

七丈島艦隊は出撃しない

浜栲なだめ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

過去に重罪を犯した艦娘が隔離的に配属される離島、七丈島。

そこへ新たに配属された大和と七丈島鎮守府の艦娘達との暇を持って余した日常、時々シリアス。

目次

日常編 1

第一話 「私の名前は、大和です！」	1
第二話 「くそ！ たった一皿のカレーがなんてプレッシャー放ちやがるッ！」	9
第三話 「大和型一番艦、大和、只今着任致しました！」	18
第四話 「42万6560円よ、コラアア！」	25
第五話 「生死の一線弁えています!？」	34
第六話 「私もオムライス、一口貰っていい？」	44
第七話 「では、倉庫整理を始めましょうか」	54
第八話 「ここを通りたくば、私を倒していくんだな！」	60
第九話 「お姉様！」	68
第十話 「妹がお姉様を知るのに一日も時間が必要ですか？」	76
第十一話 「あの、提督、私のオムライス、たべりゆ？」	85
第十二話 「よばれてとびでてジャジャジャジャーン」	98
第十三話 「パジャマパーティーしようぜ！」	107
第十四話 「私、皆から嫌われてる!？」	116
第十五話 「この子は戦闘糧食妖精っていうんだけど」	126
第十六話 「今日は、秋祭りの日ですよ！」	137
第十七話 「うわあああああ！ 目があああ！ 目があああああああ ああああッ！」	149
第十八話 「闇のゲームの始まりだぜえ！」	159
第十九話 「バレなきや、イカサマジやないんですよ？」	170

第二十話「ストーリーカーを任務にしないでください！」—— 185

第二十一話「やめておいた方が、良いですよ？」—— 195

第二十二話「私の人生、そろそろ私の好きなようにさせてよ……！」—— 206

第二十三話「でも、私がどうなろうとも、大和は必ず守ってみせる」—— 217

第二十四話「だから、もし私が明日沈んでも矢矧がいるなら安心です」—— 228

第二十五話「戦艦レ級……e l e t e！」—— 238

第二十六話「私を沈めたいのなら、魚雷五、六本くらい撃ち込まないと……駄目よ！」—— 248

第二十七話「決闘です、矢矧」—— 260

第二十八話「矢矧は必ず、私『達』が取り返します！」—— 269

第二十九話「戦場で笑って死ぬような奴に私の背中には任せられません！」—— 281

日常編2

第三十話「提督、仕事してください！」—— 292

第三十一話「今日は、バレンタインデーですよ！」—— 308

第三十二話「皆さんにこの鎮守府のキャッチコピーを考えて欲しいんです！」—— 320

第三十三話「ま！ 要は、もっと胸張って生きなさいってことよ！」—— 331

第三十四話「皆さん、ホワイトデーのお返しです！」—— 344

第三十五話「お願いです！ 私の艦娘になってください！ 矢矧！」—— 352

第三十六話 「見守る。それが提督の仕事です」

第三十七話 「じゃあ、『ウミガメのスープ』でもやる？」

第三十八話 「感謝っ……！ 圧倒的感謝っ……！」

第三十九話 「二度とやるか、こんなクソゲー！」

第四十話 「料理は私のアイデンティティだ！」

磯風編

第四十一話 「海の……中から……こんにち……は……」

第四十二話 「あなた達、気持ち悪いでち」

第四十三話 「一体なんの話でちかあああああああああッ

！」

第四十四話 「マジで調子狂うでち！」

第四十五話 「三日間でちな？」

第四十六話 「人間と艦娘は違うって知っているからでちよ」

462

第四十七話 「陽炎型駆逐艦12番艦、磯風だ」

第四十八話 「だから、料理をやろうと思ったんだ」

第四十九話 「私達ってそんなに疲れているように見えるのか……

？」

第五十話 「そうか、私は喧嘩したのか」

第五十一話 「私が、あの鎮守府を終わらせる」

第五十二話 「ああ、全部終わりにしよう」

第五十三話 「どうして、何一つうまくいかないんだ」

第五十四話 「雨、止まないな」

第五十五話 「ウチはどいつもこいつも友達少ないからな」

第五十六話 「私は、七丈島鎮守府を信じたいでち！」

559

551

539

526

517

507

498

489

……

480

472

453

441

430

……

420

408

397

387

378

368

360

第五十七話「選びなさい！ 進んで死ぬか、退いて生きるかッ！」

570 第五十八話「勝ったッ！ 磯風編、完！」

579 第五十九話「私はさ、臆病者だよ」

589 第六十話「――Injection」

598 第六十一話「私が大和ですよ」

607 第六十二話「艦娘は、人間だ」

619 第六十三話「もし良ければ、七丈島艦隊に入りませんか？」

630

日常編3

第六十四話「ところで、学生時代の話をしようと思うんだが」

640

652 第六十五話「ちよつと男に会いに行ってくるだけよ」

665 第六十六話「そつちですかー！」

677 第六十七話「誰じゃ君は!？」

688 第六十八話「何者じゃ君は!？」

第七十話「だって、あなたは何も悪くないじゃないですか！」

702

711 第七十話「あなたは、生きるべき人間なんです」

721 第七十一話「ロリ巫女様……!？」

第七十二話「この簡単な事件、私が三話、もたせてみせるっ！」

732

742 第七十三話「これは、迷宮入りだな」

750 第七十四話「犯人は、あなたです」

天龍編

第七十五話 「……天龍ちゃん、よね？」 | 760

第七十六話 「Si, Signore」 | 770

第七十七話 「ええ、義父さん」 | 779

第七十八話 「調子こいてると殺すでありますよ、屑共」 | 788

第七十九話 「わりい、俺、七丈島艦隊やめるわ」 | 800

第八十話 「それでも、私は天龍を放つとけません」 | 812

第八十一話 「私、怒ってるのよお？」 | 823

第八十二話 「この武蔵、常に一番弱い者の味方につくと心に決めて
いる」 | 836

第八十三話 「烈風拳——」 | 851

第八十四話 「ありがとう、最高の誉め言葉だ！」 | 865

第八十五話 「最初っからそう言えばいいんですって！」 | 876

889
第八十六話 「ウチの子にちよつかいかけちゃ、嫌ですよお？」 | 889

第八十七話 「あんた、龍田のこと何にもわかってないのね」 | 900

第八十八話 「独りで戦ってる奴が強い訳ないでしょ？」 | 912

第八十九話 「アタシなら、貴女の力になれると思うの」 | 925

第九十話 「それでも、龍田は諦めなかったわよ」 | 937

第九十一話 「期は熟した。さあ、実験開始よ」 | 947

第九十二話 「私、レディだもの」 | 960

第九十三話 「天龍、死ぬつもりじゃないですよね？」 | 975

第九十四話 「大規模作戦『七丈島迎撃・七丈小島突入二面作戦』、
始！」 | 開

第九十五話 「雑兵があまり目立つものではありません」 | 995

第九十六話「勝てるからであります」―― 1008

第九十七話「では、私の正体をお教えしましょうか」―― 1022

第九十八話「私は、七丈島が大切なだけ」―― 1038

第九十九話「君の使い方を一番知っているのは君自身ではなく、この僕だ」―― 1050

第一百話「そういうものだ、生きることより大切なことを見つけた人間は」―― 1060

第一百一話「ああ、不毛です」―― 1071

第一百二話「でも、いい夢見れたでしょう？」―― 1086

第一百三話「いい夢、見させてもらったぜ」―― 1097

第一百四話「本当に、強くなったわねえ」―― 1108

第一百五話「短い間だったが、楽しかったぜ」―― 1120

日常編4

第一百六話「そうだよ、明石だ。久しぶりだね」―― 1135

第一百七話「でも、それは許されないのよ……横須賀の艦娘には！」―― 1151

第一百八話「僕はね、尽くされる男よりも、尽くす男になりたいのさ」―― 1168

第一百九話「そうだ、私も艦娘になる！」―― 1184

第一百十話「横須賀鎮守府、戦艦武蔵、馳せ参じた！」―― 1197

第一百十一話「私は、戦艦になりたい！」―― 1210

第一百十二話「網走番外監獄へようこそおいでくださいました」―― 1219

第一百十三話「はっ、二度と御免だぜ！」―― 1233

第一百十四話「どんな理由があれ、女を待たせる男は最低だ」―― 1233

プリンツ・オイゲン編

第百十五話 「みんな、今までありがとう。大好きだよ！」 —

1259

第百十六話 「待っていてください……すぐに迎えに行きます！」

第百十七話 「弱すぎるッ！」 —

1292

第百十八話 「はい、すみません！ 私が弱味憎です！」 —

1303

第百十九話 「ご心配をおかけしました、大和、ただいま原隊に復帰

1315

しました！」 —

日常編1

第一話「私の名前は、大和です！」

「――では、判決を下す。被告を前へ」

法廷の中でも一際高い位置にある軍事委員席、その中央に座る海軍大将の声と共に、後ろで横並びに立つ二人の刑務官が証言台へと被告人である私を連行するべく動き出す。

ここは、横須賀鎮守府内に設けられた軍事法廷。

私は今、とある軍法会議にて裁かれる立場にいた。

判決は聞く前から既にわかりきっている。

全身を拘束具で固定された私は、刑務官に背中を押されると、バランスを崩して前のめりに倒れてしまう。しかし、彼らは助け起こそうともせず、そのまま引きずるようにして私を証言台まで連れていくと、床に這いつくばらせながら判決文が読み上げられるのを待っていた。

そのぞんざいな扱いに腹が立たない訳ではなかった。しかし、それで反抗したり、不平不満を訴えた所で何が変わる訳でもなく、むしろ余計に痛い目を見るのがわかりきっていたので、私は大人しく這いつくばって判決が下されるのを待っていた。

「被告、戦艦大和。貴様の犯した罪は審議のしようもなく重く、まさに極刑が望ましい。判決は、死刑である」

艦娘、戦艦大和。それが私の名前であった。

そして、これから消える名前でもある。私はこれから死ぬのだから。

死刑、その言葉を聞いて、どこか私は安堵していた。

これでようやく終われる。やっと楽になれる。

しかし、床に顔を埋めて小さく笑う私の耳に、突然その声は響いた。

「――異議あり」

思わず顔を上げた。

目の前の軍事委員席の右端。そこに座っていた眼鏡を掛けた男が

立ち上がり、声を上げていたのだ。周りの法務官や他の将官達も皆一様に驚愕と困惑の入り混じった表情で立ち上がっている男を見つめている。

しかし、眼鏡の男は周りの視線など少しも意にも介さず、静寂に包まれた法廷の中をゆっくりと歩き出し、床にひれ伏す私の目の前に膝をつくと言った。

「どうせ捨てる命。それなら私が拾い受けましょう。大和、貴方は今日から私の艦娘です」

☆

「突然ですが、今日、我が七丈島鎮守府に新しい艦娘が着任するので、矢矧、あなたにお迎えをお願いします」

「いや、突然すぎるにも程があるでしょう」

突然、提督から執務室に呼び出されたかと思えば第一声がこれであつた。

せめて、昨日に言ってくればまだ準備もできたというのに。

私、矢矧は目の前で嬉しそうにニコニコ笑う提督に向け、苛立ちを乗せて大きく溜息をついた。

「何でもっと早くに言ってくださらなかったんですか?」

「サプライズですよ、サプライズ」

まあ、提督の低能ぶりには驚かされたが。

全く反省がないのか、笑顔を崩さない提督に私はもう一度提督に聞こえるよう溜息をつき、仕方なく話を進めることにした。

「それで? その新しく配属予定の娘はいつ頃ここに到着するんですか?」

「えーと、確かこの辺にその通知を置いたはず……」

「置いた……?」

提督、そこゴミ箱です。しつかりしてください。

「あー! ありました、ありました! これですよ! いやあ、見つかつて良かった」

「グッシャグシャじゃないですか!? 重要書類ですよ、それ!」

提督がゴミ箱から取り出したそれは最早埃を被って原型を留めて

いなかった。

そして、所々千切れた通知書の埃を払いながら提督は安堵の笑みと共にそれを読み上げる。

「えーとですね、十二時に港に着く定期便に乗ってくるらしいです」

「……ははっ、十二時ですか」

「え？ どうしたんですか？」

もう呆れとか、怒りを通り越して乾いた笑みしか出なかった。

未だに自分が何を言ったのか理解していないらしい提督に、私はそれでも怒りを抑え、冷静に提督の方に詰め寄り、笑顔で言った。

「提督、現時刻はもう十二時半です」

「――」

しつかりしろ、提督。

☆

「さて、定期便から降りて港に着いたはいいもの……」

港に停泊した定期船からキャリーバッグと共に降りた少女は周りを見回し、もう一度手に持った紙に視線を落とす。

「港に着けば迎えの方がいると書いてあるんですけど……やっぱりいいませんよねえ……」

もう一度、少女は港周辺を見回してみる。

もう船から降りた人々もどつかへ歩いていったらしく、大分人気もなくなっている。しかし、そんな中、やはり少女を迎えに来ているような人影は一切見当たらなかった。

これからどうしたものかと考えあぐねていると、大きくお腹の鳴る音が辺りに響いた。

少女は顔を真っ赤にしてお腹を押さえながら周囲を見回し、誰にも聞かれていないことを確認すると、安堵の溜息を洩らした。

「そういえば、昨日から何も食べてないんですよね」

「おう、嬢ちゃん！ 観光客かい？」

「うわぁー！」

突然、後ろから大きな声と共に肩を叩かれ、少女は大きな声を出してしまった。

そして、同時にまた大きなお腹の鳴る音が。

「……………」

「……………」

少しの間沈黙が続いた。

既に少女の顔は真っ赤に染まり、今にも火を噴きそうだった。

「ガッハッハッハッハ！　なんだ、お嬢ちゃん腹あ、減ってるのかい？」

「うう、す、すいません」

「いや、一瞬、俺の腹の音かと思っちまったぜ！　ガッハッハ！」

港の漁師と思われる逞しい体つきをした男は、大きく笑い声を上げると、突然少女の手を引っ張ってどこかへと連れて行くこうとする。

傍から見たら犯罪臭のする画だが、周りに人がいないため、咎める者もない。

「えっ！　ちよ、何するんですか!?!」

「腹減ってんだろ？　美味しいカレーを出す店知ってるから案内してやるよ！」

「え!?!　い、いえ、結構です！」

必死に漁師の掴む手を振り解こうとする少女だが、力が強く、全く振り解ける気配がない。

大男に年端もいかぬ少女が抵抗しながらも連れていかれる状況はやはり、傍から見たら犯罪臭がするが、やはり周りに人がいないので、咎める者もない。

「なんでい、遠慮すんなって！」

「い、いや、そうじゃなくて！　私一文無しなんです！　だから、お店に行ってもお金が……………」

それを聞くと、ようやく漁師は手を離し、少女もようやく解放される。

「成程、一文無しか……………うーん」

漁師はしばらく何かを考え込んでいると、何かを思い出したかのよううに手を叩き、また少女の手を掴んでどこかへと引っ張り始めた。

「きやあああ！　なんですか！　なんなんですか!?!　無言で突然引っ

張るのやめてください！ 怖いです！」

「んー？ いや、方法があったんだよ、一文無しでも腹いっぱい食える方法がよ！」

「え、本当ですか!？」

その瞬間、少女の顔が困惑の表情から一変して輝き始め、むしろ漁師を牽引するかの勢いで先行し始めた。

「ど、どこです！ どこにいけばいいんですか!？」

「おいおい、そんなはしゃぐなって！ すぐ近くだからよ。ほら、あそこだ」

漁師が指さしたのは港から歩道に出てすぐ見える飲食店の並びであった。

おそらくは島に来た観光客目当てで出来たものだろう。さつき少女と共に船に乗っていた乗客が多く見える。

漁師はその中にある一つの店の前まで少女を案内する。

「……カレー専門店、『ビッグスプーン』？」

「おう！ さつき言った美味しいカレー食わせてくれる店つてのもここなんだけどよ。お嬢ちゃん、カレーは好きかい？」

「え？ ええ大好物ですけど」

「そいつは良かった。じゃあ、大丈夫だな！」

そう言うと、漁師は勢いよく店の扉を開け、店内に入っていく。

少女も後に続いて店内へ入る。

瞬間、濃厚なスパイスの香りが二人の嗅覚を刺激し、空腹感をさらに増長させる。

同時に、扉についていたドア鈴の音で一人の男が厨房から顔を出し、二人の前に歩いて来た。真黒に焼けた肌と漁師に劣らぬ筋骨隆々の身体が特徴的であった。

「いらっしやい。あら、珍しいじゃなあい、あなたが女連れだなんて嫉妬しちゃうわあ」

「違えよ、店長。このお嬢ちゃんはそこの港で知り合っつてな。腹減ってるみたいだから連れてきたんだよ」

「え？ あの、女の方……？ え？ でも？ あれ？」

予想外の喋り方に少女は困惑を隠せなかった。

店長は少女の前に歩み寄ると、ウインクをしながら挨拶する。

「初めまして、お嬢ちゃん。アタシはこの店の店長よ。身体は男だけど心は乙女よ、どうぞよろしくね!」

「えええ、えと、よ、よろしくお願いします!」

「まあ、こんな変態出てきたらビビるよな、普通。」

「あら、変態じゃないわよ。自らのリピドーに忠実なだけよ。それで、お二人ともご注文は?」

「ああ、俺にはカツカレーの中辛特盛。んで、こいつには——」

漁師がチラリと横目で見て少女に笑いかける。

「——『超弩級』を頼む」

「——!」

漁師の言葉と共に、店内の空気が一瞬凍り付いた。

店長は愚か、他の客達ですら、食事の手を止め漁師と少女の方を見ている。

「……あんた、本気?」

「え? 何がですか? ここに来れば無料でカレーが食べられると聞いたんですけれど……」

途端に強張った表情で少女に問い詰める店長に少女は困惑しながら事の経緯を話す。

すると、店長は、頭を掻いて無言で一旦厨房の奥に戻ると、一枚の大皿を持って帰って来た。

「お嬢ちゃん。確かにウチには一時間以内に完食できればお代は無料っていう特別メニューがあるわ。でもね、それはこのテーブル一つが埋まる大皿にカレーライスタワーのように積み上げた品なの。とてもお嬢ちゃんには——」

「——やります、それ!」

「は、はああ!? どんだけええええええ!」

少女の一言にまた店内がざわめき、店長は信じられないといった表情で少女を見つめている。漁師一人が愉快そうに笑みを浮かべていた。

「わ、わかってるの？ 完食しきれなかったら一万円のお代を頂くわよ？ 払えるの？」

「一文無しなので払えませんが、完食するので大丈夫です！」
「なッ!? あんたふざけてるの!? どんだけええええええ!?!」

「まあまあ、店長。完食しきれなかった時は俺がお代持つからよ。挑戦させてやってくれねえか？」

その漁師の一言で、店長の表情が変わった。

不敵な笑みを浮かべ、その瞳にはギラギラと眼光が発せられていた。

「……いいだろう、そこまで言うなら挑戦させてやる。うちの特別メニュー、『超弩級盛り海軍カレー』に、なあ！」

（あれ!? 口調が変わりましたよ!?!）

「——うおおおおおおお！」

その店長の豹変した男言葉と共に店内が完成に湧き立った。

「すげえ！ あのカレーに挑戦する奴が現れるなんて！ 数年ぶりに見たぜ！」

「しかも挑戦者はあの嬢ちゃんか!? こいつは予想がつかんぞ！」

店内の客達は立ち上がって少女に歓声を送り続けている。

「お嬢ちゃん、あんな啖呵切っちゃったが、大丈夫かい？ もう後には退けないぜ？」

「ええ、大丈夫です！ お腹一杯食べられそうなのが久々なので、今からカレーが楽しみです！」

「ガッハッハ！ そいつは頼もしいな！」

全く物怖じしていない少女を見て、漁師は声高らかに笑った。

緩みかけていたエプロンを再び縛り直し、店長は少女を見て言った。

「お嬢ちゃん、名前を、聞いておこうか？」

「私の名前は、大和です！」

キャリアバッグを置き、少女は声高らかに自分の名を告げた。

☆

その頃、鎮守府では。

「ああ、もう！ 既に三十分遅れ！ 急いで迎えに行かないと！」

「あ、いた！ 待つてください、矢矧！ 重要な事を言い忘れていました！」

「何ですか、提督！ この非常時に！」

「帰りにビッグスプーンでカツカレー大盛り、甘口で買ってきてくださいー！」

「少しは反省しなさいよ！ 無能！」

まだ色々揉めていた。

第二話「くそ！ たった一皿のカレーがなんてプレッシャー放ちやがるッ！」

七丈島。東京から南方に位置する有人島。

気候帯は亜熱帯に属し、通称『常春の島』とも呼ばれ、現在では一つの観光名所ともなっているが、かつては多くの罪人が流された『流刑地』でもあった。

そして、今、その島のとあるカレー店で、大食い界の歴史を覆す、ことはおそらくないであろう大勝負が始まろうとしていた。

「――またせたなあ、大和ちゃん」

店内一帯が謎の緊張感に包まれる中、店長が厨房から顔を出す。

相当調理に集中していたのだろう、身体中から滝のような汗が噴き出している。

その店長の今までにない気迫と集中力に店内の誰もが驚かされたのも束の間、その直後、店長の後に続く形で出てきた二人の従業員が運ぶ『それ』に店内の視線は支配された。

「こいつが！ 『超弩級盛り海軍カレー』だッ！」

通常、カレーの盛られた皿が机に置かれる時に発される音とは如何なる音だろうか。

コト、とか、カツ、みたいな音を想像するかもしれない。

どんな大盛りのカレーを置いたって精々、ゴトツという音が限度だと思っだろう。

しかし、このカレーだけは違った。

――ズンッ！

「う、うおおおおお!? な、なんだこの重量感!? 今、あの皿を置いたテーブルが軋んだぞ!」

「い、いや、テーブルどころじゃない！ その振動が床を伝い、観客である俺達にまでその重量感がひしひしと伝わる！」

「い、や!? 何よりも見ろ！ あのカレーを!? まるで、山、じゃねえか!? お嬢ちゃんの正面に居る俺からじゃあ、最早あのカレーで隠れ

て嬢ちゃんの身体が見えねえ!」

「くそ！ たった一皿のカレーがなんてプレッシャー放ちやがるツ！」

挑戦者の前に立ちはだかったのは一つの『山』であった。

もしかしたら50cmはあるのではないかと思う程にこれでもかと積み上げられたカレーライスの山。

総重量は10キロか20キロか計り知れない。

周りで見ている観客達にすら伝わってくるプレッシャー。実際にそれに挑戦する者が受けるプレッシャーなど考えただけで恐ろしくなる。

しかし、観客の動揺とは裏腹に、挑戦者、大和の表情はとても穏やかなものだった。

「……………」

「ふ、こいつを見て、そんな穏やかな表情してるのは、このメニューを始めて十年、あんたが初めてだよ大和ちゃん」

店長が目の前のカレーを見つめて惚れ惚れとしている大和の前にスプーンを置いた。

ただのスプーンではない。

恐らくオーダーメイドであろう、銀色に輝くそのスプーンは普通のスプーンの十倍は大きい。

大よそ五口以内で一皿の普通盛りカレーは平らげられてしまうのではないかという程の大きさだった。

『ビッグスプーン』。この店の名にもなっている特注品のスプーンだ。このカレー^{魔王}に挑戦する勇者にのみ、使うことを許している。大和ちゃんがそのスプーンを手に取った瞬間から挑戦開始だ。好きなタイミングで食べ始めな」

「では——」

店長のその言葉を聞くや否や、大和はそのスプーンを手に取り、親指と人差し指の間にスプーンを挟んで両手を合わせて言った。

「——いただきます」

挑戦、開始である。

大和は立ち上がり、山の頂上のカレーライスをその手に持ったビツグスプーンで刈り取る。

それでも全く山が削れた様には見えない。

観客の数人かはそれを見て絶望的な声を洩らすが、大和が発した言葉はそれとは全く異なっていた。

「なんということでしょう！ 通常、山のようにして盛り合わせたカレーライスの欠点はその頂上。カレールーが液体である以上、普通なら頂上にはライスばかりが残ってカレーライスとしての魅力を削いでしまうもの。しかし、このカレーは違う、頂上を無造作に掬い取って尚、スプーンの中にはライスとカレーの比率が6：4という安定感！ 頂上から麓まで、この山は『カレーライス』足り得ています！

しかも、このカレーから香ってくる濃厚なスパイス！ これはあらかじめ調査と粗挽きを済ませたカレー粉に頼っているとは決して出ない香り！ 今わかるだけでもガラムマサラ、コリアンダー、クミン、ターメリック、他にも数種類のスパイスを全て挽きたて、かつ独自の調査でそれぞれの香りを見事に調和させています。結果、この香り高いカレールーがこのカレー全体を美味に飾っているのですね！ 日本独自の海軍カレーというスタンスを保ちつつ、本場のインドカレーのスパイスエッセンスを余す事なく取り入れ、完成させています、これまで私が見てきたカレーなど足元にも及ばない、まさに真の海軍カレーッ！」

(まるでどこかのグルメラポーターみたいだ)

(まるでどこかのグルメラポーターみたいだ)

(まるでどこかのグルメラポーターみたいだ)

そして、カレーの香りを存分に堪能した大和はいよいよそのスプーンを口に運ぶ。

とは言ってもスプーンが大きすぎるため、スプーンからカレーを口に流し込むようにしてついに、彼女は超弩級海軍カレーを食した。

「——ッ！ これは！ しっかりと煮詰められたジャガイモは口に運ぶまではしつかりと形を保っていたのに、歯で軽く押し込むだけで内包された甘味と共に碎ける！ 辛みの効いたカレーは甘味の濃

縮された人参、玉葱、ジャガイモと絶妙に絡み合いながら口の中を幸せに包み込み、抵抗なくライスと共に喉元を流れていきます。しかし、柔らかく煮込まれた牛肉があり、決して重量感がない訳ではなく、また野菜が溶けてしまっている訳でもありません！ 野菜が溶ける寸前、ギリギリの所まで煮詰められている何よりの証拠！ しかも、このカレーのコク！ 果物による甘味、ヨーグルトの酸味に加え、恐らくは隠し味にチョコレート！ しかもカカオ純度の高い最高級品ですね！ チョコレートはカカオ、油脂、ミルク、砂糖のブレンドが香ばしさや苦み、さらにはまろやかなコクを追加します。これは、チョコレート発祥の地、イギリスならではのアレンジ！ なんということでしょうか。これは日本とインドの調和だけじゃない、その中にはイギリス！ これは、まさに、カレー三国同盟！」

(またグルメレポーターみたいなおことを)

(味の宝石箱かな?)

(というか、早くカレー食えよ)

「ふ、やるじゃねえか。このカレーの本質をたった一口で丸裸にしちまうとは。でも、いいのかい？ 一口たべるだけでもう二分経過してる。後五十八分以内に完食できなきゃ、挑戦失敗だぜ？」

店長が手元のストップウォッチを見せながら笑う。

しかし、大和の表情には少しも動揺は見られない。彼女は心から食事を楽しんでいた。

「ご心配なく、大丈夫です。ちなみに——」

その様子を見て、漁師はふと思った。

(そーいや、大和って名前、どつかで聞いた事が……あ！ ああッ！)

「——店長、おかわりはありますか？」

次の瞬間、少女はその本性を露わにした。

☆

現時刻、一二時五〇分。私はようやく港に辿り着いた。

港からは青い海と空が地平線まで果て無く続くのが見え、船着き場には羽根を休めるカモメ達の姿が見えた。

というか、それ以外は何も見えなかった。

「——誰も、いないッ！」

私はそう叫びながら地面にへたれ込む。

一応予想はしていたが、まさか本当にこんな事になるとは。

今日配属予定の艦娘の迎えに一時間近く遅れた上、その艦娘は既に何処へか消えてしまった。これは大問題だ。私は頭を抱えずにはいられなかった。

この七丈島に配属されるということは、普通の配属とは違うのだから。

ここ、七丈島は過去に、罪人を島流しにする流刑地であつたという歴史がある。そして、それは今現在も密かに続いている。

ただし、罪を犯した人間に対して、ではなく、罪を犯した艦娘に対して、である。

現在において、艦娘は未知の敵、深海棲艦と戦う上での最大戦力であり、容易く戦闘から遠ざけるようなことはできない。

よって、罪を犯したとしても、軍事裁判上ではおおよそが営倉での僅かな謹慎か、重くても懲役。しかも、いずれも戦闘時必要とされれば即時解除されるようなものである。

それ程に現在、艦娘という戦力は重宝されており、同時に、それは未だに艦娘以外の深海棲艦への対抗策が見つかっていないという危機的な状況を示していた。

しかし、そんな状況でも極刑を宣告される艦娘はいる。

これ以上艦隊の中に置き続けられ、さらに味方に甚大な被害が確実に出ると考えられる艦娘、あるいは深海棲艦側に加担した艦娘には極刑が求刑され、そういった事例もほんの僅か数件か出ている。

しかし、あの男は、提督はそれを良しとはしなかった。

恐らくはある程度権力はあるのだろう。数年前にこの七丈島に鎮守府を造り、戦力の保持を理由に、極刑を宣告された艦娘達を『流刑』に減刑という形でこの鎮守府に隔離する方針を取り始めた。

極刑になった全ての艦娘を残らずそうしている訳ではない所を見ると、おそらくはあの提督なりの判断基準があるのだろう。

そうして、この鎮守府には私を含め五名の艦娘が在籍し、今日入っ

てくる艦娘を合わせて六名になる筈だった。

しかし、想定外の事態により、それがなくなったのだ。

七丈島に着くまでは本島から監視役がついているが、それはあくまで罪人が船を降りるまでだ。

つまり、極刑を求刑されるような大罪人が、今、この島の中で野放しになっているということだ。

この七丈島鎮守府に関しては島民の一部のみにだけ真実が知らされておられ、それ以外の島民には島の防衛拠点として鎮守府を置いたと説明している。

そのため、不用意に近づいてしまう島民も出るだろう。そうでなくとも、ただでさえ艦装を外せばただの少女にしか見えないのだ。

もし島民が無警戒でその艦娘に近づき、なんらかの被害が出てしまえば。

「考えるだけで恐ろしいッ！」

再犯、連帯責任、抗議デモ、本島送還、再審、極刑判決。

確実にろくな目に逢わない。

「それに、今日配属される、大和の罪状は……………！」

最早一刻の猶予もない。私は急いで聞き込みを始めようと、港を出た所にいる二人の島民に話しかける。

「あの——」

「おい、早く見に行ってみようぜ！」

「ああ、こんな一大イベント見逃しちや損だぜ！」

「す、すみません！ 待ってください！」

「うおお!? なんだ矢矧さんか、びっくりさせないでくれ」

「すみません、でもこっちも一大イベント再犯の一步手前なんです！」

「お、おお? なんか知らねえが、大変だな……………?」

島にいる期間が長かったおかげで大半の島民には顔は利く。

私は早速さつきの定期便で来た大和、と名乗る少女を見なかったか聞くが、島民達は見ていないらしい。

流石に一時間前のことを、今ここを通りかかった島民に聞いても無駄だったかと私はますます焦燥に包まれる。

そんな中、島民の片方が言った。

「あ、でも。今ビッグスプーンで『超弩級』に挑戦してるのは本島から来た女の子らしいぜ？」

「は？ ビッグスプーン？」

そういえば提督にカレーをビッグスプーンで買ってくるよう頼まれたのを思い出し、提督の顔が浮かんでイラッとしたのでつい威圧的な返答をしてしまった。

二人の表情に畏怖が浮かんでしまっている。とぼっちり過ぎて申し訳ない。

「い、いや……そのビッグスプーンだよ。女の子がああ『超弩級』に挑戦してるっていうからよ」

「お、俺達それを見に行こうって今話してて……本当だよお！」

いや、別に疑ってないんだけど。

自分でも驚くほどの大した怖がられっぷりだった。

しかし、ビッグカレーの超弩級といえ、十年無敗の大食いチャレンジメニュー、超弩級盛り海軍カレーのことだろう。

そんなものに挑戦する少女。しかも本島から来たという。

一方で大和という艦娘は言わずと知れた日本最強の戦艦。そして、その卓越した能力値の代償に、全艦娘中最も燃費を食う大食い。そして、今日本島からやって来ている。

私は底知れぬ予感を感じていた。

「……私も行きましょう。ビッグスプーンに」

「お、矢矧さんもやっぱ気になるのかい？」

大食いチャレンジに関しては断じて違うが、そのチャレンジしている少女に関してなら間違いなくその通りだ。

島民と共に、大きなスプーン型の看板を構えるビッグスプーンの前に行く、そこには既に大勢の人ばかりができていた。

私はなんとかその人ごみを縫って店内に入ると、そこにはまた大勢の観客に囲まれて座る少女と何故か一人、床に手をついてうなだれている褐色肌の男が居た。

「す、すげえ……あのカレーを完食するだけじゃ飽き足らず、四杯もお

かわりしやがった!?!」

「食べ始めてからまだ三十分しか経ってねえそ?! なんてスピードと腹だ!」

「しかも、一切苦しそうな表情も見せねえ! なんて幸せそうな顔して食いやがるんだ! ああ、そうだ。彼女こそこの島に降り立った――」

「――食の女神!」

「何この一体感!?!」

新しい宗教か何かかと思つた。

「あ、アタシの! アタシの超弩級盛り海軍カレーを! 十年無敗のあのカレーを……! たつた六分で完食するなんて! しかも、五皿も平らげられて……! どんだけええええええええええ!」

なんだこのオカマは。ああ、店長か。

取り敢えず、私は絶賛食事中の彼女の前まで強引に押し入つた。

「あなたが、大和ね?」

「……………」

大和は皿に残つたカレーを食べ終え、矢矧の方を見る。

しばらくの沈黙の後、大和は何か把握したという感じの顔で空になつた皿を差し出す。

「すみません、おかわり頂けますか?」

「店員じゃないわよ!」

「どちらにせよもう店の釜も鍋も空っぽよおおおおお! どんだけええええええええええ!」

「そこうるさいツ! 私はあなたを迎えに来た艦娘、矢矧よ!」

「え…………」

それを聞いた瞬間、大和の顔がひどく悲壮をまとつた表情に変わる。

「もう、おかわり……できない……!?!」

「私の話聞いてた!?!」

「これ以上おかわりなんてされたらウチは大赤字よおおおお! どんだけええええええええ!」

「あなたは少し黙ってて！」

「そんな……女神様の勇士をもう見ることは敵わないなんて……！」

「世界の……終わりだ……！」

「俺はこれから……何を生きがいにするば……！」

「あんた達は三十分で一体何があつたのよ!?!」

三十分で店が一つ傾き、熱狂的な信者が生まれていた。

しかもその当の本人は。

「……まあ、また明日チャレンジすればいいですよね！ 明日も来ますね、店長！」

「二度とお断りよッ！」

この能天気ぶりである。

私は今までの心配が馬鹿のようで呆れ果ててしまった。もっと、凶暴で危険な人物かと思っていたのだ。

だって想像出来るはずがないだろう。

「とにかく！ さっさと店を出るわよ、大和！」

「ええ、まだ！ まだ皿に残ったカレーが！」

「人前でそんな卑しいことするのやめなさい！」

想像できるはずがない。

この大和が、まさか『国家反逆罪』を犯した大罪人だなんて。

第三話「大和型一番艦、大和、只今着任致しました！」

どうも、私の名前は大和です。

この度、七丈島鎮守府に配属になった艦娘なのですが、配属初日から迎えが来なかったので大食いメニューにチャレンジをしていたら、どうやら七丈島鎮守府から迎えに来てくれたらしい艦娘がわざわざ店の中まで私を探してやってきてくれました。

「——全く！ 確かに予定時刻に来なかった私達に非があるけれど、かといって待ち合わせ場所から不用意に動かないで頂戴」

「そ、それは、すみませんでした」

「本当に心配したわよ」

矢矧、私の身を案じてくれていたのでしょうか。

「あなたが再犯を犯して私まで連帯責任なんてまっぴら御免よ」

と、思いましたがそんなことはありませんでした。

「とりあえず、もうチャレンジは終わりよ。問題ないでしょ？ 店長？」

「ええ、何も問題ないわ……大和ちゃん、あなたの勝ちよ……」

依然としてうなだれて力なくそう呟く店長。

少し可哀想なことをしてしまったかもしれない。今日は久々にお腹一杯カレーを食べられそうで思わずはしゃいでしまったのです。若気の至りなのです。どうか許してください。そして、めげずに新しい大食いメニューを是非、作って戴きたい。そう心から願っています。

主に、私の今後の食生活の充実のために。

「さあ、あなた達も散った散った！ 大食いチャレンジは終わりよー」

その声と共に矢矧は店に入った野次馬達を退散させていく。

厳格ですが、人を纏める力のある方の方のようです。

「あ、ついでに店長。カツカレー大盛り、甘口を持ち帰りまで至急お願い」

「え、でももうウチのカレー鍋は……」

「一食分位の材料は残っているでしょ？ なければ作る！ お金は払

うし、多少時間はかかっても構わないわ」

「でも、アタシ、今日はもう……」

「甘えないで。料理人は客の注文を受けたらさっさと動く！ プロなら自分の為すべき責務と努力くらい、全うしなさい！」

「わ、わかったわよお！」

というか、どちらかというど鬼教官、でしょうか。

矢矧の厳しい罵声に店長が慌てて厨房に駆け戻り、調理を始め、他の野次馬達もそれを見てそそくさと逃げるように退散していつてしまふ。

私はその場面を見て、人々から彼女に向けられる畏怖の念を感じ取らざるを得ませんでした。

その後、おおよそ待つこと三十分、店長からプラスチック容器に入られたカレーを受け取ると、決められた料金を支払い、私と矢矧はようやく店の外に出た。

熱気の籠った店内から外に出ると、涼しい潮風が私の身体を撫で、気持ちを爽やかにしてくれる。

「さて、それじゃあ、さっさと鎮守府に戻るわよ」

「え？ あ、はいー！」

「……………」

「……………あの？ どうかしました？」

身体を思い切り伸ばす私を矢矧がじっと難しい顔をして見つめていました。

少し怖いです。

「あなたみたいなのが、なんで……………いえ、なんでもないわ。早く鎮守府に向かいますよ。大分当初の予定からずれているし、色々と説明したいこともあるから」

「は、はあ」

なんだか煮え切らない返答でうやむやにされた感じがします。

しかし、かと言って話を引っ張る勇気もなく、取り敢えず私は先行する矢矧の後を着いていくしかなかった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

うわ、すごく気まずいです。

歩き始めて三十秒、早速お互いに無言。流石にこれから生活を共にする仲間同士、これは良くないのではないのでしょうか。

私は必死に話すきっかけを模索する。

「こ、この島は海がきれいですね！」

「そう？ 私にはどこも同じにしか見えないわ」

「あ、そうですか……すみません」

「ええ」

「……………」

「……………」

会話、終了。

五秒と持ちませんでした。嘘みたいです。

というか、今のは私だけじゃなく彼女にも責任あるでしょう。なんですかあの受け答え。もう少し私の努力を買って話合わせたりしてくれてもいいじゃないですか。

もう、彼女話す気ゼロだったじゃないですか。

そもそも、この辺、海沿いを道なりに進んでいるだけで話す話題になりそうな物がなさすぎるんですよ。左手には海、右手には森林。それ以外は無機質なコンクリート道路だけって、これでどうやって話題を作れというのですか。

「……………」

「……はあ、そんなに話がしたいなら、この鎮守府について少し説明してあげるわ。本当は鎮守府に着いてからゆっくり話すつもりだったのだけど」

「——是非お願いします！」

私が頭を悩ませていることを察してくれたのか、向こうから話題を提供してくれました。

「この鎮守府がどういふ所なのかについてはあなたも知ってるわね

？」

「ええ、勿論です」

過去に重罪を犯した艦娘が戦力保持という名目の元、隔離的に配属される流刑地。それがこの七丈島鎮守府。

流石に、ここに配属された身としてそれくらいのことは理解している。

「今、この鎮守府にはあなたと私を合わせて全六名の艦娘が在籍しているわ。挨拶は後日自分で済ませて頂戴。この六人のうち、あなたを含めた五人は罪人、でも私だけは罪人ではない、普通の艦娘なのよ」
「あ、そうなんですか」

カレー屋での立ち回りを見るに、罪を犯すような艦娘には見えませんでしたから、私の中ではさしたる驚きはありませんでした。

「私は監察艦といって、あなた達の島内での行動を監視、監督する役割の艦娘よ。まあ、囚人と刑務官の関係みたいなものね。規律違反は厳しく取り締まるから覚悟なさい」

「は、はい」

そう言いながら不敵な笑みを浮かべてこちらに顔を向ける矢矧に私は緊張気味に返事をしました。

彼女が監視役ならば、相当厳しい生活になりそうです。

「まあ、でも、基本は島内では何をするのも自由よ。他の艦娘達も好き勝手にやっているしね。あくまでも規律を破らない前提の話だけだ」

「え、監視役なのに自由にさせていいんですか？」

「ええ、問題ないわ」

監視とはなんだったのでしょうか。

まあ、彼女の笑みを見るに何か対策のようなものがあるようすが。

と、色々話している内にいつの間にか立派な鎮守府の目の前に私達は立っていた。

ここが、これから私が生活する七丈島鎮守府なのだろう。

矢矧は正面玄関から入ると、私を最初に執務室へと案内した。この

鎮守府の責任者である提督がいる部屋である。

矢矧は洋風の装飾が施された扉を四回ノックし、中からの返答を待つてから扉を開き、中に入る。

「提督、失礼します。矢矧、本日着任する大和を連れ、只今戻りました」

「大和型一番艦、大和、只今着任致しました！」

「はい、どうもお疲れ様でした。矢矧、大和」

「ついでに、カレーです」

「ありがとうございます！」

扉を開けると、そこには以前裁判でも見た、眼鏡を掛けた青年が、執務机に座っていた。

机の上に無造作に散らばる書類の上に矢矧がビニール袋に入ったカレーを置くと、彼は嬉しそうに顔を綻ばせてから、私の方を見て申し訳なさそうに突然頭を下げた。

「あ、大和。道中お疲れ様でした。すみません、こちらの手違いで待ちぼうけをさせてしまったようで……」

「い、いえ！ 全然そんなことはありませんでしたから！ 顔を上げてください！」

そんなことは全然あったのですが、私は頭を下げる提督について、そう叫んでしまいました。

「提督はこれからは重要な書類は必ずわかる場所に保管するよう心掛けてください。そもそも机の上が汚いからこんな重大なミスを易々とするんです。整理整頓をなさい、整理整頓」

「は、はは、善処します」

私が思うにその言葉を発した人のほとんどは言われたことをやらないのですが。

「まあ、私のことはさておき、まずは大和にアレを付けて頂きましょうか」

「そうですね。大和、こっちに来てもらえる？」

「え？ はい、わかりました」

矢矧に呼ばれて私は彼女の立つ方へと歩いてくる。一方で、彼女の手には一つの大きめのブレスレットが握られていた。

「右手か左手か、好きな方を出して頂戴」

「じゃあ、右手で」

そう言つて、右手を差し出すと、矢矧は持っていたブレスレットを素早く私の右手首辺りに通す。

瞬間、私の手首に合わせてブレスレットが収縮したかと思うと、小さな光が点滅し、やがて消えた。

何これ、怖いです。特に矢矧のしてやったみたいな顔が余計に不安を煽ります。

「こ、これはなんなのですか?」

「これはスタンリング。小型電気拘束装置よ。あなたが島民や私、提督に危害を加えようとアクションを起こすと、そのリングが感知して一定時間痺れて動けなくなる程度の電流を放電するわ。要は、あなた達罪人がこの島で暮らすために最低限必要な安全装置よ」

「成程、島内で自由にしてもいいっていうのはこれがあるからなんですよ」

「ええ、それは私以外には外せないし、頑丈な素材で出来ているから壊すことも不可能よ」

つまり、これがある限り私達罪人は大人しくするしかないということです。まあ、別に暴れる気なんて私には一切ないのですが。

「すみません。私は必要ないとは思っているんですが、何せ規則なものですから」

「別に私は構いませんよ」

理不尽に電流を流される訳でもなさそうですし。

「とりあえずはこんな所ですかね。後は基本、この島内では自由に生きてください」

「あの、私は、というか私達は出撃はしないのでしょうか?」

「当然でしょう」

矢矧が答えた。

「あなた達はいくまで戦力の保持という理由でこの艦隊に隔離されているの。艦隊に入れば味方側に甚大な被害が出ると考えられているあなた達がこの島から出ることは許されないわ」

「……そうですね」

「具合的には島から半径10kmより外には出ないでください。そのスタンリングが反応して放電するので」

「わかりました」

仕方がありません。矢矧の言っていることは的を射ていますし。

まずは今の環境に慣れることから始めましょう。

「ところで、私と矢矧を除いてここにはまだ四人くらい艦娘がいるんですよね？」

「ええ、そうね」

「どんな方達なのでしょうか？」

やはり、今の内に他にどんな方がいるのかは知っておくべきでしょう。

仲良くできるでしょうか。私同様犯罪歴があるとはいえ、やはり新しい仲間というのは楽しみです。

「他の……艦娘達？ そう、ねえ……」

言葉を濁されると不安になります。

「………元気な娘達ばかりですよ、はい」

今までのような具体的な説明が欲しかったです。

「まあ、ここで話すよりも実際に見た方が早いわ。取り敢えず、その所は置いておいて、あなたの部屋に案内するわ」

「はあ、わかりました……それでは提督、失礼致します」

「ええ、これからよろしくお願いします」

そう言つて提督に挨拶を終え、私と矢矧は執務室を後にした。

「それじゃ、部屋に案内するわ」

「はい、お願いします」

こうして、取り敢えずは正式に私はこの七丈島鎮守府に着任、しいては七丈島艦隊の一員となったのでした。

しかし、この時私は気付いていませんでした。

私の姿を影から見つめる謎の人影に。

「——へえ、あれが、新入りか？ 面白れえ、暇つぶしに少しからかってみるとするか！」

第四話 「42万6560円よ、コラアア！」

「ここがそれぞれの私室のある居住区画よ」

「へえ、一人一部屋なんて豪華ですねえ！」

私、大和は目の前の矢矧に連れられ、七丈島鎮守府居住棟に来ていました。

居住棟は五階まであり、一階に四部屋ずつ、計二十部屋があるように、一階の101号室に管理人でもある矢矧、それから一階の部屋は全て埋まっていて、私の部屋は二階の202号室となっていた。

202のナンバープレートの掲げられた部屋の前に立ち、私は目を輝かせる。

「なんか、新生活って感じでわくわくしますね！」

「鍵はもう開いているからさっさと入って」

「は、はい！ では、失礼します！」

矢矧の鋭い眼光から逃げるように扉を開けて視界に飛び込んできたのは、新品同然のキッチン、洗濯機、それに何も置かれていないまっさらな畳部屋が広がるワンルームの部屋。

そして、その部屋の中心に立つ全身をローブで隠した謎の怪しい人影。

——ボタンツ！

「え？ いや、中入らないの!？」

「いや、あの！ 中に、中に!？」

「……ああ！ 中に大きな虫でも居たのね？ あなた、意外と憶病ね」
いや、違います。確かに大きかったですけど、あれは明らかに虫じゃなくて人型でした。

「全く、ここは森も近いから結構虫来たりするわよ？ 慣れておかないとね」

「え、そうなんですか、それは嫌だなあ……」

って違う。それ所じゃないってば、私。

「違うんです、中に人が……」

「とりあえず今日の所は私が退治してあげるわ。入るわよ」

「あああ！ ちょっと！ 何か武器とか！ せめて機銃とか持った方が！」

「は？ 虫相手に何考えてるの、あなた？」

「虫じゃないですってば！」

私の必死の説明もなしに矢矧は扉を開け放つ。

しかし、すぐに不思議そうな表情で私を見る。

「虫なんて見当たらないけど？」

「え？」

私が矢矧に続いて部屋の中を覗き込むが、矢矧の言った通り、そこには人影はおろか、虫一匹すら見当たらなかった。

「あ、あれえ？」

「見間違い？ 全く、人騒がせね」

あれを見間違いで済ますのは少々不安なんですけど。

「ま、さっさとそのキャリアバッグ部屋の中に入れて、簡単に身支度整えたら降りて来て、一階で待ってるから」

「え、ちよつと！ 行つちやうんですか!?!」

「え、だって、荷物とか色々下ろしたいでしょ？ 人に見られたくない物もあるでしょうし」

「い、いや、特にないんで、一緒にいてください！」

「はあ!?! どうしたのよ、急に！ あと、特にないってそれもそれで女子としてどうなの？」

「だって人影が……」

「虫だか人影だか知らないけれど、それは見間違いでしょ？」

「もしかしたらこの部屋のどこかに隠れてるかも知れないじゃないですか!?!」

「どこに隠れてるっていうのよ？」

「例えば、その押入れとか……」

私は矢矧の質問に部屋を見回して、すぐ横にあった押入れを指さして言った。

「まあ、確かに一人一人は入れそうだけど、流石にそれは間抜け過ぎない？」

「じゃあ、開けて見ますよ」

私は襖に手を掛けて、思い切り物置を開けた。

そこにあつたのは、一組の布団と枕、そして、先刻見た全身にロブを纏った謎の人影。

それが体育座りで物置の中で座っていた。

「——お、マジか、ばれた」

きゃー—————。

声にならない悲鳴と共に硬直する私を見て、玄関で私の方を見ていた矢矧が不思議そうに様子を伺いながら私の方へと歩み寄っていく。「どうしたの？ やっぱいいなかつたでしょ？」

そして、同時に放心している私を尻目に物置から降り立つロブの不審者。

矢矧と不審者。二人の目が合った。

「あ、やべ」

「ぎ、貴様！ 何者だあああああ!?!」

「おっと！ 逃げろ！」

「え!?! ちょっと、そっちは——」

激昂する矢矧を見て、慌てて矢矧とは逆方向へと不審者は走り出す。しかし、目の前はガラス窓。そして、その先は玄関。

私と矢矧が静止する声も聞かず、不審者は構わずガラス窓に全速力で突進。

ガラスを粉々にして突き破り、さらにベランダの柵に手を掛け、なんとそこから空中へと飛び出していった。

「あの不審者、なんてアグレッシブな！ 早く追いましょう！ 矢矧！」

「窓の修繕費用がああああああ!?!」

「早く追いましょうよ!?!」

窓の修繕費用、三万五千円。

☆

「待てえええええ!?!」

その後も私達は不審者を追って様々な場所を駆けまわりました。

工場にて。

「待てええええ！」

「しつこい奴らだ」

普段から使われていないのか人気のない寂れた工場。不審者は走り際に何かのスイッチを押す。

「危ない！」

「ひゃあ！」

途端に、大型クレーンのアームが動き出し、私達の方向目がけて回転する。

辛うじて回避するが、クレーンのアームは止まらず、工場の壁に激突。大きなひびが入った。

「ぐわあああああ！」

「矢矧！ 別に私達はダメージ受けてませんから！」

補修費用、三十八万七千円。

また、食堂にて。

「待てえええええ！」

「まだ、追ってくるか」

不審者は厨房に駆け込むと、その冷蔵庫からトマトを取り出し、私達へ投げつけてくる。

速度はさして速くはないので簡単に避けて見せるが、その度に後ろでトマトが無駄になる嫌な音が響く。

「ぐツ！ せつかくの食材が！」

「大和！ 動きが鈍いわよ！」

「し、食材が無駄になる位なら、むしろ身体で受け止めた方が！」

「血迷ってる場合じゃないでしょ！」

そうして私がかうなだれている隙について、不審者は非常口から出ていきました。

無駄になった食材費、計五百六十円。

さらに鎮守府内にて。

「待てえええええ！」

「根性あるな、あいつら」

不審者は廊下に飾ってある花瓶を投げつける。

当然、避けるので割れる。

「もう嫌あああああ！」

「矢矧！」

割れた花瓶と花、四千円。

そうして不審者の後を追って、私と矢矧は今、鎮守府を出て港方向へ道を走っていた。

走力は拮抗しており、中々不審者との距離は詰まらない。

「あの人、何者なんでしょう？　そもそも何で私の部屋に！」

「わからないわ。取り敢えず捕まえてみないことにはね！」

取り敢えず、私も矢矧もまだ体力は続く。

このまま一定距離を保ったまま相手が疲れるのを待ってもいいが、そうもいかない。

「絶対捕まえるわ。これまでの損害、全部賠償させてやるのよ！」

この人がそんな悠長に事を構えてくれるようには見えないからです。

「や、矢矧、落ち着いてください」

「あんなに物を壊して……！　始末書を何枚書けばいいと思っているの！　それに経費だってばかにならないっていうのに！　賠償させないと今月の鎮守府運営が！」

お若いのに苦労されてるんですね、色々。

「ん？　でも、あの、それって提督の仕事なんじゃ……」

「あの人に提督業を任せてたらこの鎮守府はとつくに消えてるわよ！」

「ええ……」

図らずもこの鎮守府の行く末に大きな不安を感じる一言を聞いてしまいました。

今からでも聞かなかったことにしたいのですが、あまりにシヨツキングすぎて頭から離れそうにないです。

というか、それなら私がさつき執務室で頭を下げたあれは一体なんなのでしよう。夢の国のネズミみたいなマスコットキャラクターか

何かでしようか。

偶像にして象徴という点なら酷似しているかもしれませんが。ハッ。

「……まあ、先のごとはまず、あの人を捕まえてから考えましょうか」
私はとりあえず積もる問題や不安を棚上げして、目の前の問題に集中するべく、太もものホルダーに手をかけた。

そして、指と指の間に挟むようにして、三発の白色の弾丸を握り込む。

矢矧はそれを見て驚愕の声を上げる。

「九一式徹甲弾?!」

「の、レプリカです」

そう、これは唯のレプリカであり、見かけを似せただけの鉄の塊です。

しかし――

「ある程度の重量がある以上、当たり所が悪ければ戦闘不能にだってできます!」

「物騒ね! でも良い判断よ!」

腕を大きく横に振り切りながら九一式徹甲弾を手から放つ。

三発の弾丸は直線軌道を描きながら不審者の背中と後頭部に向け、飛んでいく。

しかし、直撃寸前に、今まで前だけを見て走っていた不審者が身を翻し、こちら側に身体を向けた。

ローブがはだけて見えたその不審者の片手には日本刀の鞘、そしてもう片方の手はその鞘に収まる刀の柄に掛かっていた。

「フッ!」

一閃。

刀身が夕日に反射して眩い光を発しながら横薙ぎに振り抜かれ、私の投げつけた九一式徹甲弾は綺麗に半分に斬られ、不審者に当たることはなく地面に落ちた。

「嘘!」

「……!」

私は思わず声を上げて立ち止まっていた。

矢矧も同様に立ち止まる。

そのまま、刀を鞘にしまい、再度走り出す不審者に私はもう追いつける気がしなくなっていました。

「ごめんなさい、私、もうあの人を捕まえられる気がしません」

長物を持つている上にあれだけの剣術。艤装も持っていない、唯の少女が飛び込んで行っても勝てる筈がない。

しかし、矢矧は何故かむしろ勝ち誇った笑みを走り去っていく不審者に向けていた。

「いえ、お手柄よ、大和。これで不審者は捕まえたも、同然！」

矢矧は不審者の背中に向けて右手をかざす。

その右手には私が付けられたスタンリングとよく似た真黒なブレスレットが付いていた。

「スタンリング起動。対象、天龍！」

「——うっぎやあああああ！」

瞬間、目の前を意気揚々と走っていた不審者が急に叫び声を上げてその場で倒れた。

矢矧は笑顔で不審者の方へと駆けていく。

「う、ぐ……身体が……し、痺れて、動か、にや、い」

「ようやく捕まえたわよ。あなただったのね、天龍」

そうやって、矢矧がローブを剥ぎ取り、その正体を晒す。

短髪の紫色の髪。左目の眼帯。それは艦娘、天龍の姿であった。

「あの、この天龍はもしかして……」

「そうよ、ウチの艦隊の一員よ」

「お、俺の名はて、天龍、ふ、フフ、怖い、か……！」

どちらかというと微笑ましいですね。

「天龍、何で、こんな騒動を起こしたの？」

矢矧、笑顔なのに目が殺気立っています。

しかし、それに気づいていないのか、あるいは気付いていてわざとなのか。ヘラヘラと反省などないように笑いながら天龍は言った。

「いや、執務室から出てくる監察艦殿と新入りが見えたからよ。

ちよつとどんなもんかとちよつかい出してみただけだぜ?」

「は? スタンリング、起動」

「がああああああ!」

矢矧、死んじやいます。それ死んじやうやつです。

「あなたのお遊びで一体、いくら経費が飛んでいったの思っているのかしら?」

「えーと……43万くらい、かな?」

「42万6560円よ、コラアア!」

「ぎゃあああああ!」

ほとんど合ってたじゃないですか、可哀想に。

「始末書と反省文の提出、そして金額分の弁償を命じるわ」

「い、いや、俺らって基本金なんて持つてな……い」

「バイトして稼げ、コラアアアア!」

「みやああああああ!」

もうやめて、天龍のライフはとっくに0よ。

痙攣して最早立つ気力もない天龍を置いて矢矧は怒りながら鎮守府へと戻って行った。

一人倒れる天龍を放っておくこともできず、私は手を貸そうと彼女に近寄る。

「お、悪いな。くそ、矢矧の奴、監察艦だからって理不尽に暴力を振るいやがって……!」

「いや、真つ当でしょう」

「はは、手厳しいねえ」

「全く、本当になんであんなことを? もつとやり方があったんじゃないですか?」

「いいんだよ。俺は面白いことが最優先だからな。後が怖くても今が楽しけりやそれでいい」

典型的なダメ人間ですね。

天龍は満足げに笑うと、私を見て続けた。

「それにさ、どうよ、大和。俺との追いかけてこでついでにこの鎮守府の色んな所も見れただろ?」

「え？ あ、言われてみれば確かに」

「そういえば彼女を追って鎮守府で案内されていなかった所を色々見れた気がします。」

「それに、大分あの監察艦とも打ち解けたんじゃないか？」

「そ、そんなことのためにあれだけの騒動を起こしたっていうんですか？」

「そんなことじゃねえよ。新しく入って来た仲間のこれからの生活に関わるんだ。先人としては何かしてやりてえだろ？」

「はは、変な人ですね。おかしいですよ、特にやり方が」

「ま、俺は馬鹿だからな」

「はい、大馬鹿ですね」

「他人から言われるとなんかムカつくんだが……ま、いいやこれからよろしくな、大和！」

「はい、こちらこそよろしくお願いします、天龍！」

この七丈島に来てから上手くやっていけるのか、とか色々と不安も多かったですし、今もまだ拭えていません。

でも、私、ここで上手くやっていけるかわかりませんが、取り敢えず楽しくはやっていけそうです。

今日はそう思えた一日でした。

「さて、今日の夕飯は何かなーつと」

「いや、さつき天龍が食堂を滅茶苦茶にしてたばかりじゃないですか」
「あ……」

☆

その頃、食堂では。

「な、なんだこれは……！」

食堂の惨状を見て絶句する人影が一人。

人影は、厨房の材料を確認すると、小さく頷き、右手に包丁を握りしめて言った。

「私が、なんとかしなければ……！」

第五話 「生死の一線弁えてます!？」

「——それで、お前あの超弩級盛り海軍カレー、五皿も完食したのかよ。ぱねえな」

「はい、すごくおいしかったです! 思い出したらまたお腹が空いてきました」

「それでもまだ空くのか……」

私、大和と、同じ七丈島艦隊の天龍は並んで鎮守府を歩いていた。友好的で話易い雰囲気为天龍は、私どもの数分で打ち解け、既に互いに気心の知れた仲にまでなっている。

先の一件で矢矧とも少し仲が深まったような気がしたが、天龍とはそれ以上に和気藹々と会話を楽しむことができていた。

きつと矢矧のような謎の威圧感がなく、なんというか物腰が軽いせいだろう。

今のは『軽』巡洋艦と掛けてみた訳では決してない。

「さて、腹が減っているとこ悪いが、まずは俺達の散らかした食堂の掃除から始めなきゃ夕飯が作れねえからな。ちやつちやと終わらせようぜ」

「さらっと私も手伝わせようとししないでください。散らかしたのは天龍だけじゃないですか」

「おいおい、冷たいぜ? そう浅い仲でもあるまいし」

いや、出会って数分の浅い仲じゃないですか。

しかし、食堂の入り口まで一緒に来て自分だけ何もせず見ているというのも中々、妙な罪悪感が湧いてくるもので、結局私は天龍と共に散らかった食堂を片付けることになった。

天龍が食堂の扉を開けて勇んで中に入っていくのに続き、私も食堂に入ると、天龍の無駄に大きい驚愕の声私の耳に鳴り響く。

「なんじゃこりゃああああ!!」

「急になんですか、うるさいですよ……つてええ!!」

ついさつきまで、食堂は天龍が暴れまわったせいでそこら中に食材

が散開し、食器が割れていたりと酷い状況にあった筈。

それらが一体、何があつたというのか。食堂はまるで何もなかったかのように綺麗に片付いており、しかも、机の上には色とりどりの料理が並べられ、部屋中をおいしそうな香りが漂っている。

その部屋の中心に、同様に料理を見つめる矢矧の姿があつた。

「矢矧、まさか、食堂の掃除に加えてこの量を一人で作つたのですか!?」

「ごちそうじゃねえか！ やるな、矢矧！」

「そんな訳ないでしょ。私が来た時には既にこうなつてたのよ。食堂を片付け、これを用意したのは——」

「——それらを作つたのは私だよ」

いつの間にか、私と天龍、矢矧の後ろの厨房入り口付近に一人の少女が立っていた。

私や天龍や矢矧もまだまだ少女と呼ばれるには十分な容姿をしているが、その少女はそれよりもより少女たる未成熟な容姿をしていた。

幼女、とも呼べるのかも知れない。外見はおおよそ小学校高学年程度に見える。

しかし、調理中だからか、ゴムで括られた艶やかな長い黒髪をはためかせ、どこか大人っぽい仕草で微笑するその少女は、やはり七丈島艦隊の一員たる必然か、どこか子ども扱いできぬような異彩の空気を纏い、そこに立っていた。

「あなたが？」

「そう。見ない顔だな？ 私は磯風。この七丈島鎮守府に所属している艦娘の一人だ」

「私は大和。今日、この鎮守府に配属されました」

「そうか、歓迎しよう、大和。これからよろしく頼む」

中性的な口調の磯風と名乗った少女は、私の自己紹介を聞き、嬉しそうに顔を綻ばせ、そう言った。

当初感じた大人っぽい雰囲気から一変、その笑顔の眩しさと言え、まさにあれ位の年の子供特有の太陽のような輝きを放っており、

私はその愛らしさに困惑してしまふ。なんということだ。

「凄いですね、たった一人でこれだけの美味しそうな料理を……得意なんですか?」

「得意というほどではないさ。ただ、好きでやっている内にこうなっただけだよ」

少しも気取った感じなく、彼女は一言そう告げた。

あの年でこれだけ料理ができるなど、相当の練習を積んだに違いない。私も料理はそこそこ得意な方ではあるが、彼女位の歳の時はまだ包丁の使い方すらままならなかった。

「テーブルに置いてある料理は好きに食べていてくれ。私はデザートの準備があるからもうしばらく厨房から手が離せない」

「そんな、皆で一緒に食べましょうよ」

「申し出は嬉しいが、私を待っていては、折角作った料理が冷めてしまふ。料理はやはり温かいうちに食べて欲しいんだ。私のことは遠慮せずに、先に食べてくれ。その方が私も、食材も喜ぶ」

なんというプロ意識だろう。本当に自分より年下なのだろうか。

「そういうことなら、俺も腹減ってるし、早速戴かせてもらうぜ、磯風！」

「ごめんなさい、磯風。ありがとう」

「礼には及ばない。さつきも言ったが、私は好きで料理しているだけだからな」

その一言を最後に、磯風は厨房へとまた姿を消した。

かっこいい。素直に彼女に対し、そう口になっている自分がいた。

私達は席につくと、三人で手を合わせ、食事を始める。

「いただきます!」

「いただきます!」

「戴きます」

空腹だった私達は、それぞれテーブルの近くの料理を取る。

私はどれを食べようか悩んでいる内に出遅れていた。

だが、それがむしろ幸運であったことを私は二秒後に知る。

「うっ!?!」

「え!？」

「な、ど、どうした!？」

突然、隣に座っていた矢矧がうめき声を上げ、何回か身体を痙攣させたかと思うと、彼女の身体は力なく食堂の床に倒れ伏した。

「……………」

「……………」

えー……。

私と天龍はしばらく何も言わなかった。何故突然、一秒前まで元気だった筈の彼女が今はまるでヤムチャしてしまった後のように床に伏して動かないのだろうか。

「ん? どうしたー? 何かあったか?」

「ツ! な、なんでもありません!」

「ん、そうかー」

私達のどこかただならぬ様子を察知したのか、厨房の奥から磯風が声を掛けてくるが、私はその声について、なんでもないと答えてしまった。

そして、すぐるように天龍の方を見る。

天龍は動かない矢矧の姿を凝視すると、突然、席を立ち、彼女の方へと歩いていく。

「て、天龍……?」

「何ボサっとしてんだ? 矢矧が倒れたまま動かない。なら俺達がやることなんて一つしかないだろ」

「そ、そうですね、急いで助けな——」

「目覚める前にこいつが三日くらい寝込むような悪戯しないとな」
「私の感動を返してください」

ちよつとでも頼りになると天龍に尊敬の眼差しを向けていた自分を殴りたいです。

「やめましようよ。後で痛い目見るのはわかりきってるじゃないですか? ていうか、そんな場合じゃないでしょう!」

「止めんじゃねえ! お前みたいな出会って数分の奴にや俺の気持ちなんてわかんねえよ!」

「きつきは浅い仲でもないって言ってたじゃないですか!?!」

「うるせえ、どきな! こいつには昨日、夕飯に俺の苦手なピーマンを大量に入れられた恨みがある!」

「恨みがしようもない!」

かつ、どうでもいい。

「取り敢えずは監察艦殿の鉄壁スカートの内側を写真に……ぐへへ」

しかも、仕返しの内容におっさんくさい下心が垣間見える。

「うーん……スタンリング、起動……天龍……」

「があああああああ!?!」

「迎撃!?!」

危機察知能力半端ないな、と初めて矢矧を尊敬した瞬間でした。

「く、くそ! ぐ、偶然寝言でスタンリングを起動させるとは……悪運の強い奴! だが、二度目は——」

「スタンリング、起動……天龍、むにや」

「みやあああああああ!?!」

まさかの連撃。

「ぐ、くそ! 三度目の正直!」

「スタンリング、むにや、起動。天龍!」

「にやあああああああ!?!」

「これ矢矧、本当は起きてるんじゃないですか!?!」

取り敢えず、矢矧が元氣そうでした。

倒れている女の子のスカートをめくろうとしていただけの筈なのに、既に満身創痍に近い天龍を諭し、私は本題に入った。

「とりあえず、矢矧は元氣そうですね、今は何故彼女がこんなことになったのか、その原因究明から始めましょう」

「うう、でもピーマン……」

「ピーマンの件は漢らしく水に流してください」

「私、女だよ」

流石に三回連続で電気ショックを受けているからか、随分としおらしくなっている天龍がそこにはいた。

「うーん、取り敢えず、倒れた原因として最初に考えられるのは、この

オムライスですよねえ」

矢矧が一口だけ食べたオムライス。

これを食べてすぐに彼女は気を失ってしまった。原因はどう考えてもこれしかないが、こんなに美味しそうだし、それにあの磯風が毒を盛るというのも考えたくはない。

だが、しかし――

「磯風が料理に毒を盛るってことだけはありえないぜ」

「天龍……」

「あいつは誰よりも、何よりも料理に真剣な奴だ。そんな自分の誇りとも言える料理を毒で汚すんざ、ありえねえ。俺が保障する」

天龍の声はいつになく真剣なものだった。

それだけ、天龍は磯風の料理への情熱を信じているということ。当然だろう、出会って数分の私にさえ、彼女の料理への真摯な態度がひしひしと伝わってきた。

加えて、磯風とより長い時を過ごして来た天龍が言うのなら間違いないだろう。

しかし、そうになると、やはり矢矧の倒れた理由が謎であった。

「お、そうだ！ そのオムライス食べて意識失ったんならそれもう一回食べてみれば何かわかるんじゃないやねえか？」

「なんて提案するんですか!?! やめてくださいよ!?!」

私の制止の声も聞かず、天龍はオムライスの皿を手に取り、スプーンで一口分を掬い取る。

「ほら、矢矧、口開けろ」

「ちよつと」

止めを刺さないでください。

矢矧の口元にオムライスを近づける天龍に思わず私は手刀を振り下ろしていた。

「冗談だつて!」

「いや、止めないと本当にやりそうな勢いだつたんで、つい」

「流石にその一線は弁えてるさ。じゃ、頂きまーす」

「生死の一線弁えてます!?!」

自ら矢矧を昏倒させたオムライスを口に運ぶ天龍。

私が慌てて手を伸ばすも、間に合わず、オムライスは天龍の口の中に消えていった。

「もぐもぐ、ふうん、意外とうま——いッ!？」

「天龍——ッ!？」

天龍は矢矧同様、体を激しく痙攣させ、その後、意識を失って力なく床に倒れた。

「——ッ!？」

矢矧を助けるどころか、むしろ屍が二つに……。

「なんか、さつきから静かだが、大丈夫か?」

「え!? は、ふあい! 大丈夫です!」

「そうか! もうそろそろ私の方も作業が終わるから、すぐにそっちに行くよ」

「は、はい」

どうしよう、全然大丈夫じゃないんですけれど。

左右には屍が二つ。

目の前にはおそらくは一口でも食べれば昏倒不可避の殺人料理。

「一体、どうすれば……」

「——あれれ、あなた、新入りさん?」

「ふわあああ!」

突然、真後ろから声が出て、私は奇声を上げてしまった。

今の状況をどう打開するかに必死だったから背後への警戒が緩んでいたのだろう。

後ろには、金髪のツインテールが印象的なたれ目の少女が微笑んでいた。

「Guten Tag! 私の名前はプリンツ・オイゲン! 七丈島艦隊の一員だよお、よろしくね!」

「あ、大和です。よろしくお願ひします、プリンツ……というか、今はそれどころじゃないんです! 力を貸してください!」

「んー? 何かお困り?」

私はもう藁にも縋るような思いでこれまでのいきさつをプリンツ

に話す。

すると、彼女は笑って私に大丈夫だと言わんばかりに親指と人差し指で丸を作ってみせた。

「大丈夫、大丈夫！ これならウチではよくあることなので！」

「よくあるんですか!？」

私が驚愕の声を上げると、プリンツは厨房の方を見ながら私の唇に指をあてがう。

「あ、すみません！ 少し声が五月蠅かったですね」

「うん、ちよつと磯風ちゃんには聞かせられないからねえ……………大和つて、唇柔らかいんだねえ、素敵」

「え?」

「ん、いやなんでもないよお」

え、なんでしよう。なんか今、少し寒気が。

「えつとね、実は磯風ちゃんの料理って見た目も匂いもすごく美味しそうなんだけど、どうも味だけが恐ろしく良くないみたいでね、一口食べれば今倒れてる矢矧と天龍みたいに昏倒しちゃうの。あ、命に別状はないよ、一口だけなら」

致死量があるってことですか。それ料理なんですか、本当に。

「ん? 『みたい』 ってプリンツは食べたことないんですか?」

「うん！ 私は食べたことないし、食べるつもりもないよお。それに、食べた人は前後の記憶が抜け落ちちゃうから磯風ちゃんの料理のことうまく覚えてないの。だから今みたいにまた機会があれば食べちゃうんだよねえ。ほら、見た目は美味しそうだからね」

「な、なんという、負のスパイラル……………」

「磯風ちゃんは自分の料理の味に関して無自覚だしねえ」

「誰も言わないんですか? その、料理のこと……………」

「言えると思う?」

プリンツが視線を外すと同時に厨房の扉が開き、エプロンと髪ゴムを外した磯風の姿が現れた。

私とプリンツの姿を捉えると嬉しそうに駆けてくる。

「すまない、待たせてしまって！ ん? 天龍と矢矧はどうしたんだ

？　こんな所で寝っ転がって」

「あ、それは……」

「二人とも、食べたなら眠くなっちゃったらしくて眠っちゃったんだあ」
返答に困った私をプリンツが素早くフォローする。

それを聞くと磯風は困ったように笑うと小さな身体で力いっぱい持ち上げ、二人を椅子の上に寝かせる。

「全く、この二人は毎回そうなんだ。せめて椅子をベッドにすればいいのに」

「……………」

「でも、嬉しいな。私の料理でそこまで満足してくれるなんて」
「……………」

確かに言えません。ただ料理を食べた、料理を直接褒められた訳でもない。それなのにこんなに嬉しそうで満たされた笑顔を見せてくれる女の子に、あなたの料理は人を昏倒させるレベルで不味いなんて言える筈ありません。

「ね、わかったでしょ？」

「はい……………」

嬉しそうに二人の寝顔を観察している磯風に隠れ、プリンツが耳元で囁く。

「で、でも、それならせめて天龍と矢矧に教えてあげるくらいはしてあげなかったんですか…………？」

「したよ」

「え？」

プリンツの方を見ると、彼女は複雑な表情で私のことを見つめていた。

「ん？　どうしたんだ？　二人でここそ話して？　さあ、たくさん作ったからどんどん食べてくれ！」

「は、はい……………」

「D, ^{あ、}Danke!　わあ…………おいしそー!」

「ん？　おっと、私としたことが、自分の取り皿と食器を持ってきていなかった。すまない、また厨房から取ってくるよ」

そう言つて、満面の笑みで磯風は厨房へとまた戻つて行つた。

「こ、これは、私もいよいよ覚悟をきめなきやかもお」

「くッ……！」

たった一口で艦娘を昏倒させる程の威力の殺人料理。それが目の前に数多置かれている。

どうする、どうするんですか、私！

第六話 「私もオムライス、一口貰っていい？」

「へえ、今日の夕飯は磯風の手料理か！」

「そういえば以前も食べたことあった筈だけれど、おかしいわね、よく思い出せないわ」

(やっぱり、二人とも忘れてるんだ)

私、プリンツ・オイゲンがまだここに来て間もない頃、既に磯風の料理は何度か振る舞われていたようだった。

一口食べれば昏倒、そして目覚めた後は彼女の料理に関しては記憶が抜け落ちてしまう。

私は偶然、被害を受ける前にそれがわかったから良かったが、天龍と矢矧はすっかりその負のスパイラルに嵌ってしまった。

だから、私は言った。これ以上倒れる彼女達を見たくなかったから。

「あの一、その料理、食べるの？」

「ん？ 何言ってるんだよ、プリンツ。こんなにうまそうな料理が並べられてて食わねえなんてどうかしてるぜ」

「折角磯風が作ってくれたのだし、皆で戴きましよう」

「駄目なんだよ。それを食べたらまた二人とも倒れちゃう」

「え？」

私は二人に全てを話した。磯風の料理は見た目こそ素晴らしいが、その味は一口で人を昏倒させる殺人料理であること。そして、矢矧と天龍はそれを毎回のように食べて倒れていること。

これで、もう天龍と矢矧は倒れることはない。磯風には皆でしっかりこのことを言おう。

問題は解決する筈。そう思っていたのに、二人は笑って言った。

「まあ、でも、だからって食べない訳にもいかないんだがな」

「え？ え？」

「そうね。私も食べるわ。例えば、一口で倒れてしまおうとも」

「な、なんでえ!?! 私の話、聞いてなかったの!?!」

「聞いてたさ。でもよ、これはあいつが、仲間が俺達のために作ってく

れた料理だ」

「あんなに小さい子がたった一人で作ってくれた料理を、倒れる程度で食べないなんて、失礼よね」

そう言つて、二人は皿の上の料理を口に運ぶ。

それを私は止めることなんてできなかつた。

「あ、う……」

「ま、そういう訳だ、悪いな、プリンツ。多分今の話だと倒れた私を部屋まで運んでるのつてお前だろ？ 迷惑かけるが、もうしばらくよろしく頼む」

「ま、何度も食べてればその内耐性もついて来るわよ。つかなきや、無理やりにでも付けるわ」

「うう、そこまでしなくても……」

「いいんだよ、俺が好きでやってんだ」

「いいのよ、私が好きでやってるんだから」

そう言つて、いつも通り倒れる二人。

私は、もう何度彼女達の倒れる姿を見ているのだろう。

私はもう長いこと、一步を踏み出せていない。

☆

「ど、どうすれば！ どうすれば、この状況を打破できる！」

時間は限られてる。

磯風が厨房に入ってから食器を見つけて戻ってくるまで約一分。その間に何か打開策を練るのだ。

私達も、磯風も傷つかない、平和なエンディングを。

「とりあえずはこの料理をなんとかすれば……！」

せめて食べても昏倒しないレベルにできれば、希望はあるかもしれない。ません。

「そんな時のこれだよお、オリーブオイル！」

「オリーブオイル!? ていうかなんでそんなの持つて……」

「以前、有名な料理番組で見たの！ これさえあれば大丈夫、どんな料理もこれ一本だよ！」

そう言つて、プリンツは新品のオリーブオイルの瓶を開けると、そ

れをオムライスの上からどぼどぼと掛け始める。

「なるべく高い所から出来るだけたくさん振りかけるのがポイントだよー!」

「その料理番組の人、も●みちさんって名前じゃなかったですか?」

「これでこのオムライスも、ごきげんうまい!」

「いや、誰もが不機嫌になりそうな出来映えなんですけど!」

黄色いオムライスの表面を覆い尽くす緑黄色の液体。最早、見た目すら食べ物に見えなくなっていた。

「じゃ、この調子で全部にオイル、かけちゃおつか!」

「嫌ですよ! 収拾つかなくなるからやめてくださいよ!」

「あ、そのMBDF麻婆豆腐は低めでお願ひね!」

「低めってなんですか!?!」

オリーブオイルの滴下高度らしいです。

そうしてプリンツが椅子に立ってオリーブオイルをまき散らそうとするのをみ合せて止めている内に、厨房の扉が開いた。

「——いや、すまない。どうやら食器がもうないようだ。天龍の奴が相当割ってしまったようだ……な、何をしてるんだ、お前達、抱き合ったりなんかして?」

「い、いやあ、これは少しプリンツと親睦を深めていて……」

「そ、そうか、随分と、その……スキンシップが激しいんだな……」

「いやん、大和ったら激しいよお」

「~~~~ツ!」

フオローのつもりかもしれないですけど、それ逆効果ですからね。磯風顔真っ赤じゃないですか。

「で、では、私は倉庫まで食器の在庫を取りに行ってくるから、すまないが二人で食べていてくれ……その、ごゆっくり!」

ちよつと待って、ごゆっくりってどういう意味なんですか、ちよつと。

磯風は真っ赤の顔を隠しながらそう言って食堂を出ていった。

「さて、これでもうしばらく時間ができたね!」

「この間にこの料理をなんとかしないと……」

「じゃあ、やっぱりオリブ——」

「その線はなしで」

私は急いでこの料理をどう処理するか、思考を巡らせる。

今のままでは私もプリンツも一口で昏倒する。ならば、料理の味を改善するしかないが、その方法が全く思い浮かばない。

私がこれと同じ料理を全て作ってすり替える。駄目、時間があまりにも足りません。

「あー、まだ卵とご飯少し残ってる！ あとでTKG卵かけごはんにしよう」

「プリンツさん！ いつの間に厨房に!? 何してるんですか!?!」

厨房のカウンターから顔を覗かせた彼女は、そこをよじ登って外に出てくる。

彼女のミニスカートだと足を上げる時にパンツが見えてしまいそうになり、私は見ていて恥ずかしくなる。

だが、プリンツの方はそんなこと意にも介さず、厨房から出てくると手に持った大きな袋を私に渡す。

「ま、磯風ちゃんもそろそろ帰ってくるだろうし、もうちやつちやとやつちやおう！」

「この袋は……」

「うん、仕方ないよ。食べられないんだもん。じゃあ、処分するしかない。少し可哀想だけどこれが最善じゃないかな」

そう言って、プリンツは片手に袋を持ち、オムライスの皿に手を掛ける。

私は思わず彼女の手首を握り、それを止めていた。

「……大和?」

「すみません。それだけは、できません」

「じゃあ、どうするの?」

プリンツの顔から笑みは消えていた。

鋭い目線に思わず私は目を背けてしまう。

確かに、今の関係を維持するのならこれが最善だろう。既にやられた天龍と矢矧を除き、皆が平和だ。しかし、今のこの負のスパイラルを残したままで本当にいいのか。

「……まず、この袋は使いません」
「ん？」

「プリンツはこのテーブル上の料理を全部、食べやすいように私の所に集めておいてください。それで、私はその間厨房をお借りします」
「え？ 解決策思いついたの？」

私は心の中で覚悟を決めました。
そして、プリンツに向けて笑みを浮かべ、ポケットからスプーンを取り出しました。

普通のスプーンではありません。通常のスプーンよりも遥かに大きい、『ビッグスプーン』。
「これで、なんとかします！」

カレー食べた時から勢いで持つて帰ってきてしまいました。店長さん、本当に御免なさい。

☆

その頃、カレー専門店、ビッグスプーン。

「ない、ないわあああああああ！」

「どうしたんですか、店長？」

「なあいのよお！ この店の象徴、ビッグスプーンがああああ！ ほんだけえええええええええッ！」

「あれ、高かったつすよねえ」

「どんだけえええええええええッ！」

☆

「ふう、思ったよりも探すのに手間取ったな、すまない二人とも、今戻った……ん？」

「あ、磯風ちゃん、おかえりー」

「どうしたんだ？ 料理をそんなに寄せて……それに、この匂い、誰か料理を？」

「大和がねえ」

「お待たせしました！」

そう言つて、厨房から一皿のオムライスを手に私は磯風の前に出た。

「ど、どうしたんだ？ 急にオムライスなんて作って……」

「これは磯風さんの分です。座ってください」

「あ、ああ……？」

磯風を私の対面の席に座らせ、その目の前にオムライスを置く。

そして、ここからが本番であった。

「——では、いただきます！」

「——!？」

一瞬で私が手に取った皿の上の天津飯は姿を消していた。

ビッグスプーンと私の洗練された食事スピードが掛け合わさった賜物である。

（この天津飯、なんで苦いんですか!? あとウエハースみたいなサクサク感が!? いや、驚いている場合じゃありません、次!）

驚愕のあまり口を開けて唾然としている二人を尻目に私は素早く次の皿に手を掛けた。

カレーライス。見た目は普通だが、その味は予想の斜め上をいっていた。

（何これ、苦い、甘い、辛い、辛いが順に口の中で混ざり合ってくる……!? つ、次!）

次に手に取ったのは回鍋肉。

（味が……ない!?!）
から揚げ。

（なんか、お餅みたいな食感……）

とんかつ。

（食るとか以前に、これ動いてるんですけど……）

「す、凄い、一瞬で皿の上の料理が消えて……!」

ちなみにこの間、三秒程度です。

私の策はこうでした。

天龍が料理を食べてから倒れるまでにはおおよそ五秒程度のラグがありました。ならば、そのラグの間に料理を完食しようという策です。

幸い、食事スピードとそれを向上させる規格外の大きさのスプーン

があるので、一皿一秒もかかりません。

ただ、これは味が一瞬しか味わえないので料理が楽しめないのですが、この状況に限ってはこの方法しかないと考えました。

「——くっ！」

餃子の皿を完食した所で、私の意識が揺れ始める。

まだ三分の一程度料理は残されている。やはり予想通り間に合わなかったようだ。

私はよろめきながら立ち上がると、プリンツに支えられながら磯風の目の前に立つ。

ここからが、正念場。この負のスパイラルを断ち切る、苦肉の策。

「だ、大丈夫か!? 喉に何か詰まらせたのか!?」

「ち、違います……! 時間もないので、簡潔に言わせて貰います……」

頭がぼやけ始め、視界が朦朧とする。意識が何度も飛びかけるのを、気合だけで持ちこたえつつ、私は続けた。

「あなたの料理は、不味い！」

「……………え」

「どれくらい不味いかというと、その天龍と矢矧が一口で卒倒する位不味い! 私も正直もう目の前がほとんど見えません!」

「不味いで済む話なのか、それは!」

「大和……」

二人共、そんな顔しないでください。私だってこんな事言いたくはありません。

でも、料理を処分して嘘偽りで磯風を守って、それで問題の根本が解決するとは思えなかったんです。

この負のスパイラルのままじゃ、永遠に天龍や矢矧が傷つくまま。かと言ってそれを避けようとすれば今度は磯風を傷つける。

「——誰かのために、誰かが傷つくしかないなら、皆のために、皆が傷つきましようよ。誰かの犠牲の上に成り立つ笑顔なんて、嘘です」

あれ、意識が朦朧として、もう、考えてることすら声に出ていますね。

私は、最後の力を振り絞り、磯風の肩を掴む。

細くて、華奢な体つきだった。

「す、すまない。私は、今まで皆になんてものを……」

「私は、あなたの料理を食べました。次はあなたが私の料理を食べてください」

「え？」

「あなたの料理は不味いです。食べた私が断言します！ だから、これから上手くなりましょう！ 私が責任を持って教えてあげます！必ず、まずはそのオムライスの味が作れるように、必ず！ だから、これから、やりなおしましょ——」

「や、大和!? 大和!？」

私の気力の限界が来たのでしよう。意識はそこで闇に飲まれ、それ以降私は長い眠りに入りました。

料理を批判するために、勇んで磯風の料理を大量に食べてしまいました。

取り敢えず、私のこの眠りが長い眠りであって、永い眠りにならないことを祈るばかりです。

☆

「い、息はあるのか!？」

「うん、大丈夫！ よく眠ってるねえ」

プリンツの膝の上で眠る大和を磯風が心配そうに覗き込む。

「しかし、驚いたな」

「自分の料理のこと？」

「それもあるが、大和にもだ。まさか、料理が不味いだなんて、真正面から言ってくるなって、ふふ、今思い出したらなんだか笑えてきたよ」

磯風が先刻の大和の言葉に深い傷を負った様子はなかった。

むしろどこか晴れ晴れとしたものすら感じる。

「いや、薄々、皆がどこか私を気を遣っていることは気が付いていたんだ。でも、私自身もそれに甘えていた。まさか、こんな殺人料理をだしていたなんて知らなかったからな。本当にすまない」

「い、いや、私に謝らないで！ 私は、その……一度も食べてない、から」

頭を下げる磯風にプリンツは申し訳なきように俯きながら呟いた。それを聞き、磯風は安心したかのように笑う。

「そうか、それは良かった。しばらくは私の料理には手をつけないでくれ」

「しばらく〜」

「ああ、だって料理、教えてくれるんだろう？ その大和が。だから、私が上達するまでだ」

「ああ、そんなことも言ってたねえ」

「まずは、このオムライスの味に、だな」

そう言つて、磯風は大和の作ったオムライスを見ると、スプーンで半熟のオムレットと中のチキンライスとを一緒に掬い、口に運ぶ。

塩コショウの効いたチキンライスにとろとろでふわりとした食感のオムレットの甘味が絶妙に調和し、満足感が口から喉を通る。

「凄くおいしい！」

「私もオムライス、一口貰つていい？」

「ああ、勿論だ」

「ううん、そっちじゃない。磯風ちゃんの作ったオムライス」

プリンツはそう言つて、テーブルの上に残されたオムライスを指さす。

「や、やめてくれ、あんなもの食べるなんて」

「いいの！ それに皆のために皆が傷つくんでしょ？ 私だけ何も傷ついてないから、ね」

プリンツの強い押しに負け、磯風は仕方なく、プリンツの所にオムライスの皿を持っていく。

「じゃ、いただきますー！」

「本当に、大丈夫か？ やっぱりやめておいた方が……」

プリンツはオムライスを掬い、口に運ぶ。

最初は普通のオムライスの味、かに思えたが、徐々にそれが酸味を増し、まるでレモンをまるごと一口の中に押し込んだような強烈な刺激が口内から脳内に響き渡った。

「こ、これは、不味い……！」

「だから、言ったのに……」

「いいの！ 私が好きでやってるんだから、ね！」

その刹那、途端に意識が朦朧とし、視界が回転し始める。

「ごめくん……あとは、よろしく……」

「え、ちよ！ 流石に四人も部屋に運び込むのは私にはキツイ——プリンツ！ 頼む、帰って来てくれえええええ！」

ようやく、これで私も一歩、踏みだせたかなあ。

意識の途切れる瞬間、自分の真下で眠る大和の寝顔が目に入った。

——私の踏み出せなかった一歩を踏み出して、全部解決しちゃうなんて。もう、この人以外に考えられない。やっと見つけた。私の、『お姉様』。

第七話 「では、倉庫整理を始めましょうか」

「では、昨日の騒ぎの罰として、あなた達には倉庫整理を命じます」
「えー、そりやないぜ、提督」

私、大和がここ、七丈島鎮守府に着任してから一日が過ぎ去りました。

思えば長い一日でした。夕食辺りから記憶が覚束ないのですが、とにかく長い一日だったような気がします。

そして、今朝方、執務室にて私と矢矧、天龍の三人は昨日の不審者騒動に関して提督からお叱りを受けています。

「提督、今回の件は私と大和は被害者側です。天龍のみの懲罰で良いと思いますが」

「いや、まあ、そうですね」

「そもそも、倉庫整理というのも、今日提督がなさる予定の仕事じゃないですか。体よく私達にご自分の仕事を押し付けるつもりですか？」

「いや、それは、その……」

「しかも、昨日中に目を通して承認印を頂きたかった書類、まだ片付いてないですよ？ 提督は昨日一日中、一体その机に座って何をなさっていたのでしょうか？」

「いや、私は——」

「言い訳しない！」

「はい、申し訳ありません！」

あれ、叱られてたのどっちでしたっけ。

「まあ、それはそれとして。この件は、天龍は鎮守府内の器物破損、その被害をいち早く食い止められなかった矢矧の監督不行き、あと、大和が隠し持っていたレプリカの九一式徹甲弾という危険物持ち込み。この三つの規律違反をまとめて懲罰するものなので、全員倉庫整理は絶対です」

「う……」

「は、はい……」

私と矢矧は二人揃って提督の台詞に顔を引きつらせる。

確かに、監察艦という役割である矢矧は天龍の起こした騒動を取り締まる責任がある筈だし、そもそも天龍をそうさせるようにしてしまったこと自体が既に監視不足と言える。

また、私もレプリカとはいえ、鉄球という危険物を隠し持っていたことは罪人という立場をふまえれば、明らかに規律違反であり、本来ならば営倉に送られてもおかしくはない。

「まあ、私も一緒にやりますから」

「ちつ、しゃーねえな！ まあ、いつちよやってやるか！」

「わかりました」

天龍と矢矧も反論の余地はなさそうだ。

こうして、私達は提督に連れられて、第一倉庫と書かれた部屋の前に来た。

「この鎮守府には全部で四つの倉庫があります。それぞれ、用途によって分けられ、置かれているものが異なります。この第一倉庫は四つの倉庫の中では一番大きい倉庫で、主に生活用品が置いてあります。まずは皆でここを片付けましょう」

着任したばかりの私のためか、それとも他の誰かのためか、説明口調でそう言いながら、提督はたくさん鍵のついた鍵束をジャラジャラいわせながら、一つの鍵を鍵穴にさす。

それを反時計回りに九十度回してやると、カチリと、響きの良い開錠音をたて、扉が開かれた。

「暗いし、寒いですね」

「湿気や熱に弱いものもあるからね。食料品が保管されている第二倉庫はもつと寒いわ」

部屋に入り、外との気温や湿度の差に驚く私に矢矧がそう付け加えた。

「電気は、と……」

提督が暗闇の中で手を動かした後思うと、スイッチを押した音の後に、真っ暗だった倉庫に電気がつく。

見渡すと、改めてその広さに私は絶句し、これから行う整理作業に

気が遠くなった。

「じゃあ、私が備品リストに書いてある物品と置かれている場所を言いますから、皆はそこにいくつ物品が残っているか答えてください」

「了解だぜ」

「わかりました」

「はい！」

「では、倉庫整理を始めましょうか」

その後、明らかに百ページ以上はあるリストを次々と読み上げていく提督。

私達は広い倉庫内を右往左往しながら、なんとか数時間かけ、第一倉庫の確認を終えた。

書こうと思えばこんな数行の短い文章で済んでしまいましたが、実際の労働量はこんな陳腐な文では表せない程に壮絶なものでした。

具体的には最初の方は体力に余裕があり、かつ、初めて来る倉庫の目新しさにさしたる苦痛は感じないものの。半分を過ぎる頃にはもう体力的にも疲れが出始め、正直倉庫の風景もいたく退屈な風景に見えてしまう。実際、箱の上に箱が積まれただけの無機質な空間に面白味など欠片もないのだから、こうなるのは当然のことです。

この辺りから天龍などは作業が適当になり始めます。当然の如く申告不備が増え、結果的に私と矢矧の仕事が増えます。

矢矧はその度に天龍を叱りつけ、時にはスタンリングなど行使するのですが、その怒りで余計な体力を使うのがまたいけませんでした。

矢矧は天龍に余計な体力を使い、後半はくたくたに、天龍は元々疲れていた所に矢矧の罵声かつスタンリングの電撃。二人とも体力的にも精神的にも限界近くを迎えていました。

そして、その二人分の穴を埋めるのは私、という訳です。

いかに懲罰目的といえど、あまりにも酷過ぎる風景がそこには広がっていました。

「――よし、これで第一倉庫はおしまいですね」

「っ、疲れたぜ」

「まだこんなのが三つもあるんですか……」

「いや、ここまでの広さを誇るのはいここだけよ。後はこれの半分位の広さの筈、だから」

「半分でも十分広いけどな……」

既に満身創痍、疲れ切った私達の前に、提督は分厚いリストをめぐりながら笑顔で戻って来ました。

全員がイラツとしたのは言うまでもありません。

「では、次からは分担して行いましょう。第二倉庫は矢矧、第四倉庫は天龍、第三倉庫は私と大和でそれぞれ倉庫整理をしましょう。これ、それぞれのリストと倉庫の鍵です」

「おい、これ何ページあるんだよ……殺す気かよ」

「気が滅入るわ。というか私自身が滅されそう」

嫌そうな表情を臆面もなく顔に出しながら、それでも渋々物品リストを受け取り、天龍と矢矧はそれぞれの倉庫へと歩いて行った。

何故私は戦地に赴く戦士達を見送るような目で彼女達を見なければならぬのでしょうか。

「それでは、行きましょうか」

「は、はいー」

残された私と提督も倉庫の戸締りをして第三倉庫に向かう。

「あの、第三倉庫は何があるんですか？」

「第三倉庫は、娯楽用品、ですね」

「娯楽用品……そんなものがあるんですか」

「ええ、だって退屈でしょう？ この鎮守府何もないですし」

それはそうですけど、私達は犯罪者ですよ。

私は複雑な心境で、提督の言葉を聞いていた。

「——さて、ここが倉庫です」

第三倉庫と書かれた部屋の大きな扉を開け、電気を付けると、そこには様々な種類のボードゲームや楽器、スポーツ用品までが余す所なく敷き詰められていた。

「基本的にはこの部屋の物品は艦娘や私から希望がない限り増えないのであまり倉庫整理の意味ないんですよね」

「随分と色んなものがあるんですね……」

「大半は私が発注したものです。あんまり使われていないようで悲しいですが」

埃を被ったピアノや、テニスラケットを撫でながら提督は悲しそうに呟いた。

彼はその無駄な発注のせいで自分の、しいては私達の仕事が増えていることに気が付いているのでしようか。

「ま、ささっと確認してしましましょう。今度は私が確認するので、大和はリストを読み上げてください」

「わかりました。じゃあ、まず——」

☆

「やはり、どこにもいないな……」

その頃、磯風は鎮守府内を歩き回って大和を探していた。無論、大和に料理を習うためである。

昨日の今日でいささか急だとも磯風自身思ったが、彼女としては早急に料理の腕を上達させたかった。せめて食べても人が倒れないレベルに。

早く料理を上達することが今まで知らない所で迷惑をかけてきた他の皆への何よりの謝罪と感謝になる、そう磯風は考えたのである。

しかし、そんな磯風の決意に反し、大和の姿がまず見当たらない。朝に執務室に呼び出されていたのは知っているが、その後どこへ行つたのかがさっぱりわからない。

では、提督なら何か知っているだろうと執務室に向かったものの、その提督すらない。

どこで油を売っているのだ、あの提督は、と中々上手く事の運ばぬ現状に磯風は頬を膨らませながら、ではその提督の動向は秘書艦の矢矧が知っている筈だと今度は矢矧を探すが、これもまた見つからない。

最後にもう天龍でもいいや、と妥協に妥協を重ねて天龍を探してみるものの、やはりというか予想通りというか、やっぱり今日はこういう日なのかも知れない、不幸だわ。と言わんばかりにどこを探しても天龍もまた見つからない。

何をやっても思うようにいかない。もう、お手上げ状態であった。「と、いかそもそも何で大和を探していたのに、最終的に天龍を探すことになっているんだ？ 目的がすり替わっているじゃないか」
全くもってその通りである。

磯風がもう今日の所は諦めるしかないかもしれないと、深く溜息を洩らした時、不意にその声は聞こえた。

「――提督、それは――」

「ん？ 大和の声……！」

まだ彼女に救いはあった。今日はなんだか不運ではあったものの、最後には目的には到達した。不幸にまでは至らなかったのである。

何時間か鎮守府内を歩き回り、精神的にも体力的にも疲れ切っているのが臆面なく滲み出ていた磯風の表情に輝かんばかりの笑顔が戻った。

声のする方向は少し先にある第三倉庫の中。その扉が偶然少しだけ開いていたためにそこから声が洩れており、そこを偶然通りかかった磯風がそれを聞き取ったのである。

よくある、とでも言われそうな展開だが、それは漫画や小説の中だけの話。中々現実には起こらぬ偶然の重ね合わせ。確率的には奇跡と言ってもいいかもしれない。

神はまだ磯風を見捨ててはいなかったのである。

磯風は一目散に扉へと駆けて行った。

「――提督、何考えてるんですか……こんな所で！」

「すみません。でも、もう我慢できないんです！」

「ちよ、やめてください！ こんな所、誰かに見られたら！」

「別に私は構いませんッ！」

「……………大和？」

神は死んだ。

第八話「ここを通りたくば、私を倒していくんだな！」

さて、磯風が大和と提督の怪しげな——具体的にはR18タグが付きかねなさそうな会話を聞く直前、倉庫内に居た大和と提督の間ではこんなやり取りが行われていた。

「提督、次の棚の物品は——」

「わあ、見てください、大和！ 懐かしいものがたくさん出てきましたよ」

「仕事しましょうよ!？」

物品の数や所在を確認するどころか、棚の段ボールを開けてみては少年のような無邪気な笑顔を浮かべるいい歳した青年の姿がそこにはあった。

「ほら、モ●ポリーとか人生●ームとか、ドン●ヤラとか色々出てきました!」

「うわ、本当に懐かしい……って、提督！ 今は仕事ですから、後段ボールの中身散らかさないでくださいよ!」

段ボールから次々と中身を取り出してはにやつく提督。

それを必死に止める大和。しかし、いかんせん大和は提督に厳しくできない。もしここに矢矧がいてくれたならこんな程度の問題は三秒で片付いていただろう。

矢矧が提督の肩を叩く、提督の顔が青ざめる、提督が土下座する。合計三秒である。

しかし、今はここに矢矧はいない。彼女は今頃第二倉庫の整理作業にあたっている。つまり、今この提督の暴走を止められる人間はこの場にはいないのである。

そしてこれが提督の思惑通りであることを大和は知らない。

「——提督、何考えてるんですか……こんな所で!」

自分を止める者がいない提督はここぞとばかりに段ボールの中にあつた娯楽用品の一つを開封し始める。

箱の前には『ジェ●ガ』と書かれていた。一昔前に流行った、大量

の木ブロックで組まれた如何にも不安定そうな直方体のタワーからブロックを順番に抜き取り、タワーの頂上にのせる、という文面にすると何とも面白味が感じられない単純なゲームなのだが、これが実際にやってみると中々戦略性と緊張感に溢れており、非常に面白い。現在でも個人の家に大勢で集まった時にやるパーティーグッズとして時折目にする事もある。

試しに出してみれば、何それ懐かしい、から始まり、童心に帰って皆で大いに盛り上がること請け合いです。

特に男女混合で四人以上が集まると、いつ崩れるともしれないジェ●ガの緊張感による吊り橋効果も期待でき、それが飲み会ともなればもうジェ●ガによってカップルが生まれるであろうことは火を見るよりも明らかと言える。多分。

「すみません。でも、もう我慢できないんです！」

提督はジェ●ガの箱を開け、中に入っていた木のブロックを積み上げ始める。

「ちよ、やめてください！ こんな所、誰かに見られたら！」

「別に私は構いませんッ！」

もうこの提督、ノリノリである。すっかり懐かしのパーティーグッズに忘れかけていた童心を呼び起こされ、夢中になってしまっている。

「一回だけ、一回だけでいいですから！」

大和も今の状態の提督を抑えるよりはむしろさっさと提督の欲望を満たしてしまつた方が早いのではないかと考え始め、その首を縦に振つた。

実は心の中で自分も久々にやってみたいという思いもあつたことはおくびにも出そうとはしない。

「仕方ないですね。一回したら、ちゃんと仕事してくださいよ。」
「勿論です」

☆

「一回だけ、一回だけでいいですから！」

（一回だけってなんだ!? 何をするつもりなんだ、提督と大和は!?）

一方磯風は扉の隙間から中の様子を除こうと必死に倉庫前に張り付いていた。

傍から見れば不審者にしか見えないが、そんな考えは磯風の脳内に今はない。

「仕方ないですね。一回したら、ちゃんと仕事してくださいよ?」

「勿論です」

（いいのか!? 大和、それでいいのか本当に!? そうするのは、その、もっと大事にすべきなんじゃないのか!?）

磯風も子供とはいえ、そういう方向の知識がない訳ではない。疎いだけである。

なので、今の会話もどこぞの自分の名前を漢字で書いて欲しくて仕方がない軽巡洋艦のように磯風的には全然オツケーなどとはいかないのだが、彼女は依然として扉に張り付くことをやめなかった。

恥ずかしさや気遣いから扉の前から離れ、そっとしておくでもなく、鎮守府内で起ころうとしている不祥事を止めるべく、今すぐ扉を開いて怒鳴りつけるでもない。

詰まる所この少女、興味津々である。

（くそ、やはり、中の様子は見えないな……）

「じゃあ、私からいきますね」

「はあ、どうぞ」

（私から!? どっちからとか決まりがあるのか、知らなかった! しかも何で大和は妙に落ち着いているというか、だらけた感じなんだ!）

まさか、経験豊富ということか!）

実際はジェ●ガタワーを作り終え、ゲームを開始しようというだけのやりとりなのだが、磯風の中では別のゲームが始まっていた。

「じゃ、次、大和の番ですね」

「はい」

（え、もう終わり!? 今の数秒で一体提督は何をしていたんだ!）

ジェ●ガのブロックを一つ取り、タワーの上に乗せただけである。

「おお、そんな所を攻めてきますか」

（どこだ!）

「実は私、これ結構得意なんですよ」
（やっぱり、遊び慣れてるんだな!?)

ジエ●ガを、だが。

その後もしばらくゲームは続く。

「じゃあ、ここはどうですか!」

「うわ、今凄い揺れましたよ、大和!」

（揺れた!?! 何が!?)

タワーが。

「提督、私なんだか、ドキドキしてきました」

「私もです」

（うわー、うわー!）

磯風もドキドキである。

「はい! 提督、どうですか!」

「うわ、もう倒れそうですよ……」

（失神するほど……）

「本当に上手ですねえ」

「ええ、私、これは小学生の頃からやってきましたから!」

（小学生の頃からヤツてた!?! わ、私よりも小さい頃から……!?!）

もう限界であった。

これ以上は自分には荷が重すぎると磯風はようやく観念して扉から離れた。

身体中が火照って、心臓がこれ以上ない早さで脈打っている。一瞬、私は長生きできないだろうなと確信する程の脈拍数であった。

自分の部屋にでも戻って一旦、頭を冷やそう。そう磯風がふらつきながら倉庫を離れようとしたその時、曲がり角を曲がってやってきたのは、それぞれ倉庫整理を終え、提督に報告にやって来た矢矧と天龍の姿であった。

このままでは大和と提督の秘密のゲームを二人に見られてしまうかも知れない。磯風は迷いなく二人の前に足を踏み出した。

二人の尊厳と愛を守るために。

実際、彼女が守っているのは倒れかけのジエ●ガタワーに過ぎない

のだが、彼女がそんなことを知る由はない。

「止まれ」

「ん？ おう、磯風じゃねーか！ どうしたこんな所で？」

「ここを通りたくば、私を倒していくんだな！」

「何その中ボスみたいな台詞!?!」

いつもとは明らかに違う磯風のテンションと言動に思わず、二人は後ずさってしまった。

この時天龍は。

(もしかして、チャンバラごっこみてーのがやりてえのか？ こいつもなんだかんだ言ってまだまだ子供だよなあ)

一方で矢矧は。

(どうしようかしら、風邪薬ってまだあつたかしら……取り敢えず顔が赤いし、まずは熱を計って、それから布団で寝かしときましよう)と、二人とも磯風の内心など察する余地もなく、それぞれ勝手なことを考えていた。

「わかった、わかった。俺も刀取ってきてから後で付き合つてやるから今はそこ通してくれよ」

「まずは熱を計りましょうね。それから薬のんで、お昼にはおかゆとかを作つてあげるわ」

「お前達は何を言っているんだ!?!」

限られた情報での意思疎通は非常に難しい。

「今、そのこの倉庫で提督と大和が居る筈なんだよ。どうせ、まだ倉庫整理やってんだろ?」

「待つてくれ、天龍！ 違うんだ、やってるけどやってないんだ！ だから今はそつとしておいてくれ!」

「いや、何もかも訳が分からねえよ!?!」

必死に天龍の裾にしがみつく磯風に天龍は困った様子で彼女を見る。

磯風としてもどうにか上手い言い訳を考えて、スムーズに二人を帰したかったのだが、いかんせん磯風には荷が重い。

その様子を見て、矢矧は言った。

「磯風、何があったのか話してみなさい」

「う……」

「話して」

「はい……」

矢矧のまるで子供を諭す母親のような視線に耐え兼ね、磯風は全てを暴露した。

それから天龍と矢矧の顔が真っ赤に染まるまでは一瞬であった。

☆

「あ、崩れちゃいました」

「やった！ 私の勝ちですね！」

「ん？ 何やら外が騒がしいような……」

崩れたブロックをしまいながら、提督と大和は依然、ゲームの余韻に浸っていた。現在外で何が起こっているかなど微塵たりとも知らない。本当にご愁傷様である。

「もしかしたら、矢矧達が来たのかもしれない！ 急いで片付けましょう！」

「全然倉庫整理終わってないんですけれど……」

「そんなのもう適当で大丈夫です！ どうせ倉庫の物品変わってませんし！」

「ええ……」

二人がジエングを片付け、辺りに散らかっている娯楽用品諸々を段ボールに戻して片付け終わると、まるでトマトのように顔を真っ赤にして激怒した矢矧が扉を開いたのがほぼ同時であった。

「提督！ あなた、なんてことを！」

「え、いや、な、何をそんなに怒っているんですか……?」

これ以上にならない怒声と共に矢矧は提督の胸倉を掴み、いとも容易く提督の身体を持ち上げた。

「しらばっくれないでッ！ 全て、磯風が見ていたのよ！」

「う……」

「あ、あの、それは……」

「大和は黙っていて！」

「ひゃい！」

戦艦を一喝して圧倒できる軽巡はどの鎮守府を見てもこの矢矧だけであろうと全員が思った。

「す、すみません……つい、出来心で……」

「そんな言い訳が通じると思っているの？」

「だって、あれを見たらやりたくなるのは当然じゃないですか!？」

「何を見たのよ、変態ツ！」

「変態!？」

妙に会話がかみ合っているために以前誤解は解けない。

「天龍、あなたも何か言ってるやいなさい！」

「え？ いや、その……俺は、そういうのは、もっとお互いを深く知り合ってからの方が……いや、二人が幸せなら別に俺は、口出しする気も……でも、順序ってものがあるし……」

誰だ、この天龍によく似た乙女は。その場にいた全員がそう思ったに違いない。

身体をもじもじさせ、顔を赤らめて俯く彼女は別人のようにしおらしくなっていた。

(急に彼女の発育の良い胸とミニスカートが妙に存在感を主張してくる。何故だ)

(急に天龍が可愛く見えるわ。何故かしら?)

これが噂のギャップ萌えである。

「と、とにかく！ この罪は重いわよ！ あなたは、あなただけは、そういう事はしない人だと信じていたのに！」

最早、その目に涙が溜まり始めるのを見て、流石の提督も大いに焦り始める。

土下座でもしようかと考えたが、絶賛胸倉を掴まれて持ち上げられているのでそれは不可能。万策尽きた。

というかそもそも何で仕事中にサボって遊んでいた位で泣かれています。自慢じゃないが執務をサボって怒られるのは日常茶飯事みたいなものなのにな。と、ここでようやく提督は矢矧達と自分の空気の差に気づき始める。

「な、泣くほど怒らなくても……自分で言うのものはばかられますが、こんなこと毎日してるじゃないですか、私」

本当に自分で言うのものはばかられる発言である。

「ま、毎日やっていたの!? あなたって人は……もう、見損なつたわ!」

「今更ですか!」

「や、大和も小学生の頃からという話だったが、提督も……二人には失望したよ」

「私も!? 後、小学生ってなんの話ですか!」

この瞬間、決定的な話のズレに気付いたのは大和であった。

「……すみません。一旦、お互い何の話をしているのか言ってみてください」

「え? そりゃ、私がジエ●ガをしてサボつた話ですよね……?」

「それは、その、提督と大和が【自主規制】してた話、よ!」

「は?」

「え?」

この瞬間、ようやく全員が全ての食い違いに気付く。

「え!? 提督が大和と二人きりになれたのを良いことに襲つたんじやないの!」

「しませんよ! 誰から聞いたんですか!」

「私はそこまでは言っていない!」

「磯風ですか! そんな誹謗中傷を吹き込んで!」

「いや、そもそもジエ●ガして遊んでた時点であんたが一番悪いだろ!」

その後、無事誤解は解け、これから倉庫の扉は必ずしつかり閉めるよう徹底されたという。

第九話 「お姉様！」

私、大和がこの七丈島鎮守府に来てから三日目の朝が到来しました。

初日は天龍の不審者騒動。

二日目は倉庫整理の勘違い騒動。

今の所これといってゆつくりとした日常が送れていない私です。いや、別にゆつくりするためここに来たのではないのですが。

それでも、流石に三日ともなれば少しは暇になると私は思うのです。

この鎮守府は出撃も遠征もしない。隔離施設の七丈島鎮守府なのですから。流石にトラブルもネタ切れでしょう。

いや、別にメタ的な意味じゃないですよ。神様もいい加減、この限られた空間の中で騒動を起こすのはもうキツイでしょうという意味です。

「お早うございます、皆さん早いですね」

「お早う、大和」

「はよーっす」

食堂に足を運んだ私を出迎えたのは矢矧と天龍。

現時刻は午前七時。普通の鎮守府ならば全員で朝食といった所だろうが、この鎮守府は出撃などしないが故に基本食事は自由である。

一応規則では午前七時から八時までの間は決められた当番が食堂に来た者に朝食を作るという取り決めになっている。

昨日は矢矧が、味噌汁にご飯に焼鮭という一般的な日本食を振る舞ってくれたが、今日の食事当番は一体どのような朝食を振る舞ってくれるのだろうか。

できることなら当番が磯風でないことを祈るばかりである。

ん、何故私は磯風が食事当番であることが嫌なのだろうか。我が思考ながら謎である。

「今日は誰が当番なんですか？」

私は楽しみ四割、不安六割程度の配分で尋ねた。

食事をこよなく愛する私としては信じられない発言であった。と
どうか食事に不安を感じるって今更だがなんだ、それはどういう状況
だ。どうした、私。

どうも二日前の夕食の記憶が飛んでから何かおかしい。一体二日
前の私の身に一体何があったというのか。

何故か思い出そうとすると頭が痛む。

「今日は、プリンツが食事当番よ」

「そうなんですか。よかった」

何が良かったのか自分で言っていて意味不明だが、何故か身体が安
堵しているのだから仕方がない。

と、そんな私の目の前に突然、トースト、ベーコンエッグ、ジャ
マンポテトが乗せられた大皿が置かれる。

振り向くと、そこには満面の笑みを向けるプリンツの姿がそこに
あった。

「今日の朝食はトーストに半熟ベーコンエッグにジャーマンポテトで
すよ！ たくさん召し上がってくださいね！ お姉様！」

「ありがとうございますー！」

美味しそうな洋風の朝食に私は顔を綻ばせ、早速フォークで半熟の
黄身を破いてやり、それをトーストに乗せて頬張ろうと手を伸ばした
所でようやく私の手は先のプリンツの台詞の内に潜む違和感によっ
て止められた。

「……………ん？ お姉様？」

聞き間違いだろうか。

私はゆっくりともう一度プリンツの方へと顔を戻した。

プリンツは先と変わらぬ笑顔で嬉しそうに問題の発言を繰り返し
た。

「お姉様！」

聞き間違いではない。なんということだ、私に妹がいたなんて。

私はお姉様呼ばれる心地良さに人知れず戦慄した。

「まさか、異母姉妹……………」

彼女の輝くようなブロンドの髪と私の黒髪、そしてどう考えても顔立ちの国籍が異なっていることから私はその結論に至った。

しかし、驚きだ。今は亡き、お堅い日本男児の象徴とも言うべき我が父が母以外と、しかも恐らくは金髪美女と子を成していたなんて全く信じられない。

具体的に例を挙げるとすれば、今時オレオレ詐欺に引っかかるくらい信じられない。

「あー、また始まったか」

「随分久々ね」

困惑する私の隣で天龍と矢矧が何故か顔をしかめていた。

「何か知っているんですか？ 私の出生について！」

「いや、それは知らねえけどよ。プリンツはこういうの時々あるんだよ。自分より年上の女見つけてはお姉様って呼んでまるで本当の姉みたいに慕ってくるんだ」

「へえ……」

良かった。父は無実です。

「という訳でお姉様！ 私が朝食食べさせてあげますね！ はい、

あーん！」

「ちよつと、妹の範疇、超えています、超えています」

こんな奉仕家の妹がいてたまるか。最高じゃないか、と私は全世界の妹持ちの人々を代表して叫びたい。

「ああ、こいつはお姉様には絶対奉仕の精神で当たるからな」

「まあ、それなら何も問題なさそうですね」

「それだけなら、確かにそうかもしれないわね……」

わざわざ人の不安を煽るような意味深な言葉を残し、矢矧は食堂を去っていった。

「まあ、あいつは仕方ねえな。あいつは一年前のお姉様だったからな」

「え、そうなんですか？」

「ああ、その時は三日でノイローゼになってたぜ」

「え？」

今度はダイレクトに不安を感じざるを得ない台詞を残し、天龍も席

を立つ。

「ちよつと待つてください！ 何で二人ともわざわざ不安だけ煽って席を立つんですか!? 性格悪いですよ!」

返答はなく、代わりに食堂の扉の閉まる音だけが聞こえた。

「お姉様! 早く! あくん!」

「ぐはあ!」

不安はぬぐえぬものの、お姉様と呼ぶ甘ったるい声と上目遣いでこちらにジャーマンポテトを運ぼうとする所作の破壊力には私は再度戦慄した。

「あ、あくん」

「美味しいですか!?!」

「はい、すごく美味しいです」

「やったー! Danke! Danke!」

嬉しそうに飛び回る彼女を見て、私はプリンツのお姉様になることにした。一抹の不安は残されているが。

そして、同時にこの後、私は神様への認識を改めなければならなくなる。

いくら限られた空間であっても、気まぐれ一つでトラブルなど容易く作って見せる。

故に、神なのだ。

☆

その後、天龍と矢矧の言っていた意味が分かるまで、さして時間はいくら限られた空間であっても、気まぐれ一つでトラブルなど容易かからなかった。

その日の昼頃。

「お姉様あ! 一緒に昼食食べましょう!」

「あ、はい、そうしましょうか」

「それでー、お昼食べたら一緒に散歩に行きませんか!」

「ああ、確かに私まだこの辺りのこと知らないし、いいかもしれませんね」

ついでにすっかり忘れていたがビッグスプーンを店長に返さなければならぬ。

そういう訳で昼食を済ませた私達は鎮守府を出て港の方へと歩いて行った。

「あの、プリンツ……?」

「なんですかあ? お姉様!」

「あの、歩きにくいんですけど」

何故か私の右腕をプリンツがホールドしていた。

「あ、ご迷惑でしたか!」

「いや、そこまでは言いませんけど。こういうのはカップルがやることで姉妹ではあんまりやらないでしょう」

「私とお姉様がカップルだなんて……そんな、恥ずかしいです」

何でまんざらでもない感じなのでしょうか。

何はともあれ、取り敢えず二日前に激闘を繰り広げたカレー専門店「ビッグスプーン」の前まで私達は到着し、その中に入っていました。

「いらつしや……あんたは!」

酷い警戒のされようでした。

にこやかな笑み皿を運んでいた店長が私の顔を見るや否や、険しい顔つきに変わってしまった。

とてもお客様に向ける表情ではなかった。

「あの〜」

「な、なによ! もう大食いチャレンジはお断りよ! どんだけえ!」

「いや、そうじゃなくて、これ……」

何故か臨戦態勢の店長に私は依然持ち帰ってしまったこの店の象徴たる食器、ビッグスプーンを取り出した。

それを見た瞬間、店長の目が大きく見開く。

「アタシのビッグスプーン!」

「すみません、持ち帰ってみたいで。洗っておいたので、返しに来ました」

「どんだけえええええええ!」

最早『どんだけ』は鳴き声なのではないだろうか、と憶測を立てつつ私とプリンツはその場を後にした。

「お姉様は人気者なんですね！」

「どこを見てそう思ったんですか？」

そんな会話をしながら港を歩いていると、一人の青年がこちらに走って来た。

見た目は二十代前半といった所でおそらくは漁師か何かだろうか、がっしりとした身体で、日に焼けた肌をした中々の好青年であった。

しかし、そんな彼の瞳には私など欠片も映ってはおらず、その視線は隣のプリンツに釘づけであった。一方でプリンツの視線は私に釘付けである。

誰もが誰とも目が合わないという世界一悲しい三角形がそこにはできていた。

「あ、あの！ プリンツさん！」

「ん？ あなたは？」

向こうは名前まで知っているとこののに、当人のプリンツは見覚えがないらしい。

「え？ いや、あの結構何度か挨拶したり、話したりしてたんだけど……はは……」

これは悲しい。

私はもう彼の気まずい表情を見ていられなかった。

「あ、そうなんですか、ごめんなさい！ それで、何かご用ですか？」
意外にもプリンツ、これをあっさりスルー。

男は、少し拍子抜けしたような表情の後、慌ててズボンのポケットから何かのチケットのようなものを取り出す。

「あ、あの！ 良ければ今度俺と一緒に映画でも見に行ってくれないかなって……」

これは、まさか、逢引だとか、今風に言えばナンパとか呼ばれるあれだろうか。自分で言っていて悲しくなるからあまり言いたくないが、私は生まれてこのかた、そう言った縁がなかったので、こういった状況でまるで除け者状態の私はどう対処すればいいのかさっぱりわからない。

やはり自分で言っていて悲しい台詞である。胸が痛い。

どうすればいいのだろう。どうか私も話に入れればいいのだが、如何せん、その入り方がわからない。

現状の私はそこら辺に転がっている石、同然であった。

「ど、どうかな?」

青年は緊張気味に、頬を赤く染めながら恐る恐る尋ねた。

まるで青年の方が乙女ではないか。なんだ、この状況は。そして、なんだこの私の立ち位置は。

せめて足元の石ころから傍目に生えている木に存在感をランクアップしていきたい。

「うくん、ごめんなさい! 私にはお姉様がいるから!」

「え」

そう言つてプリンツが私に抱き着いた瞬間、私の存在感は凶らずも石ころから一気に恋敵へと五階級くらい特進したのであった。

同時に、青年の私を見る視線が、石ころを見るような無関心なものからある種の嫉妬を帯びたものになるのを私は見逃さなかった。

まさかこんな形で巻き込まれてこんな嫌な立ち位置に立たされるのであれば、私は石ころのままでも良かった。

返せ、私の石ころ的存在感を。

「くっ! くっそおおお!」

青年は私を一瞥してから男泣きでその場から走り去っていった。

なんだ、この罪悪感。私が悪いのだろうか。私がプリンツのお姉様だったから彼は振られたのだろうか。

私の脳内を苦悩が渦巻く。

「良かったんですか?」

「え? 勿論ですよ! 私お姉様一筋ですから!」

やはり、私がいなければ彼は。

私の中で底知れぬ罪悪感が心をめつた刺しにしていた。

「それに、私、男の方には興味ありませんから!」

「あ、そうなんですか!」

私の中の苦悩と罪悪感は消えた。実に気分がいい。

「それじゃ、次はどこに行きましょうか?」

「うーん、そうだ！ お姉様、私服とか欲しくありませんか？ 少し歩いたところにショッピングモールとかもあるのでそこ行きましようよ！」

「それはいいですね！ でもお金は大丈夫なんですか？」

「鎮守府で領収書を切って貰えば問題ありません！」

私はプリントに連れられ、そのショッピングモールに向けて歩き始める事にした。

そういえば昨日部屋でも自分の私服が今着ている一着しかないことに気が付き、狼狽していたのだ。

察しがいいというか、とんでもなくナイスタイミングな申し出に私はプリントに対し、感動すら覚えた。

「いや、本当に丁度良かったですよ。私服がなくて困っていたところで」

「お姉様昨日、部屋で私服がないって焦っていましたもんね！」

「……ん？」

おかしい。何故プリントが私の部屋での行動について知っているのだろう。

私は強烈に嫌な予感がしたが、真相を確かめるべく、意を決してプリントに事の次第を尋ねた。

「あの、なんで私の部屋での様子なんて知ってるんですか？」

「それは勿論、いつ何時もお姉様に奉仕すべく、お姉様のプライベートをレコーダー及びカメラで観察させていただいているからです！」

詰まる所、これは盗聴と盗撮をしているという宣言であった。

私の背中を、かつて巨大な蛾を誤って素手で握り潰してしまった時同様の悪寒が走り抜けた。

第十話「妹がお姉様を知るのに一日も時間が必要ですか?」

「盗聴器が10個、カメラが4つ……これで、全部でしょうか……?」
その日の夜。

私は経費で落とした十着ほどの私服の入った紙袋を投げ捨て、手早くシャワーを浴びた後、すぐに部屋の大掃除に入った。

ほとんど無料で私服を買う事ができたありがたみなど綺麗さっぱり忘れ、より身近に迫る危機に私の脳内は、もう奥の物が取り出せない物置のように一杯だった。ぎゅうぎゅう詰めであった。

一時間に渡る搜索の結果、出てきたのは小型の盗聴器とカメラが計14個。これは寒気すら感じる個数である。

「取り敢えずはこれで大丈夫——」

「流石です、お姉様っ!」

「わああああ!」

机の上に並べた盗聴器とカメラを処分しようと手を伸ばした瞬間、部屋の扉が勢いよく開き、熊の可愛いマスコット柄のパジャマを着たプリンツが入って来た。

しかし、そんなことは詮無きこと。問題なのはパジャマの柄ではなく、何故盗聴器とカメラを取り外した瞬間に部屋に突入してきたのか、でもなく、さらにそれ以前に、まず鍵を掛けてあった筈の私の部屋の扉をどうやって開けてきたのか、ということである。

「それは勿論、この合鍵ならぬ『愛』鍵ですよ!」

「没収です」

「ああっ! 私とお姉様の愛がッ!」

そんなものは今の所ありません。

合鍵を片手に舌を出してウインクする、俗にいうテヘペロポーズを取る彼女から私は極めて機械的、かつ無慈悲に鍵を没収した。

「くっ! 流石はお姉様!」

「悔しがっているような台詞の割に表情は嬉しそうですね」

「お姉様と手が触れ合ったので、つい」

この娘、今なら私に限って何をしても喜ぶのではないでしょうか。

「しかし、お姉様、甘かったですね！　一つ、見つからない盗聴器がありますよ！」

「なんですって!?!」

この時、私はあれだけ探したのにまだ一つ残されているのかという驚愕の表情を前面に出しながら、裏では彼女から盗聴器の回収率を教えてくださいるとは都合がよいと、笑みを浮かべていた。

今すぐもう一度探し直せば見つかるだろうが、この調子なら彼女の口から教えてくれそうだと私は驚くふりをしながら彼女から正解を炙り出しに掛かることにした。

「わ、わからないー。い、一体どこに隠されてるっていうんですかー」
我ながら良い演技ができたと思う。

「ふっふっふー！　流石のお姉様も気付かなかったようですね！　このトイレの中の盗聴器の存在には！」

演技とか抜きにショックが大きすぎて数秒間言葉も出ませんでした。

「なんで、そんな所に…?!?!　なんで!?!」

予想外かつ、斜め上過ぎた隠し場所だった。

もしも彼女の口から正解が告げられなかったらきつと私は一生この盗聴器の所在に気付かず、たった一つの盗聴器に永遠に翻弄され続ける人生が待っていたであろうと確信する程度には衝撃的であった。

というか、トイレに盗聴器を付けて何の利益があるのか私には甚だ理解ができなかった。本当に何故だ。

「そんなの決まってるじゃないですか。お姉様の排尿音や排拙音を着メロにするためですよお！」

「やめてくださいよー！」

これ以上ない壮大かつ豪快な辱めに私は震えた。

下手をすれば人一人自殺に追い込めるだけの攻撃力がそこには

あった。

「破壊ッ！」

「あああッ!?!」

今まで見つけた計14個の盗聴器及びカメラに関しては、おそらくはこれらの高価そうなストーキンググッズも経費で落とされているのだろうという謎の矢矧への同情から壊すまでには至らなかったが、この盗聴器だけは一片の迷いなく握りつぶした。

無論、後悔など永劫にない。

「これで、全部ですね？」

「はい、全部です。うう、合鍵作りと盗聴器、盗撮カメラの仕込みに昨日丸一日使ったのに……」

「道理で昨日は姿を見かけないなあと思いましたよ」

昨日、私達が倉庫整理をしている間、彼女は一心に私の部屋への侵入と盗聴器、カメラの設置にひたすら勤しんでいたに違いない。その努力の結晶がこれという訳だ。

だが、そんな努力の結晶を、私は自分の精神衛生のためなら当然の如く全力で踏みにじろう。

私を自己中心的な酷い奴と思うだろうか。しかし、我に返って考えてみて欲しい。

これら全て、犯罪である。

☆

「——という訳なので、これ以上余計に罪を重ねるような行為は慎んでください」

「合意の上であれば罪にはならないですよ、お姉様！」

「合意した覚えはありません。というかその発言もギリギリアウトですからね？」

「チャレンジッ！」

「テニスか」

これといって大した反省が見られない。思わず語尾を荒げてしまった。これは本格的に腹を据えて話す必要性を感じる。

という訳で、現在居間で私とプリンツは二人でお茶を飲んでいる。

決して夜のガールズトークとかパジャマパーティーではない。でも、できればそういうの一度でいいからやってみたい。

しかし、ここまで話してこうも話が進まないならば納得である。成程、これではあの矢矧も三日でノイローゼになってしまおう筈だ。無理もない。むしろ無理だろう、享受する方が。

「矢矧の時もこんなことしてたんですか？」

「ああ、矢矧がお姉様、そんな時期もありましたねえ」

「何をいい思い出のように懐かしんでいるんですか、あの時も矢矧がノイローゼになって大変だったと聞きましたよ？」

「うん、あの時は大変だったんですよ！ 矢矧ってば私がいくら盗聴器やカメラを仕掛けても一瞬で全部見抜いちやうんです！ こっちもスポットには随分と悩まされました」

「あなたが大変だった話は聞いてませんよ！」

ここで一つ疑問が浮かぶ。

「ん？ 矢矧がノイローゼになった原因って盗聴器とカメラじゃないんですか？」

いくら仕掛けても一瞬で見つけてしまう辺りは流石矢矧としか言えないが、それならば彼女を精神的に追い詰めたものは一体なんだったのか。

「ああ、それは——」

『矢矧姉様！』

『……いいでしょう、そこまで言うなら私もあなたの姉として全力で面倒を見てあげるわ。まずは倫理学、人類学、心理学、社会学の観点からあなたに人とのコミュニケーションについて叩き込んであげるわ』

『え……』

『安心しなさい、航海学、砲撃理論、海上戦術についてもその後と同じように徹底的に教えてあげるわ。私があなたを何処に出しても恥ずかしくないような一流の艦娘にしてあげる』

『……………！』

『あ、待て！…どこに行くの！』

「——ということがあって……」

「え？」

「それから——」

『プリンツ、どうして逃げるの？ 私のやり方に何か問題が……そもそも私が教育に関して深く学ぶ必要があるのでは？ そう、きっとそうね。そうとわかれば早く教育学の本を……』

『……あのお、矢矧姉様？』

『ごめんなさい、プリンツ。もう少しだけ待って。だから、生徒の意欲が足りない場合は叱るばかりでは駄目で、かといって甘やかすすぎても、なら——』

「——それから矢矧はノイローゼで倒れました」

「教育ノイローゼ!?!」

愚直な性格が災いしたと言った所である。というかこれ、つまりは自爆だろう。

「見ていられないのと、将来的な危機を感じた私は妹をやめました」
「今のあなたにこんなことは言いたくないですが、英断だったと思います」

矢矧にとっても、プリンツにとっても。

「そもそも私、ああいう厳しい系じゃなくてもっと優しくて包容力があるお姉様が好みなんです！」

「矢矧も優しきは分かりませんが、包容力はあるじゃないですか」

胸部装甲的な意味で。

「胸はあってもそこに飛び込めないんじゃない意味ないんですよ！ こんな風にね！」

「ちよ、いきなり抱きつかないでください！」

「えへへー」

馬鹿な、可愛いだと。

思わず同性の私ですら胸をときめかす小動物的な可愛さがそこにはあった。成程、これは母性をくすぐられる。

想像してみたい、金髪、たれ目の少女が無邪気におそらくはボディソープ、シャンプーとリンス由来であろう花の香りを振りまきな

がら自分の胸に飛び込んで天真爛漫な笑みを向けてくるのだ。誰もが頭を撫でたいだとか、こんな妹が欲しいと少なからず思うはずである。たった今経験した私が言うのだ、大体間違いない。

「……全く、その盗撮と盗聴はどうにかならぬんですか？」

「えー、無理です！ お姉様の動向は常に把握していないと不安と寂しきで死んじやいます！」

「兎といい勝負ですね」

「むしろ監視と盗聴と日中くつついているだけでも結構ギリギリなんですよー！」

「兎以下の耐久力じゃないですか」

よく今まで生きてこれたものだ。むしろ『お姉様』がいなかった時期はどうやって過ごしていたのかが気になる。

「お姉様がない時期はお守りを抱いて眠ります」

「心を読まないでください！ とうか何で読めるんですか!？」

「いやだなあ、お姉様のことなら私は何でもわかるんですよ？」

「まだ出会って三日と経ってないんですけど!？」

「妹がお姉様を知るのに一日も時間が必要ですか？」

シスコンの歴史を塗り替える格言ならぬ狂言、誕生の瞬間であった。

驚くべき事に彼女のストーキングはパブリック、プライベートを超え、スピリチュアルな部分にまで到達しうるらしい。

もうそれで何か怪しげな商売ができるんじゃないだろうか。

何という事だ。この鎮守府に来てから私の予想を斜め上に超えてくる人材が豊富過ぎる。犯罪者というより奇人変人集団ではないか。傍から見ればある意味面白いかもしれないが巻き込まれる私としては全く面白くない。

「それで、お守りっていうのは何なんですか？」

「ん、このことです」

そう言っただけ彼女は自分の胸元に手を入れると、そこから十字架のついたネックレスを取り出した。よく見ればさつきからずっと首にかけていたようである。

それは、所謂ロザリオと呼ばれる物であった。

「本来、ロザリオは首にかけるのは好ましくないのですけれど。どうしてもこれが近くにないと駄目で……」

「大切な物なのですか？」

ロザリオを握るプリンツの顔がさつきとは一変して見たこともない位思いつめたような表情になるのを見て、私は慎重に言葉を手繰る。

「ここで言葉を間違えると何かが終わってしまう、そんな気がした。

「大切な物です、私の命よりも、ずっと……」

「……………」

「あ、ごめんなさい、お姉様！ 変な空気にしちゃいましたね！ さ、お姉様の美貌に障りますし今日はもう寝ましょう！」

「ちよ、当然のように私のベッドに潜り込まないでください！」

「だって、盗聴器もカメラも取られちゃいましたし、このままじゃお姉様成分が枯渇して死んじやいます！」

「パジャマ姿で来て、着替えも持つてきてないじゃないですか。部屋に戻るまでに朝の寝ぼけた顔を皆に見られちゃうかもしれないよ？」

「大丈夫です！ 部屋はお姉様の隣ですから！ 一瞬で帰れます！」

「じゃあ、帰ってくださいよ!?!」

「うー、お姉様あ、どうしても駄目ですかあ？」

「う……………」

また元の調子に戻ってしまった。完全に彼女のペースである。

そして、私はこの時初めて気が付いた。

私、この上目遣いに弱い。

「……………今日だけですよ」

「やったー！ Danke！ Danke！ お姉様、愛しています！」

仕方なく、ベッドを半分ずつにしてほとんど密着するように寝る。

「寝返りに押しつぶされても私は知りませんかね？」

「むしろ押し倒してください！」

「電気消しますねー」

「ああん！ お姉様、真つ暗になった途端そんなの、らめえ！」

「変な声だささないでください！」

「いずれ来たる時のための予行練習です！」

「そんな時は来ませんし、来させません」

その後も何度かちよっかいをかけてくるなど、しばらくは騒がしかったプリンツも今日の買い物の疲れが出たのか、三十分もすれば隣で寝息をたて始めていた。

「黙っていれば可愛いんですけどね」

暗闇の中でもよく映える金髪を軽く撫でると、プリンツは幸せそうな笑みを浮かべた。きつと幸せな夢を見ているに違いない。

それを何処か保護者気分で眺めていると、彼女の口元が不意に動く。

「お姉様……」

「……………」

それは今まで私が聞いたどのお姉様とも異なる印象を受けた。

おそらくは私や矢矧のような偽物ではない。プリンツの、最初の、本物の。

そこまで考えて、私は思考を中断させて眠気に身を任せ、同じく夢の中へと逃げるように落ちていった。

☆

「え!? お前、本気か?」

「あの娘のお姉様を続けるなんて、そんなこと言ったのはあなたが初めてよ?」

「まあ、私も色々考えたんですけど、しばらくはこのままでもいいかなあって」

翌日の朝食。

私は天龍と矢矧にその決心の旨を報告した。

二人はまるで可哀想な人を見るような憐みの籠った目で私を見ている。どこまでも失礼な事この上ない。

「というか、プリンツ、遅いですね? 起きてからすぐに自分の部屋に

戻った筈なんですけれど」

「え、お前……プリンツと一緒に寝たのか？」

「え？ はい、まあ、私の部屋ベッド一つしかないですし。床で寝れるような準備もまだないので」

「貞操は無事なのか!？」

「無事に決まってるじゃないですか！」

「……本当に？」

「怖い事言わないでください！」

「——お姉様あああああああ！」

そこに、いつもよりもハイテンションなプリンツがダツシユでやってきて、私の背中に向けて抱きついて来る。

「ごめんなさい！ 部屋に戻ったら二度寝しちゃって！」

「今日の朝食は天龍自慢の一品、コーンフレークです」

「わー、幼稚園児でも作れるお手軽料理ですねえ！」

「うるせえよー！」

周りに笑顔を振りまきながら私の隣に座り、コーンフレークと牛乳を注ぐプリンツ。

彼女の笑顔はまだ嘘だ。心の内の闇を乗り越えられない内は、あのロザリオと『お姉様』に頼らなければならない内は、心の底から彼女は笑えない。

彼女の心のわだかまりを解くことが私にもできるかもしれない。だから、私は決意した。

いつか、あのロザリオを首から外すその日まで、心の闇を乗り越えるその日まで、そして、全てを懺悔できる勇気が持てるようになるその日まで、私は彼女のお姉様でいようと。

第十一話「あの、提督、私のオムライス、たべりゆ？」

「そろそろ、約束通り私に料理を教えてください！」

私、大和が七丈島に来てから、一週間が経った。

当初は七丈島鎮守府の艦娘達に圧倒され続け、落ち着かない毎日を通り過ぎていた私も大分この鎮守府の空気に慣れてきたのか、挙動に余裕が生まれてくるようになってきた。

「え、料理を……？」

「え？ 約束しただろう？」

そして、私は現在磯風から突然の身に覚えのない約束を突きつけられておおいに焦っている最中である。

余裕だと。そんなものなどある訳ないだろう。たかが一週間で鎮守府の空気に慣れて余裕が生まれるなど勘違いも甚だしい。そんな恥ずかしい奴がいるなら、そいつの顔が見てみたい、さあ一体どこの誰だ。

そう、私である。

「……………」

返答のない私に、磯風はおもむろに服の袖を引っ張ってきて無言で私を見上げる。

磯風には大変申し訳ないが、その仕草は思わず胸が鷲掴みされる破壊力が内包されており、不安を胸中に渦巻かせる磯風とは対照的に私の胸中は彼女の愛くるしさに非常に癒されていた。

「まさか、覚えてないのか……？」

「何言っているんですか。当然、勿論、当たり前、ばっちり覚えていますよ」

「そうか、なら良かった！」

しまった、なんとということだ。今にも泣きだしそうな磯風の表情に私はつい平然と呼吸をするように嘘をついてしまった。

しかし、私は安心した様子の磯風を他所に、問題の約束をした時の記憶を手繰っていくが、どうにも不思議な事にその記憶だけが思い出

せない。

正確に言うならば、手繰った記憶の糸は初日の夕食までで切れており、それから前は天龍を捕縛した時の記憶になっている。

要は初日の夕食。確か磯風と初めて会った時のことだったと思うが、その時の記憶が全くないのである。

これは、初日の夕食の際に恐らくは料理を教える約束をし、その時に何かがあったと見て間違いないだろう。

「じゃあ、早速丁度食堂に居る訳だし、今日作る料理のメニューについて教えてくれ」

「え……あ、はい」

私の抜け落ちた記憶の謎を置き去りにして、話はガンガン進んでいく。

仕方がない。取り敢えずこの場合は適当な料理でなんとか誤魔化しきるしかない、私は咳払いをしてもっともらしく説明を始めた。

「じゃあ、今日はハンバーグを——」

「え、まずはあのオムライスの味を目指すんじゃないのか？」

「——はっはっは、その通りですよ。今のは磯風が私の言ったことを覚えてきているかどうか試したんですよ、はっはっは」

「な、成程！ これは気が抜けないな！」

全くである。危うく開始二秒で墓穴を掘るところであった。

まさか既にメニューまで決まっていたとは思わなかった。品目まで決めて、あの時の私は何をそこまで張り切っていたというのだ。

しかし、あのオムライスとはどのオムライスだろうか。私はオムライスならアレンジを加えたものをざっと二十種位は作れるが。

あの時の私は一体どのオムライスを作ったと言うのだろうか。自身の料理上手が今この時に限って腹立たしい。

「えーと、じゃあ、取り敢えず卵とご飯と鶏肉、玉ねぎ、あとはケチャップを出しましょうか。あれ、丁度、ケチャップが切れてますね」

「じゃあ、私が取ってくる！」

そう言っただけで倉庫に走っていく磯風を見送り、私は大きく溜息をついた。

取り敢えず、磯風の言うあの時のオムライスがなんなのか、その正体を突き止めねばなるまい。

「——ふっふっふ、お姉様。お困りのようですね！」

私が食堂の椅子に座り、頭を抱えていると、突然そんな聞き覚えのある声が聞こえてきた。

椅子の下から。出来れば聞き間違いであって欲しい。

「……………」

「無視しないでください！」

「取り敢えずなんで、私の足元に寝そべっているのか教えてくださいませんか？」

そうやって、私達の座るテーブルの下で這いずっているプリンツの姿を覗き込んだ。

一体、何故普通に近づいてこなかったのか、何故あえてテーブルの下から近づくルートを選んだのか、そして何故そんなに鼻息が荒いのか。全てが謎である。

仮とはいえお姉様としては非常に彼女の将来が心配である。

「いえね、少し、お姉様の足置きにでもなろうかと思って」

「真顔でなんてこと言いだすんですか」

「ついでに下からお姉様のスカートの中を覗いたら万々歳でしたよ」

「踏んであげましょう」

「ああんツ！ もっとお！」

くそ、逆効果だった。

取り敢えず私は何かされない内に、プリンツを机の下から引っ張り出して椅子に座らせた。

顔に靴跡をつけて尚、満面の笑みを浮かべる彼女に私は深海棲艦と同等の脅威を感じざるを得なかった。

「それで、お姉様。もしかして磯風に夕食を作って貰った日の事ほとんど覚えていないんじゃないですか？」

「なんでそのことを……………」

「あの日は私も一緒にいたので、ぼつちり覚えてますよ！」

「じゃあ、教えてください！ あの日、一体何があったんですか!？」

プリンツは頷いて一度咳払いを挟むと、物語でも語るかのようにゆっくりと口を開く。

「あれは、二日前のことだし——」

「いや、一週間前ですよね？」

「……………あれは、一週間前のことでした」

「大丈夫なんですか、本当に!？」

そして、数分後。

「——はー、そんなことがあったんですか」

磯風の料理を廻る一連の騒動をプリンツから聞き、私は磯風に料理を振る舞われた日の記憶が飛んでいる理由と磯風に料理を教える手筈となった経緯をようやく理解した。

というか人を昏倒させて記憶まで奪う料理とかそれはもう料理ではないんじゃないだろうか。

と、きつと当時の私も思っていたに違いない。

「大変だったんですよ！ お姉様は私よりも沢山の料理を食べていたので記憶の損傷が大きすぎてほとんどの記憶を失ってしまったんですね！」

「成程、補足ありがとうございます、プリンツ」

「勿体なきお言葉！」

「で、私が作ったオムライスに関しては何か覚えてますか？」

「ここが本題である。」

取り敢えずこれで磯風に教える予定らしいオムライスさえわかれば万事解決である。

「確か……そう、青かったような」

「適当言わないでください」

青いオムライスなんてこの世には存在しない。

「じゃあ、黄色ですね！」

「わかりました、覚えてないんですね」

「——半熟のオムレツがのったタンポポオムライスだったぞ、あの日作ってくれたのは」

「ああ！ あのオムライスですか！」

気が付いた。二つ気付いた。

自分が作ったオムライスがどのアレンジであったのかということ。それと、それを教えてくれたのが、いつの間にか私の後ろでケチャップを持って佇む磯風であるという非常に拙い状況であること。

「あ……いや、その、これは……いえ、すみません」

何とか弁解しようと、私は必死に二秒ほど考えたが、これ以上何も弁解しようのない事に気が付いた私は大人しく謝ることにした。

「まあ、そんな気はしていたんだ。人を昏倒させる位だから、人の記憶にも障害を与える位はあるかもしれないな。怖くて聞けなかったんだ。だから大和が覚えていたような体で話を進めてしまった。こちらこそ困らせたようですまない」

「い、いえ」

毎回毎回の少女の口から出てくる言葉は大人びていすぎるとともに私は困惑を隠せない。とりあえず、そこまで怒ってはいないらしいので私としては万事解決である。

「さあ、材料も揃ったし、始めよう！」

「はー」

ここからが私の本領発揮である。

人に食べられるどころか人を喰う怪物料理を、私はどれだけ普通の料理に近づかせることができるのか。

まずは私と同じようにオムライスを作って貰えば流石にどうにかなるのではないかと思い、まな板、フライパンを隣り合わせに二つ用意する。

「それじゃあ、今日はタンポポオムライスと一緒に作りましょう！」

「ところでタンポポオムライスってなんですかあ、お姉様？」

「それはね——」

タンポポオムライス、とは映画『タンポポ』に登場したオムライスで、チキンライスの上に半熟オムレツを乗せ、それを切り開いてライスを包み込むという独特な手法をとるオムライスである。

オムレツをナイフで裂くと、半熟の中身がライスを覆っていく所がなんだかとても美味しそうで映画に出て来て以来、数多の人々がこの

タンポポオムライスを作り、台所に立ったと言う。

ただ、チキンライスまでは問題ないのだが、半熟オムレツの火加減の難しさやオムレツの返しに苦戦する人が多く、特に料理経験の浅い者などは卵を無駄にしないようにするために、まずは濡らしたナプキンなどをフライパンの上に置いてオムレツの返しを練習することになる。

オムライス一つ作るだけというのに、なんというか大変な手間である。しかし、同時にそれだけやってでも習得したいと言う魅力がこのオムライスにはあると言える。

かくいう私もこのオムライスは二十種類のアレンジの中でも最も好きなものだ。

うまいこと半熟オムレツが開けた時など思わずニヤリとしてしまう。

「美味しそうですね！」

「ふふ、ちよつと普通のオムライスよりも難易度は高いんですけど頑張りましたよ！」

「ああ！」

「では、まずは玉ねぎをみじん切りにして——」

玉ねぎを微塵切りにしたものと一口大に切った鶏肉を、油を軽く敷いたフライパンで中火で炒め、鶏肉に火が通ってきたら白米を加えて馴染ませた後、ケチャップを加える。

ケチャップが全体に馴染んで来たら塩コショウを振りかけ、チキンライスは完成である。

ここまでは磯風も問題なく、というよりはむしろ私よりも手際がいい位であった。

「凄く包丁捌き上手じゃないですか！ 火の通りもしっかり見ているし、むしろ私の方が教わる点が多いくらいです」

「いやいや、味がアレじゃ無意味さ」

確かに味は殺人的ではあるが、非常に料理慣れしている様子であるし、何より今の所は私と同じようにやっているのだから問題はない筈。

できたチキンライスも美味しそうだし、これはもう私いらないのではないか。

「じゃあ、次はオムレツってみましょうか」

オムレツは一般的な家庭料理だが、その実、中々一筋縄ではうまく行かない料理でもある。

見ている分には簡単そうに見えるのでつい軽い気持ちで挑戦して大失敗する者も多い。母親に偉大さを感じるメニューの一つかもしれない。

何故か、それはこのオムレツという料理は数ある料理の中でも『技術』の優劣で完成度の差がはつきり見え易い料理だからだろう。

大抵の料理はおおよそ材料とレシピだけで誰でも一定レベルの出来にはなる。野菜の切り方や焼き加減に多少の差異が生じててもレシピと材料である程度挽回がきくのである。

ただ、このオムレツという料理は材料が卵と調味料、レシピなどを溶いて焼くだけに等しい。

つまり、材料とレシピの比重があまりにも小さい。焼き方の練度の差によってその出来が決まるのである。

その人が如何に料理慣れしているかが見える料理の一つだろう。

「まずは卵を二つ割って、塩コショウ、砂糖などお好みで加えて素早く溶きます」

ポイントその1。この時に白身と黄身が完全に混ざり合っていないとオムレツに白い斑点がついてしまう。

それを利用したマーブル模様のオムレツというものもあるが、今求めるのは黄色のオムレツなので、ここでしっかり白身を切つてやらなければならぬ。

「それじゃ、フライパンにバターを落として、全体に敷きましょう。フライパンは中火で大丈夫です」

「よし」

「じゃあ、溶いた卵を少し垂らしてジュツと音が鳴るくらいまで温まったら、卵を全部入れましょう」

ここからが肝心である。

「フライパンを振りながら菜箸でかき回してください！」

ポイント2。半熟オムレツを作るために卵が固まる前に素早くかき回して半熟状態を作る。コツはスクランブルエッグを作るときをイメージするといい。

ただし、ここで手際が悪いと、本当にスクランブルエッグに路線変更する事になる。

しかし、逆に考えれば失敗しても二段構えになっているというのは精神衛生上とても良いことだ。

「裏面が固まり始めたら、半熟卵をフライパン端に寄せて素早くたたみ、返します」

ポイント3。ここが最大の難関である。フライパンの柄の部分を手早く叩きながら半回転させてオムレツにする。

文字で書けばこの程度だが、ここはコツを掴むまで一番時間が掛かるところだろう。

さて、磯風の方はどうなるか。

「うん、まあまあかな」

そつがない。

私がオムレツを返している頃にはもう彼女の方は形を整える所までいっていった。

しかもそのオムレツもふわふわで非常に美味しそうである。

「それじゃ、チキンライスに乗せて出来上がりなんですけれど……」

「できたー！ これをたしか最後に割るんだったか？」

磯風がナイフを取り出してワクワクした表情で尋ねてくる。

こういう所は年相応である。

「じゃ、一緒に割ってみましようか。余り深く切ると本当に一刀両断しちゃうので表面だけ優しく切るようにやってみてください」

磯風が恐る恐るオムレツに切れ目を入れると、半熟のオムレツが姿を現し、チキンライス全体を包み込む。

初めてとは思えない程の出来栄えに私もプリンツも、磯風自身まで驚いていた。

「できてしまった……！」

「いや、本当に冗談じゃなく完璧ですよ！」

「すごい！ 磯風の方もお姉様の方も区別つかないよ！」

私の方も我ながら上手くできたのでタンポポオムライスは二つとも料理店に出しても恥ずかしくない外見にはなっていた。

問題は味の方だ。私が横目に見ていた分には恐らく余計なことは何もしていないだろうから美味しい筈だが。

「味見は自分でしますか？」

「う、ん……できれば誰かに食べて貰った感想が欲しいな」

「そうですね」

だが、私もプリンツも正直味見をするのは避けたかった。いや、決して信用していない訳ではないのだ。ただ、私は石橋を叩いて渡るタイプの人間だから、万全な保証が欲しいというか。

まあ、詰まる所、食べたくないのである。絶対に言葉には出さないが。

その時、丁度よく食堂の扉が開き、誰かが入って来た。

「丁度よくお昼を食べに来た人がいるみたいですね。早速味見して貰いましょうか」

「ああー！」

厨房から顔を出すと、そこには提督が立っていた。

しかし、何故か背中の人に人をおぶっている。そして、それは明らかに磯風より少し年上に見える位の、所謂、幼女という奴に見える。

「あの、提督、その子は……？」

「ああ、大和ですか。そういうえば彼女のごとはまだ知らないんですつけ？」

「ついに、攫ってきちやっただんですか……!?!」

「うん、大和の中での私ってそんな鬼畜外道なんですか？ 結構ショックだったんですけれど」

「自首しましょう！ 私も付き添いますから！」

「普段温厚な私とて、そろそろ怒りますよ？」

良かった、誘拐とかハイエースしたとかではないらしい。

しかし、それではこの幸せそうな寝顔の少女は一体何者なのか。

う、近づくと酒臭い。

「この子は七丈島艦隊の一人ですよ。瑞鳳です」

「瑞鳳……?」

「ん、瑞鳳じゃないか。久々に見たな」

「本当、珍しいですよねえ。鎮守府前で倒れてたから拾って来たんですよ、ラッキーでした」

「そんな、四葉のクローバーみたいな扱い!」

確かにレア空母だとは聞いているけれど。

私達の喧騒に目を覚ましたのか、机に突っ伏していた瑞鳳は目をこすりながらゆっくりと起き上がった。

そして、酒気を帯びた息を吐きながら辺りを寝ぼけ眼で見まわす。

「お腹空いた」

「え?」

「お腹空いたあゝ!　なんか作って!　早く作って!　はい、あと五秒ね」

「この人まだ酔ってませんか?」

「お腹一杯になったら落ち着くと思います。何かありますか?」

「丁度、オムライスを作っていたところだが」

そう言つて、磯風がさっきのオムライスを持ってきて、瑞鳳の前に置く。

瑞鳳はオムライスと磯風を交互に見ると、オムライスの皿を提督の前にずらした。

「はい、提督」

「え、私ですか?」

成程、この瑞鳳も酔っているとはいえ、流石に磯風の料理となると警戒しているのだろう。しつこく提督に向けてオムライスを差し出すが、提督もやはり断り続ける。

「私はお腹空いてないので結構です」

「えゝ、じゃあ、特別ね。提督、はい、あゝん」

「ぐはあ!」

瑞鳳がスプーンでオムライスを掬って提督に差し出した。いわゆ

る、『はい、あくん』である。

これは男子としては憧れのシチュエーション。この女つ気のなさ
そうな提督なら尚更の筈。提督もこれには苦悶の声を上げている。

しかし、耐えた。それでも飛びついてはいけなかった。これが恥じ
らいから来るものであれば、そんなんだからお前は女つ気がないつて
んだよ、とか言われそうだが、今は命すら懸かっている可能性がある
のだから彼を責められるはずもない。

瑞鳳は頬を膨らませてしばらく考えたかと思うと、可愛らしい笑み
を浮かべ、瞳を濡らしてウルウルさせながら上目遣いで言った。

「あの、提督、私のオムライス、たべりゆ?」

「はい、喜んで」

提督は殉職なされた。萌え的な意味で。

これはつまり、今の瑞鳳の一言が彼の命を賭けるのに足るだけの一
撃だったということだ。

それでいいのか、提督。

まあ、しかし今回は私と全く同じように作っている筈なのだから磯
風の料理は心配ないと思うが。

「——かはッ!」

「提督!?!」

提督は倒れた。何故だ。

何故全く同じように作ったオムライスでまた同じような被害者が
出てしまったのかも謎だが、何故提督は倒れて尚ここまで満足そうな
顔をしているのかも同じくらい謎だった。

それでいいのか、提督。

「ふ、艦娘達に囲まれて死ぬ……こんなに幸せなことはない」

「死因、オムライスになっちゃうんですけどそれで幸せなんですか、提
督!?!」

「わく、提督く、死なないでく、私泣いちゃうく」

「あなたも食べさせておいてその棒読みやめてくださいよ!　せめて
笑顔は隠してください!」

「泣かないでください、瑞鳳……!」

「泣く気配、微塵もないですって!」

原因は全く分からないが、取り敢えず今回も磯風の殺人料理は変わらなかった。

そして、その数秒後。提督は意識を失った。

尊い犠牲であったが、取り敢えずそこらへんに寝かせておけばその内また起き上がってくるに違いない。

提督が倒れたのを見て、磯風は大きな溜息をついてから、提督の前で手を合わせると厨房の奥に戻って行ってしまった。

「あくあ、やっぱり駄目ねえ。ねえ、あなた大和よね? あなたが作つた方を頂戴」

「まあ、いいですけどよくわかりましたね。私もオムライス作ってるって」

「そりや、磯風の様子見てればすぐわかるわよ。あの子、以前はもつと自信をもって料理を出していたわ。だけど、今日の磯風はどこか不安な表情が垣間見えた。つまりは自分の料理の危険性に気がついたちゃったのよね? 多分、気付かせてくれたのはあなたでしょ?」

「はい、そうです」

何か不思議な感じがした。

まるで、目の前の瑞鳳に全てを見透かされているような、彼女の目を見ているとそんな感じがしてならなかった。

瑞鳳は私の作ったオムライスを食べて満足そうな笑みを見せながらさらに続けた。

「まあ、磯風の性格上、自分の料理の実態を知れば罪悪感ですぐに料理を練習しようとするでしょうね。そんなあの子が料理を勉強するためにコーチとして選ぶとすれば、まあ新人のあなたでしょうね。今日は二人で一緒に料理を作ったんでしょ?」

「よくわかりますね、そんなところまで」

「あなたの資料は事前に貰ってたからね。プロフィールの結果よ、プロフィールの」

「プロフィール?」

難しい単語に反応する私に瑞鳳は得意げに説明を続けた。

最早きときの酔いは影もない。

「人の持つ様々な属性を列挙した、その人専用の説明書みたいなものよ。それがあれば、人間関係の未来まで予測できちゃうのよ?」

「はあ、よくわからないんですけど、凄いですね」

「凄いです? 当然でしょ! だって、私は完全無欠の天才美少女、瑞鳳ちゃんだもの!」

「ケチャップ、ほっぺについてますよ」

また、癖のありそうなキャラの人だ。

私は心の中で嘆息した。

第十二話 「よばれてとびでてジャジャジャー」

「あ、いた。大和、ちょっと付き合つてよ」

「え？ まあ、いいですけど」

瑞鳳と出会った次の日、朝から彼女に声を掛けられて私は一日を瑞鳳と過ごす運びとなった。

「どこに行くんですか？」

「まあ、ついて来てよ。そこまで時間はかからないから」

と、特にこれといった説明がなされないまま歩き続けること十分弱。私達は港に着いていた。

外出をする時はいつもここを通っている気がする。最早見慣れた風景である。

「——瑞鳳さん！」

港に着いた所で声を掛けてきたのは随分と身なりの良い青年であった。年の頃はおおよそ十代か二十代でおおよそ薄汚れた白シャツと青のズボンで漁に行く漁師達とは真逆の洒落た服装に身を包んでいる。

そして、問題なのは彼が私ではなく瑞鳳に声を掛けた所だ。もっと言うならば彼の瞳に私はまったく映つてなどいないことである。

なんか、このシチュエーション以前にも見たことある。具体的にはプリンツと買い物に行った時に似ている。

というか全く同じである。またか。

「酷いじゃないか、瑞鳳さん」

「は？ なんのことよ」

引きつった笑いを浮かべる青年に対し、瑞鳳はこれでもかというくらいに威圧的な態度である。

「なんのことって、一昨日のデートのことだよ！」

「デート!？」

デートといえばあれである。デートである。

親しい男女が会い、その日一日を二人きりで過ごすというあれだろう。私には全くもって縁がない。

私の尊厳を守るために付け加えるが、基本的に艦娘全般に縁がない。

日々深海棲艦と戦う私達にそんな安息の日はないのである。異性とイチャイチャしている暇などないのである。

決して私がモテない訳ではないのである。注意されたし。

「ああ、デートってそういうこと。それで、あれがどうしたの？」

「どうしたもこうしたもないよ！ 一昨日はようやく二人で過ごせると思ったら、散々ショッピングモールを引きずり回してはあれが欲しい、これが欲しいって目につくもの全て僕に買わせて！」

「女の子はショッピングが好きなのよ？ それに好きな女の子が欲しいがっている物を買ってあげるのが男の務めでしょ？」

何だ、その役割分担は。女の子が圧倒的優位ではないか。私もやりたい。

「そ、それだけならまだいい！ その後、昼食はイタリアン、夕食はフレンチのフルコースを注文した挙句に最後にはバーで高い酒ばかり呑んで！ しかも僕が酒に弱いのに付け込んで僕が潰れた後に請求書だけ置いて勝手に帰っただろ！」

昨日、鎮守府前で酔いつぶれていたのはそのせいか。

「えー、あなたがいくら起こしても起きなかつたのが悪いのよ。それに、あの程度あなたなら払えない額じゃないでしょ？」

「この際、金の事はいいさ！ でも、これだけ尽くしてやっている僕にもう少し何かあってもいいんじゃないか？ 瑞鳳さん！」

これは所謂、修羅場という奴だ。私は詳しいのだ。よく昼のドラマでやっていた。

しかし、聞けば聞くほどこの瑞鳳、可愛い顔してとんでもない悪女である。まるでキャバ嬢のような貢がせぶりではないか。

正直、少し羨ましい。

「はあ、あなた、何か勘違いしてないかしら？」

「なんだって？」

瑞鳳はまるで養豚所の豚でも見るような冷たい目で青年を睨み付ける。

ちよつと待て、青年。怖気づくならまだしも、何故そこで頬を赤らめて少し嬉しそうなのだ。

「あのね、デートって男が女に貢ぐための場でしょ？ だから私は貴方に気を遣って貢がせてあげたの、わかる？」

とんだ暴論である。

しかし、この言葉に青年、何も言い返せない。何故だ。

「あなたは私に貢げて嬉しかったでしょ？ 私もあなたに貢いでもらって嬉しかった。ほら、Win—Winじゃない」

「た、たしかに……」

いや、たしかにじゃないだろう、青年。微塵も確かな所などなかったではないか。

「け、けど、それでももう少し瑞鳳さんから僕に、その、何かあってもいいんじゃないかなって……」

お、いいぞ。そうだ、もつと言ってやれ。

いつの間にか私は青年を応援していた。

「見返りが欲しいと？ 見返りならちゃんどあげてるじゃない」

そう言うと、瑞鳳は微笑みながら青年の両頬に手を当てて、目線を合わせる。

「あなたが私に貢いでくれている限りは、私はあなたのことをずっと見てあげるわ」

「~~~~~!」

青年はその言葉に複雑な表情を見せると、目に涙を浮かべながら、一目散に逃げるように走り去っていった。

強く生きろ。

「うん、これであの子は落ちたわね」

「いや、流石に嫌われたでしょう」

「いいえ、むしろ逆よ。あの子は私にどうしようもなく心の底から惚れている。だから、どんなにそっけなくされようと、もうあの子は私から離れられない。ま、私の美貌なら当然ね」

「その内刺されますよ？」

「刺されたくらいじゃ艦娘^{私達}は死なないでしょ？」

「46cm三連装砲で撃ちぬかれますよ?」

「あなたに撃たれるいわれはないわよ」

聞くとところによると、さっきの青年はこの島の有力者の一人息子。いわゆるお坊ちゃんらしく、ため込んだ金を吐き出させるために落とした一人だと言う。

いや、一人つてなんだ。あんな哀れな青年がまだ複数人いるというのか。

羨ましい。いや、けしからん。

「こんな小さな島だからこそ、お金は積極的に回さないと資本社会が成立しないわ。私はそのための手助けをしているのよ。私って偉い」
「それ詭弁っていうんですよ」

「そもそも落とされる方が悪いのよ」

「責任転嫁!?!」

瑞鳳自身には全くもって罪悪感の類はないらしい。

昼ドラで見ている分には面白かったが、こうして現実で目にする男の方がただただ哀れでならない。

「相手は瑞鳳のことをそんなに好きなのに、少しは申し訳なく思わないんですか?」

「思わないわ」

即答であった。

というか、その時の瑞鳳はさっきの白けた感じの雰囲気ではなく、どこか拒絶的な冷たさがあった。

「あいつらはね、私がどんなに辛く当たっても、もしかしたら振り向いてくれるかもしれない、きつといつかは気持ちが届く、とか根拠のない薄い希望を捨てられない甘ちゃんよ。そんな奴らを私は認めない」
「はあ……」

「無駄な時間を過ごしたわね。早くボートに乗りましょ。目的地はその先にあるわ」

どこか変な空気のまま、船着き場でボートに乗せてもらい、私と瑞鳳はこの七丈島に隣接する小島、七丈小島まで連れて行って貰った。

本来ならこの程度の距離、艀装があればすぐなのだが、今はその艀

装が拘束状態で提督の許可なしには持ち出せないためにボートに乗る必要があったのだ。

「ほら、着いたぜ、瑞鳳ちゃん。今回はいつ迎えにくればいい?」

「今日はすぐに帰る予定だから二時間後でいいわ」

「了解した」

私と瑞鳳だけに乗せたボートは七丈小島の寂れた船着き場に着く。

度々瑞鳳を連れてきているのか、日に焼けた肌のサングラスを掛けた船頭はそう言っつて船着き場を離れてまた七丈島へと引き返していった。

「さ、こつちよ」

「あの、ここつて人は住んでるんですか?」

「いえ、人は住んでいないわ」

見るからに自然一色の島の様子に私は瑞鳳に尋ねた。

そのまましばらく歩くと、視界の先に人工物らしき建物が見えてくる。その建物の見慣れた形を見て私は驚きの声を上げた。

「あれは、鎮守府ですか!」

「ええ、そうよ。七丈島鎮守府ができる前にあつた鎮守府で数年前に放棄されて今は人も艦娘もいないわ」

それにしてもあまりにも外観が綺麗過ぎる。まるでここ数年のうちに出来たばかりの建物である。

瑞鳳は扉を開いて慣れた様子で中に入っていく。私も瑞鳳に続いて中に入っていくが、中も綺麗に掃除がされているようでとても放棄された古い建物には見えない。

「あの、ここで何をするんですか?」

「会わせたい奴らがいるのよ。ちよつとお! もうそこら辺に居るんでしょ!」 あなた達ちよつと出て来てくれる!」

そう鎮守府内に響き渡る程の大声で瑞鳳が叫ぶと、何かネズミでも動くような気配を感じ、私は辺りを見回す。

瞬間、突然上から何か小さな物体が落ちてきたかと思うとそれは私達の目の前に華麗な三回転宙返りを決めながら着地する。

その小さな何かを見て私の目は大きく見開かれたことだろう。

「これは、妖精さんじゃないですか!？」

「よばれてとびでてジャジャジャジャーン」

ああ、この抑揚のないだらけた感じの声、舌足らずな言葉。この二頭身の謎の喋る生き物は間違いなく妖精さんである。

妖精さんは七丈島鎮守府を除いた全ての鎮守府に必ず一定数現れる謎の生物である。何故か深海棲艦の出現と同時期に人間の前に現れ、何故か人間に協力し、何故か装備の開発、艦装の建造など驚異的な技術力を持っており、何故か増えたり減ったりする謎だらけの生き物である。

その愛くるしい外見とは裏腹に時折ブラックな一言を呟いたり、そこから辺の雷親父よりも怖かったり、松岡●造と同等に暑苦しい妖精さんなど、外見からでは判断できぬ多種多様の性格を持つ妖精さんがいる。

ちなみにコスプレが大好きであり、たまに艦娘や史実に名を遺した戦闘機パイロットによく似た妖精さんも散見される。

妖精さんはミーハーなのである。

「妖精さん、この子、新しくこの鎮守府に出入りするからよろしくね」

「しんいりです?」

「いびつてこきつかうのアリです?」

「やきそばパン、かってこいやぁー」

わぁ、辛辣。でも、可愛い。

いつの間にか三人が増えた妖精さんは私に向けて両手を振り上げながら好き勝手呟いている。無論本気で言っている訳ではないのでこちらも本気にはいけない。

ここで焼きそばパンなど買ってこようものなら妖精さんはドン引きしてしまう。本当に自分勝手な生き物なのである。

「この子は和。あなた達の待ちに待った戦艦よ」

「ほおおおおおー!」

瑞鳳の口から戦艦という言葉が出た瞬間に妖精さん達の顔が輝き始める。

「やたー!」

「せんかん！　せんかん！」

「いろんなそうびためせるー」

「ガラクタがおたからにはやがわりです」

また数人増えている。少し目を離すといつの間にか増えているのが妖精さんである。

「ここは私の連れてきた妖精さん達が古い鎮守府を改修して作った妖精さんの住処よ。普段は気まぐれに装備開発したり艦装を作ったりしてるんだけど、やっぱり装備を試したいらしくてね。たまにここで妖精さんに付き合っただけであげてくれる？」

「それ、提督に気付かれたら拙いんじゃない？……？」

「大丈夫、あの提督なら確実にばれないわ」

一瞬、納得しかけてしまった。

「まあ、それなら別に——」

「はどうほう！　はどうほう！」

「いすかんだるへとかじをとれえ！」

「——やっぱりちよつと、待つてください！」

やばい、私、このままだと宇宙戦艦にされる。

「どうせいつもの冗談よ」

「なんか改装設計図みたいの書き始めてるんですけど！」

「まあ、別にそれもいいんじゃない？　艦載機も乗せられるようになるわよ？　コスモ・ゼロとかブラックタイガーとか」

「私は別にガミラスと戦うつもりはないんですよ！」

「えー、いすかんだるいかないのー？」

「こすもくりーなーDはどうなるのー？」

「ちきゆうはあとーねんでおしまいです？」

妖精さん達のテンションの下がりようが酷い。

「まあ、取り敢えずはそういうことで頼むわね。どうせ、暇だしいいでしよっ。」

「まあ、宇宙戦艦にしないと約束するなら」

「ゆるしてやるです」

「かんべんしてやろう」

「しかたのないやつだー」

「凄い、偉そうだ。」

「まあ、だが、私が宇宙戦艦になる未来は阻止されたのならいい。

「取り敢えず、後は時間いっぱいまで好きにしていいわよ、妖精さん」

「じゃあ、しせい35cmさんれんそうほうからー」

「まあ、それくらいなら」

「つぎはしせい41cmさんれんそうほうねー」

「はいはい」

「そのつぎはしせい51cmれんそうほう」

「わかりましたよ」

「つぎは、はどうほうー」

「はいは——は!?!」

「やたー」

「ちいさいことからコツコツとー」

「ふつといんぎどあー」

小さいことから徐々に大きなことを頼んでいくことで最終的に了承しやすくなる心理テクニク、フットインザドア。

舐めていた。この妖精達はどうしても私を宇宙戦艦にしたいらしい。

「いや、今のなし！ 波動砲は乗せませんから！」

「やりなおしきくです?」

「セーブデータがみつかりませぬです」

「じんせいはじめからやりなおすです?」

舌足らずのくせにいちいち言動が辛辣過ぎる。

この後、私は時間いっぱいまで大量の装備を乗せたり、おそらくは宇宙戦艦改造に使うのであろう何かのデータを取られたりと大忙しであった。

「お疲れさま」

「一カ月に一回くらいのペースでいいですか?」

「一週間に一回程度は来てね」

どうやら私が宇宙戦艦になる日も近い。

「それに、リハビリはしっかりやっておかないとでしょ？」
「え？」

私は彼女の言葉に強烈な寒気を覚えた。

今の言い方はまるで、瑞鳳は知っているみたいでないか。誰にも言っていない筈の私の秘密。

「何よ、驚くことないじゃない。プロフィールよ、プロフィール。あなたのことだっけ？しっかり情報集めてるのよ？」

「……………」

「大丈夫よ、誰にも言うつもりはないわよ。ま、どうせしばらく実戦はないんだし、ゆっくり慣らしていきましょう。戦えない戦艦さん」

そう言っつて、瑞鳳は船着き場に迎えに来ていたボートに乗り込んだ。

一方で私は固まっていた。

いつの間にか手が震えていた。最近は忘れかけていたのに。

瑞鳳が言っていた『戦えない戦艦』。その通りだった。

——敵を撃つことが、私にはできない。

第十三話 「パジャマパーティーしようぜ！」

瑞鳳と七丈小島に行つて来てから数日が経つた夜。

突然それはやつて来た。

「おう、大和！ 突然だけど邪魔するぜ？」

「へー、ここが大和の部屋かあ。まあまあ綺麗じゃない」

「うん、当たり前のように鍵開けて入つてこないでくださいね？」

スピアキーを片手に天龍と瑞鳳が私の部屋に乗り込んできた。

「こんな夜中になんの用ですか？」

時刻は現在0時を回つたところである。そろそろ私も就寝しようとして寝間着に着替えていたのだが、そこに同様に寝間着姿の二人が入つて来たのだ。

「パジャマパーティーしようぜ！」

「突然ですね」

「いいじゃない、ほらお酒とおつまみもくすねてきたからぱーつとやるわよ！」

「うわ、瑞鳳は既に出来上がっちゃつてるじゃないですか」

「おう、言い出しつpegがこいつでな、私を誘いに来た時点で既に酔つた」

初対面の時から言いたかつた事だが、私の知っている瑞鳳はこんなじゃない。

「ま、お前もしばらく酒なんてやつてなかつたら？ 親睦会だと思つて、今夜は色々語り明かそうぜ？」

「まあ、いいですけど」

確かにしばらくお酒なんて一滴も飲んでいない。

それに、折角こうして来てくれたのを無下に返すのも忍びない。何より、パジャマパーティー、良い響きではないか。

一回やつてみたかつた、そういうの。

「よし、三人か。もう一人くらいいるといいんだけどな」

「矢矧とか磯風は駄目なんですか？」

「馬鹿、磯風は酒飲めねえし、そもそもあいつは二十一時にはもう寝てんだよ」

「矢矧は？」

「あいつは飲めるが、この酒見せた途端に俺達説教だぜ？」

「ああ、成程」

「そういえば瑞鳳がくすねてきたとか言っていたのを思い出して私は納得した。」

「それにあいつも二十二時にはもう寝てるしな。全く健康家が多くて困る」

「じゃあ、仕方ないですね。プリンツを呼びますか」

「あいつの部屋も行ったけど反応なかったぜ？」

「大丈夫です、きつとすぐに来ますよ」

私は本棚の奥の方に手を突っ込み、本を取るでもなく、本棚の内壁に付いていた小さなスピーカーを取り出した。

「あった、盗聴器」

「え」

「プリンツ、聞いての通りなんですけど、こっち来れますか？」

その数秒後、私の部屋の扉が開け放たれ、ネグリジェ姿のプリンツが飛び込んできた。

「ずつと部屋の前でスタンバってました！」

「風邪ひきますよ？」

プリンツは依然として私の部屋に盗聴器を仕掛けて来ている。最初の方こそ頑張つて撤去していたが、流石に日数が経つと私も慣れ初めて気にならなくなつてきていたので、今はそのままにしてあるのだ。

それに、こういうプリンツへの用事がある時に便利だし。

「ほら、ね？」

「いや、ね？　じゃねえよ」

「なんでストーカーに慣れてんのよ」

天龍と瑞鳳の目が割と本気で私を心配している目だった。

☆

「——ま、そういう訳で改めて、第……何回か知らんけど七丈島艦隊親睦会だぜ！ 乾杯！」

「乾杯！」

「かんぱーい！」

「カンパ〜イ」

それぞれ盃や升、おちよこなどそれぞれの器に日本酒を注ぎ、乾杯した。

「それにしても、随分と寝間着で個性が出ますね」

「そうか？ 皆似たようなもんだろ？」

「あんたの目は節穴みたいね」

天龍はジャージ、瑞鳳は甚平、プリンツはネグリジエ、私はパジャマである。

作為的な意図を感じる程度にはバラバラであった。

天龍の目は節穴に違いない。

「そんなんだから、あんたは男が寄り付かないのよ」

「あん？ 別にいらねえよ。お前みたいに俺は男と買い物行くような趣味はねえよ」

「そういえば、瑞鳳とプリンツは男の人達からモテますよねえ」

瑞鳳もプリンツもどちらも男に言い寄られる場面を見てしまっている私としては、二人は天上人である。

「まあ、私なら当然よ」

「大丈夫ですよ、私はお姉様以外に興味何てありませんから！」

「瑞鳳はともかく、プリンツはもったいないですよ。折角モテてるのに興味がないで断つちやうだなんて」

「大和、今の発言はスルーなのか!？」

「だって本当に興味ないんですもん」

「あまりに興味なさ過ぎて男の人の顔全然覚えられないんですって?」

「はい、でも何人かは覚えてますよ！」

「へえ、お前でも顔を覚えられる男がいたのかよ」

「私だって少しは覚えられるもん！」

「で、誰なんですか？」

「えつとですね、先ず一人は提督！」

流石に提督は毎日顔を合わせているような存在だし覚えているのも当然だろう。

「あと、何故かビッグスプーンの店長さんはすぐに覚えられた」

「オカマだからか」

「オカマだからですね」

「オカマだからね」

満場一致であった。

「で、それ以外は？」

「……………」

「え、終わり!?」

「二人だけですか」

「私にはお姉様がいればいいもん！」

そう言つて、プリンツはおちよこに日本酒を注ぎ、それを一気に飲み干した。

「男に興味がないのに男にモテるつてのも難儀ねえ。モテたくてもモテない奴もいるのに」

そう言つて瑞鳳は私と天龍の方に意味深な視線を向ける。

「おう、瑞鳳、勘違いしてるぜ？俺達は別にモテたいだなんて思つてねえよ」

「えっ……………」

「ごめん、私はモテたい。」

しかし、そんなことを口に出せる筈もなく、私は天龍の言葉の行く末を見守る。

「お前みたいに金がありやいい、身分が良けりやいいってんじやないんだよ。私達は心から信じあえる相棒、そんな奴が一人いりや満足さ」

ブラボー、おお……………ブラボー。

いい感じではないか。そうだ、誰でもいいという訳ではない。見てくれに大した意味はない、恋愛とはお互いの心が大事なのだ。

よく言った、天龍。私は満足げに盃の酒を口に含んだ。

「つまり！ 心さえ通じ合えば性別の壁なんて関係ないってことですね！ お姉様と私は合・法！」

私は口に含んだ酒を嘔き出した。

「……あんた達、さつきから黙って聞いてれば、こっちだって大変なのよ! 『モテない』あんたらにはわからないでしょうけど！」

「ぐはあ！」

やめろ、その単語は私に効く。

瑞鳳の顔がより赤みを増して、甚平がはだけ始めていた。この面倒な感じの絡み方は間違はなく悪酔い特有の症状である。

このパジャマパーティーが始まる以前から飲んでいた上に升酒をかっくらっている彼女が酔いの回るのが早いことはわかりきっていたが、まさか絡み酒とは。

「私だってね！ いつ誰にデート誘われてるか確認してスケジュール調整したり！ お洒落もしなきゃだから朝早いし！ しまいにはダブルブッキングした時はどうしようかと思っただわよ！」

「いや、完全に自業自得じゃないですか」

「どれか一人に絞れよ」

「しよちゆう告白されるんだから仕方ないじゃない！ しかも二股でもいい、とか言うし！ 既に八股はかけてるっつーの！」

「今更ですけど、なんでこんな人がモてるんですか？ 私納得できません」

「世も末だよな」

「そー！ うるさいわよ！」

空になった升を投げつけてくるが酔っているためか勢いが全くない。あっさり天龍にキャッチされ、投げ返された升は瑞鳳のおでこにクリーンヒットした。

少しスカツとしたのは秘密だ。

「うう……この前なんか……女にまで告白されたし……」

「え!？」

「座ってる、プリンツ」

仰向けに倒れながら涙声で呟いた一言にプリンツが立ち上がった。落ち着け。

「そ、それで！ どうしたの!? 受けたの!? 告白!」

「うう、私、頭真っ白になっちゃって……うう……ついオーケーしちゃったよおお、うわああああん」

「泣いた!」

「やったあああああ! ここが! 私の! 理想郷!」

「座れつつつてんだろ、変態!」

小躍りを始めるプリンツに泣き始める瑞鳳。徐々に部屋の中がカオスになって来た。

「ていうか、瑞鳳何で断らなかつたんですか?」

「だってえええ! なんか目が本気だつたんだもおおおん! 真剣な顔で告白されると断れないんだもおおおおん!」

「ええ……」

「こいつ八股とかかけてるのも単に今までの告白全部断れなかつただけじゃね?」

「とんだシャイガールじゃないですか」

可愛い顔して腹黒かと思えば、酒が入ってより可愛い部分が露見してきた。なんだこの可愛い生き物。

「うわあああ、来週デートだああああ、どうしよおおお!」

「なんか、そうとわかると可哀想に見えてきたな」

「なんでしようね。この悪役にも実は優しい所があった的な、映画版ジャイアンの親しみを感じます」

「私の信じたやま×プリはここにあつたんだ!」

「うるせえぞ、変態!」

やま×プリってなんだ。カップリングか、大和×プリンツなのか、セルフカップリングなのか。

「取り敢えず、なんか收拾つかなくなってきたし、もう寝かせます?」

「じゃあ、私はお姉様と一緒にベッドで寝ます!」

「何で居座る気まんまんなんですか!」

「え? ここで雑魚寝でよくね?」

「部屋近いんだから帰ってベッドで寝ればいいじゃないですか！」
「おいおい、それじゃパジャマパーティーにならんだろう。誰かの部屋で飲み散らかして、雑魚寝までがパジャマパーティーのルールだけ？」

そうだったのか、初めてだから知らなかった。

「じゃあ、仕方ないですね」

「え？」

「え？ 何で天龍が驚くんですか？」

（え？ なんかツツコミ待ちだったんだけど……あれ？ こいつ、もしかしてこういうパジャマパーティーとか……あっ）

天龍は私の肩に手を乗せて言った。

なんだろう、なんとというか、笑顔が気持ち悪い。何でだろう。

「今日は、俺と一緒に寝てやるよ」

「いや、何ですか。別にいいですよ、気持ち悪い」

天龍の生ぬるい気遣いとどこか私を憐れむような視線が本当に気持ち悪かった。というかイラツとした。

「つまり、私はお姉様と天龍の間に挟まれて寝れるって訳ですね！

桃源郷はここにあったんだ！」

「変態は黙ってろ！」

「大丈夫！ 私天龍のことも放っておきませんよ！」

「うるせえ、お前は黙って床に寝てろ。大和とは私が寝る」

ちよつと待て。え、何で。

「お姉様と寝るのは私！ 妹特権！」

「なんだとお？」

「いや、どっちもお断りですから!？」

どうしたというのだ。特に天龍。

さつきから様子がおかしい。普段の天龍なら決してこんなことは言わない筈だ。

徐々に陰悪さを増す両者。それを止めようとする私の手を誰かの手が掴んだ。

瑞鳳だった。

「うう……私も、ねりゆ」

なんか可愛いこと言い始めた。何だこの可愛い生き物。

「しっかりしてください、瑞鳳！　ちよつとプリンツと天龍が収拾つかないんですってば」

「てめえ、口で言ってもわからねえみてえだな！」

「そつちこそ。私とお姉様の恋路を邪魔するなんていい度胸だよ！」

二人共酒が回ったのか完全に酔っている。このままでは下手をすれば殴り合いにまで発展するかもしれない。

「私はね！　妹なの！　お姉様の隣をいただく権利人なのよ！　お姉様の隣で寝るのが私である、これは決定事項なのよ！」

「お姉様の意向はガン無視ですか!？」

「てめえ、権利なんて関係ねえ！　大和が誰と寝たいかだろうが！」

「一人で寝たいです！」

「俺と寝たいに決まってるだろうがあ！」

「誰が言った、そんなこと!？」

最早当人達にその争いの中心である私の声は届いていなかった。

「大和お、来週私女の子とデートだあああ、どおしよおおおお！」

「何でまた急にその話!？」

瑞鳳も酷い状態だ。最早この空間のカオスは終わらない。

救いは、ない。と思ったその時であった。

「——スタンリング、発動」

「ぎゃあああああああ!？」

「ひゃあああああああ!？」

「ぴゃあああああああ!？」

突然、雷にでも打たれたかのように三人は奇声を上げると、その場に倒れて気を失った。

後ろを見ると、いつの間にかドアが開け放たれ、そこに黒髪をはためかせる黒い鬼が立っていた。

というか、矢矧だった。目に殺意が宿っているのを感じる。

「あんた達、夜中にギャーギャー五月蠅い」

「……す、すみませんでした」

「次騒いだらただじゃおかないわよ」

「既にただじゃ済んでないんですけれど」

「あん？」

「すみません！ 気を付けます！」

矢矧は扉を閉めて部屋へと戻って行った。

あんな矢矧は初めて見た。髪を下ろしていて、かつ寝癖でぐちゃぐちゃで、まるでどこぞのテレビから這い出てくる幽霊を思わせる恐怖があれにはあった。

「……………寝よう」

気絶して床に転がる三人をそのままに毛布だけかけてやると、私は部屋の電気を消して布団に横になった。

こうして、いくつかのトラウマを私に与えながら、初めてのパジャマパーティーは幕を下ろしたのであった。

私は当分リングを覗れそうにない。

第十四話 「私、皆から嫌われてる!？」

慣れ、とは恐ろしいもので、当初は毎日がトラブルづくしのこの七丈島鎮守府での生活にもいつの間にか順応し、私、大和が着任したその日から気がつけばあつという間に一カ月が経っていた。

最早、不審者が現れただとか、食べ物で人が倒れただとか、ストーカーだとか、男たらしだとかその程度のことでは私は驚かなくなっているのである。

成長というよりは退化である。動じないという点では肝が据わって来たと言えるかも知れないが、そんな耐性が付いた所で喜べるはずもない。

ああ、私の常識の壊れていく音がする。

「お姉様ー!」

そんな私の前にプリンツが神妙な顔つきで走って来た。

一体どうしたのだろう。昨日見つけた23個目の盗聴器は場所を変えただけで壊していない筈だが。

「お姉様、お願いがあります!」

「なんですか、突然? カメラを取り付けるのは駄目ですよ。邪魔ですし落ち着きませんし。盗聴機だけで我慢してください」

「お姉様、私が言うのもなんだけれど、ストーカーに寛容すぎます」

慣れとは恐ろしいものである。最早ストーキング程度では私の心は揺らがないのである。

「まあ、私には都合いいし、お姉様が受け入れてくれるのならそれに越したことはないですけど……って、そんなことを話に来たんじゃないんですよ!」

「じゃあ、一体なんなんですか?」

「あの、驚かないで聞いて欲しいんです」

「ああ、大丈夫ですよ。絶対驚きませんから」

私は自信満々に断言した。確信した。

神はこの狭い空間でほぼ毎日のように何かしらのトラブルを起こ

す。しかし、同時にそのおかげ、いや、そのせいで私はトラブル慣れしてしまっただ。

いくら神と言えど、今の私が驚くような状況など作れるはずがない。私はもう、一種の悟りの境地に到達しつつあるのだ。

さあ、神よ。この私を驚かせられるものなら驚かせてみよ。

「私、今日一日、お姉様のストーカーをお休みします!」

「ええええええええええええええええええええええええ!」

久々に大声で叫んだ気がする。

そして、同時に私は神への認識を改めて、改めなければならなくなる。

いくら私の精神状態が悟りの境地へ近づこうとも、気まぐれ一つで驚愕など容易く作って見せる。

故に、神なのだ。

「え!? ちょ、プリンツ!? なんですですか!? 変な物でも食べたんですか!?

わかった、磯風の料理ですね!」

「お姉様の悲しむ気持ちも痛い程伝わってきます!」

「いや、驚いてはいるけど全く悲しくはありませんよ!」

「でも、今日一日だけ、ストーカー有給を、ください!……!」

「ストーカー有給ってなに!? 給料でるんですか!? 仕事なんですか、ストッキングって!」

「明日には、必ず元の私に戻りますから……!」

「戻ってこなくていいですけど!」

涙ぐむプリンツに私は彼女の身に何かあったのかと本気で心配した。

あのプリンツが、ストーカーを休むなんて。

あの三度の飯よりもストーカーが好物の彼女が。

あの命よりもストーカーが大事な彼女が。

「いや、流石に命と天秤にかけられる程じゃないです!」

「なんでもいいですけど、一体急にどうしたんですか? あなたがス

トーカーを休むだなんて……私、明日隕石が降ってくるのとか嫌ですよ。」

「そんなに信じられませんか!？」

「じゃあ、どうしてそんな風に思い至ったんですか？」

「そ、それは……」

プリンツは口をつぐむ。

彼女がストーリーカーの犯罪性に気が付いて改心したと言う可能性があり得ない以上、これには何か理由がある筈である。

「ご、ごめんなさい、お姉様！　今は言えませんが……」

「逃げた!？」

脱兎のごとく、彼女は私に背を向けて走り去っていく。

低速戦艦の私が高速重巡に追い付ける道理もなく、私はあつという間にプリンツの姿を見失った。

では、私なりに今のプリンツの様子から推理するしかない。

プリンツが私のストーリーキングをやめる理由。彼女の様子からして私には言えないことなのだろう。

しかし、情報が少なすぎる。流星に限界があるか。

そう思った私の脳裏に瞬間、電撃走る。

「そう、こういう時は逆に、発想を逆転させる!」

某推理ゲームで私が学んだ知識とテクニックがここに来て活きた。

「プリンツが何故ストーリーキングをやめたのかではなく、そもそも何故プリンツはストーリーキングをしていたのか、まずはそこから考えましょう」

プリンツがストーリーキングをする理由は知っている。

『お姉様』の動向を常に知らない不安でなんやかんや大変なことになるのだ。だから、傍に居られないときは盗聴器やカメラでストーリーキングしてお姉様の様子を探る。

つまり、プリンツがそれをやめたということとは。

「私が……お姉様で、なくなつた……!？」

おかしい、何気に私がショックを受けているのは何故か。

つまり、私はプリンツのお姉様足り得なくなった。だから、彼女もストーリーキングをする必要がなくなつた。

そうだ。私に言い出せなかつたのもそれなら納得がいく。

そして、さらにそこから導き出される結論は。

「私、嫌われた!?!」

最悪の結論であった。

☆

「お、大和じゃねえか」

「て、天龍……」

私は若干ふらつきながら廊下を歩いて来た天龍とぼったり出会ってしまった。

「どうしたんだよ、元気ねえな?」

「そ、それが、プリンツが……!」

私はたまらず、今あったことを天龍に全て話した。

「あー、成程な。で、ショックだったと」

「私がこの事態にショックを受けているという事実がショックでしたよ……」

慣れとは怖いものである。

私はプリンツにお姉様として慕われたりストーキングされたりするにつれそれに慣れただけでなく愛着まで湧いていたのである。

一か月前の私が今の私を見たら流石に砲塔を向けてくるかもしれない。

「ま、でも、俺にはわかるぜ、プリンツの気持ち」

「……え!?!」

まさかの追い討ち。

「ま、これは仕方ないことなんだよ。俺も同じだしな」

「え、え!?!」

「じゃ、俺はもう行くわ」

「な、ちよつと、今の言葉どういうことですか!?!」

「おい、ついてくるなよ」

私が肩に伸ばした手を振り払われ、天龍は走り去っていった。

低速戦艦の私が高速軽巡に追い付ける道理もなく、私はあつという間に天龍の姿を見失った。

「……………」

私はしばらくその場で手を伸ばした状態で固まっていた。

天龍も同じ気持ち。そして、私を避けるように走り去るあの挙動。

「私、嫌われてる!」

「——あれ、大和じゃない?」

「ああ、本当だ」

「……………」

「瑞鳳と磯風、それに矢矧…………」

最早気力の籠った声は出なかった。

私は首だけをゆつくりと彼女達の方へと動かした。

「大丈夫か? 顔色が悪いように見えるが?」

「本当、なんか元気ないわね? 一体どうした——」

「ちよつと!」

矢矧が瑞鳳と磯風の手を引っ張って何やら耳元で何かを話している。

私は既に嫌な予感がしていた。

「あ、えーと、大和。私と瑞鳳と磯風は急ぎの用があるから、失礼するわね」

「ま、また後でね」

「また、夕食にな」

「……………」

そう言って、足早に彼女達は私の前から去っていった。

低速戦艦の私が高速軽巡と駆逐艦と軽母に追い付ける道理もなく、

以下略。

これは、間違いない。

私は確信した。

「私、皆から嫌われてる!?!」

なんとということだ。たった一カ月で、私はここでの居場所を失ってしまったというのか。

その場でへたれ込む私の肩に誰かの手が乗った。

「そんな所で座ると汚れますよ?」

「…………あー、そうですね。私が床に座ると床が汚れますもんね、本当に

申し訳ありませんでした。土下座ですか？ 土下座でもすれば許してくれますか？」

「なんで、そんな卑屈なんですか!？」

「提督……」

提督は私を立たせると困惑した表情で私を見つめていた。

「一体、どうしたんですか？ 山城だってそこまで卑屈にはなりませんよ」

「提督、私気付いちやっただんです。皆が私を避ける理由」

「あ……気付いてしまいましたか……」

提督はひどく気まずそうな顔を見せた。つまりは知っているのだ、提督も私が皆から嫌われている事実を。提督の反応で、私の確信はより確固たるものとなった。

一体、私は彼女達に何をしてしまったのだろう。この一カ月、皆とは平和に過ごして来たつもりだったのだが。

もしかしてツツコミがきつすぎたからだろうか。

「私、皆の邪魔にならないよう外に出てますね」

私は力なくそう呟くと鎮守府の入り口へと歩いていく。

「そうですね、それがいいかもしれません」

「……………」

提督と共に鎮守府の入り口まで来ると、彼は港の方へ歩いていく私に言った。

「あの、気付いてしまった以上、色々気まずいかもしれませんが夕食の19時には必ず帰ってきてくださいね？ あと、できれば彼女達には気付いていない体で通してください」

「……わかりました」

私はそう言っただけで港までほとんど無気力に空を見ながら歩いて行った。

そして、港につくと何をしてもなく堤防に座り、空と海との交わる地平線が無心に眺め続けた。

「ツツコミ、もっと優しく言えばよかったんでしょうか」

思い当たる節がツツコミしかないのでひたすらこれまでのツツコミ

の反省を続けた。なんだ、この芸人みたいな時間の過ごし方。そして、気がつけばいつの間にか地平線に夕日が沈んでいた。

「……帰りましょうか」

気が重い、19時の夕食には戻ると提督と約束してしまっている。

帰ろう。そして、なんとか皆に私の何が悪かったのかを教えて貰って、直そう。

そして、食堂前。

「……よし、とりあえず土下座。開幕土下座で行く！」

私は謎の決意を固めていた。

「し、失礼します……」

私がゆっくりと扉を開けて中に入るとそこは何故か真つ暗闇であつた。

食堂の電気が消され、窓のカーテンも閉め切られているのだろう。しかし、一体誰が何のためにそんなことを。

私が食堂内の様子に困惑しているその時、突然食堂中の電気がついたかと思うと、いくつもの火薬の爆裂音と共に私に何か降り注いだ。

「きゃっ！」

何かの攻撃かと思ひ、一瞬死すら覚悟した私の身体中にかかっているのは、紙紐や紙吹雪であつた。

「大和、七丈島鎮守府へようこそー！」

訳の分かっていない私に立て続けにそんな声が聞こえてきた。

一人だけではない。天龍と、矢矧と、プリンツと、磯風と、瑞鳳と、提督と、皆の声が聞こえた。

前方を見ると、クラッカーを私に向けた皆の姿があつた。しかも、その後ろには大量の御馳走がテーブル一杯に並べられている。

よく見れば、食堂中が華やかに飾り付けまでされている。まるで何かのパーティーのようだ。

「えっ？ えっ？ これは、一体……？」

冷静になろう。

私は今までの状況をもう一度振り返った。

真つ暗な食堂、急な電気の点灯と同時のクラッカー、そして並べられたごちそうと飾り付け。

これは、間違いない。

「これが噂の……イジメ……!」

「うん、大和、お前ちよつと落ち着け」

「違うんですか!」

「どう見てもちげえだろうが!」

馬鹿な、イジメじゃないだと。

激しく動揺する私に何かが凄い勢いで私の胸元に突っ込んできた。

プリンツだった。

「ぐはあ!」

「お姉様あああああああ! あー、もう! お姉様お姉様お姉様お姉様あああ! 寂しかったです、恋しかったです、愛しかったです、お姉様あああああ!」

おかしい、なんだこれは。

私の頭の中は予想もしていなかった状況とプリンツのタツクルによる意識の混濁により混乱しっぱなしであった。その様子を見かねてか、矢矧がこの場の全員を代表するようにして私に言った。

「見ればわかるでしょ? パーティーよ、あなたの七丈島鎮守府着任祝いの歓迎パーティー」

「え? 私が着任したのって一カ月も前なんですけれど……」

「でも歓迎パーティーできなかったでしょ? その後もずっとごたごたしててできなくてね。ようやく落ち着いて来たからって皆で三日前から密かに準備してたのよ」

歓迎パーティー。しかも私の。

おかしい、私のことを皆は嫌っている筈ではないか。何故そんなことを。

「大和にばれないように準備するの大変だったんだぜ?」

「特に今日は本番だから午前中から皆忙しくてな。大和には秘密だから今日だけは避けなければならぬし大変だった」

「私もお姉様とほとんど一緒に居られなかったせいで何度お姉様不足で倒れかけたことか！」

「ま、こうして大和は驚いてるみたいだし、大成功みたいね。流石、私！」

「え？ ええ？」

私は今日一日のことを初めから思い返した。

つまりは私の歓迎パーティーの準備で皆私から距離を取っていたというだけで、別に私の事を以来な訳じゃない、ということか。そう考えると今までの会話の内容も妙にしっくりくる。いや本当に、そうだろうか。

私は疑心暗鬼であった。

「あの、じゃあ、今日私を皆が避けていたのって別に私のことが嫌いになったからじゃないってことでいいんでしょうか……？」

「はあ？」

全員から何言ってるんのお前と言わんばかりの威圧的な返答が返って来た。

「んな訳ねえだろ、アホか？」

「私が！ 私がお姉様を嫌いになるなんてこの世界が減びようともあり得ませんよ!? おぞましいこと言わないでください、お姉様！」

「我が料理の師を嫌う理由がないな」

「いくら、あなたが犯罪者だったとしても、私はそれだけで偏見なんて持たないわよ。監察艦として、この目であなたを見て、それで好きか、嫌いか、判断するわ。で、答えはこの歓迎パーティーを見れば、わかるわよね？」

「もしかして、それで昼間この世に絶望したような顔してたの、大和？」

「可愛い所もあるのねえ」

皆の言葉を聞いて、私は力が抜けてしまった。

「ここまでの安心感は久々であった。」

「よ、良かったあああああ！」

「ぎ、パーティーを始めるわよ！」

その矢矧の声と共に皆がグラスを持ち上げる。

大和にもプリンツからシャンパンの入ったグラスが手渡された。

「それじゃ、提督。お願いね」

「え、私ですか!? えー、それじゃあ戦艦大和の着任を祝して、乾杯!」
「乾杯!」

そして、パーティーが始まった。

その夜は私の中でも特別なものとなった。プリンツと矢矧で作ったらしい山盛りのごちそうを皆で食べ尽くし、夜遅くまで宴会のように夜更けまで騒ぎ倒した。

私は七丈島鎮守府への認識を更に改めなければならない。

いくら私がこの鎮守府に慣れようとも、簡単に私の順応も予想も突き放し、常に私の斜め上をゆく。

故に、七丈島鎮守府なのだ。

第十五話 「この子は戦闘糧食妖精っていうんだけど」

七丈小島に住まう妖精さんの元へ行くのは私、大和のウィークリー任務となっている。

「――標的補足。全主砲、薙ぎ払え！」

『オツケー、きようはこれにてしゅーりょー！』

標的を全て撃ち抜き、燃料と弾薬の尽きた私はドックへと戻って来た。

ドックに戻ると、データを取っていたらしい学者のような白衣の妖精さんが大勢集まってきた。

「いいねーいいねー、今日もすごくよかったよー」

「いよっ、につぼんいち！」

「きみならもつとうえをめざせる」

「そ、そうですか？　そこまで褒められると照れますね」

「ゆにばーすとか！」

上ってそっちか。宇宙か。やっぱり私を宇宙戦艦にするつもりか。

私は溜息をつきながらいつものように艀装と兵装を外し、妖精さん達に預ける。

すると、いつもとは違い、私に群がる妖精さんの群れの中から突然おにぎりを持った手が伸びてきた。妖精さんには余りに大きすぎるおにぎりは私に向けて差し出されているようだった。

「これ、私にくれるんですか？」

おにぎりを受け取って引き上げてやると、一緒におにぎりを持っていた妖精もぶら下がってついて来た。

「さしいれどーぞです」

給糧艦、間宮に似た格好をした妖精さんは私が足場として差し出した左手の掌に着地すると、そう言った。

「これは、わびわびどーも」

おにぎりを一口頬張ると、口の中に何とも言えぬ加減の塩味とふっくらとしたお米の食感が広がる。

おいしい。あつという間に私の手にあつたおにぎりは私の口の中に消えていった。

「すごくおいしいー！」

「それはよかったです」

私は率直に、ストレートに称賛を伝えたつもりだったが、何故か妖精さんの顔は暗い。いや、妖精さんの表情なんてかなり適当だから勘違いかもしれないが。

「いいんですか？　こんなおいしいおにぎり貰っちゃって」

「べつに、たいりょうにあまつてるのでいくらでもー」

ああ、あからさまに妖精さんの周りに黒いもやが。

妖精さんは感情が表情に出にくいのが、感情によってその身体の周辺に謎の現象が発生する。具体的に言えば、漫画とかで見る『漫符』ができる。

いわゆる、漫画でキャラが怒っている時に頭から出てくるコック帽のようなマークや、がっかりしているときに頭部に引かれている数本の縦線。寝ている時に出る謎のZZZマークなど。

何故かこれらが現実に現れる。妖精さんは本当に謎の多い生き物なのである。

「どうしたんですか？　何でそんなに落ち込んでるんですか？」

「じぶんがしゃかいにもとめられているきがしなないです」

思いの外ナーバスだった。

「そ、そんなことないですよ！　こんなに美味しいおにぎりを作れるんだから！」

「そうおもっていただけですが、わたしにもあつたです」

「ああっ!?　妖精さんの頭部に縦線が！」

元気づけようとしたつもりが益々落ち込ませてしまった。

どうしようかあたふたする私の前に、何人かの妖精さん達と共に見知った顔が現れた。

「あら？　大和じゃない？　ちゃんと来てるのね。感心、感心」

「瑞鳳！　助けて！」

「何、急に!?!」

取り敢えず瑞鳳の提案で私と瑞鳳と妖精さんは小さな一室で落ち着いて話をすることにした。

「それで、一体どうしたっていうのよ」

「この妖精さんなんですけど……」

「いきるって、つかれるです……」

「まずい、さつきよりも悪化している。」

「あー、この子ね」

「何か知ってるんですか、瑞鳳？」

机の上でだらけて転がり回る妖精さんを見て、瑞鳳は苦笑いを浮かべた。

「この子は戦闘糧食妖精っていうんだけど」

「戦闘糧食、妖精？　なんですかその美味しそうな響きは」

「まあ、あなたには朗報かも知れないわね」

瑞鳳曰く。この妖精さんは戦闘糧食妖精といい、戦闘糧食という最近生まれた新アイテムを作った妖精さんだという。

その戦闘糧食とは文字通り戦闘中に食べる事の出来るアイテムで、出撃中に一定の確率で艦娘が戦闘糧食を食べるとその艦娘とその付近にいた艦娘に戦意高揚効果を付与するという。

「へえ、結構便利じゃないですか？」

「まあ、当初は大本営もあなたと同じような意見で取り敢えず全鎮守府と泊地にこれを配布してみたのよ。だけどね——」

『おう、○○鎮守府の』

『よお、×泊地の。士官学校以来じゃねえか』

『あのさ、最近大本営から配られてきた戦闘糧食ってあるだろ？　あれってどうしてるっ…』

『あ……あー、あれな。まあ、いくつかは使ってみたけど……正直あんまし』

『だよなあ、俺も倉庫溜めちゃってさ。もう鎮守府の倉庫一杯だぜ』
『ていうか、聞いてくれよ。俺は響に一個持たせてやったら、出撃中に大破しちやってさ。すぐさま護衛退避させたんだけどさ、帰ってきてみたらあいつ、退避中に食べちゃってよ』

『で、無駄にしちまったと。だけど、なんかそれ可愛いな、おい』

『ああ、なんか想像したら和むよな』

『でも結局のところいまいちだよなあ』

『装備一つ省いてまで持たせるかと言われるとなあ』

『なんだかなあ』

「——って感じよ」

「まるで見て来たかのような生々しきですね」

「まあ、そんな訳で案外持て余してる提督が多いのよ。あ、ちなみにウチには来てないわよ？ 私達出撃しないし」

「え？ じゃあ、この子はどこから来たんですか？」

「この子はどつかの鎮守府からか流れてきたわ」

「流れてきたんですか!？」

流石妖精さんである。

「わたしなんてテレホンカードていどのそんざいです」

「微妙に使えないわね」

「最近は公衆電話なんてほとんど見なくなりましたからねえ」

ますます戦闘糧食妖精さんは元気がなくなつて無気力になつていく。

「わたし、いらぬ子です？」

「そ、そんなことないですよ！ いつか皆が戦闘糧食妖精さんの有用性に気付く日がきつと来ます！」

「いつか？ きつと？ いつかっていつです？ きつとつてどれくらいのパーセンテージです？ ぐたいてきなすうじもとむです」

「励ましがいないんですど！」

人が励ましているのにこの態度である。流石は妖精さんである。

「はあ、しようがないわね。だったら、皆があなたを必要とするように変わればいいんじゃない？」

「チェンジです？ いえす、ういー、きやん、です？」

「May beね」

「ゆめもきぼうもみえぬです」

「夢も希望も見るものじゃなくて掴むものよ。ほら、早速案を考える

わ。大和、あなたも責任もって考えて貰うからね」

「まあ、戦闘糧食妖精さんのためですし、出来る限りは協力しましょう」

こうして、私達の『戦闘糧食改計画会議』が始まった。

数分後、私達は各々の考えをフリップに書きだす。妖精さんにも小さなフリップを渡しておいた。

「全員書けた?」

何故か、議長は瑞鳳になっている。何やかんや言ってこの会議に一番積極的に参加しているのではないだろうか。男たらしのどうしようもない彼女だが、妖精さん達からの懐かれ具合も見ると案外面倒見はいいのかもしれない。

「はい、大丈夫です」

「できたー」

「それじゃあ、大和から見えていきましようか」

「はい! 結構自信ありますよ?」

私はフリップを裏返して二人に見せた。

『戦闘糧食 (おおか)』

「……………」

「……………」

「いや、なんか言ってくさいよ」

「よくもそんな平凡の極みのような意見をドヤ顔で出せたわね、この能無し」

「罵倒は期待してなかったんですけれど!」

「まったく、これだからトーシロはいやになるです」

「二人して全否定ですか!?!」

なんとということだ。自信のあった意見がこうも真っ向から叩き折られるとは。

いや、もしかしたら説明が足りてなかったのかもしれない。

「これは、つまり戦闘糧食に具を入れてみようというアイデアで——」

「そんなの見ればわかるわよ! このすつとこどつこい!」

「すつとごどつこい!？」

その言葉使う人初めて見た。

「ええ!? だって戦闘糧食に具が入ってれば好きな物選べて楽しくないですか!？」

「そんなの気にするのあなたとどつかの正規空母くらいよ! この愚か者!」

「愚か者!？」

そんな古風な言い回しで罵倒されるのも初めてだ。

「えー、でも取り敢えずこの案もう少し掘り下げましょうよ。きつとプラスにはなりますよ」

「……まあ、こういう平凡な意見も平凡な奴らには受けるかもしれないし、一応もう少し考えてみる?」

「いいよー」

「なんか腹立つ言い方ですけど、まあ、今はいいでしょう。じゃあ、具を入れるとして妖精さんどんな具入れたいですか?」

「えー、べつにこれとってとくには」

とことん非協力的である。流石は妖精さんである。

「そう言わずに何かありませんか? 妖精さんの好きな物とか!」

「じゃーねー、おむらいす」

「ごめんなさい、それ既に米入ってます。米の中にさらに米入れる感じになってます」

「じゃあ、ちゃーはん」

「より、米オンリーになってるじゃないですか!? 考える気ないですよね!？」

「まあまあ、オムライスもチャーハンもそれ自体をおにぎりにすればいい話だし、悪くはないかもしれないわ」

「ああ、成程、その手がありましたね」

確かにオムおにぎりやチャーハンおにぎりは現実商品として出ているものだ。確かに具を入れるよりもそっちの方が見た目も変わってより面白いかもしれない。

意外とこれは艦娘に好評になるんじゃないか。

「ほら、結構私の意見良くないですか？ これなら艦娘達にもきつと好評ですよ！」

「何言ってるの？ 考えが甘いわよ、この……えーと……馬鹿チンがあー！」

「既に罵倒のボキャブラリー尽きかけてるじゃないですか。金●先生みたいになってますよ」

瑞鳳は一度咳払いをすると、フリップを裏返す前にホワイトボードに何かを書き始めた。

「どうやら提督と艦娘と戦闘糧食のイラストのようである。」

そして、最後に戦闘糧食の絵の下に『戦闘糧食（おかか）』と書く。確かに、大和の意見を掘り下げていけば戦闘糧食が魅力的に変わって艦娘達は惹かれるかもしれないわ。そりゃ、実際戦闘糧食を食べるのは彼女達なんだからそれが美味しそうなら艦娘の支持は増すかもしれない」

そう言って、艦娘の絵から戦闘糧食（おかか）に矢印を引いて、その上にハートマークを描く。

「しかし！ それはあくまで艦娘だけの支持。大和の意見では肝心の提督の興味は惹けないのよ！」

そう言って、提督と戦闘糧食の間に矢印を引いて、今度は滅茶苦茶にバツマークで矢印を塗りつぶしていく。

そこまでやると、提督が戦闘糧食に興味ないどころか大嫌いみたいに見える。

「結局、どの装備を使うか決めるのは提督！ 艦娘に装備を与えるのも提督！ 提督にこの戦闘糧食を使いたいって思わせられなきや意味がないのよ！」

「た、確かにそれはそうですけれど……」

「戦闘糧食（おかか）って見て提督はこのアイテムを装備スロット一つ埋めてでも使いたいって思う？ 思わないわよね？」

確かに別に提督自身が戦闘糧食を食べる訳ではないから、具のバリエーションがいくら増えた所で提督の興味は惹けないかもしれない。「だから、私は考えたわ！ 提督が思わずこれは使えるって思えるよ

うな、そんな戦闘糧食を！」

「おおー」

流石の妖精さんも瑞鳳の煽り文句には興味を示したらしく、期待に満ちた表情で瑞鳳を見ている。

「まさに、劇的ビフォーアフターと言えるわ！」

「随分とハードルを上げますね」

「あなたみたいな凡夫な意見とは格が違うのよ、格が」

「そこまで言うなら見せてください！ その提督が思わず使いたくなる戦闘糧食を！」

「わくてか」

「これが！ 革新的な戦闘糧食よ！」

瑞鳳は勢いよくフリップを裏返した。

『戦闘糧食（友永隊）』

「なんとということでしょうツ!?!」

叫ばずにはいられなかった。

「これぞ、ネームド戦闘糧食ツ！」

「いや、おにぎりの中になんてもん入れようとしてるんですか!?!」

「でも、なんか強そうじゃない?」

「強そうですけど!」

すると、瑞鳳が何か思いついたかのようなもう一度フリップを取って何か書き直している。

「今はこっちの方が旬かな?」

『戦闘糧食一二型（村田隊）』

「いや、そういう問題じゃないです！ 一二型ってなんですか!?!」

「九七式戦闘糧食（村田隊）を米種変更することでゲットできるわ」

「米種変更!?!」

「米種変更するとスーパード安売りしてる三等米から一等米のコシヒカリに変わるのよ」

「なんか、ここまで聞くと段々良い案に聞こえてくるネームド戦闘糧食。」

「でも、結局これ兵装じゃないですし、村田隊がおにぎりの中に入って

ても別に何かが変化する訳じゃないじゃないですか」

「何言ってるの？ 村田隊長を舐めて貰っては困るわ！ なんといつでも雷撃の神様なのよ！ 雷装値＋15なのよ！」

「……………え!? いやだから、なんなんですか!？」

一瞬勢いで何か納得しかけてしまった。

駄目だ。この軽空母、艦載機に憑りつかれて理論破綻してきている。一体何なのだ、その村田隊長への絶対的な信頼は。

「ねー、そろそろわたしのアイデアいい？」

「ん、そういえば確かに妖精さんの意見は聞いてなかったわね」

「そうですね。やっぱりこの戦闘糧食について一番よく知っている妖精さんの意見は大事です」

「わたしはこうしたいっていう、ゆめときぼうをかいたです」

そう言って妖精さんはフリップを私達に向けて裏返した。

『ピフテキたべたい』

「戦闘糧食全く関係ないじゃないですか！」

妖精さん個人の夢と希望だった。

非常にどうでもよかった。

「あ、もひとつおもいついたです」

『戦闘糧食（笑）』

「いや、大喜利やってるんじゃないですよ！」

「まあ、妖精さんにろくな意見を期待した私達が間違ってたわね」

結局、日が暮れるまで議論し尽くしたが、その後もろくな意見が出る事はなかった。

「もう、駄目だわ。何も思いつかない」

「どうするんですか？ 結局何一つ決まってもせんけど……」

「やっぱり、わたしいらない子です？」

戦闘糧食妖精さんは涙ぐんでいる。

可哀想に。でも、泣くほど嫌ならもう少し真面目に意見を出して欲しかったと切に思う。

「みんなにおにぎりたくさんたべてもらいたかったです……」

「……………ん？」

その時、私に電撃走る。

「あの、皆におにぎりを振る舞いたいですよね？」

「そうですが、なにかみょうあんうかびましたです？」

「それならいい方法があります」

「何よ？」

「とりあえず、そろそろ船頭さんが迎えに来ますし帰りましょうか。
戦闘糧食妖精さんも一緒に、ね」

☆

「ういーっす！ 腹減ったー！ つつてもまだ晩飯には早えーか！」

「おなかすいてるなら、このおにぎりたべるです？」

「うおっ!? 妖精さん!? 久々に見たぜ、妖精さんなんて……」

「どうぞです」

「お、いいのか？ 悪いな！ おお、うめー！ こんな旨い握り飯食ったことないぜ！」

食堂で天龍が戦闘糧食妖精からおにぎりを受け取っているのを影から見て、私と瑞鳳は小さくハイタッチを交わしていた。

私達はそもそも所を見誤っていたのだ。

戦闘糧食妖精さんは別に戦闘糧食が役に立たないと思われていることを悲しんでいた訳ではない。

ただ単純に自分の作った戦闘糧食を食べて貰えない事が悲しかっただけなのだ。

私達はいそこの所を勘違いして戦闘糧食の有用性を追求していたが、それは必要ない。こうして戦闘糧食を振る舞える場を用意することこそ妖精さんの望みだったのである。

「なんとか大丈夫そうね」

「ええ、これからも間食、軽食担当で七丈島鎮守府に末永く居座って貰いましょう」

朝昼夜の三食だけでは時には足りない時がある。

夜中にお腹が空くことだってあるし、中途半端な時間に小腹が空く事だってある。しかし、この鎮守府の食事は決められた時間での当番制でそれ以外は自分で何かを作らなければならない。

私は前々からこの現状に良い解決策がないか探していたのだ。そして、今日、戦闘糧食妖精さんと出会い、ピンと来た。

これは、使える、と。

「どうですか？ いい所でしょ？ ここでしばらくおにぎりを存分に振る舞うと良いですよ」

「ありがとうございます！」

おお、妖精さんの身体が輝いている。

「でも、いいの？ 向こうの七丈小島には仲間がたくさんいるけれど、ここには妖精さんはいないわよ？」

「もんだいなんです。きつとそんなさびしさ、すぐふきとぶです」

戦闘糧食妖精さんは満面の笑みを見せて言った。

「せんきやくばんらい、ですからー！」

こうして、新たに間食当番として戦闘糧食妖精さんは七丈島鎮守府に住み着いたのであった。

第十六話 「今日は、秋祭りの日ですよ！」

「さて、急に集まって貰って申し訳ありません、皆さん」

もう、世間一般的には夏も終わり本格的な秋を迎えたという時期——常春の島、七丈島に居る限りではそんな季節の変化などわからないが——そんなある日の夕方に私、大和を含めた七丈島艦隊の艦娘達は全員提督から執務室へと呼び出された。

「で、急に呼び出してなんの用ですか、提督？ 今日中に署名を頂きたい書類はもうできたんですか？」

「珍しいよな、提督から全員を呼び出すなんて」

「提督の執務室。久々に入ったが、相変わらず散らかっているな」

「面倒な用じやなきやいいわね」

「私も早くお姉様とキャツキャウフフを再開したいんですけど！」

「今まであなたとキャツキャウフフしてた覚えは一切ないんですけど！ど！」

私を含め、皆それぞれ勝手な事を言っている。

提督はそんな私達を見て笑うと、机から人数分の封筒を取り出して全員に渡す。

「提督？ これはなんですか？」

「開けて見ればわかりますよ」

「ん？ おお!? こいつは！」

「お金、だな」

磯風の言った通り、封筒の中には数枚のお札と小銭が入っていた。

天龍を除き、皆突然の金銭支給に疑問の表情である。

天龍は目を輝かせて封筒の中にくら入っているのか数えている。何故急に提督からお金を渡されたのか疑問にすら思わなければ怪しんでもいない。

馬鹿は単純なのである。

「ふふ、今日は何の日か知っていますか？ 皆さん？」

「今日？ 何かありましたっけ？」

提督の問いかけに誰も具体的な答えは浮かんでいないようであった。

「今日は、秋祭りの日ですよ！」

「秋祭り？」

「ああ、そういえばもうそんな時期か」

「忘れてたわ」

私を除き、他の皆は納得したような表情を見せる。

「ああ、大和は今年着任したばかりで知りませんよね」

提督の説明曰く、秋祭りとは年に一度、町から神社にかけて秋口に開かれるお祭りらしい。

毎年島民達が出店をだしたり、神輿を担いだり、花火も上がったりと夏祭りにも負けず劣らず賑わうのだと言う。

「へー、そんなのがあつたんですか」

「今日はその秋祭なので、皆で行きましょう、という訳です。今渡したお金はお祭りの軍資金です」

成程、突然何も言わずにお金を渡されるから一体何かと思えばそういうことか。

しかし、お祭りというのも久々だ。

艦娘になってからはずっと、陸ではなく海ばかりを見ていたから。

一応、私の尊厳を守るために言っておくが、これは全ての艦娘に共通することであり、お祭りに行く友達がいなかったとかそういう訳じゃない。決してない。

「これ、結構入っているように見えるんですけど、提督、一体いくらお入れに？」

「一万円です」

「はあ!? 大盤振る舞い過ぎるでしょ!?!」

その提督の言葉に矢矧が悲鳴を上げた。

「あ、大丈夫ですよ。縁日で使いやすいように五千円札1枚、千円札3枚、五百円玉2枚、百円玉10枚に崩してありますから。縁日ってお札だけだと面倒ですもんねえ」

「そういうことじゃないわよ! ただでさえ、天龍の壊した壁の修繕

費やらで切り詰めているっていうのに！ この半分で良かったでしょう!？」

「ああ、あの時のがまだ……」

矢矧の胃痛がマツハである。詳しくは第四話参照である。

「まあ、大丈夫ですよ。どうせ、今月はもう今日以外に出費もないですし、天龍がバイトで着々と弁償代を払ってくれているのでなんとかあります」

「だから……！ それで資金運用について上から小言を言われるのは提督でしょう……」

「まあ、いいじゃないですか。こんな大きなイベントがあるんだから是非楽しまないと。それに、島民との交友を深めるのはあなた達の義務でもあります。私はその義務を果たすために必要な資金を配給しているに過ぎませんよ。要は必要経費です」

笑顔でそう淡々と言い切った提督にもう矢矧は何も言うまいと手を上げた。

「わかったわ。そこまで言うのなら、経費、ありがたく頂戴します」

「悪いな、提督」

「余ったら、お小遣いとして自由に使って構いませんからね」

「ありがとう、提督。大事に使うよ」

「お祭りねえ。まあ、誰か声かければ奢ってくれるでしょうし、私は全部懐に入れちゃお」

「やったー！ お姉様、一緒にお祭り回ろー！」

「お祭り、ですか……！」

なんだろう、この胸の高揚感は。

私が最後にお祭りに行ったのは、十年以上遡りまだ八歳の頃である。最早懐かしいというかそもそもお祭りってなんだっけ状態である。

「じゃあ、もう始まっているでしょうし、早速行きましようか！」

こうして七丈島艦隊は提督の指揮の元、七丈島秋祭りに向けて出撃した。

☆

「——さて、それで町に着いた訳ですが
人、人、人。」

町の中に溢れかえらんとする人だかりに私達は早くも圧倒されて
いた。

ちなみにまだ私達が立っているのは入り口である。出店が少し遠
くに見える程度である。

「うわー、すっごい人だかりだあ」

「これは、ゆつくりと出店を回るのは難しそうだな」

「まあ、お祭りだしね。予想はしてたわ」

皆も同様に人の海原に驚嘆の声を上げる。

しかし、本当に凄い人ごみだ。

見る、人がゴミのよ——

「ハッハッハ！ 見ろ！ 人がゴミのようだ！」

「天龍、うるさいぞ」

うわ、被った。

「最高のショーだとは思わんかね!？」

「なんなの、さつきから？ あんまり周りの迷惑になるようならスタ
ンリングでシメるわよ？」

やめて、天龍。私、恥ずかしい。

矢矧もあきれたようにスタンリングを向けているではないか。

「バルス！」

「ぎゃあああああああ！」

と思つたらこの矢矧、意外とノリノリである。

「全く、この馬鹿は一体何に影響されたのかしら？」

「いや、矢矧わかってますよね？ はつきりバルスっていいましたよ
ね？ 金曜ロードSHOWで確実にラピ●タ見てたクチですよね？」

「ラピ●タ？ 何を訳の分からない事を言っているのかしら？ 空中
戦艦に改造されたいの？」

「私をゴリアテにする気ですか!？」

ただでさえ、宇宙戦艦改装計画が着々と進んでいるというのにまた
新たな火種が。

「私あれ結構好きなのよね」

「いや、知りませんけど!」

最早ラピ●タ好きを隠す気が感じられなかった。

「ら、ラピ●タは滅びぬ……何度でも蘇るさ……!」

「天龍はもう大人しくバルスされててください」

☆

「ところで、二つ程疑問があります」

「今度は何よ、大和?」

以前、私達は人ごみのせいで入り口にて立ち往生している。

数分前までは提督が祭り会場では特にはぐれやすいので迷子にならないよう注意するようにとか注意をしていた。

しかし——。

「まず、提督が早速いなくなっているんですけれど……」

ついでに瑞鳳もいない。

何故迷子にならぬよう散々注意喚起を促していた当の本人が入り口で既に姿をくらましてしまっているのか。

「ああ、提督ならさつき役場のおじさん達に連れていかれたぞ」

「そう、じゃあきつともう飲まされてるし今日、明日は帰ってこないわね。ま、別に二、三日返ってこなくても問題ないし大丈夫よ」

「問題ないんですか!」

提督がいなくても問題のない鎮守府とは一体なんなのか。

でも実際いなくてもなんとかかなりそうだから何も言えない。

「瑞鳳の方は、なんかさつき優男が迎えに来てたぜ?」

「またですか」

瑞鳳の方は予想がついていたので特に心配はない。むしろ妬ましい。

そして、羨ましい。

「で、もう一つの疑問は?」

「あ、別に二つ目は大したことないんですけれど」

私は横目に映る大勢の島民の浴衣を見ながら言う。

「私達って浴衣ないんですか?」

瞬間、その場の空気が凍った。

そして、天龍が歩み寄って来ると私の肩に手を乗せる。

「俺達は、秋グラ実装なかったからな」

「秋グラって何の話ですか!？」

「まあ、磯風あたりはまだワンチャンあるし、俺も夏は水着着れたからいいんだ。でも大和、お前は——」

「それ以上はやめてください!」

何を言っているのかよくわからないが、これ以上天龍に喋らせてはいけないと直感した。

「大和、私も居るから」

「ちよ、何の同情ですか! その目やめてください、矢矧!」

まるで雨の日に野ざらしにされて捨てられている犬を見つめるような哀愁と同情の入り混じった目をしていた。

☆

「じゃ、俺は用事あるからここで別行動させてもらうぜ?」

「用事?」

そう言って天龍は私達を置いて一人お祭りの人だけに駆けていき、すぐに人ごみの中に消えていった。

「じゃあ、こんな所いつまで居ても仕方ないし、私達もそろそろ行くわよ」

「おー!」

「おー!」

プリンツと磯風は既にお祭りに興奮気味である。

「去年は秋祭り、行かなかったんですか?」

「まあ、行きたい人は行く、みたいな感じだったわ。今年からよ、提督が皆で秋祭りに行こうだなんて言い出したの」

「私は今まで行ったことないから日本のお祭り今日が初めて!」

「私も日夜料理に没頭していて思えばこんなお祭り行ったことなかったな」

まあ、そんなものなのだろうか。

よく考えればプリンツは元々日本の生まれではないし、磯風は私達

と違って幼い頃から既に艦娘として戦ってきているのだからそういうものかもしれない。

「だから、今日はお姉様がエスコートしてくださいね！」

「わ、私もそんなに経験がある訳では……」

「え……お姉様、突然経験人数の話なんて大胆なカミングアウトですね！ ビックリしちゃいました！」

「今の会話の流れからそういう意味に取れるプリンツの思考回路に私はビックリでしたよ」

「大丈夫！ 私はむしろそっちの方がありがたいですから！」

「いや、大丈夫じゃないですから。アウトですから。私はまっぴら御免ですから」

なんだろう、プリンツと話しているとお姉様凄い疲れる。

「頼むぞ、大和！」

「磯風まで……」

「だって矢矧がお祭り経験豊富そうに見えるか？」

磯風が横目で矢矧の方を見ながら私に囁く。

確かに矢矧の真面目な性格を考えると、こういうお祭りは肌に合わなそうだ。つまりは消去法でいって私しかない訳だ。

「うーん、まあ、余り期待しないでくださいよ？ 私だって数回行ったことがあるだけなんですから」

「ありがとうございます！」

「人だかりも大分落ち着いて来たみたいだし、皆そろそろ行くわよ」

「はい！」

「あ、くれぐれも縁日でお金を使い過ぎないように！ 夕食は各自屋台で済ましてくれて構わないけれど、ちゃんと食べられる範囲内で買うこと。あと、ごみのポイ捨てだけは——」

お母さんか。

この後、三分に渡り、矢矧から注意事項を伝えられた後、いよいよ私達は提灯に照らされた縁日会場へと人の波に飲まれつつも歩を進めるのであった。

☆

「——うわ〜！ 色んなお店がいっぱいです！ お姉様！」

「プリンツ、はしやぎすぎですって」

「大和、あれはなんだ！ あの雲みたいなやつ！」

「あれは、わたあめですね。お祭りの定番のお菓子で、甘くて美味しいんですよ」

「へえ〜！ ワタ・アメかあ！ すごい！ ふわふわしてるー！」

「二人共わたあめすら知らないんですね」

私は屋台の方々で目を輝かせる二人を見つめて苦笑いを浮かべた。

二人共まるで子供だ。いや、片方は年相応だが。

「おじさん、このわたあめ一つください」

「あいよ、五百円な！」

興味津々でわたあめを見つめる二人の間から私は五百円玉を屋台のおじさんに渡し、大きなわたあめを持って二人に差し出した。

「大きいので皆で食べましょう」

「いいのか、大和？ 私はお金払ってないのに」

「大丈夫です！ どうせ私はお金余しても使わないので！」

そう言つて、棒に巻き付けられたわたあめを磯風とプリンツに近づける。

「あ、ありがとう。では、いただきますか」

「Danke！ お姉様！」

二人は私の持つわたあめにかぶりつく。

「——っ！ これは、おいしい！ 口の中で溶けて、甘い！」

「こんなの初めて食べたよお！」

二人共初めて食べたわたあめに驚きを隠せないようである。

「矢矧も一口どうですか？」

「ん、それじゃあ、お言葉に甘えて」

一歩引いた所でこちらを見ていた矢矧にもわたあめを差し出すと、矢矧は髪をわたあめが付かないよう耳にかけながらわたあめに口を寄せる。

その仕草に何か妙な色気を感じるのは私だけだろうか。

「久しぶりにこういうのを食べたけど、結構おいしいわね」

「色んな屋台がありますし、一通り回ってみましょうよ！」

そうして、私達は縁日制覇を目指して人ごみの中を駆けまわった。

「——お、たこ焼きと焼きそば。あれは私達も知っているな」

「でもなんかいつもよりも美味しい！」

「お祭りで食べるものって何故か美味しいんですよえ」

次に見えたのは焼きトウモロコシ。

「ただトウモロコシを焼いただけなのにここまで美味しいとは！」

「焦げの苦みとトウモロコシの甘味が見事にマッチしてるよお」

次はイカ焼き。

「む、むぐ……！ 噛み切れない……！」

「あははは！ 磯風変な顔〜！」

「あるあるですね」

「和むわね」

次はリンゴ飴。

「すごい！ 中にリンゴが入ってる！」

「シャクシャクしたリンゴの食感がたまらないな！」

「芯の方まで食べるとお腹壊しちゃいますから気を付けてください
ねえ」

「種はそこら辺に吐き捨てちゃ駄目よ？」

チョコバナナ。

「……お姉様、これってなんかいやら——」

「それ以上はいけません」

「ん？ どうした、プリンツ？ 真剣な顔でチョコバナナを見て？」

「磯風は知らなくていいことよ」

「ん？」

そして、なんとカレー。

「あ、ビッグスプーンの」

「あら？ 大和ちゃんと、他の子も一緒なのね？ 大食いはやってないからね！」

「知ってますってば！」

相変わらず警戒されているようだ。

「ビッグスプーン、秋祭り限定メニュー『もみじカレー』、食べてく?」

「是非いただきます! あ、超弩級盛りで!」

「やってないわよ! どれだけえええええ!」

「大和はまだ食べられるのか……私はもうお腹一杯だ」

「いっぱい食べるお姉様が好き!」

その後、紅葉型にカットされた人参やコロツケが乗せられたもみじカレーを完食し、私達は全種類の屋台料理を制覇するに至った。

「さて、これで大方の屋台料理は堪能したわけですが」

「じゃあ、次は遊び系の屋台を回しましょう!」

「縁日と言えば射的、ヨーヨー釣り、輪投げとか色々ありますねえ」

さらっと辺りを見回しても、十以上はあるだろう。

どこから行こうか考えあぐねていると、プリンツが私の腕を引っ張って一つの屋台の看板を指さしている。

「お姉様! 私あれやりたい!」

看板には『金魚すくい』と書いてあった。

「ああ、あれもお祭りの定番ですね。やってみましょうか!」

「金魚すくい……? いったい何をやるものなんだ?」

「水槽を泳ぐ金魚をポイっていうプラスチックの輪に紙の貼られたもので掬い取るゲームです。掬った金魚は持って帰ってもいいんですよ」

「面白そう!」

早速、皆でその金魚すくいの店の前まで来てみると、水槽にはたくさん金魚が泳ぎまわっていた。

「うわあ! すっごいたくさんいる!」

「まあ、ものは試しに一度やってみましょうか。すみません、金魚すくいやりたいんですけれど」

「おう、いらっしやい!」

「……………何やってんですか、天龍?」

屋台に何故か天龍が居た。▪

矢矧も怪訝な顔をしている。

「いや、俺も屋台開いてんだよ。ちゃんと許可はとってるぜ?」

「用事ってこのことですか」

「この店天龍がやってるの!? すごい!」

「やめろよ、照れるぜ」

「成程、普段のバイト以外にもこうして弁償代を稼いでいる訳ね」

「まあ、そういうこつた。ま、お前らも一回やっていけよ。ほれ、ポイ
一つ二百円」

天龍がポイを差し出してくる。

「なんか、身内の店で遊ぶって興ざめなんですけれど……しかも私達
から取ったお金って弁償代に回されるんですよね?」

「んだよ、不満か?」

「なんか釈然としないです!」

「私は見てるだけでいいわ。天龍の弁償を助ける義理なんてないし」

矢矧の声と視線が冷たい。

「ちっ、まあ、別にいいぜ。磯風とプリンツはやってみてえだろ?」

「うん! やってみたい!」

「私も、興味があるな」

「うっし、金魚すくい初めてだろうし二人には特別に分厚いポイを使
わせてやろう」

「やったー! ありがとう、天龍!」

そう言つて差し出したポイは普段金魚すくいで見るポイよりも確
かに分厚い。

「大和はどうする? やってくか?」

「じゃあ、折角ですし私も一回やってみましょうか」

「毎度ありい!」

天龍にそれぞれ二百円ずつを手渡し、それぞれポイを渡される。

「さて、ポイで金魚を掬ったらこの水の入った器に入れりゃいい。た
だし、ウチの金魚すくいは他の所とは一味違うぜ?」

「そうなんですか?」

「ああ、他の所にはねえスリル感満点の金魚すくいだぜ」

金魚すくいに果たしてスリル感が必要なのかどうかはさておき、天
龍の自信満々の笑みを見る限り、中々期待できそうだ。

期待できそうなんだが。

(なんでどことなく不安になってくるんでしようか……?)

「おし、じゃあ金魚すくいスタートだ!」

その声と共に天龍が何かのスイッチを押す。

同時に水槽の側面に沿わせるように敷いてある鉄管が一瞬、赤く
なったように見えた。

「あの、この水槽ってもしかして……ウォーターバスじゃないですか
?」

「おう、よく気が付いたな」

ウォーターバス。加熱器具の一種で水槽に満たした水を加熱する
ことでその中で間接的に物体を加熱する器具。要は湯浴である。

そして、その中に金魚を入れてそのスイッチを入れたという事は、
つまり、このままでは水温が上昇し、いずれ金魚達が茹で上がる。

「さあ、お前ら……救え……!」

「いや、すくうってそういう意味!」

金魚掬いならぬ、金魚救いが開始されてしまった。

というか、古典的すぎるだろ、このネタ。

続く。

第十七話「うわあああああ！ 目があああ！ 目があああああああッ！」

「——ああ！ やぶれちゃった！」

「く！ すまない、私も駄目だ」

金魚すくい改め、金魚救いがスタートして一分程度でプリンツと磯風は早くもポイが破れてしまっていた。

二人共ポイの紙が比較的厚かったためなんとか一匹ずつ掬っているが、金魚はまだうようよいいる。

このままでは残された数十匹の金魚が茹で上がってしまう。

ここは私がなんとかしなければなるまい。

金魚すくい最高記録、五匹の私が。

「あ」

「あー、破れちゃったな。残念」

しまった、一匹もすくえなかった。

「ど、どうしよう、お姉様！ このままじゃ金魚死んじゃうよ！」

「大丈夫だ、ほれまたポイを買えばいいだろ？」

天龍が新しいポイを三つ差し出してニヤニヤ笑っている。

「うう、提督からのお小遣い残り少ないのに！」

「金魚達が茹で上がっていないのか？」

「むう~~~~~！」

なんといやらしい商売だろうか。私は激怒した。

目の前の天龍とかいう眼帯は人の罪悪感につけ込んで大量のポイを買わせようと言う魂胆なのだ。全くもって艦娘の風上にも置けない奴である。

やはり、さつきもつと入念にバルスしておくべきであったのだ。

「さあ、どうする？ このまま金魚が茹で上がるのを見守るか？」

「くっ！ 金魚すくいがまさかこんなにハードなものだったなんて

……！ 勉強不足だった！」

「日本人は毎年こんな苦難を乗り越えてるんだね……！」

「いや、こんな悪意まみれの金魚すくい私も見たことないですから！」
磯風とプリンツに間違ったお祭りのイメージが植え付けられていく。

「そうだぜ？ お前ら覚えときな、お祭りつてのは遊びじゃねえ、戦いだよ」

「違いますよ!?!」

天龍が何か語り始めた。

「祭りの時だけやたら高く売られるわたあめや焼きそばを見て初めて子供は金にがめつい汚い大人達の姿を目の当たりにするんだよ」

「生々しいこというのやめてもらえます!?!」

「金魚すくいや射的でも金魚と景品取れるまで粘ったはいいものの、後々になって良く考えたらそれ程欲しかった訳でもねえってなった経験が誰にでもある筈だ。そこで気付くんだよ。全ては屋台のおじさんの巧妙な罠だということに。祭りを楽しんでいたのは自分ではなく、屋台のおじさん達だったことに！ しかし、全ては後の祭り。そして、その辛酸に顔をしかめながら、子供達は一步大人の階段を上るんだ。なあ、大和？」

「いや、知りませんけど!?! その私が当然経験しているかのような同意の求め方とドヤ顔やめてくれます!?!」

お祭りにそんな陰惨な思い出などないし、そもそもお祭りで大人の階段は上らない。

ただ、確かに金魚すくいですくった金魚は正直いらぬ。

「夏休みやシルバーウィークの後に会うクラスメイトの中で急に大人っぽくなってる奴がいることあるだろ？ あれは祭りで階段上ってきた証拠さ」

「あれは、そういうことだったのか……!?!」

「磯風!?! 何か覚えがあるんですか!?!」

「私も漫画で見たよ……お祭りの夜を二人きりで過ごしたカップルがそのまま帰って来ないと思ったら翌日会うとどこか大人っぽくなっ

てるっていうアレだね！」

「プリンツ、それ別の大人の階段です」

いけない。二人共すっかり天龍の話信じ切ってしまったている。

二人共天龍をまるで先生か何かのように見つめている。

それは教師ではあっても反面教師なのだ。したがってそんな尊敬の籠った眼差しはいけない。

「でも、それじゃあ、私達はお祭りの罫に嵌っちゃったってことだよね!? どうすればいいの、天龍！」

「ふ、他の奴らならいざ知らず、お前達に対して俺が汚い大人なんて演じてやれるかよ。安心しろ、突破口は用意してある。金魚を百パーセント救う方法を教えてやるぜ」

「天龍！」

そう言うのと、天龍は懐からプラスチックの容器を取り出して見せた。

「この、絶対破れない十萬円のプラスチックポイを今なら一つ、たったの一萬円で貸し出してやるぜ」

「これ以上なく汚い大人演じ切っちゃってますけど!？」

「やった！ 十萬円のポイがたった一萬円だって！」

「それなら私達の持ち分でも十分だ！」

「正気ですか!？」

既に二人共洗脳済みであった。

「お姉様、邪魔しないで！」

「金魚のためなんだ！ 一刻を争うんだ！」

「二人共、落ち着いてください！」

財布から一萬円を取り出そうとする二人を必死に取り押さえる。

しかし、如何せん力が強く、このままではいざれ押し切られかねない。その様子を見て呆れた様子の矢矧が歩み寄って来た。

「——全く、もう見ていられないわね」

「矢矧！ 悠長にしてないで助けてください！」

「おう、お前もやるか？」

「ええ、そうね。やろうかしら」

「毎度あり！ 二百円だぜ！」

「は？ 何言ってるのかしら？ 言ったでしよ、あんたの汚い弁償代稼ぎに力添えする気なんて私にはないわ」

「お前こそ何言ってるんだ？ ポイもなしにどうやって金魚をすくうんだ？」

矢矧は不敵な笑みを浮かべると、私の手に握られたままであった半分紙が破れたポイをひったくって言った。

「私は、これで十分よ」

「おいおい、本気かよ？ そんな半分紙の破れたポイでまともに金魚がすくえるわけねえだろ」

「見てれば分かるわ。ついでに大和達も金魚すくいのやり方を教えてあげるから見てなさい」

「は、はい」

いつの間にか磯風とプリンツも正気を取り戻していた。

そして、半分破れたポイを片手に、矢矧の金魚すくいが始まった。

「いい？ まず、金魚すくいをやる時はポイを全て水の中につけてしまおうの」

「え？ それじゃあ、余計破れやすくなっちゃうんじや？」

「むしろ中途半端に水につけると、乾いた繊維と水を吸って膨張した繊維の境界が脆くなるわ」

「へえ、なるほど」

「そして、水に出し入れるときは斜めに傾けて入れると水の抵抗での紙へのダメージを軽減できるわ」

そう言つて矢矧は水槽の角付近にポイを差し入れる。

ここで私は一つ気が付いた。

「そっか、角にいる金魚を狙えば逃げ道もなくてすくいやすいんですね！」

「そうよ。そしてゆっくりと追い込んでやって、金魚の頭がポイよりも少し手前に来たところでゆっくりと斜めに引き抜きながらポイに乗せてやる」

すると、半分しかない紙面に金魚が三匹も乗っていた。

それを素早く器に入れ、さらにももの数秒で今度は四匹の金魚をすくって見せる。

その矢矧の鮮やかな手際に私達三人から歓声上がり、天龍の笑みが消えた。

「この水槽、金魚何匹いるの?」

「ご、五十匹だ」

「そう、じゃあ、あと四十一匹。これならなんとかかなりそうね」

その後、矢矧は顔色一つ変えず、まるで作業でもするかのように淡々と金魚をすくっていき、みるみるうちに残った金魚は数えられるほどになった。

いつの間にか後ろにギャラリも増え、矢矧がポイを動かすたびに後ろから感嘆の聲が上がる。

「これで、残り一匹!」

残り二匹の内の一匹を掬い上げた瞬間、ここで異変が起こる。

「あっ! ポイが!」

「どうとう破れたわね」

ついにポイが完全に破れ、最早使い物にならなくなってしまった。

最早これまでかとギャラリー全員から落胆の聲が洩れる。

しかし、矢矧はこの状況でむしろ笑っていた。

「……大和、プリンツ、磯風。悪いけれど、ここからは参考にはならないから」

「え?」

瞬間、まるで居合斬りのように矢矧がポイを振り抜く。

水面にポイの軌跡をなぞるような水しぶきが立つと共に、その水しぶきと一緒に大きな赤い物体が跳ね飛ばされたのを全員が見た。

それは、水槽に残っていた最後の金魚。

空中に投げ上げられた金魚はそのまま矢矧の持つ容器にちゃぽん、という水音と共に落下した。

ギャラリーからは声もでない。

「え? い、今のなんですか……?」

「水面近くが上がって来た金魚をポイの枠の部分で弾き飛ばしたの

よ」

「粹？ こんな細い部分で……」

「可能なの？ そんなことが……」

確かに実際粹を使って金魚を浮かせて、そこに器を滑り込ませる技は存在する。しかし、浮かせるどころか弾き飛ばすとなると難易度がまるで違う。

誰もが信じられないという視線で矢矧を見つめていた。

そして、しばらくの静寂の中。ギャラリの中から拍手の音が小降りに聞こえてきたかと思うと、それはやがて大きくなっていき、しまいに金魚すくいの屋台付近は拍手喝采、大歓声に包まれた。

「ま、参ったぜ……まさか生真面目なお前がここまで金魚すくいをやり込んでいたとはなあ」

「生真面目だからこそよ」

「は？」

「去年、別の屋台で私は金魚すくいをやって、惨敗したわ。それから一年、リベンジのために金魚すくいに関する知識と技能を磨き上げたわ。これはその積み上げた努力の成果よ」

「な……！」

水を差す様で悪いが、それ以外にやることはなかったのだろうか。

「あなたの言った通りよ、天龍」

矢矧は髪紐を一旦解き、多少乱れた髪を括り直しながら言った。

「——お祭りは戦い、ね」

☆

「——参った、俺の完敗だ！ 戦利品としてお前らがすくったこの金魚、持っていけ！」

「いらないわよ」

「お返します」

「別にいい」

「必要ないな」

「くそ、冷てえぞ、てめえら！ というか、そもそも大和は一匹もすくえてなかっただろ！」

すくえたかどうかは別として、さつき天龍も言っていた通り、よく考えると金魚をもらったところで飼う気もないのだ。

金魚すくいを楽しめる上に金魚ももらえるとという付加価値に盲目になっただけなのだ。

よく考えたら、屋台側も余った金魚の処分は面倒くさいことこの上ないのだ。

「いやあ、それにしても金魚が無事で本当に良かったよ!」

「ああ、矢矧は金魚達の命の恩人だな」

「あれ? あなた達まだ気が付いてなかったの?」

矢矧は水槽から金属の管を掴んで引き出す。

さつきまでスイッチが入っており熱を帯びている筈のそれはいとも容易く矢矧によつて持ち上げられていた。

「これは偽物ね」

「偽物!?!」

「じゃあ、一瞬赤みを帯びたのも……」

「そもそもウォーターバスにそんな機能はないわ。それに、ここまで巨大なウォーターバスは鎮守府にもこの島にもないわ」

「な、なんだ、全部嘘だったのか」

「本当にもう駄目かとハラハラしたぞ」

「それに気づいていてなんでわざわざ金魚すくいを?」

「調子に乗ってた天龍の顔が苦渋にまみれた表情に変わっていく様が見たかっただけよ?」

なんだ、このドS。

「まあ、こいつはいくら遊びでも流石にそういう一線は超えないわよ」
矢矧が微笑みながら言った。

「言っただろ? スリル感満点だって。それを演出するための芝居だよ、こんなもんは」

天龍がそっぽ向きながら、少し恥ずかしげに付け加えた。

「なんだ、天龍もいいところあるね! お姉様程じゃないけど!」

「てめえ、偉そうに……!」

「さて、それはそれとして、お仕置きタイムよ」

「え」

その矢矧の一言で天龍の顔から血の気が失せていくのが良く見て取れた。

「嘘とはいえ、金魚への虐待行為。それを利用した客の誘導、法外な額のポイ、諸々。立派な規律違反よ」

「い、いや、それは全部矢矧さんが解決してくれてハッピーエンド、みたいなの……」

「口を慎みたまえ、君は今監察艦の目の前にいるのだ」

まさかのム●力復活。

「いや、いい感じで終わりそうだったじゃん！ このままいい感じに秋祭り回終わらせられそうだったじゃん！ やり切った感あったじゃん！」

「君も男なら聞き分けたまえ」

「俺は女だ！」

じりじりとスタンリングを天龍に向けて近づく矢矧に後ずさりながらも自分の身体を見て天龍は何かきがついたように口を開いた。

「ちよ、ちよっと待て！ 俺はさっきのお前の立てた水しぶきもろにくらって水浸しだ！ ここに電撃つてのは、少しやばいんじゃないか!?」

「……まあ、電気椅子と比べても低電流だから水に濡れていても死には至らないと思うけれど」

処刑器具と比べられても全く安心できない。

「でも確かに少しは心臓麻痺とかの可能性はあるかもしれないわね」

「だ、だよな……」

スタンリングを下げ、天龍の表情に安堵が垣間見えたその瞬間であつた。

「目つぶしッ！」

「うわあああああ！ 目があああ！ 目があああああああああッ！」

「じゃあ、今回はこれで勘弁してあげるわ」

「うわあ」

「——あれ？ あんた達揃いも揃って何やってんの？ なんか一人倒れてるけど」

「瑞鳳！」

天龍が悶絶する中、声を掛けてきたのは瑞鳳であった。

「どうしたんですか？ 連れの男の方と一緒にお祭り行つたんじゃ？」

「それが、私が次に奢って貰う屋台探してる内に見失っちゃつたのよ。全く、私とのデートで迷子になるなんて最低最悪な男ね」

「いや、それ迷子になつてるの瑞鳳の方」

「——あ！ やつと見つけましたよ、皆！ なんか一人倒れてますけど」

「次は提督か」

立て続けに私達の前に現れたのは提督であった。

顔が真っ赤になって、足もふらついている。相当役場の方々に飲まされたと見える。

「あら、珍しいわね。抜け出して来たの？」

「ええ、今日は皆さんと秋祭りに行く約束でしたからね、う、気持ち悪い」

「吐くんならどっか行つてよね」

「折角頑張つて抜け出して来たのにその対応は酷くないですか!？」

その時、不意に夜空にパーンという音と共に大きな花が咲く。

「おお、花火ですよ！」

「秋に見る花火も悪くないわね」

「綺麗だな」

「おー！ タマ・ヤー！」

「全く、こんな奴らと一緒にやムードの欠片もないわね」

「花火までに合流出来て良かったですよ。やっぱりこの花火は皆で見なかったですしね！」

「一人、見れてないけれどね」

「目がああああ！ 目がああああああああああ！」

その後、提督と七丈島艦隊の皆でお祭りを回り、私は十年振りに充

実した祭りの夜を過ごしたのであった。

第十八話 「闇のゲームの始まりだぜえ！」

「よし、磯風どうですか？ 焼きました？」

「ああ、こちらもいい具合だ」

七丈島鎮守府厨房。私と磯風は料理の特訓と称してハンバーグ作りに励んでいた。

時刻は昼時、そろそろお腹を空かせた艦娘が昼食を食べに食堂を訪れる頃だろう。

「うん、バッチリですね！」

美味しそうに焼けたハンバーグを見て私は人差し指と親指で丸を作って見せる。

「じゃあ、そろそろ盛り付けましょうか！」

皿の上にハンバーグとレタス、ブロッコリー、ポテトサラダを添え、ご飯とコンソメスープをつけてハンバーグプレートの上から盛り上げる。

「しかし、大和は凄いな。私が一つ作る間に四つも作り上げるとは」

磯風は自分の作ったハンバーグを盛りつけながら感嘆の声を上げた。

「いやあ、一つ作るのも四つ作るのも作業的には大して変わらないんですよ？ それに——」

犠牲者は少ないに越したことはないから。

その言葉を私が続けることはなかった。

途中で口をつぐんだのだ。

しかし、それを察したように磯風が口を開く。

「まあ、私の料理が食べられるものとも限らないからな。多く作っておくことに越したことはない」

「はは、まあ、そんな所です……」

前回の料理特訓では私と同じように作り、美味しそうにできたオムライスが提督を卒倒させてしまった。未だ原因は不明である。

正直、もう見た目とか関係なく、磯風の料理は危険なのだ。

例えば、元々彼女の作る料理は皆美味しそうであった。見た目が良

いからと言って味まで良いとは限らないのだ。

磯風の料理はそれを口に入れるまでその良し悪しがわからないのである。言っては悪いが、この特訓の度に誰か一人が犠牲になる確率が非常に高い。

「さて、問題はこれを誰に食べてもらうかだな」

「そうですねえ」

その瞬間、食堂の扉が開き、数人の人影が入って来た。

「ういーす！ 昼飯あるかあ？」

「お姉様が本日の昼食当番と聞いて！」

「今日は誰も捕まんなかったから食堂で食べるわあ」

食堂に入って来たのは天龍、プリンツ、瑞鳳の三人の犠牲者候補であった。これは好機と私と磯風は食堂から出てくる。

磯風の顔を見た瞬間、三人の顔がひきつるのがわかった。もう少し気を遣って表情を隠せないものだろうか。

「合わせて丁度五人ですか？ 実は今日のハンバーグプレートも五皿だけなんですよ」

「くそっ！ やられた！」

「そんなに嫌がる事ないじゃないか」

天龍が頭を抱えている。磯風が自分の料理に関して自覚し、もう気を遣わなくても良くなった途端これである。

「まあ、磯風のプレートの試食は一皿なのでこの中の誰か一人が食べる事になりますね」

「えー、私お姉様のが食べたーい！ もつと言えばお姉様を食べたーい！」

プリンツは平常運転である。

しかし、各々が勝手な事を言っても決まらないので、皆で案を考える事にした。

「これは、決闘デュエルだな」

磯風が一番に声を上げた。

「まあ、この鎮守府の規則上、そういうことになるか」

「ちよつと待って、私デュッキもデュエルディスクもないんですけど」

「誰が遊戯王やるつつったよ」

「まさか……デュエルマスターズ!？」

「カードゲームから離れろ」

だって、デュエルって言ったから。

「この鎮守府では揉め事があつて話し合いでは決着しない時、何かしらのゲームで決着を着けるんだ。それが決闘《デュエル》だ」

「なんですか、そのほのぼののルール。魂とか賭けないんですか？」

「闇のゲームじゃねえんだよ」

「まあ、この鎮守府じゃ艦装とかそうそう使えないしね」

「ゲームはなんでもいいんだけど。大和は初めてなんだし今日は大和が決めていいわよ」

成程、確かに喧嘩とかよりは平和的な解決法かも知れない。ある程度運が左右し、実力では決まらない公平なゲームならば後腐れもないだろう。

「うーん、じゃあ、ババ抜きとかどうです？」

「おう、逆に新鮮でいいな。それにしようぜ」

「お姉様の意見なら大賛成です！」

「私も異論ないわ」

他の皆も特に不満はなさそうである。

「じゃあ、決闘はババ抜きで二回負けた奴が私のハンバーグを食べる。いいな？」

「磯風、自覚があるのはいいんですけど、自分の料理を自分で罰ゲームにしていくのはどうなんですか？」

メンタル強いな、と素直に感心した。

「闇のゲームの始まりだぜえ！」

「なんだかんだ言つて天龍も遊戯王好きですよね？」

磯風のハンバーグを廻り、ある意味命と精神を賭けた闇のゲームが今、始まった。

☆ というか、全員磯風の料理に信用なさすぎだろう。

「よし、俺から時計回りに回して一人ずつシャッフルしてくれ、一周し

て来たらカードを配るぜ」

「徹底しますね」

「セカンドディール程度ならこの場の大半の奴はできるからな。誰か一人に任せればそいつの思うがままにカードを操られるぞ」

「お姉様、決闘はもう始まっているんです！」

「ババ抜きってこんな緊迫感のあるゲームでしたっけ!？」

謎の緊張感の中、シャッフルを終え、五人にそれぞれ天龍からカードが配られる。

（うわあ、私がジョーカーですか……）

カードを開いて目についたジョーカーに大和は内心、苦悶の声を上げた。

しかも、五人でやるとなると、一人当たりの枚数は10枚が二人に11枚が三人になる。当然、ほとんど揃っている組もなく、大和の手札からはAのペアが捨てられるだけで9枚のカードが残っている。

「それじゃあ、俺から時計回りに引いてくぜ、ドローー！」

「ノリノリじゃないですか」

周り順は天龍、大和、瑞鳳、磯風、プリンツだ。

「お、いきなり6がペアになったぜ！」

天龍に大和の手札中の6が引かれ、そして天龍の持っていたもう一枚の6と共に場に捨てられた。

天龍の手札は残り6枚。

「じゃあ、次は私が瑞鳳から引きますね」

「いいわよ」

引いたカードは3。大和の手札中に合わさったカードはない。

ジョーカー持ちとしては一刻も早く手札を減らしたい状況でこれは辛い。大和はジョーカーの位置を入れ替えるため、手札をシャッフルする。

自分が引いたカードを次の巡目で相手に引かれないようにするためにもこれはよくやる行為なのでこれだけでジョーカー持ちであることは確定されない。そう判断しての堂々としたシャッフルである。

（だ、大丈夫です！もしかしたら天龍がジョーカーを引いてくれる

かもしれないし！ それに手札が多いつてことはペアになる確率が高いということでもある筈……）

この時、大和が絶対的な窮地に陥っている事を当の本人だけが気付いていなかった。

（お姉様、このままじゃ……でも、私の位置からじやお姉様を助けられない！）

（大和、まだ気が付いていないの？ 負けるわよ、あんた？）

（大和……！ 師匠に私のハンバーグを食べさせるわけには……！）

異変はすぐに誰の目にも見える形で起こった。

二巡目。

「お！ また揃っちゃったよ、ラッキー！」

三巡目。

「悪いね、また揃っちゃったぜ」

そして、四巡目に回る頃には天龍の手札は残り一枚になっていた。

「嘘……！」

「悪いな、大和、一抜けだ」

そして、天龍は狙いすましたかのように大和の手札の中のJを抜き取り、二枚のJを場に叩き付けた。

「アガリだ」

大和には何が起こっているのかわからなかった。四連続で有効札を引き入れ、最短でアガった。これを偶然と考えるには、あまりにも不自然であった。

しかし、イカサマの証拠がある訳でもなく、何も言えない。

呆然とする大和の『目』を見ながら天龍は勝ち誇ったように笑った。（悪いな。俺にはこの目がある。世界水準を軽く超える俺の目なら、お前の瞳に映る手札を盗み見ることも可能！ 俺だけは絶対にジョーカーを引かねえ！）

瞳に映ったものを盗み見る。それは如何に人間の能力値を大幅にオーバーした艦娘と言えど簡単ではない。天龍が今まで経験してきた多くの戦闘から磨き上げられてきた天龍だけの特化。まさに『天眼』と言える圧倒的な能力で、天龍はこのババ抜きを制した。

それから総崩れだった。

結局大和はその後も大して手札もジョーカーも減らせぬまま、あっさり敗北した。

「これで、大和があと一回負ければゲーム終了だな！」

「うぐぐ」

「はい！ 席替えしようよ！」

ここで突然、プリンツが声を上げた。

「席替え？ 面倒くせえし別にいいだろ？」

「いや、私は賛成ね。どつかの誰かさんがまた運よくアガっちゃうといけないしね」

ここで大和との位置関係が崩れるのを阻止したい天龍は当然、真っ向から反対姿勢である。

しかし、ここで反対する天龍を押し切るように瑞鳳が加勢する。

（くそ、こいつら！ 俺が大和をカモにしているのを気付いてやがるな!? だが、それでも磯風ハンバーグを食うのは大和に決定するんだ、何が不満だっというんだ!?)

（お姉様をコケにする奴は私が許さないんだから!）

（天龍が調子乗ってるとなんかイラツとくるのよねえ）

（そんな理由で!?)

視線を介しての言葉なき会話が繰り広げられていた。

その後、トランプを引いて数の大きい順に時計回りに座っていく手筈となり、周り順はこうなった。

プリンツ、天龍、瑞鳳、磯風、大和。

（ちつ、俺はさっきのババ席か……そんでもってプリンツは一位席。本性を現して来やがったな……ラッキーガール!）

天龍が小さく舌打ちをした。

そして、大和にとつては負けられない2ゲーム目、問題の手札はというと。

（よし、ジョーカーもないし、二組揃ってた！ これはいけるかもしれない!）
（よし、ジョーカーもないし、二組揃ってた！ これはいけるかもしれない!）

自分の手札を見て取り敢えずは一安心というところで、早速プリン

ツが動いた。

「やったあ、私残り一枚だあ！」

「え!？」

(来たか! ラッキーガール!)

これは天龍のように何かタネがある訳でもカードを配る際に何かしたわけでもない。そもそもプリンツにそんな技術はないのである。

ただ運が良い。運良く、手札に最初からペアが5組あっただけ。

この幸運こそがプリンツの武器であり、最大の脅威であった。

(くそ! 奴の残ったカードは……!)

天眼による手札の盗み見を行った瞬間、天龍の目に飛び込んできたのは大和の姿であった。

(しまった、こいつ! 大和しか見てねえ!)

よく見てみれば、プリンツは既に手札を伏せて机の上に置いてしまっている。これではカードを見る事は不可能だ。

「じゃあ、私からスタートだね!」

「お、おう」

プリンツの幸運ならば一発であがれかねない。しかし、プリンツのカードが分からない以上、天龍にはなす術もない。

「これ!」

ジョーカーのすぐ隣にあった8を引いて来ると、何もせず裏向きにしてカードを重ねた。

(不発? 俺の中にアガリカードがなかったのか?)

それなら、と天龍は笑みを浮かべた。

(俺のところにプリンツの待ちカードが来ない内にジョーカー単騎にしてプリンツに引かせてやるぜ!)

ならば、当然、自分が引く瑞鳳の手札を知る必要があると瑞鳳に天眼を使おうとした瞬間、瑞鳳もプリンツと同じように手札を裏向きにして机の上に置いた。

「いいわよ、好きなのを引けば?」

「てめえ!」

プリンツの方法と全く同じ天眼封じ。天龍は仕方なく、適当にカー

ドを引く。

「お、ラッキー、揃っちゃったぜ」

「ま、またですか」

また、ではあるが、今度は本当に運が良かったただけであった。

「じゃあ、私の番ね」

瑞鳳が磯風の手札に手を伸ばす。

(ここだ！ 何も俺が天眼を使うのは自分が引くときばかりじゃねえ。瑞鳳がカードを引いた瞬間、あいつは手札を確認するためにカードを見る！ その瞬間を盗み見てやるぜ)

しかし、瑞鳳は磯風から抜き取ったカードを見ると、裏返しのままの自分の手札から一枚抜き取って場に出した。

「8、揃ったわ」

(こいつ……！ 自分の手札を覚えてやがる！)

瑞鳳は天龍のような秀でた能力も、プリンツのような驚異的な幸運も持ち合わせていない。だが、彼女には優れた頭脳がある。数枚のカードを覚えるのに十秒もいらぬ。

天才、人は彼女をそう呼ぶ。

「む、私も揃ったな」

磯風も大和から引いた5のペアを場にだす。

そして、いよいよ大和の番がやってきた。

「あの、プリンツ、引いていいですか？」

「ええ、どちらでも好きな方をー」

やはりプリンツは伏せたカードを開くつもりはないらしい。

(だが、大和は落ち目。ここで有効なカードを引き入れられるとは思えねえ)

「やった！ 揃いましたー！」

「なっ!？」

大和は8のペアを場に出した。

それはさつき天龍から引いたカード。このペアが8以外のペアであればプリンツの待ちは確定したのだが、これでまたわからなくなってしまった。

「じゃあ、私の番！」

またジョーカーの隣のカード。今度は7を引き入れるが、やはりただ裏向きのまま重ねるだけである。

（くそー。俺も早くカードを消費しねえとだな！）

天眼を封じられている現状では天龍はヒラで引くしかない。

天龍は四枚残っている瑞鳳の手札の内、右から二番目のカードを選び、手を伸ばそうとした。

「右から二番目、ね」

「ッ!？」

瑞鳳が小声でそう呟いたのが聞こえた時には既に天龍の手は右から二番目のカードを手にとっていた。

しまったと思った時にはもう遅い。天龍の引いたKは有効札ではない。

天龍は確信した。このKは——いや、一巡前のカードでさえ——瑞鳳に引かされていたのだと。

「データは揃ってる。私の『データババ抜き』の前で、あんたの手札中にペアができることは二度とないわ」

「データババ抜き、だとお!？」

瑞鳳のプロファイリングにおいて、日常的に取っている艦娘達の言動、性格、行動パターンなどのデータ。それにより、瑞鳳には誰がどのカードを引いて来るか手に取るように分かってしまう。

原理は瑞鳳以外には理解すらできない。まさに天才のなせる業であつた。

「あ、また揃いました！」

「なにい!？」

大和が二連続でカードを捨てる。今度は7のペア。また天龍の手札にあつたカードである。

これには天龍も声を出さずにはいられない。

（馬鹿なの!？ 選べるのは二択で、二連続俺のカード!？ しかも、大和には有効なカード……まさか、こいつ!）

天龍の視線にプリンツはニヤリと口角を上げた。

（気付いちちゃった？ 私が凄いのは幸運だけじゃない、私はお姉様に限っては瑞鳳と同じように行動パターンが読めるんだから！）

（間違いねえ、こいつ、大和がどっちを引くかわかってやがるんだ！

幸運で大和の有効札を引き入れ、大和にそれを引かせてアガラせる気だ！）

プリンツの大和への異常なまでの愛によって成立する大和限定のデータババ抜きである。

いや、大和の次の行動を追うそのババ抜きはまさに『ストーキングババ抜き』である。

「じゃあ、今度はこれね！」

（今度は9を引いていきやがった。まさか、これも!?）

わかっていてもなす術はない。

一巡して大和の番が来ると、予想通り、大和は天龍の9を引く。

「また揃いました！」

「流石です、お姉様！」

（やつぱりか！）

これで大和は残り一枚。そして天龍はババは幸運のプリンツによって引かれず、カードを減らしてジョーカー単騎でプリンツに引かせようにも瑞鳳のデータババ抜きによって天龍のカードは全く減らない。

そして、さらに一巡後。

「あがりました！」

「すごい、お姉様！ 最初から1枚だった私よりも早くあがれちゃうなんて！」

「いやあ、運が良かっただけですよ」

（くそっ！ 運が良い？ 違う、アガラされたんだ、お前は！）

しかし、天龍はプリンツと瑞鳳に挟まれもう何もできない。

（幸運とデータ、こいつらの前じゃあ、俺は無力だ……!）

なす術なく、天龍はジョーカーを残し、敗北した。

これで大和、天龍が共にリーチ。

「席替えだ！」

天龍が声を上げた。

このまま終わる訳にはいかない。プリンツと瑞鳳も好戦的な視線を返してくる。

（まだライフポイントが残ってる！ ここからが本当の決闘デュエルだぜ！）

「なんか、よくわかんないですけど盛り上がってますねえ」

「まあ、皆私のハンバーグよっぽど食べたくないんだろな」

自分の見えない所で高度な駆け引きがあったことなどいざ知らず、大和は楽しそうであった。

そして、磯風のハンバーグを賭けたババ抜きは三ゲーム目へと突入する。

続く。

第十九話「バレなきや、イカサマジやないんですよ？」

磯風ハンバーグを賭けて始まった決闘『デュエルババ抜き』三ゲーム目。

席替えの結果、席順はこうなった。

瑞鳳、プリンツ、大和、天龍、磯風。

「じゃ、カードを配るわ」

全員が一度ずつシャッフルを終えると瑞鳳がカードを配り始める。

この席順を見て、天龍は既に一つの策を思いついていた。

（この席順なら……ジョーカーの場所によってははいけるかもしれないねえ）

天龍は手札が配られる間、目を瞑って何かしばらく真剣に考えていたかと思うと、最後の一枚が配り終わったのと同時にゆっくりと目を開けた。

その時の天龍の意味深な笑みに気付いた者は瑞鳳とプリンツだけであつた。

（何か、企んでいるわね）

（なんにせよ、絶対にお姉様には負けさせない！）

そして、全員が配られた手札を開くと同時に天龍は天眼を発動した。

（いくら天眼を封じようとも、この瞬間だけは手札を見ざるを得ねえ！）

最初に手札で既にペアになっているカードを場に出す作業。この時だけは絶対に手札を見る必要がある。

つまり、この時、天龍は全員の手札を天眼で盗み見ることが可能なのである。

（とは言っても、俺は瑞鳳みてえにできた頭は持ってねえからな。この場で全員の手札を覚えるのなんざ不可能。だから、まずはジョーカーの所在！ 次にプリンツの手札だ！）

天龍はそれぞれの手札を見てジョーカーのありかをさぐる。

（成程、ジョーカーは磯風の所に行ったか。よし、上々だ。次にプリンツの手札！）

プリンツの手札は相変わらずの幸運によって大体のカードは最初に捨てられる。なので、彼女の手札を覚えるのは天龍でも容易い作業であった。

(プリンツの手札で残るカードは……9、5、6か)

現在の手札の状態はこのような状況であった。

瑞鳳 : 2 4 5 8 9

プリンツ : 5 6 9

大和 : 2 4 7 8 10 J

天龍 : 5 6 7 8 K

磯風 : 5 8 10 J K ジョーカー

「じゃ、私から行くわよ」

瑞鳳はプリンツのカードを一枚引く。カードは6。

次にプリンツは大和の手札から2を引く。大和の手札にプリンツの有効札がないため、適当なカードが引かれている様子である。

「じゃ、私が天龍から引きますね」

(ここだ。まずはプリンツの有効札を大和に流さねえためにここで5を死守する!)

天龍は扇形に手札を開いて大和に向ける。

この時、誰が天龍の手札の枚数が5枚から4枚に減ったことに気が付いただろう。

天龍は手札を広げると同時に5のカードだけを扇の裏に隠すようにスライドしたのである。実際は5枚目のカードが扇形に開かれた手札の裏にあるが、大和からは4枚しか見えない。つまりは、自然とその4枚の中から選んでしまうような仕向けられる。

「あー！ 7が揃いましたー！」

(よし、これでいい)

大和が7のペアを捨てた所で、再び磯風に対し、天眼を発動する。天龍の天眼封じを行っているのは瑞鳳とプリンツだけで磯風と大和は常に自分の手札を開いているのでいつでも盗み見ることができ

る。
(磯風の手札は5 8 10 J K ジョーカーだ。ここで5を引

く)

「おしー！ 5が揃ったぜー！」

天龍はペアになった5を場に出す。これでプリンツの有効札がプリンツに流れる事はなくなった。

「む、私は駄目だったか」

(ここじゃなかったか……全員の挙動を見た所ジョーカーは磯風。早いとこ磯風をジョーカー単騎にして天龍に引かせたいんだけど)

磯風が瑞鳳から6を引き、一巡目は終了。

瑞鳳 : 2 4 5 8 9

プリンツ : 2 5 9

大和 : 4 8 10 J

天龍 : 6 8 K

磯風 : 6 8 10 J K ジョーカー

「ん、今度は私も揃ったわ」

続いて二巡目、瑞鳳がプリンツから2を引き入れ、カードを消費。以前、大和に有効札がないため、Jを引いてプリンツは終了。

「じゃあ、私ですね！」

(まあ、この三枚のどれを引かれようが磯風の手札に片割れがいる。問題ねえ)

大和は6を引き、終了。

そして、天龍は天眼を発動、ここで思わぬ行動に出る。

「よし、こいつだ」

「え？」

天龍の引いたカードに磯風が驚愕の声を上げた。

天龍と磯風以外の三人は何が起こったのかと二人に視線を送るが、天龍の手札からカードが場に出ることはない。

つまりは特にペアはできていない。しかし、それで何故磯風があそこまえ驚いたのか、大和とプリンツにはわからなかった。

その可能性に辿り着いたのは唯一人、瑞鳳。

(まさか……こいつ、ジョーカーを引いた!? 何のために!?)

瑞鳳は磯風の元にジョーカーがあることを知っている。その上で、

天龍が引いた磯風が驚くようなカードと言えば、まずジョーカーしかない。

(天眼で好きなカードを引ける天龍が何故わざわざジョーカーを……いや、これは、まさか！)

(気が付いたか。流石は瑞鳳だぜ。だが、気付いた所でもう遅い。お前の位置からはどうすることもできねえ！)

最後に磯風が瑞鳳から4を引き、二巡目が終了。

瑞鳳 : 5 8 9

プリンツ : 5 9 J

大和 : 4 6 8 10

天龍 : 8 K ジョーカー

磯風 : 4 6 8 10 J K

そして、三巡目。天龍の目論見が明らかになる。

「……5がペアになった」

「うう、全然ペアにならないよお」

「な、なんかごめんなさい、プリンツ。あ、8がペアになりました」

「じゃ、俺の番だな」

天龍は自分の手札からKを投げ捨てると、磯風の手札中のKを引いて上に叩き付ける。

「悪いな、Kのペアが揃った。同時に、アガリ確定だ」

「え!？」

「嘘!」

「成程、そういうことか……!」

「……………ッ!」

手札に一枚残ったカードを見せつけるように目元で揺らしながら、天龍は大きな笑みを浮かべた。

そう、これで天龍は大和にジョーカーを渡すと同時にアガることになる。

これが天龍の立てた戦略であった。

「ふい、やっぱ頭脳労働は俺には向いてないぜ。一気に疲れてきやがった」

「く、その笑み、ムカつくわね!」

瑞鳳が悔しそうに天龍を睨み付けていた。

無理もないだろう。瑞鳳にはわかっていたのだ。この結果が。わかっていて止められない。彼女には屈辱であったに違いない。

益々、天龍はニヤツくばかりである。

(せめて磯風到天眼のタネを教えておけばこんな腹立つことにはならなかったのに……!)

磯風は天龍が何かしらの方法で手札のカードを知る事ができるといふ所までは勘付きつつある。しかし、そのタネがわかっていないためにわかっていても防ぎようがない。

一つ前のゲームでプリンツと天龍がやって見せたカードを伏せる方法で磯風が勘付いてくれれば大いに助かったのだが、結局そんなことはなかった。

そこまでの点も含め、今回は天龍の作戦勝ちと言えるだろう。

「む、私も8が揃った」

(これで私のカードは9のみ! 天龍のアガリ抜けはもう防ぎようがないわ。だから、大和にいったジョーカーをなんとかしなくちやならない!)

三巡目が終わり、それぞれの手札はこうなった。

瑞鳳 : 9

プリンツ : 6 9 J

大和 : 4 10

天龍 : ジョーカー

磯風 : 4 6 10 J

「プリンツ、まさか私の待ちカード持ってないわよね?」

「わかんないよお」

今後の事を考えると、ここで瑞鳳がアガってしまうのはなんとしても避けなければならなかった。

瑞鳳は慎重に手を伸ばし、プリンツの手札の真ん中のカードを抜き取る。

しかし、そのカードは奇しくも――。

「9、アガったわ……」

「うう！ ごめんなさい！」

アガった。というより、アガってしまったと言わざるを得ない。

「むう！ また揃ってない！」

「本当にごめんなさい」

やはり大和の手札中に有効札は来ない。

そして、天龍から大和へとジョーカーが受け渡される。

「ほらよ。んで、アガリだ」

「ええ!? やっぱりこのカードですか!? それはないですよ！」

「はっはっは！ 精々足掻くんだな」

高笑いする天龍。今更絶望的な声を上げる大和にワンテンポ遅い、

と内心瑞鳳が苛立っていたのは知る由もない。

「じゃあ、次は私がプリンツからカードを引くって事でいいのか？」

「ああ、そうだな」

「よし、む、揃ったな10だ」

これにて四巡目が終了。

瑞鳳 : アガリ

プリンツ : 6 J

大和 : 4 ジョーカー

天龍 : アガリ

磯風 : 6 4 J

「せえい！」

プリンツが大和の手札を引き抜く。ここでジョーカーを引けなければ大和の敗北が近づいて来てしまう。

しかし、引けない。

「やっぱり、引けない……！」

「そりや、ジョーカーなんて引かねえよ。あのラッキーカーはな」

プリンツの幸運は確かに脅威である。しかし、その力は逆には作用しない。ジョーカーを引こうと思ってもそれはできない。

プリンツも運気に波があるので、落ち目の時であれば引けたかも知れないが、そんな操作は利かないし、今のプリンツはとても落ち目で

はない。

プリンツはジョーカーを引かないのではなく、引けないのである。「うまく幸運を利用したわね……あれじゃ、大和は詰みじゃない」

大和の手札はジョーカーと数字のカードの計二枚の手札。しかし、プリンツがその幸運で必ずジョーカーを避けてしまうので、いつまで経っても大和はペアができない。

三人の中で大和だけが足踏みを続ける状態。

「このままじゃアガれないですって！」

「プリンツが先にアガればまだ希望はあるけどな」

「でも、残ったカードはジョーカーを除くと4、6、Jの三種類よ」

「それでもって、磯風は自分の手札2枚とプリンツの手札3枚の中でペア作れば勝ちだ」

「磯風は3分の2の確率でアガリが確定する。無理よ。大体こうなっちゃうわよ」

「——む、6が揃った。私もアガリ確定だな」

そして、第3ゲームは最終局面を迎えた。

プリンツ： 4 J

大和： 4 ジョーカー

磯風： J

「今度こそ！」

プリンツが引いたのは4。当然だ。4はプリンツの有効札である。幸運によってどう足掻こうと引かされてしまう。

「そ、揃っちゃったよ」

「じゃあ、私はこれを大和に渡せばいいんだな？」

「い、一騎打ちですね」

大和の手中にはJとジョーカー。プリンツはJ。

次プリンツがJを引いてしまえばゲーム終了。大和の罰ゲームが決定する。

「う、ううー！」

「さあ、プリンツ！ 運命の一枚です！ 心して引いてください！」

「お姉様、ちよっと黙ってて！」

「ええ!？」

プリンツがジョーカーを引きたくて困っていることを大和は知らない。

(お姉様に磯風ハンバーグを食べさせる訳にはいかない! 絶対に私
がここでジョーカーを引かなくちゃならない! 妹の名にかけて!)
しかし、どうしてもわからない。どちらがジョーカーなのか。

どちらを選ぼうと、幸運という運命力でジョーカーを引けないのでは
ないだろうか。運命という壁が今プリンツに牙を剥いて襲い掛
かっていた。

プリンツの頭が真っ白になりかけたその時、耳に聞こえてきたのは
机を指で叩く音だった。

——トントン……トン……トン……トン……トン……トント
ン

「おい、うるせえぞ、瑞鳳」

「うるさいわね、落ち着かないのよ」

「瑞鳳………あ!」

机を叩く瑞鳳とプリンツの視線が交差し、その時、プリンツは瑞鳳
の意図に気付いた。

「引くのは『右』!」

プリンツは確信をもって自分から見て右のカードを引く。

「……プリンツ、やっちゃいましたね! それジョーカーです!」

「良かったあああああ!」

「え、何で!？」

驚く大和を他所に、ジョーカーを手札に加え、そのままプリンツは
大和の目の前に差し出す。

「どうぞ、お姉様」

「あの、シャツフルしなくていいんですか? そのままだと、もろバレ
——」

「いいですから、早く!」

「ええ!？」

困惑しつつ、大和がJを引き、大和の二敗は免れた。プリンツが大

きくうなだれる中、天龍が瑞鳳を睨み付けた。

「チツ、気付くのが遅れたぜ。さっきの机を叩く仕草、モールス信号か！」

「あんた如きが私を出し抜くなんて百年早いわ、脳筋」

瑞鳳はさっきの仕返しとばかりに瑞鳳はドヤ顔を見せつける。

「さあ、次行きましょう！」

大和がトランプを整理しなおしながら高らかに声を上げる。こうして、なんとか最大の危機を乗り越え、ゲームは4ゲーム目へと持ち越されるのであった。

☆

4ゲーム目の席順はこのようになった。

大和、プリンツ、磯風、瑞鳳、天龍。その後、一人ずつシャツフルを終え、大和にシャツフルされた山札が渡されようとしたその時。

「おっと！」

「危ない！」

天龍がトランプを手放した位置に大和の右手はなく、トランプはそのまま床に落ちていく。

しかし、大和がテーブル下まで慌てて潜り込んでいったかと思うと、すぐに少し崩れた山札を鷲掴みにした左手を見せた。

「ふう、なんとか大丈夫でした」

「天龍、あんた今わざと落としてジョーカーの位置を確認しようとしたんじゃないわよね？」

「おいおい、俺がそんな器用な事出来ると思うか？」

嫌疑の目が天龍に向く。天龍の天眼ならば不可能ではない事を瑞鳳とプリンツは知っている。

しかし、天龍ははつきりと言い放った。

「おいおい、もし仮に俺がそれをやったとしても、それはバレなきやイカサマじゃないんだぜ？」

「……………」

険悪な雰囲気を感じ取ってか大和が両者の間に入った。

「まあまあ、こうして山札も無事でしたし、いいじゃないですか！」

「まあ、それもそうね」

一悶着ありながらも、取り敢えずは無事何事もなく山札のカードは全て配り終えられ、全員が手札を開いた。

「……………え？ なにこれ？」

「……………あれー？」

「これは、びっくりだな」

「おいおい、なんだよこいつはー！」

「珍しいこともあるものですねえ」

手札を開いたまま、全員が固まっていた。

しばらくして、プリンツと瑞鳳が手札の全てを場に出した。

「あ、アガってるわ」

「わ、私も…………」

「私も残り一枚だ」

「俺もだ」

「私もです」

信じられないことにゲーム開始よりも前に、既に二人のアガリが出た。しかも、残った三人の手札もそれぞれ残り一枚。

この時点で最初にカードを引かれる事になる磯風はアガリ確定。

実質天龍と大和の一騎打ちという図になっていた。

「おいおい、誰だ。こんなことしかしやがったのは…………ありえねえだろ、こんなもん！」

「何万か何億分の確率なら一回はあるんじゃないかな…………？」

「天文学的な数字になりそうで計算するのも嫌になるわね」

「あの、ハンバーグを温めなおさなくちゃなりませんし、取り敢えずこのまま決着つけちゃいません？」

「あ、ああ、まあそうだな」

「それじゃ、磯風は準備お願いします」

「了解した」

取り敢えず、このババ抜きには時間もかかり過ぎていることもあり、想定外の事態だが、このまま進める事に誰からも異論はなかった。「もう、分かっていると違いますけれど——」

磯風の最後のカードに手を伸ばしながら、大和は自分の手札を表向きに見せて言った。

「——私がジョーカー持ちです。引いてしまったら負けると思ってください」

自信満々に大和はそう言い切った。

(なんだこいつ……さっきまではまるで素人同然のカモだった癖に……急に嫌な感じだぜ)

天龍は自分の手に握られたスペードのAを見る。

大和の持つ二枚の内、どちらか一枚がジョーカー。

(なら、天眼で！)

「駄目ですよ」

「な!?!」

大和は手札を裏向きにして机の下に隠してしまった。どうやら机の下でシャッフルしているようである。

「覗き見されそうですからね。こうやってシャッフルさせてもらいます」

「……おう、好きにしな」

天龍は椅子に腰を掛けなおす。

しかし、天眼による盗み見を諦めた訳ではない。

(甘いぜ！ 俺の天眼は筋肉の動きまでもを捉える！ 机の下でシャッフルしようが腕さえ見えてればその筋肉の動きで何回シャッフルしたかわかる)

最初に大和が持っていたカードがジョーカーである事をさっき大和本人から見せて貰って分かっている。

ならば、あとはそのジョーカーの動きをシャッフル回数から追うだけ。

「お待たせしました。どうぞ」

大和は二枚の手札をそれぞれ裏向きで机の上に置く。

「……悪いな、大和。この勝負、もらった!」

天龍は勝利を確信した笑みを浮かべ、迷いなく左のカードを手にとった。

「こいつで、アガ——リ!？」

その笑みが驚きと焦燥に変わると同時に、大和の口角が吊り上がるのが見えた。

「残念。そっちはジョーカーです」

「え……嘘……そんな筈は!？」

何度見ても柄はジョーカーである。天龍は信じられないと言う顔でカードを急ぎシャッフルし始める。

（嘘だろ!？ 俺の目が見間違えるはずがねえ！ いや、しかし、実際に……！ くそ、今は考えるな！ 次だ！ 次で確実に仕留める！）

入念にシャッフルを繰り返し、天龍は大和と同じように裏向きの二枚の手札を机の上に置いた。

「さあ、当ててみやがれ!」

「天龍、知ってますか?」

「ん?」

伏せられた二枚のカードを見つめながら大和は唐突に口を開いた。

「今ここに伏せられているのはジョーカーと『スペードのエース』なんですよ」

「そんなの知ってるが?」

「スペードのエースって他のカードと違ってすごく柄が書き込まれて複雑ですよね? なんでも偽造防止のためらしいんですけど」

「それがどうしたんだ?」

「そのせいで、スペードのAだけはインクの量が他のカードより全然多いんです。すると、スペードのAは少しだけ他のカードよりも重くなると思いますか?」

大和は裏向きの二枚のトランプを重さを比べるように両手に持った。

「そんな微細な重さの変化なんて誰にわかるんだよ!？」

「私には、わかります」

瞬間、大和は右手に乗せていたカードを表向きにして机に置いた。

それは間違いなく、スペードのエースであった。

「嘘、だろ……!？」

「私の勝ちですね」

その瞬間、天龍の二敗が決定し、激闘の末、決闘は幕を閉じた。

「ほら、お待たせ。熱いうちにおあがりよ」

「――！」

未だに敗北を信じられない様子为天龍の前に、間髪入れずに湯気を立ち昇らせたハンバーグプレートが置かれる。

普段ならば、一目散に食いつく天龍も流石に手を付けないまま冷や汗を流し続けている。そこに磯風がやって来て、ハンバーグを一欠片フォークで突き刺すと天龍の口元に持っていく。

「ほら、今度こそはきつと大丈夫だ。安心して食べるといい」

「い、いやだあああああああああああ！」

「私はトランプ片付けてきますね」

「お姉様！ 私も一緒に！」

「プリントは数秒後に倒れる天龍をお願いします。瑞鳳と磯風じゃ荷が重いでしょうから」

「倒れる前提ですか、お姉様!?!」

散らかったトランプを手際よく箱にしまうと、大和は食堂の扉を開けて出て行った。

「ほら、怖くない怖くない」

「くっ！ もはやこれまで！ ―――くわあッ!?!」

「ああ！ 天龍が死んだ！ この人でなし！」

「ああ、やっぱり駄目だったかあ」

「やっぱりって……磯風、あんたねえ」

☆

「――あら？ 大和じゃない？ 食堂から出てきたってことは、昼食はもう食べたの？」

「あ、矢矧！ 秘書艦、お疲れ様です」

食堂を出ると、少し先を歩いて来た矢矧と出会った。

私は、丁度いいとポケットから今使っていたトランプを『二組』取り出し、矢矧に手渡した。

「これ、ありがとうございます！」

「ああ、この前貸したトランプ……もう一組の方は？」

「たった今決闘デュエルで使っていたやつです。一緒に返しておきます」

「ああ、成程、どうだった？ 初めての決闘デュエルは？」

「はい、矢矧に聞いた話が参考になりましたよ」

実は、私は決闘のことを以前、矢矧から既に聞き及んでいた。

その中で天龍の持つ天眼や、プリンツの幸運、瑞鳳のプロファイルなどについても詳しい説明を受けていた。

しかし、私は敢えて何も知らないフリを通した。何故なら、初心者初心者を装った方が何かと都合のいい方向に物事を操作しやすいからだ。

例えば、決闘内容をババ抜きにしたり。

まあ、厳密にはババ抜きである必要はないのだ。何かしらのトランプゲームであれば、ここぞという時に私が隠し持っていた二組目のトランプが使えるのだから。

「全く、こうしてイカサマの証拠隠滅って訳ね？」

「いやいや、イカサマなんてしていませんよ」

今回は3ゲーム目までは全て様子見であった。何もしなかったし、天龍にはやらせたい放題でもあった。

そして、完全に誰もが私を素人だとみくびった4ゲーム目。私は一気に勝負を付けるべく動いた。

わざと天龍から山札を受け取り損ねて床に落としかける。

そうしてテーブルの死角に入った隙に仕掛けを施した二組目のトランプを取り出してすり替える。山札を持つ手が右から左に変わっても皆中々気付かないものだ。

そうしてトランプのすり替えが終われば後はもう独壇場である。

五人に一枚ずつ配れば、手札が全てペアになるよう並びを細工し、天龍と一騎打ちの図式を作り、後はスペードのエースで仕留めるだけ。

ちなみにあの時、テーブルの下で私が手札をシャッフルしていた時、手札は二枚ともジョーカーにすり替えていたので、どちらを選ぼうが天龍がジョーカーを引く事は決まっていた。

そして、スペードのエースには――。

「ちよつと、大和。こっちのトランプのスペードのエース、傷ついてるじゃない」

「あ、本当ですね。でも、それくらいなら大丈夫じゃないですか？」

「駄目よ。触れば感触があるもの。目印にされるわ。というか、これもあなたの仕業でしょ？」

こうやって軽く傷でもつけておけばいいのだ。

後は、重さがどうたらとか適当な話をしながらさりげなくカードに触れば一発である。

こうして、天龍は負けるべくして負けたのである。

「全く、イカサマで勝つのは感心しないわね」

「磯風の料理を食べるかどうかの瀬戸際だったんです！ 命が掛かっ

てたんです！」

「まあ、それは同情しなくもないけど」

「それに、私はイカサマなんてしてませんよ？」

私はさっきの天龍の言葉を脳裏に浮かべて言った。

「バレなきや、イカサマじゃないんですよ？」

矢矧編

第二十話 「ストーリーカーを任務にしないでください！」

「矢矧が最近、怪しいんです！」

「急に執務室に呼び出したと思っただけなんですか、急に」

私、大和は朝から唐突に提督に呼び出され、執務室に来ていた。相変わらず仕事は捗っていないようで机の上には書類の山が順調に築かれている。

以前見た時よりも10センチ程高くなっているかもしれない。

「最近、矢矧が仕事もせずはどこか行っているみたいなんですよ！」

「仕事をしていないのは提督です」

「知ってます！」

「反省の素振りくらいは見せてください」

こんな無駄話をしている暇に溜まっている仕事を片付けるべきだと私は思う。

「とにかく、気になって仕事のままならないんですよ。それ以前に秘書艦の矢矧のサポートなしに私が仕事するのはなんて無理ですし」

提督とは一体なんなのか、改めて目の前の男に問い質したい。

「という訳で、大和には矢矧の素行調査任務を命じます」

「ストーリーカーを任務にしないでください！」

「だって私がやるよりは大和がやった方がいいじゃないですか」

そもそもやらないう方がいい。

「嫌ですよ、私じゃなくてもいいじゃないですか！ 天龍は？」

「釣りに行くらしいです」

「プリンツは!? この手の任務はプロでしょう？」

「大和以外をストーリーキングするのは美学に反するので嫌らしいです」

「ストーリーキングに美学も何もありません!? じゃあ、瑞鳳は!？」

「今日もデートです」

「羨ましい！」

「全くです」

「じゃあ、磯風………は、駄目ですね」

「ええ、駄目ですね。教育的に」

つまり、残っているのは私だけであった。

「そういう訳でよろしくお願いしますね！」

「嫌です！」

私は声を大にして拒絶の意を示した。

見知った相手とはいえストーカーキングなんて誰がやるか。私はそう

強く決意した

☆

「——と思っていた筈なのに、何故私は今矢矧を探しているのでしょうか」

私は、港町付近に矢矧が向かったという情報を元にその方面へと足を運んでできてしまっていた。

「違います、私はストーカーをしている訳ではありません。仲間の動向が心配なだけです」

こう何度も自分に言い聞かせてはいるが、私がこう至った理由は先刻の提督の一言のせいであることは明白であろう。

『もしかしたら、矢矧にも彼氏ができたのかも知れませんねえ』

あのお堅い矢矧の色恋沙汰などそれだけで興味が湧いて来るだろう。

「いえ、でも私はあくまで矢矧がもしかしたら何かトラブルを抱えている可能性も考えられるからこうして矢矧が何をしているのかを調べているだけです！」

そんな風に自分に言い訳を聞かせていると、数十メートル先に大きな目の紙袋を抱えながらこちらに歩いて来る見覚えのあるポニーテールの少女を見つけた。

間違いなく矢矧である。

「いたー！」

私は素早く傍にあった電柱に隠れ様子を伺った。矢矧は何やら機嫌よさそうに紙袋を抱えており、幸いにもこちらには気が付いていな

い様子であった。

「あんなに楽しそうな顔の矢矧の顔初めてみた……やっぱり、そういうことなんでしょか」

矢矧はそのまま港町を出ると、港に入っていく、人気のない堤防の方へと周囲に気を配りながら向かっていく。

「こんな所で逢引？ 漁師の方なんでしょか？」

距離を取りながらタンカーなどの影に隠れつつ、矢矧を追っていくと、彼女は倉庫の影を曲がって行った。

私も急いで角を曲がろうとした時、聞こえてきた矢矧の声に私の足は止まった。

「お待たせ、あら、そんなに寄って来て、私のこと待ってたの？ ふふ、可愛いわね」

「この角の先に……矢矧の……」

私は慎重に顔を半分だけ出して、矢矧と一緒にいるであろう、彼女の恋人の顔を見ようと意を決して覗き込んだ。

しかし、そこに居たのは別のものであった。

「にゃー、にゃー」

「はいはい、今あげるからね」

「……………猫？」

そこに居たのは幸せそうな顔の矢矧とそれに群がるたくさん野良猫の姿であった。

矢矧が紙袋から取り出したのは大きなキャットフードの袋と牛乳に紙皿。

手際よく矢矧は紙皿にキャットフードを山のように入れると、猫達は一気に紙皿に群がっていく。

同じように牛乳も別の紙皿に注いでやると、猫達はそちらの方にも集まっていく。

「ああ、なんて愛らしい」

矢矧は猫達をうっとり見つめている。

私はがっくりと脱力してしまう。まさか、矢矧が最近執務を抜けている原因はこれだったのだろうか。

いや、矢矧が猫好きであったという事実は中々以外であったが。

「……今なら触つても大丈夫かな」

(触りたいんですね、矢矧)

矢矧は慎重にそつと紙皿に群がる猫達の一匹に手を伸ばす。

「フウーツ！」

「ああ！ ごめんなさい、ごめんなさい！ 何もしないから、怒らないで！」

(嫌われてる！)

どうやら猫達の目的はあくまで矢矧の持っていたキャットフードと牛乳であり、矢矧に関しては特に気を許してはいないらしい。

「うう……いえ、こうして何度も餌をあげていればいつか私にも懐いてくれるはずよ！ 明日も来ましよう！」

(ああ、それで最近執務を抜け出してこうして猫の世話に……)

「フウーツ！」

「なんで!? 今私何もしてなかったじゃない!? ああ、ごめん！ 引つ搔かないで！」

(なんて不憫な……)

矢矧の方は熱烈だが、猫達の方はそうでもない、というかむしろ嫌われているようである。

矢矧は引つかかれた腕を引つ込めると紙袋の中に入れ、今度はその中から一冊の本を取り出す。

本の表紙には『猫語入門』と書かれている。

(うわあ、また怪しい本を……)

「えーと、『こんにちは』は……にや、にやあくん」

「シャーツ！」

「痛っ!？」

(矢矧いいいいいい！)

こんにちはと言っただけで引つ搔かれるという理不尽。

何故ここまで嫌われているのか。

私がしばらく猫語らしき何かで猫達とコミュニケーションを図ろうとする矢矧の様子を微笑ましく見ていると、突然背後から声が聞こ

えてきた。

「へえー、なんか面白いことしてんなあ、あいつ」

「なっ!? 天龍、いつの間に!?!」

いつの間に後ろに片手に釣り竿、片手に大量の魚が入ったバケツを持った天龍が私同様、矢矧の様子をニヤニヤして見ていた。

「まさか、あの矢矧が猫好きだったなんてなあ。あんな馬鹿みてえにニヤーとか言ってる矢矧初めて見たぜ」

「何でこんな所に……」

「ここは俺もよく来るんだよ、お前こそなんでこんな所で矢矧のことみてんだ?」

「提督から頼まれたんですよ」

「ああ、今朝そんな話もしたっけなあ。ま、いいや、じゃあ行くぜ」

「え!?! ちよ、待って!」

そう言うのと、天龍は躊躇なく私の手を引っ張って矢矧と猫達の前に連れ出した。

矢矧の顔が私達を見て、青ざめていくのがすぐにわかった。

「な……あ、あなた達……! なんで……!?!」

「いやあ、偶然にも面白れえもん見ちまったぜ。なあ、大和?」

「え……いやあ、はは」

「いつから、いつから見てたのよ!」

「俺は十分前くらいだけど、こいつはもつと前から見てたんじゃね?」

「あの、一応、三十分くらい前から……」

「――」

矢矧はふらふらと立ち上がると、ゆっくりと海に向けて歩を進め始める。

「もう、死ぬしかない……!」

「矢矧、落ち着いて!」

「駄目だわ、監察艦としての威厳が……私のイメージが……」

「大丈夫ですから! こんなことで矢矧のイメージは変わったりしませんから!」

「ニヤーって叫んでたけどあれなんて言ってたんだ?」

「このタイミングで私のフォロー台無しにするような追撃かけるのやめてもらえますか!?!」

「うわああああああ!」

「矢矧いいいい! 早まらないで! 早まらないでください!」

「離して! こんな生き恥、耐えられない!」

その後、海に身を投げようとする矢矧を羽交い絞めにしながら必死に説得を続け、なんとか矢矧は落ち着きを取り戻してくれた。

「落ち着きましたか……?」

「ええ、もうどうにでもして頂戴」

落ち着きというよりは諦めに近かった。

「全く、戦闘してねえのに轟沈が出ちまうかとヒヤヒヤしたぜ」

「いや、天龍は終始笑ってただけでしょう」

「にやにやにやー、にやにやー! って感じだっけか?」

「うわああああああ!」

「矢矧落ち着いて!」

「これ面白れえな」

「空気読んでください!」

また矢矧が落ち着きを取り戻すまでに数分を有した。

「悪かったよ、流石におふざけが過ぎたぜ」

「次やったら殴りますから」

「うう……:よりによってこんな奴に……!」

矢矧は地面に手をつけて悶えている。

「おいおい、こんな奴とは失礼だな。お前、猫と仲良くなりたくてここに通ってんじやねえのか?」

「そうよ、買い出しの帰りに見かけた猫を追って偶然ここを見つけて……:それから頻繁にここに来るようになって」

「だったら、俺にはもう少し好意的な態度を取るべきだと思うがな」

「は? どういうことよ?」

天龍は不敵な笑みを浮かべると、バケツの中の魚を一匹取り出す。

その瞬間、猫達の目付きが変わった。

今まで食べていたキャットフードと牛乳に目もくれず、一斉に天龍

の前に集まってくる。今にも天龍の持つ魚に食いかかろうと手を伸ばしているものもいる。

「待て」

その天龍の一言で、猫達はまるで統率された軍隊のようにその場に座り、一匹たりとも微動だにしないまま天龍を見て次の指示を待っているようであった。

「よし、ほら食いなー!」

「ニャー!」

天龍の放り投げた魚に一齐に猫達が群がっていく。

その後も次々と魚を投げていき、バケツが空になるとドヤ顔で私達の方に視線を戻した。

「え、何ですか、これは?」

「ここにいる猫共は元々俺が集めた猫なんだよ」

天龍の話によると、元々この場所は天龍の釣り場としていた場所だったという。しかし、何度か釣りをしている内に猫達が天龍の釣った魚に集まって来た。

天龍が釣った魚の一部を猫達に与えている内に猫の数も増えて来てここは猫の集会場のようになってしまい、釣りどころではなくなつたため釣り場所を変え、以降は釣った魚をここまで届けに定期的に通っていたのだと言う。

「要は、このシマをシメてるのは俺ってことだ」

「猫のボスってことですか。なんか似合いますね」

「あの、天龍が……!?! 猫達を……!?! やっぱり知能レベルが近いから……!?!」

「ぶっ飛ばすぞ、お前ら」

見ると、天龍の足元には猫達がゴロゴロと喉を鳴らしながらすり寄っている姿が見える。

矢矧には威嚇しかしていなかったというのに、凄い懐かれ具合だ。矢矧はそれを羨ましそうに見ている。

「ふふ、羨ましいか?」

「う、羨ましくなんか……これくらい、私だつてちよつと通い詰めれば

……」

「いいや、無理だね」

天龍は笑い飛ばすようにして言い切った。

「ここらの野良猫共は港で漁船から運ばれてくる魚を盗み取って生きてる奴らばかりだ。腹は減ってるから何やっても食うには食うだろうが、キャットフードじゃ、こいつらの心は動かねえぜ？ やっぱ、魚じゃねえとな」

「うぐ……」

「それとも、猫語とやらで頑張ってみるか？」

「うぐぐぐ……！」

悔しそうに拳を固める矢矧に、溜息をつきながら微笑むと天龍は続けた。

「だが、お前の態度次第じゃ釣りを教えてやってもいい」

「え？」

「魚を仕入れるんなら釣りだろうが。まさか市場で買ってくるつもりじゃねえだろうな？ 経費の事考えても釣りした方がコストも良いんじゃないのか？」

「ま、まあそうかもしれないけれど……」

矢矧は意外そうな表情で頷く。しかし、その後、すぐに疑わしい目つきに変わる。

「……で、私にどうしろと？」

天龍がここまで好意的な話を持ち掛けてくるには何か裏があると読んだのだろう。天龍はその質問にニヤリと笑う。

「人にものを頼む時には大事な言葉が必要だろう、『お願いプしますリー』が？」

「え？」

「ほら、ちゃんとお願いしてみな」

「別にそれくらい言われずともやるわよ………お願いします、私に釣りを教えて、ください」

少しぎこちなくはあったが、矢矧はしっかりと天龍に頭を下げた。

「オーケー、オーケー！ 了解したぜ、監察艦殿！」

天龍はその姿を見て満足そうに笑った。

私は天龍の耳元で、小声で尋ねた。

「え、本当にこれだけでいいんですか？」

「ん？ ああ、十分だ。いや、一度言ってみたかったんだこの台詞！俺の好きな漫画の台詞なんだよ」

「いや、知りませんけれど」

いつもスタンリングで雷撃されている天龍としてはもっと日頃の怨恨をこめて矢矧を辱めるような要求をすと思っていたのだ。

天龍は満足そうな笑みからどこか優しげな笑みを垣間見せながら言った。

「それによ、あんなになつてまで猫と仲良くなりたいつてんだから助けねえ訳にはいかねえだろう？」

天龍の視線の先には猫達にそつと伸ばされる矢矧の手があった。その手は猫達による生傷だらけである。普段の執務では手袋をしているために提督も気付かなかつたのだろう。

「良くも悪くもあいつは不器用だからな。仲間としては、たまに手助けしてやるのも悪くはねえだろう？」

「天龍もいい所あるじゃないですか！」

「馬鹿、俺はいい所だらけだろうが」

「どの口がいうんですか？」

「ん？ おつと、あいつはいけねえな」

天龍は、今度は少し離れた所に一匹だけ佇んでいる黒猫の方に手を伸ばす矢矧に近づき、その手を掴んだ。

「そいつはやめときな」

「え、なんでよ？」

黒猫は、矢矧と天龍の方を睨み付けるようにして、そそくさとどこかへと歩いて行ってしまった。

「あいつはこの野良猫共のボスみてえな奴でな。そんでもって俺や他の猫とも一切つるまねえ、気難しい奴さ。近づいても引っ搔かれるだけだぜ？」

「……そう、いつも一人なのね」

「矢矧……?」

その時、黒猫を見つめる矢矧の目は酷く感傷的な目をしていた。

「ほら、そろそろ帰るぜ? 今度暇な時は俺に声かけてくれりゃ、釣りを教えてやるよ」

「ええ、しつかり頼むわ! 絶対に私も猫を撫でるんだから!」

「あ、一応提督の方も気にかけてあげてくださいね。仕事が溜まっていくばかりですから」

「あの人は少しくらい苦労させた方がいいわ」

「はは! 厳しいねえ!」

猫の堤防の件は取り敢えず矢矧と私と天龍の間だけの秘密とする事になった。

私としては別に他の皆も受け入れてくれると思うのだが、矢矧自身が嫌がって聞かなかった。

日頃から対立——とはいっても天龍が一方的に電撃を食らうだけだが——しているイメージの矢矧と天龍だが、こうして見ると中々良いコンビなのかもしれない。

七丈島艦隊の新たな人間関係の誕生を私は素直に嬉しく思うのであった。

——この関係が数日後崩壊することなどいざ知らず。

☆

その頃、七丈島鎮守府の執務室に緊急の電文が送られてきていた。

「珍しいですね、万年出撃なしのこの鎮守府に大本営からの緊急電文だなんて。一体内容は——」

電文を読み上げ、提督の表情は険しくなった。

「七丈島近海に、深海棲艦の艦影……!?!」

その時、仮初の日常に一筋のヒビが入り始めたのだ。

第二十一話「やめておいた方が、良いですよ？」

七丈島鎮守府近海に敵影。

その報告が提督の口から私達の耳に届いたのは翌日の早朝のことであった。

「深海棲艦が、この近くに……！」

「そういや、ここに来て数年経つが、こんなことは今までになかったな」

「ええ、この七丈島付近を含む近隣の海域は既に制圧が完了していますからね」

「で、そんな平和な筈の海域になんでまた敵が現れるのよ？」

「報告では、一週間前に南方海域で深海棲艦の大艦隊と連合艦隊との間で大きな戦闘があったらしいです。大きな損害を生みながらもなんとか敵部隊のほぼ全てを撃滅できたらしいのですが、どうやら敵の一部が戦闘海域を抜け、そのまま日本に向かってきていたようです」

「で、そいつらがいいよいよここまで来ちまった訳か」

「大規模な戦闘で敵艦隊の動きに気付くのが遅れたことに加え、敵艦隊を追うだけの余力も残されてはいなかったのでしょうか」

提督は眼鏡を押し上げながら淡々と手元の書類に視線を落とすしながら現状を報告した。普段のだらけたような空気は微塵も感じない。いつもこんな感じであればもう少し提督業も上手くいくだろうかと密かに思ったが、非常時なので口には出さなかった。

「まあ、とはいいましたが！」

今まで視線を落としていた書類を机に置くと、まるで全員の緊張を一蹴するように手を叩く。

「現在、横須賀鎮守府の一艦隊が海域哨戒のためこちらに向かっていきます」

「横須賀艦隊ってことは、あれか？ 『元帥』が指揮してる艦隊か？」

「はい、同時に現在、日本最強の艦隊でもあります」

横須賀艦隊。その存在は私もよく知っている。というよりは提督や艦娘、またそれに準じた関係者ならば誰もが知っているだろう。

現在、対深海棲艦における日本の戦略拠点にして最高司令部、いわゆる大本営は東京に構えられている。

裏を返せば、この大本営が壊滅した時、日本は深海棲艦に敗れるだろう。そして、その大本営を防衛するという役目を同時に担うのが、横須賀鎮守府である。

その重要拠点に置かれる提督は当然、どの提督より優秀で、どの艦隊よりも優れた艦隊を持つ者である。つまりは横須賀鎮守府には日本最強の提督とその艦隊が着任することになるのだ。

『元帥』という肩書と共に。

深海棲艦との戦争が始まってから、この国では元帥とは日本最強の称号であり、横須賀艦隊とは日本最高戦力の同義語であった。

そんな横須賀艦隊——おそらくは主力第一艦隊ではないだろうが——が海域哨戒のためにこっちに向かってきているというのだ。これ以上なく心強い援軍である。

「なので、取り敢えず戦力的にはそこまで不安はありませんが、流石に横須賀艦隊に頼り切りという訳にもいけません。この鎮守府には資材も資源も、ろくな装備も置かれていない上に皆さんは艀装の扱いに大きなブランクを抱えている。非常時に備えて艦隊訓練を行っておくに越したことはない筈です」

「まあ、そりゃ俺達だって横須賀の奴らに頼る気なんてさらさらねえよ。テメーの島くれえテメーで守るさ」

「そういう訳なので、矢矧。お願いできますか？」

全員の視線が今まで無言を貫いていた矢矧に集中した。

「ええ、勿論よ」

その時、既に私は少なからず予兆を感じていたのかもしれない。

「それでは、艦隊旗艦を矢矧として、皆さんは今日から艦隊訓練を開始してください。預かっていた皆さんの艀装はドックの方で調整してありますから問題なく使用できます」

「おうー！」

「まあ、仕方ないわね」

「艤装なんて付けるのいつぶりだろうな」

「お姉様、頑張りましょう！ いざという時は私がお姉様を守ります！ ついでにどきどきに抱き着いて胸部装甲を揉みますッ！」

「はい……」

「あれ？ いつものお姉様からの熱いツツコミが来ない……」

「この時の私はプリンツの言葉など微塵も聞こえていなかった。」

「……………あの」

「なに？」

「なんだろうか。この不安感は。」

しかし、明確に何が不安なのかはわからない。何か変わったところは見受けられないし、何も問題はない筈だ。私は口を開いたはいいものの、胸中にうずめくその不安を言葉にできなかつた。

「いえ、なんでもありません……」

「そう、それじゃあ、全員すぐにドックに向かうわよ」

☆

「——いや、すっかり失念していましたよ」

ドックに準備された艤装の前に立ち、私は一人汗を流していた。

「当たり前のようにドックまで来ましたけど、私に演習って……無理でしょ、いや、本当に」

妖精さんの所で撃っていたのは敵ではなく、ただのデコイ。しかし、これから始まる演習で撃つのはれっきとした艦娘である。

いくら演習弾と言っても、これは私にはできない。できる気がしない。

「お姉様！ 準備できましたかあ？」

「え!? いや、あと、もうちよつとです！」

とにかく、ここまで来たらとりあえずは行くしかない。私は艤装を取り付けて急ぎ海へと抜出した。

「——じゃあ、今日は二組に分かれての演習を行うわ。今日の内に感覚を取り戻すわよ」

「どういうふうに組み分けんだよ？」

「私、お姉様とがいい！」

「何で火力要員の戦艦と重巡を同じチームにしなきゃならないのよ、バランス考えなさいよ」

「組み合わせはもう考えてあるわ」

矢矧は全員に向けてそう断言すると、おもむろに私を指さした。

「Aチームは私と大和。Bチームはそれ以外。これで演習をするわ」

「お、おいおい、本当にそれでいいのかよ？ 重巡もいて制空権を取れる上に多勢に無勢じゃねえか」

「これは艦種による戦力分けではないわ。艦装の練度による戦力分け。私は普段から訓練に艦装を使っているし、大和はここに来たのが最近。つまりは一番ブランクが短い。それを考慮すればこれ位の戦力差で五分と五分よ」

矢矧の説明を聞き、内心で私は申し訳ない気持ちで一杯であった。

五分と五分などとてもない。私が戦えない以上、実質このチームは矢矧一人になってしまう。

今、このタイミングしかない。私は意を決し、声を上げようとした。

「——私は反対ね」

「ん、瑞鳳？ どうしたよ、急に」

(瑞鳳!?)

「この組み合わせには反対と、そう言ったのよ」

「……理由を聞きたいわね？」

突如反論の声を上げる瑞鳳に、矢矧がいぶかしげに理由を尋ねる。

瑞鳳は私が戦えないことを知っている。恐らくは気を遣って助け舟を出してくれたのだろう。

私は安堵の息を洩らした。

「だ、だってプリンツと大和は同じチームになりたがっていたじゃない？」

(いや、私はなりたがってませんけど!?)

洩らした息をのんだ。

「さつきも皆に聞こえないようにボソッと『プリンツには私がついていない』とか言ってたわよ」

「お姉様！ そのままで私のことを想って！」

(言ってませんし、想ってません！)

プリンツからの視線が熱い。

「大和、お前……」

「い、いや、私は！」

「——大和」

「う!？」

その時の瑞鳳の表情は私がいままで見た中でも随一に鬼気迫った表情であった。

(話を、全力で、合わせろ)

気迫でそう言っているのが伝わってくる。

「うう……!？」

「どうした、大和？」

「た、確かに言いました……! 言いましたよ、くそッ!」

「お前、なんでそんな苦しそうなんだよ」

「やったああああああああ、言質をとったあああああああ!」

「プリンツ、うるせえ黙ってる、はねるな、水しぶきが当たる」

「これが、大人の愛……!」

「磯風は今日聞いたことは忘れる。こら、忘れろつつたろ、メモろうとしてんじゃねえ」

飛び跳ねて嬉々とした声を上げるプリンツとその光景に興味津々な磯風を傍目に私は唇を噛んだ。

肯定してしまった。私にそんな趣味はないのに。本当はないのに。

「と、とにかく! これでわかったでしょ? プリンツと大和を引き離すべきではないわ。引き放すと爆発するわよ!」

「爆発するの!?」

「しねえよ、だからメモんなって」

(いつそもう死なない程度に爆発したい)

「いや、引き離すなって言っても……瑞鳳が言ったんじゃないの、重巡と戦艦の火力要員を一緒のチームにするなんてバランスが悪いって」

「あ、愛にバランスは関係ないでしょうがあッ!」

「あなたさつきから理論破綻しまくってるけど大丈夫!? らしくない

わよ!?!」

瑞鳳が目に見えて限界である。

ここまで瑞鳳が必死になってくれたのは凄く嬉しい。戦えない戦艦。それが意味する所を彼女はよく理解している。だからここまで庇ってくれたのだろう。

いや、理解したうえでここまで必死になってくれるのは彼女自身が優しいからだ。とても罪人だなんて思えない程に。

だからこそ、これ以上瑞鳳に恥をかかせる訳にはいかない。

「……あの、皆さん——」

「——お話し中失礼致します、七丈島艦隊の皆さん」

「——!?!」

私が口を開いた瞬間、その私の真後ろから響き渡った声に全員が飛び退いた。

無理もない。最早ほぼ零距离といえるまでの接近を許して尚、声を掛けられるまで私達の誰一人として彼女の接近に気が付いてはいなかったのだから。

「お前……艦娘か?」

天龍が腰の刀に手を掛けながらその少女に声を掛けた。

少女、というにはあまりにも凛としたその立振る舞いは歴戦の武士を思わせる、しかし、その外見はやはり齡二十歳もいかぬ少女に見えた。

少女は視線を動かして私達を一通り値踏みするように見回すと、濃厚そうな笑みを見せて私達に一礼した。

「話の腰を折ってしまい、大変失礼しました。私は横須賀鎮守府第四艦隊随伴艦、川内型軽巡洋艦二番艦、神通といえます。提督から海域哨戒の任を受けて推参致しました」

横須賀艦隊。その言葉を聞いて私達は警戒を解き、天龍は刀から手を離れた。取り敢えず敵ではない。

「私は七丈島艦隊旗艦を務める阿賀野型軽巡洋艦三番艦、矢矧よ。今回の海域哨戒の件、感謝しているわ」

「いえ、今は戦時中ですからね。お互い協力して助け合うようにと提

督も仰っていました」

彼女の口ぶりは極めて友好的に思えた。横須賀艦隊と聞いてどこか緊張していたのかも知れないが、普通に良い人ではないか。

そんな私や、他の皆も神通を見てそう安堵したそのタイミング、彼女はまるでそこを見計らったかのように再び口を開いた。

「まあ、廃棄予定だった危険因子とはいえ、戦術的価値が欠片でもあるなら守れというのがそちらの提督の意向ですしね？」

「——ッ！」

そのたった一言で、私達を取り巻く空気は険悪なものに変わる。最初に動いたのは天龍であった。

「やめておいた方が、良いですよ？」

「ぐッ!？」

天龍が、海面に手を踏み込み、刀を神通に向けて抜こうとした最中、彼女は天龍の方を一睨みしてそう言った。私が見ていた限りでは本当にそれだけである。

別に天龍の身体を拘束したわけでも砲塔を向けた訳でもない。ただ、一言天龍を見てそう言っただけである。

(う、動けねえ……)

たったそれだけで、天龍はそれ以上神通に近づけないでいた。

同時にプリンツ、瑞鳳、磯風が動く。

「お姉様！ 私の後ろに！」

「艦載機全機発艦準備！ 磯風、私の援護をなささい！」

「わかってる！」

「え？ え？」

私の前にプリンツが割って入り、磯風と瑞鳳は素早く後退を始める。

私と矢矧を除き、全員が明らかな臨戦態勢に入っていた。

神通と私達の間でいつ戦闘が始まったもおおかしくない緊張状態が続く。

その時。

「——ああああああ！ 神通さん！ やつと見つけましたよおおお

おッ！」

しかし、その緊張状態を破ったのは素っ頓狂な声で突如神通と私達の間割って入った。薄緑の髪に大きな緑のリボンを付けた艦娘であった。

「……あら、夕張さん。やっと追いついたんですね」

「私、足が遅いから置いてかないでくださいって三十回は言いましたよね!? もしかしてわざとですか! わざと私を置いて行っただんですか!?!」

怒り心頭といった様子で神通に罵声をぶつける夕張と呼ばれた少女に対して神通は困ったように笑う。

それを見て、私達の方も何か力が抜けてしまい、全員肩を落としたり。気が付けば体中が大量の汗で気持ちの悪い湿り気に包まれている。神通の方は汗一つかかず涼し気だというのに。

しばらく神通に向けて涙目で色々と訴えていた夕張は我に返って私達の方に気付くと、慌ててこちらに身体を向けて海面と並行になるまで深く頭を下げた。

「す、すみません! そちらに挨拶もせず! 私は横須賀鎮守府第四艦隊旗艦の夕張という者です!」

「は、はい……」

「あ、あの、私がない間に神通さんが何か失礼をしていませんか……?」

「ああ、丁度少し皆さんを挑発していたところだったんですよ?」

「あんたいい顔で何言ってるんですか!?!」

笑顔で淡々と言い放つ神通に夕張が再び怒りの形相で食って掛かる。

「もう……あなたが何か問題起こすと旗艦の私に責任問題が……うう、お腹痛い」

「あ、私胃薬持って来てますよ」

「胃薬の前にあなたは私に余計なストレスをかけないよう気遣ってください! 胃痛の元凶から胃薬貰うってなんか複雑なんですよ!」

「じゃあ、いらないですか?」

「……いる」

なんだか色々苦勞してそんな人である。

「とにかく、神通さんが大変失礼しました。この人、深海棲艦でも艦娘でも何にでも戦い挑んじやう戦闘^{バカ}狂なんです、本当にすみません！」
平謝りする夕張に流石に全員神通に対して文句を言う気にはなれなかった。天龍も肩透かしをくらったように頭を掻いて溜息をついている。

「あの、夕張……さん、だったかしら？」

「は、はい！」

（『さん』をつけた!?!）

おそらくは夕張から自分に近い何かを感じ取った矢矧が彼女に敬意を払った表れだろう。きつと二人共苦勞人だからに違いない。

「取り敢えず、二人共入港手続きをして貰いたいんだけど、いいかしら？」

「は、はい！ すみません、お手数をお掛けします！」

「では、皆さんまた後で」

夕張と神通は私達に一礼すると、矢矧に連れられてドックの方へ向かって行ってしまった。

「なんか、スゲエな、横須賀艦隊って。色んな意味で」

「はい……」

天龍の台詞が私達全員の感想を代弁していた。

あのやり取りの中で明確な勝敗などある筈もなかったが、私達がたつた二人の艦娘に終始圧倒されていたのは確かな事実であった。

☆

「執務室まで案内するわ、艀装はそこに置いてくれれば整備しておくわ」

「何から何まで申し訳ないです……」

「私はこのままで結構です」

「神通さんー！」

艀装を外そうとしない神通に夕張は肘で彼女の横腹を突く。

「私達の裝備の整備は全てこの夕張さんに任せていますので、そう

いったお気遣いは無用です」

「じ、神通さん、本当にやめてくださいってば!」

「……確かに見た目は酷い工廠だけれど、こう見えて一応妖精さんもいるわよ?」

今朝方、深海棲艦との戦いを想定して工廠の方に出向いた提督が、いつの間にか数人の妖精さんが現れていたのを確認している。

今までは一人も見かけなかったのに、いざ使うとなった途端に湧いて出てくる、それが妖精さんなのである。

「いえ、妖精さんよりも夕張さんの方が整備の腕は上ですので」
「~~~~~!」

夕張は顔面蒼白である。

しかし、矢矧は別段怒るでもなく。

「そう、なら構わないわ」

と言ったきり、それ以上は何も言う事はなかった。

「あれ絶対怒ってますよ、絶対怒ってますって! 神通さんのせいですからね!」

「大丈夫ですよ。彼女はあの程度のことと腹を立てる程器の小さな艦娘ではありません。それに、妖精さんよりあなたの整備技術の方が上であることは事実ですしね」

「……褒めても今までの独断行動に関しては許しませんからね」

少し恥ずかしそうに視線を逸らしながら夕張はそう呟く。

(相変わらずチョロいですねえ)

矢矧の後を歩く事数分、木造の扉の前まで来て矢矧は足を止めた。

「ここが提督のいる執務室よ」

「ご案内ありがとうございます」

「執務室に入る前に一ついいですか?」

「何かしら?」

執務室の扉に手をかけた矢矧に神通が声を掛ける。夕張はまた気が気でないといった表情をしている。

「まあ、これからそちらの提督にもご了承を頂くつもりなのですが――」

その次に放った神通の台詞は、矢矧の表情に驚愕の色を浮かべるには十分な内容であった。

「矢矧さん、横須賀鎮守府に来る気はありませんか？」

第二十二話「私の人生、そろそろ私の好きなようにさせてよ……!」

その日、七丈島鎮守府執務室内は普段の気の抜けた空気とは一変した異様な緊張感に包まれていた。

「それで、あなた達が横須賀艦隊の?」

「はい、旗艦、夕張と申します!」

提督の問いかけに緊張気味に答える夕張。

「随伴艦の神通です。よろしくお願い致します」

温厚な笑みを浮かべて余裕のある所作でお辞儀をする神通。この対照的な二人の艦娘を見て、提督は眉をしかめて言った。

「あの、今回こちらに来てくれたのはあなた達二人だけですか?」

「は、はい! すみません! わ、私も少ないとは思ってたんですよ!?!
でも……」

「提督が、私達二人で十分と仰いましたので」

深海棲艦の討伐に寄こされた援軍が軽巡洋艦二隻だけ。確か、報告では敵は戦艦級を含む六隻の一個艦隊とあつた筈だが。

確固たる自信の表れか、それとも慢心と驕りか。

「その両方でしようね、あの人なら……」

提督は夕張と神通の提督、所謂元帥の人柄を思い出しながら小さくそう呟いた。

「大丈夫、なんですよね?」

「ぜ、全力を尽くさせていただきます!」

「本来なら夕張さん一人でも十分な位ですから、ご安心を」

精神的な余裕が一致しない二人だと提督は内心で苦笑した。

「まあ、それはそれとしてなのですが、一つご提案があります」

一通り話に区切りがついたのを見計らい、神通が口を開いた。

「なんですか?」

「そちらの監察艦、軽巡洋艦矢矧を我が横須賀艦隊に迎えたいのです」

「え?」

提督は傍らに立ったまま先刻から口を開こうとしない矢矧に視線を向ける。

矢矧は表情を変えない。

「この件に関しては勝手ながら事前に矢矧さんには了承を取らせて頂いてます。そうですね、矢矧さん？」

「矢矧、本当ですか？」

「……………ええ、本当です」

動揺を隠しきれない提督に身体を向けて、矢矧は深く頭を下げて言った。

「提督、これまで大変お世話になりました」

その矢矧の台詞に、眼鏡のずり落ちた提督の口からは言葉も出なかった。

☆

「はあく、美味しい！ まさに秋の味ですねぇ！」

七丈島鎮守府、食堂。私、大和を含む七丈島艦隊は矢矧が横須賀艦隊の案内に消えたことにより、勝手に演習を中断して昼食を食べていた。

食堂では妖精さんが秋刀魚の蒲焼定食を振る舞ってくれた。よく脂ののった旬の秋刀魚の蒲焼にふつくらと炊かれた白米のおにぎりと味噌汁はあまりにも合い過ぎた。これが美味しくない筈がない。

「おかわりもたくさんあるよー」

「戴きますー！」

「あんたはじちようしてー」

「何で!？」

私と妖精さんとの必死の口論の脇で、磯風と瑞鳳も秋の味覚に舌鼓を打っている。

「もう秋って感じねぇ」

「ああ、疲れた身体に染みわたるようだ」

「いや、別に私達疲れるようなことしてないわよね？」

「臙装、重くないか？ 正直五分も背負っていたくないんだが……」

「貧弱過ぎるわ」

しかし、磯風のぐつたりとした様子を見るに、本当に疲れているらしいことは明らかである。やはり私を含め七丈島艦隊は運動不足になりがちなのかもしれないが、艦娘となり身体強化を受けた身でしかも最軽量の駆逐艦艦装が重いとなると、それもう出撃するのも厳しいんじゃないだろうか。

「やはり私は料理に生きるよ。この秋刀魚を焼く位なら今の私にだって」

「無理だろ」

「無理ね」

「無理だよお」

「秋刀魚を無駄にしたくないので私がやりますね」

「君達、最近私に対して遠慮がなくなってきたな」

他の食材ならともかく旬の秋刀魚を任せるのだけは許容できない。絶対にだ。

「しかし、こんなにくさんの秋刀魚、どこで取って来たんだ？ 島の市場でもここまで出回ってなかった筈だが」

「ここしばらくほっぱーにサンマ漁ってたです」

「アグレッツシブだな、おい」

最近姿を見ないと思っただらまさか一人でサンマ漁に行っていたとは。妖精さんらしいといえれば妖精さんらしい。

というかどうやって秋刀魚漁に行ったのかがすごく気になる。

「ついでにあれももらったです」

「大漁旗!? なんて!？」

妖精さんは食堂に大きく飾ってある大漁旗を指さした。

いや、食堂に入った時にあれの違和感には気が付いていたが、まさかあれも秋刀魚漁の戦利品だったとは。

本当に妖精さんは北方海域で一体何をしていたのだろうか。私の興味は膨らんでいくばかりである。

「ところで、あの横須賀艦隊の二人。この鎮守府にしばらく居座る気かしら?」

「まあ、他に拠点がある訳でもないですし、多分そうじゃないですか

？」

「えー、私、あの神通つて人嫌いだなあ」

「プリンツが好きそうなしっかり者のお姉さんタイプじゃないですか」

「私のお姉様は大和姉様だけですから！ 一生離しませんから！ 一生離しませんから！」

「なんで二回言ったんですか？」

プリンツの目は本気であった。

私は彼女から目を逸らしつつ、改めて横須賀艦隊の二人、特に神通の方を思い出していた。

あの時、危うく私達と彼女は戦闘になるところだった。彼女の私達と提督を小馬鹿にしたような発言によって。

別段、私自身のことについて悪く言われることに嫌悪感はない。私が罪人で、危険因子で、廃棄予定であったことはまごうことなき事実だ。しかし、そんな私達を救ってくれた提督への侮辱には耐え兼ねるものがある。

あの時、私を含む全員がそのことに対して怒り、手が出そうになったのだ。

しかし――。

(攻撃はしなかった)

否、できなかった。

天龍が神通に斬りかかろうと踏み込んだ瞬間、彼女から発された重圧感のようなものによって私達は気圧され、微動だにできなくなつた。

即座に瑞鳳が磯風を連れて距離を取ったのは正解だったろう。信じられないが、私達の誰もが直感したのだ。

彼女は、私達全員の戦力を合わせても遠く及ばないだけの戦力を有している。

「なにより、あの視線……」

まるで私達の一人一人を見透かしていくようなあの視線。そして、その後見せた、全てを理解したような余裕を含んだ彼女の笑みに、私

は恐怖した。

「……お姉様？ お箸が止まっていますけど？」

「え？ ええ、そうですね！ こんなに美味しいのに冷めてしまったら台無しですからね！」

プリンツの呼びかけで我に返り、私は頭から神通のことを振り払って、再び目の前の豪華な食事に思考を戻した。折角妖精さんが苦勞して取ってきてくれた美味しい秋刀魚。雑念に囚われていてはろくに味わえない。

気を取り直して私が秋刀魚の蒲焼とおにぎりを交互に口いっぱい頬張ったその時、食堂の扉が勢いよく開かれた。

「……………ここにいたのね」

「やふあぎっ!」

しまった、口の中が一杯で上手く喋れない。

「よう、矢矧！ お前も食うだろ？ 滅茶苦茶うまいぜ、この秋刀魚の蒲焼定食！」

「じしんさくですゆえー」

しかし、矢矧は険しい顔つきで天龍と妖精さんを無視すると、真っ直ぐ私に向かって歩み寄ってきて机に手をついた。

「大和、正直に答えなさい」

「ふえ？ な、なんでふか、急に」

「まず、口の中のものを飲み込みなさい！」

「ふあ、ふあい！」

矢矧の怒鳴り声に思わず丸ごと飲み込んでしまった。ろくに味わえていなかったのに勿体ない。

「あ、あの……勝手に食堂で昼食を取っていたのは、その……」

「あなた、戦えないの？」

その言葉に一気に私の顔から血の気が引いた。

「答えて」

「あの、その……」

「そんな訳ないでしょ、何よ急に。変な言いがかりはやめて頂戴」

瑞鳳が私と矢矧の間に割って入ってくる。

「……今は大和に質問しているの」

「その質問が言いがかりだって言ってるのよ」

「お、おいおい、お前らなんだよ急に、喧嘩はやめようぜ？」

「そ、そうだぞ二人共。一体どうしたんだ、なんかピリピリしてないか？」

天龍と磯風が矢矧と瑞鳳の間を取り巻く剣呑な空気に動揺している。プリンツもさつきから私の裾を掴んだままじっと黙っている。

そんな中で私は目の前の現実にはただ立ち尽くしていただけだった。

——私から話さなくともいつかは、バレる。それはわかっていただけ。

その時がこんなにも早く、こんな形で訪れるなんて。

いつかはきつと自分の口から話そうと思っていた。瑞鳳はそれを止めたが、いくら隠し通そうと仲間になった以上、話すべきことであると理解していた。

しかし、頭では理解しているつもりでも、一向に私の口からそれを話す覚悟決まらなかった。それどころか、この七丈島艦隊の温かさに甘えて、逃げてすらいた。

そのツケが今こうして帰って来たのだ。それも最悪な形で。

「矢矧、皆も、私は今まで皆に話していなかったことがあります」

「大和!？」

瑞鳳が私の口を塞ごうと動く。

しかし、もうここまで来て逃げる訳にはいかない。私は一度開いた口を閉じる気はなかった。これから深海棲艦の戦闘にかもしれない。その上で私という『戦えない戦艦』の存在を隠すのは他の皆の命まで危険に晒しているようなものだ。

——だから、ここで言わなければならぬ。その結果、私が再びあの死刑台に戻るようになるうとも。

「私は、誰かを撃つことができません。戦えない戦艦なんです」

「——!」

苦渋の表情を浮かべる瑞鳳を除く全員の顔が驚愕に包まれていくのがわかった。

そして、同時に全員が理解したのだ。それが一体どういうことなのか。

「大和、それは事実なのね？」

矢矧が静かに私に真偽を問う。それに私は首を縦に振った。

戦えない艦娘とはつまり、砕けた盾、刃の折れた剣、胴の折れた弓である。使い物にならないそれらがどうなるのか。

廃棄処分。全て一緒である。盾も、剣も、弓も、そして艦娘も。使えなくなれば、捨てるしかない、廃棄するしかない。そのために、艦娘にも解体と呼ばれる廃棄体系が存在する。

その内容は艦娘を元の人間に戻すという比較的有情な内容であるが、この大和に限ってその廃棄の形は異なる。

大和は元々死刑囚である。死刑寸前の所を提督が七丈島に匿ってくれているような状態である。そして、七丈島で大和達罪人を預かる大義名分として挙げられているのは『戦術的価値が残されている』から。

では、今、大和が戦えない戦艦だと発覚すればどうなるのか。

戦術的価値が消え失せた時、大和は再び死刑囚に戻ることになる。解体により人には戻れない。それ以前に彼女に宣告された死刑が執行されるからだ。

つまり、大和が戦えない戦艦であるという事実が周知の事実となれば、大和の実刑が執行される。

私や瑞鳳がこれまでこの事実を隠そうとしてきたのはこれが理由であった。

「そう、そうなのね」

「はい」

矢矧は静かに私にそう言った。

矢矧は監察艦である。そして、この大和の問題を報告する義務がある。大和の戦術的価値がなくなった以上は早々に死刑を執行すべきだから。

死刑宣告をされるだけの罪を犯した危険因子を意味もなく自分の懐に忍ばせておく理由など皆無なのだから。

「わかったわ」

「え？」

てつきり何かしらの罵声が飛んでくるかと思っていた。

しかし、矢矧は今までの鬼気迫る空気を途端に消し去ってしまふと、まるでもう用はないと言わんばかりに食堂を出て行こうと歩いていく。

「ちよ、ちよっとー！」

「何？」

「あ、あの、怒らないんですか？ 私は今までずっと……」

「別に？ だって、私はもうあなた達の監察艦じゃないもの。あなたが戦えようが戦えまいが関係ないわ。今の質問は私の選択が正しかったことを確認したかっただけよ」

「……え？」

監察艦じゃない。

その言葉に全員が反応を見せた。

矢矧はおもむろに右腕を掲げて見せる。そこにはいつも彼女が身に着けている黒いリング、スタンリング起動リングがなくなっていた。

「さつき話がまとまってね、私は横須賀艦隊に移籍することになったわ」

「は？ お前、何言ってるんだ……？」

「そのままの意味よ。私はもうあなた達の監察艦じゃない。だから、あなた達が何者で、どうなろうと知ったことじゃないし、関与する気もないわ」

「きゅ、急にそんなことを言われても困るのだが……」

「急、ねえ。あなた達にはそうかもしれないけれど、私にとってはむしろようやく、よ」

「ど、どういうこと？ さつきから矢矧が何言ってるのか、全然わかんないよお」

プリンツの言葉に痺れを切らしたのか、苛立った様子でこちらから目を背けて背中を向けると矢矧はダムが決壊したかの如く、怒声を上

げ、まくしたてるように話し始めた。

「わからないなら、言つてあげましょうか!? 私が今までどれだけあなた達に! この鎮守府にうんざりしていたか!? 島全体の平和ボケした空気! 反省の欠片も見られない野放しにされた犯罪者! やる気を感じられない提督! ここに初めて来た時からずっと思つていたわ、私はこんな所に来るために艦娘になったんじゃないって! こんな怠惰の中でゆっくりと腐敗していくような、こんな日常を送るために、私は……!」

最後の方は声が掠れていた。

矢矧の言葉に、私達はただただ圧倒されていた。矢矧が今までため込んでいた心の内。その心の叫びはあまりにも私達には重すぎた。

矢矧に迷惑をかけたっぱなしだったのは知っている。矢矧がいなければ、この鎮守府は、私達はいなかった。

でも、それでも、少しは、ほんの少しは矢矧もこの日常を楽しんでくれているものかと思っていた。

いや、私がそう思い込みたかっただけなのかもしれない。

実際、目の前の矢矧は今までため込んだ負の感情を私達にぶつけているのだから。

「そして、新しく来た罪人は、戦えない戦艦。もう、守つてあげる価値もないじゃない。はは……もう、怒りを通り越して笑っちゃうわ」

「……………っ!」

「お前、その言い方はねえだろ!」

「甘えるなッ!」

「ぐ……!?!」

罵声と共に再び私達を睨み付ける矢矧に全員が気圧されてしまっていた。

見れば、矢矧の目からはいつの間にか涙が流れ始めていた。

「いい加減にして……なんで私があなた達のために、犯罪者のためにここまで己を殺さなくちゃならないの。私が何をしたっていうの?」

深海棲艦から人々を守るために艦娘になって、今まで人一倍努力を積んできた……そんな私が、なんであなた達なんかのために心を砕か

なくちやならないの……？ やつと、やつと私の努力が認められたのよ、横須賀艦隊よ？ 艦娘なら誰もが一度は憧れる、あの横須賀艦隊に、ようやく私は認められたの。もう、充分でしょ？ 私、あなた達のために十分頑張ったでしょ？」

「……………」

「私の人生、そろそろ私の好きなようにさせてよ……！」

涙を流しながら訴える矢矧に、誰も返す言葉はなかった。

こちらを睨む矢矧の視線に私達が耐え兼ねた頃。次に聞こえてきたのは食堂の入り口から響いた静かな声だった。

「そう、でしたか。そこまで辛い思いをさせてしまっていたんですね」

「提督!?」

矢矧の表情が驚愕に歪む。

提督は帽子を取ると、矢矧に向けて深く頭を下げた。

「申し訳ありません。あなたを縛り、あなたに長い間辛い思いをさせてしまったのは全て私のせいです。私の我が儘のせいで、あなたに取り返しのつかないことをしてしまいました」

「やめてください、提督……！ 私はあなたにそんなことをして貰いたい訳じゃ……」

「いえ、全ては私の責任です。知らず知らずの内に私はあなたの心を無視して、自分のいいようにあなたを使っていた。提督失格です。どうか、謝らせてください」

「やめろッー！」

矢矧が提督に掴みかかり、無理矢理提督の頭を上げようとする。勢い余って提督は矢矧に押し倒される形で床に叩き付けられる。

矢矧に馬乗りされながら、尚も提督は構わずに続けた。

「あなたの苦しみは全て私に責任があります。だから、どうか大和達のことには赦してくれませんか？ 彼女達も結局は私の我が儘でここにいるだけなんです。七丈島艦隊があなたの重みになっていたら、それは彼女達ではなく、私の責任なんです」

「……………ッー！」

「横須賀艦隊への移籍の件、承認しておきました。心置きなく行って

きてください」

笑顔でそう言う提督に反して矢矧の表情はなんとも複雑な表情であった。

まるで、何もわかっていない。そう言わんばかりの様々な感情の入り混じった、人間の表情をしている。

「矢矧、最後にお礼を言わせてください。今まで私のために尽力してくれたこと、本当に感謝しています」

「提督、私は——」

「ありがとうございます」

「——！」

その瞬間、矢矧は提督の身体から勢いよく起き上がったかと思うと、食堂から逃げるように走り去っていった。

食堂の中には重苦しい静けさだけが残っている。

「矢矧……」

私の中で、最後に矢矧の言いかけた言葉と苦しそうな表情だけがいつまでも脳裏に焼き付いていた。

第二十三話「でも、私がどうなるうとも、大和は必ず守ってみせる」

数刻前、執務室前。

「矢矧さん、横須賀鎮守府に来る気はありませんか？」

その神通の言葉に矢矧は扉にかけた手を止めて、後ろに向き直った。

「断るわ」

「あら、即答ですか」

神通は驚いて目を丸くした。

「だって訳がわからないもの。私にあなた方のお眼鏡にかなうような所があつたとは思えないのだけれど」

「ご謙遜を。立ち振る舞いを見ればすぐにわかりますよ」

神通は口元に手を当てながら笑って言った。

「先程私があえて皆さんを挑発したのは、それを受けての皆さんの動きを見るためです」

「……………」

「皆さん、様々な形で素早く迎撃態勢に入られていて、とても数年間島に引きこもっていた艦娘とは思えませんでしたよ」

「それはどうも」

「でも、あなただけは違いました」

私を真つ直ぐ見つめて神通は続けた。

「他の艦娘達が臨戦態勢に入るよう動く中、あなた一人だけは動かなかった。否、動く必要がなかったと言うべきでしょう。私が挑発する以前から、私の姿を認知した瞬間に、既にあなたは私の間合いから外れつつ迎撃行動を取れる位置へと既に移動していた。私すら気付かない内に」

「買いかぶりね」

「噂には聞いていました。ここに来るまでは半信半疑でしたが。でもあなたの動きを見て確信しましたよ。やはりあなたは『あの』矢矧さ

んなのですね?」

私の否定の声など意にも介さず、神通は確信の籠った笑みを向ける。

「矢矧さん、あなたのいるべき場所はこんな所じゃない筈です」

そう言つて神通は私に手を差し伸べる。

私はその手を見て小さく笑うと、ゆっくりその手を振り払う。

「わかつてないわね、何回も言わせないで。断るわ」

「……理由を聞いても?」

「別に大した理由じゃないわ。ただ、一度始めたことを途中で投げ出すのは性に合わないのよ。ここの監察艦として、まだ七丈島しちじまを離れる訳にはいかないわ」

「……困りましたね」

その返答を聞いて、神通の顔から笑顔が消えた。

その彼女の素の表情に多少なりとも恐怖した自分がいたことを私は否定できなかつた。

「……そういえば、すみません。さっきの言葉は誤りでした」

「はっ」

「もう一人いましたねえ。あの時、あなたと同様に私の挑発に対して動かなかつた艦娘が」

急に何の話が始めたのかと私は困惑の表情を隠せない。同じ仲間の夕張ですら今の神通が一体何を意図してそんな話を始めたのか理解できていないようだ。

しかし、その後神通から放たれた言葉で私達ようやくその意図を理解することになる。

「大和さん、でしたか。彼女、もしかして戦えないのでは?」

「なっ!?!」

「ええ!?!」

私と夕張が驚愕を声に出すのがほとんど同時であった。

「彼女、戦意と敵意は他の方々と同じかそれ以上に伝わってきていたのに、全く微動だにしていませんでした。まるで、動こうにも動けないみたいでしたね。そして、私は似たような症状を見たことがあります」

す」

「ここまで言えば、私と夕張にも神通が何を言わんとするのか理解できました。」

私の額に汗が滲み始めた。

「PTSD。心的外傷後ストレス障害。大和さんのあの様子、まさにそれなのでは？」

「……………」

戦争下におかれる兵士がいつ命を失うとも知れない極度のストレスから精神に異常をきたしてしまうという事例は数え切れないほど存在する。

艦娘も元は人間。無論例外の筈もなく、深海棲艦との戦いの激化している前線では特にこの障害を発症する者が多いと聞いている。

戦闘になると自分の意思とは関係なく身体が硬直して動けなくなるなどよく聞く症状である。

「…………そんな報告はなかったわ」

「本人が無自覚なだけかもしれないですね。でも、私の目は誤魔化せません。確実に今の彼女に戦闘能力は皆無です」

神通は確信の籠った声でそう断言した。

「さて、その上で問いたいのですが、この七丈島鎮守府に在籍している艦娘達は罪人にも関わらず島内でのみ自由を許されていますね？」

それは、何故でしたか？」

私は齒軋りをして目の前の神通を睨み付けた。わかっていて、あえて私の口から言わせようというのだ。これ以上なく性質が悪い。

「その、艦娘に戦術的価値が残されているから、よ」

「では、戦う事の出来ない大和さんにそれが残っているのでしょうか？」

「この……………」

「そこで一つ提案です」

私が神通に殴りかかりそうになった所で、神通は彼女の目の前に人差し指を立てた。

「あなたが私達と共に来てくれると仰ってくれるのなら、このことは

私達の胸の内に留めておきましょう。どうです？」

「——ッ！」

「そんなに怖い顔なさないでください。私もこんなことはできればやりたくなかったんです」

その言葉と共に神通の表情にまた笑顔が戻った。

要は大人しく横須賀艦隊に入らなければ、大和を死刑台に送り返すと堂々と脅されているのである。

私に残されていた道は一つしかなかった。悔しいが、彼女の方が一枚上手だったようだ。

仕方がない。私は大和をみすみす見殺しにする訳にはいかないのだ。

「わかったわ。あなた達と共に行けばいいんでしょう」

「ご理解感謝します」

神通の満面の笑顔にこれ以上ない敵意をぶつけつつ、私は少し乱暴に執務室の扉を開けた。

そうするしか、なかった。

☆

皆から、提督から逃げるように鎮守府を飛び出してから、どれだけ走り続けたかは定かではない。

気が付けば私は港に一人立ち尽くしていた。頬に何か冷たい感触を感じて上を見上げると、鼠色の空から雨がポツリポツリと降り始めている。

一旦どこか落ち着けるような場所に、そう思いまた足を進めた所で、目の前に立つ二人の人物が視界に入り、私はまたその足を止めた。「こんにちは、矢矧さん。良い天気ですね」

私の名前を呼びながら笑いかけるのは横須賀艦隊の艦娘、神通だ。私は彼女から目を背けながら言葉を返す。

「雨が降って来てるのだけれど」

「あら、私は雨、好きですよ？」

「……なんでこんな所に？」

「え、えつと、そちらの提督への挨拶も終わりましたし、ちよつとだけ

島を見て回りたくないな、なんて……はは」

矢矧の決して穏やかではない心情を察してか、怯え気味に話すのは神通の横に立つもう一人の横須賀艦隊の艦娘、夕張である。

神通は私のことを見つめると、どこか満足そうにまた笑った。

私は彼女の笑顔が嫌いだ。彼女の笑顔は友好や温厚を示すものではなく、何かしらの感情を隠すための作ったような笑顔だ。

笑顔の裏に何かを隠している。そんな彼女の笑顔を見たくなくて私は頑なに視線を逸らし続けた。

「私、すっかり嫌われちゃったみたいですねえ。全然目を合わせてくれません」

「あ、あの、神通さん。あんまり突っかからない方が……」

「何を言ってるんですか？ ただのスキンシップですよ。だって、これから矢矧さんは私達の仲間になるんですから」

「……………」

「その様子だと、ちゃんと皆さんとお別れが出来たみたいですね」

神通の一言一言が私の神経を逆撫でする。

わざとにしてもよくここまでの確に相手を精神的に追い詰めるような言葉が出てくるものだと逆に感心する。

私が彼女を睨み付けると、彼女はまるでだだを捏ねる子供を見るような困ったような笑みを見せる。

「これから背中を預け合う仲間としてせめてもう少し矢矧さんとは仲良くなりたいたいのですが」

「悪いけれど私はあなたを好きになれそうにないわ」

「私は大好きですよ？」

どこまで本気で言っているのかさっぱりわからない。

「約束は守って貰うわよ」

「勿論ですよ。必ず守りましょう」

彼女の胡散臭い笑顔で言われても全く信憑性がない。

その意を察してか、夕張が前に出て来て言った。

「大丈夫です！ 神通さんが変な気を起こさないよう私がしっかり見張っていますから」

「……ありがとう、夕張さん」

「つくづく信用がないようですねえ。悲しいです」

あんなことをした矢先にどの口が言うのだ。

まるで意外そうな顔でそんなことを言う神通に私は耐えきれなくなり、その場から立ち去った。

「出発は明日の昼になりましたから、準備をお願いしますね」

そんな神通の声が最後に聞こえた。

☆

矢矧が去っていった後、神通と夕張は雨が本降りにならぬ内に鎮守府へと戻ろうと来た道に戻っていた。

上機嫌な神通とは裏腹に夕張は不満そうに頬を膨らませている。

「そんなに気に入りませんでしたか？ 私のやり方」

「当然です」

夕張の冷たい態度に神通は困ったように笑った。

「卑怯ですよ。あんな風に脅して、あの人が首を縦に振らない筈がない」

「まあ、そうでしょうね」

「なにより！」

夕張は神通の前に進路を塞ぐようにして立ちはだかった。

「あの言い方じゃ、もう大和を死刑台に送り返すことができないじゃないですか！」

「天下の往来でそんなこと大声で叫んじゃ駄目ですよ、夕張さん」

神通に冷静にそうなだめられて、夕張は自分の口を慌てて塞ぎ、その後小さめの声で続ける。

「一体何を考えてるんですか？ 神通さんは提督の命令に背くつもりなんですか？」

夕張は神通を問い詰めるように続けた。

『『罪人大和の処分』それが、私達がここに来た目的でしょう！』

「いや、あくまでも目的は近海に現れた深海棲艦の駆除ですから」
「でも！」

「それに、提督は危険性が認められるなら、とも仰っていました。戦う

「こともろくにできない今の彼女に危険性なんて欠片もないでしょう」
「でも！ あいつは！」

「あなたは随分と大和さんのことが嫌いなんですね」

「当然でしょう！ あいつは！ あんなことを、して……まだ！ のうのう、と……！」

夕張は怒りのあまり過呼吸になりかけていた。

神通が背中を叩いてやると、激しく咳込んで何度か深呼吸を繰り返す。

「はー、はー………なんで、神通さんはあいつを見てそんなに冷静でいられるんですか？ 大和の私達を見た時の顔見ましたか？ あいつ、まるで初対面みたいな顔で私達のことー！」

「まあ、あの時の状況下で私達の顔なんて覚えていませんよ」

「それに！」

「夕張さん」

「う………」

神通の目に気圧されて夕張は言葉を呑んだ。

「あなたの怒りはよくわかります。でも、もう終わったことですから………」

夕張は俯いて黙ってしまふ。まだ納得しきれていないと言った様子だ。

神通は夕張の頭を撫でながら優しく笑いかける。

「そんなに大和さんが嫌いなら、上に報告すればいいじゃないですか」

「……それは、矢矧さんとの約束を違えることになるので、絶対に無理ですー！」

「義理堅いですねえ」

神通は朗らかに笑う。

今まで他の艦娘の手前抑えていた大和への怒りがここに来て爆発してしまっただろう。むしろ今までよく抑えていられたものだとも言える。

先の大和の『反逆行為』から、彼女との浅からぬ因縁を持つ者は横須賀艦隊に多い。夕張もその一人なのだ。

「……………すみません、少し取り乱しました」

しばらく神通が夕張を撫でてやっている、そう彼女は小声で呟いた。

「スッキリしましたか？」

「多少は」

「まあ、安心してください。これで大和さんを処分する機会が永遠に失われた訳じゃありません。今は、機を待ちましょう」

「はい……………」

「それに、艦娘一人を処分するよりは新たな戦力を迎え入れる方が有意義というものです」

「あの、私が言うのもなんですけれど、矢矧さんはそれ程に優秀な艦娘なんですか？」

その言葉に神通は不敵な笑みを浮かべて言った。

「どんな手を使っても手に入れたいと思う程度には優秀な艦娘ですよ」

「本当に汚い手段まで使って手に入れてましたもんね」

夕張の言葉に棘を感じつつ、笑みを崩さず神通は続ける。

「あなたは基本工廠に引きこもりがちなので知らないのも無理はないでしょうが、彼女は結構な有名人ですよ？」

「そうなんですか？」

「ええ、かつて『軍神』とまで呼ばれていた流浪の艦娘。それが彼女です」

☆

港から苛立ちに任せて歩き続けた結果、私はいつの間にか倉庫街にまで来ていた。いつも仕事の合間を縫っては猫達と戯れていた場所。

しかし、今日は雨が降っているからか猫は一匹も見当たらない。

「あ、雨……………」

そこでようやく今まで雨が降っていたことを私は思い出した。

見れば既に本降りになっており、私の服もびしょびしょに濡れている。

取り敢えず倉庫の壁際に寄って、雨を凌ぐ。幸い、倉庫から少し屋

根が飛び出ししているためギリギリそれが傘となつてその真下に雨は届いていない。

スカートや服をしぼつてから、ゆっくりと腰を下ろして、私は大きく溜息をついた。

「参つたわね」

雨に降られて、という意味だけではない。

今の自分は精神的にも色々参つてしまっている。

「でも、これで正解よね……」

「ニヤー」

「あら？ あなたは」

私の独り言に鳴き声を返したのは以前、この倉庫街の猫達の中にいた黒猫の姿である。確か、この辺りの野良猫のボスで誰にも懐かず、誰ともつるまらずいつも一匹でいると聞いていたが。

いつの間にやら私のすぐ隣に座っている黒猫を見て、私は数時間ぶりに笑みを浮かべていた。

「お互い雨宿りかしら？」

「ニヤウ」

「……………」

そつと私は黒猫に手を伸ばしてみる。天龍の話では触る事すら難しいという話だったか、どういう気まぐれか、黒猫は何も言わず黙つて矢矧の手に撫でられている。

「あなたも私も独りぼっちね」

黒猫は矢矧の方を見る。

「私もね、もう長いこと独りなのよ。ここに來てからはそうでもなかったけれど、今日また独りになっちゃったわ」

黒猫は黙つて矢矧の言葉を聞いているように見えた。矢矧も相手が猫であると自覚しながら、まるで誰かに話すように口を開いていた。

「でも、私がどうなるうとも、大和は必ず守ってみせる」

以前にも、同じ言葉を言った記憶がある。

以前にも、こうして猫を撫でていた記憶がある。同じような黒猫

だった。

そう、あれは確か私がまだ『軍神』などと大袈裟な異名で謳われる前、七丈島に来て監察艦になる遙か前、まだまだ未熟な一人の艦娘として仲間達と共にあの前線の泊地で戦っていた頃――

「――矢矧！」

「ん？」

その声と同時に私は手元で撫でていた黒猫から手を離し、同時に猫は声に驚いてどこかへ逃げてしまった。

「やつぱりここにいたんですね！ 本当に猫が好きなんですねえ、矢矧は」

「ああ、ごめんなさい。もしかして私のことを探していたの？」

私は後ろで腰に手を当てる彼女の方に顔を向ける。しやがみながら彼女の方を向くと丁度ギリギリと照り付ける太陽の方向に視線をやらなければならぬため目がくらんでしまう。

彼女は手で目の上にサンバイザーのように傘を作る私の手を強引に引っ張り上げる。何故かその手は酷く汗ばんでいた。

「探しましたよ！ 一時間はこの照り付ける太陽の下を走り回りましたね！」

「……あの、私別に非番じゃないからすぐ招集に駆けつけられるよう無線持ってきてるわよ？ まずはそれで連絡とろうとは思わなかったの？」

「へ？」

彼女は慌てて自分の腰についている無線を確認してから、頭を抱えて静かにしやがみこむ。

「気が付かなかった……！」

「相変わらずね」

「あはは、すみません。私バカですから」

そう言いながらまた立ち上がると彼女は恥ずかしそうに笑って頭を掻いた。

「それで、提督からの招集？」

「あ、はい！ 第一艦隊は全員至急、作戦会議室まで来て欲しいとのこと

とです！」

「既に一時間は経過しているけれどね」

「ほんとにすみません！」

「まあいいわ、急いでいきましょう、大和！」

「はい！」

大和。この少し天然な糸目の少女のことを私はそう呼んでいた。

八年前。私はどこにでもいる平凡な、まだ孤独を知らない、哀れで愚かな、しかしそれ故に幸せな一人の少女だった。

第二十四話「だから、もし私が明日沈んでも矢矧が
いるなら安心です」

「提督、大変遅れました！ 第一艦隊大和、矢矧、只今推参致しました
！」

「本当に遅い！ もうとっくに作戦説明は終わっているぞ！」

私、矢矧は大和と共に提督から招集がかかって一時間十五分もの遅
れを経てようやく作戦会議室へと入室した。

中では明らかに怒っている様子がみとれる提督と普段は第二艦隊
に所属している筈の翔鶴型正規空母一番艦、翔鶴の姿があった。

「すみません、提督」

謝罪と共に頭を下げる私を見て、非常に慌てた表情を浮かべると大
和はあたふたと提督に説明を始める。

「ち、違うんですよ！ 矢矧が悪いのではなくて私が矢矧を探すのに
手間取ったせいで矢矧まで遅刻してしまったというか、本来なら無線
で通信を取ればよかったのに私がそれに気が付かなかったせいとい
うか！ つまり私のせいで——」

「だろうな！ わかりきったことを説明しなくていい！」

「ええッ!？」

大和は驚愕とショックのあまり一步退いてしまっている。

「大和、もうお前とも長い付き合いだからな、俺もお前がどういう艦娘
なのかわかってるつもりだ。正直、今回の件もお前に矢矧の搜索を
任せた俺の采配ミスも大きいとは思っている」

「あはは、すみません、私バカなので！」

「ああ、勿論知っているさ。だからな？ 本当に悪いと思っ
ているなら、取り敢えずまずは頭を下げる、馬鹿」

「あ……はい……………」

この間、何が一番腑に落ちないかと言えば、ここまでずっと私だけ
が頭を下げっぱなしであったことである。

私達のやり取りを見て、隣で翔鶴が苦笑いを浮かべているのが目に見えるようであった。

☆

「——全く、我が艦隊の主戦力二人が揃ってこの大規模作戦の会議に遅刻など弛んでいるんじゃないのか?」

「すみません、提督」

「わ、私はいつだって真剣に、全力でやってるつもりなんです!」

「一番弛んでいるのはお前の頭だろうが!」

「はい! すみませんでした!」

この馬鹿は素直に黙って頭を下げるといふことができないのだろうか。

「うう、提督は私にばかり当たりが厳しい気がします」

「俺にはお前ばかりが何かしら問題を起こしているように見える」

「そういう所が可愛いんじゃないんですか!」

「開き直るな、阿呆が!」

「な! 嫁に向かってアホとはなんですか!」

大和は自分の左手の薬指にはめられている銀色に輝く指輪を見せつけて言った。

「それに、私はアホじゃなくてバカです!」

「そこは重要なのか!」

「アホよりもバカの方が可愛いじゃないですか!」

「いや、微塵も理解できない!」

「そもそも、私の良い所も悪い所も一緒に好きになってくださいよ!

それが愛つてもんでしよう!」

「愛する人のために少しでも悪い所を改善して成長するのも愛だと思うがな」

「じゃあ提督は今日からお酒禁止です! どう考えても毎日飲み過ぎですから!」

「お前! 酒は俺の数少ない楽しみなんだぞ!」

「——ねえ、二人共いつまで痴話喧嘩をしているつもりなのかしら?」
茶番に聞き飽きた苛立ち混じりの私のその一言でようやく二人の

痴話喧嘩は半ば強制的に幕を下ろした。いや、下ろさせた。

この二人は顔を合わせる度にこれだから困る。仲が良いのか悪いのかはつきりして欲しい。

まあ、思ったことを直接言い合えるという点ではこれ以上なく仲睦まじいと言えるのだろうか。

「……………よ、よし、取り敢えず今回の作戦説明に入ろう。二人共掛けてくれ」

「はい」

「どこでもいいのですか!?　じゃあ、提督のお隣でいいですか!?!」

「駄目だ」

「ええ!?!　なんですか、倦怠期ですか!?!」

「公私混同するなど言っている」

その後、不満げな大和を引つ張って私達が提督の対面の席に座ったところで、ようやく作戦説明が開始された。

「——今回の作戦は南方に集結しつつある敵戦力の撃滅だ。これまでのどの作戦よりも激しい海戦が予想される。普段以上に気を引き締めてかかってくれ」

「南方、ね」

私は緊張気味に呟いた。

南方での作戦はこれまでに幾度ともあったが、その全てに楽な戦いは無かった。特に、あの海域には単艦で一個艦隊に匹敵する化物、戦艦レ級が出現する海域だ。

少しでも油断すれば戦艦ですら容易く轟沈させられてしまうだろう。

「旗艦はいつも通り矢矧、お前に任せる。艦隊を勝利に導いてくれ」

「了解よ」

「随伴艦には大和、霧島、千代田、瑞鶴。そして、今回は入渠中の加賀に代わり、第一艦隊には翔鶴に加わって貰う」

「よろしくお願いします」

翔鶴は丁寧私達に向けてお辞儀をする。

私も第二艦隊の主力空母としての彼女の活躍は度々耳にしている。

彼女なら加賀の代わりも立派に務めることができるだろう。

私も大和も当然不満はなかった。

「ドックで装備と艀装を万全に整えた上で明朝ヒトマルマルマルに作戦を開始する。説明は以上だ。何か質問はあるか？」

「ないわ、大丈夫よ」

「うむ」

「私も大丈夫です！」

「おい、本当か？」

「何で私には不安そうに聞き返すんですか!?!」

大和が納得のいかない様子で文句を言っている。

彼女は私に助けを求めるように視線を送り、提督を指さしながらまるで駄々っ子のように頬を膨らませている。

「もう！ 矢矧もなんとか言ってくださいよ！」

「大和、当日になってからわからないじゃ済まないのよ？」

「矢矧まで!?! もう！ 皆私がバカだからってバカにして！」

「至極真当じゃないか」

「何も矛盾はないわね」

「もうっ！」

私と提督双方からからかわれて大和は不満と抗議の意を示すように両の腕を振り回している。

「悪かった、大和。少しからかい過ぎたな」

「むう~~~~」

大和はため息をついて面倒そうに謝る提督を、糸目を釣り上げてまだ睨み付けている。

提督は少し思案すると、ポケットの中から二枚の半券を取り出す。

「……………そうだ、明日の出撃に向けて英気を養ってもらうために間宮のアイスクリーム券を作戦艦隊の全員に渡しているんだ。矢矧と大和も今日はもう非番にしておくから二人で行ってくるといい」

「え、本当ですか!?! やったあ！ 愛しています、提督！」

「ちよろい。」

「それじゃあ、二人共もう下がっていいぞ。明日の作戦はくれぐれも

遅刻しないように、よろしく頼む」

「ええ、勿論よ」

「ぜ、善処します」

「返事が聞こえないぞ、大和」

「絶対に遅刻しません！」

「よし」

その提督の言葉と共に一礼した後作戦会議室から出ると、大和は私の腕を引っ張って今にも走り出さんとする勢いで間宮に私をまくしたてる。

「早く行きましょう、矢矧！ 間宮アイス！ 間宮アイス！」

「わかったから……って、あら、そういえば無線機返してなかったわね。大和は先に行っていて頂戴。私は提督に無線機を返してくるわ」
「わかりました！ じゃあ、先に食べてますね！」

「行っていてと言っただけれど」

その言葉を言い切る前に既に大和の姿は見えなくなっていた。

私は笑いながら息をつくとき、大和と自分の二つの無線機を返しにもう一度作戦会議室のドアをノックしようとして手を伸ばす。

その矢先、室内から洩れて私の耳に入って来た声はその手を止めた。

「——翔鶴、この指輪を受け取ってくれないか？」

「提督、それは………」

「翔鶴、俺とケツコンしてくれ」

私はしばらくその言葉に思考が停止していた。

次に気が付いた時には、頬を真っ赤にした翔鶴が逃げるように会議室を出る所に鉢合わせていた所だった。

「あ、あ、あの……！」

何か口ごもっていた翔鶴は、結局何も言わないまま私の横を抜けてどこかへと駆けて行ってしまった。

会議室の中には指輪をポケットの中に入れ直す提督の姿が見えた。

私はゆっくりと会議室に入っていく。

「提督」

「ん？ 矢矧か。どうした？」

「無線機を返し忘れていたから返しに戻ったのよ」

「ああ、そうか、ありがとう」

提督はいつもと変わらぬ素振りで私から無線機を受け取る。

私は我慢できなくなつて口を開いた。

「今のはどういうこと？」

「聞いていたのか。まあ、見ての通り翔鶴にケツコンを申し込んだんだ。当人には返事を聞く前に逃げられてしまったが」

「作戦前に艦隊の士気を乱すような行動はやめて欲しいわね。あなたには既に大和がいる筈よね？」

私の怒気の籠った言葉に提督は少し困惑したような様子を見せて笑った。

「おいおい、矢矧、勘違いするな。これは結婚ではなくケツコンだ。さらに正確にいうなればケツコンカツコカリ、だ。あくまでシステムの話であつて、お前の思うようなことは——」

「あなたにとつてはそうでも、大和や翔鶴にとつてはそうじゃないでしょう！」

思わず大きな声が出ていた。

しばらく沈黙が会議室内を支配し、一向に口を開かない提督に嫌気が差して私は怒りに任せて扉を開き、その場を後にした。

☆

「——つてことがあつたのよ！」

「ああ、だからそんなに怒つてるんですか。というか、それよりによつて私に告げ口しますかね普通。嫁ですよ、私。昼ドラだったら包丁とか持ち始めてますよ」

「どつちかつていうと火曜サスペンスよ、それ」

「どうでもいいですけど、やっぱり愚痴る相手間違つてませんか？」

「胸の内に留めたまま明日の作戦に出て旗艦の私がしくじる訳にもいかないでしょ！・ いっそ当人にぶちまけてやれと思つたのよ！」

「半分八つ当たりじゃないですか！」

甘味処間宮にて、私は未だ収まらぬ怒りと共にアイスを頬張ってい

た。娯楽も物資も乏しいこの泊地では間宮アイスは最高級の御馳走だが、今の私にはさして味も感じない。

「私は、提督には今まで何度も助けて貰っているし、この前線の泊地で轟沈が未だ一人も出ていないのはあの人の指揮のおかげだと思っているわ。それに、私が今こうして力を発揮できているのもね」

「矢矧の才能を最初に見抜いたのは提督でしたもんねえ」

主力の第一艦隊、その旗艦に私を抜擢したのは他ならぬ提督であった。

もし提督が私の才能を見つけ、それを指南してくれていなければ、きつとこうして大和達と共に立派に戦っている今はなかっただろう。

「ええ、だから、感謝しているし尊敬もしている。あの人は立派な提督だと思っていた。だけれど……さっきのあの人の姿を見ると、どうにもわからなくなってきてしまつて……」

「矢矧にとつて提督つてどういう存在なんですか？」

「一人で皆を守る強さと覚悟を持った人よ。でも、さっきのあの人をそんな風には思えなかつた」

「あつはつはつはつは！ そりやそうですよ！」

「え？」

突然、大和はお腹を抱えて大笑いしたかと思うと、笑い涙を指で拭いながら一呼吸置いて続けた。

「あの人は、そんな人じゃないですもん。矢矧の思う提督とは正反対ですよ。提督はむしろ一人じゃ何もできない寂しがり屋さんなんですよ？」

「ええ？ そんな印象は全くないけれど……」

「ふっふっふ、嫁にしか分からないこともあるんですよ？」

大和は得意げに笑つてそう言うと、糸目を薄ら開く。とても慈愛に満ちた優しい瞳をしていた。

「だから、誰かが傍に居て欲しいんですよね。矢矧が見たように誰かとケツコンしたりして自分に寄り添ってくれる誰かを求めている」

「大和だけじゃ足りないって言うの……？」

「そんなことはないんでしょうけれど、ほら私達はいつ沈むとも知れ

ないですから、ね」

「そんなことはさせないわ!」

私は寂しそうに笑う大和に思わずそう大声で叫びながらテーブルを叩いて立ち上がる。店内の視線が私に集中し、私は赤面しつつ周りに頭を下げながら静かにもう一度席に座りなおした。

大和は嬉しそうに私を見て笑っている。

「ありがとう、矢矧。勿論、私も沈むつもりはありませんよ。でもね、こればかりは本当に確証のないことだから仕方ないと思うんですよ」

「そんなの仕方なくないわ。提督が大和を信じ切れていないだけじゃない……! 大和はいいの!? あなたの代わりに提督が翔鶴や別の艦娘達とケツコンして、それでも提督を愛せるって言うの!?!」

「ええ、愛せます」

大和は強い口調で断言した。

「会議室でも言いましたけれど、その人も良い所も悪い所も一緒に好きになれる。それこそが愛だと思うんです。私はそういう弱さも含めて、あの人を愛しています。この想いに変わりはありません」

「……凄いわね、大和は」

「いえいえ、バカなだけですよ」

「本当に凄いバカね」

「混ぜないでください」

やはり、思い切り話してみても大分気が晴れた感じがする。

多少、提督に対して失望の念がある事は否めないが。

「それにしても、矢矧にとつて提督って一人で皆を守る強さと覚悟を持った人でしたっけ? ふふ、なんというか」

「何よ、理想が高すぎるって言いたいのか?」

「いや、その理論で行くと私達にとつての提督は矢矧になりますねって!」

「はあ!? どこがよ!?!」

私は突然の大和の台詞に声を大にして反論した。

「矢矧はたった一人で私達を引っ張れる位強いじゃないですか」

「それは旗艦なんだから当然でしょ!」

「それを当然のようにやってのけること自体が既に強さなんですよ」

大和はおもむろに私の手に自分の手を重ねて続けた。

「こんなに小さな手で、身体で、軽巡洋艦のあなたが水雷戦隊ではなく、私達戦艦や空母の先頭に立って指揮をしているという事実。これは明らかに並大抵ではない。全部の鎮守府と泊地回ったってそんなのはウチだけだと思いますよ?」

「それは、提督がそういう風に指示したからで……」

「悪いですけど、流石に私達も提督の命令だろうと生半可な艦に旗艦を任せるつもりなんてないですよ。自分の命に関わりますからね」

「……………」

「矢矧、あなたはもつと自分の強さに誇りを持っていい。そしてそれを当然と言つてのけられるだけの覚悟にも。そんな強いあなただからこそ、私達は全員あなたに命を預けてついて来るんですから」

そこまで言うと、大和は席を立ち上がる。

「だから、もし私が明日沈んでも矢矧がいるなら安心です」

「何を言っているの? そんな日は来ないわよ!」

「でも、もしそうなった時は、提督を、この泊地を、よろしく願いますね」

店の外へ出て行きながらそう言つて笑う大和を追いかけて私は言った。

自分にも言い聞かせるように、強く、言った。

「私がどうなるうとも、大和は必ず守ってみせる」

「ふふ、それなら私は絶対に沈めませんね」

一瞬驚いたような表情を見せてから、大和は和やかに笑った。

「それに、あなたに代わつてあの提督の世話なんてまっぴら御免よ。私にはあの人に対してあなた程強い愛なんてないもの」

「頼んでおいてなんですけれど私も矢矧に提督取られたら嫉妬で化けて出ちやいます」

「……………ちゃんと成仏してよね」

「ん? んん? 何ですか今の間は? もしかして幽霊苦手ですか?

怖いんですか？ いつもクールで万能超人の矢矧がまさかお化けが苦手なんですかあ？」

「違うわよ！ 大体幽霊なんて実在する筈ないでしょ！」

「幽霊苦手な人は大体そういうこと言いますよね！ あ、そういうば昨日の深夜の話なんですけれど——」

「唐突に怖い話始めるのやめてくれる!? ニヤニヤしてんじやないわよ、このバカ！」

「何ですかこの矢矧、可愛いー」

日が傾き、夕日のオレンジ色の光がじゃれ合う私達を眩しく照らし出していた。

私は幸せだった。信じられる仲間がいて、信じてくれる仲間がいて、仲間達と過ごす日常がある。

その日までの私にとってはそれが世界の全てであった。私の世界は夕日のような温かなオレンジ色に包まれていた。

そして、それはあまりに、この世界の真の色とはかけ離れて過ぎていた。

私は明日、それを思い知ることになるのだ。

第二十五話 「戦艦レ級……e l e t e !」

「寝癖よし、洗顔よし、朝食よし、歯磨きよし、体調よし、艀装接続よし、主砲よし、電探よし、タービンよし、作戦目標よし、航行ルートよし、作戦展開よし、敵勢力情報よし——」

「矢矧、出撃の度にそれやってますね」

「やれることは全部やってからじゃないと気が済まないのよ。万全な体勢で出撃したいから」

明朝、集合時刻の三十分前に私はドックで大和と共に出撃準備を進めていた。いつも通りだ。いつも通り万全な準備を完了し、いつも通り艦隊を指揮する。

装備と練度、情報が万全である以上、後は『いつも通り』ができればいい。決していつも以上は必要ない。

「——よし、これで大方準備は完了ね」

「真面目ですねえ」

「大和はもう少し緊張感をもって作戦に臨んで欲しいわ。さて、残った準備はあと一つ、ね——」

私のその言葉と同時に、準備を終えた他の随伴艦達も私達のいる出撃ドックに姿を現した。

その中には当然、翔鶴の姿も見える。

翔鶴は私と大和を見ると、気まずそうに一瞬目を逸らしてから、少し思いつめた表情に変わり、何か覚悟を決めたようにもう一度私達の方に視線を戻すと、そのまま真っすぐこちらに歩いてきた。

「あ、あの、矢矧さん。それに、大和さんも、おはようございます」

「おはよう」

「あ、翔鶴さん、おはようございますー！」

満面の笑みで元気よく挨拶する大和に酷く罪悪感に苛まれた表情を見せた翔鶴は意を決し、その口を開いた。

「あの、大和さん、私は——」

「あ、ケツコンの話ならもう矢矧から聞いてますよ？」

「あ、え……?」

「大丈夫です! 正妻の座は譲りませんが私は一向に構いません! むしろウエルカムです!」

「え……ええ……?」

おそらく、昨日の件に関して自分から大和に事情を説明しようとは決別まで覚悟しながら苦心の末開いたのであろう翔鶴の口からは困惑の言葉しか出てこなかった。

昨日、既に大和の意志を聞いている私からして見れば、大方予想通りの展開なのでほくそ笑んでその場を見守る。

「だから、翔鶴さん。余計な気を遣わないであなたのしたいようにしてください。そもそもケツコンカツコカリは翔鶴さん自身の問題なんですから、周りの人を優先する必要なんてないんですよ? まあ、そういう気遣いが翔鶴さんの良い所ですけど!」

「で、でも……私なんかが大和さんと提督の間に入って嫌ではないんですか?」

「まあ、歴史上のトップなんて大体の人が一夫多妻じゃないですか?

そんなに気にすることでもないですよ、わかんないですけど!」

「ええ……でも……」

「まあ、大丈夫よ、翔鶴。この娘、バカだからそんなに難しいこと考えられないし、能天気だからむしろ気遣うのがバカバカしくなるわよ?」

「矢矧さん……」

いまいちまだ振り切れていない様子の翔鶴を後押しするように私は声をかけた。

「だから、この問題はあなたのしたいようにしていいのよ? あなたが熟考して出した結論なら私も大和もそれを応援するわ!」

「なにせ、私達は仲間ですからね!」

「矢矧さん、大和さん……:はい、私、もう一度しっかり考えてみます! ありがとうございます!」

翔鶴の表情に笑顔が戻った。

生き生きと駆けていく翔鶴を見守り、私は安堵の息をついた。

「これで、万全ね」

随伴艦よし。

私は心の中でそう呟いた。

☆

「――左舷、重巡1、軽巡1、駆逐3接近！ 艦隊、単縦陣をとりつつ、瑞鶴、翔鶴、千代田は第一次航空隊発艦！ 随伴の駆逐艦をアウトレンジから航空爆撃で散らして！ 大和と霧島は射程に入り次第、敵重巡と軽巡を弾着観測射撃！ 一気に蹴散らすわよ！」

「了解！」

私の指示と共にすぐさま航空機が遠く離れた敵艦隊の元へ飛び立ち、駆逐イ級を爆撃かつ制空権を確保。

露払いが完了し、既に半壊した敵艦隊が肉眼ではつきりと捉えられない距離まで近づいた瞬間、射程の長い戦艦が敵主力艦の重巡り級と軽巡ホ級を先制砲撃。

敵艦隊に一度の攻撃も許さぬまま、戦闘は終了した。

「あの、噂には聞いていたし疑っていた訳じゃないけれど、本当に凄いのね、矢矧さんって」

「ああ、翔鶴姉は矢矧の艦隊は初めてだったけ？ 凄いわよ、矢矧は。特に、敵艦を発見してから指示を出すまでの速さ。常に最適解を最短で導き出してる。生半可な敵艦隊じゃまず砲撃戦にすらならないわ！」
「これが第一艦隊旗艦を任される艦娘の実力なのね、私も彼女からもっと学ばないと」

瑞鶴の説明を聞いて改めて翔鶴は感嘆の声を上げている。

私は聞こえないふりをしながら、しかし、少し顔が熱くなっているのを感じていた。

「おや、矢矧？ 聞こえないふりしちやってどうしたんですか？ 顔真っ赤になつてますよっ！」

「う、うるさいわね！ そろそろ敵戦力の集結情報のあった海域に入るわ、気を引き締めなさい！」

「はい、ふふふ」

「そのたるんだ表情直せって言ってるのよ！」

ここまでは概ね予定通り。むしろ予定よりも順調に作戦を進行できている。今まで私の艦隊指揮下に入った経験のない翔鶴が戸惑わないか少し心配ではあったが、流石は第二艦隊旗艦。すぐに順応し、私の指揮の意図まで察して無駄なく動いてくれている。おかげで艦隊指揮も執り易い。

この調子ならさほど苦戦することもないだろう。

私は横目で随伴艦達を見てその艤装の様子や彼女達自身のコンディションをチェックし、万全であることを確認し、改めて気を引き締める。

そんな時、翔鶴が私に声をかけた。

「あの、矢矧さん、一つ報告が」

「何かしら？」

「たった今索敵機から連絡が入りました。四時の方向に孤立した敵艦隊が海域から離れるように航行していると」

「はぐれ艦隊？ しかも敵主力が集結しつつあるこの海域から離脱？」

私はそのはぐれ艦隊を叩くかどうか悩んだ。

「……そのはぐれ艦隊の編成は？」

「輪形陣をとって駆逐イ級eliteが五体、中心に旗艦らしき深海棲艦がいますが、瘴気で隠されて判別不可能のようです」

「……………」

私は少し考え込んでしまった。

駆逐イ級eliteの存在はいい。ただ、問題は瘴気によって隠されている旗艦である。深海棲艦はある程度の上位個体になると体から瘴気と呼ばれる赤や黄、黒のオーラのようなものを発するようになる。それらは電子機器にはチャフのように通信障害を引き起こし、かつ人体には毒ガスのように極めて有害に作用する。

そして、その瘴気を密集させれば霧のように艦一つを覆い隠すことも可能である。

輪形陣で進んでいることから空母系の深海棲艦を旗艦とした機動部隊とも考えられるが、姿が判別できない以上結論付けることもでき

ず、気味が悪い。

余計な弾薬と燃料を使うのは避けて第一目標を速やかに叩くか、念を入れてはぐれ艦隊も殲滅するか。

どちらも一長一短、正しい方がどちらとも答えは出せない。

「……！ こつちも前方に敵艦隊を多数発見！ 情報通り凄いい数よ！」

私が判断しかねている最中に千代田からさらに敵艦の発見報告が入る。

もう迷っている暇はない。私は第一目標を優先することに決めた。

「艦隊、単縦陣を維持！ 前方の敵戦力を撃滅するわよ！」

「了解！」

☆

「——はあ、はあ……終わったかしら？」

「え、ええ、もう周りに敵影はいないわ……」

「や、やっと終わりですか……？」

「翔鶴姉、大丈夫……？」

「この霧島も流石に限界です……」

「つ、疲れましたあ」

敵の懐に入って奇襲を仕掛けてから数時間にも及ぶ戦闘の末、ようやく私達は集結していた敵を全て撃滅することに成功した。

既に燃料と弾薬は尽き果て、艦隊は全員ボロボロ、母港に帰投するのが精一杯だろう。

「流石に早く……入渠しないとですねえ」

「あなたは、私を庇い過ぎよ……」

大破状態の大和を見て私は言った。流石に大和の方もかなりしんどいのか普段の元気は失せてしまっている。

それでも大和は無理やり笑って私に言った。

「旗艦を体張って守るのが、随伴艦の役目ですから、ね、はは」

「それ以前にあなたは私達の主力なんだから、無茶して欲しくないわね」

「いくら私に力があっても、それは矢矧の指揮があって活かされるん

ですから、これでいいんですって」

「全く、ほら、私につかまって。その状態じゃろくに航行もできないわ。私が少し引つ張ってあげるわ」

「えへへ、ありがとうございます！」

大和のおかげで損傷が中破で済んでいる私にはまだ余力がある。流石に大和を引つ張るなど無理な話だが、多少大和に楽をさせてやるくらいの手助けはできる。

疲れ切った笑顔で私につかまる大和を見て、私は改めて自身の課題を思い知らされていた。

軽巡洋艦という艦種である必然。私の火力と装甲の低さ。それがこの艦隊の弱点であった。

敵に空母や戦艦などの高火力艦がひしめく中、こちらは数ですら劣っているにも関わらず、その旗艦に軽巡をおいている。

いくら指揮が完璧だとしても、私ではせいぜい敵駆逐艦程度にしかまともに攻撃が通らない。そして、戦艦や空母に狙われれば高い確率で私は大きな損害を受けてしまう。

そのためにわざわざ攻撃に回るべき戦艦に私の護衛までやらせてしまっている。結果、本来彼女達が持っている攻撃力が充分に発揮されていない。これがこの艦隊の弱点であった。

「でもあれだけの数の敵がいて結局大破は私一人っていつもより調子よくないですか？」

「ん？ あれ？ 言われてみればそうね……？」

確かに大和の言う通りである。これならいつもの南方海域の方が被害は大きいくらいだ。いくら奇襲作戦の上、いつも以上に綿密に作戦展開できていたとはいえ、こんなことがあるのだろうか。

何か見落としている。そんな腑に落ちない感覚が私の胸中に渦巻き始めたその時、翔鶴の言葉と共に事態は急変した。

「あ、あれ？ おかしい、ですね？ 泊地との通信が繋がらない？」

「え？」

さつきから通信機で作戦完了の報告を試みている翔鶴が困ったように通信機の周波数を何度も合わせなおしている。

私の中で小さな不安の種が芽生えようとしている中、何かの偶然か、その音声は流れてきた。

『ザ、ザザ——助け——敵——が——誰か——けて——』

「——ッ！」

「矢矧さん、これは!？」

「急いで泊地に帰るわよー!」

明らかな助けを求める艦娘の声。

不安と焦燥の中、残った力を振り絞ってようやく帰ってきた私達を待っていたのは、赤々と燃える大火と幾重にも重なる砲撃音、そして肉の焦げたような臭いと硝煙が混ざりあつた戦場の臭いに包まれた凄惨な泊地の姿であつた。

☆

「これは……!?!？」

私は、その光景を前に思考が停止していた。

私達が帰るはずの場所、今朝まで私達が生活していた、私達の——

——赤、赤だ。うるさい地鳴りのような音。砲撃音、焦げ臭い、何で、どうして私達の泊地が。

どうして——

「——矢矧!」

「ッ!」

私の意識を再び正気に戻したのは、私につかまっていた大和の声であつた。

「早く! 早く皆を助けないと!」

「そ、そうね。そうだね。第一艦隊、全員戦闘態勢! 単縦陣を保ちつつ空母は索敵! 敵を発見次第、燃料も弾薬も全部使って全力で叩くわよー!」

「了解!」

一度折れかけていた心を立て直し、再び戦意を呼び起こしたその時、その心を再度挫くかのように、千代田と瑞鶴のいた場所が突然水柱に包まれ、彼女達の姿が私の視界から消えた。

正確には、どこからか放たれた敵の雷撃と航空爆撃が直撃したのである。

二人共大破炎上、一瞬にして仲間が二人も戦闘不能になった。

「くそー！ どこから!？」

「や、矢矧！ あそこです！」

大和が声を震わせて指さす方向を見て、私は絶句すると同時に、見落としていた何かを思い出した。

そうだ。今回の作戦の方が楽な筈だ。損害が少ないはずだ。あの
大艦隊には、いつもはいる筈の『あれ』がいなかったのだから。

「戦艦レ級……eleete！」

通称、一人連合艦隊。たった一体で航空戦、雷撃戦、砲撃戦をこな
し、艦娘十二人で編成された連合艦隊一つに匹敵する力を持つと言わ
しめる南方海域のみに出現する最凶最悪の深海棲艦。

白銀の髪に真っ赤な目を光らせ、赤黒い瘴気を発しながら私達を見
て猟奇的な笑みを浮かべる絶望の象徴がそこに立っていた。

「——散開ッ！」

レ級がその尻尾のような砲塔をうねらせた瞬間、私はそう叫んで大
和を引っ張り離脱し、霧島と翔鶴もそれぞれ千代田と瑞鶴を背負い、
左右に散った。

数秒後、私達がさつきまでいた位置に多数の水柱が立つ。おおよそ
四発は撃たれている。誰が沈んでもおかしくない威力と弾数だ。

「やっぱり、やっぱりあの時のはぐれ艦隊……！ くそー！ なんて気
づかなかったのよ！」

大和を全力で引っ張りながら私は自分を罵る。私達が敵に奇襲を
仕掛けるように、何故相手もそれをしてこないと思ひ込んでいたの
か、考えの甘い自分に心底腹が立つ。

あの時見つけたはぐれ艦隊は集団から離脱したのではない。出撃
したのだ。私達の泊地を奇襲するために。

おそらくは主戦力の私達が出撃するのを見計らって、瘴気で姿を隠
しながら、あの集結した深海棲艦の大艦隊すらも囷にして、奴らは私
達に致命的な一撃を与えに来ていたのだ。

それを折角翔鶴がいち早く見つけてくれたにも関わらず、私は気づかず、目の前の餌に無様に食らいついて、結果がこれだ。

「矢矧……」

「考えろー！ でないと、私のせいだ！ 皆が！ 大和が！」

私は必至で現状の打開策を模索し続ける。

まず私が考えたのは大和を安全な場所まで連れていくことだった。ただでさえ、燃料と弾薬が尽き、大破状態、その疲労もピークであったのに泊地からの通信を受けて余計急がせてしまったのだ。

大和はもう意識すら朦朧とした状態であった。艦娘として染み付いた習慣か、生きるための本能がそうさせているのか、足だけは未だ止めていないことだけが救いである。

いち早く安全な場所で休ませなければならぬ。

「そうだ、ドックまで戻れば！」

ドックまで戻って大和を帰投させ、それから再び私が囷になる形で出ていけば、大和はなんとか助かるかもしれない。

僅かな光明に賭けて全力で走り、ドックが肉眼に捉えられる距離にまで迫っていたその時。

——ドンッ！

鼓膜を破るような大きな砲撃音と同時に、私目の前と真後ろに巨大な水柱が上がり、私はバランスを崩してその場に倒れる。

夾叉。幸い、直撃はしていないが、その場で足を止めてしまった瞬間、私の死は限りなく決まったに等しかった。

砲撃音の方向を見ると、レ級がこちらに砲塔を向けて笑っているのが見える。

「あ……」

言葉はそれしかでなかった。目の逸らしようなない死との直面。その時、私の口から零れ出たのは怒りでも悲しみでもなく、情けないことに絶望の嗚咽だけであった。

——ドン

レ級の砲塔から火が出る瞬間、私の体は真横に大きく吹き飛んだ。最初、私はそれが砲撃によるものかと勘違いした。

しかし、揺れる私の視界に移ったのは、私を真横から突き飛ばした大和の腕。

そして、その直後、体から火を噴いて海面に倒れる大和の姿。

「大和ッ……!?!」

海水ではない、真っ赤な液体が私の顔に飛沫となってふりかかった。

第二十六話 「私を沈めたいのなら、魚雷五、六本くらい撃ち込まないと……駄目よ！」

「——あ、ああ……」

海面に倒れた大和を中心に周りの海水に赤が混じっている。

少しずつ、しかし確実に沈んでいく大和の体を私は急いで引き上げ、彼女の艀装を全て外して海に捨てる。

「大和！ 大和！ しっかりしなさい！」

「——あ……矢……矧」

「——っ！ 意識が！」

まだ意識がある。まだ助かるかもしれない。

「なんで！ なんで、そんな状態で！」

「……旗艦……守らなくちゃって……」

大和の腹部からあふれ出す血が、いつまでも止まらない。

あまりに傷が深すぎる。

「あなたが死んだら意味ないでしょ!？」

「ああ……そっかあ……そう、でした……ね」

「そうでしたね、じゃないわよ……!」

「あ、はは……すみません……私、バカなので……」

薄っすらと笑う大和の体から体温が、生気が、抜けていく。

傷口を抑える私の手から、流れ落ちていく。

「矢矧……お願いがあります」

「喋らないで！」

薄く朦朧とした目を開けて、大和が私の手を掴む。目の焦点が合っていないことからもう視力すら失っているのだろう。

しかし、それでも彼女の眼には強い力が宿っているように思えた。それがまるで最後の力を振り絞っているようで私はとても直視できない。

「矢矧……後は、頼みます……」

「いやよ」

「泊地と、提督を……どうか……」

「いやよッ！」

「矢矧……生きて……」

不意に、大和の手から力が抜け、海面に滑り落ちた。

大和の体の重みが急に増し、ゆつくりと海底に引つ張られていくかのように沈んでいく。

「ぐ……急に、重くッ！」

艦娘の殉職者の墓の中は空だと聞いたことがある。遺体がないからだ。

海上で戦死した艦娘のその遺体は海の底に沈み、二度と陸に還ることはない。それが『轟沈』と呼ばれる艦娘の死の形であり、逆らえぬ理。

だから、これには抗いようがない。私は知っていた。

「大和……！」

体を膝の辺りまで一緒に引きずり込まれながら、私の手はそれでも大和の体を決して離そうとはしなかった。無駄だとわかっているその行為を、私は全身全霊で続けた。

「ヒヒッ！」

聞こえてきたのは甲高い笑い声だった。

ゆつくりと声の方に顔を上げると、今まで私達の様子をただ傍観していたらしいレ級が悠長にしゃがんで頬杖を突きながら笑っていたのだ。

意外だった。今まで表情に笑みが見えることは多々あったが、レ級自身が声を発したことなど一度も聞いたことがなかったのだから。

レ級はゆつくりとその砲塔を今度は私に向ける。

私が逃げれば大和の体は海に沈み、二度と還ってこない。私は足を動かさそうとはせず、ただ、大和の体を引き上げること集中していた。夢中になっていた。まだ大和は死んでいない、大和の体を引き寄せることそんな夢の中に私は居座ろうとしていたのだ。

「——危ないッ！」

また、横から強い衝撃が私の体を揺らした。

「あ……い！」

今度は突き飛ばされたのではなく、強引に引つ張られたのだ。その拍子に私は大和の体を手放してしまふ。海の底へと離れていく大和の体に手を伸ばしたその直後、目の前を大きな水柱が遮った。

「あ………」

水柱と共に大和の姿は消えた。

「しっかりしてください、矢矧さん！ 死にたいんですか!？」

「霧島……?」

自分の襟首を引つ張って全速力で海を駆けているのは霧島であった。

「離して……大和が——ぐっ!？」

僅かな抵抗を見せる私に霧島は襟首を引き寄せ、私の顔に左拳を入れた。脳が揺れ、一瞬視界が歪む。口の中を切ったのか、ひりつくような痛みがこみ上げてくる。

「しっかりしなさいッ、矢矧！ あなたは、第一艦隊旗艦でしょう！

仲間を守るのは、もうあなたただけなんです！ 情けないですけど……あなただけが頼りなんです！ だからどうか、指揮を執ってください！ 大和さんの犠牲を無駄にしないでください！」

「……………」

霧島の拳と言葉で、拳の痛みと心の痛みで、ようやく私は我に返った。

「ごめんなさい……………」

私は一言そう呟いた。この間もレ級の容赦のない砲撃は続いており、いつ私も霧島も轟沈するか予断を許さぬ状況である。

しかし、私はいやに落ち着いていた。大和の死、それを認識した時、私の中の何かが切れた。

「霧島、手を離して。私は逆方向に逃げて隙を作る。あなたはそのままレ級の攻撃を耐え抜いて、合図を出したら残りの全火力をレ級に叩き込んで」

「——！ はい、了解です！」

霧島が返事と共に襟首を掴む手を離すと同時に、私は全速力で霧島

とは逆方向に走り始める。

幸い、燃料はまだ十分にある。逆行する私にいぶかしげな視線を送るレ級と睨み合い、私は戦闘を再開した。

「翔鶴、聞こえる?」

「は、はい! なんとか大丈夫です、戦えます!」

無線機越しに翔鶴の返事が返ってきた。声色は大分辛そうだが、彼女も歴戦の古兵。戦えると一度言ったならば、意地でも戦ってみせよう。

私は遠慮なく彼女に指示を出した。

「すぐに艦載機を発艦。霧島の援護と、私に向けて放たれるであろうレ級の艦載機を奇襲して撃墜して頂戴」

「はい、お任せください!」

すぐさま翔鶴が艦戦を発艦する。

同時に、私の動きに業を煮やしたレ級は予想通り私に向けて艦載機を飛ばしてきた。

現在、レ級の主砲は霧島を終始狙い続けている。そこに私が加われば、レ級は手数を増やして対応するしかない。艦載機を発艦してくるのは火を見るより明らかである。

あとは、発艦のタイミングで艦戦が敵艦載機を奇襲する形で撃ち落としてくれればいい。ましてや相手側は発艦直後の不安定な状態の艦載機、まず相手にならないだろう。

「ガッ!」

「――! 敵艦載機、全機撃破です!」

「流石ね。霧島の援護も引き続き頼むわ」

発艦した艦載機が突如後ろから飛んできた艦載機に全機撃墜され、レ級の表情に大きな動揺が浮かんだ。

この機を逃すつもりはない。

私は全速力でレ級の懐めがけて突撃した。

「な!? 無茶です、矢矧さん!」

霧島の悲鳴のような声が聞こえてくるが、私は速度を落とさない。次にレ級がとる手段はわかりきっている。どうせ、魚雷の滅多打ち

だろう。

「ガァー！」

獣のような咆哮と共に、予想通りレ級の足元から魚雷が発射される。しかし、その数は想定外だった。

「ちっ、十二本か。思ったより多かつたわね」

私の逃げ場を塞ぐかのように扇状に放たれた魚雷の射線を見て、今更どう避けようが一発は直撃せざるを得ない事実を確認する。

焦ることはない。ならば、一発耐えればいいだけだ。

私は魚雷の一本に突っ込むかの如く、さらに速度を上げた。

「矢矧さん！」

迎撃用の魚雷もださなかった。私に残された唯一の武装である魚雷一本。私はそれを発射管から取り外して右手に持った。

これを使うのは今ではない。そして――

「ダメ！ 耐えきれぬ筈がないわ！」

「矢矧さん！」

――私が死ぬ時も、今じゃない。

「――つあああああああああッ！」

魚雷直撃。艦装は大破し、服は破け、全身から出血し、意識は朦朧。その中で、私は自分を鼓舞するかのように雄たけびを上げてレ級に怯むことなく突撃した。

全身血まみれで指でつつけば倒れてしまう程の重症、あらかたの武装は使用できず、気力だけで立っているだけの敵にすらなりえない存在。

そんな私に目の前に立たれただけで、レ級の表情には恐怖の色が濃く浮かんでいた。

「そんな顔もできるのね……あなた達……」

「ガァアッ！」

レ級が息を荒くして私に主砲を向けようとする。

酷く滑稽だった。この互いの息遣いすら聞こえる間合いで主砲を撃てる筈もないのに。

「駄目よ」

私はこの程度では沈めない。

「私を沈めたいのなら、魚雷五、六本くらい撃ち込まないと……駄目よ！」

右手に持っていた最後の魚雷。それを私はレ級の顔面に叩きつけた。

「ギャアアアアアアアアアッ!？」

レ級の顔面で大きな爆発が起こり、レ級は身をよじりながら両手で顔を押しえて悲鳴を上げる。

「今よッ! 霧島!」

「距離、速度、良し! 全門斉射あああああッ!」

☆

「――以上が、作戦報告よ」

私は書類の束を目の前の机に置き、それまでの戦闘の経緯を全て提督に報告し終えた。いわゆる、事後報告というやつである。

あの凄惨な戦いからもう、一週間が過ぎた。

私を含む第一艦隊の生き残りは治療を受けてからほとんど休みもせず、泊地の復興作業に入ることになった。私達以上に重傷を負った者が多すぎた。

幸い、近くの泊地や鎮守府から多くの助っ人が駆けつけて来てくれたので、作業は順調に進んでいる。私達の泊地は取り敢えずの落ち着きを取り戻しつつあった。

提督は椅子に座って挙動不審に私と書類を交互に見ている。平静を装ったつもりなのだろうが、その手は小刻みに震え、貧乏ゆすりは机越しからでもわかるくらい激しい。

「あ、ああ、ご苦労だった、矢矧………それで、レ級は、し、沈めたのか?」

「……いいえ、残念ながら、あと一歩及びませんでした」

霧島の全火力をぶつけた砲撃。それでもレ級は辛うじて生き残っていた。満身創痍のレ級が狂ったように悲鳴をあげて逃げていく様子を燃料も弾薬も尽きて何もできなくなった私達はただ見ていることしかできなかつた。

私の手はいつの間にか握り拳を作っていた。

「……提督」

「ひっ」

レ級を仕留め損ねた。その言葉に目の前の提督は異常に怯えている様子であった。私は大きくため息をつく。

戦闘後、提督が発見されたのは執務室であった。無様にも部屋の隅で体を縮こませて震えていたらしい。レ級に泊地が蹂躪されゆく様を見て強いトラウマを植え付けられてしまったのだろう。最早、以前の彼の面影など欠片も残ってはいなかった。

いや、これがこの男の本来の姿なのかもしれない。

「や、矢矧……お前は、残ってくれるんだよね？」

「……」

提督のように心に深い傷を負ってしまった者は生き残った艦娘にも多かった。あの時の惨状がフラッシュバックされては暴れだし、鎮静剤で落ち着かせる。泊地内の病棟は一日中その作業の繰り返しである。そして、精神は壊れなかった艦娘達も、網膜に焼き付いて離れない恐怖と絶望の情景に多くが解体願を出願してきた。

轟沈、戦闘不能、戦意喪失。あまりに多くの艦娘達がこの泊地から消えた。

私は提督の言葉に冷ややかな視線で返した。

「た、頼む！ 残って、傍にいてくれ！ そうでないと……不安に押しつぶされそうになるんだ……気が狂いそうなんだ……一人は嫌だ、置いていかなくてくれ！」

提督に肩を掴まれ、後退した私の体はそのまま後ろの壁に押し付けられる。

なんだ、この男は。

私は今にも泣きそうな顔をする提督を軽蔑的に見つめた。

提督は、艦娘を管理し、行使する存在。そんな立場の人間が、艦娘に泣きながら媚びるなど、許されていいのか。

『あの人は、そんな人じゃないですもん。矢矧の思う提督とは正反対ですよ。提督はむしろ一人じゃ何もできない寂しがり屋さんなんです。』

すよ?』

大和の台詞が脳裏をよぎる。これが、こんな情けない姿がこの男の本質だというのか。

私達はこんな男を守るために、戦ったのか。こんな男のために大和は――

「――ッ!」

「矢矧! お願いだ!」

「寄るなッ!」

「がつ!」

こいつは、もう提督じゃない。

私は力の限り提督だった男を突き飛ばした。人間離れした艦娘の力は大の男すら敵わない。男は後ろによるめいて尻餅をつき、啞然とした表情で私を見つめている。

仮にも上官である提督への暴行。軍事裁判ものだが知ったことではない。私は先刻机の上に乗せた書類の束から一枚を抜き取って突き付けた。

「こ、これは……?」

「あなたの退役願よ。一人が嫌ならさっさと本土で家族とでも暮らせばいいわ。安心しなさい、これまでの功労を労って十分過ぎる額の退職金があなたには支払われることになっている」

「し、しかし……私の泊地は……!」

私は眉をしかめた。その自分の泊地が強襲され、皆が戦っている時に指揮もとらずに一人部屋の隅で怯えていたのは誰だ。

「ここは私達の泊地だ。お前のじゃない。」

しかし、言葉にはしなかった。そもそも泊地が強襲される原因を作ったのは私だ。この惨状は私の責任でもあるのだ。だから、私に彼を責める資格はない。

「泊地の引継ぎに関してはまだ済ませてあるわ。もう何も後ろ髪を引かれることはない筈、後はあなたの好きにすればいい」

「ま、待て! どこへ行くんだ!?!」

「……私はこの泊地を出ていくわ」

「な、なにを言っているんだ!? 艦娘の移籍の話なんて承認した覚えは……!」

「移籍じゃないわ」

私は提督だった男に背を向けて扉へと歩きながら言った。

「私はどこにも属さない、これからは適当に鎮守府や泊地を渡り歩いて生きていく」

「な……そ、そんなこと、できる訳がない! これから、ずっとたった一人で生きていくのか!?!」

「そうよ」

あなたとは違う。私は決別の意を籠めて断言した。

「提督にはやれる限り有情に対処した、泊地も落ち着いてきたし大丈夫でしょう。もう十分約束は果たしたでしょ?」

「だ、誰とのだ……?」

「大和との、よ」

もつとも、私は了承した覚えなどないあまりに一方的な約束だが。

「や、大和………っ!」

提督はそれ以上何も言わなかった。

「さようなら」

私は執務室を後にした。

ドックへ行き、数日分の生活用品の詰まったりリュックを背負い、艀装の準備を進める。そういえば、霧島や翔鶴達が 大和の墓を作ってくれていたらしいが結局私は一度も手を合わせていなかった。

手を合わせる気にはなれなかったのだ。だって、あそこに大和はいないのだ。彼女は今も暗い海の底に眠っている。

『私がどうなるうとも、大和は必ず守ってみせる』

『ふふ、それなら私は絶対に沈めませんね』

作戦前日、あの日交わした会話を思い出し、私は自嘲気味に笑った。私は、何も守れていないではないか。むしろ、守られたのは、私だ。『……もう、夕暮れね』

私は艀装を装着し終え、夕焼けが反射して橙色に輝く海面に足を下ろした。少し前の自分なら綺麗だと感じていただろうが、今の私には

恐ろしく感じる。

これから夜が来るから。何も見えない真つ暗の世界の中を、これから私は歩かなければならないからだ。

『それにしても、矢矧にとつて提督って一人で皆を守る強さと覚悟を持った人でしたっけ？ ふふ、なんというか』

『何よ、理想が高すぎるって言いたいなの？』

『いや、その理論で行くと私達にとつての提督は矢矧になりますねって！』

『はあ!? どこがよ!?』

そういえば、あの日もこんな夕日が見えていた。だからだろうか、こんなに作戦前日の大和との他愛の無い会話を思い出してしまふのは。

私は海の上で手を合わせ、黙祷した。

そうだ、提督に理想を求める必要なんかない。大和が答えをくれていたではないか。

他の誰でもない、私がなればいい。

「大和、約束するわ。もう、私の前では二度と誰も死なせない。私は一人でも皆を守るだけの強い艦娘になる」

大和の眠る海底に向けてそう呟き、私は泊地を去った。

☆

「——流浪の艦娘、ねえ？ 随分と無茶をするじゃないか」

「無茶は承知の上です」

煙草をふかしながら、中年男性のその提督は私を懐疑的な目でじろじろと見まわす。

「それで、私の鎮守府を訪ねて来たと言っていたが?」

「はい、一カ月で構いません。私をこの鎮守府に置いて戴けないでしようか。勿論、置いて戴ければそれに見合った働きはします」

「……別に置くのは構わないが、君は軽巡洋艦だろう。一体、何ができる? 悪いが遠征要員は足りているぞ?」

「では、どんな艦隊でも結構ですので、一艦隊を私に任せは戴けないでしようか?」

「ふむ？」

「それで、私の力量は理解していただけるかと」

泊地を出て、鎮守府と泊地を転々としながら流浪の艦娘として生活を始め、早一年が経った。

私は武者修行でもするかのよう鎮守府や泊地を訪れては、そこがむしやらに艦隊を指揮した。

元々、艦隊戦術に関しては熟知しているし、泊地時代の経験もある。何か一つ艦隊を指揮して見せれば、一様に提督達は揃って舌を巻いた。

大和も言っていたが、やはり第一線で戦える軽巡洋艦というのは相当珍しいらしく、私の能力は並みの軽巡洋艦のそれを遥かに超えていた。

戦力になると見なされれば、後は好きにだけ艦隊を指揮できる。

おかげで多くの艦隊、戦闘を指揮することができ、最近は以前より強くなっている自分を実感していた。

しかし、まだ足りない。私の理想にはまだ程遠い。

「自信があるのは結構だが、慢心して轟沈など許さんぞ？」

「大丈夫ですよ。私の前では誰一人沈ませません。これは慢心ではなく、覚悟です」

それからしばらくして、私に『軍神』などという大仰なあだ名が付いた。私が許される限り延々と出撃を繰り返しているせいで私がいた時だけその鎮守府の戦果が通常の二倍以上に跳ね上がるために付いたあだ名らしい。本当に大げさ過ぎて笑いが止まらない。

何が『軍神』だろう。まだ足りない。まだ、この程度の強さでは、あの絶望は乗り越えられない。

私は、もっと強く。人の何倍努力しようが足りない。もっと、強くならなければならないのだ。

——あの絶望の中で、大和を救える程に、強く

☆

「ん……あれ、私いつの間にか寝ていたみたいね」

「ええ、おはようございます、矢矧」

「↓」

私は驚いて顔を上げた。

そこには、赤いから傘を差して、雨の中私を見下ろす大和の姿があった。

「……大和」

気が付けば、傍に居た黒猫の姿はどこにも見当たらなかった。

第二十七話 「決闘です、矢矧」

私、矢矧が流浪の艦娘から、軍神へ呼ばれ始めてから数年後。私は縁あって提督に拾われ、七丈島で監察艦兼秘書官を務めることになった。

初めは二人だけだった鎮守府も年を経て天龍、磯風、瑞鳳、プリンツと人数も増えていった。

その数年は私にとって比較的、安寧を感じられた年月であった。

これまでとはかけ離れた戦いの無い日々がそうさせるのか、提督が連れてくる罪艦達の性分がそうさせるのか、その数年は息苦しい、張り詰めた日々から解放された気分だった。

泊地時代、流浪時代の戦いの日々が辛かった訳ではない。あれは私が自ら望んだ道だ。ただ、この七丈島に来てから数年、私は大和のことを徐々に頭の片隅へと追いやっていた。自分でも気が付かぬうちに、忘れかけていた。

痛みを、自責を、執念を、生きる意味を、忘れかけていた。

そして、そんなすつかり鈍らとなった私を咎めるように、諫めるように、私に全てを思い出させるように、あの日私の前に再び『大和』が現れたのだ。

☆

「大和……」

「矢矧、こんな所で寝ていると風邪をひきますよ?」
「……………」

無表情で矢矧を見下ろす大和に対し、矢矧が返答を返すことはなかった。

返す言葉が、なかった。

「…………じゃあ、要件だけ伝えますね」

大和はそう言うと、懐から封書を取り出し、それを矢矧の胸元に落とすとした。

矢矧がその封書を確認する前に大和が口を開いた。

「果たし状です」

「は？ 果たし、状……？」

「矢矧、この鎮守府には艦娘同士のいざこざが起きた時、なるべく穏便に解決するためのシステムがあるのをご存知ですか？」

「まさか……」

矢矧はその言葉を聞いて大和が何を言おうとしているのか気づいた。気づかざるを得なかった。何せこのシステムを考案したのは、他でもない矢矧自身なのだから。

「決闘デュエルです、矢矧」

決闘デュエル。双方が納得した何かしらのゲームの勝敗により完全決着させるこの七丈島鎮守府だけの特殊決着法。

「矢矧、私達が勝ったら、あなたにはこの鎮守府に残ってもらいます」

「……そんな決闘、私が受けても？」

「受けてください」

「嫌よ」

「何ですか？」

「それは……」

矢矧が口ごもるのを見て、大和が苛ついた口調で言葉を続けた。

「矢矧がここに残れば私が死刑台に送り返されるからですか？」

「なんでそれを……！」

「心配は無用ですよ。今回の決闘には、神通さんと夕張さんにも参加してもらおうつもりですから」

「どういう、こと……？」

「矢矧は、必ず私達七丈島艦隊が取り返すということですよ……！」

☆

同時刻、七丈島鎮守府。

雨の中、濡れて帰ってきた神通と夕張に突然真っ白なタオルが投げられてきた。

タオルが投げられた方向に視線を動かすと、そこには不敵な笑みを浮かべる天龍の姿があった。

「よう、横須賀のお二人さん、お帰り」

「あら、これはごく親切にありがとうございます」
「ど、どうも」

突然投げつけられたにも関わらず、神通はタオルを二枚とも別段驚いた様子もなく容易くキャッチし、一枚を困惑気味の夕張に渡して自分の頭をふく。

「帰ってきたところ悪いんだが、あんたらに話があるんだ」

「なんででしょう?」

「いや、大したことないんだけどよ。ウチには艦娘同士で一悶着あつた時は、平和的にゲームで解決しようっていう決闘デュエルツールがあるんだ」

「まあ、それは素敵ですね」

天龍の説明を聞いて笑顔で両手を合わせて感心した様子を見せる神通に天龍は凶悪な笑みを向けて言った。

「そういう訳だからよ、お前らが連れて行こうとしている矢矧、決闘デュエルで返してもらおうぜ」

「え!?!」

「……成程、そういうことですか」

明らかに激しい動揺を見せる夕張に対し、神通の反応はせいぜいその表情から笑みがうつすらと引いていく程度のものであつた。

しかし、神通にも夕張にもこれは少なからず予想外の展開であることは彼女達の反応から明白。

天龍は口早に言葉を続ける。

「ルールはこうだ。明日の朝九時、三対三の演習をやる。横須賀艦隊は矢矧とあんたら二人、七丈島艦隊は大和、俺、プリンツが戦闘に参加する。その演習で俺達が勝ったら、矢矧は返して貰う。かつ、大和のことも口外しないと誓ってもらうぜ」

「なっ?!? どこでそのことを……!?!」

「……盗み聞きですか?」

「ウチには一人盗聴、盗撮、尾行癖がある奴がいてな。知らねえうちにこの鎮守府全体に盗聴器が仕掛けられていたらしい。それで、偶然な」

「なっ!? そ、それは、盗聴罪じゃないですか! 立派な犯罪ですよ!」

「大和を人質にして矢矧を従わせるっつーのも、脅迫罪っていう立派な犯罪になるんじゃないかねえのか?」

「そ、それは……」

天龍は夕張を一睨みする。

殺気を放つその視線に気圧され、夕張はその口を閉じた。

「まあ、いいじゃないですか。いいですよ、その決闘^{デュエル}、謹んでお受けいたします」

夕張とは対照的に、特に動揺する様子もなくあっさり決闘を承諾した神通は再び先刻の笑みを見せる。

天龍にはその笑顔が不気味でならなかった。

「それで?」

「あん? それでって何だよ?」

「あなた達が勝てば矢矧さんを『勧誘』するのは諦めて、大和さんの秘密も口外しないことを誓いましょう。では、あなた達が負けたら?」

七丈島艦隊の皆さんは私達に何をしてくれるのですか?」

「……………そいつは、お前らで決めりゃいい」

具体的にこちらが負けたらどうするのかということを決めていなかった。

こちらにはもう命以外に差し出せる価値のあるものなどないし、まず、そもそも負ける訳にはいかなかった。

だから、天龍は黙って、神通が何を求めるのか提示するのを待った。

「そうですねえ、矢矧さんにはこちらの艦隊に所属して貰うのは勿論ですが……………あ、では、あなた達が負けたら大和さんは処刑で」

「なっ!?」

「え!?! ちよ、ちよっと、神通さん流石にそれは!」

笑顔でなんてことを言うのだ、この女は。

天龍は怒りを通り越して彼女にある種の畏怖の念さえ覚え始めていた。

しかし、天龍と夕張の反応を見ると、神通は笑って手を横に振る。

「いやいや、冗談ですって。流石にそれは矢矧さんに悪いですし」

「冗談に聞こえないんですよ！ あなたの冗談！」

全くもって夕張に同意である。

天龍は冷汗を拭いながら神通を睨み付ける。しかし、それでも彼女は依然として楽しそうな笑顔を絶やすことはない。

「それじゃあ、あなた達が負けたら、大和さんを一生死刑台に送らせないと誓います」

「……は？」

「あの、神通さん、冗談ですよね？」

「いえいえ、今度は本気です」

「はああああ!? 何言ってるのかわかってるんですか、神通さん!？」

全くもって夕張に同意である。

ここで何故七丈島艦隊にとつて有利な条件を出すのか。その意図がさっぱり読めない。

これでは勝つても負けても大和が死刑台送りにされることはない。

天龍達にとつては良い条件でも神通達に利点があるようには見えない。

「何を企んでいやがる?」

「いえいえ、何も。私達はよかれと思ってやっているですよ? あ

なた達が勝てば私達は大和さんの秘密を口外しないと誓います。しかし、この条件では私達『以外』が同じように大和さんの秘密に気付いてしまうケースは保証しかねますから、私達が勝った時はそこまでアフターフォローして差し上げます、という私の厚意ですよ」

おかしい。ますます神通達に利点見つからない。

天龍が頭を悩ませているその時、鎮守府の扉が開き、びしょ濡れの矢矧と傘を差した大和が入ってきた。

「お帰りなさい、矢矧さん。今の話、聞いてましたよね?」

「ええ」

「やられた……」

「大和、どうしたんだ?」

矢矧は思いつめたような表情で俯き、大和は悔し気に唇を噛みしめ

ている。

「そう、そういう条件なら、この決闘は負けられないわね」

「は？ 矢矧、てめえ、何言ってる………そういうことか………！」

そこで天龍はようやく気が付いた。

矢矧が横須賀艦隊に行こうとしているのは大和の命が人質とされているからだ。だから、天龍達は神通達に口封じをするために決闘を挑んだ。

『七丈島艦隊が勝てば、矢矧は七丈島艦隊に戻り、大和が死刑台に送られることもない』

さつきまではこういう条件であった。これなら矢矧が決闘でわざと負ければそれで全て解決であった。

しかし、今の神通の一言で、この条件は大きく変わったのだ。

『七丈島艦隊が勝てば、矢矧は七丈島艦隊に戻るが、大和が神通と夕張以外の手によって死刑台に送られるかもしれない』

『横須賀艦隊が勝てば、矢矧は横須賀艦隊に入ることになるが、大和は誰の手によっても死刑台に送られることはない』

つまり、言葉尻をとって七丈島艦隊の勝利によって大和が死刑台に送られる可能性を示唆した。

この一見神通達にメリットのない提案は矢矧がこの演習でわざと負けるようなことがないように釘を刺すためのもの。

矢矧には今の神通の言葉がこう聞こえただろう。

『もしお前が決闘でわざと負けるようなことがあれば私達以外の誰かが大和を死刑台に送るだろう。大和を助けたいのなら勝利しろ』

「なんてドス黒い野郎だ………！」

「明日が楽しみですわね」

大和と天龍の表情が苦渋に満ちていくにつれて、神通の笑みがより一層輝いていくように見えた。

☆

「——そう、やっぱりそう上手くはいかないわね」

「完全にしてやられたぜ………！」

神通達と別れて天龍と大和は瑞鳳の部屋を訪ねる。

既に瑞鳳の部屋には矢矧を除いた七丈島艦隊全員が集まっている。

「折角、矢矧を取り戻せると思っただのに！」

「横須賀艦隊、いや、あの神通という艦娘。ただ者じゃないな」

予定通りならばあとは明日矢矧が演習でわざと負けて七丈島艦隊が勝てば矢矧は戻ってくれる上に大和の秘密も口外されないハッピーエンドであった。

しかし、神通の存在がそれを阻んだ。

暗くなる空気の中、瑞鳳は手を叩く。

「はい、やめ！ 何しけた顔してんのよ！ 別にこの程度予想の範疇よ。戦うしかないのなら、道は一つでしょ」

「……………」

「——勝つよ、あいつらに。真っ向からね。それとも、諦める？」

瑞鳳の言葉を聞き、即全員が首を振った。全員の目にまた覚悟が戻っていた。

当然だ。この程度で諦めるほど聞き分けの良い者は七丈島艦隊にはいない。

「じゃあ、すぐに明日の準備を始めるわ。全員、私についてきて。七丈小島に行くわよ」

「七丈小島だあ？ 行ったことねえがあそこになんかあんのか？」

「私行ったことないなあ」

「私もだ」

「え、いいんですか、瑞鳳？ 皆にも秘密にしているんじゃない？」

七丈小島には妖精さん達がいる。

七丈島が戦力を有しているという事実をできうる限り隠すために今までも仲間にさえその存在を隠し、知っているのは瑞鳳一人に留めていた。最近になり、妖精さんの熱い希望でようやく大和がその存在を知る二人目になったばかりだ。

そこまで慎重に隠し続けてきた秘密をこんな事態とはいえ、いきなり七丈島艦隊のほとんどにバラしてしまってもいいのか。

瑞鳳は仕方ないと言った感じで頭を掻いた。

「まあ、非常時だし仕方ないわ。それに、出し惜しみしてちや横須賀艦

隊には勝てない。鎮守府にあるガラクタ装備じゃとても勝負にならないわ」

確かに、鎮守府に最低限置かれた装備は使い古された拳句、どれも低火力装備ばかりだ。とてもあの装備で横須賀艦隊の相手になるとは思えない。

かといって、装備を整えた所で、やはり対等に戦えるかは怪しい所だが。

「ま、安心しなさい。装備だけじゃなく、奴らを倒す作戦もちゃんと考えてあるんだから。ふふ、ふふふ」

(うわ……あれ絶対エグイ作戦考えてるな)

(慈悲もなく非道の限りを尽くしそうな顔してますね)

(完全に悪役の笑い方してるよお)

(なんか、瑞鳳楽しそうだな)

その時の瑞鳳の笑顔は真っ黒に輝いていた。

☆

「……………」

私は電気もつけず、部屋の片隅でただ膝を抱えて虚空を見つめていた。

「私は……………」

『矢矧は、必ず私達七丈島艦隊が取り返すということですよ……………！』

脳内で大和の言葉が反響する。

演技とはいえ、罵詈雑言を吐き散らして七丈島艦隊を抜けた私を、大和は、皆は必死になって助けてくれようとしている。

どうやらプリンツの盗聴器デューエルが私と神通達の会話を拾っていたらしいが、まさか横須賀艦隊に決闘まで申し込むなんて。

あまりに無謀すぎる。

「何で……………」

わからない。

だが、わかる必要もないと思った。

どちらにせよ私は勝たなければならない。大和を死なせないために。

「私がどうなろうとも、大和は必ず守ってみせる」
かつて守れなかった約束。
今度こそ守ってみせる。

——そして、決闘の朝はやってきた。

第二十八話 「矢矧は必ず、私『達』が取り返します！」

決闘デュエルの日の朝がやってきた。

「寝癖よし、洗顔よし、朝食よし、歯磨きよし、体調よし、艀装接続よし、主砲よし、電探よし、タービンよし、目標よし、作戦展開よし、演習情報よし——」

「あら、早いのですね？」

「……昨日はよく眠れたかしら？」

「ええ、おかげさまで」

ドックで演習前の最終確認をしている私に神通と夕張が姿を現した。

神通はいつも通り笑顔を浮かべているが、夕張は若干顔が青い。

「夕張さんは大丈夫なの？」

「ああ、この子あまり戦闘にはでないので緊張で固まってるみたいで」

「うう……お腹痛い」

「……よくそれで深海棲艦の駆逐任務を引き受けたわね」

「返す言葉もございません……うう」

しかし、これまでの艦隊指揮の中でこういうことがなかった訳じゃない。むしろ、何一つ問題のない艦隊の方が珍しいのだ。

過去には自分以外が全員戦砲雷撃戦未経験者ということもあった。

「まあ、いいわ。問題ない」

「それは頼もしい限りです」

それに、癪ではあるが、最悪この目の前で笑っている神通が一人でもなんとかするだろう。

大和が戦えない以上、今回の演習参加艦の中で最強は間違いなく彼女だ。

「……来たわね」

「おはようございます、矢矧」

ドックの扉が開き、大和達が入ってくる。私を除く、七丈島艦隊全員の視線が私に突き刺さる。

「それでは、そろそろ演習場に行きましようか」

私を説得しようと言いかけてくるかと思ったが、大和は手短にそう
呟いていち早く海上へと抜錨する。

他の皆も同様にして続く。

「あら、冷たいですねえ。昨日までは同じ艦隊の仲間だったのに」

「……私達も行くわよ」

大和達が何も言わないのならばいい。

私も何も言うことはない。

全ての決着は海の上で、砲火を交えてつけよう。

私は冷たい海水に足をつけた。

☆

大和達についていった先には、半径500メートル程の円形を描く
ように浮きを設置して作られたステージが用意されていた。

「ここで演習を行います。よろしいですか?」

「ええ、構わないわ」

昨日の今日で作っただけに作りは単純かつ雑であるが、周辺の住民
への被害を考えて事前に戦闘範囲を決めておくのは演習の鉄則だ。

全員その点は理解しているので誰も口を挟む者はなかった。

「ルールは演習弾を使う通常の演習と同様です。轟沈判定が出ればス
テージの外に出て片方の艦隊全員がステージ外に出た時点で演習決
着。双方が燃料、弾薬が尽きるまで決着がつかなかった場合、その時
点でどちらの艦隊が優勢かで勝敗を判定します」

「あ、ダメージに関係なくステージの外に出た場合もその時点で轟沈
判定よ。私の艦載機がちゃんと空から見張ってるから不正はさせな
いわ」

「私もステージ外から監視していよう」

瑞鳳と磯風が付け加えて言った。

上を見れば、艦載機がはるか上空を旋回しているのが視界に映っ
た。

「こっちの艦隊の旗艦は大和だ」

「横須賀艦隊の旗艦は矢矧さんです」

天龍と神通がお互いの旗艦を宣言しあう。旗艦は演習戦において勝敗を決する重要な存在。故に、あらかじめ公言しておく必要がある。

あらかたルール説明も終わり、あとは演習を開始するのみとなった。磯風が両艦隊の間に割って入る。

「よし、^{デュエル}決闘開始時間が近い。演習を開始するぞ。お互い距離を取ってくれ」

磯風の誘導で円形のステージの中心から十分に離れた所で互いの艦隊が並ぶ。

七丈島艦隊は大和、天龍、プリンツ。

横須賀艦隊は矢矧、神通、夕張。

数十秒の睨み合いの後、磯風がまつすぐ上に伸ばしていた手を振り下げた。

「戦闘、開始ッ！」

「——戦艦大和、推して参ります！」

「——横須賀艦隊、預かります。矢矧、抜錨する！」

^{デュエル}決闘の火蓋がきつて落とされた。

☆

「神通、夕張さん、まずは天龍から獲りに行くわよ」

「ん？ ここは戦えない上に旗艦である大和さんからでいいのでは？」

「戦えないとはいえ、相手は大和型。私達の全火力を合わせてようやく轟沈判定を取れるかどうか。今の状況じゃ随伴艦に邪魔されて火力が分散する可能性が高い。装甲を抜けずに無駄な弾薬を消費するのを避けるためにもまずは獲りやすい所から一人ずつ仕留めましょう」

「成程……それも一理ありますね」

確かに一見、攻撃してこない上に旗艦をしているなどカモがネギを背負ってやってきたような展開で、すぐにでも飛びつきたくなる。

ただ、相手が大和型で随伴艦が二隻いる。装甲と護衛という大きな二つの障害があるのだ。

ならば、ここは無理に旗艦を仕留めにいく必要はない。随伴艦二隻を殲滅すればその時点で勝利したようなものなのだ。

随伴艦二隻に邪魔されながら旗艦を落とすに行けば戦力図は三対三。しかし、旗艦を無視して随伴艦を落とすに行けば大和が戦えない以上、戦力図は三対二だ。

つまり、この状況の最適解は大和ではなく随伴艦、特に装甲も薄い軽巡洋艦の天龍を仕留めにいくこと。

「……珍しいですね。神通さんが論破されるのって」

「私も艦隊指揮に関してはまだまだ未熟ということですよ」

神通も決して場数を踏んできていないわけではない。戦況の判断力も相当に優れているはずだ。その彼女をして己を未熟と言わせるのだから、矢矧の艦隊指揮のレベルの高さたるや想像もできない。

夕張は矢矧の『軍神』という別称にここで初めて心から納得した。

「やはり、あなたは横須賀艦隊に必要な人材ですね」

「艦隊、単縦陣をとって前方の敵艦隊に突撃！ 第一攻撃目標は天龍！」

流れるように矢矧を先頭に単縦陣を取りながら神通は悔しがるところかむしろ満足気な笑みを浮かべている。

一方、完全に後手に回った七丈島艦隊もただその場で棒立ちをしている訳ではない。

「へえ、狙いは俺か。面白れえ、全員返り討ちにしてやるぜ！」

「重巡洋艦を無視して痛い目見ても知らないんだからね！」

好戦的な笑みを浮かべて迎撃態勢をとる天龍とプリンツ。

そして、その後ろには大和がある準備をして控えている。

「やはり、大和さんは前に出す気がないみたいですねえ」

「構わないわ。むしろ余計な邪魔が入らなくていい。全員主砲、構え！」

「よし、大和、今だ！」

「はいー！」

天龍達が矢矧達の砲撃射程に入った瞬間、それは起こった。

「――！ これは、煙幕ッ!？」

突然大和の居た場所を中心に大量の真っ白な煙が噴出し、大和達を覆い隠していく。

当然、煙幕など予想もしていない矢矧はその事態に驚き、反射的にブレーキをかけた。

その隙を天龍とプリンツは見逃さなかった。

「天龍様の攻撃だ！ うつしやあッ！」

「砲撃、開始！ Feuer！」

「くっ！ 散開！」

攻勢だった戦況は一瞬にして覆され、矢矧は致し方なく、艦隊を散開させる。仕方ない、今煙幕に巻き込まれては、矢矧達は敵の位置が掴めぬままに孤立させられかねない。

それをステージ外から見て瑞鳳は勝ち誇ったように高らかに笑っていた。

「ふっふっふ、はーはっはっは！ どんなもんよ！ 煙幕なんて予想もしてなかったでしょうねえ！ ざまあみろってんのよ！」

「そりゃ、ウチの鎮守府に発煙装置なんてありませんからねえ。矢矧もありえないものまで想定できませんよ」

「ふ、『ありえない』なんて事はありえない、のよ？」

「なんでもいいですが、あの発煙装置と天龍達の整備の行き届いた装備の出どころは後で白状してもらいます」

「むむむ……」

ステージ外に浮かぶ一隻の船艇。そこに提督と瑞鳳はいた。

双眼鏡で戦闘の様子を見ながら瑞鳳は歓喜の声を上げ、提督は隠れて装備を開発していたらしい瑞鳳に白い眼を向けている。

「今回は見逃しなさいよ！ 矢矧のためでしょ！」

「それとこれとは話が別です」

「……ところで提督、私の作った伊達巻、食べ——」

「騙されませんよ、それは瑞鳳ではなく磯風が作った伊達巻でしょう！」

「チッ！」

磯風料理による記憶消去は失敗した。

「……私の料理がどこかでデイスられている気配を感じる」
ステージの外周を周回しながら磯風はムスツとして呟いた。

☆

「……まるで入道雲ですねえ」

一旦、後退して距離をとった横須賀艦隊。尚も拡散し、既にステージの半分程を覆い隠してしまっている煙幕を見て神通は感心したように呟いた。

あまりに巨大すぎて煙幕の中の七丈島艦隊の位置は見当もつかない。

「ど、どうします？ これじゃ攻撃しようにも敵の姿が……」

「……まあ、いいわ。大丈夫よ、私達からも相手が見えないように、向こうからもこちらは見えない筈——!?!」

突然、矢矧は血相を変えて最大船速で飛び出すと、悠長に広がっていく煙幕を見上げる神通にタツクルする。

「ぐっ……!?!」

「え!?! ちょ、矢矧さん!?!」

神通は突然の不意打ちに声を洩らしながら真横に吹き飛ばされた。夕張が突然の矢矧の奇行にパニックになったその時、爆音と共に矢矧が巨大な水柱で包まれた。

「こ、これは……!?!」

「魚雷!?!」

間違いなく魚雷だ。

しかし、煙幕によつて七丈島艦隊から横須賀艦隊の姿が見えない以上、攻撃を当てるなどほぼ不可能だ。

しかも、ただでさえ当たりにくい魚雷を、たった一発、ピンポイントで放ってきた。矢矧が神通にタツクルをしていなければ、あの魚雷は間違いなく神通に直撃していただろう。

「く、魚雷直撃で小破、か。運がよかったわね」

「すみません、矢矧さん。庇ってもらってしまって」

「……そ、そうですね！ なんて旗艦の矢矧さんが随伴艦の神通さんを庇っているんですか!?! 普通逆でしょう!?!」

繰り返しになるが、旗艦は演習の勝敗を左右する重要な存在である。

だから、旗艦を随伴艦が庇うというのは戦術の一つとして珍しくはない。ただ、随伴艦を旗艦が庇うという図式はまず考えられない。

しかし、矢矧は平然と説明を始める。

「これでいいのよ。私は戦闘力的には並みの軽巡に毛が生えた程度。大破したって戦力はさして減少しないし、艦隊指揮はできる。でも、神通はこの艦隊の主戦力なのだから今ダメージを受けさせるわけにはいかない。その優先度に従って動いたまですよ」

「光栄です」

「庇った分、しっかり戦果は挙げてもらおうわよ」

「……え、ええ？　そういうものなんですか？」

矢矧の言い分は確かに理に適っている。しかし、夕張にはそれがどうにも言い訳のようにも聞こえた。

まるで、自分が随伴艦を庇う理由をそれらしくでっちあげたよう。だが、それ以上の追及をしても仕方がないし、そんな場合でもなかった。

「——きやあつー！」

「またー！」

今度は主砲による砲撃が二発、見事に夕張の艦装に直撃する。

火力を見るにプリンツの砲撃だろう。流石に無防備な状態での直撃はダメージも大きく、夕張は中破まで追い込まれてしまった。

矢矧の額に汗が流れる。

「どういうこと？　向こうの装備に電探なんて見えなかった。どうやってこっちの位置を把握しているの？」

「……………成程、どうやら別に『目』があるようですね」

神通はそう言つて、上を見上げた。

『——よし！　夕張にプリンツの砲撃が着弾！　夕張中破！　相手は手も足も出ないみたいね！　作戦通り！　流石私ね！』

「っしやあ！　瑞鳳、次は!？」

『次の目標は矢矧よ！　二時の方向、距離は717！　まだあいつら

は動いてない、今度は魚雷と砲撃で攻撃！ そろそろ仕留めないと勘付かれるわよ！』

「わかってんよ！」

「お姉さま！ 発煙装置はあとどれくらい持ちそうですか!？」

「もってあと五分が限界です！」

煙幕の中、大和、天龍、プリンツはイヤホンマイクから瑞鳳の指示を受け取りながら次の射撃準備を進めていた。

横須賀艦隊の位置は監視用と銘打って堂々と上空を旋回させている瑞鳳の艦載機。そこから送られた情報を基に瑞鳳が無線指示を出す。

方角、位置の起点は発煙装置を起動した時に大和が向いていた方角と立っていた位置とし、大和は発煙装置の様子を見ながらそこに留まり続けることで指標となる。

これが、大和達の作戦であった。

「——な！ 艦載機を使って私達の位置を!? 卑怯すぎますよ！」

「高度的に私達の主砲じゃ落とせそうにないわね」

「煙幕に隠れての弾着観測射撃とは。いや、悪くない戦術ですねえ」

「なんで神通さんはそんなに楽しそうなんですか!？」

相変わらず神通の表情から笑みは消えない。

神通は視線を矢矧に戻して尋ねる。

「さあ、どうしましょうか?」

「……決まってるでしょ」

矢矧が視線を煙幕へ戻した瞬間、煙幕が揺らぎ、砲弾が発射されたのがわかった。

矢矧は最大船速で斜めに動きながら煙幕に向けて走り出す。

「煙幕の中に突っ込むわよ！ 神通と夕張は私の後ろに付いて単縦陣を保って！」

「了解！」

「了解、です！」

砲撃と魚雷を避け、矢矧達は煙幕へ突っ込んでいく。

『十時の方向！ 矢矧達が煙幕に突っ込んでくるわよ!』

「こっちも迎撃だ！」

「Feuer! Feuer!」

天龍とプリンツも簡単には近づけさせまいと主砲斉射で迎撃する。「迎撃してきたわね。神通、私が盾になるから奴らの居場所を突き止めて。位置を特定で来たら単艦離脱して先制。できるわね？」

「なんなら、全員倒してきましようか？」

煙幕の中から次々と放たれる砲火を前に、むしろ嬉々として笑う矢矧と神通。

敵の位置がわからない以上、煙幕に突っ込んでいくのは得策とはいえない。しかし、こうして艦載機によって一方的に攻撃されるならば、ここは煙幕に入った方が索敵を避けられるのでまだいい。それに、向こうが迎撃のために攻撃をしかけてくるのなら、砲撃、雷撃位置から敵の所在を割り出せる。

最悪、煙幕の中での遭遇戦。しかし。上手くいけば敵艦の位置を特定し、先制攻撃まで可能だ。

最悪、対等条件下での戦いにはなるが、劣勢にはならない。故に矢矧達にとってこの選択がベストであった。

それに、横須賀艦隊には規格外の戦力が一人いる。決して分の悪い賭けではなかった。

「——神通、行きます」

静かにそう言つて、神通は船速を保ちながら左に飛び出し、速力を上げて単艦、煙幕の中にいち早く突入した。

「くそ、おい！ 瑞鳳！ 俺らの砲撃は当たってんのか!？」

『拙い……神通が、煙幕に突入したわ！ 全員砲撃を止めて即離脱しなさい！』

「はっ？」

その時、白煙を切り裂いて天龍の目の前に、巨大な殺意の塊が現れた。

「見つけました」

「——ッ!？」

「出たあッ！」

プリンツが悲鳴を上げ、天龍が主砲を向けるよりも早く、神通の掌底が天龍の腹部を貫いた。

「まず一人」

天龍は体をくの字に曲げて吹き飛び、大和後方の煙幕に消えた。

「お姉様、逃げてッ！」

叫びながらプリンツが神通に主砲を向ける。

しかし、神通は即座に煙幕の中に身を隠してしまう。煙幕がここに来て仇となった。プリンツはしきりに周りを見回すが、まるで神通の気配は感じられない。

「これで二人」

「——うぐっ！」

「プリンツ！」

今度は背後から上段蹴りがプリンツのこめかみに直撃し、天龍同様、その身体は煙幕の中に消えた。

「プリンツ！」

「さて、後は大和さん、あなただけですわね」

「ちよつと、あなた強すぎませんか……？」

「あら、もう決着かしら？」

「矢矧!？」

煙幕の中から矢矧と夕張まで現れる。横須賀艦隊三隻に囲まれ、対するは戦えぬ大和一人。絶体絶命である。

「流石ね、神通」

「いえ、それ程でもないですよ。結局大和さんは仕留めきれませんでしたし」

「……………」

「大和、あなたの負けよ。随伴艦もいなくなり、じきにこの煙幕も晴れて完全に勝機はなくなる。これ以上の戦闘に意味はないわ。降参して」

はつきりと大和の敗北を断言する矢矧に対し、大和は顔を俯けた。

「矢矧、私昨日言いましたよね？」

「ん？」

「矢矧は必ず、私『達』が取り返します！」

「——ッ！」

再び上げた大和の顔には、まだ笑みが浮かんでいた。

その声と共に、大和の後方から煙を裂いて二つの影が横須賀艦隊にとびかかる。

「おらあああああああッ！」

「フアイアアアアアアアアア」

「Feuerrrrrrrrrrr！」

それは先刻吹き飛ばされた天龍とプリンツだった。

天龍は刀を振りかざし、プリンツは主砲を向ける。

「ぐっ！」

「矢矧さん!？」

天龍の斬撃は神通が魚雷を小刀のようにして受け止めたが、夕張に向けられたプリンツの砲撃は矢矧が庇い、直撃した。

矢矧の艤装が大破する。

「矢矧さん！　なんで私なんかを!？」

「言っただけでしょう？　私よりもあなたの方が、戦力的に優先度が、高い

……それだけよ」

「いや、そんな訳ないでしょう！　と、とにかく一時退避——」

「私から逃げられると思う?」

「な、なんですかこの人……なんか、急に背筋が寒く……」

「最凶のストーカーですからね、プリンツは。ストーカーされてる私が保証します」

「今度こそ逃がさないからねえ、夕張?」

「ひっ!？」

じりじりといやらしい笑みを見せながら夕張に迫るプリンツと、彼女から顔を青ざめさせて逃げ腰になる夕張の姿があった。

一方で、天龍と神通の方も状況は緊迫している。

「まさか、さっきの一撃で仕留めきれなかったなんて、少し自信をなくしますね」

「その程度の実力ってことだろ?」

天龍が煽るように笑みを向ける。

反応はしないものの、癪に障ったのか神通の刀を押し戻す力が増した。天龍はより刀を握る力を強める。しかし、押しきれない。

尚も続く膠着状態に天龍は嘆息した。

「俺様の斬撃を魚雷一本で受けるなんざ、随分と舐めたことしやがるじゃねえか」

「その程度の実力ってことですよ」

「へっ、この野郎！」

プリンツと夕張、天龍と神通。見事に戦況は三分割され、大和と矢矧もまた対峙する。

「流石に、しぶといわね」

「なかなかやるでしょう、私達も？」

「そうね、まるでゴキブリね」

「その表現には悪意しか感じませんよ！」

大和と矢矧は笑う。片や戦えぬ戦艦、片や大破した軽巡洋艦。この状況はお互いに最大の好機でもあり、最大の危機でもある。

そして、それ故に、決着にはふさわしい状況とも言えた。

「さあ、決着をつけましょう、矢矧」

「ええ、決着をつけましょう、大和」

しかし、演習が白熱する最中、脅威が、すぐ目の前まで迫りつつあったのを彼女たちはまだ知らない。

「——前方二、艦娘ヲ発見。タダチニ殺戮ヲ開始スル」

第二十九話「戦場で笑って死ぬような奴に私の背中は任せられません！」

カレー専門店、「ビッグスプーン」。そこで私は初めて彼女を見た。書類には目を通していたので彼女が『大和』であることは事前に知っていた。覚悟もしていた筈だった。

しかし、カレーを平らげて満足そうに笑っている大和の表情は、あまりにも、私の親友^{大和}に似ていて――。

「あなたが、大和ね？」

「……………すみません、おかわり戴けますか？」

「店員じゃないわよ！」

その能天気な性格も、声も、一挙一動がまるで生き写しのようである。

「――さて、それじゃあ、さっさと鎮守府に戻るわよ」

「え？ あ、はい！」

私は動揺を表に出さないように必死だった。もしかしたら、実は彼女が奇跡的に生きていて、こうして私に会いに来てくれたのかもしれない、そんな馬鹿げた考えさえ浮かんできた。

「……………」

「……………あの？ どうかしました？」

でも、少し緊張気味に私を見上げるその大きく見開かれた丸い目は明らかに彼女とは別のもので――。

「あなたみたいなのが、なんで……………」

――何で、今になって私の前に。

そんな言葉が思わず出そうになって、私は慌てて言葉を切った。

「……………いえ、なんでもないわ。早く鎮守府に向かいましょう。大分当初の予定からずれているし、色々と説明したいこともあるから」

「は、はあ」

不思議そうに私を見つめる大和を尻目に私は足早に店を出た。

「——こ、この島は海がきれいですね！」

「そう？ 私にはどこも同じにしか見えないわ」

「あ、そうですか……すみません」

「ええ」

「……………」

「……………」

大和が気を遣って話題を振ってくれるが、会話は全く続かなかった。

少し気を抜くと、ため込んでいた言葉が漏れてしまいそうで、あまり多くを語りたくなかった。

この数年、僅かにでも彼女の死を乗り越えられていたのかもしれない、そう思っていた。しかし、実際にはそんなことはなかった。同じ艦種というだけの別人を見ただけでこのザマだ。

「……………」

しかし、私は、これはチャンスだと、そう思っていた。

「……はあ、そんなに話がしたいなら、この鎮守府について少し説明してあげるわ。本当は鎮守府に着いてからゆっくり話すつもりだったのだけど」

「——！ 是非お願いします！」

平静を装い、口を開く私に、大和は安心したような表情を見せる。

そうだ、この大和は、今度こそ私が守ってみせる。

これは、彼女の死を乗り越えるチャンスなのだ。

私の目の前に再び現れた大和。彼女を守り通すことで、私はあの時のリベンジを、贖罪を果たすことができる。

使命だとまで思った。

だから、私は必死で大和を守ろうと、守るべき彼女を遠ざけてまで、敵対してまで自身の使命に徹した。

それなのに、何故大和は、大和達は、横須賀艦隊を敵に回してまで私を取り返そうとしているのか。私のような使命もないはずなのに、何が彼女達を動かすのか。

——わからない。

☆

「疲れた……」

「あら磯風。戻ったのね？」

「もう、限界だ……艤装が、重い……」

「もやしっ子ねえ」

船艇の上が上がってそそくさと艤装を外す磯風に瑞鳳は不敵な笑みを浮かべて言った。

「さて、すっかり『あれ』はやってくれた？」

「ああ、バツチリだ」

磯風が親指を立てて笑い返す。

「じゃあ、あとは煙幕が晴れるまでのあいっらの頑張りにかかっているわね」

その頃、発煙装置が止まり、徐々に霧散し始めた煙幕の中では緊迫した戦いが続いていた。

「うらああああああー！」

「っー！」

天龍の猛攻を魚雷一本で捌ききる神通。しかし、いくら神通の実力が優れていても魚雷の方が天龍の攻撃に先に悲鳴を上げた。

神通が距離を取って、天龍に向けて魚雷を投げつける。

「おっと!？」

天龍は身を翻して魚雷を避ける。

後ろで爆発した魚雷の爆発音と爆風が、天龍の背中をひりひりと打ちつける。

「へへ、あと魚雷は何本残ってんだ？」

「あと三本ありますよ。あなたを倒すには十分すぎる数です」

「強がりも今のうちだぜー！」

天龍は間髪入れず再び刀を振り下ろす。

実際、劣勢なのは神通であった。剣戟ではほぼ同等といった両者だが、使う刀の格があまりにも違い過ぎた。

神通が持っているのはそもそも刀ですらない。

勝負の行方はほとんど見えている。

「ふふ、ふふふ」

(こいつ、笑ってやがる)

明らかに徐々に追い詰められつつある神通はしかし、笑っていた。さも楽しそうに。

さも愉快そうに。

「——ふっ！」

「うお!？」

途端に、神通が天龍の間合いのさらに内側まで踏み込んでくる。さつきまで防戦一方だった彼女の戦い方が一変した。

「ぐっ！」

天龍の刀は長刀。対する神通の刀は魚雷。いわば小刀である。互いの体が触れそうな程切迫した間合いでは長刀の方が不利になる。

しかし、これは天龍も十分に理解していることである。

問題は別にあった。

(今……初動が見えなかった)

間合いを詰められればこちらが窮地。それを重々理解している天龍は神通の一挙一動には細心の注意を払っていた。

間合いに踏み込まれぬよう、常に攻撃を続け、長刀の間合いを保っていた。

しかし、今、こうして踏み込まれているという不可思議な現状。神通の動きに不可解なものを感じてならなかった。

(決して速かった訳じゃねえ。気づいたら、目の前にいたって感じだ) 天龍は主砲で牽制しつつ、後退して神通から距離を取ろうと試みる。

「無理ですよ。もう、あなたは私から、逃げられない」

また、目の前に神通が現れた。

「こいつ……!」

振り下ろされた魚雷が天龍の脳天を打ち抜いた。

脳が揺れ、視界が歪み、視界が真っ赤に染まる。それが頭から流れる自分の血だと気が付いた時には神通は目の前におらず、天龍の真下には魚雷が迫っていた。

「やつべ……!」

魚雷が爆発し、水柱が天龍を包み込んだ。

☆

煙幕の中での戦いとは、夜戦に似ている。

お互い視界が皆無の中で撃ち合う。それは、不意打ちの殴り合いとも言える。

それ故に、同時に夜戦は『運』の戦いとも言えるのだ。

「だから、私は負けない」

プリンツは静かにそう言って、何も見えない前方に魚雷を発射した。

当たる保証などどこにもない。ただ、勘で撃っただけだ。夜戦ではそういう場面も多い。

大抵は当たることはないが、ただ、撃つて無駄ということもない。酸素魚雷は航跡の視認が困難な優秀な魚雷だ。ましてやこの煙幕の中でその航跡は認識できない。

当たれば万々歳で、当たらずとも位置まではバレない。そんな心持ちで魚雷を撃つのだ。

しかし、一部の、運に恵まれた艦ならば話は別である。

「——きやあ!? 右舷に魚雷直撃!」

少し遠くで夕張の悲鳴が聞こえる。どうやら直撃したようだ。

プリンツは息をつく。おおよそここまではプリンツが圧倒的に展開を進めていた。

煙幕に隠れての撃ち合い。運が試されるこの戦場でプリンツ以上に有利な艦はいないだろう。

「正直、天龍の方が心配だし、神通にはさっきの借りもあるし、早々に決めて加勢しなくちゃ!」

まだ痛みの残るこめかみを抑えながら、プリンツは主砲を構える。動くことはしなかった。推進音による探知を防ぐためだ。

しかし、プリンツがトリガーに手をかける直前、真正面に砲弾が現れた。

「え?」

大きな爆発音と共に艤装が半壊する。何が起きたか理解が追いつかないプリンツの前に夕張が現れた。

「データはぼっちりね」

「データ……？」

何故、魚雷の航跡など確認不可能なこの煙幕の中で位置がバレたのか。

「確かに酸素魚雷は航跡が確認し難く、射程も威力も優れた良い魚雷です。この煙幕の中では猶更視認は不可能に近いでしょう。良い、攻撃でした」

「じゃあ、何で……？」

「データはこの身体に刻み込みました」

夕張は苦笑いで大破寸前の艤装を指さして言った。

「魚雷が直撃した角度と位置から方角は割り出せます、痛いですけど。あとは、その方角に突っ込みながら滅多撃ちですよ」

「そんなの……演習じゃなかったら轟沈してるよお」

「はは、全くですね。正直私も実戦ではやれる気しません。というか、戦闘自体私の柄じゃないんですよ」

夕張は疲れ切った表情で愚痴るように言うから、一呼吸置き、言葉が続けた。

「まあ、でも、私も一応横須賀艦隊ですから、ね？」

完全にプリンツは参ってしまった。多少やり方は強引だが、それでも運をデータで上回ってきたことには違いない。

「——おいおい、なんだ、お前もかよ」

「あれえ、天龍!?!」

プリンツの目の前に天龍が吹っ飛ばされてきた。艤装は既に大破しており、笑みも引きつっている。

「流石、夕張さん。もう勝負がついていましたか」

「神通さん!」

天龍が吹っ飛ばされてきた方向から悠々と歩く神通が現れた。

神通の方も多少はダメージを受けているが、小破にも満たない程度のダメージ量だ。

「ちよつとお、何ボロ負けしてるの？」

「お前こそ、煙幕の中での戦闘は任せろとか言つてた割にはあつさり負け過ぎじゃねえの？」

良い所まではいった。しかし、結局完敗である。

「煙幕が晴れますね」

「ふう、やつと終わった……やっぱりこういう戦闘は柄じゃないですよ」

煙幕が晴れて明らかに緊張の解ける二人を見て、天龍達は笑った。諦めではない、何故かしてやつたりという満足げな笑みだ。

「完敗だね、ねえ、天龍？」

「ああ、完敗だな、プリンツ？」

「……………っ！ 夕張さん、走りますよ！」

天龍達の表情と薄れゆく煙幕を見て少し考えた後、足元に視線を移した瞬間、神通は珍しく取り乱した表情で夕張をせかす。

しかし、もう遅かった。

「——だが、この演習は、もらった！」

煙幕が完全に晴れた瞬間、彼女達の真上に飛んできた艦載機から瑞鳳の声が高らかに響く。

『はい、そのの四人！ そこステージ外よ？ 全員失格！』

「はああ！」

「やられましたね……」

いつの間にか、演習のステージを象る浮きは彼女達の遥か後方に浮かんでいた。煙幕で視界が悪くなっている間に、いつの間にかステージの外に出てしまっていたのだ。

「う、嘘でしょう!? だって、ステージから出るほど私、動いていないですよ!？」

「……………道理で、無駄に広範囲に煙幕張るなど思いましたよ」

悔しそうな表情で瑞鳳の立つ船艇を神通は睨んだ。

「やってくれますね」

「当然よ、勝つためならなんだってするわ」

瑞鳳の中では、煙幕からの弾着観測射撃に対し、横須賀艦隊が煙幕

に突入する所まで予測済みであった。

そして、まともなぶつかり合えば七丈島艦隊に勝ち目がないこともわかっていた。だから、瑞鳳は策を講じた。

「煙幕に入れば当然視界も悪くなる。その隙にステージをまるごと動かして厄介な横須賀艦隊をまとめてステージ外に出す。いくら強かろうが、これは決闘^{デュエル}。ルールを破れば負けよ」

ステージを象る浮き自体は非常に軽く、全てが鉄線でつながっているのどこか一端を持って引っ張ってやればステージはそのまま移動できる。

貧弱な磯風でもその程度は容易い。

「いや、重かったし、結構大変だったがな」

「もやしっ子は黙ってなさい」

「むう」

ドヤ顔で神通と視線を交わす瑞鳳の横で若干不満げに頬をふくらませている磯風の姿があった。

☆

「さて、これで私達は失格になってしまった訳ですが」

「まだ、矢矧と大和はステージの中だな」

「つまり、あそこの勝敗次第で勝負が決まるってことですか……」

「お姉様なら、きつと大丈夫！」

全員がステージの中で対峙する大和と矢矧に視線を送る。

ステージ内では、既にほとんど決着はついていた。

「——矢矧、もう降参してもいいんですよ……？」

「何言っているのかしら？ 後、もう一息じゃない……」

大和と矢矧の間に戦いという程のものはなかった。

彼女達の間で行われていたのは、我慢比べ。

大和が、矢矧の攻撃に耐えきるか。それとも矢矧の攻撃が大和を轟沈判定まで追い込むか。

「もう、十分やったじゃないですか」

撃ち込まれた砲弾、20発以上。魚雷直撃12本。しかし、依然として大和の艦装はその損傷を中破までに留めていた。

大和の艦装には主砲を載せても意味がないということ代わりにはバルジが目いっぱい積んである。

相手が軽巡洋艦のみであるため、魚雷対策としての計らいである。おかげで、これだけの攻撃を受けてもびくともしない。

「まだ……まだよ……まだ、弾も魚雷も残っている……！ 私はまだ戦える！」

「なんで、そこまでするんですか!? 私一人のためなんかに——」

「あなた一人のためよ！」

矢矧の表情には鬼気迫る凄みがあった。

「私からしたら、何であな達こそそこまでして私を止めようとするのかわからない。別に、あなたと違って、私は死なないのよ？ ただ、いなくなるだけよ」

「……………」

「私はあなたをみすみす死刑台に送り返す訳にはいかない。私は二度と、誰も目の前で死なせない！」

「二度と？」

「だから、私がどうなろうとあなただけは守ってみせる」

「矢矧、あなたは——」

大和が矢矧に何かを言いかけたその時だった。

——ドンッ

「なっ……!?!」

大和の艦装が突然火を噴く。

否、実際には大和に砲弾が直撃したのだ。砲弾は明らかに演習弾ではない実弾。殺気を纏った攻撃。

大和が海面に倒れると同時に、その遥か後方に控えていた敵が矢矧の目に映った。

「あれは……戦艦夕級!?!」

「深海棲艦だ?!」

矢矧が声を上げるのと同時に天龍達も深海棲艦の出現を目視で確認した。

よく見れば夕級の背後にさらに駆逐イ級が3体、軽巡夕級が1体控

えている。

「このタイミングで探していたはぐれ艦隊が現れるとは……」

「い、急いで迎撃しないと!」

元々、横須賀艦隊がここに来た目的。深海棲艦のはぐれ艦隊が今になって目の前に現れたのだ。

現在、演習に参加していた艦は全員演習弾しか持っていない。これでは深海棲艦には傷一つつけられない。

「夕張さんはすぐに鎮守府まで戻って装備を整えてきてください。あなたが持つてきたあの新装備で一気に片します」

「は、はい!」

「天龍さん、この刀、拝借しますね」

「え? お、おい!」

夕張は全速力で鎮守府の方向へと駆け、神通は天龍の刀を手にして深海棲艦の方に向かう。

「ここは、私が食い止めます! 七丈島艦隊の皆さんは急いで退避してください!」

真つすぐに向かってくる神通に対し、夕級が即座に主砲を向ける。

しかし、その夕級の周りで突然、爆音と共に炎が弾ける。

艦載機による爆撃であった。

「——舐めんじやないわよ! アウトレンジは私の領域よ!」

「瑞鳳さん、ですか。空母が加勢してくれるのは心強いですね」

敵が怯んだ隙に神通は夕級に飛びかかり、一太刀入れる。

「キャアアアアア!」

「やはり、効いてますね。良い刀です」

夕級から尾のように伸びている主砲の一端が切り落とされ、夕級は悲鳴を上げる。もう一撃入れようと神通が刀を構えた瞬間、イ級が飛びかかってくる。

「ガアアアアアア!」

神通が後退した所で夕級は標的を変えたのか、大和と矢矧の方へとイ級を連れて向かう。

「待て!」

神通が夕級を追おうとしたその目の前に軽巡ツ級が立ち塞がる。

「瑞鳳さん！」

「わかってるわよ！でも！随伴艦が邪魔！」

足止めを食らう神通に代わり、瑞鳳が迎撃するが、イ級達が盾になり、艦載機爆撃が通らない。

矢矧も大和も共に大破状態。このままでは確実に追い付かれて二人共轟沈してしまう。

「間に合わない！」

夕級が大和の背中に向けて再び主砲を向けた。

その時、大和を庇うように矢矧が夕級の目の前に出た。

「矢矧!？」

「大和は、死なせない……！」

矢矧は満足だった。今度こそ、その身を挺して大和を守ることができた。

例えこのまま轟沈しようとも、悔いはない。

自然と笑みが浮かんでいた。

「——むかつく」

「え?」

途端、矢矧の体はすごい勢いで真後ろに引っ張られたかと思うと、その身体は宙に放り出されていた。

矢矧の視界にはいつの間にか大和の背中が映っていた。

「え……?」

「戦場で笑って死ぬような奴に私の背中には任せられません！」

「沈メッ！」

多数の砲撃音。そのコンマ数秒後、矢矧の目の前で大和は砲撃の嵐に巻き込まれ、その身体は水飛沫で見えなくなった。

「あ、ああ……あああああああああああああああ！」

矢矧の脳裏で、鮮明に親友の死がフラッシュバックした。

日常編2

第三十話 「提督、仕事してください！」

「あなたが、噂の軍神さん、ですか？」

ある大きな鎮守府に立ち寄った時。出撃を終えて休憩している私は、開口一番そう言って話しかけてくる眼鏡の男と出会った。

「……誰、あなた？」

「私は、今度提督になる予定の者です」

男は恥ずかしそうに笑ってそう言った。

「良かったら私と少しお話でもしませんか？」

「ナンパなら他所でやって頂戴」

「ちよつと、勘違いしないでくださいよ！ 私にナンパするような度胸なんてないですから！ 伊達に年齢〓彼女いない歴やってませんよ!?!」

「別に聞いてない！」

何だ、この男は。

からかわれているのかと思ひ、腹を立てて立ち去ろうとする私の腕をその男は力強く掴んできた。

「……何？ 何なの？」

「下心はありません。本当に、お話がしたいだけなんです」

妙に真剣なその目に、私は致し方なく男に向き直った。

「それで、何よ、話って」

「私の鎮守府に来てくれませんか？」

「は？ あなた、提督じゃないんですよ？ 鎮守府なんてあるの？」

「一か月後にある島の鎮守府の提督として私は着任します。その時、あなたを私の初めての艦娘として迎えたい、そう思っています」

「無理よ」

私ははつきりと断った。私は今の生き方を変えるつもりはない。これまでも来訪した鎮守府や泊地でスカウトされることは度々あつ

た。しかし、私はその全てを断ってきている。それだけ私の決意は固いのだ。それを今更提督になってもいない者にスカウトされた所で私の心が揺らぐはずもなかった。

「そうですか、ダメですか」

「ええ、悪いわね」

「じゃあ、せめてその鎮守府や泊地を渡り歩くやり方を止めて欲しいのですが」

「は？」

男の言動の意味が理解できず、私は困惑してしまう。

「え？ あの、え？ あなた、私をスカウトしに来たんじゃないの？」

私はますます困惑してしまふ。今まで、私の艦隊指揮能力を買って私を自分の鎮守府に置きたいという輩は散々見てきた。

しかし、私のこの流浪の生活をやめさせようとしてくる輩は初めて見た。

「あなたには、同じ時を過ごす仲間が必要だと思っんです」

これが、私と提督の初めての出会いだった。

☆

「——っ……うう、生きてる、みたいですわね」

「大和！ 大和！」

海面に両手をつく大和を矢矧が泣きそうな声で繰り返して呼んでいた。

しかし、大和もバルジを積んでいたとはいえ、艦装の損傷度合いは明らかに大破のそれ。今の砲撃をもろに食らえば轟沈してもおかしくはなかった筈である。あの距離を相手が外してくれるとも考えにくい。何故、自分はまだ生きているのか。

その大和の疑問は顔を上げた時にすぐに解けた。

「な、なんとか間に合いましたか」

「おい、大和、矢矧！ 無事か!？」

「お姉さま！」

「矢矧も大丈夫だ！」

「提督!？ 皆も！」

大和の目の前には提督が乗っていた小型の船艇。それが盾となつて夕級の砲撃から大和を守つたのである。

「二人共、早く乗ってください!」

「はい! 矢矧も、早く!」

「……………」

大和と矢矧が船艇に上がると、矢矧は鬼の形相で大和に突然掴みかかる。

「お、おい! 何やってんだお前ら!」

「矢矧!? お姉さま!」

「大和……なんで、あんな無茶を——ぐっ!」

矢矧の言葉を遮るように突然爆発音と共に船艇が揺れる。

夕級の追撃によるものであった。

「おい、提督! 急いで逃げるぞ!」

「くそ、機関部がやられたみたいですよ……………」

「万事休すか……………」

矢矧はそれを聞くと大和の胸倉から手を離すと船艇を降りようと背を向けて歩き始める。

「私が囷になるわ。その内に提督を連れて全員逃げなさい」

「断る」

「そんなことできる訳ないでしょ!」

「私も同意見だ」

天龍、プリンツ、磯風の三人が矢矧の進路を塞ぐ。

それを見て、矢矧は静かに、しかし重みのある声で言った。

「じゃあ、瀕死のあなた達に戦艦が倒せるの?」

「む……………」

「今、この状況で生存確率を上げるためには誰かが囷になるしかない。そして、その囷としての役目を全うできるとすれば、私以外にはいない」

「なんでそうなんだよ!」

「忘れたの? あなた達は罪人であると同時に、予備選力でもある、失えないわ。でも、ただのお目付け役の私が死んだところで代わりはい

る。だから、これがベストなのよ」

そう言つて強引に天龍達を押しつけようとする矢矧の肩を誰かが掴んだ。

矢矧が振り向くと、そこには大和の姿があつた。

「矢矧、先に謝つておきますね、すみません」

「は？」

次の瞬間、矢矧の顔面に強い衝撃が走り、視界が上へと弾かれた。

甲板に体が叩きつけられる感覚と、鼻から流れる生暖かい液体が鼻血だと気付いた時、ようやく矢矧は今自分は殴られたのだと認識した。

「ぐ、グーパーだ……」

「お、お姉さま……」

「おい、喧嘩は…その、よくないと思うぞ？」

天龍達が揃つて動揺している。

普段温厚な大和が暴力を振るうなど想像もしていなかつたのだらう。

矢矧もその例に漏れず、滴る鼻血を見つめて唾然としていた。

大和は甲板に倒れたままの矢矧に向かって口を開いた。

「矢矧、あなたは何もわかつていない」

「……………」

「矢矧、あなたは自分勝手です」

「そんなことはない！」

大和に噛みつくような勢いで、矢矧は立ち上がる。

「私は、あなたを、皆を守りたいから——」

「知ってますよ、そんなこと！」

「ええ!？」

思わず天龍達の方から驚愕の声が上がった。

「あなたが、私を守るために横須賀艦隊に行こうとしたり、演習で勝つために横須賀艦隊の二人をその身を挺してサポートしたり、今も自分を囮にして私達を逃がそうとしてくれたり! もう、うんざりする程あなたが私達を守ろうとしてくれるのは知ってます!」

「だったら、何が自分勝手なのよ！」

「全部、自己犠牲じゃないですか！」

「自己犠牲!? それがなんだって言うの!？」

「だから、わかってないって言うんです！」

今度は大和が矢矧の胸倉を掴んで引き寄せる。

大和は矢矧に訴えるように怒鳴った。

「なんで、矢矧が私達を守りたいと思うように、私達も矢矧を守りたいと思ってるってわからないんですか!？」

「——っ！」

「自己犠牲をしてまで、矢矧が傷ついてまで守られるなんて、そんなこと誰も望んでないんです！」

「で、でも……」

「自分勝手ですよ、私達の気持ちも知らず、一人で傷ついて……」

「でも、そうするしかないのよ!！」

今度は矢矧が大和に怒鳴り返した。

「仕方ないじゃない！ 私なんかの自己犠牲で済むなら、それだけで命一つ助けられるなら、そうするじゃない！ それが最善でしょう!？」

矢矧の目には溢れんばかりの涙が溜まっていた。

急に胸倉を掴んでいた手が開き、矢矧は大和の拘束から不意に解放される。

「……最善な訳、ないじゃないですか」

大和はさつきまでの激怒したような様子とはうって変わって、いつも見せる柔和な笑みを向けて続けた。

『私なんか』、じゃないですよ。矢矧が傷ついているのに、最善だなんて言える筈ないじゃないですか」

「……………」

「誰も傷つかない、これが最善なんです」

「……そんなの無理よ」

「確かに一人じゃ無理です。でも、あなたは一人じゃない筈です」

不意に矢矧の手が引かれ、いつの間にか天龍、プリンツ、磯風、大

和と円を作るように立っていた。

円の中心には、大和に握られたままの矢矧の手がある。

「矢矧、ここには私達がいいます。ねえ、皆さん？」

「おうー！」

天龍の手が矢矧と大和の手の上に乗せられる。

「私も！」

続いてプリンツが手に乗せる。

「私もいるぞー！」

磯風も手に乗せる。

不意に、どこからか飛んできた九九式艦爆が重ねられた掌の上に着陸した。

『私を忘れてもらっちゃ困るんだけど？』

「瑞鳳か!？」

『今までの会話は盗聴器でしつかり聞かせてもらったわ』

そして、最後に一際大きい手が上に乗せられた。

「私も、入れてもらっていいですか？」

「提督……」

重ねられた手の厚みが、一番下の矢矧の手にかかる重みが、自分が一人ではないということの疑いのような証だった。

「さて、一人じゃ無理でも、私達ならあれをどうにかできるんじゃないですか？」

そう言って、大和は目の前に迫っている夕級を指さして言った。

矢矧は辺りを見回して少し考えると、静かに口を開いた。

「一つだけ、私達があいつを倒せる方法があるわ。だけど、全員危険を伴うわよ」

「大丈夫です。皆が皆を守りさえば、誰も傷つきません！」

「フフ、俺様なら楽勝だぜ」

「お姉さまが果てぬ限り私も果てることはありません！」

「やってみせるさ」

全員、やる気は十分。

矢矧は緊張気味に手を振りあげた。同時に上に乗っていた全員の

手も振り上げられる。

「やるわよ、皆であいつを倒して、皆で生き残る！」

☆

「ガアア！ グオオオオオ！」

夕級は中々沈まぬ船艇を見て苛立ったのか、船艇の目の前まで来て、自らの拳を船艇の壁面に叩きつけ始めた。

しかし、威力は十分で、みるみるうちに船艇の壁に拳型の穴が増えていき、船尾に海水が偏り、船首が持ち上がってきた。

その時、夕級の真上の甲板から二人の人影が降ってくる。

「いくわよー！」

「おうよー！」

矢矧と天龍は夕級の左右にそれぞれ着地すると、攻撃をするでもなく、そのまま夕級を通り越して駆け抜ける。

当然夕級は嬉々として砲塔を向けて滅茶苦茶に撃ってくる。

「チツ！ あいつ、俺らが攻撃できないのを知ってやがるな！ ノーガードで遊んでやがるぜ！」

「まあ、むしろ好都合よ。このままあいつを船体から離さず、かつ引きつけておくのよ！」

「難しい注文だぜ、畜生！」

戦艦の砲撃が直撃すればその時点で轟沈は必至。故に二人は必死で逃げ回る。

夕級を沈めるその時まで。

「どうですか、磯風？」

「もう少し、だな。まだ船体が持ち上がり切っていない」

「これ、そろそろ重いんですけど……！」

「我慢だ。それを持って走れるのはお前しかいないからな、頼むぞ？」

船体の影で夕級の様子を伺いながら磯風と大和はそのタイミングを待つ。

そして、船首が海面とほぼ直角に持ち上がった瞬間、磯風は船体の影から飛び出した。

「いくぞー！」

「はい！」

磯風に続き、大和も飛び出す。

その大和の手には、巨大な錨が抱えられている。錨の鎖は船艇に繋がっている。

「——!?!」

夕級は後ろから迫る大和達に気付き、即座に砲塔を向ける。しかし、それよりも磯風の方が速い。

「四連装酸素魚雷、食らえ！」

「ギャアアツ!?!」

所詮、魚雷数本では戦艦の装甲すら抜けるか厳しい所だが狙いはそこではない。

足元で魚雷が爆発したことで、夕級が大きく怯み、隙ができた。

「今だ！」

「はい！」

大和が夕級に切迫し、抱えていた錨を絡ませるようにその周囲を小回りする。

みるみるうちに夕級の体は鎖で身動きが取れなくなっていた。

「ガアアア！」

「うわ!?!」

夕級は触手をうねらせることで鎖をすり抜け大和に砲塔を向けてくる。しかし、その砲撃を寸前で航空爆撃が妨げる。

「瑞鳳！　ありがとうございます！」

『冷や冷やさせんじゃないわよ！』

そのまま一方的に触手すら動かさないまで錨を雁字搦めにした。

「フフ、フフフ」

「なんだ、こいつ、笑ってやがるぜ？」

「ここまでやって、結局縛り上げただけですからね。自分を殺すことができないとわかっているからこそその余裕なのかもしれません」

「もう、終わっているんだがな」

「教えてあげましょう。瀕死の艦娘でも、仲間がいればあなた一体倒すなんて造作もないことを」

丁度矢矧の言葉が終わった瞬間、船艇が海底へと急速に沈み始め、同時に船艇の錨も徐々に海底へと引つ張られ始める。

「ガアアア!? ガアアアアアアアア!」

夕級もようやく自分の危機的状况に気付いたのか、必死に体をよじらせるが、幾重にも絡みついた鎖は緩むことはない。

徐々に、船体と共に夕級の体が引きずり込まれていく。

「シ、沈ム! 私ガ!? 何故沈ム!」

「簡単なことよ。とは言っても私もさつき気が付いたばかりなんだからどね」

最早頭しか海面に出ていない夕級にしゃがみこんで矢矧は言った。

「あなたは一人で、私には仲間がいたからよ」

「キイイイイイイイイイイイイイイ!」

まるで金属音のような断末魔と共に、夕級は海底に引きずり込まれていった。

夕級の影が見えなくなった瞬間、全員の力が抜けた。

「はあ……終わったあ」

「っ、疲れたぜ」

「もう、動きたくないよお」

「全くだ」

「皆さん、本当にお疲れ様でした……」

思わずその場にしゃがみ込む私達の元に数十秒して神通が駆け付けた。

「……まさか、夕級を倒したんですか?」

「へへ、やってやったぜ」

天龍は自慢げに驚愕を露わにする神通に言った。

しかし、神通は自分の後方を指さすと、渋い顔で続ける。

「お疲れのところすみません、援軍です」

「はあ?」

神通の指の先を見ると、深海棲艦の一個艦隊がこちらに向かってきているのが見える。

「どうやら、さっきの夕級の奇声が仲間を呼び寄せたようですね」

「あれか……!」

先刻の金属音のような断末魔。あれは仲間を呼び寄せると特殊な音だったのだろう。

「まあ、皆さんはその救命ボートの提督と一緒に鎮守府まで逃げてくれればいいですよ。ここは私一人でも十分なので——」

「——いえ、その必要はないわ」

刀を振りかざして大和達を逃がそうとする神通の声を瑞鳳が制した。

その手には何故か零式艦上偵察機が乗っている。

『——七丈島艦隊の皆さん、よくぞ、ここまで耐え抜いてくれました』

「うお!? その声は!」

「夕張さんね」

「やつと、準備ができましたか……」

零式艦上偵察機を通して夕張と無線が繋がっていた。神通は疲れた声で零偵に声をかける。

「夕張さん、今丁度新たに深海棲艦の一個艦隊が現れた所なんです」

『はい、見えています』

「じゃあ、やってしまってください」

「え?」

『了解です! 一気にやっちゃいます!』

「ええ?」

そうあっさり与会話を終えると、七丈島鎮守府前に立つ夕張は艦装に直接接続された超大型の『スナイパーライフル』を抱え、スコープを覗き込む。

それは最早ライフル、というよりは大砲に近い。夕張の身の丈の倍はあるロングバレルにおおよそ41cm三連装砲と同等かそれ以上の口径。

艦装に接続して夕張の身体全身で支えていなければ砲口を保持することすらままならないその兵器は静かに稼働を開始した。

「艦装内部コンデンサからの電力供給率40、60、80%。重力、磁場補正、誤差0.01%以下。距離、5.97km——」

艦装に内蔵したコンピュータが計算結果を夕張の脳内に送信し、それを受けて夕張が射撃補正を行う。

艦装と一体化する艦娘だからこそできる人体のマシン化。計算に強いコンピュータに対し、ランダム要素への簡易対応に強い人間の脳。これらを一つにすることで、より高度な計算補正が必要になる兵器を艦娘一人で運用することが可能となる。

これこそが、日々工廠に引きこもって進めている夕張の研究。そして、その実験は彼女自身の身体と艦装を持って行われるのだ。

「出力最大、スコープの倍率を固定、標的をマルチロック……ロックオン！」

撃鉄が鳴らされ、夕張の弾き金にかけた指に力が籠る。

「――発射ッ！」

掛け声と共に引き金を引いた瞬間、銃口から雷を束にしたような、光の塊が轟音と共に放たれる。

「――え？」

深海棲艦達にはそれが何に見えたかはわからない。

ただ、大和達が見たそれは彼女達の知識的確に表すなら、漫画やアニメで見えるいわゆるビームだった。直極太のレーザービーム。それが深海棲艦の方へ飛んで行ったかと思うと、一個艦隊が残らず光に包まれ、そして跡形もなく消えた。

「目標の消失を確認！……でも、この小型荷電粒子砲ボジトロンライフル、威力は十分だけれど一発の電力消費が激しいから連発できない上に、重いなあ……まだ改善の余地あり、と……うん、データもばっちりね！」

しばらく何が起きたかわからなず固まる大和達とは対照的に、夕張は楽しそうにノートを取り出してメモを書きながっていた。

☆

「――さて、深海棲艦の乱入ですっかり演習が滅茶苦茶になってしまった訳ですが」

数時間後、後処理を終えて夕日が水平線に沈み始める頃、全員再び演習場に戻ってきていた。

「どうしますか？ 明日にでもやり直しますか？」

神通は目を改めて再度試合をしたいらしい。しかし、神通を手で制して矢矧が口を開いた。

「別に、やり直す必要なんてないわ。もう、勝敗は決まっているもの」
そう言って、笑いながら矢矧は両腕を上げる

「降参、私の負け、よ」

「そう言うと思いましたよ」

「旗艦が負けを認めてしまえばもう、仕方ないですね」

神通と夕張も予想していたのだろう。あっさり矢矧の降参宣言を受け入れ、決闘は幕を下ろした。

「それじゃあ、約束通り、矢矧は返して貰うぜ？」

「ええ、どうぞ……」

「あ、あの、神通——」

「大丈夫ですよ、矢矧さん」

矢矧が複雑そうな表情で神通に何か言おうとしたのを先読みして神通が口を開いた。

「あの時はああ言いましたけれど、実際私が問題なしと報告して疑うような人は横須賀艦隊にはいないんですよ。私、これでも結構偉いので……残念なことに……」

悔しそうな口ぶりであった。自分の発言力の高さを悔いるのは彼女にとって今日が初めて最後だろう。

「ま、まあ、そういう訳なので、安心してください！　神通さんが血迷っても私が止めますし！」

「血迷いませんよ。横須賀艦隊の誇りを汚すようなことは絶対にできませんからね……残念なことに」

その後、すぐに神通と夕張は事後報告のためと言って横須賀へと帰っていった。提督が夕食くらい一緒にと引き留めたが、結局丁寧に断られてしまった。

神通達を見送り、七丈島艦隊だけになると、提督が手を叩き言った。

「じゃあ、私達も帰りましょうか！」

「はい、そうですね！　お腹すきましたし！」

「私もお腹すきました！」

「ま、今日は色々あつて疲れたしな！」

「明日絶対筋肉痛だ、これ……」

「私も腰痛いわあ」

いつものようにそれぞれ勝手なことを言いながら鎮守府へと向かう大和達を一步退いた所から見ている矢矧に、提督はモーターボートの上から声をかけた。

「矢矧、鎮守府にいたら執務室へ来てもらいますか？」

「はい？ わかりました」

☆

「——提督、神通、夕張両名、只今戻りました」

「うむ、入れ」

横須賀鎮守府。その執務室に神通達は来ていた。執務室とは言っても障子で隔てられた和室である。

室内に入つて見えるのは、龍虎の描かれた巨大な水墨画と、所狭しに敷き詰められた大量の書物。逆に言えば、それ以外のものはこの執務室にはないに等しい。

「ご苦労じゃったな、二人共」

「はい」

「は、はい！」

和室で一人書類を進めている着物を着た老人の前に二人は正座して頭を下げる。

オールバックの白髪に鋭い三白眼、一見細身にも見える身体には、実際は無駄なく筋肉が絞り込まれているのだと、はだけた胸元から一瞬で見て取れる。

見るからに威圧感と貫禄に満ちた風貌の初老の男性こそこの日本海軍の頭目。対深海棲艦において最強の人類、元帥である。

元帥はゆつくりと書面に走らせていた万年筆を置くと、神通達に視線を向けた。

神通などは慣れたもので涼しい顔をしているが、夕張はそれだけで心臓がはちきれんばかりに脈打つ。

「それで、どうじゃった？」

「はい、良い艦隊でした」

「そうか、貴様の目から見てそう言わしめるか」

神通の報告を聞いて元帥はどこか楽しんで笑った。

「大和は、問題ないか？」

「はい、さしあたって問題は見られませんでした」

「うむ、そうか」

(よし！)

夕張は胸を撫で下ろす。七丈島艦隊との約束はこれで果たされた。これでこの最大の目的は完了である。

しかし、気を抜いた最中、元帥は夕張に視線を向けて言った。

「ところで、夕張。貴様、小型荷電粒子砲を持ちだしたらしいのう？」

「がっ……！」

「しかも、撃つたと聞いたが？」

「あの……ええと……それは……」

拙い。夕張の顔から血の気が引いた。

今回持ち出した小型荷電粒子砲はまだ試作段階故、万が一の被害を考えてまだ実験は止められていた。無論持ち出しなど厳禁である。

これは確実に殺されるか沈められる。そう夕張は確信した。

「夕張、どうじゃった？」

「え……う？」

「撃つてみてどうじゃったと聞いている！」

「は、はい！ 最高に気持ちよかったです！」

何を言っているんだ私は。

夕張は真つ赤な顔を手で覆い隠した。

しかし、元帥は夕張に罵声を浴びせるでもなく、むしろ満足げな笑みを見せる。

「そうか、気持ちよかったか。くくく」

「え、あの？ 怒らないんですか？」

「ふん、勝手に持ち出して失敗したのならば解体ものじゃが、成果を上げてきたのならば良し。小型荷電粒子砲は明日から実験に入って良いぞ。急ぎ実践投入へと改良を重ねよ」

「は、はい！ 喜んで！」

「うむ、励めよ」

元帥は笑って茶を啜った。

「まあ、今回は貴様らも良い経験になったじやろう。いつも同じ艦隊の奴だけで組ませても面白くないからのう」

「さ、流石に私みたいな第四艦隊の下っ端じゃ神通さんの足を引つ張るだけでしたけどね」

「いえいえ、そんなことはないですよ。私も夕張さんに色々と助けて貰いましたし。楽しかったので機会があればまた組みましょう」

「ええ、私はもうしばらくは工廠に引きこもりたいです……」

大分碎けた雰囲気になった所で、元帥が咳払いを入れる。

途端に二人は再び姿勢を正す。

「うむ、他に報告がなければ下がって良いぞ。神通、貴様には早速明日の早朝に南方海域に出てもらおう。準備を怠るな」

「はい」

「励めよ、第一艦隊旗艦」

第一艦隊旗艦。神通はそう呼ばれると、一際大きく返事をした。

☆

「提督、失礼します」

「ああ、矢矧、待ってましたよ！」

七丈島。執務室を訪ねた私は相変わらず書類の山に埋もれている提督を見てああ、戻ってきたんだなという実感と共にため息をついた。

「それで、用とはなんですか？」

「これを、返そうと思ってきましたね」

提督は矢矧の手を取って、黒い腕輪を手渡した。

スタンリングの起動権。七丈島艦隊監察艦の証である。

「ありがとうございます！」

私はすぐにリングを腕に通す。腕に通すとリングは収縮してブレスレットとなる。馴染みのある感触に浸りながら私は提督に尋ねた。

「提督、私と初めて会った時のこと、覚えていますか？」

「ええ、勿論です」

「提督、あの時私に言いましたよね。『あなたには、同じ時を過ごす仲間が必要だと思っんです』って」

「はい、言いました」

「今になって、ようやくわかった気がするわ。あの言葉の意味」

「それは、良かったです」

提督は嬉しそうに笑う。

次に、私は頭を下げつつ提督に言った。

「あの、それと……私の移籍の承認書類。あれ承認してしまうと凄く取り消し面倒よね……ごめんなさい」

「ああ、そのことですか」

提督は机の上から書類を一枚抜いてきて矢矧に見せる。

艦娘の移籍書類であることは確かだが、承認印は愚か、全くの白紙である。

「実は、私、この書類まだ手付けてなかったんですよ。面倒くさくて忘れてました」

私は思わず笑ってしまった。

どこまでわかってやっているのかわからないが、取り敢えず、私がこの七丈島艦隊の監察艦として、提督の秘書艦として戻ってきた記念として、こう言ってやることにする。

「提督、仕事してくださいー！」

第三十一話 「今日は、バレンタインデーですよ！」

矢矧の一件から数カ月時間が経ち、あの騒動の余韻も薄れかかってきたというある日。

珍しく朝から私、大和を含めた七丈島艦隊の全員が食堂に集まっていた。

別に何か示し合わせて集まってきた訳でもなく、全員特にこれといった用事がないため、退屈を凌ぐための場所を求めて自然とここに集まってきたのだ。

ただ一人、私を除いては。

「……暇だなあ、おい」

「暇なら手伝ってくださいよ」

「何で大和はポウルなんて持つてるんだ？ 何か作るのか？」

私の手に抱えられたポウルを指さしながら、椅子をベッドにして寝ている磯風が尋ねた。

その質問に私は驚いて磯風と他の面々の顔を見回した。

「え……いや、だって今日は……」

「あん？ 今日？ 今日ってなんかあったっけか？」

「さあ？」

「むう、心当たりがないな」

「私は、今日はお姉さまに一日中密着する日だったよ！」

「それいつも通りじゃねえか」

「え？ あの、皆さん、本当にわからないんですか？」

信じられない。そんな表情を隠せない私に天龍達はますます首を傾げている。

その様子を見かねてか、今まで静観を保って読書をしていた矢矧が口を開いた。

「今日は、2月14日。俗に言うバレンタインデーよ」

「そうですよ！」

私は机を叩いて訴えるように叫んだ。

「今日は、バレンタインデーですよ！」

「うるせえな、わざわざ二回も繰り返し返さなくてもいいだろうが」

「サブタイにするための手ごころな台詞が必要なんですよ！」

「何の話だ!？」

聞けば、この鎮守府では基本的に毎年二月十四日は特に何も無い平日扱いらしい。

「皆さん、チョコ作らないんですか？」

「作ったところで誰にやるんだよ？」

「いや、提督がいるじゃないですか……」

「ああ、いたな、そんな奴」

「最早存在すら曖昧なんですか!？」

もう少し気にかけてあげて欲しい。

「皆さん、提督にはバレンタインデーにチョコあげましょうよ？」

「え、嫌だが？」

「そういうのは遠慮したいな」

「うーん、気が進みません」

「なんで私が提督にチョコあげなきゃならないのよ？」

「皆さん、もしかして提督のこと嫌いなんですか!？」

他の鎮守府ではおおよそあり得ないであろう冷たい空気が七丈島鎮守府には流れていた。

では、まさか提督はこの女所帯の鎮守府で、唯一の男性にも関わらず今までチョコを貰ったことがないというのだろうか。

「ちなみに私は一応毎年チョコ渡しているわよ。今日も朝に渡したし」

良かった、矢矧が最後の良心でいてくれた。

「なんだよ、矢矧。それ初耳だぜ？」

「……別に言う必要もないでしょう？ 言ってもどうせあなた達作らないでしょうし」

「ま、それもそうだな」

「それもそうだなって……」

「というか、そもそもバレンタインってむしろ女がチョコ貰う日じゃ

ないの？」

瑞鳳が何か訳のわからないことを言い始めた。

「だって、私は毎年この時期には男共から大量のチョコ届くわよ？」

まあ、あんなに大量だと逆に迷惑なんだけど」

「私、瑞鳳はそろそろ一度痛い目を見ておいてもいいと思うんですよ」

「むしろ今俺達でシメルか」

「ちよ、暴力はよくないわよ！ 暴力は！ ちよっと！ 痛い！ こ

れ地味に痛い！」

天龍が瑞鳳の頭を掴んで持ち上げているのを傍目に磯風は少し考
えてから起き上がって言った。

「うーん、だが、確かに提督には日々世話にはなっているし、偶にはこ
ういうのもいいかもしれないな。今年は大和もいるしな」

「磯風！」

「えー、男の人にチョコ作るのお？」

「まあ、別に好きとか嫌いとかじゃなくて、日々の感謝の印としてだ
な。なんだつたらプリンツは大和にもチョコを作ればいいんじゃないぞ
いか？ 最近はお姉さまとプリンツも折れて賛成の意を示した。」

磯風の説得にプリンツも折れて賛成の意を示した。

「じゃあ、お姉さまに作るついでに提督のも作る！ 楽しみにしてて
くださいね、お姉さま！」

「くれぐれも普通のチョコでお願いしますね」

「はい、ちゃんと媚薬入れておきますね！」

「話聞いてました？」

プリンツとは近いうちに常識について腹を据えて話さねばならな
い。

☆

「——という訳で、皆さんエプロンを着て、手もしっかり洗いましたか
？」

「はーい！」

「バッチリだ」

「なんで私がチョコ作りなんて……」

「まあ、いいじゃねえか。どうせ暇だろうが」

プリンツ、磯風、天龍、瑞鳳と私はチョコづくりのためにキッチンに立っていた。

矢矧は秘書艦の仕事があると言って戻って行ってしまった。

「今年は提督へバレンタインチョコを贈りましょう！」

「おー！」

「まあ、それはいいけどよ。実際手作りチョコってどうやって作るんだ？ 俺は料理なんてしたことねえから難しいことはできねえぞ？」

天龍の質問に私は余裕の笑みで答えた。

「大丈夫です！ 手作りとはいっても、作り方は非常に単純。チョコを溶かして、型に流してまた冷やす、これだけです！ 誰にでもできますよ！」

「おお！ 本当か！」

「ごめんなさい、磯風はできるかわからないです」

「どことん信用がないな、私は」

簡単にやり方を口頭で説明してから各自、溶かす板チョコを手に手作りチョコを作り始める。

「まずは板チョコを湯煎して溶かしてくださいね。わかんないことがあったら聞いてください」

「おう！」

気合の入った返事と共に天龍は板チョコを手に鍋で湯を沸かし始める。

他の面々もそれぞれ湯煎に取り掛かっている。今のところ問題はなさそうだ。

「さて、私も自分の作業を進めておきましょうか」

天龍達には先ほど説明した通り、チョコを溶かして型に入れるだけの簡単なものを作ってもらうつもりだが、私は少し違う。

板チョコを包丁で細かく刻み、ボウルに入れて、チョコと混ぜる予定の生クリームを鍋に入れて中火にかける。

「お姉さま、できましたー！」

「こつちもできたわよ」

生クリームを火にかけている間にプリンツと瑞鳳がボウルに入った溶かしたチョコレートを見せにやつてきた。

プリンツも瑞鳳も料理をやるイメージはないが中々どうして手際がいい。

「それで、この溶かしたチョコをどうするの？」

「まあ、後は好きな型を持ってきてそこにチョコレートを流し込んで冷蔵庫で固めるといのが一番簡単ですね」

ハート型や星型の型を手に取ると、さらに加えて私は説明を続ける。

「でも、それだけだとあんまりにも味気ないですし、アラザンやカラーシュガーで見た目を華やかにしたり、チョコペンでメッセージを書いてみたり色々とアレンジしてみるといいと思います」

アラザンとは銀色の小さい粒状の装飾菓子。カラーシュガーは名のとおり色のついた砂糖のことでこれも装飾に使われる。

チョコペンはよく誕生日ケーキなどで目にするホワイトチョコレートで文字を書くあれだ。

形が変わっただけで茶色一色の味気ないチョコレートもこのような装飾菓子を利用したり、何か一つメッセージを添えることで簡単にそのランクを上げることができる。

かかる手間は僅かだが、受け取る側にとってはこれがあるのとなしいのでは大きな差がある。

「じゃあ、そうしてみますー！」

それからしばらくして。

「できましたー！」

「私も完成ね」

また二人が私の元にチョコレートを持ってくる。プリンツのものは星型とハート形のチョコレート二つ。どちらもアラザンで縁取りされ、ホワイトチョコペンで文字が書かれている。

瑞鳳のチョコは一体どうやってつくったのか、九九艦爆型のチョコレートだ。

「瑞鳳はこれ、どうやって作ったんですか……？」

「私は大きめの四角柱のチョコレートを作ってそこから削り出しただけよ?。」

彫刻家か。

「瑞鳳凄おい!。」

「ま、私にかかれればこんなものよ!。」

瑞鳳が得意げに笑っている。プリンツは星型の方のチョコレートを調理台に置いてハート形のチョコレートの方を私に差し出す。

「はい、こつちがお姉さまのチョコレートです!。」

「え、いいんですか? ありがとうございます!。」

「私はそもそもこつちが目的ですから! 提督の分はついんです!」
複雑な気分だが、取り敢えず受け取っておこう。チョコレートには

『Ich sehe nur dich』と筆記体で書かれている。

ドイツ語は全く分からないので意味は愚か、読み方さえもわからない。

すると、私の様子を察した瑞鳳が横から覗き込んで翻訳してくれた。

『Ich sehe nur dich』、日本語では『あなたしか見

えない』ってとこね!。」

「私の想いの丈が少しでも伝われば嬉しいです!。」

「ええ、凄いだキドキしてます、いろんな意味で!。」

彼女の変態性を知っている私としてはこれが『いつもお前を見ているぞ』という脅迫文にしか見えない。

「提督の方のメッセージにはなんて書いてあるんですか?。」

「こつちは『Ich danke Ihnen herzlich』。

日本語では『心より感謝申し上げます』、ね!。」

これでもかというくらい他人行儀である。

だがしかし、バレンタインチョコとしては二人共申し分のない出来だ。これなら提督もきつと喜んでくれるに違いない。

「ん、大和は私達のと違うのね?。」

「あ、はい。私はトリユフを作ったんです!。」

「トリユフ!? 難しそう!。」

「まあ、手間は少しかかりますけどね」

トリュフを作る際は温めた生クリームとチョコレートを混ぜ合わせてガナツシユを作り、それを丸めて形を作って固め、最後に溶かしたチョコレートとココアパウダーでコーティングをするという数段階の作業が必要である。

それを聞くと瑞鳳がニヤニヤしながら肘で私をつつく。

「何よ、もしかして抜け駆け?」

「いえ、そんなんじゃないです。たくさん作ったので後で皆さんにもあげますね」

「真顔で即答とかつまないわね」

「やったあ! ありがとうございます、お姉さま!」

「ところで――」

瑞鳳が思い出したように呟いた。

「天龍と磯風、遅くない?」

「確かに……」

私が湯煎の指示を出してからもう一時間以上経っているのに、未だ天龍達は何も言いに来ない。

私は心配になって天龍の調理台へ急ぐ。

「天龍、大丈夫ですか?」

「おう、大和! 丁度これからチョコの湯煎にはいるところだ!」

そう言って、天龍は私に板チョコを見せる。

チョコを溶かすまでに一時間以上も何をしていたのか疑問だが、取り敢えず問題を起こしている訳ではなさそうなので一安心して磯風の方に向かおうとしたその時、天龍の背後の鍋蓋を落とされている大鍋に気付いて足を止めた。

「……天龍、その火にかけてある大鍋、何ですか?」

「あん? そんなん決まってるだろうが」

天龍は鍋蓋を掴みあげる。瞬間、湯気と共に、覚えのある匂いがキッチン全体に広がる。

「カレーだ!」

「何で!?!」

大鍋一杯にカレーが入っていた。天龍はその鍋にチョコを細かく砕きながら入れていく。

「よし大和、チョコ、湯煎できたぞ？ 次はどうすればいい？」

「それ、湯煎って言いませんから！」

「え、だって湯煎でチョコ溶かすことだろ？ だからこうしてカレーを」

「だから、何でカレー!？」

「カレーにチョコレートを入れるだろうが！」

「いや、入れますけどね!? 隠し味に！」

「じゃあ、いいだろうが！」

「私達今カレーじゃなくてチョコ作ってるんですけど!？」

「どうりで時間がかかるはずである。」

「まあ、いいんじゃないか？ バレンタインチョコがカレーってのも斬新で」

「いや、それまずバレンタインチョコだと思われなからね？」

「細けえこと気にすんな。似てるだろうが、チョコとカレー」

「茶色以外全く似てませんよ!？」

「大丈夫だ、提督ならわかんねえよ」

「提督舐めてんですか!？」

もうカレーをバレンタインチョコとして贈る気満々の天龍としばらく言い合いをしていると、誰かが私のスカートの裾を引っ張る。

見れば、青い顔をした磯風が居た。

「や、大和……」

「ん、どうしたんですか、磯風？」

「おう、お前も完成したか？ こっちも丁度今完成した所だぜ」

「む？ 何故カレー？ いや、まあそんなことはどうでもいい。大和、これを見てくれ……」

磯風が抱えたボウルを私に手渡す。流石に磯風は湯煎の意味は知っているのすっかりチョコレート湯煎していたようだが。

「……………何ですか、これ」

ボウルの中のそれは、おおよそチョコレートとは遠い緑色をしてい

た。

あと、少しねばねばしている。

「何度湯煎しても皆こうなってしまうんだ……」

「おいおい、これじゃバレンタインチョコにならねえぞ」

「カレー作った天龍も大概ですけれどね」

しかし、これはまた予想外の事態である。まさかチョコを湯煎するだけで既にチョコをチョコならざる何かに変えてしまうとは。

というか、出会った当初からますます磯風の料理が悪化している気がするの私の気のせいだろうか。

「お姉さまー、天龍達どおですか？　って何でカレー？　あと何その緑色でネバネバの液体!?!」

「チョコ溶かすだけでどうしてこんなことになるのかしらね？　というか何でカレー!?!」

騒ぎを聞きつけたのかプリンツと瑞鳳もやってきた。

「どうすればいい?」

「とりあえず、そのままチョコっぽく仕上げて提督にあげてみましょう。食べるとどうなるか興味があるわ」

「デメエは悪魔か」

私は磯風の肩を叩いて諭すように言った。

「取り敢えず、チョコは私が作るの、磯風はトッピングだけしましよるか」

「うう、まあ、それがいいな……」

磯風は不服そうであつたが、こうしてなんとか全員提督へのバレンタインチョコを作り終えたのであつた。

一人チョコじゃなくてカレーだが。

「——それにしても、皆なんやかんや言っちゃんとチョコ作るんですね？　最初の様子見て適当にチョコ固めて完成にするつもりかと思つてました」

天龍の作ったカレーを皆で食べながら私は口を開く。

最初は全員乗り気という程でもなかったのに、終わってみれば皆結構、一生懸命にチョコ作りに励んでいたように見える。

「これでも俺達は提督にはかなり感謝してるんだぜ？ 色々とぐだぐだ言ってたが本気で作りたくねえと思ってた訳じゃねえよ」

「じゃあ、なんで最初はあんなに消極的だったんですか？」

「感謝しているからこそ、だ」

私の疑問に磯風が答えた。

「感謝しているからこそ、生半可な物は提督には渡したくないんだ。チョコ作りなんて詳しい者もいなかったし、私なんて問題外だ。だから、下手な物を渡す位ならいつそ渡さない方がいい、というのが私達の結論だったんだ」

「で、いつの間にかバレンタインの存在自体忘れてたのよね」

「でも、今年は大和がいたからな！ 料理できる奴がいるんならやつてもいいって気になった訳だ」

私は彼女達の言葉を聞いて顔をしかめると、頭を掻きながら言った。

「あの、難しく考えすぎですよ」

「え？」

「こういう贈り物で一番大切なのは必ずしも物の質じゃありません。一番大切なのは、心をこめるっていうことです。皆さんの心がこもった贈り物なら、あの提督はなんでも喜んでくれると思いますよ？」

「んー、まあ、そうなのか？」

「そうです」

私ははつきりと言い切った。

「だから、来年も皆でチョコ作りましょう！ 今度は矢矧も一緒に！」

「おう、そうだな！」

「ま、付き合っただけでもいいわよ」

「お姉さまと一緒に喜んで！」

「来年までにはなんとか料理ができるようになってるといいな、切実に」

まあ、色々あったが取り敢えず皆が提督のことを嫌いという訳ではないことが知れて良かった。

私はカレーを口に運ぶと、唐突に思い出して言った。

「あ、そういえば、矢矧は毎年提督にチョコ渡してたんですよ？　なんで皆も誘わなかったんでしょう？」

その質問に瑞鳳がニヤニヤと悪戯っぽい笑みを浮かべながら答えた。

「ま、ライバルは少ない方がいいって思ったんじゃないの？」

「ん？　どういう意味ですか？」

「さあ、どういう意味かしらねえ」

その後、私がどんなに問い詰めても瑞鳳はニヤニヤとしているだけでそれ以上のことを喋らなかつた。

☆

その夜。

「矢矧！　見てください！」

「どうしたんですか、提督？　今日は随分と機嫌がいいですね？」

「これ！　皆さんからバレンタインチョコ貰ったんです！」

「ああ、そういえば大和達が今日作るって言ってたわね」

提督の机の上には皆から受け取ったであろうチョコが並べられている。

何故かカレーも混じっているが。

「……何でカレー？」

「わかりません。あと、この緑色の物体だけは本能が食べることを拒否しています」

「食べない方がいいと思うわ」

「じゃあ、記念としてどこかに飾りましょう！」

「腐るからやめてください。そんなに嬉しかったですか？」

嬉々として執務室を歩く提督に矢矧は尋ねた。何故かその表情は固い。

しかし、浮かれ切った提督がそんな事に気付くはずもなく、満面の笑みで言葉を返した。

「ええ、勿論です！　今まで矢矧からしか貰ったことありませんでしたから！」

「ふうん、それは良かったわね」

「……………何か矢矧怒ってます?」

「いえ、別に?」

若干、怒気の混じった声に提督は立ち止まって矢矧の方を見る。

それに対し、矢矧は笑顔を向ける。だが、その目は笑っていない。

「提督、そういえば島役所と大本営から至急、提出が必要な書類が送られてきたので今日中に全部終わらせてくださいね?」

「なん……………だと……………!?!」

矢矧が提督の机に置いた紙の束は明らかに千枚を超えている。今から始めても終わる頃には日が昇り始めているだろう。

「あの、矢矧さん? 書類整理、少し手伝っては——」

「じゃあ、頑張ってくださいね」

「矢矧! いつもは手伝ってくれるじゃないですか!? なんか今日は冷たくないですか!?!」

「いいからさっさと仕事する!」

「はい、ごめんなさい!」

泣きつく提督を一喝して、矢矧は執務室の扉を開ける。

「……………私がチョコあげてもあんなに喜ばなかったくせに」

「え? 何か言いましたか、矢矧?」

「五月蠅いわね! 口よりも手を動かさない!」

「はい、ごめんなさい!」

こうして、バレンタインデーは提督の悲鳴と共に終わりを迎えたのであった。

第三十二話「皆さんにこの鎮守府のキャッチコピーを考えて欲しいんです！」

「さて、皆さんよく集まってくれました」

ある日、提督からの招集がかかり、艦娘達は食堂に集められた。

「今日、皆さんに集まってもらったのは、この鎮守府に関わる大事な案件があるのです」

「大事な案件？」

瑞鳳が大きな疑問符を浮かべて声を洩らす。提督は神妙な顔つきで眼鏡を指で押し上げながらゆっくり頷いた。

「そう、この鎮守府の運命を握っていると言っても過言ではない！それは——」

「あの、すまん、ちよつといいか？」

「なんですか、天龍？」

提督の言葉を遮って天龍が口を開いた。

「あのよ、まだ大和が来てねえんだけど？」

冒頭で提督がさも七丈島艦隊全員が招集されたような口ぶりで語っていたが、実は大和だけが食堂にいない。

「ああ、そのことですか。なんか大和は外出中みたいですね。まあ、仕方ないですね、いいでしょう！」

「大事な案件なんだよな!？」

鎮守府の運命を握ると言っても過言ではない案件の扱いが思いのほか適当である。

「聞きたいことはそれだけですか？」

「いや、それとよ——」

天龍は部屋の隅を指さす。

「ウウーツ！　ンウーツ！」

「あれは、なんだ!？」

部屋の隅で椅子に何重にも縛り付けられた拳銃手錠、目隠し、さる

ぐつわをされた変わり果てたなプリンツの姿がそこにはあった。

「え、プリンツですが?」

「そんなことはわかっているよ! なんであんな超一級危険人物みたいな拘束のされ方してんだって聞いてんだよ!」

「いや、忘れられがちですけど、一応あなた達元犯罪者ですからね?」

超一級危険人物ですからね」

「それも知ってるけどよ!」

「それについては私から説明するわ」

「矢矧?」

提督の代わりに今度は矢矧が口を開いた。

「そもそも、プリンツは今朝から既に拘束されてたわ。聞けば、大和が拘束していったらしいわ」

「マジかよ……ちよつとあれはやり過ぎなんじゃねえのか、流石に」

「あ、いや最初は手足に手錠されてただけだったんだけどね?」

「何でより悪化してんだよ!? お前、見つけたなら助けてやれよ!」

「助けたわよ! で、話を聞こうとするや否や大和を探しに飛び出そうとするから……」

「するから?」

「スタンリングで動きを止めてから逃げられないよう、こんな感じで拘束してみたわ」

「最終的にお前が拘束してんじゃねえか!」

一度助けておいてまた拘束するというこの鬼。

「あ、さるぐつわと目隠しは私が付けました」

「なんで提督も一緒になつてやってんだあああああああ!」

その得意げな顔、殴りたい。

「——ほら、取り敢えず目隠しとさるぐつわは外してやんよ」

「ぶはあ、助かったよお、天龍!」

生き返ったと言わんばかりの表情でお礼を言うプリンツ。流石の変態にもこの拘束は苦痛でしかなかったに違いない。

「大丈夫か? 辛かったろ?」

「うん、お姉さま以外からの拘束プレイとか誰得だよって感じだよ

ねえ、ほんと辛かったよお」

まるで大和にならやられたいと言っても言いたげな台詞に全員の背筋に悪寒が走ったし、同時に見せた彼女の爽やかな笑顔に愛を通り越して崇拜すら感じた。

「で、話戻しましょうよ。今日は私達集めて何やろうってのよ?」

痺れを切らした瑞鳳が苛立たし気に質問する。

「皆さんにこの鎮守府のキャッチコピーを考えて欲しいんです!」

「帰っていいかしら?」

「帰るぜ」

「帰るか」

「お姉さまを探しに行かないと!」

「ちよ、ちよと待つて下さい! 本当に困ってるんですってば!」

食堂から立ち去ろうとする天龍達に提督は凄い勢いですがりついてくる。

「キャッチコピーなんて大したもんでもねえだろ? 自分で考えよ」

「そもそも鎮守府の運命はキャッチコピーで決まるものなのか?」

「それが結構重要なのよ」

矢矧が言うには、最近この鎮守府の存在感が島民の間で薄まりつつあるという。

それもそうだろう。この鎮守府は海域防衛拠点ではなくあくまで戦力の保存を目的とした特殊な鎮守府である。

日常的に深海棲艦と戦うことなどしないし、そもそもこの辺りの海域は横須賀鎮守府によつて完全制圧された海域であり、以前のように深海棲艦が侵攻してくるような特殊な状況でなければまず敵影を見ない。

故に、島民には七丈島鎮守府の存在について認識が希薄なのだ。何をやる所で何のためにあるか理解されていない。このままでは何かの拍子に鎮守府の撤廃案が掲げられてもおかしくない。

「——という訳で、鎮守府の宣伝を兼ねてキャッチコピーを考えようと思つている訳よ」

「まあ、事情はわかったけどそんなんで変わるもんなのか？」

「やらないよりはマシよ」

「だが、この鎮守府がなくなるのは私達としても困るな」

「そんなに効果があるとも思えないけど、そこまで言うならやってもいいわよ、暇だし」

「ありがとうございます！」

かくして、七丈島鎮守府のキャッチコピー作りが始まった。

☆

「それで、具体的にキャッチコピーってどうやって作るんだよ？」

「一応、参考までに横須賀鎮守府のキャッチコピーはこれよ」

『敗北。この二文字を私達は知らない——横須賀鎮守府』

「強気なフレーズね」

「まあ、日本最強だからな」

「こいつら俺達にこの前負けたけどな！」

「勝ったとも言えないわよ。実力は明らかに向こうが上だったし、勝ちを譲ってもらったと言った方が的確ね」

「で、この横須賀鎮守府のキャッチコピーを参考に私が作ったものがこれです！」

『敗北を知りたい。——七丈島鎮守府』

「いや、これ横須賀鎮守府っていうよりバキ丸パクリじゃねえか！」

「最凶死刑囚編の名台詞ですし、なんか設定が上手く組み合わさってかなくて」

「そのドヤ顔やめろッ！」

「まあ、でも他の作品を参考に作るっていうのはいい案ね。下手にオリジナルで考えるよりよっぽど完成度は期待できるわ」

「じゃあ、俺の好きなゲームのキャッチコピーをいくつかあげてくぜ」「何でゲーム？」

「いいんじゃないですか？ 名作ゲームのキャッチコピーって何か引きつけられるものありますよ」

こうして天龍によって原文として以下の名作ゲームのキャッチコピーがホワイトボードに書きあげられた。

『俺より強いやつに会いに行く——ストリートファイター2』

『涙がポポロ——ポポロクロイス物語2』

『楽しすぎて、狂っちゃまいそうだ——デビルメイクライ2』

『あなたのせいで死体が増える——かまいたちの夜』

『どうあがいても絶望——サイレン』

『東京が死んで、僕が生まれた——女神転生III』

『任務は、最愛の人を殺すこと——メタルギアソリッド3』

『エンディングまで、泣くんじゃない——マザー』

『最後の一撃はせつない——ワンダと巨象』

『出会った人の顔、覚えていますか?——ロックマンDASH』

『とりあえずこんな所か』

『よくこんなに覚えてるねえ、天龍』

『これを原文としてどうアレンジするかは私達の腕の見せ所ね』

『やはり鎮守府のキャッチコピーだから、『提督』とかの単語を入れる
といいんじゃないか?』

『じゃあ、それでアレンジするぜ』

『そう言つて天龍はどこからか出してきたフリップボードに軽快に
ペンを走らせ、全員に見せる。』

『俺より強い提督に会いに行く——七丈島鎮守府』

『会いにいかないでください! 鎮守府にいてください!』

『提督は常に誰よりも強くなっては提督であり続けられない。深い
な』

『もしくは島民に提督への挑戦を喚起させているようにも見えるわ
ね』

『どちらにせよ私は強くなってはならないんですか!?!』

『じゃあ、私も一つ作ってみようかしら』

『提督がポポロ——七丈島鎮守府』

『ポポロってなんです?! 私ポポロってどういうことなんです?!』

『じゃあ、次私ね!』

『提督過ぎて、狂っちゃまいそうだ——七丈島鎮守府』

『どこを変えてるんですか!』

「あ、間違えた、こつちだったよ！」

『お姉さま過ぎて、狂っちまいそうだ——七丈島鎮守府』

「これはお前に限ったことだよな!？」

「えー、じゃあ皆にもわかるようにこんなのは？」

『お姉さまの一撃は、せつない——七丈島鎮守府』

「いや、わかんねえよ!？」

「お姉さまからの折檻ご褒美を堪能して幸せに浸りつつ、同時にああ、これでお終いかあつて名残惜しい感じもあるってことだよ！ わかんないの!？」

「だから、わかんねえよ！ 何でキレ気味なんだよ！」

手錠がなければ殴りかかってもおかしくない怒りようであった。

「そもそもこれ七丈島鎮守府要素が皆無よね」

「じゃあ、次は私だ」

『提督のせいで死体が増える——七丈島鎮守府』

「増えませんか！ 怖いですからやめてください！」

「じゃあ、こうだ」

『あなたのせいで提督が増える——七丈島鎮守府』

「もつと怖いことになってるじゃないですか！」

「なんで増えるんだ、提督」

「知りませんよ！ 磯風が作ったんじゃないですか！」

「お前、変えるところがおかしいんだよ。何か増やしてえ訳じゃねえんだからこうしろ」

『あなたのせいで死体が提督——七丈島鎮守府』

「私、死んでるんですけど!？」

「駄目か、じゃあ別のやつにするか」

『任務は、最愛の提督を殺すこと——七丈島鎮守府』

「だから、私死んじやつてるんですって！」

「何したのよ、提督？」

「こつちが聞きたいですよ！」

「もう一つ思いついたぞ！」

『提督が死んで、僕が生まれた——七丈島鎮守府』

「私を殺さないで満足できないんですか!？」

『どうあがいても提督——七丈島鎮守府』

「喧嘩売ってるんですか!？」

「なんだか、楽しくなってきたな」

「こつちはもう泣きたいですよ」

『提督まで、泣くんじやない——七丈島鎮守府』

「キャッチコピーで励まさないでください!！」

一通り全員で提督をいじり倒した所で矢矧がフリップボードにペンを走らせ始めた。

「死体とか増えるとか殺すとか、そういう原文はまずアレンジに適していないわ。もっと温厚な原文を使うべきよ。これとかどう?」

『提督の顔、覚えていますか?——七丈島鎮守府』

「ええ……まるで私が影薄いみたいな」

「確かに、ぱっと思いつくのは難しいな」

「え!？」

「あれ、提督ってどんな顔だっけ?」

「いや目の前にいるじゃないですか!」

「め、眼鏡だけは辛うじて思い出せるけど……でも、それ以上は」

「私って眼鏡しか覚えられてないんですか!？」

提督のことをよく見てもらうよう働きかけるという点では鎮守府の存在感の希薄さを払拭できるキャッチコピーなので、とりあえず第一候補として決まった。

「もう一つ位良い候補が欲しいよな」

「でも、ゲームのキャッチコピーは大体使い尽くしたよお?」

「じゃあ、次はCMネタで行くわよ」

「今、ネタって言いましたよね? 矢矧も私で遊ぼうとしてますよね?」

提督の声を無視して今度は矢矧がCMで聞くキャッチフレーズを書き出していく。

『100人乗っても大丈夫——イナバ物置』

『んん、マズい、もう一杯——キューサイの青汁』

『そうだ、京都に行こう——JR東海』

『選ばれたのは、綾鷹でした——綾鷹』

『やめられない、止まらない——かっぱえびせん』

『じゃあ、また一部を提督に変えるか!』

「いや、提督に変えるのはやめましょうよ。そうですね、今度は鎮守府とかにしましょう!」

「ちっ」

「何で舌打ちするんですか!?!」

他の面子に変な流れに持ってかれないうちに、提督はフリップボードにペンを走らせる。しかし、それよりも早くフリップを書き上げた者が一人居た。

『そうだ、お姉さまの部屋に行こう——七丈島鎮守府』

「だから、お前は大和関連のアイディアやめろ!」

『選ばれたのは、パンツでした——七丈島鎮守府』

「何てもん盗んでんだ!?!」

『やめられない、止まらない! お姉さまのストーキング——七丈島鎮守府』

「すみません、この内容でさつきから最後に七丈島鎮守府の名前出してくるのやめてくれませんか!?!」

「お前を拘束していった大和の判断は概ね正解だったな」

「でも、これ需要はあるよね!?!」

「ねえよ!」

「あるよッ!」

「だから、ねえよ! 食い下がんな!」

おそらく大和と離れているせいだろう、今日のプリントは本格的に頭がおかしい。

仕方ないので、プリントと天龍が言い合いをしている間に提督は自分のフリップの方を書き上げて全員に見せる。

「——うん、よし、これで行きましょう。かなりの自信作です!」

『10000人乗っても大丈夫——七丈島鎮守府』

「10000って数字どこから来たのよ?」

「七丈島の人口の概算です」

「この鎮守府に一万人も乗れるのかしら？」

「まず面積的に厳しいが、仮に乗れたとして流石に一万人の重量は耐えきれないだろう」

「え、いや、そういう意味じゃなくて、この鎮守府が七丈島の全島民の命を背負うという意味表示を暗喩したものでして——」

「成程、じゃあこの後はこうなるのか」

『鎮守府がポポロ——七丈島鎮守府』

「ポポロさせないでください！」

「で、こうなるのよ」

『10000人乗っても大丈夫——七丈島鎮守府』

『鎮守府がポポロ』

『んん、マズい、もう一杯一杯』

「このままじゃ鎮守府倒壊しそうな危機感が伝わってくるな」

「いや、キャッチコピー繋げないでくださいよ!？」

「なるほど、こうしてさっきのこれに繋がるのか」

『提督のせいで死体が増える——七丈島鎮守府』

「倒壊したんですか!？ 乗ってた一万人も巻き込まれた感じですか、これ!？」

「提督が10000人乗っても大丈夫とか言うからこんなことに……」

「私のせい!？」

「そして、責任を追及する大本営はある命令を下すのよ」

「なんで急にストーリー仕立てになってるんですか!？」

『——選ばれたのは、彼の艦娘達でした』

『任務は、最愛の提督を殺すこと』

『やめられない、止まらない』

『どうあがいても、絶望……』

『全米がポポロした!』

『最後の一撃は、せつない……』

『エンディングまで、泣くんじゃない!』

『——提督の顔、まだ覚えていますか?』

『提督が死んで、私が生まれた——七丈島転生Ⅲ——』

『——そうだ、映画館に行こう』

「ねえ、ちよつと、これ完璧じゃない!？」

「大作の予感しかしねえ」

「ハリウッド狙えるわよ、これ」

「主演はお姉さまで行こう、そうしよう」

「なんで映画の宣伝できてるんですかあああああ!？」

提督自身、ちよつと面白そうだなと思っただことは秘密だ。

☆

夕刻、夕焼けが水平線に沈んでいくのを見ながら、大和は鎮守府への道を一人歩いていた。

「ふう、なんだか思いのほか帰りが遅くなってしまいました。プリンツ、大丈夫でしょうか?」

今朝、手足に手錠をかけて拘束したプリンツのことを思い出す。今日は大和としてはプリンツについてこられると色々と不都合があったので仕方なく拘束したが、今更ながらかなり辛い仕打ちをしてしまったと後悔が募る。

「まあ、港町の方で一日限定70個しか売られない七丈島プリンが七個も手に入りましたし、これで手を打ってもらいましょう」

そんな独り言を呟きながら鎮守府の前まで辿り着いたところで、大和の足が止まった。

その視線は鎮守府の入り口に掲げられている大きな看板に向けられている。

『提督が死んで、私が生まれた——七丈島転生Ⅲ—— 来年上映予定』

「え、何ですかこれ? 映画? え!?! 何で!?! っていうかタイトル全く聞いたことないんですけどⅢって三作目なんですか!?!」

『——主演、大和』

「何で私!?!」

「おう、大和、おかえり」

「ちよ、天龍なんですか、これ!?!」

「映画をやるのよ、主演はあんたよ！」

「楽しみだな！」

「だから、何で!？」

天龍と瑞鳳、磯風はノリノリで大和に映画の説明を始める。

困惑する大和の前に立て続けに矢矧が現れた。

「あ、矢矧！ ちょっと、何か皆映画とかなんとか言ってる何かおかしいんですけれど……」

「大和、目標は興行収入20億よ」

「矢矧!？」

矢矧までおかしい。

「だ、誰か正気の人は……そうだ、プリンツ！」

「あ、お姉さままだあああああああッ！ お姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまお姉さまあああああああああッ！」

「駄目だ！ よく考えたらプリンツは元からおかしい！」

その後、大和の3時間超に渡る鬼気迫る抗議により正気を取り戻した七丈島鎮守府の面々により、看板は即時撤廃されたと言う。

第三十三話「ま！ 要は、もつと胸張って生きなさいってことよ！」

どうも、七丈島艦隊所属、戦艦大和です。

現在、私はこの島に来てから最大のピンチに直面しています。

「た、助けて……！ わっぷ！ だ、誰かあ！」

今、まさに人が、目の前で溺れているのです。

鎮守府を出て港まで来た所で防波堤の方からバシャバシャと水を叩く音が聞こえ、一体どうしたのかと思えば、齡十くらいと見受けられる少女が溺れているではありませんか。

彼女はきつと泳げないのでしよう。必死に手足を動かしてどうか海面に浮上しようと思いますが、力みの入った身体というのはどうしても沈んでいくものなのです。

泳ぎの上手い人はむしろ暴れず脱力します。肺という浮袋一杯に空気を取り込み、力みを取り去るのです。

そうすれば、元々海水には塩分が含まれており、真水よりも浮力が大きい訳ですからいとも容易く浮きます。

しかし、脱力というのは難しいものです。何故ならやろうと思つてやれるものでもないのです。

泳げる人と泳げない人の決定的な差をお教えしましょう。

ずばり、水が怖いか、否かです。

人間は恐怖するとどうしても力が入ります。それは自分を守るための本能です。怖い話を聞いていたりすると、だんだん身体が丸まって握り拳を作つてたりしませんか。

それは恐怖から身を守ろうと防御力を高めるための本能的な反応です。仕方のない者なのです。

なので、水に対する恐怖がある人は脱力ができません。本能的に力んでしまう。なので、スイミングスクールなどでは最初は水に慣れさせる所から始めます。

人は恐怖するから、自分を守ろうとするからかえって深く沈んでしまふのです。

「ど、どうすれば……近くに人もいないし……!」

ここで、そろそろ皆さん思うことでしょう。

おい、はやく助けてよ、と。

何故、人を探しているんだ、お前が海に飛び込んで助けるんだよ、と。

長々と水の浮き方だの、脱力だの、水への恐怖だのグダグダ言っつてんじゃないよ、と。

あくしろよ、と。

ごもつともです。反論のしようもありません。しかし、こればかりは仕方ないのです。

「どうしましょう……私、泳げないのに!」

そうです。恥ずかしながら、私、カナヅチなのです。

艦娘の癖にと思いましたがでしょう。

でも、実は潜水艦を除く全艦娘は艀装なしでは全員カナヅチなのです。

☆

溺れている所に助けが来たと思ったら、その人はカナヅチ。なんと運のないことだろう。

「な、何か紐とか! 掴めるものは?」

何か掴む物さえあれば私の力なら余裕で一本釣りしてやれると、手頃なロープを探すが今日の港にはそれらしいものは一切見当たらない。

「いつもは何か浮輪みたいなやつとか綱みたいなのあるのに!」

いよいよ後がない。

少女の頭が海水から出てこなくなってきた。沈んでいるのだ。何をやっている。今まで張り損ね、のうのうと生き長らえてきたこの命、今ここで張らずしていつ張るのだ。

私はここで覚悟を決めた。

「大和、推して参ります!」

私は少女の近くに勇んで飛び込むと、少女の身体を掴む。少女も必死に私の体にしがみついてくる。

やはり、私の体はみるみる沈んでいく。しかし、この距離なら、いける。

——すみません、この際打撲と擦り傷は勘弁してください！

私は、一緒に沈む少女の体を掴み、思いつきり胴上げする要領で防波堤の方へと投げ飛ばした。

普通の人間ではできない所業だが、大和型の馬力なら可能である。

「とりゃあああああああつー！」

少女は海水から防波堤へ弧を描いて飛んでいった。

きつと全身をコンクリートに打ちつけてしまっただろうが、そこは勘弁してほしい。

さて、一方の私は当然泳げない。というよりも浮けない。身体に艦の魂を宿したからかは知らないが体が鉛の塊になったように勝手に沈む。

脱力とかは関係ない。鉄の塊がいくら脱力した所で沈むのと同じで、私達艦娘もどうあがこうと水に浮いていられない。

夏とか水着を着ていたりするが、実は泳げないので海に出るときは仕方なく艤装を付けて気分だけ楽しんでいるのだ。

だから、ヤケクソになつて深海棲艦との戦闘時でさえ水着で挑んだりする艦娘が後を絶たない。困ったことである。

「ああ、これは本当にダメかもですね。こんな所で人知れず死ぬんですか、私……」

私、最後、誰と何と会話しただろうか。

『お姉さま！ お出かけですか？ お供します！』

『……プリンツ、ごめんなさい』

『ん？ なんです？ 手錠？ まさか！ 拘束プレイ!? やったああああああ！』

『違います！ ちょっと今日は、ストーキング禁止です！ それじゃ！』

『え……放置プレイ!? やだ、興奮しすぎて死にそう！』

『プレイじゃないって言ってるでしょう！ 私が変な趣味だと思われるからやめてください！』

『私はそういうのも全部受け止められますから、一向に構いませんッ！』

『私が構うんですよッ！』

——いや、死に切れるか！ こんな会話でッ！

よりによって人生最後の会話が拘束プレイと放置プレイの談義なんて化けて出るレベルである。

しかし、時既に遅し、海面は既に遠く、身体は海底へ引きずり込まれていく。

その時だった。

「——大変だ！ 人が溺れてるぞ！」

そんな声と同時に何か黒い影が私の目の前に飛び込んできたかと思うと私はその黒い影と一緒に海面へと浮き上がっていった。

「ぶはあ！ ゲホゲホ！」

「お、おい！ 大丈夫か!? ん、ていうかお前大和ちゃんか？」

「あ、あなたは……ゲホ！ 確か第一話登場の漁師さん！」

「なんだ、その思い出し方!？」

第一話にてお腹を空かせた私をビッグスプーンまで連れて行ってくれたあのやたらテンションの高い漁師のおじさんが私の体を抱き上げ、防波堤まで引き上げてくれていた。

「はあ、はあ、死ぬかと思いました……助かりました漁師さん」

「いやあ、なんのなんの！ このお嬢ちゃんが泣きながら助けを求めてきてよ！ いやあ、間に合って良かった！」

「お姉さん……!？」

「あ、さっき溺れてた子……良かった、ちゃんと助かった」

予想通り全身を打ちつけた痕があったが、なんとか助けられていた。

私はそれに安堵の息をついた。

「まあ、今日は天気もいいし、しっかり乾かして行けよ！ その姿で二人共町歩いてたら男たちの注目の的だぜ！」

見れば、私の服はずぶぬれで下着まで透けている。

「ぎ、流石にこれは町歩けない……！」

「ガハハハ！ まあ、ここら辺は今日人通り少ないし、二人で防波堤にでも座つとけば一時間くらいで乾くだろ！ じゃ、俺はこれで！」

漁師は陽気な笑い声と共に去っていった。

「……えーと、じゃ、そこで座りましょうか」

「はいー！」

少女と並んで防波堤に足を投げ出して座る。

潮風が程よく濡れた髪と服から水分を少しずつ奪っていくのを感じる。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

こんな気まずい状況、前にもあった気がする。

確か矢矧と鎮守府向かう時もこんな感じじゃなかっただろうか。

これはいけない、人生の先輩として私から何か会話を盛り上げる種を――。

「私、美海っていいいます！」

「え!?! あ、はい!?!」

「美しい、海って書いて『みう』と読みます！」

「は、はい!?! いい名前ですね！」

突然の自己紹介にビビる人生の先輩。

「ありがとうございます！」

「は、はい!?! どういたしまして!?!」

この美海という少女、やたらと声がでかい上に礼儀正しい。まるで軍人のようだ。

思わずこちらまで声が大きくなってしまふ。

「え、と、美海さんはどうして海で溺れてたんですか?」

「はい!?! 私が美海だからです！」

「ごめん、ちよつと意味がわかりません!?! 後、もう少し普通に喋り

ましようか、ね！」

「はい！ すみません！」

その大声を止めて欲しいのだが。

「私は、親から貰った美海という名前が大好きで、その影響か、海が大好きなんです！」

「あー、それで海で遊んでたら、足とかつつちやっつてってパターンですか？」

「いえ、単純に泳げない癖に海に飛び込んだので溺れました！」

「泳げないなら海に飛び込まないでください！」

「はい！ 明日は命綱つけて飛び込みます！」

「だから、飛び込まないでください！」

海が好きなのに泳げないというのも中々難儀な性分である。しかし、海が怖いならまだしも海が好きなら案外さらっと泳げるようになるりそんなものだが。

「泳ぎ、練習しないんですか？」

「……………」

美海は私がそう聞くと俯いて黙ってしまった。私が不思議がって彼女の顔を覗き込もうとした瞬間、彼女は顔を上げて言った。

「すみません！ 嘘を吐きました！」

「ぐわああああ！ 耳がああああああ!?!」

美海の大声で私の鼓膜がやばい。

「実は、私、最近友達に泳げないことだからかわれて…………美海って名前なのに泳げないなんて変だって…………」

「……………」

「だから、取り敢えず海に飛び込んでみようかなって！」

どうしてそうなった。

「いえ、海に飛び込めば、何かいい感じに泳げるようになるかなって！」

海、好きだし！」

「見通し甘すぎませんか!?!」

いや、むしろ泳げないから海に飛び込んで泳ぎを覚えるってスパルタか。

「泳ぎを覚えるならせめて足の着くような浅瀬でやればいいんじゃないですか？」

「……………確かに！ すっかり失念してました！」

あ、もしかしてこの子、アホの子か。

「じゃあ、大和さん、是非私に泳ぎを教えてください！」

「いや私泳げませんから！」

「え、そうなんですか!？」

「あなたの目の前で私、さつき溺れてたじゃないですか！」

助けを呼んでくれたのも美海だった筈だが。

「これはとんだ心得違いをしました！ すみません！」

「いえいえ」

失念とか、心得違い、とか時折少女に似つかわしくない語彙が飛び出すな。一体どこで覚えてくるのだろうか。

「そういうえば、泳ぎの練習のこと、ご両親は知っているんですか？」

「いえ！ 話してません！ 心配をかけたくないので！」

「いや、溺れてからじゃ遅いんですよ？ やっぱりこういうのは、慣れないうちは保護者同伴でやった方が——」

「それに、お母さんが亡くなってからお父さんは仕事と家事両方やってて忙しいですから！」

「——あ……………すみません、お母さんを亡くしていたんですね。配慮が足りてませんでした……………」

すっかり平和ぼけしていた自分を殴りたい。一年前の自分ならばこんなことは言わなかった。

今はまだ戦争中だ。この島が例外的に平和なだけで他の全世界では日々誰かが死んでいる。そんな世の中だ。

親を亡くした子供だって多いのだ。何故、それを本人の口から言わせるまで気づけなかったのか。

暗い顔をしている私を、気遣って美海は言った。

「だ、大丈夫です！ 私はもう寂しくありませんから！」

「そうなんですか？」

「はい！ お父さんがお母さんも兼任してくれているので！」

「そ、そうなんですか……」

相当に複雑な家庭事情と見た。これ以上深くは聞かない。

「ところで、大和さんは艦娘なのですよね？」

「え、はい？」

「ということはあの謎に包まれた秘密結社、七丈島鎮守府の一員ということですよね!」

「秘密結社……?」

「そういうことですよね!」

「そうですけど、多分違います!」

島民の七丈島鎮守府に対する認識を正す必要性を強く感じた瞬間だった。

「実は、島民のほとんどが鎮守府という場所が一体どういう場所なのか知りません!」

「まあ、普段から何もやってないですからね、ウチ。そうなるのも当然でしょうか」

「噂では島の権力者とその関係者を洗脳してたり!」

恐らく瑞鳳のことだ。

「鎮守府内で未知の化学兵器を作っていたり!」

恐らく磯風のことだ。

「この辺りの猫を手なずけて情報を集めていたり!」

恐らく天龍のことだ。

「最近は聞きませんが、一時期はマークされた人物に金髪の諜報員が24時間張り付いていたという噂もありました!」

絶対にプリンツのことだ。

「まあ、私はそこまで子供じゃないので全部デマだってわかっていますけどね! ね、大和さん!」

「は、はい、そうなんです、かね……」

心当たりが多すぎて全く否定できないが、美海の期待の眼差しを裏切ることにはできないので取り敢えず返答は濁すことにした。

「友達の中には悪の秘密結社だって言ってる人もいますけど、私にはわかりません! 大和さんみたいな艦娘がいる七丈島鎮守府が悪の秘

密結社の筈はありません！」

「私みたいな、ですか？」

「はい！ 艦娘は皆泳げないというお話でしたのに、大和さんは命を賭して私を助けてくれました！ 誰にでもできることじゃない、立派なことですよ！」

「……………」

私はその純真無垢な言葉に、眩しさに、目を逸らすようにして俯いてしまった。

「違いますよ。全然そんなことない」

「大和さん？」

あの鎮守府に集まったのは皆そういう人達だ。

実際に尋ねた訳じゃないが、そういうのは雰囲気でなんとなくわかる。

自分の命を賭してでも助けたかった誰かが居て、でも助けられなくて、自分一人だけがあるうにか生き残った。

自分の命を張って助かったのは、誰かではなく、他でもない自分だった。

誰も助けられなかったからこそ、私は今、ここでのうのうと生き残っているのだ。

しかも、私は敵を撃てない、役立たず。

こんな私がどうして立派と言えようか。

「私は昔、取り返しのつかない程悪いことをしたんです。提督のおかげでこうしてまだ生きてますけど、私はあなたが思う程立派な艦娘じゃないんですよ」

「大和さん！」

今までで一番大きな声だった。

「すみません！ 私はあまり頭が良くないようなので難しい話はわかりません！」

「あ、はい、こちらこそすみません」

「でも、私が立派だと思ったのだから、それでいいじゃないですか！

昔とか関係ないです！ 立派かどうかなんて、自分じゃなく他人が決

めるもんです!」

「……………」

「だから、大和さんは立派な方なんです!」

その勢いに私は圧倒されて言葉もでなかった。

不意にこみ上げてきたのは笑いだった。

「大和さん?」

「ふふ、すみません。なんだか、美海さんのおかげで少し心が軽くなりました」

「それは良かったです!」

「さて、丁度服も乾きましたね。そろそろ移動しましょうか」

いつの間にか大分長いこと話していたらしい。時刻は昼を回っている。

「じゃあ、是非お礼をさせてください!」

「いや、いいですよ、そんな」

「大丈夫です! お時間取らせません、すぐそこですから! ついでに昼食も食べていってください!」

「あ、ご飯屋さんなんですか?」

「はい!」

そうやって美海に半ば強引に連れてかれたのは見覚えのあるカレー店だった。

「え、ここって…………」

「お父さん、ただいま!」

「あら、美海おかえりなさい。外で何してたの?」

「うん、泳ぎの練習しようと思って海に飛び込んだら溺れた!」

「はあ!? ちよ、あんた、どんだけええええええええええええ!?」

「それで、この人に助けられた!」

「あ、お久しぶりです、店長」

「どんだけええええええええええええええええええええええええええええええ!?」

☆ ここは港から徒歩一分のカレー専門店、ビッグスプーンである。

「——まさか、店長、子持ちだったとは……」

「何よ、その懐疑的な目は！ これでもアタシ昔はモテてたのよ？」

「男に？」

「女に決まってるんでしょ!? どんだけええええええ！」

絶対嘘だと思うが、面倒なので深く詮索はしない。

「美海さんからお父さんとお母さんを兼任してるって聞いていたから一体どんな奇特な方かと思ってましたけど、オカマ店長のことだったとは……」

確かに奇特な方ではあったが。

「美海は母親を早くに亡くしてるからね。母性が必要だと思ったのよ」

「だからって兼任しないでくださいよ！」

それから、お礼と言うことでサービスしてくれたカレーを食べながら、自然と美海との会話を店長に話していた。

「なるほどね。まあ、要はアタシの娘マジ天使ってわけね」

「まあ、そういうこと——そういう話でしたっけ!？」

「大和ちゃん、これだけは覚えておきなさい」

店長はカレーの大鍋を掻きまわしながら言った。

「生きてるってことには何か意味があるのよ。あの提督だって道楽や気まぐれであなたを拾ったんじゃない。今、あんたがこうして生きてるってことは、つまり、あんたは生きてていいってことなのよ」

「店長、あなた、私達のことを知ってるんですか？」

「……まあ、色々大人の事情があんのよ」

私達が元罪人であることは島民には知られていない事実だ。それを店長が知っているということは、一体どういうことなのか。

「あの、提督、結構酔うとお喋りなのよねえ」

「機密事項を酔ってばらしちゃったんですか!？」

何をやってるのだ、あの提督は。

店長は笑って私の背を叩く。

「まー！ 要は、もっと胸張って生きなさいってことよ！」

「……はいー」

生きていることには意味がある、と店長は言った。

私はきつと怖いのだ。誰かを撃つことが、そして、またあの時みに、一人生き残ることが。

だから、怖くて、自分を守ろうとして、自ら深く暗い海底へ、沈んでいった。

でも、それは溺れているだけだ。生きているのではなく、死へ向かっているだけ。

だから、私は浮き上がらなくてはならない。恐怖を克服し、あの光差す水面へ。

それが、今の私が生きている意味、なのかもしれない。

「私、頑張ってみます！」

「ええ、頑張りなさい」

「私も頑張つて泳ぎ練習します！」

「あなたは浅瀬で練習しなさい！」

「そして、いつか必ずや大和さんのいる鎮守府に、お勤めに参らせていただきます！」

「はい、楽しみにしてます！」

ダメな提督のフォローに矢矧が倒れるのも時間の問題だろうから十年以内に来てほしい所である。

「全く恥ずかしいわねえ、美海ったらアタシの昔の喋り方すっかり真似しちゃってて」

「いや、お言葉ですけど、今の店長の喋り方の方がよっぽど恥ずかしいですよ？」

☆

「そういえば、大和ちゃんは今日何しに港まで来てたの？ お買い物？」

「え？ ああああああああああああ！」

「な、なによ!? どんだけっ!?!」

そうだ。私はそもそもアレのために、今朝プリンツを拘束してまで港町に向かっていたのだ。

「一カ月に一日だけ！ 限定70個にか売られない七丈島プリン！」

あれを買いに来たのに！」

「ああ、この時間じゃもう売り切れてるわね。あれ、毎月午前中には完売するから」

「ぐあああああああああああ！」

うなだれる私に、店長が冷蔵庫を開けてビニール袋に何かを詰め込むと、私の前に置いた。

「これは？」

「実は七丈島プリン売ってる店の店主と仲良くってね。今月は十個多く作り過ぎたからってウチにくれたのよ」

「え!？」

「まあ、ウチはアタシと美海と母さんの仏壇に供える三つだけあればいいから、丁度いいしあげるわ。そっちたしか提督も合わせて全員で七人でしょ？」

「いいんですか!？」

「美海も今日は大和ちゃんと話せたからか、楽しそうだし、その分のお礼よ。その代りって訳じゃないけど、これからも時々美海のこと構ってくれると嬉しいわ。アタシじゃどうしても寂しい思いさせちゃうから、ね」

「勿論です！」

次溺れられたら私も助けられる自信がないし、泳ぎは教えられないが、溺れないよう見ているくらいは私にもできるはずだ。

「ありがとうございます、店長！」

「では、また！ 大和さん！」

「またね、美海さん！」

こうして、美海という少女と知り合い、店長の意外な事実を目の当たりにすると同時に、私の心の中で自らの過去と向き合い、変わる覚悟が決まったのであった。

この後、何故か映画作りに燃える七丈島鎮守府の面々を数時間かけて正気に戻す仕事が続いていることを私は知らない。

第三十四話 「皆さん、ホワイトデーのお返しです！」

三月十四日。いわゆる、ホワイトデーと呼ばれる日。提督が食堂に艦娘達を集めた。

「皆さん、ホワイトデーのお返しです！」

「うわ、何ですかそのドラム缶!?!」

「ふ、用意するのに苦労しましたよ……ここ二、三日は横須賀を駆け回っていました」

三つの輸送用ドラム缶を台車で運んできた提督はその一つを開けて全員に見せる。その中にはありとあらゆるお菓子がぎっしり詰められていた。

「これは、凄いな……」

「提督、いくらなんでも多すぎませんか？」

「え？ だって、ホワイトデーは30倍返しでしょう？」

「違いますよ!?!」

「桁一つおかしいぞ」

「間違ってるわね」

流石に度を行き過ぎたお返しに天龍と瑞鳳からもツツコミが入る。

「ホワイトデーは300倍返しでしょうが、このクズ」

「当然だよなあ？」

「何、平然と桁一つ増やしてるんですか!?!」

「ここまで豪勢にお返しされておいてさらにたかろうとするクズの極み。」

「すみません、勉強不足でした……」

「提督も真に受けなくてください！」

取り敢えず量が量なので、急遽、お茶を淹れて全員でお菓子パーティーの運びとなった。

☆

「提督、そういえばこっちのドラム缶には何が入っているんです？」

「ああ、こっちは皆さん個人へのお返しです」

「大量のお菓子に加えてそんなのまで用意してるんですか!?! 気合入

りすぎでしよう!」

相当、バレンタインに皆からチョコが貰えたのが嬉しかったらしい。矢矧は経費がどうこうぼやいているが、聞こえないふりをして提督はゆっくりと二つ目のドラム缶を開くと、中身を慎重に一つずつ取り出して机に並べる。

「これはプリンツのです」

「うわあ! これ、シュトーレンだあ! 数年ぶりに見たよ、懐かしい!」

プリンツにはドイツのお菓子だ。プリンツも久々に故郷のドイツに馴染みあるものを貰えて嬉しそうにしている。

「これは瑞鳳の分ですね」

「あら? これマカロンじゃない! 一度食べてみたかったのよ、一度!」

マカロン。いかにも瑞鳳が好みそうな高級スイーツである。

「これは天龍の分」

「おお! これは、超巨大ふ菓子、大懣豪だいふじょうじゃねえか!」

両手一杯に抱えられる程の大きさを誇る巨大ふ菓子である。駄菓子といえどここまで大きいと迫力がある。

「これは磯風の分」

「おお、これは——いや、何だ、この青い奴は!」

磯風に差し出されたのは謎の青い粘土のような物体であった。傍から見て食べ物かどうかも怪しい。

「ふ、これはラムネ味餡子、です!」

「おい、なんだそれは! バレンタインに緑色のチョコを渡した仕返しなのか!? バレンタインの仕返しなのか!? だから私の奴はゲテモノなのか!」

抗議の声をあげる磯風をスルーして、今度は三つめのドラム缶を開ける。

「これは、全部大和の分ですね!」

「こ、これは……!」

ドラム缶の蓋を開けた瞬間に周囲に広がった甘い匂いで全員が気

付いたことだろう。

私は、ドラム缶に駆け寄って中を覗きこむ。

その目が爛爛と輝き、その口元が思わずにやけてしまう。

「これは、ドラム缶プリン！」

ドラム缶の中身は余すことなくカスタード色のプリンで埋まっていた。

これこそがおいしいしん坊なら誰もが夢見るバケツプリンのさらなる上位互換、ドラム缶プリンである。

「大和にはもう食べられないと一度言わせたかったんですよ」

「提督、ありがとうございます！ いただきます！」

「うわあ、あれ食うのか……？」

「見るだけで胃もたれしそう……」

「途中で飽きないか、普通？」

「プリンの中に様々なフルーツフレーバーが混ぜ込んであって層ごとに色々な味が楽しめるようになってるらしいですよ？」

周りは色々と言っているが、私はそんなことよりもスプーンを手に目の前のドラム缶プリンを食い尽くすことしか頭にない。

こんな時にこそ、あれが欲しかった。今は店長の元に返してしまつたビッグスプーンが。

「——どんだけツ!？」

「お父さん、急にどうしたの、大丈夫!？」

「え、ええ、美海、大丈夫よ。おかしいわね今確かに何者かの殺気を感じただけれど……？」

☆

持つてきたドラム缶を全てお披露目して一息ついた所で、天龍が辺りを見回しながら不思議そうな顔で提督に尋ねた。

「あれ？ おい、矢矧の分はねえのか？」

「あ、えーと、ちよつと諸事情でないんです」

「……え？」

その提督の一言により、一瞬で楽しげだった食堂の空気が凍り付いた。

食事モードに入った私でさえもスプーンを動かす手を止めてしま
う。

誰もが提督と、彼を見つめて固まる矢矧の二人の様子を直視してい
た。

「あ、そ、そうなんですか……ふ、ふうーん、そうですか、そうですか
：諸事情なら、仕方ないですね、わ、わかりました。仕方ないですも
んね……はい」

あからさまに矢矧の表情と言動に動揺が伺える。

身体が小刻みに震え、焦点が合っていない。こんな矢矧を見るのは
七丈島鎮守府に来て初めてである。

「あらあ？ 矢矧、もしかしてシヨックだった？」

「は、え？ い、いや、そんな訳ないでしょ!？」

動揺した矢矧に瑞鳳がニヤニヤしながらちよっかいを出し始める。

頼むから、空気読んでくれ。

「いやあ、私にはこんな高級スイーツをくれて、矢矧には何もいなん
て、もしかして、提督ったら私のこと好きなのかしらあ？」

「は、はあ!?! いくら提督が今まで彼女できたことのない、童●だか
らってあなたみたいなお女に陥落される筈ないでしょう!？」

「ぐっはあ!？」

「提督うううううううううううううううううううううう!？」

提督の精神的ウィークポイントにダイレクトアタック。

「——燃え尽きたぜ……真っ白にな……」

「立て！ 立つんだ、提督!？」

ただでさえ服装も相まって白い提督がさらに真っ白になってし
まっている。

天龍が叱咤激励しているが、明らかに面白がってやっているの
で、多分提督はもう立ち上がれないだろう。

「でも、好きじゃない女の子のためにこんな高級スイーツ、わざわざ
二、三日もかけて買ってきてくれるのかしら?？」

「そ、それは、今までもろくにバレンタインにチョコ貰ったことなかつた
から、ちよっとはしゃいでるだけよ!？」

「がはあっ！」

「提督うとうとううとうとううとうとううとうとううとうとう！」

再びダイレクトアタック。

「――パトラッシュ、疲れたろう。僕も疲れたんだ。なんだか、とても眠いんだ……」

「私はパトラッシュじゃないぞ。おい、優しく頭を撫でるのはよせ。目を開けろ、提督！」

天使に連れていかれそうな提督を必死に磯風がピンタで起こそうとする。だが、磯風は明らかにラムネ味餡子の仕返しで殴っているの
で、あのままではどちらにせよ天国行きだろう。

そんな提督を差し置いて依然、瑞鳳の嫌がらせは続く。

「じゃあ、何で矢矧には個人的なお返ししないのかしらねえ？ 毎年バレンタインもあげてたのにねえ？ おかしいわよねえ？」

「い、いや、瑞鳳……それは――」

瀕死の提督が最後の力を振り絞って何かを言おうとしている。

だが、悲しいかな、今の矢矧には全くその声が耳に入っていない様子だ。

「そ、そういう肝心な所で気が利かないのよ、この提督は！ だから、モテないのよ！ それだけよ！」

「か……は……っ……っ……！」

「提督うとうとううとうとううとうとううとうとううとうとう！」

もうやめて、提督のライフはとっくに0よ。

「――我が生涯に、一片の悔いなし……！」

「いや、悔いしか残ってないじゃないですか！ そんな人生でいいんですか!？」

もういつそ楽にしてやろうとさえ思った。

☆

「す、少し港に用事があるのと、しばらく一人になりたいので、外に出ます……」

「は、は、は」

なんて寂しげな背中だ。

心に深い傷を負った提督はそう言っただけで食堂を去っていった。しかし、それにさえ気づかず、矢矧は暗い顔で俯いている。

「瑞鳳、やりすぎですよ」

「何よ、ほんの重い冗談じゃないの」

「重い自覚はあったんですね!?!」

「そうよ、私はちゃんとわかってやってるんだから」

「その得意げな顔やめてもらえます?」

猶更性質が悪い。

「だ、大丈夫よ。別に、気にしてなんてないんだから……」

「そんな小刻みに体震わせながら言われても……」

「……………弱ってる矢矧もちよつといいかも」

「プリンツはそこを動かないでください!」

プリンツがまたおかしなことを言い始めた。

「違います! 誤解です! ギャップ萌えてあるじゃないですか!?!」

「信用できませんね!」

何せ相手は常軌を逸した変態だ。いつプリンツが衝動を抑えきれず矢矧に襲い掛かるか分かったものではない。

「本当に違うんです! 私の中での一番はお姉さまなんです! 浮気じゃないんです! 信じてください!」

「いや、そこはどうでもいいんですよ! まるで私が嫉妬してるみたいな言い方はやめてくださいよ!」

「お姉さま、恥ずかしがらなくても、いいんですよ?」

「天龍、その空いたドラム缶、取ってくれます? ちよつとコンクリ詰めにして海に投げ捨ててきます」

「やめて、お姉さま! それ本当に死んじゃう!」

ドラム缶片手にプリンツを追いかける私を見て瑞鳳がニヤニヤして呟く。

「女同士でイチャイチャと、見せつけてくれちゃって」

「どうやったらこれがイチャイチャに見えるんですか!?!」

「いや、プリンツは嬉しそうだが……」

「よく考えたら、今まで私が追いかけるばかりだったのに、今はお姉さまに追いかけられてる……これって、もしかして相思相愛?！」

「どう考えても違うでしょう!！」

「おめでとう」

「おめでとさん」

「めでたいな」

「何の祝福ですか!？」

それから私がプリンツの後頭部にドラム缶をクリティカルヒットさせて仕留めた頃、両手にふ菓子を抱えてかぶりついていた天龍が思い出したように呟いた。

「——そういえばよ、前から気になってたんだけど、矢矧って提督にだけは敬語だよなあ」

「ああ、そういえば」

「言われてみればそうね」

「確かにな」

「珍しいよねえ!」

「そ、そうかしら?」

弱弱しくも返事ができる程度には立ち直ってきた矢矧に私は記憶を辿りながら言う。

「確かに、私が見た他の矢矧は提督にも普通の口調だったと思いますよ?」

「しかも、よりによってあんな提督に敬語ってのはなあ」

確かに、私と矢矧以外は提督に敬語を使っているのを見ない。

しかも私は癖で誰と話するときにも敬語になっているので、実質、提督に意識的に敬語を使っているのは矢矧一人だ。

まあ、提督のいつもの仕事ぶりを見れば仕方がない気もするし、言いかたを変えればフレンドリーな鎮守府とも言える。

「敬語……別に意識してそうしてた訳じゃないけれど、きつとあの時からね」

自分のこれまでの提督に対する言動を思い出しながら矢矧は意味深にそう呟く。

「あら？ 昔、提督と何かあったの？」

瑞鳳が興味津々に食いついてくる。

「ええ、まあ、あの時はまだ提督ではなかったけれど。まだ私が鎮守府を渡り歩く流浪の艦娘をやっていた頃の話よ」

それを口上に話は始まった。

矢矧と提督、その出会いの物語が。

「そう、あいつは、私のことを日夜追いかけてまわすストーカーだったのよ」

「――!?」

今、提督とゴキブリどちらの存在がより尊いかを天秤にかけて、ゴキブリに傾きかけている。

第三十五話「お願いです！ 私の艦娘になつてくださ
い！ 矢矧！」

「お願いです！ 私の艦娘になつてください！ 矢矧！」
「また出たわね、不審者！」

私、矢矧がかつて居た泊地を離れてから数年。最初は右も左もわか
らず、事情を各鎮守府の提督に説明し、滞在させてもらうまでには相
当手こずったもので、難航した時は一日か二日かかったこともあつ
た。

その中で色々な経験をし、色々な物や人を見てきた。時にはとんで
もない苦勞にみまわれることもあつたが、それらも含め、私の中に確
かに活きている。私はこの数年でこの世界に対する見分を相当に深
めてきたのだと最近思う。

しかし、どこの鎮守府や泊地での経験を思い返しても、ストーカー
という生物に出会つたのは生まれて初めてである。

「何で、あんたは部外者の癖に毎日毎日！ この鎮守府の警備はどう
なってるの!?!」

「それはもう、毎日毎日憲兵さんを襲撃して侵入してるんですよ。い
やあ、今日は少し危なかった」

「最近、憲兵さん達がボロボロなのはあんたが原因か!」

現在、私の目の前に立つ眼鏡の男は自称提督になる予定の男で、数
日前から自分の鎮守府の艦娘になつてくれとやたらしつこく勧誘し
てくる。

私としては当然そんな怪しい申し出を受ける筈も無く、何度もはつ
きりと断るのだが、この眼鏡、何故か一向に諦めようとしないのであ
る。

「あの、そろそろ、私の艦娘になつてくれませんか？」

「そろそろって何よ。なるわけないでしょ」

「ええ……私、もう憲兵さん達と戦うのしんどいんですけど」

「じゃあ、やめれば!？」

「凄いですよ? 今日なんて警備が一人と見せかけて私が動いた瞬間に十人以上の伏兵があつという間に私を取り囲んできて——」
「聞いてないわよ!」

こつちもこんなわけのわからない男の相手をしているせいで疲れしてしまう。ただでさえ仕事如山積みの中、僅かに取れた休憩時間だというのに。

「もういいじゃないですか? 何で渡り鳥なんてしてるんですか? そろそろどこかで身を固めてもいいじゃないですか!」

「遊びでやってんじゃないのよ」

何も知らない癖に。

疲れも相まって私の語尾に怒気が籠る。

「私はね、そう簡単に今の生き方を変えることもしないし、まずそのつもりがないの。何も知らない部外者が口を挟まないで」

「部外者なんて冷たいですよ! 私と矢矧の仲じゃないですか!」

「まだ出会って一週間も経ってないわよ! ああもう、頭痛がする……」

「おや、風邪ですか?」

「あんたのせいよ!」

本当にこの男いると疲れる。

折角外に出たが、これでは落ち着いて休憩もできない。私は仕方なく、鎮守府へと戻ろうと踵を返す。

すると、鎮守府の方向から書類の束を持った艦娘がこちらにやってくるのが目に入った。あれは駆逐艦の電だ。

「あ、矢矧さん! 見つけたのです!」

「電? どうしたの?」

走ってきたらしい電は私の目の前までかけてきて、肩で息をしながら書類の束を手渡した。

「て、提督が、その書類の件で、相談が、あるって、言ってたのです!」

「はいはい、息整えてからゆっくりでいいのよ。ありがとうね」

息切れしている電の背中をさすりながら書類に目を通す。装備の

開発計画に関する書類だ。工廠の妖精さん達にも相談する必要があるかもしれない。

私は急いで鎮守府に戻ろうと歩を進めようとするが、その足を私の肩に置かれた手が止めた。

「……………何？」

「これは、装備開発の計画書ですか？　なんでこれが艦娘のあなたに？　こういうのは提督の仕事でしょう？」

「別に。提督の業務を見ててもっと改善できる部分があるからそこを指摘しているのよ。最近は鎮守府運営の一部も請け負っているわ」

「な、通常の出撃に加えてですか!？」

「何よ、あなたには関係ないでしょ？」

男の手を振りほどこうとするが、提督の手はより一層私の肩を強く掴んで離そうとしない。

「矢矧、ダメです。こんなのやめてください、あなたの体が持ちませんよ」

「どうするかは私が決める。部外者が口出ししないで」

「真剣な話です!」

男の声が大きくなる。

私と男の間で睨み合いが始まる。

「……………あんた、何で私が渡り鳥をやっているのかって聞いたわね？　初めて会った時にはそういうやり方をやめろとかも言ってたわね？」

「はい、言いました」

「理由なんて簡単よ。私はね、提督っていう存在を必要としていないのよ!　提督なんて所詮は鎮守府で座っているだけの唯の人間。艦娘一人守れやしない役立たず!　だから、私は誰にも頼らない、皆私が守る!」

元居た泊地で、私は自分の力が足りなかったばかりに、親友を失った。そして、頼るべき提督も艦娘より弱い人間なのだ知った。

だから、私は誰にも頼らず、自分一人の力で全てを守る力が欲しかった。

だから、私は渡り鳥のように鎮守府や泊地を渡り、誰にも頼る必要

がないだけの力を、皆を守る力を付けてきた。

でも、まだ足りない。

「だから、私はまだ渡り鳥を止める訳にはいかないのよ！」

興奮気味に畳みかける私を見て、しかし男は冷たく言い放った。

「誰にも頼らず一人で生きるなんて誰にもできません。一人で皆を守るなんて猶更。そんな考えはさっさと捨てた方がいいですよ」

「なっ……………」

「今のあなたは大事なものが見えていない。それはあなたの一番近くにあるものなのに、一人だから見えなくなっているんです」

「偉そうに、この——」

「あの、この人誰なのですか？」

「え？」

男の襟首を掴み、握り固めた拳を振りぬく寸前、電のその言葉で私はピタリとその動きを止めた。

「な、なんで知らない男の人がいるのです？ 不審者、なのです……………」

「え？ あの、いや、私は…………不審者じゃ…………」

「いや、不法侵入者でしょう。略して不侵者ね」

「その略し方は絶対におかしい！」

「や、やっぱり不審者なのですっ！ なのですううううううう！」

電の大声が響き渡ると、すぐに数人の足音がこちらに向かってくるのが聞こえた。

「見つけたぞ！ こんな所に隠れてやがった！」

「この野郎！ 今日こそふん縛って穴と言う穴にワサビとか突っ込んでやるぜ！」

「我ら憲兵隊を怒らせるとどうなるか、教えてやれ！」

「くっ！ 仕方ない、今日の出直します！ では、また明日！」

「何さも当然のように侵入予告してんのよ、来るな！」

去り際に男は私の耳元で、小声で呟いた。

「提督は、役立たずなんかじゃありませんよ」

「……………」

その一言を残して男は走り去っていった。

「不審者さん、捕まるといいのです！」

「え？ ああ、そうね」

すっかり無駄な時間を食ってしまった。ろくに休憩もできなかったうえに、まだやることが山積みだというのに。

私は眉間に皺を寄せて大きくため息をつく。

「矢矧さん、大丈夫なのですか？」

「ああ、頭痛がするわ」

あの眼鏡の男の言葉のせいで、ただでさえ疲れているのに数倍疲れる。頭痛もきつとそのせいだ。

その後、男の後を憲兵達が追いかけていったが、数時間後に見た憲兵達の暗い雰囲気から察するにどうやら捕り逃がしたらしい。

☆

そして、その翌日。

「——さて、じゃあ今言った通り第一艦隊は南方海域へ出撃。第二艦隊は演習。第三艦隊は遠征。第四艦隊は私と一緒に西方海域へ行くわ。以上、解散！」

深夜、提督と入念な話し合いを重ねて決定したスケジュールを鎮守府の艦娘達に朝礼で通達する。

その後も今後の装備運用や建造計画に関して資料を集めて提案書を作成していたおかげで結局徹夜になってしまった。

しかし、こんなことはこれまで何度も経験してきたことだ。今更苦痛に感じるほどのことではない。

「あ、矢矧さん！ 後で工廠来てよ！ 開発計画の確認とかしたいから！」

「ええ、わかったわ」

「矢矧さん、資材と資源の備蓄に関して相談が……」

「わかった、目を通しておくからその書類、まとめて私の机に置いておいて」

「矢矧さん！ よければ今日の出撃の後、艦隊指揮のコツみたいな教えてください！ もっと旗艦として上手くやりたくて！」

「了解、出撃から戻ったら昼食でも食べながら話しましょう」

「矢矧さん、スリーサイズ知りたいのでここに書いといてくださいね！」

「わかった、後で書いてお——書かないわよ!? 誰、今の!？」

この鎮守府にももう一カ月滞在しているが、随分と初日に比べて話しかけてくれる艦娘が多くなった。

たまに変なものも混じっているが。

そして、それに比例するように鎮守府の戦果もよく伸びてきている。

どうだ、これが私の理想とする姿だ。私は心の中であの眼鏡に向けて得意げに言ってる。

執務室で書類に追われ、資材、資源の運用をしているだけでは鎮守府という建物は守れても艦娘の命は守れない。

仲間と共に前線に立つてこそ、初めて艦娘まで守ることができる。

これが私の理想像。人間の提督では決して実現できない理想。

『誰にも頼らず一人で生きるなんて誰にもできません。一人で皆を守るなんて猶更。そんな考えはさっさと捨てた方がいいですよ』

何が誰にもできない、だ。私は今それを実現しかけているじゃないか。

事実、私が来てから鎮守府の戦果は上がっているし、この一カ月、誰一人として中破以上の損傷を受けていない。

私は一人で皆を守る。あの男は所詮、何もわかっていないのだ。

「——さん! 矢矧さん!」

「ん……ああ、電。ごめんなさい、考え事をしてて気が付かなかったわ」

つい、考え事に集中して電が呼びかけていたことに気が付いていなかった。

私としたことが、珍しく注意散漫だった。あの男を意識しすぎているのだろうか。

「だ、大丈夫なのですか? 昨日も遅くまでお仕事してたって大淀さんが心配してたのです……」

「大丈夫よ、こんなの慣れっこだし艦隊指揮に問題はないわ」
「なら、いいのです……」

心配そうな顔をする電の頭を撫で、私は今日指揮する第四艦隊の元へ行く。

第四艦隊は練度の低い艦娘にローリスクで多くの経験値を積ませることが目的の艦隊である。今日は、電などの駆逐艦達の練度上げが目標である。

ドック棟へ行こうと艀装を装備して建物の外に出た所で、問題のあの男が現れた。

頭痛の種。眼鏡をかけた自称提督になる予定の男。

「……おはようございます」

「今日は随分とお早いおでましね。悪いけどこれから出撃なの。構ってる暇はないわ」

「矢矧、悪いことは言いません、今日の出撃は止めてください」

「……なんで、あんたにそんなことを指図されなくちゃならないの？」

言葉に苛立ちがあらさまに混じる。

いつもはもう少し冷静に話せるのだが、この男だからか、頭痛のせいか、どうにも苛立ちが隠せない。

「逆に、言われないとわからないと言うのが不思議です。やはり、あなたには一番大事なものが見えていない」

「昨日から、訳のわからないことを……」

「もう一度言います。出撃をやめてください」

「あの、矢矧さん、不審者さんの言う通り、私も——」

「行くわよ」

「え？」

「出撃予定時刻を過ぎているわ！ 第四艦隊、急ぎ抜錨するわよ！」

電の言いかけた言葉を無視し、私は第四艦隊を連れてドックへと向かっていった。

男は、今度は肩を掴んではこなかった。ただすれ違い際に小声で――

「だから、提督は必要なんです」

そう言い残したただけだった。

第三十六話 「見守る。それが提督の仕事です」

「――右舷に潜水艦四隻、見ゆ！ 全員、砲雷撃戦用意！」
「な、なのです！」

西方海域、リランカ島に着いてからはすぐに忙しくなった。練度の低い電をできるだけ前に出しつつ、後方から高練度艦が支援して敵を撃滅する。旗艦は電に敵の攻撃が集中しないよう、細心の注意を払って陣形を変更し、指示を出し続けなければならない。

敵の二個艦隊を全て撃滅した頃、ようやく艦隊は一息つけた。

「矢矧さん！ 電、大丈夫でしたか？」

「ええ、バッチリよ。初めての海戦でパニックになってた時もあったけど、概ね指示通りに動けてたし、敵に攻撃も当たっていたわ」
「なのです！」

私にそう言われて電は嬉しそうに笑うと、急に心配そうに私の顔を覗き込む。

「矢矧さんは大丈夫なのですか？ 顔色、悪く見えるのです」
「え、そう？」

電に指摘された途端、思い出したかのように頭痛の痛みが私を襲う。昨日までのものより痛みが強い。

（そういえば、今日はいつもよりいつもより身体が重いし、艤装の調子も悪いような……帰ったら仮眠を取らせてもらおうかしら）

今日の出撃に関しては提督の方からも止められていた。結局、戦果が上がり調子だからと私の独断で出撃を執行したのだが、悪手だったのかもしれない。

『矢矧、悪いことは言いません、今日の出撃は止めてください』
いや、馬鹿な。これではあの男の言う通りになっているようではないか。

私は大丈夫だ。何も問題はないのだ。

「――矢矧さん？」

「いえ、大丈夫よ。もう少しで哨戒予定のルートも終わるし、そしたら一旦撤退しましょうか」

「今からでも撤退した方が……」

「心配してくれてありがとう、電。でも、私は大丈夫——」

その時、電の頭を撫でる私の視界に入ってきたのは、彼女に迫る魚雷の影。

「危ない！」

「え!？」

夢中で電を突き飛ばすが、私は回避が間に合わず、魚雷の爆発にもろに巻き込まれる。

完全に私の失態であった。

何故レーダーまで持つてきておきながら、索敵を怠ったのか。あまにも注意散漫が過ぎる自分を殴りたい。

この海域には艦影の見えない潜水艦がウヨウヨいるというのに。

「ぐ……あ……」

当たり所が悪かったのか、私の艤装は大破していた。全身が焼けるように痛い。

しかし、それ以上に身体が動かない。

大破とはいえ、動けなくなる程のダメージではないことは経験からわかる。それなのに、まるで力が入らず、意識も朦朧としている。

「矢矧さん！ 矢矧さん！」

「き、旗艦！ 指示を！ どうすれば！」

単横陣を保ちつつ迎撃。深追いはせず、チャンスがあれば即撤退。五秒かからず通達できる程度の指示が出せない。

このままでは低練度の電や他の艦娘をカバーできない。まずい。

(くそ！ なんて、こんな時に身体が……まずい、意識まで……)

視界が暗闇に包み込まれ、仲間の声も、砲撃音すら遠く、聞こえなくなっていく。

こんな筈ではなかった。

私は一人で、皆を守る。その筈だったのに。

「こんな筈じゃなかったのに——」

「おや、目覚めたかね？」

「——っ!？」

聞き覚えのある野太い声に私は目を見開いて跳ね起きた。

いつの間にか私の身体はベッドに寝かされており、その隣に提督が座って本を読んでいた。

提督は本を閉じると私の方に視線をやる。厳しい目をしていた。

「私は、どうなったの?」

「君は過労状態にも関わらず無理に出撃した。艦装は母体である艦娘のコンディションの影響を強く受けるのは知っているだろう? そのせいで艦装は本来の機能を発揮できず、潜水艦の魚雷一撃で大破。装甲機能も低下していたせいで母体の君自身にも少なからずダメージが入り、過労も相まって君は戦闘不能となった」

「わ、私の艦隊は?」

「君が意識を失った直後になるか。第四艦隊を追って出撃した第一艦隊が君達を助けたのだ」

「第一艦隊!? 何故、私達のいた西方海域に!」

提督は椅子から立ち上がりながら言った。

「ついてきなさい」

言われるがままについていった先は客間だった。

提督は扉を開けて私に入るよう促す。

「矢矧、目が覚めたんですね」

「あ、あんたは……!」

「彼が私に進言してくれたのだ。第四艦隊が危険かもしれないから支援艦隊を出してほしいと。よくお礼を言っておくように」

そう言って、提督は客間を出て行った。

残された私は依然、目の前の男を見て何もできず固まっていた。

「座らないんですか?」

「す、座るわよ!」

「お茶をどうぞ。あ、この大福もすごく美味しいですから食べてみてください」

「ちよ、やめ、もてなすなっ!」

男の方を見ると、眼鏡を光らせてニヤニヤと笑っている。

「どうですか? わかりましたか? 見えていなかった大切なもの」

「……私自身、と言いたいのか？」

「そうです、あなたは少し自分を疎かにしすぎる。それはあなたの理想のため、文字通り我が身も顧みず頑張っていたからなのでしよう。しかし、そのせいで今回あなたの艦隊全員は逆に危険に曝される結果となった」

何も言い返せず、私は赤面して俯く。

「でも、自分の過労に気付けなかったことを恥じることはありませんよ。案外人は自分のことには鈍感な生き物なんです。それに、鎮守府と仲間のために疲れも忘れて一心に頑張れる。それはあなたの誇るべき長所です。恥じるべきは、一人でやろうとしたことです」

「一人で、やろうとしたこと？」

「あなたは、もう少し周りの声に耳を傾けるべきだった。今も言いましたが、人は他人のことには鋭敏でも自分のこととなると鈍感なものです。あなたが気づいていなくとも、あなたの過労に気付いていた人は私も含め、何人が居た筈ですよ」

電や提督の姿が脳裏に浮かぶ。

「あなた一人では気付けなかった。でも、一人でなければ気付けたはずです」

「一人じゃ、気づけない……」

「人は一人では生きられない、なんて言葉の意味はこういう所にあるんでしょうね」

「……そうね、私が間違っていたのね」

私は素直に自分の間違いを認めた。

仮に、今日、私に過労がなく無事に出撃を終えたとしても、きっとどこかで私は自分の理想の破綻に気付くだろう。

一人では自分の間違いに気付くことすらできない。それなのに、私の理想が一人で実現できる筈も無いのだ。

そして、それに気付かせてくれたのは、目の前の男だ。

「提督も、役立たずなんかじゃないのね」

「ええ、提督は確かに唯の人間ですから深海棲艦とは戦えませんし、出撃したあなた達の帰りを待つことしかできません。でも、あなた達艦

娘を決して一人にはしない。あなた達が見えない所は私達提督が見て、導いてあげられる」

私達艦娘が時に迷ったり、道を間違えたり、何かが見えなくなっても。

提督は私達を見て、守ってくれる。

「見守る。それが提督の仕事です」

提督が居る限り、艦娘は一人ではない。守られている。

私は、姿勢を正して座り直し、目の前の男に頭を下げた。

「この度は、大変ご迷惑をお掛けしました。そして、助けてくれてありがとうございます！」

「え、敬語!?! ちよ、矢矧、もう一回! 録音しますから!」

「調子に乗らないで!」

私は赤面した顔を誤魔化すように、仏頂面で皿の上に置かれた大福を頬張る。

「ん、凄く美味しい……!」

「でしょう!?! いやあ、我ながら最高傑作だと思っんですよね。この町の特産の小豆を使った大福なんですけれど」

「手作り!?! しかもあんたの!?!」

「いやあ、今までの不法侵入とか諸々謝りに行こうと思っ作っってきた大福なんですよね、これ」

てつきり老舗の和菓子店の一級品かと思っっていた。

私が感心していると、男は咳払いを一つ入れて、また口を開く。

「さて、矢矧。改めて、私の鎮守府に来ませんか?」

「ああ、今日も勧誘、するのね」

「勿論です。それに、矢矧が私に恩義を感じてくれている今が絶好の付け込むチャンスですからね!」

「ちよっと見直しかけたけどその言葉で台無しよ、このストーカー眼鏡」

「いくらなんでも言い過ぎじゃないですかね!?!」

私は笑いながら男に言った。もう、心は決まっていた。

「まあ、それでも一応恩人だし、一つ位恩返しをお願いを聞いてもいい

かもしれないわね」

「本当ですか!?!」

「まあ、つまらなかつたらすぐに出てくけど」

「大丈夫です、飽きは来ないと思いますよ。他の鎮守府とは全然違いますから!」

「ふうん?」

男が右手を差し伸べてくる。

「それでは、これから末永くよろしくお願いしますね、矢矧!」

私は、その手を力強く握り返して言った。

「こちらこそよろしくお願いします。提督、最後まで頑張ってくださいませ!」

☆

「——で、まさか犯罪者だらけの鎮守府だなんて思ってなかったけれどね。まあ、確かに飽きないけどね」

「提督と矢矧の間にそんな過去があつたんですね! 衝撃です!」

矢矧の長い一人語りが終わわり、聞いていた他の面々も大和に続いて感想を口に出す。

「お前みてえのがこんなとこに来た理由がようやくわかつたぜ」

「いい話だな。提督、最後まで不審者でストーカーのまま終わると思つたが、いい仕事をしたな」

「いつもの提督からは想像もできないよねえ!」

「で、その出来事をきっかけに矢矧ちゃんも提督に恋心を抱いちゃつたってわけね?」

瑞鳳が汚い笑みを見せて矢矧を問い詰める。

そのいやらしさたるや若い女の子に下心丸出しで絡むおっさんのそれである。

「そ、そんな訳ないでしょ! 急に何言つてるの!?!」

しかし、矢矧。純粹故か、言葉では否定するものの頬の紅潮を隠せない。

大和達もこれには思わずニヤニヤしてしまう。

「あ、でも、それだけ提督と強い繋がりがあつて、ホワイトデーのお返

し忘れられたのか……?」

「おい磯風、言葉には気をつけろ！ 大分時間が経っていたせいでそのことを忘れていた矢矧が今にもスタンリングで俺に八つ当たりを仕掛けようとしているじゃねえか！ ていうか、何で俺!？」

「まあまあ、落ち着きなさいよ、矢矧。男つてのはね、一番大事なものは最後まで取っておくもんなのよ」

「はあ?」

矢矧がスタンリングを起動させようとするのを瑞鳳がなだめていると、タイミングを見計らったかのように、鎮守府内アナウンスが流れる。

『監察艦矢矧さん。提督がお呼びです。至急執務室へおいでください。繰り返しします——』

「これは……」

「ほら、行ってきなさい」

背中を押され、矢矧は訳が分からぬまま、執務室へ向かう。

☆

「失礼します。提督、お呼びですか?」

「あ! 来ましたね!」

嬉しそうな表情の提督に促され、私はソファに座らされた。

すかさず、お茶の入った湯のみが目の前に置かれる。

「あの、提督。一体どういう要件で——」

「大福、食べます?」

「……これって」

「凄く美味しいから、食べてみてください」

私は大福をゆっくりと一つ手に取って頬張る。

あの時食べた大福と同じ味がした。

「凄く、美味しいです」

「でしょう? あの時と同じ小豆で作りましたから。取り寄せるのに少し時間かかってちよつと遅れましたけど」

「そういうことだったのね」

私の目の前に提督が腰かけてお茶を啜りながら笑う。

「いや、流石に私でも矢矧のホワイトデーのお返しだけは忘れませんよ」

「え、それはどういう？」

「ん？ いや、だって矢矧からは毎年バレンタインのチョコ貰ってますから。ホワイトデーのお返しも毎年恒例じゃないですか」

「ああ、そういうこと」

まあ、期待していた答えがこの男から帰ってくるはずもないか。

私は湯気の立つお茶に息を吹きかけ、啜る。

「今年は他の皆の分もあつて大がかりになったので、矢矧にも懐かしいものを作ってみました」

「本当に懐かしいです。良く覚えてましたね？」

「忘れられませんよ。矢矧は、私が自分の意志で選んだ唯一の艦娘ですから」

「……………」

「矢矧？」

「ああ、すみません。でも自分の意志で選ぶ、だったら他の艦娘も同じでしょう？」

「む、いや、そうじゃなくて、自分の都合で選んだ……は言い方悪いですね。自分の選り好みで決めた？ というのも少し語弊が……」

「まあ、いいわ。言いたいことは伝わりました」

「ん？ 何にやけてるんですか、矢矧？」

「別に？ 提督が私のストーリーカーしてた頃思い出して笑ってただけですよ」

「いや、ストーリーカーしてた訳ではないですよ!？」

私は必死で言い訳を始める提督を尻目にお茶をもう一口啜った。

喉を通り、身体全身が熱くなつていくのを感じる。

でも、顔が少し熱くなっているのだけは、きつとお茶のせいではない。

第三十七話「じゃあ、『ウミガメのスープ』でもやる?」

「暇ですね」

「暇ね」

「暇だな」

「ああ、暇だ」

「暇だよお」

今日も相変わらず七丈島鎮守府には何も無い。

戦争なんてもうとつくに終わっているんじゃないかというレベルで何も無い。

ちなみに矢矧と提督は執務で忙しいのでこの食堂にはいない。仲睦まじいようで何よりである。

そういう訳で、私大和と他の面々が食堂で何をするでもなく、皆でぼーっとしていると、瑞鳳が口を開いた。

「じゃあ、『ウミガメのスープ』でもやる?」

「お、なんだ? 料理か? 料理か? ん?」

「おい、磯風、ウキウキすんな。殺す気か」

「そもそもウチの食糧庫にウミガメなんてないですよ」

「じゃあ、私ちよつと獲ってきますね!」

「料理の話じゃないわよ『ウミガメのスープ』っていう一種のクイズみたいなもんよ」

ルールとしては、出題者が出した問題に対してYesかNoで答えられる質問をして真相を探り当てていくゲームだと言う。

「まあ、やることねーしやってみるか」

「私は楽しそうだし賛成だぞ」

「そうですね、やりましょう!」

「お姉さまがやるなら私も!」

「わかったわ。じゃあ、私が出題者やるから、3問出して1問も答えられなかった奴は罰ゲームね」

「え、罰ゲームって何ですか?」

「あ、じゃあ、私が作った新作のグラタンの試食を頼む」
「え」

その場の空気が凍り付いた。
天龍が噛みつくように瑞鳳に怒鳴りかかる。

「お、おい！ お前、出題者でノーリスクってずるくねえか!？」

「じゃあ、私の出す問題に全問正解できたら私も罰ゲームでいいわよ」
「うわあ、最低でも二人は磯風グラタン食べる羽目になるんですか……?」

「一人よりいいでしょ……?」

その瑞鳳の声は震えていた。

「大丈夫だ、今回は良い感じにできたぞ！ 自信作だ！」

「お前のその言葉が一番信用ならねえ！」

かくして、磯風グラタンを賭けたウミガメのスープが始まった。

☆

「じゃあ、一問目はこの『ウミガメのスープ』のタイトルにもなってる代表作。『ウミガメのスープ』よ」

船乗りがふと立ち寄ったレストランで海亀のスープを注文した。

運ばれてきたスープを一口飲んだ船乗りは驚いた表情を浮かべ、

それ以上スープを飲むことなく店を出て行ってしまった。

そしてその晩、その船乗りは自殺をしてしまったという。

さて、どうして船乗りは自殺をしてしまったのだろうか？

「——はい、質問来なさい。今回は初めてだし、何回でも質問していいわよ」

「おし！ スープには毒がもられてましたか？ これだろ!？」

「No、別に毒で死んだわけじゃないわよ。ていうか自殺だって言うってんでしようが」

成程、この問題からじゃ何が起こったのかさっぱりわからない。だから質問が必要なのか。

私は改めて気が付いたこのゲームの面白味に思わず感嘆の息を洩らしていた。

いけない。私もさつきと質問して罰ゲームを回避しなければ。

「じゃあ、船乗りは何か宗教に入っていましたか？ イスラム教とか？」

「この問題には関係ないわ。とりあえずN Oと答えておきましょうか」

「ふむ……？」

てつきり宗教上口にしてはいけない食べ物が入ったのだと思ったのだが。

その時、プリンツが何かに気が付いたかのように手を上げる。

「はいはい！ そのスープはお姉さまが作ったものではありませんでしたか!？」

「は？ まあ、Yes」

「その船乗りはお姉さまにスープを作ってもらえると聞いていたのにスープを作ったのがむっさいおっさんだったことに絶望しましたか!？」

「そんなことで自殺しないわよ！」

「私ならするかも！」

「あんたの話なんてしてないってのよ！」

よし、プリンツはいつも通りだ。これは罰ゲーム直行だな

「ふふ、皆、まだわからないのか？ 私はもうわかってしまったぞ？」

「磯風が!？」

「全く、瑞鳳らしい皮肉った問題だな」

「へえ、自信ありげじゃない。あと、これ別に私が作った問題じゃないけどね？」

磯風は確信の籠った笑みと共に口を開いた。

「そのスープは、私が作ったスープだ！」

「いやN Oだけど」

「なん……だと……!？ 絶対私のメシマズ弄りの問題なんだとばかり……」

「それ、どんだけ私の性格悪すぎよ。失礼な」

「え、悪いじゃん、お前」

「黙ってなさい、厨二眼帯」

「ふざけんな！ この眼帯は飾りじゃねえ！」

どう見ても瑞鳳は性格悪いと思う。

「ええ、絶対これだって思ったんだけどな……」

「いやいや、流石に磯風の殺人料理でもスープ一口で人を自殺には追い込めないでしょう？」

「ワンチャン、ある……！」

「是非、早急にノーチャンスにしてください」

そんなやりとりをしている間にプリンツが次の質問を考え付いたらしく手を挙げる。

「はい、その船乗りにはお姉さまがいますか!？」

「No、両親だけよ」

「そのスープになったウミガメにはお姉さまがいますか!？」

「No、お姉さまお姉さまって、しょうもない質問ばかりしているとペナルティを——」

「はい、わかった！ そのスープがお姉さまだったんですよツ！」

「——!？」

そのプリンツの一言で瑞鳳が固まった。

「う、うん、これは……とんでもない所から……くそ、どう答えたものか……」

ええ、何々、その反応。凄い気になる。

「プリンツ、スープがお姉さまだったから、なんなのかしら？」

「ええ？ いや、スープがお姉さまだったから、それを食べちゃったなんて自殺もん……あああああああああああああああああああ
あ！」

「うお!? なんだ急に、びっくりした！」

「そうか！ ウミガメのスープだと思ってたら、お姉さまだったんですよー！」

「すみません、プリンツ。興奮してるとご申し訳ないんですけど、私をスープにするのやめて！」

しかし、プリンツは私の声も意に介さず説明を続ける。

「船乗りは以前、ウミガメのスープって言われて食べてたのが実はお

姉さまだったんですよ！ それを、レストランで食べて気が付いたんです！」

私をスープにするのやめてって。

「むう……いいでしょう、正解よ」

「やったあああ！」

「ん？ つまりどういうことなんだ？」

「男は過去に航海中に遭難して餓死しかけたことがあったの。その時に仲間の一人がウミガメのスープだと言って渡してきたスープを飲んでなんとか生きながらえたんだけど、レストランで食べたウミガメのスープの味とはまるで違う。そこで気が付いたのよ。あの時食べたウミガメのスープは実は餓死した他の仲間のスープだったんだって」

「うわあ、なんですかその話……」

「え、エグイな」

「まあ、何はともあれ、プリンツは一抜けね」

「やった！」

成程。裏にこれほどエグイストーリーが隠されているとは思いつけなかった。中々難しいかもしれない、このウミガメのスープ。

何より、一番罰ゲームに近いプリンツに抜けられたのは大きい。次は油断できない。

「よし！ 次の問題いきましょう！」

「じゃあ、プリンツは質問はしてもいいけど答えを言うのはだめよ」

「はい」

「それじゃあ、次は笑える系の問題でいくわね」

〃先日のテストが返ってきた。

私は問題を一問も間違っていなかった。

しかし、私はクラスで最下位の成績だった。

一体、何故だろう？

「先生が答え合わせ間違ってたんじゃないかねのか？」

「No、答え合わせに間違いはないわ」

「全員満点だったか？」

「No、0点から100点まで色んな点数の人がいたわ」

「お姉さまが最下位のはずなんてない！」

「プリンツはいい加減にしなさい」

一問も間違っていない筈なのに最下位の成績だった。こういう矛盾した文章が成立している場合、実はどちらかの事実を誤解しているのだ。

まず、一問も間違っていない、という文章を誤解しているとして考えよう。

「テストの裏面に本人が気づいていない問題がありましたか？」

「No」

「名前を書き忘れていて0点だった？」

「No」

「本人は正答だと思っていたが、間違いだった？」

「No」

うーん、少し難しいな。じゃあ、次は最下位の成績だったという文章を誤解していると仮定しよう。

「最下位、というのはクラスの中だけの順位ですか？」

「No、学年でも最下位ね。良い質問よ」

クラスでも学年でも最下位。一問も間違っていない。

そもそも最下位っていつてもクラスと学年の人数が——あ。

「わかった！ そのクラス、学年は『私』一人だけだったんですよ！」

だから、何点取ろうが一位であり、最下位でもあったってことじゃないですか!？」

「No、クラスには多くの生徒がいて、その中で最下位だったわ。さつきも色々な点数の人がいたって言ったでしょう？」

「あ……」

忘れていた。結構自信があっただけにショックだ。

私を頭を悩ませていると、天龍がゆつくりと手を挙げる。

「あのよ、クラスでも学年でも最下位ってことは、そいつテストは0点だったってことか？」

「いい質問ね、Yesよ」

「ああ！ 成程！ そういうことか！」

天龍が声をあげた。

「つまり、一問も間違つてはいないが、一問も正解してなかったんだろ？」

「Yes、もうほとんど正解ね」

一問も間違つていないけど、一問も正解してない。

そこまで聞いて私もようやく理解した。

「つまり、白紙解答で出したんだ。別に間違つた訳じゃねえけど、正答している訳でもねえ。だから一問も間違っていないけど0点なんだ」
「はい、正解。白紙解答を一問も間違っていないと言い切る発想の転換がこの問題のミソね」

まさか、天龍にまで先を越されるとは。

いよいよ次が最終問題。私も気を引き締めて行かないと。

「じゃあ、最終問題いくわよ」

「このプールで私は食事もできるし、トイレもできるし、寝泊りだつてできる。」

私は外で見ている人達にプールと一緒に泳がないかと手を振るが、皆笑つて手を振り返すだけでプールには入つてこない。

一体なぜだろう？」

「んんんんんんん!!」

「状況からもう想像できないぞ?」

「なんか、難易度があがつてねえか?」

「瑞鳳もこれ正解されたら磯風グラタンだからねえ」

プールで食事、トイレ、寝泊り。そこからもう想像できない。どんな高級リゾートホテルのプールなんだ、一体。

「うーん、そのプールに入るには大金がかかりますか?」

「No、お金はかからないわ」

「トイレはプールの中ですか?」

「Yes」

うわ、汚い。そりゃ、プールに入りたがらないだろう。

「でも、排泄物が汚いからが一番の理由と言う訳ではないわ」

「そうだよね、お姉さまの排泄物なら私喜んで飛び込むし」

「聞いてないです」

「外は大雨でプールに入るような日和じゃなかった、とかどうだ？」

「天候は関係ないわね」

「うーん、外の人達がそのプールに入ったら問題がありますか？」

「いい質問ね、Yesよ。多分、怒られるでしょうね」

怒られる、とはどういう意味だろう。

「そのプールはホテルとかにある宿泊者専用のものか？」

「いい質問ね、Noよ」

全く、わからない。

汚いから入りたがらないというのは一番の理由ではないみたいだし、ホテルとかのプールでもない。

『はい、正解。白紙解答を一問も間違っていないと言い切る発想の転換がこの問題のミソね』

発想の転換、か。

そうだ、そもそも『何故、外の人達がプールに入ってこないのか』ではなく、『何故、私はプールの中に入れるのか』を考えてみよう。

「そのプールは一般人には入れませんか？」

「Yes、良い質問よ。一般人は一生入ることはできないでしょうね」
一般人は一生、入ることができない。では、『私』は一般人ではないのか。

『私』は一般人ではないのですか？」

「すごく良い質問ね。Yesよ」

すごく良い質問。核心に迫っているということだろう。

私は一般人ではない。いや、まさか、そもそも——

『私』は人ではありませんか？」

「Yes、その通りよ」

プールでトイレも、食事も、寝泊りもできて、人ではない。

ああ、成程、やっとわかった。

「そうか、『私』は水族館の海洋生物なんですかね？」

「Yes、『私』は海亀よ」

「水槽の外から自分を見ている人間達に手を振っている。でも、人間は水族館の水槽内に入ろうとはしない。そういうことですね？」

「ええ、大正解よ」

「おお、すげえ、よくわかったな大和！」

「流石お姉さま！ さすおね！」

「変な略し方やめてください」

「成程、そういうことだったのか。全く見当もつかなかった」

こうして『ウミガメのスープ』大会は幕を下ろした。

☆

「さて、ということは罰ゲームは瑞鳳と磯風だな！」

「むう」

「まさか、こいつらに全問正解されるなんて……屈辱だわ」

瑞鳳と磯風の前に磯風が作ったグラタンが置かれる。

湯気を立て、表面のチーズが程よく溶けたそれは、中々美味しそうなグラタンの形をしていた。

形だけは間違いなくグラタンだった。

「見た目がまともな磯風料理も久々ですね」

「今回は上手くいったって言っただろう？」

「信用してねえぞ。食って生き残ってからだ」

「まあ、いいさ。私から食べよう。私の料理の成功を私の手で証明してみせる！ いただきます！」

磯風はそう言うと、スプーンでグラタンを口に運ぶ。

「もぐもぐもぐ」

「……………」

「……………」

「……………」

なんだ、この緊張感。

しばらく磯風はグラタンを味わうように咀嚼すると、笑顔で言っ

た。

「美味しい、我ながら最高の出来だ……！」

「嘘!？」

「マジか!？」

「え、本当に？ ラッキー！ 私助かったのね！」

磯風は一向に倒れない。磯風料理を口にした者がここまで意識を保っていた例はない。史上初、磯風料理の成功例が誕生したのだ。

瑞鳳も、安堵の息をついてグラタンを食べ始める。

「なんだよ、こんなところで成功すんのかよ。瑞鳳がぶっ倒れるところ見たかったのによ」

「いやあ、何が原因で上達したのかわかりませんが、良かった良かったー！」

「はは、ありがとう。これも大和や皆のおかげだ」

「これで、もう悲しい争いは生まれないんだね！」

「いやあ、悪いわね！ このグラタン、本当に美味しいわよ！ いくらでも食べれそうー！」

平和。圧倒的、平和。

何もなく終わる筈だった。その筈だった。

「かっ——！！」

「え？ 瑞鳳？」

突然、スプーンが床に落ち、瑞鳳が白目をむいて真後ろに倒れた。

「瑞鳳おおおおおおおおおッ！」

天龍が倒れた瑞鳳を抱きかかえる。

瑞鳳は、全身を痙攣させて口を金魚のようにパクパクと動かしている。最後の力を振り絞って何かを伝えようとしているかのようだ。

「どうしたんですか!? 瑞鳳！ 何を、何を私達に伝えたいんですか!?」

「し……しじみ……！」

その言葉を最後に、瑞鳳は気を失った。

「おい、しじみってなんだ!? グラタンとなんも関係ねえぞ!? 瑞鳳

！ 瑞鳳おおおおおおおッ！」

「瑞鳳、尊い犠牲だったな」

「何で、磯風は平気なんですか!?!」

「さあっ…」

磯風の料理は磯風本体には効かない。

七丈島艦隊の食卓的平和の実現は未だ遠い。

第三十八話 「感謝っ……！！ 圧倒的感謝っ……！！」

「ふんふんふん、ふふーふふーん」

ある日の朝。自室で上機嫌に鼻歌を歌いながらプリンツは鏡の前で髪をいつも通りツインテールに結っていた。

室内にはスピーカーを通して隣の大和の部屋の盗聴音がBGMの如く流れ続けている。しかし、まだ大和は起きていないらしく、スピーカーからはほとんど何も聞こえてこない。

「お姉さま、昨日遅くまで読書してたみたいだからなあ。お寝坊さんかな？」

昨日は夜遅くまで本のページをめくる音が流れ続けていたため、大和が何か読書に耽っていたのは知っていた。

基本、七丈島鎮守府では起床時間などは決まっていらないが、今日の朝食当番は確か大和だ。このまま大和が寝坊したら朝食が食べられないどころか、磯風がいらぬ気を利かせて朝食作りを始める可能性もある。

そうなれば七丈島鎮守府が容易く壊滅してしまうことは火を見るより明らかだ。

「よし！ お姉さまを起こしに行かなくちゃ！ 決して合法で部屋に侵入する理由を見つけたからとか、朝ちゅんチャンスとか狙っている訳ではなく！」

誰にしても知らぬ言い訳を並べながら、鼻息荒くプリンツは部屋を出た。

隣の大和の部屋の合鍵は作るたびに没収されてしまっていたが、今はピッキングが上達したため、針金が二本あれば五秒で鍵を開けることができる。

自室から持ってきたピンを素早く動かし、カチャリと鍵の開いた音を確認すると、プリンツは音をたてぬよう慎重に室内に入る。

「お姉さまあー、あなたの愛しの妹が朝のご奉仕に参りましたあー」

小声でそう呟くと、大和のベッドまで近づいていやらしい手つきで

布団の中に手を入れようとしたその時。

プリンツの手は布団から出てきた大和の手に掴まれた。

「ひゃう!？」

思わず変な声が出る。

同時に布団から大和が起き上がって言う。

「飛びましたよっ……………！ 眠気がっ……………！」

「え?？」

「くくく……………！ 朝から堂々と、不法侵入……………！ 犯罪っ……………！ 圧

倒的犯罪っ……………！」

「え、なんですかお姉さま、その喋り方……………？」

「おおかた、私の貞操を狙ったんでしよう、が……………駄目っ……………！ 致命

的に漏れ出してしまっている……………！ 煩惱の気配……………！」

「あの、ちよつとお姉さま? なんか『これ』多くありません? 気

のせいですか?」

「ここでプリンツもようやく気付く……………！ 大和の話し方の、違和

感っ……………！ その、原因っ……………！」

「ナレーション!？」

ここでプリンツは大和の枕元に数冊の単行本が無造作に散らばっているのに気付いた。

「賭博黙示録ガイジ……………？」

「それは……………まだ貸せません……………！ 何故なら、最新刊……………！ つま

り、まだ……………読み終えていない巻っ……………！」

「お姉さま、絶対にこれに影響されたでしょ!？」

☆

「へー、そんなにハマったか、その漫画」

「ええー！ 最初は絵柄とか好きじゃないなって思ってたんですけど、読んでいくうちにズブズブとのめりこんじゃって……………」

「あんなお姉さまは嫌です」

食堂で朝食のベーコンエッグを頬張りながら大和と天龍が漫画談義に花を咲かせている横でプリンツが不満げに頬を膨らませている。

「プリンツも読んでみたらいいですよ！ 絶対ハマりますっつて!」

「えー……一体どういう漫画なんですか？」

「ガイジっていう借金まみれのクズが自分を棚に上げた精神論とセコイ頭脳戦で様々な命懸けのゲームで他人を蹴落としてつつ大金を掴んでいくという壮絶なシリアス漫画です！」

「ろくな内容じゃないですね！」

「でも、読んでみたら面白いんですって！ 筑摩川とのDカード戦とか自分の耳切り裂きますからね！」

「なんで!？」

そんなスプラッターな部分を押されても何一つ読む気がわかないのだが、無意識に自分の手を握り締めながら輝かんばかりの笑顔を近づけてくる大和を見て、こういうのも悪くないな、と思うプリンツがいた。

「ガイジが駄目ならアオギはどうだ？ お前、麻雀好きだったろ」

いまいち漫画に興味を示さないプリンツに天龍は別の漫画を勧めてきた。

「うん、日本に来た時にルール覚えて一時期ハマってたけど」

「アオギはガイジの作者が書いた麻雀漫画だぜ」

「へえ！ 麻雀漫画かあー！ 天龍に前貸してもらった『鷺—s a g i—』も面白かったからそういうのなら期待できそう！」

ちなみに鷺—s a g i—はいわゆる超能力を持った少女達が何故か麻雀で日本一を目指すというとてもない漫画なのだが、これが中々ピツタリと噛み合っていて面白い。唯一欠点をあげるとすれば作者がよく休載するため連載開始から10年経っても未だに全国大会が終わらない。

「アオギは突然現れたアオギって名前の天才少年が麻雀で裏社会を駆け上がっていく話なんだ」

「やっぱり内容はスプラッターだね……」

「でも今クライマックスの鷹頭麻雀が滅茶苦茶面白くてな！ 20年間麻雀をやり続けて点棒が多い方が勝ちってルールなんだが、ゲームを始めたとき既に鷹頭が70歳の高齢でな。もう、麻雀終わる前に老衰で死ぬんじゃないかって」

「なんで鷹頭そんなルールにしちやったの!？」

「そういえば一回、鷹頭死んで地獄に落ちたけど、鬼を成敗して蘇ったな」

「麻雀は!？」

こちらもかなり滅茶苦茶な内容である。天龍と大和双方から地雷臭のする漫画を勧められ、プリンツが困っていた所にタイミングよく磯風が食堂に入ってきた。

「おはよう、すまない、遅れた」

「磯風……遅刻っ……! 朝食はもう……ないっ……! 俺様が食った……全部っ……! 残念っ……!」

「その喋り方結構ウザいよ、天龍?」

寝坊してきた磯風はそれを聞いてうなだれるが、そこに大和がキッチンからベーコンエッグとトーストが乗った皿を持ってくる。

「大丈夫ですよ、ちゃんととっておいてありますから」

「感謝っ……! 圧倒的感謝っ……!」

「磯風もわかるの!？」

「ガイジは天龍から貸してもらって全巻読んでいる」

「やめてよ、絶対教育に悪いよっ!」

朝食を口いっぱい頬張りながら、磯風も天龍達の漫画談義に参加してきた。

「わたしは、そうふあな、『テニスの王女様』とか好きだな」

「磯風、飲み込んでから喋りましょうね」

「テニスの王女様! テニスのプリンセスで略してテニプリ! それなら私も聞いたことあるよ! 確か青春テニス漫画なんだっけ?」

「いや、超能力バトル漫画だぞ」

「いつからそんな奇をてらった方面にシフトチェンジしたの!？」

聞いていた話から斜め上に脱線している現状にプリンツは声を荒げた。

「まあ、無我の境地辺りからもうスポーツ漫画から離れ始めていたがそれはまだいい。今の『新・テニスの王女様』ではボール止めるためだけにブラックホールとか作り始めるからな」

「テニスやってるんだよね!? ブラックホールって必要だったっけ!?」

「あと、新・テニスの王女様になってからは徐々にテニスで相手を戦闘不能にする奴が増えた気がする」

「怖いよー!」

少女漫画雑誌に掲載されているものだから、きつと可愛い少女達が日の下でキャツキャウフフしながらテニスするような百合漫画だと思っていたプリンツの妄想は儂く打ち砕かれた。

「テニプリはやっぱインフレしすぎたよなあ。ていうか、あいつらまだ中学生だぜ? 主人公の越後、まだ中1の夏に入ったばっかなんだぜ? 半年前までランドセルだぜ? 明らかにあいつら高校生だろ、運動神経とか、胸とか」

「あの世界では中学に入る頃には高校生の体格に成長するんだろう、きつと。高校生とかもう大学生みたいな色気のあるお姉さんだったり、おばさんレベルに老けてる奴もいるしな。というか、それを言ったらアオギだつてあいつ中学生だったろう」

「え、中学生が麻雀で裏社会を駆け上がるの!?!」

ガイジの主人公は二十代であったからてつきりアオギの方もそれくらいかと思っていたプリンツは思わず反応してしまう。

中学生といったら鷺—s a g i—の主人公達よりも年下だ。麻雀漫画の主人公としては最年少かもしれないレベルである。

「まあ、中学生のくせに第一話でチキンランして海に落ちるくらいだからな。相当の不良だったんだろう」

「不良ってレベルじゃないよね!?!」

「アオギが『ククク……まるで白痴だな』とか言い始めた時はゾクツと来たぞ」

「中学生の語彙力じゃないよね!?! 白痴ってどういう意味!?!」

日本の漫画は世界一だとは聞いていたが、ここに来てその深淵を覗いた気がするプリンツであった。

「まあ、それでも『シヨシヨの奇天烈な冒険』にはどれもかなわないけれどもね」

「瑞鳳、貴様あ！ どこから入ってきた!？」

「これは、スタント攻撃を受けている!？」

「そう、これが私のスタント! 『実はさつきからいた』!」

「ごめん、私ついていけない!」

まるでギリシヤ彫刻のようなポーズを取る瑞鳳、天龍、磯風の三人にプリンツは頭を抱えた。

「今日は、プリンツ、よくツツコミますね」

「だってお姉さまがサボるから!」

「ごめんなさい、つい楽で」

こうしていつの間にか矢矧と提督を除いた全員が食堂に集まり、漫画談義がさらに賑やかになった。

「それにしても、プリンツ、意外と漫画読んでねえのな」

「意外ですねえ。結構日本文化に馴染んでると思ってたんですけれど」

「私だって有名どころは読んでよ! 『ホワイトジャック』とか

『エースをくらえ』とか、『明後日のジョー』とか」

「うわ、古い」

「古いな」

「流石に遅れすぎだぜ」

「確かに名作ではあるんですけれどね」

皆から総ツツコミをくらい、プリンツも思えば日本の最近のサブカルチャーには手を出していなかったと今更気が付いた。

「じゃあ、とりあえず何か面白い漫画教えてよ! 読んでみるから!」

「ガイジ」

「アオギ」

「テニプリ」

「シヨシヨ」

「まとめてよっ!」

そこからは長かった。

「——ちよつと待ってくださいよ! ガイジのどこがマンネリなんですか!?! ブレイブメンロード渡らせませすよ!」

「そうだぜ！ アオギだつてここまで来るまでに一体どれだけ時間をかけてきたと思つてんだ！ 丁寧に一工程ずつ心理戦を演出した結果だろうが！」

大和と天龍の主張に瑞鳳が反論する。

「丁寧すぎるのよ！ ガイジはもうあれ『ざわ……ざわ……』つてさせておけばいいと思つてるでしょ！ アオギに至つてはいい加減終わらなさいよ！ なんてツモつて切るだけの行為に一月以上かかるのよ!」

「それはあるな。もっとテニプリみたいな爽快さと疾走感があつていい」

「疾走しすぎて読者は置いてけぼりだけだな」

「置いてかれるなんて、まだまだだね」

「なんだとう」

「そこを考えるとやっぱり一番はショショよね。丁寧な心理描写に加えて適度な物語進行、そして個性の光るキャラの数々。完璧だわ！ あれこそ漫画界の頂点と言つていいわ！」

「子供はいないが孫はできる世界のどこが完璧なんだ、ああん？」

「大人はウソつきじゃないのよ！ 間違いをするだけなのよ！」

その後も一日中議論が続けられた末、最終的には――

「全部面白いから全部読め」

「うん。もう、いいよ、それで」

そういう訳で大量の漫画を段ボールに入れてプリントは自室に戻り、読みふけることとなる。

その日、プリントの部屋から電気が消えることはなかった。

☆

次の日。

「お姉さま！ おはようございます！ さあ、今日はデートに行きましよう！ 早く！ ハリーハリーハリー！」

「プリント？ すみません、昨日の漫画談義、あのあと夜からまた始まってほとんど徹夜なんですよ。今日は休んで、明日にでも――」

「今日を頑張り始めた者にのみ、明日は来るんですよ、お姉さま！」

「え、もうガイジ地下チンチ口編まで読んだんですか？ でも、今日は本当に勘弁してください。明日、明日必ず行きますから……」

「お姉さま！ 明日って、今さッ！」

「ちよ、やめて！ 布団取ろうとしないでください！」

「無駄無駄アッ！」

プリンツに布団を奪われ、仕方なく大和はクマのついた目をこすりながら起き上がる。

見れば、プリンツにも同様のクマが残っていることに気が付いた。

「プリンツ……もしかして徹夜で漫画読んでたんですか？」

「……………」

「……………」

「倍プッシュだ……！」

「何を!? 絶対に言ってみただけでしょう今の！」

「……………」

You ま still だ have ま lots だ more だ to だ work ね

385
n

「だから、唐突に好きな漫画のセリフ無理矢理ねじ込んでくるのやめてくださいよー！」

プリンツがにへらと気味の悪い笑みを浮かべて大和の体に抱き着く。

「うへへえ、お姉さまあ！ じゃあ、今日はお部屋デートですねえ！」

「あんなことやこんなことしましょうねえ！」

「ちよ、離れてくださいって！」

「プリンツゾーンからは逃げられませんよ？」

「何ですか、その手柄ゾーンみたいなやつ!？」

「ようこそ……………女の世界へ……………」

「胸触らないでください！」

「豊満な…………双丘…………！ 至福の時…………！」

「実況もしないでください！」

「倍プッシュだ…………！」

「しなくていいっ！ 漫画ハマりすぎですって、プリンツ！ 誰か、こ

の深夜テンションのプリント止めてッ！
「今日も七丈島鎮守府は平和である。」

第三十九話 「二度とやるか、こんなクソゲー！」

「大和、遊ぼうぜ！」

「なんですか、急に……」

「磯野、野球しようぜ」みたいなテンションで私の部屋に天龍がやってきた。

今日は自室でゆっくりと過ごそうと思っていたのにいい迷惑である。

「どうせ暇だろ？」

「まあ暇ですけど……」

「こんないい天気にもせずつ部屋に籠ってちやもつたいないぜ！」

「わかりましたよ。それで、何をするんですか？」

「鎮守府の倉庫から見つけたTVゲームだ！」

「思いつきりインドアじゃないですか！」

という訳で今日はゲームをして暇を潰すことになった。

☆

天龍が取り出したのはいわゆるTVゲームのソフトだった。そして、そのケースの表紙には主人公と思われる美少女が数人のイケメン達に囲まれてポーズを取っている絵が描かれている。

要は、これは乙女ゲーム、通称乙ゲーだ。

「お前の部屋テレビあったよな？ ハードも持ってきてるからすぐできるぜ！」

「ええ……」

目を爛々と輝かせる天龍にNOとは言えず、私は仕方なく、天龍と乙ゲーをプレイする運びとなった。

しかし、天龍がこういうゲームに興味があったとは驚きである。

「――よし、これであればディスクを入れればゲームが始まるぜ！」

「私乙女ゲームなんてやったことないんですけど」

「ん？ 大和はこのゲームやったことないのか？」

「知識としては知ってますよ。確かイケメンの男子と恋をするゲーム

「でしよう?」

「まあ、そうだけどよー。乙女ゲームも奥が深いんだぜ? この『早乙女恋物語』っていうのは今までの乙女ゲームから一線を画す名作だぜ」

「へー」

私が適当に相槌をうつっていると画面が暗転し、タイトル画面が表示された。

『早乙女恋物語』

少女の声でタイトルコールが始まり、画面にはNew GameとLoad GameとMemoryの三つの選択肢が点滅していた。

「よし、当然ニューゲームだぜ」

「はい」

New Gameと押すと、電子音と共に画面が暗転し、画面下部にモノローグが出てきたかと思うと、タイトルコールをしていた少女の声でモノローグの朗読が始まった。

『——春、それは始まりの季節。草木が芽吹き、太陽が燦々と輝く暖かなその季節は、春風と共に始まりを運んでくる。新しい生活の始まり、新しい出会いの始まり、新しい出来事の始まり、そして、新しい恋の始まり』

「今喋ってるのが主人公だぜ」

「あ、そうなんですか。名前はなんていうんですか?」

『——そう、この春、私の新しい恋の物語が始まった。私の名前は——』

そこまでモノローグが朗読を終えると画面が切り替わって五十音表が表示され、上部に「あなたの名前は?」とメッセージが出ている。なるほど、このゲームはプレイヤー自身が主人公になるわけだ。

「まあ、(´▽`)は普通に『やまと』で」

『『やまこ』にしようぜ?』

「何その微妙な提案!?!」

天龍のやまこ押しを完全無視して名前を『やまと』と打ち込んで決定ボタンを押すと、場面が切り替わった。

画面には桜吹雪の舞う朝日に包まれた桜並木の街道の一枚絵が現れる。制服を着た男女がたくさんいるということはおそらくこれは朝の登校風景なのだろう。

私が状況を把握したタイミングを見計らったかのように画面下部に吹き出しが現れ、再び主人公のセリフが始まった。

『私の名前は早乙女桜——』

「ちよつと、待って！」

私はポーズボタンでゲームを一時停止させた。

「んだよ、まだ始まったばかりかだぜ？」

「なんですか、早乙女桜って!? 名前打ち込んだのと全然違うじゃないですか！」

「いや、別に主人公の名前は最初からこれで固定だが？」

「だって『あなたの名前は?』って！」

「いや、別に主人公の名前なんて言っていないだろ？」

「じゃあ何だ、さっきの。」

「なんですか、このゲーム！」

「ほら、はよ進めって。日が暮れちゃうぜ？」

私はポーズボタンを再度押してゲームを再開する。主人公のセリフが再度流れ始める。

『私の名前は早乙女桜』

はい。

『お父さんの仕事の関係で、この聖ヴァルハラ学院に転校してきた高校二年生。突然変化した環境にまだ戸惑いも不安も残っているけれど、持ち前の元氣と前向きさで頑張っていこうと思う!』

「健気で良い娘みたいですね」

「ああ、この主人公は元氣とポジティブが特徴だからな。ストーリーを進めていけば主人公の過去についても色々なことがわかって——と、あんまし言わねえ方がいいかもな」

『大丈夫! なんてったって私には代々受け継がれるこの妖刀『やまと』があるんだから!』

「ちよつと待ってッ！」

叫ばずにはいられなかった。

「おいおい、なんだよ」

「え!?　なんでこの娘、妖刀持ってるんですか!？」

「そりゃ、早乙女家に代々伝わる家宝だからだ」

「だからって刀携帯する女子高生なんていませんよ!？」

「敵に襲われた時丸裸じゃ流石にきついだろ」

「これ乙女ゲームですよね!?　敵とかいない筈ですよね!？」

まあ、それはまだいい。問題は次だ。

「なんで妖刀の名前が『やまと』になってるんですか!？」

「さつきお前が自分で決めたんじゃねえか」

「あれ、妖刀の名前決めてたんですか!？」

「いいじゃねえか、かつこいいしよ」

「なんですか、このゲーム!？」

『この妖刀『やまと』さえあれば、どんな敵だって一刀両断なんだから!』

「なんかヒロインが物騒なこと言ってますよ!？」

「おい、そんなの気にしてる場合じゃねえ!　来るぞ!　第一攻略男子だ!」

色々気になる点はあるが、天龍が興奮気味に私を急かす。

なるほど、登校中にイケメンと遭遇し、しかも同じ学校の同じクラスというパターンだ。

さあ、誰が来る。

『???…ちよつと、そこの君!』

『桜…え、何?』

『後ろから声をかけられて振り向くと、そこには赤い髪と目をした、爽やかな好青年が私を見つめている。彼の目と私の目が合った瞬間、私の胸が少し高鳴った』

というモノローグの後にその好青年の絵が画面に浮かび上がる。

「おお、これはなかなかの爽やかイケメンですね!　絶対サッカー部のエースとかやってそうな顔してますね!」

「随分具体的に絞っていくな、お前」

ようやく少しは乙女ゲームらしくなってきたことに少しテンションが上がってきた。

『桜：あの、何ですか？』

『???：いや、見ない顔だなんて思ってた……もしかして新入生？』

「おお！　なんかそれっぽいファーストコンタクトが始まりましたよ！　これですよ、こういうのがやりたかったんですよ！」

「楽しそうで何よりだ」

『レン：そっか、転入生かあ！　俺の名前は江迎蓮（エムカエ　レン）って言うんだ。気軽にレンって呼んでよ！』

『桜：う、うん、私は早乙女桜。よろしくね、レン、君……あの、その……』

『慣れない男子との会話に私は言葉が上手く出てこない。こういう時、なんて返せばいいんだろう。えーっと……』

「おお、いいですねえ、青春ですねえ！」

「おやし臭いぞ、お前。ほら、なんてセリフを言うか選択肢でてくるから選びな。これで向こうの好感度が上がり下がりしたりするから慎重に選べよ」

「は、はい！」

そう思うと少し緊張してきた。まあ、流石に相手に好印象を与えるようなセリフくらいわかると思うが。

1　：　ところで、誰の許しを得て私に気安く声をかけたのかな？

この豚が！

2　：　好きです好きです好きです好きです好きです好きです好きです好きです——

3　：　私にあまり関わらない方がいい、死ぬよ？

「あれ!?　全然わかんない！」

「ほら、突っ込んでないで早く選べよ」

「え!?　いや!?　ええ!?!」

正直どれを選んでも致命的にしか見えない。

どれも初対面、というかそもそも普通、人に言うようなセリフじゃないと思うが。

「うーん……じゃあ、3番、かな？」

一応、この中では一番引かれない筈。

『桜：ご丁寧に自己紹介ありがとう、レン君。でも、私にあまり関わらない方がいい、死ぬよ？』

「痛い痛い痛い痛い！」

「んだよ、下痢ピーか？」

「違いますよ、汚いな！ あとそれ死語ですからね！」

『桜：——ぐっ、私の妖刀やまとが……暴れだした!? くっ、鎮まれ！』

「くっ、鎮まれ！ じゃないですよ！ なんで桜急にこんな痛いキヤラになってるんですか!?!」

「お前が暴れてるからだろ？」

「妖刀やまとのせい!?!」

『レン：あ、ああ、うん……よくわかんないけど、もう近づかないよ、なんかごめんね』

『レンの好感度が50下がりました』

「ほらー！ レン君ドン引きじゃないですか！」

『桜：ふ、それでいい、早く行って……！ 私^コが妖刀^イやまと^ツを抑えている内に……！』

「もうこれ以上余計な事言わなくていいから！ 桜！」

「おい早く鎮まれよ、大和」

「私は暴れてない！」

『レン：じゃ、じゃあね、早乙女さん……』

『桜：ふ、さらだば』

『さらだば!?!』

「あー、ここな。酷い誤植だよな。『さらだば』を『さらだば』、とか「もう何もかも台無しですよ！ なんですか、このゲーム！」

もうヤダこんなヒロイン。

「あ！ 電源切るんじゃないよー！」

「もう一回！ もう一回選ばせてください！ なんか納得いきません！ 誤植も含めて！」

その後、もう一度選択肢画面に戻ってきた。一番損害が少ないと踏んだ3番があれだったので正直困惑しているが。

『もう正解言っちゃうけど1番だぜ』

「え!? 1番ですか!? これが一番ドン引きだと思っただけですけど」

だつて落とすべきイケメン男子に向かって豚が!とか言ってるし。

「押してみりやわかるって」

「ええ、納得いきませんけど……」

『桜:ところで、レン君だったっけ?』

『レン:うん、なにかな? 桜ちゃん』

『桜ちゃん? いつ私が名前で呼ぶことを許可したのか。馴れ馴れしいレンの態度に私の口は自然とその思いの丈を言葉にしてぶつけていた。』

『桜:ねえ、誰の許しを得て私に気安く声をかけたのかな? この豚が!』

『レン:え……?』

『桜:え? じゃないわよ! 豚はそんな風には鳴かないわよ!』

「さ、桜ああああああああああ!」

なんだ、このヒロイン。

『私は妖刀やまとを抜き、その峰で豚の頭を叩いてやる』

『レン:ぐはあ! な、なにをするんだ、桜ちゃん!?!』

『桜:桜ちゃん、ですって? 桜様でしょう、この卑しい豚!』

『レン:ぎやああああ!』

「さ、桜ああああああああああああ!」

『何度も豚を殴りつけると、豚の返り血で『やまと』が赤く染まってる。それに『やまと』も喜んでいるように見えた』

「喜んでない! 妖刀はこんなこと望んでないですよ!」

「大和、最低だな」

「うるさい!」

『そして、数時間後——』

「桜、学校は!」

『桜:——さて、あなたのご主人様のお名前を言ってごらんなさい?』

『レン：き、桜様です、ブヒい』

「レエエエエエエエエッ！」

『桜様：豚が人間様の言葉をしゃべるんじゃないわよ！』

『レン：ブヒい！ 申し訳ありません！』

「桜様あああああああああああああ！」

『桜様：ほら、また喋った！』

『レン：ブヒイ！ ありがとうございます！』

「レエエエエエエエエッ！」

『豚は私からのお仕置きを受けると、力尽きたのか頬を赤らめながら気持ちよさそうに白目をむいて失神していた』

「レエエエエエエエエエッ！」

『豚の好感度が300上がりました』

「豚ああああああああああああああ！」

「――な？ これが正解だろ？」

「正解っていうか、無理矢理正解にただけじゃないですか、これ!？」

「何言ってるんだ、このイベントがないとレンの潜在的なDM気質が解放されなくてプレイヤーはこいつの好感度上げに苦しむことになるんだぞ！」

「だとしても見たくなかったですよ、こんな惨いルート！ なんですか、このゲーム！」

「あ！ また電源ブチ切りしやがって！」

全然納得できない。こんなことで好感度が上がっても私は嬉しくない。きつとある筈だ。桜が普通にイケメン男子と仲良くなれるルートが。

「この2番の選択肢、これに私は賭けます！」

「2番か？ 俺は見たことねえな。そこは1番選んでぶっ飛ばしたからな」

「きつと、レン君は素直に気持ちをぶつける娘が好きはず！ そうであってくださーい！」

私は2番の選択肢を押した。

『さつきから収まらないこの胸の高鳴り、なんだろう、今すぐ彼にこの

「うおおおおおおおおおおおお！」

天龍がコンセントを勢いよく抜いてゲーム機の電源を落とす。

画面が消え、猟奇的なBGMが止まった後も、私と天龍の胸の動悸はしばらく収まらなかった。

「……………」

「……………」

やがて、目だけで私たちは合図をみると、素早くゲームディスクを取り出してパッケージに戻し、リュックに乱暴に詰め込んだ。

「二度とやるか、こんなクソゲー！」

私達の声が重なった。

第四十話 「料理は私のアイデンティティだ！」

ある日の七丈島鎮守府、食堂。

私、大和はジャガイモ、玉ねぎ、人参、ベーコン、豚肉、ソーセージを大鍋で煮込んでいる最中である。この後、シチューの固形ルーと牛乳を足して塩コショウで味を調製すればシチューの出来上がりである。

「なあ、大和」

私の隣で同様の調理を行っている磯風が鍋をお玉でかき混ぜながら私に声をかける。

「どうしたんですか？」

「鍋料理というのはいいものだな。一度にたくさん作れて、それでいて調理も難しくない。それに幅広く応用が利く料理だ」

「そうですね」

私は、鍋料理とは余りものの処分に最も適した料理であると思う。冷蔵庫の中身を見て、余っている食材を残らず鍋で煮込んで、そこから好きに味付けができるからだ。

例えば玉ねぎ、人参、ジャガイモ、豚肉があつたでしょう。

鍋料理において不要な食材というものは少ない。やることは一つだけ、とりあえず全て鍋で煮込むことだけだ。

加えて鍋料理は柔軟性に富む料理だ。鍋で煮込んだ材料はカレーにもなれば、肉じゃがにもなり、ポトフにもなり、シチューにもなる。鍋料理を少しやると、一気に料理のレパートリーが増えるだろう。それでいて鍋の大きさと材料さえあれば、一気に大量に作ることもできる。

唯一欠点があるとすれば煮込む時間が長いことだが、それも圧力鍋で解決する。

材料を選ばず、多彩な料理ができ、調理が単純で、大量に作ることもできる。これほど無思考で臨むことができる料理は鍋料理以外にないだろう。

私はそう考えている。

「そう、ただ何も考えず煮込めばいい、筈だったのに……」

「……磯風」

私は遠い目をしながら材料を煮込んでいる筈の鍋の中身を覗き込み、そして深くため息をついた。

磯風がカラカラと金属音を鳴らしながら鍋をかき回し続けている。だが、そんな行動はもう無意味だ。

「なんで、鍋の中身なくなっちゃってるんですか!?!」

「さあ……」

空鍋をかき回しながら困惑顔の磯風に私は叫んだ。

「人参は!?! 玉ねぎは!?! ジャガイモは!?! 豚肉は!?! ソーセージは

!?! ベーコンは!?! 何より水は!?!」

「なんか……材料は全部一瞬で溶けて、それからふわあって感じで水ごと全部煙になってしまった……」

「もう、なんか、凄い! 磯風凄いですね! 流石ですよ、くそ!」

「すまない」

ヤケクソになってきた。

☆

「今日も失敗でしたね」

「ああ、これで大和と料理の練習を始めてから通算15回目の失敗だ」
暇を見てはやってきた料理の練習もここまで進展がないと磯風もいよいよ深刻だ。

「というか、むしろ悪化しているような気がするのは私だけだろうか。」

料理がそもそも消えるなどという現象、これまでの信じられない磯風料理の数々を見ても初めてなのだが。

「そもそももう料理ですらなくなってるし。」

「なあ、大和」

「なんですか?」

「もしかして、私って世界一料理が下手なんじゃないか?」

「何言ってるんですか、磯風」

私は磯風に首を振って答える。

「宇宙一でしよう?」

「大気圏外……!?!」

正直、宇宙なんて次元に留まっているかすら怪しいと思っている。「もう、むしろどんどん磨いていけばいいんじゃないですか!? 磯風なら最終的に宇宙すら創造できますよ! 人参とジャガイモから!」
「本当にすまないと思っっているから、どうか落ち着いてくれ」
正直もう諦めてゴールしたい。

☆

「うーん、どうすれば料理になるんでしょうね」

「当初の料理が上手くなるという目的からガンガン遠ざかっていくな」

仕方ないだろう。ここ最近はそもそも食べ物なのかすら怪しいレベルの料理ばかりなのだから。

「料理が上手くなるコツは野菜炒めをマスターすることとか聞きますよね」

「ああ、それは私も料理を習いたての頃先生に言われたな」

野菜は特に切り方、炒め方、味付けの仕方の些細な違い一つで完成度に大きく差の出る食材だ。

なので、野菜炒めを練習すれば、食材を均等に、食べやすいサイズに切る包丁捌きや食材への熱の通し方、調味料の扱い方を自然に身に着けることができる。

この基本がしっかりできていれば大抵の料理は美味しく作れるだろう。

なので、野菜炒めとは料理初心者が料理の基礎を身に着ける練習として最適なのだ。

「でも、磯風はそもそもそういうレベルじゃないですからね」

別に磯風は料理の基本ができてない訳じゃない。むしろ調理技術のみに関して言えば私以上に料理慣れしているイメージすらある。

ただ、完成品がどこかしらで、未知の反応を引き起こし、料理ならざる何かになってしまっただけなのだ。

だから、尚のこと性質が悪い。

「ん？　というか磯風、今先生って？」

「ああ、間宮さんのことだ。私は以前居た鎮守府の間宮さんに料理を教えてもらってたんだ」

「あ、そうなんですか」

そういえば、ウチにはいないが他の鎮守府には主に鎮守府の甘味処や食堂の管理をする料理のスペシャリスト、給糧艦間宮がいるのだ。

「今思い返せば、あの時から既に私の料理は変だったな」

「間宮さんは何も言わなかったんですか？」

「先生は『個性的な料理と味ね……かはっ』って笑っていたな」

「なんか、最後ダメージ受けてそうな声入ってましたけど!？」

「今思えばあの時の先生の顔は真っ青で笑顔も引きつっていたな。吐血してたし」

「思い出すまでもなくその時点で気付いてくださいよ!」

「いや、吐血するほど美味しいんだって思ってたんだ」

「なんでそんな自信過剰なんですか!？」

間宮さんにも不味いものは不味いと断言する勇氣をもつて欲しかった。

こんな酷くなる前に。

☆

「この包丁も実は先生からもらったんだ」

「ああ、それですか。かなりの業物だとは思っていましたが、間宮さんが使っていた包丁ならそれも領けますね」

磯風愛用の三徳包丁。磯風が料理をするたびに見るそれは少し料理の腕に覚えのある者ならば誰が見ても相当の業物であることが感じ取れるほどの美しい包丁だった。

加えて磯風が毎日手入れを欠かしてないのだろう、状態も非常に良い。

「先生は『もう私に教えられないことはない』って免許皆伝の証としてこの包丁をくれたんだ」

「え？　本当ですか？　よく思い出してください。思い出補正かかっ

てませんか？ 本当はなんて言ったんです？」

「なんで私の思い出にそんな懐疑的なんだ！」

それから磯風は少し腕を組んで目を瞑って、思い出を遡ると、再び口を開いた。

「あの時は確か——」

『磯風ちゃん、これを』

『ん？ 先生、これは……三徳包丁？ しかも、凄い業物じゃないか！』

『磯風ちゃん、私はもう先生ではないわ。もうあなたに教えられないことはない……というかもう私には教えることはできないというか……とにかく、これはその餞別よ』

『ありがとう！ 先生！』

「——うん、確かこんな感じだった」

「いや、これ完全に見放されてますよね？ 免許皆伝というより破門ですよ、これ？」

「何!? でももう教えることはないって……」

「その後に、もう私には教えることはできないって言い直してるじゃないですか！ 手に負えないってやんわり見限られてるじゃないですか！」

「そういう意味だったのか！」

間宮さん、伝わってないです。

「でも、正直間宮さんで駄目だと私じゃ厳しいと思うんですよ」

「そんな！ 大和がここで諦めたら私の料理の被害者が増えるだけなんだぞ?！」

「磯風が料理をやめるという選択肢はないんですか?！」

「ない！」

断言されてしまった。

「料理は私のアイデンティティだ！」

「そういうことはまともな料理を一品作ってから言ってください！」

しかし、磯風の料理への情熱には並々ならぬものを感じた。私ではもうどうしようもなさそうだしどうするか。

せめてプロの料理人からの意見が欲しいものだ。

その時、私の脳裏に一人の人物の顔が浮かび上がる。

「……磯風、少し散歩でもしましょうか」

「ん？ どうした急に」

「プロの料理人に会いに行きます」

☆

「——という訳であなたをプロの料理人と見込んで意見を伺いに来ました」

「カレー屋の店長を捕まえて無茶言っでんじやないわよ」

「ここは七丈島港から徒歩1分の場所にあるカレー専門店ビッグスブーン。」

「もう、頼れる人が店長ぐらいしかいないんです！」

「いや、町の方行けばもう少し色々な料理店あるでしょう。なんでよりによってウチなのよ」

「正直、こういう面倒ごと持って押しかけるなら店長かなって」
「ぶっ飛ばすわよ」

お互いに気の知れた仲ではあるし、近場だし。

ついでにカレーも食べれるし。

「とりあえず、カツカレー超弩級盛りで」

「やってないわよ、帰れ」

「そこをなんとかお願いします！ カレーだけ！ カレーだけでいいですからー！」

「あんた磯風ちゃんのために来たんじやなかったの!？」

「どっちも！ どっちもお願いします！」

「そんな思い出したかのようにー！」

結局、その後特盛だったがカツカレーは作ってくれた。

☆

「——ごちそうさまでした！ それで、店長、お願いですから磯風の料理上達のために力貸してくださいー！」

「うーん……でもねえ、あの子の料理はねえ……そもそも上手いとか、下手とかそういう問題じゃないわよ、あれ」

「そうなんですけれどね」

流石に店長でもお手上げか。

「あれ？ そういえば磯風は？」

「あそこよ」

店長が私の後ろを指さす。

「……………！」

「……………!？」

磯風と美海がテーブルを挟んで無言で睨み合いをしていた。

いや、正確にはお互い警戒態勢というか。

「……………何ですか、あれ？」

「そういえば初対面だったわね、美海と磯風ちゃん。お互い同年代の子って珍しいから動揺してゐるんじゃないの？」

「まさかのお互い人見知り!？」

「二人とも周りに年上の方が多い環境だし、仕方ないんじゃない？」

美海の学校の友達も年上ばかりよ

まあ、偶に同年代とはあまりしゃべらない癖に年上相手だと急に饒舌になる人間はいるが。

「……………！」

「……………?？」

「……………! ………………！」

「……………!？」

「……………!？」

「なんか、喋りましょうよ!？」

なんかお互いに身振り手振りでコミュニケーションを取ろうとしている。なんだ、そのUMAや宇宙人にでも会った時のような対応は。同じ人間だろうに。

「こ、こわくない、こわくない……………」

「動物……………!？」

「わ、私も怖くない、怖くない」

「うん、とりあえず二人とも怖がってないでその警戒態勢解きましよう？ 大丈夫ですから」

とりあえず二人を席につかせた。

「……………」

「……………」

「あの、まずは自己紹介でもしたらどうですか？」

「なんだ、この空気。」

「お見合いか何かか、これは。」

「あの、私は、美海、です」

「わ、私は、磯風……です」

「美海にいつもの声量がない。」

「磯風が、私が見てきた中で初めて敬語を使っている。」

「……………」

「……………」

「おっと、会話終了。本当に自己紹介以外しなかった。もしかしてこの先も私が話題提示をしなくてはならないのだろうか。」

「……………」

「……………」

二人ともなんか私の方をチラチラ見てる。やっぱり私が仲介しなきゃダメなのか。

「どうしたものと私がため息をつくとき、そこに店長がカレーを二皿、磯風と美海の前に置いた。」

「はい！ お昼時だし二人ともお腹空いてるでしょ？ とりあえずこれでも食べなさい！」

二人は顔を見合わせてから少し困惑気味にカレーを食べはじめる。

「ん、美味しい！」

「ですよー！ 私もお父さんのカレーは世界一だと思ってます！」

「ああ、私もいつかはこれ程の料理ができるようになりたいものだ」

「磯風さんは料理できるんですか!? 凄いです！ 歳は私と同じくらいなのに！」

「い、いや、まだ全然下手なんだが……あと、その、『さん』はやめてくれ、敬語も」

「——！ うん、磯風ちゃん！ じゃあ、私のことも美海って呼んでね」

！」

「あ、ああ！ 美海！」

何か、いつの間にか二人の間で会話が盛り上がっている。

驚く私に店長は軽くウインクして見せた。

「あの年頃の子達は一緒に美味しい物でも食べれば何もしくなくても勝手に仲良くなるもんなのよ」

「店長！」

「うふふ、見直しちゃったかしら？」

「私の分のカレーは!？」

「ないわよ！」

☆

「——あ、磯風ちゃん、これからは暇があつたらウチ手伝いに来なさい。美海以外にも人手が欲しかったのよ。勿論ちゃんと報酬は支払うわよ」

「え、それって……」

「まあ、仕事の合間になら、私の料理テクを少しは教えてもいいかしらね？」

「いいんですか、店長!？」

「その代わり、しっかり仕事はしてもらわよ」

「店長！」

「美海もいいわよね？」

「うん！ 磯風ちゃんなら大歓迎！」

磯風と美海はそう言つて二人で無邪気な笑みを見せている。

以前話した時の美海はもう少し堅苦しい喋り方をしていたと思つたが、おそらくは年上と話す時はあんな感じで今の彼女が本来の姿なのだろう。

うん、こつちの方が年相応でいい。磯風も楽しそうだ。

しかも、これからは店長も磯風の料理上達に協力してくれる。なんだかんだ、全てうまい具合にまとまっていた。

「ん？ でも、店長、アルバイトつて磯風の年齢じゃ違法——」
「お手伝いよ」

「でも報酬を支払うって——」

「ご褒美よ」

「……はい」

まあ、グレーゾーンだが、深く考えるのはやめよう。幸いここは平和で和やかな雰囲気漂う人口の少ない島だ。大体島民は顔見知りだし、派出所の警官も事情を聞けば見逃してくれるだろう。それよりも心配すべきは。

「でも気を付けてくださいね、店長。正直、その見た目で幼女二人置いてお店やってたらロリコンにしか見えませんからね！」

「二人とも、そのカレー大和お姉ちゃんが奢ってくれるって」

「え!?!」

「ありがとうございます！ 大和さん！」

「ありがとうございます、大和！」

「え!?!」

「大和ちゃん、さっきの特盛カツカレーと合わせて1200円よ」

「え、と、その鎮守府に——」

「悪いけど領収書切らしてるからツケはなし、現金のみね」

拙い。経費で落とす気満々でお金など持ってきていない。

「……勘弁してください」

「今日一日、皿洗いやってけや」

「……はい」

ドスの利いた声の店長に言われて私は渋々食器を持って厨房に向かった。

「さて、天気もいいんだし美海と磯風ちゃんは外で遊んできなさい！

これお小遣いね」

「ありがとう、お父さん！ 行こう、磯風ちゃん」

「ああー！」

二人は仲良く手を繋いで店を駆け出して行った。

「うう、なんでこんな目に……」

「あんた、いつもは真面目な癖にアタシに対してふざけすぎなのよ！」
「だって、店長数少ないツッコミ属性ですし……」

「ツツコミ属性？」

「私だつてツツコミから解放されてふざけたい時もありますよ！」

「訳わかんないこと言つてないで、黙つて皿洗いせんかい！」

「すみません！」

こうして、私はその後閉店までビッグスプーンで店長に罵声を飛ばされつつ洗い物に追われることとなった。

磯風編

第四十一話「海の……中から……こんち……は……」

「うわ、流石に凄い人ですねぇ」

「久しぶりに来たぜ、ここ」

「私は初めてよ」

「私は何回かストーキングで来たことあるよ！ だから任せて！」

「何も任せないわよ、何も」

「こ、ここが！ 海水浴場、ですか！ ドキドキします！」

本日、私大和を始めとする天龍、矢矧、プリンツ、瑞鳳に美海を加えた六人は現在七丈島に点在する海水浴場の一つ、『頂土海水浴場』^{ちやうど}に来ていた。

最近、夏を感じるジリジリとした暑さを感じるようになってきたので皆で海に涼みに行くという趣旨だ。

常春の島、七丈島とはいえ、それは年間平均気温を見ての話。夏は30℃を超える日も少なくはない。今日だって最高気温33℃という真夏日であり、今も私達の頭上では雲一つない晴天に浮かぶ太陽がキラキラと地表を照り付けている。

「さあ！ 早速水着に着替えましょう！ 早く砂浜へ駆け出しましょうー！」

「はい！ 大和さん！」

「なんか今日の大和のテンション高くねえか？」

「ああ、ようやく大和にも水着グラが来たのよ」

「なるほど、それでね」

「お姉さまの、水着……ごくり」

「プリンツ。涎、ふけよ？」

何やら他の面々が微笑ましい表情で私を見つめている。プリンツはなんか血走った眼で私を見ている。

とりあえず、全員、荷物を降ろして脱衣所で各々水着に着替える。

少し鏡の前で入念におかしい所がないか確認していたせいか、私が脱衣所から出てきた時には他の面々は既に砂浜の一角で場所取りをしてパラソルを立てていた。

「す、すみません！ 遅くなつて！」

「おう、やつとでてきやがったな？ お、それがおニューの水着か、中々似合つてんじゃない」

「は、はい、ありがとうございます」

白い水着に水色のパーカーを羽織った天龍の素直な賞賛に私は少々照れながらパラソル立ての手伝いに加わる。

着やせするタイプなのか、水着になって露わになった豊満な胸元についつい目がいつてしまう。

「ああ、やっぱり女の子だったんですね、天龍つて」

「喧嘩売つてんのか、てめえ」

「ほう、赤と白……攻めるわね」

私が天龍と話していると、瑞鳳がやってきて何か値踏みするような目つきで私の水着姿をまじまじと見つめる。

「や、やっぱりこの水着は派手すぎましたかね？」

「いいえ、むしろ夏はそれくらい攻めなきや。最近の男は草食超えて断食なんてのもいるくらいだし。こつちから押していく位が丁度いいのよ！ いいじゃない！」

「別にナンパとかそういうのは狙ってないんですが……」

そう私に向けてサムズアップする瑞鳳はというと、白と黒のボーダーの大人っぽい水着に白パーカーを羽織っている。比較的幼児体形に近い瑞鳳だが、何故か彼女の漂わせる雰囲気からかそこまで違和感はない。

むしろ、その体つきと大人っぽい水着とのギャップが相まってどこか背徳的な魅力すら感じる。

その魅力にやられたのか、先刻から通りがかる男達がチラチラと瑞鳳の方を見ては何か小声で話しているのが見える。

「お……お姉さま……」

「プリンツ?」

「ああ、普段見えないお姉さまの美乳があんなに……いえ、勿論普段のように服の上から見ているだけでも十分に魅力的なのですが、水着によつて見える絶妙な比率の肌色部分が実に……そして、何よりもあの谷間! お姉さま! 是非! 是非、ラムネを! ラムネを挟んでいただきたいツ!」

「挟みませんよ!」

「プリンツ。鼻血、拭けよ?」

金色の髪に真っ白な肌。群青色の水着がコントラスト的にそれをより際立たせている。これで鼻から流れる赤色さえなければ本当に美少女なのに。

私はそう心から思うのだった。

「そつちも準備はできたようね」

「ただいま戻りました!」

「あ、矢矧に美海ちゃんも」

何故かシュノーケルやら銚やらを持つ矢矧と浮き輪を持った美海が私達の方に歩いてくる。

「……矢矧、なんですかそれは?」

「ん、銚よ? こつちはシュノーケルね」

「矢矧は海水浴場で何するつもりなんですか!」

「大丈夫よ、ここから少し離れた所でやるから。お昼は楽しみにしてなさい」

「自給自足……!?!」

そんな無人島生活みたいな。

折角赤色の水着はよく似合っているのに銚やらシュノーケルやらのせいで周りの人からは遠巻きにされてしまっている。

「というか、そんなのどこに持ってたんですか? 荷物にそんなのなかったように見えましたけれど」

「海の家にありました!」

「マジですか」

「浮き輪と一緒に借りたと言って言ったら凄い驚いてたわね」

「でしようね！」

こうして私達の海水浴は始まりを告げた。

☆

「じゃあ、私は早速魚を捕ってくるわ！」

矢矧はそう言つて道具を抱えて歩いていく。

なんだか彼女の目が見たことない位に凄い輝いていた。好きなんだらう。

「おい待てよ、矢矧！俺も面白そうだからついてくわ」

「私はパラソルの下にいるわ。日焼けしたくないし」

「え、ちょ！折角みんなで来たのに、別行動!？」

あつという間に矢矧と天龍の姿は見えなくなり、瑞鳳もパラソルの下から動く気配がない。

こういうのは皆でわいわい遊んだりするのが常なのではないのだろうか。なんだろうか、この連帯感のなさは。

「うーん、仕方ないですね。じゃあ、折角の海ですし私達は泳ぎの練習がてら遊びに行きましょうか、美海ちゃん」

「はい！」

「私もお供します、お姉さま！」

私と美海とプリントは海へと歩いて行つた。

「——ブクブクブク、ぷはあ！」

「美海ちゃん、大分海には慣れてきたみたいですね」

「はい！沈むから潜るにレベルアップしました！」

最初の方は海の中に潜ったきりそのまま沈んで浮かんでこないというカナヅチぶりを見せていた美海ではあつたが、一時間程度も練習していると、自由に潜ったり浮かんだりしてくるようになった。

「ついでにこんな物も見つけました！」

「うわ！大きい貝！」

美海が大人の掌以上の大きさの貝を海中から引き揚げて見せた。

「これ、食べられますか？」

「あ、食べるために拾ってきたんですね」

「あとで天龍と矢矧に聞いてみよう！」

「食べられたら磯風ちゃんにも自慢しよう！」

「そういえば、今日は磯風いませんでしたね？ ついでに提督も見てください」

「あー、この日はいつもあの二人いませんよ？ 二人で島の外に出てるみたい」

「え!?! それは事案———というか私達って島の外出れるんですか!?!」

確か、島から半径10kmの範囲外に出たらスタンリングが反応して電流が流れる仕組みだった筈だが。

「えーと、確か特別に提督が認めれば一日だけ提督の監視下で島外に行けるって以前矢矧が言っていました！」

「へえ、そんなシステムが……」

「じゃあ、今磯風ちゃんは島にはいないんですね」

「そういえば店長も今いませんよね。今日美海ちゃん迎えに行った時に張り紙してありましたし」

確か、『店長不在のためしばらく休業』と書いてあった。

「お父さん、偶に本島の方にカレーの研究に行けらしいです！ 帰ってくるのとたくさん見たことないような珍しい食材とかスパイスを持って帰ってきたりします！」

「まさかそこまでカレーに情熱を注いでいるとは……流石です」

「えー、じゃあ美海ちゃんは今お家に一人ってこと？ それって寂しくないの?」

「いえ、私は慣れているので……それに、今は大和さんやプリンツさんが一緒ですから！」

「うう、美海ちゃん！ 超いい子だよお！」

「苦しいでぶ、プリンツふあん！」

プリンツの胸に抱き寄せられる美海は無邪気な笑みを見せているが、私はさつき一瞬だけ彼女の顔に陰が差したのを見逃さなかった。

ならばと、私は店長の不在を知った時から考えていたアイデアを提案する。

「じゃあ、美海ちゃん、店長帰ってくるまで七丈島鎮守府ウチに来ましよう

よ」

「え？」

「成程、流石お姉さま！ うん、それがいいよ！ 私は大賛成！」

「で、でも、皆さんにぐ迷惑じゃ……」

「むしろ皆喜ぶと思いますよ？ 特に磯風とか」

「じゃあ、そういうことなら、あの、不束者ですがよろしくお願いしますっ！」

「うん、使い方間違ってますけれど、これで決まりですね！」

美海は少し照れくさそうに、しかし、心底嬉しそうに笑顔を見せた。

☆

「——さて、そろそろお昼時ですし戻りましょうか？」

「はい、お姉さま！」

「私もお腹空きました！」

そうして元のパラソルの場所に戻ると、何やらそこには人だかりができていた。

しかも、全員男。

ああ、瑞鳳だな、と私は反射的にそう確信した。

「それにしても今日は暑いわね。私、喉乾いちやった。冷たいピニャ・コラーダが飲みたいなあ」

「じゃあ、俺が今買ってきますっ！」

「いや、俺が！」

「いやいや、俺が！」

男達が集まる中心から瑞鳳の甘ったるい声が響く。

同時に数人の男達が海の家方面へと全速力で駆け出していく。

「それに、日差しも強いわねえ。このままじゃ日焼けしちゃうかもねえ、誰か私に日焼け止め、塗ってくれりゅ？」

「塗りゅううううううううううううううううううううううう！」

なんだこれは。

なんだ、塗りゅって。

隣のプリンツと美海が完全に固まってしまっているではないか。すると、集団の中心から再び声が聞こえてくる。

「あら？ 大和達帰ってきたの？ 丁度いいわ、あなた達も何か奢つてもらおうといいわよ」

「え、いや、結構です」

「じゃあ、私はかき氷が食べたいです！」

「美海ちゃん!？」

「ねえ、私達にかき氷、買ってきてくれりゆ？」

「買いゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう！」「

買いゆってなんだ。無理やりすぎだろう。

「私はいちごミルク味がいいかなあ」

「私はブルーハワイがいいです！」

「美海ちゃん!？」

意外と図太いな、この子。

「じゃあ、皆お願いね？」

「うおおおおおおお、俺が一番に買ってくるんだ！」

「ふざけんな、抜け駆けは許さねえ！」

「邪魔だ、どけええええええ！」

あつという間に男達がいなくなると、満喫した様子の瑞鳳がサマーベッドから半身を起こしてこちらに手を振る。

「おかえり。騒がしくして悪かったわね、あの男達は当分帰ってこないから大丈夫よ」

「いやいや、絶対数分後には帰ってくるでしょ」

「帰ってこれないわよ。だってピニャ・コラーダもかき氷いちごミルク味もここの屋台には売ってないもの。自分で材料買って作るなら話は別だけれど」

「うわあ」

プリンツが凄いい冷めた視線を瑞鳳に向けている。多分、私も今似たような顔をしているだろう。

「ええ、かき氷ブルーハワイ……」

「それ位は後で私が買ってあげるわ」

「本当ですか！ ありがとうございます、瑞鳳さん！」

「——おーい、帰ったぞー！」

パラソルに腰を下ろして炎天下で火照った体を冷ましていると、天龍の声が聞こえてきた。

見れば、天龍と矢矧が魚や貝を山ほど詰めた網を持ちながら銚を掲げている。周りの人はそんな二人に驚愕の視線を送っている。

「獲ったどおおおおおおおお！」

「うるさい！」

何はともあれ、昼食分の食材が手に入った。

☆

「はふはふ、凄い、七輪で焼いて塩かけただけなのに、凄く美味しいでふ！」

「美海ちゃん、そんなに急いで食べなくてもまだたくさんありますから！」

「お姉さま！ 酒蒸しはこんな感じでいいですか!?!」

現在、私達は海の家から借りてきた七輪やバーベキューコンロで天龍と矢矧が獲ってきた海の幸を調理している。

基本魚や海老は焼いて塩、醤油で軽く味付け。貝は酒蒸しにしている。

当然、そんな珍しいことをしていれば、人が寄ってくる。

「凄い、あの魚自分達で獲ってきたのかな？ もしかして海女さん？」

「調理してる女の子も手慣れた包丁捌きだわ。料亭の娘さんとかかしら？」

「美味そうな匂いだなあ」

正直、凄く恥ずかしい。

他の面々は全く気にしていない様子だが。

「あ、大和さん！ これ！」

「ああ、さっきの貝ですね。矢矧、天龍。これは食べても大丈夫ですか？」

「ん？ ああ、食べる食べる。安心してジャンジャン作ってくれ！」

「まあ、その種類に毒はない筈よ。しっかり加熱調理すれば大丈夫」

「じゃあ、酒蒸しにしちゃいましょう」

フライパンに料理酒を入れ、砂抜きした貝を置いてカセットコンロ

で加熱。しばらくすると貝の蓋が開く。大きさが大ききなので時間がかかると見て私は他の食材の調理にかかる。

「あ、貝開きました！ あれ？」

貝が開くのが面白いのか酒蒸しの様子を見ていた美海が不思議そうに開いた貝を見つめている。

「どうしました？」

「大和さん！ 貝の中にこんなのが！」

「これは……！」

開いた貝の中には三粒の真珠がキラキラと輝いていた。

火を止めて、真珠を取り出して水で洗うと、より一層三粒の真珠は輝きを増した。

「うわあ！ 凄い！ 生の真珠なんて初めて見ました！」

「うお!? 真珠か、それ!? すげえ！」

「偶に貝の中に入っているのを見つけるっていうのは聞けけれど、三粒も入っているなんて滅多に聞かないわね」

「超ラッキーガールだね！」

「あら、素敵ね。大切にしなさいよ」

「はい！ 一つは磯風ちゃんにお土産にします！ もう一つは……」

「お父さんにあげたらどうです？ きっと泣いて喜びますよ」

「じゃあ、そうします！」

その後、海の幸の味を心行くまで満喫した私達は海の家で諸々の道具を返しに行くついでにデザートとしてかき氷を食べていた。

「じゃあ、俺たちが魚取ってる間、お前達は泳ぎの練習してたのか」

「はい！ 充実した時間でした！」

「美海、教わる相手間違ってるねえか？ 俺たちは基本艀装で浮かぶことはできるけれど泳げないんだぜ？」

「船ですもんね！」

「まあ、でも私達の中にはいないってだけで一応泳げる艦娘もいるわよ」

「そうなんですか!？」

美海は瑞鳳の言葉に興味津々で食いつく。

「ええ、潜水艦っていうんだけれどね。基本潜りっぱなしで海中を自由動き回れるのよ」

「凄いです！ いつか会ってみたいです！」

「多分会ったら驚くぜ？ 何せあいつら年中どこへ行くにもスクール水着にセーラー服だからな！」

「へ、変態さん、なのですか……!?!」

「いや、彼女達にとってあれが艤装の一部なんですよ」

「ちよつと、天龍！ ドイツの潜水艦はちゃんとした戦闘服と艤装があるんだからね！」

「あ？ そうなのか？ ドイツの潜水艦事情は知らねえよ。俺が居た鎮守府にはいなかったし。あれ？ でも確かドイツかぶれっぽい眼鏡の奴はスク水だったような……」

「その子はドイツかぶれなだけ！」

プリンツと天龍が言い合いをしているのを他所に、海の家から見える海の方を凝視しながら美海が私の袖を引っ張る。

「ん、どうしました？」

「あの、あれって……」

美海が指さす方角を見ると、波打ち際に何か黒い物体が見える。よく目を凝らしてみると、その正体に私は思わず声を上げていた。

「人が倒れてるじゃないですか!?!」

「何?!」

天龍達の反応も待たず、私と美海はいの一番に海の家を飛び出して倒れている人の所へ走る。近づくにつれ、それがおおよそ磯風や美海と同じくらいの少女であることがわかる。黒つぶく見えたのは体のところどころに海藻が絡みついていたためだった。

もしかしたら溺れて波に流されてきたのかもしれない。

「大丈夫ですか!?!」

私が少女の体を叩いて声をかけるが、反応はない。慌てて彼女の胸に耳を押し当てる。

「……………心臓は、動いているみたいですよ！」

「あ、あの、私、ライフセーバーさん呼んできます！」

「おいおい、急に飛び出していったと思えばって、そいつは！」

ライフセーバーを呼びに駆け出す美海と入れ替わりに天龍達が遅れてやって来て驚愕の声をあげる。

「こういう時どうすればいいんですか!? 人工呼吸? 心臓マッサージ? AED?」

「落ち着け、大和」

「落ち着いてなんかいられませんよ! 心臓は動いてますけれど、溺れていたんですよ!」

「大丈夫だ、よく見ろ。そいつは溺れてなんかいない。というか、そいつは溺れない」

「え?」

天龍に言われて改めて少女の方に目線を落とす。

体形や幼い顔立ちを見るにやはり磯風や美海と同年代——あるいは、少し年上かもしれない——だろう。服装はスクール水着に何故か上半身だけセーラー服を着ている。

「スクール水着にセーラー服?」

頭にかぶさっている海藻を取り除いてみる。

鮮やかな桃色のショートカットが現れた。私はこの少女の出で立ちに見覚えがある。スク水にセーラー服、幼い体形と顔つき、桃色のショートカットの髪型。これらはある艦娘に共通する特徴だ。

「この子、潜水艦伊58じゃないですか!」

「——ゴホッ! ゴホッ! う、ここは……」

「意識が!」

伊58は薄っすらと目を開けて私達の顔を見回すとゆっくりと口を動かす。

「海の……中から……こんにちは……は……」

「え、大丈夫ですか!」

「そして……さよなら……」

「ちよ、しっかりしてください! そんな反応に困るボケかまして気絶しないでください!」

再び、伊58は目を閉じた。

☆

とある共同墓地に二人はいた。

一人は軍服を着た眼鏡の青年。もう一人はセーラー服を着た黒髪の少女だ。

少女はとある墓碑の前に持っていた花束を置くと、線香をあげて目の前で目を瞑り、手を合わせた。

手を合わせて俯く少女の顔は苦しそうに歪んでいた。死を悲しむというよりも、自責と後悔に苛まれた顔をしていると青年は思った。

それから、時間にして20分程手を合わせ続けていた少女は目を開いて墓碑に背中を向けて一歩引いて様子を見ていた青年の元に戻ってきた。

「もう、いいのですか、磯風？」

「ああ、もう十分だ。すまない提督、時間をかけてしまった」

「毎年一緒に来ていますからね。もう慣れましたよ」

「ああ、ありがとう。じゃあ、そろそろ七丈島に帰ろう。皆が待っている」

磯風はそう言うと、再び墓碑に振り向いて呟いた。

「それじゃあ、また来年くるよ、谷風、浜風——」

第四十二話 「あなた達、気持ち悪いでち」

「――皆、ただいまー」

本島から戻り、その日の最終便で七丈島に帰ればもう日付が変わるか否かというくらいの夜更けになってしまった。

磯風と提督は両手に土産袋を下げながら体で鎮守府の入り口を押し開けて中に入る。

玄関口には人の気配はなかったが、どうやらまだ皆就寝はしていないらしい。

遠くからかすかに喧騒が聞こえてくる。

おそらくは食堂あたりだろうか。

「もう消灯時間になるというのに、まだ部屋にも戻っていないみたいですねえ？」

提督が呆れたように溜息をつく。

もう数分もすれば消灯時間である午前0時を回る。いつもならばこの時間には就寝はせずとも、秘書艦兼監察艦の矢矧を除いて艦娘達は自分の部屋に戻っている時刻だ。

規律には比較的うるさい矢矧もいるというのに一体どうしたというのか。

提督の言葉にはそんな疑問も含まれていた。

磯風と提督が食堂まで歩いていくと、案の定、入り口の扉の隙間から僅かに光と声が漏れ出している。

提督と磯風はお互いを見て小さく頷き合うと、扉の前に立つ。

そして、袋を片手に纏めて提督が勢いよく扉を開けた。

「皆さん、いつまで騒いでいるつもりですか！ もう消灯時間になりますよ！」

「――食らえ！ 必殺、人間魚雷ッ！」

「がはあッ!?!」

「提督!?!」

扉を開けると同時に提督の顔面に人間大の何かが激突した。

そして、そのまま提督は鼻血を吹き出しながら激突したものの諸共磯

風の横に倒れた。

恐る恐る磯風が中を覗くと、そこには顔面蒼白で硬直した七丈島艦隊の面々がいた。

「……あ、やべ」

まるで何か大きな物でも投げた後のように両手を振り下ろした姿勢で固まっている天龍が冷や汗を流しながらポツリと呟いた。

☆

提督が食堂の扉を開ける数分前。

「——で、こいつどうするよ？」

「どうするっていつても、ねえ？」

食堂の机の上に毛布をかけて作った簡易ベッドの上のそれを見ながら、私達は揃って溜息をつく。

ベッドの上では未だ伊58が穏やかな寝息をたてている。

浜辺で伊58を見つけたあの後、警察や救急車が来るなど色々大騒ぎになった。

結果として伊58の心臓は動いており、外傷もほとんどないということで命に別状はないだろうと言われた。

加えて艦娘の治療は専門外ということで病院でも対応ができないと言われ、仕方なく鎮守府に連れて帰ることにしたのだ。

「まあ、目を覚ましてから事情を聞きましょう。話はそれからじゃないですか？」

「そうね。ただ気絶しているだけなら明日にでも目覚めるでしょう」

「一時はどうなるかと思っただよお」

「これが……潜水艦……初めて見ました……」

「美海ちゃん、眠いんだったら寝てもいいんですよ？」

美海が私の隣でこっくりこっくりと船をこぎ始めている。今日は一日色々なことがあって疲れたのだろう。それにもう深夜だ。いつもなら美海はとっくに寝ている時間だろう。

しかし、美海は首を横に振って自分の頬を叩く。

「もう少し頑張ります……泳ぎのコツを教えてもらうために……」

「今日はもう夜遅いですし、そういうのは明日にして寝ましょう、ね」

？」

「うう……」

すぐにまた眠そうに欠伸をする美海を私は部屋に連れて行こうと彼女の手を引いて席を立つ。

今日から美海は父親が帰ってくるまでの間、七丈島艦隊の部屋をローテーションで泊まることになっているのだ。

「——いや、大和。ちよつと待て」

しかし、食堂を出ようとする私達を天龍が止めた。

「誰かが鎮守府内に入ってきた。今、確かに玄関の方で音がしたぜ」

「え、泥棒ですか？」

「かもな」

今まで鎮守府に泥棒が入ったことはないが、侵入者が入ってきたならばそれに応じた対応をしなければならぬ。

特に今は美海もいる。万が一にも危険な目に合わせる訳にはいかない。私は未だ状況を理解していないのか眠気眼を擦る美海を見てその手を強く握る。

「どうしましょう？　こういう時って警察に通報とか——」

「静かに！　足音がこっちに近づいてきたわ！」

壁に耳を当てて聞き耳を澄ましていた瑞鳳の声に部屋中に焦燥感が漂う。

拙い。もう一刻の猶予もない。

しかし、罪艦はスタンリングがある限り他の人間には危害が加えられない。現状、襲われた時に逃げることにしかできない。

「矢矧、最後はお前が頼りだぜ」

「どうやら、そうみたいね」

唯一スタンリングの縛りなく行動ができる矢矧だけが頼りだ。矢矧も小さく頷く。

「なんか投げられるものはねえか？　泥棒がこの部屋に入ってきた時に何か一発ぶちかましてやるぜ。投擲なら電撃に邪魔される前に攻撃できるしな」

成程、確かに投擲系の攻撃ならばスタンリングの電撃が襲う頃には

武器は手から離れて泥棒に飛んでいつている。

つまり、初撃に限ってスタンリングに邪魔されずに攻撃ができる。「すみません、厨房の方にはもう鍵かけちゃって……」

厨房には包丁を始めとして凶器になりえる物、また、食材も置いてある。そのため、普段から食堂は使わない時は入り口を施錠し、カウンターにもシャツターを下ろして防犯を徹底している。

天龍は辺りを見回すと、小さく舌打ちして目の前の『それ』を持ち上げる。

「仕方ねえ、もうこいつしかねえか。いくぞ、伊58！」

「いや、ちよつと」

眠っている伊58を両手で持ち上げる天龍を私は全力で止める。

「これが本当の人間魚雷だ……！」

『人間魚雷だ……！』じゃないですよ！ 伊58が怪我でもしたら――

――

「来たわ！」

――！――

瑞鳳の声の数秒後、食堂の扉が勢いよく開かれた。

同時に、私の静止を振り払い、天龍は伊58を開いた扉の向こうへと投げ飛ばした。

「――食らえ！ 必殺、人間魚雷ッ！」

「がはあッ！」

「提督!？」

「え!?! 提督!?!」

扉の奥から聞こえた聞き覚えのある声に私達は硬直した。額から嫌な汗が流れ始めている。

扉の向こうから、不安げな表情の磯風が顔を覗かせた。

「……あ、やべ」

天龍の乾いた声だけが空虚に深夜の食堂に響き渡った。

その隣で美海は私に寄りかかって寝息を立て始めていた。

☆

「――もう！ 何やってんですか！ 本当に！」

美海を私の私室で寝かせた後、私達は食堂でそろって正座させられていた。

提督と磯風が呆れた様子で私達を見下ろしている。

「本当にすまねえ。てつきり泥棒か何かかと」

「だからって、人投げは駄目でしょう！ 何が『必殺人間魚雷ッ！』ですか！ 矢矧も止めてください！」

「いや、その、すみません。気が動転していたというか……はい、すみません」

提督に天龍と矢矧が怒られている最中、ちらりと私は横で改めて毛布にくまっている伊58を横目で見る。

あんなことがあったというのに、未だ目を覚まさない。凄い能天気な顔で幸せそうに寝ている。

「大和！ 何よそ見しているんですか！ あなたにも責任はありますからね！」

「は、はい、すみません！」

普段温厚な提督が完全にお説教モードに入っていた。

すると、不意に横から大きな欠伸が聞こえてくる。

「うーん？ なんてち、うるさいでちねえ」

「――！ 意識が！」

ゆっくりと目をこすりながら投げ飛ばされても尚目を覚まさない伊58がゆっくりとその体を起こして辺りを見回していた。

「あれ？ ここどこでち？」

「やっと目が覚めたんですね！」

「誰でち？」

「あ、大和です」

「それでちか……え、マジで誰でち!? ここどこでち!? 私なんでもんな所にいるでち!？」

「お、落ち着いてください、伊58！」

ようやく目が覚めて状況を把握したのか慌てふためく伊58に提督や磯風への説明を兼ねて事情を説明する。

「ここは七丈島です。あなたは頂土海水浴場で倒れているのを発見さ

れてここに運ばれてきたんです」

「成程、私は漂流してたでちか。じゃあ、ここは鎮守府でち？」

「はい、七丈島鎮守府です。それで、あなたがここに漂流することになった経緯を聞きたいのですが」

私達が一番気になっているのはそこである。

艦娘が気絶状態で漂流など通常ありえない。もしかしたら、以前のようにこの海域周辺に深海棲艦が現れ、伊58はその攻撃を受けたのかもしれない。

だとしたら、早急に対策を練らねばならないのだ。

「……………覚えてないでち」

「え？」

不意打ちで、もしくは別の原因で気が付いたらここに流されてきたということだろうか。

「ええと、じゃあ、あなたが所属している鎮守府を教えてくださいませんか？ とりあえずあなたを元の鎮守府に送還しないとですし」

「……………それも覚えてないでち」

「え？ あの、それってどういう……………」

「私が艦娘、モデル伊58だってことはわかってるでち。でも、私がどこから来たかとか、それ以外のことについては全然思い出せないでち……………」

その瞬間、空気が凍った。

「え……………これって、まさか……………」

「記憶喪失、ね」

「ねえこういう場合ってどうするのお？」

「私には、なんとも……………提督？」

「……………」

私達が慌てふためく中、提督は伊58をじつと見つめ続けている。すると、突然無言のまま彼女の目の前へ歩み寄ると、そのセーラー服の裾を掴んで一気に脱がせた。

「……………!?……………!?」

突然のことに理解が追い付かないのか、伊58は手をバンザイさせ

た状態で目を白黒させている。

しかし、少しして脱がせたセーラー服を見つめている提督とセーラー服を脱がされスクール水着のみになった自分の姿を交互に見て顔を真っ赤にして震え始めた。

「……………成程」

「何が成程だ、この変態ッ！」

「がふっ！」

矢矧が提督の顔面に上段回し蹴りを入れた。

「ち、違うんです！ 潜水艦って初めて見るものだったので……………セーラー服はどうなってるのかなって……………」

「だからって唐突に脱がすなよ！」

「あと、セーラー服の下もスクール水着なのかなって気になって……………」

「むしろ違ったらどうすんだ！」

「こ、怖いでち……………提督超怖いでち」

伊58も震えて部屋の隅っこまで後退してしまった。

こんな人にさつきまで説教されていたかと思うと悲しくなる。

こんな人が私たちの提督かと思うともっと悲しくなる。

そんな提督は矢矧の蹴りでひび割れた眼鏡をかけ直しながらよろよろと起き上がる。

「ぐ、眼鏡が……………あ、伊58のことはしばらくウチで預かることにしましょう。もしかしたら提督が既に捜索願いを提出しているかも知れませんか——」

「まだ息の根があったのね」

「ぐはあー！」

矢矧に背負い投げされて床に叩きつけられたと同時に衝撃で提督の眼鏡が砕け散った。

提督のアイデンティティ、その実質上の死である。

「め、眼鏡が……………！」

「流石です、提督。まだ息の根があるのね」

「助けてくださいー！」

「もうやめて、矢矧！ 提督のライフポイントはとっくにゼロです！」

「どいて大和、提督殺せない」

「殺しちや駄目ですって！」

☆

大和達が提督に襲い掛かる矢矧を総出で抑えている間、磯風と美海は食堂の隅っこで震える伊58の方にフォローへ出向いていた。

「大丈夫か、伊58？ すまないな、ウチの提督は少し変わっているんだ」

「べ、別に気にしてないでち」

話しかけてきたのが大和や矢矧のような年上ではなく、伊58と見た目的に年齢が近い二人だからだろうか。終始目をそらして小刻みに震えていた彼女も大分落ち着きを取り戻してきた。

「私は七丈島艦隊の磯風。こっちは友達の美海だ」

「美海です！ よろしくお願いします！」

「……友達？ 磯風と美海がでちか？」

伊58がそれを聞いて驚いたように磯風と美海を交互に見る。

「あ、ああ、そうだが？」

「は、はい」

それを聞いた途端、今までの態度が嘘のように豹変し、突然伊58が乾いたような笑いと共に二人を汚物でもみるかのような目で睨みつける。

「艦娘と人間が友達？ 友達ごっここの間違いじゃないでちか？」

「な、なに？」

「ど、どうしたんですか、急に!?!」

伊58は立ち上がると、磯風と美海の止める声を聞かず食堂の出口に向かう。

「あなた達、気持ち悪いでち」

そう言い残して、部屋を出て行った。

「な、何だったんだ……?」

「凄く怒ってたね……」

二人で顔を見合わせてしばらく黙っていると、磯風が美海の手を引っ張って言った。

「よく分からないが、取りあえず追いかけてよう」

「——！ うん、それがいい！」

☆

「——まったく、信じられない奴らでち。成程、噂通りの犯罪者集団でちね」

私は薄暗い廊下を歩きながら独り言を呟く。

そして、周りを確認してからスクール水着の内側から通信機を取り出すと手慣れた仕草でボタンを操作する。

『私だ』

「提督、こちら伊58でち。現在七丈島鎮守府内部に潜入したでち」

『ご苦労。身元は割れていないだろうね』

「大丈夫でち、記憶喪失を装って余計な情報は与えていないでち」

『よろしい、では手筈通り七丈島鎮守府提督の暗殺。迅速に頼むよ』

「了解でち」

私の言葉を最後に通信は切られた。

通信機をしまい、再び薄暗い廊下を歩き始める。潜入前にあらかじめ鎮守府の見取り図は頭に入れてきたが、実際に歩いて符合するかを確かめる必要がある。

確実な暗殺のために。

「まあ、肝心のターゲットもただのロリコンみたいで安心したでち。あんなちやらんぼらんなら5秒でやれるでち」

最初に面と向かって見つめられた時は見透かされたような悪寒が走り、気が気ではなかったが、結局ただの変態でしかなかった。

悪寒はきつと奴の嘗め回すような気色悪い視線から来たものだったのだろう。

しかし、思い出しても苛立たしいのは艦娘達だ。自分が思うがままに好き勝手動いて提督にすら暴力をふるう。

そして、人間と友達だと言う。自分がいったいどういう存在なのかまるで弁えていない。

あんな危険物を生かしておいて良い筈がない。

「七丈島鎮守府。提督諸共私が潰してやるでち」

闇の中で伊58の目が鋭く光った。

第四十三話「一体なんの話でちかあああああああああ
ああああッ！」

「な、なんだって……!?!」

私は薄暗い鎮守府の廊下、その曲がり角の壁際に体を寄せながら思わず小さな声を洩らしてしまい、慌てて口を手で塞ぐ。

私の名前は磯風。

この七丈島鎮守府に在籍している艦娘の一人であり、そして、唯一提督の危機を凶らずも知ってしまった艦娘である。

「磯風ちゃん、どうしたの？ 急にそんな火曜サスペンスの第一発見者みたいな顔して」

「そんな顔をしていたのか、私」

まあ、状況的にはあなたが間違ってもいないかもしれないが。

「美海には聞こえなかったか？」

「伊51さんが何か独り言呟いてたのはわかったけど、内容は全然」

「そうか。あと伊51じゃなくて伊58だぞ、美海」

「どうする？ そろそろ声かける？」

「……いや、もう少し様子を見よう」

美海には聞こえていなかった。だとすれば、ますます提督に迫りくる危険に先んじて対処を講じることができるとすれば、それは私だけ。

私は今、確かに聞いた。

おそらくはこの曲がり角の先にいるであろう伊58の声を。

『七——府。提督——私が潰し——でち』

そう、伊58はこう言っていた。それもとんでもない怒りを秘めた声で。

最初の方は少し聞き取りにくい部分もあったが、ここまで聞けば私でもわかる。

『伊58』、『提督』、おそらくは『潰す』というワード。これだけで

も十分に物騒な雰囲気は十二分に伝わってくる。

しかし、これを私がかつて瑞鳳とプリンツに教えてもらったある知識とつなげることでその真の恐ろしさが露わになる。

そう、あれは大和が来る数か月前の出来事だった。

『——はー、ただいまー、全く疲れちゃうわ』

『おかえり、瑞鳳。三か月ぶりの帰宅だな』

両手に貢がせた——本人は貰ったと言っていたが——お土産らしき高級スイーツが一杯に詰め込まれた袋を持って瑞鳳が鎮守府でいつも通り料理の修行に明け暮れる私の前に現れた。

『ん、磯風、久しぶりね』

『またデートか?』

『そーよ』

『凄いな、どうやったらそんなに男の人にモテるようになるんだ?』

『ズバリ、男の弱点を知ることね、ズバリ』

『男の弱点?』

『あ、瑞鳳がいるう、珍しー』

私と瑞鳳が話している声を聞きつけたのか、プリンツも会話に入ってくる。

『あら、プリンツ、久しぶり。今、磯風に男の弱点について教えていたのよ』

『男の弱点? あー、そんなの簡単だよ』

『男の弱点……大人な響きだな! 一体それはなんなんだ?』

『チ●ポだよ』

『チ●ポよ』

『……え?』

一瞬、私の脳内でビッグバンがイメージとして現れる。

私にとってそれほどの衝撃を与える単語が二人の口から一斉に放たれたのだった。

『え、と……』

『いい? 男なんて所詮はケダモノ。扱い方を誤れば筋力的に劣る私達は明らかに不利。しかし、アソコさえ掌握してしまえば理性なき獣』

が支配者たる私達に触れることは決してできないのよ』

あまりの衝撃に私がろくに喋れないでいると、頼んでもいないのに瑞鳳が熱弁を始めた。改めて瑞鳳は凄いなと思った。しかし何故だろう、微塵も尊敬できる気がしない。

こんな大人になりたいと一切思わせない所がまた凄いと思う。

『うんうん、男はアソコに一撃入れれば下手をすると命を落とすらしいからねえ』

『そ、そうだったのか……！』

『うん、男性として死ぬんだよお』

『ん？ 男性として、死ぬ？ よくわからないが、まあいいか……！』
何を言っているのか高度すぎて理解できないし、理解してはいけない気がした私はそこで考えるのをやめた。

とりあえず男の弱点というものを知ったことで、あの時私はまた一つ大人の階段を一段上ったのだ。

今思うとむしろ踏み外していたかもしれない。

「——うん、今思い出すと大和が来る前の七丈島鎮守府はヤバいな」
他所に見せていいものではないな、あれは。世間一般的な瑞鳳とプリンツのイメージが汚されていけない。

大和がいたら何回ツツコミが入ったかわからない。

「さつきから様子がおかしいけど、どうしたの？」

「いや、なんでもないよ………美海は、どうかそのまま置いてくれ」
「何、急に？」

それはともかくとして、だ。

伊58が提督に受けたセクハラ、伊58のあの怒りよう。そして、『提督』の何かしらを『潰す』というワード。

導き出される結論は——

『七丈島鎮守府。提督のチ●ポは私が潰してやるでち』

そう、伊58はこう言っていたに違いない。

奴め、なんて恐ろしいことを考え付くのだ。

そんなことをしたら提督はどうなってしまうんだ。というか、潰された場合、あれを失ってしまった提督はどうなるんだ、性別的に。

男なのか、女なのか。

ああ、そうか、これが男性的に死ぬという意味――

「ああ、理解したくなかったのにツ！　クソツ！」

「磯風ちゃん!?　なんで急に顔を壁に叩きつけるの!?!」

また一つ階段を踏み外した気がする。

「大丈夫だ、安心してくれ。私は怪我一つないぞ、艦娘だからな」

「私、磯風ちゃんの体よりも心の方が心配だよ！」

いたずらに美海の不安を駆り立ててしまった。

あともう少し大和が早く来てくれば何か違ったかもしれない。
い。

「――そこで隠れているのは誰でち！」

「バカな、見つかった!?　完全に私達は奴の死角にいるはずなのに!?!」

「あんなダイナミックに壁に顔叩きつけたら音でバレるよ！」

美海も中々キレのいいツツコミをする。

将来有望だな。

☆

「――理解したくなかったのにツ！　クソツ！」

「でち!?!」

背後から突如聞こえた声に、私は思わず柄にもない声をだしてしま
う。

しまった、まさか人がいるとは思わなかった。

何せ、七丈島艦隊の奴らも提督も今は食堂で揉めていると思ってい
たからだ。

食堂を出ていく時の様子ではまだ落ち着きを取り戻すには時間がか
かかると思ったが。矢矧とかいう艦娘は人を殺しそうな目をしてい
たし。

「そこで隠れているのは誰でち！」

私は背後の、おそらくは曲がり角の陰に潜んでいるであろう何者か
に勇んで怒鳴り声を上げた。

ここで怯んだり逃げることがありえない。そんなことをすれば、確
実に無用な『疑念』と『警戒』を呼ぶ。

無防備な記憶喪失の少女を演じ、凶らずもあの変態提督のおかげで私はか弱い少女のポジションに加え、被害者としてのポジションをも得た。

今の状況が、一番誰にも怪しまれず、警戒されず、かつ自由に動き回れるポジションなのだ。そう易々とは手放さない。

確実にバレたと判断できるまではポジションを保持する。

「あ、あの、そのすまない、隠れるつもりはなかったのだが」

「私達、伊28さんが心配で……」

「ふん、さっきの友達ごつこの奴らでちか……ん？　今数が足りてなかったような？」

「どうしたんですか、伊58さん」

「……………まあ、いいでち」

提督との会話を聞かれたかもしれない。

今重要なのはここだ。

まずはその事実確認からだ。結果的に聞かれていようが聞かれていまいが、この事実確認をしない内には私には逃げるといふ選択肢はない。

「で、隠れて何してたんでち？」

かつ、高圧的に真っ向からぶつかると。こちらにはやましいことはない、そういう主張を態度で示すのだ。

もし、相手が私の声を完全に聞き取れていなかったとすれば、こちらが強気にさえ出していれば勘違いで押し切れる。

そして、私が居た場所から曲がり角までの距離、そして最低限の音量で話していたことを考えれば完璧に聞かれたという方が不自然。

大丈夫、私の正体はバレていない筈。

「すまない、その……………本当にそんなつもりはなかったんだが……………聞いてしまったんだ」

なんだと。

私の頬を冷や汗が伝わる。

いや、落ち着け。まだ焦るような時間じゃない。

「な、何を聞いたっていうんでち？」

「磯風ちゃん、聞こえてたんだ。それでさつきから様子がおかしかったんだね」

「様子が、おかしかったでちと?」

それはつまり動揺していたということ。さらに言えば、内容が聞こえていたということじゃないか。

まさか、本当に。

膝がかすかに震え始めた。

「いや、でも、これは……言っていていいものか……」

「言えって言ってるでち!」

確実にバレたと判断できるまでは私は――

「……伊56、お前が提督を、(男性的に)殺すって」

「伊58でち! つて、え!?!」

やばい、完全にバレている。

こういう場合、どうすれば。

いつそ、ここで二人とも――

「まあ、だが、仕方がないのかもしれないな」

「え!?!」

何を言っているんだこの艦娘は。

自分の提督が殺されると知っていながらそれを仕方がないで割り切るなんて。あまり情報はなかったが、あの提督はどうやらこの艦娘に嫌われているようだ。

それならむしろ協力関係も築けるか。

「伊57に出合い頭にセクハラしちゃったからな。うん、(男性的に)殺されても仕方ない」

「お前の中の命、あまりに軽すぎないでちか? あと伊58でち」

セクハラしたら情状酌量の余地なしの死刑宣告なんて聞いたことがない。

想像を絶する嫌われようだな、あの提督。私が殺しに行かなくても待っていれば勝手に殺されていたのではないか。

「磯風ちゃん、流石にそれはちよつとあまりに酷すぎじゃないかな……」

「そうかな？ でもペットとかも同じようにするだろう？」

「お前、ちよつと倫理観とか色々考え直した方がいいでちよ」

「うん、私もそう思う」

「そ、そうか……」

（おかしいな、飼い犬や飼い猫とかも発情期になると去勢すると聞いたんだが……）

流石、犯罪者の巣窟だ。可愛い顔してなんて猟奇的な思考をしているのだ、この艦娘。

私も長居すると逆にこいつらに殺されてしまうかもしれない。

とにかく、ここは慎重に、荒波を立てないように穏便に話し合いで解決するべきだ。

「じゃ、じゃあ、お前は私が提督を（生物的に）殺すことに文句はないんでちね……？」

「んー、まあ、大丈夫だろう、提督なら。（男性的に）死んでも誰も困らないだろうしな」

「お前、マジで提督嫌いなんでちな」

「何言ってるんだ、大好きに決まってるだろう！」

「お前は何を言ってるんでち!？」

目の前の磯風が何を考えているのかさっぱり理解できない。なんだ、こいつ。

「まあ、提督が（男性的に）死んでしまうことは悲しいことだが、あの提督のことだ、きつと全てが終わった後にはまた笑ってくれるさ」

「怖ッ！ 死んだ後に笑うんでちか!？」

「なんだ、笑うことも許さないのか!？ 提督だって人間なんだ、笑うくらいするだろう!」

「普通は笑わないでちよ!？」

死んだ後に笑うとかそれ普通に心霊現象である。

何よりそれをさも当然のことにように語る磯風が一番怖い。

「お前、本当に頭大丈夫でちか？ 提督を殺すって言われてそこまで平然としているなんて信じられないでち」

「なに、大丈夫だ。だって店長と同じようになるだけだろう？」

「店長って誰でち!？」

「美海の父親だ!」

「お父さんは死んでないよ! ちょっと旅に出てるだけだよ!」

「でも、(男性的に) 死んだからあんなじゃないのか?」

「私のお父さんがオカマだからってそれは酷いよ、磯風ちゃん!」

美海と磯風が勝手に二人で言い合いを始めてしまった。

なんとなくだが、おそらく美海の父親は実際死んでいて、それを受け入れられない彼女は未だ父は旅に出ていると思いついでいる。そんな所だろう。

戦争中であるこの国では珍しい話でもない。

磯風がああやって説得しても美海は聞く耳持たず、という訳だ。

「ここは私も彼女に一言声をかけてやらねばなるまい。」

「美海っていったでちか?」

「何!? あなたも私のお父さんがオカマだからってバカにするの!？」

「ぐ」愁傷さまでち

「余計なお世話だよ! 憐れまないですよ!」

「わかってるでち、わかってるでち」

「伊48にお父さんの何がわかる!」

「伊58でち!」

怒らせてしまった。仕方ない、まだ子供なのだ。これから時間をかけて向き合っていくしかないだろう。

「そもそも!」

「ここで美海が私と磯風の間割り込んで声を上げる。」

「なんか、さつきからおかしいよ? 二人とも明らかに話噛み合っていない!」

「何を言ってるんだ、私達はさつきから提督を(男性的に)殺す話をしていたんだろう?」

「そうでち、私が提督を(生物的に)殺すという話でち。まあ、まさか磯風が賛同してくれるとは思わなかったでちが」

「そう、そこなんだよ。いいの、磯風ちゃん? 提督が死んじゃうんだよ。」

「まあ、いいとは思わないが……しかし非は提督にあるしなあ」

そこで美海が何か気付いたかのように小さく「ああ」と声を洩らすと、今度は私の方に向き直って尋ねる。

「伊108さん。提督を殺すって言ったけれど具体的にはどういう風にするの?」

「お前、それワザとでちな? 具体的には? まあ、心臓をナイフで一突き、でちかねえ」

「な、なんだと!?! それじゃ本当に死んでしまうじゃないか!?!」

「だから、さつきからそう言ってるでち!」

本当に何を言っているのだ、こいつは。

しかし、焦った表情を見せたのも束の間、磯風は何かを納得したように頷くと笑みを浮かべる。

なんとというか、少し見下されたように感じて腹が立つ。そんな笑みだった。

「さては伊59は知らないな? 男の弱点がどこにあるのかを」

「お前もわかっててわざとやってるでちな! 男の弱点? なんてち、それ?」

「心臓じゃないぞ。提督のチ●ポは股間についているんだぞ」

「一体なんの話でちかあああああああああッ!」

自分でも顔全体に血が上っているのがわかる。

美海の方も同じく顔を真っ赤にしてプルプルと震えて口を覆っている。

「え? え?」

そこでようやく磯風は自分の話がずれていることに気が付いたらしい。

こいつ、ぶん殴りたい。

☆

「——成程、つまり、全ては私と伊88の間で殺すの意味が異なっていたと」

「そうみたいでちね。なんでちか、男性的に殺すって。あとそろそろ名前いい加減にしろでち」

「いや、だってプリントが」

「私のお父さんは死んでないからねッ！　あと男性的にも死んでないからねッ！」

「あ、ああ」

「わ、わかったでち」

取りあえず数分の話し合いの後、私と磯風の間の誤解は解けた。

「で、伊58。お前は提督を殺そうとしていると。命を奪うという意味で」

「あ、はいでち……」

そして、私の目的も自動的にバレた。

今度こそバレた。

「い、一応聞くけど、勿論あれだよ？　よく友達とかに冗談で言ったりする方の殺す、だよ？……？」

「そ、それは勿論でち……本当に殺すわけないでち……ムカついたから冗談で、言っただけ……でち」

少し怯えた表情で美海が出してくれた助け舟にそのまま便乗する。

正直、先刻あれだけ口を滑らせておいて冗談も何もないが、きつと美海はその現実を突きつけられるのが怖いのだ。

それはそうだろう。殺人を計画しているなどと言っている奴と関わり合いになんてなりたくない筈がない。

丁度いい、こちらも逃げ道ができて万々歳というものだ。

「——いや、冗談なんかじゃないだろう、伊58」

「い、いやいや冗談でちよ」

「さっきのお前の目は冗談で言っている目じゃなかったよ」

「でち……」

磯風の鋭い目線に私は思わず視線を外すように顔を背けた。

私はバカだ。冗談で通るわけがない。

わかっていた筈だろう。ここは犯罪者の巣窟だ。

人殺しだって経験しているだろう。そんな『先輩』から見れば、私が冗談で殺すと言ったのかそうでないかなんて見抜かれるに決まっている。

「だったらどうするでちか？ 他の仲間や提督に言うでちか？」

「……………」

「磯風ちゃん…………？」

「言わないよ」

「は…………？」

そう言うと、磯風は私に背を向けて歩き去ろうとする。

「な、ちよつと待つでちー！」

「言わない、本当だ」

「それが本当だとしても、そうする理由がわからないでちー！」

「お前がどうして会ったばかりの提督を殺そうとしているのか知らないが、好きにすればいい。絶対にお前は提督を殺せない」

「それは私を——」

馬鹿にしているのか。そう続けようとした口が突然凍り付いたように動かなくなった。

磯風の射殺するような視線に、あまりに冷たい目に、金縛りにあったように動けなくなった。

動いたら、殺される。そんな気がした。

「——殺せないよ。だが、それでも、万が一にでも、お前が提督を殺せたらなら、その時は私がお前を殺す」

今度は勘違いではない。

命を奪うという意味で、彼女は『殺す』言ったのだ。そう、一瞬で理解できた。

第四十四話 「マジで調子狂うでち！」

「――朝、でちか」

部屋に差し込む日差しで伊58は目を覚ます。

昨夜はあの後、大和達に居住棟に案内され、余っている空き部屋を一室借り受けてそこで夜を明かしたのだ。

布団以外には何も無い簡素な畳部屋だが一人にしてもらえたのは伊58にとつては非常に都合がよかつた。

「今日は晴れでちね」

窓から見える燦々と輝く太陽と雲一つ見えない青空を見ながら枕の下に手を入れる。

枕の下から抜かれた伊58のその手には使い込まれたコンバットナイフが握られていた。

「殺^やるにはいい日でち」

ナイフを手の中で回転させながら伊58は部屋の中で一人静かに笑った。

☆

「――うまいでち……！」

「あ、本当ですか？ お口にあつたようで良かつたです」

食堂。布団を畳んでしばらくしてから大和達が朝食をご馳走すると訪ねてきたのでこれは好都合と私は現在食堂で七丈島艦隊の面々と共に朝食をとっていた。

何が好都合なのかと言えば、提督のことに関して探りを入れるためである。

暗殺に最低限必要な情報は提督がいつ、どこにいて、何をしているのか、だ。そして、それらをよく知っているのは他ならぬこの鎮守府の艦娘。

当初の予定では私の方から探りを入れる予定だったが、向こうから来てくれるならそれに越したことはない。

朝食を共にして親睦を深めつつ会話から情報を集めようという訳だ。

「……………」

取りあえず、この朝食を食べ終わったら。

「伊58の奴、さつきから無心で食いまくってるな」

「お腹空いてたのかしら？」

天龍と瑞鳳が一心に朝食をかきこむ私を見てニヤニヤと腹の立つ笑みを浮かべているが、そんなことはどうでもいい。

そんなことで食事を中断することすら勿体ないくらい、目の前の朝食は美味だった。

大和が作ったという焼鮭と味噌汁、白米という極めて一般的な和風朝食だが私の鎮守府のそれとは比べものにならない。

こいつら出撃もしない癖にこんなに美味しいものを毎日食べているのかと思うとますます提督暗殺にやる気が湧いてくる。

「美味しかったんだねえ、お姉さまの朝食だもんねえ。私もこのお味噌汁の中に僅かに零れ落ちた視認できない微小な皮脂やお姉さまの吐息中の水分が混ざっているのかと思うと無限に食欲が湧いてくるよ」

「うん、今お前のせいで少し食欲がなくなったでち」

一旦箸を止めて私はそろそろ情報収集に移ろうかと息をつく。

その時、食堂の扉を開けて二人の少女が入ってきた。

「ふぁ……皆、おはよう」

「おはようございますー！」

「うっ……………」

磯風と美海の姿に私は思わず顔が引きつる。

何せ、現状あるうことか私が提督を暗殺するということを知っている二人なのだ。もし、彼女達が今ここで私の企み全てを話してしまえば、それだけで私は終わる。

「…………大和、ごはん」

「まさか、大和さんが朝食を作ってくれるなんて、恐縮です！」

「はいはい、二人の分もちゃんと用意してありますよ」

磯風は私の姿を一瞥すると、何をすることもなく椅子に座り、眠たそうな声で大和に朝食を要求するだけだった。

美海も同様に何もアクションを起こす気配はない。

(本当に言わないつもりでちか？ いや、もしかしたら既に全員には話している?)

様々な憶測が私の頭を駆け巡るが、結局私が依然として拘束されていないことを考えると磯風達が誰かに私の暗殺計画を話した可能性は低いという結論に至った。

全てを知ったうえで私を泳がせておいてもメリツトがないからだ。暗殺をしようとしている艦娘がいるならば泳がせているより素直に拘束してしまった方が明らかに手っ取り早い。

だとすれば、磯風は昨日の宣言通り誰にも私のことを話していないのだろう。

『お前がどうして会ったばかりの提督を殺そうとしているのか知らないが、好きにすればいい。絶対にお前は提督を殺せない』

昨夜の磯風の言葉が脳内で再生される。

『殺せないよ。だが、それでも、万が一にでも、お前が提督を殺せたなら、その時は私がお前を殺す』

昨日は少し雰囲気にもまれてしまったが、よく考えてみれば何が「殺せない」だ。私はこのために提督から特別に『訓練』を積まされている。加えて、この艦娘の体。

人間相手に遅れをとるなんて万に一つもあり得ないのだ。

磯風はどうやら私の実力を測りかねているようだが、私を馬鹿にしたことを後悔するといいいい。

邪魔をしないならそれで結構、私は予定通り事前に考えておいた台詞を話し始める。

「そういえば、昨日、あの後提督はどうなったでち?」

「ああ、あの後少し落ち着きを取り戻した矢矧が提督を引っ張っていつて執務室で夜遅くまで説教していましたよ」

「部屋に戻った気配もなかったし、ありや多分二人ともまだ執務室でくたびれて寝てるな」

「いえ、矢矧は一時間前位に朝食二人分持って執務室に戻りましたよ? 多分提督も叩き起こされていると思います」

「深夜まで説教の末に即仕事って鬼でちね……」

「はいはい、夫婦夫婦」

「イチヤイチャしやがって」

「お前らなんでそんな妬ましそうな反応なんでちか!？」

とにかく、提督は今睡眠不足の上秘書艦にしごき倒されて疲労困憊状態の筈だ。

これは良い知らせと言える。

「矢矧凄い怒ってたからねえ、これは今日一日執務室に軟禁状態かもねえ」

「じゃあ、執務室に行けば提督に会えるでちね」

「どうしたんですか？ 提督に何か用でも？」

大和が私の言葉に不思議そうに首をかしげる。

その反応も事前に予想済みだ。

「殴りに行くんだろ？ 俺も付き合うぜ」

「何言ってるの、訴訟でしょ？ 私も付き合うわよ」

「どっちも違うでちよ!?! あと付いてくんまでち!」

天龍と瑞鳳の発言からはさつきから提督に対する尊敬や親愛の念を一切感じない。

いらないツッコミが入っておかげで調子が狂う。

「……一応、記憶喪失の私を置いてくれてるでちから、一言お礼をと思っただけでち」

「律儀ですねえ。あの提督にそこまですることないと思いますけれど」

「お前ら提督のこと嫌いなんでちか!？」

「ゴキブリより全然好きよ」

「比較対象がおかしいでち!」

「……この提督が予想外に艦娘から嫌われているせいで思わず私の方が気遣ってしまう。」

「いえいえ、冗談ですよ」

「ただの軽口だぜ」

「あの提督もきつと見えない所で頑張ってるでちよ、もう少し優しい

言葉をかけてあげても——」

いや、何故私は今から殺す相手を庇っているのだ。言い過ぎた。そう思った時にはもう遅かった。

大和達が目を丸くして私を見つめている。

「伊58は本当にいい人ですねえ」

「なんつーか、人間ができてるよな」

「そ、そんなことないでちー!」

「いやいや、提督にあんな仕打ちを受けてそんな言葉が出るなんて……え、まさか惚れたの?」

「え、そうなんですか?」

「おいおいマジかよ」

「は!?! そんな訳ないでちー! おい、その顔やめろでちー!」

大和、天龍、瑞鳳が一樣にニヤニヤしているのが本当に腹立つ。

「ええ、提督よりお姉さまの方が数百倍はいいと思うけれどなあ」

「お前はそもそも恋愛観がおかしいでちー!」

「提督をか……道は険しいが頑張れ、伊58」

「ファイトだよ!」

「おまつ——」

磯風と美海が私にサムズアップして笑いかける。

(お前らは違うってわかってんだろうがあああああ!)

私は口から出かけた言葉を怒りに震えながら飲み込んだ。

☆

「——つたく、なんなんでちかこの鎮守府の艦娘は! どいつもこいつも無駄にキヤラ濃すぎなんでちよ!」

これ以上茶化されるまいと早々に食堂から飛び出して、私は苛立ち気味に早足で執務室へと歩を進める。

「マジで調子狂うでちー!」

ぶつぶつと文句を垂れながら、私は先刻の失敗を悔いていた。

やはり提督について語り過ぎた。

今の私は記憶喪失なのだ。あまり艦娘に関連したことは喋るべきではない。

しかも――

『伊58は本当にいい人ですねえ』

『なんつーか、人間ができてるよな』

これから自分達の提督が私に殺されるとも知らずに大和達は私を『いい人』と言った。私がいい人な筈ないというのに。

少し、心が痛む。

「……ああ、もう調子狂うでちー！」

もういい。今は任務に集中するべき時だ。

私はセーラー服の内側に忍ばせたナイフの刃の側面を指でなぞる。ナイフの冷ややかな感触が私の頭を冷静にし、思考を研ぎ澄まさせる。

「行くでち」

準備はできた。

私は執務室の扉をノックした。

「――あら、伊58じゃない、どうしたの？」

扉が開き、中から矢矧が出てくる。

奥には書類の山に埋もれた提督がせわしなく手を動かしている。

「提督に話があつて来たでち」

「そう、どうぞ入って」

「失礼しますでち」

「あ、おはようございます、伊58さん。昨日はゆっくり眠れましたか？」

「はい、おかげさまで快眠でち」

執務室の中に通される。中は一面書類の山だった。提督の机は勿論、ソファ、テーブル、簡易ベッド、床に至るまで書類が積み重なって足場もほとんどない。

出撃も、建造も何もかもしていない筈なのに一体何の書類がこれだけ集まってくるのだろうか。

下手をしたら他の鎮守府よりも忙しいのではないか。

私はその執務室に有様を見て思わず小さくではあるが声を洩らしてしまった。

「すみません、いつもはこの10分の1くらいなんですけれど……」
「悪いわね、伊58。今ソファとテーブルの書類全部どかすから、座つて頂戴」

「わ、わかったでち」

本来は来客用として使われているのであろう対面するように置かれた一際豪華な二つのソファとその間のテーブルに積まれた書類だけを矢矧が適当なところに動かしてスペースを作り、私に座るように促す。

私が恐る恐るソファに腰を下ろすと提督も書類の山で狭くなっている足場をよろめきながらも慎重に歩いてきて私の対面のソファに座った。

「それで、私に話があるんでしたよね？」

「はい。まずは記憶喪失の身であった私をこうして鎮守府に置いていただきありがとうございますでち」

「いえいえ、困った時はお互い様ですし、それに助けたのは大和達ですよ。私はお礼を言われる程のことはしていません」

「そうね、初対面で女の子のセーラー服脱がせる提督が感謝されるようなことは一つもないわね」

「う、ぐ……」

「そ、それはもう気にしてないでち！」

矢矧の言葉に刺々しいものを感じ、慌てて私はフォローに回ってしまふ。

別に数分後には殺す相手を気遣う必要など一切ない筈なのだが。

まあ、いい。さっさと本題に入ってしまったおう。

「それで、実は今朝になって少し思い出したことがあるでち」

「本当ですか！」

「はいでち。あの、それで……そのプライベートなことなので……できればあまり多くの人には話したくないというか……」

言いにくそうに、申し訳なさそうに、上目遣いでゆっくり言葉を切りながら話す。

無論、こういう演技だ。

「ああ！　そうですよね、すみません。そういうことなので、矢矧。少しの間外してくれませんか？　話が終わったら扉開けるので」

「……わかったわ。そういうことなら仕方ないわね」

矢矧はそう言って秘書艦用の執務机に置いてある書類の束を抱えると狭い足場を器用に歩いて執務室の扉を開ける。

「じゃあ、私は食堂で書類のチェックを進めておくので終わったら呼びに来てください。提督、くれぐれも手を出さないように」

「わかってますって！　十分に反省しました！」

「ならいいけれど」

そう言い残して矢矧は執務室から出て行った。

これで邪魔者はいない。後は殺すだけ。

心臓の鼓動が急に速くなり始める。

「これでよろしいですか？」

「はい、十分でち」

私は笑顔を装いつつセーラー服の後ろに手を回す。ナイフを隠し持っている場所だ。

ここから0.5秒でナイフを構え、同時に立ち上がって一気に斬りかかる。頭の中、訓練で何度もシミュレートした動きに淀みはない。

私が意を決して重心を前に倒し始めた瞬間だった。

「あ、そうだ！」

「うわあ!？」

「え!？　ど、どうしたんですか、急に大きな声出して」

「す、すみませんでち。びっくりしちゃって」

「それはこちらにも申し訳ないことを。それはそれとして、美味しいお茶菓子があるので折角ですし一緒に食べましょう！　今は矢矧もいませんし！」

「え?　は、はい……それじゃあ戴くでち」

提督。偶然とはいえ嫌なタイミングで大声を出すものだから完全に斬りかかるタイミングを逃してしまった。

提督はそそくさと書類の束を踏まないよう抜き足差し足で大きめの棚を開いてお茶菓子を探している。

仕方ない。提督が茶菓子を持って戻って来た時。腰を下ろすタイミングで殺そう。

私は息をついて再び棚を漁る提督の背中を見る。

「あ、あれー？ 確かこの辺に置いたはずなんですけれど？ もっと奥の方だったっけ？ ぐあああ！ 頭がはまった！」

(……今なら後ろからでも殺せないでちか?)

相当奥行きのある棚なのか提督の頭が棚の中にすっぽり収まっていた。

「あ、そうだ伊58さん。是非見ていただきたい書類があるので読んでみてください」

「え？ は、はいでち」

棚に頭を突っ込んだまま提督は私に声をかける。

「伊58さんの後ろに置いてある書類の束の一枚目です」

「わかりましたでち」

私はソファから乗り出して後ろに置いてある書類の一番上の一枚に手を伸ばす。

それを見て私は首を傾げた。

「え、七丈島フェリー時刻表？」

一体なんだこれは。こんなものが執務と何の関係が。

そこで私はもう一つ気が付いた。

「あれ？ 二枚目は白紙？」

書類の一番上の一枚を取り去ると二枚目は白紙。試しにもう数枚取ってみるとこれもまた白紙。

(なんでち？ とんでもない量の書類が積まれていると思ったら一番上以外白紙？ なんで?)

その時だった。

「どうしたんですか？ 私を殺さなくていいのですか？ 伊58さん？」

「——っ!？」

振り返ると先刻と変わらぬ穏やかな笑顔の提督がすぐ後ろで私を見下ろしていた。

その時やつと気が付いた。

私は、嵌められたのだと。

「気づいていたでちかッ！」

素早くセーラー服からナイフを取り出そうと手を突っ込むが、何故かそこにナイフの感触はない。

「これをお探しですか？」

「私のナイフ！」

いつの間にか提督は私のナイフを手の中で回転させたり放ったりして遊んでいた。

拙い。暗殺は失敗だ。

「……は……一時退却でち！」

「おっと」

私は執務室を出るべく提督に蹴りで牽制を入れつつソファの背もたれに足をかけて出口の方へ飛び上がる。しかし、私の逃走はそこで終わった。

「しまっ——書類の山！」

床に無造作に置かれた書類の山が着地地点の足場を遮り、そのせいで私はバランスを崩して盛大に転んだ。

「白紙の書類の山の目的はこれでちか……！」

「その通りです」

転んだ私は立ち上がる暇も与えられずにあっという間に提督に組み伏せられる。

その表情は依然として穏やかな笑顔のままであった。

「これはあなたを逃がさないための仕掛け。御覧なさい、あなたと私の座っていたソファの周りを取り囲むように紙の束が置かれているでしょう？」

確かによく見れば最初と配置が僅かに変わっている。

最初に入った時は出入り口やソファの付近、私が着地した場所には書類の束はなかった。

それらの配置を思い出して逃走を試みたのだから間違いない。

『悪いわね、伊58。今ソファとテーブルの書類全部どかすから、座つ

て頂戴』

「矢矧でちか……!」

「まあ、矢矧にはあなたが私を殺しに来た刺客とまでは教えていませんがね。ただ、こういう風に置いて欲しいと頼んだだけです」

「お前……一体何者でちか!」

私が暗殺者だと知って、むしろ罠にかけたというのか。

普通じゃない。

普通の提督が、暗殺者が来ると知って逆に罠にかけようなどと思うものか。

何より、あまりに手際が良すぎる。

『絶対にお前は提督を殺せない』

磯風の言っていた意味がようやくわかった。

あまりにレベルが違いすぎる。私を組み伏せて笑うこの男は明らかに私よりも格上だ。

「さて、それでは——」

「わ、私を殺すでちか?」

「いえ、お茶菓子を食べましょう」

「は?」

その言葉と同時に拘束が解かれる。

困惑気味に体を起こして提督の方を見れば、その手にはクッキーの入った高級そうな箱があった。

「とりあえず紅茶でも淹れましょうか。クッキーですしね」

「……は?」

「ほら、ソファ座って待っててください! はい、ナイフも! あ、もう襲ってこないでくださいね!」

「え、あ、はい……え?」

「さて、お湯を沸かさないと……ティファールはどこにやりましたっけ? あと、茶葉は——」

さつきとは打って変わってまるで足場の狭さなどないものかのようになりに素早く執務室中を歩き回ってお茶を用意する提督を見て私は何もできず半ば放心状態でソファに座っていた。

「調子狂うでち……」

辛うじて絞り出せた言葉はそれだけだった。

第四十五話 「三日間でちな？」

「あれ？ 矢矧、どうしたんですか？」

食堂に書類の束を持って現れた矢矧の姿に大和を始めとした七丈島艦隊の面々が声をかける。

矢矧は大きいため息をつく、大和の隣の席に腰を下ろしてから書類を見て、また一つ大きなため息をついた。

「なんだ？ 機嫌悪いな」

「馬鹿ね、天龍。女の子の日なのよ」

「違うわよー」

機嫌が悪いとわかっていながら軽口を叩く瑞鳳を青筋を立てて怒鳴りつけながら矢矧は乱暴に手に持っていた書類を机に叩きつけた。「本当にどうしたんですか、矢矧？ また提督が何かやらかしたんですか？」

大和が氷の入った麦茶を持ってきながら、瑞鳳とは真逆に恐る恐るといった感じの口調で何かあったのかと尋ねてくる。

矢矧は冷たい麦茶を一気に飲み干して頭の熱を冷ましながら自分を落ち着かせるように数回深呼吸を繰り返すと、叩きつけた書類をもう一度手に取り、視線を戻しながら返答した。

「提督は今自称記憶喪失さんの事情聴取中よ」

「は？ ええと？ 伊58のことですか？」

「そう、それでプライベートな話だからって私は追い出されたのよ」
「何？ それで拗ねてるの？ かわいいわねー」

「瑞鳳、監察艦の立場を利用すれば私、あなたに死んだ方がマシと思わせるようなえげつない懲罰を与えることもできるのだけれど——」

「私が悪かったです。本当に申し訳ございませんでした、監察艦様」

言葉を終える前に躊躇なく土下座で謝罪する瑞鳳に鼻を鳴らしながら矢矧は再び話を戻す。

「全く、なにも一対一でやらなくたって……伊58はナイフも隠し

持ってたみたいだったし……」

「あー、セーラー服の後ろに隠してたやつか。そーいや持ってたな」
「そうね、あの子が朝食がつついてる間にちよつとくすねて見せてもらったけれどよく手入れの行き届いた良いナイフだったわね。あ、勿論ちゃんと元の位置に戻しておいたわよ?」

「へー、あれ提督に使うために持ってたんだけだあ」

天龍、瑞鳳、プリンツのそれぞれの返答に、思わず立ち上がった矢矧の額に再び青筋が浮き出てくる。

「あなた達、気付いてて見逃してたの……?」

「いや、俺他人の主義に口は出さねえ主義なんだ」

「そうそう、それに他人の物盗んだら泥棒になっちゃうから」

「別にお姉さまに危害がなければどうでもいいもん!」

「わ、私は知りませんでしたよ! 本当ですからね!」

「……………はあ、もういいわ」

怒りを通り越して呆れた様子で矢矧は椅子に座り直す。

伊58がナイフを隠し持っていたという理由だけでも十分に怪しいというのにあることかそれに気付きながら何もしなかったと悪びれることなく告げる彼女達——大和は知らなかったらしいが——を責めたい気持ちはあるが、同時に今更それを叱責したところでどうしようもないこともわかっていた。

矢矧のその様子に天龍は肩を叩きながら励ますように言う。

「ま、大丈夫だろ、提督なら」

「問題ないわ、提督なら」

「どうせ無事だよ、提督なら」

「あなた達ね……」

関心がないのか、それとも全幅の信頼の表れなのか。

矢矧も決して提督が伊58に襲われた所でむぎむぎと殺されるとは思っていない。そのための策も講じてきた。

ただ——

「もう少し、私を頼りにしてくれても……」

矢矧がふてくされたようにそう呟く傍らで、その様子を少し離れて

いた所から見ていた者達がいた。

磯風と美海である。

「だ、大丈夫かな？　もしも私達のせいで提督さんが怪我でもしたら……」

「安心しろ、昨日も言っただろう。提督はナイフで襲われた程度では死なない」

矢矧と大和達とのやり取りを聞いていて、伊58の暗殺計画を知っているながら見て見ぬふりをしていることに罪悪感が湧いてきたのか、美海が不安げに磯風の袖を引っ張る。

しかし、磯風は至って落ち着いた様子で机に上半身を倒しながら問題ないと手を左右に振る。

「それに、伊58に提督は殺せない」

「提督さんが強いから？」

「まあ、それもあるが」

磯風は机の上にだらしなく預けていた上半身をゆっくりと起き上がらせて背筋を伸ばすと、どこか遠くを見つめるように虚空に視線を移しながら言った。

「あいつは、昔の私に似ているからな」

☆

「———どうです？　美味しいでしょう？」

「美味しいでちー！」

執務室。伊58は成り行きで提督とクッキーを食べながら紅茶を啜っていた。

本来の目的などもう彼女の頭の中からは消えていたし、それ以前にとっくに諦めていた。

なので、どうせ失敗するならいつそのこと開き直ってしまえと伊58は今半ばヤケクソになっているのであった。

「それで、息災ですか？　犬見中将は」

「……そこまでわかってるでちか」

『犬見』という名前が提督の口から発されると伊58はクッキーに伸ばした手を止めて観念したようにソファにもたれかかる。

「なんでわかったでちか？ 鎮守府に関する情報は洩らしていなかった筈でち」

「……知っているかもしれませんが、艦娘とは形式上軍艦の一種として扱われています」

「知っているでち」

艦娘が人なのか、艦なのか。これは艦娘が台頭し始めてから現在に至るまで議論が続く議題である。

彼女達は人と呼ぶにはあまりにも強く、艦と呼ぶにはあまりにも人であった。

次世代の提督を育成する海軍士官学校でもこの手の議題は関心が高く、授業でも大きく取り上げられる他、卒業論文のテーマとして頻出する。

現段階では、大本営は艦娘を『対深海棲艦兵器』として扱うことを取り決めており、故に艦娘に関する手続きはそれに準じた形式をとることになっている。

「例えば、あなた達には一人一人違った個体識別番号が存在します。艦娘の新規獲得にあたっては、まず提督が15桁の識別番号を与え、それを大本営に申請することで正式に艦娘として運用が可能になります。そして、以降その艦娘に関する情報は全て識別番号で管理されるわけです」

所属、艦種、艦名を始めとして、出撃、遠征、演習の戦果、装備の使用履歴、練度、ケツコンカツコカリ、轟沈。その艦娘に関するありとあらゆる情報は全て個体識別番号で管理、統合され、大本営データベースに保存される。

こうして徹底した管理システムにより、各鎮守府、泊地の戦力や運営状況を大本営が正確に把握できる仕組みになっている。

国家規模の戦争において重要視される要素の一つは自軍戦力の透明化である。現在全体でどれだけの戦力があり、またそれがどのように分布しているのか。

国家規模での戦争では自軍の把握すら容易ではなく、またそれが不透明では戦略などたてようもない。

故に、こうした戦力把握に徹底したシステムは未知の敵である深海棲艦との戦争を始める上では必須だったのだ。

「それで、実はあなた達の識別番号は艦装本体に刻印する決まりになっていきます。伊58型艦娘の場合はセーラー服とスクール水着。その裏地にそれぞれタグが付いています」

「マジでちか!？」

伊58は慌ててセーラー服を折り返して裏地を見る。

その時、彼女は気が付いた。

「……昨日私がいきなりセーラー服脱がされたのって」

「はい、識別番号をこっそり確認するためです」

「明らかにこっそりではなかったでちが」

「識別番号さえわかれば後は大本営のデータベースで検索すれば所属している鎮守府や提督の名前などあっさり判明します」

「そいつは知らなかったでち……失敗したでちね。というか、大本営のデータベースってそんなに簡単にアクセスできるんでちか?」

「………まあ、はい。徹夜すれば、なんとか入り込むくらいは」

「あからさまに犯罪臭がするんでちが」

あからさまに目を逸らして言葉を濁す提督。

「まあ! つまり! 昨日私は決して伊58さんに破廉恥な行為をしようとしていた訳ではなく! ただ伊58さんの調査のために、仕方なく! ああなってしまっただけなんです」

仕方なくの語調が不自然なくらいに強調されていた。

「つまり、私は決して変態ではないんです!」

「わかったでち、わかったでちから」

「本当に、違うんです!」

「そこまで必死だと逆に怪しいでちよ?」

その後も何度か同じようなやり取りが繰り返されたせいで、伊58が徐々に提督がもしかしたら本当は好きでやっていたのかもしれない、マジで変態かもしれない、と疑惑の念を強めたのは言うまでもない。

「でも、なんで私が提督を殺しに来たってわかったでちか? まさか

そんなことまでデータベースに書いてあるでちか!？」

「いえいえ、そこは半分勘です」

「勘!？」

「でもあなたの提督が犬見中将とわかった時点でほとんど確信していました。彼は昔から悪い意味で大胆な人でしたから」

「……ウチの提督と知り合いなんでちか?」

「ええ、士官学校では同期でした。それに半年前の定例会でも話しましたよ」

海軍では鎮守府、泊地の提督が定期的に横須賀で情報交換をする定例会というものがある。参加、不参加は任意の上、そもそも出撃しないため交換すべき情報を持たない七丈島鎮守府にはそもそも定例会の連絡すら普段は回ってこない。

ただし、半年前の定例会は別だった。

提督はある要件で定例会に召集を受け、定例会への出席を強制されていた。

「以前、横須賀近海まで侵攻してきていた深海棲艦の一艦隊。それを横須賀艦隊と協力という形で撃沈しましたからね。七丈島鎮守府が支持を得たことで早急に私を潰しにかかったのでしょうか?」

「大体そうでち……」

以前、横須賀艦隊——二隻だけの艦隊だったが——が七丈島鎮守府を訪れた際、侵攻中の深海棲艦の艦隊を横須賀艦隊と七丈島艦隊で撃沈している。

実際はほとんど横須賀艦隊の二隻が片づけてしまったのだが、一応旗艦の戦艦夕級一隻を沈めたことで神通と夕張が気を利かせて『協力して撃沈』という報告をしてくれたのだろう。

これにより、今までその存在の必要性を疑問視されていた七丈島鎮守府はようやくその目的である『臨時戦力の保存』の有用性を示すことに成功し、七丈島鎮守府についての見方は変わりつつあった。

半年前の定例会はその事後報告と改めて七丈島鎮守府の存在意義について議論し直すために提督から直接説明をするよう求めたものであった。

定例会ではその実績を高く評価され、議論ではそのほとんどが七丈島鎮守府の今後の展望や運営への援助など、存続を前提とした意見が多く挙げられ、七丈島鎮守府存続反対派は目に見えて弱体化していた。

七丈島鎮守府という存在はこの定例会をもって他の鎮守府、泊地の提督達から一定の支持を得たと言える。

「犬見中将は定例会でも終始反対意見を主張し続けていましたよ」

「提督の意見は間違っていないと思うでち。私もこの七丈島鎮守府は危険だと思ってるでち」

「まあ、彼の意見を真つ向から否定することはできませんでした」

定例会の議論時、犬見中将の七丈島鎮守府存続についての反対意見の支柱は七丈島鎮守府に所属する罪艦達の危険性であった。

罪艦がもたらすであろう味方への被害とそれによる作戦成功率の低下、不安要素の混入による艦隊士気の低下などを挙げ、メリットに対してデメリットが大きすぎることを主張した。

そして何より、罪艦の信頼性の低さを強調した。

「二度仲間に手をかけた奴を戦力として信頼しろなんて言う方が無理な話でち」

「……確かに、罪を犯したのはどうしようもない事実。信頼できないというのもよくわかります。でも、だからこそ、これから彼女達ももう一度信頼を勝ち取るためにこの鎮守府が必要なんです」

「まるで平行線でちね。罪人は信頼できないと言えば、信頼はこれから勝ち取っていくだなんて」

伊58は呆れたように呟くと先刻返してもらったコンバットナイフを再び提督の方に向ける。

「悪いけれど、提督の命令通りお前はなんとしてでも殺すでち。七丈島鎮守府は存続させてはならないんでち」

「……三日ください」
「でちっ」

「三日間、この鎮守府で過ごして、それでもまだここが危険だと言うのなら仕方ありません、大人しく殺されましょう。しかし、もし考え

が変わったのならば、そのナイフを収めて犬見中将の元へ帰ってその旨を報告していただきたい」

「そんな提案に乗るとでも思ってるでちか?」

「この提案をのんでくれないのならば仕方ないので今からあなたをフルボッコにします」

「うぐ……」

既に伊58に選択の自由はなかった。

今、目の前にいる標的は実力的に格上。真正面から向かい合っしかも周りを書類の山で囲まれ、動きも制限されるこの状況ではどう見積もっても拘束されておしまいだ。

今伊58が提督を暗殺するために必要な条件はまず、この部屋から出て仕切り直すことだ。ならば、伊58は提督の提案を承諾する以外に選択肢はなかった。

だが、選択肢はなくともやりようはある。伊58の中にこの提案を利用した妙案が浮かんでいた。

「三日間でちな?」

「ええ、三日間です。それで駄目なら私の命は差し上げます」

「そんな口約束は信用できないでちな」

「私は絶対に約束を違えません」

「じゃあ、これを飲むでち」

「これは?」

伊58が提督に渡した瓶にはコップ一杯分程度の無色透明な液体が入っていた。

「毒でち。摂取しても体に異常は起こらず、五日後に突然心臓麻痺を引き起こす新型の毒薬でち。そして、その解毒薬は私だけが持っているでち」

「成程、そういうことですか」

「三日後に私の考えが変われば解毒剤をやるでち。変わらなければ前はそのまま死ぬでち。約束を違える気がないのなら、勿論飲むでちな?」

「ええ、当然です」

伊58の挑発的な笑みに、提督は穏やかに笑い返すと、何の躊躇もなく小瓶を開け、その中身を一気に飲み干した。

「これで、よろしいですか？」

「わからないでちな。なんで、そこまでする必要があるでち？ 私なんてさつさと捕まえて沈めるなりなんなりすればいいでち」

「それじゃ、駄目なんです。また同じことの繰り返しになるだけで、永遠に分かり合うことなんてできない。だから、私達から歩み寄る必要があるんです。あなた達にもこの鎮守府を認めてもらうために。それは、私の命を賭ける価値のあることです」

「……馬鹿でちな、お前。まあ、三日間で考えが変わるなんてありえないでちが、付き合ってやるでちよ」

そう言って伊58は執務室から出て行った。

「頼みましたよ、皆さん……！」

こうして大和達の知らぬ間に、提督の命は彼女達に託されたのであった。

第四十六話 「人間と艦娘は違うって知っているからでちよ」

「僕は、艦娘は兵器である、そう強く主張する」

私がまだ、七丈島鎮守府の提督になる以前。士官学校に通っていた頃。

心から怖いと思った人がいた。

「——やあ、主席殿」

「主席殿はやめてくださいよ、犬見君。大変でしたね、先刻のディベートは」

少年の名は犬見誠一郎。

180cmを超える長身の優男。同期の中でも抜きん出て優秀な士官候補生の一人だ。

今は座学の成績の僅かな差で私が主席、彼が次席となっているが、いつその上下がひっくり返ってもおかしくない程度には肉薄している。

「何も大変なことはない。ただのディベートだ。これまで何度もやってきただろう？」

「私があなたの立場なら講義終了の予鈴を待たずにギブアップしてしまいましたよ」

私達が今何を話しているかと言うと、先刻の講義で行った『艦娘が人か、兵器か』というディベートについてだ。

ディベート参加人数は男女合わせて40名程度。その内私を含めた39人が、艦娘は人であると主張する中で、犬見誠一郎ただ1人だけは最後まで艦娘は兵器であるという主張を続け、たった1人で講義時間いっぱいまで39人の意見を論破し続けるという孤軍奮闘の大立ち回りをこなしたのだ。

「いや、主席殿ならもっとうまくやったさ。むしろ主席殿が僕の方に来てくれれば向こうを確実に打ち負かしていただろう」

「いやいや、ありえないですって」

「そうかな？」

犬見はそう言って涼しげに笑う。

まったく冗談を言っているように聞こえないのが彼の怖い所だ。

艦娘が人が兵器か。これを議論するには学生には荷が重いと私は思っている。大半の学生は、艦娘は人であると答えるからだ。

理由は二つある。

まず一つ目に、士官学校に通う生徒の年齢はおおよそ15から18歳。ある程度、人間関係というものを円滑に進める上で周りの目に過敏になる年頃。他己評価の重要性に気づき、『悪目立ち』を怯える年頃とも言える。

そんな学生達に艦娘が人が兵器かと問えば、例え兵器だと思つていたとしても、道徳や倫理観でほとんどは人と答える。兵器などと答えば、例え授業だとしても周りから非人道的で残酷な人間だという評価を下されかねないからだ。

二つ目に、そもそも艦娘は兵器と思つていても表立つて主張できる者は中々いない。

元人間だったものをいまだ艦娘一人指揮したこともない学生の自分達がはつきりと兵器呼ばわりするには、あまりにも覚悟が足りないのだ。

故に、私は学生にこの論題を投げかけることに意味はないと思つていた。

他者の目など気にすることなく、終始艦娘は兵器だ、という自分の考えを臆面なく主張し続けた犬見誠一郎という少年の姿を目にするまでは。

「よく、あれだけの敵に囲まれて艦娘が兵器と主張できましたね」

「ただ自分の主張を示しただけだ、大げさだよ。自分の意見を言うだけのことに敵の数も内容も関係はない筈だ」

しかし、それがわかっていてもできないのが普通の人間なのだ。

事実、先刻のデイベートでも人間派の中に終始顔を俯けてほとんど発言をしない生徒が数人いた。彼らは自分の主張を曲げた故に自分

の意見がなかったのだろう。

だが、これは褒められるべきことではないが至って普通のことだ。つまりは臆面なく艦娘を兵器と主張する犬見誠一郎の方が非凡なのだ。

「犬見君は凄いですよ。私は艦娘が兵器とは、思っていたとしても言えませんが」

「凄いことなんて何も無いさ。僕はただ、自己中心的なだけだ。自分以外はどうでもいいんだよ。だから、艦娘が兵器だと公言することに抵抗なんてないし、むしろだからこそ艦娘が人だなんて言えないんだ」

「どういう意味ですか？」

犬見は私に僅かに笑ってみせると窓の外から見える青い海を見つめながら口を開いた。

「主席殿には折角だから話しておこうか。僕の提督像というものを」「どうしたんですか、いきなり……？」

突然話題が変わったことへの私の困惑も無視して、犬見は勝手に話を始めた。

「僕はね、『道具』だけでいいんだ。僕の周りにあるものは僕の扱うままに動く道具だけいい。そう心から思っている。わかるかな？」

「は、はあ……？」

「ああ、できればそれは優秀な方がいいな。ナイフはよく切れた方がいいし、銃はよく当たる方がいいからね」

「………すみません、話が見えてこないのですが？」

「つまりね、艦娘に人のように振る舞われるのは僕の提督像とは違うんだ。艦娘は僕の命令通りに動作するだけの道具でいいのだから」

「それは……！」

彼は艦娘を兵器として管理することが深海棲艦に勝利する最良の道だとデイベートで繰り返して発言していた。

つまり、彼にとって艦娘に対する人道的措置は無駄であり、不要なのである。

彼にとって艦娘とは深海棲艦に向けるナイフや銃であり、そのナイ

フや銃が勝手に動かれるのは困る。そうあたかも当然のような顔をして言っているのだ。

「傲慢で自分勝手だと思うかい？ 返す言葉もなくその通りだよ、僕は自己中心的だからね」

「犬見君、本気で言っているんですか……？」

「主席殿には敬意を払って、正直に言おう。僕は、自分の道具にならないゴミは一切合切消えてしまえばいいと、本気で思っている」

犬見のその言葉に私は何も言えなくなった。

正確には何かを言おうと口だけが開いたまま、声が出なかった。人は、あまりに驚いた時、逆に声が出なくなるものなのだとその時初めて知った。

自己中心などという次元ではない。世界に存在するのは自分だけで、他は全て道具かゴミ。

自己唯一的。まるで神様か何かのような思考回路だ。

「主席殿のその顔を見る限り、やはり僕は人間としてどこかおかしいのだろうね。まあ、僕にはどうでもいいことだが」

「……………」

心から怖いと思った人がいた。

敵意も、悪意も感じない。何をされた訳でもない。

それ故に、私は彼が恐ろしかった。

☆

「——それでだな、提督が奇襲に慌てて布団から起き上がってきたところにワイヤートラップが——」

「……………」

「ちよつと待ちなさい、天龍。そうするくらいだったらいっそ爆弾とか——」

「……………」

「いや普通に改心したふりしてからの騙し討ちが一番だよお、提督だもん。きつところつと騙されちゃうはずだよお」

「はい、冷たい麦茶どうぞ」

「ありがとうでち……」

大和から氷の入った麦茶を受け取り、コップを傾ける。

ああ、冷たくておいしい。

「——って、そうじゃないでちッ！」

「うおっ!? どうした急に!？」

「何だって言うのよ?。」

「びっくりしたあ」

「びっくりはこっちのセリフでちよ!?! 何でお前らこぞって提督の暗殺に加担しようとしてるんでちか!?!」

私が提督と密約を交わして再び食堂に戻ると、何故かやたらハイテンションの天龍達につかまり、このぎまである。

何故私の提督暗殺計画がバレたのか。そこは今置いておこう。

一番わからないのは、何故こいつらまで一緒になつて提督の暗殺計画を練っているのだ。しかもなんで私よりノリノリなのだ。

お前達それでも七丈島艦隊の艦娘か。

「いやあ、面白そうだなって」

「暇だしね」

「提督ならわかつてくれるよお」

「お前ら、さつきから向かいで矢矧がヤバい殺気出してるの、気付いてないんでちか!?!」

書類で顔を隠すようにしているのでその素顔は定かではないが、おそらく鬼の形相に違いない。

それでなくとも矢矧が左手に持つ麦茶の入ったコップが徐々にひび割れ、中の氷が凄い勢いで溶けていくのを見れば、彼女の怒りの度合いは想像に難くない。

「……後で絶対シメる」

「なんか言ってるでちよ!?!」

私の不安をよそに天龍達に反省の色は見られない。

いや、そもそも何故私はこいつらの心配などしているのだ。暑さで少し頭がやられたか。

「もう、お前ら訳わかんないでち! 普通、私が提督を暗殺しようとしてるってわかったら私を捕まえて、怒ったりするもんじやないんでち

か!?!」

「なんだ、捕まえて怒ってほしいのか？」

「そ、それは……」

「ついでに拷問されたいの？」

「さらに調教されたいってこと!?!」

「そこまでは言っていないでち！」

天龍が私を見て吹き出すように息を吐くと、笑いながら言った。

「別に俺達はお前とただ仲良くしたいだけだぜ？」

「私は敵でちよ？」

「敵だったら、仲良くしちゃいけないのか？」

「……………」

私はここの鎮守府を潰しにきた。

そのために提督を暗殺しに来た。

私は、お前達の敵だ。

それなのに、誰も私に憎悪を向けてこない。それどころか私と仲良くなりたいたいとまで言う。

何故だ。そんなことをしても私達は敵同士。裏切られることなんて目に見えているのに。

裏切り——

『へー、あなた艦娘なのね！ 私と友達になろうよ！』

『伊58、いつも私達を守ってくれてありがとう！』

『これからも、ずっと私達を守ってね、約束だよ！』

『私達、ずっと友達だよ！』

違う。

『なんで、なんでもっと早く来てくれなかったの!? お父さんとお母さんが……私達を守ってくれるって約束したのに……!』

違う。

『艦娘は深海棲艦から人間を守るための兵器でしょ!? だったらなんでお父さんとお母さんを守ってくれなかったのよ! この役立たず!』

違う。

『お前のせいでお父さんとお母さんが死んだんだ！ お前が、お前が殺したんだ！』

違う。

『お前なんか、友達じゃない！』

違う！

「——おい！ おい、どうした？ 大丈夫か？ なんか苦しそうだぞ？」

「——っ！ 触るなッ！」

「うおっ！」

嫌なことを思い出した。

いつの間にか私の額を汗が滴り、呼吸は乱れて。その足は床にへたりこんでいた。

大丈夫だ。今の私はあの時のようにもう弱くない。提督に出会って、私は変わったんじゃないか。

『道具でありなさい、伊58。そうすれば、こんな下らないことで傷つかずに済むから』

「……………はい、提督」

「お、おい、本当に大丈夫か？ 少し休むか？」

「顔真つ青よ、あんた」

「今薬とか色々持つてきますね！」

「大丈夫？ 結婚する？」

「プリンツはちよつと黙ってる！」

呼吸は未だ荒いが、我に返った私は周囲を見渡す。

私の顔を心配そうな顔をした七丈島艦隊の面々が覗き込んでいる。

大和は薬を取りに食堂から走って出て行ってしまった。

「……………もう、大丈夫でち」

「お、おい、あんまずぐに立ち上がらない方が」

「本当に大丈夫でち。少し、部屋で休んでくるでち」

私は天龍達の制止を振り払い、部屋へと戻ると、隠していた通信機を取り出して提督へ連絡をとった。

『私だ』

「伊58でち。経過報告でち」

『経過報告、か』

通信機のスピーカーから提督の溜息が聞こえた。

『私は、作戦完了の報告を期待していたのだけれどね』

「も、申し訳ありませんでち。しかし、既に暗殺は終わったも同然。後は遺体を確認するだけでち」

『そうか。まあ、いいだろう。引き続き作戦を続けてくれ』

「あ、あの、提督！」

『なんだい？』

「提督は、私を裏切らないでちか？」

『……君が私の命令通りに動くうちは、私には君が必要だ』

「——っ！ はい！ 全力で提督の期待に応えるでち！」

『期待している』

そこで通信は切れた。

しかし、私の胸の内は安堵と高揚感に満ちていた。

そうだ、私は必要なんだ。提督は、私を裏切らない。

提督だけが、私を——

「——伊58いるか？」

『……この声は』

すぐに通信機を隠し、ドアを開けるとそこには声の主である磯風と、その隣に美海が並んで立っていた。

「なんの用でち」

「いや、ちよつと話でもしようかと思つてな」

「別に私はお前らに話すことなんてないでち」

「まあ、そう言うな」

「おい、コラ、勝手にあがってくんなでち！」

磯風と美海は私の返答も聞かずにずかずかと意味深な言葉を残して部屋の中に入って畳の上座る。

口火を切ったのは美海だった。

「伊58さん、もうやめようよ、暗殺なんて」

『……………』

「きつと何か事情があるんだよね？ 天龍さん達も味方してくれると思うし、提督さんだつて事情を話せばきつと——」
「断るでち」

私ははつきりと美海の言葉を切り捨てた。

美海は一瞬泣きそうな顔をするが、すぐにどこか覚悟を決めた引き締まった表情に戻るともう一度口を開く。

「わ、私は諦めないよ！」

「……そもそも、別にお前はここの鎮守府の関係者でもない一般市民でちよな？ なんでそこまでこの鎮守府の奴らを庇うんでちか？」

「関係者だよ！ 私は磯風ちゃんの友達で、大和さん達にもお世話になってるから！ そんな大切な人達の助けになりたいと思うのは当然でしょ!？」

その美海の言葉は私の中でスイッチを入れるには十分なセリフだった。

「ああ、成程。この鎮守府がなくなるとお前はこいつらに深海棲艦から守ってもらえなくなるでちな。確かにそれは困るでちな」

「え!?! 違うよ！ そういう意味じゃ——」

「折角、お友達という言葉を使って自分を守ってくれる道具を手に入れたのに、私のせいで今までの努力が無駄になっちゃうのはそりや嫌でちなあ?！」

「何、言ってるの……?！」

美海の顔が徐々に強張ってその眼尻に涙が浮かんでいる。

声のトーンが低くなり、その言葉は怒りに震えていた。しかし、私はやめない。やめるつもりがなかった。

「どうせ、利用するために友達になったクチでちな？ でなきや、人間が艦娘^{兵器}と友達になんてなる筈ないでち」

「違うよッー！」

まるで空気が震えるかのような。そんな雷のような怒号だった。

「違う……私は、そんな下らない理由で磯風ちゃんと友達になつたんじゃない……! なんて、そんな酷いこと言うの……?！」

大粒の涙を流しながら、美海の目は私を軽蔑するように睨みつけて

いた。

そんな感情的に熱くなっている美海とは対照的に、私は冷めた言葉を返してやる。

「人間と艦娘は違うって知っているからでちよ」

その身をもって、痛いほどに。

「それでも、私は磯風ちゃんと友達だもんっ！」

その言葉と同時に、美海は涙を拭いながら部屋を走って出て行った。

部屋の中には私と磯風、そして重苦しい沈黙が残った。

「……言いすぎだな」

「間違ったことは言っていないでち」

「言いすぎは言いすぎだ」

部屋に入ってから一切口を開かずに私と美海の言い合いを見ていた磯風はそう諭すように言った。

「少し、昔話をしよう」

「は？ 急になんでちか？」

「いいから聞け。お前にも無関係な話じゃない」

「どういう意味でち？」

磯風は私の質問に答えを返さぬまま、視線を下に向け、遠くを見つめるように語り始めた。

「今からもう5年くらい前になる。私がここに来る以前に居た鎮守府の話だ。その提督は犬見誠一郎という男だった」

「お前……」

犬見誠一郎。提督の名前が磯風の口から出てきたことに私は驚きを禁じ得なかった。

磯風が私にも無関係ではないと言ったのはこういう訳だったのだ。

しかし、次の磯風から発された言葉が私にさらなる衝撃を与えた。

「そこで私は、親友を二人、この手で殺している」

第四十七話 「陽炎型駆逐艦12番艦、磯風だ」

私の世界は、地獄だった。

いわゆる戦争孤児という奴だ。深海棲艦との戦争中であるこの国ではそれほど珍しい存在ではない。

両親の顔も、自分の名前も知らない。

そんな何も持っていない私は物心ついた頃から他の孤児達と共に孤児院で生活を送っていた。

「この穀潰し共！ いつまで寝てんだいッ！ さっさと朝の掃除と朝食の準備を始めな！」

孤児院の朝は大抵、寮母の怒鳴り声と暴力から始まる。この孤児院では寮母は絶対であり、三十名程いる私達孤児は一人残らず彼女の奴隷だ。

一日中、ことあるごとに理不尽な罵声と暴力を受けながら奴隷のように働かされ、ようやくその日の衣食住を手に入れることができる。

孤児院での日常は幼い私にとっては命懸けだった。

「何やってんだい！ 遅いんだよこの愚図！」

「ぐっ！ めんなさい、寮母さん……」

私は寮母によく殴られていた。昔から体が弱く、体力もない私はすぐ疲労困憊からミスをしてばかりだったからだ。

今日も掃除の手際が悪いことを理由に寮母に目を付けられ、いつ終わるともしれない折檻を受けていた。

痛いのは嫌だった。

でも、反抗することもできなかった。

寮母に逆らえば孤児院から追い出されるかもしれないし、その頃の私は『殴られることは当然で、それは私が愚図だから』そんな寮母の言葉をそのまま鵜呑みにして信じていたのだ。

仕方のないことだと、私が悪いのだと諦めていた。

しかし、私の心は決して折れてはいなかった。

この地獄の中で、私は独りではなかったから。

「おおっと、寮母さん、ちよいと横を通りますようつと！」

「ちよ、あんた！ 生ゴミの袋は臭いがつくから私の近くに持つてくるんじゃないよ！」

「寮母さん、郵便配達の人から手紙が届いとったけえ、寮母さんの部屋の机の上に置いてくくな？」

「ちよいとお待ち！ 私の部屋に勝手に入るんじゃないよ！」

「寮母さん、朝食の準備が終わりました。次は何をすればいいでしょうか？」

「ああ、もうっ！ お前達！ やかましいからいつぺんに来るんじゃないよ！ 全く、煩わしいったらないよ！」

突如立て続けに現れた三人の少女達に寮母は苛立たし気に鼻をならすと、少女の一人が持つてきた手紙をふんだくって、興が削がれたのか私を殴るのをやめて自分の部屋へと戻っていった。

寮母がいなくなったのを確認すると、すぐさま、私の周りに三人の少女達が集まってきた。

「大丈夫かい？ 全く、あの人の暴力も度が過ぎていけないね。嫌んなるよ、全く！」

「ああ、もう、こんなに痣だらけになって……ごめんな、ウチらがもつと早く助けに来てればこんなに痛い思いさせずに済んだんじゃないが……」

「私、絆創膏とか消毒液とか探してきます！」

「いや、これくらいなんともないさ。いつものことだしな。三人とも、助かったよ。ありがとう」

おかつぱの下町言葉の少女、水色の髪をした広島弁の少女、銀髪で右目を隠している丁寧語の少女。

私達には名前というものがないので、その外見的特徴からとってそれぞれ『おかつぱ』、『水色』、『銀髪』などと適当に呼んでいた。ちなみに私は『もやし』らしい。

彼女達は私と孤児院に入った時期が近かったことから同じ仕事を分担させられることが多く、自然と話す機会が増えて仲良くなった同じ孤児達だ。

互いに助け合い、痛みも苦しみも分かち合って、強い絆で結ばれた、家族とも言えるような存在。

この凍えてしまいそうな暗い世界の中で私に与えられた唯一の温かな光だった。

彼女達がいたから、私の心は折れずに踏ん張ることができたのだ。きっといつか四人でこの地獄のような孤児院から出て行ってやる。そんな希望を抱きながら孤児院での生活が数年続いたある日、転機はやってきた。

「——いいかい、お前達！ 今日はお前らのようなゴミを引き取ってくださると言う慈悲深い軍人様がいらっしやる！ 朝食が終わったら全員すぐに風呂に入ってるべく綺麗な服に着替えるんだ！ そうして、お行儀よく軍人様にご挨拶するんだよ!? わかったね!？」

ある日、偶然目の前を横切った孤児の一人を邪魔だと蹴り飛ばしながら寮母は私達にそう言うと、上機嫌で歩き去っていった。

その日の朝食はやけに豪華だったし、風呂だっていつもは一週間に一度入らせてもらえるかどうかだ。しかも、風呂から上がると、いつもの埃まみれのボロキレのような服ではない、新品らしき私服が全員分用意されていた。

ここまでやるのは、年に一度国の調査員が孤児院の視察にやって来る日だけだ。

ただごとではないことは私達にも理解できた。

「ねえ、軍人って兵隊さんのことだろ？　なんでそんな人が私達なんて欲しがるんだろ？」

おかつぱが着慣れないワンピースに苦戦しながら隣の私に話しかける。

そこに、風呂からあがってきた水色と銀髪も会話に入ってくる。

「そうじゃのお、確かにウチらみたいなんも取り柄のない孤児を欲しいなんて信じられん話じゃ」

「わからないですけど、考えられるのは労働力のためとか養子縁組とかでしょうか？　寮母さんの機嫌が良かったので私達を買う目的でやってくるのは間違いないと思いますけど……」

「もしかしたらウチらの体目当て、とかかもなあ?」

「ひゃ!? わ、私の胸に何するんですか!? やめてください!」

「お、おい、お前達、あんまり騒ぐと寮母さんに怒られるぞ」

普段よりテンション高くじゃれあう銀髪と水色を制止しながらも、実際私の胸の内も抑えきれぬ期待に満ちていた。

もしかしたら、この孤児院を出ていくことができるかもしれない。誰もがそんな希望を抱いていたのだ。

「——まあまあ、わざわざ遠い所からようこそおいでくださいました、軍人様」

「き、来たみたい、だよ?」

「な、なんか緊張するのう……」

「私も、です」

玄関先から聞こえてくる声に三人同様、私の体も緊張で強張っているのがわかる。

寮母の上ずった笑い声と革靴が床を叩く音が私達のいる食堂へと近づいてくる。

そして扉が開き、いつもとは正反対に貼りつけたような笑顔を浮かべる寮母と共にその男は私達の前にその姿を現した。

「さあ、こちらがウチの子供達でございます」

「三十人程、と言ったところか。随分と多いですね。孤児院の運営はさぞかし大変でしょう」

「ええ、それはもう。しかし、戦争で親を失ったこの子供達を放っておくことなど私にはとてもできませんので、それはもう身を粉にして——」

寮母がうんざりするような三文芝居をしている間、私の目はその男に釘づけだった。

いつも熊のように巨大に見える寮母をさらに超える長身に、人のよさそうな顔つき。

来ている仕立ての良い服も、育ちの良さが見て取れる気品を感じる佇まいも、何もかもが新鮮だった。

「うわあ、えらいイケメンじゃのう、ええなあ、ウチらのこと貰ってく

れんかなあ」

水色がうつとりした表情で男の方を見つめていると、その願いが届いたのか、彼は私達の方に歩み寄って来た。

「わっ、わっー!」

「こんにちは、お嬢さん達。とても可愛いワンピースだ。よく似合っているね」

「え、えへへえ、そうかい？ そいつは、なんていうか、照れるね、あはは」

「あ、ありがとうございます……ごいす……」

おかつぱは笑って照れ隠し、銀髪は恥ずかしさのあまり男の顔を直視できなくなったのか、顔を真っ赤にして俯いてしまった。

私達は普段からあの寮母に散々罵詈雑言を受けて育ってきたため、褒められることに極端に慣れていない。だから、簡単な世辞一つでも私達には効果抜群なのだ。

「間違いないな。君達が、艦娘適正があった子だね」

男は胸ポケットから写真を取り出して私達と写真とを交互に見ては何度も頷いていた。

そして、写真を再び胸ポケットにしまうと困惑気味の私達に笑顔を向けながら説明を始めた。

「私は提督という仕事をしている。今日は君達を艦娘としてスカウトするためにやってきたんだ。君達の名前を教えてくださいかな?」

「名前……私達には……」

返答に困る私達に男は察したように手の平で返答を制して話を再開する。

「そうか、ならばこれからは艦娘としての名前を名乗るといい」

「艦娘?」

「そう、この国を守るために戦う海の女神だ。君達は、それに選ばれたんだ」

「私達が……」

「この世界を救うため、私と一緒に来てくれるね?」

誰も、艦娘になるということについて深く理解はしていなかったと

思う。

しかし、私達は彼の差し出した右手を取る以外の選択肢はなかった。

目の前に現れた四人一緒に孤児院の生活から抜け出すチャンスを、みすみす逃すことは私達にはとても考えられなかった。

「よろしく、私の名前は犬見誠一郎だ」

これが、犬見誠一郎との、私の全てを奪った男との、初めての邂逅であった。

どこで間違えたか、どうすれば良かったのか。思い返せばやり直したい分岐点はいくつもある。だが、きつとここが原点だ。

もしもこの時、この男の誘いを断っていれば、孤児院に残っていたれば、終わらぬ地獄の中でも一番大切な物だけはきつと守り抜けた。そう確信できる。

だが、いくらもしもの話をしたところで、当時の私にそんなことが想像できるはずもないし、孤児院に残る選択もありえなかった。

故に、私が全てを失うことはこの時から必然だったのだろう。

☆

「――提督、艤装接続完了しました」

「入れ」

扉の向こうから提督の声が返って来たのを確認して私達は執務室の扉を開け、彼の目の前に横一列で並び、習った通り、敬礼をする。

そして、私達は生まれて初めて与えられた『名前』を名乗る。

「陽炎型駆逐艦12番艦、磯風だ」

と、私。

「同じく14番艦、谷風！ よろしく頼むね！」

と、おかつぱ。

「同じく11番艦、浦風じゃ！ 提督さんのために背一杯頑張るけえのうー！」

と、水色

「同じく13番艦、浜風です！ 以上四名、只今着任致しました！」
と、銀髪。

私達は工廠での数時間に渡る精密検査と艤装接続試験を経て、行き場も名前もない孤児から、晴れて艦娘となった。

「ご苦労。気分はどうだい？」

「不思議な感覚です。外見は何も変わっていないのに、体の奥底から力が湧いてくるというか」

「今だったら孤児院の掃除も一人で終わらせられるかもしれないねえ！」

「元氣いっぱいじゃー！」

「そうか、それは何よりだ」

孤児院からは私達四人の他、数人の少女が引き取られ、私達と同じくこの鎮守府に着任したと聞いた。

引き取られた全員が少女だったのは、なんでも女性でなければ艦娘になれないかららしい。

「さて、君達にはこれから正式に私の艦娘として、国のために戦ってもらうことになる」

その提督の言葉に、艦娘となって浮かれ気味だった私達は再び背筋を伸ばす。

少し前まで名前もなかった孤児の私達が今や国のために戦う艦娘。世界ががらりと変わり、そのスケールの壮大きに今まで頭が付いてきていなかった。

しかし、こうして艦娘となって提督の口から改めて自分たちの役割を口に出されると、国を背負って戦うという重圧に私達の足は既に震え始めていた。

「まあ、しかし、君達は艦娘の使命とか余計な事を気にすることは一切ない」

「え？」

私の口から思わず声が出た。

「君達が厳守すべきはただ一つ、私の命令、それだけだ」

「提督の命令……」

「私の与えた命令通り動け、それだけでいい。シンプルで簡単だろう？」

確かに、国を守るためになどと考えるよりかはよっぽど単純でわかりやすい。

私達は提督の言葉にゆつくりと頷いた。

「ああ、心配しなくてもいい。私も無理な要求はしないし、命令にさえ従ってくれば結果が伴わずとも良い。私の命令通りに動く。それだけを心掛けてくれ。これはこの鎮守府に所属する艦娘全員がやっていることだ。君達も数日もすれば慣れるだろう」

「は、はい」

「まあ、それなら楽そうだし、別にいいかな？」

「ウチは提督さんの言うことならなんでも従うけえね！」

「聞き分けがよくて助かる。よろしく頼むよ」

提督の命令通りに。それだけでいい。

聞いた限りでは難しいことには聞こえなかった。孤児院の寮母の滅茶苦茶な命令に比べれば遥かに易しい。

——だが、果たしてそれでいいのか。

それが私の性格由来のものだったのか、あるいは艦娘となったことで私の内に引き継がれた艦船の魂が発したものだっのかはわからない。

私の中に一瞬、そんな疑問が芽生えた。

「——磯風？」

「——っ!? はっ、はい、了解した」

私の一瞬の疑念を見透かすかのようなタイミングで、笑顔の提督が私の肩に手を載せて顔を覗き込んでいた。

まるで氷の塊を背中に入れられたような怖気が走り、思わず声がうわずる。

「よろしい。磯風もよろしく頼むよ」

「はい……」

提督の命令通りに動くこと。

それが、私が艦娘として提督に与えられた最初の命令だった。

第四十八話 「だから、料理をやろうと思っただ」

「うへえー、やっと東京急行終わったあー！ 疲れたあー！ 腹減ったあー！」

鎮守府の食堂にそう叫びながら飛び込んできたのは遠征部隊に配属された谷風だ。

「お帰り、谷風。晩御飯できているぞ」

「え!? まさか、磯風の作ったやつじゃないよね？」

「なんだ、私が作った料理は嫌か？」

「誰のせいであるの時二日間も昏睡状態に陥ったと思ってるのさ!? なんか、記憶もおぼつかないしー！」

「大丈夫よ、磯風ちゃんには配膳してもらっているだけだから。それは私が作った晩御飯よ」

以前に一度、私の料理の被害に遭っている谷風は、厨房から夕飯のカレーを配膳してきた私を見て露骨に警戒模様を示す。

私達が口論を始めると、その様子を聞きつけたのか厨房から間宮さんが出てきて仲裁に入る。

間宮さんの言葉を聞いて谷風は心底安心したように胸をなで下ろしている。失礼な。

「全く、私だってもう半年も修行すれば……」

「まあまあ、磯風ちゃん、調理技術自体は凄い速度でちゃんと上達しているんだし、美味しい料理もきつと作れるようになるはずよ」

「ほら見ろ、谷風。私が凄腕料理人になってもお前にだけは絶対に料理は振る舞ってやらんからな」

「おう、別にいいよ」

「少しは食い下がってこいー！」

「まあまあ」

私達がこの鎮守府に着任してから、早一年が過ぎようとしていた。

☆

「———そういえば、浜風と浦風は？」

「浦風はまだ作戦海域から帰ってきてないよ。浜風も司令部の仕事が山積みみたいだからもつと遅くなるって」

「そう、か」

私達四人は、鎮守府に入ってからそれぞれが別の部隊に配属されていた。

谷風は遠征部隊。提督から指示された遠征任務を行い、資材と資源の調達、あるいは作戦海域の戦力偵察なども任されるサポート部隊だ。

浦風は攻略部隊。提督の作戦展開に従い指定海域へ出撃し、海域を攻略する実働隊だ。艦娘を海の女神と言わしめる鎮守府の華である。

浜風は司令部。艦娘はほとんど配属されない特殊な機関だ。主に提督を中心に作戦を立て、作戦時は提督不在時に代理で指揮を行う。また、その他の遠征指示、開発計画なども提督に代わって伝達、指揮を行い、通信状態が悪い時には艦娘として現場へ単独出撃することまでであると聞く。

提督の補助役かつブレインなど様々な場面で活躍し、万能を求められる部署だ。

ちなみにこの鎮守府では艦娘は提督の命令には絶対というルールがあるが、この司令部に所属する艦娘には特例として意見具申が許可されている。

そして、私は演習部隊。日々、他の鎮守府の艦隊との演習を行う部隊だ。

危険が少なく、午前と午後の部で数える程しか戦闘がないためこの鎮守府の中では働かない楽な部隊だ。今、こうして私が間宮さんを手伝っているのも演習のノルマが早々に終わり、手持ち無沙汰となって落ち着かなかったからに他ならない。

恐らく私の体力不足を見抜いての配属なのだろう。

「私ばかり楽しんでいるようで本当に申し訳なくなる」

「なーに言ってるんだい！ 演習部隊といやあ、あの外交戦略部隊だろ？ メンバーの入れ替わりが激しいわ、新装備を実験配備されるわ、艦娘になったばかりの新人を投入するわ、良し悪しの分からない新し

い艦隊戦術を試すわ……で、そのくせ勝率にこだわるなんて無茶ぶりが平然と行われる心労の絶えない鬼畜部隊って聞くよ！ 十分に大変じゃないか」

「そんな風に言われているのか、ウチの部隊は……」

確かに、演習部隊は唯一、他の鎮守府の艦娘との交流があり、他の鎮守府との合同作戦や支援などを視野に入れて良好な友軍関係を築くためにも、まず結果を出すことを第一に求められる。

何故なら、相手は自分より弱い鎮守府とは友軍関係を築くのはメリットが薄いと考えるためだ。だから、こちらにもそれ相応の戦力があり、友軍関係となることでメリットがあることを演習で示さねばならない。

目標は勝利S。それでなくとも最低でも戦術的勝利。万が一敗北する場合は相手の艦隊にもそれ相応の被害を与え、『接戦』とするのは必須だ。

演習で使う装備では轟沈しない分、こちらの戦闘では時に狂気じみた無茶もできるので、時には攻略部隊の戦闘以上に死に物狂いの泥沼試合にもなったりする。

演習部隊が裏で外交戦略部隊とも囁かれるのはこういった役割を担っているところにある。

また、それ以外にも実験段階の装備や戦術の試行、戦闘未経験艦娘の配備など戦闘時に何かしらの不安要素を抱えているのは日常茶飯事、加えて勝利への重圧で一切気は休まらない。

さらに、相手の艦隊情報や個人の成績によっても演習部隊はメンバーの入れ替わりが激しい。私の知る限りでは最速で8時間で演習部隊から遠征部隊へ異動となった者もいるくらいだ。

確かにこれらのことを考えると、意外と勤務時間が短いだけで楽ではないのかもしれない。

「提督はさあ、命令通りに動けば結果は伴わずとも良いって言うけれどさ。演習部隊に対してだけは絶対に例外だよ、あれ」

「まあ、だが今まで提督の命令通り動いて敗北したことはないぞ。苦戦する時は大抵誰かしらが提督の命令を破った時だ」

「そこは流石提督ってやつだね」

「……なあ、谷風。私達、こんなふうに四人で話すこと、最近少なくなってるないか？」

「そうだねえ。四人とも相部屋だけど、帰ってくる時間もバラバラだし、そもそも部屋入ったら疲れてすぐに布団直行だからねえ」

「最近じゃ浜風は部屋にも戻ってこないな」

「忙しいのさ。司令部は本当に優秀な奴しかできない仕事だから少数精鋭になっちゃまって、結果一日中働き詰めだからねえ。司令室で泊まり込みなんてしよつちゆうさ」

もう一か月くらいになる。私達四人は会話どころか顔もほとんど合わせなくなっていた。

今日、谷風と話したのだから随分久しぶりだ。

できれば、昔のように四人で集まって他愛のない話をしたい。だが、そう思うのは、私のわがままなのだろう。

「皆、大変なんだな……」

「浜風は頭脳で、浦風は戦闘でエリートコースまっしぐらだし、磯風も大概化物だし、かぁーっ！　谷風さんの親友はなんでいつもこいつも優秀なのかねえ!？」

「浜風と浦風は分かるが、私が化物とはどういうことだ？　悪口か？

悪口なのか？」

「違うっての！　あのねえ、ただでさえ入れ替わりの激しい演習部隊でもう配属されてから一年弱ずっと部隊に居続けられる奴なんざ、磯風が初めてなんだよ？　自覚してるかい？　それってつまり、他の部隊も含めてこの鎮守府で一番、艦隊戦で勝率の高い艦娘って意味なんだからね？」

「いやいや、運が良かっただけだろ。私はもやしだぞ？」

「もやし……まあ、そこんところが磯風が攻略部隊に組み込まれない理由なんだろうね」

谷風は私を見て大きくため息をついた。

「ま、攻略部隊みたいに連戦する体力はなくても、単発の艦隊戦じゃ磯風が最強候補っていうのは事実さ。結構有名だよ、演習番長の磯風っ

て」

「そのあだ名はどうなんだ……まあそれはともかく、評価されているというの、少し照れるな。だが、谷風だつて凄じやないか。毎日毎日あんなに遠征を繰り返して。私にはとてもできない……」

あの遠征部隊のいつ終わるとも知れぬ反復作業は精神的にも体力的にもタフでないと続けられないだろう。

見ているこっちか疲れるくらいだ。

谷風が配属された理由がよくわかる。

「あんなの、同じことを延々と繰り返してただけさ」

「だが、おかげで今日も私は演習で勝利できた。私だけじやない。この鎮守府全員を支えているのは、他ならぬ谷風達が頑張つて持つてきてくれる資源だ。感謝している」

「な、なんだよ、急に！ 思わずちよびつと泣きそうになつちまつたじやないか！ べらぼうめえ！」

谷風がそう言つて左腕で目を擦る姿を見て、私は静かに笑つた。

「——ごちそうさん！ 今日も相変わらず最高に美味しかったよ、間宮さん！」

「そう、それはよかつたわ」

「それじゃ、磯風。飯食つて元気も出てきたし、私はこれからまた遠征だから、ちよいと留守にするよ！」

「あ、待つてくれ、谷風！」

「なんだい？」

カレーを完食してハツラツと駆けてゆこうとする谷風を私は呼び止めた。

「今度、いくつつかの鎮守府と合同でやる大きい作戦があるだろう。それが無事終わつたら、一日だけでも休暇を取つて四人で、どこか出かけないか？」

四人で一緒に居たい。一番体力の消耗が少ない自分が疲れているであろう彼女達に言える立場ではないが、私はどうしても四人で会つて話す時間が欲しかった。

谷風は一瞬驚いたような表情を見せると、すぐに満面の笑みを浮か

べた。

「おお！ そいつはいいね！ よっしや、そうと決まればますます張り切って資源ため込んだかないとね！ 腹が減っちゃ戦にや勝てぬって言うしね！」

「ああ！ 浦風と浜風にも見かけたら伝えておく」

「そんじや、決まりだね！」

谷風が手をふりながら走り去っていくのを見送りながら私は内心ガッツポーズをとっていた。

☆

「——休暇を取って四人で、ですか？」

「ああ、忙しいのは百も承知だ。だが、どうにか時間をとれないか、浜風？」

司令室。

司令部の皆への夕飯を間宮さんと一緒に届けに行くついでに、浜風にも休暇の話を持ち掛けた。

浜風はすっかり乱れた髪をさらにグシャグシャにするよう頭を掻きながら、深いクマの刻まれた目を細めてしばらく何かを考えていたかと思うと、急に何枚かの書類を持ってきてそれらを凝視し、不意にニタリと笑った。

極限に疲れている人間の一举一動って凄い、不気味だ。

「や、やっぱり駄目そうか……？」

「……………いえ、いけます！」

「ほ、本当か？ あの、くれぐれも無理はしないで、くれよ？」

「大丈夫、一週間の徹夜で済みます……！」

「おい、それは本当に大丈夫なのか、浜風!？」

くたびれた笑顔でサムズアップをする浜風をとりあえず信じることにして、若干心配になりながらも私は再び食堂に戻り、間宮さんに料理の手ほどきを受けつつ浦風達の帰還を待つことにした。

間宮さんから料理の手ほどきを受け始めたのはこの鎮守府に来て一か月が経った頃からだ。演習が全て終わって何かやることはないかと鎮守府をふらついている時、料理をふるまう間宮さんを見たのが

きっかけだ。

以来、暇を見つけては間宮さんの所にあしげく通いつめ、料理を習っている。

「ふふ、嬉しそうね、磯風ちゃん」

「ああ、四人で集まれるなんて久しぶりだからな！ よし、できた！野菜炒めだ！」

「……本当に包丁捌きや火入れ、調味料の扱いから何もかも上手になったわね。目を見張る成長速度だわ。見た目はともかくとして……」

「いやいや、私なんて先生に比べたらまだまだだ。さあ、食べてみてくれ、先生！」

料理を習っている間宮さんのことは先生と呼ぶことにしている。今作ったのは間宮さんに初めて習った料理だ。

間宮さん曰く、『野菜炒めは全てに通ず』。

野菜炒めには料理に大切なありとあらゆる基本が詰まっているから、それを極めれば他の料理も自然と上手くなる、ということらしい。

「……どうだい？」

「な、なんというか……個性的な料理と味ね……かはっ！」

「先生!？」

私の野菜炒めを食べた間宮さんは顔を真っ青にしてひきつった笑顔を浮かべながら口元を抑えてそう言った。

口を抑える手から血が滴ってきている。

どうやら吐血するほど美味しかったようだな、うん。

「そうか、個性的な味か……少しは料理に自分らしさという奴が出てきたということか。先生のおかげだ」

「い、磯風ちゃんがそう思うのなら、それでいいと思うわ……ぐふっ！」

私も自分で作った野菜炒めを一口食べてみる。なるほど、味付けに塩が少し足りなかったか、それに見た目もまだいまいちだ。

ピーマンとキャベツと玉ねぎと人参を使った筈なのに色が半分以上黒い。間宮さんの野菜炒めに比べたらまだまだだな。

だが、味の方はもしかしたら間宮さんがいつも隠し味として使っているアレがあればよくなるのではないだろうか。

「なんだったか、先生がどの料理にも必ず一つまみ程度ふりかけている、あの塩のような調味料……あれを使ってみたいのだが——」

「駄目よッー！」

「——!？」

唐突に大声をあげる間宮さんに私はびっくりして持っていた箸を床に落としてしまう。

箸が厨房に落ちる音を聞いて、間宮さんは我に返ったように小さく声を洩らす。

「ご、ごめんなさい……私ったら」

「い、いや、こちらこそすまない先生。そうだな、あの調味料を私のような素人が使っても無駄にするだけなものな。私が馬鹿だった」

「本当に、ごめんなさい。でも、あの調味料はどんな料理にも使える分扱いが難しく、もう少し上達したら使ってみましょう?」

「ああ、わかった。あ、箸洗わないとだな」

若干気まずい空気が流れる中、私は野菜炒めの皿を片付け、フライパンや包丁、まな板、食器などを洗い始める。

少し驚いたが、間宮さんがあそこまで止めるということは本当に扱いが難しい調味料なのだろう。逆に言えば、あの調味料を使わせてもらえるようになれば、私は間宮さんに料理の技術を認めてもらえたということになる。

きつといつか、そうなれるようより一層精進せねば。

「磯風ちゃん、なんで私に料理を習おうって思ったの?」

私がそう決意を新たにスポンジを握り締めていると、後ろで食材の在庫確認を行っていた間宮さんが私の横にやってきて洗った食器をふきんで拭きながらそう尋ねてきた。

「んー、そうだな。皆が頑張っているのに私だけ暇なのは罪悪感があったからというのものもあるが……一番は、先生の料理を食べている皆が、とても幸せそうだったからだ」

「……………そうかしら」

「間宮さんはあまり厨房から離れることがないから知らないかもしれないが、食堂以外に居る時の皆は一樣に疲れきって、辛そうな顔をしている。谷風もさつきはあんな感じだったが、遠征の時はあまりの疲労で声も出ないと言っていた。でも、食堂に入ると皆の顔が変わるんだ。先生の料理を食べている時、皆がすごく、楽しそうな、幸せそうな顔をしている。それが、凄いと思った。」

——その姿に、私は憧れた」

「……………」

「だから、料理をやろうと思ったんだ」

何故だろう。隣で私の言葉を聞く間宮さんの顔がどんどん暗くなっていくように見える。気のせいだろうか。

「ごめんなさい……………」

「何故謝るんだ？」

「いえ、なんでもないの。でも、きつと、磯風ちゃんは一flowの料理人になれるわ。私なんかよりも遥かに凄腕の料理人に」

「——？　　そうか、じゃあ、先生の期待に応えるためにも頑張らないとな！」

私が最後の食器を洗い終わり、改めてガッツポーズを決めたその時だった。

「間宮さん！　　うわ、演習番長!?!」

食堂の扉を壊すくらいの勢いで飛び込んできた艦娘は間宮さんと私を見て——私と目が合うとツチノコでも見たかのような反応をされたが——混乱した様子で叫ぶ。

「手を貸してください！　　浦風が！」

「何…………!?!」

この日を境に、私は少しずつ、この鎮守府の真の姿を知ることになるのだ。

第四十九話「私達ってそんなに疲れているように見えるのか……?」

「浦風!」

「う……磯風?」

間宮さんと共に走った先に見えたのはドックで血塗れになって倒れている浦風の姿であった。

「いやあ……ちつと失敗……」

「喋らないで! あなたは至急担架を! 入渠ドックはまだ空いてる!?!」

「準備中です! 第4ドックが後5分で用意できます!」

「じゃあ、そこに直接運び込むわ! 手伝って!」

私の姿を見て力のない笑いを浮かべる浦風の傷の状態を確認して周りの艦娘達に的確に指示を出す間宮さん。

その動きは非常に慣れているように感じた。

「——何事かな?」

「浦風!」

「提督……! 浜風も!」

そこに現れたのは提督と浜風だった。

司令部が受けた連絡を通じてやってきたのだろう。血塗れの浦風の姿を見て提督は目を細め、浜風は息をのんで口を手で覆う。

「……提、督さん、ウチは——」

「誰か、何故こうなったのか説明してもらえるかな?」

「そ、それは……」

提督の表情に変化はない。いささか冷たく見えるが、無表情で淡々としたものだっただけ。

しかし、言葉の節々に僅かな苛立ちが聞いてとれ、攻略部隊の艦娘は質問を投げかけられ答えにくそうにして萎縮してしまっていた。

そこに一人の艦娘が前に出てきて口を開いた。

「う、浦風さんは、大破した私を庇って負傷しました……」

「野分か。それで、敵艦隊は撃滅したのか？」

「い、いえ……旗艦以下重巡1隻と戦艦1隻を残したまま海域を離脱しました……」

野分はつい一か月前くらいに新しく攻略艦隊に加わった駆逐艦だ。今は大破状態であるために艤装はボロボロで全身傷だらけだが、それでもこうして提督に話をする余裕がある分幾分か浦風よりは軽傷に見えた。

野分の説明を聞いて提督は大きくため息をつく、到着した担架に乗せられた浦風の方へ歩み寄った。

「……浦風、何故命令通りに動かなかった」

「命令？」

「いくら、提督さんの命令でも……う、ウチには……あんなことは、できん……」

二人の会話を聞く限りでは浦風が提督の命令通りに動かなかったのが原因のようだが、浦風が自分の意思で命令違反をしたように聞こえる。

「……一度だけは許そう。次はない、いいね？」

「提督、もうこれ以上は」

「わかった、入渠ドックへ行ってくれ」

間宮さん達が浦風を運んでいくと、提督の解散の一言で集まっていた艦娘達も散り散りになっていく。

「提督、どういふことなんだ？ 何が何やら私にはわからないのだが」
浜風と共に去っていかうとする提督を呼び止める。

「仲間を庇って無事帰って来たのだろう？ 何が命令違反なんだ？」

「私は『大破した野分は見捨てろ』と命令したからね」

「な、そんな命令、聞けるはずがないだろう!?! むしろ、野分を守って帰って来た浦風はお手柄じゃないか!」

「問題なんだ。命令を無視して自分まで大破した挙句に本来ならば攻略できていたであろう海域攻略に失敗した」

「そんなのはまた回復したら出撃すればいいだろう!?!」

私の反論に提督は冷ややかな目線を私に浴びせ、浜風は顔を俯ける。

「では、大破した二人の修理費はどこから出てくると思う？ 余計に増えた次の出撃のために必要な資源は誰が集めるんだい？ 出撃の指揮系統、作戦立案は誰が担うんだい？」

「そ、それは……」

「遠征部隊と司令部だ。つまり、浦風は野分一人を助けたことで他の艦隊全てに余計な負担をかけたのだ。それに、仕留め損ねた敵艦隊がこちらを追跡していないとも限らない。浦風が連れて帰って来たのは野分だけじゃないかもしれない」

「………それでも命を助けたということは、事実だ！」

「確かに艦娘の命は大切だ。だが、本当にそう思っているならば、目先の一人の命を助けて他全員を危険にさらすのか、一人を見捨てて他全てを守るのか、後者を選ぶべきだ」

浦風の行動は決して間違っていない。

そんな私の反論は提督の言葉によつて徐々に崩れ去っていく。

「磯風、私達は戦争をしている。私達が負ければ、私達だけではなく、この鎮守府の後ろで生きる人々も全員死ぬぞ？ 艦娘一人の命とそれら全てが釣り合うと思っているのか？ これでも君は浦風が正しいと言えるかい？」

「そ、それは……」

私は反論できなかつた。

一見冷徹な提督の判断の中に、確かな信念を感じたのだ。

言い淀む私に、提督は僅かに笑みを浮かべると、その口調が厳しく淡々としたものから論すような優しいものになる。

「だが、君達にそこまで考えろとは言わないし、責任も求めない。それらは全て私が引き受ける。だからこそ、私の命令には絶対に従ってもらわねば、困る」

「………」

「私は君達のことを道具だとしか思っていないし、そのように扱うだろう。しかしだ、道具だと心から思っているからこそ、私の命令は感

情論に左右されない、艦娘を最大限に活かすことのできる最善の一手となる。

ゆめゆめ忘れるな、裏を返せば、私の命令に逆らうことは、破滅に繋がるぞ」

私の頭に手を載せながら提督はそう言うと、体が硬直して言葉の出ない私を置いて、その場を後にした。

☆

浦風はあの後一週間の謹慎となり、営倉行きとなった。

私は、未だあの日の提督の言葉を思い出しては、それについて考えていた。

頭では提督の言い分に理があるのはわかっている。だが、だからと言つて多くのために一人を切り捨てるのが本当に正しいことなのか。

まだ、私の中で納得がいつていなかった。

『——磯風、右に回頭して全速前進。そのまま直進しながら敵部隊に砲撃、当てる必要はないからとにかく多くの敵艦を引きつけるんだ』
「了解……」

演習の時には二つのパターンが存在する。

一つ目は提督が事前に作戦を指示し、演習時には自分達だけで戦うパターン。

二つ目は提督が実際に通信機から艦娘一人一人に指示をだしながら戦うパターン。

今日の演習は後者の方であった。

数十分後、こちらの勝利S判定と共に演習は終了した。

こうやって直接提督の指示に従うパターンの方が前者よりも勝率が高いという事実は、私の考えを提督に否定されているようで、素直に喜ぶことはできなかつた。

「いやー、相変わらず強いなあ、君の艦隊は！」

「……………」

相手の艦隊の一人が私に話しかけてくる。

彼女の艦隊とはよく演習をしていたので顔は覚えていた。しかし

一度も話をしたことはなかったので、私は馴れ馴れしく肩を組もうとする彼女の腕から思わず逃げてしまう。

そんな私の一歩引いた冷めた対応に、彼女は酷くがっかりした様子だった。

「あれ!? もしかしてまだ私の顔覚えてもらってないの!? 川内だよ、川内! よく顔合わせてるじゃん!」

「いや、それは知っているが」

「もおー! だったらもう少し仲良くしようよ!」

「でも、話したことはないよな?」

「何言ってるの? 何度も語り合ってるじゃん、これで!」

そう言って右腕の砲塔を見せつけてくる彼女に私は嘆息して鎮守府へ引き返そうと背中を向ける。

「待って、待って、待って! そんな残念な奴を見るような目しないでっ—!」

「なんなんだ、要件はなんだ?」

「だから仲良くしようって!」

「……はい、握手」

「う、うん?」

「じゃ」

「待って、待って、待って! それはない! それで終わりはないよ!」

ああ、うつとうしい。

再度背中を向けた私に川内が背中から覆いかぶさるように抱き着いて離れまいとガツチリ組み付いてくる。

「おま、やめろ! 離せ!」

「別にそんな邪険にしないでしょ!」

「邪険にしてるわけじゃない! 私は今別のことで頭が一杯でお前に構ってられないんだ!」

「別のこと? わかった、夜戦のことでしょ!」

「違う!」

「私もさー、いつ夜戦か気になったらもう昼から——」

「聞いてない！ 勝手に語り始めるな！」

☆

「——それでねー、提督に夜戦しようって言ったらさあー」
「どうして、こうなった……」

鎮守府の食堂。

私の目の前で何故か一緒に昼食をとっている川内の姿があった。
演習終わったんだから帰ってくれ。

「でー、提督が夜戦でねー」

聞き流しているから詳細はわからないが、さつきから川内の口から『提督』と『夜戦』のワードしか聞こえてこない気がする。

「——って訳なんだけれどどう思う？」

知らん。

「だよねー！ やっぱ磯風もそう思うよねー！ 私と同じ夜戦至上主義の磯風ならわかってくれるって信じてたよ！」

勝手に私の返答を都合よく脳内補完するんじゃない。

勝手に夜戦至上主義にするんじゃない。

「あ、間宮さん、カレーおかわりー！」

「元気だな、お前は」

おかげでこちらは普段より疲れる。

いつもならこのカレー一皿食べ終える頃には疲労が吹き飛んだように元気になっているものだが、今日に限って全くそんな気はしない。

いつもと味も少し違うような気がする。

「君らのところは元気ないよね？ なんか、すれ違う艦娘全員疲れた顔してるよ？ 働き過ぎじゃない？」

「さあ、他の鎮守府を見たことがないからわからないが、私はまだ楽な方だ。疲れているように見えたら単純に私の体力がないだけだ」

「あー、君なんかもやしっぱいもんね」

「うるさいな！ 私だって頑張ってるんだ！」

「ごめん、ごめんって！ じゃあ、一日どれ位出撃してるの？」

「そうだな、私のいる演習部隊なら——」

「——はい、川内さん、カレーのおかわりよ」

「お！ ありがとね、間宮さん！」

私と川内が話していると間宮さんが横からカレー皿を持ってやって来た。

間宮さんはカレーに目を輝かせる川内に尋ねる。

「そういうえば、他の皆は帰っちゃったみたいだけれど川内さんはいいの？」

「ああ、大丈夫！ 私は提督と一緒に帰る予定だから。今はそつちの提督さんと話をしている筈だよ——」つと、噂をすればかな？」

二人分の足音が食堂に近づいてきたかと思うと、扉が開いて白髪と白鬚をたくわえた初老の男性と提督が入ってくる。

「ここにおったか、川内」

「あ！ 提督、おかえりー！ 待ってたよ！」

より一層テンションの高くなった川内はカレーを一瞬でかき込んで初老の男性に駆け寄る。

「それでは、儂らはそろそろ失礼するでしょう」

「ええ、中將殿。またいらしてください」

提督が中將と呼ぶその男性は食堂の中を見渡すと笑って言った。

「……犬見提督の艦隊には少々疲れが見えますな。艦娘といえど、人間。戦果は十分すぎる程に出ているのだから、もう少し彼女達を労わりなさいるといい」

「ご忠告、痛み入ります」

「それでは」

「磯風またね！ 今度はウチの鎮守府においでよ！ 歓迎するからさ！」

「あ、ああ」

そう言って、中將と川内は食堂を去り、提督も見送りのためか一緒に出て行った。

川内、まるで嵐のような艦娘だった。谷風だつてあそこまでテンションは高くない。おかげで、頭の中が真っ白だ。

だが、不思議と悪くない気分だった。

「またね、か……」

今までも演習で立ち会った艦娘と会話する機会があったが、あんな風に友達か何かのように気安く接してこられたのは初めてだ。

この鎮守府の中ですらそんな存在は谷風、浦風、浜風以外には居ない。

「今度はもう少し話ができるといいな」

「磯風ちゃん、嬉しそうね」

「ああ、今度会ったら、私の料理でも振る舞ってやろう」

「そ、それはやめておいた方がいいと思うけれど……」

「え？ そうかな？ まあ、川内にも味の好みがあるかもしれないな」

仕方ない、ならば料理は川内に味の好みを聞いてから考えるとして。

私は川内と中将の言葉を思い出していた。

「私達ってそんなに疲れているように見えるのか……？」

☆

「どうだった、提督？ 向こうの提督は何かボロを出してくれた？」

提督護送用の軍艦。その甲板に中将と川内はいた。

「流石に難しいのう。そっちはどうじゃった、川内」

「うーん……確かに疲労が溜まってる様子はあったけれど、それほど深刻にも見えなかったし、磯風も何か隠しているようには見えなかったなあ」

川内が磯風の様子を思い出しながらそう報告すると、中将は難しい顔をして白い髭を手で撫で始める。考え事をしている時の彼の癖だ。

「……しかし、あの鎮守府の戦果は異常じゃ。いくら効率的な艦隊指揮をしたところでどうにかなる数値ではない。確実に何かある筈じゃ」

「噂の『軍神』さんが来てたとしても無理？」

「無理じゃな」

「そいつは凄いね」

戦果が多いということは良いことだ。しかし、戦果が多すぎるとい
うのは問題だ。それはすなわち、——艦娘に対して規定を外れた重労
働を強いている、あるいは裏で資源の賄賂を受け取っている——何か
しらやましいことをやっている証なのだ。

数か月でその鎮守府の戦果を二倍にまで押し上げると言われるか
の軍神も最効率時の戦果の範囲を決して外れることはない。

「必ず尻尾を掴んでやるぞ、犬見誠一郎」

既に見えなくなった鎮守府の方向を見て、中将は静かに呟いた。

第五十話 「そうか、私は喧嘩したのか」

「明日一日、休みをあげよう」

「休み？」

提督の口から放たれた予想外の言葉に私は思わず怪訝な表情で聞き返してしまった。

「そうだ。明日は少し私の方で急用があつてね、鎮守府を留守にするために艦隊指揮ができなくなった。だから、明日一日は休日とする。町に買い物に行くもよし、一日ゆっくりしているのもよし、自由にしてくれ」

「そう、か」

「そういうえば、明日は浦風も営倉から出所だな。四人でどこかに遊びにでもいってくればいい」

提督の言葉に顔をあげる。

予定していた時期よりも早かったが、以前から相談していた四人で遊びに行く計画が図らずも成就するのだ。

そうと分かれば、明日は空けてもらうよう浜風と谷風にも言っておかねばならない。

急いで執務室を出ようとする私を提督が呼び止めた。

「磯風、休日の後、君には少し重要な任務を任せるつもりだから、そのつもりで頼むよ」

「ん？ 了解した」

去り際に見えた提督の笑顔が若干不気味に感じたが、それ以上に明日のことで頭が一杯になっていた私は大して気にすることもなく、浜風と谷風の元へと走って行った。

☆

そして、次の日。

「——うん、雲一つない晴天だな」

「お出かけ日和って奴だね！」

「久々に四人で集まりましたね！」

「皆、疲れとるじゃろうに、ウチのためにありがとう！」

一応、浦風の営倉期間の終了と合わせたので、その復帰祝いのような感じだと本人は受けとったらしい。

何はともあれ、普段の艦装、戦闘服から各々の私服に着替えた私達は今日一日を四人で過ごすことにしたのである。

「さて、まずはどこに行く？」

「町のデパートってところこうよ！ 何でも揃ってるって話だよ！」

「そうじゃな、ウチも新しい服とか買いたいけえ、デパートでショッピングしたいなあ」

「あの、一応経費で落とす許可は戴いていますけれど、あんまり使いすぎないようにお願いしますね？」

「何言つとる！ 次はいつあるかわからん休日じゃけえ、今日は固いこと言いつこなしじゃ！」

「今日くらいちよいと贅沢したって、提督も許してくれるって！」

「ええ……でも……」

「浜風、諦めろ。もう、あの二人は止まらない」

ハイテンションでデパートへと走る谷風と浦風を見て、浜風も説得は諦めたのかそれ以上は何も言わなかった。

「……こうなったら、私だって遠慮しませんよ」

いや、むしろ開き直ったのかもしれない。

よく考えてみればこの中で一番ストレスをため込んでいるのは浜風だ。

ならば、誰よりもこういう場ではっちゃけたいのはきつと彼女なのだ。

「よし、ではデパートへ出撃、だな！」

☆

「おー！ ええのう、ええのう！ 浜風、次こつちじゃ！ こつち着てみい！」

「いや、あの、もう私は十分……」

「何言つとる！ 浜風はただでさえ根が真面目で地味なんじゃから、もう少しお洒落せんといけん！」

「地味!？」

デパートにて。

すっかり興が乗った浦風によって浜風が着せ替え人形にされていた。

様々な服に着せ替えられていく浜風の姿と、その度に店員に絶賛され彼女が赤面する姿を見ているのは非常に愉快である。

ちなみに私と谷風は早々に新しい部屋着と外出用のお洒落な服を数着選んで買い終え、浦風に至っては量が量であっただけに郵送までしている。

浜風だけが一人、何やら服選びに難儀している様子であったので、こうして現在浦風の着せ替え人形にされている訳だ。

しかし、流石にスタイルがいいだけあってどんな服でも似合うな、浜風。

いや、全くけしからん。

「うーん……やっぱりこつちかのう? いや、でもこつちも捨てがたいし……」

既に二時間程度の時間を消費しているが、ようやく浜風の服選びも終局を迎えつつある。

流石に貴重な一日を服だけで潰すのは勿体ないから丁度いい頃合いだろう。

「お客様! こちら、明日から店頭に並べる予定の商品だったので! お客様に是非試着をしていただきたく!」

「なんじやと!？」

おい、店員。終わらないだろうが。

「あの、流石にそれは申し訳ないですし……それに、時間が……」

あまり強く意見を主張したがない性格の浜風も流石にこれには否定的な言動を並べている。

しかし、浦風が怪しい笑みを浮かべて浜風の耳元で口を動かす。

「でも、あの服なら提督さんも可愛いって褒めてくれるかもしれないなあ?」

「……着ます!」

「ありがとうございます！ では、ささ、こちらの試着室へ！」

結局その後、浦風と店員と急に意欲的になり始めた浜風の服選びはヒートアップし、店を出る頃にはさらに一時間が経過していた。

「ふうー、満足満足！」

「つ、疲れました……」

「お疲れさん」

「朝早くに来たつもりがもう昼過ぎだな」

シヨツピングを終えた私達はデパートのレストランフロアで昼食をとることにした。

「間宮さんの料理も美味しいけれど、このレストランのハンバーグも中々だね！」

「うわあ、パフエって食べたことないんじゃないけど、頼もうかのう……でも、食べ過ぎて太るのも嫌じゃなあ」

「あ、じゃあ私と半分こしませんか？ 私も食べてみたいので」

「ナイスアイデアじゃ、浜風！ 谷風と磯風はどうする？」

「じゃあ、私も磯風と半分こしよっかな！ ねえ、磯風？」

「……このオムライス、オムレツのふっくら感が少し足りないな、あと熱を通し過ぎだ……卵は二つ使っているようだが、ケチャップライスの分量から考えて三つにした方が……だが、このデミグラスソースは中々……しかし、これも間宮さんには及ばない——」

皆が各々昼食を楽しんでいる最中、私は料理の研究に集中していた。

仕方ないだろう、間宮さん以外の料理なんて中々見られないのだから、こういう時にしっかり研究しておかないと勿体ないではないか。

むしろ、私はこれが目的で今日デパートに来ていると言っても過言ではないのだ。

「磯風ー、パフエはー？」

「ああ、私も頼む。そうだな、確かチョコレートパフエとフルーツパフェの二種類があったはずだから、どちらも食べてみたいんだが」

「わ、わかったよ。じゃあ、二種類頼んで四人で回しながら食べよっか」

「磯風、凄い情熱じゃ。ウチら料理人じゃなくて艦娘なのに」
「なんとというか、生き生きしてますね」

他、三名から生暖かい視線をもらった。

☆

「——あー、ぶち楽しかった!」

「ええ、私もこんなにリフレッシュできたのは久々です」

「本当、一日が終わるのが早すぎるったらないよ!」

「ああ、本当に楽しかったな。またこうして四人で遊びに行けたらいいな」

夕暮れ。

夕日が沈みゆく海岸線を横目に、私達は両手一杯に買い物袋を持って鎮守府への帰り道をなるべくゆつくりと歩いていった。

「明日からまた遠征地獄かと思うと気が重いなあ」

「私も溜まっていて仕事のことを思うと胃が……」

「おいおい、今から明日のことを気に病んでどうする」

「ウチは謹慎解けたばっかで久々じゃえむしろウズウズしとるけどな! 浜風も谷風もウチみたいに営倉行きになって少し暇しとればむしろ楽しくなるかもしれんよ?」

明日からまたいつもの日常が戻ってくるのが若干気怠そうな谷風と浜風に対し、浦風はしばらく出撃がなかったせいも、むしろやる気満々のようだった。

浦風のブラックジョークに私と谷風は苦笑いを浮かべる。

しかし、浜風だけは違った。

「何ふざけたこと言っているんですか? あんな馬鹿みたいなこと二度としないでくださいね!」

「……馬鹿みたい、だど?」

少し怒り気味の浜風から出たその言葉を、私は聞き逃すことはできなかった。

「命令違反とは言え、浦風はその身を挺して野分を守って帰って来たんだぞ? それを馬鹿みたいはないだろう」

「磯風、提督の話を聞いていなかったんですか? あれはただの危険

行為でしかありません。下手をしたらこの鎮守府も町も今頃焼野原だった可能性もあるんですよ?」

「実際はそうはならなかったじゃないか!」

「可能性があったというだけで問題なんです!」

「ちよ、ちよつと、二人ともどうしたのさ……?」

谷風が私と浜風の間に入って仲裁をしようとするが、私達の口論は止まらない。

「じゃあ、可能性があるというだけで助けられる命を見捨てると言うのか!? そんな選択が正しいのか!?」

「あえて言いますよ、そうです。一を切り捨て十を確実に取るのが正しいんです! これは戦争なんですから!」

「なんだ、お前は! さつきから聞いていれば提督の言葉を繰り返しているだけじゃないか! まるでオウムだ!」

「私は自分の正しいと思っていることを言っているだけです! 提督は正しい、私は心からそう思っています! だから、オウムで結構!

私は提督の言葉を何度でも繰り返し返しますよ!」

「だったら……だったら、お前は、私達の誰かがもしもそういう状況になった時、一切の躊躇なく見捨てるというのか……?」

そこで初めて浜風が怒りの表情から一転、苦しそうな表情で言葉を止めた。

「その質問は……卑怯です……」

「私は絶対に見捨てないぞ。救える命が目の前にあるなら、私は絶対に仲間を助ける。提督の考え方は、間違っている」

その言葉で再び浜風の表情に怒りが現れた。

「提督は間違ってるなんていません! 何も知らない磯風が勝手なことを言わないで!」

「なら、お前は見捨ててるのか! それが、誰であっても、見捨てられるのか!」

「………はい。この中の誰かを見捨てることで他の三人が助かると言うのなら、私は——」

「いい加減にしろ、このすつとこどつこいッ!」

その鼓膜が破れるかと思う程の怒号の直後、頬を鈍い衝撃が走り、私は地面に尻餅をついて、拳を握りしめる谷風を見上げていた。

「なんなのさ、なんで……そうなるんだよ」

「た、谷風……私は……」

「さっきまで楽しかったじゃんかよ！ 皆で笑って鎮守府に帰ってたんじゃないか！ それが、なんで最後にこんなことになるのさ!? 勘弁してよ、本当に……!」

「ごめん、ごめん、ウチがあんなこと言うから……ウチのせいじゃ……ひぐっ」

顔を横に向けると浦風が顔を涙でぐしゃぐしゃにしていた。

谷風も怒りに歪んだ目元に涙をためていた。

その時、私はやっと自分がどれだけ惨いことをしたのか、理解したのだ。

「……………」

「浜風!」

空気に耐えかねたのか、浜風は何も言わずに鎮守府へ逃げるように走り去ってしまった。

谷風は泣きじやくる浦風の頭を自分の胸に抱き寄せ、私を睨みながら言った。

「正直、二人のどっちが正しいかなんて私にはわかんないけどさ、さっきの質問はあんまりだよ。この中の誰かを見捨てられるのか、なんて、間違っても聞くなよ」

「……………」

「最低だよ、磯風」

谷風は私に背中を向け、浦風と二人で浜風を追うように歩き去っていった。

二人の背中が見えなくなるまで、私は地面に尻餅をついた状態から微動だにできずにいた。

私がようやく立ち上がって鎮守府への重い足取りを歩み出したのは、夕日が沈み切り、あたりが真っ暗になった後のことだった。

☆

「なんだか、浮かない顔ね、磯風ちゃん。今日は四人でお出かけだったんでしよう?」

「……………」

「何が、あったの?」

食堂で洗い物をしていた間宮さんを手伝っている間、終始無言の私に彼女は何かを察したのか、そう、話しかけてくれた。

その声色のあまりの優しさに、私の口は自然と解れていく。

「今日は、朝早くから、町に行ってきたんだ」

「うん」

「それで、デパートっていうところに初めて行って、洋服を皆で買ったんだ」

「うん」

「そこで、テンション上がった浦風が浜風に色んな服をコーディネートして、一種のファッションショーみたいになってしまったな。途中から店員さんも混ざってきて、凄い盛り上がったんだ」

「うん」

「その後、レストランでお昼ご飯を食べたんだ。間宮さんの料理の方が全然レベルが上だったけれど、そう言ったら谷風に『こういうのは雰囲気を楽しむものなんだよ』って怒られてな」

「うん」

まるでダムが決壊したかのように、私は今日一日の出来事を隈なく詳細に、息をつく間もなくひたすらに話し続けた。

間宮さんは、そんな私の話に優しく相槌を打ち続けてくれた。

「四人でパフェも食べたんだ。二種類あったから、二つとも頼んで、四人で回して食べて、チョコレートパフェ派とフルーツパフェ派で意見が対立してな、店員さんに声が大きくなって注意されたよ」

「うん」

「その後も浜風の希望で大きい本屋で色んな本を見て回ったり、谷風の希望でゲームセンターに行ったり、日が暮れるまで一日中めまぐるしく町を走り回っていたな」

「うん」

「本当に楽しかった。本当に、楽しかったんだ、でも……………」
ふきんで水をふき取ったばかりの皿の上に水滴が滴り落ちる。

私の声は嗚咽を隠そうと震えていた。

「でも…………私が、私が、全部台無しにしてしまった…………私のせいで…………！」

「うん」

そっと、横から私の頭が抱き寄せられる。

間宮さんが涙の止まらない私を抱きしめてその頭を優しく撫でていた。

「喧嘩、しちやったのね」

「喧嘩…………？」

私達四人は、いつだって一緒だった。

お互い助け合って、庇い合って、そうやって家族同然のように生きてきたのだ。

今まで互いに反発しあったり、誰かに怒りを覚えたことなど一度もなかった。

だから、私は間宮さんにそう言われて初めて気が付いたのだ。

「そうか、私は喧嘩したのか」

これが、親友達と私の、仲直りの叶わなかった、最初で最後の喧嘩だった。

第五十一話 「私が、あの鎮守府を終わらせる」

「提督、これは、何だ……？」

休日から一日が明けた早朝。

提督に執務室へと呼び出された私は机上においてあるそれを見て、声を震わせた。

真つ黒なグリップに鋭く光る銀色の短い刀身。

世間一般的に、それはナイフと呼ばれている。

「持っていくといい。必要になるからね」

「どこでどう使うんだ！ こんな物！」

笑顔でナイフを差し出す提督に私は激昂した。

ナイフの刃も、銃弾も、深海棲艦には通用しない。はつきり言つて、今の世界では戦闘に必要な筈の鉄の塊だ。

そんな屑鉄がそれでも何故未だに全世界で作られ、使われ続けているのかと問われれば、それは深海棲艦『以外』に向けるために他ならない。

「来週の頭に演習がある。以前会つただろう、中将殿の鎮守府とだ。君達演習部隊には中将の鎮守府で演習をした後、そのまま一泊してもらう予定になっているのだが——」

私の怒声も意に介さず提督は淡々と話を始める。

中将と聞いて川内と一緒に帰っていった白鬚の老人の姿が思い出される。

そこまで聞いて、私は次に提督は何を言うつもりか既に察していた。

「その時、中将を殺してきてくれ」

「断る！」

即答した。

心臓の鼓動が早くなっている。笑顔で、しかも普段の命令と変わらぬ口調で平然と暗殺を艦娘に命じる目の前の男に、私は少なからず恐怖していたのだ。

その恐怖を紛らわすかのように、私は大声で拒絶の意思を示した。
「……………ああ、大丈夫だ。中将殿もそれなりにご高齢だからね。背後から適当に何度か刺してやればあとは何もしなくても勝手に死ぬ。不安なら後で私がやり方を教えてあげてもいい」
「違う！ 殺したくないから断ると言っただけだ！」
こいつ、正気か。私は鳥肌が止まらなかった。
「殺したくないか。浦風といい、君といい……………まあ、いいだろう。理由を説明しよう」

提督は呆れたように頭を搔くと、再度話を始める。
「以前、中将がウチに来た時。探りを入れてきた。どうやら我が鎮守府の戦果の異常に気が付いたらしい。一応、一見しただけじゃわからないよう調整はしていたつもりだったが、流石は中将殿と言ったころだ」

「戦果の異常？」
「現在、我が鎮守府は非常に良い具合に回っている。艦隊運営としてはほぼ最高率の理想的な状態だ。ここまで積み上げてきた実績を水泡に帰す訳にはいかない」

提督はそう言うと言った満足げな笑みを一瞬だけ見せる。しかし、すぐに表情から笑みが消え、対照的に氷のような冷たい、無機質な表情でこう続けた。

「つまり、だ。今の私達にとって中将は邪魔な存在だ。よって、殺す」
「そんな理由で……………!？」

自分にとって都合が悪いから殺す。そんな理論がまかり通る筈がない。

戦果の異常というものがどういうことなのかよく理解はできていないが、おそらく提督の口ぶりからして私達が何かやましいことをやっているのではないか？

それならば、中将の方に正義があるのではないか？

「そんな理由？ ならば、お前が死ぬか？ 磯風？」

「な、何だと……………？」

「中将を生かしておけば、近いうちにこの鎮守府は終わる。そうなっ

た時、お前達艦娘はどうなると思う?」

「どうなる……?」 艦娘は他の鎮守府に引き取られるんじゃない?」

提督は私の言葉に首を横に振った。

「いいや、おおよそ全員解体処分だ。一つの鎮守府に收容できる艦娘にも限界があるからね、よっぽど即戦力にならない限り引き取ろうなんて考える提督はいない。それに、この鎮守府の全貌が明らかにされた時点で、こここの艦娘を引き取ろうと思う奴なんて誰もいないだろう」

「それは、どういう意味だ……?」

「……とにかく、鎮守府がなくなれば全員解体されてまた、元の生活に戻ることになる。磯風、四人でまたあの孤児院に戻るか?」

「——ッ!」

孤児院の言葉に思わず私の背筋が凍った。

また、あの生活に。暴力と絶望が蔓延する光なき孤児院へ逆戻り。それだけは嫌だ。それはすなわち、私達に死ねと言っているようなものだ。

「全ては君次第だ、磯風。選べ、中將を殺してこの鎮守府を守るか、殺さずして全員死ぬのか」

そう言つて、提督は刃の部分を持って私にナイフを差し出す。

私は、それを

☆

「——やっほー! 磯風、久しぶりいっ! 川内だよ!? 覚えてるよね!? 覚えていてくれよお!」

「初っ端から、うるさい!」

翌週。私は中將の鎮守府へ他の演習部隊を連れてやって来た。

鎮守府の手前で川内とその他数人の艦娘が大きく手を振って私に笑顔で歓迎の意を叫んでいる。

「よおーっし! よく来たね、磯風! ひとまず執務室行つて提督に軽く挨拶したら早速演習しようね! 今日はウチに泊まるんでしょ? じゃあ、夜戦もやりたい放題だね!」

「わかったから! わかったから、落ち着いてくれ……あと、夜戦はし

ない！」

「なんでさ!?! 夜戦至上主義の磯風が!?!」

「そんな主義は掲げていない!」

「何でもいいから、夜戦しよーよ! 夜戦! 夜戦! 夜戦!」

「自分勝手か!」

「昨夜から一度も夜戦やってないんだよー!」

「ガッツリやっているじゃないか!?!」

相も変わらず騒がしい川内が私の肩を掴んで前後に揺らしている
と、彼女の背後からその脳天に拳骨が加えられる。

川内と一緒に私達を出迎えに来ていた他の艦娘の拳だった。

「かわう……川内うるさい! さっさと鎮守府に案内するわよ!」

「騒がしくてごめんなさいね」

「ほら、さっさと行くわよ!」

「ちよ、わかった! 大人しくしてるから! 襟首掴んで引きずらないですよ! 離してっばあ!」

私から川内を引きはがして鎮守府へ誘導を始める他の艦娘達に対し、川内は終始何やら叫んでは再び拳骨を入れられていた。

その仲睦まじい様子に、私は思わず自分の艦隊を振り返ってしまった。

演習部隊では珍しくもないが、相変わらずほとんどが初対面の艦娘ばかりで、ろくに話もせず黙ってついて行っているだけ。誰も口を開くことはなく、その表情にはどこか気怠さのようなものが垣間見えて非常にギスギスした空気を漂わせている。

勿論、会話も喧嘩すら一切ない。なんとというか、川内達とは対照的な冷めた空間がそこに広がっていた。

「……………」

別段、仲良くすることで演習の結果は変わらない。何故なら、演習は各々が提督から与えられた指示の通りに動いているだけだからだ。他人を気遣うことなどしないし、チームプレイなど意識したこともない。

しかし、そんな状態でも私達は勝ってしまう。結果を出してしま

う。

それによつて、艦隊全体にこれが良いという認識が生まれ、最終的には疑問すら持たなくなる。

それでいいのだろうか。

川内達の艦隊を見て、改めて私は羨ましいと思つてしまうのだ。

「——う、うわ！ 駄目駄目駄目だつて！」

「……………」

私が撃つた魚雷が旗艦の川内に直撃し、大破撃沈判定が下つた所で演習は終了した。

勝利S。文句なしの結果である。

そう、結果自体には、文句はない。

「くそう！ また負けたあ！」

「まあ、私達もアウトレンジできてなかつたし、川内だけの責任じゃないわよ」

「また次頑張りましょう」

「……………」

敗北しても仲間の間で励まし合い、反省し、次へ活かそうと団結を強くする川内達。

一方で、勝利したにも関わらず私達の艦隊にはやはり会話は無い。

皆、どうでもいいといった感じで各々体を伸ばしたり、疲れてしゃがんだりしているだけで労わりの言葉すらかけようとしない。

「…………お疲れ」

「……………はあ、お疲れ様」

仮に私から声をかけてもこれだ。面倒そうに一言返答して終わり。これ以上話しかけるなどでも言いたげに私の傍から離れる。

『現在、我が鎮守府は非常に良い具合に回っている。艦隊運営としてはほぼ最高率の理想的な状態だ』

これが、本当に良いのか？

これが本当に理想的な艦隊なのか？

提督の言葉に私は疑問しか浮かんでこない。勿論、これは演習部隊に限った話なのかもしれないが。

そんなことを考えて歯噛みしていると、後ろから何かが飛びついて来て私に体重をかけてくる。

「磯風！ 何、浮かない顔してんの？ ほら、演習も終わったんだしさっさと鎮守府戻って夜ご飯にしようよ！ 私お腹ぺこぺこだよー！」

「あ、ああ……」

元気に海原を駆ける川内を追って、私も鎮守府へと戻る。

鎮守府に戻って工廠に艀装を預けると、川内は私の手を引いて食堂へ駆け込んで、ハンバーグプレートを一皿注文した。

すぐに、ジュージューと音を立てる鉄板の上に肉汁をほとぼしらせるハンバーグが乗せられたプレートが二皿運ばれてくる。

「これがウチの一押しメニューだよ！ 食べてみて！」

「そ、そうなのか。じゃあ、いただきます」

「どう!? 美味しい!？」

ナイフとフォークでデミグラスソースがたっぷりかかったハンバーグを一かけら口に運ぶ。

口の中を火傷しそうなくらい熱い肉汁が私の口内を駆け巡り、私はゆっくりと味わおうとしていたそれを反射的に飲み込んでしまった。

「すごく、美味しいな」

「本当!? でしょでしょ!? ここのハンバーグは世界一なんだよ！ さ、じゃんじゃん食べてよ！ ここは私の奢りだからさー！」

川内に促されるまま、私は次々とハンバーグを口に運び、あつという間に鉄板の上は空になってしまった。

「ご馳走様。本当に美味しかったよ」

「……やっと、笑ったね！」

「え?」

「喜んでもらえて何よりだよ。君、少し元気なさそうだったからさ」

「そう、見えたか?」

「何かあったのなら、相談に乗るけど?」

元気がない。その原因は私自身もわかっていた。

理由は二つある。だが、片方は川内には言えない。

だから、私は一つだけ彼女に打ち明けることにした。

「実は、友達と喧嘩してしまっただけな」

「……良ければ、詳しく聞かせてくれないかな」

それから食後のコーヒーを二人で飲みながら、私は曖昧にはあるが浜風達との出来事を話した。

私が経緯を話している間、川内は黙って話を聞いてくれていた。

そして、私の話が終わると、コーヒーを一口啜って、川内は口を開いた。

「そっか、じゃあ仲直りしないとね」

「仲直り……できるのかな」

「そんなに重く考える必要なんてないよ。きつとできるよ！ だって、磯風は仲直りしたいって思ってるんじゃない？」

「あ、ああ」

「じゃあ、向こうもそう思っている筈だよ。だから、大丈夫」

川内のその言葉で私はなんだか安心してしまった。

「もう一度ちゃんと話し合ってみなよ。案外、あっさり仲直りできるもんだよ」

「でも、また喧嘩になるかもしれない」

「じゃ、また仲直りすればいいじゃん！ 仲直りするまで繰り返せば、絶対仲直りできるんだよ！」

「なんだ、その暴論は」

思わず笑ってしまった。

「大切な友達、なんでしょ？ じゃあ、諦めちゃ駄目だよ！」

「……ああ、そうだな。その通りだ！」

その言葉で決心が固まった気がした。

私はコーヒーを飲み干すと、席を立って食堂を出ていこうとする。

「どこ行くの？」

「ちよっとトイレだ。すぐ戻る」

私は食堂から出ると一目散に走り出した。

中将がいる、執務室へ向かって。

☆

——コン、コン。

「む、誰じゃ？ 入っていいぞ」

「夜に突然すまない」

「おお、犬見提督の所の」

扉を開けて中に入った私の姿を目を丸くして中將は見つめると、持っていた書類を置いて立ち上がる。

「どうしたんじゃ？ 何か用かの？」

「ああ、用があつて来たんだ」

そして、私は隠していた服の内ポケットから『ソレ』を取り出して中將に向ける。

「——ッ！ 磯風……！」

「死んでくれ、中將」

私が両手で強く握ったもの。それは提督から事前に渡されたナイフ。

その切っ先は中將の心臓部に向いている。

川内には言えなかった元気のなかった二つ目の理由。中將の暗殺。

私は今まさにそれを実行している。

「……犬見提督の命令か？」

「わかつている。わかつているんだ。きっと、私達が悪い。私達が悪者なんだ……！」

私はまるで中將に言い訳でもするかのように口早にしゃべり始めていた。

何かを喋っていないと、緊張と、罪悪感と、恐怖に押しつぶされそうだった。

「私達が悪だ……でも、私は、それでも……自分が、友達が、大切なんだ……！」

もう二度と孤児院には戻りたくない。

そして、浜風、浦風、谷風にも、私の大切な友人にもそんな思いをさせたくない。

だから、私はナイフを取った。

間違っているとわかつていながら、悪となった。

「ごめんなさい……」

「謝ることなどない」

中将はナイフを向ける私にそう言って笑った。

「私はあなたを殺そうとしているんだぞ？　怒ったり、恨んだりしないのか？」

「そんな苦しそうな泣き顔をされては、怒りも恨みも湧かぬ」「え？」

気づけば視界が涙でぼやけていた。ナイフを持つ手は震え、あまりにナイフを強く握り込んでいたせいかうっ血していた。

そんな私に中将はゆっくりと近づいてくる。

「く、来るなー」

「儂を刺しておぬしの憂いが晴れるなら、それも良かろう。しかし、こんな老いぼれの命一つでどうにかなるとは到底思えぬ」

「で、でも……あなたを殺さないと、私達は……」

「うむ、そこでじゃ」

しゃがみこんで私と視線を合わせた中将の胸元に軽くナイフの切っ先が当たる。このまま少し前にその切っ先を突き出せば、銀色の刃が心の臓まで食い込み、真っ白な軍服は鮮血に染まるだろう。

しかし、私は硬直したようにナイフを動かすことはできなかった。

「儂と協力し、犬見誠一郎を倒さんか？」

「でも、それじゃ、残された艦娘の行き場がなくなる」

「……犬見から何を吹き込まれたか知らぬが、提督が解任された場合、その艦娘達は次に着任した提督へ引き継がれることになっておる。犬見の悪事を暴いても、おぬしらが路頭に迷うことはない筈じゃ」

「なんだと……？」

その言葉を聞いて、私は手に持っていたナイフを落としてしまう。

それでは、私は提督に騙されていたというのか。

自分の保身のために、私にあんな嘘を吐いて、中将を殺させようと操ったのか。

全てを悟り、私の中に沸々と燃え上がるものがあつた。

怒り、だ。

「川内、もう出てきてよいぞ」

「ふへえ、見てるこつちがドキドキしたよ。提督無茶しすぎ。まあ、磯風が踏みとどまってくれて本当に良かったよ」

「心配かけてすまんの」

「……川内、中将」

私は隠れて様子を伺っていたらしい川内と白鬚を撫でる中将に頭を下げて言った。

「こんなことをした後で凶々しいのは百も承知だ。どうか、私に力と知恵を貸して欲しい」

「覚悟は決まったようじゃの」

「磯風、なんか、腫物が落ちたような顔してるね」

「ああ、決めたよ」

やはり、私と提督はどこまでも相容れない。

そして、あの男の下では、私達は幸せにはなれないようだ。

ならば、選択肢は一つだ。

「私が、あの鎮守府を終わらせる」

第五十二話 「ああ、全部終わりにしよう」

「え？ それマジ？ 本当に？ ちょっとって言うか、かなり盛ってない？ 超弩級盛りしてない？ もしかして見栄張っちゃってる？ そういうのいいからね、本当？」

「そうじゃぞ、磯風。儂らは真相解明のために純粹に知りたいただけなんじゃ。本当はあれじゃろ？ 今言った半分くらいじゃろ？」

「え、いや、マジだが……どこがおかしかったか？」

中将の鎮守府に来てから夜が明け、私と川内、そして中将は執務室で朝食をとりながら話をしていた。

まずは、彼らが怪しんでいた私達の鎮守府の運営状況についてだ。軽く私のいる演習部隊と遠征部隊、攻略部隊の一日の動きを大雑把に話したところ、二人して口を開けて固まってしまった。

「……………ええ、いや、ありえないって」

「だが、それならあの戦果も領けるといふものか……うむ……」

「そんなにおかしいのか、ウチは」

中将が私を見て何やら難しい表情を浮かべている。

「今、君の言った出撃状況が真実ならば、儂の鎮守府の3倍は出撃しておる……」

「言つとくけど私達の鎮守府って前線の攻略も後方の哨戒も担ってるから普通の鎮守府の2倍はハードだよ。正直私も結構キツイしね。でも、その3倍って……」

想像したら気分が悪くなったのか、川内の表情が今にも貧血で倒れそうなくらい真っ青だ。

「だが、艦娘となって肉体強化が施されている状態なら理論上、まだ体は持つレベル、か。実際戦果の異常も考えれば真実と考えるべきじゃろうな」

「いやいや、体は持ったって精神がイカれるって！ 私達、体は艦船並に強いけれど心は人のままなんだからさー、そんな働き詰めじゃノイローゼになるよ！ だからウチはこのままにしようね、頼むよ!？」

「ふむ……そこじゃない」

川内の悲鳴に中將は白鬚を撫でながら何やら目を閉じ、思案にふけり始めた。

しかし、私達のいる鎮守府がそこまで他の鎮守府よりも働き詰めにされているとは全く気が付かなかった。

思えば、生まれた時から倒れるまでこき使われることが日常で、当然だった。そんな私が鎮守府に入ったところでその運用状況が良いか悪いかなど判断できる筈がない。

むしろ、艦娘の体になって耐久力が増した分、以前より楽になったと感じた程だ。

もしかしたら犬見もそれが目的で私達のような孤児を艦娘にしたのかもしれない。どんな過酷な環境も受け入れてしまうような、そんな哀れな人材を求めて。

こうして、中將達と話すことで、また一つ犬見の本質が見えた気がした。

「艦娘としての体は耐えられても、精神が耐えられぬハードワーク。しかし、犬見の鎮守府は破綻しておらず、当の艦娘達にすら自覚がない。とすれば、考えられるのは——」

中將は目をゆっくり開く。そのまま私に向けられた彼の眼にはどこか哀愁が籠っているように感じられた。

「——おそらくは麻薬、じゃない」

「麻薬？ 薬のことか？ 薬は良いものなんじゃないのか？」

「薬っていうのは使い方によっては毒にもなるんだよ……」

中將と川内の暗い口調をして尚、私は二人の言う薬の何が問題なのかよく理解できなかった。

その後、二人が麻薬、薬物乱用などの単語を詳しく説明してくれたおかげで、ようやく私にもその危険性が理解できた。

「強烈な快楽と引き換えに、薬への依存と、身体障害、最悪死か……とんでもないな」

「おそらくは疲労感を緩和させるような薬物をどこかで摂取しているはずじゃが、何か覚えはないかの？」

「提督から必ず飲むよう言われている薬がある、とか。毎日注射を受けてる、とか」

「いや……そういうことはないな」

風邪をひいた時には間宮さんが薬を出してくれるが、毎日飲んでい
るような薬はない。

注射なんてほとんど打ったことのある者すら少ない位だろう。

中将は私の返答を聞くと、もう一つ質問した。

「では、白い粉をどこかで見たことはあるかの？」

「白い、粉……？」

私の中将の言葉に一瞬脳裏にある人物の姿を思い浮かべたその時だった。

「——失礼する！」

「うわあ!?! なんだ、なんだ!?!」

「大変恐縮ですが、予定された出港時刻を過ぎていきますので、直ちに磯風を連れて我々は鎮守府へ帰港します。一日、大変お世話になりました」

ノックもなしに執務室に入ってきたのは私の他に來ていた演習部隊の艦娘達であった。

彼女達はどこか苛立たし気に私を見つけるや否や腕を引つ張って連れて行くこうとする。

「ちよー！ ウチが招いたとはいえ、いくらなんでも失礼じゃないの!?!」

ノックもなくゾロゾロと執務室に入り込んできてさあ！ 今、磯風と重要な話をしているんだからもう少し空気読んでよ！」

「申し訳ありません、提督からの命令ですので」

「だからって!」

「申し訳ありません、提督からの命令ですので」

「ドラ●エの村人Aか、あんたは!」

「やめておけ、川内。あと、そのネタはもう古いかもしれん」

強引に私を連れて行くこうとする艦娘と睨み合う川内を制止して、中将は私達の方に何かを持って歩み寄ってくる。

「申し訳ないのう。時間も忘れて話し込んでしまったわい。磯風、こ

んな爺の話に付き合ってくれてありがとう。楽しかったぞ」

「中将……」

「これは儂からのお礼じゃ」

そう言っただけで中将は私にピンクと白の縞模様の包装紙に包まれた飴玉を一つ手渡す。

「君たちもいるかね？」

「いえ、急いでいるのでこれで失礼します。ああ、見送りも結構ですでお構いなく。ほら、磯風、行くわよ」

「あ、ああ」

「犬見提督によろしくの」

若干戸惑いながらも、中将は笑って頷いているので、私はもらった飴玉をポケットにしまいつつ、執務室から連行されるように出ていった。

「また来なさい、磯風」

私は中将のその言葉に大きく頷いたのであった。

☆

「——まったく、あの爺と何話してたのか知らないけれど、勝手にいなくならないでよね。提督の命令を破ったら怒られるのは私達なのよ？」

「す、すまない」

「チツ！」

私は露骨に苛立っている様子の演習部隊の面々の最後尾を、航行速度を落として少し離れてついていく。

普段は会話もしないくせに文句だけは一人前に畳みかけてくるのか、こいつらは。

私は彼女達にうんざりしながら、気分転換にでも、と中将にももらった飴玉の包装紙を開ける。

「ん？ これは？」

包装紙を開けると、赤色の飴玉と一緒に包装紙の裏側に書かれている数字の羅列が目に入った。

おそらくは携帯番号だ。

成程、どうやらこういう展開になることを見越して中将は事前に私

に連絡手段を与える準備をしていたらしい。

私は丁寧に包装紙を折りたたんでポケットに大事にしまうと、飴玉を口に入れて改めて気合を入れ直す。

「よしー!」

「磯風! チンタラしてんじゃないわよ!」

「すまない、すぐ追いつく!」

まずは中将の言っていた薬物を見つかるんだ。

正直、あまり当たっていて欲しくはないが、先刻の中将との会話で一つ、心当たりがある。

☆

鎮守府に帰ってから、私はまず執務室の犬見に呼び出された。

暗殺の結果を報告するためだ。

「——そうか、失敗したか」

「ああ、後ろから一突きしてそのまま逃げたんだが、他の艦娘がその後すぐに倒れている中将を見つけてしまっただけ。結局大事には至っていない」

「ふ、む……今朝は中将の執務室にいたと聞いたが?」

「おそらく、疑われているのだと思う」

「凶器は?」

「海に投げ捨ててきた」

全て昨夜のうちに中将と打ち合わせした通りの台本だ。

暗殺に失敗して、尚且つ中将と話していることを不自然に思われなような、私達に都合の良いシナリオ。

もしかしたら犬見は疑ってくるかもしれないが、結局真偽は確かめようがないのだからどうとでも逃げられる。

「……了解した。ご苦労だったね。下がっていいよ」

「暗殺に失敗したが、お咎めはなしなのか?」

「暗殺の行為自体は命令通りやってくれたようだ。ならば、お前を責める理由はない。私の使い方が悪かっただけのことだ」

どこまでも私達を道具扱いする犬見の言葉に若干苛立ったが、私は堪えて執務室を出た。

「さて、食堂に行くか」

食堂には珍しく誰もいなかった。

時刻は昼をとっくに過ぎていたので艦娘がいないのは当然ではあるが、間宮さんまでいないのはやはり珍しい。

チャンスだ。私は厨房に入り、奥の食品棚の一番上の引き出しに台を足場にして手をかける。

確か、ここだった筈だ。いつも料理にふりかけている白い粉の場所は。

『それじゃ、磯風。飯食って元気も出てきたし、私はこれからまた遠征だから、ちよいと留守にするよ!』

私達が毎日食事と一緒に摂取していて、食事をとると、皆途端に活気に溢れている。

麻薬というものが本当に使われているとすれば、最も怪しいのはこれだ。

——いつもならこのカレー一皿食べ終える頃には疲労が吹き飛んだように元気になっているものだが、今日に限って全くそんな気はない。

いつもと味も少し違うような気もする。

あの時はただ川内のせいで疲労感を感じただけだと思っていたが、実際、本当に疲労感があったのだ。

おそらくは、よそ者の川内がいたせいでこの粉をカレーに入れていなかったから。

「あった」

「何をしているの!」

プラスチックケースに入れられた白い粉を取り出したその時だった。

背後から聞き覚えのある怒鳴り声が聞こえた。

間宮さんだ。

「……磯風ちゃん」

「……………」

私の姿を認識して安心したような表情でため息をつく間宮さんに

私はどう返せばいいのか迷った。

どうしても料理研究のために使ってみたくて、とごまかすのは簡単だ。

ただ、間宮さんはこの粉の話になる度にとっても苦しそうな顔をする。

もしかしたら、打ち明けてしまえば味方になってくれるのではないか。そんな淡い希望が私の中にあった。

だから、私は質問をすることにした。

「なあ、先生。この粉はなんなんだ？」

「それは、調味料よ……」

「疲労感を緩和させる調味料か」

「……………そう、もう気づいているのね」

間宮さんは酷く悲痛な表情を見せたが、しかしどこか解放されて肩の荷が下りたように脱力してシンクにもたれかかった。

「先生、教えてくれないか。この鎮守府で何が行われているのか」

「それを知ってどうするの？」

「皆を助ける」

「もう、手遅れよ」

「手遅れ？」

間宮さんは厨房の入り口のカギとカウンターのシャッターを閉めると、椅子を二つ持ってきて、一つには自分が座り、もう一つに私が座るよう促す。

私が白い粉の入ったプラスチックケースを持ったまま椅子に腰かけたところで間宮さんは話を始めた。

「あなたの今持っているその粉の名前は『コカイン』。磯風ちゃんの推察通り、疲労感を緩和させたり、陶酔感、高揚感をもたらす強力な麻薬よ」

これは後から私自身が調べて知ったことだが、この麻薬による覚醒作用は恐怖感の喪失、空腹感の希薄化、眠気の霧散など多岐に渡り、ポリビアでは鉱山労働者などの重労働者が

朝、入坑するときに頬いっぱいニコカインを含むコカノキの葉を詰

め込み、そのエキスを飲むことで、鉱山崩落事故などの危険の恐怖を忘れ、疲労や空腹を癒しながら夕方まで昼食もとらずに働き続けると言われている。

まさに、深海棲艦と命がけの戦いを日夜繰り返して、休みなく働き続ける私達艦娘にはうってつけの麻薬という訳だ。

「ただ、この薬には強い精神依存性があって、しばらく薬を摂取しないと幻覚症状が起きたり、最終的には薬がないと生きていけないほどボロボロになるわ」

「精神依存……」

「不幸中の幸い、でしょうけれど艦娘にはその副作用は弱いみたいね。個人差はあるけれど、磯風ちゃんにはコカインの禁断症状は見られないし、強く薬を求めているようにも見えないわ。少なくとも今は」

そう言って間宮さんは自嘲気味に笑う。

「なんで、そんな危険なものを」

「提督の命令だからよ」

「——っ！ なんのためらいもなく使ったというのか!?!」

「そんなわけ、ないでしょう?」

その時の間宮さんの笑顔は背筋が凍るほど苦渋と、怒りと、後悔と、様々な負の感情が入り混じったもので。

思わず私は彼女から逃げるように椅子ごと後退してしまった。

「私だって嫌よ。こんな薬を自分の料理に入れるなんて……でも……もうダメなのよ。私は、その薬がないと……!」

途端に間宮さんの体が小刻みに震え始め、彼女はしきりに両の腕をかきむしりだす。

「間宮さん……」

「薬がきれると、皮膚の下を虫が這いずり回っているように感じるの。気持ち悪くて、仕方ない……私は、もう……」

「そういうことか」

強力な精神依存。既に間宮さんは薬から離れようにも離れられない。彼女は薬のために犬見の命令通り動くしかなかったのだろう。

頭では間違っていることなど百も承知なのだ。それでも、心は、薬

を断ち切れない。

こんな白い粉末が、ここまで人間を壊すのか。

目の前で血が滲むまで腕を掻き塗り続ける間宮さんの無残な姿を見て、私は顔をしかめた。

「もう、手遅れなのよ、磯風ちゃん……私だけじゃない。この鎮守府にいるあなたを含めたほぼ全ての艦娘が自覚症状のないまま中毒に陥っている。仮に磯風ちゃんが提督の悪事を暴いたところで、もう私達に行き場はない。良くて解体処分の後病院送り、悪ければそのまま殺処分まであるわ」

「なっ!?!」

『——それに、この鎮守府の全貌が明らかにされた時点で、ここの艦娘を引き取ろうと思う奴なんて誰もいないだろう』

犬見の言葉の意味がようやくわかった。

ここまで来て、この鎮守府の真相まで解明して、まだこんな選択を迫られるのか。

「私にはもう実行する気力も覚悟もないから、ここからは磯風ちゃん
の判断に任せるわ」

「……………」

「全てを犠牲にして、犬見提督と刺し違える覚悟はある?」

私はしばらくの間無言だった。

犬見を告発すれば薬物中毒になってしまった私も仲間も共倒れ、か
と言ってこのままの状態では薬と過労に心と体の両方を食いつぶさ
れる。

どちらも行き着く先は破滅。

ここまで悲劇的な展開だとむしろ笑ってしまう。

どこで私は間違えたのだろう。どうしていたら、私達は幸せになれ
たのだろうか。きつと今更そんなことを考えることに意味はない。

今はただ、覚悟だけ決めればいい。

「ああ、全部終わりにしよう」

どうせ死ぬのなら、犬見も道連れだ。

それが、私の選択だ。

第五十三話 「どうして、何一つうまくいかないんだ」

「——という訳だ」

『ふむ……コカイン、か……』

私はこっそり鎮守府から抜け出して近場の電話ボックスから中将にこれまでの顛末を話した。

電話口から帰ってくる中将の声はやはり暗い。

「中将、正直に答えてくれ。この場合、全てが終わった後、私達はどうか分される？」

『……なんとか、依存度の低い艦娘は儂が引き取ってでも助けてやりたいが、おそらくは薬の摂取が断たれば大半は使い物にならなくなるじやろうな。そうなった時は、すまぬが……』

「いや、謝らなくていい。間宮さんからもその話をされたから確認したかっただけだ」

それを覚悟で、私はやると決意したのだ。今更、中将に話が違うじゃないかななどとまくし立てる気など一切ないし、そんなことをしても虚しいだけであることも重々承知している。

「明日の夜、証拠を持って中将の鎮守府に出発するつもりだ」

『わかった、川内達を待たせて保護しよう。それで、証拠というのは？』

「コカインの入った袋、取引先と輸入ルートの資料、そして、薬の売買を証明する領収書だ」

『うむ、十分じゃ。川内達はそちらの鎮守府哨戒海域ギリギリまで近づけておく。ランデブーポイントは——』

鎮守府にはある一定の哨戒海域が設定されている。これはその海域内の管理管轄をその鎮守府が担うという取り決めで、同時にその海域に担当鎮守府以外の艦娘が緊急時を除き、無断で立ち入ることは許されていない、一種の領海のようなものでもある。

戦果というもので鎮守府同士の競争を図る以上、鎮守府間でトラブルを避けるためにもある程度区分というものが必要になるのだ。

そういった点から、どうしても私は単独である程度の距離を航行することを覚悟せねばならなかった。

途中、運が悪ければぐれ深海棲艦に出会うかもしれないし、犬見に勘付かれれば数多の追手が迫ってくることだろう。

そういったあらゆる状況を考慮すると、駆逐艦一隻でランデブーポイントまで辿り着くのは決して容易ではない。

『すまぬが、なんとか逃げ切ってくれ。最悪、ダメだと思ったら照明弾を撃て。海域侵犯してでも助けにいかせる』

「わかった。少し長電話し過ぎた、そろそろ切るぞ」

『うむ、頼むぞ、磯風』

私は受話器を戻して電話ボックスを出ると鎮守府の裏口へと走った。

☆

翌日。その日の演習を終わらせると私は間宮さんに食堂に呼び出された。

「どうしたんだ、先生？」

「今日の夜よね」

「ああ」

昼時を過ぎた食堂には他に人の気配はなく、厨房は完全に私と間宮さんの二人きりだ。

間宮さんは台所の上に、厚手の布の巻物のようなものを置いた。

「磯風ちゃん、これを」

「ん？ 先生、これは……三徳包丁？ しかも、凄い業物じゃないか！」

彼女が丁寧に巻物の紐を解くと、その内から丁寧に手入れが行き届いた様子の三徳包丁が姿を現した。

それは、いつも間宮さんが料理に使っていた業物。美しい流形の波紋を持つそれは、ただそこにあるだけである種の威圧感さえ感じてしまう。

「磯風ちゃん、私はもう先生ではないわ。もうあなたに教えられないことはない……というかもう私には教えることはできないというか

……とにかく、これはその餞別よ」

「ありがとう、先生！でも、いいのか、本当に？」

包丁は料理人にとっての命。易々と渡せるものである筈がない。しかし、間宮さんは躊躇いなく頷いて言った。

「その包丁は良い料理人が使うべきよ。私なんかじゃない、磯風ちゃんのような料理人に」

「そんな、私にとっては先生こそ最高の料理人だ」

「私は料理人なんかじゃないわ」

私の言葉に間宮さんは首を振って笑った。

「あの粉を鍋の中に入れた時、私は料理人を辞めたのよ」

「……………」

「だから、どうかそれは磯風ちゃんが使って」

「…………絶対に、大切にする」

「ありがとう」

間宮さんの声は涙声になっていた。

彼女も長いこと苦しんでいた。自分では終わりたいと思いつつ、ずっと薬への依存と薬がなくなった後の不安と恐怖で終わり切れな
いでいたのだ。

そして、この包丁。

これを私に餞別として渡すということは、すなわち覚悟なのだ。犬
見と向き合い、この鎮守府の終わりを見届ける覚悟。

私は、彼女のそれに応えねばならない。

☆

「あ」

「あ…………」

食堂から包丁ケースを持って出た所で、昼食の食器を下げに来たら
しい浜風とばったり遭遇した。

唐突な遭遇に私も浜風もしばらく固まっていたが、やがてゆっくり
と私は扉の前から体を避け、浜風も軽く会釈すると、体で扉を押し開
けて食堂の中に入っていった。

「…………仲直り、しなくちやな」

川内の言葉を思い出して、私は、落ち着きなくその場で浜風が出てくるのを待つこととなった。

今日を逃せばもしかしたら再び私達が話す機会はないかもしれない。い。

だからせめて、わだかまりは解いておきたい。

「浜風」

「……わざわざ、待ってたんですか」

食堂から再び出てきた浜風はそこで待っていた私を見て目を大きくして驚いている様子だった。

「その、この前のことなんだが、その……すまなかった！」
「……………」

仲直りなどしたこともないので、どうすればいいのかなどわからなかった。だから、私は謝った。

あの時、私が言ったことは明らかに浜風を傷つけた。そのことに関しては絶対に謝らなければならぬと思ったのだ。

浜風は頭を下げる私をしばらく無言のまま見つめていた様子だったが、やがて笑い声をもらった。

「な、なんだ？」

「いえ、すみません。少し、拍子抜けしてしまって。きっとまだ怒っていると思っていたので」

「浜風こそ、怒っているんじゃないのか？」

私がそう尋ねると、浜風は困った風に笑って同じように頭を下げた。

「いえ、私もあの時は言い過ぎたと後悔しています。本当に、ごめんなさい」

「あ、ああ」

こうして、悩んでいた時間の割にあっさりと、ものの数十秒で私達は仲直りを果たしたのであった。

「浦風と谷風にも謝らないとな」

「浦風は昨日から遠方の作戦海域に出ているので帰ってくるのは明後日くらいになるらしいですよ。谷風は、今日も夜遅くまで遠征です

ね」

「そう、か」

「浦風が帰ってきたらささやかですが、四人集まって食堂でご飯でも食べましょう。その時、二人にも謝れば大丈夫ですよ、きつと」

「……………」

駄目だ。それじゃ遅すぎる。

この鎮守府は今日で終わるんだから。

私が苦い顔をしていると、浜風が不思議そうに顔を覗き込んでくる。

「どうしたんですか、磯風？」

「い、いや」

待て。今、いつそのこと浜風に全て打ち明けてしまうのはどうだ。

一人では川内達と合流するのは厳しい。ならば、浜風や谷風に話して協力してもらえばいいんじゃないか。

「浜風、実は——」

この鎮守府の真実を話そうと口を開いた所で、一つの最悪の未来が見え、胸中に不安が湧き出てきた私は言葉を切った。

——もしも、浜風が私の提案を拒否したら？

この鎮守府の非道な行いを訴えても尚、浜風が犬見側についたら、どうなるのか。

そんなことはないと思いたい。信じたいが、私と浜風の喧嘩の原因は犬見の思想への賛否が元々の原因だ。

もしかしたら、浜風がまた犬見を庇いたて、私に協力してくれないかもしれない。それに、この鎮守府がなくなれば、大半の艦娘はおそらく処分されてしまうというリスクがある。

それを聞いて浜風がどう思うか。

私はそれでも犬見を止めるべきと選択したが、もし、浜風が私とは違う選択をしたのならば、きつと作戦決行の夜を待たず、私は犬見に拘束され、全てが水泡に帰す。

私の視線は右手に持った包丁ケース、しいては中の三徳包丁に向けられる。

もし、作戦が失敗すれば、意を決して協力してくれた間宮さんの覚悟まで踏みにじることになる。

それだけは駄目だ。

「どうしたんですか？　なんだか、様子がおかしいですけど……？」

「い、いや。すまない、なんでもない」

「え、気になるんですけど」

「すまない、全部終わったらきつと話すから」

「そうですか……？　あ、もう私戻らないといけないので、すみませんが、ここでー！」

「あ、ああ」

「では、また後でー！」

浜風は廊下を駆けていきながら私の方を振り向いて笑顔で手を振っていた。

私は手を振り返しながら、遠ざかっていく彼女を罪悪感に苛まれないがら見つめていた。

「すまない。もう、後はないんだ」

全部終わってから話せばきつとわかってもらえる。

私はそうして、作戦決行の夜を待った。

☆

その夜。私はドックから事前に朝一で整備してもらいたいという口実で置いておいてもらった自分の艀装を装着し、地下室へと急いだ。

この鎮守府における地下室とは主に遠征や出撃で得た資源の一時保存、あるいは艦娘を介して輸出入された物資を保管してある場所だ。

世界中の制海権が深海棲艦によって奪われた現在、海運の仕事は主に艦娘の携わるものとなっている。

故に、この地下室には所狭しと、輸出品、輸入品、一時保管品など数種類に区分された様々な物品が並んでおり、その全ての把握は提督ですら難しい。

例え、見慣れぬドラム缶が一つ増えていたところでその差異に気付く者などいないのだ。

「これが、先生が用意してくれた証拠品か」

一見すれば普通の輸送用ドラム缶だが、中身には昨日彼女に手配したありとあらゆるこの鎮守府の違法取引の証拠品が詰まっている。

保存のため密封状態にしておく必要のある物品もあるということで見えて確認することはできないが、ドラム缶の蓋に、間宮さんが指示した通りの貨物番号があるので、間違いはない。

「……よし、行くか」

ドラム缶を持って私は再度ドックへ戻ると、アンカーでドラム缶と艀装を接続し、出撃用のシャッターを開き、海面に浮かぶ。

その時だった。

「——こんな夜に散歩かい？ 磯風？」

「……提督か」

銃を片手に構え、銃口を私に向けてほほ笑む犬見の姿がそこにあった。

しかし、私には少しも焦りはない。

「すまないが、お前のやっていることを見過ぐすことはできない。皆は解放させてもらう」

「やめておけ。正義感で動いてもろくなことにはならないぞ」

「動かなくてもろくな結末は待ってないだろ？」

「ふふ、そうか、全て知ってしまったか」

犬見はそう言うのと二、三発、私に向けて引き金を引く。

真夜中のドックに銃声が響き渡り、私の周りに三つ程小石が落ちたかのような水音と波紋が立っていた。

私に当たった銃弾がひしゃげて海に落ちたことによるものだ。

「無駄だ。艀装を付けた艦娘にそんなものは通用しない」

「ああ、知っているとも」

艦娘は艀装を付けた瞬間に皮膚の表面に薄い透明の膜のようなものが張られる。それは、あらゆるダメージを艀装や着用している衣服などに分散させ、母体の身体を守ってくれるバリアのようなものだ。

勿論、ダメージが超過すれば艦装や衣服に分散しきれないダメージは本体に届くし、艦装が損傷するとそのバリアの効果は弱まってしまう。

しかし、少なくとも拳銃やアサルトライフルをどれだけ撃たれようが、艦娘には毛ほどのダメージも与えられないのだ。

「磯風、最後のチャンスだ。命令だ、『今すぐこちら側へ戻ってこい』
「断る」

「そうか。私の命令に逆らうということがどういうことかは、以前にも教えたね?」

『——ゆめゆめ忘れるな、裏を返せば、私の命令に逆らうことは、破滅に繋がるぞ』

犬見が以前私に言った言葉が脳裏をよぎる。

「そうだな、私はきつと破滅する。だが、その時はお前も一緒だ」

「そうか、覚悟の上か。ならば止めないよ。磯風、お前はもう、いらない」

そう言つて、犬見は私に背を向けてドックから出て行った。

恐らくは追撃隊を出して私が川内達と合流する前に沈めるつもりなのだろう。私は足早にランデブーポイントへ出発した。

☆

「——はあっ！ はあっ！」

ドラム缶を引っ張りながら夜の海を一人走り続けるというのは存外体力を奪われる。何しろ、陸と違って街灯なんて一つもない。

探照灯で前方をみいつぱいに照らし、コンパスと電探で方位と敵影を確認しながら常に気を張った状態で走り続ける。それは精神的にもキツイのだ。

「——っ！ 電探に反応……後ろから、二隻！ ついに追いつかれたか……！」

電探が後ろから私を追ってくる艦を二隻補足したところで、状況は一変した。

私は探照灯を消し、より航行速度を上げて、追手を巻こうとするが、距離は離れるどころかどんどん近づいてくる。

「……戦うしか、なやそうだな」

私は、航行速度を落として、ドラム缶と繋がっているアンカーを外すと、息を整えて臨戦態勢に入った。

少なからず戦闘になることは予期していたので、弾薬は十分に積んできている。

そう時間はかからず、私の耳にも艦娘の艤装の稼働音が近づき、次の瞬間、私の視界一面を強烈な光が包み込んだ。

「……見つけたよ」

「まさか、本当に……」

探照灯の光に目がくらみ、よく姿が見えない。

しかし、その声を聴いて私はすぐに追手の二人が誰なのかを理解した。

「谷風……浜風……！」

よりによって、この二人を私に差し向けるのか。

今は姿の見えぬ犬見に対し、歯ぎしりをしながら、悲しそうに私を見つめる浜風と谷風に口を開いた。

「すまないが、見逃してくれ」

「そいつはできないよ、磯風」

「なんで、こんなことをするんですか？ 提督を裏切るような真似……」

「聞いてくれ、二人とも！ あの提督はお前たちの思っているような人間じゃないんだ！」

それから数分間、私の口からはまるで決壊したダムのように絶えず言葉が流れ出した。これまでの犬見の言動に感じたこと、中将と出会ってわかったこと、間宮さんから聞いたこの鎮守府の非人道的な違法行為、そして、何より私達は犬見にとって、ただの道具にすぎないこと。

一通りすべて話し終えると、思い出したように私はむせ返る。

呼吸も忘れて言葉を吐き出し続けた。昼の時は言えなかった自分の思いを全てぶつけた。これで、きつと二人も理解して協力してくれる。

そう、信じていた。

「もう、やめてください」

しかし、私に向けられたのは差し伸べられる二人の手ではなく、その手に装着された連装砲の砲塔であった。

「え？」

私は訳が分からないと言わんばかりに疑問をぶつけた。しかし、二人からは苦渋にまみれた表情が返ってくるばかり。

「やっぱり、提督の話は本当だったみたいだね」

「は？ 提督の話？ なんだ、それ？」

「提督から話は聞きました。あなたと間宮さんが、裏でこの鎮守府への反逆を企てていると」

なんだ、その下らないホラ話は。そんなの嘘に決まっているだろう。まさか、そんな話を二人は信じたのか？

「先刻、間宮さんを拘束し、営倉に収監しました。磯風、あなたは騙されてたんですよ。あの女に」

「お、お前達……本気で言っているのか？」

声が震えた。

体が熱くなった。

私は、体の奥底で沸々と煮えたぎる憤怒を必死で抑え込むのに必死だった。

「さあ、磯風。もう帰ろう。提督も磯風は間宮に洗脳された被害者だから罰は与えないって言っていたよ」

「やめろ」

「昼に様子がおかしかったのはこれのせいだったんですね？ 相談してくればその場で正気に戻してあげられたかもしれないのに」

「やめてくれ」

これ以上、声を聞いていると私はお前達が嫌いになりそうだ。

「さ、馬鹿なことやってないで、とっとと帰ろうよ！ 私、遠征から帰ったばかりで駆り出されてもうくたくただよ！」

「そうですね、これ以上は明日に支障がでますし……ほら、磯風、いきましょー。」

「ふざけるな」

浜風が差し伸べた手を私は振り払った。

「なんで、そんなことが言えるんだ……あの間宮さんが、お前達も散々お世話になっていただろう？ そんなあの人が、本当に悪人だと思っ
ているのか!？」

「いや、そりゃ私だって信じたくはないけどさあ。けど、事実なんだよ

——」

「私もとても残念です。今でも信じられません。でも、信じるしかないでしょう——」

「——提督がそう言ったんだから」

「——提督がそう仰られたんですから」

その時の私の心情は筆舌しがたい。

体が焼けるように熱く、心臓の鼓動は高鳴り、呼吸は荒く、視界が朦朧としかけていた。悲しくて、苦しくて、許せなくて、信じたくなくて、耳を塞いでしまったかった、これ以上目を開けていたくなかった。

私の心はあらゆる負の感情に満ち満ちてしまっていた。

寸前まで私の胸中に渦めいていた言葉はこうだ。

——どうして、何一つうまくいってくれないのだ。

しかし、二人のこの言葉を聞いた瞬間、急に、そういつた感情が一気に消えた。

消えた、というより冷めたという方が正しいのかもしれない。

まるで、浴槽に満杯まで溜まっていたお湯が排水溝の蓋を開けた途端、あつという間に引いていく感じ。

そして、私は谷風に連装砲を向けてその引き金を引いていた。

「——ぐわっ!？」

この時のことはよく覚えている。

感情に任せて思わず撃ったとか、気が付いたら引き金を引いていたとか、そんな可愛らしいものではない。

むしろ、この時の私は、自分でもゾツとするほど冷静に、照準を合わせ、艤装の脆い箇所にあたることを念頭に、一切の躊躇なく谷風に

砲撃を行っていたのだ。

おかげで、彼女はこの一発で艦装が中破してしまっていた。

何故谷風に砲撃したのかと問われれば、私の連装砲が右手についており、向かって右側に立っていた彼女の方が狙いやすかった程度の理由しかない。

この時の私は、まるで機械のような殺意を二人に向けていた。

「磯風！ 何てことを！」

「洗脳されているのはお前達の方だよ、谷風、浜風」

私はすぐに砲塔を浜風に向けてもう一発砲撃を行う。

今度は躲かされてしまったしまったが、狼狽した浜風と谷風の表情を見て、依然、優位はこちらにあることを確信した。

「どうして、何一つうまくいかないんだ」

私の言葉には怒りはない。その言葉は嘆きだった。

私は続けて数発、谷風と浜風を狙いながら交互に砲撃を続けた。

「や、やめてください！ 磯風！ 落ち着いてください！」

「私は落ち着いているよ」

「駄目だよ、浜風！ こいつ、もう手遅れだ！ くそ！ 間宮め、よくも磯風を！」

もう、彼女達の誤解を解いてやる気にもなれない。

私の中で、半ば諦めにも近い残酷な覚悟が決まっているのだ。

「谷風、浜風。逃げるのなら早く逃げてくれ。私はわざわざお前達を追うことはない」

そうしてくれるなら、それが一番いい。

「……谷風、仕方ないです」

「ああ、わかっているよ。私だって覚悟決めたさ！ こうなったら仕方ない。提督の命令通り、せめて私達の手で楽にしてやるんだ……！」
畜生めッ！」

「そうか」

ああ、やっぱりうまくいかないのか。

でも、もういい。諦めたよ。

仕方ない。もう、仕方ないんだ。

「じゃあ、私はお前達を殺すよ」
さようならだ、私の親友達。

第五十四話 「雨、止まないな」

いつか孤児院にやってきた神父様に、私達もきつと幸せになれるかと尋ねたことがあった。

すると、神父様は笑って空を指さして、

『雨がいつか必ず止むように、いつまでも続く不幸というものもないのです』

と答えてくれた。

外国の人のようだったが、とても日本語が流暢で驚いたことをよく覚えている。

当時の私はいたくその言葉に感激したものだ。

苦しいのは今だけで、きつと生きていればいつか良いことがある。

これは私にとって希望そのものだった。

しかし、そんな言葉に縋って、明日には、一か月後には、一年後には、と希望を寄せてきた未来は、すぐに苦しい今となって過ぎ去った。

私はあと何度いつか来る幸せを先送りすればいいのだろうか。

先送りできる未来は、あとどれだけ残っているのだろうか。

——私の不安を他所に、雨はまだ止まない。

☆

『磯風、右に避けてから十時の方向に砲撃。その後左に回頭して全速前進』

うるさい。

私の頭の中で忌々しいあの男の指示が響き渡っていた。

この鎮守府に来てから一年と数か月。

日数にして四百日以上。一日十戦もの演習を行い、一度たりともその中で犬見が指示を欠かさなかったことはない。

累計にして四千戦以上、私はあの男の駒となって戦ってきたのだ。

いくら無思考な駒ともいえど、これだけの戦闘を積み重ねば、嫌でも彼の戦術思考が体に染み込む。

私の頭の中で、犬見が常に状況の最善手を指示してくるのだ。

「はあ……はあ……う、嘘でしょ……!!? いくら、演習部隊といえど、たった駆逐艦一隻に、ここまで一方的に追い詰められるなんて……!?!」

「つ、強い……」

気が付けば、私が一方的に浜風と谷風を蹂躪する形になっていた。大破してまともに動けなくなり、海面に膝をつく二人の脳天に私は両手の連装砲を向けている。

引き金を引けば、艦装のバリアがほとんど機能していない彼女達の頭は跡形もなく吹き飛ぶだろう。

「……終わりだ。浜風、谷風」

「ま、待ってよ！ 降参する！ だから撃たないでよ！」

「……………」

『撃つんだ、磯風』

うるさい、黙れ。

降参の意思を示すためか、連装砲と機銃を外して両手を上げる谷風を見つめる私の脳内で、また犬見の音が響く。

そのせいで私の顔が不快に歪んだためだろう。谷風は涙声で私を説得する。

「もう、よそうよ。なんで、友達同士で殺しあわなきゃならないのさ。磯風、お願いだから考え直して——」

ドン、という発砲音にかき消されてその後の言葉は聞こえなかった。

代わりに、夜の海に背中から倒れて沈んでいく谷風の身体がたてた水音と、横で浜風が小さく悲鳴を上げた声が聞こえた。

『それでいい』

「うるさい」

別にお前の声に従ったわけじゃない。

「容赦ないですね」

「見逃せばお前達は私を発見した場所を報告するんだろう？ 生かして帰す理由がないよ」

「そうですね、磯風が見逃してくれたら私達はそうするでしょう」

少しも悪びれずに私の言葉を肯定する浜風に私は砲塔を頭に押し付ける。

僅かに息をのむ音が聞こえたが、月明かりに照らされた彼女は依然私から視線を外さなかった。

「何か、言い残すことはあるか？」

「谷風には聞かなかったくせに、急に律儀ぶってどうしたんです？」

「ないのか？」

『どうした、磯風？ 早く撃ってしまえばいい』

お前の言葉には従わない。私は私のやりたいようにやる。

「遺言、ではないですが、一つ忠告をしましょうか」

「忠告？」

「磯風、あなたは提督を見誤っています」

「また洗脳されているとか言い出すのか？」

苛立たし気に砲塔を押し付けると、浜風は静かに首を振って続ける。

「あなたは提督が艦娘を道具程度にしか思っていない非道な人間と
思っているのでしょうか」

「お前がどう思おうと、あいつは絶対に生かしていない人間じゃない」

「違います。あなたは、彼の恐ろしさを理解していない」

「どういう意味だ？」

「あの人は私達のことを道具だと言いました。しかし、それは決して見下している、ないがしろにしているという意味ではない。むしろ、私達のことを私達以上に知り尽くし、自在に操ることができる。だから、彼にとって私達は『道具』なのではないでしょうか？」

つまり、私達の全てはあの男の思うがままだとも言いたいのだろうか。

中将や間宮さんと裏で画策したこの反乱すらも、奴にとっては想定内の出来事だと。

それならば、私を止めるために出撃させた谷風と浜風を返り討ちに
し、中将に証拠を届けることができても、奴の掌の上と言えるのか？
そんな訳はない。本当に私を道具のように操って見せると言うの

ならそもそも私が反乱を起こせる筈がない。

「言いたいことはそれだけか？」

「……はい」

「じゃあ、さようならだ、浜風」

「ねえ、磯風——」

浜風の頭に突き付けた砲塔が火を噴く直前、浜風は泣き笑いのような表情で最後に私にこう言った。

「——雨は、まだ止みそうにありませんね」

浜風の身体は暗い海へ引きずり込まれるように沈み、すぐに見えなくなつた。

半ば放心状態で海面を見つめ続ける私の頬を何か冷たいものが流れていった。

「……雨か」

いつの間にか、しとしとと雨が降り始めていた。

「——おい、磯風！ 良かった！ 無事に逃げてこられたんだね！」

「ああ……」

鎮守府の哨戒海域のギリギリ外側。そこで川内が心底安心したように手を振っているのが見えた。

谷風と浜風を沈めてからは、拍子抜けするほど何もなかった。追手が新たにくることもなかったし、深海棲艦と遭遇することもなかった。

途中から本降りになり始めた雨でお互いにずぶ濡れだったが、川内は私の姿を見つけるや否や哨戒海域など気にも留めずに一目散に駆け寄ってきて私はされるがまま彼女に強く抱き寄せられた。

「本当に、気が気じゃなかったよ！ 大丈夫？ どこか怪我とかしてない？」

「ああ、怪我はしていない」

「よし、じゃあさっさとここから離脱しようか！ これが、証拠品つてやつ？」

「ああ、そうだ」

川内はアンカーを外して一緒に来ていた別の艦娘に受け渡すと、艦隊の先頭に立つ。

「よし！ 今日ばかりは夜戦もスルーして全速力で鎮守府に帰るよ！」

☆

「磯風、よくぞ無事でここまで来た。貴艦に儼は心から敬意を表する」
「いや、私だけの力じゃない……間宮さんのおかげで、ここまで来られたんだ」

執務室で、中將はドラム缶を持って川内と共に現れた私に脱帽して頭を下げた。しかし、私は彼の賛辞に首を振って答えた。

ここまで来られたのは私の力だけではない。何より、ここにたどり着くまでに犠牲にしてきたものが余りにも多過ぎた。故に決して誇るべきことではないのだ。

「……それが、証拠か？」

「ああ、この中に全てが入っている」

「では、開けさせてもらおうかの」

中將がドラム缶へ手を伸ばしたその時、突然執務室の黒電話が鳴り響く。

一瞬、川内と二人で体を震わせた私だったが、ただの電話であることに胸を撫でおろしてため息をついた。

「ふむ、こんな夜更けに誰かのう？」

中將が黒電話の受話器を手にとって耳に当ててから数秒後、彼の表情が強張ったのが見て取れた。

「……磯風」

「なんだ？」

「おぬしに犬見からじゃ」

「——っ！ わかった、代わろう」

中將から受話器を受け取り、ゆっくりと耳に押し当てる。
すると、聞きなれた声が私の名前を呼んだ。

『やあ、磯風。無事に荷物は届けられたようだね』

「犬見……！ 間宮さんに手は出してないだろうな！」

『浜風と谷風から聞いただろう？ 拘束はさせてもらっている。今は
営倉だよ』

「今に見ている。次はお前が牢獄に閉じ込められる番だ」

『ほう、それは楽しみだ。清廉潔白な私をどうやって牢獄送りにする
のかな？』

こいつ、どの口がいうんだ。

相変わらず、焦りの見えない犬見の声に私は苛立ちを募らせてい
た。

正確にはそれは不安だったのかもしれない。

何故、ここまで追い詰められたにもかかわらず、彼にはまだ余裕が
見られるのか。

『私はね、磯風。今とても清々しい気分だよ。例えるなら、1000
ピースくらいのジグソーパズルの最後の1ピースを埋めた時のよう
な、大いなる達成感。私の胸の内は今、そんなものに満ち溢れている』
「急に、なんだ？」

『思えば、長かった。始まりは、この薬物による艦娘の効率化に重大な
欠陥が見つかったことだった。だから、鎮守府を一旦リセットする必
要があったんだ。具体的にはこの事実を知る関係者と薬物依存が進
みすぎた艦娘の抹消だ』

なんだ？ 何の話を始めているんだ？

受話器の向こうで楽しみに語り始める犬見に対して、私はここで受
話器を置くこともできた筈だが、受話器が耳に張り付いたかのように
離すことができなかった。

『私の計画に必要なだったのは、この鎮守府の闇に気づき反乱を起こす
ような勇者だった。その候補が、孤児院から買い取った君たち四人
だ』

「勇者……？」

『君たち四人を別々の部隊に配置し、それぞれに情報を得る機会を与
えた。結果としては谷風と浦風は気づきもしなかった。浜風は資料
に挟んでおいた鎮守府の輸出入履歴の違和感から、コカインの輸入に
はたどり着いたが、心酔のあまり私に対して反抗する気概をなくして

いた。君が唯一、この鎮守府の闇に辿り着き、尚且つそれを止めようと立ち上がった勇者となってくれた』

「は……う？ え……う？」

『やはり、外部の環境に触れさせ、間宮とも接触の機会を増やしたのが良かった。丁度、目の上のたんこぶとなっていた中将与君が手を組んだことを暗殺失敗から察した時、私は計画に中将の殺害を加えると同時にその成功を確信したよ』

やめろ、何を言っているんだ。それじゃ、まるで、私が今まで犬見の計画を献身的に助力していたようではないか。

頭の中で不安の渦が大きくなっていく中、私は犬見に怒鳴るように尋ねた。

「じ、じゃあ、谷風と浜風を私が沈めたのも計画通りだというのか!？」
『ああ、彼女達が振り返りに遭うのはわかっていたからね。君の退路を完全に断つという役割を果たしてもらった。孤児院からの友であり、味方である彼女達を手にかけて君は、真正正銘の殺人者となったわけだ。今丁度向かわせているが、浜風と谷風の艦装をサルベージすれば証拠はあがる。艦娘が味方に対して敵意を持って甚大な被害を与える、それは軍事裁判で極刑を免れない罪だ。これで君も何があるうと私の計画の完遂と共に消えてくれる』

「な、何を言おうが、ここに証拠がある限り——」

犬見の言葉に反論しかけたところで、私の言葉は止まった。

受話器の向こうからは彼の笑いを噛み殺した声が聞こえてくる。

「まさか……いや、そんな訳ない……」

ドラム缶。証拠が詰まっている筈のそれを見つめる私の声は震えていた。

ゆつくり腰のホルダーに取り付けた間宮さんの包丁に触れ、何度も私は頭の中の想像をかき消すように「そんな訳ない」と呪文のように唱え続ける。

『磯風、実に健気だね』

「やめろ」

『私は君たち艦娘のことを道具だと公言してきた。ならば、それは間

「宮にも当てはまることだと思わないか？」

「やめろ」

『ならば、何故間宮が今までずっと私の指示で動いていたと考えない？』

「やめろ！ 先生は、間宮さんは、ずっと苦しんで……だから、全部終わらせた……！」

消え入るような私の声に犬見は容赦なく聞きたくなかった言葉をぶつけた。

『磯風、よくぞ、そのドラム缶を無事中将の元へ届けてくれた。』

——私のために、ありがとう』

「中将！ 川内！ ドラム缶から離れろ！」

次の瞬間、轟音と光と熱が一齐に襲いかかり、執務室は爆炎に包まれた。

☆

簡潔に言えば、私は助かった。目が覚めた時は病院の一室で、一週間ほど眠っていたらしい。

すぐ横を見ると、松葉杖をベッドに立てかけて座る川内の姿があった。

外は雨が降っているのか、窓には水滴が滴り、小さく雨音が室内まで届いていた。

私がゆっくりと体を起こすと、川内が気力の感じられない薄い笑みを浮かべる。

「やあ、おはよう」

「……………どうなったんだ？」

「どうもこうも、全て終わったよ」

素っ気なく答えた彼女の表情は諦念に満ちていた。

彼女の話の聞くに、艦娘で、しかもあの時は急いで艦装をつけた状態で執務室へ向かったために艦装のバリアが機能し、私と川内はあの爆発の中軽症で済んだらしい。

私も強く頭を打ち付けたくらいで外傷はほとんどないとのことだ。

「中将は、どうなったんだ？」

「……………死んだよ。三日前くらいに葬儀も終わってる。遺体は跡形もなかったけれどね」

「すまない……………」

「謝らないですよ。殴りたくなる」

真顔のまま拳を震わせる彼女に、私は押し黙って顔を俯けた。

「ごめん、磯風は何も悪くないって頭ではわかってるんだよ。磯風の方が大変なのに、お門違いもいい所だっわわわわ。だけど……………悔しくて……………」

「わかっている。私は、これからどうなるんだ？」

「多分すぐに軍事裁判だよ。見る？ 新聞記事」

川内に渡された新聞記事の一面には大きく私の鎮守府の写真が載っていた。

鎮守府内で薬物を密輸していた艦娘がいたことが発覚。犬見と中将が協力してこの解決にあたるも、追い詰められた主犯の一人が中将の鎮守府へ爆発物をしかけ、甚大な被害を生んだという旨の記事が書かれている。

主犯は私と間宮さんだ。

私は谷風、浜風の撃沈と鎮守府の爆破、中将の殺害で薬物中毒の殺人鬼扱い。

間宮さんはコカインの密輸入、さらに艦娘への食事へそれを混入し、洗脳を試みていたとまで言いたい放題書かれている。

私は思わず新聞を握りつぶしていた。

「犬見か」

「そうだね。あいつ、提督の葬式にまで顔出してきやがって、『彼は私の協力者であり良き友でもあった』とか抜かしやがって……………足の傷が回復したら多分殺してたよ」

これが、奴の計画の全貌というわけだ。

私は犬見の思うがままに操られ、最悪の形で全ての罪を背負わされる。結果的に彼の抱える問題は私と共に全て消え去ってしまうわけだ。

新聞記事を横のゴミ箱に投げ入れようと視線を横にやると、少し焦

げ付いた包丁ケースが視界に入る。

「……無事だったのか」

「ああ、その包丁は艤装のバリアと一緒に防護されてたみたいで、少し包丁ケースは焦げてるけれど中身は傷一つついてないよ。大事な物なの？」

「ああ、先生からもらったんだ」

「先生？」

「先生は、間宮さんは、今はもう牢獄か？」

「そう、間宮のなんだ。磯風、記事は最後まで読みなよ」

「何？」

丸めた記事をもう一度開いて記事の続きを読むと、間宮さんは営倉にて拘束中に着物の帯で首を吊って自殺したとある。

「自殺、だと……」

「間宮ってさ、確か磯風にあのドラム缶渡した奴だよな？ 結局この人も犬見に利用されていただけだったってことなんだろうね」

「……はは」

乾いた笑い声をあげる私を見て眉をひそめると、川内は包丁ケースを持って病室を出ようとする。

「これは処分しとくよ、持ってて気持ちの悪いもんでもないでしょ？」

「待ってくれ、それは返してくれないか？」

「……君を裏切った奴の包丁だよ？」

「いい。どうせ、もう長くはない命だ。本人がいないなら、その包丁に恨み言を吐かせてもらおうよ」

「そう」

川内は私に包丁を返すと、そのまま松葉杖をついて病室の出口へと向かう。

私は彼女の背中に再度声をかけた。

「次は、もうないだろうな」

「……そうだね、ごめん。今私達の鎮守府、提督がいないから、本当に何もできなくて……本当は、力になってあげたいんだけど」

「その気持ちだけで十分だ。本当にありがとう。お前と喋っている時

はいつも楽しかったよ、川内」

「私もだよ、磯風」

その別れの言葉を最後に川内は病室から出て行った。

私はすっかり脱力して再びベッドに倒れこむと、包丁ケースを撫でながら、じつと天井を見つめていた。

「まったく、先生のせいで全部台無しだ。私は、全部捨てて、浜風と、谷風まで手にかけて……それでも必死に先生が集めてくれた証拠を届けたのに、あんな裏切り方をされるとはな」

誰もいない病室で、まるで間宮さんがいるかのように私は独り言を呟き始めた。

「しかも、そこまでやって結局自分も罪を被せられて自殺だなんて、全くいい気味だ。あなたみたいいな人を先生と崇めて信じていた自分が恥ずかしい」

天井が霞んでよく見えなくなってきた。

「でも、なんでだろうな……怒りとか、憎しみとか、そういうのが全然湧いてこないんだ」

『……本当に包丁捌きや火入れ、調味料の扱いから何もかも上手になったわね。目を見張る成長速度だわ。見た目はともかくとして……』

『な、なんというか……個性的な料理と味ね……かはっ！』

『いえ、なんでもないの。でも、きつと、磯風ちゃんは一流の料理人になれるわ。私なんかよりも遥かに凄腕の料理人に』

『なんだか、浮かない顔ね、磯風ちゃん。今日は四人でお出かけだったんでしょ？』

『喧嘩、しちゃったのね』

『私だって嫌よ。こんな薬を自分の料理に入れるなんて……でも……もうダメなのよ。私は、その薬がないと……！』

『その包丁は良い料理人が使うべきよ。私なんかじゃない、磯風ちゃんのような料理人に』

『だから、どうかそれは磯風ちゃんが使って』

包丁を一撫でするごとに、間宮さんと過ごした日々の数々が思い起

こされていく。

「――間宮さん、なんで……酷いじゃないか……私は、悲しいよ……」
あふれ出る涙を抑えるように目頭に両腕を乗せた。

雨がいつか必ず止むように、いつまでも続く不幸というものもない。昔、そう教えてくれた神父様がいたことを思い出した。

雨はもう、随分と長いこと降り続けている。私はずっと雨宿りした
ままだ。

以前まで隣で一緒に雨宿りしていた友も、今はもういない。

そして、私ももうすぐいなくなる。

「雨、止まないな」

降りしきる雨の中、冷え切った体で雨宿りを続ける私に『傘』が差し伸べられるのは、もう少し先の話だ。

第五十五話「ウチはどいつもこいつも友達少ないからな」

「へー、あなた艦娘なのね！ 私と友達になろうよ！ 私は、——
——っていうの！」

今は名前も思い出せないが、少女はそう言っただけに話しかけてきた。

「……あっち行って欲しいでち」

「あなた、いつも一人でいるよね？」

人と話すことが苦手だった。

そんな性格のせいで、この鎮守府に来てから二年程が経った今でも、私には友人と呼べるような存在はおらず、すっかり孤立していたのだ。

「私みたいなのと話しているとお前も友達減るでちよ」

「心配してくれてるの？ 優しいね！ まずまず友達になりたいな！」

「……………う、ぐすっ」

「え、何で泣いてるの!? ごめん！ なんか、ごめんなさい！」

輝かんばかりの笑顔を見せながら、こんな私に友達になりたいと手を差し伸べてくれた少女を見て、それまでため込んでいた色んな思いが急に湧き上がってきた私は耐え切れず涙を流してしまったのだ。

「——伊58、いつも私達を守ってくれてありがとう！ 今日もお疲れ様！」

その日から、私が任務を終えると少女に会いに行くのが日課になった。

会いに行く度に彼女は私に労いの言葉をかけてくれて、私はその度に舞い上がっていたものだ。

そうして二人で会ってやることと言えば、適当に街を歩いたり、とりとめのない話題で談笑したり。

私は話が上手くなかったので大体的場合、少女が色んな話題を提供しては二人で盛り上がるのがほとんどだった。

少女にとつてはどうということのない日常なのかもしれないが、私にとつてその日々はそれまでの人生の中で一番幸せと言つて過言のないものであつた。

「これからも、すつと私達を守つてね、約束だよ！」

いつか、そんなことを彼女に言われた。

私は当然だ、と二つ返事で指切りをした。私自身、彼女を特別に想つていたのだと思う。命を賭けてでも彼女を守ろうと本気で思つていた。

「私達、すつと友達だよ！」

彼女の笑みは私には眩しくて、その笑顔の裏に隠れた醜悪な笑みなど欠片も見えていなかった。

それだけ私にとつてあの日々は夢のように素晴らしく幸せな時間だったのだ。

しかし、数年後、爆撃音と町を埋め尽くす炎と逃げ惑い倒れてゆく人々の最中にその時間は終わった。

鎮守府が深海棲艦の奇襲を受けたのだ。

「——なんで、なんでもつと早く来てくれなかったの!? お父さんとお母さんが……私達を守つてくれるつて約束したのに……!」

燃え盛る彼女の家の前で、体中を擦り傷や火傷、打撲痕で埋め尽くす少女は私に怒鳴つた。

その日の私は遠征任務で鎮守府への奇襲時にはいなかったため、救助に向かうまでに時間がかつたのだ。

私は彼女に誠心誠意泣いて謝り続けた。しかし、彼女の口から許しの言葉が出ることはなく、むしろ徐々にその怒鳴り声は大きくなっていくばかりだった。

「艦娘は深海棲艦から人間を守るための兵器でしょ!? だったらなんでお父さんとお母さんを守つてくれなかったのよ! この役立たず!」

兵器。彼女の口から私を代名する単語としてそれが発せられた時、

私は長い夢から覚めたような気分だった。

「これじゃ、わざわざあんたを友達にしてやった意味がないじゃない！　こんなことならもっと強い艦娘と友達になっておくべきだった！」

少女の叫ぶ『友達』の意味が決してそのままのものではないことを私は理解した。

「お前のせいでお父さんとお母さんが死んだんだ！　お前が、お前が殺したんだ！」

既に彼女の声は耳には届いていなかった。

この少女は私と友達になりたかったわけじゃない。私という友達^{兵器}を近くに置いて安全を確保しておきたかっただけなのだ。

そのために、私に近づき、取り入ったのだ。

有事の際には自分を最前線で守ってくれるように。

「お前なんか、友達じゃない！」

友達だと思っていたのは、私だけだった。裏切られた、と思った。

世界の見え方が180°変わった。あれだけ眩しい笑顔に向けていた彼女は、今や歪んだ醜い表情しか見せてくれない。

大きな喪失感に包まれ、私が膝から崩れ落ちたその時、彼は現れた。

「――道具に責任はない。道具の不始末は総じて使用者の能力不足だ」

「え？」

現れたのはこの爆撃の炎が蔓延する中、不自然に傷一つない白い軍服を着て不敵に笑う男だった。

少女はその姿を見て一目で救助にかけつけてくれた軍人と認識したのか、私を捨て置いて一目散に男に駆け寄った。

「軍の兵隊さんですか!?　助けてください！　お父さんとお母さんも死んでしまって、逃げ場もなくて、私どうしたらいいか不安で不安で――」

突然、パン、と乾いた音が響いて、少女は胸から血を流して倒れた。

見れば、男の手には黒い拳銃が握られていた。

「安心していい、私は君の鎮守府の提督から救助の要請を受けてやつ

て来た。もつとも、完全に手遅れのようなのだが。まあ、とにかく君には危害を加えるつもりはない」

目の前で唐突に行われた殺人に身を震わせながら彼を見つめる私に男はそう言つて拳銃を懐にしまった。

「救助に来たというなら、な、何故、彼女を……？」

「生かす理由がなかったからね」

当然のように男は言つた。

「両親も失い、行く当てもなく、年端もいかない。しかも、君に逆恨みをしていた。生かしたところで幸せにはなれないし、もしかしたら君に危害を加える可能性もある。これはもう使い物にならないよ」

少女が私を兵器としてしか見ていなかったのと同じように、男も少女をまるで壊れた道具のように扱つていた。

改めて動かなくなった少女の顔を見る。自分を裏切つた彼女に私はやはり怒りを覚えられなかった。ただ、深い悲壮感だけが胸の内を支配していた。

「全く、そうやって無意味に傷ついて、不必要に苦しんで、何か楽しいのかい？ そんな無駄なことはやめてしまいなさい」

「そんなこと言つても……」

私の様子に呆れたように口を挟む男は続けた。

「道具でありなさい、伊58。そうすれば、こんな下らないことで傷つかずに済むから」

「道具……」

訝し気な表情の私に男は笑いながら言つた。

「教えてあげよう、君に道具として扱われることの幸せというものを」
顔を上げると、男は私に手を差し伸べていた。

「あなたは、私を裏切らない、でちか？」

「私は使える道具を捨てるつもりはないよ。心配せずとも、壊れるまで大事に使つてあげよう」

そして、一拍おいて伸ばしかけた私の手を取つた。

「私は、^{道具}君を裏切らない」

これが、犬見提督との初めての出会いだった。

自分以外のものを道具かゴミとしか扱わず、己の利益のみを追求する彼は紛れもない極悪人だ。

しかし、あの少女と違つてその腹の内を臆面もなく晒すことのできる生粋の悪。

だから、私は彼の言葉を信じることにした。

嘘で塗り固めて綺麗に取り繕われた濁った言葉よりも、自己中心的で利を追求する純粋な暴言の方が、私には心地よく聞こえたのだ。

他の色の介在の余地などない程に純粋な漆黒。だからこそ、犬見提督は信じられる。故に、私は彼の『道具』になった。

——もう二度と裏切られたくないから、もう二度とあんな思いはしたくないから。

☆

「——これで、私の話は終わりだ」

「……………で？　だから、どうしたって言うんでちか？」

私は自らの凄惨な過去を語り終えた磯風に冷たく言い放った。

「確かに提督のせいで相当に辛い思いをしてお前が今ここにいて、それは痛いほどわかったでち。ご愁傷様でちね。でも、提督が文字通り人を人とも思わない悪人だつてことぐらいこっちは百も承知でち！　わかつていて、それでも私は提督の道具になつてるんでち！　そんな話で私が心変わりすると思つたら大間違いでちよ、なめんな！」

「……………」

一通りまくし立てて、一旦言葉を切るも、磯風は薄っすらと笑みを浮かべたまま無言で私を見つめているだけだった。

「何とか言えでち！」

「伊58、人と仲良くするのは怖いか？」

「……………」

虚を突かれた思いだった。

「お前を見ていてな、思つたよ。なんでお前は皆と話していると楽しそうにしているのに、距離が近づくと、途端に自分が敵であることを強調して遠ざけようとするんだらうなつて」

「だ、だって、普通に考えておかしいでち。敵と仲良くするだなんて」

「だが、お前の立場からすれば、それは好都合の筈だろう？ あえて自分が敵であることを主張して警戒させるようなこと、しなくていいはずだ」

嫌な感覚だった。

まるで、自分の心の内を見透かされているような。気色悪い感覚を磯風に覚えていた。

「お前は——」

「——やめろっ！」

思わず磯風の胸倉を掴んでいた。怒りではなく、焦燥からだった。「犬見に救われるということは同時に何かを失うということだ。私はあの孤児院から救われた代償に、家族同然の親友達を失った」

磯風はまっすぐに私の目を見つめて尋ねた。

「お前は、あの男に救われて、何を失った？」

「私は……」

裏切られたくない、捨てられたくない。何より傷つきたくない。

だから、私は提督の道具になることでその理想を手に入れた。

裏切られないし、捨てられないし、むやみに傷つくこともなくなつた。

だが、私はいつの間にか提督以外の誰とも仲良くできなくなった。他人に近づくことを恐れて止め、近づいてくるものは遠ざけるようになっていた。

『君が私の命令通りに動くうちは、私には君が必要だ』

私は提督に依存することで、他の誰かを信じられなくなっていた？

『あなた達、気持ち悪いでち』

『——おい！ おい、どうした？ 大丈夫か？ なんか苦しそうだぞ？』

『——っ！ 触るなッ！』

『うおっ！』

『違う……私は、そんな下らない理由で磯風ちゃんと友達になつたんじゃない……！ なんて、そんな酷いこと言うの……？』

「……違う、私は、何も奪われてなんて、いない、でち」

「そうか、わかった」

目を伏せながら自分に言い聞かせるように答える私に、磯風は優しく微笑んだ。

そして、そのまま私の手をゆつくりと振りほどいて部屋を出ていこうとする彼女に私は思わず尋ねた。

「なんで、私に自分の過去を話したんでちか？ お前自身、話してて気持ちの良い話でもなかった筈でち」

「いや、なんとなくだ」

「は、はあ？」

「強いて言えば、お前に私のことを知ってもらいたかった、かな？」

「何のために？」

「おいおい、決まってるだろう？ お前と仲良くなるためだよ」

「何で、お前達は皆、そうやって……！」

むやみに、ひたすらに、何の躊躇もなく、何の恐怖もなく、誰かに近づぐことができるのだ。

表情を歪めた私に向き直り、磯風は笑って言った。

「ウチはどいつもこいつも友達少ないからな」

☆

「——美海、ずっと部屋の前にいたのか？」

部屋を出ると、ドアのすぐ横でしゃがみ込んでいる美海の姿があった。

磯風が声をかけると顔を上げて泣きはらした跡の見える赤くなつた目が見えた。

「磯風ちゃん、私決めたよ！」

磯風を見るなり、立ち上がった美海は目元をこすって声を大にして叫んだ。

「もう頭来たよ！ こうなったら、意地でも伊58さんと友達になつてやる！ どんなに嫌がられてでも！ 逃げられたって地の果てまで追い詰める所存だよ！」

「はは、それでこそ美海だ」

「そう！ プリンツさんの如く！」

「それはやめろ」

プリンツの生き方は子供の教育によろしくない。

「何？ 呼んだあ？」

「うお!? なんだ、皆してどうしたんだ？」

噂をしていればプリンツの声が聞こえてきたのでギョツとして磯風が振り向くとそこには磯風を除く残りの七丈島艦隊の面々全員が集合していた。

「いや、伊58の奴、様子おかしかったからやっぱ心配だな」

「皆で見に来たってわけよ、皆で、ね？」

「私は伊58じゃなくてあなた達が何かしでかさないか心配について来たのよ。勘違いしないでもらえる？」

「まあまあ、それで、伊58は大丈夫そうなんですか？」

「ああ、そうだな。私達が今してやれることは何もなさそうだ」

そう答えてから磯風は不敵な笑みを浮かべて続けた。

「今、はな」

☆

「——もしもし、提督でちか？ 伊58でち」

『ついさつき経過報告は聞いたが？』

「はい、状況が変わりまして、任務完了の報告をするでち」

『……ほう』

「五日後に七丈島鎮守府提督の毒殺が完了するでち。これから後処理をして標的の死亡前にいち早く離脱し、鎮守府に帰投する予定でち」

『了解した。では護衛艦隊を派遣するから三日後の夜に七丈島で合流し、共に帰投せよ』

「了解でち」

『伊58、任務ご苦労だった。流石は私の道具だ』

「はい、ありがとうございますでち」

私は通信機を切り、小さく息を吐いた。

「悪いでちな、七丈島艦隊。これで永遠におさらばでち」

第五十六話 「私は、七丈島鎮守府を信じたいでち！」

「——あれから三日。それももう少しで過ぎ去ろうとしていますね」
提督は目を通していた書類を机に置いて壁の時計に目を向ける。
時計の短針が丁度10の数字を指示している。

あと、二時間で、伊58と約束を交わした三日目が終わろうとしていた。

「——気分はどうでちか、提督？」

「今日は矢矧がないので仕事が全く進まなくて憂鬱な気分ですよ」

「そう言えば、他の奴らも今日は見ないでちな」

「……結果通知に来てくださったんですよね？」

音もなく執務室に入ってきた伊58を見て提督はそう確認する。

三日間。それで伊58が七丈島艦隊に対する敵対心に変化がなければ、提督は死ぬ。

彼は三日前に伊58と密約を交わし、毒薬を摂取している。彼女の持つ解毒剤がなければ、これから二日後に彼は心臓麻痺で死ぬことになるのだ。

「解毒剤はあげられないでちよ」

「……そうです、か」

一瞬だけ表情が強張ったが、すぐにいつもの飄々とした笑顔に戻った提督は大きいため息をついて座っている椅子の背もたれにより深く身体を落とした。

「いやに落ち着いているでちね」

「覚悟は、しましたから」

一体、どれだけの覚悟をしていれば人間は死刑宣告を受けてすぐに笑顔を浮かべることができるようだろうか。

まるでゲームをやっていて自分のプレイヤーが死んでしまった時のような、自分のことなのに他人事かのような気楽な諦観を伊58は彼から感じていた。

「死ぬのが怖くないんでちか？」

「大丈夫です。実はこの三日間、万が一のために七丈島鎮守府の引継ぎを任せられそうな方に数人声をかけておきました。なので私が死んでも後のことは安心です」

「お前自身、どうなのかと聞いているでち」

「あまり死にたくはないですが、怖くはないです」

そう断言して提督はもう一度伊58に笑顔を見せた。

絶句する彼女に彼は眼鏡を外してレンズをハンカチで拭きながら再び口を開いた。

「私はある目的さえ達成できればいいんです。そこに私の生死は関係ありません。私の意志を継いで目的を果たしてくれる誰かがいるのなら、安堵こそあれ死に恐怖はありませんよ」

「この奴らは皆どこかおかしい奴らばかりでちが、お前も大概、狂つてるでちな」

自分の命よりも重いものがある。そのためならば己の死に恐怖はないと言う。

まさに文字通り死んでも成し遂げる覚悟といったところだ。伊58はその答えに呆れたように、しかし何か納得したようにため息をついた。

「それに、まだ二日ありますからね。幸運にも解毒薬が作れるかもしれないし、もしかしたら毒薬が作用しないかもしれない。覚悟はできていますが、決して希望を捨てた訳でもありませんよ」

「まあ、せいぜい未練のない余生にするといいでちよ。それじゃ、私はもう行くでち」

「そうですか、もう私とは会うことはないでしょうが、また遊びに来てくださいいね」

「……なんでちかそれ。二度と来ないでちよ」

伊58はそう言っていると、提督の返事も待たずにさっさと執務室を出て行ってしまった。

☆

ドック。しかし、ここは七丈島鎮守府のドックだ。ただでさえ日頃使っていないドックはすっかり荒れ果てており、まさにその最低限の

機能しか果たさないであろうことはすぐに分かった。

私はゆつくりと出撃区画の海面に足を付ける。思えば海に入るのは随分久しぶりな気がする。

「——なんだ、もう行くのか？」

「……よく、ここがわかったでちね」

「ウチには度し難いストーカーがいてな。そいつが教えてくれた」

振り向けば磯風と美海の姿が見えた。

磯風はともかく美海とはあれから一言も言葉を交わすどころかお互い姿すら見ていなかったの。若干気まずいが、今更そんなことを気にしても仕方がない。

「……………」

「ほら、美海」

「わ、わかってる！」

磯風に背中を押されて私の目の前によろけながら歩み寄ってきた美海は私と視線を合わせたり外したりを繰り返しながらおもむろに手を差し出した。

その手の中には何かぼんやりと光るものが見える。

「これは、真珠のイヤリング？」

「あげる」

真珠をそのまま銀細工の台座に取り付けただけの単純な作りのそれは、おそらくは売っているものではない。加工は誰かに手伝ってもらったのだろうが、微妙な作りの甘さから見ておそらくは手製のイヤリングだ。

「伊58さんと会ったあの日に海で見つけたの。本当はお父さんにあげるつもりだったけれど、伊58さんにあげる」

「それならお父さんに渡した方がいいでちよ」

「いいの！ これは友達の証なんだから！」

「は？ 友達の証？」

「実は私と美海もつけているんだぞ」

見れば、彼女達の片耳に大きさは微妙に違えど、同じような真珠のイヤリングが彼女達の耳につけられていた。

「別に、私はお前達と友達だなんて思っていないでちからそんなの、いないでち」

「じゃあ、嫌がらせだから!」

「余計いららないでち!」

「どうでもいいから付けろお!」

「ぐわ! や、やめるでち! 耳引っ張んなでち!」

逃げようとした所をイライラが爆発したのか美海に無理やり耳を引っ張られてイヤリングを取り付けられてしまう。

「絶対外さないでね!」

「……まあ、高値で売れそうだし、もったいないでちから真珠取り外すまでは付けておいてやるでちよ」

「なにそれヒドい!」

「はっはっは、きつと照れてるんだぞ、美海」

「はあ……まあ、もうそれでいいでちよ」

最後まで変な奴らだと思いながら私は潜水を始める。

私の身体が海に潜りきる前に、磯風と美海は私に言った。

「じゃあ、またいつでも来い」

「待ってるからね!」

「……なんでちかそれ。二度と来ないでちよ」

揃いも揃ってまた来いなどとおかしなことを言う。全くもって理解しがたい提督と艦娘だ。

私は、暗い海の中へと沈み、そして、もう到着している筈の護衛艦隊とのランデブーポイントへと向かった。

☆

「——ふんふん、ふふーん! ふーんふーんふーん!」

「もう少し静かにできないのか、那珂」

「トップアイドルを目指す那珂ちゃんとしては、こういう暇な時間こそダンスと歌の練習に充てなきゃだと思っただよねー! 地道な努力を重ねる那珂ちゃん偉い!」

「暇な時間って……今一応作戦中なんだけれど……」

七丈島鎮守府から5 kmほど離れた場所。そこに四人の艦娘が

停泊していた。

那珂、日向、伊勢、そして――

「浮かれるはええけど、しつかり任務は遂行してもらうけえの。足引つ張ったらただじゃおかんから」

「は、はーい、浦風ちゃん。那珂ちゃん、ちよつぴし反省」

「まあ、そうなるな」

「は、はは……相変わらずおつかないなあ、ウチの旗艦は……」

旗艦の浦風が横目で睨みを利かせると、たちどころに那珂は縮こまって大人しくなる。

その威圧感に日向と伊勢も思わず背筋が伸びてしまう。

「ん、来たみたいじゃね」

「お前達が護衛艦隊でちか？」

浦風の声と同時に海中から伊58が姿を現した。

「如何にも、ウチらがあんたの護衛を提督さんから命令された護衛艦隊じゃ。ウチは旗艦の浦風。僚艦に日向、伊勢、那珂がおる」

「主力艦隊に名前を連ねる奴ばかりでちな。私みたいな潜水艦一隻には余剰すぎる気がするでちが」

「それだけ、あんたのやったことは提督さんに評価されとるってことじゃけえ。提督さんからも話したいことがあるらしいから今通信機で鎮守府と繋ぐけえ、ちよつち待つとき」

浦風が首から下げた小型の通信機を操作すると、すぐに軽いノイズ音の後に彼女達には聞きなれた犬見提督の声が聞こえて来た。

『伊58、無事合流したか。任務ご苦労だった』

「はい、でち」

緊張気味に答える伊58に柔らかい口調の犬見は尋ねた。

『ところで、一体どのようなにして七丈島鎮守府の提督を暗殺したのかな？ 是非聞かせて欲しい』

「それは、遅効性の毒を盛って五日後には心臓麻痺で死ぬように――」

『ははは、嘘はいけないな』

その言葉に伊58は息を飲んだ。

『そんな毒など聞いたこともないし、最初から毒なんて持っていなかっただろう?』

「……それは」

『聞かせてくれ、一体、どうやって、彼を暗殺したんだい?』

「て、提督! 七丈島艦隊に提督の危惧するような脅威なんてないでち!」

『どうして、そう思うのかな?』

伊58と犬見の会話を聞く周りの護衛艦隊の表情は夜の闇でうかがい知れない。無言の重圧に耐えながら、それでも必死に伊58は口を回した。

「七丈島艦隊の奴らにはまず、ろくな装備なんて置いてないでち。あんなザマで反逆行為なんて不可能でち。それに、そもそもあいつら自体、提督含めて全員すつかりふ抜けきつて、例え反乱を起こしたとしても私一人でも対処できるような雑魚ばかりでち」

『それで?』

「あ、あんな馬鹿な奴らが提督の障害になる余地を感じないでち」

——敵である私に、ただ真つすぐに、仲良くしたいだとか、友達になりたいだとか言ってしまう、あんな馬鹿共なんて。

「どうせ、放っておいてもそのうち勝手に自滅するんじゃないでちかね?」

『だから?』

「だ、だから……お願いします、あいつらは見逃してくれないでちか、いや、もう少し猶予をくださいでち……少しでも危険性が見られればすぐに私が始末をつけるでち……!」

——ついに言ってしまった。どうやら七丈島艦隊にいるうちに馬鹿が移ったらしい。いつもの私なら絶対に提督にこんな恐ろしいことは口にしなかつただろう。

『誰かを信じて裏切られる苦しみを誰よりも知っているお前が、七丈島艦隊は信じられると、そう言うのかい?』

耳元のイヤリングに触れる。不思議とさつきまで緊張と恐怖で震えが止まらなかつた体が落ち着きを取り戻す。

こんな状態を、勇気が湧いてくるとでも表現するのだろうか、と伊58は一人思った。

「私は、七丈島鎮守府を信じたいでちー！」

『そうか、だが駄目だ』

凍てつく程に冷徹な犬見の声と、その瞬間向けられた自分への殺意に伊58は反射的に潜水していた。

『護衛艦隊、伊58を処分しろ』

「夜の闇の中、対潜装備だつて持つてきてはいない筈。そう簡単にはやられないでちよー！ むしろ、返り討ちにしてやるでちー！」

視界が皆無とも言える夜の海で、潜水艦の攻撃はまさに一方的である。対して、海上の護衛艦隊がそんな伊58に対して決定打を与える手段は対潜装備であるソナー、爆雷による攻撃しかない。

しかし、潜水艦にしか効果を発揮しないソナーや爆雷に装備を圧迫させるようなことはできうる限り避けたい選択である。なので、普通なら潜水艦と戦う予定でもなければ、艦娘に対潜装備が載せられていることはまずありえない。

故に、伊58はこの時まで自分の勝機を確信していた。

『手筈通り引きずり出せ』

「了解」

その声が響いた瞬間、海中で様子を伺っていた伊58の周囲に大量の爆雷が降ってきた。

「——なっ!?!」

『私は道具の使い心地に少しでも異変を感じれば、もう信用しないと決めているんだ。お前が私に任務完了の報告をしてきたあの瞬間に、私はお前を信じるのをやめたよ』

☆

そこからは、ものの数分で終わった。

爆雷の嵐に艦装が大破し、潜水状態が維持できなくなって海上に浮かんできた私はあっさりと取り囲まれて捕まった。

「ふ、これが偉大なる瑞雲の力だ」

「別に潜水艦一隻相手ならわざわざ全装備を瑞雲にするほどは必要なかったと思うんだけど」

「何、瑞雲はいくつあっても困るものではない」

「那珂ちゃんもバッチリ決めましたー！ きやはっ！」

「ほんに舐めたことしてくれたのう、伊58。覚悟はできとるけえの？」

「う……………」

頭を鷲掴みにして私を持ち上げる浦風が連装砲を胸に押し付ける。

「ん、なんじゃ？ イヤリング？」

「触るなっ！」

「あん？」

私は、イヤリングに伸ばそうとする浦風の手を両腕で掴んで止めていた。

「それは、私の友達がくれたものでちっ！ お前らには死んでも触らせないでちっ！」

「ほだされおつて！ 随分と向こうでは優しくしてもらったようじゃのう？ じゃあ、触らんよ。その耳、連装砲で粉微塵に吹き飛ばしてやるだけじゃけえのうっ！」

「……………」

『まあ、待て、浦風。最後に少し話をさせろ』

「…………提督さんが、そう言うなら」

激昂して今にも私の耳に砲撃を撃ち込まんとしていた浦風は犬見のその言葉に渋々と言った感じで連装砲を下ろすと、私の背中に回って手首を後ろ手に拘束した。

『伊58、最後に教えてあげよう。お前は二つ勘違いをしている』

「勘違い…………？」

『一つ目だ。お前は七丈島艦隊に危険性はないから処分する必要性を感じないと言ったな？ だが、今の七丈島艦隊に反乱を起こすだけの力も意志もないことなどわかっている』

「じゃ、じゃあ、なんで…………」

『私が恐れているのは、奴らの個性だ』

その犬見の言葉で私はますますわからなくなつた。

彼は通信機ごしにも私の困惑を感じ取つたのか、補足のようにつけて話し始める。

『個性とは、すなわち影響力だ。人に裏切られ、人を信じなくなつたお前に、また誰かを信じようと思わせてみせた、その影響力が私は恐ろしい。あれらは道具にはならないし、そんな物が混じると、周りの道具は瞬く間に錆びびつてしまう』

七丈島艦隊の個性。確かに、あそこにいる艦娘は皆誰もが何人にも染まらず、誰とも違う色を持っている。

そして、彼女達の強すぎる個性はやがて周りの他者の色をも変えてしまう。

私を、こうして変えたように。

それはきつと、彼女達の誰もが絶望の淵に追いやられながらも心を折ることなく、這い上がってきたその屈強で崇高な精神の賜物だ。

しかし、犬見にとって、その影響力は自分の信念を脅かす存在だ。彼女達のような個性は、艦娘を道具から人に変えてしまう。彼の理想にとって七丈島艦隊の存在はまさに天敵なのだ。

『だから、潰す。今はまだ小さくとも、あれはいつか必ず私の理想を脅かす。今危険性がないから、ではない。危険性がないからこそ、今、七丈島鎮守府は葬っておかねばならない』

「提督、あなたは、たった六人の少女達がそんなに恐ろしいんでちか……?」

『ああ、その通りだ。そして、その七丈島艦隊への認識がお前の二つ目の勘違いだ』

その瞬間、まるで突然嵐に巻き込まれたかのような衝撃が私達を包み込んだ。

私と私を拘束していた浦風は一瞬宙を舞い、浦風の方は数メートル後ろに吹き飛ばされ、私はゆっくりと何者かの腕の中に抱きかかえられる形でキャッチされた。

「よう、遅れてすまねえな、伊58」

「はあ!? 天龍っ!?!」

私を抱きかかえているのは腰に差していた刀を抜いた七丈島艦隊の一人、天龍だった。

吹き飛ばされた衝撃で海面に頭を強く打ち付けたのか、濡れた頭を押さえる浦風の首から下げた通信機から、再び犬見の声が聞こえて来た。

『ろくな装備も持たないうえに、提督を含めて全員すつかりふ抜けきった雑魚ばかりとお前は言ったな？ 馬鹿め、ふ抜けているのはお前の方だ』

「よう、そこで喋ってんのが犬見誠一郎って野郎か？ 昔、磯風が随分世話になつたらしいなあ、おい？」

『こいつらが雑魚だと？ とんでもない』

「天龍、ちよつと速すぎるってばあ！ お姉さまが完全に置いてけぼりだよお！」

「いつの間はこの那珂ちゃんの背後に！」

『仮にも横須賀艦隊との演習で勝ち星を挙げたような奴らだぞ？ 雑魚な筈あるものか。むしろ、化物だよ、こいつらは』

「化物とは、言ってくれるじゃないか、犬見」

「——ッ！ あんたはッ……！ やっぱり生きてたんじゃなあ、磯風えええええッ！」

私を背中に隠すようにして、天龍、プリンツ、磯風の三人が目の前に並び立ち、護衛艦隊と睨み合いを始めていた。

「お前ら、どうしてここがわかったでち！」

「すまないな、そのイヤリング、実はGPS機能を取り付けてある。安心してくれ、終わつたらすぐに取り外すから」

「なっ!？」

「ちなみに盗聴器も付いている」

「なああああ!？」

「カツコよかったぜ？ 『私は、七丈島鎮守府を信じたいでち』ってよ！」

「お、お前らー！」

顔に血が上る。

しかし、やはり、こんな状況なのにこいつらの近くは不思議と安心する。

私の身体はすっかり力が抜けていつの間にか海面に座り込んでしまっていた。

『——やあ、磯風。本当に久しぶりだ。また会えて嬉しいよ』

「ああ、私もだ」

『また、私に反逆するのかい？』

「ああ、当然だ」

『何度やつても、お前は私には勝てないよ』

「以前のように上手く行くとと思うなよ。今度こそお前を叩き潰す……！」

『面白い、やってみるといい。護衛艦隊、作戦を前倒しする。今夜、七丈島鎮守府を壊滅させる。手始めに、目の前の七丈島艦隊三隻を速やかに撃沈せよ』

「了解」

私の、そして磯風の、犬見誠一郎との最後の戦いの火蓋が、今切つて落とされた。

第五十七話 「選びなさい！ 進んで死ぬか、退いて生きるかッ！」

「海岸沿いに住んでいる人達の避難、ついさつき終了しています、提督」

「そうですか、ご苦労様でした、矢矧」

島の小学校体育館に入ってきた提督を、その中で島民達の名簿を確認していた矢矧が出迎えて、そう報告した。

今日一日、矢矧が一日中島を駆け回って避難についての説明と誘導を行った成果である。

事前に——というか、そもそも全部屋に仕掛けてあるらしいが——プリンツが伊58の部屋に仕掛けていた盗聴器から、今日犬見が伊58を回収する情報を得た七丈島艦隊は三日前から着々と準備を進めていた。

今頃は作戦通り大和、天龍、磯風、プリンツが犬見艦隊と戦闘を開始している頃だろう。瑞鳳の準備もそろそろ終わるはずだ。

そして、同時に矢矧と提督は万が一のために避難勧告を出して回った。

これで、犬見の迎撃態勢は完全に整ったのである。

「これで、仮に七丈島鎮守府の近くで敵と戦闘になっても取りあえず被害は最小限に抑えられるはずですよ」

「後は、先行した大和達次第、ですか」

不安げな表情を見せる矢矧の肩に手を置いて提督は言った。

「ここは私が引き継ぎます。矢矧は皆の元へ」

「いえ、大丈夫です」

提督の提案に、しかし矢矧は首を振って答えた。

「私がああ娘たちにできることは既に全部やったつもりですよ。ならば、私は皆を信じて待つだけですよ」

「ふ、そうですか」

「それに、ここを提督に任せる方が私としては不安です」

「え!？」

そう言つて矢矧は笑うと、名簿の三分の一程度を提督に渡して率先して再び島民達の方へ歩いていく。

「さあ、まずは避難した島民の点呼を早々に終わらせてしまひましよう!」

☆

『さて、ここは二対一で行こうか』

「ふ、流星は提督。私はその言葉を待っていた」

「お仕事ですね!」

「……磯風え」

「あれ? 私達四人でむこうは伊58がほぼ戦闘不能状態だから三人ですよ? ウチは一人余りませんか?」

伊勢の言葉に犬見は笑いながら言った。

『はは、それが狙いだよ』

「チツ、的確にこつちの嫌がることをしてきやがるな」

「向こうも横須賀程ではないが決して弱くはない。一人は足止めできずに鎮守府へ先行されてしまうか……」

「大丈夫だよ! まだ大分後方だけど、お姉さまがいるもん!」

プリンツが自信満々に、胸を張つてそう叫ぶ姿を見て天龍と磯風は表情には出さないものの内心で嘆息していた。

そんな二人の雰囲気機敏に気が付いたらしくプリンツは不満げに頬を膨らませた。

「お姉さまならいけるもん!」

「いや、まあ、そうだな……さつきと片づけて後を追えばいいか」

「ああ、大和ができるだけ足止めしてくれるよう期待しよう」

「むう……お姉さまなら絶対勝てるもん」

大和は敵を撃つことができない。

戦闘になれば引き分けまでが限界で、勝利はありえない。

だからこそ、事前の矢矧の作戦でも彼女の役割は主に『盾』。大和型の耐久力を活かして、艦隊のサポートに立つことで初めて彼女は勝利に手が届く。

言ってしまうえば、大和は一人では戦力にはならないのだ。

故に、天龍達が大和に敵艦一人を任せることに大きな不安を感じるのは至極当然であった。

逆にプリンツの大和に対するその信頼と自信はどこからくるのか聞きたい。

「——さて、そちらの作戦会議は終わったかな？」

「……へえ、近くで見るとやっぱデケエな、お前」

「伊勢型航空戦艦、日向。推して、参る」

天龍の目の前には本来砲のある位置の装備に飛行甲板を満載した日向が彼女を見下ろすように腕を組んで立っていた。

戦艦特有の巨大な艦装に、日向自身の巨軀、そして全てを見通すような眼光。威圧感を与えるには十分な出で立ちであった。

「お前よお、戦艦の癖に砲が一つも見当たらねえけどどうやって戦うつもりだ？ まさか、その甲板の瑞雲じゃねえよな？」

「ふ、貴様には我が無敵の瑞雲を出すまでもない」

「あん？」

そう言うと、日向は腰に差してある刀を抜く。

湾曲した刀身が月明かりに照らされ銀色に輝く。

「こいつで、どうだ？ 貴様もやるのだろうか？」

「面白れえ、真剣同士での立ち回りは久々だぜ」

天龍も好戦的な笑みを浮かべて腰の刀に手をかけ、鯉口を切った。

「——むむむう〜！」

「な、何？ じーっと私のこと見つめて？」

「金髪、おさげ、碧眼、雪のように白い肌、程よいバスト、ミニスカ、生足……………挑発的なお尻」

「やめてよおー！」

周りをぐるぐると回りながら手を顎に当てて目を細める那珂に、プリンツは恥ずかしくなってお尻を両手で隠しながら赤面して叫ぶ。

「那珂ちゃん、シヨック！ 大シヨックだよ！ 何なのこのゲルマン系美少女は!? 那珂ちゃんにないものを全部持つてる！ ずるいよ

！ 神様は不公平だよ！ 那珂ちゃんはこんなに努力してるのに！」

「え……う？」

「でも、那珂ちゃんへこたれない！ この程度の逆境、アイドルにはつきものなんだから！」

ころころと表情の変わる那珂にプリンツはすっかり困惑していた。すると、今までプリンツの方に見向きもせず誰に向けてなのかもわからない自演を繰り広げていた那珂は急にプリンツの眼前に迫って、彼女に人差し指を突き出した。

「認める！ 認めるよ！ 今は那珂ちゃんの方がちよつと出遅れちゃったみたい！ でも、いつか努力であなたも追い越して、絶対那珂ちゃんはナンバーワンアイドルになるんだから！ 負けないんだからね、私のライバル！」

「ライバル!?!」

「はあーい！ 画面の前の皆あー！ 艦隊のアイドル、那珂ちゃんだよおー！ 今日の更新も読んでくれてありがとうー！ 今日私は私の艦隊戦、楽しんでいってねー！」

「誰に言ってるの!?!」

明後日の方向にまるで誰かいるかのように笑顔で手を振りまくる那珂にすっかりプリンツは調子を狂わされていた。

「よおーっし！ じゃあ、艦隊戦いっちゃうよー！ 那珂ちゃん絶対負けないんだからねっ！ センターを賭けて勝負だあー！」

「センターって何!?! もうなんなのお、あなた!?!」

「川内型三番艦、第四水雷戦隊のセンターも務めた那珂ちゃんだよー！ 好きな食べ物はいちごのショートケーキだよー！」

「そういうこと聞いているんじゃないの！ もう、私こういうキャラ苦手だよお！ チェンジ！」

那珂に振り回される形でプリンツと那珂の戦いが始まった。

「磯風え……！」

「やはり、私の相手はお前か」

憤怒の形相で自分をにらみつける浦風を見て磯風は静かに連装砲を構えた。

『伊勢は一足先に鎮守府へ攻撃を。島への損害は気にしなくていいか』

ら、確実に任務を達成することを第一に動くんだ』

「りよ、了解……頑張ります」

「一人で大丈夫か？ 伊勢？」

「ば、馬鹿にしないでよね、日向！ 私だってやる時はやるし！」

「ぐっ！ い、行かせないでちー！」

「流石にそのザマじゃ戦えないでしょ？ 邪魔だからどいてくれる？」

「ぐあつ！ くそ、待て！ 待つでちー！」

伊58が伊勢を引き留めようと彼女の前に立つが、大破した状態の伊58に何かできる筈もなく、伊勢の戦艦級の怪力に抗えずに横に吹き飛ばされてしまう。

そのまま、伊勢は鎮守府の方へと消えていった。

『それと日向、瑞雲を一機私に寄越せ。目が欲しい』

「ふ、提督の命令とあらば、仕方ないな。特別な瑞雲を預けよう」

日向の飛行甲板から一機の瑞雲が飛び立ったかと思うと艦隊の周囲を旋回し始める。

『瑞雲に取り付けた赤外線カメラと指令室のモニターをリンクさせた。これで、私も道具を使う準備が整ったわけだ』

「なるほど、未だにいちいち命令を出して戦闘を行うのか、お前の所は」

『いいや、あの頃ほど非効率ではないさ。既に艦隊全てには私の教育が根付いている。故に、私の指示がなくても艦はおおよそ期待通りに動くさ。だが、お前に叩き潰すと宣戦布告されたのだ。ここは私が直々に相手をするべきかと思つてね』

通信機から聞こえてくる犬見の声は非常に楽しそうであった。

『日向、那珂、そちらは各自に任せる。浦風は私の命令通りに動け』

「別に、私だけでも負ける気せんけどのう」

浦風は水色の髪をかき上げながら磯風を見下すように睨みつける。

『さあ、始めようか。格の違いを見せてあげよう』

☆

「すっかり、置いてくれましたね……」

夜闇の海を走る私、大和はポツリとそう呟いた。

忘れていた。自分が低速戦艦であることを。

そして、基本的にウチの艦隊はもう長いこと訓練をしていないために互いに歩調を合わせてくれるような意識はないということ。

「プリンツだけでしたよ、私と先行する天龍達を見てあたふたしてくれたのは」

悲しい。最近私の扱いが酷いと思う。

そもそも、私のスタンスを忘れたのだろうか。私はサポート役であって戦闘はできないのに一人にするのはどう考えてもおかしいと思うのだ。磯風は自分事のように焦っていた様子だったからまだいいとして天龍とプリンツにはそこを察して欲しかった。

こんな時に万が一敵艦に出くわしたらどうするのだ。

「あと、どれくらいで追いつけるんでしょう？　なんか、少し前から遠くで砲撃音が聞こえ始めているのには気が付いているんですが――

――え？」

「……え？」

私とその艦娘が疑問符を声に出したのはほとんど同時だった。

夜闇とはいえ、特に座礁するような障害物がないことは知っていたので探照灯も何も付けずに航行していたせいだ。

また、あちらも恐らくは隠密のために探照灯を使っていなかった。

故に、お互い相手の存在に気付くのが遅れた。

私とおそらくは犬見艦隊の一人であろう戦艦伊勢は凶らずも真正面から対峙するように邂逅を果たしてしまったのだった。

「あ、ああ、えーと」

「え、嘘、大和型!?　ちょ、聞いてない！　よりによって向こうの戦艦とエンカウントする!？」

言葉が出てこない私に対し、伊勢の方は随分と狼狽しているように見えた。

「そうか、あいつらがコソコソ話してたのはこのことだったのか！

くそ！　まさか大和型を後方に配置して迎撃とか……うわ、もう最悪」

「あの、犬見艦隊の方でよろしいですよね？」

「あーもう！ あつちは悪くても重巡なのにこつちは戦艦つてズルいよ、あつちの方が確実に楽じゃん！ 私もあつちが良かったなー、もう、この采配はどうなのさー、提督！」

こつちの話を微塵も聞いてない。

しかも、言葉の節々から天龍達を見下している感じがひしひしと伝わってくる。

「もおー、嫌だなあ、気が滅入るなあ」

この人、なんだろう。さつきから愚痴ばかりで一向に私に攻撃を仕掛けてこない。

しかし、私の方はチラチラと横目で見ているから警戒はしているのだろう。

もしかしたら、これは。

「あの、あなた敵ですよ」

「うわー！ ちよー！ 待って待って！ いきなり砲塔向けるのやめてよ！ 話し合おう！」

この反応で私は確信した。

同時に矢矧の言葉が脳裏に蘇る。

『大和、もしかしたら、今回ばかりは不測の事態が起きて、あなたも敵艦と一騎打ちになることがあるかもしれない』

『え？ 流石にその可能性は低いような気がしますけれど。出発は天龍達と一緒にですし』

『可能性があるのなら無視はできないわ。もしそうなった時は、まず、堂々としていること』

『堂々と？』

『ええ、余裕を見せてつけて、強気に威圧するのよ』

『で、でも私結局砲撃できないんですよ？ 私なんかの虚勢でどうにかなるんですか？』

『何言ってるのよ。あなたは日本、しいては世界最大の大和型でしょう？ あなたの虚勢に少しも物怖じしない艦なんてそうそういないわ』

そうだ、私は、見た目こそ大和型一番艦なのだ。

砲撃できないと知っているのは七丈島艦隊だけ。敵は私の火力をよく知っている。同じ戦艦でさえも恐れる大和型の威光はこういう場面で私の力となる。

「正直、私も無益な戦闘はしたくありません。私の火力は少し加減を間違えればあなたの命まで木っ端微塵に吹き飛ばしてしまうでしょうから」

「そ、それは、私も望む所じゃない、よ」

良かった。向こうの伊勢はどうやら臆病な性格らしい。

これなら、いける。

「退いてください。私も命まで取りたくはないので」

（や、大和型……確か横須賀艦隊との演習にも旗艦として参加して、尚且つ勝ったって……しかも、こいつ、犯罪者なんでしょ？）

「……………」

（やばいって、あの目は絶対何人も人殺してる目だよ！ 無理無理無理！ 怖すぎ！ こんな化物と一騎打ちとかいくらなんでも無茶すぎるって！ 私は日向みたいな好戦的なタイプじゃないんだってばあ）

私が少し睨みつけてみせると伊勢は体をびくつかせて少しずつ後退していく。

そうだ、そのまま、そのまま逃げろ。

「どうしました？ 震えているようですが？」

「ふ、震えてなんか……！ わ、私だって提督から命令を受けてここまで来たんだから、いくらなんでもこのまま帰る訳にはいかない！」

しまった。今の一言は余計だった。

威圧することと煽ることは実はよく似ている。境界線が曖昧と言ってもいい。だからこそ、私は彼女を威圧し続けるために言葉は慎重に選ばなければならない。

植え付けるのは恐怖、怒りではない。

「では、戦うのですね？ また、誰かを手にかけてしまうと考えると少し悲しいですがね。どうせ、もう数えきれないくらい殺してしまっ

身ですし、今更一人増えたところで変わりませんか」

「い、や、ちよつと、それは……う、ぐ」

今日ほど、この犯罪者というレッテルに感謝したことはない。

死刑になるほどの残虐な犯罪者という事実は、それだけで恐怖の種になる。

相手だつて死にたいだなんて思っていない筈。提督の命令だからこうしてまだ立っていられるが、この戦闘は伊勢本人にメリットなんてないのだ。

相打ちなんて論外、怪我すらも避けたいと思っている筈だ。

そんな意識の低さで、私と戦う選択はできない。ここで畳みかける。

「どうでしょう？　ここは、一度退却、してみるのはい」

「退却？」

「逃げ帰るのではなく、私を確実に撃破するためには今の戦力では足りない。そう報告すれば良いのです。戦略的撤退。それならあなたの提督も納得するのでは？」

「ぐ……でも……」

「それが嫌なら、覚悟を決めてください。命を捨てる、覚悟を……」
どうにか、ここだけ退いてくれればいい。そうすれば、天龍達と合

流できる。

後で虚勢がばれて戦闘になつても構わない。

今の一騎打ちだけは絶対に避けるのだ。

私の虚勢に、背中の鎮守府と七丈島の命運がかかっている。

ならば、ハツタリにだつて命を賭けてやる。

「選びなさい！　進んで死ぬか、退いて生きるかッ！」

「うう………！　うぐううッ………！」

これが今の私にできる、私の戦いだ。

第五十八話 「勝ったッ！ 磯風編、完！」

「チッ！」

「どうした？ 逃げていても仕方がないぞ、天龍！」

刀を一振りする度に海が割れたかのような水柱が立つ。

日向のその一振りを受けられるはずもなく、天龍は未だ鞘から刀を抜かぬままに逃げ回るばかりであった。

「なんて力任せな剣だ。技術もクソもあつたもんじゃねえな」

「違うな。私の剣はこの力こそ技術なのだ。今の世に必要なのは、一撃で全てを破砕する剣。見た目ばかり綺麗なだけの小手先の剣術など役には立たないッ！」

「……まあ、そういう考え方もあるか」

天龍は海上でバックステップを踏みながらジグザグに距離を取り、再び構える。

剣は鞘の中、しかし、手は柄にかかり鯉口は切られている。

その構えに、日向は珍しがるように声を洩らした。

「居合、か」

「俺はこう見えて真っ向から斬り合ったり、鏝迫り合いしたりするよ
うな血の気の多いチャンバラは趣味じゃねえんだ。もつと、スマート
に行かせてもらうぜ」

「力では敵わずと見て速さで勝負という訳か。まあ、そうなるな」

日向は上段に刀を構えると、ゆっくりと間合いを測るように天龍に近づいていく。

互いの間合いが重なった時が勝負だ。

間合いを見誤った方、判断の遅れた方がやられる。

二人の間は呼吸音すらはばかられるような緊迫した静寂で包み込まれていた。

「……………」

「……………」

両者の額に汗が滲んでいる。

互いの距離が2 mを切った時、日向が足を止めた。

そして、次の瞬間、勢いよく一步を踏みだすと同時に、それまで天を突く様に掲げられていた刀が動いた。

「はあああああああああああッ！」

自身の間合いのギリギリ外までゆっくり接近し、タイミングを見計らって一步踏み込み斬撃を放つ。

間合いの取り合いでは日向が先行した。

そう見えた。

「——ふっ！」

最初に日向に見えたのは弧を描いて輝く銀色の線。次に聞こえたのは、金属と金属を強く打ち合わせたような音。

そして、最後に感じたのは、自分の身体が、後方にバランスを崩しながら吹き飛ばされる感覚。

「ぬ、ぬおおおおお！」

すんでの所で浮き上がった右足を強引に、後ろに突き刺すようにして軸足とし、後ろに吹き飛ばされながらも、なんとか姿勢だけは保つ。前方で、振り切った刀を再び鞘に戻す天龍の姿が日向の目に映った。

「馬鹿な、あれでこちらが遅れるのか……!？」

間合い取りは完璧だった。

ゆっくりと間合いを縮め、あと一步で間合いに入るというところで、足を止め、『ずらし』を入れて踏み込む。

下手をすれば相手は剣を抜ききることもなく一刀両断されてもおかしくない程に完璧なタイミングだったはずだ。

しかし、結果はむしろこちらが剣を振り下ろす前に天龍の剣に弾き飛ばされた。

先手を取ったにも関わらず、それ以上の反応速度と剣速で逆に圧倒された。

文字通り後の先を取られたことに日向は驚きを隠せなかった。

「ああ、見えていたからな」

「見えていただと!？」

日向の声がより大きくなる。

彼女の斬り落としては刀の重量を利用した重力加速と戦艦の腕力が相まって瞬間的には音速近くにまで達する。

ましてやこの暗闇の中での戦い。

いつそ殺気を感じして反応した、と言われるよりも信じがたい言葉だった。

「テメエの剣先の動き、掴み、腕と足の筋肉の脈動、腰の落とし具合、体重移動、視線、瞳孔、呼吸リズム、全部俺には視えてる。だから、いくら『ずらし』を入れられようと釣られねえし、剣先が動く前に体の微小な脈動で斬りこみを察知できる。少し特別なんだよ、俺の目は」
「……いっ、ああ、そうか、まさかお前、『天眼』か？ いや、『暴れ天龍』と呼んだ方がいいか？」
「……………」

「かの『軍神』は艦隊指揮と戦術、戦略の達人だった。彼女を群の極みとするならば、『暴れ天龍』はそれとは正反対の個の極み。戦艦レ級以外で一人連合艦隊と言えば貴方のことだ。そうだろうか？」

「はっ、聞いてもいねえことをペラペラと」
「否定はしないのだな」

天龍は苦虫を噛み潰したような顔になって日向を睨みつける。

その反応に日向は大いに満足したように笑みを見せた。

「いや、すまない。私としたことが感激のあまりいっぴになく饒舌になってしまった。実はファンなんだ、貴方の。まさか『暴れ天龍』本人に会える日が来ようとは夢にも見なかった」

「そいつは、どうも」

「貴方の武勲はいくつも聞き及んでいるが、かの『舞鶴の百隻斬り』は当時の私の胸を震わせたぞ？ なあ、教えてくれ、斬った百隻の中に一隻『艦娘』が紛れていたという噂は真実なのか？」

「——おい、テメエ、ちとお喋りが過ぎるんじゃないやねえのか？」
「むー！」

途端に、居合の構えを取ったまま、急速に間合いを詰めて来た天龍に素早く反応し、日向は再び距離を取って薄ら笑いを浮かべる。

「俺にはテメエとお喋りしてる暇なんざねえんだよ。戦う気がねえん

ならさつさと斬られる」

「ふふ、口が過ぎたな。かの暴れ天龍が相手ならば、こちらも全力でいかせてもらおう！」

日向の声と同時に、それまで甲冑のように彼女の身体を包み込んでいた航空甲板が動き始める。

「——瑞雲、全機発艦ッ！」

☆

「——皆聞いてくれてありがとー！ 『恋の2—4—1—1』、二番も張り切って歌うよー！」

「もおおおおおお！ なんてあんなふぎけた歌とダンスしながら全部避けてるのお!？」

苛立ちも有頂天のプリンツは楽しそうに見えない観客に向けて二番を歌い始めた那珂に向かってひたすらに砲撃を繰り返しながら叫んだ。

しかし、その砲撃はことごとく避けられてしまう。那珂のダンスと歌にイラつかされてプリンツが集中力を欠いているせいもあるが、何よりも那珂の動きが変則的過ぎてまったく次の動きが読めない。

やがて、疲れ切ってプリンツが砲撃を止めた所で勝ち誇ったかのように那珂は彼女の目の前で腰に手を当てて得意げな笑みを浮かべてみせた。

「ふっふっふ！ 甘い！ 甘いよ！ 生まれ持った容姿に甘えて歌とダンスのレッスンを怠った！ あなたの敗因はそこにある！」

「絶対違うッ！」

「認められないならいいよ。那珂ちゃんはあなたがそこで足踏みしている間にもっと先に行くだけだから！ 可哀そうだけど、アイドルの世界は実力主義！ 残酷な弱肉強食の世界なんだよ……！」

「これ見よがしなウソ泣きやめて！ 見えてるから！ 目薬見えてるから！」

「あれ？ ばれちゃったー？ チャン那珂、まだ演技とかは甘いからそっち方面はまだセンキューノーの方向でシクヨロなんだよねー」

「変な業界用語もやめて！ 腹立つから！」

「きゃは！」

「死ねッ！」

しかし、プリンツが無駄に輝いた笑顔の那珂めがけて撃った砲弾は
またも彼女の華麗なターンで躲かれてしまう。

それにますますプリンツの顔は怒りに歪んでいくのだ。

「ほーら、笑顔！」

「うるさい！」

「それにしても、歌とダンスに夢中になってる間に随分遠くまで離れ
ちやつたなー？ 観客一人もいないよー！」

「うう、もうやだあ……帰ってお姉さまにセクハラしたい……お姉さ
まに全力でふざけて突っ込まれたい……」

「ちよつと！ もしかしてたつた一曲でへばつちやつたの!? ライブ
はまだまだこれからでしょ!? 観客がいるかどうかなんて関係ない
！ プロなら最後までやりきらなきゃ！ ほら、立って！ 私がつい
てるから！」

「励まさないですよ！ なんなの、さつきからそのスタンス？ 敵なの
？ 味方なの？ いや、敵だよね？」

「じゃあ、『恋の2-4-11 with プリンツ』いっくよー！」

「いかないよ!?!」

「ほーら、笑顔！」

「うっさい！」

再びダンスと歌を始めようとする那珂を見ながら、呆れつつも、プ
リンツは彼女の實力自体は内心で認めていた。

ふざけた歌とダンスだが、あれだけ海上を縦横無尽に動き回ってお
いて、本人は汗一つかかずにケロリとしている。那珂が砲撃をしてこ
なかつたためにほとんど回避運動を取らずに砲撃だけをしていたプ
リンツでさえ肩で息をするほどなのにその何倍も動き回ってあの余
裕は並大抵の体力ではない。

それに、砲撃の回避運動もダンスに隠されてはいるが、かなりキレ
がいい。むしろ、ダンスに組み込むことによつて変則的になり、相手
に次の手を読ませないように工夫が凝らされている。

決してふざけている訳ではない。ふざけているように見えても、それが彼女の戦い方なのだ。

「きやはー！」

「……………チツ」

ふざけているわけではないのである。

性格が元々ふざけた奴なだけなのである。

「どうしたの？　なんだか機嫌悪そうだね？　今は別にいいけど、

フアンの前では笑顔、だよ？」

「それだよ！　その意識高めなアイドルみたいな言動のせいで調子乱されてイラついてるの！」

「な、何があったのか知らないけれど落ち着いて、深呼吸だよ」

「何があったか今説明したよね!？」

「隙あり！」

「きやあ!？」

那珂の終始ふざけた態度に掴みかかろうと近づいたプリンツの目の前に唐突に那珂の連装砲が現れる。

あまりに唐突で反応すらできず、プリンツは真正面から那珂の砲撃を食らってしまう。

「駄目だぞ！　私達は敵同士！　いくら相手が馴れ馴れしいからって敵に不用意に近づいちゃいけないだよ!？　私達はアイドルである以前に艦娘なんだからね！」

「……………」

所詮は軽巡洋艦の砲撃。重巡洋艦のプリンツがその一撃で戦闘不能に追い込まれるようなことは万が一にもない。

僅かに艤装防御膜をすり抜けて頬に降りかかったススを腕で拭いながら、プリンツは無言だった。

「あれ？　もしかして顔に直撃だった？　きやは！　ごめん！　わざとじゃないよ！　顔はアイドルの命！　絶対狙ったりしないもん！　でも、プリンツもアイドルならどんな時でも顔だけは絶対ガードしなくちゃだ・め・だ・よ！」

「……………」

「ほーら、笑顔！」

「……………あー、もう、完っ全にキレちゃったよ」

プリンツはゆっくりと首を左右に回して辺りを確認する。

目の前の那珂以外誰も見当たらない。本当に随分遠くまで離れてしまつたらしい。

しかし、むしろ好都合だとプリンツはニタリと邪悪な笑みを浮かべた。

「な、なにその笑顔!? だ、ダメだよ、アイドルがそんな顔しちや……」

「全砲門、魚雷管、開放」

「わっ、わっ！」

プリンツの全砲門と魚雷管が作動し始めたところで那珂は次に彼女が何をする気なのか察知し、慌てて距離を取る。

「——全砲門、^Voile^Feuerⁱ、一斉射ッ！」

プリンツの怒号と同時に、砲門から火が噴き、彼女の足元から大量の魚雷が所構わず射出される。

狙いなどまったくつけていない、滅茶苦茶な砲撃。しかし、その密度には那珂も反撃するほどの余裕はなく回避に専念しなければならなかった。

「マジ切れからのフルファイアなんて、中々情熱的だけれど、那珂ちゃんから見れば甘いよ！ 全然、那珂ちゃんはユウの笑顔なんだから！」

華麗なターンとステップで次々と砲撃を回避する那珂。

一斉射など永遠に続けられるわけではない。プリンツの残弾数を考慮しても後30秒もすれば弾薬が尽きる。

那珂はそれを待っていた。

（そんな必死の形相じやダメダメ。勝者っていうのは常に笑顔なの。自暴自棄になったら、艦娘もアイドルもおしまいなんだから！ もう勝負あつ——）

那珂が内心で己の勝利を確信したその時だった。

「きゃっー！」

砲撃をターンで避けた先に偶然、魚雷が差し迫り、回避が間に合わ

なかった。

「ぐ、これだけ滅茶苦茶に撃つてたら偶にはいい位置にいく時もあるよね。私の動きを読める筈ないんだから、今のは偶然————きゃああ!」

再び同じように被弾した。

今度は魚雷を回避した先に砲撃が飛んでくる。

重巡洋艦の魚雷と砲撃を受け、那珂の走行は早くも中破してしま
う。

那珂の顔から笑顔が消えた。

「う、嘘!? こ、こんなラッキーパーチが重なることって……まさか、本当に私の動きを……!? まさか、『恋の2—4—1—1』一曲だけのダンスを見て私の動きを見切って……!」

その後は、一方的だった。

プリンツの弾薬が切れる残り十数秒の間、那珂はまるで砲弾と魚雷に吸い寄せられるようにごとく被弾し、ようやくプリンツの弾薬が切れた時には既に大破。

ほとんど戦闘不能状態に陥っていた。

「う、嘘だ……あれだけ練習した那珂ちゃんのダンスをそんな簡単に見切られるなんて……」

「別に、見切ってないよ」

「ひっ!」

海面にへたれこむ那珂の目の前に笑顔のプリンツが彼女を見下ろしていた。

しかし、その目はまったく笑っていない。

「私はね、ラッキーなの。どんなに滅茶苦茶に撃とうが、直感に任せようが、不思議と敵に砲撃が当たっちゃう。私の場合、距離とか船速とか計算して理詰め撃つよりも今みたいにやった方が命中率いいんだよねえ。特に、あなたみたいな滅茶苦茶な相手には、ね?」

「あ、あは、あはははは! いやあ、すごいなあ! 那珂ちゃんの完敗だよ! いや、でも本当にいい勝負だったよね、うん、なんてゆーか、ライバル同士お互いを高め合えたっていうか、絆を深め合えたつ

ていうか！ うん！ この戦いを通して私達の間には深い友情が芽生えた——」

「——とでも思うのお？」

「で、ですよねー」

泣き笑いの表情の那珂にプリンツは満足げに頷いた。

「でもお、私もう弾なくなっちゃったからねえ」

「そ、そうだよ。だから、もうこれ以上戦うことはできないね！ こ

れで解散だね！ うん、お仕事終わり！ 打ち上げだよ！」

「うん、だから、トドメは私の拳でいくね？」

「ふ、ふえええええ！」

笑顔で骨を鳴らしながら拳を固めるプリンツに那珂は悲鳴を上げる。

そんな彼女にプリンツは満面の笑みで囁く。

「ほーら、笑顔！」

「か、顔はやめてえーっ！」

ゴン、という鈍い音と共にプリンツの腰の入った右ストレートが那珂の顔面に直撃した。

那珂は鼻から真っ赤な血液を噴き出しながら、そのまま、数センチ後ろに吹っ飛んで海面に仰向けに倒れた。

「か、顔はやめてって……言ったのに…………がくっ」

その言葉を最後に那珂の意識は途切れた。

鼻血を垂らしながら海面に浮かぶ那珂を見て、プリンツは大きくガッツポーズを決めた。

「勝ったッ！ 磯風編、完！」

☆

一方、その頃。

「ぐ……」

「はあ、はあ……やっぱりだ。やっぱり——」

大和と伊勢の決着は依然ついていなかった。

しかし、数刻前と状況は違う。

大和は伊勢の砲撃を受けて、既に中破になっていた。

そんな彼女を見ながら、伊勢は怯えながらも確信めいた声で言った。
「や、やっぱり、あなた、艦娘が撃てない、のね……？」

第五十九話 「私はさ、臆病者だよ」

私は臆病だ。

私は自分が、酷く臆病であることを自覚する。

昔から先が見えぬことが恐ろしかった。

薄暗い森の奥が恐ろしかった、曲がり角の先が恐ろしかった、電気の消えた部屋の暗闇が恐ろしかった、どう動くか見当のつかない動物や虫が恐ろしかった、自分の将来が恐ろしかった。

私は艦娘には向いていないと思った。しかし、向いているか向いていないかという問題は艦娘の適正があるかどうかとは関係はないのだ。

いくら艦娘になりたくてもなれない者がいるのと同様に、なりたくなくても艦娘になってしまう人間もいる。

それが、私だ。

『また、逃げたのか、伊勢』

予想していたことではあったが、最初の提督は臆病な私にすっかり失望していた。

臆病な私はよりにもよって戦艦という対深海棲艦における主戦力となるような艦種に選ばれていた。

しかし、当然、私に正面から深海棲艦と撃ちあうなどできる筈がなかった。

艦装による保護があるとはいえ、命がけの戦闘には変わりない。

自分の数分先の生死が見えない。

それがあまりに恐ろしかったから。その恐怖があまりに耐え難かったから。

私は一人、戦場から逃げた。

『いくら戦艦とはいえ、これでは話にならないな。仕方ない、解体だ』

提督の期待を裏切り、仲間からは嘲笑され、後ろ指を指されながら私は艦娘としての任を解かれた。

当然のことだとは思っている。しかし、だからと言って何も思わな

いわけじゃない。

私だって好きで艦娘になつたんじゃない。適正があるからと、半ば強引に艦娘にされたのだ。私は最初から向いていないとわかつていたのに。

勝手に期待した癖に勝手に失望されても困る。私は何も悪くないじゃないか。

私は提督と艦娘が大嫌いだった。

——そして、そんな言い訳で変わろうとしない自分を正当化する私自身もつと大嫌いだった。

こんな性格に生まれなければ、こんな苦しい思いをせずすんだのに。

変わることができれば、私はもつと幸せだったはずなのに。

——臆病とは、私生まれつき罹つた不治の病だ。

『——違う、その臆病は才能だ。お前が解体されたのは役立たずだからじゃない。ここの提督が無能だっただけのこと。来い、お前は私が使つてあげよう』

犬見提督は私の臆病を初めて褒めてくれた人だった。

☆

「艦載機を放つて突撃、これだ……！」

「うおつとー！」

二機の瑞雲が突進してくるように向かってくるのを一歩下がって慌てて避ける。

しかし、その間に日向が刀を振り上げ踏み込んできた。

「むんー！」

「チツ、地味に厄介だな」

サイドステップで日向の斬撃を躲して再び距離をとりながら天龍は呟いた。

「戦術としては至極単純。瑞雲で相手の動きを制限し、隙を作り、日向が一方的に攻撃できるように立ち回る。」

しかし、言うは易し、行うは難し。通常、艦載機の操縦とは中に乗っている妖精さんが行っている。その場合、夜は暗すぎて飛ぶことがで

きない。故に、空母などの艦載機を伴う艦は夜戦では戦力にならないのが現状だ。

しかし、それを打開する方法が一つだけある。

艦娘自身による艦載機のマニユアル操縦だ。

飛行機を操縦するゲームが数段難しくなったとでも考えればいい。この方法なら艦娘自身に夜目が効けば艦載機を発艦することは可能になる。

ただし、その場合、ほとんどの艦娘は艦載機の操縦に意識を集中させる必要があるため、艦娘自身で戦闘はまずできない。

また、同時に複数機を操縦する場合は両方に意識を集中させる必要があるため、その難易度は跳ね上がり、処理情報のあまりの密度に立っていることさえ困難になるだろう。

加えて言えば、艦娘の視界に変化はないため、視認不可能な距離まで離れたり、雲などに隠れて見えなくなったりすれば、感覚だけで操縦するしかない。目を瞑って艦載機を操縦しているのと同じだ。

故に、艦載機のマニユアル操縦など普通の艦娘にはとても手が出ないし、できた所で難易度に見合う程の恩恵もないのだ。

「いや、スゲエな、お前」

天龍は素直に日向を賞賛した。

二機の瑞雲を自在に操り、かつ自身も刀を抜く。

それを可能にしたのは、一体どれだけの執念、あるいは狂気なのか。

日向も、天龍の言葉に他意はないと悟ったのか、誇らしげに笑みを浮かべた。

「瑞雲への愛さえあれば、この程度造作もないさ」

「今、心の底から先行していったのがお前じゃなく、あの気の小さそうな奴で良かったと思っただぜ。お前ほどの艦娘をここで足止めできたことは戦術的に大きな成果だ、と俺は判断するぜ」

「気の小さい——ああ、伊勢のことか。確かにあいつは臆病だがな」

日向は瑞雲の二機を再び、弧を描くように天龍の右斜め上、左斜め上から交差するように飛ばすと、不敵に笑いながら言った。

「だが、臆病故に、あいつは強いのだ」

「何……？」

☆

プリンツと那珂の一騎打ちの決着から数刻前。

(駄目だ……もう逃げよう！ 無理！ こんな奴と一騎打ちなんてする必要なんてない！ 一旦戻って日向を連れて万全の態勢で——)

「早く、決断してくださいッ！」

「ひっ！ わ、わかった！ わかったよ、ここは退く！ だから主砲を向けないで——」

そう言つてすぐさま逃げるように身を翻したところで、私の足は止まった。

そして、もう一度ゆつくりと首を回して大和の方を見る。

相も変わらずこちらを睨んで主砲を向けている。

(あれ、主砲？)

違和感があったのは、主砲の数だった。

大和型には合計で四つの装備を装着可能だが、今、目の前の大和には主砲一基しか見当たらない。

弾着観測射撃を行えるように主砲は多くても合計二基、残りの装備には水上観測機と副砲もしくは電探や徹甲弾や三式弾などが装備されるのが大型艦装備の通例だ。

主砲が一基のみとはどう考えても不自然だ。

(装備不足かな？ 七丈島鎮守府は出撃を想定していないらしいから大型艦の主砲は足りていなかったり？)

最初はそれで納得しかけた。

しかし、すぐにそれにも疑問が生まれた。

(でも、天龍とプリンツ、磯風はしっかりフル装備だったよね？ 特にプリンツは火力重視の重装備に見えたし。でもそれなら、駆逐艦や軽巡洋艦の装備を売り払ってでも大和型の装備を優先して揃えろと思うんだよね。戦力的に大違いだし……)

軽巡洋艦や駆逐艦の装備は整っていて目の前の大和の装備は不足している、その理由はわからないが、事実として大和は今装備が不十

分な状態にある。

そう考え始めると、先の大和の発言も違う意味に聞こえてくる。(私を誤って殺してしまうかもしれない、無駄に殺したくないとか言っただけけれど、逆なんじゃ？ むしろ、今の装備じゃ殺せないからああやって脅して私に撤退させようとしているんじゃないの？)

いくら大和型とはいえ、こちらも戦艦なのだ。46cm三連装砲一基で沈められる程やわではない。

犯罪者でしかも大和型、加えてあの威圧的な台詞にすっかり委縮していたが、もしかしたらそれはあちらに戦闘をする余裕がないことの裏返しなのではないか。

(……いや、違う)

私は更に、その先に思考を巡らせる。

(戦闘をする余裕がないなら、まずは私に撤退を促してどうする？ 私を撤退させた所で、後になって再度侵攻してくるのは向こうもわかってる筈。こういう時、私なら味方の戦力が追いつくまで逃げ回しつつ牽制して足止めだけすることを考える。じゃあ、そんなリスクを冒してまで私を撤退させて戦闘を避ける理由は何？)

そこまで考えて、私は一つの可能性の閃きに思わず身震いしてしまった。

確証はない。確かめるなら一種の賭けになる。だが、どちらにせよ大和は装備が不十分で火力は格段に下がっている。決して分の悪い賭けではない。

「どうしました？ 撤退するのでは？」

苛ついた様子で大和が私に問いかける。
恐ろしい。

相手にその口上程の力がないとわかって尚も、あの大和からは依然として圧力を感じる。

臆病な私にこの重圧はかなり堪える。

だが、私は勇気を振り絞り、口を開いた。

「私はさ、臆病者だよ」

「え？」

「先が見えないって言うことが、怖くてたまらない。皆が勇敢に戦っている時に、私だけが体を震わせて前に進めないでいる。それが私なんだよ」

「……そうですね。あなたに艦娘は向いていないと思います」

「うん、私もそう思ってたよ。この臆病な性格、自分でも大っ嫌いだった——」

私は35 cm連装砲を大和に向ける。

彼女の表情が驚愕に包まれたのが良く見えた。

「——でも、今は違うッ！」

先刻まで大和に委縮しきっていた私が、この僅かな勝機を見いだせたのは、相手を恐れ、先が見えぬことを恐れ、故に、少しでも見えぬ先を見ようとその一挙一動に必死で目を凝らしていた他でもない、勤勉なる臆病の成果だ。

病ではない、これは提督が認めてくれた私の才能だ。

それを私は今から証明してみせる。

私は、大和に向けて主砲を一齐射した。

「な……!?!? ぐあっ！」

小さな悲鳴と共に、大和は砲撃の直撃を受け、爆炎に包まれる。

「ぐ……」

(堅っ!?!? 主砲直撃で小破すらしないの!?!?)

砲撃を一旦止めてから数秒して煙が晴れ、依然健在な大和の姿を見て私は想定以上の彼女の装甲に少なからず驚愕を隠せなかった。

しかし、同時に私は自分の推測が当たっていたことを確信する。

「はあ、はあ……やっぱりだ。やっぱり——」

緊張のせいで息があがっているのか、肩で息をしながら私は笑みを浮かべた。

——反撃が来ない。

あれだけ軽微な損害で、不意打ちとは言え、私に撃ち返す余裕がない筈はない。しかも、こうしてあからさまなクールタイムまで入れているのを見させているのだ。大和が反撃するなら今しかないはずだ。

しかし、彼女は主砲を受けただけで、私に対して依然撃ち返しては

こないでいる。

これが、大きなリスクを負ってまで、私を撤退させたかった理由だ。「や、やっぱり、あなた、艦娘が撃てない、のね……?」

考えられるのは罪艦の制限か何かだろうか。とにかく、これで彼女が私を撃つことができないことが判明した。

私は臆病者だ。先の見えないことが恐ろしくてすぐに逃げてしまう。しかし、それは裏を返せば、臆病者が動く時とは、先が見えた時。揺るがぬ勝利を確信した時なのだ。

「主砲、四基八門、一斉射ッ!」

☆

数分立たずして、形勢は逆転した。

「が……っはあ……はあ……」

「本つ当に堅いね……結構撃ち込んだつもりなんだけれど、まだ倒れないの?」

脅しのための主砲を一基、その他は全てバルジに装備を回した。

おかげで、戦艦の砲撃に対してここまで耐え続けることができたが、流石にそろそろ限界だ。痛みで意識が朦朧とし始めている。

やはり、火力が桁違いだ。矢矧の時のように相手の弾切れまで持ちこたえられる気がしない。

（参りましたね……これは駄目かもしれません……せめて、彼女が近づいてきてくれれば、大和型の馬力で足止めすることはできるんですが……）

「悪いけど、あなたが倒れるまで近づくことはしないよ。私は臆病者だからね、万が一その大和型の馬力で掴みかかってこられたら厄介だなんて嫌でも警戒しちゃうんだよ」

（臆病、それ故にこんな状況でも油断してくれない……完全に手詰まりじゃないですか、これ）

私はチラリと一門だけ奇跡的に無事な主砲を横目で見る。

幸い、まだ動く。

（撃つ……しかないんでしょうか……? でも、これ以外に鎮守府を守る手は——）

そこまで考えて私は首を横に振った。

私は今、何てことを考えていたのだ。

そんなことしたら、鎮守府を守るところか、この七丈島が壊滅しかねない。

「悪いけれど、そろそろ倒されてよね。私はこれから、あなたの鎮守府を制圧しにいかなきやならないんだからさ」

「……通しません」

依然として、私は伊勢を睨みつけてその目の前で両手を広げる。

その姿に、僅かに伊勢の目に恐怖の色が浮かんだのが見えたが、しかし、その砲撃に隙ができるほどではなかった。

「じゃあ、そのまま何もできずに、尽き果てろー！」

「う、うわあああああああー！」

一か八か、私は伊勢に向かって一直線に走る。

彼女の身体に掴みかかって動きを止めるしかもう手はない。

砲撃が次々と着弾し、最早、その機能を半分以上失いかけている艦装保護膜から私の身体に直接ダメージが与えられる。

皮膚が焦げ、抉られ、血を噴き出し始める。しかし、足は止めない。

真つすぐに伊勢を目指し、突き進む。

「ぐ、あああああああつー！」

「ひっ！ く、くそおおおおおおお！」

伊勢が私の咆哮に体を震わせたかと思うと、砲撃がますます激しくなる。

後、10 m、あと少しで、手が届く。

もう、損傷が激しすぎて走ることもできない。一步、一步、歩みを進め、彼女の身体に手を伸ばす。

「あ……と……少し……」

「ひっ！」

そこで、私は力尽きた。

結局、伸ばした右手は指先は伊勢の着物に僅かに擦れただけで、そのまま、私の身体ごと、海面に落ちていった。

「……は、はは、勝った！ 勝ったんだ！ やった！ やってやった

……！ 私の、勝ちよ！」

——このままじゃ、私のせいで、七丈島鎮守府が………。

『ネエ、ソロソロ代ワツテ？』

意識が消える寸前、身体の奥底からどす黒い何かがせり上がってきたのを感じた。

第六十話 「Injection」

「……………はあ、はあ」

「なんじゃ？ もう限界か？ だらしないのお、磯風？ まだ小破じゃろ？ これからもっと痛みつけてなぶり殺しちやるけえ、まだまだ頑張ってもらわんと！」

浦風が連装砲を息が上がった磯風に向ける。

それを見て磯風が回避行動を取ろうとする。

『浦風、左だ』

まるで、磯風の動きを予知したかのように、彼女の回避と同時に浦風の連装砲がそれを追尾するように動き、その砲弾は、磯風に直撃した。

「ぐツ……………」

『他愛ないな、磯風。あれだけ啖呵を切った割にお前は何一つ変わっていない。やはり今もお前は私の掌の上だ』

「はっ、負ける気がせんのお！ 七丈島鎮守府は今日を持って終わりにじゃー！」

なす術なく、一方的に攻撃を受ける磯風に対し、浦風が高笑いする。

無言の磯風に犬見が瑞雲を通して声をかけた。

『磯風、まだ私の声が聞こえているんだろう？ あれだけ演習で仕込んだんだ、嫌でも頭の中で私の指示が響くだろう？』

「……………」

磯風の一年と少しの鎮守府生活。犬見によって道具として使われた日々は、磯風の中に根強い『後遺症』を残した。

戦闘中、脳内に流れる犬見の指示。そして、指示通りに動く身体。自ら考えることを徹底的に排除された彼女の戦闘は体に染み込んだ犬見の戦術のトレースであった。

故に、犬見本人が相手では、その思考は筒抜けと言っても過言ではない。本物に模倣は勝てない。

——磯風、相手は油断している。仕掛けるならば今だ。前方に魚雷、合わせて敵の両翼に砲撃して雷撃射線上に釘付けにしろ。

「……………」

『次は、魚雷を撃って牽制で射線上に釘付けにする作戦か？』

「ほんなら、魚雷を狙い撃ちすりゃあ、終わりじゃね！」

『その通りだ』

浦風はその場から連装砲を正面に距離を変えて数発砲撃を始める。

五発目辺りで爆発音とともに海から水しぶきがあがった。

『さあ、次はどんな策だ？』

「……………」

——それならば、今度は敵に対して斜め方向に全速前進し、敵側面を取って攪乱だ

『斜めから敵側面を取って攪乱、か？』

「……………っ！」

磯風の足が止まった。

——ならば次は——

『一旦距離を取って出方を見る、だな。浦風、距離を詰める。逃がすな』

「了解！」

「成程、全てお見通しという訳か……………」

☆

三日前。

「どうしたんだ、急に私と模擬演習だなんて」

「磯風、伊58がどうという判断をしようとも、結局犬見艦隊との戦闘は避けられないわ」

「そうだろうな」

「だから、あなたにはもう少し強くなってもらわなくちゃならない」

矢矧は声を低くして私にそう言った。

「他の奴らはいいのか？」

「天龍もプリンツも瑞鳳も大和も私にはどうしようもないわ」

「確かに、そうか」

天龍は今のままでも十分に強いし、プリンツも持ち前の強運でなんとかかしてしまうだろう。瑞鳳に至っては私達が考えつくようなこと

はとつくに思いついて実行していそうなものだし、大和はそもそもそれ以前の問題だ。

成程、確かに私くらいしかレベルアップを凶れる艦娘はいないな。

「じゃあ、とりあえず五本、始めるわよ」

「ああー！」

結果は2―3で私の敗北だった。

最初の2本は私の圧勝だったが、そこから3本なす術なく連取された。決して軽巡洋艦と駆逐艦というだけの違いではない。

明らかな経験値の差を痛感させられた。

「うん、以前から思っていたけれど、実は磯風は体力以外これといって弱い部分はないのよね。むしろ、艦隊戦での動きはウチで一番良いかもしれない」

矢矧に高評価をもらったものの、私の中では真に喜べることはない。

それは、頭の中の犬見の声に従った結果なのだから。

「――でも、私から言わせれば、まだ伸びるわ。だって、この動き方、どうもあなたに合っているようには見えないもの」

「私に、合ってない？」

「あなたには天性の艦装操縦センスがある。それを活かすには、あなたの動きはどうにも平凡というか、模範的過ぎる。大半の艦娘ならそれでいいけれど、あなたにならもう少し無茶な動きを要求しても問題はないし、その方がいい」

たった5戦で随分と私のことを分析されたようだ。流石は軍神と心から感嘆の声が洩れ出た。

「誰に仕込まれたのか知らないけれど、今からそれは捨ててもらおうわ。その代わりに私の艦隊戦術を叩き込む。時間もなさそうだから加減はしないわ。覚悟してついてきなさい」

「了解！」

☆

（――いや、本当に酷い三日間だった、よく今生きてここに立っているものだな）

後退と同時に全速で磯風に突撃する浦風を見て、しかし、磯風は笑っていた。

「何、笑つとるかああああッ!」

『……笑み? 何か策を練ったか? いや、それはないな。しかし、何か妙だ………浦風、一旦止まれ』

「え? り、了解……?」

——よし、相手が足を止めたぞ。今のうちに距離を取れ。

「……はっ、そうじゃないだろう? まあ、矢矧……!」

その眩きと同時に、磯風の脳内に犬見ではない、新たな声が響く。

——そうね、常に攻勢に徹し、優勢だった相手が、ここに来て回る意味のない防御に回った。悪手中の悪手ね。ここで流れを変えるわよ。真つすぐ突撃、あなたなら行けるわ。

「——了解、艦隊旗艦!」

「提督! 磯風が向かって来とる!」

『チツ、うろたえるな。まだ優位はこちらにある。撃ち返せ、相打ちでもダメージを負っている分向こうが不利だ』

——と、思うでしょう?」

「ぐっ、きやああ!」

磯風のこの時の動きは最早艦としての動きではなかった。文字通り水上スケート。真横に滑るように移動しては急転換して再び反対方向に滑る。そうやってジグザグに距離を詰めてきては、その中で敵に砲撃も行う。

まるで艤装が体の一部かのような、明らかに相手の浦風とは天と地程にその動きに差が出ていた。

それは、彼女の天性の艤装操縦センス、そして、彼女が犬見の命令で日々こなした数多の艦隊戦から得た経験値、その二つから成るもの。

より命令通りに、指示通りに動くために自然と鍛えられた艤装操縦は、彼女のセンスも相まって一線級の練度を当に超えている。

磯風が犬見から得た唯一の恩恵だった。

——まあ、体力がもやしだから、短期決戦以外じゃまるで使い物に

ならないけどね。

「おい、一言余計だぞ」

「ぐ、那珂のダンス戦法とも違う……いや、それ以上に、出鱈目で、まるで目が追いつかん……!?」

そして、その結果。真正面からの撃ち合いでは浦風の砲撃はことごとく避けられ、一方で磯風の砲撃はことごとく命中する。

練度は高い。経験値もそれなりに積んでいる。しかし、浦風の動きは未だ船の動きだった。磯風から見れば動きは予測し易く、随分と悠長に見えていた。

『あんな、旧型の艦装でよくもあれだけ動くものだ。しかし、明らかに動きが違いすぎる……今まではわざとこちらの術中にはまったかのように見せかけていたということか……!』

——戦術の基本ね。あとは上手いこと向こうが乗ってきて一騎討ちにさえもちこめれば、そこから先は戦術の届かない領域、実力だけが全ての世界。それなら、うちの磯風は絶対に負けないわよ。

「ここで一気に決めるッ!」

「くつ、指示を! 提督! 命令を! このままじゃ……押し切られる!」

『……無理だ。私の指示を聞いてから行動して間に合う程緩い状況ではないだろう。戦略とは群と大局のためにあるもの、一騎討ちだけは、個の局面にだけは、干渉できない……!』

——そう、だからこそ、隙が欲しかった。正直犬見提督と真正面から戦術勝負始めるのは私も避けたかったからね。

磯風の体力はお世辞にもある方ではない。かといって犬見も易々と戦術勝負で隙を見せてくれる相手ではない。最初から本気で戦えば長期戦は必至、その上で負けていた可能性が高い。

だからこそ、短期決戦にできるような状況にすることが勝利への道だった。

全てはそのための布石。

徐々に艦装の損傷が大きくなっていく浦風を見て犬見は大きく苛立たし気にため息を洩らした。

『……珍しく、私としたことが、慢心、していたようだ。まさか、貴様ら道具に『僕』が一杯食わされるとはな……ッ!』

「——大破だ。もうこれ以上の戦闘はできないだろう」

「くそ、くそ、くそ、くそ! ウチが! こんな裏切り者に!? 提督! 指示を! こいつをねじ伏せる戦術を! くそ! 磯風ええええええええええ!」

激昂する浦風にはもう戦える武器も、艤装もない。今はただ、海に浮かぶことだけを許されているだけのか弱い少女だ。ただ、敗北の屈辱を味わいながら磯風への憎悪と憤怒を叫び散らすことだけを許された状態。

これ以上ない、完璧な敗北だった。

「……はあ、ごほっ! くっ、こっちも、もう限界だったな。本当、疲れた、吐きそうだ」

咳き込んで胸を押さえながらも磯風は笑っていた。

そして、はるか遠くの七丈島へ向かって、拳を向けた。

「勝ったぞ、矢矧……!」

☆

「おやおや、伊勢と那珂からの通信も途絶え、たった今浦風も戦闘不能。まさか、残っているのは私だけか?」

激昂する浦風を見ながら、何故か楽しそうにそう呟く日向の目の前で瑞雲二機を斬り落とした天龍が目を光らせていた。

「ちよいと手こずったがよ。もう、見切ったぜ。次はねえ。次はお前を叩つ斬る」

「……ふ、見事なものだ」

追い詰められたかに見える日向の表情から依然笑みは消えない。

「提督、どうする気だ? いやいよ追い詰められてきたが?」

『……………浦風』

「なんですか……?」

神秘的な声でボロボロのままそれでも怒りと憎悪で戦意を燃え立たせる浦風に提督は尋ねた。

『お前は、今、戦うために何を捨てられる?』

「私は、ずっと目の前の磯風を、浜風と谷風の敵を討つためにッ！ そのために生きてきたんじや！ 今、戦えるなら、今、あいつを倒せるなら、もう、ウチには何も要らんよ……全部、捨てちやる」
「……………」

浦風の言葉に磯風の表情が苦悶に包まれる。

天龍も苦い顔でその様子を横目で見ている。

『そうか、それだけの怒りと憎しみ、そして覚悟があるのなら……あるいは耐えうる、か』

「提督？」

『日向、お前と浦風に使うぞ。適合しているのはお前だけ、浦風は正直賭けだ。フオローと後処理は任せるぞ』

「ふ……まあ、そうなるな」

意味深な会話のやり取りを行う提督と日向に天龍と磯風は警戒を示す。

『――Injection』

「ぐっ……………」

「が……………あ……………っ!？」

「何だ!？」

「浦風!? どうしたんだ!？」

何か攻撃がくると身構えていた二人は提督の発した言葉と同時に苦しうに声をあげる日向と浦風に狼狽する。

磯風が、浦風に近づこうとしたその時、天龍は確かに感じ取った。

彼女達の雰囲気が一変し、その直後、強烈な殺気を放ったことを。

「磯風！ そいつから離れろ！」

「——ッ！」

間髪入れず、天龍の声に反応し、浦風と距離を取る。

その直後。磯風が寸前にいた海面が無数の爆発と水柱に包まれた。

おそらくは魚雷。しかし、その数が多すぎるうえに、大破状態の浦風は魚雷発射管が破損して動かない筈である。

さらに、続けざまに異常は発生する。

今度は日向の方であった。

「さあ、悪いな、『暴れ天龍』。少し事情が変わった。私一人であと4、5人か片づけなければならぬんだ」

「……なんだ、何をしたんだ!？」

「伏しテもらおう」

その日向の右目は赤黒く染め上がり、血管がまるで赤いタトゥーのように浮き上がっていた。

同時に彼女の航空甲板から大量の瑞雲が放たれる。

その数、なんと十機。

「おいおい、そのマニュアル操縦は無茶だろ、脳がパンクして死ぬぞ!」

「まあ、そうなるな。普通ならバナ!」

「なっ!？」

十機の瑞雲はまるで鳥のように自在に夜空を駆け回り、しかし天龍に的確に爆撃を行ってくる。

それは、先ほどの二機の瑞雲の操縦以上に精度が上がっているように見えた。

「うおおおおお!？」

瑞雲十機からの絶え間ない航空爆撃の嵐に天龍は身動きが取れない。

そして、当然のようにその間隙を突いて、刀を構えた日向が、天龍の背後に回ってくる。

「斬り、伏セルツ!」

「ぐっ!」

その場で回転しながら刀を抜き、日向の斬撃を受けるものの、先刻とは桁外れのパワーに1秒と持たず、天龍は弾き飛ばされる。

数発、瑞雲の爆撃を被弾しつつも、急所を避けて素早く立ち直った天龍に最早さつきまでの余裕はなかった。

「やハリ、一筋縄でハいかナイな」

「おいおい、突然のパワーアップとかどんな手品だよ、笑えねえぜ」

一方、磯風も天龍同様、窮地に立たされつつあった。

「くそ! なんだ、この砲撃の威力は! いや、そもそも艦装は破壊し

つくしたはずだ！ 何故そもそも砲撃がまだできる!？」

「磯風エ……浜風と谷風のカタキ……殺ス……沈める……沈メエ！」
「なんだ……あの艤装は……!」

磯風が浦風の身体を傷つけないよう気を遣いながら破壊した艤装。その破損部位から植物のように赤黒い結晶のような物体が生えてきていた。

さらに、その結晶は破損部位を包み込むと、自壊し、そしてその内からは漆黒のボディに血管のような赤い線が描かれた『艤装』らしきものが姿を現すのだ。

「間違いない……艤装が、確かに『再生』している……!? しかも、フォルムは禍々しいが、明らかにパワーが桁外れに上がっている！ なんだこれは……これじゃ、まるで……」

まるで、深海棲艦じゃないか。

その先の言葉を恐ろしくて天龍も磯風も口にはできなかった。

「まあ、ソウナルな」

「磯風ハ……ウチが沈めル……!」

『あまり、このやり方は好かないのだがな。だが、それだけ私が追い詰められた証拠だ。お前達は誇つていい、よくぞここまで健闘したものだ、七丈島艦隊。しかし、これで本当に終わりだ』

犬見の冷たく、無機質な、あまりに暗い勝利宣言が、海に響き渡った。

第六十一話 「私が大和ですよ」

「浜風と、谷風が……磯風に、殺された!? 何馬鹿なこと言っとるんじゃない、われえ!」

帰ってきた私達攻略部隊を待っていた艦娘の一人が告げた言葉に逆上して私は思わずその艦娘に掴みかかった。

「わ、私に言われても……! でも、事実そうなのよ! 提督に聞いてみればわかる!」

「——っ! 提督!」

私は脇目も振らず一目散に執務室に駆けていった。

しかし、彼から発されたのは、さっきの艦娘と同じ、非常な現実を告げる言葉だった。

「磯風は私達に反逆。追手に出した谷風と浜風は彼女に討たれて、轟沈した。現在は彼女達の艦装をなんとかサルベージしようと試みている。遺体は、諦めてくれ。艦娘の宿命だ」

轟沈した艦娘の遺体は残らない。これは艦娘になった時に初めに言われる台詞だ。

浜風と谷風と、二度と会うことができない。その事実は私の心の奥深くに突き刺さった。

「……………なんで、磯風はそんなことをしたんじゃ」

「間宮にたぶらかされたのかもしれないな」

「間宮?」

「そうだ、今回の件は間宮が主犯だ。磯風は彼女に従って鎮守府に反逆を企てたのだ」

私は、間宮が捕縛されているという営倉に走った。

牢屋の中に、彼女はいた。

手足を拘束された状態にもかかわらず姿勢よく正座をしたまま目を瞑って、その眉間には深い皺を寄せてどこか祈るように、苦悶に満ちた表情を見せている。

私は彼女に問い質した。しかし、彼女は首を振った

「違う、磯風ちゃんも、私も、犬見に利用されたのよ」

「あんだ、そんな嘘でウチを騙せる思うとるんか……？」

「そう、やっぱり、あなたもそうなのね」

「は？ どういう意味じゃ！」

私の返答に、乾いた笑みを浮かべる間宮を怒鳴りつけるものの、彼女は少しもひるんだ様子を見せない。

「もう、間に合わない。きつとあの子は犬見が用意した方のドラム缶を持って行ってしまった。後は、せめて彼女が無事であるように祈ることしか、私にはできない」

「何言つとるんじゃ？ お前のせいで磯風が、あんなんになつてしまったんじゃろ!? でなきや、あいつが谷風と浜風を……親友を殺せる筈がない！」

「……磯風ちゃんが？」

私の言葉にようやくそれらしい反応を見せた間宮は俯くと、申し訳なきそうに言った。

「そう、それは……私のせいね、きつと。ごめんなさい」

「——ッ！ 謝るくらいならっ……！」

その表情があまりにも悲痛だったから。

それが許せなくて、私は、私は——

「——なんだ、殺してしまったのか、浦風？」

「て、提督……ウチ……」

「酷いな、連装砲で無抵抗な彼女を殴り殺したのか。恐らく首の骨と頭蓋が完全に砕けているな。艦娘の力で殴られてはこうもなるか」

「ご、ごめんなさい……ウチはなんてことを……」

「いい、どうせ遅かれ早かれ死ぬ手筈だったんだ。まあ、少々早すぎだがよしとしよう。自殺とでもしておくさ。そういう方面にも顔は効くのでね」

「ウチは、ひ、人殺しじゃ……」

「気にするな」

そう言うと、提督は私を優しく抱きしめてくれた。とても温かかった。

「これは、全て間宮と磯風のせいだ」

「え……う？」

「そうだろうか？ この二人がこんな馬鹿なことを始めなければ、谷風も浜風も殺されず、お前が手を汚すようなことにもならなかった」

私に都合のいい言葉が、脳内に染みわたるように囁かれた。

「悪いのは、磯風だ。お前は何も悪くない」

その甘い言葉に、私は墮落してしまって、そして、磯風に心の平穏を求めたのだ。

彼女を恨み続けることで、私は、人殺しの罪悪感をなすりつけたのだ。

そうしなければきっと私は今まで生きてこられなかったから。

☆

「磯風、殺ス、殺ス、殺ス！ 谷風ノ浜風ノカタキイイイイイイ！」

「ぐっー！」

容赦なく放たれる砲撃に磯風はほとんど防戦一方。

たまに隙を突いて撃ち返してみるも、直撃したところで、痛みがないのか一切ひるまない。ダメージはかなり与えられているので、体力的にはギリギリなのだろうが、そんなことを感じさせない覇気があった。

「くそ、やべえぞ、こいつは……」

「フフ、徐々に追い詰められていくな。そして、私の見立てではそろそろ口なんだがな」

瑞雲を飛ばし、着実に天龍の艦装を削り壊していく日向の言葉と同時にそれは起こった。

「——ッ!？」

ガキン、と嫌な金属音がしたかと思うと、天龍と磯風の航行速度が急激に低下する。

原因は艦装の破損であった。

しかし、ダメージによるものではない。

元々、艦装にガタがきていたのだ。それを天龍や磯風レベルで動かせば、艦装が耐え切れないのは自明の理であった。

「やっべえ！ マジでやっべえ！ 磯風、そつちは大丈夫か!?!」

「わ、私は、右足の方が壊れたが……まだなんとかなる！ そつちは!?!」

「俺は両足だ！ 動けねえぞ、畜生!」

「マァ、そうなるな」

たちまち、天龍の周りを瑞雲が取り囲む。

「近づクことはナイ。剣で勝負すル段階は既に終わつタ。今の私ハ貴方を如何に確實ニ、安全に殺スかだけを考えてイる。故に、私が貴方に近づクことはない」

「……成程、じゃあ、その瑞雲がなくなつたら、どうするんだ?」

「なんだと? む!?!」

天龍の言葉に突然、上を見上げる日向。

その先から何か鳥の集団のようなものが迫ってくるのが見えていた。

「馬鹿な、アれは……零戦、だと……!?!」

夜闇に紛れて大量にやってくるその機体は、零式艦戦52型、彗星、天山。その三種類の艦載機で編成された航空隊であった。

『零戦だど!?! 馬鹿な、ありえん! 夜間戦闘で艦載機を飛ばすなど……薬を使った状態でもまだ実現しえていない! そんなものは、深海棲艦以外にできる筈がない!』

狼狽する犬見を他所に、零戦の一機についているらしいスピーカーから聞きなれた少女の実に能天気な声が響く。

『——待たせたわね! 真打、天才瑞鳳ちゃんの登場よ!』

その声に、天龍がすぐさま野次を飛ばす。

「おせえぞ、瑞鳳! マジで死ぬかと思つたぜ!」

『主役は遅れてやってくるものなのよ』

「いや、主役はお姉さまだからっ! お姉さまだからっ! お姉さま、だからッ!」

「プリンツ、無事だったか!」

零戦と共にプリンツも気絶した那珂を引きずりながら声をあげる。彼女達の合流に、磯風と天龍に精神的な余裕が戻りつつあった。

「ま、マズい……瑞雲！ 退避しろ！ 急げ——」
『させるんでも?』

楽し気な瑞鳳の声と同時に、航空隊が天龍から霧散するように散った瑞雲を飲み込むように次々と撃ち落としとしていく。

日向の顔がみるみるうちに青ざめていったかと思うと、一転、怒りに真っ赤に染まった。

「貴様ツ！ 不意打ちとは卑怯な！ 貴様ニ瑞雲道ハナイノカツ!？」

『ごめん、何それ存じ上げない』

「おし、これで瑞雲はいなくなつたな」

激昂する日向は、ニヤリと笑みを浮かべて、刀の鯉口を切る天龍を見て、すぐに自分も刀に手をかけた。

状況は二転、三転するも、最後には最初と同じ形となっていた。

「抜きな！ どっちが素早いか試してみようぜ、という奴だぜ」

「ぐ、クソ、こんな筈でハなかつた。そして、ここで終わル訳にはいかないのだ！」

日向は刀を抜くと、迷わず一直線に天龍に突っ込んでいった。

（奴は、浮き砲台、こちらは『薬』で強化状態！ 彼我の戦力差、大なり！ 勝てる！ 私は勝てる！ 勝つぞ、私は瑞雲にかけて、全身全霊で勝つ！）

「ぬおおおおおおおおお！」

「最後まで衰えぬその気迫たるや見事、だぜ。だが——」

何が起こつたのか日向が認識したのは、彼女の身体が痛みに悲鳴をあげた瞬間だった。

そして、彼女の身体が痛みに悲鳴をあげたのは、彼女の動きが止まり、腕から刀が零れ落ちてから数秒後だった。

「——お前の中の全部合わせても、俺には届かねえ」

「は、なんで、私ノ身体動かナ……がっ?! え? 私の足ト腕……臆、切レテ……? 馬鹿な……お前、今の一瞬デ、一体何回だ? 何回私ヲ、斬つて——」
「がああああアッ！」

そのまま、断末魔と共に、体中から血を噴き出して日向は海面に倒れた。

☆

「グウ!? クソ! 生意気ナ、艦載機共ガア!」

彗星と天山の爆撃に晒されて尚もその視線は磯風にのみ注がれていた。

「浦風……」

「オ前ノセイダ! 谷風モ、浜風モ、間宮モ! 皆、オマエノセイデ死ンダンジャ、磯風エエエエエ!」

「そうだよ、浦風。皆私のせいで死んだんだ。皆、私が悪い。お前にも辛い思いをさせてしまった、すまない、浦風」

「謝ルナ……謝ルクライナラ、谷風ト、浜風ヲ、返セ! ウチノ、唯一無二ノ友達ヲ……私達ヲ、元ニ……戻シテ……! 全部、元に戻シテヨオ!」

両目が真っ赤に染まり、顔にヒビのようなものまで入り始め、いよ人よりも化物にその容姿が偏ってきた浦風は、しかし、その目から赤い涙を流していた。

『やはり、適合していない……このままでは、どちらにせよ壊れるな』
「なんだと!」

犬見の言葉に磯風が声をあげる。

『ちよ、こいつ航空爆撃あれだけ受けて全然弱ってないんだけど!? しかも、こっちはもう残弾尽きたし!』

「くそ、プリンツ手を貸してくれ! プリンツ!」

『あの子、弾薬尽きて役に立たないからって、大和探しに行ったわよ』
「くそ! 相変わらず大和好きだな!」

この猫の手も借りたい状況で、とぼやきたいのはやまやまだったが、それ以上に目の前が切迫していた。

浦風は依然、健在。対して磯風はもう片方の足の艀装が壊れぬよう気を遣いながらセーブしての戦い。

分が悪いどころか、このままでは確実に磯風は敗北する。何か手を打ちたいところだが、瑞鳳の夜間航空爆撃という切り札を切り終え、彼女達には本当になす術は残されていないなかった。

「に、逃げろ、磯風! そいつはもうお前の手には負えねえ!」

「いや、それだけはできない。私が逃げれば、次に狙われるのは動けない天龍だ。仲間を見捨てて逃げるなんて絶対にできない！」

「へエ、自分ノタメニ浜風と谷風ヲ躊躇ナク殺シテオイテ、ココノ仲間ハ見捨テナインジャナ? 随分エエ子ニナツタモンジャネエ?」

「……私は逃げない。お前から、過去からも……! そのために、私は今日まで生きてきたんだ！」

「違ウ、才前ハ今日、私ニ殺サレルタメニ、生キテキタンジャ! ソシテ、死ネ!」

『逃げなさい、磯風!』

瑞鳳の悲鳴にも似た怒号と同時に、磯風の脳天に向けられた浦風の連装砲が火を噴いた。

☆

「——提督、とりあえず、私達がやれることは全てやり終えましたけれど、鎮守府に戻りますか?」

「……………」

「提督?」

どこか心ここにあらずと言った様子の提督の顔を矢矧が覗き込むと、彼は我に返ったかのように、慌てて頷いた。

「あ、すみません。そうですね! 帰りましょうか!」

「何か気がかりでも?」

「まあ、それは色々ありますが、一番は……伊58のことですかね」

「え? なんで彼女が?」

七丈島艦隊の心配かと思いきや、意外な名前が出てきて矢矧は即座に理由を聞く。

提督は苦笑いを浮かべながら言った。

「いや、あの方は、というかあの子は……本当に、性格が、あれなので……伊58には荷が重いんじゃないかな、と」

「あの方? あの子?」

「いや、まあ、色々あって私が呼んでおいた、助っ人みたいなものですよ」

助っ人、という頼もしい単語を使う割に、提督の表情は優れなかつ

た。

☆

「——っ！ う、ん？」

私の目の前に巨大な黒い岩のようなものが現れたように見えた。

それが、岩ではなく私の前に立つ誰かの影であることに気付くのに、数秒かかった。

「大丈夫、磯風？ 全く、君は相変わらず無茶するなあ。まあ、夜戦で張り切っちゃうのは仕方ないけどね！」

「その、声……」

どこか懐かしい声だった。

顔をゆつくりと上げると、そこには短めの黒髪サイドテールが特徴的な代わり映えしない無邪気な笑みを見せる川内の顔が見えた。

「川内……!?! どうして……ここに……」

「話は後だよ、ほら、立てる？ 決着、付けるんでしょ？」

「……ああ！ そうだな、そっちが先だった」

川内に肩を借り、立ち上がり、目の前の浦風を見る。

「銀髪、寮母サンニ見ツカル前ニハヨウチノパン食べ、オ前、細スギジャ。オカツパ、何泣イトルン？ マタ、寮母サンニ殴ラレタンジャナ？ ショウガナイナア、撫デチャルケエ、コツチオイデ——」

孤児院時代の幻覚でも見ているのだろうか。浦風は懐かしい呼び名を口にしては、虚空を見つめて延々と喋り続けている。

しかし、私と視線が合うと急に豹変し、憎悪の視線を私に送る。

「磯風エ、何デマダ生キテルンジャ？ オ前ガ死ネバ、皆元通りニナルンジャ。キット、昔ミタイニ、辛イコトモ、楽シイコトモ、一緒二分カチ合エル、家族ミタイニ、キット……!」

「川内、合図したら勢いよく私をあいっつに向けて押し出してもらえるか？」

「え、いいの？ 真正面からじゃ蜂の巣じゃ？」

「大丈夫だ」

「……ま、磯風の実力は私が一番良く知ってるからね、わかった、信じるよ」

そう言つて、川内は腰を落とし、私の背中に手を乗せる。

「磯風……磯風、磯風、イソカゼエエエエエエ！」

「今だー！」

「いっけえええええええええ！」

川内の渾身の力で、私は鉄砲玉のように真つすぐに反対から向かつてくる浦風に向けて飛んでいく。

当然、浦風は連装砲を目の前にして今度こそ私の脳天を捉えんと引き金を絞る。

「ここだー！」

このタイミングで、私は自分の艤装を起動した。とはいっても動くのは左足だけ。

しかし、それがここで功を持した。

左足のスクリューだけが回転し、それは、急カーブに近い軌道を生む。

「――！」

避けられないと思っていた私が土壇場で回避したのがよほど虚を突かれたのか、私の回避に反応が遅れた。

彼女の無防備な側面を取った時、私は躊躇いなく、連装砲を向けた。

「これで最後だ……！」

砲火と同時に、砲弾は浦風の側頭部を直撃した。

海面に浦風の身体が倒れ、それ以上起き上がってくることはない。

「浦風――！」

「……ああ、磯風……今度谷風と浜風も誘つてまた、一緒に町に遊びにいこうな……私は、今度は……商店街の方とかも……見にいきたい、なあ……」

「浦風、私は……」

「――磯風……ごめんなあ……」

「――ッ！」

最後に、駆け寄る私に仰向けのまま虚ろな目でそう呟いた浦風はそれ以降、言葉を発することはなく、その体は冷たくなって海に飲み込まれた。

「謝るくらいなら……何で……ッ！」

磯風は浦風の沈んだ海底を恨めしく見つめ、海面に手をついて頭を垂れた。

☆

磯風と浦風の決着が着いた頃、プリンツは、暗い海原を一人上機嫌で駆けていた。

「——ふんふんふん！ あ！ きつとあれだ！ あれに違いない！ お姉さま！ あなたの最愛のプリンツがお姉さまをお迎えにあがりましたよ！ 手始めに熱い抱擁から——」

前方に見えた一人の艦娘の影を大和と認識し、飛び込んでいくプリンツの足は彼女の姿を目視した所で止まった。

立っていた人影は確かに大和だった。

そして、その足元には、白目を剥いて海面に倒れている伊勢の姿が見えた。

しかし、その姿は見るも無残で、艦装はほとんど原型をとどめないまでに破壊の限りを尽くされていた。

一体、砲撃のできない大和が、いや、砲撃ができるにしても一体どうしたらこのような惨状を生み出せるのかプリンツには想像がつかなかった。

「あ、あの、これは、お姉さまが？」

恐る恐る質問するプリンツに、大和は振り返った。

「あら、プリンツ。無事だったんですね、良かった！ 磯風や天龍は大丈夫ですか？ 瑞鳳は？」

「……………」

「あれ、どうしたんですか？ 私の顔に何か変なものでも——」

「——お姉さまじゃない」

プリンツは静かにそう言った。

同時に大和の表情が固まった。

「ぷ、プリンツ？ あの、流石の私もそういうことを真正面から言われるのは傷つくんですけど……」

「似てはいるけど、お姉さまじゃない。あなた……誰？」

「……………あら、わかるんですね」

「途端に大和の声色と雰囲気が一変した。

プリンツは、反射的に距離を取るが、それを彼女は笑って手を振った。

「いやいや、警戒する必要はないですよ。別に危害を加える気はないですし」

「だ、誰!? あなた! お姉さまはどこ!」

「私が大和ですよ」

「違う! あなたは、今まで見て来たお姉さまとはなんか、よくわかんないけど違う! 私にはわかる!」

「…………正直、これでバレないようでしたら私が大和私になるつもりだったんですけど、まさかこんなあつさりバレてしまうとは、我ながらショックです」

「な、何言ってるのあなた…………?」

落ち込んだように肩を落とすと、再び笑顔を見せて大和は言った。

「まあ、あの私も私なりに頑張っているということなんでしょうね。仕方ない、まだしばらくはあの私に大和私を任せることにしましょう」

「あなたは、誰なの?」

「言ったでしょう? 私は大和です。そして、あなたの良く知る私も大和。どちらも大和でどちらかが欠けても大和ではない、そんな感じですよ」

「うーん?」

「まあ、きつといつかわかる時が来ますよ。それまで、どうか、大和私の良き仲間であってくださいね、プリンツさん、そして七丈島艦隊の皆さん」

そう言って優しい微笑を見せた瞬間、糸が切れたように大和は前のめりに意識を失って倒れる。

プリンツが慌ててその体を受け止める。

呼吸は安定している。どうやら気絶しているだけらしいとわかり、プリンツは胸を撫でおろした。

「お姉さま…………お姉さまは一体何者なの…………?」

「——あの、お取込み中失礼します」

「ふえ!?!」

途端に、背後から声をかけられ、プリンツは変な声を洩らしてしま
う。

振り向くとそこには和服を着た丁寧な物腰の女性が立っていた。

「七丈島艦隊の大和さんとプリンツさんですね？ 私は軽空母鳳翔。
佐世保鎮守府提督、大将海老名薫えびなかもるの命により、七丈島鎮守府の救援に
馳せ参じました」

「ふえ……大将……!?!」

思わぬビッグネームの登場に、プリンツからまた変な声が洩れた。

第六十二話 「艦娘は、人間だ」

昔から、道具を使うことが得意だった。

『ほう、見事なデキだ』

『この年でこれだけできるとは、将来有望じゃないか、息子さんは』
『工具や機械の扱いが極めて上手いんだ。一回教えただけで、応用的な使い方で完璧にマスターしてる。こいつは天才かもしれない』

僕の家は代々製鉄所を営む家系で、戦争が始まってからは艦装と装備の製造を中心に工場を回している。将来の跡取りとして幼い頃から僕は父が祖父から引き継いだ製鉄所に入りしてはその技術を朝から晩まで叩き込まれていた。

その頃から、既に僕は道具を使うことについて才覚を發揮していた。

一度説明されればその工具にどんな使い道があうのか大体察することができたし、また、自在に操ることもできた。

父やその同輩達からは天才だとおもてはやされ、また、僕もその賞賛を嬉しく思っていた。

しかし、そんな僕に転機が訪れた。

父が死んだのだ。

『事故だ。機械の内部点検中に誤作動が起きて……頭をはさまれて、そのまま……』

それ以上は言わず、僕は見ない方がいいと父の死体も見せてもらえなかった。

僕は父の死に悲しいという感情を子供らしく抱いていたと同時に、失望したという冷めた感情も持ち合わせていた。

——使うべき道具に殺されるなど、無能だ。

当時13歳の僕はそんな思考をこの時既に持ち合わせていた。

それから、僕の製鉄所への関心は薄れ、周りはそれを父の死のトラウマと勘違いしてか何も言わず、僕と製鉄所の距離が遠のいてから3年の月日が過ぎた頃、二人の軍人が僕の元へやってきた。

一人は女性、提督だという。もう一人の屈強そうな男はその護衛の憲兵だった。

『あなたの、道具を扱う才能、それを海で活かして欲しいのよ』

『海軍士官学校の、入学願書……？ 僕に士官になれと？』

『君には是非、志高く、提督を目指してもらいたい！』

斜め後ろで直立不動の姿勢を取る憲兵が僕にそう言った。提督の方も同意を示すように頷いた。

『あなたには艦娘の指揮の才がある。それを是非軍に貸して欲しいってわけよ』

『艦娘は人間でしょうか？ 僕は人を使うことはできませんよ』

『じゃあ、兵器でいいじゃない』

『――！』

軽々しく即答する提督に僕は目を見張った。

『犬見君、犬見誠一郎君、アタシは、あなたの才能が欲しい。きっとあなたは立派な提督になれるわ。そうになったら、アタシの元に来なさい。あなたの力が必要よ』

艦娘は道具。提督はその道具を使いこなす者。

かぶらぎみみすず 鏑木美鈴。彼女という提督との出会いが、彼女から掛けられた言葉が、それからの僕の理念を決定づけるきっかけだった。

『――あれが、七丈島か』

青空の下、回想に浸っていた僕は甲板から、少しずつ大きくなっていくかの島を細めに遠望しながらそう呟いた。

☆

『――う、ん？』

『お姉さま！ 目が覚めたんですね?!』

気が付けば、そこは私の部屋、そのベッドの上だった。私が意識を取り戻した瞬間、その視界に飛び込んできたのはプリンツの心から安堵した笑顔だった。

『……プリンツ、どうなったのか、教えてくれませんか？』

『勝ちました！』

『うん、もう少し詳しく』・

それから数分間にかけてプリンツから私が気絶していた間のことを聞かされた。

犬見艦隊との戦いから既に1日が過ぎた。

結果さえ見れば、私達は救援に来た大将の艦隊の助けもあり、犬見艦隊に完勝。現在は戦死した浦風を除き、捕虜としてスタンリングを付けてウチの鎮守府に待機してもらっている。

本人たちは皆大人しくしているということだ。

「しかし、大将クラスの艦隊が救援に……」

「事前に提督に呼ばれていたらしくて、伊58が戦闘のどさくさに紛れて合流し、私達の元まで案内してくれたらしいです」

「そうですね、伊58が」

「どうやら、磯風の言葉は伊58にしつかり届いていたらしい。」

「あれ？ そういえば他の皆はどこに？」

「食堂でその大将さんの相手をしています……」

プリンツが私から目をそらしたのが気になったが、とりあえず私もその大将に挨拶せねばと食堂に向かうことにした。

「——この日本には現在、四人の大将がいる！」

「はあ……」

「呉鎮守府の亀有提督！ 舞鶴鎮守府の姥鮫提督！ 最前線、ブイン基地の白鯨提督！ そしてっ！ 佐世保鎮守府の、この私！ 海老名ちゃん提督だあ！」

「あの、もう、5回目でち、その台詞……」

「はっはっは！ もしかしたら以前4回を聞き逃しててわからない子がいるかもしれないだろう!？」

「どうでもいいけど、私に被さるのいい加減やめろでち！」

陽気な笑い声をあげながら伊58に覆いかぶさるように抱き着くその女性を振り払おうにも振り払えず、伊58は現在、本気で困っていた。

そして、海老名自身もその伊58の様子を把握していながらあえてこうしてちよっかいをかけているのだ。

その様子に天龍、磯風、瑞鳳は特に動くことはない。きつと下手に

動けば次は自分がこうなるとわかっているから。

「ふっふっふ！ それじゃあ次は天龍ちゃんとその豊満なボディに
呐喊とっかんさせていただこうかなねえ、ふひひ」

「悪いけど、本気で斬るぜ、いやマジで」

「いいねえ、私はそういうのも全然おつけーよ、いやマジで」

「フッフ、怖い」

「でもお、じゃあ、先に磯風ちゃんいつとく？」

「わ、私は美味しくないぞ……！」

「毒入りでも磯風ちゃんなら私はイケる」

「ひえ……！」

「あの、海老名提督……私達、用事があるので、そろそろ一旦失礼した
いんですけど……」

「瑞鳳ちゃん、私のために毎日卵焼きを作ってくれ。私、全部たべりゆ
し」

「こいつ……会話が成立しない……っ！」

海老名に対して各々結構本気で威嚇してみせたものの、むしろその
反応を喜ぶ彼女に天龍達の身体は震えていた。

しかし、そんな彼女の伸びたい放題でボサボサの頭髮に手刀が降り
下ろされる。

「つたあーい！ 誰?! 私には佐世保鎮守府大将、海老名ちゃん提督だ
よ!?!」

「海老名、あなたは士官学校の頃から全く変わりませんね……」

「あ……先輩、お久しぶり、でえす……」

振り向いた海老名の笑顔がさっきの楽しそうな表情から一変して
引きつり、血の気が失せているのが一目瞭然だった。

「私も大概ですけれどね！ 海老名は私なんかよりも責任があり、国
民だけでなく他の提督の模範にもならねばならない立場なのですか
らもう少し、こう、頑張ってください！ 具体的にはまず身なりをで
すね——」

「ちよー やめてください！ 大将にはお触り厳禁ですよ!?! 髪はこ
れでいいんです！ これが私のベストコンディションなんですう！」

海老名が提督に片手でヘッドロックされつつ髪を整えられている間、拘束が緩み、やつとのことで脱出できた天龍達は一步引いたところからその様子を苦笑いで見つめる矢矧と川内、鳳翔の方へと逃げるように移動した。

「やつと解放されたでち……もう、本当に、限界だったでち」

「すげえな、あれが大将か。タダ者じゃねえな」

「プリンツに似た何かを感じた」

「ウチの提督が皆さんにご迷惑をお掛けして、本当に申し訳ありません！」

「うん、提督のスキンシップは本当になんていうか、デンジャラスだよねえ」

天龍達の様子に、鳳翔は何度も頭を下げ、川内も目を逸らして苦笑いを浮かべていた。

しかし、その中で矢矧だけは提督の方を見て絶句していた。

「あ、ありえない……」

「でち？」

「提督が、あの提督が！ ちゃんとしてるように見えるなんて!」

「……なんか、すっかり平和って感じよね」

「そうだな、もう元通りだ」

「——すみません、さっき目が覚めました……ってなんか賑やかですね？」

「お、大和、目が覚めたのか」

食堂に入ってきた大和とプリンツを出迎える天龍達。

そこに何よりも反応したのは、提督に捕まっていた海老名だった。

「大和だど!? ちよおつとあなたの超弩級なボディを海老名ちゃんハンドで触診させてもらってもいいですかねえっ!」

「なんですか、この人!」

「お姉さまは渡さないッ!」

「大丈夫、海老名ちゃんは寛大なんだ！ 二人まとめてやったるでい！」

「やだ、怖いです、お姉さまー!」

「私も怖い！」

両手の指を触手のようにうねうねと動かして大和達に迫る海老名に再び提督の手刀が振り下ろされた。

☆

「——ゴホン、改めて、こちらは海老名薫大将。今回の件で私が助っ人として呼んだ方です。ちなみに士官学校の後輩でもあります」

「どーも、海老名ちゃんです。親しみを込めて海老名ちゃんと呼んでくれたまえ。あ、先輩には士官学校で色々深い意味でお世話になった身です」

「ちよ、提督!? まさか、その人と……」

「何もありません！ 海老名、いかがわしい言い方はやめてもらえま
すか!?!」

「将来は専業主婦として先輩に養ってもらおう予定です」

「なっ……!」

「そんな予定はありませんッ!」

これまでにないおちゃらけた雰囲気その大将は、私達の大将像からはあまりに離れすぎていて、私達はすっかり面食らってしまった言葉がでないでいた。

矢矧だけは別の意味で固まっているのかもしれないが。

しかし、いつまでも沈黙したままにいるわけにもいかず、磯風が口火を切って質問する。

「その、あなたが——」

「海老名ちゃん」

「……その、海老名ちゃんが川内の今の提督なのか?」

「イエス、その通り。そして、そういう君、磯風ちゃんの話は川内から常々聞かされているよ。昔お爺ちゃんに協力してくれてただってね、ありがとね!」

「お、お爺ちゃん?」

「磯風、実はこの人、中将の孫なんだよ」

「孫!?! 中将の!?!」

磯風は川内の言葉にオーバーなアクションで驚愕する。

あまりに磯風の中將と目の前の海老名に血縁関係を思わせる類似点が見いだせなかつたからだろう。

「ま、助っ人で呼ばれて、伊58ちゃんに連れられて来てみれば既にほとんど終わつて後片付けくらいにしか役に立たなかつたけどね、いや面目ない」

「大将クラスと知り合いだつたんだな……提督」

「まあ、大将が知り合いというより知り合いが大将になつたと言うのが正確ですがね」

「いやあ、私、優秀なもので。主席卒業の先輩までも追い越して大将になつてしまいました。はっはっは」

自慢気に胸を張って語る彼女に鳳翔と川内から同時に手刀が振り下ろされた。

今度は川内と鳳翔からだつた

「つたあい！」

「何が優秀だ！ 自分は執務室でだらだらしてるだけの癖に！ いつも頑張ってるのは私達なんだからね!? そういうセリフは、少しは仕事してから言つてよね！」

「そうですね。胸を張つていい程提督は鎮守府に貢献はしてないですよ」

「私は面倒ごとには関わらずに艦娘といちやいちゃして遊んで暮らしたいんだよお。楽しいことだけやっていたいよお、仕事面倒くさいよお」

何故こんな人が大将なのか、と私を含めてその場の誰もが思ったことだろう。

「提督は仕事の意欲があるだけマシだったのね」

「あれと比べられてマシと言われてもあまり嬉しくないんですが」

「働きたくないでござるっ！ 絶対に働きたくないでござるッ！」

鳳翔と川内の説教に対して耳を塞いで働きたくないを連呼する海老名を見て、矢矧は見直したとでも言いたげに提督を見上げ、提督はその視線に苦笑いで答えた。

「——随分と、賑やかだね。ここの鎮守府は」

その声に一番に反応したのは磯風だった。

いつの間にか食堂の扉が開かれ、そして、そこからゆつくりと姿を現した男は、紛れもなく、犬見誠一郎その人だった。

「久しぶりだ、主席殿。いや、今は少将殿、か」

「お久しぶりです。犬見君」

「お久しぶりですー、いぬみん先輩」

「チツ、海老名か。面倒なのがいるな」

「えー、なんですか!? カワイイ後輩がこうして愛想よく挨拶してるのにその反応!?!」

犬見は海老名の抗議の声も無視して辺りを見渡すと、磯風に視線を向けた。

「久しぶりだな、磯風」

「犬見……!」

「ねー、ちよつと! いぬみん先輩聞いてますー!? 無視しないでよ、

私大将よー!」

「提督、空気読んでください!」

☆

「まずは、ウチの捕虜の方だが」

「ええ、皆さん無事です。最低限の拘束はさせていただいています
が」

「ああ、知っている。まさかスタンリングを付けているだけとは、驚いたよ。悪いが、既に開放してここに連れて来させてもらった」

犬見の言葉と同時に伊勢、日向、那珂の三人が続けて食堂に入ってきた。そして、机の上はどうやって外したのか開錠されたスタンリングが三つ食堂のテーブルに置かれる。

「少将殿、鎮守府の警備についてはもう少し見直した方がいい。このスタンリングについてもね。あまりにザル過ぎる」

「……検討しておきます」

「では本題に入ろうか、少将殿は今回の件に関してどういう対応をとるつもりかな?」

「既に横須賀艦隊に護送船の用意を依頼してあります。軍事裁判でし

かるべき処分を受けてください」

提督の言葉に、犬見は何も動揺を見せない。

むしろ、嘲るように笑った。

「甘いな。私ならそんなことはせずに内々で処理するが。それに、そんなやり方で磯風は納得しているのか？」

磯風に視線をやる犬見に天龍や川内が険しい表情をして口を開きかけたが、それよりも早く、海老名の低い声が響いた。

「先輩、もう、いいんじゃないですか？ 殺^ヤつちやつても。私、大将ですし、彼一人くらいの生死ならギリ揉み消せますよ」

「海老名……」

「あ、別に気に病む必要はないです。私、実は大層なお爺ちゃんつ子なので、いぬみん先輩には内心かなりおこですし。今は先輩の手前我慢してるだけです」

先刻とは一変して一定のトーンで淡々と語り続ける海老名からは明確な犬見への憎悪と敵意が感じられた。

それに反応し、犬見の後ろで控えていた伊勢達は慌てて彼を守るように前に出てくる。

「……わかりました。磯風、こういうことですから、あなたに判断を任せます。自らの手で、決着をつけたいというのなら、私も止めません」
「ちよ、提督、それは!?!」

提督は懐から黒光りするオートマチック拳銃を取り出すと、磯風に渡す。

矢矧から声があがるが、天龍に制止される。

「あなたが、決めてください。あなたの選択を、私は必ず尊重します」
「わかった、ありがとう、提督」

銃を受け取ると、磯風は犬見の方に向き直った。

「犬見、艦娘は道具か？」

「ああ、道具だ。全ては、私の道具。悪いが、この命が果てるまでその考えが変わることはない」

「そうか、なら、私も言おう」

前に立ちふさがる伊勢達を眼力で圧倒し、犬見の目の前に立った磯

風は真つすぐに彼を見つめて言った。

「艦娘は、人間だ」

「……………何故、そう思う？」

「私達は、楽しければ笑うし、悲しければ泣く。自分で考え、自分で行動する個性がある。私達は道具や兵器にはない『心』を持っている。だから、道具にも兵器にもなれない。当たり前のことだ」

「そうか、当たり前か」

その時、僅かに眉を動かした犬見を見て、提督が小さく笑ったのが矢矧には見えた。

「犬見、お前も気が付いている筈だ。艦娘は道具じゃないって」

「何を馬鹿な…………」

「お前の艦娘が証明してくれている。何も命令されずとも、自分の意志でお前のために動く艦娘達がお前の目の前にいるじゃないか。かつて谷風と浜風もそうだった。そして、きつと浦風もそうしただろう」

「……………」

「わかるか、犬見？ 艦娘から心を取り外すことは、意志を奪うことはできないんだ。だから、私達は道具になれない、人間なんだ」

伊勢、日向、那珂は何も言わない。犬見も眉間に皺を寄せて立ち尽くしている。

磯風はそんな犬見に銃を向けて続けた。

「正直、お前を殺したいほど憎んでいる私がいるのは事実だ」

「…………ふ、そうだろうな」

「だが、私はお前を慕う艦娘達を見た。だから、私は私の心に従って、人として、お前を赦すことにする」

そう言って、向けていた銃を再び下におろした。

「何、だと…………」

「勘違いするな。法の裁きは受けてもらう。ただ、ここで私が自ら手を下すことはしない。それだけだ。すまないが、それでいいか、海老名ちゃん？」

磯風は恐る恐るといった様子で海老名の方を見る。

彼女は一瞬、険しい表情を浮かべたものの、すぐに諦めたように笑ってため息をつくくと、親指と人差し指で丸を作って見せた。

「うん、おっけーよ。他でもない磯風ちゃんかそう言うなら、海老名ちゃんも大人げないこと言えないわー。それに、そっちの方がいぬみん先輩には効きそうだしね」

そう言って、笑う海老名の視線の先では犬見が怒りに拳を震わせていた。

自らが使うべき道具に打倒され、決別され、そして助けられる。

完膚なきまでの完全敗北であり、同時にそれはかつて道具に殺された父と重なる、犬見が最も忌避した姿だった。

「僕を……虚仮コケにするのか……磯風ツ！」

「犬見、これが私とお前の決着だ」

そう言って、磯風は犬見に背を向け、七丈島艦隊の面々へ笑顔でピースをして見せる。

磯風の長きに渡る犬見との因縁はこうして決着を果たした。

第六十三話「もし良ければ、七丈島艦隊に入りませんか？」

「成程、犬見君の考え方はわかりました」

士官学校、その廊下で主席殿は僕の考え方についてそう反応を返した。

「君は僕を否定するかい？ 非情な人間だと」

きつと僕の考え方は万人が認めるものではない。むしろほとんどの人間は僕を否定するだろう。

しかし、主席殿は笑って首を振った。

「いえ、非情とは言いません。あなたはこの戦争を終わらせるためにより効率的に艦娘を運用したいと、そう言っている。本当に非情なのは、戦争を続けることですよ」

「そうか、そういう考え方もあるか」

「でも、悪いですがその理想は叶わないと思います」

理想を認めない、許さないなどと言われることはあつても叶わないと言われたことは初めてだった。

「何故、そう思う？」

「艦娘は心を持っているから。心を持ったものは、兵器や道具にはなれませんよ」

「じゃあ、心を排除できたとしたら？」

主席殿は首を振った。

「それじゃ駄目なんです。これまでの軍艦では駄目で、艦娘だけが深海棲艦を倒すことができる理由はそこにあると私は思います」

「心で深海棲艦を倒せるとでも？」

「感じ、傷つき、恐れさせる、時に邪魔で非効率とも思える心が、艦娘に残されたことにはきつと何か意味がある、私はそう思います」

心を排除した艦娘では、軍艦と同じ。心を持つからこそ、艦娘は艦娘足りえる力を発揮できるのだと、主席殿の言葉を僕はそう解釈した。

当時の僕は、内心でそんな確証はないと否定していたが、今となつてはあながち否定もできない。

☆

『私達は、楽しければ笑うし、悲しければ泣く。自分で考え、自分で行動する個性がある。私達は道具や兵器にはない『心』を持っている。だから、道具にも兵器にもなれない。当たり前のことだ』

「……まさか、同じ答えを聞かされることになるとはな」

「え？」

小声で犬見が呟いた言葉に磯風が反応しかけたその時だった。

「——お話は終わったのかしら？」

「——あ、あの、入ってもよろしいでしょうか……？」

磯風が拳銃を提督に返し、食堂内の緊張感が途切れたその瞬間を見計らったかのように、食堂の扉から頭だけ覗かせる二人の少女がいた。

「あなた達は？」

「横須賀から犬見中将の護送を任されて来たわ！ 駆逐艦雷よ！ 後のことは全部私に任せてくれていいんだからね！」

「同じく護送を任命された駆逐艦電、なのです」

はきはきと明るい喋り口調の雷と、それに対照的に前髪で右目を隠しているせいも、陰気で常におどおどしている電。

護送に任命されたのがこの幼い二人の艦娘であるということに、全員が不安を隠しきれないでいた。

そんな表情を読み取ってか、雷が抗議の声をあげる。

「大丈夫よ！ 私達にたくさん頼ってくれていいんだからね！ これでも精鋭だから！」

「ま、まあ、あの横須賀だしな。見た目で判断すんのは良くねえよな。悪い悪い」

「い、いえ……実際、私達なんて、頼りないですし……皆さんが不安になるのも仕方ないのです」

「ちよ、電！ 駄目よ！ もっと自信を持ちなさい！」

「妹の方は普通に駄目そうね」

「でも、ああいう姉妹、いいよね！ お姉さまもそう思うよね!？」

「何で私に同意を求めるんですか？」

「海老名ちゃんは超同意だぜ！」

「話がややこしくなるので海老名ちゃんは入ってこないでください！」

また騒がしくなる食堂の空気に耐えかねたかのように、犬見は自発的に食堂の扉を開く。

「ちよ、ちよつと！ 勝手にどっか行かないでもらえる!？」

「こ、困るのです！」

「これ以上長居する必要もないだろう。さっさと行こう」

「も、元からそのつもりよ！ あなたに言われるまでもないわ！ あ、でもちよつと待って！」

護送を促す犬見に対し、雷は何か思い出したかのようにポケットから四つ折りにされた紙を取り出すと、たどたどしい言葉遣いで読み上げる。

「えと、被疑者、並びにその共犯とおぼしき艦娘も一緒に同行することであるだけけど？」

「あ、わ、私達のことだよね」

「まあ、そうなるな」

「那珂ちゃんやっぱりアイドル引退なのかなあ」
「……………」

伊勢、日向、那珂は名乗り出て犬見の方へ歩み寄る。

伊58はそれに一瞬足が止まった。

周囲にも再び緊張が走る。

「えーと、その伊58はどこの所属かしら？ 七丈島艦隊じゃないわよね？」

「あ、私も——」

雷にそう尋ねられて、足を一步踏み出そうとしたその時、伊58の台詞を遮るようにあがった声は意外にも犬見の声だった。

「その潜水艦は知らないな。海老名大將殿の艦娘だろう？」

「え……………」

「——！ あー、この子はウチの艦娘だから、連れてつちや、やーよっ。」
「ふーん、ならいいわ！ じゃ、さつさと行きましようか！」
「あ、すみません、後もう一つだけ犬見提督に聞きたいことがあるんですが」

「もう！ あと一分だけなんだからね！」

「すみません」

雷が腰に手を当てて頬を膨らませる。

提督は犬見の耳元で周りに気付かれないよう小声で尋ねた。

「最後に使った、あの薬。あれは、鏑木提督の研究に関連する薬ですよ
ね？」

「……そうか、君はまだ、彼女の亡霊を追っているのか……」

「何か知っていることがあるなら教えて下さい」

「諦めろ、鏑木美鈴は当の昔に死んだ。あれは、僕がくすねてきた遺品
を元に作った失敗作に過ぎない」

「……………そうですか」

「少将殿、まさか、君は——」

「——そろそろ時間よ！」

犬見が何かを言いかけたところで雷が二人の間に割って入り、強制的に会話を中断した。

雷に手を引つ張られながら、犬見は最後に提督の方を振り返った。

「………主席殿、友として、一つ忠告しておく。君という人間は、そんな無意味なことに使っていいものじゃない。君も、君に使われる道具も、哀れだ」

懐かしい呼び方でそう呼ばれ、虚を突かれたように顔をあげる提督を背に犬見は去っていった。

「え、と、あの……」

「……………」

犬見とその艦娘達、さらには雷までもが既に食堂から去っていったにも関わらず、一方電は一人でまだそこにいた。

その目は何かに憑りつかれたようにひたすらに大和を見上げている。

「あの、皆さん行ってしまいましたけれど……?」

「そっくりなのです」

「え?」

「よくできているのです!」

「あの、何の話ですか?」

「でも、所詮は偽物なのです!」

「……あの、あなたは」

大和の返答も待たず、電は雷達を追って走り去って行ってしまった。

その最中に、彼女の前髪で隠されていた右目が露わになり、そこには大きな眼帯が見えた。

☆

「さて、これで一件落着というわけですね。皆さん、大変お疲れさまでした!」

「ふいー、久々のガチ戦闘は疲れたぜ」

「いや、全く。温泉とか行きたいわよね、温泉」

「行けるわけないでしょ? まあ、でも、今日くらいは少し賑やかにしても私は目を瞑るわよ」

「あ、じゃあパーティーだね!」

「パーティー! いいですね!」

提督のすっかり緊張の抜けきった一言から派生してあつという間に今日はパーティを開く話まで広がっていく。

そして、今日に限りはそれに間違いなく乗ってくるであろう人物がさらにいる。

「お、パーティーだとう!? こいつは友軍艦隊として海老名ちゃん達も参加しないとだよねえ!」

「提督は遊びたいだけでしょ?」

「何が悪いか!」

「まあまあ、もう鎮守府に帰投するには日が回りすぎましたし、私達もお手伝いがてら参加させていただきましょう」

「話がわかるぜ、お艦! じゃあ、料理はよろしく頼んだ!」

「ああ、私と大和と鳳翔さんがいればこの人数でも料理は心配いらな
いな！」

その瞬間、七丈島艦隊の面々の空気が凍り付いた。

「え、ちよ、おい、磯風さん？ 何さりげなく自分も料理作ろうとして
んだ、おい？」

「大丈夫だ、なんだか凄くスッキリしててな、今日はイケる気がする
！」

「いける気がするじゃないわよ!? 大将暗殺したら今度こそ死刑よ
!?!」

「悪いことはいいませんから料理は私と鳳翔さんに任せてもらえませ
んか？」

「おん？ 海老名ちゃん、料理は真心派だから、愛さえ込めてくれれば
結構なんでも食べるよ？ 炭化してても笑顔で食うよ？」

「よし、私の全身全霊をかけて海老名ちゃんに料理を振舞おう」

「よっしゃ、きたこれ！」

「やめて！ 本当にやめてくださいって！」

「いや、海老名ならいいですよ」

「提督!?!」

「先輩!?!」

七丈島艦隊全員がかりで磯風の乱心を止めている中、一人だけ浮か
ない表情をしている伊58に気付いた大和は彼女の隣に歩み寄った。

「どうしたんですか？」

「いや、その、私だけが助かっちゃって、いいのかなって……」

先刻、共犯として名乗り出られなかったことが伊58の中で罪悪感
となつて尾を引いていた。

しかし、大和はそれを笑い飛ばしてみせる。

「いや、大丈夫でしょう！ 他ならぬ犬見提督が、伊58は違うって
言ったんですから」

「何で、私のことなんて庇ったんでちか。私は、提督に救われたその恩
をあんな形で返した裏切り者なのに……」

伊58は耳についている真珠のイヤリングに手を伸ばし、その眉間

にますます深い皺を作った。

そんな彼女に大和は手を乗せて言った。

「そういうのも全部含めて、犬見提督はあなたを自分の艦娘じゃないって言ったんだと思いますよ。あなたはもう道具じゃない、一人の人間だって」

「……なあ、犬見提督は、本当に悪人だったと思うでちか？」

「さあ、どうでしょう？ 少なくとも磯風にした仕打ちを考えれば私達にとっては立派な悪人ですけれど」

大和はそこで言葉を一旦区切ると、どこか遠くを見据えるようにして続けた。

「正義か悪かなんて、物の見方次第でどうとでも変わるものです。だから、あなたはあなたの視点で犬見提督を見ればいいと思います。それを私達は誰も否定しませんよ」

「……そうでちね、ありがとうでち、大和」

伊58はそう言って嬉しそうに笑顔を見せた。

「ところで、伊58はこれからどうするんです？ これで野良艦娘になっちゃいましたけれど」

「あー、そこんところ考えてなかったでちな」

「もし良ければ、七丈島艦隊に入りませんか？」

「……………」

大和の言葉に驚愕を隠し切れない様子の伊58は視線を大和の方から磯風達が騒いでいるあたりに向ける。

「あの、こんなのおこがましいのは百も承知でちが、許されるなら、私は七丈島艦隊に——」

「——だが、断る」

「——!？」

伊58が声を期待に上擦らせながら言いかけた言葉を横から割り込んで制止したのは、いつの間にか大和と伊58の間に陣取っている海老名だった。

「え、あの、海老名ちゃん？」

「この海老名薫が最も好きなことの一つは、これフラグ立ってるだ

ろって話の展開を憶測している奴らに、『NO』と叫んでフラグをぶち壊してやることだッ！」

「海老名ちゃん!？」

「ふっふっふ、忘れたのかあい？ 私雷ちゃんに言ったはずだよ？」

この子はウチの艦娘だからってなあ！ 悪いが伊58ちゃんは私が貰い受けるんだからね！ 勘違いしないでよね！」

そう言っつて、伊58を抱きしめる海老名からはもう彼女を取り戻せそうにはなかった。

「大丈夫！ その代わりラスボス戦でピンチになったら伊58と一緒にカツコよく助けに来てやんよ！」

「何ですか、その使う機会の来なさそうな特典は！」

「……まあ、私を必要としてくれるなら。よろしくでち、海老名提督」「よろしくねえ、私のことは親愛を込めて海老名ちゃんと呼びなさい」「ええ……」

こうして七丈島艦隊の新人加入チャンスを逃したものの無事伊58の行先も決まり、おおよそ全ての問題が片付いたという所で、最後に大きな衝撃を与える事件がやってくることになる。

「——あら、今日はとても賑やかなのですね？ どうも、お久しぶりです、七丈島艦隊の皆さん。横須賀艦隊から犬見提督の護送の任を受けて推参致しました、川内型軽巡洋艦二番艦、神通です」

「げっ、神通!？」

「嬉しい反応をしてくれますね、天龍さん」

食堂の扉を開き、入ってきたのは以前一悶着のあった横須賀艦隊の神通だった。

天龍があからさまに嫌そうな顔をするが、それ以前に、彼女の台詞を聞いたその場の全員は時間が止まったかのように動きを止めた。

「ちよつと、神通さん？ 今あなた、なんて言いましたか？」

「いえ、だからご依頼のあった犬見提督の護送のために来たのですが……犬見提督はどちらに？」

「……今しがた、護送を任命されてやって来た雷と電が連れて行きましたか」

「……雷と電？ おかしいですね、護送任務は私だけに出ていた筈です
すが」

背筋が凍るように寒くなったのをその場の全員が感じた。

「じゃあ、さっきの彼女達は一体どこの誰なんですか……？」

☆

「——さて、ついにこれで僕も牢獄行きか」

護送船の甲板。遠く、小さくなっていく七丈島を見つめながら笑った。

「しかし、何故ついてきたんだい、お前達？ 伊58と同じようにごまかせばこうして捕まることもなかったろうに」

呆れたように犬見は振り返って後ろに立っていた伊勢、日向、那珂の方に視線をやる。

「い、いやあ、だって、ねえ？ 私達は提督の艦娘だし、そこは最後まで、その、付き合いますよ」

「まあ、そうなるな」

「那珂ちゃんの提督は犬見Pだけだからね！」

「……呆れた奴らだ」

犬見はそう冷たくあしらってまた彼女達に背を向ける。しかし、彼のその表情には僅かに笑みが浮かんでいた。

『——なんかいい感じな所悪いのだけれど、あなた達がこれから向かうのは実は横須賀じゃないのよねえ』

突然どこからか聞こえて来たボイスチェンジャーの掛かった声に犬見と艦娘全員が音の発信源に即座に首を回した。

いつの間にか彼らの後ろに立っていた雷と電。彼女達の持つ通信機から流れてくる音声だった。

『久しぶりね、犬見君。アタシのことを覚えているかしら？』

「……馬鹿な、そんな筈はない。誰だ、お前は」

『流石犬見君ね。相変わらず勘が鋭いわ。そうよ、あなたの想像した通り、鏑木美鈴よ』

「鏑木提督はとっくの昔に死んだ、もういない」

『でも、死体が本人だったかはわからなかったでしょう？ だって、そ

んなのがわからない程焼け焦げていた筈だもの』

「……………」

『嬉しいわ。その才覚を活かして立派に提督をしてきていたみたいで』

「……………」

犬見は険しい表情で通信機を睨み、口をつぐんでいた。

『でも、他人の物を盗んで勝手に量産されたりするのは困るわね』

恐らくは、日向と浦風に使った薬のことを言っていると即座に犬見は理解した。

『艤装に注射器を取り付けて艤装接合部を通して体内に注入する発想はなかなか悪くないけれど、肝心の薬の方は全然駄目ね。あんな半端物を世に出されると困るわ』

「成程……薬のことが大本営に知られるのが恐ろしいと言う訳か」

『そうよ、特に元帥にはまだ知られる訳にはいかない。今あの爺さんに少しでもアタシに繋がる情報を渡すのは、あまりうまくない。だから、先回りして証拠は処分することにしたわ。あなた達ごとね』

その言葉と同時に雷と電は背中に差してある錨に手をかけた。

「雷——」

「電——」

「——拔錨」

『さようなら、犬見誠一郎君。ヴァルハラで逢いましょう』

その後、横須賀鎮守府を中心とした搜索隊が編成され、数か月に渡って搜索が続けられたが、犬見誠一郎とその艦娘三名が発見されることはなかった。

やがて搜索は打ち切りになり、犬見と艦娘達は全員、深海棲艦との戦闘の末に戦死したとして処理された。

これが、将来、七丈島艦隊が対立することになる巨大な闇との、間接的ではあるが、初めての接触であったことを、後に知ることになるが、それはまだ先の話。

日常編3

第六十四話「ところで、学生時代の話をしようと思うんだが」

犬見との対決から二週間の時間が過ぎ、そのほとぼりも冷めつつあるある日の七丈島。

「——ふう、いやあ、本当にここはいい所だねえ。食べて、遊んで、寝てのスローライフ。まさに私にとってのユートピアだよ、この鎮守府は」

「海老名ちゃん、いつまでウチにいんだよ!？」

「いや、全くよ」

「本当にな」

「もう他の皆帰っちゃったよお?」

「正直、そろそろ帰った方がいいと思いますよ、本格的に」

「なんだよなんだよ! 皆して海老名ちゃんを追い出そうとしやがって! でも、皆そんなこといいつつ私に構ってってくれるから許しちゃう!」

七丈島艦隊の面々から総突っ込みを受けつつも、佐世保鎮守府大将、海老名薫は依然として七丈島鎮守府に居座っていた。

「いや、だつてなあ」

「伊58の奴、任務終わりにウチに寄っては海老名ちゃんを迎えに来てたのに、ついに昨日から来なくなったぞ?」

「これはいよいよ愛想をつかされたのでは?」

「嘘だ嘘だ! 佐世保の皆だつてなんやかんや海老名ちゃんを甘やかしてくれる優しい娘達なんだい! きっと、迎えに来てくれるんだい!」

「——海老名提督、あ、やっぱりここにいた」

海老名が食堂の机にだらしなく突っ伏しながら腕を振り上げて抗議の声を上げている最中、矢矧が彼女の名前を呼びながら入ってきた。

「お？ 矢矧ちゃん、どしたの？」

「いえ、その、佐世保鎮守府の提督代理、鳳翔さんからウチに電報があまりまして」

「お艦だ！ やっぱりお艦は私を裏切らないんだ！」

「最後通告かもしれないわよ」

「黙れ！ 鳳翔さんは私の母になってくれるかもしれない女性だ！」

「だからなんなんだ」

「内容を要約すると『伊58が可哀そうなのでもう勝手に自分で帰ってこい』って……」

「おかああああああああん！」

食堂に海老名の悲鳴がこだました。

☆

「ひどいやひどいや。海老名ちゃん、一文無しなのにどうやって帰れと？」

「何故そんな状態で一人ウチに残った」

「だってえ、ひぐつ、あまりに離れがたくてえ……うええ……でもお、私と七丈島艦隊は、ズツ友だよ……！」

机に突っ伏してふざけた嗚咽を洩らす海老名に七丈島艦隊の面々からは呆れたため息しかでなかった。

「ところで、学生時代の話をしようと思うんだが」

「なんだ、唐突に!？」

「帰ってください」

「そんな冷たい反応、ひでえや……聞きたくないの？」

「いや、興味がありますけど」

「だよねえ、矢矧っちも興味あるよねえ？ 先輩も出てくるよ？」

「は!？ な、なんでそこで提督がでてくるんですか!？」

「うへへ、カワイイ反応ご馳走様です。じゃあ、早速話そうかね」

海老名から話を振られて動転する矢矧を見てニヤニヤしながら、海老名は体を起こし、自分の胸を触りながら語り始めた。

「そう、あれはまだ私の胸がGだった頃——」

「何、その導入!？」

「ちなみに今はIさ。アイちゃんと呼んでくれてもいいんだぜ?」

「得意げな顔やめろ!」

「早く回想始めてくださいよ!」

☆

「——すごいね、海老名! また成績トップだよ!」

「ああ、うん、そだね」

提督の適正があるだの言われて、祖父が提督であることもあり、勧められるまま入った士官学校の三号生としての生活が数か月過ぎ去ったこの段階で、既に私の熱は冷めきっていた。

生来、私は、誰かに頼られるよりも頼っていたい人間なのだ。

物心ついた時から、頑張れば頑張るだけ、次のハードルが高くなつていくことを理解していた。

ハードルを越えられなくなった時、周囲から向けられる失望の痛みと恐怖を知っていた。

だから、期待されたり、責任を負ったり、頑張りがたくない。皆の前に立つよりも、後ろから先頭の背中を追っていたい。

大きな栄誉と成功は望まない、その代わり深い失墜もない。そんな平穩にして平凡な人生が私の目標だったのに。

私こそ、凡骨に生まれるべき人間だったのだ。しかし、神は、必ずしもその人にその人が望む才能を与えるわけではない。

私には、自分で思っているよりも遥かに高い提督としての資質が備わっていたようだった。

「海老名と合同の班ならA+評価も余裕だな」

「また、今度勉強教えてよ!」

「よっ、我ががエース!」

頼られて、期待されて、こんなのは私の望むものじゃなかった。

だが、そんな贅沢を口に出すことを赦される筈もなく、私は日に日にあがっていくハードルを見つめながらいつか訪れる失墜に震えた。

しかし、図書館とあるレポートに関する資料集めをしていた時、私は運命の出会いを果たしたのだ。

「——『艦娘の存在定義における社会的地位の変革』ですか? 面白い

本を読んでいますね？」

「どうした、主席殿？」

眼鏡をかけた柔らかい笑みが印象的な男性と、その隣で訝しげな表情でこちらを見る凛々しい顔立ちの男性。

二人の襟元の学年章に輝くⅢの文字を見て一号生ということを知った私は瞬時に背筋が伸びて体が緊張で固まってしまった。

私が言葉を返しあぐねていると、凛々しい顔立ちの方の先輩がなんの断りもなく、急に私の本を取り上げて尋ねた。

「……確かに、普通のレポート課題には使わないような本だ。君は何のためにこれを？」

「あ、いや、突然『艦娘が人か兵器か』って論題でレポート書いてみないかって教官にいわれましてえ……」

「それは、私達が一週間前にやったディベート議題と全く同じですね」「一号生相当の課題を二号生の君が？」 成程、間の抜けた顔をしている割にそこそこ頭は優秀らしいね

「この海老名ちゃんのご尊顔を前にしてなんて失礼な！ そつちこそ友達いなさそうな陰気な雰囲気出してる癖に！」

「なんだと……？」

凛々しい方の先輩は眉間に皺を寄せ、その目を細める。

やばい、まさか凶星だったか。

軽く生命の危機すら感じるその険悪なムードを壊してくれたのは、隣に立ってずっと私のレポートの紙面を見ていた眼鏡の先輩であった。

「あなたは、艦娘は人か、兵器か、どちらと考えているのですか？」

「おい、主席殿。もうそんな話はいいだろう。まずはこの礼儀のなっていない後輩に教育をだね——」

「犬見君、少し黙っててください」

「なっ……!?!」

「海老名さん、というんですよね？ どう、思いますか？」

犬見と呼ばれた先輩を制して、私の顔を覗き込むようにして質問を続ける眼鏡の先輩から私は目を逸らしつつ口を開いた。

「わ、私は、別に、その、色々偉い人の著書とか読んでみても、艦娘が兵器とか人間だとか、正直わからないです」

「……わからない、ですか」

「いや、わからないってのは艦娘が兵器か人なのかわからないんじゃないやなくて……えー、なんというか、そういうのを区分する必要性がわからないです」

「はあ？」

犬見先輩が、何言ってるんだこいつみたいなの顔をしている。

しかし、眼鏡の先輩の反応は真剣に私の次の言葉に耳を傾けている様子だった。

「別にどっちでもいいじゃないですか。そもそも艦娘自体が新しい概念なのにそれをわざわざ今までの概念で区別する必要なんてあるんですかねえって話です」

「しかし、曖昧なままでは問題が起こるだろう」

「でも、曖昧にしといた方がいい場合もありますよね。曖昧ってことは決まってるじゃないってことで、つまり融通が利くってことですから」

「その曖昧な基準を悪用されたらどうする」

「そんな奴を提督にしちゃうこと自体が問題では？」

私と犬見先輩の終わらぬ問答に眼鏡の先輩が手を差し出して制止した。

「……成程、面白い意見です、そのレポート、よろしければ私達もお手伝いしましょうか？」

「え、マジですか!？」

「主席殿、今さらつと僕も巻き込んだか？」

「三人で頑張りましょうー!」

それをきっかけに、私は彼らと交友関係を築くことになった。

しかし、普通の一号生ならばともかく、まさか、この二人が噂の海軍士官学校始まって以来の天才二人組だとは露知らず、そんな二人とつるんでいる私もまた伝説として祭りあげられては同期から余計に羨望と畏敬の視線を集めることになった。

だが、それ以上に嬉しかったこともあった。

「先輩！ 航海戦術Ⅰの勉強見てくださいよー！」

「いいですけど、私だけじゃ不安なので犬見君も一緒に三人でやりましょうか」

「えー、先輩とマンツーマンがいいー」

「僕に勉強を見られるのがそんなに不満か」

「だっていぬみん先輩、厳しいんですもん」

「お前の理解が浅すぎるからだ。お前はまず復習が足りてないんだ。一度授業を聞いただけで理解できるほどデキの良い頭か、こいつは？」

「あうっ」

教科書で私の頭を叩く犬見先輩を見た周りの生徒の囁きが聞こえてくる。

「海老名の奴、また犬見先輩に説教されてんな」

「流石の海老名もあの人達に比べたら全然だもんな」

同期の中では頭一つ抜けて優秀だった私も先輩達の前ではただの平凡な後輩として成り下がってしまう。

おかげで周りの私への過剰な期待は先輩達の威光におおよそ払拭され、ハードルも随分と下がった。

私はやっと私の望む正当な評価を得ることができたのだ。

先輩達出会って、私は私らしく振舞えるようになった。そんな先輩達と共に過ごす時間は私にとって最も安らぐ一時だった。

「——いいか？ 艦娘は兵器、それがあれの真価であり、効率を考えるならば慣れ合いは不要だ」

「えー、慣れ合いは大事ですって！ 艦娘がなんで皆あんなムチムチの太ももしてると思ってますか!? 膝枕のために決まってるでしょ!?!」

「今、そういう話はしていないだろうが！」

「あ、いぬみん先輩、もしかして膝枕されたことないんですかあ？ しょうがないなあ、先輩、ほらカモン！」

私は山のように積まれた本の中心に埋もれるようにして一心不乱に文献を漁っている先輩の方を見ながら、彼をそこに誘導するように

自分の太ももを両手で叩いた。

「なんで、私なんですか……?」

「いや、いぬみん先輩が膝枕の気持ちよさをわかってないみたいですから実演をと」

「犬見君にしてあげればいいじゃないですか」

「めっちゃ嫌です」

「海老名、随分と僕に対して舐めた態度を取るようになったじゃないか」

「先輩なら全然オツケーなので、さあ、どうぞ！ 最近卒論でお疲れでしょう!? ささ、カワイイ後輩のムチムチの太ももへいざ行かん！」

「すみません、今は忙しいので遠慮しておきます」

私がつれない先輩の返答に頬を膨らませていると横で犬見先輩がニヤニヤと笑みを浮かべていた。

「全く、お前は努力と徒労を嫌う癖に学業だけでなく、恋でも険しい道を歩む気か?」

「いぬみん先輩、うっさいですよー」

「完璧人間の主席殿も女心までは解さないときた。まあ、こういう欠陥の一つくらいあった方が僕としては好ましいのだが、お前には酷な話だな」

ぐぬぬ、と唸っている私に犬見先輩は耳元に顔を寄せて呟く。

「もういつそ、告白でもしてしまえばいい」

その瞬間、私の身体の温度が一気に3度は上昇した。

「そして、あえなく玉砕するがいい」

「うるさい！ いぬみん先輩はそんなだから彼女の一人もできないんですよ！ ばーかばーか!」

「僕は別に恋人は必要としていないのでね」

「それモテない男の常套句ですから！ ばーかばーか!」

「一応、僕個人に対してファンクラブが存在しているのはお前も知っているだろうに。こう見えて僕はモテるんだよ、海老名」

「顔だけの癖に!」

「それで十分だよ。人間は外見以外見えてなんていないからね。海老

名、相手が見えるのはハッキリしている表層だけだ。曖昧な心の内までは決して見えない。わかるな？」

「うわああああ！ いぬみん先輩の癖に良い感じのこと言いやがってええええ！ 海老名ちゃん、学生寮帰る！」

犬見先輩に言い負かされ、私はダツシユで自習室を出て行った。

「相変わらず犬見君と海老名は仲いいですねえ」

「どう見ても海老名は君の方に懐いているだろう。僕には嘸みついてくるだけだよ、あれは」

「喧嘩するほどなんとやらと言うでしょう？ 犬見君は女心がわかってませんねえ、ふっふっふ」

「……はあ、これだ」

「なんです、そのため息!? 犬見君、今間違はなく私のこと小ばかにしたでしょう！」

「呆れているんだよ。後半年もすれば卒業だというのに何をやっているのやら」

☆

「——続く！」

「続くのかよ!?!」

「え!?! というか、海老名ちゃん、提督のこと……」

「おいおい、自己紹介で言ってたじゃーん。将来は先輩に専業主婦として養ってもらうって」

「冗談だと思ってきましたよ！」

何気にとんでもない事実が暴露され、聞いていた七丈島艦隊の面々は全員驚愕に包まれていた。

「ていうか、海老名ちゃんいつ堕ちたのよ」

「いつだろーね？ いつの間にかって奴じゃないかな？」

「ファンクラブって、あんな腐れ外道が人気あったのか。まあ、確かに顔だけは良かったがな」

「おお、言うねえ、磯風ちゃん！ 海老名ちゃん的にもいぬみん先輩は私を甘やかしてくれねえから全然ピクリともこなかつたわ！ 先輩に会いに行く度に遭遇してたからある程度口は利いてたけどな！」

色々と話が広がって盛り上がっている中、矢矧だけが何とも言えない表情で海老名の方を凝視していた。

「矢矧っち、なあくに、見てんのお？ 海老名ちゃんが実は恋のライバルだって知って警戒してんの？ かわいいなあ、ちよつとスケベしよーうや」

「いえ、そういう訳じゃないです。後、こっちにじりじり寄ってこないでください」

「まあ、でも、今はもうほとんど諦めてるから安心していいよ」

「え、そうなんですか？ もしかして学生時代に告白とかしてたり？」

「……………うん、したぜ」

「え!？」

「終わったことだし、ここまで来たらその時のことも話してやんよ！」

☆

「先輩、その、好きです……………とか言われちゃったりしたらどうします!？」

「……………え？ 海老名からですか？」

「え!？ あの、その……………いや私でも、私じゃなくてもお、じゃあ、一応私だったとしたら……………？」

我ながらここまでのはつきりしないのはどうかと思う。

先輩の卒業まで一か月となったその日、私は先輩と二人きりになったタイミングで唐突に話を切り出した。

多分、空気を読んだであろう犬見先輩が色々お膳立てをしておして私を嘲笑しながら去っていったのが非常に腹立たしいが、今だけは感謝しよう。本当に助かりました、犬見先輩。

「うーん、申し訳ないですけど想いに応えることはできません」

「あ、やっぱそうですよねー、あはは」

当然だ。大きな栄誉や成功は求めない、その代わり深い失墜もない。それが私の生き方。ここで結果を求めるのはそもそも筋違いなのだ。

だから、こんな私が先輩とこれ以上深い関係になれるはずがない。ああ、ちゃんと笑えているか心配だ。だって、思ったよりもこれ、辛

い。

「あのー、一応理由とか聞けたりします?」

「……忘れられない人が、いますから」

「——あ」

その瞬間、私の目から流れ出るそれを止めることはできなかった。

「え!? 海老名!? どうしたんです!」

「あ、う、ご、ごめんなさい……私、こんなつもりじゃ……」

先輩の言葉を聞いた瞬間に私は理解してしまったのだ。彼には、私なんかよりもずっと大切に思う誰かがいて、私はそれにはなれないのだと。

曖昧にしてきたことが、はつきりと形になって現れた時、私はそれから目を背けられない故に堪えられなかった。

「主席殿」

「い、犬見君、あの、これは、どうすれば……」

大方どこか物陰で様子を伺っていたのだろう。犬見先輩が私と先輩の方に無表情のまま歩み寄ってくるのが見えた。

しかし、今の私は溢れ出る涙を止めるので精いっぱい彼に噛みつく余裕すらない。

「落ち着くまで頭でも撫でてやれ。今の君にできるのはそれくらいだ」

「う、うえっ……いぬみん先輩の癖に……!」

辛うじて言えたのはその一言のみ。

それを聞いて呆れたようにため息を洩らす。

「まあ、海老名にしては、頑張ったな」

それだけ言い残して去っていく犬見先輩の背中を見て、私は余計に涙が抑えられなくなった。

☆

「——うっわ、我ながらはっすい! ごめん、やっぱ今の忘れて! 私恥ずかしくすぎて泣きそうなる!」

「ううっ、海老名ちゃん……本当に、提督のこと、好きだったんですねえ」

「やめて、大和ちゃん！ そんなマジ泣きやめて！ なお恥ずかしいわ！」

海老名が感動して涙をこぼす大和に顔を真っ赤にして詰め寄っている。

「犬見の癖に生意気な」

「そう！ 海老名ちゃんその磯風ちゃんみたいな冷めた感想が欲しかった！」

「いいじゃねえか、海老名ちゃん、青春じゃねえの！」

「いやあ、もう、本当にご馳走様です」

「うわああああ！ 天龍ちゃんと瑞鳳ちゃんのニヤニヤうっせええええええー！ 海老名ちゃん、悶えるうううううー！」

一方で、プリンツと矢矧は俯いて黙りこくっている。

「その反応はその反応でなんか怖いな……どしたん？」

「いや、私……そういう恋バナはちよつと……NGっていうかあ。ごめん、部屋戻ってお姉さまのパジャマの匂いかいってくるね」

「お、おう？ いったらー」

「ちよ！ プリンツ！ 私のパジャマって何ですか!? 待ちなさい！」

そのままプリンツとそれを追って大和が食堂から消えた。

「忘れられない、人……！」

「あ、矢矧ちゃん、もしかして海老名ちゃんと同じようなショック状態になってる？」

「うぐぐぐぐ」

「はっはっは！ まあ、精々頑張れよ、監察艦どのよお！」

「いやあ、海老名ちゃんのおかげで今後の七丈島も面白くなりそうね！」

「スタンリング起動。対象、天龍と瑞鳳！」

「ぎゃあああああああ!?!」

「ぴゃあああああああ!?!」

天龍と瑞鳳に制裁を加えつつ頭を抱えて机に倒れこむ矢矧の頭を海老名ちゃんは優しくなでていた。

「まあ、あれだよ。私は駄目だったけれど、矢矧っちはまだこれからだからさ。応援するぜ、同志としてね！」

「海老名大将……！」

「まあ、私も実はまだ諦めてなかったり——」

「——おや、ここにいたんですか、海老名？」

「きやああああああ！」

「私の顔見て悲鳴あげないでくださいよ!？」

突然、食堂に入って来た提督を見て海老名が顔を真っ赤にしなが
ら悲鳴をあげる。

「ほら、海老名。交通費、貸してあげますから今日のフェリーで佐世保
に帰りなさい」

「わ、わかりました！ 海老名ちゃん、もう恥ずかしくてここいられな
いし、言われなくても帰ります！ アリーヴェ・デルチ！」

提督が差し出した封筒をひったくるようにして風の如く海老名は
鎮守府から走り去っていった。

「……やっぱり実は嫌われてるんですかねえ、私。結構学生時代は良
い友人関係を築けたと思ってたんですけれど」

「提督の朴念仁」

「え、矢矧、何です急に!？」

「何でもないです。さっさと、執務に戻りますよ」

「え、私、これから昼休憩だったんですけれど!? ちよ、痛い！ 矢矧、
なんか機嫌悪くないですか!？」 矢矧!？」

提督の腕を力任せに引っ張りながら、矢矧は大きくため息を吐い
た。

第六十五話 「ちよつと男に会いに行つてくるだけよ」

「瑞鳳！ 瑞鳳はどこに行つたんですか!？」

2月14日。その日、矢矧は珍しく声を荒げて鎮守府中を大声で叫び散らしながら廊下を歩いていった。

その喧騒に何事かと食堂にいた私、大和は扉を開けて談笑していた天龍とプリンツと一緒に顔を覗かせる。

「矢矧？ どうしたんですか、そんなに怒つて？」

「瑞鳳にちよつと問い質したいことがあるのよ！」

「まあまあ、ほら、茶でも飲んで落ち着けよ」

「え？ あ、まあ、そうね」

天龍が自然に食堂に矢矧を引き込んで椅子に座らせ、目の前に茶を置いてやると、彼女は勧められるままに茶を啜つて一息つく。

「つて、そうじゃない！ 私は瑞鳳を——」

「あ、矢矧そういえばもう提督にバレンタインチョコ渡したの？」

「え？ あ、それはその……」

唐突なプリンツの質問が不意打ちだったのか、矢矧は焦ったように目を逸らして言葉を濁す。

「おう、そうだ。俺もそれ聞きたかつたんだよ」

「昨日は人一倍チョコ作り頑張つてましたもんねえ。提督もさぞ喜んでくれたんでしょう？」

「……うん、すごく、喜んでくれたわ」

頬を上気させて、そつぽを向いて恥ずかしそうに小声でつぶやくも、その時のことを思い出したのか嬉しそうな表情を隠しきれない矢矧に私達は思わず立ち上がって拍手を送っていた。

「ごちそうさまです」

「矢矧が幸せそうで俺たちも嬉しいぜ」

「やったぜ」

「ああ、うるさい！」

机を叩きながら顔を真っ赤にして怒声をあげる矢矧は既に私達の

玩具である。

「いやあ、最近の矢矧はやけに乙女チックですなあ、天龍？」

「いや、全く。あの厳しい監察艦の顔はどこへやら」

「誰が乙女チックよ!？」

「矢矧は、最近乙女プラグインするフレンズなんだね？」

「すごい！」

「たーのしー！」

「ああ！ もう！ こいつら！」

一通り矢矧をいじり倒して大分満足した私達は、涙目の矢矧をなだめながらようやく本題に入ることにした。

「——これよ！」

「……これは？」

「領収書よ。全部瑞鳳が切ったやつ」

束になった領収書を机に叩きつける矢矧の目は据わっていてそれだけで怒りの度合いがひしひしと伝わってくる。

おそろおそろの見れば、それらは花屋、雑貨店、本屋など様々な店の領収書でその金額は一枚一枚大したことはなさそうだが、合計すると十数万にも及んでいる。

「ご丁寧に隠蔽工作までしてくれたおかげで今朝になってやっと気が付いたわ。瑞鳳、あの子一人でどんだけ経費使い込んでんのよ！ 道理で今月の鎮守府運営がやたら厳しいと思っただわ！」

矢矧は領収書を見つめると頭を抱えて苦しそうに唸り声をあげる。

こんな日まで心の休まらぬ矢矧に憐憫の情しか湧かない。

「で、瑞鳳を探してるんだけど!? どこ!？」

「お? そういや瑞鳳も磯風も今朝からいねえな」

「ああ、磯風なら店長のところにアルバイト行きました」

「で、瑞鳳は?」

「し、知りません、ごめんなさい」

さきほど散々からかったのもあって今の矢矧は最高に機嫌が悪そうである。

「瑞鳳となら今朝あったよ?」

「本当!? あいつどこか行くとか言っただけだ!」

「そう、あれは確か、お姉さまの部屋の鍵をピッキングしていた時――」

「ん?」

『――うーん、南京錠とは違ってやっぱり部屋の鍵は難しいなあ……』

『あら、プリンツ、おはよう。早いね』

『おはよう! 瑞鳳も朝早いなだね! それにその恰好、お出かけ?』

『ええ、ちよつとね。夕御飯までには帰るわ、あ、私宛に届いたチョコはできれば冷蔵しておいて欲しいわ』

『うん、了解! 何? もしかして今日もデート?』

『ちよつと男に会いに行っただけだよ』

『――っって言っただけだよ!』

「これって……瑞鳳は今日のデートのために経費を?」

「彼氏へのプレゼント探し、か? あいつがそこまでするだけの男がいるとは……気になるな」

「ああ、そういえば昨日も瑞鳳はチョコ熱心にたくさん作ってましたもんね……彼氏に渡すために試作を重ねてたんでしょ?」

「これは、是非彼氏のご尊顔をみてみたいとだね!」

こうして私達は瑞鳳捜索に乗り出したのだった。決してバレンタインと一緒に過ごすような異性がなくて暇だからとかでは決しない。

そういう相手は確かにいないが、決してそんなんじゃない。

☆

その頃、ビッグスプーン。

「はい、お父さん! バレンタインのチョコ! 磯風ちゃんと一緒に作ったの!」

「店長、私からも日頃の感謝をこめて、な」

あらかた客がはけて一息ついた頃を見計らって美海と磯風の手から店長にラッピングされたチョコプレートが手渡された。

店長はそれを受け取るとみるみるうちに涙ぐみ、二人の身体を抱き寄せる。

「ありがとうねっ！ 美海、磯風！ あんた達は私の宝よっ！」
「大和さんにも味見してもらったから美味しくできたと思うよ！」
「ええ、大事に食べさせてもらうわね！」
「ふ、私のチョコも、味は保証するぞ」
「ええ、大事に飾っておくわね！」
「おいしい、店長。チョコは飾るものじゃないぞ？ はっはっは」
その後もしつこくチョコを食べるよう要求する磯風に対し、店長はかたくなに包装すら解こうともせず、やがてチョコは神棚に上げられたという。

☆

「——で、外出したはいいものの」
「手がかりがなあ」
「ないのよねえ」

とりあえず町まで出て来てみた私達だが、瑞鳳の行く先にまるで見当がつかない。

しかし、瑞鳳は普段から男遊びにかまけているだけあってこの島では有名人だ。きっと道行く男達に声をかければ何か手がかりが見つかるに違いない。

そう思ったのだが。

「あの、すみません——」

「——えい!? 大和さん、ですよね!? も、もももしかして、この俺に、チョコを？」

「あ、いえ、違います」

「あ……はい……そうですね、こんな俺なんか……どうせ今年も誰からもチョコなんて」

「あの、強く生きてください」

今日は島中がバレンタインという空気に包まれ、道行く男達からの熱い視線を感じる。

話しかければいらぬ勘違いをされ、こちらはよくわからない罪悪感に苛まれ続ける。

正直、聞き込みにならない。

「なんかやけに人通りが多いと思つたら、こいつら……」

「誰かにチョコをもらえるんじゃないかと期待して意味もなく外をぶらついでるみたいね。まあ、島の小さなコミュニティだし、ワンチャンあるんでしようけれど」

「悲しいですね」

「あなた達は女の子からチョコをもらうのが苦手なフレンズなんだね！　へーきへーき！　フレンズによつて得意なことは違うんだから！」

「すごい……」

「たーのしー……」

「プリンツ、やめなさい」

プリンツに笑顔で毒づかれて男達は今にも身投げでもしそうな表情になっている。

そんな感じでこの辺りの人には一応瑞鳳の行方について聞いてみたが、結局有力な情報は手に入らなかった。

「——あの、瑞鳳さんをお探しなんですか？　私心当たりがありますよ？」

不意に後ろから声をかけられ、振り向くと、そこには割烹着を着た、見た目20代後半くらいで黒髪を赤いリボンで結び、ポニーテールにしているのが特徴的な女性が頬に手を当ててこちらに笑いかけている。

「う、あなたは……」

「ん？　矢矧、知り合いですか？」

「よくウチのお店に飲みにいらっしゃるんですよ、矢矧さん」

「どうやら、矢矧の行きつけの居酒屋の女将さんらしい。」

「というか、矢矧が居酒屋に頻繁に出入りしているという事実に驚きだ。私と同じことを天龍も思つたらしく、その口元には意地悪い笑みが浮かんでいた。」

「おいおい、俺達の模範ともあろう監察艦様が隠れて酒煽ってるとはなあ」

「ぐっ……私だって色々溜まってるものがあるのよ！」

「まあまあ、いいじゃないですか、お酒くらい。矢矧は私達のために日々頑張ってくれてるんですから」

「そうですよー!」

意外にも私のフォローに女将さんも加勢してくれた。

「酔った時の矢矧さんは本当に面白いんですから、店に来てくれなくなるようなこと言うのはやめてください!」

「あなたはちよつと、黙っててもらえる?」

「ほう、面白いのか?」

いさめるどころか俄然、天龍を面白がらせてしまった。

「とにかく今はこんな話より瑞鳳でしょ!」

「特に最近は提督さんへの愚痴が多いかもです!」

「黙ってろつて言つたわよね!?!」

この人わざとやっているんじゃないかと私の直感が告げている。

「ほう、やはり中々進展しない関係にストレスが――!」

「そうよ! 不安よ! 悪いか!?!」

「すまん」

ついに矢矧が爆発した。

☆

その頃、佐世保鎮守府。

「お艦ー! 皆あああああ! おらにチョコを分けてくれえええええ!」

愛情の籠った手作りチョコを、分けてくれええええええ!」

「ありませんよ」

「ははっ、ナイスジョーク!」

お気に入りの通称人をダメにするソファア、ヨギボーに全身を預けつつ叫んだ海老名の懇願の声は机で書類仕事に勤しむ鳳翔によって一刀両断された。

しかし、それでも海老名は諦めない。

「なんできなんできー! 私大将だよー! それ以前に提督だよー! 皆の日頃の感謝の気持ちをチョコレートという具体的な形にして届けて欲しいよー!」

「そんなこと言ってるうちは誰からもチョコなんてもらえません」

「え？ マジで？ マジでないの？ マジで誰も用意してないの？」
「そもそもそんな暇ありませんよ」

ここ最近は出撃が詰まっていたから、皆くたくたです。そう鳳翔は付け加えた。

その言葉に起き上がった海老名は手で顔を覆い、再びヨギボーに全身を預けた。

「そ、そうか……そっかー、皆出撃で疲れてるもんね。そ、それならしょうがないなー。うんうん、チョコを作りたくても疲れて作れないなら、仕方ないよねー。はは、ははは」

この世の終わりのような顔をして力なく笑う海老名に鳳翔は囁く。

「まあ、でも、提督が少しお仕事頑張っていい所を見せてくれたら、皆もしかしたら提督に感謝の気持ちとしてチョコを作ってくれるかもしれませんよ？」

「……言ったな？」

元気よくヨギボーから起き上がると海老名は執務机に座り、山のように積まれた書類を次々と片づけていく。

それに鳳翔はため息をつきながら微笑を見せると、執務室から出ていく。

「それじゃあ、私は少し外しますけれど、しっかり仕事してくださいね？」

「おう！ 任しときんしゃい！ この書類の山、1時間で片してやんよー！」

「期待してますね」

そう言つて執務室の扉を開けると、そこには伊58を先頭に鎮守府の全艦娘が待機していた。

「鳳翔さん、こっちは提督へのチョコの用意できたでちよ？」

「ええ、それじゃ、あの人が仕事をやり終えたら皆でチョコ渡しませうか」

「まさか、チョコなんかのためにあの人が仕事するなんてびっくりりぢ」

「ふふ、あの子はいつまでたつても子供だもの。それじゃ、提督がしつ

かり仕事をやり終わるまで皆でこっさり見守っていきましょうか」

そう言つて見透かしたような笑みを浮かべる鳳翔を見て、お母さんかよ、と伊58は苦笑いを浮かべた。

☆

「で、瑞鳳は本当にここに行ったの、よね？」

「ええ、女将さんはそう言つてました。ですが、これは……」

「孤児院、か」

七丈島には戦争で親を亡くした子供たちを引き取る孤児院が一つある。

国からの給付と島の人たちからの援助で成り立つその施設には今小学校低学年から中学生くらいまでの男女十数人がいたはずだ。

孤児院の庭からはいつも子供たちが遊んでいる声が聞こえてくるのだが、今日はそれに交じつて聞き覚えのある声が聞こえて来た。

「……瑞鳳？」

私達が孤児院の門をくぐると、庭でたくさんの本と筆記用具、画材などの荷物が詰まった段ボール箱を開けて中身を子供たち一人一人に手渡しする瑞鳳の姿があった。

「ほら、あんたはこの本でも読んでもう少し国語を勉強なさい。文字がわかれば世界は変わるわ」

「うわー、むずかしそーな本がいつぱい。でもありがとー！」

「はい、あなたにはこれね、絵の具と筆、あとキャンパス。絵、得意だったでしょう？ その長所、絶対伸ばすべきよ」

「う、うん、ありがとう、瑞鳳おねーちゃん」

それは、一人一人、何が得意で何が苦手で、何が必要なのか、瑞鳳が真摯に考えた痕跡が伺える贈り物だった。

「いやあ、瑞鳳さんにはいつも助かってますよ」

啞然として瑞鳳を見つめる私達の後ろから初老の男性が声をかけてきた。

確か、孤児院の院長だったか。

「彼女が来てくれるようになってから子供たちも楽しそうだ。それに今日は花束にあんなプレゼントまで」

領収書の記憶がよみがえる。

花屋、本屋、雑貨店。つまりはそういうことだ。瑞鳳は、彼らへのプレゼントのためにこっそり経費を使い込んでいたのだ。

そして、おそらくは昨日一心不乱に作っていたあの大量のチョコも

「ほら、皆にもう一つ、この私手作りのバレンタインデーチョコレートよ！ 男子は特に感謝して受け取りなさい！」
「やったー！」

「瑞鳳ねーちゃん、さいこー！」
「いいわ、もっと私を讃えなさい！ もっと！」

子供たちの輪の中で両手を広げる瑞鳳はその年齢の割に未発達な幼児体型も相まって実にほほえましい。

しかし、しばらくすると、辺りを見回して、どこかへと走っていく。その先には、一人子供達の輪から外れるように木陰で車椅子に座って様子を眺めている少年の姿があった。

少年は孤児院の子供たちの中では年長のように中学生くらいに見える。彼は距離を置いて、はしゃぐ子供達を見つめて微笑んでいた。

「あんたは相変わらず、ぼっちなのね」

「……瑞鳳さん」

「ほら、皆に混ざってくれば？」

「僕なんかと一緒にいてもあの子達は楽しくないよ。僕は足が動かないから追いかけることもできないし、遊びに連れて行ってもやれない。僕の方まで瑞鳳さんが皆と遊んであげてよ」

少年の言葉に瑞鳳は頭に手刀を落とす。

「いたい……」

「馬鹿ね、私だって暇じゃないの！ いつまでもあんた達の面倒なんて見てられないわよ！ 院長先生だってもう結構年いってるんだし。あの子達を支えてあげるべきはあんたでしょ？」

「僕には、自信がないよ……どんくさいし、根暗だし、いい所なんて一つもないもの」

「何言ってるのよ、そんなの関係ないでしょ。あんた達は家族なんだ

から」

「……家族」

瑞鳳の言葉に少年は顔を上げた。

「どんくさくても根暗でもいいわよ。ただ、傍にいてあげなさい。こんな離れたとこにいないでね!」

「うわ!」

その言葉と同時に瑞鳳が彼の車椅子を押しして強引に子供達の目の前まで少年を連れていく。

一瞬、呆然とした表情を見せるも、子供達はすぐに少年の元へ集まって来た。

「遊んでー!」

「この漢字よめねーよ! 教えて兄ちゃん!」

「……皆」

子供達の屈託のない笑顔に、少年は安心したように笑顔を見せた。同時に、再び少年の頭に衝撃が走る。

しかし、今度は瑞鳳の手刀ではなく、ラッピングされた長方形の箱だった。

それを手に持って困惑した表情を見せる初年の耳元に顔を近づけて、瑞鳳は囁く。

「はい、皆とは違うちよつと特別なバレンタインチョコよ。これから頑張るお兄ちゃんへ、瑞鳳お姉さんからのエール」

「え、特別って、瑞鳳さん……?」

「それじゃ、今日は私そろそろ帰るわね!」

そう言つて子供達の頭を一人一人丁寧に撫で繰り回すと、振り向きざまに瑞鳳は少年に言った。

「あなた、良い所なんて一つもないとか言つてたけれど、顔立ちはなかなかのもんよ。あと十年もすれば私好みの良い男になるかもね」

「え、ええ!」

『ちよつと男に会いに行つてくるだけよ』

ああ、そういうことか。その様子を見て、私は瑞鳳の台詞を思い出して笑みを浮かべずにはいられなかった。

☆

顔を真っ赤にした少年と、無邪気に手を振る子供達に手を振りながら門を出た所で、待ち構えていた私達を見て瑞鳳は嘖き出した。

「な、なんであんた達が……!」

「いや、すげえよ、流石瑞鳳さんだ。あんなん、誰だつて墮ちるぜ」

「よっ! 七丈島一の男たらし!」

「ああ、あの子絶対十年後も瑞鳳の影を追ってしまおうんでしようね。可哀そうです」

「早速言いたい放題ね、あんた達!」

私達に怒声をあげる瑞鳳は、一人無言で自分を見つめる矢矧に気付くと即座に体をこわばらせる。

「あ、そのー、経費の件に関しては後で全額返すつもりで……そのお……」

「もうその件はいいわ」

「え? まじ? なんかいいいことでもあったの? あ、わかった今年のバレンタインチョコが提督に好評だったんでしょ?」

「しばくわよ」

「ごめんなさい」

「……はあ、ただ、次からはちゃんと相談しなさい」

呆れたようにため息をつきながら矢矧は瑞鳳の肩に手を置く。

「私達は、仲間でしょ?」

「——っ! はは、全く、殺し文句ね、男だったら惚れちゃってたかも」

「何馬鹿言ってるのよ」

とりあえず場の雰囲気も和んだところで、私は手を叩き、皆の注目を集める。

「はい! それじゃ、そろそろ磯風も美海ちゃん連れて帰ってくる時間ですし、今日は皆でバレンタインパーティーですよ!」

「おっしやー!」

「やったー!」

「あんまりハメを外さないでよね。片づけ大変になるんだから」
「まったく、ウチはいつも賑やかでいいわね、賑やかで!」

こうして、今年のバレンタインも七丈島艦隊は平和に終わりを告げた。

☆

一方、横須賀鎮守府では。

「ほう、チョコじゃと？」

「ええ、今日はバレンタインデーなので、日頃お世話になっている提督に、私から愛の詰まった手作りチョコです」

（うわー！ 神通さんも提督にチョコあげるんだ！ 意外！）

そう言つて張り付けたような笑顔の神通は巨大なハート型のチョコレートを提督、すなわち元帥に渡した。

そして、その様子を陰から見ていた夕張は内心で驚嘆の声を上げた。

（でも、バレンタインにチョコ渡してるとは思えない重圧感漂わせてるのなんなの？ あの二人は私を怖がらせないと満足できないの？）

元帥はケーキーホール程の大きさもあるそれを片手で持ち上げると、猟奇的な笑みを浮かべ、そのチョコを勢いよく拳ではさみ、叩き潰した。

（手作りチョコを躊躇なく笑顔で砕いたあああああ！）

「ふん、神通よ。お前の故郷ではチョコレートにはナイフを隠し味に入れるのか？」

（は!?!）

砕けたチョコの中から、ゴトンと鈍い音を立てて畳の上に落ちたのはどう見てもサバイバルナイフである。

「あらあら、あつさりばれちゃいましたか」

「まったく、構って欲しいならそう言えばよかろう。ほれ、昔のようにそのナイフで儂に襲い掛かってきたらどうじゃ？ 久しぶりに相手をしてやろう」

ナイフを拾い上げて神通の脳天めがけて投げ返す元帥。そしてそれをなんなく指で挟み取る神通。

夕張が息をするのも辛くなるほどの重圧にさらに重みが増したのがわかる。

「言質、いただきましたよ?」

神通はナイフに頬ずりして一瞬恍惚とした表情を浮かべると、すぐにまた張り付けたような笑顔に戻ると、立ち上がって元帥の執務室から出ていく。

「愛していますよ、提督」

「ふん、心にもないことを言いおつて。その眼から儂の首を獲らんとする殺気がただもれておるわ。ククク、まあ、悪くないがな」

「あらあら、ふふふ」

「クツクツク」

お互いに笑いながら殺気をぶつけ合うその惨状に、夕張は、体が震えすぎて生まれたての小鹿のようになっていた。

(もうやだ、こんなの私の知ってるバレンタインじゃない……)

折角勇気を振り絞って作った夕張のチョコレートは間もなくお蔵入りとなり、元帥と神通の『じゃれ合い』で執務室とその周辺区画が吹き飛んだのはそれから15分後のことであった。

第六十六話 「そつちですかー！」

店の引き戸がガラガラと音を立てながら開く。

時刻はおおよそ20時を回った所。空いた酒瓶を片づける手を休めて扉の方へと視線を向け、そこに立つポニーテールと凛とした目つきが印象的な少女の姿を見ると、店の女将であろうその女性はにっこりと笑って入って来た彼女に声をかけた。

「いらっしやいませ——あら、ご新規さんですか？」

女将の言葉が癪に障ったのか、扉の前で棒立ちのまま苛立ちを隠すように目を瞑りながら少女は口を開いた。

「このお店毎週通い詰めてるんですけど」

女将はそれを聞くと、片目を瞑りながらサムズアップを返す。

「やだなあ、知ってますよ、矢矧さん」

「ぶっ飛ばすわよ」

「二名様でよろしかったですか？」

「一人よ!？」

「あれ、じゃあ、後ろにいる血色の悪い方は……?」

「誰もいないわよ! 怖いこと言うのやめてくれる!？」

ここは七丈島のある居酒屋。

毎週金曜日の夜に、矢矧は一人この店に酒を飲みを訪れるのである。

☆

カウンター席が九席だけの小さな店内には現在矢矧以外の客はいない。しかし、奥の方のカウンターに氷が溶けかけている濡れたグラス三つ放置されているところを見るに、ついさっきまで客が来ていたことがわかる。

「ぼちぼちやってるみたいね」

「ええ、ついさっきまで常連さん方が。今は誰もいませんし、矢矧さん、お好きな席にどうぞ」

食器を洗っている女将に促され、L字に曲がったカウンターの中央

あたりの席に腰かけた矢矧は一息つくど御品書きも見ないままに注文を始める。この店のメニューはもうあらかた頭の中に入っているのだ。

「とりあえず、いつものもらえる?」

「スクリユー・ドライバーですね?」

「違う」

「……………」

「……………」

凍り付く空気、静かに見つめ合う二人。女将は食器を洗う手を止め、思案顔で頬に手を当てて首を傾けている。

「…………マティーニ?」

「違う」

「…………ジン・トニック?」

「違う」

「…………テキーラ・サンライズ?」

「違う」

「ああ、そうだ! ギムレット!」

「しゃらく寫樂ももらえる?」

「そつちですかー!」

「どつち?」

「三十択くらいまでは絞れてたんですけどねー!」

「絞れてないわよ?」

寫樂と書かれた一升瓶とグラスを取り出しながら陽気に笑う女将に冷めた視線を投げかける矢矧。

しかし、女将の方には一切反省の素振りはない。

「なんで毎週同じの頼んでるのになんで忘れちゃうのよ」

「やだなあ、覚えてますって」

「なお性質が悪い」

すぐにカウンターに置かれた一升瓶と日本酒の注がれたグラスを

一口含み、湿った息を洩らす。

「やっぱりこれが一番ね」

「でも、スクリユー・ドライバーとかもお好きでしたよね？」

「一度も頼んだことないわよ」

「あ、そちらのお客さんは何にします？」

「唐突に誰もいない空間に話しかけるのやめて!？」

矢矧の隣の空席に向かつてまるで誰かいるかのように話しかける女将に矢矧は悲鳴にも似た怒声を上げた。

「え？ やだなあ、いるじゃないですか、ここに青白い肌の――」

「そんなものは断じて存在しない！」

「え、まさか、本当に矢矧さん、見えてないんですか……？」

「え……まさか……本当に、何かいるの……？」

「いや、いませんけど」

「20 cm連装砲と酸素魚雷、どっちがいい？」

「やめてください、死んでしまいます！」

☆

「本当に、あなた変わったわよね」

一杯目のグラスを空にした頃。矢矧がおもむろに呟いた。

「気づきました？ 実は先週、髪切ったんですよ！」

「そういう変わったじゃない」

大皿を拭いている女将の姿を再度じっくりと見つめながら、二杯目を注いだグラスを傾けつつ、矢矧は思い出すように続けた。

「初めて給糧艦『伊良湖』として鎮守府に来た頃のあなたはもっと大人しくて真面目な良い子だったんだけどね」

「わかります」

「腹立つから便乗しないでもらえる？」

正確には元給糧艦、伊良湖。それが女将の名前だった。七丈島鎮守府に最初に着任した艦娘が矢矧、次に着任したのは他ならぬ目の前の彼女なのである。

当時は誰にでも礼儀正しく、おとしやかで、炊事だけでなく掃除や倉庫整理などもこなす文句のつけようのない完璧美少女だったのだが。

それが、一体何があつてこんなふざけた性格になったのか。矢矧は

頭を抑えながら大きくため息をついた。

「でも、変わったというよりは、徐々に素のままの自分を曝け出していったという感じですよ。元から私はこんなんですよ」

「まあ、鎮守府来て一ヶ月たないうちに、結婚するから艦娘辞めますとか言ってきた時にはその片鱗は感じたわ」

「照れますね」

「褒めてないわよ」

世の提督達がこの伊良湖を見たらどんな反応をするだろうかと考えて、矢矧は苦笑を浮かべながら二杯目のグラスを飲み干した。

「これでも、急な解体願いにお許しをくださった提督や、なんやかんや言いながら色々手伝ってくれた矢矧さんには感謝してるんですよ？」

「まあ、提督が応援すると言ったなら、私も従うしかなかったから、それだけよ」

「おかげ様で、このお店も随分長いこと続けさせてもらってますし」

そう言いながら伊良湖は大皿を拭きながら笑った。

それに矢矧は照れくさそうにそっぽを向いて返す。

「夫ともラブラブですし！ 何もかも順風満帆です、矢矧さんと違って！」

「うん？」

「あ、そういえば矢矧さん、先日バレンタインデーでしたけれど提督さんにもう告白は——あっ………察し」

「その喧嘩、買ったわ」

「ちよ、やめましよう！ 暴力は何も生まな——頭蓋がああああ!!」

カウンター越しから伊良湖の顔面に矢矧のアイアンクローが炸裂した。

☆

「私もう解体されて艦娘じゃないですよ！ 艦娘の握力であんなの食らったら顔の骨格変わってお嫁にいけなくなるじゃないですか！

あ、もうとつくに嫁いでた！」

「海軍精神注入アイアンクローオオオオオッ！」

「ぐああああああつ！」

おそろく海軍精神注入棒よりも、痛い。

「なんで自ら火に油を注ぐような真似するのよ、あなた」

「いやもう、これは生まれ持った業としか……」

「業が深すぎるわ」

それからしばらくして。

「ねえ、悪いけれど何か作ってくれない？」

「任せてください、私バルーンアートには少し自信があるんです！」

「誰もバルーンアートの話なんてしてない」

皿を拭きながら嬉々として語る伊良湖に再び矢矧の眉間に皺が寄り始める。

「何か料理を作ってくれる？」

「え、オムライスのバルーンアートくらいしかできないんですがいいですか？」

「バルーンアートから離れて」

「あ、じゃあ、ここは提督の顔でも作りましょうか？」

「バルーンアートで……!?!」

「ところで矢矧さん、ずっとお酒だけですけれど、何か軽くお作りしましょうか？」

「だから、さつきからずっとそう言ってたでしょうがッ！」

「そっちですかー！」

矢矧的には提督の顔のバルーンアートが少し気になったのは秘密だ。

「それで、何がいいですか？」

「適当に軽めのもので、任せるわ」

「あ、最近ラーメン始めたんですよ！」

「軽めって意味わかってる？」

「じゃあ、ステーキあたりにしときますか！」

「だから軽めって言ってるでしょ!?!」

「150 gくらい矢矧さんなら小指で余裕でしょう？」

「そういう軽いじゃないッ！」

この時間に高カロリー食は女子として受け付けてはいけない。

「——だし巻き卵です」

「うん、ありがとう」

これくらいならまあ、いいだろうと矢矧はまだ湯気を立てているだし巻き卵の一つを箸で二つに割り、口に運ぶ。

めんつゆと醤油の風味と卵の甘味が合わさってつい顔が綻んでしまうのを矢矧は必至で抑えていた。

「相変わらずの腕前ね」

「ええ、毎日ラケットの素振りは欠かしてませんからね！」

「料理の腕前の話よ！」

「そっちですかー！」

「逆になんでこの流れでテニスの話になるのよ!？」

「バドミントンなんですけど！」

「知らないわよ！」

矢矧はヤケクソ気味にグラスの中の酒を飲み干した。

☆

「そういえば、鎮守府の皆さんには私のことお話しされてないんですね?」

「あー……そうね」

「先日会った時に矢矧さん以外の方に誰こいつみたいな顔されて私は微妙に悲しかったですよ！」

「まあ、話す機会がね、なくてね。ずるずると今日まで私と提督以外あなたのことは誰も知らないわね」

「酷い！」

「それは普通にごめんなさい」

「えー、なんでですか、紹介してくださいよー！ 私いわば七丈島鎮守府OGですよー!?!皆で飲みに来てくださいよー！」

常連客を増やすチャンスとばかりに露骨に紹介をねだってくる伊良湖に矢矧は怪訝な顔つきで考え込む。

「でも、あなた、絶対あの子達に悪い影響与えるだろうし……」

「そのために矢矧さんがいるんじゃないですか!？」

「開き直ってんじゃないわよ」

ただでさえ混沌としているあのメンバーに伊良湖が加われば、そろそろ矢矧、大和だけでは手に負えない。続く新たなツツコミ要員が必要になるだろう。

「海老名提督といい最近ボケが濃すぎるのよ……」

「何の話ですか？」

「平和だなんて話よ」

「そんなことより七丈島艦隊の皆さん連れてきてくださいよ！」

「連れてくるにしても全員は無理よ。年端もいかない子供もいるし」

「大丈夫！ ソフトドリンクもありますよ！」

「あなたと会わせるのが教育に悪いって言ってるのよ！」

「そつちですかー！」

ここまで言つてなおも反省が見えないのはもう逆に潔いと矢矧は思ってしまった。

「えー、会いたいなー、矢矧さんみたいに皆さんともお話したいなー」

「……………そうね、もう少しその人をおちよくる性格直せば考えておくわよ」

「じゃあいいです」

「それを直せって言ってるのよ！」

「嫌だッ！」

「無駄に力強い声！」

……最近で一番覇気の籠った声だったと後に矢矧は語る。

☆

午前0時を回った頃。

皿を拭きながら思い出したように伊良湖が口を開いた。

「矢矧さん、もう結構いい時間ですけれどお仕事に差し支えないんですか？」

「いいのよ、明日——っていうか今日は仕事午後からだから」

「お、珍しくはかどってるみたいですね」

「そうね……でも、今月は私の方が何回かミスやらかしてね。同じ書類に判子二回押してたり……疲れてるのかしら」

「あります、あります！ 私も今ずっと同じ皿ばかり拭いてますもん！」

「それずっと同じ皿なの!？」

「そういえばこいつずっと皿拭いてたな、と矢矧は今更ながら思い出した。」

「もう五十回はすすいでは拭きを繰り返してますね」

「途中でおかしいとは思わなかったの?」

「いや、流石に四十回目あたりで、これはおかしいなって気付きましたよ。」

「もつと早い段階で気付いて」

「なんか手持ち無沙汰って落ち着かなくて、つい」

「とりあえず、皿は片づけなさい」

「不安です」

「何が?」

「そう言っつて頑なに皿を離そうとしない伊良湖が食器棚に皿を戻したのはそれから十五分程後のことであつた。」

☆

「あ、矢矧さん、お酒空じやないですか? 新しいの用意しますよ?」

「そうね……じゃあ、一生青春とか置いてる?」

「はいはい、ありますあります」

寫樂の一升瓶を空にして頬を上気させて左右にゆらゆらしている矢矧は少し思案顔を浮かべるとそう告げた。

その様子を見て伊良湖はニヤリとほくそ笑む。

(ふむ……きましたね)

「伊良湖?」

「ん、なんですか?」

「やつぱり、胸は大きくありたい、そう思わない?」

(ほら、なんか面白いこと言い始めましたよ!)

伊良湖は心の中で嬉々として叫んだ。

「胸、大きい方が良いんですか?」

「そうね、おっぱいは大事よ!」

(なんでおっぱいって言いなおしたんですか?)

必死に笑いをこらえながら伊良湖は相槌を打つ。

「この前、海老名提督っていうおもちのやばい方が来たのよ」
「おもち」

(なんでいちいち呼び方変えるんです?)

「しかも提督LOVE勢だったのよッ!」

「言い方!」

「もう、やばいわよね!」

「そうですね! 色々やばいですね!」

今にも吹き出しそうになって伊良湖はプルプルと体を小刻みに震わせている。

「バレンタインの日も海老名提督からなんか高そうなチョコが届いてたし……」

「でも矢矧さんこそ、その、胸は、中々じゃないですか?」

「やっぱり吊り橋効果だと思いのよ!」

「何の話ですか!?!」

唐突に話が変わるのは酔っている矢矧の特徴である。

「知ってる? 吊り橋効果?」

「確か恐怖のドキドキを恋のドキドキと勘違——」

「それ!」

「食い気味!」

矢矧はグラスの酒を水のように飲み干し、まくし立てるように続ける。

「でも、私結構着痩せするから見た目じゃあんまりだと思いのよ」

「急に何の話ですか!?!」

「いや、胸の話だけ?」

「そつちですかー!」

唐突に話に戻るの酔っている矢矧の特徴である。

「え、あの、吊り橋効果の話は——」

「それ!」

「食い気味!」

「それを参考にね、ちよつと作戦を考えてみたのよ」

「は、はあ？　どんな作戦なんです？」

そもそも出撃のない七丈島鎮守府で恐怖などあるのだろうか
と伊良湖は首を傾げた。

それを見て矢矧が意気揚々と作戦概要を声高く語り始める。

声が大きくなるのは酔っている矢矧の特徴である。

「少しヤバめの書類をね、期限ギリギリまであえて手を付けないのよ」

「ドキドキってそういう」

「大本営からのプレッシャーの恐怖感を利用するっていう作戦よ！

吊り橋効果大作戦、どうよ！」

「ちよつと作戦名も含めて何とも言えませんねー！」

「忌憚のない意見を求めるわ」

「まあ作戦名共々駄目でしょうね」

「ぶっ飛ばすわよ」

「何ですか!？」

「この作戦名のどこがダメなのよ？　あん？」

「そつちですか!？」

あからさまに理不尽なのは酔っている矢矧の以下略。

「うん、その作戦は駄目ですよ。色々危ないですし」

「やつぱり、私なんかじゃ駄目ってことね……」

「そういう話ではなく！　ただ、大本営に目を付けられるのはあまり
よくない——」

「そつちですかー！」

「それ私のネタ！　盗らないでください！　しかも、食い気味！」

酔うと性格がまるで正反対になるのは以下略。

皿を拭きながら伊良湖は完全に酔っている彼女を実に楽しそうに
見つめていた。

「伊良湖！」

「はい、なんですか！」

「皿、置きなさい」

「あ、はい」

自然と手が動いて再び同じ皿を拭き始めた私を射抜くように見つめる矢矧の目は据わっていた。

☆

そして、時計の短針が二の数字を差した頃。

「……………」

「どうしました？ 矢矧さん」

「……………ねえ、もしかして、やらかした？」

「面白かったですよ！」

「そうよね！ あんたが良い顔してたからそんなことだろうとは思ってたわ！」

酔って色々面白くなった矢矧はほとんどきっかり一時間で酔いが冷めて元に戻る。

都合のいいことに酔っていた時間帯の記憶は飛んでいるので追憶から恥辱に悶えることはないが、伊良湖に良い笑顔でサムズアップを受けた時点で彼女は今にも頭から蒸気でも噴き出しそうなくらい真っ赤になって机に突っ伏し、足をバタバタと動かしていた。

伊良湖が再び皿を拭き始めているのにも気が付かない。

「あー、もう！ あー、もう！ これだから！ あー、もう！」

「まあまあ、お酒の席ですしよくあることじゃないですか」

「慰める気ならそのニヤニヤをまず引つ込めなさいよ！」

「……………はい」

「顔が笑いで引きつってんのよッ！ あとそのサムズアップもやめなさいー！」

「吊り橋効果大作戦、頑張ってくださいね！」

「あああああああ！ もう！ お酒なんて飲まない！」

「そう言っつていつも一週間後にまたいらっしやいますよね！」

やはり、日頃のストレスも相まって矢矧にとつてこうしてお酒でストレス発散をする場は必要なものなのだろう。

そう伊良湖は考えている。

「まあ、それは、来るわよ。あんたがしっかりやってるか見に行くためにも……………」

「え?」

空気が固まった。驚いたような表情を見せた伊良湖に矢矧は失言をしたとばかりにまた顔を真っ赤にする。

「ま、まあ!? 私は監察艦だし!? 元とは言え、鎮守府の艦娘の経過観察は私の仕事というか、それだけよ! 変な勘違いしないでよ!」

「……矢矧さん」

伊良湖の表情から笑みが消え、目を見開き、今にも泣きそうな表情になっている彼女に矢矧は照れくさくてつい視線を外す。

「な、何よ」

「なんで、それが提督にできないんですか!」

「うるさいわよッ!」

いつも通り伊良湖が既に用意していた領収書をひったくるようにして矢矧は入口の引き戸を開ける。

「ご馳走様!」

「ありがとうございます!」

店を出ようとする矢矧にいつも通り元気に挨拶をする伊良湖。

すると、急に矢矧は皿を拭いている伊良湖の方に振り返って店内へと引き返す。

「伊良湖」

「あ、はい皿ですよ、置きます置きます——」

「来週は提督と皆も誘って来るから、七人で予約、できる?」

「え……あ、じ、じゃあ折角なので来週は貸し切りにしましょう、か……?」

「ここ九席よね? それなら折角だし、美海と店長も連れてくるわ。ソフトドリンクとお酒と料理、たくさん用意しておいて、それじゃ」

「え、あ、はい。ありがとうございます!」

それだけを言い残して矢矧は帰って行った。

彼女の足跡が遠ざかってやがて聞こえなくなるまで半ば放心状態だった伊良湖は、ようやく我に返って嬉しさのあまり叫んだ。

「そっちですか!」

第六十七話 「誰じや君は!？」

「それじや、今日もビッグスプーンでバイ——お手伝いしに行ってくる」

「バイ——お手伝い頑張ってくださいね!」

「バイ——お手伝い行ってらっしゃい!」

「今日もバイ——お手伝いとか頑張るわね」

「おう、バイト——じゃねえ、お手伝い頑張れよ」

磯風は食堂で揃ってテレビを見ている大和、プリンツ、瑞鳳、天龍に声をかけると意気揚々と扉を開けて駆けて行った。

その背中を大和達はそれぞれ笑顔で見送った。

「磯風、ほとんど毎日店長のところ行ってますね」

「今週のシフトは月曜から金曜まで毎日だよ」

「シフトとか言わない」

「先週は月、水、金で行ってたし、このままだといずれ向こうに泊まり込みそうな勢いだねえ」

「大丈夫ですかねえ、無理してないといいんですけど……」

大和の心配そうな声に天龍が笑って答える。

「大丈夫だろ! 楽しそうじゃねえか!」

「でも、今日とかは少し風強かったり天気も不安定らしいですし……」

あ、磯風傘持っていきましたっけ!？」

「お姉さま、お母さんみたいだね!」

「あ、今日午後からずっと雨ね。そんなもって深夜に台風直撃するみたいよ」

テレビを見ながら煎餅を齧る瑞鳳が唐突にそう呟いたのを聞いて大和が立ち上がった。

「私、ちよつと傘渡してきます!」

「大丈夫だって、お母さん」

「お母さんじゃないです!」

「お姉さま、過保護すぎない?」

「だって、磯風が風邪ひいちゃったらどうするんですか!」

「大丈夫よー、子供は風の子っていうじゃない。少し雨に濡れるくらいなんともないわよ」

「それ以前に私達艦娘だけどねえ」

艦娘は基本的には体が丈夫なので滅多に風邪はひかない。

「ていうか妙に風強いと思ったら台風が近づいてんのか」

「意外と久々だよね! わくわくしてきた!」

「なんでわくわくしてんのよ」

「台風ですか……流石に明日は磯風をビッグスプーンにお手伝いは行かせられませんね」

「そうだな、お母さん」

「お母さんじゃないです!」

その後しばらく七丈島鎮守府内で大和をお母さん呼びするいじりが流行っていたという。

☆

「今日、午後から雨らしいけれど、磯風は傘とか持ってきたのかしら?」

あ、その胡椒の瓶取ってくれる?」

「これか? ああ、そういえば傘持ってきてないな」

「そう、じゃあ裏口のとこ刺さってる奴一本持ってた方がいいからそれ差して帰んなさい。はい、挽肉カレー中辛大盛二人前、四番テーブルに持ってってちょうだい」

「了解した! ありがとう、店長!」

「美海、三番テーブルの食器、下げてきて!」

「はい!」

七丈島の港のすぐ近くに店を構える人気カレー専門店ビッグスプーン。今日も昼時はたくさんのお客様で賑わっており、美海と磯風も忙しく店内を駆け回っていた。

そして、お昼時が過ぎて店内の客もいなくなった頃。

「開いとるかいのー」

「げっ、やはり今日も来たか……」

店内に杖を突きながら入って来たのは小柄なお爺さん。その姿を

見た磯風は酷く警戒するような声をあげた。

「あら、今日も来てくれたの？ 最近は毎日顔出してくれて嬉しいわー、海原の爺さん！」

「海原さん、こんにちは！」

「おう、店長に美海ちゃん、今日も来たぞい」

店長と美海は営業スマイルで老人を席へ案内するが、磯風だけは彼に対し、一定の距離を取っていた。

「ほら、磯風、あんたが注文とつてきなさい！」

「ええ、美海が取った方が早いじゃないか……」

「回数積み重ねてくしかないのよ！ 海原の爺さんは！」

店長に言われて渋々椅子に腰かける老人に歩み寄る磯風。そんな彼女を見て老人はカツと目を見開いて叫ぶ。

「誰じゃ君は!？」

「磯風だ！ もう何度目だ、このやり取り！」

磯風がうんざりした口調で叫ぶ。

この海原という老人、実は磯風がこのバイ——お手伝いを始めた頃から昼時を外れた時間を見計らったかのようにやつてくる常連さんなのだが、かなりボケており、もう数十回は顔を合わせた磯風のことを未だに従業員として覚えられていない状態である。

「初めて見るんじゃないが！」

「もう三十回は顔合わせたぞ！」

「嘘じゃろ！」

「本当だよ！ まあ、いい！ それよりご注文はお決まりですか！」

「何の？」

「カレーだろ、どう考えても！」

「カレーか！ ちよい待て」

「……………」

「……………」

「……………ん？ 誰じゃ君は!？」

「磯風だつて言ってるだろうが！」

以下、無限ループである。

こんなやり取りを、顔を合わせるたびに繰り返しているうちに磯風の中でこの老人に対して苦手意識のようなものが芽生えてしまっているのである。

磯風と彼のいつも通りのやり取りを見て美海と店長は苦笑を浮かべている。

「それで、そろそろ注文を言ってもらえないか……」

メニュー表を睨んでいる老人に磯風は疲れた様子で注文を催促する。そこに最早普段の接客の心得は欠片も見えない。

老人はメニュー表から顔を上げるとゆつくりと口を開いた。

「磯谷」

「磯風だ」

「ここ、メニューは何あるんじゃ？」

「手に持つてるメニュー表を見ろッ！」

「じゃあ、きつねうどん」

「ないッ！」

「なんでじゃ!？」

「ウチはカレー屋だからだよ！」

「ところで、誰じゃ君は!？」

「磯風なんだよ！」

この後、牛煮込みカレー甘口並盛という注文を彼の口から引き出すまでに十分弱かった。

「んまい！」

「良かったな……」

「磯風ちゃん、お疲れ様。はい、お水」

「ありがとう、美海……凄い疲れた」

美海から渡されたコップを受け取ると中の水を一気に飲み干して大きくため息を吐いた。

「まあ、海原の爺さんは本当に積み重ねよ。アタシだって覚えてもらうのに半年はかかったもの」

「私も海原さんがここの常連になってから三か月間来るたびにお話ししてやっと覚えてもらえたからね……そう、落ち込まないで、磯風

「ちゃん！」

「もう、私は疲れたよ……」

「ご馳走さん！ うまかったぞい！」

「ほら、磯風、食器下げてきなさいな」

「うう……」

嫌な予感を感じながらも磯風は老人の座るテーブルに歩いていく。

「海原さん、食器、お下げしてもよろしいですか？」

「誰じゃ君は!？」

「そう来ると思つたよ！ 磯風だ！」

「磯谷！」

「もう違う！」

「注文したやつまだか!？」

「今食べたじゃないか!？」

「きつねうどん！」

「だから、ないんだよ！」

「誰じゃ君は!？」

「うわあああああ！」

この時ばかりは流石の磯風も取り乱しが激しい。

「——麦茶、んまい！」

「あら、ありがと。でもそれ番茶なんだけど」

この時間は客も来ないからと店長の提案で昼休憩に入った。私達はテーブルの一つを借りてまかないのカレーを食べることにした。

海原のお爺さんはカレーを食べ終わっても帰る気配がないので店長が茶を淹れたのを美味しそうに飲んでいいる。だが、感想を聞く限り味がわかっていいるかどうかは非常に怪しい。

「そういえば、海原の爺さんはまだあの海沿いの家住んでるの？」

「ん？ そうじゃ」

「いい加減、引越しなさいな。あそこ津波とか危ないでしょ」

「断る！」

「役場の人達困ってるってほやいてたわよ」

「知らん！」

「でも、あんな町からも遠いところ不便でしょ？ 海原の爺さんはもう若くないんだから、何かあった時に周りに助けてもらえる方がいいじゃないの」

「別に助けなんていらん！ 体だってどこも悪くないぞい！」

「頭には大分ガタがきてるがな」

「磯風ちゃん！」

店長の引越しの提案に磯風が横から毒づく。

「とにかく、今日の夜にも台風が来るって言っじゃない？ 今日と明日だけでも別のところで過ごしましょう？ 役場の人が町営住宅すぐ貸せるって——」

「うっさいわい！ 儂は絶対にあの家は離れん！」

ついに怒って海原の爺さんは席を立った。

テーブルに財布から抜き出した千円札を置くとそのまま何も言わず店を出て行ってしまった。

「……追って来る」

「磯風ちゃん！」

「美海。いいのよ、行かせてやんなさい」

☆

「海原さん！」

「ん？」

店を出てすぐに杖をついて歩く老人の背中を見つけると、彼の名前を呼んで磯風は駆け寄った。

「誰じゃ君は!？」

「磯風！」

「なんて!？」

「磯風だ！」

「誰じゃ君は!？」

「くそが！」

感情を爆発させる磯風に老人は向き直って尋ねた。

「それで、何の用じゃ」

「あなたに言いたいことがあってな」

「なんじや、儂は何と言われようとあの家から——」

「お釣りだッ！」

「ああ、そつちかい。忘れとった」

拍子抜けしたような反応を見せてから老人は磯風の手から小銭を受け取り、財布にしまう。

「それじや、帰るぞい」

「いや、待て。あなた一人じや心配だ。家まで送っていこう」

「なんじやと、儂がボケてるんでも言うのか!？」

「ボケてるだろ!？」

こうして曇り空の下、少女と老人はゆっくりと歩き始めた。

「磯辺」

「磯風だ」

「お前は儂に引つ越せとは言わんのじやな」

「正直、できれば台風の時くらいはどこかに避難して欲しいんだがな」

そう言ってから、磯風は老人の方に視線を向けた。

「何かあるんだろう？ あの家を離れたくない理由が」

「そうじや、磯野」

「磯風だ」

「あれは、今から二十年は前の話になるかのう。その頃はこの七丈島にも鎮守府があつたんじや」

「今もあるが」

「嘘じやろ？」

「本当に知らないのかボケてるのかどつちだ」

「見えるかの、あの七丈小島つてどこに鎮守府があつたんじや」

老人が指さす先には現在、瑞鳳と妖精さんで運営されている七丈小島が見える。そういえば、確かあそこの建物は旧七丈島鎮守府を改築したものだったと磯風は今更になつて思い出した。

「その時、儂は一度だけじやが、偶然艦娘を見た」

「ほう」

旧七丈島鎮守府ではあまり出撃はしていなかったのだろうかと磯風は一瞬疑問を浮かべたが、よく考えれば七丈島小島の方から出撃し

ているならわざわざ七丈島の方へ近づく機会などなかったのだろうとすぐに納得した。

「美しかった。あの時、海の上を縦横無尽に駆ける彼女らの姿は、儂には本当に女神様か何かのように見えた」

「……………」

「それ以来、もう一度だけ海を駆ける艦娘の姿を見てみたいと海沿いに家を建てたんじゃ」

「見えたのか？」

「いや、金を貯めて家を建てた頃にはもう鎮守府自体がなくなっておった。なんか、このあたりはあれじゃろ？ どっかの強い艦隊が敵を全滅させたとかで、滅多に敵が来ないんで必要なくなったんじゃろ？」

おそらく横須賀鎮守府の話をしているのだらうと磯風は瞬時に察した。

ここはそういう平和な地域だから。だからこそ、磯風達のような罪艦が遠島させられる地として機能しているのだ。

「だから、儂があの家に住む頃にはもう、艦娘もいなくなっておった。ほれ、ここが儂の家じゃ」

「……………本当に海沿いギリギリだな」

海原のお爺さんの家は店長が言っていた通り大分町外れの方の本道の行き止まりに建っている日本家屋で、杖つきの彼が生活するにはあまりに不便な僻地と言わざるを得ない。

一番近場の飲食店であるビッグスプーンまで歩いてくるのにも随分苦労しただろう。

何よりも、海沿いギリギリすぎて、この位置では堤防があるとはいえ、少し大きな津波がくればすぐに浸水してしまうことは明らかだ。

確かに、これは役場の人や店長が引越しを促すのも頷ける。

「あがってくか？」

「いいのか？ じゃあ、お邪魔します」

「誰じゃ君は!？」

「このタイミングで!？」

その後も何度かボケていたものの、海原のお爺さんは磯風を一階の縁側に連れて行った。

「凄……い！」

縁側から外を見て、磯風は思わず息を飲んだ。

そこから見えたのは視界一杯の海。その迫力たるは、まるで一瞬自分が艀装をつけて海に立っているのではないかと磯風が錯覚しかけるほどであった。

波音と潮風をすぐ近くで感じるほど海沿いに迫ったこの日本家屋だからこそ見ることができる景色。

「ここからな、艦娘を眺めようって思ってたんじゃ」

「ああ、ここからなら、良く見えるだろうな」

「偶然でもいいから、見えたりせんかなと長年ずっと狙ってるわけじゃ」

「それが、ここを離れない理由か」

「もしかしたら、それは明日かもしれない。ならば、儂は何が起ころうとここで海を見続けなけりやならん」

磯風に、この老人にもつと島の内側の安全な場所へ引越せとはとても言えなかった。

「ま、そもそも今この島に艦娘、おらんがな！」

「いや、いるぞ」

「嘘じゃろ？」

「ていうか私だ」

「誰じゃ君は!？」

「磯風だよ！」

「磯兵衛!？」

「磯風だツ！ それ聞き間違いってレベル超えてるからな!？」

そこまで聞くと、海原は笑い始めて磯風の頭を撫でた。

「まあ、儂を元気づかせようとしてくれたのは嬉しいがな！ 流石にそれくらい嘘がわからんほど儂もボケてないぞ？」

「いや、本当だ！ あとあなたは間違いなくボケてる！」

「む、もうこんな時間か。そろそろ帰れ。これだけ長居してたら店長

も心配しておろう」

「……わかったよ。海原さん、明日は危険を感じたならすぐに家を離れてなるべく高いところに避難してくれ」

「わかつとる。これまでも同じようなことは何度かあったんじゃ。大丈夫じゃて」

結局、磯風はそのまま海原の家を後にし、ビッグスプーンに帰った。

☆

「へえ、海原の爺さん、そんなロマンチックな理由であんなところ住んでたのね」

「素敵だね！」

ビッグスプーンに帰ってから事のいきさつを話すと店長と美海は納得がいったように頷いていたが、店長の方はすぐに顔を曇らせた。

「でも、それとこれとは話が別なのよねえ。危険なことには変わりない」

「だが、私にはあの人を説得させる言葉は浮かばなかった」

「ん？ 磯風ちゃん今から艦装つけて海原さんのところ行けばいいんじゃない？」

美海の提案に磯風は苦笑いを浮かべた。

「まあ、それができればいいんだがな」

「できないの？」

「あのね、美海。この子達はちよつと特殊な事情を持つてる艦娘で、よっぽどの事情がない限りは艦装を付けることは許されてないのよ」

「なんで知ってるんだ、店長」

「おたくの提督、酒入ると口軽くなる癖直した方がいいわよ」

一応機密扱いの情報が一般人に流出しているという事実には流石に磯風の表情も凍った。あるいは矢矧なら気を失っていたかもしれない。

「で、でも……」

「すまない美海……私達の艦装は装着した時点で大本営にも知らせが入るようになってる。その場合、責任を取るのは提督なんだ。私は提督には極力迷惑をかけたくない」

「爺さん一人喜ばせるためなんて理由は当然通らないでしょうね。仕方ないわ、いつでも救助向かう準備だけ整えて、後は何事もないう祈るくらいしかないわね！」

そして、その夜。台風がこの島を直撃した。

第六十八話 「何者じや君は!？」

七丈島にもいわゆる警察署と呼ばれる場所がある。

町の中にある比較的小さな警察所で、署員数は約四十名である。大半の警官は皆派出所の方に出向いており、現在は署内の警官は十年務めている大ベテランと二か月前にやってきた新人の警官二名だけが勤務している状態である。

「ああああああ！ くっそおおおおお！」

「うるさいよ」

新人の方がデスクワークにいよいよ限界が来たとばかりに叫び声をあげて立ち上がる。

一方ベテランの方はキーボードを打つ手を一切止めないまま新人の方に冷めた言葉を返した。

それを聞いて新人がずかずかとベテランの方へと歩いていくと彼の隣のデスクに両手を叩きつけた。

その衝撃でデスクにおいてあるマグカップが僅かに浮き、中のコーヒーがこぼれそうになる。

「先輩ッ！」

「叩くのやめてもらえる？ コーヒーこぼれるから」

「なんで！ この島はこんなにも平和なんですかッ!？」

「いいことじゃないの」

「ここに！ 来てから！ まだ！ 一度も！ 軽犯罪すら！ 起こらないんですけどー！」

「文節ごとに『！』って入れるのやめて。うるさいし、うざったい」

ベテランの言葉も意に介さず新人はさらに続ける。

「犯罪者を捕まえるために苦勞して警察官になったのにあんまりじゃないですか！ 空き巣の一つくらい誰かやれよッ！」

「お前、その発言、減給ものだからね？」

「ここに來てから成し遂げた一番の大仕事といえはおばあちゃんの荷物持って港まで送ってたことくらいですよー！」

「立派じゃないの」

「おかしいだろ！ 平和ボケしすぎだろ！ 皆もつと熱くなれよおおお！」

「こんな奴が警官とかどうなってんだ、日本」

新人は強風に震える窓から見える大雨に目をやって瞳に炎を燃やしていた。

「いや！ 焦るな！ 今日待ちに待った台風だ！」

「なんで待ちに待ってた」

「きつと、熱い事故やらが起こるはずだ！」

「それを未然に防ぐために警察がいるんだよなあ」

「熱くなってきたぜええええええ！ 絶対に助けてやるからなああああー！」

「昨日俺達で散々島民に今日は家から出ないよう声かけたじゃないの。そうそう事故なんて起こんないよ」

「くっそおおお！ こんな大雨なんだから土砂崩れの一つでも起きろよ！ もつと熱くなれよおおお！」

「そろそろしばくか」

ベテランが椅子から立ち上がって指の骨を鳴らしながら拳を固めてから十秒後。

床にボコボコにされて倒れる新人の姿があった。

「頭冷えたか？」

「可愛い後輩に容赦ない顔面グープンとか酷すぎるのでは……」

「誰が可愛い後輩だ気持ち悪い」

「普通に辛辣ッ！」

「前々から言おうと思ってたんだけどさ、お前ね」

ベテランは新人を指さして言った。

「女の子がそういう言葉遣い、やめなさいね」

新人女性警察官として署内の男性人気を集めつつある彼女の内面の残念ぶりにベテランはため息をつきながらそう言った。

「本当にね、ただでさえウチ若い女の子少ないんだからさ、俺の可愛い後輩達の夢、砕かないでもらえる？」

「……私だって先輩の可愛い後輩なのに」

「おう、じゃあもつと女の子らしくしようや」

その時、署内の電話が鳴り響いた。

ベテランが受話器を取れば、派出所の方からの連絡であった。

『五分前に七丈富士で土砂崩れが発生。これによる死傷者は出ていないものの、近隣に住んでいた海原さんが町に続く一本道を封鎖され、避難ができなくなっている模様。至急応援を要請したい。場所は――』

受話器を置いてからベテランは新人の方をじろりと睨んだ。

「先輩！ まさか、事件ですか!?!」

「土砂崩れだと。俺達も応援に出る」

「なんだって!?! 急いで助けに行きましよう！ うおおお、燃えてきたアアアアア！」

「あーあ、お前がさつき土砂崩れ起きろとかいうから」

「流石に理不尽！」

☆

「台風だあああああ！ ひゃつはあああああ！ いえあああああ
ああー！」

「プリンツがここ数ヶ月でダントツに変なテンションだツ！」

七丈島鎮守府では現在提督と矢矧を除く全員が食堂で待機状態である。

磯風も今日ばかりは提督と店長の二人からお手伝い禁止を言い渡されている。

「ちよつと！ プリンツが！ やばいんですけど!?!」

「あん？ プリンツがやばいのはいつものことじゃねえか」

「そうですけど!?!」

「プリンツは台風や雷とかにテンション上がっちゃう系女子なのよ、ほつときなさい」

「それ、女子としてどうなんですか!?!」

とりあえず今日は強風でガタガタと音を立てる窓に張り付いて外ばかり見て自分の方に頻繁にはくつついてこないのので大和はプリンツのことはしばらく放っておくことにした。

「……流石に避難したよな、海原さん」

「ああ、磯風が昨日話してた海沿いの」

「今日は風強いから高潮や高波が起こってもおかしくないわ。堤防があるとはいえ、海沿いの家っていうのはちよつと危険かもね」

「まあ、流石に役場とか警察の奴らが嫌でも引つ張つて避難させてるだろうさ」

「そうか、そうだよな」

心配そうな磯風の表情も天龍の言葉で幾分か和らいだかに見えた。その時だった。

「皆さん、少しいいですか？」

「ん？ 提督、と矢矧……と、警察の方、ですか？」

食堂に入ってきた四人の男女を順々に見て大和は不思議そうに声を洩らした。

提督と矢矧の他に水浸しになった警官の制服らしきものを着用している男女がいることと、四人の誰もがどこか深刻そうな表情を浮かべているのが見えたからである。

「何か、あつたのか？」

「実は、七丈富士で土砂崩れが起きて、海沿いに住んでいる老人の避難経路が封鎖されてしまったの」

「海原さんが!？」

「そこで、恐れながら提案なんですがね」

矢矧の説明の横から男の方の警官が話に割って入ってきた。

「現状、土砂崩れで封鎖された道から救助に向かうには最低でも一日はかかります。しかし、この台風じゃいつ、高潮や高波が来てもおかしくはない。そこでなんですけれどね、艦娘の皆さんに海の方から海原さんを救助しに行ってもらえないかな、と思ひまして」

「この台風の中を、ですか？」

「イエエエエエエエツ！」

「プリンツうるさいー！」

外は文字通り嵐である。

海など最早並の漁船ではまともに舵も利かず転覆させられてしま

うかもしれないレベルだ。

確かに、軍艦の強度と性能を持つ艦娘ならばあるいは航行可能かもしれないが、艦娘も人間だ、強度は軍艦並でも体は漁船よりも遥かに小さいのだ。

波にのまれて『転覆』でもすれば泳げない艦娘に助かる術はない。潜水艦型の艦娘でもいれば良いのだが、生憎、七丈島鎮守府にそれはいない。

「私は反対です」

「提督……」

「せめて、もう少し海が落ち着いてからでないと出撃許可は出したくありません」

「まあ、そうですねー。いや、参ったな、それじゃどうしたもんか——」

「それじゃ、遅すぎるッ！　なんでだッ！　どうしてそこで諦めるんだッ！　こんな嵐がなんだッ！　人命がかかってるんだぞッ!?　お前が行かないなら私が行ってやるッ！　もつと熱くなれよおおおとおおおッ！」

「——！」

「何言ってくれてんだこの野郎！」

「ぎゃふッ！」

突然、隣で叫び始めた女性警官にすかさず肘鉄を決めた男性警官は失神した彼女の襟首をつかみながらこちらにペコペコと頭を下げる。

「い、いやあ、すみませんね。ウチの馬鹿がとんだぐ無礼を——」

「——行かせてくれ、提督！」

声をあげたのは磯風だった。

「し、しかし……」

「あの暑苦しい婦警さんの言う通りだ。人命がかかっている。私達艦娘が出なくてどうするんだ！」

「そうだな、ここで行かなきゃなんのために艦娘やってんだって話だぜ」

「大丈夫です！　大和型はこの程度の嵐ではびくともしません！」

「お姉さまが行くなら私も行くよ！ フウウウウウウツ！ 盛り上がってきたあああッ！」

「私は正直危険だと思うけど、仕方ないわね」

「提督、大丈夫です。私の指揮で必ず任務を果たして帰ってきて見せるわ！」

七丈島艦隊全員が名乗りをあげ、提督も、隣の男性警官も目を丸くして彼女達を見ていた。

一瞬、提督は酷く悲しそうな顔を一瞬だけ見せたが、すぐに呆れたような笑顔を浮かべた。

「わかりました、人命救助のため特例として艀装の使用を許可します！ 作戦の第一目標は海原さんの救助！ 第二目標は、全員で帰ってくることに！ いいですね!?!」

「了解ッ！」

こうして七丈島艦隊による救助作戦が開始された。

☆

『やめろ！ 海原さん！ この嵐だぞ?! 海に飛び込んだりしたらあんたまで死ぬぞ!』

『離せ！ 息子が！ 息子がそこで溺れているんだ!』

『あいつもいっぱしの漁師だ！ この荒れた海でもそう簡単にや沈まねえ！ 救助が来るのを待ってくれ！ あんたまで溺れたらもう収拾つかなくなる!』

『おい！ 救助船の用意はまだできねえのか!?!』

『無茶いな！ こんな嵐の中でまともに航行できる船なんざ島には

——ん？ ありやなんだ!?!』

それは最初小さな岩礁のようにも見えた。

しかし、みるみるうちにこちらに近づいてくるそれが人の形をしていると知った時、俺の身体はその場に釘付けになってただその姿を目で追っていた。

黒髪のポニーテールに黒い瞳を持ったその少女はこの嵐で荒れた海をまるで意に介さず、海の上を滑るかのよう移動して、今にも波にのまれそうな息子の手を引っ張って引き上げると、俺達のいる堤防

付近までやってきて息子を抱えて差し出した。

『よかった、息子さんは無事みたいですね』

『……あ、あんたは一体』

その場の誰もが呆然として少女を見つめる中、海面に立つ彼女は敬礼をして答えた。

『七丈島鎮守府所属艦娘、秋月型防空駆逐艦1番艦、秋月と申します！司令の命を受け本日、七丈島周囲の巡警及び、救助活動をお手伝いさせていただきますたく推参致しました！』

それから二十年以上の年月が経った今でも、彼女の姿を忘れたことは一度もない。

結局、艦娘の姿を見たのはそれきりで二度と見ることは叶わなかったが、今も海を見ていると思うのだ。

もしかしたら、と。

☆

「——こんな嵐の日は猶更、期待しちまうのう」

暴風雨の中縁側に座って茶をすする海原は昔のことを思い出しながらそう呟いた。

既に土砂崩れで町への避難ができないことは知っている。そして、さつきから何度か縁側の下を高潮が攫って来ているのにも、また、その水位が回数を重ねるたび目に見えて上がってきていることも、彼は全て把握している。

それでも尚、彼は海を見ることをやめなかった。

「ま、死んだら死んだでその時じやる。ぶっちゃけもうどうしようもないしの」

最後まで自分のやりたいことをやりきって死ぬのならそれも悪くないと達観した心境で茶を啜ってたその時であった。

「うな——ら——ん」

「むっ」

「——海原さあああああん！ 助けに来たぞおおおお！」

「ぶっ！」

彼の目に映ったのは、この荒れ狂う海を渡り徐々にこちらに近づい

てくる六人の人影。そして、その最前列でこちらに向けて大声で手を振っているのは間違いない。磯風の姿であった。

「海原さん、無事か！」

「何者じゃ君は!?!」

堤防まで近づいてきた磯風は海原の声を聞いて、腰に手を当てて得意げに言った。

「私は七丈島鎮守府所属艦娘、陽炎型駆逐艦12番艦、磯風だッ！」

「本当に艦娘だったんか!?!」

「だから言っただろうが！」

「嘘じゃろ!?!」

「現実を見ろ！」

「あれが海原の爺さんか？」

「ボケてるって話だったけど以外とまともな反応ね」

「まあ、こんなん見たら誰でも驚くと思いますけど」

「ハリケーンファイバー、ヒエアアアアアッ！」

「この子連れてくる必要性ありましたか？」

「幸運のお守りがわりになるだろ？」

「装備品……!?!」

「第一目標確認、さっさと救助に入るわよ！ 大和！」

驚きのあまり未だ現実を受け入れられない海原と磯風の問答を端から見つめながら、矢矧は大和の肩を叩いた。

それに大和は微妙な表情で応じる。

「え、本当にやるんですか、これ……?」

「あなたしかいないわ。大丈夫、磯風に命綱は繋いであるし、今の海で安定して海面に立ってられるのあなただけなのよ」

「それ間接的に私が重いって——」

「はやく、やれ！」

「わかりました、わかりましたってばもう！」

ヤケクソ気味に返事をする、大和は腰に縄を結び付けた磯風を抱きかかえる。

「本当に、行きますよ?」

「ああ、作戦通り、やってくれ！」

「……なんじゃ？」

「——ッ！ どっせええええええええええい！」

「投げたああああああああああああ！」

説明しよう。

現在、艦隊は堤防まで迫った。しかし、堤防から海原宅には高潮で不定期に水位が上がってきてはいるものの、まだ高低差は大きい。

そこで、本作戦は大和型の安定感と馬力を利用し、軽重量の磯風を海原のいる場所まで投擲し、海原を抱えた磯風を今度は命綱を引つ張って再び引き戻すという極めてシンプルかつスピーディーでテクニカルな救助作戦なのである。

力技とかごり押しだとかいう指摘は立案者の矢矧がキレるので決して口にはならない。

「——ぬおおおおおおああああ！」

「うおおおおおおお！」

「お、なんとか辿り着いたな」

「ナイス投擲」

「いいじゃない。磯風！ 目標を確保！」

矢矧の指示に、磯風は口をパクパクさせている海原を片手で抱きかかえつつ、縄を強く二回引つ張る。

「ん、目標確保の合図が」

「引いて！」

「おでっせええええええええええいッ！」

「ぎゃあああああ！ 死ぬ！ 死ぬるうううううう！」

「暴れないでくれ、海原さん。慣れるとこの浮遊感、意外と快感だぞ？」

大和が縄を勢いよく引つ張るとまるでミサイルの如く磯風と海原が大和の元に飛んできて、二人ともその胸に収まった。

「よし！ それじゃあ、受け渡し位置までいくわよ！」

「了解！」

☆

「——お、来たぞ！ 救護班、用意！」

「よっしやああああ！ 熱いぜえええええ！」

港ではベテランと新人の二人の警官が海原を抱えて向かって来る七丈島艦隊に手を振っている。

しかし、その表情は彼女達の背後に視線がいった瞬間、みるみるうちに青ざめた。

「高波だ！」

「ぬあああああ！ 堤防まで逃げえええ！ 全身の汗一滴まで振り絞るんだああああああいッ！」

七丈島艦隊の面々も、すぐに背後に迫る高波に気が付き、驚愕の表情を浮かべる。

「おい、あれやばくね!!? 5 mくらいあるじゃねえか！」

「のまれたら大体死ぬわね」

「海原さんだけでも投げるか」

「お前達もう少し老体をいたわれ！」

「投げるのは危険じゃないですか？ 受け止めてくれる人がいませんし」

「じゃあ、全力で走るしかないじゃない！」

己の身に迫る危機に速度をあげて堤防を目指す面々であったが、荒れた海は海面が隆起沈降を常に繰り返しており、思うように距離が詰まらない。

焦る彼女達に港から女性警官が叫んだ。

「堤防まで！ 堤防まで逃げて！ 堤防まで逃げればあの高波をどうにかできるッ！」

「何か秘策があるみたいね」

「でも、これ明らかに間に合わないわよ」

「……………磯風」

徐々に迫る高波を背に大和は磯風を掴む。

「これから、軽く投げますから、ちゃんと着地してくださいね？」

「え？ 何を——ぬおおおおおお!!？」

軽くとは言ったものの、超低空飛行で一直線に投げ飛ばされた磯風

は堤防手前のところでブレーキをかけつつなんとか着地した。

「ほら、次行きますよ」

「なッ!」

「きやつ!」

「ちよ、大和!」

天龍、瑞鳳、矢矧が順に投げられ、堤防付近までたどり着いたことを確認した所で大和が声を張り上げた。

「すみません、警察の方! 後はお願ひしますッ!」

「おい、何言つてやがる大和!」

「何考えてるの!」

「大和……」

「大丈夫です、皆」

眼前まで迫った波に体を向け、大和は呟いた。

「世界最大最強の大和型、この程度の波にのまれはしませんッ!」

「くそッ、もう間に合わない! 仕方ない、『緊急防壁』作動!」

ベテラン警官の声と共に地響きの聞こえて来たかと思うと、堤防の少し外周を沿うように、頑強な鉄の壁が海中からせりあがってきた。

後から聞いた話だが、まだ七丈島が今ほど平和ではなかった時期に当時の提督の指示で作られた防壁装置の一つらしい。

「これで、内側の島民は高波から守られる。だが……!」

「くそ! 大和! なんでそこで諦めるんだあああ!」

「大和、ふざけんなよ!」

「そうよ、こんなの間違ってるわ!」

「大和、しっかりして!」

「大和!」

皆の声が隔壁に遮られ、届かなくなっていく。

最後に彼女達から届いた声は、大和を多少なりとも驚かせるものだった。

「大和! プリンツはッ!」

「……………あ、忘れてた」

「お姉さまと! 一緒に! 波と! バトルドオオオオオオムッ

！」

「プリンツうううううううううう！」

約10 mはあるだろう分厚い鉄の壁が、大和達の後ろにそびえたつ。そして眼前には高波が迫る。

つまりは、もう逃げられない。

「……プリンツ」

「なんですか、お姉さま」

「本当にすみません。もし、二人とも生きて帰れたら、なんでも一つ言うこと聞きます」

「まじですか!? じゃあ、明日から私お姉さまの部屋住みますからッ！」

「ず、随分余裕ですね、私はともかくあなたは重巡洋艦——」

「大丈夫、大丈夫。ドイツの技術力は世界一イイイイイですから！耐久性は戦艦級と自負してます！」

「え」

「そして私はこの程度じゃ死ねない程度には幸運です！」

「……じゃあ、さっきのなしで」

「だが断る」

「いや、ちよ、待つ——」

その言葉を最後に高波が二人をのみこんだ。

☆

「高波は去ったか……」

仕事を終えた防御壁がゆっくりと下がっていく。

港では七丈島艦隊の面々が息をのんで祈るように壁の向こうを見つめている。

やがて壁が海中に沈んだ時、その向こう側には見慣れた二人の少女がずぶ濡れで立っていた。

ただ、金髪の少女の方はだいぶぐったりして黒髪の少女に肩を貸してもらいながらやっと立っている状態だが。

「大和！ プリンツ！ 無事だったんだな！」

「正直キツイと思っただんですけど、意外といけました。あと、途中で波

の威力が弱まったような……?」
「ぎゃ、ギャグパートでは……死人はでない……法則……がくつ」
「ちよつと何言ってるかわかんないわね」
「とにかく二人とも無事でよかった」
「いやあ、本当すごいな、艦娘って奴は。海の女神の二つ名も納得だ」
「うおおおおお！ 感動した！ お前達が、富士山だツ！」
「空気がち壊すのやめような」

☆

「うおおおおお！ 父ちゃん！ 良かったあああ！」
「うっさいわ、魚臭い体で抱き着いてくるな、バカ息子め」
「一話登場の漁師さん！」
「あれが息子だったのね」
「まあ、良かったな」
「おい、磯風」

唐突に海原から名前を呼ばれ、一瞬反応できなかつた磯風だったが、すぐに驚愕の表情を浮かべた。

「海原さん、私の名前、憶えてくれたのか」
「あんなことされたらの」
「ははは、まあ、それもそうだな」
「それに、またこうして艦娘と会えた。今日という日はどんだけボケても忘れられそうにないぞい。ありがとうの、磯風」
「――！ ああ！」

こうして、磯風の笑顔と共に七丈島艦隊と台風の戦いは幕を下ろしたのであった。

☆

一方、その頃、七丈島周辺海域。

そこに三人の影が立っていた。

「時間よ。そろそろこの海域を離脱するわ」

「……ええ、わかりました」

「珍しいのです、あなたが提督に我がままを言うなんて。この島に何か思い入れが？」

そう尋ねられて、少女は笑った。

「司令官と私は以前この島の鎮守府に所属していたんですよ。故郷のようなものなんです」

「でも、独断で波を減退させたのは流石にやりすぎよ！ 私達のことを勘付かれたら提督が困っちゃうんだから！」

「申し訳ありません……」

「……全く！ それに一声かければ私達だって手伝ってあげたのよ！ もっと私達に頼ってもいいんだからね！」

「なのです！」

「ふふ、はい、ありがとうございます。雷さん、電さん」

そう言って、少女は同じ艦隊の仲間である雷と電に頭を下げながらまた笑顔を見せた。

「じゃ、私達の艦隊に帰りましょ、秋月！」

「鏑木提督が待っているのです！」

「ええ、付き合っていたいただきありがとうございます」

雷と電が先陣を切って海域から離脱する中、秋月は島の方を振り向く。

彼女の目には楽しそうに笑う七丈島艦隊と、島の人々の姿が映っていた。

「現七丈島艦隊ですか。中々面白い方達ですね」

そう言って、秋月達は人知れず、その場から消えるようにいなくなつた。

第六十九話 「だって、あなたは何も悪くないじゃないですか！」

これは、磯風が七丈島鎮守府へ着任する、その少し前の話。

「どういうことでしょうか？ 罪艦、磯風の軍法会議に立ちあえないというのは？」

提督は目の前で愛用のパイプにワックスをかけながらどっしりと腰掛ける男、軍事刑務所所長に対し、できるだけ動揺を抑えた静かな口調で尋ねた。

「この通り、本軍法会議への参加は大本営からの許可が下りている他、そちらからも了承の返答を受けたはずですが」

そう言つて、提督は手に抱えた茶封筒から軍法会議の参加の許可、さらにこの刑務所所長の印が押されたその了承の旨を伝える公文書を彼に差し出して見せる。

それを見て所長は手に持っていたパイプを机上のパイプレストに立てかけておくと、僅かに声を洩らして笑みを浮かべた。

それに対し、怪訝な顔を浮かべる提督に対し、咳払いをされると彼はようやく口を開いた。

「いや、失礼。こちらの言い方が正確ではありませんでした、少将殿。はい、確かにこれらの文書は罪艦磯風の公判にあなたが参加することを公的、法的に認可するもので間違いはありませんな」

「ならば、何故——」

「いや、大変心苦しいことではあるのですが、少将殿が参加するご予定の公判は二日前に既に終了しているのですよ」

「な……」

余りの驚きにろくに声も出ないといった様子の提督を再び所長は小さく嘲笑する。

提督は、一瞬頭の中が真っ白になったが、すぐに我に返ってまくしたてるように質問した。

「馬鹿な！ 公判は明日と伺っていました！ その文書にも日付が書

かかっている筈です！」

「いや、そうなのですがね。事情により公判を前倒しにすることが三日前に急遽決まりました。その旨をお伝えする書簡を少将殿の鎮守府へ送ったはずなのですが。いや、そちらの鎮守府は本土から離れた離島故、どうやら間に合わず、行き違いになってしまったようですね」「そんな大事なことならば電報でよろしかったではありませんかッ！」

提督は歩み寄り、彼が両手を組んで載せている机を叩いた。

しかし、所長は彼の怒りなどまるで気に留める様子もなく、パイプレストからパイプが落ちていないか視線を動かしてから再び提督の方に視線を戻して呆れたようなため息をついた。

「少将殿、私もこの刑務所の所長を務める身。己の一挙一動に際限なく公的な措置が絡む立場なのです。いくら急を要する要件であるにしても公文書としての発行は疎かにはできませんよ。こちらの事情も鑑みていただきたい」

「……何故急に軍法会議の日程変更を？」

「さあ、詳しい事情はわかりかねますな。本軍法会議は鎮守府軍法会議に属するものでありますからして、その最高決定権は鎮守府司令長官である犬見中将殿に委ねられておりますからな」

その言葉を聞いて提督はおおよその内情を察した。

要は、この所長は犬見の息のかかった人間なのだ。

そして、犬見が公判を早めた理由として考えられるのは、自分の介入を危惧していることに違いないと提督は唇を噛んだ。

「成程、まんまと嵌められたというわけですか」

「はは、なんのことやらわかりかねますが。いや、かの『暴れ天龍』の時のようにまた『特例』で罪人を公然と攫われるおつもりだったならば、自重せよ、という天啓とも考えられませんか？」

そう言いながら提督を見る所長の目は厳しい目をしていった。

成程、この所長も自分のことは良くは思っていないようだ。だから犬見の企みに協力するのもやぶさかではなかったという訳だ。

提督は内心で嘆息した。

「罪艦なんぞという不良品を掠め取って鎮守府に引き取るなど何を考えているのか理解に苦しみますが、提督ごっこなら他所でなさい。軍法会議は子供がはしゃぎまわって良い場所ではない。まあ、此度の件はその良い教訓となったでしょう」

「……………」

もう隠す気すらない所長の明確な敵意に、提督の表情が冷たくなる。

「……………それで、磯風の判決はどうになりましたか？」

「それに関しても後々全て文書でお渡しする予定ですが、聞くまでもないでしょう？」

所長は勝ち誇ったかのように笑いながら、続く言葉を一際大きな声で続けた。

「無論、死刑判決です」

☆

「おう、提督。どうだったよ」

「既に公判は終わっていると言われましたよ」

「は？ おいおい、そりゃ話が違うだろうが」

「……………成程、嵌められたってわけね」

「察しが良くて助かります、はあ」

刑務所の前で待機していた矢矧と天龍と合流し、提督は溜息交じりに現状について話した。

「ん？ じゃあ、俺の時みたいに特例うんたらでなんとかできねえのか？」

「まあ、軍法会議が終わってしまっている以上、そうなりますね」

「詰みじゃねえか」

「なんとか磯風との面会は許可をもらってきたので、とりあえず彼女の元へ向かいましょう」

「でも、今更面会したって死刑になんのは変わらねえだろ？」

「……………それについては少し考えがあります。まず磯風と会って話をしましょう」

そう言って、考えの全てはを明かさなまま、提督は天龍と矢矧を

連れて磯風のいる独房へと向かった。

「——こちらでお待ちください」

「案内ご苦労様です」

「はっ、では私はこれで」

刑務所の面会室まで案内された提督達は用意されたパイプ椅子に座り、アクリル板の向こうを一心に見つめる。

少しして、向こう側の入り口の扉が開き、刑務官と一緒に、本人が手を枷で拘束された状態で入ってきた。

「あれが、磯風」

天龍の洩らした声には憐憫が含まれている。それはそうだろう。

年の程は十くらい歳の少女は虚ろな目をして俯き気味に、刑務官に誘導されるがまま歩いていった。そこにおおよそ彼女の心というものは感じられず、まるで人形のような印象さえ受けた。

「現時刻ヒトゴヨンハチ。面会時間は十五分になります」

刑務官は磯風を椅子に座らせてから時間を通告すると、磯風の斜め後ろに設置された机に座り、冊子に記録を取り始めた。

刑務官がペンを走らせる音だけが聞こえる数秒の静寂の後、話し始めたのは提督からだった。

「初めまして、磯風。私は七丈島鎮守府という所で提督をやっている者です」

「……………」

磯風は何も答えない。無視しているというよりもまるで聞こえていないかのように反応がなかった。

「極刑判決を受けたらしいですね。本来は私もあなたの公判に参加するつもりだったのですが、間に合わず申し訳ありません」

「……………」

「お待ちせしました、磯風。私達はあなたを助けるためにやってきました」

刑務官のペンの動きが止まりこちらをジロリと睨んだ。天龍は不敵に笑い、矢矧は動揺が隠せない様子だ。

磯風もようやくその提督の言葉に対して顔を上げて怪訝な顔を見

せた。提督はさらに続ける。

「具体的にはあなたには七丈島鎮守府の艦娘として着任してもらおうつもりです。どうですか？ 七丈島っていう本土から少し離れた離島なのですが、常春の島とも呼ばれているようにとても温暖な気候で島の人たちも良い人たちばかり——」

「ゴホン、ゴホン！」

刑務官の大きな咳払いで提督の言葉は止められた。どう考えても警告である。

矢矧は焦った表情で提督の肩を掴んでゆすつている。

また少し静寂が場を支配した後、今度は磯風の方が口を開いた。

「あなた達は一体、何が目的なんだ？」

「目的？」

「まあ、今の私を助けることができるかどうかは別として、それであるたになんの利があるのか皆目見当がつかない」

「本当に助けにきただけなんですけれど」

「悪いがそういう言葉は信用できなくてな」

磯風は提督から視線を外しながら顔を歪ませて冷たくそう言い放った。

「残念ながら、私は今まで人を信じて辛い目にばかりあつてきたから、無償の善意を向けてくるあなた達が、怖い」

その後、また視線を提督の方に戻すと、今度は笑顔を浮かべて告げた。

「教えてくれ、私を助けることに一体何の意味があるんだ？」

その笑顔があまりに疲れきつていて、悲壮に満ちていたものだから、提督の両隣に座る矢矧と天龍は見えていられないと言わんばかりに目を背けた。

提督だけが彼女の目を見つめて、優しく笑い返して言った。

「意味なんてありません」

「なら——」

「だって、あなたは何も悪くないじゃないですか！」

「——っ！」

「だから、私達はあなたを助けに来た」

「少将殿、どうか、それ以上はご自重を」

提督の言葉に、相当に驚かされたのか磯風は目を大きく見開いて提督を見つめたまま硬直し、刑務官はそれが磯風にとって余計な言葉であると判断し、彼に明確な警告を放った。

「申し訳ありません。話を変えます」

「……………はあ、今回に限り私の胸の内にはのみ留めておくので、気を付けてください」

「ありがとうございます」

それからは本当に他愛のない話ばかりだった。

「——で、その日は疲れてたので夕食カップ麺だったんですけれど、まさかの矢矧がカップ麺を知らなかったんですよ！」

「ちよ、提督！ その話はやめて！」

「はいつてカップヌードル渡したら、しばらくじーっと見つめてたかと思うと中身そのまま食べ始めるんですもん！ 固まっちゃいましたよ」

「お前、蓋に書いてある熱湯3分って文字読めなかったのかよ」

「仕方ないでしょ！ 未知の物質との出会いにテンパってたのよ！ 中身見てレーシヨンのなものだと思ったのよ！」

七丈島鎮守府内の話だった。

「——あ、磯風は料理とかできるんですか？ ウチは現在ろくに料理できるのが矢矧くらいしかいなくて」

「まあ、その矢矧もここ最近になってようやくマシなレベルになってきた程度だけだな」

「未だに肉じゃがも作れないあんたに言われたくない」

「俺はやらねえだけだ。本気出せばヤバいぜ、俺は？」

「キャベツとレタスの区別くらいつくようになってから出直してきなやろ」

「……………まあ、一応、料理は以前鎮守府で間宮さんに仕込んでもらったから、一通りは」

「間宮さん仕込みだってよ。かなり期待できるんじゃないのか？」

「小さいのに立派ですねえ」

磯風のことについて質問してきたり。

「私、いまいち提督としての威厳が足りてない気がするんですね」「必要か？」

「いりますよ！　なんというか私、もう少し尊敬されたい！」

「してるわよ」

「おう、尊敬してんぜ？」

「それ！　なんか軽くないですか!？」

「……はあ」

唐突なお悩み相談になったり。

「磯風、私の好きな食べ物知ってます？」

「………さあ」

「カツカレー」

「……だからなんだ」

死ぬ程どうでもいい話だったり。

しまいには刑務官が筆を止めてしまう程に残りの時間で行われたことは、本当に他愛のない雑談そのものだった。

「――時間です。これで面会は終了となります」

「あれ、もうお終いですか？」

「まあ、こんなものでしょう」

「俺ら本当に何しに来たんだろうな」

いそいそと椅子から立ち上がる三人を見て、磯風はどこか惜しむように小さく声を洩らしていた。

それが自分でも意外で、磯風は思わず両手で口を覆った。

「大丈夫ですよ、磯風。また来ます」

「なあ、結局ほとんど雑談に終わった気がするんだが、あれに何か意味があつたのか？」

「そこまで深くは考えていませんでしたが」

提督は少し悩むように顎に手を当てて眉間に皺を寄せる。

「ま、強いて言えば、磯風に私達のことを知ってもらいたかった、ですかね？」

「なんのために?」

「決まってるじゃないですか、あなたと仲良くなるためですよ!」

提督は笑顔でそう断言した。

これには刑務官ももう呆れて声も出ない。後ろで矢矧と天龍もため息をついているが、その表情はどこか満足気である。

「それに、ほら、私達の鎮守府これで全員でして、皆友達少ないんですよ」

「し、失礼ね! ボッチは提督だけでしよう!」

「ボッチじゃないですしッ! 少ないだけですし!」

「はっはっは、不毛な争いだぜ」

その三人のやり取りがあまりに自然体で、アクリル板越しに見ている磯風にも彼らの間に堅い絆が結ばれていることがわかった。

その姿が、どことなく谷風、浜風、浦風に重なって、磯風は悲痛に歪みそうになる顔を苦笑に抑えて言った。

「だからって、死刑囚と仲良くなったって仕方ないだろう」

「だから、私達が助けに来ました」

「まだ言うか」

「少将殿!」

刑務官の悲痛な叫びに慌てて口を塞ぐと、提督は彼に頭を下げてそそくさと面会室から逃げるように出て行った。

「全く、あの方は……あまり本気にしないように。では戻るぞ」

——だって、あなたは何も悪くないじゃないですか!

「……まだ、私にああ言ってくれる人がいたんだな」

「何か言ったか?」

「いや、独り言だ。なんでもない」

再び刑務官に連れられ、また暗く冷たい独房に戻される中、磯風の表情は面会前よりもほんの僅か、明るさを取り戻しているように見えた。

☆

「掴みはバッチリですね! これで磯風もきつとウチにすぐ馴染めるはずですよ!」

「普通に雑談しただけじゃねえか」

「むしろあの刑務官さんが優しくなかつたら開始五分で追い出されるわよ、私達」

刑務所を出てガッツポーズをとる提督に即座に天龍と矢矧から駄目だしが入る。

「で、あそこまで言い切ったからには磯風の死刑判決、覆す手はあるのよね?」

「おっし、提督! 俺は何すりやいいんだ? あいつ助けるためならなんでもするぜ!」

「おお、二人ともかなり意欲的ですな」

思わずたじろぐ提督に二人は言った。

「ええ、あんな絶望と諦めに引きつった笑顔、子供がしていい顔じゃない」

「あいつ、もう何も信じられないから、何にも頼れなくなってるんだ。とても見てらんねえよ」

「同感です。私も直接磯風と話して確信しました。彼女は何も悪くない。ならば、助けなければなりません。それが、七丈島鎮守府のやり方です」

三人が頷き合う。

すると、提督は柄にもなく悪人じみた笑みを浮かべて言った。

「では、始めましょうか。磯風の脱獄作戦を!」

第七十話 「あなたは、生きるべき人間なんです」

独房の中の私の視界には、しとしと降り続ける雨が映っている。

私はそれが現実のものではないと知っている。

誰も濡らすこともなければ冷たさも感じないこの雨は私の心が見せる幻。谷風と浜風の命を奪ったあの日から、私の目には幻の雨が映りこんでいた。

この雨粒は熱の代わりに生きる活力そのものを奪っていく。きつとこの雨は私の悲壮、絶望、後悔、全ての負の感情の塊なのだ。

そんな雨に絶えず降られた私は、自分を地獄の底へ叩き落とした張本人への怒りすら枯れ果て、生きることが辛くなっていた。

その根底にあつたのは、家族同然の友を二人もこの手で殺めた私は死んで当然の存在なのだという、そんな今更な罪悪感だった。

「……………死刑は、いつなんだろうな」

生きていることは辛かった。しかし、かと言って死が怖くないのかと問われれば決してそうではない。

暗い独房の中心で膝を抱えて丸くなり、小声で呟く私の声と体は刻一刻と迫る死の瞬間に恐怖し、震えている。

生の辛苦に悶え、死の恐怖に震える。私という存在はいよいよ逃げ場を失い、崩壊が始まりつつあった。

「——磯風、立て。お前に面会だ」

軍法会議で極刑判決を言い渡されてから二日程経った時、私の元にも顔も知らぬ提督が訪ねて来た。

男は二人の艦娘を連れ眼鏡くらいしか特徴の見て取れない、印象の薄い男だった。

「お待ちせしました、磯風。私達はあなたを助けるためにやってきました」

彼を私は一貫して拒絶した。

恐ろしかったからだ。

彼の真意がわからないから、彼の無償の善意がかの犬見誠一郎とそれにまつわる悲劇を思い出させるには十分だったから。

しかし、それ以上に恐ろしかったことは、彼が私を生かそうとして
いることだ。

生きる資格を持たない私が、生き続けるということがどれだけ恐ろ
しいことか。

それは、一生消えぬ罪悪感と葛藤に心を擦り減らし続ける生き地獄
だ。それをあとどれだけ途方もない時間耐え続けなければなら
ないのかと考えると気が狂いそうだった。

なるべく顔に出さないようには努めたつもりではあったが、この時
の私は男の両隣に座っていた艦娘の反応を見るに相当に酷い表情を
していたようだ。

しかし、彼は笑みと共に、そんな私の内心を察したかのように言っ
た。

「だって、あなたは何も悪くないじゃないですか!」

その一言が、まるで私の全てを肯定してくれているようで。

その一瞬だけ、絶え間なく振り続けた雨が、止んだ。

☆

「——さて、そろそろ刑務所の見回りの交代時間ですね……行きます
か」

深夜、提督は時計を確認すると刑務所裏手のフェンスに手をかけ
た。

「2メートルくらいですか……上の方に有刺鉄線がありますけど、
まあ、この程度ならなんとかなるでしょう」

そう言いつつ数秒でほとんど音もたてずにフェンスを登り切り、刑
務所の敷地内に降り立つと、周りを見回して、建物の裏口に向かって
走る。

すぐに裏口の扉の鍵を開けて中に入ろうとしている二人の刑務官
を見つけると、提督は彼らに音もなく近づく。

「あ、すみません、私も入れていただけますか?」

「お、提督さんもいたんですかい、ほら早く入ってください」

「どうもすみません」

「さて、あとは見回り交代して俺達の仕事は終わりだ。どうよ、これか

ら飲みにも行かねえか？」

「お、いいねえ！ 一昨日いい店見つけたんだ、そこ行こうぜ」

「いいですねえ、やっぱり仕事終わりのお酒は格別ですからね」

「流石、わかっただらっしゃる！」

「そうそう、あのビールの喉ごし！ あれがまた週末だとさらに違うんだ！」

「ええ、わかります、わかりますとも。私、最近は秘書艦にお酒止められてるんで、あの味が恋しいですよ」

「うわ、そりや可哀そうだなあ！」

「いいじゃないですか、提督さんも今日くらいこっそり飲みに——
——ん!？」

刑務官二人は刑務所の廊下の真ん中で同時に立ち止まり、驚きと困惑のあまりそれから声がでずにいた。

彼らは自分達と一緒に裏口から刑務所内に入った侵入者の存在に気が付いていたし、相手が侵入者だと認識したうえで会話していた。

そんな不自然すぎる状況を微塵も不自然だと思えなかった自分達に驚きを隠せなかった。

「あんたは——がつ——」

「ぐえー！」

につこりと笑顔を浮かべた提督に刑務官達は手刀の一撃で沈められる。

「さて、磯風はどこにいるんでしょうか……とりあえず誰かに聞いてみましょうか」

そう言つて適当な部屋に入ると、中にいた男性に提督はまるで自分が侵入者であることなど忘れているかのように口を開いた。

「お疲れ様です、罪艦の磯風ってどこにいるかご存じないですか？」

「あ、提督さんお疲れ様です。あれなら確か地下三階の最奥の独房——

——あれ？」

「ありがとうございます」

部屋の中で資料整理をしていたらしい刑務官の鳩尾に拳を叩き込んで気絶させると提督は地下三階の独房を目指して走り出した。

☆

「おいおい、提督ほんとに単身で乗り込んでいつちまったぞ、大丈夫かよ、おい」

「ま、大丈夫でしょ」

「お前、なんでそんな余裕そうなんだよ」

提督の指示通り刑務所から最寄りの港でボートをレンタルした矢矧と天龍はボートの中で買ってきたコンビニ弁当で遅めの夕食を摂りながら提督の帰りを待っていた。

「いくらなんでも刑務所に侵入して磯風連れて脱獄なんぞ、普通無理だろ」

「ウチの提督は普通じゃないでしょ？ あなただって鎮守府着任初日にフルボッコにされたじゃない」

「あれは陸だったからだ！」

「陸上での戦闘とはいえ提督は素手、あなたは刀使って完敗じゃ言い訳にならないわよ」

「ぐぬぬ……！」

悔しそうに矢矧を睨む天龍を他所に矢矧はから揚げを口の中に放り込む。

「ま、大丈夫よ。あなたを迎えに行った時もなんやかんやしてなんとかあったんだから、今回もなんやかんや大丈夫なのよ」

「何そのふわっふわした説明!？」

「あなたにもいずれわかる時が来るわ」

「お前の提督に対するその特に理由のない全幅の信頼なんなんだよ。ちよつと怖えよ」

「フフ怖？」

「フフ怖ってなんだよ！ やかましいわ！」

☆

「……………誰だ」

「あれ、音は立ててなかったつもりだったんですけど……………よくわかりましたね」

「気配がした、気がした」

磯風は布団から体を起こして鉄格子の外に立つ男性を見て目を丸くした。

「何故あなたがここにいる」

「言ったじゃないですか、また来ますって」

「まさか独房まで訪ねてきてもらえるところとは思っていなかったな」

「さあ、磯風、逃げましょう！ レッツ脱獄！」

「……………」

提督の手にはどこからくすねてきたのか独房の鍵が握られている。

しかし、磯風は何か考えあぐねるように顔を俯けたままだった。

「どうしました？」

「提督、私はな、友人を二人、この手で殺しているんだ」

「ええ」

「それ以来な、夢にあの二人が出てくるんだ。よくも殺したなって、私に怒っているんだ」

「ええ」

「なあ、確かに私は中将のことを暗殺していないし、薬物の件も含めて犬見誠一郎の企みでその罪を被らされたただだ。でもな、あの二人を殺したのは、間違いなく私なんだ」

磯風は体を震わせながら顔を上げて提督に尋ねた。

「ならば、私は死ぬべき人間なんじゃないのか？」

「いえ、違います」

磯風の問いを提督はそう即答した。

「でも、私が生きているなんて——」

「あなたが死んだところで殺した友人は帰ってきませんよね」

「……………」

再び磯風は俯く。提督はそんな彼女に追いうちをかけるように厳しい表情で言葉を続けた。

「あなたが友人を殺したことを本当に悔いているのなら、死んで楽になることは許されない。むしろ、あなたは生きて悔い続けなければならぬ」

「……………厳しいな、提督は」

「そうです。私は厳しいので絶対にあなたを死なせてあげません」
苦しそうな表情の磯風に提督は一転して優しい笑みを浮かべて口を開いた。

「あなたは、生きるべき人間なんです」

「……生きなきや、ダメか」

「はい」

「……生きてて、いいのか？」

「勿論です」

「……………」

「う?」

「——うわあああああん!」

「え!?! ちよ!?! ブレーカー落としたとはいえ、流石に見つかっちゃいます! やばい! ちよ、磯風! 今はちよっと、マジやばいです!」

ずっと死ぬしかないと自分を追い詰めていた。こんな罪悪感を背負って生きていくのも御免だと思っていた。

だが、そんな身勝手な思い上がりは、提督に阻まれた。

殺した二人の命を背負って、生きて償い続けろと、苦しみ続けろと言われた。

それでも生きていて欲しいと、言ってくれた。

それが嬉しいのか悲しいのか、あるいは両方なのか磯風にはわからなかったが、彼女は泣かずにはいられなかった。

☆

「うお、本当に磯風連れて帰ってきやがった!?!」

「だから言ったでしょ、大丈夫だつて」

「すみません、脱出に手間取って時間がかかりました」

「わ、私の泣き声のせいだな……すまない」

「大丈夫です! むしろ制圧する手間が省けましたし!」

「制圧したのか……」

「所長が会食とかでいなかったせいとか統率取れてなくてやりやすかったです」

「はあああああああ!?!」

夜明け前の横須賀に天龍と矢矧の大声が響き渡った。

☆

「どういうことか、納得のいく説明をしていただきたい!」

受話器の向こうで怒鳴る声に対して、提督はげんなりした声で返した。

「ですから、所長殿。磯風の『再審』の結果に則り、彼女は七丈島鎮守府へ『遠島』と判決が下されたのです。『特例』によって」

「な、何故既に判決の下った死刑囚の再審など……!」

「この軍法会議は先の軍法会議で取り上げられた磯風の重罪に加えて、今回の脱獄の罪も罪状に含めた上で改めて処分を決めるためのものですので」

「それが何故死刑から遠島に判決が甘くなるのだツ!」

「それは本軍法会議にて『特例』が適用されましたので」

「貴様……ッ!」

今にも怒りに任せて拳を机に叩きつけんとする刑務所所長の真っ赤な顔が目には浮かぶようであった。

「そもそも磯風を脱獄させたのは——」

「そこまでにしていたきましよう、所長殿」

提督は所長の言葉を威圧的な口調で封殺する。

「あの夜、そちらは不幸な停電に見舞われて監視カメラの映像もなにもかも残ってはいなかったと聞いていますが? 何か、証拠でもあるのですか?」

「ぐっ……貴様がブレーカーを落とさしさえしなければ!」

「それ以上は侮辱罪に問われかねませんよ?」

その言葉で所長もそれ以上は口を閉ざすしかなかった。

提督は勝ち誇ったように続ける。

「偶然そちらで停電が起き、偶然磯風が脱獄し、偶然横須賀で逮捕され、偶然私が軍法会議に参加でき、特例によって磯風は七丈島鎮守府に着任した。それだけの話です」

「随分とできすぎた偶然ですな!」

「では、何かの天啓かもしれませんね？」

「くそっ……ところで何故か私の刻み煙草がびしょ濡れにされてカビが生えていたのですが——」

「私執務がありますので失礼いたします。後の詳細は文書にして郵送いたしますので」

「な、待たれよ！ そんなあからさまに!? やはりあなたが——」

「——喫煙はあなたにとって肺がんの原因の一つとなりますッ！」

所長はまだ何か怒鳴っていたが、提督は言うだけ言ってそのまま受話器を戻した。

同時に矢矧が小さい小包を持って執務室に入ってきた。

「提督、よろしいですか？ 鎮守府宛に荷物が届いているんですけれど」

「ああ、届きましたか。磯風を呼んでみてくださいください」

「ん？ 私に関係あるものなのか？」

すると、矢矧の背中からひよっこりと磯風が顔を出した。

「……何可愛いことしてるんですか」

「ん？」

「え、か、可愛いって……今矢矧に鎮守府ツアーをしてもらっていいな。さっきは食堂を案内してもらってたんだけ」

磯風は楽しそうに笑ってそう言った。

「お、丁度いいですね。では、早速食堂で腕を振るってもらえますか？」

「ん？」

提督が小包を開けるとそこには三徳包丁が嚴重に包装されていた。

それは、磯風が間宮から貰った因縁の包丁であった。

「……もう戻ってこないかと思ってた」

「ええ、少し面倒でしたがなんとか取り戻せました。思う所もあるのでしようが、きつと大切なものだと思っただけ」

そう言いながら、包丁を渡す提督を見上げながら磯風は静かに頷いて包丁を受け取る。

「ありがとう、提督。私、頑張って生きてみるよ」

「ええ、長生きしてもらいますよ」

「では、この磯風、早速皆に自慢の料理を振舞わせてもらおう！ 昼は楽しみにしておくといい」

「ええ、楽しみにしますよ。磯風！」

「……提督はロリコンなの？」

「なんですか、急に!？」

矢矧と提督が口論を始めた所で磯風は意気揚々と食堂へと走っていった。

彼女の視界に、もう雨は降っていない。

第七十一話 「ロリ巫女様……!?!」

私、大和は怒っている。

「ぜえ、ぜえ……くそ、なんて長い階段ですか、これは!」

私は現在、この島の誇る二つの山のうちの一つ、二原山にいる。

この七丈島は上から見れば小さい円と大きい円がくっついたひょうたんのような形になっており、小さい円の方にあるのが七丈富士、大きい円の方にあるのが二原山である。

ひょうたんの間の窪みに当たる部分に港があり、そのままひょうたんの真ん中を辿っていくと商店街や住宅街など生活圏が広がっている。

要は、七丈富士と二原山に挟まれた平地に島民は生活圏を築いている訳である。

ちなみに、鎮守府は港から七丈富士の方へ行つた所にあるため、二原山からかなり離れている。

「くそ、あの提督め!」

私は能天気にはらへら笑っているあの眼鏡提督を思い出し、思わず右手に持っていた破魔矢をへし折りそうになった。

そう、私が今、二原山のふもとから続くこの長い石階段を上っているのはこの破魔矢とあの需要のないドジっ子提督が原因なのだ。

☆

「——大和、今暇ですか?」

「……暇じゃありません」

「お、暇そうですねえ」

「暇じゃありません、これから皆の昼食を作るんです!」

明らかに面倒ごとの気配を漂わせて食堂に入ってきた提督から逃げるように私は厨房に逃げ込もうとする。

「きよーのおひるはあさりのボンゴレです」

しかし、そんな私の目論見を厨房からひよこつと顔をだした戦闘糧食妖精さんが遮る。

「せ、戦闘糧食妖精さん……!」

「おひさしぶりです。二十二話いらいのさいとーじよーです」

「メタァ!」

「めでたァー!」

そんな戦闘糧食妖精さんの横槍のおかげで逃げ場を失った私は
渋々提督の頼みを聞くしかなかったのだ。

「この破魔矢をですね、神社にお返ししてきて欲しいんですよ」

「破魔矢……」

その年の幸運を射止める、厄を祓い、悪いものから守ってくれる、そ
んな縁起物が破魔矢だ。

この鎮守府にも武運長久や安全祈願などを願って飾ってあるもの
だろう。

「通常、破魔矢は効力が一年とされ、ウチは大体年明けに破魔矢を頂い
てきて翌年明けに神社にお返しするんですよ」

「まあ私の家でも確かそうしていましたね」

私の返答に頷き、少し伏し目がちになった提督は一度ため息をつく
と、一際声を小さくして続きの言葉を放った。

「……でも、今年は忘れててまだ返しに行つてなかったんですよ」

「もう四月終わりますけど!?!」

破魔矢はあまり長いこと置いておくと悪い気で穢れて逆に良くな
いものを寄せたりする。

「なんで今まで気が付かなかったんですか……」

「忙しくて、つい……というか今も絶賛忙しいんですよ!」

思い出したかのように大声を上げる提督と同時に鎮守府内にアナ
ウンスが響き渡った。

『えー、提督、どこで油売ってるのか知らないけど、大本営からありと
あらゆる書類の催促の電話が鳴りっぱなしです。さつさと帰ってこ
い。以上』

静かに、しかし明らかに言葉の節々に怒りの炎を覗かせる矢矧の声
と、ブツツと音を立ててあからさまに乱暴に切られたアナウンスは提
督を震え上がらせるには十分だった。

「そ、そういう訳なので、これを二原山神社にお返しして、新しい破魔矢を頂いてきてください！ これお焚き上げ料と初穂料です！」

そう言ってお金の入った茶封筒と破魔矢を押し付けるようにして提督は慌てて食堂から走り去っていった。

仕方ないため息をつきつつ、私はあさりのボンゴレを頂いてから島民の方々に場所を尋ねつつ二原山神社に向かうことになったのだ。ちなみにあさりのボンゴレは本当に美味しかった。

☆

「——で、色んな人に道を尋ねてやつとここまで来たのに、なんですがこの長い石階段は！」

やつとのこと険しい石階段を上りきって鳥居の前まで来た私は肩で息をしながらぼやいた。

一息ついて神社の方を見れば、境内に人の気配はなく、随分と寂れた小さな神社である。

「あれ、誰もいない……ということはないでしょうけど……あのーすみませーん！」

「——誰？」

「うわ!？」

鳥居をくぐって境内で声をあげると、賽銭箱の裏側から細かい声と共に少女の頭部の上半分が姿を現した。

「あの、この神社の方でしょうか？」

「……………」

「あのー、なんで頭だけ出してこちらを見てるんでしょうか……」

「……………」

「すみません、せめて賽銭箱の裏から出てきてもらえませんか？」

「私コミュ障だから無理」

「なんて堂々としたコミュ障！」

「でも人が怖いだけで決して話したくない訳じゃないの」

「面倒くさい、この子！」

変な人に遭遇した。

「…………私はこの神社を、その、守っているの」

「はあ」

成程、僅かに見える巫女服っぽい者から推測してこの神社の巫女さんと言ったところか。

「それ以上近づかないで！」

「はい!？」

ゆっくりと賽銭箱に近づこうと歩を進める私に少女は大声をあげた。

「今はこの賽銭箱以外に隠れ場所がないからそれ以上近づかれると逃げ場を失って詰むの」

「詰むって何がです!？」

「こうやって何かに隠れてるうちはまだまともに会話できるの。ここから出てあなたと面と向かい合ったら私、間違いなく心臓止まるよ?」

「それコミュ障っていうレベルじゃないですよ!？」

しかし、少女の声はあまりに必死だったので仕方なくこの何とも言えない距離感で会話を続けることにした。

「あなた、誰?」

「ああ、私は七丈島鎮守府の艦娘の大和といいます」

「艦娘……」

それを聞くと今まで頭を半分だけ出していた少女は賽銭箱の裏側から立ち上がってゆっくりと出てくる。

「艦娘、そう、だから人と違う感じがするの。あなたなら向かい合っても平気かも」

「やつと姿を見せてくれましたか」

少女は美海や磯風より少し年上くらいだろうか。ぱつちりと開いたくりくりした瞳と薄い唇が特徴的な端正な顔立ち、綺麗に切りそろえられた前髪と後ろで一括りにして結んでいるらしい腰まで届く艶やかなストレートの黒髪が巫女服も相まっていかにも巫女さんらしい清潔感のある印象を伺わせる。

ただ、その表情は機械的というかあまり変化がなく、無表情を貫き通しており、折角の美人が台無しである。

「人以外だったらコミュ障は発動しないの。大和は結構マシ」

「艦娘だから、でしようかね」

「そうかも。だからゾンビ映画とかエイリアン映画とか見るとすごく落ち着くの。わかる?」

「わかりません」

「あ、人間やめる系も平気なの。石仮面つけてURYYYYYってやってるの、見えて凄く安心する。わかる?」

「わかりませんって!」

真顔の少女が声色だけ嬉しそうにやたら同調を求めてくる。なにこれ怖い。

「久しぶりにお話できてついテンションが上がってしまったの」

「表情から一切テンションの上昇が見て取れないんですけど」

「普段は良くてカラス、最悪賽銭箱に話しかけてるから……」

「悲しい」

巫女少女のテンションが下がったのはすぐにわかった。

「それで、今日はなんの用なの?」

「ああ、古い破魔矢のお焚き上げと新しい破魔矢を頂こうと思って」

そう言ってお焚き上げ料と初穂料が入った茶封筒と破魔矢を差し出すと、少女は走って近づいてくると、ひったくるように二つを取ってすぐ逃げるように元の位置まで離れていった。

「はあ……はあ……た、確かに、受け取ったの……」

「大変そうですね」

「この距離を維持して欲しいの」

「これ普段の参拝客にはどう対応してるんですか?」

「ウチ、あんまり人来ないから。平地にも神社はあるしね」

そう言って、巫女少女は私の後ろにある険しい石階段の方に視線を向けた。成程、確かにこんな嫌がらせのような石階段があれば参拝客の足も遠のくだろう。

「それでもこの島で一番古い神社だからってやってきてくれる人もいるの。あなたの所の提督もそう」

「そういった方々にはどうしてたんです?」

「神主のお爺ちゃんが対応してた」

「ん？ 今そのお爺様はどちらに？」

私がそう尋ねると、少女はますますその無表情に暗い影を落とす。

「お爺ちゃんは、遠いところに行っちゃったの」

「あ、すみません、辛いことを聞いてしまいましたね……」

「お婆ちゃんと結婚五十周年記念の北海道旅行に行ったの。しばらく帰ってこないの」

「おめでとうございますッ！」

私の謝罪を返して。

☆

「じゃあ、今は一人でここに？」

「うん、でもバイト勇者くんが毎日様子見に来てお世話してくれるから平気」

「バイト勇者くんって誰ですか!？」

唐突に出てきたヤバそうなパワーワードに私は戦慄した。

「バイト勇者くんはこの島のいたる場所でバイトをしているスーパー高校生なの。お爺ちゃん達が留守の間この家政婦兼神主のバイトをしているの」

「家政婦はともかく神主をバイトにやらせるのは駄目でしょう!？」

「でも参拝客のお相手もしてくれて助かってるの。バイト勇者くんは私と違ってコミュ力の塊だから」

バイト勇者のことは気になるが、とりあえず今は早く新しい破魔矢をもらって帰りたい。

「あの、それで……あれ？ そういえば、お名前聞いてませんでしたよね」

私がそう言った瞬間、とんでもない速度で巫女少女は再び賽銭箱の裏側にダツシユで逃げて行った。

「なんでまた逃げるんですか!」

「じ、じじじ、自己、紹介、とかとかとか、ちよつととと、そ、そういうのは」

「非常に動揺してらっしやる!」

巫女様は舌噛むんじゃないかというレベルでもっておられた。

「……名前を聞くにはまだ大和と私の関係じゃ早いと思うの」

「逆にどこまで進めば名前教えてもらえるんです!？」

「家族」

「秘匿性高っ!」

「それまではあだ名で我慢して」

「普通その順序逆じゃないですか!？」

真名解放までの道のりは長い。

「それで、あだ名ってなんですか？」

「良くお参り来るお爺さんやお婆さん達は……若様って呼ぶよ」

「若様? 堅いですねえ」

「バイト勇者くんはロリ巫女様って呼んでくるよ」

「ロリ巫女様……!？」

二度目のパワーワード出現に動揺が隠せない。

「個人的にはロリ巫女様の方が好き」

「好きなんですか!?! いいんですか、それで!？」

「なんか、語感が気安くていいの」

ロリ巫女様の考えることはよくわからない。

「だから、大和もロリ巫女様って呼んでね」

「それ通用するの後一、二年が限度ですからね、ロリ巫女様」

「……………ふふふ」

ロリ巫女様は心なしか嬉しそうだ。

☆

「——はい、新しい破魔矢。飾り方は結構適当でいいけれど、濡らさないようにね、神様の気が流れ落ちちゃうの」

「わかりました。適当でいいんですか……」

「強いて言えば矢先が太陽を向かないようにするくらい。後は、あまり決まりはないの」

「わかりました、ではありがたく戴きますね」

こういう説明を受けるとロリ巫女様が本当に神社関係の人間なのだと改めて実感する。

破魔矢を受け取ると、私は鳥居を抜けて石階段を降りようとする。

「大和」

そこでロリ巫女様が声をかけてきた。

「今日は楽しかったの。偶にでいいからまたお話しに来てね」

「……はい、勿論です！　ここで会えたのも何かの縁でしょうしね！」

私は笑ってそう答えた。

ロリ巫女様も、その返答にこころなしに僅かに笑みを浮かべた気がした。

そして、再び長い石階段を下りて鎮守府につく頃にはもう夕方になっっていた。

「おかしいですね、あまり長居したつもりはなかったんですけど」

「あ、お帰りなさい、大和。破魔矢はもらえましたか？」

「はい、これでいいんですよ？」

「お、ありがとうございます！　今日はお疲れさまでした、本当に助かりましたよ！」

破魔矢を持って提督が嬉しそうな声をあげる。その能天気な表情を見ていると一つは文句も言いたくなり、自然と私の口が開く。

「全くもう、聞いてませんよ、あんなに石階段が険しい山中の神社だなんて！」

「あはは、すみません。流石の大和といえど疲れましたか？」

「もう足が棒のようです」

「夕食前にお風呂にでも入ってきたらどうですか？　瑞鳳が新しい入

浴剤を買い込んできましたよ」

「お、本当ですか！　じゃあ、先にお風呂入ってきましようかね！」

「あ、神主のお爺さんはお元気でしたか？」

入渠ルームに向かおうとする私の足をその提督の質問が止めた。

「いえ、お爺さんはお婆さんと結婚五十周年記念の旅行とかで北海道に行ってるらしいですよ？」

「あれ、じゃあ、バイト勇者君に破魔矢出してもらったんですか？」

「あ、提督もバイト勇者君知ってるんですね。いえ、その彼でもなく、神主さんのお孫さん？　中学生くらいの巫女さんが出てきましたよ」

「え？」

私の返答を聞いて、提督が不思議そうに首を傾げる。

「神主さんのお孫さんは本土にいるって話でしたけど、それに男の子だと言ってた気が」

「え？ そんな筈不是吗、だって……」

「それに、中学生くらいのお孫さんがいたとして、いくらなんでもその子を一人で置いて旅行なんて不自然じゃないですか？」

「え、その間はバイト勇者君が家政婦って」

「だとしても、神主さんはそんなことをする人じゃありません」

沈黙が場を支配する。

そうだ、思えば不思議だった。今日は平日のはずである。なのに、何故学校にもいかず彼女は一人あの神社にいたのか。

あれ、なんだろう。この背筋の寒さは。

「まあ、あそこの神社ってお稲荷様祀ってたりしますし、化かされたのかもしれない！」

「え、ちよ、待って怖いです。提督、私今すっごい怖いんですけど」

「大丈夫です。悪さする類のものではないですよ。守り神みたいなものって聞きましたし」

「そういうことじゃないですよ！」

一人でお風呂に入るのも怖かったので苦肉の策としてプリントと一緒に入った。

☆

「——今日も今日とてバイト三昧。いやー充実してるっすねーっ！」

夕暮れの二原山神社の石階段を上る男子高校生の姿がそこにはあった。

彼は通称バイト勇者。この島の三割の店で掛け持ちバイトを日夜こなすバイトの鬼である。

境内に入ると、彼は手慣れた手つきで賽銭箱を動かしてその下の鍵を手に取ると、自分の体中に塩を振りかけてから本殿の鍵を開けて中に入る。

「さてと、お、またお供えのお揚げが消えてる！ 誰が食べてるんつかねー？」

「私なの」

いつの間にか背後の賽銭箱に隠れるようにロリ巫女様が頭の半分だけを出してバイト勇者を見つめていた。

「うお！ ロリ巫女様っすか!? いつも気配なく現れるの勘弁して欲しいっすねえ！」

「ごめんね」

「まあ、ロリ巫女様の方から声かけてくるようになってくれて俺は嬉しいっすけどねー！」

「バイト勇者くんのコミュカのたまものなの」

そう言いながら本殿を丁寧に掃除し始めるバイト勇者の姿を見て、賽銭箱の裏からロリ巫女様は満足げに頷いている。

「——さて、最後にこのお供えのお揚げを、と」

ガサガサとビニール袋の中からお揚げを取り出すと白いお供え皿の上に置く。

「お稲荷様、今日も一日ご苦勞様にございました！ 明日もよろしく願いますよっと！」

「違うの」

後ろでロリ巫女様が頬を膨らませている。

「今のご神体のお稲荷様はまだ若いの。若稲荷様なの」

「あー、そうだったすね！ 爺様方が若様って呼んでたっすね！ これは失礼しました、若稲荷様！」

「よろしい」

再びご神体にそう謝る彼を見て、ロリ巫女様は満足げに頷いた。

それを確認して再びご神体に向けて手を合わせて黙祷して一礼すると、いそいそと本殿から出て鍵を閉め、息をついた。

「じゃあ、夜ご飯にしましょうか！ ロリ巫女様の分もお弁当買ってきたんで一緒にどうっすかって——あれ？ またいない」

いつの間にか賽銭箱に隠れてこちらを伺っていた彼女の姿はなかった。

「まだ一緒にご飯はNGみたいすねー。仕方ない、また家の方にお弁当置いて帰るっすかね」

そう言つて、バイト勇者は頭を掻きながら二人分の弁当を持って本殿の裏にある住居の方へと歩いていった。

第七十二話「この簡単な事件、私が三話、もたせてみせるっ！」

「見えてきましたね、あれが二原荘ですか！」

「悪いな、二人とも、手伝わせてしまっ」

「いいってことよ、代わりにさっき食ったカレーのお代、無料にしてくれんだろ？ 安いもんだぜ」

大和、磯風、天龍の三人は現在、二原山の麓に建物を構える温泉旅館、二原荘にやってきていた。

理由は、彼女達の両手を塞いでいる大量のカレーである。

「しかし、ビッグスプーンってカレーの宅配サービスもやってるんですねえ」

「まあ、この島には高齢者も多いからな。店長が、幅広いお客様に対応できるようにって始めたらしい」

そんな話をしながらバイト中の磯風と一緒に、カレー代を無料にしてもらう代わりにその手伝いを頼まれた大和と天龍は木造の旅館の前に立ち、感嘆の声を洩らした。

「おお、すげえ、立派な旅館じゃねえか」

「本当に……素敵な所ですね」

「この島で一番の温泉旅館だな。この島の周辺の安全も確立されて年々宿泊客は増えてるらしい」

年代と貫禄を感じさせる旅館を見ながら、受付を探す三人の耳に不意に聞こえて来たのは老婆のものと推測される怒声だった。

「——誰がやったんだい！」

「ん？ なんででしょう？」

「こつちの方から聞こえたぞ」

カレーの入った袋を持って声の方に足を運んでみれば、この旅館の従業員らしき人間が土蔵の前に集まって何やら話をしているらしい。

その中心におそらくは先刻声をあげた白髪のお婆さんが般若のよ

うな表情で従業員たちを睨みつけている。

「あのお、何かあったんですか？」

「うお、誰だ、あんたら!？」

「ビッグスプーンの者だ。注文のカレーを届けに来た」

磯風の言葉を聞いて、従業員達が困惑気味に頷く。

「どうやら立て込んでいる時に来てしまったようだ。」

「配達大変ご苦勞様でした。あ、カレー、私が受け取りますので……」

どう対応したものが困っている従業員をかき分け、着物姿の高校生

くらいの少女が現れ、磯風達に丁寧にお辞儀をした。

「ああ、代金は既に受け取っているからこの袋だけ置いていく」

「はい——痛っ！」

「ん!? おい、大丈夫か？」

磯風の持つ袋の一つを取ろうと袋に触れた瞬間、少女の表情が一瞬痛みに歪んだ。よく見れば、指に包帯がまかれている。

「怪我してるのか? いい、やはり私が持っていくよ」

「申し訳ありません……」

「というか、これ何かあったのか? どうもただごとじゃねえって雰囲気だが」

少女は少し言いくそうに顔を伏せると、小さく口を開いた。

「……実は、ウチの旅館にあった年代物の壺が割れてしまいました」
「壺?」

「ええ、この旅館が江戸にあった頃から代々受け継いできたもので、今日博物館に寄贈して丁重に保管してもらったんです」

しかし、その壺が何者かによって割れてしまった。確かにこれは一大事である。

「成程、そういうことでしたか。そういうことならお任せを!」

「お、おい、大和?」

「大和、どこいくんだ?」

大和が従業員達の輪の中心に歩いていく。

「事情はお聞きしました。つまり、壺を割った犯人をお探しなのですね?」

「なんだい、あんたは？」

「私は、七丈島鎮守府の艦娘、大和です！ 七丈島の平和を守る者として、この事件、私が解決してみせましょう！」

そう大和は意気揚々と叫んだ。

それを見て天龍がため息をついた。

「ああ、そういや、昨日探偵ものの漫画読んでたな、あいつ」

「大和は意外と影響されやすい所があるからな」

天龍は以前、大和が『賭博黙示録ガイジ』を読んで随分影響されていたのを思い出した。

具体的には第三十八話のできごとである。

「ふふ、そうですね、ではまず現場の状況から改めてお聞かせ願えませんか？」

中心ですっかり全員の視線を受けて上機嫌な様子の大和はさつきまで声を荒げていた着物姿の老婆に視線を向ける。

「……成程、鎮守府の艦娘さんでしたか。私はこの旅館の女将です。ええ、仰った通り当旅館の壺が土蔵の中で割れているのが見つかったのです」

老婆は、大和が艦娘とわかると丁寧な口調に変わって土蔵の奥を指さした。

電気のついた土蔵の奥の方に陶器の欠片が散らばっているのが見える。大和はしきりにそれを見て頷き、話を進める。

「では、今日、この土蔵を訪れた方は誰かいらっしゃいますか？」

大和がそう聞くと、従業員の人々の中から数人の手があがった。

その中には女将の手もあった。

「おそらく、私が今日一番初めに土蔵を訪れました。ええ、今朝の四時のことです。今日寄贈する壺の様子を確認しに土蔵に来たのです。その時、壺は無事でした。お前達はどうかだったんだい、中井、花板？」
女将がそう証言を終えると、手をあげていた二人の従業員に声をかける。

中井と呼ばれた女性は桃色の着物を着た色白な和風美人で、花板と呼ばれた男性は和帽子を被った強面の青年で、見た目からしてどうや

ら板前のようだ。

「私は朝の五時ごろですかね。客室のお掃除前に壺を運びやすい位置に動かそうと思つて。丁度花板さんが通りかかったので手伝つてもらつたんです」

「ええ、あつしも朝の仕込みの最中、偶然土蔵に入つていく中井さんを見かけまして、入口の近くに壺を移動させました。その時は壺にはヒビ一つ入つておりやせんでした」

「それで、昨日も皆の前で話したが、私は旅館を代表してお前に壺を持つてくるよう、頼んだね？　いろは？」

いろは、と呼ばれた少女は先刻大和達に事情を説明してくれた少女だった。

少女は、女将の視線にびくつと体を震わせながら頷く。

「は、はい。私は十二時頃に土蔵に壺を取りに行く予定だったんですが、その、途中でお客様に島の案内を頼まれてしまいました、結局土蔵には……」

「割れた壺を最初に発見したのはどなたですか？」

「私です。あの子がいつまでも壺を取つてこないものだから私自らが壺を運びに土蔵に行つたのです、確か、十二時半をまわつたくらいでしたか」

「なるほど、つまり犯行時刻は今朝五時から十二時半までという訳ですか」

「別にまとめなくてもそれくらい誰だつてわかつてるぜ、大和」

「犯行時刻全然絞れてないぞ、大和」

「二人ともうるさい」

茶々をいれる天龍と磯風を睨みながら大和はさらに続けた。

「では、今から皆さん一人一人に事情聴取をして——」

「あれ？　皆さん、どうしたんすかこんな所に集まつて？」

大和の声を遮つて現れたのは、濁つた水の入ったバケツと雑巾、それに塵取りと箒を持つている作務衣サムエを着た高校生くらいの少年であつた。

少年は皆が集まっている土蔵の奥を見ると、表情をこわばらせて、

その場で土下座を始めた。

「あ！ す、すいません！ あの壺割ったのは俺です！」

「ええええええええええ！」

「……………どういふことだいな？」

女将が厳しい声で少年に尋ねる。

「今日土蔵から壺を持っていくって聞いてたんで、少し掃除しておこうと思つて土蔵に行つたんつす。ほら、あの壺ずっと奥にしまつてあるから埃溜まつてるんじゃないかと、それで一旦動かして掃除を……………」

「それで、不手際で割つたつて？」

「はい、本当に申し訳ありませんでした！」

全員、何も言わなかつた。特に大和は顔を真っ赤に赤面させて何も言えなかつた。

「うわ、大和、これはハズいなあ、おい」

「捜査を始めようとしたら犯人が普通に自供し始めるとか、ある意味とんだ探偵殺しだな」

「……………」

女将は少年の説明を聞くと、厳しい顔つきで彼を見下ろしながら質問する。

「そのバケツと雑巾は土蔵の掃除に持つてつたのかい？」

「は、はい……………それで、壺の破片を集めようと今ちりとりと箒を持つてきたところつす」

「わかつた。何、弁償しろとはいわないさ。ただ、ここの仕事はクビだ。今日一杯で出ていきな」

「そんな、女将さん！ クビはバイト勇者君が可哀そうじゃ……………」

「え、バイト勇者!? 彼が!? あの!？」

「大和、空気読め」

空気を読まず驚愕の声をあげる大和に天龍が手刀をいれた。

「なんだい、いろは? 何か文句でもあるのかい?」

女将の鋭い視線を受けて、抗議の声をあげた少女は、顔を伏せてそれ以上何も言わなかつた。

「いいね、もう解散だ。各自仕事に戻ることに。お前さんは壺の破片を片してから荷物をまとめな」

「はい、わかりました……」

「——果たして、それでいいんでしょうか？」

女将の解散の声に異を唱えたのは他ならぬ、大和である。

「おいおい、大和、お前そろそろいい加減に……」

「そうだぞ、これ以上は迷惑だ」

「この事件、本当に終わらせてもいいんですか？」

その場の全員の視線が再び大和の元に戻る。

「現時点までの文字数は3401文字。この小説の平均文字数は約6000文字。そして、今回の話は長編開始の第七十五話にむけてまさかの三話構成。まだまだ尺は余りまくってます」

「おい」

「この簡単な事件、私が三話、もたせてみせるっ！」

☆

『わかりました、艦娘の皆様にはいつもお世話になっておりますし、気のすむまでお調べになってどうぞ。ただ、くれぐれも従業員の仕事の邪魔や、他のお客様の迷惑になるようなことはなさらぬようお願いいたします』

そんな言葉を残して、女将は呆れたように去っていった。

「よし、じゃあ早速捜査開始ですね！」

「お前、今日はなんかやべえな」

「まあ、仕方ない。乗り掛かった舟だ、私達も協力しよう」

「磯風、お前ちよつと面白がつてるよな？」

言葉とは裏腹にわくわくが隠し切れない磯風の表情に天龍は溜息を吐いた。

「ではまずはロビーに行きますか」

「お、なんでだ？」

「いや、とりあえずカレーを届けに行こうかなと」

「ああ、そういえばそうだったな」

カレーの袋を両手に、大和達は正面玄関からロビーへ入った。

「あら、あなた達、さっきの」

「あ、どうも、えーと、中井さん、でしたよね？」

「ええ、この旅館の仲居頭をしております。中井です」

「なんてわかりやすい名前！」

「いや、逆にややこしくねえか？」

ロビーに入ると、丁度中井と呼ばれていた女性が階段を下りてきたところで、彼女は私達の姿を見ると、微笑んでこちらに歩み寄ってきた。

「すみません、これ、ご注文のカレーです」

「はい確かに、ご苦勞様。でも、確か最初に若女将が対応してなかったかしら？」

「若女将？」

「ああ、いろはちゃんのことよ。女将さんの孫娘なの、あの子。だから若女将って呼ばれているの」

「へえ」

なんとというか、自分達とは別世界の住人のような印象を受け、三人は面食らってしまった。

そんな彼女達の中井はクスクスと口に手を当てて笑う。

「それで、大和さんでしたよね？ ああ言ったからには犯人はバイト勇者君じゃないと考えているのかしら？」

「それをこれから調べるんです」

「そう、聞きたいことがあったら何でも聞いてね。協力するわ」

「では、早速」

待つてましたとばかりに大和は身を乗り出す。

「もう一度土蔵に行った時の状況について詳しく話してくれませんか？」

「あら、凄い、ドラマみたい」

そうして再び中井が土蔵に行つて花板と共に壺を土蔵の入り口付近にまで運んだ経緯を話してくれた。

「あの壺結構重くて、女手一つじゃ厳しいから、花板さんがいてくれて助かったわ。彼がいなかったらバイト勇者君じゃなくて私が割つて

たかもしれないわね」

「皆バイト勇者君って呼ぶんですね」

「彼この島の七不思議にも数えられるくらい有名だから。口裂け女の本名を誰も呼ばないのと同じじゃないかしら。本名より異名の方が有名なのよ」

ますますバイト勇者のことがよくわからなくなる説明である。

「うーん、中井さんは何か壺が割れた現場を見て思ったことはないですか？」

「ええ、そうねえ。最初に見た時はなんで破片が土蔵の奥にあるのかしらって思ったわね」

「破片の位置ですか」

「でも、バイト勇者君が壺をお掃除するために移動させたからなのねってすぐ納得しちやっったわ」

「なるほろ」

「なるほろ？」

大和が質問を終えると、立て続けに磯風が質問した。

「なあ、そういえばあの女将さんはどういう人なんだ？ 皆怖がってるみたいだったが」

「ええ、女将さんはとつても厳しいお方で、怖がってる従業員も少なくはないでしょうね。私も新人仲居の時代には何度も泣かされたのよ？」

当時を懐かしむように笑いながらそこまで話して、中井は思い出したように手を叩く。

「ああ、いろはちゃんには特に厳しいわね。やっぱり自分の跡取りだからかしら。おかげであの子、すっかり女将さんには苦手意識を持ってるみたいだけれど」

「ああ、それは私も感じたな」

「それとね、バイト勇者君にも当たりがきついように思うのよね」

「バイト勇者にも？」

中井自身も不思議そうに話を続ける。

「バイト勇者君、ここに短期の住み込みで来てるんだけど、凄くよく働

いてくれて、仕事の覚えも早いし、気が利くし、何より彼とつても愛想が良いからお客様からも好評で、私達も助かっていたのよ。けれど、女将さんだけはバイト勇者君に厳しく指導を続けてたわね……もう、バイトどころかプロでもそこまで求めるかってレベルで厳しかったわ」

ロリ巫女様がコミュ力の塊と彼を表現していたが、まさかそこまで有能人材だったとは、と大和は内心でまた驚嘆の声をあげていた。「だからね、私はバイト勇者君がミスで壺を割ったんじゃないかって、女将さんへの仕返しで壺を割ったんじゃないかなって思うのよ」

「女将さんへの仕返し、なるほろ、確かに自分に厳しいばかりの相手に好印象は抱きませんよね」

「今またなるほろって言ったよな、大和」

「いや、待て大和、私はそうは思わない!」

中井の考えに一理あると同調を示す大和を、磯風が制した。

「私が見えた気がするぞ、この事件の真犯人がな!」

「本当ですか、磯風!」

「おお、やるじゃねえか、磯風!」

「私にも聞かせてもらえるかしら」

磯風はコホンと一つ咳払いをいれると、自身の推理を披露し始める。

「結論から言えば、今回の犯人は女将さんじゃないかと思う」

「女将さんが!?!」

「女将さんはバイト勇者のことが気に入らなかつたんだ。だが、バイト勇者は聞いている通りかなり有能な人材。クビにする理由がなかった。そこで、壺を割らせることにしたんだ」

「おお、なんかそれっぽい真相だな!」

全員磯風の推理に期待が高まる。

「そこで、女将さんはあの壺の妖精さんと密約を交わしたんだ」

「……………ん?」

「壺の妖精さんとなんやかんや仲良くなった女将さんはバイト勇者が壺の掃除をしに土蔵に来た際、自分が割ったと勘違いさせるよう壺を

割るよう指示をし、はたしてそれは実行された」

「なるほろ。結果、バイト勇者君は自分が犯人だと思い込んで……」

「おい」

「悲しい、事件だったな」

「おい、おいおいおい、ちよつと待て」

天龍が勝手に盛り上がってる大和と磯風の間割って入る。

「なんですか、天龍」

「いや、なんですかじゃねえよ。なんだ、壺の妖精さんって」

「壺の妖精さんは壺の妖精さんだろ！」

「逆ギレ!？」

「私達の装備にさえ妖精さんが宿るんです、江戸時代から続くような壺に妖精さんがいたっておかしくはないでしょう」

「いや、まあ、仮に妖精さんがいたとしてだぜ？ そんな壺割ってまでバイト勇者追い出したって考えるか、普通？ おい、なんだその顔」

天龍の反論に磯風が凄い形相で睨んでくる。

「いや、だつてよ、博物館に寄贈するほどのもんだつたら結構な値打ちもんなんじゃないのか？」

「あ、そうね、詳しくは女将さんというはちゃんくらいしか知らないけれど、億の値がつくって聞いたわ」

「うぐぐ」

「それによ、バイト勇者だつて住み込みの短期バイトなんだからそんな長くはいねえだろ？」

「ええ、今週一杯でどちらにせよ仕事はおしまいね」

「じゃあ、わざわざそんなリスク冒して追い出すのは不自然だろ」

「なんやかんやあってそうせざるをえなくなつたんだよ！」

「なんやかんやってなんだよ」

「なんやかんやは、なんやかんやだツ！」

「ヤケクソか」

この後ダダをこねる磯風をなだめるのが大変だったという。

第七十三話 「これは、迷宮入りだな」

「なあ、花板さんだっけ？ その人にも話を聞きに行こうぜ」

「ええ、そうですね。なるべく多くの人に当たるのは捜査の基本ですからね！」

そう言つて、中井さんに案内を頼み、調理場へと三人は足を運ぶ。

「……あつしがこの板長をしておりやす、花板というもんです」

すぐに先刻の強面の男性がやってきて、こちらに頭を下げた。

「忙しい時にすみません。もう一度土蔵に行つた時のお話を聞かせてください」

「ええ、わかりやした。自分、朝の仕込みの最中に土蔵に入っていく中井さんを見かけやした。土蔵に置いてあるもんっていうのは重いもんばんかりで、女手一つじゃ危ねえって思いやして、僭越ながら壺を移動させるお手伝いをさせていただきやした」

「なあ、それは朝の仕込み中のことだったんだよな？」

「え、はい、さようぞ」

磯風が目を細めて花板に声をかける。

「朝の仕込みの最中になんであなたは土蔵なんかに来たんだ？」

「は、はい？」

「ここまで中井さんに案内されてきたが、どうもこの調理場と土蔵までは離れすぎている。朝の仕込みの最中に調理場を仕切るあなたが土蔵まで一体何の用事でやってきたんだ？」

「そ、それは……」

「そもそも、朝の仕込みはその日の朝食だけでなく、昼食や夕食にも少なからず影響を与える繊細な仕事だろう。それと並行して住み込みの従業員の朝の賄いも作るはずだ。つまり、この調理場の設備と板前の人数を見るに、朝は手が足りない程忙しくなるんじゃないのか？」

そんな中、板長のあなたがその仕事より優先すべきと考える用事があるのか？ いや、仮にそれがあつたとして、さらにそれをほっぽりだして土蔵で中井さんを手伝っている余裕があなたにあつたのか？

それとも、それくらい手を抜いても客には気付かれないと思ったか？

なあ、教えてくれ。花板さん。なあなあなあなあ——」

「磯風ストップ！ 花板さん、泣きそう！」

「お前！ 憂さ晴らしに花板さんに八つ当たりしてんじゃねえよ！」

「いえ……全くもつてその通りかと思いやす……自分に、この調理場を仕切る資格なんざ、ありやせん……！」

花板が和帽子を脱ぎ捨て、頭を下げた。

「本当にすいやせんでした！ 自分、思いあがっておりやした！」

「ちよつと磯風どうしてくれるんですか——あれ、花板さん、その頭、どうしたんですか？」

和帽子の下の彼の角刈りの頭に真つ白な包帯がまかれていた。

「あ、これは、その……」

「大体な、料理人というのは、自分の作る料理に誇りと信念をもって——」

「だああああ！ もう！ 黙ってろ、てめえ！」

「自分の料理を棚上げにして散々な言いようですね……」

天龍に小脇に抱えられながらも磯風の目は据わっていた。

☆

「もう！ 磯風のせいで中途半端な所で聞き込みが中断しちゃったじゃないですか！」

「いや、しかしだな」

「反省しろ。大体まともな料理作れないお前が言えた台詞かよ」

「むぐぐ」

しばらく調理場には近づけそうにない。よって、現場の検証をしようとする三人は再び土蔵の前に戻ってきた。

すると、丁度土蔵の中からバイト勇者が出てくる。その右手には壺の破片の入ったビニール袋が握られていた。

「あ、七丈島鎮守府の皆さんっすよね」

「ええ、この壺を割った犯人を捜査中です」

「いや、俺なんすけど……」

「それは調べればわかることです」

特に意味もなく意味深な笑みを浮かべる大和にバイト勇者はただ苦笑いを浮かべるばかりだった。

「あ、手伝いますよ。土蔵の横に置きっぱなしのバケツ、私が持ちます。うわ、水凄い真っ黒！どこ掃除してたんですか？」

「い、いえいえいえ！ そんな申し訳ないっすよ！それに、従業員でもない人に仕事手伝わせたら女将さんに雷落とされるっす！」

真っ黒に濁った水の入ったバケツを持つとうと近づくとバイト勇者はぶんぶんと首を振ってバケツの前に立ちはだかる。

「これは俺が持つていきますから！」

「まあ、そこまで言うのなら」

そう言っつて、バイト勇者はバケツを持って早歩きで歩き去っていく。

その時、ほんの僅かに、何かがぶつかるような音がバケツから聞こえた、気がした。

（ん？ 今、バケツから何か音が？ いや、気のせいですかね？）

☆

その後、戻ってきたバイト勇者に大和は質問を始めた。

「バイト勇者君は土蔵の壺のこと知ってたんですよね？」

「ええ、昨日土蔵に案内されて見せてもらったっすから」

「何時ごろこの土蔵に？」

「十二時ちようどくらいっすかね！ 昼飯の前に済ませてしまおうかなど。まあ、おかげでこんなドジしちまって大変な迷惑かけちゃいましたけど……」

バイト勇者はそう言っつて肩を落としました。

「なあ、この土蔵付近には何があるんだ？」

「え、そうっすねえ、従業員の居住棟とか、客室廊下に続く裏口とか、ボイラー室とかっすね。俺は基本掃除とか雑用全般で客間の方に行くことも多かったのでこの道ショートカットに使ってました」

「ほお、じゃあますます花板さんがここに来て中井さんを手伝った理由がわからないな」

「まだ言っつてんですか、磯風」

磯風は邪悪な笑みを浮かべている。これは次花板を見かけたら再び質問攻めにするつもりだろう。

「まあ、でも、花板さんが土蔵の方に来た理由がわかんねえってのには同意だぜ。朝の忙しい時間にわざわざここまで来るのは不自然だな」
「花板さんと中井さんお二人で土蔵に来てたんすか？ それは良かったっす、二人とも仲直りしたんすね」

バイト勇者から気になる発言が聞こえる。

「仲直り？」

「ええ、昨夜、二人が廊下で喧嘩してるのを見かけたんすよ」

「喧嘩……」

「結構白熱してましたから俺も仲裁入ろうに入れなくて、結局スルーしちゃったんすけど、良かったっす、何事もなくて」

バイト勇者は安心したように息をつく。自分がバイトをクビになって大変な目にあっているというのに他人の心配をするとは中々肝が据わっている。

「——いや、何事もなく、とはいかないかもしれねえぞ？」

天龍が土蔵の外で静かにそう呟いた。

「どういう意味です？」

「見ろよ、ハン」

土蔵の外は真っ白な小石が敷き詰められている。しかし、天龍の指さした先には不自然に小石が抜けて土の色が出てきていた。

「小石がなくなってるみたいですね？ 誰か蹴っ飛ばしたんでしょうか？」

「それだけじゃねえ」

天龍が小石を一つ拾い上げて見せる。そこには僅かに赤い斑点のようなものがついていた。

「これって、もしかして……!」

「ああ、血じゃねえのか？」

「おい、これ!」

さらに、磯風が声をあげる。彼女の掌には青銅色の陶器の破片のようなものに乗っていた。

それは、バイト勇者の持つビニール袋の中に詰まった壺の破片によく類似している。

「壺の破片のようですね……でも、何故土蔵の外に？」

「こいつは、思ったよりやべえ事件かもしれねえぞ？」

天龍の声は震えていた。

「今すぐ全員を集めてくれ、犯人、わかったぜ……！」

☆

三十分程して、当初土蔵に集まっていた全員が集まっていた。

「それで、壺を割った犯人が分かったと聞きましたが？」

「俺なんすけど……」

「いや、違う。今回、真犯人は他にいる！」

天龍のその言葉に集まった従業員たちがざわつき始める。

「実は、捜査の結果、俺達はこの土蔵の外で、血痕を見つけた」

「け、血痕……！」

「大丈夫っすか、いろはちゃん!？」

「ふえ!? は、はい! 大丈夫! 大丈夫です!」

血痕と聞いて、いろはが顔を青ざめさせてよろめいたが、バイト勇者に支えられると今度は真っ赤になってすぐ姿勢を正す。

それを、おお、青春だなあと大和は生暖かい目で見つめていた。

「この血のついた小石の周辺からはいくつか小石が抜き取られてた。多分、血痕を隠すために犯人が抜き取ったんだ。そして、同時に壺の破片らしきものも発見した。こいつは重要な証拠だぜ? 何故なら、これは、土蔵の外で壺が割られたことを示す証拠になるからだ!」

おお、と天龍の力強い声に従業員達がまたどよめく。

そういうの私がいりたかった、と大和は天龍を羨望の眼差しで見つめていた。

「犯人は、土蔵の外で壺を割った。いや、正確には壺で『殴りつけた』結果、割れたんだ」

「殴りつけた!？」

バイト勇者が素っ頓狂な声をあげる。それまで真顔で天龍の言葉を聞いていた女将ですらその表情に困惑がはつきりと浮かび上がった。

ている。

「壺は結構な重量があるからな、鈍器としちや十分だったんじゃないか？　そして、殴られた拍子に石に血痕がついた。割れた壺の破片は犯人が集めて土蔵の中にばらまいたんだ。真の犯行現場をカモフラージュするためにな！」

「おお、それで、天龍。犯人は一体誰なんです？」

天龍は得意げに人差し指を立てた。

「大和、俺達はもうその犯人に会って話をしてるぜ？　その被害者ともな。そうだろ？　中井さんよお！　あんたがああ壺で花板さんを殴りつけたんだ！」

「え、私？」

「な、中井さんが!?!」

「中井さん、あんたが壺で花板さんを殴りつけた。これがこの事件の真相だ！」

しかし、中井さんはその天龍の推理を否定するように首を横に振った。

「いいえ、そんなことやってないわ。大体、まず私と花板さんが土蔵に来た段階で壺は割れてなかったって証言したでしょう？」

「そりゃ、あんたが殴る前の話だ。あんたが花板さんを殴ってからは、誰も土蔵に来てないんだぜ？」

確かに、確認に行くはずのいろははお客さんに呼び止められて、結局女将が発見する十二時半まで土蔵の壺の状態はわからない。

「それなら、私が花板さんを殴りつけた証拠はどこにあるの？」

「はっ、それこそ明白だぜ！　この中で怪我をしているのはただ一人、花板さん、その和帽子の下、確か包帯撒いてたよな？　頭、怪我してんじゃないのか？」

「花板、帽子を取りな」

「へ、へい、女将さん」

花板が帽子を取るとそこには大仰な包帯が現れる。

その場の全員が息をのんだ。

「あんたが昨夜花板さんと喧嘩になったのは知ってる。それで、あ

んたは花板さんを土蔵に呼び出した。花板さんが朝この土蔵に来たのは偶然じゃねえ、呼び出されてきたんだ。そして、花板さんを背後から――」

「あの、すいやせん」

天龍の推理に口を挟んだのは花板だった。

「あの、あつしは別に中井さんに殴られちゃいけません。そもそもこの頭の怪我は階段から落ちた時にできたもんでして……」

「え？」

「おつとお」

雲行きが怪しくなってきた。

「それに、その、あつしが土蔵に行ったのはその、なんとというか……」

「花板さん！」

何かを口ごもる花板に中井が声をあげて制止しようとする。

「え、なんですか？ なんなんですか？」

「花板、はつきり言いな」

「へい、女将さん。全て話しやす。本当にすいやせん、あつしの、いやあつしらの身勝手な行動のせいで、天龍さんが勘違いしたんでしよう」

「は、花板さん、お願いだからやめて……」

「中井さん、もうしつかり話しやしよう。これ以上あつしらの事情で皆さんに迷惑がかかるのはいけねえ。すいやせんでした、あつしと中井さんは実は、大分前から男女の付き合いを、しておりやす……！」

「男、女の、付き合いい？」

「え？」

その場の全員が絶句した。

唯一中井さんだけは耳まで真っ赤にして顔を手で覆っている。

「実は、最近互いの仕事が忙しくて、その、二人っきりの時間をとれていやせんでした。それで、少し口論になりやして……それで、今日の朝、こっそり土蔵で逢引きをしていたんです。少しでも二人の時間が欲しくて……皆さん、ご迷惑おかけして本当にすいやせんでした！」

花板さんと中井さんは二人揃って頭を下げた。

「え、じゃあ、昨夜のつてただの痴話喧嘩……」

「へい、その通りで」

「……花板、中井。顔を御上げなさい」

女将の声に二人はゆっくりと顔をあげて女将の方を見た。

「別にウチは恋愛禁止なんていう決まりは設けてやしない。それにお前さんらも立派な大人だ。そこらへんは好きにすりゃいい。でもね、仲居と板前、互いにその頭を任されてる自覚はもう少し持ちな。少なくとも、仕事に私情を持ち込むなんざ未熟者のすることさ。あんたら、何年この仕事やってんだい」

淡々と、しかし心に刺さるような厳しい言葉を並べ、女将は二人に背を向けた。

「反省は仕事で示しな、以上」

「へい、すいやせんでした!」

「申し訳ありませんでした!」

「あと、いろは!」

「は、はい!」

「菊の間の布団、たたみ方がなっちゃいないよ! 干し直してきな!」

「は、はい、今すぐ!」

「他も持ち場にお戻り! くれぐれもお客様にご不便をかけるんじゃないよ?」

その女将の言葉が発破となって全員速やかに持ち場に戻っていき、後には大和と天龍、磯風、バイト勇者だけが残された。

「ええ、なんですか、これ」

「おい、どうするよ」

「これは、迷宮入りだな」

「あの、いや、だから、ずつと言ってるつすけど、壺割ったの俺なんですつてば」

——後編に続く。

第七十四話 「犯人は、あなたです」

振り出しに戻されてしまった大和達。

既に行くところもなく、意味もなく土蔵を見ているばかり。

「やっぱバイト勇者なんじゃね?」

「まあ本人もそう言ってるしな」

「……………」

天龍と磯風が諦めムードの中、大和だけが何か一人考え込んでいた。

「どうした? 大和、なんか気になることでもあんのか?」

「ええ、まだ少し……引つかかることが」

大和は今までの会話を思い出す。自分たちは既に現場と容疑者を調べつくしている。ならば、きっとそこに真相を解き明かすヒントは隠れていると確信していた。

『怪我してるのか? いい、やはり私が持っていくよ』

『それで、昨日も皆の前で話したが、私は旅館を代表してお前に壺を持ってくるよう、頼んだね? いろは?』

『今日土蔵から壺を持っていくって聞いてたんで、少し掃除しておこうと思って土蔵に行ったんす。ほら、あの壺ずっと奥にしまってるから埃溜まってるんじゃないかと、それで一旦動かして掃除を…………』

『ええ、あつしも朝の仕込みの最中、偶然土蔵に入っていく中井さんを見かけまして、入口の近くに壺を移動させやした。その時は壺にはヒビ一つ入っておりやせんでした』

『あの壺結構重くて、女一人じゃ厳しいから、花板さんがいてくれて助かったわ。彼がいなかったらバイト勇者君じゃなくて私が割ってたかもしれないわね』

『ええ、そうねえ。最初に見た時はなんで破片が土蔵の奥にあるのかしらって思ったわね』

『ああ、いろはちゃんには特に厳しいわね。やっぱり自分の跡取りだからかしら。おかげであの子、すっかり女将さんには苦手意識を持つ

「てるみたいだけれど」

『あ、そうね、詳しくは女将さんというはちゃんくらいしか知らないけれど、億の値がつくって聞いたわ』

『あ、手伝いますよ。土蔵の横に置きっぱなしのバケツ、私が持ちます。うわ、水凄い真っ黒！どこ掃除してたんですか？』

『ん？今、バケツから何か音が？いや、気のせいですかね？』

『この血のついた小石の周辺からはいくつか小石が抜き取られてた。多分、血痕を隠すために犯人が抜き取ったんだ。そして、同時に壺の破片らしきものも発見した。こいつは重要な証拠だぜ？何故なら、

これは、土蔵の外で壺が割られたことを示す証拠になるからだ！』

『壺は結構な重量があるからな、鈍器としちや十分だったんじゃないか？そして、殴られた拍子に石に血痕がついた。割れた壺の破片は犯人が集めて土蔵の中にばらまいたんだ。真の犯行現場をカモフラージュするためにな！』

「……………なるほろ」

「何かわかったのか？」

「……………いえ、確証はありません。なので、待ちましょう」

「は？」

「へ？」

大和の提案に天龍と磯風は首を傾けた。

☆

じやり、と音が鳴る。

小石の敷き詰められた土蔵の前では足音は隠せない。だが、今、周りに人の姿は見えない。だから、彼は安心して、手に持っている真っ白な小石を茶色くはげている部分に戻そうと手を伸ばした。

「やはり、戻ってきましたね」

彼はびくりと肩を震わせて声の方を見る。そこには土蔵から顔を覗かせる大和達の姿があった。

大和は土蔵から出てきて彼を指さして言う。

「犯人は、あなたです」

その言葉に彼は笑った。だって、それは、彼自身が何度も繰り返し

言ってきたことだったから。

「そうっすよ、俺が壺を割った犯人っすよ。最初からそう言っているじゃないっすか」

「やっぱり、バイト勇者なのか」

「こいつが壺を割ったのか、大和?」

「いえ、違います」

「おいおい、大和さん、ちよつと言ってることはちやめちやじゃね?」

頭を搔く天龍に補足するように大和は言った。

「彼は犯人に違いありません。でも、壺を割った犯人じゃない。事件現場を偽装した犯人です。これは天龍も言っていたでしょう?」

「……ああ、そうだな。壺は外で割られたんだ。その証拠に壺の破片が落ちてたんだからな」

「……いやっすね。それは違うっすよ。その破片は、俺が土蔵の中の破片を集めてる最中に外に落とした奴っすよ」

バイト勇者は大和の主張を認めない。

「では、その小石は? 血痕がついていたのでは?」

「いや、これは泥にまみれていたのを掃除しただけっすよ」

「じゃあ、隣の小石についていた血痕はどう説明しますか?」

「さあ? 誰かが鼻血でも垂らしたんじゃないっすか?」

ああいえばこういう。しかし、それでも理屈が通ってしまうからどうしようもない。

すると、大和は急に狼狽し始めたように頬を搔く。

「あ、あれ、えとじゃあ、どうしましょう」

「おい!」

「あれだけカッコよく決めておいて一瞬で論破されたぞ」

「あれ、おかしいですね。す、すいません、バイト勇者さん、念のため壺を割った時の状況つてもう一度教えてもらえませんか?」

「いいっすよ、まず――」

「あ、すみません、この土蔵の中入って実際に再現してもらえませんか?」

「ん? まあ、いいっすけど」

大和に促されるまま土蔵の中に入り、意気揚々とバイト勇者は奥の壺が元々置いてあった場所に立った。

「この奥に壺が置いてあったのでこれを移動させようと持ち上げたら手が滑って壺が割れたんっすよ。ここら辺に破片も散らばってたでしよ?。」

「本当にそれで間違いありませんか?。」

「ええ、間違いないっす——あれ? なんすか、この空気?。」

天龍と磯風が目を丸くしてバイト勇者を見ている。

その後ろで、大和が確信をもって笑みを浮かべたのが見えた。

「やはり、バイト勇者さんは知らなかったんですね。」

そう、彼は、彼だけが知らなかった。その証言を中井がしていた時、彼はちりとりと箒を取りに行っていてその場にいなかったのだから。

「中井さんと花板さんが土蔵で逢引きをしていたのは知ってますよね?。」

「ええ、そうみたいっすね。まさかあの二人がくつついてるなんて想像もしてなかったっすけど。」

「その時、彼らはただ逢引きをしていただけじゃないんですよ。」
「え?。」

「実はその時、壺の場所を動かしているんですよ。運び出しやすいように、奥側から、入口の近くまで。」

バイト勇者の表情が固まった。やられた、完全に油断していた、そんな思考が脳裏をぐるぐる回っていた。

大和はこのボロを出すのを待っていた。そのために推理を外したかのような小芝居までいれて油断させて、そしてついに決定的な証拠を引きずりだした。

「おかしいですね、バイト勇者さん。あなたは確かに奥に壺が置いてあったと言った。しかし、実際には壺は入口付近に置いてあったんですよ?。これは一体どういうことでしょうか?。」

「……………」

「中井さんも不思議がってましたよ。破片が何故奥の方に散らばってるのかって。理由は明白です。その破片が意図的にそこにばらまか

れたもので、かつ、その犯人は壺が入り口付近に移動されていたことを知らなかったからです。だから、奥に破片をばらまくのが自然だと思っていたんです」

みるみるうちにバイト勇者の表情が歪んでいく。

「本当にあなたが壺を割ったのなら、変わった壺の位置を見て知っていた筈。それを知らなかったということはつまり、あなたは壺を割っていない。あなたが見たのは壺が既に割れている状態だったということになるのです」

「おお、おお、そうか！」

「なるほろな」

天龍と磯風が感心したように頷いている。大和はさらに続ける。

「土蔵の中で壺が割れていればあなたが破片を奥に動かしてしまうような失敗はしなかったでしょう。あなたは、土蔵の中で壺を移動させた際に割ってしまったという設定で犯人を演じた。ですから、土蔵内に破片が散らばってる限りはそのままにしておいて問題はないはず」
「だが、破片は不自然な位置に移動させられていた。バイト勇者には破片を動かす必要があった訳か」

「裏返して、壺の破片が土蔵の外に散らばってたことになるな」

「あなたは、壺を割った犯人を庇ったんですよね？ 犯人が誰か、わかってしまったから」

「……………」

「壺が割れているのを見ただけなんだろう？ それだけで犯人がわかるもんなのか？」

天龍の疑問に、大和は首を縦に振って返した。

「ええ、壺が土蔵の外で割れていた場合に限って、その犯人は一人しかありえないんです」

女将は彼女に旅館を代表して壺を取りに行くよう言いつけた。

ならば、壺を土蔵の外に運び出す人間は一人しかいないのだ。

「若女将、いろはさん、ですよね？ 壺を割った犯人は」

「……………全部、お見通しなんすね」

「いろはさんは特に女将さんから厳しく指導を受けていた。その過程

で女将さんは恐怖の象徴にすらなっていたかもしれませんが。そんな時、女将さんから持つてくるよう言いつけられた壺を割ってしまった。女将さんの厳しさと壺の価値を知っていた彼女にとってこれがどれだけの恐怖なのか、理解には及びません」

もしかしたら彼女は殺されるとまで考えていたかもしれない。

一概に、逃げた彼女を責めることもできない。

「彼女は慌てて壺の破片を拾おうと手を伸ばし、そこで指を切ってしまった。小石の血痕はその時のものでしょう。彼女、指を怪我してましたし。さらにパニックになった彼女はもうその場から逃げるしかなかった。そして、その後、あなたがやって来た」

「……あの時、客間の掃除を頼まれて、土蔵の方からショートカットしに来たんす」

「そして、全てを察したあなたは彼女を助けるため、偽装工作を始めた」

壺の破片を土蔵の中に移動させ、血の付いた石を回収した。

ただ、急いでいたからか、破片を一欠片回収しそこね、小石も自然に抜けたまま放置し、隣の小石の僅かな血痕には気付けなかった。

「あなたの作業衣にはポケットがないですし、石はあの時持ってたバケツの水の中に沈めて運んでたのでは？ あれだけ黒く濁った水の中なら底まで見えませんし」

「ええ、中々血が落ちなくて苦労したつすよ」

バイト勇者は自嘲気味に笑った。

「そして、最後の仕上げにちりとりと箒を持って皆の前で自供。ほぼ完璧ですね、普通これで真犯人に気付く人はまずいないでしょう」

「気付かれたつすけど」

「そいつは俺達が相手だったからな」

「ふ、運がなかったな」

「なんであなた達が得意げなんですか？」

胸を張る天龍達を横目で睨みながら、土蔵の外に出て、案の定そこに立っていた少女に大和は声をかけた。

「どうです？ 合ってますか、私の推理？」

「はい、全くもって、その通りです」

「いろは……」

「ごめんね、私のせいでバイト、クビにまでなっちゃって……私、そんなつもりじゃなかったのに……」

「いいんつすよ。俺がクビになるだけで済むんなら、それが最善だと思っただんす。女将さんは厳しい人つすから、犯人がいろはだつて知つたら勘当されちまうまであるつて思っちまつたんすよ。それだけは嫌だから、俺のクビ賭けてでも避けなかつて思つて……」

「二昔前のウチの監察艦みたいな口ぶりを……」

以前の矢矧とのいざこぎを思い出して大和は呆れたようにため息をつく。

「ごめんなさい……ごめんなさい……!」

いろはは今にも泣きだしそうな程目に涙を溜めている。

大和はそんな彼女に優しく笑いかけた。

「大丈夫です。今からでも女将さんに真実を話しに行きましょう」

「……え?」

「大丈夫です、私達がなんとかしてみせます!」

少し不安げな表情で俯いていたが、大和の言葉に顔をあげ、いろはは強くうなずいた。

☆

「——というのが今回の真相です」

「すみませんでした!」

「お、御婆様、申し訳ありません……!」

この経緯を話し、畳に頭を付ける二人。

それを、女将は静かに見下ろしていたかと思うと、笑いながら大きくため息をついた。

「あのね、そんなこととつくに知ってるよ、お前さん方」

「え!」

「バイト、お前さんね。土蔵にバケツと雑巾もつて掃除行く奴があるかね。土蔵つてのは湿気から物を守るためにあるんだ。濡れ雑巾なんざもつてのほかだらう」

「あ」

「ああ、なるほろな」

「なるほろ、確かに」

「なるほろですね」

「だから、こいつが嘘ついてんのはすぐわかった。お前もだよ、いろは」

「え、あ、はい!？」

「今ここにお泊りになってるお客様は皆昔馴染みの常連さんだ。島のことなんざあんたより知ってる方々ばかりさ。わざわざ島の案内なんて頼まないよ」

横からチーズをかつさらわれたネズミの気分だった。

「こんなの、最初から探偵などいらなかったのだ。女将さんは最初から全部お見通しだったのだから。」

「まあ、このまま今日中にどっちも頭下げに来ないようなら二人とも追い出してたがね。気が変わった、お前さんのクビは取り消しだ。残りも頑張んな」

「え!？ 本当ですか!? ありがとうございます!」

「あの、御婆様……」

「いろは、歯を食いしばんなさい」

「……はい」

「待ってください!」

いろはに手を上げかけた女将を大和が制止した。

「今回の件は、女将さんがいろはさんを追い詰めすぎたことも原因の一端なのでは?」

「……だからって人様に罪をなすりつけて許されるってもんじゃありません」

「ならせめて手をあげるのはやめてあげてください。全部が全部、彼女が悪い訳じゃないはずですよ。あの壺、女手一つでは厳しいって中井さんも言っていましたよ」

「……………」

しばらく女将と大和の間で睨み合いが続く。

一分が経った頃、先に女将が折れた。

「わかりました。大和さんがそこまで言うなら折檻はよしませう。いろは、反省は仕事で示しなさい」

「は、はい！」

「二人とも下がって仕事に戻りな。もうじき夕飯時だ。忙しくなるよ」

その声と共に二人は安心した表情で女将の部屋を出て行った。

残ったのは大和達と女将だけ。

「……今回はとんだご迷惑をおかけしました」

「いえ、こちらこそ。内輪の事情に土足で割り込んで申し訳ありませんでした」

「ふふ、それじゃ、今回は両成敗ということで手を打ちましょうか」

「ええ、そうですね」

初めて女将がここまで和やかに笑ったのを見た気がすると、三人は思った。

まるで、二人を追い出さずに済んで良かったと安堵しているかのような表情だ。

「あ、そうだ。一つだけわからないことがあるんですが、聞いてもいいですか？」

「なんです？」

「女将さん、バイト勇者君にもいろはさんと同じくらい厳しく当たってたって聞いたんですが、何故です？」

それを聞いて、女将はニヤリと意地の悪い笑みを浮かべて言った。「それは、なにせ可愛い孫娘が見初めた男ですから、どんな程度のものかと気にもなりませんし、骨があるようなら将来困らないよう今からしっかり育てておくのは老婆心でございませう？」

その予想外の返答に三人は絶句した。

「つまり、婿いびり……」

「まったく、なんて婆さんだよ……」

「じゃあ、嫌いできつく当たってたんじゃないんですね？」

「ええ、勿論ですよ。私は気に入ってる輩には厳しく接してしまう性

根なものですね。今回の件もある意味では良かったと思ってます。あのバイトの全部を肯定する訳じゃありませんがね、私は案外嫌いじゃないですよ？ 身を挺して女を守ろうっていう男気は」

女将は着物の袖で口元を隠しながら、それはもう実に楽しそうに笑っているのだった。

天龍編

第七十五話 「……天龍ちゃん、よね？」

私の中で正当なる怒りが燃え盛っていた。

「——第一から第四区画まで今すぐ閉鎖しろ！ 区画内の職員の避難は待たなくて構わん！」

「駄目です！ 第四区画、隔壁突破されました！ DW-1、さらに加速して第三区画を進行中！」

「やはり、人間用の隔壁では時間稼ぎにもならんか……！」

「このままでは一時間持たずに地上へ到達します！」

「ならぬ！ なんとしてでもそれだけは防ぐのだ！」

既に戦闘員らしき職員は全員片づけた。他の職員は誰もかれも私を恐れて震えるばかりだった。涙を流してみつともなく命乞いまで始めた者までいた。

普段、白衣をまとって冷たい目で私を見つめる彼らを知っている身としては随分と滑稽に見えて、笑いすらこみ上げる。

「——現時刻をもって第二、第三区画を放棄！ 二区画をガスで満たせ！」

建物の中を歩いていると、少し、肌がひりついてきた。意識もぼうつとして、息もしにくくなって、気持ちが悪い。

だが、それも私の足を止めるほどの障害ではない。

「……駄目です！ 催眠性、神経性、糜爛性、いずれも効果ありません！ 目標の速度、尚も上昇中！」

「化け物め……！」

「DW-1、第一区画に到達します！」

きつとあと少しだ、ほのかに潮の香がする。私達の海の匂いがする。

「ひっ……！」

「ついに、ここまで来させてしまったか……！」

管制室らしい様々な機器とモニターで埋め尽くされた部屋に、数人

のオペレーターと恐らくはこの施設の最高責任者らしき軍服の中年男性が私を睨みつけているのが見える。

「ここで貴様を地上に出すわけにはいかん、陸軍の威信をかけて、この私が差し違えてでも貴様を殺す！」

それが銃を構えた男の最期の言葉だった。

そして、私は解放された。

どうやら地下にあったらしい、その施設を脱出した私の目の前に雄大な海が目の前に広がっている。成程、潮の香がしたのはここが港の倉庫にカモフラージュして作られた研究所であったためなのだろう。

あまりの喜びに頬の緩みより先に目から涙が流れてくる。

「ああ、これでやっと、帰れる……待っててね、天龍ちゃん」

私は最愛の彼女の名前を呼んで、海面に足をつけた。

☆

「——では、次の議題は前回保留のままとなった軍事予算についてだが」

「儂からは前回通り、陸軍の予算縮小、海軍の予算増額の案を推す」

大本営会議。その場で誰よりも強大で禍々しいオーラをまき散らす老人は悪辣な笑みを浮かべながら予算案を提示した。

軍令部長、またの呼称を海軍元帥。かの横須賀艦隊の提督である。

「今の戦争には海軍の力のみであれば良いことは儂がこの椅子に座ってから幾度となく論じた主張。それは諸君らもよく知っている筈じゃな？　ここで海軍の挙げた戦果の数々を語るのも良いが、いささか陸軍には耳の痛い話であろうから今更言わぬ。当然、異論はない筈であろうな？」

例えるならば虎。彼が言葉の終わりと同時に視線を周囲に向ければ誰もが目を伏せて何も言わない。

否、一人だけ、この状況の中、元帥に反論の声を真つ向からあげる者がいた。

「陸軍としては、海軍の意見に反対である」

陸軍、参謀総長であった。葉巻を啜えた小太りの狸を思わせる風貌の初老の男性は張り付いたような笑みを浮かべて元帥と真つ向から

睨み合う。

「ほう？ 他ならぬ陸軍から声が拳がるとはな」

「ほっほっほ、いやいや、実際反対という程のものでもありませんがね。ただ、我らがまるで何の戦果もあげぬただ飯食らいのように表現されては、こちらでも面子が立ちませぬのでね、少しばかり訂正をと」
「訂正する場所などあったか、何の戦果もあげぬただ飯食らい」

両者の睨み合いにますます場の緊張が高まる。最早、元帥と参謀総長以外の発言など許されない空気。

誰もが冷や汗を滲ませながら二人の行く末を見守っている。

「ほっほっほ、聞いておりますよ。ここ数ヶ月、突発的に発生する深海棲艦の近海出沒。いくらか手を焼いていらつしやるようで」

「……………」

「例えば、舞鶴鎮守府の方では、主力が遠方へ出撃していたために対応にいささか遅れが出たとか。その際、我が陸軍が深海棲艦の撃退や住民の避難にいくらか貢献したと報告が来ていますよ？」

「ふん、あそこの提督がたるんでいただけのこと。横須賀であのような失態は起きぬ」

「ほう、陸軍はたるみなどあり得ませぬがな」

元帥の眉間の皺が深くなる。

「さらに、佐世保の方では陸軍との共同作戦にて突発的な深海棲艦の出沒に対応したとか」

「…………海老名、あの馬鹿め」

元帥も流石にこれには嘆息を禁じ得ないようで、参謀総長の笑みはますます深まる。

「まあ、海軍の方々は日々深海棲艦との戦いでお疲れになっているのでありましようなあ。少しばかり隙ができてしまうのも致し方のないことでしょう。なればこそ、我らがその隙を埋めて差し上げようと思いますが、いかがか？」

「不要だ」

「そうは言われましてもな。現状はやはり海軍だけでは万全とはいかないのでは？ 海軍の方には深海棲艦に勝つことだけでなく、国民の

安全も考えていただきたいものですか」

議論は完全に陸軍側のペースだった。

「どうでしょう。陸軍の意見としてはですな。今の問題が解決するまでは予算はこれまで通り現状維持としたいのですがな」

陸軍の予算縮小も海軍の予算増額もなし。同額の予算で決定する形に収まろうとしている。それは元帥の意見とは完全にそぐわぬ形である。

「……………ふん、狸め。思惑通りに事が運んで相当に機嫌が良いと見える」

「どういう意味でしょう?」

「儂がこの件について何も気づいておらぬとでも思ったか? これまで起こった突発的出没の記録。深海棲艦出没から陸軍の出動まで、どう考えても対応があまりに早すぎる。まるで、深海棲艦が出現する場所とタイミングを予知していたかのようだ」

「我々の日頃のたゆまぬ鍛錬の成果と受け取っていただきたいですな」

「貴様ら、裏で何をやっておる?」

「ほっほっほ、何の話やら」

参謀総長の表情は常に笑顔で何も読み取れない。

元帥が痺れを切らし始めたその時であった。

突然、勢いよく会議室の扉が開かれた。

「愚か者、会議中だ!」

元帥の怒号に、入ってきた軍服の青年は体を強張らせて直立する。

「も、申し訳ありません! 参謀総長殿に緊急の伝令です!」

「おやおや、緊急とは何事でしょう」

参謀総長は青年に近づき伝令の書状を受け取りその内容に目を通す。

その時、一瞬彼の眉がピクリと動きを見せたのを元帥は捉えた。

「……………失礼、本会議はここで中断とさせていただきます。続きは次回の会議でお願いいたしまする」

その言葉を最後に、半ば強引に会議を中断させ、参謀総長は席を

立ってしまった。

「ふむ……成程な」

そして、その姿を見て、元帥はニヤリと笑みを浮かべるのであった。

☆

「——そんな訳で、この前は陸軍との共同作戦があつて後処理でちよつとごたつてゐるんでちよ。しばらく出撃もなく、久々の休日つてわけでち」

「へえー、突然深海棲艦が出没ねえ」

「しかも鎮守府近海につてせつこいわねー」

「いや、本土の方は大変なんだな」

「お前ら他人事じゃないでちからな!」

今日は七丈島鎮守府に伊58がやってきていた。

「それにしても、海老名大將は陸軍の方とは仲がいいのね？ 上の方は結構陸と海で対立が激しいつて聞いていたのだけれど」

「あー、他の所は割とそんな感じのとこばつかかももしれないでちなあ。海老名ちゃんは例外でち。何故かくつそ仲良いでちよ。普通に共同作戦の後皆で宴会やつてたでち」

「いいことじゃないですか」

陸軍と海軍の競争意識を発端にした対立は今に始まったことではなく、上層部ではかなり根が深い。

今のところ海軍のお荷物的評価を払拭しきれない七丈島鎮守府の提督でさえ、陸軍の士官にはキツイ当たりをされてしまうというのだから佐世保鎮守府のその現状には目を見張るものがある。

「そういえば、ここには憲兵つていないでちな」

「ああ、確かにな」

「こんな平和な島に来たところであ。やりがいもねえし、何よりあの提督じゃなあ」

「暇になるでしょうねえ」

あの提督が海軍懲罰令に引つかかるような不祥事など起こしようがないという確信がその場の全員にあつた。

「そういえば、お前らここには予備戦力で集められてるんでちな」

しばらく時間が経過した後、唐突に伊58が口を開いた。

「おう、そうだな」

「まあ、犬見の主力艦隊を相手にあっさり勝利して見せたあの腕前からお前らが強いことに疑いは持ってないでち。で、ちよつと気になったんでちが、七丈島鎮守府で一番強いのもって誰でちか?」

即座に天龍が自信満々の笑みで手をあげた。

「やっぱ俺だろ!」

「え、天龍が? ないわー」

「天龍は正直私も一番ではないと思うぞ」

「天龍? なんで? 一番はお姉さまだよ?」

「い、いや、私そもそも戦えませんから!」

「それはそれとして天龍はないわね」

「お前ら」

ほぼ全員からことごとく否定の言葉を浴びせられ、天龍は割とショックを受けていた。

「特に根拠なく自分で最強名乗るとか大体死亡フラグよ」

「ああ、倒された後に他の四天王から『ククク、奴は四天王の中でも最弱』とかいわれちゃう奴ですわね」

「四天王って誰だよ!? それに根拠ならあるぜ、『O^{オー}・C・E^{シヤ}・A^ン・Nランキング』だ!」

天龍が聞きなれない単語を叫ぶが、それに反応していたのは矢矧と伊58だけであった。

「え!? 何、お前ら知らねえの!? 艦娘なのに!」

「何それ」

「聞き覚えがないな」

「聞いたことありませんね」

「私もお」

「海戦における深海棲艦制圧能力ランキング。略してO・C・E・A・Nランキング。要は全艦娘を個人の戦闘力で序列付けしたものでよ」

対象となるのは各国の大本営データベースに集められた艦娘の個

人戦果。それらのデータを元に艦娘個人の深海棲艦制圧能力を数値化し、統合して、序列をつけたものである。

「へえ、そんなものがあつたんですね」

「一般公開されてるでちから誰でもネットから見れるでちよ」

そう言いながら伊58はどこから取り出したのかスマホを操作し始める。

「まあ、艦娘の技術は日本が先駆けでち、やっぱランキング上位は日本の艦娘が独占って感じでちな」

「一昔前まではWar spiteとかBismarckとか海外勢でもすげえ奴らがいんだがな」

「で、それに私達はあるんですか?」

「……いないでちな。ランキング圏外でち」

伊58はフリック操作をしながら呟く。それに天龍が大げさにテールを叩いて抗議する。

「はあ!? そんな訳ねえだろ! そりゃここ数年は戦果0だろうが、ランキング自体に載ってないはずはねえ!」

「いや、除外されてるのよ、私達七丈島鎮守府の艦娘はね。当然でしよう? 罪艦なんだから」

「まあ、そりゃそうよね」

「じゃあ8年、いや、10年前まで遡れねえか!」

天龍が必死に食い下がる。

「めっちゃ必死だな、天龍」

「舐められたままじゃ納得いかねえ!」

「毎年更新でちから、10回前のランキングを見れば……お、でた、うえ!」

伊58が呆れたように10年前のランキングを検索していると、突然、目を見開いて大仰な声をあげる。

「どうした、伊58。なにかあつたのか?」

「い、いや、天龍って10年前は舞鶴にいたんでちか?」

「おう、そうだけ?」

「じゃあ、多分間違いないでちな……」

「え、なんですか？ 天龍載ってたんですか？」

伊58が未だ信じられないという顔で大和達にスマホ画面を見せる。

そこには――

「はあ!?! 天龍が9位い!?!」

「嘘だろ、天龍」

「にわかには信じがたいわね」

「いや、これ別の天龍じゃないんですか？」

「お前ら、ぶっ飛ばすぞ」

全く信じていない七丈島艦隊の面々の反応に天龍は拳を固め始めた。

「わかったか？ 俺は結構強いんだぜ？ お前らにはそうは見えてなかったみてえだけどな！」

「いや、まだ信じてないから」

「ドツキリなんだろ、天龍？」

「正直にいいなさい。不正したんでしょ？」

「いや、だからこれ別の天龍じゃないんですか？」

「よーし、お前ら歯を食いしばれ」

結局殴りかかろうとした寸前に矢矧がスタンリングを起動して天龍の拳骨は不発に終わった。

「お前らもういいわ！ 釣り行って来る！ バーカーカー！」

「うわ、涙目ですっごい拗ねてますよ？ いいんですか、あれ？」

「バーカーカーって、ウケるわあ」

「夕飯の時間には機嫌直ってるわよ、どうせ」

「そうだね！ 天龍だしね！」

「では、今日は天龍のために私が腕を振るわせてもらおうか！」

「積極的にトドメ刺しに行くのはやめて差しあげろでち」

特に心配もされない天龍の扱いに、信頼の裏返しなのか、普通に仲が悪いのか困惑する伊58であった。

☆

「――つたくよー、なんで俺はあいつらにあんな舐められてんだ？」

結構バトルでは活躍してんじゃんよー、チクショー。いつそ昔みてえに髪伸ばすか？」

最初こそ釣り糸をたらしながら一人で恨み言をぼやく天龍は、しかし三十分も経つ頃には既に怒りも消え失せていた。

「はー、しっかし、今日もいい天気だぜ」

流れる雲をぼーっと見つめながら天龍はおもむろに左目の眼帯をとる。普段眼帯で覆われた左目周辺に潮風があたり、少し気持ちがいい。

天龍の左目はとある事件以降、盲目となっている。

光を映さなくなった左目に手を伸ばせば、いまだ抉れた古傷が残されているのが感触でわかる。それは鋭い刃物で斬りつけられたような古傷に見えた。

「平和だねえ。平和過ぎて怖いくらいだぜ」

ふと、耳に届いたのは、数人の男達の声。声の方に視線をずらしてやると、漁師達が集まって何かを話しているようだった。

釣り糸に獲物がかかる気配もなく、退屈していた天龍は眼帯をつけなおすと、漁師達の方に向かって手を振りながら歩み寄る。

「おーい、漁師のおっさん、なんかあったのかよ？」

「おう、天龍！ 実は漁に出てたらとんでもねえもんが網にかかっちゃまってな」

「とんでもねえもん？」

「――天、龍？」

ふと、漁師の誰とも違う琴線を弾いたような高く、美しい声色が聞こえた。

それは漁師達の集まっている中心あたりから聞こえてきたかと思うと、彼らを押しのけて、天龍の前に姿を現す。

「……天龍ちゃん、よね？」

「お前……!?!」

天龍と同じ紫がかった黒の髪と同色の瞳。それは、天龍型の艦娘に共通する特徴。

天龍と異なるのは、髪はセミロングで、両目は眠たそうな垂れ目気

味の半眼、左頬に泣きぼくろがある点。

何より、彼女の右腕の火傷跡。

天龍にとってそれは見間違えようなない人物だった。

「龍田……！」

「あゝ、やつぱり天龍ちゃんだあ。久しぶりね〜」

龍田と呼ばれた彼女は驚く天龍に向けて嬉しそうな笑顔を見せた。

第七十六話 「Si, Signore」

『いや、全く、とんでもないことをしでかしてくれたわね、参謀総長殿？』

豪華な装飾があしらわれた薄暗い一室。その中央に無造作に置かれたラジオ型の通信機から流れる変声機で加工された声に、参謀総長はビクリと肩を震わせ、冷や汗を垂らす。

通信機の声は参謀総長の返事を待たぬまま、続けて言った。

『D W ー1はアタシの貴重な実験サンプル。それを色々と協力してもらっている恩義であなた達陸軍に預け、研究を許してあげていたのに。まさか、そのサンプルを逃がしてしまうなんてね』

「返す、言葉もありませんなあ……」

参謀総長の力のない返答に通信機の向こうからため息が聞こえる。

『それで、どうするの？ D W ー1が公の元に晒されるようなことがあれば、あなた、完全に終わりよ？ それに、今あれが日の光に当たるのは、アタシの方にも多少なりとも都合があるのだけれど？』

「重々承知しておりますよ。そのために、生体内マーカーなどという金のかかるものまで付けて万全の監視体制を整えてきた。特務小隊を編成した後、可及的速やかに回収いたしまする故、ご安心ください」
僅かに余裕が戻る参謀総長の声に、彼が言う特務小隊に少なからず自信があることは通信機越しにも読み取れた。

『特務小隊、ねえ……』

「陸軍特務部隊、通称『蜻蛉隊』^{トンボ}。我が陸軍の精鋭三十名からなる非公式小隊です。戦力的にD W ー1に遅れをとる心配はないかと」

『そう、期待させてもらうわ。ところで、その隊にもう一人加えて欲しい子がいるのだけれど頼めるかしら？』

「おお、ご助力を頂けると？」

『一人元気のあり余ってる子がいてね。折角だから貸してあげるわ』
「ほっほ、それはありがたい。では、その三十一名で隊を編成させてもらいましょう」

通信機からの申し出に、参謀総長は嬉しそうに顔を綻ばせた。

「これは良い報告ができそうですね」

『とにかくD W—1の確保、それができないなら処分。それだけはなんとかしても完遂して頂戴。頼むわよ?』

そう言つて、通信は一方的に切られた。

今まで笑みを浮かべていた参謀総長は険しい顔つきで、既に物言わぬ通信機を睨みつけた。

「ふん、鏑木美鈴め。誰のおかげで今日まであの元帥の目をかいくぐつて生きていられると思つておるのやら」

かの女性の名を忌々しいといわんばかりに腹立たし気な口調で洩らすと、ふと思案にふけるように顎に手を当て、苦い顔を浮かべた。

「しかし、彼女の助力を得られたとは言え、問題はあの元帥がどう動いてくるか……」

以前の会議では随分と怪しい挙動を見せてしまった。あの老人からしてみれば余りに大きな失態と言わざるを得ない。既に目を付けられているも同然。

彼の介入が参謀総長にとって一番の懸念であった。

☆

「へえ、磯風が963位ねえ、演習だけしか戦果ない癖にかなり高順位じゃない」

「矢矧は途中から番外になつてるな」

「その頃はもう渡りの艦娘になつてたからね、大本営データベースに戦果は記録できないのよ。存在が規定違反みたいなものだから」

矢矧の言葉に、磯風が顔を曇らせる。

「艦娘は鎮守府の所有物、だからな。特定の鎮守府に留まらず、非公式に不特定多数の鎮守府での役務は許されない、か」

「違うわよ、単に尻軽は嫌われるって意味よ」

「誰が尻軽よ!?!」

「大和はどここの鎮守府いたんでち? ランキング気になるでち」

「え、私ですか?」

「はいはい! 私も気になるうー!」

矢矧と瑞鳳が口喧嘩を始めた他所で、伊58とプリンツが大和に向けてタブレット片手に目を輝かせて尋ねる。

しかし、反対に大和は申し訳なきように頬を掻いて、呟く。

「……えーと、ですね。私、覚えてないんですよ、実は」

「え？」

場の空気が凍ったように静まり返った。

「覚えてないってどういうことですか？」

「ええ、ちよつとここに来る以前に色々ありまして。その時の後遺症で過去の記憶が断片的になくなってまして……以前いた鎮守府の記憶はちよつと思いい出せなくて」

「初耳なんだけど」

「あれ、言ってますませんでしたっけ？」

「……………」

「どうしたの、プリンツ？」

「ん!? い、いや、なんでもない!」

顔を伏せたプリンツを心配そうにのぞき込む矢矧に、プリンツはめいっぱいの笑顔で手を振って答える。

しかし、内心では以前見た、大和のことが気にかかっていた。

『あなたは誰なの?』

『言つたでしょう? 私は大和です。そして、あなたの良く知る私も大和。どちらも大和でどちらかが欠けても大和ではない、そんな感じですよ』

(あれが、何か関係してるのかな……?)

「——おー、ただいまーっつと」

プリンツの思案を遮るように食堂の扉が開き、天龍がすっかり元の調子に戻って帰ってきた。

「あら、天龍早かったわね。もう少し拗ねてると思ってたわ」

瑞鳳がニヤニヤと笑みを浮かべて天龍をからかう。

いつもの天龍なら瑞鳳に噛みついていくところだが、今日の天龍は少し困惑した様子で頭を掻きながら、

「あー、いや、まあ、その色々あつてな。ちよつと報告してえことがで

きて帰ってきた」

と歯切れ悪く、天龍は背後に立っていた彼女をその場の全員に見せるように一歩横にずれた。

「ここが天龍ちゃん今の鎮守府かしら〜？」

「誰!？」

それから天龍からもろもろのいきさつを聞いて、七丈島鎮守府の面々と伊58は大きく息をついた。

「——この七丈島鎮守府に流れ着いた、ですか」

「なんかどつかで聞いた話だな」

「おい磯風、なんで私を見るでちか」

「で、どこの鎮守府から来たのよ？」

「うーん、それは答えられないわねえ〜」

矢矧の質問に龍田は笑顔で答えを拒否した。

「だって、私の最後の記憶から、なんだか随分時間が経っちゃってるみたいなのよねえ、十年くらい?」

「え、それってつまりは」

「記憶喪失ってやつかしら〜」

「……………」

「おい、お前ら、私を見るのやめろでち!」

伊58とのファーストコンタクトにデジヤビユを覚える大和達であった。

「それで、もしかしなくても二人は知り合い同士なのよね?」

「ええ、今から十年くらい前になるのかしらあ? 天龍ちゃんと私は同じ舞鶴鎮守府にいたのよ」

「へえ、そんなお二人がこんな形で再会なんて凄い偶然ですね!」

「じゃあ舞鶴にいた頃の天龍を知ってるのか」

「ランキングの件についても真偽がはつきりするわね」

「お前ら、まだ信じてなかったのかよ!」

依然、元ランキング9位であった事実を信じていない瑞鳳達に天龍はため息をつく。

その様子を見て龍田は嬉しそうに笑った。

「天龍ちゃん、ここの鎮守府ではうまくやってるのね。私、凄くほつとしたわ」

「む、昔とはちげえよ!」

「昔は違ったのか?」

「天龍ちゃん、舞鶴にいた時は友達なんて一人もいなかったのよ?」

「ぼっ! 何言ってるんだ、龍田!」

楽しそうに話し始める龍田の口を慌てて閉じる天龍だったが、時すでに遅く、見れば口元を抑えてニヤニヤを抑えきれない瑞鳳の顔が見えた。

「ぼっちの天龍」

「ぶはっ! ちよ、磯風、真顔でそういうこと言うのやめて! お腹よ

じれる!」

「髪も今みたいに短くなかったわよね」

「え、天龍ロングだったんですか!? 何それ、みたい!」

「大和くらいの長さあったわよお」

その言葉に人一倍反応したのは矢矧だった。

「嘘でしょ! 二日に一回しかお風呂入らないうえにトリートメントとシャンプーの違いもわかってないそんなズボラな性格で、ロングヘアーとか無謀過ぎでしょ! 絶対寝癖まみれのパッサパサだったでしょう!」

「そんなことねえよ!」

「そうよ、パッサパサっていうよりはボツサボサよねえ? 酷い時は

スーパーサイヤ人みたいに——」

「龍田、ちよつと黙っててくれ!」

「サイヤ人て! ひー、死ぬ! 笑いすぎて! 死ぬ!」

「瑞鳳、てめえ、言い残す言葉はそれでいいんだな!」

「ここはいつ来ても賑やかでちなあ」

食堂の喧騒はその後数時間おさまりを見せなかったと言う。

☆

「つーわけで、提督。龍田拾ったからしばらくウチに置いていいか?」

「そんな、猫拾ってきたから飼っていいみたいに言われましても……」
「私を飼ってにゃくん」

「飼ってにゃくんて」

とりあえず一段落ついて、執務室で提督の判断を仰ぎにいった天龍と龍田を提督は複雑な表情で迎えた。

「ええ、どうしましょう。以前こんな感じでOKして私殺されかけたんですよねえ」

「伊58のことはもう言ってやるな。意外と傷ついてんだよ、あいつ」「うーん……」

提督は天龍の隣でニコニコと人懐っこい笑みを向けてくる龍田を見て言った。

「漁師さんに助けられたと聞きましたけれど、艀装はなかったんですか?」

「ん、そういやなかったな?」

「あらく? そうねえ、いつの間にとつかいっちゃったのかしらあ?」
「そんな状態でよく生き残りましたね……」

艀装のない艦娘は絶対のカナヅチだ。故に海上で艀装を失うことはほとんど轟沈と同義なのだが、実際助かっている所を見ると本当に運が良かったとしか言いようがない。

「まあ、今回はスパイ送られるような因縁のある方も心当たりありませんし、本当に海で遭難して記憶喪失、ということなんでしょうかねえ」

「提督、もしかして伊58の件意外と根に持ってるのか?」

提督の警戒度が妙に高い。気づいていたとはいえ、伊58に暗殺されかけるといえるのは実はそれなりに冷や汗ものだったのかもしれない。

「多分しばらくしたらどつかの鎮守府から搜索要請あがってくるだろう」

「まあ、いいでしょう。どちらにせよ私、これから数日鎮守府離れますから、そこら辺の処理とかどうせできませんし。しばらくここに居てくれた方が私的にも都合良いかもしれません」

「やったあ、提督、ありがとうございます〜」

「ん？ 提督、どっかいくのか？」

天龍の質問に提督は一枚の電報を見せる。

「呼び出しです、元帥から」

「元帥から!？」

「後で全員を集めて説明しますが、正直いつ戻れるかも検討がつきません。なので、それまでの間、龍田さんのお世話は拾ってきた天龍が責任をもつてよろしくお願いしますね？」

「そんな自分で拾った猫なんだから責任もつて世話しろみてえに」

「天龍ちゃん、よろしくにゃん」

「よろしくにゃん、じゃねえよ」

「はいはい、とにかく滞在許可は出しておきますので、龍田さんはもう下がっていいですよ。あ、天龍はまだこのまま残ってください」

そう言つて龍田だけを執務室から退室させた後、提督は顔をしかめて天龍に尋ねた。

「左頬の泣きぼくろ、右腕の火傷跡、あなたから聞いた彼女の特徴と一致しますが……まさか、他人の空似ですよね？」

「……あいつは、舞鶴にいた頃の俺を知ってた」

提督が息をのんだ。

「馬鹿な、だつて彼女は……」

「俺にもよくわかんねえ。あいつには十年前から先の記憶がねえみたいだからな、何があったのか聞きようもねえ」

天龍の声は少し震えていた。

「十年前、俺はあいつを殺した。そこから一体何があつて生き残ったのか、見当もつかねえよ」

「……………」

「提督、見たか？ あいつ、ちゃんと、艦娘だったよ。ちゃんと、生きてた……………」

天龍の表情は笑顔だった。しかし、その目からはダムが決壊したかのように涙が絶えずあふれ出していた。

「良かった……………」 本当に良かった！ 俺は、あいつを、殺してなかつ

た！」

「天龍……」

良かった、と何度も繰り返し、むせび泣く天龍を見て、提督は喉元まで出かけていた言葉を飲み込み、何も言わずに彼女の頭を撫でてやっていた。

☆

「——さて、急な呼び出しですまなかつたわね」

執務机に両手を組んで置き、朗らかに笑う女性はそう言って、扉を開けて入ってきた甘いマスクをした黒髪の好青年に声をかけた。

「いえ、上司かつ、それが美しい女性からの呼び出しとあらば、僕は深海棲艦に襲われている最中だったとしてもすぐにあなたの元に駆けつけてみせますよ」

青年はそう言ってキザつたらしくその場に膝をついて胸に手を当てて敬礼して見せる。

「はい、ありがとう。たった今、日本ジャッポネに潜り込ませた諜報員から連絡があつたわ。DW-1の居場所がわかつたみたいよ」

DW-1の単語を聞くと、即座に青年は立ち上がって、真面目な表情に変わる。

「では、本格的に我々が動く時が来た、という訳ですね」

「ええ、現在我が国では艦娘、深海棲艦双方の研究とも諸外国には差を付けられているのが現状。なればこそ、追いつくにはそれらの最先端をゆく日本の研究を横取りするのが手っ取り早い」

女性は悪人のような笑みを浮かべて続けた。

「奪つて来なさい。日本の深海棲艦研究の成果、DW-1を」

「Si, Signore」

「よろしい。この作戦中、君の名前はエドモンド・ロツソ。所属はイタリア海軍、階級は少将よ。二人とも、入ってきて」

女性の言葉の後、すぐに扉を開けて入ってきた二人の少女を見て青年は声をあげた。

「セレーネ！ プリシラ！ 君達もこの作戦に？」

「ええ、そうよ。でも残念、今の私はセレーネじゃなくてイタリア海軍

重巡洋艦艦娘 Z a r a よ、エドモンド・ロツソ提督？」

「お久しぶりでえす、プリシラ改め、イタリア海軍重巡洋艦艦娘 P o l a で〜す」

「エドモンド・ロツソ少将。君はこの重巡洋艦艦娘ザラとポーラを連れ、日本へ友軍艦隊として海外遠征へ行ってもらうこととする。既に、諸々の処理は済んでいる。明朝出発し、D W ー 1 を持ち帰ってきなさい。いいわね？」

作戦詳細の入った U S B を受け取り、エドモンド、ザラ、ポーラは海軍式の敬礼を返した。

「情報・軍事保安庁の名にかけて」

「期待しているわよ」

女性の言葉に、エドモンドはキザったらしいウインクと笑みで答えて見せた。

第七十七話 「ええ、義父さん」

濃霧で目の前数メートルすら見渡せない海の上で、彼女の持つ通信機から騒がしく女性の声が響き渡っている

『第一艦隊、応答せよ！ 第一艦隊！ 一体何があったの!? 状況報告を求めます!』

「……………あ、こ、こちら、第一艦隊旗艦……………私達は深海棲艦の主力艦隊に遭遇し、砲雷撃戦を開始していた。しかし、なんだったんだ、あれは……………」

『どういうこと!? 説明を求めます!』

旗艦らしき艦娘は目の前で起こった現象が信じられないといった様子で頭を抱えながら覚束ない口調で報告を続けた。

「あれは、恐らくは、別の艦隊? 数十名にも及ぶ艦娘らしき船影が横からあつという間に敵主力艦隊を撃滅し、再び霧の中に消えていった……………」

『付近に別の艦隊が? しかも数十名? そんな大規模艦隊の情報などどこにもあがってはいるはず……………』

「そういえば、一瞬、陸軍の軍服が見えた気が……………」

『どうしました? 何か言いましたか?』

「い、や、なんでもない。艦隊、これより帰投する」

☆

「ふああ、ねむてえ。よお、大和、おはよーつす」

「あ、やっと起きて来たんですね、天龍。もう皆とっくに朝ごはん食べ終わってますよ?」

「仕方ねえだろ、俺あ朝弱いんだよ」

再び大きなあくびをしながら天龍は席に着く。すぐに湯気をたてた白米とみそ汁、鮭の塩焼きが運ばれてくる。

「お、今日の朝食当番大和か? すげえ美味そうじゃん」

「いえ、今日は龍田です」

「天龍ちゃん好みの少ししょっぱめのお味噌汁よろしく」

「お、いいねえ」

と、天龍は顔をほころばせながら腕を持ち上げてみそ汁を啜り、幸せそうにため息をつく。

「うめえ」

「でしよ〜?」

「龍田もかなり料理うまいと思う」

「ふつーに大和に匹敵するレベルで美味しいわよね」

「そんなことないわよお〜」

磯風と瑞鳳が横から口を挟んでくる。それに龍田は笑って謙遜してみせる。その風景を横目で見ていたプリンツが嬉しそうに声をあげる。

「それにしても龍田も結構馴染んできたよね!」

「ほんとにな」

「まあ、もうあれから三週間弱経ってるし、ねえ」

「龍田は昔から人に溶け込むつつうのか、なんというかそういうの上手かったよな」

「私、この鎮守府凄く気に入ったわあ〜。ずっと居たいくらい」

そんな談話を楽しんでいると、食堂の扉が開き、真っ白な軍服と提督帽を被った少女が入ってくる。

「よお、提督代理。おはようさん」

「天龍、朝は皆揃って食べようって決まりにしたわよね? 何回目の遅刻よ。今度遅刻したら営倉送りよ」

「あらあら、随分提督ぶりが板についてきたじゃない、矢矧?」

悪戯っぽい笑みを見せる瑞鳳に、少し恥ずかしそうに咳払いをする矢矧。

提督が元帥に招集されてこの島を出たのは二週間以上前のことだ。その際、矢矧は提督から提督代理の任を受けていた。

現在、この七丈島鎮守府の提督は矢矧ということになっている。

「とにかく! 提督がいない間は私がこの鎮守府の最高責任者になったんだから、あなた達のこととはこれまで以上にしっかりと管理していくわよ! 特に天龍!」

「くそ、提督早く帰ってこねえかな」

「提督に目を付けられちゃって大変ねえ、天龍ちゃん」

今日まで、七丈島鎮守府は何事もなくいつも通り平和にやっていた。

「あ、今日は夜、伊良湖さんの所にお呼ばれしてるのよお、だから皆で飲みに行きましょう〜?」

「お、いいですねー!」

「私は、執務があるから……」

「何ノリ悪いこと言ってるのよ、提督代理! どうせ提督いない分仕事も捗ってるんだから余裕あるでしょ? 飲むわよ!」

「まあ、確かに余裕はあるけれど……」

まるで普段は提督が足を引つ張ってるかのような言いぐさである。しかし、誰からも否定の声があがらないのが悲しいところである。

「じゃ、決定ね。あ、天龍ちゃん、朝ごはん食べ終わったら一緒に商店街の方までいかない? 昨日福引券もらったのよお〜」

「お前、めちやくちや島に馴染んでんな」

「そうかしらあく? この島の人達良い人ばかりだからそのせいかもしれないわねえ」

「あ、福引券、私も溜まってるので一緒に行きたいです!」

「お姉さまが行くなら私が行かない理由はない!」

「じゃあ、大和とプリンツも一緒ねえ」

ちなみに瑞鳳と磯風、矢矧はそれぞれデートとバイト、執務で断られてしまった。

☆

「あ、天龍ちゃん、見てあのお魚すごく活きが良いわあ。お値段もお手頃だし、買っていいこうかしらあ」

「今日買っても夜は伊良湖のとこだろ? 一日置いたら鮮度落ちねえ?」

「しっかりと冷蔵しておけば大丈夫よお」

福引会場まで商店街を見て回る天龍と龍田を一步引いたところから観察している私、大和は龍田の馴染みっぷりに驚くと同時に、仲睦

まじい二人について笑顔がでてしまっていた。

「あの二人、なんだか夫婦みたいですね」

「私達も負けていられませんね、お姉さま！」

「そういう話ではなく」

プリンツは相変わらずこんな調子だ。犬見艦隊との戦いの後、少し私と距離をとっているかのような様子があったように思っていたのだが、きつと私の気のせいだったのだろう。

「お姉さま！ あれが福引会場じゃないですか？」

「ああ、凄いい行列ですね」

プリンツが指さす先には買い物袋を提げたおばさん達が長蛇の列を作っており、その先にはよく見る、六角形の木製の箱を回転させて玉を出す抽選器、通称ガラガラが置いてあった。

ちなみに後で瑞鳳にあれの名前を聞いてみた所、新井式回転抽選器などという名前らしい。

特に知ったところで何の感動もなかったのが悲しいところだ。

「じゃあ、あそこの最後尾に並びましょうか」

「はい！」

「よっしゃ、一等当てるぜ！」

「いや、狙うなら三等のお米券よお」

「堅実ですね」

四人で列の最後尾まで向かったその時、

「きゃっ!？」

「龍田!？」

大柄な男がぶつかってきて、龍田の身体が横によろめく。

ぶつかった男はジロリと龍田を見ると何も言わずに立ち去ろうとする。その横柄な態度に私が文句の一つでも言っただろうと口を開くより早く、天龍の激昂が商店街に響き渡った。

「おい、てめえ！ ぶつかっという何の言葉もなしかよ！」

「天龍ちゃん、いいのよ、私も少し不注意だったわ」

「……………」

男は足を止めてこちらに向き直る。その顔はあからさまに苛立た

し気に皺が寄っていた。

しかし、そんな男の表情に臆することなく天龍は続ける。

「おう、なんとか言え！」

「……小娘。この軍服が見えんのか？」

「あ？」

見れば、彼の着ている服は黒の外套で多少隠されているが、その深緑に茶が混じったようなカーキ色の服は陸軍の軍服に相違なかった。

私は何故陸軍がこの島にいるかよりも、とんでもない相手に喧嘩をふっかけてしまったことへの後悔の方の念が強かった。

しかし、それでも天龍は一切退かない。

「軍人様だったら人にぶつかっても謝んなくてもいいってか？」

「口の利き方のなっていない小娘だ」

みるみるうちに険悪なムードが漂う。このままでは喧嘩にでもなりそうな空気だ。しかし、私達罪艦にはスタンリングがあり、矢矧の許可なく危害を加えることはできない。そうなれば、どう考えても天龍が危ない。

それに、艦娘と陸軍兵士が喧嘩騒動などという話になれば、こちらにどんな影響があるか計り知れない。

周りの人々もどうにか二人を止めようと仲介に入ろうとしてくれているが、流石に気圧されて誰も声すらかけられない。

もうどちらかから手が出てもおかしくない。そう思った瞬間だった。

「——もお、暴力は駄目よお？」

「うげ!？」

一瞬だった。

一瞬で龍田は天龍の右腕を絡み取ったかと思うと、その腕を背中に回して、体を地面に押さえつけていた。

俗にいう脇固め。合気道や柔術、プロレスでも見る関節技である。

「ごめんなさいねえ、別に喧嘩をするつもりはないんです。ちよつとこの子短気な所あるからあ」

「ぎ、ギブ！ ギブギブ！」

「……………」

「——おや、何事でありますか？」

龍田の突然の行動に驚きを隠せない私の頭が追いつかないまま、更に声が聞こえて来たかと思うと、人々の間を縫うようにして、一人の少女が現れた。外側が黒、内側が赤の外套に黒い軍服、頭に黒い軍帽を乗せた、黒ずくめの服装とは対照的に、死人を思わせるほど血の通いが見られぬ真っ白な肌をした少女。

その姿を見て、私は何故か、一瞬、表現しがたい寒気を感じた。

「隊長、これは……その……」

「世間様を無用に騒がせて、お前は一体何をしたのでありますか、説明するであります」

「そ、そいつが、龍田にぶつかってきやがったんだ！」

「天龍ちゃん！」

天龍の方を見て、少女は成程と状況を把握したように数回頷くと、男の傍に歩み寄る。

「人にぶつかっておいて謝らない。当然の悪でありますな。ならばお前に誅を下すことは当然の正義に違いあるまい」

「——がつー」

一瞬、少女が男に何をしたのか理解できなかった。ただ、男が顎を天上に向けながら真上に数センチ浮かされ、その後大きな衝撃音と共に倒れた音を聞いて、ようやく私は彼が、アツパーを食らって倒れたのだと認識した。

「う、ぐ……」

「さっさと立つてあります。龍田さんとやら、これで部下の非礼はどうかお許しいただきたい」

「え、ええ」

「ほら、さっさといくでありますよ」

「はい、隊長」

「では、我々はこれで。また、お会いしましょう」

脳が揺らされているのか、男はふらつきながら立ち上がると、少女と共に商店街の入り口へと消えていった。

「な、なんだったんだ、あいつら?」

「さあ……」

「なんか嫌な感じだったよね……」

「……………」

龍田だけが何も言わず、ただ彼女達が去っていった方向を見つめていた。

☆

「——隊長、先程は申し訳ありませんでした!」

「既に罰は下した。ならばこれ以上謝る必要はないのであります。お前は少し他人を見下し過ぎるきらいがある。そこは直すか、できないなら表面上だけでも隠すであります」

「はっ!」

少女の後ろを歩きながら敬礼する男は、少女に質問した。

「しかし、隊長、あの女達、天龍と龍田と名乗っていましたが、まさか」「ああ、この島の艦娘でありますな。七丈島鎮守府、情報は入ってきているであります。なんでも全員が極刑級の大罪人であるという話であります」

「それは、我々の任務の障害になりえませんか……?」

「奴らは艦装どころか他者への攻撃すら制限されている首輪付きの身。現状は放っておいても問題はない筈であります」

少女は無表情のまま淡々と続ける。

「それに、これから当の鎮守府へご挨拶をしに行くのでありますから、その時、念入りに釘を刺しておけばいいだけのこと」

そこまで言って、少女は初めて笑顔を見せた。その笑顔は彼女の端正な顔立ちからは考えられない程に醜く、歪んでいた。

「なに、恐れることはない、正義は我々にあるのでありますからな」男はその表情を見て、その言葉を聞いて、心底安心したように笑った。

「——あ、隊長! お疲れ様です!」

「まるゆ、首尾はどうなっているでありますか?」

前方から走り寄ってくる軍服の似合わないショートボブのあどけ

ない童顔の少女、まるゆは慣れない様子で敬礼をしてから報告に移る。

「は、はい！ 私達を除く全隊員は所定の位置につきました！ いつでも作戦行動を開始できる状態です！」

「よろしい、ご苦勞であります」

「はい！」

少女が満足気に頷くのを見て、まるゆは嬉しそうに顔を綻ばせた。

「それで、あなたの方は、調子は？」

少女はまるゆの隣に立つ、全身を黒いローブとフードで隠し、顔には仮面をつけ、フードの隙間から銀色の長髪を垣間見せる少女に声をかけた。

「こつちは、いつだって万全」

「それは何より、では、蜻蛉隊を代表して、我々はこれより七丈島鎮守府へ形式上の挨拶へ向かうであります」

「了解、あきつ丸隊長」

「はい！」

「……待ちくたびれた」

あきつ丸を先頭に、四人は鎮守府へと歩き始めた。

☆

二週間前。

横須賀港。

「——来たか」

雷雨の中、荒れ狂う波を意に介さず堤防の上に一人仁王立ちするその老人は何も知らない一般人の目から見てもただものでないことを悟らせる覇気に包まれていた。

老人は船から降りてくる一人の青年を見つけると、まるで獲物を見つけたライオンのような獰猛な笑みを見せる。

「久しぶりじゃな」

「ええ、何年ぶりかも覚えてないですよ、元帥」

元帥の表情とは対照的に青年の方に老人との再会を喜ぶような感情はおおよそ読み取れない。

むしろ、どこか嫌悪しているかのような節まである。

「ふんッ！」

突然、元帥の手が下から上に振り上げられ、そこから銀色の閃光が青年の脳天めがけて走る。

しかし、その銀色の閃光はその眼前で彼の右手に握りこまれる。

銀色の閃光の正体、それは千枚通しであった。

「七丈島で平和ボケしているかと思っただが、どうやらそうでもないらしい。偉いぞ、きちんと警戒は怠っていないなかつたようじゃな」

「あなた相手に警戒するなという方が無理な話です」

「ククク、まあ、腕はそれほど鈍っていないようで何よりじゃ。歓迎するぞ、七丈島鎮守府の提督よ」

元帥は満足げに笑ってから思い出したかのように、再び提督の方に向き直ると、

「よくぞ、再び生きて帰ったな、我が義息子よ」

そう付け加えるように言った。

「ええ、義父さん」

提督も愛情の欠片の感じられない声で元帥にそう返答した。

遠くで雷の落ちる音がした。

第七十八話「調子こいてると殺すでありますよ、屑共」

「なんだ、あなた達、帰って来たの？」

矢矧は呆れたようについ数十分前に鎮守府を出て行った筈の瑞鳳と磯風を見て呟いた。

「なんか急用が入ったらしいわ。まったく、私とのデートすっぽかすとかいい度胸してるわ」

「少し前から店長が不在らしくてな。店は休業中だった」

「今からでも商店街行って大和達と合流してきたらいいじゃないの」

矢矧の提案に二人は少し考えてから首を振った。

「面倒くさい」

「すれ違いになるのも嫌だしな」

「それじゃ、私も思いの外早く仕事終わっちゃって暇だから、雑談でも付き合つて」

「ああ、喜んで。矢矧とはこうしてゆっくり話す機会も少ないからな」
「え、まだ昼前よ？ もう仕事終わったとかマジ？」

食堂で腰掛ける三人が談笑を始めようとしたその時、水を差すようにチャイムの音が響いた。

鎮守府の来客用のチャイムである。

「……珍しい、役場の人達かしら？ でも、提督が今いないことは伝え
た筈なのだけど」

「誰だろうな？」

「さあね」

「まあいいわ。ちよつと行って来るわ」

矢矧が席を立って駆け足で食堂を出ていこうと扉をあけたその時。

「——きやあー！」

「矢矧!？」

見れば、扉を開けた矢矧が悲鳴をあげて尻餅をついていた。

原因は開いた扉の目の前に立っていた大男だろう。

黒の外套に、陸軍の軍服と軍帽。鋭い目つきをした男は矢矧をギロリと見下ろす。

「……これは失礼。呼び鈴を鳴らしても応答がなかったので勝手に上がらせてもらっている」

「誰だ、お前達！」

磯風がすかさず矢矧の前に立って大男とにらみ合う。

緊張感が辺りを覆い始めようとしたところでその空気を割いたのは男の後ろから飛び出した小柄な少女だった。

「やめてください！ 喧嘩は駄目で——きやつ！」

男と同じ軍服と軍帽を纏った少女は出先こそ勢いよく飛び出してきたものの、何もないとところで突然つまずき、バランスを崩して、二人の丁度真ん中あたりで盛大に転んだ。

「……まるゆ、お前は何がしたいのだ」

「え？ え？」

「痛い……」

目を潤ませながら、顔をあげるまるゆと呼ばれた少女はそう言っていそいそと立ち上がると、二人にそれぞれ左右の手の平を向け、

「やめてください！ 喧嘩は駄目です！」

と、先刻言い損ねた台詞を言い直した。

「あ、ああ、そうだな。喧嘩は、よくないな」

「……………」

すっかり毒気を抜かれ、お互いにむき出しにしていた敵意を収めると、まるゆは嬉しそうに笑って見せた。

（なんなの、この人達、軍服から見て陸軍？ 一体何の用でこんなところに——）

「——下がるであります、二人とも」

「——ッ!？」

次の瞬間、矢矧がとった行動は即座に立ち上がり、磯風を後ろから抱きかかえるようにして一緒に後退することだった。

瑞鳳も矢矧と同様の寒気を感じたのか、席から立ち上がって既に臨戦態勢までとっている。

男とまるゆに続いて入ってきた二人の陸軍の軍服を纏った人間。一人は死人のような真っ白な肌に沼のように黒く淀んだ瞳の少女、も

う一人は仮面をつけた銀髪を覗かせるおそらくはこちらも少女。

そのどちらからも、脳が警鐘を鳴り響かせるだけの気味の悪い寒気を感じた。

「あなた達、何者？」

「これは失礼。我々は陸軍特務小隊、名を『蜻蛉隊』^{トンボ}。要は味方でありますので警戒されなくともよろしいのであります」

白い肌の少女はそう言って笑みを見せた。

「陸軍、特務小隊？　なんでそんなのがこの島に？」

「それは当然、任務であります」

「……………」

少女を何と呼べいか戸惑っている矢矧の様子を察し、少女は後ろに立つ大男と小柄な少女、仮面の少女の方を順に手で示しながら一人ずつ紹介を始めた。

「これは、大変申し遅れました。その愛想のない大男が原田、気弱そうなのがまるゆ、この仮面の少女は……………うん？　そういえば名前を聞いていなかったでありますな、あなた、名前は？」

「…………『ロスヴァイセ』でいい」

「覚えにくいでありますな。とにかくこの仮面の少女がロスヴァイセ。そして、私がこの蜻蛉隊の隊長、あきつ丸と申します」

丁寧にお辞儀をするあきつ丸に困惑気味に、矢矧はゆつくりと口を開いた。

「ご丁寧にも。私はこの鎮守府の提督代理の矢矧よ。それであきつ丸さんは一体どういう要件でウチにやってきたの？　悪いけれど、今ここの提督は不在で、あまり重要な案件は対処しかねるのだけだ」

「いやいや、そんな大層なことではないので、安心して欲しいのであります。本日は単にこの島を管轄とする鎮守府に挨拶をと思ってきただけでありますので」

「挨拶？」

物腰低く、笑顔絶やさず、友好的な反応を見せるあきつ丸。しかし、それを見て尚も矢矧は肩の力が抜けないでいた。

「我々とはある任務でこの島にやって来たのでありますが、場合によつてはこの島の住民やあなた方にもご迷惑をかけるやもしれないので、事前に断りをいれておくのが筋と思ひ、こうして鎮守府を訪ねた次第なのであります」

「……どういう意味？ 荒事になる可能性があるつてこと？」

「その可能性は否めないでありますな。何せ、相手は化物でありますから」

「化物!？」

磯風の驚いた声にあきつ丸は声のトーンを低くして真剣な表情で話し始めた。

「実は、この島に深海棲艦が入り込んでいるのであります」

「なんですつて!？」

「確かなのか!？」

磯風と矢矧を見て、あきつ丸はゆっくりと頷いた。

「危険な奴であります。既に多くの人間が殺されている」

「そんな……」

「深海棲艦のコードネームはD W ー 1。我々の任務はこれを発見次第、鹵獲、もしくは撃滅することでありませう」

そう言つて、あきつ丸はまるゆから小型の通信機のような機械を受け取つて矢矧達に見せる。

「深海棲艦を設定した範囲内に探知するとこの探知機が反応して音を鳴らすのであります。これを使って包囲網を張り、追い詰めていく予定であります」

「それなら私達にも探知機を貸してくれない？ 手伝わせてもらはうわ」

「そうだな、ウチの島のことだ。放つてはおけない」

矢矧と磯風の申し出に、あきつ丸は首を横に振つた。

「お気持ち嬉しいのでありますが、今回、七丈島艦隊の皆様にはその逆のお願いをしにきたのであります」

「え?？」

次の瞬間、それまで朗らかな笑みを見せていたあきつ丸の顔が急に

厳しくなる。

「あなた方にはことが終わるまで一切手を出さず、大人しくして頂きたいのであります」

「え、なんで……」

納得いかない様子の矢矧に大男が問答無用と言わんばかりに彼女の声を封殺する。

続けてあきつ丸が補足をするように続けた。

「探知機を使ってこの島の周辺海域を見回りましたが、DW-1は見つかりませんでした。目標はこの島内に潜んでいる可能性が高いのであります。故に、陸上での戦闘を考慮し、あなた方に下手に手を出されると作戦に思わぬ支障をきたすリスクが高いと判断したのであります」

「つまり、全て我々に任せて大人しくしていれば良いということだ」

原田が嫌味ったらしく鼻を鳴らしてそう言った。

矢矧は眉をひそめてあきつ丸に反論する。

「納得いかないわね。あなた達が取り逃がしてDW-1が海に出たら、その時は一体誰が追いかけるのかしら？」

「無論、我々が」

矢矧は首を振った。

「無理よ、軍艦なんて沈められるだけだわ。深海棲艦に対抗できるのは艦娘だけよ」

「私とまるゆは陸軍製ではありませんが、一応艦娘でありますよ」

「……二人だけで仕留められると？ 凄い自信ね？」

「いえ？ 当然、蜻蛉隊総勢30名をもって討伐にあたるつもりであります」

「ちよつと待って、あなたとまるゆはともかく他の隊員はどうやって海上で深海棲艦と戦うつもり？」

「無論、我々と同じようにでありますよ」

「……ごめんなさい、話が見えないわ」

困惑する矢矧にあきつ丸は食堂の窓まで歩いて、それを開いてみせる。

食堂の間取り的に、窓からは広大な海が見えている筈である。

「矢矧殿、全て、こちらに来てみればわかるのでありますよ」

「……………」

矢矧があきつ丸の傍まで歩いて彼女の開いた窓から海を見下ろす。

その瞬間、矢矧の目が大きく見開かれた。

「何、これ……」

「どうしたのよ、矢矧？」

「私達も見にいこう」

矢矧の表情を見た瑞鳳と磯風も同様に窓から海を見下ろすと彼女と同じように息を飲んで言葉を失った。

「あれは……全部、艦娘、なのか？」

「艦娘じゃないわ。ほとんど男じゃない」

彼女達が見下ろした海には、たくさんの人間が立っていた。

無論、海面に立つことのできる人間などおらず、そんな芸当が可能なのは世界で艦娘だけであり、彼らも艦装のようなものを取り付けているのが遠目に見える。

しかし、艦娘とは、文字の通り、女性にしかねないから艦娘なのだ。男が艦装を取り付け、ああして海面に立つ姿など、本来あり得ない光景である。

「なんなの、あれは……」

「我が陸軍が海軍から貰い受けた艦娘技術を研究し辿り着いた対深海棲艦装備の完成形であります」

「陸軍式艦装って訳ね……」

「名を陸軍式海上戦闘用機動兵装丙型『ワダツミ』。人間をやめることなく、また、適正も関係なく艦娘と同等の力を得ることをコンセプトとした秘密兵器であります。まあ、まだ実験段階の投入なのではありませんが、今のところ結果は上々。ここに来るまでにも、深海棲艦の主力艦隊を一つ殲滅しているであります」

あきつ丸の言葉に彼女の後ろに立つ原田達も自信ありげに笑みをみせる。

あきつ丸の言葉が本当だとすれば、彼女達蜻蛉隊とは、その全員が

艦装による海上戦闘を可能にした小隊であり、また、大艦隊ということにもなる。

通常海域への出撃でさえ艦娘が6人、大規模作戦時でさえ連合艦隊と支援艦隊を合わせて24人が最大規模。蜻蛉隊の30人にはまだ届かない。

「わかったでありますか？ あなた方の力など借りずとも、我々は十二分にDW―1を討伐できるだけの戦力を有しているのであります」

☆

「――戻ったか」

「ええ、第三、第四研究所もハズレです」

「ふむ、では、残るは第五、六、七研究所じゃな」

疲れ切った様子で畳の敷き詰められた和室に入ってきた提督を、元帥は大して労うこともなく迎え、一瞬だけ彼の方に視線を向けるとまたすぐに書類に視線を落とした。

また、提督もその反応を特に気にするでもなく、座布団の上に座り込む。

「まさか、陸軍研究所をしらみ潰しに調べる羽目になるとは思いませんでしたよ。もう少しマシなアイデアはなかったんですか？」

「ふん、ならば貴様が考えてみる。あの狸からそう簡単に情報が盗めると思うなよ。あいつは身内の人間すら信用せん秘密主義の人間。そう簡単にボロなど出さぬわ」

参謀総長を狸と揶揄する元帥は忌々しげにそう答える。

「奴が何やらこそこそと小隊まで出してきた必死で追っているDW―1とやら。これが近頃頻発する深海棲艦の近海出没に関連していることはまず間違いない。後は、その確固たる証拠を見つければいいじゃ」

「だから陸軍研究所を？」

「陸にいなながら深海棲艦に関して海軍以上の知識を得ているのだとすれば、その源は研究所しか考えられん。あそこは陸軍で唯一我々が鹵獲した深海棲艦が運び込まれる施設じゃからな」

かといって、全国に七つもある研究所を一つ一つ回って、潜入して

こいなどという任務は提督一人でやるにはあまりに負担が大きかった。

おかげで、すぐに戻ると矢矧に言ったにも関わらず既に二週間以上の時間が経ってしまった。

「ところで、悠長に休んでいる暇があるのか？ おそらくは今頃、陸軍が七丈島に辿り着いている頃じゃろうがな？」

「は？ なんですか、その話は……？」

「おや、言っておらんかったか？ 一昨日特務小隊、蜻蛉隊とやらの動きが掴めてな。どうやら七丈島に向かったようじゃ」

「……聞いていないんですが？」

悪魔のような笑みを見せる元帥に、提督はいよいよ殺気立って立ち上がり、彼を睨みつける。

「戻ります、今すぐに……！」

「やめておけ、貴様が行ったところでどうにもならん。揉めて自分の首を絞めるのがオチじゃ。ただでさえ、『七丈島鎮守府』『特権』と貴様を過剰に鼻屑してやっているのだ。これ以上は庇えんぞ、儂は」
「それでも戻ります。蜻蛉隊が調査通り本場に全員海上戦闘が可能な小隊なら、あまりにあの子達が危険すぎる」

「……まあ、待て。蜻蛉隊を止めたくば、正面からぶつかるより直接上を叩いた方が手っ取り早い。お前は研究所の調査に集中しろ。あの狸が今回の件に関わっているのなら、奴も恐らくはそこにいる筈じゃ」

歯ぎしりをしながら何か反論しようと提督は口を開きかけるが、元帥の言葉に反論の余地がないとわかつているが故に言葉がでない。

「第七研究所に向かうぞ。確証はないが、あの狸が出入りしている回数が他の研究所よりも数回多い。今回は儂も同行する。へりと呼んであるから支度せい」

「……わかりました」

不安を拭えない提督を元帥は少しばかり楽しそうに見つめていると、その肩を叩いて言った。

「そう不安がるな。七丈島については既に儂が手を打っておいた、ク

クク」

☆

「これで、あなた方の助力が必要ないということはわかっていただけでありますか？」

「ええ、そのようね」

「矢矧！」

磯風がそれでいいのかと矢矧に抗議する。しかし、矢矧は首を振って言った。

「じゃあ、私達は私達で別に動かしてもらおうわ。安心して、貴方達の邪魔はしないわ」

「ほう」

「貴様！」

原田が憤りの声をあげる。しかし、矢矧はむしろ彼を睨み返す勢いで続けた。

「あなた達が誰だろうと、どれだけ強かろうと、この七丈島は私達が守る場所！ 黙って見ているなんてできないわ！」

「矢矧！」

「全く、張りきっちゃって、ウチの提督代理はこれだから」

磯風と瑞鳳も嬉しそうに矢矧の言葉に同調する。

原田が青筋を浮かべ、今にも殴り掛からんと矢矧に掴みかかろうとしたその動きを止めたのは、他ならぬあきつ丸の第一声であった。

「調子こいてると殺すでありますよ、屑共」

「——ッ!?!」

笑顔はそのままに、彼女の口から放たれたその『殺す』という単語に鳥肌がたった。

脅してはない。彼女は、あきつ丸は本気で殺すつもりで、『殺す』と言ったのだ。少なからず、矢矧はそれに恐怖を抱かずにはいられなかった。

「私はね、上からあなた達との交戦は極力控えろと言われていなければ、この島についた時点であなた方をまず殺しているでありますよ」
「なっ……」

「しかし、もう我慢ならない。罪人が、悪がのうのうと生きていられるだけでも度し難いというのに、『私達が守る』とはなんたる傲慢、万死に値するであります。そんなことは、私の正義が許しはしないのであります」

一歩ずつ、ゆつくりと、しかし着実に矢矧達に詰め寄るあきつ丸の拳は握り固められ、その瞳は溢れんばかりの殺意で満ちていた。

数秒後に、殺し合いが始まる。その場の誰もがそう確信した。

「ま、待ってください、隊長！」

「どくであります、まるゆ」

「も、揉め事は駄目です！」

「まるゆ、いいではないか。これは天意なのだ。この場で悪を誅することこそ我らが天命よ」

「原田さんまで！」

「もう十分に容赦はしたであります。御上への義理立てを成した今、悪にこれ以上の寛容はないであります」

「た、隊長お……」

泣きそうな表情で継るまるゆを押しつけ、再び歩を進めるあきつ丸と原田。

既に戦闘態勢に入りつつある矢矧達。

あと数歩で互いの間合いに入る距離まで双方が近づいたその時だった。

「——あらあら、相も変わらず賑やかですねえ、この鎮守府は」

「なっ!? 何者だ貴様!? 離せ！」

食堂の扉を開け放ち、室内に突風が吹き荒れたかと思うと、いつの間にかそこには原田の腕を掴む柔和な笑みを浮かべる少女の姿があった。

その少女の姿を捉え、矢矧の表情が僅かに歪んだのは言うまでもない。

「横須賀鎮守府第一艦隊旗艦、神通と申します」

横須賀鎮守府第一艦隊旗艦、神通。O・C・E・A・Nランキング第3位。

「神、通……」

「うわぁ」

「また厄介な奴が来たわね……」

「助けに入ったのにその反応は流石の私も傷つくのですが」

全く歓迎されていない雰囲気(雰囲気)に神通の表情が曇る。

「双方、矛を収めてもらおう。無益な争いはこの私が断じて許さない」

「そうですよ、無益な上に無意味で、しかも迷惑ですからやめましょ
う」

さらに一方は覇気の籠った、もう一方はどこか気の抜けたふわふわした声が響き、また新たに二人の艦娘が姿を現す。

一人は褐色の肌に真っ白な髪と赤い瞳に銀縁の眼鏡が特徴的な筋肉質な艦娘。

一人は栗色の長髪をポニーテールにした如何にもゆるふわな雰囲気(雰囲気)の艦娘。

「同じく、綾波です。よろしくお願いいたします。あ、名乗らなくていいですよ、覚えませんか」

横須賀鎮守府第一艦隊、綾波。O・C・E・A・Nランキング第6位。

「同じく、武蔵だ。さあ、文句のある奴はかかってこい」

横須賀鎮守府第一艦隊、武蔵。O・C・E・A・Nランキング第1位。

☆

「——ついでで、ここが日ジャッポネ本のシチジョージマか。空気が美味しいし、暖かいし、良い所じゃないか！」

「そうね、それじゃあ早速——」

「観光しましょー！」

「ん？ 何言ってるのかしら、ポーラ？」

「苦しい、離してセレーネ姉——じゃないザラ姉様あ……」

笑顔でザラに胸倉を掴まれるポーラは息苦しそうにギブアップを訴える。

そこにエドモンドが仲裁するように割って入ってきた。

「まあ、落ち着け、ザラ。昔、母さんも言っていた、『楽しむこと、それが成功の秘訣』ってね。いいじゃないか、観光。島を見て回りながら情報収集すればいいさ」

「流石エド〜！ わかってるうー！」

「はっはっは、よしてくれ。色男だなんて、照れるじゃないか」

「そんなことは言っていないさ」

「もう、エドがそんなだからポーラが調子に乗るのよ！」

既にザラの言葉は二人には届いておらず、エドモンドとポーラは楽しそうに駆けだして行ってしまう。

「よし、まずはあのビッグスプーンなる店で日本^{ジャップ}カレーを頂こうじゃないか！」

「日本もイタリヤに負けず劣らず料理とお酒の美味しい国って聞いているから楽しみ〜」

「もう！ 二人とも！ DW-1は!? 任務は!?!」

「でも、ザラも長旅でお腹空いただろう？ それに、日本の料理にも興味あるんじゃないかい?」

「う……確かに、興味が無いと言えば、嘘になるけれど……」

「よし、ザラ姉様の許可も取れたし出発〜！」

「許可なんて出してない! ……もう! カレー食べたらずぐに任務に戻るんだからね!」

と、意気揚々と三人で店の目の前まで来たものの。

「あ、ごめんなさい、今日はお父さ——店長がいないので休業で……」

「マンマミーアッ！」

「ざんね〜ん」

「嘘……」

何気に一番落胆していたのはザラだったという。

第七十九話 「わりい、俺、七丈島艦隊やめるわ」

「さあ、文句のある奴はこの武蔵が相手になるぞ」

武蔵の声に一瞬は苦虫を噛み潰したかのような表情を見せたあきつ丸。

しかし、すぐにまた怪しい笑みを浮かべると、彼女の方へ一歩ずつ近づきながら口を開く。

「横須賀艦隊、しかもその第一艦隊の艦娘が三隻も乱入とはいいやはや参りましたな。しかし、本当に、良いのでありますか？ 武蔵殿？」

「本当に良いとは、どういう意味だ？」

少しずつ距離を縮めてくるあきつ丸の次の行動は誰にも予測できない。今にも武蔵の顔面めがけて拳を打つてもなんら不思議はない。彼女ならそれくらいはやると思わせる狂気的な雰囲気。矢矧達に気持ちの悪い緊張感を与える。

「本当に、私が、あなたと、戦闘になって大丈夫なのかということでありますよ」

「……その口調では互いの実力のことを言っている訳ではなさそうだな」

「今、どちらに正義があるのかという話であります」

話の先が見えない磯風とは裏腹に、その一言で矢矧と瑞鳳の顔がこわばる。

「御上からの任務に従事している我々と、横から飛び込んできたあなた方、争って損をするのはどちらなのか、わからぬわけでもないでありますよ？」

あきつ丸達蜻蛉隊は参謀総長から直属の命令を受けて行動をしている。それに関して艦娘がその任務行動を妨げるということは海軍による陸軍への妨害行為と取られかねない。

いくら関係に亀裂があろうと同じ旗を仰ぐ仲間同士。不和は原則正されねばならない。今ここで正規行動をしているのはあきつ丸達。この場において正義は陸軍側にある。

よって、ここで蜻蛉隊と全面的に対立するということはここにいる艦娘のみならず、その監督役である提督達でさえ反逆者として軍法会議で裁かれかねない。

いくら横須賀艦隊とはいえ、ここであきつ丸達と争うことはできない。

しかし、そこまで釘を刺されて、武蔵は何故か口を大きく開けて笑い始めた。

「はっはっは、あきつ丸。お前は何か勘違いしているようだな」

「勘違い？」

「別に私はお前達の任務を妨げる気などない。ただ、ヒートアップしていた所に水を差したものだから鬱憤が溜まっているのではないかと思つて、そのはけ口になつて差し上げようと提案したまでのこと」

「ほう、つまりはサンドバッグになつていただけると？」

「その解釈で構わない」

あはは、と乾いた笑い声をあきつ丸があげた刹那、突然武蔵の腹にあきつ丸の拳がめり込んでいた。

「お氣遣い痛み入るであります、では、遠慮なく」

「ぐ……ふ、ふふ、中々、いい拳じゃないか……もつと来い！」

「ちよ、ちよつとー！」

止めに入ろうとした矢矧を呆れ顔の神通が止めた。

「あー、いいんですよ。お氣になさらず、武蔵さんのことはもう好きにさせてあげてください」

「え、でも、あれじゃ……」

神通と話をしている間にも二発、三発とあきつ丸の拳が休む間もなく武蔵の露出度の高い褐色の肢体に次々と叩き込まれていく。

「どうでありますか、陸軍仕込みの体術は？ 身体を鍛えていても効くものでありませんよう？」

「……………くっ」

体の各所に一通り拳を撃ち込み終えたあきつ丸は、満足げにうなだれている武蔵を見下ろす。

それを見ていた原田もまた楽し気な笑みを浮かべ、まるゆはおろお

ろと申し訳なさそうに辺りを見回している。

矢矧達もそのリンチの惨状に表情の歪みを隠し切れぬ。

そんな中、平然と笑みを崩さない者があきつ丸達以外に三人。

神通、綾波、そして、顔をあげた武蔵だった。

「くっ、くくく、くははは！ 衝撃が、中々どうして、体の奥まで響く

！ 拳の一発一発がまるで鉄骨に打たれたかのようなようだ！ 素晴らし

い！ いいぞ、もっと来いッ！ ほら、早くッ！」

「なっ」

歡喜の笑みを浮かべながら更なる追加攻撃を要求する武蔵の姿はさしものあきつ丸でさえ気味悪く感じたのか、ずっと浮かべていた、見下したような笑みがここにきて崩れた。

「どうした？ お前はまだまだこんなものではないだろう？ お前の全てを受け止めてやる！ だからお前の全部を私にぶつけて来いッ！」

「……………予想外でありますな」

「え、何、あれ？」

「ああ、昂ぶってらっしゃいますねえ、武蔵さん」

「相変わらず気色悪い性癖ですね」

困惑する矢矧に神通と綾波も嘆息と共に声を洩らす。

「お前の拳をもつとこの肌で感じたいんだッ！」

O・C・E・A・Nランキング第1位。世界最強の艦娘は、規格外に特殊な性癖をお持ちであった。

端的に言えば、DMであった。

☆

「興が削がれたであります」

拳を撫でながらあきつ丸は溜息をついて武蔵に背を向ける。

一見して武蔵の性癖に呆れたように見える、しかし、実の所、武蔵を殴った彼女の両拳は主に鈍い痛みを訴え続けていた。

(…………まるで大木でも殴ったかのようにありますな。伊達に1位という訳でもないでありますか)

内心、舌打ちをしながらも表情は笑顔で再度矢矧達に向き直る。

「話を戻すでありますか。とにかく、こちらの任務が終わるまで、あなた達には余計な手出しを控えてもらいたいですね」

「……それは」

「できない、とは言わせないでありますよ」

「できない。そう言いたい」

しかし、任務の妨害ととられれば、横須賀艦隊はともかく、既に首の皮一枚で留まっている七丈島艦隊の面々は今度こそどうしようもない。

了解の返答を矢矧が言おうとしたその時、

「いえ、それは無理な相談ですね」

口を挟んできたのは神通だった。

「なんでありますか、私は今、七丈島艦隊と話をしているであります」「ええ、知ってますよ。でも、困るんですよ、その方々を拘束されるのは。こちらも任務なので」

「任務？」

神通は張り付いたような笑みのまま一枚の書類を取り出すとあきつ丸達の方に差し出す。

「元帥からの命令でしてね、『七丈島に出向き、潜伏している敵を殲滅せよ。必要ならば現地の艦娘との協力を許可する』とのことですよ」

「成程、そういうことでありますか」

明らかに蜻蛉隊の任務と意図的にバッティングさせてある命令書を見てあきつ丸は顔をしかめた。

お互いに任務に従事した上で起きた衝突なら、正義は双方にある。一方が一方に何かを強要することはできない。

「横須賀艦隊と七丈島艦隊はこれより協同でD W ー1殲滅の任務にあたります。よって、横須賀、七丈島両艦隊への行動制限はご自重願えますか？」

「馬鹿な、納得がいくか！ あからさまに我々の任務を妨害する魂胆ではないか！」

「あら、酷い誤解です。偶然、任務内容がバッティングしただけだというのよ」

相変わらず癪に障る台詞回しと笑顔である。

あきつ丸を含め、蜻蛉隊側の表情に明らかに敵意が混じったのが一目でわかる。

「……そういうことなら仕方ないでありますな。ここは退くとしましょう。DW―1殲滅にあたり、任務行動に関しては互いに不干渉ということでもよろしいでありますな?」

「協力はしないが、妨害もしないということですね? はい、それで結構です」

「ぐ、ぬぬ……」

満足気な神通の声に原田の顔がますます険しくなっていく。

「やめるであります、原田。向こうがDW―1の情報を嗅ぎ付けていたのは驚いたであります、流石にそれ以上の情報はない筈。ならば探知機と数のあるこちらが有利なのは自明。こちらが先にDW―1を捕獲すれば何も問題はありません」

原田の肩に手を置いて小声でそう宥めると彼は頷いて握りしめていた拳を開いた。

「まるゆ、念のため探知機を起動しておくであります」

「は、はい、隊長!」

あきつ丸に言われてまるゆが探知機のスイッチを押す。この場ではどうやら彼女しか探知機を持っていない辺り、数の少ない貴重品なのかもしれない。

そんなことを考えている矢矧の視界に神通の顔が横から割り込んでくる。

「どうですか、矢矧さん? 私が来て良かったでしょう? 助かりましたよねえ? あと一歩で何もできずに蜻蛉隊のいいようにされていたんですから。お礼に横須賀艦隊に入ってくれてもよろしいんですよ?」

「入らないわよ」

「二ヶ月、いや、一週間だけでもどうです? 絶対に後悔はさせませんよ?」

「ウチの監察艦を引き抜こうとするのはやめろ」

神通はそこで一旦、あきつ丸達が何か内輪で話を始め、こちらへの意識が薄れていることを確認すると、真面目な顔になって小声で囁く。

「それで、実際D W—1について何か思い当たる節はないんですか？」

「D W—1についてっていったってねえ」

「その容姿もわかってないしな……」

「自分の島のことなのに何も見えてないんですね、ある意味凄いなと思います」

「う、ぐ」

「やめなさい、綾波」

「そうだぞ、毒を吐くなら私に向かって吐けと何度も頼んでいるだろう？」

「武蔵さんもこれ以上ご自分の格を落とすたくなければ黙っていた方が賢明ですよ？」

「底辺から這い上がる、というのも悪くない」

「黙っててください」

柔らかな笑顔で毒を吐く綾波。

無駄に良い顔で、罵倒を求める武蔵。

その二人を諷める神通。

三人のやり取りを見て磯風と瑞鳳がドン引きしている中、矢矧だけは何かを考え込むよう俯いていた。

「そうですね、例えば、ここ最近島に現れた方とかいないんですか？」

「ここ最近、か。別に化け物を見たとか、怪しい人影を見たみたいな話しは聞かないが」

「……まさか」

「矢矧さん？ 何か心当たりが？」

神通が険しい顔をしている矢矧に声をかけたその時だった。

「よーっす、帰ったぜー！」

「いやあー、大量大量！ これではばらくお米には困りませんね！」

「お、重い」

「ただいま帰ったわあ〜」

大和、天龍、プリンツ、龍田。

四人が米袋を抱えて食堂に入ってきた瞬間、探知機のアラームが鳴り響くのがほとんど同時だった。

☆

「——ッ！」

食堂内にいた全員の視線が大和、天龍、プリンツ、龍田の四人に集中する。

拙い、と矢矧が思ったのも束の間、彼女が声をあげる間もなく、あきつ丸達は即座に大和達を取り囲んだ。

「てめえら、さつき商店街で会った奴ら……」

「え、え、え!? なんです、このアラーム!? 私達何か悪いことでもしました!?!」

「お姉さま、怖い!」

「……………」

「これはこれは、まさかこちらから網にかかりに来るとは僥倖でありますな、DW——」

状況を把握できない大和達。

「あなた方四人のうちの誰かが、深海棲艦であります故、確かめさせてもらうであります。まるゆ、探知機の最小範囲は?」

「現在設定している5メートル範囲内が限界です」

「ふむ、逃亡の危険も考えるとそこまで距離を離したくないでありますな」

「はあ? 深海棲艦? いる訳ねえだろ。俺たちはどっからどう見たって艦娘だろうが!」

天龍があきつ丸の言葉に怒鳴り返す。

「この探知機が反応したということとはそういうことでもありますよ。いや、まさか艦娘に擬態できるとは予想外でありましたが」

「おい、てめえ訳わかんねえこと言っただねえで——」

「ああ、そうだ」

天龍の言葉を完全に無視しつつ、あきつ丸が思いついたかのように手を叩く。

「DW-1が七丈島に来たのはつい最近の筈でありますな。矢矧殿？
この四人の中で新参の方は誰でありますか？」

「それは……」

口ごもる矢矧。磯風は信じられないという表情を浮かべ、瑞鳳は顔をしかめる。

七丈島艦隊とは見知った仲である神通も、厳しい顔つきで『彼女』を見つめている。

四人の視線の先には龍田だけが映っていた。

「……………龍田、よ」

絞り出すような声で矢矧はその名前を言った。

蜻蛉隊に協力した訳ではない。ただ、自分の仲間のすぐ隣に深海棲艦が立っているという状況に耐え兼ね、それを打破するための最短の策を選んだだけにすぎない。

これで少なくとも、天龍、プリンツ、大和の安全は保障される。

そして、何より、矢矧の胸中には沸々と燃え上がる怒りがあった。

「騙っていたのね、龍田……」

怒りを抑えるあまり、声が上手く出せない。

敵が自分達の仲間を装って数週間共に生活していたこと、その間、幾度となく仲間を危険に晒していたこと。そして、そんな状況に今更になつて気付いたこと。

龍田に対してよりも自分自身への怒りで矢矧の頭は一杯だった。

「よろしい、龍田以外を包囲から解放するであります」

「あの、すみません」

「え？ ちよ、ちよつと！ どういうことですか!? 説明をお願いしたいんですけど!」

「お姉さま！ とりあえず今は離れた方がいいと思う」

「プリンツまで!」

大和とプリンツがまるゆに手を引っ張られて輪の外に出される。

「おい、貴様もさっさと出ろ」

腕を掴まれる天龍が龍田の方を見る。

「……………天龍ちゃん」

「……………」

俯いて、一言そう呟いた龍田に、何故か天龍は笑いかけた。そして、原田の腕を振りほどくと、笑って言った。

「悪い、やっぱ駄目だわ」

「え？」

「おい、貴様、何を言って——」

苛立たし気に天龍を引っ張り出そうとする原田の顎に飛んできたのは天龍の拳。

そのまま原田は仰向けに倒れた。

「がっ…………!?!」

「おお、今日はよく顎を殴られるでありますなあ、原田」

「隊長！ 笑ってる場合じゃありません！ 包囲に穴が！」

「天龍、何やってるのあなた!?!」

矢矧が困惑と怒りの入り混じった声で叫ぶ。

天龍は矢矧に申し訳なきように笑うと龍田の手を取って引っ張る。

「わりの、俺、七丈島艦隊やめるわ」

「はあ!?!」

「天龍ちゃん…………?」

「大丈夫だ、龍田。俺はお前の味方だからな」

そう言うと、一目散に食堂の入口へ走り出す天龍達。

しかし、そこにはあきつ丸が立ちふさがっている。

「ははは、逃がすとしても思っているでありますか?」

「思わねえよ。だから、斬るぜ」

「ん…………!?!」

天龍がスカートベルトのベルトに手を掛けたかと思うと、それを見て何かを察知したのかあきつ丸が扉から横に飛ぶ。

次の瞬間、天龍が腕を勢いよく振りぬいたかと思うと、食堂の扉が横に真っ二つに両断されて崩れ落ちた。

「うえ!?!」

「ほう」

「これはまた珍しいですねえ」

「物騒ですね、これだから罪艦は」

何が起きたのかわからない大和を他所に横須賀の面々は感心したように声を洩らしていた。

「ちつ……腰帯剣、でありますか」

天龍の手にいつの間にか握られている、しだれた薄い銀色の刀身を見てあきつ丸が呟く。

腰帯剣。ベルト内部に、薄っぺらの360度しなる刀身を仕込んだ現代暗器の一つ。扉を両断したのはそれだった。

さらに天龍は、右手首についていたスタンリングもあつさり切断し、床に落としてみせると、再び龍田の手を掴んだ。

「これでよし、と。ほらいくぜー」

「ちよつと、天龍ちゃん!？」

「隊長、どうします!？」

「当然、追うであります。まるゆは全隊員に通信を入れて包囲網を。原田、いつまで寝ているでありますか！ 私と貴様で奴らを追う！」

「了解……くそ、あの女、ただでは済まさん！」

退路を確保し、食堂から逃亡した天龍達に向けて小さく舌打ちをすると、あきつ丸は即座に指示を飛ばしながら原田の頭を蹴って叩き起こし、天龍達を追って走り去っていった。

「嘘、天龍……なんで……」

何が何やら状況にまるで追いつかない大和の頭の中で、ただ一つ理解ができたことは、天龍が七丈島艦隊からいなくなってしまったこと、それだけだった。

☆

一方、その頃。

「いやあ、ここは良い店だなあ。お酒と料理は美味しいし、何より、女将さんが美しい」

「あら、お上手ですねえ、流石は紳士の国イギリスの方です」

「僕はイタリア人なだけけどね」

「そつちですかー！」

ビッグスプーンで美海から教えてもらった居酒屋に足を運んでい

るエドとザラとポーラは伊良湖の料理とお酒を満喫していた。

「うえへへく、日本酒おいしく、もう一杯く」

「ポーラ、まだ飲む気!? やめておきなさい!」

「そうですよ、そろそろカクテルとかも頼んでくださいよ、自信作あるんですよ」

「お酒飲むのをやめろって言ってるんです!」

「そっちですかー!」

「じゃあく、ワインください」

「あ、カクテルじゃなくてそっちですかー」

日本酒一升瓶を既に三本空にしてさらにワインに手をつけようとするポーラにザラがチョップを入れた。

「痛い……」

「これ以上は駄目よ」

「そうです、カクテルにしときましょう、自信作あるんです」

「お酒を勧めるのやめてもらえる?」

「ごめんなさい」

その時のザラの顔はまさに般若であった。

「はっはっは、じゃあポーラの代わりに僕がその自信作のカクテルを頂きましょう」

「ちよ、エド!」

「ありがとうございます!」

エドの注文に伊良湖が嬉々としてカクテルを作り始める。

「もう! エドも飲みすぎよ!」

「何、大丈夫さ。それに、こんな美しい女将さんが作ってくれるカクテルなら、僕は無限に飲める!」

「でも、お客さん、飲み過ぎには本当に気を付けた方が良いでしょう?」

アルコールには脳を麻痺させてしまう作用があります。脳の麻痺が生命維持に関わる中枢部分にまで及ぶと、心臓の働きや呼吸機能を停止させてしまい、最終的には死に至ります。急性アルコール中毒の症状をきっかけに、転落や交通事故での死亡や、嘔吐物を喉に詰まらせた窒息死なども発生しており、急性アルコール中毒は、時として死へ

もつながら恐ろしいものなのです。東京都では毎年1万人以上が急性アルコール中毒で救急輸送され、なかには死亡者も出ているらしいですよ?」

「……………」

「……………」

「……………」

「お待たせしました、オリジナルカクテル『七丈島』です」

「この流れで出す!」

「え、なんでですか!? 注文してくれたじゃないですか!」

「いや、そうだけれど!」

「すみません、水ください」

「ポーー!」

ポーーが真顔で水を頼み始めた。

「僕が飲んだアルコール量を概算するとこうなるから、これを分解するために必要な水量は……………」

「何で居酒屋で電卓叩いてるの、エド!」

「お二人ともどうしたんですか、急に……………なんだか私怖いです」

「多分あなたのせいよ!」

居酒屋で平和な一時を過ごした三人であった。

第八十話 「それでも、私は天龍を放つとけません」

「――逃がしたでありますか」

「申し訳ありません、自分の復帰が遅れたばかりに……」

鎮守府の外まで走り、周囲を見渡すも天龍と龍田の姿はどこにも見当たらない。

ため息を洩らすあきつ丸に原田が頭を下げた。

「まあ、良いであります。この小さな島の中、我々の包围網を逃れる術などないのでありますから」

「隊長！」

後ろから遅れて追いついてきたまるゆとロスヴァイセに目をやる。

「逃がしたの？」

「ええ、残念ながら」

「意外とノロマなんだね、あきつ丸」

「貴様！ 隊長に対して失礼だぞ！」

責めるような口調のロスヴァイセに原田が激昂して掴みかかる。

まるゆと同じくらいの背丈の彼女は原田に軽々と身体を宙に持ち上げられた。

「貴様が『鏑木博士』の推薦だろうが、今は蜻蛉隊の一隊員に過ぎぬのだ！ 隊長に対しては敬意を払え！」

「私、自分より遅い奴には従う気ないから」

「少し、痛い目をみないとわからないと見た」

「ちよつと、原田さん、ロスヴァイセさん！ 仲間割れしてる場合じゃないですよ！」

今にも殴り掛からんとする原田を必死で止めるまるゆの頭に手を乗せると、あきつ丸はもう一方の手を下から上に、ロスヴァイセを持ち上げる原田の腕を断つように手刀を振り上げる。

風を切る音と共に、原田の腕が大きく上に弾かれ、拍子にロスヴァイセを掴んでいた手が離されて、解放された。

「そこままであります」

「う、ぐ」

「手刀、速いね」

手刀一つで場を収めると、歩き始めながらあきつ丸はまるゆに質問を始める。

「まるゆ、現在の隊全体の状況は？」

「はい、我々を除いた隊員を三班に分け、一班は海上監視、二班、三班はエリアA、Cに分かれ、搜索を開始しています」

「各班の人数構成は？」

「各班全て9人ずつです」

「一班は索敵能力テスト上位5名を残し、4名を二、三班に2人ずつ回すであります」

「了解しました。一班の探知機はどうしますか？」

「探知機2つ共二、三班に回すであります。現状、DW―1がこの海上に出てくることは考えにくい。索敵網のみで十分であります」

「わかりました」

「全員、無線通信は完備してありますな？」

「無論です。状況の変化はすぐに全隊員に伝達されます」

「よろしい。では我々四班はこれよりエリアBに向かい、搜索を開始するであります」

☆

「福引やって帰ってきたらよくわかんない音が鳴って、よくわかんない人達に取り囲まれて、よくわかんない説明されて、挙句よくわかんないまま天龍と龍田が逃げ出しちゃったんですけれどどういうことですか！」

「私もお姉さまと同じ気持ちだ！」

「落ち着け、二人とも」

両手を振り上げてため込んでいた感情を爆発させる私とその隣で同じポーズで叫ぶプリンツ。

その後、矢矧達からこれまでに何があったのか詳しく話を聞き、私は愕然とした。

「――え、つまり龍田が、そのDW―1とかいう深海棲艦だって言うんですか!？」

「あの探知機が鳴ったってことはそういうことでしょうね」

「信じられないんだけど……」

私とプリンツからはその現実を受け入れるような言葉はとて出なかった。この三週間近く共に生活をして、彼女とは多少なりとも親交を深めてきたつもりだ。

だからこそ、彼女がああ深海棲艦だということが信じられない。

外見という意味のみならず、その内面から考えても、彼女が深海棲艦だという結論はあまりに出鱈目に聞こえた。

「あらかた説明は終わりましたか？」

ここまでの状況を聞き、絶句する私達に神通が声をかける。

しかし、私の視線は神通の方ではなく、その背後でこちらを見つめる褐色肌に白髪をたずさえた戦艦に釘付けだった。

「武蔵……さん……」

「ふ、私の顔くらいは覚えていたか。夕張はお前が自分のことを覚えていないものだから拗ねていたぞ？　まあ、当時の記憶が覚束ないのであれば仕方のない話だがな」

「何をしに来たんですか？」

「私達もD W ー1を追ってここまで来た。あきつ丸はまるであれがただの深海棲艦であるかのように説明していたがな、あれはもつと危険な存在だ」

「どういうこと？」

武蔵の意味深な台詞に矢矧が説明を求める。

「ここ最近、鎮守府近海における深海棲艦の突発的な出現が確認されているのは知っているか？」

「そういえば伊58がそんなことを言っていたな」

「ウチにも注意勧告が届いていたわ」

「私達の提督、つまりは元帥だが、彼はこれが陸軍の仕業だと睨んでいる」

「どうして陸軍がそんなことする必要があるんですか！」

私は大声で反論した。同じ、国を守って戦う者が、どうしてわざわざ敵を近海に引き入れるような真似をするのか理解できない。

しかし、武蔵は首を振って続けた。

「真意は定かではないがな。しかし、実際陸軍の動きはまるでそこに深海棲艦が出現するのを予知していたかのようなこととは事実だ」「わからないわね。実際、それが陸軍の仕業だとして、そんなことどうやったらできるのよ?」

瑞鳳の疑問はもつともだ。深海棲艦を鎮守府近海に出没させるなど、方法が思いつかない。

「……元帥は、『権能』絡みと言っていた」

「権能?」

私達の誰もが首を傾げる。

「知らないのも無理はない。これは軍の機密事項だからな。しかし、今回の件に巻き込まれた以上、お前達にも知る権利はあるだろう。神通、構わないな?」

「ええ、別に問題ないと思いますよ」

神通の許可を得て、武蔵は小さく頷くと、再び話を始めた。

「深海棲艦の上位個体の中には普通の深海棲艦にはない特殊な能力に目覚めるものがある。例としては飛行場姫の『損傷回復』、戦艦棲姫の『攻撃吸引』、防空棲姫の『絶対防御』などが挙げられるな」

「それが、権能って奴?」

「理解が早くて助かる。今回の深海棲艦の出没もその権能によって起こされていると考えている」

「で、その権能を持つ深海棲艦がD W ー1、つまりは龍田ってわけね」「所有する権能は『招来』。深海支配海域においてその海域主が持つ権能だ。自身が撃沈されるまで、配下の深海棲艦を無限に召喚し続ける能力と言ったところか」

全ての鎮守府の総力をもってあたる大規模作戦。それはすなわち深海棲艦に制圧された海域、深海支配海域の攻略作戦。

そこでは海域のボスたる海域主の深海棲艦を倒すまで、配下の深海棲艦は無限に復活、増殖し続けると聞く。

それが『招来』の権能。

仲間を自分の元へ呼び寄せる力。

「陸軍はこの事実を隠すために蜻蛉隊を使つてDW―1ごと証拠隠滅を図ろうとしているというのがこちらの読みです」

「証拠隠滅なんてさせる気ないですけどね〜」

「それに、今は権能を発動していかないようだが、このままあれを放つておけば、七丈島が深海棲艦の巣窟になる可能性もある」

「そんな……」

「ちよつと待て、今の龍田は権能を発動してないんだらう？ 何故だ？」

「わからないな。権能の発動に何か条件でもあるのか、それともなんらかの原因で使えないのか」

「そこまで話すと、武蔵は声色を変えて言った。

「それで、そのDW―1と共に逃亡した天龍の扱いなのだがな」
体が跳ね上がる。

天龍はその深海棲艦と共に逃亡した。七丈島艦隊をやめると言うて。

これがどういう意味を持つのか察しがつかない訳ではない。

「私達もなるべく配慮はするつもりだがな、DW―1を撃滅する上で障害となるようなら、容赦はできないと思つてくれ」

「それは、天龍を殺すつてこと？」

「場合によつてはそうなりますね」

矢矧の震えた声に、神通が笑顔でそう返した。

「そう睨まないでください。あくまで死ぬまで抵抗した場合に限った話です。気絶させたり無力化できればそれ以上は何もしませんよ」

「むしろこの時点で私達が報告一つ入れれば天龍に処分許可が下つているんだからむしろそれをしないことに感謝して欲しいです〜」

「……………ええ、それについては感謝しているわ」

絞り出すような矢矧の声。磯風や瑞鳳もどうしていいかわからな
いといった表情をしている。

「できれば私達に協力していただきたかったですけれど、その様子だと無理そうですね。では、私達は私達で動かさせていただきます。七丈島艦隊の皆さんもお好きなようにしてください。あなた達が、DW―

1を守ろうなんて馬鹿な考えに至らない限り、直接的に敵対する気はありませんので」

そう言い残して、神通達は食堂を出て行った。
残された私達は顔を見合わせる。

「どう、しましょう」

「まさかこんなことになるなんて……」

「ど、どうするんだ？ 私達はどうすればいいんだ？」

「お姉さま……」

「……決まっているわ」

一際険しい声をあげたのは瑞鳳だった。

「天龍を助けるか、否か、今私達を選ぶべきはこの二択よ」

「天龍を、助けるか……」

天龍は今、龍田を守るために蜻蛉隊、横須賀艦隊を相手にたった一人で立ち回っている。

その天龍を助けるということは、私達も同じように蜻蛉隊と横須賀艦隊を相手取らなければならないかもしれない。

「大和、あんたはどうしたい？」

「私ですか？」

こういう意思決定は提督代理である矢矧に振るものかと思っていたが、意外にも瑞鳳は私に向けて尋ねて来た。

つい、瑞鳳と目が合う。瑞鳳が何を考えて私にそう尋ねたのかはわからない。しかし、その瞳を見て、少なからず、瑞鳳は私の返答に何かを期待しているように思えた。

「……天龍が龍田を連れて逃げてしまったのは変えようのない事実です」

あの瞬間、天龍は私達全員を裏切ったとも言える。

七丈島艦隊をやめるという発言は、私達全員と龍田を天秤にかけ、それでも龍田を取るといふ彼女の決意だ。

そこまではつきり言われても、私は——

「それでも、私は天龍を放つとけません」

それに、龍田のことも。私にはどうしてもあの龍田が深海棲艦のよ

うには、敵のようには見えない。

天龍が、彼女と共に逃げたのもそこになにか理由があるのではないか。

「私は、龍田が敵で、天龍が間違っているなんて思えません」

「それが、蜻蛉隊と横須賀両方を敵に回すことになるとしても?」

「それは、仲間を助けに行かない理由にはなりません」

まあ、本音を言えば流石にあの二勢力の片方を敵に回すことも避けたいところだが。

そこまで聞くと、瑞鳳はどこか安心したように笑った。

「大和なら、そう言ってくれてくれるって信じてたわ」

「ああ、その通りだ! 私も天龍を助きたい!」

「うん、色々頭がこんがらがってたけど、お姉さまのおかげでスッキリしたよ!」

「全く、多分提督代理として私が言うべき台詞だったのよね、これもまだまだね、やる前から蜻蛉隊とか横須賀艦隊にビビって足がすくんでたわ」

さつきまでの沈んだ表情に、活力が戻っていくのが見て取れた。

「よし、やりましょう! 蜻蛉隊と横須賀艦隊より早く、天龍達を見つけて出すんです!」

私達は手を重ね、気合を入れると、すぐに作戦会議に入った。

☆

「——ふう、くそ、流石は陸軍。結構強えじゃねえか」

地面に伏して気絶している三人の軍服の青年を見下ろし、天龍は肩で息をしながら呟く。

人通りの多い町の方へ逃げる途中、裏路地で偶然遭遇した蜻蛉隊の隊員だ。

なんとか龍田と天龍の二人がかりで倒せたものの、無線で一人が自分達を発見した旨を知らせていたので、急いで離れなければならぬ。

「結構向こうの対応が早えな、この分だと早いところ何か対策しねえとあつという間に取り囲まれちまうか」

「天龍ちゃん……」

「お、こいつ軍刀持ってるじゃねえか！ 助かるぜ、これで少しは楽に

——」
「天龍ちゃん！」

龍田の大声に天龍はゆつくりと顔を向けた。

「なんだよ？」

「天龍ちゃん、あなたは今すぐ七丈島鎮守府に帰るべきよ」

「七丈島鎮守府に？ いや、あそこには俺の刀も艀装もあるから帰りてえのはやまやまなんだが、まだマークがキツイだろうし、とりあえず夜まで待ってから——」

「そういうことじゃないわ！ 私いるとあなたまであの人達に殺されるかもしれないわ！ いや、もしかしたら私にかもしれないわね、だって、私は、私は、深海……棲……艦、だもの」

龍田の声は震えていた。

しかし、天龍はそれを笑い飛ばしてみせる。

「は、馬鹿言え。お前が深海棲艦なら俺達全員とつくにお前に殺されてんよ」

「でも、あの人達は……」

「お前、自分が深海棲艦だと思うか？」

「わからない！ わからないから、怖いのよ！」

突然、お前は実は人じゃない。そう言われたらどう思うだろうか。今までずっと自分を龍田だと思っていた。しかし、本当はそうじゃないかもしれない。自分で自分がわからないことの恐怖。

龍田はそれに押しつぶされかけていた。

両手で自分の肩を抱きしめて震える龍田の肩を掴み、しかし、天龍は言った。

「もう一度言うぜ？ お前は深海棲艦じゃねえ、龍田だ。誰が何と言おうと、お前がどう思おうと関係ねえ、お前は龍田だ。俺がそれを証明してやる」

「……………」

「安心しろ、俺は何があってもお前の味方を張り続ける」

次第に龍田の身体の震えが収まり、呼吸の乱れが止んだ。

「ごめんなさい、少し、取り乱したわ……」

「おう、そろそろ移動するぜ」

「ええ………天龍ちゃん、ありがとう」

「はっ、気にすんなくて、俺とお前の仲じゃねえか」

龍田の表情にようやく笑顔が戻った。

天龍が軍刀を持ってその場を後にするのを後ろから追いかけようと龍田が一步踏み出したその時だった。

「——ッ!？」

「龍田、どうした?」

鋭い頭の痛みに思わず足が止まった。しかし、すぐに痛みは消え去り、なんともなくなる。天龍が駆け寄って龍田の顔を覗き込む。

「おい、大丈夫かよ?」

「……いえ、なんでもないわ。少し、頭痛がしただけよ」

「そうか、よし、行くぜ!」

「ええ、天龍ちゃん」

そうして、すぐに二人の姿は見えなくなった。

☆

一方その頃。

「誰じゃ、君は!？」

「だから、僕はイタリア海軍のエドモンド・ロツソといいまして!」

「なんて!？」

「なあ、僕の日本語、そんなに下手くそかなあ!？」

住宅街で海原さんと出会ったエドモンド達は意思疎通に苦しんでいた。

「うーん、今までの人たちにはちゃんと日本語通じていたみたいだし、聞き取れない程ではない筈なんだけれど」

「お爺ちゃんだし、耳悪いのかもねえ」

「余計なお世話じゃ! 皿! コーラ!」

「ザラです!」

「ポーラだよお!」

「なんて!？」

三人とも中々自己紹介を終えられずにいた。

実際、諦めてその場を去ると言う手もあったはずだが、なんとしてもこのボケ老人に自分達の名前を伝えてみせるという特に意味のない意地が彼らをもう小一時間程その場に留め続けていた。

「いいですか、お爺さん？ 僕の名前はエドモンドです。エドモンド、わかります?..」

「江戸もんっってお前、その顔でそんなわけないじゃろ！」

「顔で名前を全否定された！」

「まあ、偽名だからあつてるっちゃあつてるう」

「しっ、ポーラ！」

「なぬ、偽名なのか！」

「なんでそういう所は聞き取れちゃうのよ!？」

しまったと、三人は額に手を当てた。

「お主ら、儂をからかっておったのか！ 道理で変な名前じゃと思つたわい！ 皿にコーラて！」

「そこは本当に違うわよ！」

「誰じゃ君は!？」

「ザラ！」

「皿!？」

「だから違うって言ってんでしょ！」

「ザラ姉様、落ち着いて！ 暴力は駄目ですう！」

そろそろザラの沸点が近づいてきた。

「よし、ザラ、ポーラ。こうなったら、このお爺さんのお耳にもしつかり届くよう、全身全霊の大声で叫ぶんだ。それがダメだったら、もう諦めよう」

「エド……」

「いいの、諦めちゃって?..」

「ああ、正直、こんなところで小一時間も時間を無駄にしている身分じゃなかったってついさつき思い出したんだ」

「そうね」

「そうだったねえ」

三人の表情に哀愁が漂っていた。

「だから、最後に精いっぱい、自己紹介をして、それで終わりにしようじゃないか」

「ええ！」

「賛成！」

「よし、お爺さん、よく聞いていてくれ、僕の名前はっ！ エドモンド！ ロツソだあああああああッ！」

「私の名前は！ ザラあああああああ！」

「私は、ポーラだよおおおおおおお！」

住宅街のど真ん中で、自分の名前を大声で叫び、息を切らしている三人を見て、海原さんはしきりに頷いた。

「エドモンド・ロツソ、ザラ、ポーラっていうんじやな？」

「——っ！」

海原さんの言葉を聞き、その達成感のあまり三人は肩を抱いて喜んだ。

「やった！ やったぞ！ 僕たちの声がやつと届いたんだ！」

「ええ、頑張った甲斐があったわ！」

「よくわかんないけど、凄くいい気分」

そんな興奮冷めやらぬ中、三人の背後から声をかける人物がいた。

「——あのー、ちよつといいですかねえ？」

「すまない、後にしてくれないか？ 今はこの感動と喜びを分かち合いたい——」

「警察のものなんですけれどねえ、近所で騒いでる外人さんがいるって通報あったんですがね、もしかしてあなた方のことではありませんかねえ」

自分達の後ろに立っていた警官と婦警の姿を見て、三人の表情が凍った。

第八十一話 「私、怒ってるのよお?」

「ふむ、やはり一筋縄ではいかないでありますか」

隊員数名が天龍と龍田と戦闘。そしてあっけなく敗北した知らせを受けてあきつ丸は特にこれといって驚きもせず無感情に呟く。

「戦闘地点を考えると、両名は住宅街からエリアB内の町へ入り、人ごみの中に隠れるつもりかと思われます。どうしますか、隊長? いくら探知機でDW-1を捕捉できても人ごみの中で武器は使えませんが、こちらの足も鈍くなります。それが原因で方が一、横須賀に先を越されれば……」

「その時は横須賀ごと制圧すれば良いのだ、まるゆ」

「それは流石に厳しいと思うけどね」

「貴様、我ら蜻蛉隊の精鋭達が艦娘如きに劣るといふのか!？」

「少なくともあなたじゃ勝てないよ、遅いし」

「貴様!」

「二人とも喧嘩はやめてください!」

三人の喧騒の中、一人何かを考え込むように顎に手を当てていたかと思うと、あきつ丸は笑って言った。

「いや、むしろ人ごみの中に紛れてもらうであります。そちらの方が、都合が良い」

「隊長? どういうことですか?」

「この辺りで一番人通りの多い場所はどこでありますか?」

「事前調査ではこの時間帯では商店街辺りでしょうな。夕飯の買い出しに賑わっているはずですよ」

「では、そこへ。後、他の班にもエリアBまで包囲を狭めるよう連絡を」

「あ、あの、隊長、この島の方々を戦闘に巻き込むようなことは、しませんよね?」

まるゆは心配そうにあきつ丸に尋ねる。

この島に入ってからまるゆを含め、島民から声を掛けられることが

多かった。そして、その誰もが劳いの言葉をくれた。

本土では陸軍が歩いていれば歩行者は道を開けて目を逸らす。

戦争においてほとんど活躍のない陸軍が国内の治安維持に力を尽くした結果がこれだ。国内の犯罪率の減少こそ著しかったが、代わりに国民からはすっかり畏怖の対象である。

そんな視線を日常茶飯事に受けて来たまるゆを含めた隊員達にとって、この島の人達の温かさがどれだけ心に響いたか、あきつ丸自身想像に難くない。

故に、まるゆのこの意見をただ考えが甘いと叱責することはできない。

「当然であります。あんなに優しい声をかけていただいたこの島の方々を危険に晒すなど許されざる悪であります。なればこそ、我々はこれより商店街へと一刻も早く向かう必要があるのですよ」

「そうなんですか？」

「その通り。これは島民を守り、同時にD W ー1を追いこむための一手。そのために——」

具体的に説明をしないまま歩き始めるあきつ丸はそこまで喋って、思い出したように言葉を区切る。

「誰か、そこらへんでマイクか拡声器を調達してきて欲しいであります」

☆

「よし、もう少しで商店街だ。あそこの人通りなら少しはカモフラージュになるだろう」

「でも、私達も敵に気付き難くなるわ。それに、向こうには探知機みたいなもので私達を追って来る。どこに逃げても逃げ場は……」

「そうだな、この島の中じゃもう逃げ場はねえ。蜻蛉隊だけじゃねえ、横須賀も、後、多分あいつらも追って来てるだろうしな」

天龍は寂し気な表情でそう呟く。

「天龍ちゃん……」

「いや、すまねえ。とにかく、今は逃げ続けるしかねえんだ。チャンスが来るまではな」

「チャンス?」

「なんとか夜まで持ちこたえりや、夜目の効く艦娘俺達の方が動きやすくなる。そこがチャンスだ」

天龍は自信ありげにそう頷いてみせた。

「わかった。天龍ちゃんを信じるわ。きつと、チャンスを掴みとつてみせる」

「お、なんだよ、ようやく腹くくったのか?」

「ええ、天龍ちゃん。私、怒っているのよお? 突然やってきて私がDW-1とかいう深海棲艦だなんて決めつけて、横暴よね? 私が誰かは私が決めること、赤の他人に口出しされるいわれは一切ないわあ」
「ようやく、らしくなってきたじゃねえか」

二人が笑い合っていると、そこに、中年の男性が現れ、天龍達を指さして叫んだ。

「天龍!」

「おお、酒屋のおっちゃん。配達の帰りか?」

「おい! 天龍を見つけたぞ! 陸軍の人! 聞こえるか!?!」
「なっ!?!」

突然その場で大声をあげて蜻蛉隊を呼び始める男性に、天龍は顔を強張らせた。

「やべえ、龍田、走るぞ!」

「え、ええ!」

何が起こったのかわからないが、とにかくその場に留まるのは危険と判断し、二人は走り始める。

「あ、天龍だ! 陸軍の人! こっちだ!」

「向こうに逃げたぞ!」

「協力感謝します! 隊長に連絡しろ! DW-1を発見した!」

次々と、自分たちを見つけた何人かが天龍達を見つけるや否や声をあげる。

さらにそれを聞きつけたのか、後ろからは怒声と軍靴の音が聞こえてくる。

「やられた、あいつらの仕業か……! 商店街はやめだ! 迂回する

ぜ！」

人ごみに紛れるつもりが、むしろそれを逆手に取られた。

そのことに気付いた天龍は小さく舌打ちをした。

☆

『——えー、皆様、お騒がせしております。私はあきつ丸。陸軍の軍人です。今日は皆様に、注意勧告とご協力をお願いするため、お話をさせていただいております。どうか、一時私の声に耳を傾けていただきたいのであります』

拡声器を持って商店街の真ん中で声をあげるあきつ丸。それに商店街を行き交う人々は何事かと足を止めて彼女の周りに集まってくる。

『実はこの度、我々はこの島に身を潜めている深海棲艦を捕らえに参りました』

深海棲艦。その単語一つで人々は不安げにざわめき始める。

『我々も全力を尽くし、深海棲艦を追い詰めておりますが、奴は艦娘の形に姿を変え、さらにはあるうことかこの島の艦娘の一人を洗脳し、操っているであります』

『この島の艦娘ってことは、七丈島鎮守府の艦娘か!?!』

『あの子達、私よく知ってるよ。どの子も愛嬌があって良い子達ばかりさ』

『瑞鳳さんを筆頭に美人ぞろいだしな』

『俺プリンツさん派』

『結構ちっちゃい子もいたねえ。ほら、ビッグスプーンでよく美海ちゃんと働いてる磯風って子』

『矢矧さんには困った時に相談乗ってもらってるから俺達は頭上がんねえよ』

『大和ちゃんとはここで買い物してる時に何度も会うわ。この前も肉じゃがのコツ教えてもらったもの』

『天龍は儂の釣仲間じゃよ。若いのに結構根性ある奴じゃて』

島民の七丈島艦隊の面々に対する想定以上の好評具合にあきつ丸は内心ほくそ笑む。

『深海棲艦に洗脳された艦娘は天龍であります。深海棲艦は龍田の姿に化けて天龍を洗脳して人質とし、我々から逃亡を続けているのであります』

「なっ、天龍が!？」

「畜生、深海棲艦の奴、ゆるせねえ!」

「龍田って、最近この島に流れ着いたっていう?」

「私見かけたことあるわよ。怖いわあ」

あきつ丸は曇みかけるように続けた。

「我々は深海棲艦を捕らえるだけでなく、天龍も救いたい。そのために、皆さんにもご協力を願いたいのであります」

「協力してえのはやまやまだけどよ、具体的にどうすりやいいんだよ?」

「私そんな腕つぶしなんて強くないわよ?」

『皆さんには天龍を見つけたら、声をあげて我々を呼ぶか、私と同じ服装をした人間に報告をしていただきたいのであります。できる範囲で構いません。相手は深海棲艦であります、絶対に無茶はせず、危険を感じたならまず逃げることを優先して欲しいのであります。また、このことをまだ知らない方にも教えていただけると尚ありがたいのであります』

そこまで聞いた島民達は協力する意思を示すようにあきつ丸に頷いてみせる。

最後の仕上げとばかりにあきつ丸は声をさらに張り上げた。

『どうか! この島の平和を守るため! 天龍を救うため! 皆様のお力をお貸しく下さい! 我々と、この島の全員の力で、愚かな深海棲艦を倒してやろうではありませんか!』

「よし、任せておけ!」

「見かけたら報告するだけでいいのね。それで天龍ちゃんを助けられるなら喜んで協力させてもらうわ」

「おし、早速配達しながら探してみるぜ!」

「深海棲艦に島の団結力を見せてやらあ!」

そう言って散っていく島民達。

予想通りに事が運んだことに満足げに笑った。

「お疲れ様です、まさか、あそこまで島民の方々が協力的に動いてくれるなんて……」

「この島の人々は優しいでありますからな。それにこの島のような小さなコミュニティは結束と仲間意識が強い」

「七丈島鎮守府の艦娘が予想外に島民に慕われているのもありましたな」

「ええ、しかし、何よりも大きいのは。自分たちの為す行動が、『正義』であると裏打ちをしたこと。人は誰しも、正しい選択の中にいたいと望むものでありますからな」

—— 私自身も含めて。

内心であきつ丸はそう言葉を付け加えた。

☆

「くそ、人ごみに紛れる筈が、人ごみ自体が監視の目になっちまうとはな」

路地裏で荒い息を整えながら、天龍は呟いた。

「どうする？ だんだん軍服の人間が多くなってきた。きつとこの周辺に集まってきてるんだわあ」

「商店街は迂回して抜けたが、結局何人かには見られて陸軍を呼ばれちまった。このままじゃいずれは見つかるな。かといって迂闊には動けねえ……くそ、ここ抜ければすぐ二原山に入れるってのに……」

「山に入るつもりだったの？」

「ああ、向こうが何人か来てるか知らねえが、山を囲むような人数はいねはずだ。そんな人数連れてきて、しかも探知機まであんならとっくに見つかってる。それに、山狩りは滅茶苦茶神経使う上に時間がかかる。向こうを疲弊させて、しかも夜まで時間稼げるって思ってな」

夜になればこちらのものだ、と天龍は息まぐ。

「——向こうでDW-1と天龍を見かけたと報告が入ったぞ！」

「探知機も反応したらしい、急ぐぞ！」

天龍達の隠れる裏路地に表通りを走り抜けていく蜻蛉隊の声が響く。

一瞬、この場所が勘付かれたかと冷や汗を流したが、何故か足音は遠ざかっていく。

「……なんだ？ 誤報か？」

「よくわかんないけれど、彼らがこの付近からいなくなったってことは今がチャンスかもしれないわよ」

「おし、よくわからんがラッキーだ。一気に駆け抜けるぜ」

裏路地から出て二人は人通りの少なくなった道を一気に駆け抜ける。そして、ようやく二原山の麓に着いた所で、足が止まった。

「やりまくした〜！ 探しもしてないのに向こうから見つかりに来ましたよ。必死に探してる蜻蛉隊の人達が馬鹿みたいですね〜」

「本当ですねえ、綾波さんの幸運属性の賜物ですかねえ。私はもう少し気長に散歩していたかったんですけど」

「神通に、綾波……！」

山を目の前にして最悪の敵に遭遇してしまった。

横須賀艦隊の艦娘。しかもそれが二人。

天龍は諦めたように笑いながら尋ねる。

「見逃してくんねえかな？」

「いいですよ」

「駄目で〜す」

「どつちだよ!？」

矛盾する返答に思わず天龍の声が大きくなる。

神通と綾波も顔を見合わせてなにやら無言で見つめ合っている。

二人とも終始笑顔なのが逆に怖い。

「じゃあ、神通さんはそこで立って見ているだけでいいです。全部私がやりますから」

「そうですか、頑張ってくださいね」

ほぼ無言のまま話がまとまったらしく、神通は数歩下がり、同時に綾波が腰を低くして地面に左手をつける。右手は力を溜めるように曲げ、脇の下で拳を固く握っている。

どうやら戦闘態勢に入ったらしい。

「くそ、やるしかねえか！ 龍田、油断すんなよ！」

「当然よ、返り討ちにするわあ」

天龍が軍刀に手をかけ、龍田が両の手を開手にして綾波へ向け、構える。

「いきまゝす」

瞬間、綾波の両の足と地面につけていた左手が地面を蹴った。

地面に三つほど小さなクレーターを作り、爆発的な加速をして天龍達に一直線に突撃してくる。

並の艦娘の航行速度よりも断然速いと確信する。

しかし、天龍の目が追いきれない程の速度ではなかった。

「ふっ！」

「——ッ！」

間合いに入った瞬間に、天龍の軍刀が光の線を描く。

しかし、綾波もそれに気づいたのか、間合いに入る寸前で足を強引に前に蹴って後ろに飛ぶことで居合を回避する。さらには、そこからもう一度地面を蹴って再び天龍に向け加速してみせる。

(居合の弱点は攻撃の後です)

「ぐっ！」

居合を空振り、刀を振り切った状態からでは、切り返すより早く綾波が懐に入る。

それを防ごうと、龍田が綾波の真横から掌底を放つ。

ほとんど視界の外からの攻撃、仮に視界の端の龍田に気が付いたところで、反応も反射も間に合わない。

しかし——

「甘いです」

「えっ!」

それは、最早、神域の反応速度であった。

綾波の目が一瞬赤く光り、ギョロリと天龍から龍田の方へ向けられる。

悪寒を感じた時には既に遅く、綾波は龍田の突き出された掌底をその手首を掴んで防ぐと、そのまま自分に向けて彼女の身体を引っぱり、同時にもう片方の手で拳を彼女の腹部に叩き込んだ。

「おつ……えつ……！」

「てめえ！」

胃の中身が逆流し、龍田の口から吐き出される。

天龍が綾波に向けて振り下ろした刀も容易くサイドステップで避けられ、同時に懐へ踏み込まれることを許してしまう。

距離を取ろうとする間もなく、がら空きの脇腹に綾波の拳が叩き込まれ、天龍は顔を歪め、地面に膝をついた。

「なんつー出鱈目な速度と力……お前本当に駆逐艦かよ」

「なんて凡骨な動きと技術、あなた達本当に深海棲艦と軽巡洋艦ですか？」

笑顔で毒を吐く綾波に天龍と龍田は徐々に気圧されていく。

ほんの数秒の戦闘、僅か数撃にしかなかった攻防。それだけで目の前の小さな少女が今の自分達以上の力を持っていることは十分すぎるほどに痛感できた。

「くそ、こんな使い慣れねえ軍刀じゃなきゃ、もう少し太刀打ちできたんだがな」

「弱い人ほど負けた理由を自分以外に求めますよね」

「……天龍ちゃん、悪いんだけど、その軍刀の鞘、貸してもらえる？」

「——！　おう、受け取れ！」

天龍は鞘を龍田に投げる。

口元を拭いながら龍田はそれをキャッチし、片手で鞘を華麗に回転させて見せる。

それを綾波は興味深げに見つめていた。

「棒術ってやつですか？」

「私、怒ってるのよお？」

「そうなんですか？」

「綾波ちゃん、武器って大事よ？　武器一つのせいで天龍ちゃんはあるに勝てなくなった」

鞘の中間と端を持ち、龍田が構える。

「でも、今からは逆。武器一つのせいで、あなたは私に勝てなくなるわ」

雰囲気が変わった。

後ろで退屈そうに綾波達の戦闘を観察していた神通の目がはつきりと見開かれる。

「面白い冗談です、癒されますねえ〜————やってみてくださいよ」

朗らかな笑みを見せる綾波の目が、再び赤く光った。

☆

一方その頃。

「へえ、イタリアからわざわざこんな島まで来たんだ、提督さんは」

「はい……」

「イタリアじゃ住宅街のど真ん中で騒いでも注意はされない？」

「いえ……」

「じゃあ、駄目だよね」

「すみませんでした……」

「ああ、エド！ エドが日本の国家権力にすっかり委縮してしまっているわ！」

「この人こわーい」

表情は笑っているが目が笑っていないベテランの少しずつ逃げ場を防いでいくような説教にエドモンドはもう涙目だった。

いや、たった今頬を透明な液体が伝った。

そして、それをザラとポーラは見ないふりをした。

「いや、先輩ちよつと寝不足でしょね！ 機嫌悪いんですよ！ 後で後輩の私がキツくいいきかせておきますんで！ はい！」

隣の暑苦しい後輩婦警はその様子を見かねてエドモンドにフオローを入れる。

「ねえ、誰のせいで寝不足になってるのか覚えてるかな？」
「……………」

「書類を期日までため込んでたのは誰だったかな？」

「私です……」

「で、それ一人で終わらせたんだっけ？」

「違います……」

「誰に手伝ってもらったの？」

「先輩です……」

「結局何時に書類終わったんだっけ？」

「今朝の…6時」

「7時だね」

「すみませんでしたッ！」

「ああ、婦警さん！ 婦警さんが鬼の先輩警官にすっかり委縮してしまっているわー！」

「やつぱりこの人こわーい」

表情は笑っているが目が笑っていないベテランの少しずつ逃げ場を防いでいくような説教に婦警はもう涙目だった。

いや、たった今頬を透明な液体が伝った。よく見たら汗だった。

そして、それをザラとポーラは見ないふりをした。

「はあ、俺も少し八つ当たりが過ぎてキツク言い過ぎました、申し訳ありません」

「い、いや、そもそもこつちが迷惑行為をしたわけで、君達は仕事をしていただけであって頭を下げられるようなことは……」

「ああ、エド！ エドが突然頭を下げられて困惑してしまっているわー！」

「ザラ姉様、その喋り方気に入ったの？」

「そうです、そもそも私が原因なんですから先輩が謝る必要はないですー！」

「そうだよね、そこまでわかって、なんでお前の頭は俺の頭上に見えるのかな？」

「申し訳ありませんでした！」

「土下座！ 日本の伝統文化！ 初めて見たわ！」

頭を下げたベテランに睨まれ、思わずジャンピング土下座を繰り返してしまった婦警にザラは大はしゃぎであった。

「お嬢さん、どうかお顔をあげてください。そんなところに頭をつけられては折角の君の可愛い顔が見えないじゃないですか」

「ああ、エド！ エドが先輩警官に怒られて精神的に弱った婦警さん

をここぞとばかりに口説き始めたわ！ 流石エドだわ、何考えているのよ、この恥知らずのナンパ男！」

(頬膨らませて嫉妬するザラ姉様かわいい)

しかし、婦警は顔をあげると引きつった顔でエドを見る。

「ごめんなさい、台詞くさすぎて無理です」

「ぐはっ！」

「ああ、エド！ 久々に瞬殺されちゃって、エド！ 残念だったわね！」

(安心して笑みが隠し切れないザラ姉様かわいい)

「悪いですけど仕事なので、そういうのはやめてもらっていいですか？」

「え、先輩嫉妬!!? それ、私を他の男に近づけたくないって嫉妬ですか!!? うおおおお、熱くなってきたああああ！」

「違うよ」

「冷めてる！」

そんなやり取りをしていたその時、エドモンドは見た。

「ぜえ、ぜえ……瑞鳳！ 次はどこ行けばいいんですか!?! ……はあ

!?! 遠すぎです！ 後どれだけ走らせるつもりですか!?!」

「お姉さま！ ファイトです！」

「なんであなたはずっと並走してて全然疲れてないんですか!?!」

片方は後ろ姿しか見えないが、長居黒髪をポニーテールにした少女。

そしてもう一人は横顔からおそらくはゲルマン系と思われる金髪の少女。

エドモンドはその金髪の少女から目が離せなくなっていた。

「ふつくしい……」

「エド?」

エドモンドの様子がおかしいことに気が付いたザラが声を掛けたと同時に少女たちはどこかへと走り去っていく。

反射的にエドモンドの身体が動いていた。

「待ってくれ！」

「ええ!?! どうしたの、エド!?!」

「あく、それじゃあ、お勤めご苦労様です」

「ええ、七丈島で良い一時を」

「熱い一時を!」

警官に見送られ、エドモンド達は大和とプリントを追って走り出した。

第八十二話「この武蔵、常に一番弱い者の味方につくと心に決めている」

遡ること一時間ほど前。

「さて、私達が蜻蛉隊、横須賀両勢力の隙を縫って天龍達に追いつく方法だけだ」

ホワイドボードの目の前で咳払いしながら矢矧は食堂の一つのテーブルに集まる大和、磯風、プリンツ、瑞鳳を見渡して言った。

「待つ、ことよ」

「待つ、ですか？」

「どういう意味だ？」

「そうね、私もそれが一番手っ取り早いと思うわ」

大和と磯風が疑問符を浮かべる中、瑞鳳だけは矢矧の意見に納得したように首を縦に振っている。

「天龍達はこの鎮守府に戻ってくる可能性が高いわ」

「そうなんですか？」

「だって大和、考えてもみなさいよ？ 既にこの島には蜻蛉隊と横須賀艦隊がうじゃうじゃしてんのよ？ そんな戦力的にも物量的にも不利な状況でこの小さな島ですつと逃げ続けることなんて不可能でしょ」

「む、確かにそうだな」

「本気で天龍が龍田と共に逃げるつもりなら、考えることは一つよ」

七丈島からの逃亡。そえが最も現実的な方法に違いない。

しかし、艦娘の天龍にはそのために艀装が必要だ。そして、その艀装がどこに保管してあると云えば、当然、この七丈島鎮守府であろう。

「天龍達はまたここに帰ってくるってことですか!?! 艀装を入手するために!?!」

「そうよ、だから最終的に私達はここで待っているだけで天龍と再会できる」

「ま、そう上手くはいかないんだけどね」

「……そうでしょうね」

「まだ何かあるんですか？」

今度は矢矧に代わって瑞鳳が説明をする。

「天龍達がここに帰ってくる大前提として、あいつらが蜻蛉隊、横須賀両方の追跡を躲すことが絶対条件よ。でも蜻蛉隊は人数がいるうえ、探知機まで持つてる。加えて、人数はいないけれど、まず遭遇したらジエンドの横須賀がうろついている。この状況で天龍達が上手く逃げてウチに帰ってくるのを信じて待つっていうのはあまりにご都合すぎるわね」

「じゃあ、どうするんだ？」

「当然、私達でサポートするのよ。天龍達がここにちゃんと帰って来られるようにね」

「天龍達の逃走をサポートしつつ待機。これが私達の作戦になるわ」
捕まえたいのか逃がしたいのかよくわからない作戦で頭が混乱しそうになるが、取りあえず作戦の主旨は理解できたと大和は大きく頷く。

磯風やプリンツも同様に首を縦に振っている。

「で、具体的にはどうサポートするんだ？」

「蜻蛉隊、横須賀になくて私達にあるものって何かわかる？」

「この島の地理情報とか、でしょうか？」

「それもあるわ。でもこれは多分蜻蛉隊もある程度情報は集めてきてるでしょうし、それほど大きな差は出ないと思うわ」

「目、ね？」

「その通り」

矢矧の返答に満足げに瑞鳳が頷いた。

「目？」

「具体的には、艦載機よ」

「えー？ 確かに横須賀には艦載機搭載艦はいないけど、蜻蛉隊にはあ？」

「いないわ」

プリンツの疑問に矢矧が即答する。

「さつき海にいた他の蜻蛉隊の中に飛行甲板を装備しているタイプ
の艦装はなかったわ。何より、艦載機を持っているのならもう天龍達の
追跡に使ってるし、下手したらもう捕まってるわ。その様子がない
てことはそういうことよ」

「艦載機を操縦するのは妖精さんよ。あの陸軍式艦装とやらには妖精
さんは寄り付かなかったんでしようね、空母系がないのはそれが原
因かもね」

「ほーこーせいのがいいですね」

「そうなんですか」

「ここぞとばかりに戦闘糧食妖精さんが机の上に降ってきたかと思
うとそう言いながらイヤイヤと首を振っている。

「可能性があるとすれば、カ号観測機、三式指揮連絡機を装備できるあ
きつ丸だけけど、まあ、持ってきてないんでしょうね。天龍達絶賛逃
走中だし」

「もってないです。あのひとから同志のけはいしませんでしたので
で」

「まあ、そういうわけで、今七丈島の制空権は私達が確保したも同然の
状態ってわけ」

「その艦載機を使って天龍と龍田、蜻蛉隊、横須賀の動向をチェックし
つつ逃走サポートをするわ」

「これならば数や戦力で他二勢力に劣る七丈島艦隊にも勝ちの目が
生まれる。」

「あの、艦載機で天龍達の居場所がわかったなら、普通にそこに行けば
良いんじゃないですか?」

「それは——」

「——それは愚策中の愚策と言わざるを得ないな」

私の質問に矢矧が口を開きかけたその時、食堂に凜とした女性の声
が響き渡る。

瞬間、瑞鳳が何かの気配を察知したのか勢いよく立ち上がり、上を
見上げる。

「上かつ！」

「いいや、下だッ！」

「きゃあああああああああ!？」

瑞鳳が悲鳴をあげたのも無理はない。

自分の足元から聞こえる声に上から下へ即座に視線を映せばそこには自分の足の下に横たわり、決め顔でほくそ笑む武蔵の姿があったのだから。

「なんで！　なんで私の足の下にいるのよ!？」

「ふむ、体重は32.6 kgといった所か……痩せすぎだな、もつと肉を付けた方が健康的といえる」

「女の体重を堂々とばらしてんじゃないわよ、てかなんでわかんよ、変態！」

「え、瑞鳳の身長が大体150 cmとしてBMIが……やべえ、すごいですね」

「計算しなくていい！」

「……羨ましい」

「矢矧！　あんたが最後の頼みなんだからしつかりなさい！」

「ふむ、やはり負荷が足りていないな、大和、お前も乗ってみてくれな
いか」

「絶対に嫌です」

「あんたいつまで私の踏台になってんのよ！　いや、私が退けばいい
んだわ、これ！」

「させると、思うか？」

「足掴むな！」

「何を言われようと私はこの手を離さん！　ほら、なんとでも言え！
言ってみろッ！」

「あんた罵倒されたいだけでしょ!？」

突如、武蔵の出現によって食堂は大混乱となった。

☆

「いや、新鮮な反応をありがとう。横須賀の奴らではこうはいかない。
貴重な体験をさせてもらったよ」

「……疲れた」

「話が中断してしまったわね」

「そうだな。お前達が艦載機で天龍を探して直接会いに行くことについてだったか。繰り返すが、それはやめた方がいい」

そう言いながら、武蔵は再び席についた七丈島艦隊の面々を見ながら、同様に椅子に座るように腰を落とす。

しかし、そこに椅子はない。

「……なんで空気椅子してるんですか？」

「試さずにはいられないのさ、己の大腿四頭筋というやつをな……ッ！」

「大和、もう無視しなさい。話が進まないわ」

「それで、何故天龍に直接会いに行くことがダメなのか。まあ、矢矧と瑞鳳はわかっているようだが、それは当然お前達が直接天龍の元へ向かうことで他の勢力にも見つかる可能性が高いからだ」

武蔵は空気椅子状態にも関わらず、苦悶の表情一つ見せずに涼しげな顔で説明を始めた。

「天龍が七丈島艦隊から離反したのは周知の事実。だが、かといって七丈島艦隊との接触がなくなるのは我々も蜻蛉隊も考えてはいない。むしろ、お前達の向かう場所に天龍がいる可能性が高いとすら思っている。お前達がこの状況で外に出ていくとすれば、それは天龍との接触を狙ったものに違いないと考えられるからだ」

確かに、今の状況で、外で七丈島艦隊の面々が動いているのを見れば、天龍との接触が目的に違いないと考えるだろう。

大和は今、艦載機で天龍達を見つけて天龍達の元へ行けば手っ取り早いと言った。だが、そんな単純な思考で動くことは、みすみす天龍の元に蜻蛉隊、横須賀艦隊を案内しているようなものだ。

「故に、やはりお前達は天龍がここに帰ってくるのを待つべきだ。確実性というのもあるが、なにより敵に余計な情報を与えないという意味でもな」

「な、成程、すみません確かに軽率な意見でした……」

「ていうか、武蔵。あんたも敵側よね？ いっちよまえにスパイのつ

もり?」

大和は自分の意見の危険性に気付き、潔く引き下がる。その一方で瑞鳳は厳しい懐疑の視線を武蔵に投げかけていた。

「ふ、良い目だ。そうでなくてはな。私を信用するなどそれこそ愚の骨頂、その懐疑の目を決して緩めるなよ?」

「敵意を楽しんでんじやないわよ、変態」

「生憎、性分だな。しかも私自身、案外これが気に入っている」「いけ好かないわね」

まるで目の前の艦娘の底が見えない。瑞鳳は武蔵から感じる存在自体のステージの違いに、結局気圧され、一步引くことになった。

少なくとも、向こうに敵意がない限りは、こちらから仕掛けることはしてはいけないと判断した。

「安心しろ。この武蔵、今回はお前達側につくことにした。この作戦を神通達に密告もしないし、できる限りの協力は約束しよう」

「……理由を聞いても構いませんか?」

「そうね、私達につくことについてあなたには何一つメリットがあるようには思えないもの。私もその理由は聞きたいわ」

大和と矢矧に武蔵は一変、真剣な表情になると口を開いた。

「この武蔵、常に一番弱い者の味方につくと心に決めている」

そして、付け加えるように、

「一番痛い目に逢える確率が高いからな」

そう言いながら、彼女は楽しそうに笑った。

☆

「——よし、見つけたわ」

瑞鳳が艦載機を数機発艦させてから十分程度で、天龍達の所在は割れた。

素早く、事前に広げていた七丈島の地図に瑞鳳が天龍の見つかった場所を×印で書き、進行方向を矢印で書いて見せる。

「……どうやら商店街の方に向かっている、みたいですね」

「木を隠すなら森の中、人を隠すなら人ごみの中ってことかしらね」

「天龍にしちや悪くない手ね」

瑞鳳が感心したように笑っていると、突然、その表情が険しくなる。「拙いわね」

「どうしたんだ？」

「商店街であきつ丸がなんか演説してるみたいなのよ。島民に天龍を探すのを手伝わせる気ね」

「おい、それじゃ商店街に向かってる天龍は敵地に飛び込みについてるようなものじゃないか！　なんとか防がないと捕まるぞ！」

「流石に今からじゃどうにもならないわよ」

「じゃあ、天龍にこのことを知らせましょう！　艦載機を使えば可能じゃないですか!？」

大和の意見に矢矧は顔をしかめる。

「今、天龍の中で私達がどういう認識になっているのかわからない限り、接触はさけるべきだわ。もし、艦載機を警戒されたら今後天龍の動向を探るのが難しくなる」

「しかも、それで天龍の足を鈍らせてしまえば、蜻蛉隊と横須賀に現れやすいよう追い詰めるようなものよ」

「なんか、面倒くさいなあー！」

「難しいな……」

プリンツと磯風が悩ましそうに頭を抱えている。

「まあ、こればかりは直接話し合うしかないからな。今はチャンスを待とうじゃないか。何、焦らしプレイだと思えばこれくらい」

「武蔵さんはいつも一言多いですよね」

「途中まではかっこいいこと言ってるんだがな、シメが、な」

「大和」

武蔵に呆れている大和の傍へ、いつの間にか瑞鳳がやってきていた。

その表情は満面の笑みに包まれている。

しかし、瑞鳳に限ってその表情からは嫌な予感しかない。

「大和、囃、いつてきて」

「……マジですか」

「多分、天龍ならギリこの状況でも危険を察知して逃げる筈よ。だか

ら、あんたが蜻蛉隊の包囲網を攪乱しなさい。大丈夫よ、指示は私が出すから、あんたはただ私の言う通り走ればいいの」

「私の扱いがあんまりだ！」

「お姉さまの扱いがあんまりだ！」

大和とプリンツは同じポーズで瑞鳳に抗議する。

そんな大和に瑞鳳は彼女の耳元まで口を近づけ、周囲には聞こえないように呟く。

「あなたなら、あの探知機にも反応するでしょ？」

「——ッ!? 瑞鳳、あなたは……なんでそこまで私のことを……」

「あら、初めて会った時にも言わなかったかしら？ データと分析に基づくプロファイルよ、プロファイル」

瑞鳳は悪戯っぽい笑顔でそう言った。

☆

「——それで、困がなんでこのメンバーなんですかねえ」

「私はお姉さまと一定範囲離れると死んじゃう病ですから！」

「はっはっは、なんだか荒事の匂いがしたのでな、私としては行くしかあるまいよ」

「やりにく！ 変態だらけじゃないですか、何このパーティー!?!」

『ほら、文句言ってるんで早く走りなさい』

耳に付けたイヤホン型通信機から瑞鳳の声が聞こえる。

私達は現在、天龍達を囲もうとしている蜻蛉隊の包囲網の外周に向かっていている。

「天龍達は無事ですか!?!」

『ええ、島民の一人に見つかったけれど、危険を察知して商店街を迂回したわ。判断が早かったのが功を奏したわね。でも、流星にこのままじゃ身動きがとれないまま囲まれるわ。天龍達のいる場所からできる限り離れた所で困役を始めてもらおうわよ。次の角を左に曲がって!』

「はいー!」

言われた通り角を曲がる。

『よし、そこで大声あげて！ 天龍を見つけたって』

「天龍がここにいるぞおおおおおお！」

「とつちめろおおおお！」

「プリンツ、とつちめる必要はないですから！」

「ふ、だが、しつかり効果はあったようだな」

すぐに、足音が近づいてくるのが聞こえ、次第に男達の慌ただしい声も聞こえてきた。

『仕上げよ。私が合図したら元来た道を全力で走りなさい。

……………今！ 走って！』

同時に、ピーピーという先刻も効いた探知機の音がかすかに聞こえる。

「探知機が反応した！ この辺りにいるぞ！」

「急いで連絡を！」

「ん、あれは七丈島艦隊の艦娘！ 天龍とDW―1と合流するつもりかもしれない！ 追え！ 捕まえて拷問すれば居場所を吐くかもしれない！」

後ろから響く怒声にさらに私の足に籠る力は強くなる。

「うわわわわわ！ 拷問とか言ってますよ!? これ捕まったら本当に

ヤバイ奴じゃないですか!」

「作戦大成功だね！」

「プリンツには後ろの怒声が聞こえてないんですか!?!」

「……………私はもうダメみたいだ。ここは私に任せて先に行け！」

「何』くそ、さつき受けた傷が……………』みたいな演技してんですか!?! あなた拷問されてみたいだけでしょ!?! 露骨に足緩めないでください!」

『そうよ、別に今の速度維持してれば後は私のナビゲートで撒けるから。はい、次の角右ね』

瑞鳳の言う通り、すぐに後ろから追って来る蜻蛉隊の気配はなくなった。

一息ついて瑞鳳に意見を求めようと耳のイヤホンに触れると、何やら相談中のようなだった。

「何かあったんですか?」

『次の天龍の動きがわかれば、包囲網の誘導と攪乱に現実性が増すんだけど、いまいちわかないのよねえ』

今は一度目の囿による攪乱。種を撒いたに過ぎない。

これから数度にかけて攪乱を行うことで徐々に蜻蛉隊の包囲網から天龍達が外れるよう誘導していくのがこの囿作戦の主旨だ。

しかし、そのためには次に天龍がどう動くのかを予測する必要がある。そこを読み違えるとかえって天龍を追い詰めることになりかねない。

『……ちよつと、この位置じゃ目的が絞れないわね。矢矧、あなたの意見を頂戴』

『本来、天龍達は商店街を通るつもりだった。しかし、そのルートが使えなくなり、急遽迂回し、今この地点で身を潜めてチャンスを伺っている……この迂回ルートが出鱈目なものではないとすれば、多分、目的地は山だと思っわ』

「山、二原山ですか？」

『ええ、私ならこの状況なら山に身を潜めるのが最善と考えるわ』

「山に籠ってどうやって鎮守府に戻るのお？」

『夜まで時間を稼ぎ、闇に乗じて鎮守府に戻るつもりじゃないかしら』
『成程、確かに艦娘は夜目が効くけれど、蜻蛉隊の隊員は大多数が人間みたいだから包囲網を抜けるには闇に紛れるのが一番都合がいいわね。理にかなってるわ』

矢矧の推測に瑞鳳が同意を示す。

この二人が参謀に回るとここまで心強いのかと改めて私は感嘆の息を洩らした。

『よし、そうとわかれば後は簡単よ。大和、今から言う場所に走りなさい！』

「はい、任せてくださいー！」

☆

「——ぜー、ぜー、つ、疲れた……」

「お姉さま、お水です！」

「あ、ありがとうございます」

港まで帰って来た私は体力の限界と言わんばかりに足を止める。すかさず汗だくの私にプリンツが水の入ったペットボトルを渡してくれた。ありがたくそれを受け取った私はそれを一気に飲み干した。

プリンツと武蔵も多少汗はかいているが、私程疲労している様子がない。この変態共は化け物か。

「その息苦しさをしっかり覚えておけ。私は、それを記憶に刻み損ねたことを今激しく後悔している」

「あなたと一緒にしないでもらえますか？」

「お姉さまの汗……！　はあ、はあ……！！」

「おすわり」

「くうーん」

お預けをくらった犬のような声をあげるプリンツを見てため息をつきながら私は汗を拭う。

この数十分ほとんど走りっぱなしだったが、おかげで随分と包囲網を誘導できたようだ。

先刻、瑞鳳からも天龍達が山に向けて動き始めたと連絡が入った。

これで任務完了か。そう私が安心した、そんな時に限って、想定外の事態というものは起こるのだ。

『なああああああ?!　大和、プリンツ急いで！　最悪よ！　天龍と

龍田が横須賀と鉢合ったわ……』

「はあああああ?!」

「それゲームオーバー案件だよ！」

『ああ、もう、こっちのナビゲートに集中してて気付くのが遅れたわ！

あの二人なら多分、すぐにはやられない筈！　取りあえず住宅街エ

リアまで走って！　二原山への最短ルートナビゲートするわ！』

すぐに走り出そうと住宅街に向かって身を翻したそこに、さらなる『不測の事態』が立ってこちらを見ていた。

「——やあっと、見つけたでありますよ？　鼠さん方」

悪寒が走り、思わず体が震えた。

死人のような肌と死んだ目を持った得体のしれぬ不気味な女。

蜻蛉隊隊長あきつ丸が猟奇的な笑みを見せているのが見えた。

「な、なんで、どこから来たんですか!？」

『は!? あきつ丸!? 嘘でしょ、寸前まで周囲に近づいてくる敵なんていなかったはずよ!』

「成程、海から回り込んできたか」

あきつ丸の足元が不自然に濡れているのを見て、武蔵は呟いた。

「ええ、少し前から上空を艦載機が飛び回っているのには気付いていたでありますからな。島内の監視にばかり目が行っているであろうと想定し、海から回り込んだ次第であります。いや、港にいてくれて探す手間が省けたであります」

『ごめん、大和、プリンツ……私のミスだわ』

あきつ丸の勝ち誇った声を聞き、瑞鳳が悔しそうに唇を噛んでいる姿が浮かんでくるようだった。

「さて、探知機が反応し、かつあなた方がここにいることからD W—1はこの付近にいますのでありませんよう? 正直に答えてくだされば見逃してあげましょう」

『全速力で逃げなさい! そこに隊員が集まってきているわ!』

「な! なんてこの場所が……まだあきつ丸は港に私達がいることを連絡していない筈——」

『——いや、港にいてくれて探す手間が省けたであります』

「あの時!」

「逃げ場はない。従属か死か、正義か悪か、己で選ぶが良いであります」

「ふ、成程、いよいよ私の出番というわけだ」

プレッシャーの増すあきつ丸の前に立ちふさがったのは他ならぬ武蔵であった。

「武蔵さん……!」

「行け!」

『そうね、大和、プリンツそこは武蔵に任せなさい! 天龍達の所に一刻も早く向かうのよ!』

「は、はい!」

あきつ丸と対峙する武蔵の背中を一瞬見つめると、私とプリントは走り出した。

☆

「隊長！」

大和達が見えなくなったのとほとんど同時のタイミングで他の隊員があきつ丸の後ろから走ってきた。

数の優位を確認すると、あきつ丸は武蔵に尋ねる。

「武蔵殿、そこをどいてくださいませんか？」

「ここから先は通行止めだ。諦めて迂回してくれ」

この港周辺は裏路地といったものが少ない。大和達の向かった方へこの道を迂回して行くには、一旦来た道を戻らなければならぬ。

そんな悠長なことをしていれば見失ってしまう。武蔵の要求にあきつ丸が首を縦に振る訳がなかった。

「何故D W ー1を庇うのですか？」

「庇っているつもりはない。私は今、七丈島艦隊の味方をしているだけなのでな」

「はっはっは、同じことありますよ」

両者の間の緊張感が増した。

「お互い、不干渉でいこうという話だったではありませんか？」

「別に私は妨害しているつもりはないさ。私はここから先に誰も通さないのが任務であるだけだからな。むしろ、ここを通ろうとするお前達こそ、我々の任務行動に干渉していることになるが？」

「屁理屈でありますな。しかし、成程、理はある」

頭をかきながらあきつ丸は武蔵の目の前まで歩み寄る。

「もう一度、あの素敵な拳をプレゼントしてくれるのか？」

「うーん、武蔵殿には力技は通じない上、互いの任務行動に干渉しないと言い出したのは私ですからなあ、それを私から破ってしまうのは不義理でありますなあ。参りました、これは詰みでありますな！」

あきつ丸が降参とでも言いたげに苦笑いして両手をあげた。

次の瞬間、武蔵の側面が爆発した。

否、海から砲撃を受けたのだ。当然、その砲撃を行ったのは海上であきつ丸の『合図』を待つて待機していた蜻蛉隊の隊員である。

武蔵の銀縁眼鏡が、地面に落ちた。

「でもよく考えたら、DW-1を庇うような悪にかける義理など持ち合わせておりませんでありました！ 全員突撃であります—— 殺せ」

「うおおおおおおおー！」

あきつ丸の背後に待機していた十名程の隊員が軍刀を抜き、砲撃によろめく武蔵に一齐に軍刀を突き刺す。

「うーん、これで死んでくれていると助かるのでありますが」

「——ふう……ぬるいな」

「はあ、やっぱそうでありましようなあ」

軍刀を武蔵に突き刺した隊員達は皆一様に驚愕に包まれていた。

「馬鹿な……」

「軍刀の切っ先が……刺さらねえ!？」

正確には僅かに皮膚を裂いてはいる。しかし、それ以上先に切っ先が進まない。筋肉に、内臓に刃が沈まないのである。

そして、何よりも、砲撃を生身で食らったにも関わらず、五体満足でいること。さらには火傷や血の跡が残るばかりで傷がほとんど見当たらないこと。

「こんな難儀な性癖となつてからは、おおよそ死ぬ寸前までの苦痛は一通り体験してきたつもりだ」

武蔵が自分に突き立てられた軍刀の刃の一つを掴む。その瞬間、生命の危機を察知したのか、隊員は全員武器を手放して、その場から離れることを優先した。

蜻蛉隊に集まっているのは皆一様に軍内で名の知れた精鋭達。その精鋭達を迷わず逃走の一手に追い込むだけの覇気が、目の前の艦娘からは放たれていた。

「だがな、とても素敵で、とても残念なことに、私達は成長する生き物だ。ある重さのダンベルを上げ続ければ、いずれそのダンベルが軽く感じるようになってしまうように、あらゆる痛みを体験してしまえば

自然と体はその痛みから体を守るよう、より『強く』なってしまう」
武蔵が軍刀の刃を親指と人差し指で挟むと僅かに力を込めてみせる。それだけで、軍刀はひび割れ、親指と人差し指で挟まれていた部分は貫通して穴が開いていた。

「この武蔵の身体、既に並の刃では通らん。銃弾では貫通できん。大抵の毒では効果すら現れない。艤装の艦砲射撃すら、致命傷にはならない」

片方のレンズがひび割れた眼鏡を拾って掛け直し、人差し指で押し上げてやると、武蔵はあきつ丸達を睨みつける。

それだけであきつ丸を除く全ての隊員は委縮して動けなくなった。

「悪いことと言わない。まだ私を殺そうと思っているのなら、諦めた方が良い」

これが第1位。『超越者』と呼ばれた史上最強の生命体、武蔵。

「正義を妨げる悪は断じて滅ぼす。誰が相手であろうと、例外はないのであります」

しかして、あきつ丸は笑った。ポケットから取り出した黒いハードナックルグローブを装着し、まるでこれから狩りを始める狩人のように猟奇的に笑った。

第八十三話 「烈風拳——」

駆逐艦綾波が『鬼神』と呼ばれるようになったのは、自分を含めた世界全てを否定からしか見られない歪んだ性格になったのは、一体いつのことだったか。

少なくとも初めて出会った時の彼女はどちらかと言えば戦い自体は好きではなかったと思うし、仲間に対してはいつも労いと敬意の言葉を忘れない、心根の優しい少女だったと記憶している。

きっかけとして心当たりがあるとするれば、今の彼女を形作るのは『怒り』なのだ。

件の大和が起こした、彼女が国家反逆罪に問われる原因となったあの事件。その時の傷跡が夕張同様、彼女の中にも深く刻まれている。本人の性格を真逆に歪ませてしまう程に。

皮肉なのは、彼女がO・C・E・A・Nランキング第6位にまで登り詰めるに至った転換期、覚醒のきっかけもまた、その『怒り』だということ。

——まあ、でも、それくらい混沌としてきてからが人間、味がでてきて面白い。

私、神通は目の前で繰り広げられる戦闘を見つめながら内心で綾波という一人の艦娘についてそう言葉を結んだ。

「——じゃあ、そろそろいききますね〜?」

「来なさい……!」

軍刀の鞘を槍のように構える龍田に、綾波は笑いかけた。自然と龍田の軍刀の鞘を握る拳が強くなるのがわかる。

あれだけの啖呵を切ったが、やはり綾波相手には余裕がないのだろう。

「棒一本で一体何ができるんでしょう〜?」

再び綾波が地面を蹴る。

さつきよりも明らかに速い。龍田に何もさせないまま制圧する気だ。

しかし、綾波の動きに龍田の目が鋭く光った。

「ふっ！」

「ん〜」

綾波の次の右足の着地点に鞘の先端が槍の如く刺さる。

すぐに、右足の行先を変更しつつ、体を回転させ、違うルートから再度間合いを詰めにかかる綾波。

ここまでは私も、そして当の綾波にも想定外の範疇の対応といったところだ。

約80 cmの鞘。それによって龍田の間合いは僅かながら広がっている。綾波の攻撃手段が徒手空拳である以上は先制攻撃を何かしらの形で受けることは予想できた。

予想をしていなかったのは、ここからの動き。

「ッ!？」

素早く体を回転させて綾波が間合いを詰めようと次の足を踏み出すようにする刹那。

真横から間髪入れず鞘の腹が薙刀の如く、綾波の右脇腹を薙ぎ払われんと迫ってきていた。

(お、これは、綾波さんでも避けられませんねえ。骨格的に)

艦娘は身体能力こそ各々化物じみてはいるが、人間の骨格を持つ以上、必ず重心の移動、骨の可動域の都合で避けられない攻撃というものは存在する。

意図してやったのか、それとも偶然かによって龍田の評価が大きく変わるところだが、何にせよこれは有効打だ。

「うッぎいー」

綾波の目が赤く光る。

右腕で脇腹を庇い、鞘を受けるよう動く。

軍刀の鞘とはいえ、その強度は鉄の棒にも近く、かつそれが艦娘の力で払われれば同じ艦娘でも骨への損傷は免れない。

加えて、綾波のような身体的にも未熟な少女ならば猶更骨を守るだけの筋肉が発達してはいない。普通ならば折れて、勝負ありとなるどころだろう。

だが、綾波に限り、それを回避する反則技を持っている。
「ぐう……いー」

痛みに初めて綾波の表情から笑顔が消えた。右腕は打撲程度のダメージでやり過ぎたようだが、彼女の足が止まる。

この隙を見逃さず、龍田の持ち手が変化する。

「はあッー」

「ちっ」

鞘をそのまま刀の如く振るった上段からの切落とし。

受けるのすら危ういと悟った綾波は舌打ちしつつ、後退して距離を取る。

その時点で龍田の追撃はなく、再び持ち手を鞘の端と中心辺りに戻し、また槍の如く構える。

「はあっ……はあっ……いー」

ほんの10秒にも満たない攻防。龍田の額には滝のような汗が流れていた。

——突かば槍、払えば薙刀、持たば太刀、杖はかくにも外れざりけり。

私は内心でこんな言葉があったことを思い出していた。

ただ一本の棒なればこそ、無限の変化がある。それこそが杖術の強み。他の武器術にはない柔軟性。

成程、棒一本で何ができると綾波は笑ったが、これは中々に厄介だ。

ついさっきまでの攻防では天龍と龍田二人がかりで20秒も持たなかったというのに、今は綾波を龍田一人で10秒で押し返してみせた。

この戦況の変化は大きく、額の汗を拭いながらも龍田の口元に余裕が幾何か戻っている。

面白くなってきたと、私の口角もつい吊り上がりすぎてしまう。

「なんとか、五分と五分には持って行けたかしらねえ」

「あはは、そんな滝汗流して、本当にそう思っているんですか？ おめでたいですね、倒されるのが少し遅くなるだけなのに」

「手こずってますねえ、綾波さん」

「うるさいですよ、神通さん。黙って見ててくださいって私言いました?」

「立って見ただけでいい、じゃありませんでした?」

「じゃあ、これからは黙って見ててください〜い」

何故仲間同士でわざわざ挑発し合うのだろうか、とでも言いたげに天龍と龍田が苦笑いを浮かべている。

「まあ、確かに、多少は驚きましたけどもう『対応』できます。ここからは一方的ですよ?」

「できるかしらあ?」

「何度でもいいですよ。所詮、棒一本、それで何ができるんですか?」

深紅に光る綾波の目が、龍田に狙いを定め、再び襲い掛かる。

☆

「さて、鎮守府での続きといこうか、あきつ丸」

グローブをはめたあきつ丸に好戦的な笑みを浮かべる武蔵とは対照的に、あきつ丸の表情から笑みは消えていた。

「今まで様々な攻撃をこの身に受けてきた私だが、お前の拳は何か違った。そう、なんというかな、すり抜けるような——」

武蔵がその時の感触を思い出すように目を瞑る。瞬間、あきつ丸が地面を蹴った。

一直線に、武蔵の目の前まで間合いを詰めると、腰を低く、拳を脇の下に構え、息を吐く。

「烈風拳——」

「ぬ、うう!?!」

まず、鳩尾に2発、顎に1発。

空裂音と共に、目にも止まらぬ速さで拳が叩き込まれた。

鈍痛に目を見開く武蔵に対し、あきつ丸は冷たい声で呟く。

「喋っていると、舌を噛んでしまわれますよ?」

「ふ、案ずるな……むしろ、それを狙っている……!」

「そうでありますか」

更に5発。武蔵は反撃も防御もしない、あるいは反応すらできない

のか。

「が……ッ！」

「随分と苦しそうでありますなあ。こんな細腕の拳が銃弾や刃に勝るでありますか？」

「銃弾や刃とはまた違う味わい……速く、重い……やはり良い拳だ……！」

「その余裕、いつまで持つてありますか？」

その後も休むことなく次々と無防備な体にあきつ丸の拳がめり込む。

先刻、鎮守府で一戦交えた時、あきつ丸の拳はほとんど武蔵には効いていない様子だった。

しかし、あきつ丸が攻撃を始めて30秒が経過した頃、武蔵に変化が現れた。

「これは……！」

血。

武蔵の口元から真つ赤な血が流れている。

それに気づいた武蔵は、右腕を左から右に薙ぐようにしてあきつ丸を振り払う。それによって、マシンガンのような拳の連打も停止する。

予想もしていなかった展開に、驚きの余り声も出ない隊員達に対し、あきつ丸の表情は余裕たっぷりな笑みであった。

「吐血。ようやく効いてきたでありますか。全く、規格外でありますな」

「……ああ、成程、この内臓に直接響くような、浸透するような打撃」

口元の血を拭いながら何かを思い出したように話し始める武蔵。その目にはこれまでの敵の攻撃を楽しむような余裕はなく、警戒の色が露わになっていた。

「はっ、栄えある大日本帝国陸軍の軍人ともあろう者が、よもや中国拳法とはな」

『人は水の入った皮袋』。太極拳、最上にして最初の定義であります
中国における拳法の歴史は他の格闘技の追隨を許さない。

実に4000年。歴史を重ねているということは、その分他よりも発達していることと類義であり、事実、中国拳法程多くの流派、多くの技を持つ格闘技は他にない。

そして、多くの技、流派があるということは、それだけ多くの状況、環境に対応できるということ。

銃弾や刃すらも通らぬ鋼の肉体を持った化け物に対する技も存在するということ。

「鎧があるのならば、その内まで打撃を通すまでであります」

浸透勁。それがあきつ丸の打法の呼称。

通常の打撃とは異なり、体の表面ではなく、内部への衝撃を意識した打法。極端に言えばそれは、内臓を直接殴るための打法である。

金的やレバーなど、人体において内臓の露出が高い部位はそのままそこが急所となる。

内臓は衝撃に弱く、かつ生命活動に必要なパーツだから。

そして、弱いからこそ肉が、骨がある。脆く、しかし生きるために必要な内臓を守るために纏った骨肉の鎧。

なればこそ、その鎧をすり抜ける浸透勁が人体に及ぼすダメージは計り知れない。

極めたならば、その一打は命にすら届くだろう。

「流石の武蔵殿と言えど、臍物まで鉄とはいかぬでありますか？」

「確かに、内臓を鍛える機会はなかったな……ッ！」
得心したと武蔵は再び笑った。

胃の粘膜が度重なるあきつ丸の打撃に耐え兼ね出血し、吐血。そこまで理解し、あきつ丸の拳が自分にとっての脅威であることを再認識して、尚も笑った。

「全く、さぞかし名のある師の元で功夫クンフを積んだと見える」

「それでもありません。私のこれは所詮、素人の見様見真似であります」

「はっはっは、それは参ったな」

瞬間、動き始めたのは武蔵の方であった。

一瞬で2、3メートル離れていた間合いを詰めてみせる。あきつ丸

の目が大きく見開き、すぐに防御の姿勢を取る。

しかし、それは無意味だった。

武蔵の拳はあきつ丸が両腕を交差させて作った盾を真つ向から一撃で体ごと吹き飛ばしてしまったのだから。

まるで漫画のようにあきつ丸の身体が5メートル後方まで吹き飛ばされた。

「……っ」

「ならば、ここからは『戦闘』だ」

それまであえてサンドバッグに徹していた化物が、初めて牙を剥いた。

☆

「あく、くそ！ うつぎいですね〜ッ！」

綾波が攻撃を再開し始めてから3分が経過した。

その間、龍田と綾波の間に攻防はあれどいまだ有効打は一撃としてない。

「そんな力任せな攻撃スタイルじゃ、私には届かないわ！」

「力任せ、ですか。本当。何も見えてないんですね〜」

龍田の指摘が痛に障ったのか、急に綾波のスピードが一段階上がる。

突きをサイドステップで躲し、薙ぎ払いをバックステップで躲し、隙あらばすかさず踏み込んで拳を振る。

その動きは機械のように正確で無駄がない。

しかし、龍田も綾波の拳を、素早く手元まで引き戻した鞘で上に弾いて躲し、そのまま鞘を縦に回転させて突きに転じる。

両者共に譲らず、依然続く拮抗状態。しかし、既に両者の表情には差が出ていた。

笑顔が崩れない綾波。

一方、少しずつ苦しげな表情が垣間見える龍田。

綾波の戦闘力が、龍田の技を圧倒し始めていた。

「それは、さつき見ました」

「なっ!？」

綾波の呼吸に合わせ、死角から側頭部を狙った攻撃。それを容易く掴み取られた。

ついさつきまでは受けるので精一杯だった筈の攻撃。龍田の背中に悪寒が走る。

「どうしました？ 掴まれちゃいましたよ？」

「っ！」

「うわっと」

関節を利用して手首の回らない方向に鞘を振り回し、強引に綾波の腕を解く。

「今、少し、怖くなったでしょう？」

「いえ、まだまだ！」

（……ああ、これは、駄目ですね）

果敢に鞘を振るう龍田を見て神通は目を細める。

この緩やかな劣勢。決して龍田の杖術が劣っていることが理由ではない。

単純に、綾波が強すぎるのだ。

「言った筈ですよ？」 『対応』した、と」

「……っ！」

（ただでさえ、反射速度、スピード、パワー全てが一級品。加えて、一度見た攻撃に二度目は対応できる驚異的な戦闘センス。龍田さんは一つ対応される度に新しい攻撃パターンを出し続けなければならぬ道理）

綾波に対し、磨き上げられた技で対抗しようとした龍田。

しかし、綾波の暴力的なまでの戦闘センスは、その技をも正面から食い破っていく。

（自分の『技』に自信がある奴ほどこれは効くんですよね）

「……はあっ………はあっ……」

「どうしました？ 呼吸が乱れてきていますよ？」

綾波に有効打を与えられる技というだけでも随分と限られてくる。

それなのに、一度使えば二度目は見切られ、三度目はカウンターを食らうという理不尽。

手の内がどんどん塞がれていく。これでは近いうちに手詰まりになる。

(勝負、ありですか)

神通が勝負の行く末を見限ろうとしたその時だった。

「おし、いいぜ、龍田。もう十分だ」

今まで沈黙を保っていた天龍が、笑ってそう言った。

「……戦意喪失したのかと思っていきましたが、まだやる気なんですか？」

「もういいの、天龍ちゃん？」

「おうよ」

「……無視、しないでもらえますか？」

綾波が天龍に標的を変えた。

一見、怒りに任せて一直線に全速力で飛び込んできているように見える。しかし、綾波には、この速度を維持したまま方向転換ができるだけのフィジカルがある。

安易に間合いに入った瞬間、刀を振るだけならば、また裏をかかれ、今度は起き上がってこられないダメージを負うだろう。

(大方私の動きを見て目を慣らしていたんでしようが、無駄ですよ。それなら、より速く動き、その企みの裏を突くだけです)

綾波の戦い方は一見持てる身体能力に依存した力押しに見える。しかし、実はその戦闘スタイルは後の先、所謂カウンター戦法に近い。単純に攻撃力で力任せに押し切るのではなく、自身の優れた身体能力を活かし、敵の攻撃をギリギリで見切り、最短距離で、最速で、最効率で、最大威力のカウンターを敵に叩き込む。

それが綾波の戦い方。持てる力に頼るのではなく、活かす戦い方。荒々しく見えて、その内には繊細で完璧主義な機械仕掛けの戦闘氣質がある。それは例えるなら、敵をより速く、効率的に排除するようプログラムされた高性能戦闘マシンと言っても差支えがない。

しかし、今回に限り、それが裏目に出た。

「いいのか？ そこ、もう俺の間合いだぜ？」

「はっ。」

気付けば、綾波の首元に軍刀の刃が迫っていた。

「~~~~~!?!」

反射的に綾波の身体が左に飛んだ。想定外の攻撃に対し、彼女の身体は全身全霊の緊急回避を選んだのだ。

大きく態勢を崩し、地面に倒れる綾波の目に映ったのは、軍刀を持つ天龍の手。

その手は極端に端の方を握っている。

(くそ、あれで間合いを伸ばしたって訳ですか、小賢しい)

ギリギリの所で攻撃を見切る戦闘氣質が災いした。持ち手の変化による微細な間合いの変化に虚を突かれるというのは綾波だからこそ起こり得た現象だった。

(でも、もう『対応』しました。これからは持ち手による間合いの変化も考慮すればいいだけ——)

「私のこと、忘れてなくい?」

「っ!」

間髪入れず、龍田が綾波に向けて鞘を勢いよく振り下ろす。

それを、地面を転がることで回避し、素早く立ち上がる。しかし、そこはまだ龍田の間合い。再び杖術による変幻自在の猛攻が降りかかる。

(落ち着け、これは既に『対応』している筈! これは劣勢にあらず、むしろ態勢を立て直すチャンスです)

綾波から攻撃に転じる程の隙はないが、決して当たるような攻撃はない。これならば天龍に崩された態勢を再び攻勢に立て直せる。

「おいおい、今度は俺のこと忘れてんじゃねえの?」

「なっ!」

龍田の嵐のような鬼気迫る鞘の乱打。しかし、その合間を縫うように、天龍の剣閃が背後から綾波の胴を両断せんと走る。

「ぐう!」

背中に熱が走る。回避しきれず、背中の薄皮を斬られた痛みだった。

信じられない、と綾波は唇を噛んだ。

——これは、『檻』と『銃』だ。

龍田の攻撃は綾波にダメージを与えることを目的とはしていない。その目的は綾波を今の間合いから逃がさない『檻』を作ること。

そして、真に綾波を狙うのは、この0.1秒毎に形の変化する檻を、すり抜けるように走る銃弾の如き、剣閃。

まるで鉄格子の檻の中に閉じ込められた状態で、四方から看守に銃で狙われているようなイメージ。

「悪いけれど、詰みよお」

「少しばかり時間はかかったが、龍田の技はもう『視える』。剣閃が檻を壊すことは万が一にもないぜ?」

「今まで私ではなく……龍田の動きを見て……!」

拙い。綾波の表情がますます苦悶に包まれた。

これがかもし、龍田の檻のみならば、すぐに看破できた。しかし、これに天龍の居合が加われば、看破どころか、このままジリ貧になる。「どうしたんですか、綾波さん? そんな檻、ちやちやつと破ってみせてくださいよー」

神通のいつも以上にうきうきした声に綾波の眉間に皺が寄る。

(あなたみたいなたくまな化物と一緒にしないでください……ッ!)

無茶である。この狭い『檻』から出ないまま、天龍の剣閃を回避し続け、さらに二人に攻撃を加える。

そこまで『対応』するよりも、綾波に致命傷が与えられる方が早いことは明白であった。

神通ならばそれすら可能にするのだろうか、綾波にはそれはできない。

「仕方、ないですね。5秒で決着をつけます……」

できない、ことを可能にするために綾波が出した結論は一つ。

体の負荷を省みない『無茶』であった。

「ぐッ!」

綾波の目がこれまで以上に赤く光る。そして、その目から真っ赤な血の涙が流れ始めた。

「なんだっ!?!」

「え!？」

1秒。

龍田の振り回す鞘を強引につかみ取り、握り潰し、破壊した。

「このッー!」

2秒。

天龍の剣閃を右手で掴み取り防ぐ。綾波の手の平から血しぶきがあがるが、それ以上天龍の刀はびくとも動かなくなった。

「させな——」

3秒。

天龍の刀が止められ、背中から龍田が飛び掛かろうとしたのに対し、後ろ蹴りで腹部から龍田の身体を弾き飛ばす。

「終わりですッー!」

4秒。

軍刀を力任せに引っ張り、天龍が前によるめいた所に拳を振りかざして潜り込む。

5秒。

渾身の力を籠め、天龍の腹部を拳で撃ち抜く。

衝撃が天龍の身体を貫通し、後ろの木の幹を僅かに震わせた。

「ぐあ……!」

口から大量の血を吐き出し、天龍は地面に倒れ、起き上がってこなくなつた。

「あ……天龍、ちゃん……」

「ぐ……はあ、はあ、はあ、げほ! げほ!」

倒れる天龍を四つん這いで見つめる龍田の横で、綾波もまた苦しそうに地面に手をついた。

「私の……勝ち……」

その綾波の言葉を聞いた直後、龍田の頭の奥から、突き刺すような痛みが湧き上がってきた。

「あ、ぐ、頭、が……」

「ええ?」

「あ、あああ! 頭が、割れる……ッー!」

「様子がおかしいですね」

「深海棲艦が……手を煩わせてくれます……」

ゆっくりと立ち上がると、ふらつきつつも、地面を転がり悶える龍田の前まで歩き、綾波は拳を握った。

「そんなに痛いなら、眠らせてさしあげますね」

綾波が拳を振り下ろそうとしたその時。

龍田の動きが急に止まった。

「——その必要はないわ」

「はあ？」

「——綾波さん、避けてください！」

それは、砲撃だった。

突如、龍田の手から現れた黒い砲塔。それが綾波の目の前に向けられていた。

反応はできた、しかし、綾波には回避行動に移れるだけの体力が残っていないかった。

真正面から、艦装を付けていない生身の状態で綾波は砲撃を食らい、煙を上げて地面に倒れた。

「……………これは、拙いかもありませんね」

神通が腰の刀に手を掛ける。

それを見つめる龍田の瞳にはさつきまでの光は灯っておらず、深海のような暗黒だけを宿していた。

☆

一方、その頃。

「見失った！」

「何やってんのよ、エド！」

「ていうか何追いかけてたの？」

大和とプリントを追いかけていたエド達であったが、艦娘程の身体能力も、土地勘もないエドには艦娘の彼女達に追いつく術など持ち合わせている筈なかった。

「くそ、諦めきれない！ なんとかしてもあの少女を探しださねば……！」

「エドがどうでもいい方向にやる気を燃やし始めたわ！」

「女の子追いかけてさせたらイタリアでエドより情熱的な男はいないからね〜」

「おい、その言い方だと僕が変態みたいじゃないか、やめろ！」

エドの抗議の声に対し、ザラとポーラは白い目を向けるばかりであった。

「日本では女の子にボディタッチしたり、追いかけてまわしたり、話しかけたりすることを事案って言うらしいわよ」

「そして警察に捕まるんだよ〜」

「やめろ！ 僕に注意喚起するんじゃない！ ていうか話しかけるだけでもアウトなのか!? 怖いな、日本！」

その時、不意に遠くから砲撃の音が聞こえてきた。

「これは、あの山の方角からか？」

「砲撃音、よね？ これ、もしかしてDWW-1案件なんじゃないの？」

「……観光は終わりだな。行こうか、任務開始だ」

エドの声にザラとポーラは頷くと、3人は二原山を目指し、走り出した。

第八十四話 「ありがとう、最高の誉め言葉だ！」

島中に響き渡った空気を震わせる1発の砲撃音。

それは、港で戦いを繰り広げていた武蔵とあきつ丸の耳にも届き、両者の動きを同時に止めた。

「……砲撃音、でありますか」

「はてさて、一体誰の砲撃だろうな？　ちなみに横須賀に島の中で砲撃をするような浅慮な艦娘はいない」

「現段階で、蜻蛉隊の中で砲撃が行えるのは海上警備を任せた第1班の5名と艦装を付けている私のみ。そしてその全員が今この港に集まっているであります」

ならば、この砲撃音は横須賀でも蜻蛉隊のものでもないということになる。

この時点で、あきつ丸の中では七丈島艦隊、もしくは、DW-1のものかという2択に限られる。どちらだとしても重要な情報源には違いない。

一方、武蔵は七丈島艦隊の面々もまた、誰一人として艦装を装備していない事実を知っている。よって、彼女の中ではこの砲撃はDW-1のものと既に確定している。

故に、今は早急にこの場を離れて音源に向かわなければならぬ。それが、あきつ丸、武蔵両者の1発の砲撃音から導き出された結論であった。

「さて、どうする？　一時休戦とするか？」

「……蜻蛉隊、全隊員に通達。2班、3班、4班は今すぐに砲撃音の音源へ向かうであります。1班は鶴屋のみここに残り、私の援護を。他4名は島周囲の索敵を厳となさい。尚、DW-1を発見したならば直ちに殺せ。以上」

武蔵は無線に告げたその内容に目を丸くしていた。

一つは、この状況でもあきつ丸は依然武蔵の撃退を優先したということ。

もう一つは、DW―1を殺せ、と命じたこと。

「意外だな、まだ遊んでくれるのか？」

「当然であります。あなたを音源へ向かわせないという事実はそれだけで戦略的に大きなアドバンテージであります」

ははは、と乾いた笑い声をあげた武蔵はあきつ丸に再び尋ねた。

「お前達は、DW―1を鹵獲するのではなかったか？」

「ああ、御上からは確かにそのような命令を受けておりますな。第一に鹵獲を優先し、最悪の場合は撃沈、と。しかし、私には知ったことではないでありますな」

「成程、上の命令に従順な犬という訳でもないのだな」

「私は最初からDW―1を殺すためにここに来ている。御上の事情は二の次、三の次でありますよ」

「……何故、殺す。お前の正義とはなんだ？」

一瞬、武蔵の質問に虚を突かれたような表情を見せるあきつ丸。

しかし、すぐに天真爛漫な笑みと共に彼女は答えた。

「悪を滅ぼす。そのみが、唯一にして絶対の正義であります」

今度は武蔵が虚を突かれる番だった。

「馬鹿な、救うことは正義ではないと？」

「救うことでは悪は消えないであります」

あきつ丸ははつきりと言い切った。

「悪を赦さず、贖罪を認めず、改心を信じず、免罪を嫌悪し、断罪を尊ぶ。善性の繁栄ではなく悪性の根絶をもって己が正義を示す。故にDW―1は必ず殺さねばならない。どんな手を使っても、どれだけ時間がかかっても」

その言葉に纏わりつく覇気に、否が応でも信念を貫くという一点の曇りもないあまりにも純粹な狂気に、武蔵は僅かに悪寒を覚えた。

「一体、何がお前をそこまでさせたのか、興味が絶えないな」

「決まっているであります」

あきつ丸は地面を蹴り、拳を振りかぶりながら言った。

「悪への憎悪と怒り。それだけでありますよッ！」

☆

「随分と、『らしく』なってきたじゃないですか、DW—1さん？」

目の前で自分を睨む龍田に対し、神通は笑ってそう言った。

一方の龍田は自分の腕にまるで張り付くように装備されている黒い岩石にも似た連装砲を見て、ため息をついた。

「艦装の召喚、まさに深海棲艦のそれですね」

「……………」

深海棲艦に艦装という概念はない。装備は、何もない所から召喚される。体から生えてくるように召喚する者もいれば、空気中から突然砲塔が現れる者まで、バリエーションは様々ではあるが、基本、深海棲艦に武器の装備という概念はない。

兵装は常に自分と共にあり、艦娘のように取り外しをして保管するものではないのだ。

「ようやく、本性を現した、と言った所なのでしょうか？」

「……………」

龍田は何も言わない。虚ろな眼で空中を見ている。

一見無防備にも見えるが、しかし、その砲口は今なお、綾波の頭部に向けられており、神通といえど迂闊に動くことは許されない。

「ねえ、神通さん？」

「……………なんですか？」

「綾波ちゃんと天龍ちゃん、まだ死んでないわ。そう、今から七丈島鎮守府に走って入渠させれば命は助かるわ」

龍田はそう言うと、神通に背を向けてどこかへ歩き出す。

「どこへ行くつもりですか？」

「……………」

龍田は何も答えず、その場から逃げ出すように走り出し、すぐにその姿は見えなくなった。

神通も、走り出す彼女を追うことはなく、綾波と天龍の治療を優先すべきと判断し、腰の刀から手を離し、二人の元へ駆け寄った。

その直後、誰かが走ってくる足音が響いたかと思うと、二人の艦娘が姿を現した。

「神通さん!？」

「おわ!? 天龍!! それと……綾波!! なんで二人とも満身創痍!?!」

「大和さんに、プリンツさん、丁度良い所に。綾波さんと天龍さんを急いで入渠させなければなりません。お手伝い願えませんか?」

「あの、龍田さんは一緒にいませんでしたか……?」

「……それについては後で全てお話しします。今は早くこの場を離れましょう」

「うん、お姉さま、ここに長居するのは私も良くない気がする」

「じゃあ、とりあえず急いで鎮守府に帰りましょう!」

多くの人間の気配、おそらくは蜻蛉隊の隊員がここに向かってきているのがわかる。急いで移動しなければ面倒なことになりそうだと、神通は綾波を、大和は天龍を背負い、その場から走り去った。

☆

「む、あれは……D W—1!?!」

砲撃音の聞こえた二原山の方へと走っていた蜻蛉隊の隊員三名は前方からゆっくりとふらつくように歩いてくる人影に足を止めた。

それは見まごうことなくD W—1、龍田の姿であり、一方で彼女は下を向いているせいか

隊員達には気が付いていないようだった。

「どうするっ…」

「どうするもこうするもない。隊長からの指示通り、やるぞ」

「了解」

三人はそれぞれ肩に掛けてあった小銃や、腰の軍刀を手取る。

すると、それに反応したのか龍田の動きがぴたりと止まり、その顔がゆっくりと持ち上がり、武器を構える隊員達をその目に捉えた。

「おい、気が付いたぞ」

「構うものか、撃て!」

「覚悟!」

連続して乾いた銃声が響き渡る。

銃弾は龍田に命中したようで、その体が3、4回大きくのけぞったのが確認できた。

しかし、決してそれで倒れることはなく、むしろその攻撃が引き金

になったのか、さつきまでの臆げない足取りが嘘のように変わり、50メートル程あった両者の間合いがあつという間に詰められた。

「なっ！」

「下がれ！俺がやる！」

軍刀を抜いた隊員が迎え撃つように前へ飛び出す。その瞬間、龍田の右腕から黒い煙のようなものが放出されたかと思うと、それは一瞬で薙刀の形に変化した。

「なっ!? 武器が、空中から!?!」

慌てて軍刀を抜いた隊員は距離を取ろうとブレーキをかける。軍刀と薙刀では薙刀の間合いの方が広いため、一直線に向かつていけば返り討ちにされると踏んでの判断だった。

しかし、それがいけなかった。

ここでは、むしろ飛び込んでいくべきだった。下手に間合いを取るよりも、いつそ薙刀の間合いの内側に入ろうとする方がまだ光明があった。

「ぐ、あ……!?!」

「坂本おとおおおッ！」

中途半端に踏み込み、止まってしまったせいで距離を取る間もなく、薙刀の刃が坂本と呼ばれた隊員の腹部を切り裂いた。

軍刀が地面に落ち、その数秒後に後を追うように彼の身体も血の池を作りながら地面に倒れた。

「くそー！ 撃てー！ 撃てー！」

再び小銃が龍田に向けて火を噴く。

しかし、龍田は無数の弾丸が飛び交う中、薙刀を回転させながら、まるで舞うように銃弾を弾いてみせる。

「化物めッ！」

小銃の音と隊員の怒声が止むまでには数秒とかからなかった。

自らの血の中に沈む三人を見回すと、薙刀は再び煙のように霧散した。

銃弾の命中した部位に目をやれば、その部分には黒鉄のような黒い塊が覆われていた。おそらくはこの鉄の皮膜のようなものが銃弾か

ら身体を守ったのだらうとすぐに理解できた。

「……私、これじゃ本当に化物ね」

龍田は無感情な声でぼつりと眩き、また歩き始めた。

☆

「烈風拳——ッ！」

「ぐ、ぬう……！」

腕を上げて頭部のガードを固める武蔵に対し、あきつ丸の拳が次々と叩き込まれる。

（成程、確かにただの浸透勁ではないようだ。何か別の技術も混ぜているな？）

「これだけ、打ち込んで……血反吐を吐かせるので手一杯とは、情けない限りでありますな」

息が切れ、拳が止まる。

その瞬間、武蔵が拳を動かすのと、あきつ丸が後ろに飛ぶのがほぼ同時であった。

豪快な空振り。しかし、その武蔵の拳は空気すら弾き飛ばし、あきつ丸の顔面に向けて空気の塊をぶつける。

「っ！」

反射的に目を閉じる。

0・1秒程度のほんの刹那の視界の暗転、それがこの戦いでは致命的となる。

次に視界が戻ってきた時には既にあきつ丸の視界に武蔵の姿はなく、直後、真横から武蔵の腕が伸び、彼女の腕を掴んだ。

「取ったッ！」

「鶴屋、撃て！」

「むっ!？」

武蔵があきつ丸の腕を掴んだ瞬間、その眉間に強い衝撃を受け、手が離れる。

それは一発の銃弾。銃弾は、眉間を数ミリ抉り、出血させるだけに留まったが、武蔵は即座に射線を予測し、海上に警戒の視線を向けた。「味な真似を。腕のいい狙撃手がいるようだな」

1 kmほど離れた海上から自分の方へ視線を向ける武蔵を双眼鏡越しに見て、老齡の狙撃手、鶴屋は冷や汗を流していた。

「おいおいおい、マジかよ。12.7 mm徹甲弾眉間に食らって何でそんな傷で済んだよ？」

『鶴屋、やれそうでありますか？』

「勘弁してくれ、隊長。人間撃ってる気がしねえ」

鶴屋は白い顎髭を撫でながら半笑いで無線に返答する。

そして、胸ポケットから煙草を取り出して火を付けると、再びスコープに右目を近づけ、ボルトハンドルの引く。

その目は獲物を狙う狩人のような鋭く冷たい目をしていて。

「ただ、1つだけアテはある。爺の浅知恵で良けりや任せてください」
『期待しているのであります』

その鶴屋の言葉を聞きながら、あきつ丸は息を吐いた。

武蔵の戦力に絶望しているわけではない。そんな段階は当の昔に通り越している。

むしろ、そんな相手だからこそ、自分の烈風拳の有効性を確認できたことに、滾っていた。

（浸透勁なればこそ、徹甲弾すら通らぬ鎧を超えて、武蔵にダメージを与えられる。武蔵が相手に限り、私の拳はどんな兵器よりも強力無比な武器となる）

狙いは決まっている。

烈風拳が通じた。ならば、考えるのは武蔵の内臓のどこを殴るか、だ。

肝臓や胃、十二指腸ではダメージは与えられるものの、やはり想定外の筋肉のせいかな衝撃の伝導が想定していたよりもずっと鈍い。

これではダメージにはなっても決め手にはならない。

だから、狙うのの一つ。筋肉がなく、かつ、人体における最重要臓器。

（武蔵の脳を揺らす……ッ！）

「さあ、第2ラウンドの始まりといったところか！」

「ええ、そして、KOで終了であります」

あきつ丸が拳を構える。

しかし、その右拳は顎のあたりに、そして、左拳は極端に下に構えられ、ほとんどガードというものがなかった。

「これは……」

瞬間、地面を踏み込む音が3度鳴った。

中国拳法、古武術の縮地法、柔術の滑り足を混成した足運びは、武蔵が、いつの間にか互いの間合いが必殺の範囲にまで縮まっていることに気付くのをワンテンポ遅らせた。

「烈風拳ッ！」

あきつ丸の左手が動く。脱力しきった左腕はまるで鞭のようにしなる。

その速度は人の反応速度を超え、さらにその拳は斜め下から上に上昇するように打ち込まれる。

つまりは、視野の外側。死角から打ち込まれる音速の拳。

完璧に決まったそれを見てから回避する術はない。

それは、ボクシングに見られる『フリッカー・ジャブ』と呼ばれる技に酷似していた。

「――」

避けられない。

武蔵の顎をあきつ丸の拳が下から上へ跳ね上げた。

（勝った）

頭部には、背中や腹部、腕部、脚部に比べ、極端に筋肉や脂肪が少ない。

肉が少ない、ということはすなわち衝撃の吸収材が少ないという意味であり、つまり、頭部においての、また、人においての最重要機関、脳に対しても衝撃が容易く伝わるということである。

（このフリッカー・ジャブ混成の烈風拳は、速度は無類ではあるが、どうしても浸透勁が弱くなる。しかし、脳にまで衝撃が通りやすい顎を打てば、むしろこれ以上の必殺の攻撃はない）

「そのまま崩れ落ちろ、武蔵」

武蔵の身体がよろめく。既に脳に衝撃が伝わり、平衡感覚、視覚は

重大な異常をきたしているのだろう。

ふらつきながら、やがてあきつ丸の方へよろめいた彼女の手が、支えを求めるようにあきつ丸の腕を掴んだ。

「——成程、面白いな」

「なにッ!？」

離れない。

掴まれた腕を振り払おうとするが、腕がびくとも動かない。

見れば、武蔵があきつ丸の方を見つめ、笑っていた。

「烈風拳、か。様々な武術、格闘技の技術を混ぜ、調和させているだけではない。状況に応じて混成された技術の比率を変えることで技の性質を変化させている。さしずめ今の烈風拳は速度特化といったところか。その分、勁力が弱くなるようだが」

「馬鹿な……確かに脳を揺らした筈……」

「ああ、視界が歪んで全身の感覚が極端に鈍く、地面に立っている感覚がほとんどない。意識が朦朧として気持ちが悪い。だが——」

武蔵は恍惚の笑みを浮かべて言った。

「この苦痛も、私の守備範囲内だ」

「慣れているからどうという問題ではないはずです!」

「言っただろう? 人は成長する生き物だと。例え、脳を揺らされても、私は戦闘不能には陥らなくなった。正確には、脳がそのダメージから復帰するのが極端に早くなった」

「あり得ないでありますッ! 常識外れすぎる!」

あきつ丸の台詞に、初めて武蔵は嘲笑を向けた。

「あり得ない? 常識外れ? あきつ丸、誰に言っている?」

「ぐ、ぐうう!」

「私は『超越者』の武蔵。『あり得ない』と『常識外れ』は私の恒常だ」

「——っ!」

あきつ丸が俯いて膝をつき、決着はついた。

かに見えた——

「なあって、ね—— 鶴屋あ! この位置で良いでありますなッ!？」

「ああ、文句なしだぜ、隊長」

スコープ越しにこちらを向いて叫ぶあきつ丸に鶴屋はニカツと笑みを浮かべた。

「行くぜ、超越者さんよ。ここ弾かれちゃ、もうお手上げだ。頼むから、弾丸くらい通してくれよ?」

そのスコープの照準の中心に位置していたのは、驚愕に大きく見開かれた武蔵の右目。

狙いは、眼球。

「——ファイア」

銃口が火を噴き、その銃弾は真つすぐと武蔵の右目の眼球に飛んでいく。避けようがある筈もない。

普通ならば。

「ふんッ!」

「な……………」

「は……………」

しかし、その銃弾は、武蔵の目ではなく、額に命中して粉々に砕け散った。

正確には、まるで銃弾が見えているかのように、彼女は銃弾に頭突きをかまし、粉碎してみせたのだ。

「眼球か、良い狙いだ。流石の私もここは人並。だから、悪いが別の所で受けさせてもらったぞ。さあ、これで終わりか?」

この時のあきつ丸の表情にはありとあらゆる負の感情が溢れかえっていた。

「この——」

「はは、こいつは駄目だ、隊長。俺らじゃ勝てねえわ」

「この、変態がああああああッ!」

「ありがとう、最高の誉め言葉だ!」

武蔵の腕が持ち上がり、同時にあきつ丸の身体が宙に浮く。

そのまま腕全体をしならせるようにして海に向かって振り下ろされた右腕はその手に掴んでいたあきつ丸を数百メートル彼方の海面へと投げ飛ばした。

「実に楽しかったぞ、あきつ丸。また遊ぼう」

オレンジ色の夕日が水平線から勝者を讃えるように武蔵を照らしていた。

☆

「天龍、ちゃん……」

夕暮れの七丈島。

人気のない道を一人歩く虚ろな瞳の龍田の前に3人の人影が現れた

「やあ、美しいお嬢さん。お一人かな？」

「……………」

キザつぽく笑顔でお辞儀をする外国人の青年は、しかし、龍田を言葉通り『美しいお嬢さん』と見ている訳ではないようで、節々に警戒の色が見て取れた。

それに、両隣に控える金髪と銀髪の少女は艦娘なのか、砲塔を向け、既に戦闘態勢をとって龍田の様子を観察している。

「もう日も暮れる。女の子が一人では危ないかと思っただけね。良ければ、僕達に君をエスコートさせて欲しいのだけれど、どうかな？」

「……………結構よ」

「はっはっは、それは困ったな」

笑いながらも青年は鋭い視線を龍田に送る。

「それじゃあ、女の子としてエスコートじゃなくて、DWR-1として捕縛するしかないじゃないか」

龍田は瞬時に薙刀を右手に構える。

「自己紹介がまだだったね。僕はエドモンド・ロツソ。イタリア情報・軍事保安庁のエージェントだ。君を迎えに来た」

彼がそう言っただけで右手を上に挙げた瞬間、両隣の少女の砲塔が火を噴いた。

第八十五話 「最初っからそう言えばいいんですけどっ
！」

真っ暗な空の下、真っ赤な海の上に、俺は立っていた。

俺は刀を構え、息を荒くして相對する『敵』に斬りかかるタイミン
グを凶っている。

——やめろ

俺の意思とは関係なく、体は勝手に目の前の敵に向かって走る。

——やめろ

『敵』は何もしてこない。その姿はまるで影のように不自然に真っ
黒でよく見えない。

だが、俺がこちらに向かってきているのには気が付いているのか、
棒立ちのままだがはつきりとこちらを見ている気がした。

そして、俺の腕は刀を頭上に振り上げ、間合いに入ったところで刀
を勢いよく振り下ろす。

影は避ける素振りすら見せない。

——やめろ

刀は影を袈裟斬りにした。真っ黒だった影から真っ赤な血が噴き
出し、俺の顔に飛沫となっつかかった。

その生温い血を左手で拭いながら俺の頭は倒れた影を見るように
下がっていく。

——やめろ

やめろ、見たくない。やめてくれ。しかし、目をつむることも、目
を覆い隠すこともできないまま、俺は海面に倒れるその影を見てし
まった。

否、それは既に影ではなかった。

そこにははつきりと、血まみれになり、目を見開いて倒れる龍田の
死体があった。

「あ、ああ……！」

俺は情けない声をあげ、へたりこんでしまう。すると、死んだ龍田の目だけがギョロリと動き、俺を見た。恨めしように、憎らしそうに、俺を、見た。

「——うわあああああああああああつ！」
水飛沫のはねる音と自分の悲鳴で目が覚めた。過呼吸になりそうな程荒い呼吸を落ち着けながらゆつくりと辺りを見回す。

確か俺は綾波と戦っていて、最後の最後で負けて、気絶していた筈だ。

「ん!？」

今更ながら自分の身体がいつの間にか全裸になっていることに気が付く。

しかも、身体は湯の中に浸けられている。

見間違いでなければおそらく自分が寝かせられていたこれは、艦娘の損傷回復、通称『入渠』に使われる艦娘修復剤浴槽ではないだろうか。

自分の身体の傷が綺麗になくなって、痛みも消えているのがその推測を裏付ける十分な証拠と言える。

取りあえず一通り、自分の状況を確認し、ふと周りを見回して俺は更なる驚きに声をあげた。

「あ、綾波!？」

自分の隣の浴槽ではついさっきまで戦っていた駆逐艦綾波が同じように寝かせられていた。

同じく傷は綺麗になくなっていているようだが、目を覚ましてはいない。

一体、俺が気絶してから何があったというのか。

そんな考えがよぎった瞬間、何よりも優先すべき存在に気が付いた。

「龍田は!？」

左右を見回すが、龍田だけは姿が見当たらない。既に入渠を終えてこの浴室から出て行ったのか、それとも。

嫌な想像が働き、それをかき消すよう首を振る。

考えているだけじゃ状況は変わらない。まずは動こう。

「取り敢えず、俺の服、服っと」

まずは自分の着替えを探しに立ち上がった瞬間、浴室の引き戸がガラガラと開いた。

「天龍、目が覚めたんですね」

「……大和」

どこか厳しい表情の大和と目があった。

☆

「F u o c c o (フオーコ)！ F u o c c o！ ありったけ撃ち込んでやれ！」

「ぐっ!?!」

ザラとポーラの主砲から次々と放たれる砲弾。

それは龍田の周囲に着弾し、着弾と共に真っ白な煙を辺りに振りまいた。

(砲弾じゃ、ない……!?!)

「B e n e、撃ち方止め」

「イタリア製麻酔砲弾。いままで使い道のなかったガラクタがまさかこんな形で役に立つ時が来るとは工廠の連中も驚くでしょうね」

「本当にねえ〜」

白い煙に包まれた龍田を見てザラは苦笑を浮かべ、ポーラは愉快そうに笑っていた。

イタリア製麻酔砲弾。イタリアの兵器開発部で鹵獲兵器として作られた特殊砲弾。深海棲艦の意識を奪い、体を麻痺させる麻酔弾である。

しかし、深海棲艦一体を麻酔状態にするために相当量の弾数が必要になり、最低二隻の艦娘の装備が麻酔弾で埋まってしまう他、当然、損傷を与える兵装ではないために結果として艦隊戦においてはほとんどお荷物にしかない。

艦隊の一隻、二隻をほぼ無力化した状態では鹵獲どころかそもそも艦隊戦での勝利すら危うくなってしまったため、実用性に乏しいと判断

され長らくお蔵入りしていた装備だ。

しかし、非戦闘員の多い環境において、一隻の深海棲艦を鹵獲する任務という状況下においてはこの兵装程都合の良いものはない。

「この麻酔弾は非殺傷兵器かつ、麻酔ガスは人間には影響しない。こういう非戦闘員がうようよしている島内でも構わず撃てるってわけだ」

「物は使いようね」

機嫌よく鼻歌混じりに解説を終えると、エドはザラとポーラの艦装の背面を開き、そこに隠しておいた捕獲用のカプセルのパーツを取り出すと、慣れた手つきで組み立て始める。

「さて、少々窮屈なホテルで申し訳ないが、何、一眠りしているうちにチエックアウトだ。そう不自由は感じない筈さ」

白い煙の中にいるであろう龍田に語り掛けるエドだが、その瞬間、煙を突っ切って、龍田が飛び出してくる。

「エドー！」

ザラがエドを突き飛ばし、間髪を容れず、間髪を容れず、間一髪薙刀の刺突を躲す。

「馬鹿な！ 麻酔弾が効いてないのか!？」

「いや、あれ……」

ポーラが龍田を指さす。

彼女の顔には、さつきまでなかった鼻から顎までを真っ黒な『ガスマスク』が覆っていた。

それは、深海棲艦の潜水力級の口元を覆うものによく似ているように見えた。

「マンマミーア！ そんなのアリか!？」

「ど、どうするのよ、エド!？」

「あれ、もしかしてえ、万策尽きてなくい?？」

「いや、策はある!？」

エドはそう言って素早く立ち上がり、龍田を睨む。

「たった一つだけ、策はあるぞー!？」

「本当、エド!？」

「ああ、とっておきの奴さー!？」

「エド、もしかしてそのとっておきって……」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべて見せると、エドは即座に龍田に背を向けると、全力疾走する。

「逃げるんだよオオオ——！」

「なんでそうなるのよおおおおお！」

「うわ、逃げろ！」

先陣を切ったエドに素早く反応し、ザラとポーラも一目散に駆け出す。

その素早さたるや、数秒もしないうちに三人の姿が龍田の視界から消え失せる程であった。

「……本当に逃げたみたいね」

薙刀とガスマスクを霧散させ、龍田はため息をついた。

しかし、不意に視界が歪み、ふらつき、近くの塀に手をつけて体を支える。

「ぐ……やっぱり少し、吸っちゃったみたいね……危なかったわあ」

あの脅しで撤退してくれて助かった。あのまま戦い続けていたら本当に鹵獲されかねなかった。そう、龍田は安堵して笑った。

☆

「……よお、数時間ぶりってとこだな、大和」

「おかえりなさい、天龍」

そこまで言葉を交わして再び二人は無言になった。

天龍といえば、何かを言おうと幾度か口を開きかけるも、いずれもいたたまれなくなったのか寸前で止めて口を閉じてしまう。

大和は浴槽につかる天龍を見下ろすだけで何も喋ろうとしない。天龍が何かを言うまでただ待っているようにも見えない。

やがて、2分ほどの空白の後、天龍が覚悟を決めたかのように口を開いた。

「大和、龍田はどこだ？」

大和の目を真つすぐに見つめて問う。

それに対し、大和の答えは——

「——ぐぼっ!？」

顔面への鉄拳。

そういえば矢矧にも以前こんな感じでグーパンをかましていたなと天龍は後ろにのけぞりながら思い出し出していた。

「つてえ！ 何すんだよ!?!」

「何を言うのかと思えば、がっかりですよ。もっと先に言うことがあるんじゃないですかあ?」

「う……その、悪かった」

「何がですか?」

「いや、その、怪我の介抱させちまって——」

「そっちじゃねえでしょうがあ!」

「2発目ツ!?!」

再び大和の右ストレートが天龍の顔面にめり込んだ。

「お、おま……乙女の顔面に……2発て……」

「何で、たった2人で行ったんですか!?!」

大和の表情は険しかった。

「そりゃ、お前、迷惑かけたくねえんだよ、俺の都合で」

「天龍のことだからそんなことだろうと思いましたがよッ!」

「げふう!?!」

3発目の拳が入る。

「お前! ちよつとバイオレンス過ぎねえか!?!」

「あなたが、泣くまで、殴るのを、やめないッ!」

「……うつぜえな!」

大和が4発目の拳を振りかぶったのを見ると、天龍が浴槽から大和に飛び掛かる。

「ぐう!?!」

「なんなんだよ、俺とテメエらはもう切れただろうが。テメエは俺の母ちゃんかなんかかよ。知った風な口きいて偉そうに説教しようとしてんじやねえぞッ!」

天龍の頭突きが大和の顔面に命中する。

今度は大和が仰向けに倒れる。そこに天龍が馬乗りになるとさらに顔を何度も殴りつける。

「これは俺の問題だ。お前ら他人がズケズケ入ってきていい問題じゃねえんだよ！」

「もう巻き込まれてんですよ、こっちは！」

「知るか！」

大和が馬乗りになった天龍の身体を掴みながら転がり、引きはがす。

ものすごい力で横転させられた天龍は受け身を取り切れず、全身を強く打ちながらそれでも立ち上がる。

大和も鼻血を親指で拭いながら立ち上がり、天龍を睨む。

「余計なお世話だっつてんだよっ！俺の問題に首突っ込んで何が楽しいんだ！ テメエらに得なんてねえだろうが！」

「馬鹿にすんのも大概にしてください！ お節介上等！ 損得勘定で七丈島艦隊私達が動いてると思ったら大間違いですよッ！」

大和が浴室の床を蹴り、天龍に向かって突進する。

しかし、天龍は避けるでも、迎撃するでもなく、挙げていた拳を下ろして、大和には聞こえないように小さな声で言った。

「知ってるっつての」

「この、馬鹿——うえ!?」

天龍の目の前、そこで大和の身体がバランスを崩した。

浴室の床で足を滑らせたのだ。

大和は態勢を立て直せず、天龍は避けられず、そのまま、両者の額がぶつかり、浴室に大きな音を響かせた。

「つ~~~~~~~~ッ！」

「いったあ——ッ！」

しばらく頭を抱えて浴室の床を転がりまわる二人。

最初は涙ぐんで悲鳴をあげていた二人だが、その悲鳴は徐々に笑い声に変わっていった。

「締まらねえなあ、おい。こんな喧嘩の終わり方があるかよ」

「し、知りませんよ！ 慣れてないんですから、喧嘩とか！」

「まあ、いいか。こういうのも、偶には悪くねえ」

起き上がった大和が天龍の方を見下ろすと、彼女は右腕を目元に被

せて笑っていた。

「本当に馬鹿ばつかだ、ウチの艦隊は」

「あなたも含めてですけどね」

「はっ、言うようになつたじゃねえか、新参の癖によ」

大和は笑つて自分の赤く腫れた額を押さえながら言った。

「天龍つて、『助けて』つて言いませんよね」

「……そうだったか」

「今まで1回も言つてなかつたと思います。少なくとも私は言われたことはないです」

「まあ、別に一人でできるんならそれに越したことはねえし、一人じゃできねえことならやらねえからじゃねえの?」

「今、天龍がやってることは一人でできることなんですか?」

「……難しいぜ」

天龍の声が沈む。

「じゃあ、そう言えばいい。私達は仲間なんですから。助けて、助けられて、そこに遠慮はいらない筈でしょう? 矢矧の時も、磯風の時も、そうしてきたじゃないですか」

「ああ、そうだったな」

「私達は仲間なんだから、一人で抱え込まないでください」

「……なんか、以前にも龍田に似たようなことを言われたの思い出したわ」

「え?」

天龍はゆつくりと立ち上がると大和に深く頭を下げた。

「悪かった。頼む、俺に力を貸してくれ」

「最初っからそう言えばいいんですつて!」

大和は心底嬉しそうに笑った。

☆

「——と言う訳で天龍が七丈島艦隊に帰ってきました」

「おかえりー」

「知ってた」

「どうせそんなことだろうとは思ってたわ」

「あんな啖呵切って出て行った癖に一日もたないとか、プークスクス」「いつも通りだな、お前ら！ あと瑞鳳は喧嘩売ってんだよな？ そうだよな？」

天龍が口に手を当てて笑う瑞鳳の胸倉を掴んで持ち上げている。やつと、いつもの七丈島艦隊らしくなってきたと大和は内心ほっとしていた。

「すみません、綾波さんにまで高速修復材を使って頂いて」「気にしないでいいわ、別に敵ってわけじゃないんだから」

賑わう食堂の中、神通が神妙な様子で頭を下げた。

それに対し、矢矧はなんでもないのでのように返す。しかし、実際この備蓄を考えると高速修復剤というのは貴重品であり、なけなしの資材を削っていることには変わりない。

ここから先は、もう傷を負ってもすぐには回復させられない状況に追い込まれていた。

「まだ意識、戻らないの？ 傷は回復したと思ったけれど」

「はい、おかげさまで傷は全快していました。目覚めないのは綾波さんの準備というか、まあ、とにかく明日には目を覚ますと思うのでご安心を」

煮え切らない返事をしながら神通は張り付けたような笑顔を見せる。

「まあ、それならいいわ。今の問題は龍田をどうするかね」

「龍田は、俺が気絶した後どうなったんだ？」

「深海棲艦として完全に覚醒し、いなくなりましたよ。龍田さんとしての意識は残っていたみたいですが」

「……………そうか」

「天龍、あなた、もしかして龍田が深海棲艦であることを承知で、彼女を助けようとしたの？」

矢矧の質問に、天龍がゆっくりと頷いた。

「なんでそんなことを…………」

「艦娘が轟沈後、深海棲艦となって現れるっていう話は噂話程度にはよく聞くわ。あの龍田がそうだって言うわけ？」

瑞鳳の問いに天龍は首を振った。

「確かにあれは龍田が深海棲艦になったものだ。でも、轟沈してなった訳じゃねえ。あいつは、深海棲艦に変えられたんだ」

「変えられた……？」

「だから、俺は龍田を今度こそ助けなきゃならねえ。あいつをDW――1に変えた張本人、『鏑木美鈴』に会って元に戻させるために……！」

鏑木美鈴。その単語を聞いて、数人の艦娘が反応を示した。

神通、瑞鳳、大和の三人。

「鏑木、美鈴……！」

「やっぱ、何人かは心当たりあんのな」

「誰なんだ、それは？」

「――なんだ、興味深い話をしているな」

食堂に入ってきたのは、武蔵の姿だった。

口元に血の跡を残し、体中に青痣を作りながらも、彼女はそれを用意にも介さず笑っている。

「武蔵さん……その傷、どうしたんですか？」

「くくく、いや、油断していた、と言う訳でもないのだがな、くくく、あきつ丸とかいう奴は中々陸に置いておくには惜しい人材だよ」

「それほどの実力者でしたか……」

「え!?! 私達を逃がした後そのまま戦って、勝ったんですか!?!」

「まあ、負けてはいないな。かと言って向こうがあれで大人しくなるとは思えんが」

今、最も注視すべき敵対勢力、蜻蛉隊。その隊長をのしてきたというのだから大和はすっかり気が抜けてしまった。

瑞鳳や矢矧もその出鱈目さに声もでていないようだった。

「掟破りというか、なんというか……」

「闘争にルールも何もないさ。さて、そんなことより天龍の話聞きたいのだがな、私は」

「……ああ、そうだな。この際だし、全部話しとくぜ。俺と龍田の過去に一体何があったか、鏑木美鈴が何者なのか」

天龍は食堂のテーブルにつき、他の皆もそれに倣い、テーブルを囲

んだ。

「これは、俺が、友を裏切った話だ」

☆

日が落ちて、見通しが悪くなると、蜻蛉隊の隊員はキャンプを設営し、各々身体を休めることになった。

無論、七丈島の周辺海域を交替で哨戒しながらではあるが、島内の搜索は一旦打ち切られた。

頭や腕、衣服の下にも包帯を巻いたあきつ丸の命令によって。

「本当に良いんですか、隊長！ 結局我らはやられっぱなしではないですか！」

「良い。どうせ、夜目の効く深海棲艦相手では人間は追いつけない。艦娘である私とまるゆ、ロスヴァイセは別であります。それだけでは搜索班としてはあまりに不足。ならば、夜間は島外への逃亡のみを警戒し、体を休める方が得策でありましょう」

レーションをかきこむあきつ丸に原田は食い下がる。

「お言葉ですが、D W — 1 に殺された隊員達の無念はどうなるのです！ 坂本は、堀井は、横田は！ 彼らの死を思うのならば、今すぐにも——」

「原田」

あきつ丸が空になったレーションのプレートとスプーンを置いて、原田の方を睨む。

それだけで原田の背筋が自然と伸びてしまう。

「坂本、堀井、横田の犠牲を尊ぶお前の気概は買うであります」

「は、はい」

「だが、感情のまま生き急いでも仕方がない」

「う、ぐ」

「遺体は回収したでありますな？ であれば、この任務が終わった後に彼らは故郷の土へ還してやらねばならない。そのためには、必ずこの任務を生還せねばならないのであります。わかるな？」

「はい……」

うなだれる原田の肩に手を置き、あきつ丸は笑う。

「何、心配せずとも必ず機会は訪れるであります」

原田を背に立ち去りながら、頭の包帯を外す。

そのあきつ丸の表情からは今さっき原田に見せた温和な笑みは消え、憤怒の炎が燃え上がっていた。

DW-1の逃走を許し、更には隊員を失ってしまったこと、そして、武蔵に敗北を喫したこと。数時間の間に起きたあらゆる結果が、彼女の表情を歪ませる。

あきつ丸は小さく呟く。自分に言い聞かせるように、戒めとするように。

「正義は、我々にあるのであります」

☆

私は人目につかない裏路地で隠れるように身を縮こませている。

先刻受けた麻酔弾の効果が頭を朦朧とさせるのだ。

どこかで一旦休まなければならないだろう。

幸い、日が沈んでからは蜻蛉隊や横須賀の連中が自分を追って来る気配はない。

横になるスペースもないが、誰にも見つからないという点ではこれ以上優秀な休息所はない。

——私は、天龍ちゃんを、大好き。

私は頭を抱える。

自分の思考が別の何かに侵食される感覚に怯えていた。

塗りつぶされるのではない。自分の中に別のものが入ってきて徐々に溶け合い、やがて一つになっていく。

私は私なのに、徐々に私ではなくなっていく。

——私は、天龍ちゃんを、殺したい。

「違う……！」

——私は強い天龍ちゃんが大好き、だから、殺したい。

「違う、違う、違う……私は、そんなこと望んでない……！」

ああ、拙い。

このままじゃ、私はどんどんおかしくなってしまう。

天龍ちゃん、どうか私を早く助けに来て。

私がおかしくなる前に、どうか私を、殺しに来て。
——あの時みたいに。

第八十六話 「ウチの子にちよつかいかけちや、嫌ですよお〜?」

「ぐおっ!」

道場の真ん中から壁まで投げ飛ばされ、背中を強く打ち付ける。

気だるい鈍痛に悶えながら自分を静かに見下ろす艦娘の姿を睨んだ。

「全く、本当にわからない子よねえ、天龍ちゃんは」

「うっせえな、龍田」

「吼える元気があんならまだ大丈夫ね、さっさと立って」

笑顔のまま、容赦なく立ち上がることを強要する龍田に対し、俺は怒りを原動力に全身の痛みに耐えて立ち上がってみせる。

「ほら、罰として課せられた私との組手、100本。まだ、たった37本しか終わってないわよ? 日が暮れちゃうわ〜」

「舐めんな、クソがああああッ!」

激昂し、龍田に向かって突進する。

彼女の首元にもう少して手が届くというところで、急に床と天井が逆転し、龍田が急速に離れていく、そして、直後に背中を打つ衝撃と共に床に落ちた俺は、また龍田に投げ飛ばされたのだと気が付いた。

その後、62回同じことが繰り返された。

「痛い目にあうことなんてとつくにわかっている筈なのに、なんでいつも命令無視しちゃうのかしら〜、暴れ天龍ちゃん?」

「その名前で呼ぶな」

暴れ天龍。

ここに来る以前からの俺の仇名というか、忌み名というか。

命令に従わない、単独行動する、好き放題暴れる、そのくせ毎回深海棲艦は全滅させ、戦果を挙げるものだからおいそれと処分もできない。そんな、どうにも手の付けられない暴れ馬の俺を揶揄したものだ。

最初は軽蔑の意味合いが強かったのだが、俺が毎回一人で深海棲艦を全滅させて帰ってくるうちに、艦娘達からは畏怖の念も加えられて陰で囁かれた。

「嫌なのかしら〜？ 今じゃ少しは名前も通っているでしょうに」
「……………」

「まあ、名前負けしてるものねえ。実際のあなたはこんなに弱いもの」挑発じみた龍田の言動に畳に伏したまま彼女の言葉を聞いていた俺の身体が持ち上がる。

「喧嘩売ってんのか…………？」

「え、嘘、天龍ちゃん自分が強いと思ってたの？ 私にも勝てない分際で？」

大きさにリアクションをとって龍田は俺を嘲笑する。

ここに刀があつたら即座に叩き斬つているところだ。

「あなたが今まで敵を全滅させてくれたのはあなたが強かったからじゃない、敵が弱かったからでしょ？ はつきり言つて、迷惑よ。弱い癖にいつも前に出て、単騎で突つ込まれても、いざという時尻ぬぐいをするのはこっちなんだから〜」

成程、俺が龍田に心底むかつているのと同様に、龍田の方もかなり俺には苛ついているらしい。

舞鶴第二艦隊の旗艦としてその一員たる俺の監督責任も受け持つ彼女にとって、俺は頭痛の種でしかないということだ。

そういうことなら簡単な話だ。

俺は立ち上がって龍田に笑つて言つてやった。

「そういうことなら問題ねえよ。俺の口から提督に言つといてやる。俺が勝手に単独行動して死んだ時は別にお前の責任は問わねえようによお。だから、安心して俺のことは放っておけや、な？」

次の瞬間、再び視界が逆転し、そのまま暗転した。

後から聞いた話では、俺は脳天から畳に叩きつけられ気絶したらしい。

☆

「あら、天龍。災難だったわね？」

「……叢雲か」

医務室から出てきた俺に声をかけたのはこの舞鶴鎮守府の最古参、駆逐艦叢雲であった。

ライトブルーの髪をはためかせながら彼女は笑顔を浮かべて俺に近づいてきた。

「全く、龍田も酷いことするわ。あなたは艦隊の中で一番戦果を挙げたのに」

以前の鎮守府でもそうだったが、舞鶴に来てからも俺に対する周りの反応はほぼ二分化されていた。

龍田のように敵対心と嫌悪を露わにしてくるか、あるいは怖がって関わろうとしないかのどちらかだ。

しかし、この叢雲だけは珍しく俺に対して表面上理解を示す艦娘だった。

「はっ、そんなこと言っただけのことをお前様を庇ってくれる変わり者はお前ぐらしいのよ」

「別に。私は合理主義なだけよ。これであなたが戦果を挙げてこなかったら、私だって他の皆と同じようにあなたを批判していたと思うわ」

「そうかよ。じゃあ、これからは気合入れて戦果だけは挙げてこねえとな」

俺は叢雲のこういう性格が嫌いではなかった。

評価の基準がはっきりしていてわかりやすいし、本人もそれを一貫している。感情のまま敵意をむき出しにしたり、きまぐれに距離を縮めようとしてこない。

ある一定の距離を置いて、それでいて友好的である理由がはっきりしている。

こちらとしてもそれくらいサバサバしている方が、気が楽なのだ。「安心しなさい。鎮守府の利益になる存在を私は無下には扱わないわ」

背中を向けて、食堂へ向かう俺に叢雲がそう言葉をかける。

それに対し、俺は右手を軽く振って答えた。

☆

「聞いた!? 今日、龍田がつくき天龍を気絶するまで張り倒してくれたらしいわ! これでも奴も自分の立場を思い知り、厚顔無恥な態度を改め、私に土下座して謝ってくること間違いなし——」

「誰が、誰に、土下座するって? ああん?」

「ぐああああああ! この声! 出たわねツ! 天龍ツ!」

食堂に入ると、見覚えのあるちんちくりんがテーブルの上で声高らかに道場での俺の失態を宣伝していたので背後からその頭を鷲掴みにして持ち上げた。

俺の不意打ちを食らったそのちんちくりんは空中でじたばたと暴れながらも尚も俺に対する敵対心を緩めない。

「さあ! 今すぐ、今までのことを謝るなら、私もレディとして寛容な心を持ってその全てを赦してあげようじゃない! ほら、ごめんなさいって言ってごらんなさいよ!」

「は? 誰がテメエに赦しなんぞ乞うか、ちんちくりんが」

「ちんちくりん!? 誰がちんちくりんよ、私の名前は暁だっていつも言ってるでしょうが! いい加減覚えなさいよ!? 馬鹿なの!? 死ぬの!」

よくも敵に頭を鷲掴みにされた状態でそこまで高圧的な態度を取れるものだと感心する。

暁は俺の所属する第二艦隊の艦娘の一人だ。龍田に次いで俺に反発している艦娘で何かとすぐに突っかかってくるチンピラみたいな奴だ。

今まで何度タイムンを挑まれ、その都度俺に瞬殺されて泣き顔になって逃げていくこいつの背中を何度見送ったか、もう覚えていない。

「ってかいい加減離しなさいよ! いつまでレディの頭鷲掴みにしてんのよ! ぶっ飛ばすわよ!」

「おう、ぶっ飛ばせるもんならやってみろや」

「ええ、やってやるわよ! あんたが手を離したらすぐにでもその憎たらしい顔面をしこたまぶん殴って泣きつ面拜んでやろうじゃない

の!?! ええ!?!」

レディを自称する割に口悪すぎるだろ、こいつ。

「あれー? 何? もしかして怖いのか? 私にぶん殴られるの怖くて
ビビっちゃって手が離せないのかしらあ? 可愛いわねー、天、龍、
ちゃん」

「よく吼えた、ちんちくりん」

俺は暁の頭を戦力で食堂の床に対しほぼ垂直に叩きつけた。

床の木版が砕けた音と同時に、暁の身体が床に刺さっていた。

「あ、暁ちゃんが……刺さった」

「す、垂直だ」

「必然、パンツが丸見えだ……」

「くまさんパンツだ……おおよそレディとは真逆に位置する可愛いく
まさんパンツだ……」

周りの艦娘達が震えながら床に刺さったまま微動だにしない暁を
見てどよめいている。

我ながらいい仕事をした。

せいぜいこれで二、三日寝込む程度に赤っ恥をかくがいい。

「あらく、随分面白そうな遊びをしてるのね、私も混ぜてもらえるか
しら?」

背後から響く声に俺の笑顔が凍り付いた。

そこから何があったのかは想像に難くない。

要は、暁にしたことを、俺にも再現した訳だ。

「て、天龍も刺さった……」

「二人揃って垂直だ……」

「必然、天龍のパンツも丸見えだ……」

「く、黒下着だ……存外セクシーなチョイスだ……」

怒りと羞恥に身悶えしながら、いつか絶対龍田も同じ目に逢わせて
やると、俺は固く誓ったのだった。

☆

「今日は随分とツいてないみたいね。まあ、その様子じゃ軽傷みたい
だけれど」

「見た目以上に傷は深いけどな」

医務室を出た所でまた叢雲と遭遇した。

俺の様子と頭に巻かれた包帯とを見比べながら、安堵のため息を洩らす彼女に対し、俺は目を伏せた。

「龍田のヤロウ……この借りは百倍にして返してやる」

「なんで天龍は龍田に目の敵にされてるのかしら？」

「知らねえよ、とにかく俺が気に食わねえんじやねえの？」

「ひよつとしたら、ひがみかもしれないわね」

「は？ ひがみだあ？」

叢雲の言葉に俺は驚愕を露わにした。

俺より強いあいつが、俺より艦隊から慕われているあいつが、一体俺の何をひがむと言うのだろうか。

「妬ましいのよ。あなたみたいが好き勝手やってる癖に、それで結果を出せるっていう才能が」

「……わかんねえな」

「でしようね、あなたと龍田じゃ何もかもが違うもの。龍田は、長らく努力が報われなくて苦労した子だから」

「あ？」

叢雲の言葉に俺はつい威圧的になってしまった。

その言い方では、まるで俺が何の努力も苦労もしていないと言っているように聞こえたからだ。

その様子を察知し、すぐに叢雲は苦笑いを浮かべた。

「気に障ったなら謝るわ。でも、少なくとも龍田からすれば、あなたはそう見えているってことよ」

「……なんだそりゃ」

あれだけ偉そうなことを言っておいて、結局は嫉妬か。

自分はこのように努力しても結果が出ないのに、あんな不良が簡単に結果を出すのは道理が通らない。そんな自己中心的ないがかりで俺を否定していたというのか。

頭に血が上ってくるのが自分でもよくわかった。

「ねえ、天龍。龍田と反りが合わないのなら、ウチに来ない？」

「ウチって、お前が旗艦やつてる第一艦隊についてことか?」

叢雲がゆつくり頷いた。

願ってもない提案だが、そんなことが可能なのだろうか。

「大丈夫よ。提督は私が説得するし、艦隊の皆にもあなたのことでとやかく言わせないわ」

「なんで俺なんだ? 実力で言えば龍田の方が上だぜ?」

「今は、そうでしょうね。でも、龍田はもう今がピークなのよ。長いこと見てきたからわかる。彼女の成長はもう止まった。底が見え切っているのよ」

この鎮守府で龍田をここまで酷評する人物を俺は初めて見た。

「でも、あなたは違うわ、天龍。あなたはまだまだ強くなる。いずれは龍田も目じやない程の才覚を秘めている。ならば、将来的なことを考えてあなたを今の内に第一艦隊に入れておくのが合理的と判断したわ」

龍田よりも俺に目を掛けてくれているという叢雲の言葉に思わずにやけそうになるのを抑え、平静を取り繕いながら質問する。

「でもよ、今第一艦隊には空きがねえだろ。そこはどうするんだよ?」
「あなたはローテーション時の補充メンバーとして加入してもらおうと思ってるの。第一艦隊、すなわち『主力』という戦力を維持しつつ、より長時間継続するための交代要員。そろそろ欲しいと思っていたのよ。あなた程の艦娘なら申し分ないわ」

俺のことを弱いと断じた龍田とは真逆の評価であった。

まあ、叢雲の話聞く限り妬み嫉妬も入り混じった結果なのだろう。

叢雲は俺を戦力だと判断し、有用だと買ってくれている。その信頼を裏切りたくはなかった。

「ああ、でも流石に私の推薦とは言え、それだけじゃ提督を説得しきれないかもしれない。だから、一つ、任務をこなしてもらいたいのよ」
「任務?」

「ええ、その成果も合わせて念押しすれば、まず問題ない筈よ。心配せずとも、あなたの実力なら問題ないレベルの任務よ」

「……………」

「で、どうする？ できればすぐにでも返事が欲しいわ。まあ、あなたなら私の期待に応えてくれるとはわかっているけれどね」

差し出された手を、振り払う理由が見当たらなかった。

右手を叢雲の手に伸ばそうとしたその瞬間に、背後からあの声が、聞こえてさえこなければ、俺は彼女の手を固く握っていた筈だった。

「あら、これはこれは叢雲さんじゃないですかあ。天龍ちゃんに何か御用かしら？」

「——っ！」

「……あら、龍田じゃない。あなたは提督に出撃の戦果と食堂の備品破損について報告に行っていたと思っていたのだけれど」

「ええ、凄く怒られちゃったわ。だから、天龍ちゃんの様子を見に行くとって言い訳して早めに切り上げてもらったのよ」

「ふうん」

叢雲は天龍に差し出していた手を素早く引つ込め、俺もまたゆつくりと、龍田に気取られないようその手を戻した。

「それで、お二人は楽しそうに何のお話してたのかしら？」

「別に、ただの世間話だよ」

「天龍ちゃんには聞いてないわ」

「なっ……………」

「別に。本当に他愛もない話よ。その怪我はどうしたの、とか。最近艦隊はどう、とか。こういうのを世間話と言うのではなかった？」

「あらそうでしたか、それはお邪魔して申し訳なかったわあ」

「いえ、私もそろそろ戻ろうと思っていたから、気にしないで頂戴」

互いが、互いの手の内を隠し、探り合うかのような会話だった。

「それじゃあ、もう行くわね。天龍、また近いうちにゆつくりお話ししましょう」

「え？ あ、ああ」

俺はその言葉を、また目を改めて返事を聞かせて欲しいという暗喩と受け取った。

「叢雲さん」

「……何？」

去り際に龍田が叢雲に声をかける。叢雲は背を向けたまま足を止めた。

「ウチの子にちよつかいかけちゃ、嫌ですよお〜？」

「ふふ、何の話かしら？」

お互い楽しそうに笑い合っていた。

ただし、その目は、双方共に笑ってはいなかった。

☆

「天龍ちゃん、叢雲さんにはあまり関わらないでもらえる？」

「はあ？」

叢雲が完全にいなくなった後、龍田は俺にそう言った。

「訳わかんねえよ。何がどうしてそうなる？」

「いいから。黙って言うことを聞いて」

龍田の口調は有無を言わせぬ感じで、いつものような余裕が感じられなかった。

彼女のそんな態度が気に入らなくて、俺は首を横に振った。

「嫌だね。俺が誰とつるもうが、俺の勝手だろうが」

「聞き分けのない子は嫌いよお？」

龍田から殺気が滲み出ている。暁ならば、この時点で押し黙って大人しく言うことを聞くだろう。

しかし、俺の性分として、ただでさえ気に入らない奴から、そんなあからさまな敵意を向けられれば、反発せずにはいられない。

「はっ、なんだよ、急に必死だなあ。ああ、そうか、お前、気に入らねえんだろ。俺が第一艦隊に異動するのがよ」

「第一艦隊に、異動？ 天龍ちゃんが？」

「ああ、そうだけ。叢雲から直々にスカウトされたんだ」

その言葉に多少なりとも動揺したのか、数秒、龍田は言葉を失っているようだった。

「いえ、そんなはずないわ」

数秒、思考した末に辿り着いた結論が現実逃避とはあの龍田も形無しであると俺は胸がすくような気持ちだった。

「おいおい、現実を見ろよ」

「現実を見るのは天龍ちゃんよ。よく考えて、あなたが、第一艦隊に配属される訳ないでしょう?」

その言葉は、俺の頭に血を昇らせて沸騰させるのに十分な発言だった。

「てめえ、妬みもいい加減にしろよ」

「え?」

「お前は結局、俺を認めたくねえだけだろうが! 自分の方が努力してるから、自分の方が苦しい思いをしているから、俺じゃなく自分が評価されるべきだって思ってたんだろ!」

「な、何を言っているの、天龍ちゃん?」

「お前はそうやって俺のことわかったように見下すがよ、お前は俺の何を知ってたんだ? 俺を否定するばかりで、理解しようとしなかったお前が!」

「……………」

俺の怒声に龍田が珍しく口をつぐんだ。

好機とみるや、俺は更に龍田を攻め立てた。

「俺が何の努力もしてねえと思っただか? 俺がろくに苦勞してねえと思っただか? お前から見えてる俺が全てだとも思ってたんのか?」

俺が、本当に、好きで『暴れ天龍』なんて呼ばれてると思ってるのか?!」

息切れする俺に対し、龍田は申し訳なきように目を伏せた。

「……確かに、あなたを理解しようとしていなかったのは事実ねえ。

正しいわ」

「んだよ、何が言いてえ」

「つまり、私が今ここで何を言ったところで天龍ちゃんには届かないってこと」

「は?」

その言葉を最後に、龍田は踵を返し、歩き去ってしまった。

一人、取り残された俺はと言えば、胸中の複雑な感情の置き場に困り果てていた。

「なんなんだよ……ッ！」

去り際に見えた龍田の寂しげな表情が、妙に脳裏に焼き付いて離れなかった。

第八十七話「あんた、龍田のこと何にもわかってないのね」

「天龍、何故呼び出されたのかわかるか？」

「さあね」

執務室に座る筋骨隆々の日に焼けた肌色をした男の呆れたような声に俺は同じく呆れたような声で返した。

「いい加減、その協調性のなさはどうにかならないのか？」

「いい加減、その諦めの悪さはどうにかなんねえのかよ、おっさん。俺にいくら説教しようが、無駄だってもうわかってんだろ？」

「おっさんじゃあない！ 提督と呼べ！ ていうかそんな老けて見えるか!？」

毎度毎度、出撃で俺が命令違反をする度に俺は目の前の男——舞鶴鎮守府の提督——に説教をされるのが通例であった。

何を言われようとこのスタンスを変えるつもりはないと何度も言った筈なのだが、まだ俺を矯正するつもりでいるらしい。

面倒くさいおっさんだ。

「あのな、お前は——」

「実力はあるんだからそれを自分だけでなく艦隊にも活かせ、だろ？」

もう耳にたこができるぜ」

「はあ……実はな、他の艦娘から抗議の声があがっている。お前を追い出すべきだってな」

「心中お察しするぜ」

「じゃあ、直せよー」

頭をぼりぼりと掻きながら反省の色の見えぬ俺に深いため息をつく提督。この男もわからない奴だ。俺がいて迷惑だと思ふのならばさっさと追い出してしまえば良いのに。

俺一人のあげてくる戦果が消えた所でこの鎮守府ならば成績はそこまで悪化しない筈だ。

「まあ、安心しろ。お前を追い出すつもりは一切ないからな！」

「はあ……わかんねえ人だな、あんた。まあ、礼は言うがよ」

「恩義を感じるなら態度で示せ」

「じゃあ、別にいいや」

「全く……今は俺と協力してくれる艦娘で抑えてはいるが、このままお前が変わらないようならば、いつまでも庇えないぞ！」

意外だった。提督はともかくとして艦娘側にも俺を庇おうとする者が多少はいるとは思わなかったからだ。

「まあ、協力者といつても一人だけなんだがな！ 本当に人望ないな、お前！」

「なんでわざわざ言った」

「いや、今ごまかしても真実を知った時にお前がより傷つくんだけなんじゃないかと」

「いらねえ気遣ってんじゃねえよ」

一人だけか。おそらくは叢雲だろう。

「心配すんなよ、潮時だと思つたら普通にここ出ていくからよ」

「寂しいことを言うもんじゃないぞ、天龍！」

暑苦しい。これ以上この空間にいるのが耐えられず、俺は黙って扉に向かって歩き始めた。

「おい、天龍、話は終わってないぞ！」

「俺はもう話すことはねえ。話を聞く気もねえ。お互い時間の無駄だぜ、おっさん」

「おっさんじゃない！俺はまだ20代前半——おい、待て、天龍ッ！」

背中に提督の声を浴びながら扉を開けて俺は執務室を後にした。

そろそろ頃合いなのだろう。これ以上、この鎮守府に居座れば何が起ころとも知れない。それに——

「——つたく、何で今、龍田の顔なんざ思い出してたんだよ、俺は」

☆

「天龍！ここであったが百年目ッ！今日こそ私の前に平伏しなさい

ぬぐお!!」

「はあ、お前は毎日毎日元気だな」

翌日。食堂で朝食を食べていた俺に、暁が挨拶代わりと言わんばかりにタツクルを仕掛けてきたので、その頭を掴んで止めた。

こいつの頭は手によくフィットして掴みやすいのだ。

「人の頭を掴むなんて、レディじゃないわ!」

「朝から人に向かつてタツクルしてくる奴に言われたかねえよ」

「ん? 何よ、あんたその朝食。麦飯だけじゃない。おかずはどうしたのよ?」

「……チツ」

「何その舌打ち!?!」

言い難いことをズバズバと聞いてくる奴だ。

周りの艦娘が暁の発言に対し、どこか気まずそうに視線を逸らしていくのがわかった。

「知ってんだろ、俺が嫌われてんの」

「知ってるわよ、私も嫌いだし!」

「だからだよ」

「だからだよって……?」

「っ! だから! いけすかねえ俺に食わせる飯はねえって嫌がらせ受けてんだよ! 察しろ、ちんちくりん!」

朝食はその時間中に食堂のカウンターに並び、その日の配膳係からプレートを受け取っていく方式だが、俺に配られたプレートには麦飯の茶碗が載せられているだけだった。

抗議の声を挙げてでも無視され、周りもまるで無反応。要は、ほぼ全員がグルというわけだ。

配膳係の胸倉を掴んで投げ飛ばしてやっても良かったが、それでは根本的な解決にならないどころか、相手の思う壺だ。

別にここで問題を起こして追い出されるのは構わないが、こいつらの思い通りに事が運ぶのは気に入らない。

仕方なく、怒りを抑えながら震える手で俺は麦飯だけが載せられたプレートを持って席についたと言う訳だ。

「……はあ? ったく、仕方ないわね。ちよつと待ってなさい!」

事情を察した暁は俺の手を振り払って食堂の方に歩いていくと、しばらくして二人分の朝食を持って隣の席に座った。

「はい、あんたの分」

「……なんの真似だ」

「覚えておきなさい、朝食を軽んじる奴は痛い目を見るのよ！」

みそ汁と鮭の塩焼き、だし巻き卵、ほうれん草のおひたしを俺の目の前に置くと、暁はそそくさと自分の朝食を食べ始める。

「情けをかけたつもりか？」

「は？ そんなわけないでしょ？ 朝食を食べなかったせいで、力がでなかったじゃこつちが迷惑すんのだよ。今日も出撃あるの忘れてんじゃないでしょうね？」

「……ちんちくりん」

「暁よ」

暁はそこまで言うとい旦箸を止めて食堂中に聞こえる声で言った。

「誰が首謀者か知らないけど、こつちいうことは金輪際止めてよね。喧嘩くらい直接売りなさい。全く、情けない——レディじゃないわ」

暁の言葉に、返答はなかった。

だが、すっかり俯いて委縮してしまっている艦娘達を見るに、それなりに効果はあったらしい。

「礼は言わねえぞ」

「いらぬわよ、別にあんたのためにやったんじゃないし。あんた如きに皆何を怖がってるのかって不思議だっただけよ。あとちんちくりん言うな」

「……………」

「何よ、なんか少し元気ない？」

「別に」

「え、何、そんなに辛かったの!? 陰湿ないじめに傷ついちゃったの天龍ちゃん!? 可愛いわね、暁お姉さんがよしよししてあげましょうか? ん?」

「ははっ、なんだよ、また床に刺さりてえのか、お前? 上等だよ」

「——おはよう、ちよつと寝坊しちやつたわ〜」

手が出る寸前、食堂に入ってきた龍田の声に昨日の出来事がフラツシユバックして体が跳ね、素早く、何事もなかったかのように食事に戻る。

「あ、龍田おはよう。今日は少しお寝坊さんね、珍しい」

「ちよつと、昨日遅くまで作戦資料に目を通していてね〜……じゃ、私行くわね」

「え!?! 隣空いてるわよ?、ここで食べればいいじゃない!」

暁に声をかけられ、恥ずかしそうに頬を掻いていた龍田だが、俺の姿が隣にあるのを確認するや否や逃げるようにその場を離れていつてしまった。

その様子を見て、何か察したのか、暁は俺に向き直る。

「あんだ、龍田に何したのよ」

「……別に」

「いや絶対なんかあったでしょ、でなきや龍田があんな態度とる訳ないじゃない! あ、もしかしてあんだが微妙に元氣ないのも関係ある!?!」

「うっせえな」

「やっぱり! 目逸らしたもん! 絶対そうじゃない、凶星じゃない!」

どうやら一切合切話すまで逃がしてくれなさそうな様子に、仕方なく俺は昨日の出来事をかいつまんで話すことになった。

☆

「——はっ! 笑止! 実に笑止と言わざるを得ないわね! マジ笑止!」

「ふざけてんなら、ぶっ飛ばすぞ」

気が付けば食堂は俺と暁以外は誰もいなくなっていた。

暁は話を聞き終えるや否や俺を鼻で笑い、見下すように——というかテーブルに仁王立ちして実際見下していた。

「でも、ごめんなさい。私、話を聞く前、ひよつとしたら天龍が悪いんじゃないかって疑ってたの」

「だよな、やっぱこの件に関して俺に落ち度は——」

「疑うまでもなく、あんたが悪いに決まってたわ」

なんだとこの野郎。

再び食堂の床に穴が開くことを避けられたのは、暁の続けざまに出た言葉によつて俺の思考が止まったおかげであった。

「あんた、龍田のこと何にもわかってないのね」

「……あ？」

それだけ言うと、暁は呆れたように席を立ち、どこかへと歩き去ってしまった。

☆

「あら、あなた今日は出撃があるんじゃないかなかった？」

「はっ、知るかよ。サボりだ、サボり。どうせ、俺なんていない方があいつらも任務が捗るだろうしな」

「ふうん、昨日龍田と何かあったのかしら？」

苦笑いを浮かべる叢雲に俺は言った。

「そういう訳だからよ、叢雲。お前が言つてた第一艦隊に入るための任務って奴、詳細を聞かせてくれねえかな」

その言葉と同時に、叢雲は満面の笑みに変わって頷いた。

「あなたならそう言ってくれるって思ってたわ」

叢雲と俺は他の艦娘に話を聞かれないように場所を移動した。

叢雲はどこからか海図を持ってくると、その一か所に赤鉛筆で印を付けた。大分遠い。かなり深海棲艦の支配領域に近いほとんど前線の位置だ。

「あなたには、単独でここに向かって欲しいの」

「ここは？」

「ここは以前、泊地だった場所。数ヶ月に深海棲艦に襲われて壊滅、以降は奴らの巢窟になつてるわ」

珍しい話じゃない。戦争をしている以上、こっちの被害がゼロな筈はなく、深海棲艦との戦いに敗れ、凄惨な死を迎える者は少なくない。

「具体的にはこの予備電源を起動して欲しいのよ」

「予備電源？ 何のために？」

「通信機器類を再起動させて、その泊地の戦闘データ、戦略情報諸々を回収するためよ」

成程、泊地が壊滅したことでデータベースにアップロードされ損ねた情報を回収できればそれは著しい戦果と言える。

それらは鎮守府についてはこの国にとつての利益となり得るだろう。「予備電源さえ入れてくれれば後はこっちでハッキングする準備ができてる」

「そんな大事な任務を俺に、しかもたった一人でやらせる気かよ」

何が俺の実力なら問題ない任務、だ。深海棲艦の巣窟に一人で突入などほとんど自殺行為ではないか。

「艦隊を組んでいけばすぐに索敵に引つかかるし、そもそも戦力差が違いすぎて戦闘になったらひとたまりもないわ。つまり、この任務は『見つかった』はいけないのよ。だからこそ、戦闘能力の高い精鋭による単独潜入が効果的なもの」

「成程、納得したぜ」

「心配しなくとも潜入ルートも確保してあるわ。こっちの指示に従ってくれば上手くいく筈だし、あなたならこの程度はこなせる実力がある筈でしょう?」

叢雲はそう言つて笑う。俺もそこまで言われては引けない。

すぐに装備を整え、俺は叢雲に言われた泊地跡へと出撃したのだつた。

『天龍、聞こえているかしら?』

「おう、問題ねえ、良好だ」

『そう、じゃあ、索敵網の薄い所から潜入を開始しましょう。ルートはこっちから誘導するわ』

叢雲の指示通りに、何度か迂回を繰り返しながら泊地跡に静かに近づいていく。

彼女の指示はかなり無茶苦茶で並大抵の艦娘がこなせるような要求とは思えなかったが、それでもそのおかげか道中深海棲艦の影も見ないまま、あっさり俺は半壊した泊地跡へと辿り着いた。

『よし、事前に渡した泊地内の地図は持つてきてるわよね? それを

頼りに予備電源に向かつて』

「了解した。まあ、この分なら楽勝だな」

『ええ、もう少し時間がかかるかと思っていたのだけれど、流石天龍ね』

心なしか叢雲の声も弾んでいるように聞こえる。

俺の運が良いのか、それとも深海棲艦の警戒が甘いのか、巣窟という言葉が嘘のように自分以外の気配がなかった。

途中、何度か瓦礫に阻まれて時間はかかったものの、やはり戦闘になることもなく俺はあっさりと予備電源設備のある区画へと辿り着いてしまった。

「このブレーカーを上げればいいのか？」

『ええ、それだけで施設内の機器は再起動が始まるようになっている筈よ』

「これで、任務完了と」

錆びついた赤いレバーを力任せに持ち上げるとガコンと、泊地内の各所で機械音が響き渡り、薄暗い室内にぽつぽつと電気が灯り始める。

それと同時に。

泊地の周りから、数多の水音と共に地獄の底から響いてくるようなおぞましい雄叫びが聞こえてきたのは。

「——っ！ 気づかれた!? 畜生、こいつのせいか!」

予備電源が入れば、泊地内の生きている機器類の全てが自動的に再起動する。ならば、それは深海棲艦にも視覚的に、聴覚的に異常を知らせるものになり得ると何故気付かなかったのか。自分の浅慮が苛立たしい。

よりにもよって泊地の真ん中。最悪の位置で自分の存在が露見した。

流石にこの状況がいかにも絶望的かは俺にもすぐにわかった。

「叢雲！ おい聞こえるか!? 任務は達成した！ でも奴らに気付かれた、悪いが援軍を頼む!」

不穏な空気が流れ始める泊地内を走りながら、無線機になんとか救

助を要請できないか訴える。

しかし、聞こえて来たのは叢雲の能天気な声だった。

『助かったわ。今丁度泊地のデータベースに入りこめたの。凄い情報量、しかもウチの鎮守府に活かせる有用なものばかり』

「いや！ それはわかったからよ！ とりあえずこの危機的な状況を乗り切る案をくれねえかな!？」

『……大丈夫よ、天龍。きつとあなたは英雄として語り継がれる。誰にもあなたを卑下させないわ』

「は？ いや、だから——」

『だから、安心して死になさい』

その叢雲の言葉は俺の思考を一瞬で真っ白にし、その足を止めた。

「おいおい、笑えねえ冗談だな、おい」

『冗談じゃないわよ？ だって、ここまでが作戦だもの』
「は?」

駄目だ。叢雲が何を言っているのかさっぱり理解できない。

『そりやそうでしょう。予備電源を入れればその時点でどう足掻いても深海棲艦に気付かれるのは必然。そして、気付かれればもう生きて帰れるわけがないわ』

「そりや、どういう意味だよ……」

『やっぱりあなたは私の見込んだ通り、素晴らしい艦娘だったわ。私あの指示通りに動けるといっただけでも一流だけれども、更にはこんなに早く予備電源区画に辿り着いてくれるなんてね』

「おい、答えろ、叢雲！ どういう意味だ!」

『この作戦のためにね、私どうしても欲しかったのよ』

それまで弾んでいた叢雲の声が途端に冷たくなった。

『死んでもいい、優秀な艦娘っていう道具が』

「……なんだ、そりや」

『この作戦を成功させるには二つの必要条件がある。一つは私の指示通りに動き、索敵網を抜けられる程度に優秀であること、もう一つは、最終的に死んでも構わない、ということ』

つまりはこういうことだ。

この作戦は元々誰かを犠牲にすることが前提条件の作戦だったという訳だ。

そして、その生贄として選ばれたのが、俺なのだ。

『あなたはこの作戦にぴったりの艦娘だった。個人としての能力は申し分ないトップクラス。それなのに、協調性が皆無で命令無視が当たり前の暴れ馬。艦隊単位で見れば排除すべき因子。だから、私はあなたに近づいたの』

俺を、利用するために。

『色々と手間をかけたわ。他の艦娘を煽ってあなたが孤立するよう誘導し、龍田とあなたの間で亀裂が生まれるよう印象操作し、そして私だけが周りとは正反対にあなたを評価し、取り入った。まあ、全部お膳立ては勝手にされていたから、私は少し後押ししただけなのだけだ』

最近の艦娘達からの嫌がらせが頻発していたことは叢雲が原因だった。

昨日、龍田との言い合いになった原因に、寸前叢雲から聞いていた龍田の話があった。

俺はいつの間にか叢雲の話を鵜呑みにするようになっていた。

「なんで、だよ……」

『私ね、実は他所の鎮守府から舞鶴に初期艦として移ってきた艦娘なのよ。その元いた鎮守府の提督から教わったの。自分以外の全ては己の目的を達成するための道具として使えって。私、我ながら上手にあなたを使えたんじゃないかしら』

「……はは、じゃあ、なんだよ。提督と一緒に俺を庇ってくれてたつても俺の信用を得るための演技か?」

『ん? それは知らないわね。私以外の誰かじゃないの? モノ好き な子もいるのね』

腐ってる。

俺は無線機を握りつぶしそうになるのをこらえながら歩き始める。

「覚悟しろよ、叢雲。俺は、絶対にテメエを殺す」

『あら、素晴らしい心がけね。そうね、そこであなたがなるべく頑張っ

てくれた方が鎮守府としての戦果も上がるもの。ありがとう、期待しているわ』

俺は無線機を投げ捨てた。

そして、腰の刀を抜くと、適当な窓をぶち破り、海に降り立つ。

着地してすぐに、駆逐イ級が待ち構えていたとばかりに大口を開けて襲いかかってくる。

それを一振りにて真横に両断し、俺は地平線まで続いているのではないかと錯覚するほどに視界を埋め尽くす深海棲艦の群れを睨んだ。

「俺は今、虫の居所が悪いんだ……どけ、雑魚共ッ！」

怒りのままに絶望的な戦力差に突っ込んでいく俺は文字通り正気ではないのだろう。

だが、狂気に身を任せても状況は変わらない。

憤怒に身を委ねても劇的に強くはならない。

この世界は、どこまでも無慈悲で公平だ。強い奴が勝ち、弱い奴が負ける。そこに感情が関与する余地はなく、既に俺の敗北は決定事項だった。

「——はあ、はあ……」

50隻は斬っただろうか。だが、いまだ視界を埋め尽くす深海棲艦に変化はなく、また、俺の体力も限界に近づいていた。

未だ損傷は中破に留まり、辛うじて動けることが唯一の救いだらう。

あと、30隻は斬ってから沈んでやる。

俺は、目が霞む中、気力で刀を構える。その背後に近づくと、戦艦夕級の影にも気が付かず。

「えっ？」

気付いた時には、夕級の砲口が振り返った俺の眼前にあった。

絶対不可避の必中領域。ここからできることと言えば、死なないように祈ることだけだ。

それも多分厳しいだろうが。

「畜生……畜生……ッ！」

死に直面した俺の口から洩れ出たのは情けない、涙声だった。

悔しい、情けない、辛い、哀しい、色々な感情が一瞬の間に俺の内側を流れていく。これも一種の走馬燈と言えるのかもしれない。

そして、砲口の奥から死の炎が噴き出さんとしたその時だった。

「――まだ、生きてるわねえ？」

夕級の横腹を音速で飛んできた大型の薙刀が貫く。

その身体は叫び声をあげる暇もなく、砕け散り、海の底へと落ちていった。

「お前、何で、ここに……」

「当然、出撃時刻になつても集合場所に来ない不良娘に説教しにきたのよお」

両手に薙刀を構え、不敵に笑う龍田は、俺の目には輝いて映っていた。

第八十八話 「独りで戦ってる奴が強い訳ないでしょ？」

「はあい、天龍ちゃん、私がこれから何を話すかわかってるわよねえ？」

「お、おう」

舞鶴鎮守府。その食堂では現在全艦娘の活躍を労い、宴会が行われていた。

そして、俺はその隅っこで床に正座させられ、黒い笑顔を浮かべる龍田に見下ろされていた。

「はい、説教タイムです」

目がすこぶる笑っていない。これまでも何度となく彼女を怒らせたことはあったが、今回のそれは今までにないマジギレである。

いつもの俺ならば、こんな龍田にも真っ向から反抗してみせるのだが、今はとてもそんな気分になれない。

僅かに視線を上に向けると、彼女の右腕に巻かれた痛々しい包帯が見に入り、俺の視線は再び床に沈んでいった。

結果だけを簡潔に語るのなら、数時間前、深海棲艦の巢窟の真ん中で窮地に陥っていた筈の俺は、こうして生還している。

☆

数時間前。

「龍田、お前、何でこんな所に……」

「暁ちゃんから少し話を聞いてね。集合場所にも来ないし、気になって調べたら叢雲が天龍ちゃんをここに向かわせたって吐いたから、一目散に駆けつけたわあ」

龍田は目の前の深海棲艦の群れを見つめながら、淡々とそう答えた。

よく見れば、龍田の装備は両手に持っている大型の薙刀のみ。その代わり、それと同じものが彼女のバックパックに十数本積載されてい

る。

先刻俺の目の前の戦艦夕級を仕留め、沈んでいった薙刀も同じものであった。

この量の深海棲艦を相手に薙刀のみで戦うつもりなのだろうか。それはあまりにも自殺行為に思える装備だった。

「何で来ちまったんだよ、お前……こんな量の深海棲艦、どうにかできる筈もねえ。お前まで無駄死になるだけだ、それくらいわかんだらうが！」

「誰が無駄死にですって？」

龍田が俺を睨みつける。その瞳孔の開いた目に睨まれただけで鳥肌がたった。

なんだこいつは。これが、本当に龍田なのか。

こんな龍田は見たことがない。今までのどんな出撃でだつて見たことはないのだ。

「安心して、天龍ちゃん。今の私、普段の10倍強いからあ」

そう言うと、龍田は突如海面深くに薙刀を突き刺す。そして、ゆっくりと引き上げるとそこには潜水力級が腹部を貫かれ、弱弱しくもがいている姿があった。

それを一振りで両断してみせると、龍田はすかさず俺の背中を薙刀の石突の部分で小突き、全速力で向かって来る深海棲艦に背を向けて走り出した。

「ほら、さっさと逃げるわよお」

「あんな無双しそうなセリフ吐いて結局、逃げんのかよ!？」

「当たり前でしょ、全部相手にしてたらきりが無いわあ」

まるでやろうと思えば全滅させられるみたいな口ぶりだ。

しかし、俺達は巢の中心で囲まれている。

どこに逃げようとも、背後からの追撃は勿論、その左右からも敵は押し寄せてくるのだ。

「おい、龍田！ 左からきてんぞー！」

「わかってるわよお」

龍田はまるで小刀でも扱うかのように軽々と片手で薙刀を振り回

し、深海棲艦数隻をあつという間に切り裂く。

その洗練された動きは今まで見てきた彼女の挙動が如何に加減されていたものだったか気付くのに十分だった。

「お前、今まで戦闘でも、俺との喧嘩でも、滅茶苦茶加減してただろ」「これでも私、O・C・E・A・Nランキング現10位なのよお？」

加減しないと天龍ちゃん死んじゃうわよお？」

「10位……グランドかよ……」

深海棲艦単艦制圧能力序列、略してO・C・E・A・Nランキング。上位ならば単純にそれだけの戦闘能力を有しているという証であり、中でも10位以内にはとある『特例』が許可されることもあり、『グランドランカー』と呼ばれる。

そんな天上の存在と思っていた大物が目の前にいることに、俺は驚きを通り越して脱力してしまった。

「あら、後続の群れの移動速度が案外早いわねえ」

四方八方からの敵を斬り倒し、攻撃を軽々と避けて走り、その妨害に驚く程足止めを食うことはなかった。

しかし、それ以上に、深海棲艦の詰め方が上手い。多少の抵抗はものともせず、着実に包囲を狭めてこちらへと巨大な物量が迫ってくる。

「仕方ないわね、一本使いましょうか」

背後に迫る死の気配に脂汗が滲む俺とは対照的に龍田の顔は涼しいままだった。左手に持っていた薙刀を一旦バックパックにしまい、右手の薙刀を肩口に拳上して構える。

それはまるで、槍の投擲を行うかのような構えだった。

「安全装置解除、標的確認、方位角固定。爆ぜ穿て、『岩融』いわとおし ツー！」

瞬間、龍田の叫びと同時に、人外の臂力で放たれた薙刀は刃の付け根、石突からジェット噴射を起こし、さらに加速し、迫りくる深海棲艦の大群の中心部目掛けて、流星の如く飛んで行ったかと思うと、数秒後、大群の半分を包み込む程の大爆発を起こした。

「なあ!? 何だそのトンデモ兵器は!？」

「天龍ちゃん、よく考えて。私が天龍ちゃんの所に来るまでに深海棲

艦に見つからなかった訳がないじゃない。行きもこうやって敵を吹き飛ばしながら駆けつけたのよお」

そう言つて、龍田はドヤ顔でブイサインをしてみせた。

「対深海棲艦用投擲刺突爆雷『岩融』。私の専用兵装よ」

専用兵装。前述したグランドランカーにのみ許された特権である。

各々が自分に合わせた専用武器を提案し、その有用性が認められる範囲で開発、実用の権利が与えられる。

龍田の場合、それがこの薙刀『岩融』であった。

通常時は大型の薙刀として無類の破壊力を持った近接武器として使用できるが、その本質は艦娘の筋力と内部のジェット噴射構造による中距離から長距離への投擲、そして爆発による範囲攻撃である。

「これ、使い方としては消耗品なんだけれど結構コスパ悪くて、どうしても16本までしか開発許可が下りなかったのよねえ。昔3本、天龍ちゃんを助けに行くまでに3本、今1本使ったから残り9本になっちゃったわあ」

「お前……なんでそこまでして……」

俺を助けるんだ、と言いかけた所で龍田の人差し指が唇に当たった。

「話は後でいくらでもしてあげる。今は生き残ることだけ考えて」

爆発によつていくらか群れの進行が遅滞したのを見て、再び龍田は足を動かす。

わからなかった。なんで、龍田が俺に対してここまで必死に助けようとしているのか。

やめて欲しかった。自分を守ろうとするのを。

自分が、あまりに情けなくなる。

俺は、お前に守ってもらう程の価値のある奴じゃ、ないんだ。

「天龍ちゃんッ！」

「——え？」

突如、龍田が俺の身体を引っ張った。それとほとんど同時に、すぐ近くで爆発音が響いた。

それが、龍田が俺を敵の砲撃から庇った音だと気づいたのは、彼女

の右腕が煙を発しながら真っ赤に染まっていたのを見たからだ。

おそらくは砲弾を右腕で弾くようにしてダメージを最小限に留めたのだ。

「た、龍田っ！ すまねえ、俺が、ぼうつとしてたから……ああ、俺の、俺のせいで……！」

「あ……ぐう……ッ！」

艀装保護膜のおかげで腕は吹き飛んでいない。だが、もうさっきのように右腕で薙刀を振るうことは叶わないだろう。

なんてことをしてしまったのだ。俺のせいだ。俺が、集中を切らしていたから。俺がすっかりしていないから。俺が足を引っ張ったから。

俺が、弱いから。

——それは、かつての『トラウマ』を蘇らせるには十分すぎた。

「あ、ああ、俺の、俺のせいだ。俺が悪いから、俺が弱いから、俺なんていなきや——」

「天、龍ちゃんッ！」

半ばパニックに陥っていた俺を正気に戻したのは、右腕を襲っているであろう激痛に耐えながら、怒るでもなく、ただ、懇願するように、俺の頬に優しく触れた、龍田の両手だった。

「お願いだから、そんなに自分を卑下しないで……！」

「——ッ！」

頬にあたる彼女の指。右手から滴る生温い血の感触。

俺は微笑む龍田を見つめる。

徐々に、冷静さが戻ってくるのを感じる。

「悪い、取り乱した、な」

「いける？」

「ああ、もう、これ以上の失態はねえ」

「そう、ならあと少し、頑張りましょうかあ！」

「おうー！」

龍田が元気よく叫ぶと、俺も合わせて声を上げる。

左から迫る深海棲艦は龍田が、右からは俺が、それぞれ捌き、一心

にこの地獄を抜けるべく必死で走る。

やがて、巣を抜けるまで後一步というところまで来て、最後の障害が目の前に立ちはだかる。

背後から迫るものと同じく、数多の深海棲艦の群れ。俺達は包囲されているのだから。いつかはこの壁を抜けなければならないのは自明であった。

「それじゃ、最後のひと頑張りといくわよお!」

龍田が岩融を構え、そして次々に投擲する。

矢継ぎ早に投げられた三本の薙刀は深海棲艦の壁の中心に大きな穴を穿った。

「よし、いくわよお!」

「うおおおおおおお!」

開けた穴が塞がる前にあそこを抜ける。

既に体はヘトヘトだった。燃料も随分と心許ない量である。それでも、全身全霊で、一点の光を目指して走り抜ける。

しかし、左右から、穴を抜けんとする俺達を深海棲艦が砲撃で妨げようとする。

「天龍ちゃん! 転覆しないでね!」

「は!?! え、ちよお!」

龍田が岩融を俺達の真後ろ数メートルに投げ込む。海中で爆発したそれは、海面を持ち上げ、やがて小規模の津波となって俺達を押し流した。

「ぬおおおおおおお!?!」

津波は付近の深海棲艦をも飲み込んだのか、俺達は巣を抜けた。

「よし、抜けたわあ! これで、私達の勝ちよお!」

「いや、そんなわけあるかよ! まだすぐ後ろにあいつらが——」

そう、巣の外側に出たというだけで、まだ、深海棲艦の群れは真後ろにいる。

まだ勝利を確信できる段階にはない。むしろ、絶体絶命である。

しかし、龍田は笑って再度言った。

「いいえ、私達の勝ちよ!」

「——天龍と龍田を確認ッ！ 全艦、撃ち方、始めえ！」
聞き覚えのある声が聞こえたかと思うと、その直後、数多の砲撃音と共に、炎と爆発が深海棲艦を襲う。

龍田が見つめる先には、先頭に腕組みをした暁を据え、おそらくは舞鶴鎮守府に所属するほとんど全ての艦娘が海面に立っていた。

「あいつら……」

「流石、暁ちゃん。お願いした通り、皆を連れてきてくれたのねえ」

「大変だったわよ！ 一人一人に頭下げて、遠征帰りの子にもすぐに
出してもらって！ 何もかも天龍とかいう馬鹿のせいよっ！ 帰った
ら、覚悟しなさい！」

「ちんちくりん……」

「ちんちくりん言うなあ！」

暁からの怒号が飛んでくる。

ああ、俺は何故こいつの声を聞いて、無性に安心してしまっている
のだろうか。

「天龍！」

「な、なんだよ」

「怪我は、ないんでしょうね?!」

「……ああ、ああ、その、おかげさまで、な」

恥ずかしさと、情けなさに視線が逸れる。

しかし、その返答に満足げに頷くと、暁は再び叫ぶ。

「我ら、目的を完遂す！ 繰り返す、目的を完遂す！ 従って、これよ
り、舞鶴鎮守府の全戦力をもって、撤退を開始する！」

連合艦隊などという比ではない量の艦がただ逃げることに全力を
尽くすのだ。

例え、周辺海域を黒く埋め尽くすほどの物量をもってしても、深海
棲艦が俺達の逃走を阻むことは不可能であった。

☆

そうして、今に至る。

戻ってきた艦娘達の補給などを行った後、提督の判断で今日の任務
は全て切り上げとし、宴会を始める運びとなった。

提督が、僅かに潤んだ目で、俺の頭を撫でてくれたのが少し印象的だった。

叢雲は、俺達が帰ってくる前に、龍田の拘束を抜け、逃亡したらしい。

現在は憲兵達が追跡をしているが、未だ尻尾も掴めていないようだ。

「全く、そんなうまい話あるわけないでしょお？」

「いや、だってよ、知らなかったんだよ……第一艦隊に配属される条件が、『旗艦』としての経験を持つことだなんてよ……」

第一艦隊は主力艦隊。それだけ、厳しい戦いを想定してメンバーが編成されており、そんな戦闘の最中で、旗艦という指揮系統を失うことは致命的と言って差し支えない。

よって、第一艦隊のメンバーは全員が過去に潤沢な旗艦経験を持っているという絶対条件があったらしい。

つまり、旗艦の経験などない俺が、そもそも、旗艦の命令をガン無視するような問題児の俺が、第一艦隊に入れる道理などいくら叢雲の推薦であっても皆無であったのだ。

「まあ、これで少しは反省してくれたかしら？ 叢雲に騙されたとは言え、自分勝手な単独行動が、どれだけの迷惑をかけるかってことが」

「……ああ、今回のことは、悪かった。反省してる」

「あら、素直ねえ」

そう、右腕の怪我を見せつけられては俺も強気に出れない。今回のことは、龍田が、皆が来てくれなければ死んでいた。

俺一人の命を救うために、この鎮守府の艦娘全員に迷惑をかけてしまった。

守られてしまった。

そこに俺の貫いた正義はなく、正義を失った俺は紛れもなく悪に違いないのだ。

「また、卑屈なこと考えてるでしょ」

「……………」

「私ねえ、聞いたわ。あなたが、『暴れ天龍』になった理由。前の鎮守

府で、慕っていた先輩の艦娘が死んだのよね？　あなたを庇って」
「てめえ、どこでその話……！」

提督か。この話を知っているとしたらあの男しかない。

俺はすぐに立ち上がって提督の元に向かおうとするが、それを龍田の腕が制止した。

「先輩の艦娘は鎮守府ではエースみたいな存在で随分慕われてたみたいね。当然、彼女が死んだ原因であるあなたにはありとあらゆる負の感情がぶつけられたんでしよう」

『お前のせいだ！』

『お前が、弱いから！　あいつは！』

『お前が、あいつを殺したんだ……』

『いつそ、お前が死ねば良かったんだよ！』

「っ……！」

幻聴が頭に響く。

そうだ。俺がのせいで先輩は死んだ。俺が守られるような弱い艦娘だったから死んだ。

だからその日から俺は守られるのをやめた。

「単独で敵陣に飛び込んで、誰にも自分を庇わせなかった。自分のために誰かが死ぬくらいなら、いつそ自分が死ぬ方がマシ、とか考えてたのかしら？」

「ああ、最初はそんな感じだったよ。ありや半分自殺みたいなもんだった。でもな、何故かいつも生き残っちゃうんだわ、皮肉だよな。そんでいつの間にか、俺も結構強くなってるよ、『暴れ天龍』だとかいう二つ名なんてついてて、笑っちゃうよな」

誰にも守られず、誰にも守らせない。自分のために誰も死なせない。

それが『暴れ天龍』の形だった。

だがそれも、今日、終わってしまった訳だが。

「やっぱ弱いんだなあ、俺」

「当たり前でしょ、激弱よ、天龍ちゃんなんて」

「いや、そりゃグラントランカー様から見りやそうだろうがよお」

「それ以前の問題よ」

龍田は真つすぐに俺の目を見据えて言った。

「独りで戦ってる奴が強い訳ないでしょ？」

「え」

「自分のためでもなく、誰かのためでもない。ただ人形のように独りで戦って強くなれる道理なんてないわよ。そこに強くなるうという意思がないんだもの」

確かに、俺は強くなるうとしていたわけではない。ただ、自分のせいで誰かが傷つかないことだけを念頭に戦ってきた。

成程、そんな俺が今まで死ななかつたのは、龍田の言った通り、敵が弱かつただけなのだ。運が良かったのだ、俺は。

「だから、これからは仲間のために戦いなさい」

「それは……」

「誰にも死んで欲しくないなら、強くなりなさい。仲間のために」

「仲間のために、強く……」

そうだ。自分のせいで誰も死なせたくないなら、俺が仲間を守れるようになればいいのだ。遠ざかる必要などない。むしろ、近くで守ればいい。

何故こんな簡単なことに気が付かなかつたのか。

「そして、私達も天龍ちゃんを守るために強くなる。理論上は無限に強くなれるわよお」

「お、俺は、守ってもらう必要なんて！」

「あ、それは無理よ。だって、私が天龍ちゃんを守りたいんだもの」
それでは意味がない。俺を守って誰にも傷ついて欲しくないのに。

「天龍ちゃん、あなたは先輩に自分を庇って死んで欲しいだなんて一度でも思ったことある？」

「あるわけねえだろ！」

「同じよ。私達も、あなたに死んで欲しくない。だから私達もあなたを守るの。守り合うの。それが、仲間つてもものよ」

「……………」

「そうよ、天龍！ あんたあ、見れるとお、あぶなつかしく見え、こつ

「ちや冷や冷やするのろお！」

「ぬお!? ちんちくりん!?!」

何故か泥酔状態の暁が突如俺の背後からチョークスリーパーを仕掛けてきた。

「ちよつと、だあれえ? この子にお酒飲ませたの?」

「あらしは年齢的にはろつくに20歳こえれるつつーの! レディらつつーの!」

「酒に飲まれるような奴をレディとは呼ばねえ!」

「うるさい! とにかく、あらしらつてねえ、あんらのことは大嫌いらけど、別に死んで欲しいなんて思っちゃいないのよ、この馬鹿! だから二度とあんな自殺行為みたいなこととして助けにこさせんじやないわよ!?!」

「……………ああ」

「返事が小さい!」

「ああ、本当に悪かったツ! 二度としねえツ!」

食堂が水を打ったように静まり返り、俺は声量を上げ過ぎたことに気が付いた。

全員が驚愕の表情で俺の方を見たかと思うと、どこからともなく、笑い声が聞こえ始め、それは最終的に食堂を埋め尽くす大爆笑になった。

「そうよ、二度とやらないでよね!」

「毎回毎回あんなは御免だよ!」

「私達も陰湿な真似して悪かったしさ! もうお互い馬鹿な真似はよそうよ!」

「まあ、こうしてお酒飲めるんならたまにや悪くないけどね〜!」

「おし! よろしい! じゃ、ケジメつけるために坊主いっれみよー!」

「え?」

酔った暁のテンションに吞まれ、そのままテーブルの上に立たされる。他の皆も興味津々で俺に注目をしている。

「ここまで来たら仕方ない、覚悟を決めるしかない。」

「わかった、坊主とはいかねえが。これが俺なりのケジメだ！」

そう叫ぶと、俺は刀を抜き、腰まで伸びた長髪をまとめ、一思いに切り落とした。

「え……!?!」

「え!?! お前ら、何その反応!?!」

「あれ? ほんろうにやっちゃつらの? 馬鹿ね、別に本気にせんれも良かったのにい」

「はあああああ!?! てめ、ちんちくりん! ぶっ飛ばすぞコラア!」

「ちんちくりん言うなああああ!」

「お、乱闘か!?!」

「いいぞ、やっちゃまえ」

テーブルの上で喧嘩が始まり、周りからも野次が飛んできてますます宴会は賑わいの様相をかもしていた。

その様子を少し離れた所で楽しそうに眺める龍田が、

「覚悟してね、天龍ちゃん。私達は仲間よ。もう、一人でなんでも抱え込めるなんて思わないことねえ」

そう呟いたのが、確かに聞こえた。

☆

「——誰か、誰かいないの!?!」

外灯の光すらも避け、闇に紛れる少女が一人、とある鎮守府の扉をせわしなく叩き続けていた。

ライトブルーの髪色は目立つからとフードを被り、艦娘とばれないよう艀装の類は一切合切置いてきている。

そうして憲兵達の追跡を躲し、叢雲は頼みの綱として、ここまで死に物狂いでやってきたのであった。

「なんで、なんで私がこんな目に……! 私は、鎮守府のためを思っ
て!」

悔しそうに、赤くはらした目にまた涙を溜めて一心に扉を叩き続ける彼女の背後から、首に手をかけ、ナイフを突きつける影が現れた。

「ひう……!?!」

『こんな夜更けに艦娘が一体何の用だ?』

陸軍の軍服と軍帽を身に着け、その顔には何故か道化師の仮面を付けた男に、叢雲は必死で敵意がないことを訴えるべく首を振った。

「違うの……私、鐙木提督にお話があつて来たんです！　どうかお目通しいただけませんか!?　私、以前犬見提督の元で秘書艦を務めていた叢雲といます！」

「――あら、懐かしい名前」

不意に扉が開き、そこから真っ白な軍服に身を包んだ女性が現れた。

彼女は叢雲をじつと見つめると、柔和な笑みを見せ、中へ入るよう促すように手で示す。

「お入りなさい、叢雲。話を聞いてあげるわ」

「あ、ありがとうございます！」

叢雲は憲兵に解放され、心底安堵したように涙ながら何度も頭を下げ、室内へ入っていった。

ここまでの出来事が、一年後の悲劇のプロローグでしかなかったことを天龍はまだ知らない。

第八十九話「アタシなら、貴女の力になれると思うの」

刃と刃が幾度となくぶつかり合い、火花を散らす。

俺は一旦、間合いを取ると、目の前の龍田の薙刀の間合いを測りながら、あえて刀を鞘に納めた。

抜刀術。あるいは居合と呼ばれるその技術は、この一年の龍田との鍛錬の中で俺が得たものの中でも唯一、一流に届く技術と自負している。

龍田を獲るのなら、これしかない決めていた。

「——ふっ！」

息を肺一杯に吸い込み、そして、一気に吐き出すと同時に、龍田に向かって全速力で足を踏み出す。

真正面から龍田に突っ込んでいく以上、薙刀と刀の間合いの差は如何とも埋め難い。

先制するのは必ず薙刀だ。それは決まっている。どうしようもない。

ならば、俺の勝利はこの薙刀の間合いから刀の間合いに入るまでの1メートル弱、時間にして1秒にも満たない刹那の生存を獲得しなければ決して届かない。

龍田ならば、この距離と時間の間、敵を5、6回は仕留めるだろう。俺にとってこの1メートル弱は万里、この刹那は無限にも等しく、この空間はさながら地雷原だ。

一つの間違いも許されず、最善手のみを求められる。僅か数ミリの動きの遅れは即致命傷。コンマ数秒の反応、反射の遅延は即敗北。

なればこそ、俺はこれまで数えきれない敗北を龍田の前に積み上げてきた。

だが、今日こそは届く。

これまでの敗北という経験。龍田の技を最も近くで、最も多く、見て、体験してきたのは他でもない俺自身だ。

技術、経験はここに充足した。加えて、俺にはこの『眼』がある。

ならば、勝利への道筋は既に整っている。
後は己を信じ、一步、踏み出すだけだ。

「――あ」

俺の右足が一步、刀の間合いに踏み込んだ。

その瞬間、双方の中で既に決着は着いていた。遅れて、俺の刀が龍田の首元に寸止めされる形で、事実上の決着をもたらした。

「し、勝者……天龍っ！」

数秒、場を支配した静寂。それが審判の決着の声を合図に鼓膜を破らんほどの大喝采に変わった。

次々と俺の周囲に集まって小突いたり、胴上げを始めようとする野次馬をよそに、龍田はゆっくりと刀が触れていた首筋を撫で、一つ大きなため息をつく。悔しさと嬉しさの入り混じった笑みを俺に向けた。

「本当に、強くなったわね」

俺が叢雲に騙され、龍田達に救出されたあの事件。

あれから一年という時間が過ぎようとしていた。

☆

「いや、まさか天龍がねえ、絶対無敵の龍田を破るなんてねえ。まだ信じられないわ」

「一番近くで見てたの審判してたお前だろうが、ちんちくりん」

「ちんちくりん言うなし。暁と呼びなさい、レデイでも可！」

「レデイはそんなことは言わねえ」

「ちよ、やめてよね！ 改二になって新調した帽子が汚れるでしょ！」
暁に軽く手刀を入れる。

彼女は赤色のラインの入った帽子を両手で抑えながらジト目で俺の方を睨んできた。

「まあ、才能あるのは知ってたし、龍田が稽古つけるんだからそりやもう、凄いことになるとは思ってたけれど、まさかここまでとはね」

「へへっ、我流とはいえ、中々のもんだろ？」

あの事件の後、艦隊戦闘について諸々勉強し直すため、俺は龍田に頭を下げた。

もう単独で突っ込むようなことはしないと誓ったからには、艦隊の中で機能的に動けなければ迷惑をかける。そのブランクを埋めるために龍田の力は不可欠だと判断したのだ。

おかげで、毎日出撃に加えてスパルタ訓練が入り、力尽きるまで海上を走り回されたが、ある程度艦隊戦闘というものが様になってきたと感ずる。

一方で、個人的な戦闘技術についても俺は龍田に教授を求めた。龍田は剣術に関しては専門外だったので、教授とは言っても戦闘の心構えや、足捌きや艦装の効率的な使い方のような共通部分だけで、残りには模擬戦を通し、我流で鍛えていくことになった。

「変わったわね、この一年で。本当に成長したと思うわよ。人間的にも、艦娘的にも」

「……ま、まあ、あれだ。そこんところはお前らが後腐れなく接してくれたおかげもあるっつーかよ」

「何、むず痒くなるようなこと言ってるのよ、気持ち悪い」

「人が礼をしようとしてる時にそれはねえと思うんだ」

暁のこめかみを両拳で万力のように挟み込む。

確かに、俺は変わった。だが、それはここの艦娘達が変わろうとする俺を積極的の後押ししてくれたからでもある。

わだかまりがあるにも関わらず、積極的に心を開いてくれたから、俺もへこたれずに頑張れた。

今では一年前が嘘のように、毎日が楽しかった。

「しかし、龍田も追い越して、どこまでいくつもりなのかしらねえ、天才さんは」

拳万力から脱出した暁のその言葉を聞き、俺は即座に否定する。

「別に、ランキングじゃまだ格下だし、模擬戦だって今日が初勝利だけ？ 全然追い越してねえだろ。ようやく背中が見えたっつーくらいじゃねえか？」

「……そうかしら、私の目には、今日の一勝は、そんな小さなものには見えなかったけれど」

「はっ、あの龍田だけ？ そう簡単に追い抜かさせてくれるかよ」

「そうだといいんだけど、ね」

俺とは対照的に少し寂しそうな暁の表情が印象的だった。

「まあ、それはそれとして！ あんた、その目、まだケアしてないでしょ！ その……『天眼』だっけ？　なんか、色々負担かかるんでしょ？」

「あ？　いや、別に大丈夫だって、集中しすぎるとちよつと充血とか頭痛するくらいだしよ」

「駄目よ、何言ってるの！　馬鹿なの!?　死ぬの!?!」

「ちよ、おい、引つ張んなって!」

暁が俺の手を強引に引つ張る。

俺の目は、どうやら普通のものとは違う天性のものらしい。勝手に『天眼』と名付けている。

視力は勿論のこと、動体視力、静止視力、視野、立体視力など、諸々の能力が人並み外れて高い。

近接戦を中心としており、敵の攻撃を見切ることが必要な俺にはこれ以上ない目だ。

ただ、その代償なのか、あまり集中して目を使いすぎると、充血や頭痛、酷い時は目の霞みや痛みなども起こる。目の性能に、神経や脳が耐えられないのだ。

普段生活している分には特に問題ないが、今日のような目をフルに使うような戦闘の後には目を冷やしたりして休息をとることが必要というのが医師からの指示だった。

「ほら、さっさと医務室行くわよ!」

「はあ、面倒くせえなあ、おかんかよ」

「レディよ!」

結局、暁を振り払うこともできず、俺は医務室で数十分、水で濡らしたタオルを両目のの上に乗せていることになった。

☆

「——はあ、やっと解放されたぜ。飯、飯っ」と

医務室から解放された俺は食堂に駆け込む。

少し遅い昼食ではあるが、食堂内にはまだ食事をしている艦娘がち

らほらといた。その中に龍田の姿を見つけ、俺は彼女の元へと歩み寄る。

「よお、龍田も今昼か？」

「あら、天龍ちゃん〜！ ちよつと艤装の不具合を報告しててねえ、すつかり遅くなつちやつたわあ」

「なんだよ、じゃあ、今日の模擬戦は完全勝利つてわけでもねえのか」
「いえ、不具合が起こったのはついさつき。天龍ちゃんとの模擬戦で負荷をかけすぎたみたい。模擬戦でのコンディション自体は万全だったわあ。今日のは、本当に私の完敗よお」

嬉しそうに、いつもよりテンション高めに俺の頭を撫でてこようとする龍田の手を振り払いながらも、改めて彼女からそう言われ、俺は少し照れくさくなった。

「本当に強くなつたわねえ〜！ 私、とつても嬉しいわあ〜！」

「頭を執拗に撫でようとすんな〜！」

「遠慮しなくてもいいのに〜」

こうして、俺の成長を素直に喜んでくれる龍田。親身になって気にかけてくれる暁。他の艦娘も皆俺に温かく接してくれる。

本当に、良い仲間を持つて俺は幸せだった。幸せすぎて、怖いくらいに。

「——龍田、いるっ？」

食堂に入ってきた艦娘に呼ばれ、龍田が立ち上がる。

「あら、何か御用かしら？」

「提督がちよつと執務室まで来てつてさ」

「何かしらあ？ じゃあ、天龍ちゃん悪いけれどちよつと行って来るわねえ」

「おう、また後でな〜！」

手を振り、龍田は食堂から出ていった。

今思えば、この時、龍田の本心に気付いてやれていれば、あるいは未来は違ったのかもしれない。

☆

「失礼します、提督。龍田、来ましたあ〜」

「ああ、龍田、入ってくれ」

龍田が執務室のドアを三回ノックすると、すぐに提督の声が返って来た。

ゆつくりと扉を開けて中に入ると、中には提督と、来客用のソファに座る女性が一人、そしてその背後に立ついかにも怪しい仮面を付けた軍人が一人いた。

「すまないな、急に呼び出して」

「いえ、そちらの方々は？」

「ああ、こちらは鏑木提督。女性の身ながら提督にして、深海棲艦研究において博士号もお持ちになられている海軍きつての才女だ」

「初めまして、鏑木美鈴よ。あなたが龍田さんね？ お話がかねがね」

「ええ、初めまして……？」

お話がかねがね、という言葉が少し気にかかったが、温和な笑みで握手を求める彼女に龍田も快く応じた。

「あの、失礼ですけど、そちらの仮面の方は？」

「ああ、ごめんなさいね。彼は私の鎮守府の憲兵でね、護衛みたいなものよ。少し顔に傷があつてね、仮面を付けているのよ。見た目はこんなだけけど、無害だから安心して」

鏑木提督にそう紹介された憲兵は無言で頭を下げる。

「いえ、こちらこそごめんなさい。無遠慮に立ち入ったことを聞いてしまつて」

「あはは！ いいわよ、アタシだってこんなのが居たら気になつてしょうがないもの！」

「……………」

憲兵は何か言いたげに仮面の向こうから鏑木提督に視線を投げかけている。

仮面もそうだが、さつきから一言も喋ろうとしないのも不気味だ。しかし、それ以上彼のことを聞く気も湧かず、龍田は話を進めることにした。

「それで、私はどういった要件でここに呼ばれたのでしょうか？」

「ああ、実はね、龍田さんにはアタシの実験に協力してもらえないかと

思っただけをお願いをしに来たのよ」

「実験？」

龍田が首を傾げると、鏑木提督は横に置いてある鞆の中から分厚い資料と一本のペン型注射器を取り出した。

「ねえ、龍田さん。今よりもっと強くなれるとしたら、どう？」

「今よりも？」

「O.C.E.A.Nランキング第10位。末席とは言え、堂々のグランドランカーの座を手にした貴女ではあるけれども、現状はどうなのかしら？ 果たしてあなたの満足に足るものなのかしら？」

そう鏑木提督に聞かれ、龍田は目を伏せる。

「もしかしたら、限界を感じているんじゃない？」

「なんで、それを……」

「私なら、その限界を打ち破ってあげられるかもしれないわよ？」

「——鏑木提督？ その、こう言うのははばかられるのだが、すまないが、龍田を刺激するような発言は控えて頂けないだろうか？」

横槍を入れる提督に、鏑木提督が一瞬、鋭い眼光を向けた。

しかし、すぐに元の笑顔に戻ると、何か思いついたかのように両手を合わせて言った。

「そうね！ 百聞は一見にしかずよね！ まずは龍田さん自身にアタシの研究について実際に見て体験してもらいましょう！ 話はそれからでも遅くないものね！」

「え？」

「提督さん。演習場を少し借りてもいいかしら？」

「え、ああ、はい、構いませんが……？」

「それじゃあ、憲兵君。少し予定は早まったけれどあの子を演習場に呼んでおいて」

鏑木提督は後ろに立つ憲兵にそう指示をするとソファから元気よく立ち上がる。

「それじゃあ、龍田さん、突然で申し訳ないのだけれど模擬戦の準備をしてもらえないかしら？」

「模擬戦？」

「アタシの研究が、あなたの求めるものであるかどうか、それでハツキリすると思うの」

鏑木提督はそう言って、龍田の手を両手で握った。

龍田には彼女が、どこか蛇のように見えてならなかった。

☆

「——おいおい、なんだよこの人だからは」

「なんでも龍田さんが模擬戦するんだってさ」

「模擬戦？ 龍田が？ 誰とだよ？」

演習場が見渡せる堤防にできる艦娘の人だかりを押しわけ、最前列に出た俺は演習場に立つ龍田とその対戦相手の姿を見た。

「……ローブとフードで何も見えねえ。なんだあいつ」

「大きさに駆逐艦か軽巡洋艦あたりだと思っけどねえ、なんだろあの服装。他の鎮守府ではあんなのが流行ってるのかな？」

「他の鎮守府の艦娘、か」

全身をローブで覆い、顔をフードの下に隠すその艦娘を見て、俺は目を細める。

何故だろう、どこかで見たことがある気がするのだ。

外見はともかく、雰囲気には既視感を覚えた。

「ちよつと、天龍！ これ何事よ！」

「わかんねえ、何だつて龍田の奴、模擬戦なんて始めようとしてんだ？」

同じく人ごみをかき分けて顔を出した暁を横目で見て、俺はすぐに視線を演習場の両者に戻した。

程なくして二人の目の前にある浮き砲台から真上に号砲が撃たれる。

模擬戦開始の合図である。

「龍田が動いた！」

先に動いたのは龍田の方だった。薙刀を構え、真つすぐに相手の方へ突撃する。

砲撃戦や雷撃戦に持ち込む隙も与えず、接近戦にて勝負を決めにくつもりだ。

しかし、相手もそれに対して一切動じることない。ロープをはためかせ、その内側から何本もの鉄棒をばら撒く。

否、ばら撒いたのではなかった。よく見れば、その一本一本から細い鎖が伸びており、彼女の鎖を手繰る動きに連動し、鉄の棒と棒は連結され、一本の細長い槍のようになった。

多節棍の仕組みを利用し、ロープの下に収納して忍ばせていたのだろう。向こうも初めから近接戦が狙いだったという訳だ。

しかし、俺が驚いたのは、それ以上にその槍によく見覚えがあったことだ。

「あれは……」

鉄槍を構えると同時に、フードが取れる。そこに見えたのはライトブルーの髪と赤色がかった橙の瞳。

間違いない。それは一年前、俺を陥れ、鎮守府から逃げ去った張本人。叢雲に違いなかった。

「あいつッー」

俺が声を荒げたのと同時に、龍田の動きが一瞬、止まった。彼女も目の前の叢雲に動揺したのだろう。

しかし、その一瞬が命取りだった。

気が付けば、叢雲はその心の間隙を突き、いつの間にか龍田の目の前にいた。

初めに薙刀を弾き、次いで石突で顎を打ち上げ、鳩尾を突き、崩れた所で穂先が龍田の首元に触れた。

流れるような決着だった。

「あら、ごめんなさいね。なんだか驚かせてしまったみたいね」

「あなた……よくも、おめおめと……!」

龍田が敵意を剥き出しにして叢雲を睨む。

しかし、叢雲の余裕ありげな笑みは決して崩れない。

「あらあら、誰かと勘違いしているのかしら？ 私は叢雲だけけど、でもあなたの知り合いの叢雲とは別人かもしれないわよ？」

「見間違う訳ないでしょう……私が、初めて殺してやりたいと思った奴の顔よ？ 死んでも忘れないわあ」

「まあ、怖い。私は全く身に覚えなどないのだけれど、そうね、取りあえず仕切り直しましょうか？ 今の模擬戦は、どうやら私の顔で驚かせてしまったみたいで悪いしね」

槍を回転させながら戻すと、叢雲は至って友好的な笑みでそう言つて手を差し出した。

その手を払いながら龍田は立ち上がる。その目からは敵意が消えるどころかいつそう、炎が燃え盛っている。

「いいわあ、もう一戦、やりましょうかあ」

「なんだつたら、本当に殺しにきてくれてもいいのよ？ そんな刃引きた薙刀じゃなく、本物でくればいいじゃない？」

叢雲の挑発も意に介さず、龍田は弾き飛ばされた薙刀を回収すると、その切っ先を叢雲に向ける。

「いえ、これでいいわあ。刃があつたら、大した苦も無く殺しちゃうもの」

「お好きにどうぞ」

両者は再び所定の位置に戻り、号砲を待つ。

しかし、先の一戦目とは異なり、その空気は張り詰め、どこことなく、殺気を帯びてすらいた。

「ね、ねえ、天龍。ヤバいつて、あれ龍田完全にキレてるわよ？ いくらなんでも、取り返しのつかないことになる前に止めに行かないと……」

「ああ、そうだな……」

龍田が本気で叢雲を罫り殺すつもりならば、それは間違いなく現実になる。彼女の實力は俺が誰よりも良く知っている。叢雲も優秀な部類の艦娘ではあったが、彼女の前ではもって十分程度が限度だ。

叢雲について思う所がない訳でもないが、それでも龍田に人殺しをさせるわけにはいかない。

俺と暁は観戦客の集団から抜け、急ぎ艦装を装着して演習場に向かった。

そこまでに精々五分かかったかどうかだった、しかし、演習場に到着した俺達が見た光景は、予想とはあまりにかけ離れていて、俺達は

揃って言葉を失い立ち尽くしてしまった。

「あら、もう終わり？」

「——っ!？」

そこには再び首筋に槍の穂先を突きつけられ、狼狽している龍田と、不敵な笑みを浮かべる叢雲の姿があった。

「……もう一戦よ」

「ええ、何度でもお付き合いまするわ」

そこからは酷い有様だった。

龍田のどんな攻撃も、どんな戦術も、叢雲の前ではまるで通用しなかった。単純にスペックが違う。俺の目からはそう見えた。

叢雲の動きは駆逐艦の機動力を遥かに超えている。龍田の攻撃を見てから動き始め、龍田よりも早く攻撃を食らわせる。

理不尽とも言える絶対的な戦力差を遠目からも感じた。

「ぐ……い！」

「ああ、弱い！　なんて弱いのかしら！　これがあれだけ遠く及ばぬ存在と思っていた龍田だなんて！」

「——ッ！」

熱狂的に、挑発的に、興奮を隠せず、叢雲は龍田の前に積み上げた勝利の数々に浸り、歓喜の鳴咽を洩らしている。

そして、それに対して何も言えずに俯き、唇をかみしめる龍田はもう見ていられなかった。

「龍田——」

『どうかしら、龍田さん。アタシの研究がどれだけ素晴らしいものか、その身で感じて頂けたかしら？』

俺の声を遮ったのは、小型の軍用ボートに乗る女性の拡声器を通じた声だった。

『アタシなら、貴女の力になれると思うの』

「……………」

「おい！　お前、誰なのか知らねえが、口挟んでくんじゃ——」

再び俺の言葉が止められたのは、叢雲が口元に槍の切っ先を当ててきたからだ。

「五月蠅いわよ、天龍。今はあなたの出る幕じゃないの。そういう空
気読めない所、変わってないのね」

「てめえ……!」

「口を動かすと、唇、切れちゃうわよ?」

そう言つて、叢雲は刃をさらに唇に押し付けてくる。

隣の暁もどうすればいいのか混乱しているようで、何も言葉が出な
いようだった。

すると、それまで俯いて黙りこくっていた龍田がゆっくりと立ち上
がる。

そして、俺の方を一瞥してから背を向け、ボートの方に体を向けて、
彼女は言った。

「鏑木提督、実験のお話、受けさせてください」

この時、俺はすぐに龍田の元に走っていかねばならなかったの
だ。

唇だろうが、首だろうが、どこを切り刻まれようが、俺は彼女に駆
け寄り、言うべきだった。友として、怒鳴りつけてやらねばならな
かった。

——駄目だ、お前は間違っている、と。

第九十話 「それでも、龍田は諦めなかつたわよ」

鉛色の雲が空を覆い、日の光を塞いでいた。

あと数十分もすれば雨でも降り始めるかもしれない。

「――敵艦、捕捉。戦艦1、軽空母1、駆逐艦3だよ、どうする?」
空母からの索敵報告が俺達に告げられる。

以前なら第二艦隊の旗艦である龍田から陣形の指示が即座にとんでくる。

だが、今は違う。

「そう、私が行くわあ。皆はここで待機しててねえ」

そう言い残し、龍田は俺達に目もくれず、艦隊を離れ、一人深海棲艦に突撃していった。

その龍田の行動に最早異を唱える者は俺を含めて誰もおらず、全員、指示通り足を止めた。

「……またか」

「ねえ、天龍。やっぱりおかしいわよ、最近の龍田」

ため息をつく俺に暁が眉間に皺を寄せながら言う。

「あれじゃ、まるで――」

「少し前の俺みてえだつて言いてえのか?」

一人で敵陣に突っ込んでいって敵を壊滅させて帰ってくる。

仲間との協力など頭の片隅にもない。自分勝手な暴れ馬。

天眼を通して見えた数キロ先の龍田の姿はまるで以前の俺、暴れ天龍そのものだった。

「いや、実際なんか知らないけれど滅茶苦茶強くなってるし、一人でも勝てるってのはわかんだけどね」

「それでも、流石にああやって全部一人でやっちゃうのはさ」

「なんか暗に私達が足手まといって言われてるみたいで気分悪いよね」

艦娘達の陰口を聞こえないふりしながら天龍は唇を噛んだ。

拙い、龍田が艦隊の中で孤立し始めている。

「ただいま、ごめんね待たせちゃって」

「お、おう……あのな、龍田——」

「——二時方向に新たな敵影出現！ 戦艦1、軽巡1、空母1、駆逐3！」

俺の言葉が、敵影の発見によってかき消される。

「またあゝ？ しようがないわねえ、もう一回行って来るわあゝ」

「た、龍田！」

「ん？ なあに、天龍ちゃん？」

俺の声に足を止めていつものように笑ってこちらを向く龍田。

しかし、そこに以前の彼女の面影はない。

彼女の目に若干苛立ちの色が見えたのだ。深海棲艦を倒しに行くという時に水を差すなどでも言いたげだ。

「つ、疲れてんじゃねえか？ 俺も、行くぜ？」

「……いえ、いいわ。天龍ちゃんはここを動かないで」

「い、いや、でもよ！」

「旗艦命令よ。艦隊において旗艦の指示は絶対。教えたわよね？」

「あ……」

そう取り付く島もなく、龍田はまた深海棲艦の艦影に向けて走っていった。

「天龍……」

「心配すんな、龍田は大丈夫だ！ まあ、確かに龍田ならあの程度俺がいなくても余裕だろうしな！」

暁が心配そうに俺を見つめる。それに空気で応えつつも、笑顔が自分でも力のないものであるとわかる。

「うわ、天龍にまであの態度とか」

「なんか、龍田さん、嫌な感じだよな」

「それよか、最近深海棲艦の出没数多くない？ 体感、普段の3割増しくらいなんだけど」

駄目だ。このままじゃ駄目だ。

わかっている。そんなことは痛いほどわかっているのに、何をどうすればいいのか、わからない。

☆

鎮守府に俺達が帰ってきた時には雨が降り始めていた。

「龍田、お前、大丈夫かよ?」

鎮守府に帰ってきてから、俺はすぐに龍田の肩を掴んで声をかけた。

少し気だるそうな表情ではあったが、それでも彼女は俺を見ると、すぐに笑顔をみせた。

「なあに言ってるのよ。全然無傷よお? 天龍ちゃんも見てたでしょ? 私の無双っぷり」

「ああ、鏑木美鈴、だっけか? そいつに施術とやらを受けてからはとんでもなく強くなったな」

「そうでしょう? 鏑木提督も予後は良好だから、このままちやんと『これ』の使い方さえ守っていればなんの影響もないだろうって」

そう言って、龍田は既に空になったペン型注射器を見せて声を弾ませた。

この薬が龍田の戦闘力を何倍にも増幅させているらしい。

薬を打つだけでそんなに強くなれるものなのか疑問ではあったが、事実、龍田は薬を摂取してから数時間は以前の何倍にも強くなっている。

最早誰も勝てないんじゃないかと思うくらい、龍田は圧倒的な力を手にしていた。

だが、その薬を使い始めてから龍田は変わり始めた。

さっきの単騎突撃もそうだが、どこか自分の力に陶醉しているように思えるのだ。

「龍田、もうそれやめろ」

渾身の勇気を振り絞って、俺は言った。

案の定、龍田から笑顔が消え、表情が険しくなる。

「は? 何言ってるのよ、天龍ちゃん、冗談でも笑えないわよお?」
「冗談じゃねえ」

以前のお前はそんな奴じゃなかった。

俺を救ってくれたお前は皆から慕われていて、努力家で、それでい

て他人を尊重してやれる奴だった。

その実験が始まってからだ。何もかもおかしくなったのは。

しかし、俺の言葉に対して返ってきたのは、龍田の冷笑だった。

「なあに、天龍ちゃん。いっちょまえに私に説教でもするつもりい？」

「そんなんじやねえよ！ でも、今のお前は……」

「……まあ、天龍ちゃんにはわからないでしょうねえ。私の気持ちなんて」

「わかつてる！ 少なくとも以前のお前は！ そんな怪しい実験だからだか得た力を良しとするような奴じゃなかっただろ！ もっと、鍛錬を重ねて——」

「はあ、やっぱり」

龍田は俺に対して呆れたように首を振ると、静かに、俺を睨みつけた。

「天龍ちゃんには私の気持ちなんてわかりっこないし、わかつて欲しくもないわあ」

「おい、待てよ、話はまだ——」

「触らないで！」

踵を返す龍田の肩を反射的に掴んだ。

しかし、龍田はそれを片手で掴み、とんでもない力で真上へ振り上げる。

体がいとも容易く宙に浮き、視界が反転する。次いで床に叩きつけられた衝撃と共に景色が歪んだ。

「痛つてえ……」

「ごめんなさい……でも、何と言われようと実験はやめるつもりないわあ」

床に倒れたままの俺を置いて、龍田はその場から立ち去って行った。

「あはは、また喧嘩？ 本当に仲が良いわね」

「……何しにきやがった、テメエ」

「そう怖い顔しないでよ。龍田の様子定期報告よ。鏑木提督から命令受けてるの、聞いているでしょ？」

倒れている俺の顔を上から覗き込むのは、叢雲だ。

龍田が鏑木美鈴の実験に参加してから、その定期観察のため週に一度舞鶴鎮守府を訪ねてくる。

彼女の所業は舞鶴鎮守府の人間には知れ渡っている訳で、俺を含めたこの艦娘の彼女に対する態度は極めて冷淡だ。

しかし、そんな雰囲気を感じて尚も彼女は意にも介さず、我がもの顔で鎮守府に出入りしている。周りからの敵意の視線を嘲笑し、楽しんでるようにも見えた。

「そもそも、テメエがあの時ウチに来なけりや……！」

「まあ、確かにキツカケとなったのは私かもしれないわね。でも、それはただのキツカケであって原因じゃないのよ。龍田は遅かれ早かれ、力を求めてああなつていたと思うけれどね」

「また適当ほざいて俺達を弄ぼうって腹か、テメエ」

「適当なことを言った覚えはないわ」

叢雲は目を細め、唇を尖らせた。

「以前も話したでしょう？ 龍田はとつくにピークを過ぎてる艦娘だって」

「それがなんだよ」

「龍田は弱さが許せない」

叢雲は俺の反応を楽しむようにさらに続けて言った。

「何故なら、成長を止め老朽化していくだけの存在に価値はなく、己の弱さが仲間を殺すことを理解しているから」

「そんなこと……」

そんなことはない、と否定できなかつた。

実際、龍田の鍛錬に対するストイックさは嫌という程味わってきたし、彼女が『強さ』に並々ならぬ執着を抱いていることは薄々気が付いていた。

「一方で、今メキメキと力を付けている才能に溢れた天龍。一年もかからず龍田が数年がかりで辿り着いた地点を容易く通り越すあなたを見て、龍田はどう思ったのかしら？ 決して、あなたの成長を喜んでいただけではない筈よ」

かといって、龍田はその複雑な感情を周りに当たり散らす程程愚かではない。

むしろ、あいつはもつと性質が悪い。

龍田は、自分に対して怒るのだ。自分の弱さに対し、情けないと。傷だらけの身体と心にそれでも鞭を打つ。

彼女の怒りは、人知れず彼女自身を炙り殺していくのだ。

「そんな時、私達が来た」

鏑木美鈴、そして、急激に強くなっている叢雲。

この誘惑に、龍田が抗えただろうか。

力への渴望で満身創痍だった彼女に、鏑木美鈴の申し出はまさに釈迦の垂らした蜘蛛の糸に等しかっただろう。

「ねえ、天龍？ 強くなりたいって思うことの何がいけないことなのかしら？」

「……………」

「龍田は今、あんなに幸せそうじゃない？ それを奪う権利があなたにあつて？」

聞くな。こいつの言葉には毒がある。

聞けば聞く程、何が正しいのかわからなくなっていく。段々と思考が麻痺して、そして、気が付けばこいつの手中で身動きがとれなくなる。

こいつは毒蜘蛛だ。人を惑わし、絡めとる魔物だ。

「あなたの言葉じゃ龍田には響かない。恵まれたあなたじゃ、龍田には寄り添えない」

それでも、彼女の言葉は、俺の頭の中で反響して、目の前を真っ暗にしてしまった。

☆

「あんだ、何かあつたでしょ」

食堂で夕食をとっていた俺の目の前の席に、暁が腰を下ろした。

「……………別に」

「その様子だと、龍田の説得に失敗したみたいね」

あからさまに大きなため息をつく暁に、俺は少し苛立ちを覚えた。

「仕方ねえだろ。俺とあいつは違えんだからよ」

「は？ 何それ、あんた本当にどうしちやったわけ？」

暁も俺の返答に怒気の籠った口調で返す。

気が付けば、お互い、睨み合いを始めていた。

「俺にはどうせ龍田のことなんざわかかんねえし、もう知るか。あいつの好きにすりゃいいんじゃないやねえの？」

「ちよつと、何その投げやりな態度。何無責任なこと言ってるのよ」

「もうどうでもいいんだよ、面倒くせえ」

次の瞬間、俺の顔面に味噌汁がぶちまけられた。

暁が自分のお盆に乗っていた味噌汁の椀を俺に投げつけたのだ。

「馬鹿だ馬鹿だとは思ってたけれど、よもやここまでとはね。見下げ果てたわよ、天龍」

「……へえ、上等だよ、ちんちくりんがよお。そういや、久しく喧嘩はしてなかったっけなあ！」

お互い、同時に立ち上がり、殴り合いが始まった。

その騒ぎに周りの艦娘達もすぐに止めに入ってくるが、俺も暁も意にも介さず制止する腕を強引に振り払う。

きつと互いに、相手の顔面に拳をめり込ませることしか考えてなかった。

「たった一回駄目だっただけですぐ諦めるとか！ どんだけ豆腐メンタルよ、この意気地なしがあー！」

「テメエにはわかんねえだろうよ！ 仕方ねえだろうが！ 俺とあいつは根本的に違えんだから！ 俺が何言っただって届かねえんだからよ！」

「そんな程度のこと諦める理由になるわけないでしょ、クソ馬鹿！」
「じゃあ、どうしろってんだよ！ 人に説教する前にテメーでどうにかしてみやがれ！」

「それがわかったらとつくにやってんのよ、そんなこともわかんない訳?! 本当に馬鹿ね！」

「テメエも一緒じゃねえか！」

「私はあるみたいだに諦めてふてくされてないわよ！ 一緒にすんな

！」

「何もできねえ癖に言うことだけはご立派だなあ、ちんちくりん！」

「本ツ当に粗暴で低俗で、救いようのない馬鹿！ レディじゃないわ！」

俺も暁も、ガードも回避もしなかった。

互いに鼻血まみれになりながら殴られるまま殴られて、怒鳴りたいだけ怒鳴りあつた。

「——おい、天龍、暁!? 何やってる！」

その後、騒ぎを聞きつけてきた提督と応援にかけつけた艦娘達によつて俺達は拘束され、二人揃つて営倉にぶちこまれた。

「……………」

「……………」

しばらくの間俺達の間会話は無かった。

沈黙に空気の重みをひしひしと感じながら、俺がふと隣の暁を見ると、彼女は正座で床に座しながら、声もなく涙を流して泣いていた。

「な、何泣いてんだよ!？」

暁が泣いている所というものを今まで見たことがなかった。

こいつは、身体は小さいが見た目ほど子供ではない。弱音を吐きそうになつても、黙つて前を向ける強い奴と内心では認めていた。

そんな彼女が嗚咽一つ洩らさず、涙を流す姿を見て、思わず声が出てしまった。

「だって、私、本当に、何もでき、ないから……………」

しゃくりあげそうになるのをこらえながら、暁は答える。

「どうやらさっきの喧嘩中にぶつけた台詞が存外効いているらしい。胸中を罪悪感が埋め尽くした。」

「……………つたよ」

「え?」

俺が小声で呟いた言葉を、暁は聞き取れなかったらしく、こちらを向いて聞き返す。

それに対し、顔が紅潮するのを見られないようそつぽを向きながら、今度は大声で怒鳴る様に言った。

「だから、俺が悪かったって言ったんだよっ！」
「……………」

暁は涙も忘れてぼかんと口を開けてこちらを無言で見つめている。
「その、あれだ、ちよつと色々あつて、むしやくしやしてたんだよ。つ
い八つ当たりしちまった。酷えこともたくさん言った。だから、すま
ん」

罪悪感と恥ずかしさから依然目は合わせられなかったが、俺は暁に
向き直り、改めて頭を下げた。

瞬間、暁も床にぶつける勢いで頭を下げた。

「私もごめん！ ついカツとなつちやつて……あんたに酷いこと言っ
て、ごめん。私の方こそレディじゃなかったわ」

「……………」

「……………」

しばらく、二人とも同じ姿勢を維持していた。

不意にどちらからもなく、噴き出すような笑いがこぼれ、すぐに
営倉内を笑い声が埋め尽くした。

☆

「——また、叢雲なのね。本当にあいつ、余計なことしかないわね」
「いや、真に受けちまった俺のミスだ。あいつの言葉も間違っちゃい
ねえと思つちまったんだ」

「確かにね。あんたと龍田は正反対だしね。天龍の言葉じゃ龍田に届
かないってのも一理はあるかもしれないけどね」

「でも」と言つて、暁は床を叩いた。

「それでも、龍田は諦めなかったわよ」

「——っ！」

そうだ。俺の言葉が龍田に届かないように、あいつの言葉もかつて
俺には届かなかった。だからこそ、俺は一年前、叢雲にいいように利
用されるハメになった。

それでも、今、俺がここにこうして生きているのは、龍田が俺を諦
めないでいてくれたからだ。

馬鹿か、俺は。なら、俺が諦める道理なんてどこにもないじゃない

か。

「……ありがとな、暁。たった今、完全に目が覚めたぜ」

「お礼なんていいわよ、仲間でしょ——つてちよつと待って!?
今、あんた私のこと暁って呼んだ!」

「もう、ちんちくりんとは馬鹿にできねえからな。いつぱしのレディだよ、お前は」

俺の言葉に、みるみるうちに暁の顔が真っ赤になっていくのが薄暗い営倉でも見て取れた。

「な、何よ、急に……普通に嬉しいじゃない」

テレテレと恥ずかしさ半分、嬉しさ半分で頬を緩ませる暁を前に、俺はおもむろに立ち上がった。

そして、暁に、そして自分に言い聞かせるように、叫ぶ。

「誓う！俺は、何があつても龍田の味方だ！俺はあいつを絶対に諦めない！」

「勿論、私もよ！何があろうと絶対に離れないわ！」

それを聞いて、暁もすぐに同じく立ち上がり、二人揃って、営倉で誓いの言葉を叫んだ。

少し、手間取ったが、もうぶれない。もう折れない。

揺るがぬ決心を刻み、ようやく雲間から光明が差してきたと思えた、その時だった。

「——っ！なんだ、爆発!？」

地面を揺らし、営倉内まで聞こえてくる轟音。

それが、後に『舞鶴の百隻斬り』と呼ばれる、俺の人生史上最最低最悪の悪夢の始まりの合図だった。

第九十一話 「期は熟した。さあ、実験開始よ」

—— 龍田、顔色悪いけど大丈夫？

そう言われたのは実験が始まってから3日——3本の薬を使用した頃だった。

その時は特に気にしていなかった。

実験が始まってからは手に入れた力を試すのに夢中で、少し体に負担を掛け過ぎているのだろうと思っていた。

—— 体が冷たい。

そう気が付いたのは実験が始まってから1週間が経った日。7本目の薬を使用した後だった。

深海棲艦の死骸を掴んだ時。それまで奴らに触れば例外なく伝わってきた無機質な冷感。それを感じなかったのだ。

違和感を拭うようにすぐに医務室に走り、体温計を拝借して己の体温を計測した。その数字を見て、私は強烈な吐き気に襲われた。

それは医務室の壁にかかっていた温度計が示す室温と寸分変わらず同じであった。つまるところ、まるで死人。私の身体は生者らしい熱を帯びていなかったのだ。

—— おかしい。最近、私が私でないようだ。

実験が始まってから2週間。14本目の薬を使用する頃には私は身体だけでなく、心にも異変が現れたことを自覚した。

敵を倒すことに悦楽を感じている自分がある。最近、深海棲艦の突発的な出没が多いことを幸運なことだと思っている自分がある。

己の力に酔いしれている自分がある。

気が付けば、私に向けられる周囲の視線には畏怖と軽蔑が混ざり始めている。

これはいけない。

これではまるで、かつての暴れ天龍ではないか。他ならぬ私が諭したのだ。彼女の在り方を否と断じた私が何をやっているのだ。

—— 脈が弱い、心臓が偶に止まる。

実験が始まってから3週間弱。使用した薬は20本を超えた。血色は失せ、体温は冷え切り、脈は弱い。それなのに力ばかりが日々増していく。

私から、無駄なものが削ぎ落されているためではないかと思った。私という艦娘が、1つの本質にそれ以外の不純物を何重にも重ね合わせてできた肉の塊だとしよう。

薬を使う度に、私から不純物が一枚一枚剥がれていくようなイメージだ。血を削ぎ、熱を削ぎ、理性を削ぎ、仲間を削ぎ、ひたすらに不純物を削ぎ落していった私に残ったものは、図らずも『力への渴望』だった。

ああ、なんて情けない。だが、否定はしなかった。私は私に残された唯一を、愛おしく抱きしめた。

—— 龍田、もうそれやめろ。

実験が始まり一ヶ月が経った頃。天龍が私にそう言った。

聞く耳すら既に削ぎ落ちている。対話すら不純物と切り捨てた。

しかし、彼女が私の肩を掴んだその時、一瞬、削ぎ落ちた筈の不純物が戻ってきた。

血色の悪さは化粧で胡麻化している。しかし、触れれば私の体温が冷たすぎるなど誰でも気が付く。

それを天龍に悟られたくないと思っただ。

「触らないでー」

気づけば天龍を投げ飛ばしていた。

私は私自身に驚きながら、その場から走り去った。

ああ、私はすっかりおかしくなってしまった。

それでも私は止まることはできない。この実験さえやめてしまえば、『力の渴望』さえ、切り捨ててしまえば、もう私には何も残らないのだから。

だが、何が起きているのかはハッキリさせておかねばならない。

—— そして、今、私は叢雲と対峙している。

「大丈夫よ、それは正常だから」

叢雲は私の訴えに平静そのものといった表情でそう答えた。

「その薬は一時的にあなたに大きな力を与えてくれる。ただし、その分あなたの肉体は急速に死に向かって行く。副作用とでも言えばいいかしら」

「……………」

「あら、意外と冷静なのね？ 狼狽した怒鳴り声の1つでも聞けるかと思っただのに」

私の反応の薄さが予想外だったのか、叢雲は少し残念そうにこちらを見やる。

「別に。あれだけの力がノーリスクで手に入るとなんて思える程、甘ちゃんでもないしねえ」

「そう、物分かりが良くて何よりだわ」

「ねえ、これが実験？ 私がこの薬で一体どれだけ生きていられるかデータを取りたいの？」

「薬の副作用がもたらす症状の進行は3段階。まず肌より血の気が失せ、次に体温が消える。そして、最後に心臓の鼓動が止まる。ここであなたという艦娘は死ぬ」

「…………もう、残された時間は少ないみたいねえ」

既に心臓の鼓動は脆弱極まっている。運動能力全般に支障はないものの、死が既に目の前まで迫っている自覚はあった。

「——そして、そこから『本当の実験』の始まりよ」

「なんですって？」

「実験始める前、あなたに1本注射打ったでしょ？」

「…………ええ、記憶にあるけれど？」

「もしもあなたに資格があるならば、きっと奇跡が起こるわ」

「奇跡？」

意味深な言葉を並び立てる叢雲に説明を求めようとしたその時だった。

闇に紛れて私の両隣から迫る化け物の存在を察知した。

駆逐イ級だった。

「こんな時にまた深海棲艦…………本当に最近多いわねえ」

私に向かって呐喊してくる二体を薙刀で串刺しにした。なんとも

手ごたえのない戦闘。回避もできずにただ貫かれに來ただけとは。そんな私を見て叢雲は笑いを噛み殺すように口元を抑えていた。

「何がおかしいのかしらあ?」

「いえ、なんて茶番を見せられているのでしようと思っただけ」

「……どういう意味?」

「だって、ねえ? 自分で呼び寄せた深海棲艦を自分で倒してしまっただけのもの、それは茶番以外の何物でもないでしょう?」

「——え?」

不意に叢雲の腰のあたりから一瞬銀色の光が瞬いた。それは棒立ちで隙だらけの私の胸元をあつさり貫通し、心臓を的確に貫いていた。

銀色の光が叢雲の槍の切っ先であつたことに気付くと同時に、私は口から大量の血を吐いた。

そんな死の間際だということに私が考えていたことと言えば、まだ自分に赤い血が流れていることに驚いていた。

「期は熟した。さあ、実験開始よ」

槍が引き抜かれ、私の身体は海中に沈んでいく。

真つ暗で底が見えない、文字通りの深淵へとゆつくりと飲み込まれながら、私の中で何かが蠢く気配を感じた。

ゆつくりと目を閉じると、その『何か』の姿が瞼の裏の暗闇に見えた。

——ああ、そうか。そういうことだったのね……

叢雲の言っていた茶番の意味が、あの薬がなんなのか、全て理解した。

直後、私の身体を引き裂き、その内で蠢いていた『何か』が海上へと浮上していった。

☆

爆発音がして数分も経たない内に俺と暁は営倉から解放され、艦装を装着し、出撃ドックへ集合させられた。

鎮守府内は大騒ぎで、誰もが焦燥を浮かべて走り回っている。

さらには絶えず聞こえ続ける爆音。なり始めるサイレン。尋常な

事態でないことは明白だった。

「提督、こりや一体何の騒ぎだ？」

「深海棲艦の大群が近海に出現した。数は少なくとも100。依然増加しているとのことだ」

「はあ!? 近海に100!?」

「現在総力をもって迎撃にあたっている。お前達第二艦隊も急ぎ出撃し、敵大艦隊を撃滅してくれ」

「第二艦隊って、龍田はどこだよ!？」

集められた面々には旗艦の龍田の姿だけが見当たらない。

「龍田の機装がなくなっていた。おそらくは既に単騎で出撃しているのだろう。よって、龍田と合流するまでは暁を臨時の第二艦隊旗艦とする、できるな?」

「当然よ、レディだもの」

気合十分に応える暁。

しかし、その仕草はどこか落ち着かない。おそらくは龍田の動向を案じているのだろう。

「暁に『岩融』を渡しておく。積載量としては1本が限界だろうが、十分に戦況を覆す切り札となりえるものだ。龍田に届けてくれ」

提督が指さした先には重厚な鉄の棺桶のようなものが置いてある。あの中に岩融が入っているのだろう。

「俺がこいつ使っちゃダメなのかよ?」

「岩融は龍田の腕力と技量をもって初めてその威力を発揮する。いくらお前でも扱いなれない岩融を使用すれば少なからずこちらにも被害が出る可能性が高い。だからそれはやめてくれ」

「……了解した。取りあえず敵を殲滅しつつ龍田と合流すりゃいいんだろ? 任せとけて!」

「頼んだぞ、せめて周辺住民の避難が終わるまでは持ちこたえてくれ!」

提督の声に送り出され、俺達は真っ赤に燃える夜の海へと出撃した。

「地獄絵図だな」

鎮守府を出て10分もしない内に、既に戦闘域に入っていた。視界には溢れんばかりの砲火、航空機、そして、仲間たちの怒声、悲鳴。

「お前達なんかああああ！ 殺してやる！ 殺してやるううううう！」

「ひっ、助けて！ もう燃料が！ ああああああああ！」

「来ないで！ 来ないでよお！ 嫌だ！ 死にたくない、死にたくない！」

また1人、仲間が死んだ音がした。

「なんて、ことなの……ッ！」

暁が拳を握りしめ、震えている。

「第二艦隊！ 殲滅開始！ 一匹たりとも逃がすな！」

暁が怒号と共に砲を撃ち、前進する。

俺も刀を抜き、陣形を維持しつつ、向かって来る敵を斬る。

「——っ！ 天龍！ あそこ！ 全部斬って！」

「おう！」

10匹程度の駆逐イ級が何かに集まり夢中でその牙を突き立て、咀嚼している。

その中心に何がいるかを察しながら、深海棲艦を次々と切り捨てた。

「あ——が、あ——」

「うっ」

俺と暁は口を手で覆い、胃からせりあがってくるものを無理やり抑えた。

他の面々は耐えられなかったようで後ろで嗚咽をあげている。

駆逐イ級にだけは殺されるな。艦娘の間で常套句となっている言葉の一つである。

駆逐イ級は深海棲艦の中でも最も危険度の低い雑魚だ。そんなものに沈められるような情けない戦いは艦娘として決してするまいという発破をかける意味で主に使われる。

しかし、実際にはもう一つの意味がある。あれには他の深海棲艦に

はない、巨大な口と歯がある。

それらが何のために使われるのかと言えば、これだ。

食い散らかされ死ぬこと以上に凄惨なものはあるまい。故に、駆逐イ級にだけは殺されてはならないのだ。

「痛い……いた、い、よお……殺……して……」

息も絶え絶えにそう訴える艦娘に俺は躊躇なく刀を振った。

生温い返り血が頬にかかった。

やがて、彼女の身体はゆっくりと、海底へと沈んでいった。

「行くわよ、まだ敵はいる。味方は今この瞬間にも死んでいつている。少しでも私達がその力にならないと……」

「う、うええ……もう、嫌だ……」

「これじゃ、龍田さんも……」

「泣き言言つてんじゃないわよ！ レディじゃないわ！」

早くも仲間達の心が折れかけている。

無理もない。この舞鶴鎮守府でこれほど惨い戦闘は今まで一度だつてなかった。こんな戦いを経験しているのは前線基地だけだろう。

それでも、立ち上がらせなければならない。そうしなければ、死んでしまうから。

「おい、泣くのは後に——」

その時、俺は一瞬、周囲への警戒を解いてしまったのだ。

あいつがそれを狙って来たのか、単純にタイミングが良かっただけなのかは今となってはわからない。

だが、結果としてこの一瞬の油断がその後全ての結果に繋がった。

「ぐん、ふ」

泣きじやくつっている艦娘の肩を持ち上げてやろうとしたその時、彼女の胸元から、黒鉄の刃が生えて来た。

否、貫かれたのだ、後ろから。

誰に。決まっている。薙刀を使い、俺の隙を突いて一撃入れる実力者など一人しかない。

「あなタは、弱イ、わねエ」

「え……?」

「た、龍田……?」

薙刀を抜き、大量の血を流しながら、仲間が一人、また海面に倒れ、沈んだ。

「あ、うわああああああ!」

「ちよ、馬鹿! 離れないで!」

突然の仲間の死に動転したのか、一人が悲鳴をあげてその場から逃げた。

しかし、ここは既に戦場。しかも、敵の数は圧倒的。

隙だらけの彼女の側面を戦艦夕級の砲撃が襲う。

そして、足が止まったが最後、無数の砲撃が彼女を一斉に襲った。

爆炎に包まれ、焼け焦げた死体が一つ、また海へ沈んだ。

「暁! 天龍! ふ、二人が、あんな、あつという間に……!」

「俺達の後ろにいる! 絶対に離れるんじや——!」

「——なんで、あなたの後ろが安全だと思ったのかしら?」

「——ツ!?!」

「あ、げ」

音もなく、背後で叢雲が少女の首に三節棍形態にした槍を撒きつけ、容易くへし折っていた。

慌てて、叢雲とも距離をとり、俺と暁は背中合わせになる。

頭がまるで事態に追いついていない。

数秒の内に、第二艦隊が俺と暁以外壊滅した。こんな理不尽を、脳が許容できない。

「気付くのが遅い、判断が遅い、警戒が遅い、何よりも来るのが遅い」
叢雲が残念そうにため息を吐く。

「天龍、あなたがウダウダやってるうちに龍田は堕ちたわよ?」

「叢雲、これはテメエの仕業かツ!」

「違うワあ」

激昂する俺をなだめる様に聞こえてきたのは背後の龍田らしき何かの声。

俺はゆつくりと彼女の方へ視線を向ける。

薄紫の髪は真っ白に、瞳は炎のように真っ赤に、そして、全身が死体のように青白く、しかし、その声は、その笑みは、その技の冴えは、間違いなく、龍田のもので。

「ゼエンプ、私が望んでやったことなノよ、天龍ちゃん」

だから、俺は、こんな光景は見たくはなかった。

「私ね、強くなりたいノ。もつと、モット、もつと、モット、もつと、モット、もつと、モット、もつと、モット、もつと、モット、もつと、モット、もつと、モット、もつと」

龍田はどこか妖艶な仕草で薙刀に手を絡ませながら俺を見つめる。

「天龍ちゃんハ、強いカしらア？」

「——ッ！」

間髪入れず、薙刀が俺の胸元を抉らんと振り下ろされる。

寸前で身を翻して躲すが、まだ龍田の間合いの中にある。

「天龍ちゃんヲ殺せたら、私は強いわヨねえ!？」

大ぶりの中段横薙ぎ。刀で受ければ刀ごと腕の骨が碎かれる。だからこそ、これは海面ギリギリにしゃがんで避ける。

しかし、相手は龍田一人にあらず、しゃがみ、動けなくなった俺を目掛けて3匹の駆逐イ級が襲い掛かる。

「やべえー！」

「天龍！」

この体勢では斬れるのは2匹までだ。

暁も他の深海棲艦の相手で手一杯。防ぎきれない。

しかし、その刹那、駆逐イ級は3匹とも薙刀の三連突きによって順に碎かれた。

当然、龍田の仕業である。

「邪魔しないでもらえルう？ 私ガ！ 天龍ちゃんヲ殺すことに意味があるのお、取るに足らない雑魚でも介入させると傷がつクのよお」

「龍田、やめろ！ やめてくれ！ こんなのお前らしくねえよー！」

「天龍！ 今の龍田は普通じゃない！」

「でもー！」

暁が必死に龍田に呼びかける俺を制止する。

「ふうん、つまんないワあ」

その龍田の言葉の後、彼女は再び薙刀を構えて俺に襲い掛かる。

「ほら、ホラ、ほらあ！」

「ぐっ、やめてくれ、龍田！」

「天龍！」

防戦一方だった。

いや、正確には違う。防戦一辺倒と言うべきか。俺は、龍田に攻撃する気など微塵もありはしなかった。

ただ、彼女の攻撃を躲し、いなすばかりで、必死に言葉をかけ続けていただけだった。

「……本当に、つまらないわねえ。じゃあ、もういいわ。先にこっちを貫うから」

「え？」

突然、龍田の薙刀が打って変わって真横に伸びる。その先には、喉元のあった。

「——らあッ！」

「ぐ……ッ!?!」

「へえ、やるじゃない」

力の限り刀を舌から上に振り上げ、龍田の薙刀を強引に真上に弾き飛ばした。

呑気に観戦していた叢雲は拍手などしている。

刀を振り上げた形の俺の目の前に武器を失った龍田が立っている構図となった。

この瞬間、俺は龍田の生殺与奪を握った。

「……………」

「……………振り下ろさないの?」

「……………ッ！」

振り下ろせるはずがない。

俺は龍田を殺したいんじゃない。彼女を助けたいのだ。一年前、俺が龍田に助けられたように。

だからこそ、誓った。龍田を絶対に諦めない。

あの誓いを破り、この刀を振り下ろすことなんて、絶対にできない。

「……そう、もういいわ。飽きた」

「龍田！」

「死んでいいワよ、天龍ちゃん」

龍田の右手に黒い霧のようなものが凝集したかと思えば、それは瞬時に薙刀の形を成し、その切っ先は俺の左目を抉る様に裂き、次いでその上半身を撫でるように斬った。

「ぐ、あああああああつー！」

「天龍!? 何やってんのよ、龍田あああああ！」

激痛に身をよじり、その場に崩れる俺を見て、激昂した暁が砲撃を繰り返す。しかし、いずれも龍田の薙刀に容易く弾かれ、届かない。

やがて弾薬が尽きたのか、熱を帯びた砲塔から弾が出なくなると、暁は悔しそうに唇を噛み、叫ぶ。

「そいつが！ 天龍がどれだけあんたのことを想ってここまで来たかわからないのか、龍田っ！」

「……………」

「なんとか言え！ 言いなさいよ！ 龍田！」

涙を流しながら叫ぶ暁に、興味が失せたように龍田は背を向けた。その視線の先には鎮守府がある。

「次は、あそこに行きましようかあ、あれを殺せば、きつとモット強くなれルわあ」

まるで、龍田の後についていくように、彼女が鎮守府の方へ歩き始めると、それまで隙を伺って飛び掛かろうと勇んでいた深海棲艦達も、俺達を置いて移動を始めた。

残されたのは暁と俺と、そしてその一部始終を観察していた叢雲だけだった。

「龍田はもう駄目ね。彼女には資格はなかった」

「ぐ、う、龍田……………」

「あら、寸前で避けたのかしら？ 目の方は駄目そうだけど、胸の傷は浅いわよ」

　　楽しそうに天龍の傷を見て笑う叢雲を暁が睨む。

「あんたは、一体なんなのよ！ 何がしたいの!?! 何もかもを壊して

！ ぐちやぐちやにして！ 何のためにこんなことするの!？」

「何のためにですって?」

叢雲は暁を睨み返しながら答える。

「人類と世界のためよ」

「こんな地獄を作っておいて、どの口が……!」

「私も私の目的があつて動いているの。ただ、今回は私も少し事を急ぎ過ぎたわ。いや、というより私怨が祟ったというべきかしらね」

クスクスと笑う叢雲は俺の左目にどこから取り出したのか包帯を巻きつけながら言う。

「まあ、見ていてとても面白かったけれど、少しあなた達が不利すぎでつまらないのよねえ」

「何のつもりだ、テメエ」

「だから、私にも私の目的があるの。少し力を貸してあげる。最後まで足掻いて見せなさい」

叢雲が取り出し、俺達に渡したのは龍田が使用していたペン型注射器によく似ていた。

「これは、龍田の使つてた……」

「いいえ、龍田の使つていたものより弱いものよ。その副作用も少ない。ただ、それを使えば、今の状況をどうにかできるかもしれないわね」

悪魔の囁きだ。

確かにこの薬で龍田は尋常ならざる力を手に入れたのは事実。しかし、同時に、今、龍田は化け物と化している。

この薬を使うということは、俺達も少なからず同様のリスクを背負うということだ。

「前方、龍田を含め百隻程度、後方からも龍田に招来された深海棲艦五十隻程度。手負いのあなた達じゃ犬死にもいいところね」
「……………」

「まあ、使うも自由、使わぬも自由。一応、参考程度に教えておくと、90%で無毒。10%の確率で龍田の二の舞よ」
それだけ言うと、叢雲は槍を持って俺達に背を向けた。

「それじゃあ、私は私でやることがあるから行くわ。くれぐれも手遅れにならないよう、よく考えて足掻くといいわ」

叢雲が見えなくなつて、俺達は薬を持ち、鎮守府の方へ進む深海棲艦の群れと、その先頭に立っているであろう龍田を睨む。

「暁、俺に命令してくれ」

「え？」

「多分、俺の意思じゃ、また龍田を斬れねえ。だから、背中押してくれねえかな……？」

暁は一瞬泣きそうな表情を浮かべ俯くと、今度は険しい表情になつて顔をあげた。

「天龍、艦隊旗艦として命じるわ！ 鎮守府へ侵攻する深海棲艦およそ百隻！ そしてその首魁、龍田！ 一体残らず、斬りなさい！」

「ああ、了解だ！ 代わりに背中中は頼んだぞ、暁！」

「ええ、後ろから迫ってくる深海棲艦五十隻は私が引き受けるわ」

俺は腰の刀を、暁は艤装に鎖を巻き付けて引張っていたケースを開き、中の岩融を手取る。

「暁、絶対に生き残るぞ」

「ええ、天龍。お願いだから薬でくたばらないでよね。介錯とかいやよ」

「はっ、そつちこそ」

互いに注射器を首に当てる。

覚悟は決まっている。

死ぬ覚悟も、殺す覚悟も。

「天龍型軽巡洋艦1番艦、天龍、出撃するぜツ！」

「暁型駆逐艦1番艦、暁、出撃するわッ！」

舞鶴鎮守府、現戦闘可能艦、天龍、暁、2隻のみ。

敵深海棲艦、総数、約150隻。

絶望的戦力差の中、彼女達の最後の戦いが始まった。

第九十二話 「私、レディなもの」

「ああああああッ！」

叫ぶ。なんのために。

己を鼓舞するため、相手を威圧するため、恐怖を振り払うため、無駄な力を抜くため、かつて色々理由を思い浮かべたものだった。

何故、人は時に戦場に立ち、大声で叫ぶのか。下品で、無意味だ。ずっとそう思っていた。

だが、今になって、やっとわかった気がする。

「うわああああッ！」

重巡り級の頭が岩融の刃で碎かれる。この薙刀の重量と刃の分厚さを考えれば、それは斬る武器でなく、粉碎する武器なのだとすぐわかる。

これをして、深海棲艦を真つ二つにするのだから龍田の技量には本当に驚かされる。

「はああああああッ！」

この薙刀を振るにはあまりにも私の腕は小さく、細い。

だが、今の私は尋常ではない。両手で薙刀を何度も振り回し、未だ息は上がらない。

あつという間に十隻程度は仕留められただろうか。

これでも龍田の使っていたものよりも効果が弱いという。全く、馬鹿げている。こんなものを彼女が使っていれば天龍すら歯が立たないのも当たり前だ。

「ガアアッ！」

「ぐっっ！ つおおおおおッ！」

戦艦ル級からの砲火が掠る。駆逐艦の私の身体では着弾の余波でも十分なダメージとなる。薬は防御力、耐久力までは強化してくれないらしい。

艦装保護膜がビリビリと震えるのを感じながら私は、戦艦ル級を岩融で勢いよく貫いた。

「まだまだあッ！」

まだ深海棲艦はうじゃうじゃいる。私は大声で叫び、敵に飛び込んでいく。

逃げるな。

一隻だつて私の後ろに通すわけにはいかない。

友が、倍の大群と戦っているのだから。

五十隻くらい、私一人で撃滅できねば顔向けもできない。

「次いッー！」

私は叫ぶ。

いや、私は吼える。

無意味ではないのだ。こんなに力が湧いてくる、こんなに闘志が溢れ出てくる。

身体の奥底でリミッターが外れていくのを確かに感じる。

人は、全身全霊を尽くす時、叫ぶのだ。

「っ!？」

「――」

私の薙刀が止まる。否、止められた。その強固な装甲を一撃で破砕することは叶わなかった。

「装甲空母鬼！・ 鬼級までいるわけ!？」

次いで、私の周囲に突如爆発が起こる。

空爆。成程、爆風に目を細めながら装甲空母鬼の背後を見れば離れた所で空母ヲ級がずらりと並び、艦載機を発艦しているのが見えた。

「こんな、程度で……!？」

龍田ならこんな爆撃、涼しい顔で全て躲しきる。

天龍ならこの程度の敵、笑って斬り伏せる。

「こんな程度で、レディが止まるかあああああッー！」

爆撃の嵐を一息に駆け抜ける。

私には涼しい顔も、笑ってやる余裕もないけれど、それでも私はあの二人を一番近くで見て、彼女達の武勇に誰よりも焦がれた艦娘だ。

私は弱い。キャリアこそあれど、龍田程の研鑽も、天龍程の才能もない、ランキングだつてぎりぎり下から数えた方が早い。

でも、だからこそ、心では、気合と根性では負けられない。負けて

はいけないと思った。

曲がりなりにも、私はあの二人の『友人』を名乗っているのだから。「うりゃああああッ！」

一撃で砕けぬ装甲なら、二撃で砕こう。それでも駄目なら三撃、四撃。相手が砕けるまで攻撃を止めるな。

気合と根性で押し通せ。

今日に限り、その気合と根性に身体は応えてくれる。

「砕けろおおおお！」

「キイイイイイイ！」

徐々に装甲空母鬼の体中にヒビが入り、二十は打ち込んだ頃、断末魔をあげて敵は沈んだ。

そのまま、私は後方の空母群へ一直線に突っ込む。

左右からの砲撃は完全無視。

何発かはもろに食らって艀装が中破したが、痛みも恐怖もまるでない。

薬の作用か、リミッターが外れた影響か。

とにかく、今日の私は誰にも負ける気がしない。

「ああ、今の私、最っ高にレディだわッ！」

なんて最悪で最高な日なのだろうと、私は吼えた。

☆

「——二十三、二十四、二十五隻ッ！」

走りながら、すれ違いざまに軽巡一隻と駆逐艦二隻を斬り、俺はただ見えぬ先頭へ向かって刀を振る。

止まるな。

見敵必殺。斬れ、視界に入ったもの一切を斬り続けろ。

「しゃらくせえ！」

横一列に並んだ戦艦三隻を一気に横薙ぎにする。少しの抵抗もなく、まるでケーキのように戦艦の上半身と下半身が分断された。

薬の影響で、刀のキレが良い。いつも以上に体が、刀が、イメージ通りに動く。

「全く、自分が自分じゃねえみてえな変な感じだぜ」

四十隻目を斬り、息をつく。

疲れはない。むしろ、より集中力が研ぎ澄まされていく感じた。これが薬の作用だと言うのなら、龍田が溺れるのもわかる気がする。例え、その末路がこんな形だとしても。

「つたく、余裕があるからか要らねえこと考えてんな。駄目だ、やめろ。斬りにくくなる」

そう呟きながら自分の頭を小突く。

そんな中、ようやく自分達の群れに襲来してきた脅威を認識したのか、こちらに向かって戦艦ル級、夕級、空母ヲ級で編成された一艦隊六隻が出てくるのが見えた。

全員がeliteかflagship相当であるのがわかる。

だが、俺はそれに対し、笑った。

「やつと手練れが出てきたか。だが、2分ばかり遅かったな。雑魚共を相手にして、ようやくと隻眼での戦いにも慣れたところだ」

刀を鞘に納め、全速力で海を滑る。

上下運動も姿勢のぶれもない、その縮地に、敵には俺が瞬間移動でもしたように見えたのかもしれない。

眼を見張り、砲塔を動かすことをも忘れる、深海棲艦の驚愕の表情というものを初めて見た気がした。

「どけ、お前らに用はねえ」

その抜刀の瞬間をただの一体も認識すらできず、深海棲艦六隻はあっさりと両断され海へ沈んだ。

「これで四十六隻」

「――あら、アラ、あら、アラ。随分派手にやってくれてルわねえ。さつきトは、大違いじゃないのお、天龍ちゃん」

そのノイズの入り混じった声でゆっくりと深海棲艦の群れの奥から姿を現したのは他でもない龍田だ。

「リベンジなのかしらあ?」

「ああ、そんな所だよ」

落ち着け。動揺を悟られるな。

刀を持つ手が少し、震えている。それを隠すようにおおげさに刀を

鞘に仕舞い、居合の構えをとる。

左目の包帯が、血で滲んでくるのがわかる。

「その目、とつても痛そうねえ。そんな今の天龍ちゃんハ、強いのかシ
らあ?」

「試して見りやわかるぜ」

「ふうん、確かに、さっきトは違うみたいねえ」

瞬間、言葉の途中で龍田の身体がなんの前ぶりもなく動いた。
遅れた。

だが、まだ間に合う。

今度は俺の心臓を貫かんと音速で突き出される薙刀の切っ先を振りぬいた音速の剣で弾く。

薙刀の切っ先は斜め上にそれ、俺の左耳のすぐ横の空を貫いた。

「あら、本当二別人みたい」

「隙だらけだがよお、斬っていいんだよな?」

「——ッ!」

振りぬいた刀の刃を返し、袈裟斬りする。

今度は龍田が空いた左手に薙刀を作り出し、俺の刀を弾く。同時に大きく真後ろに飛び、再び間合いの測り合いに戦況が巻き戻った。

「ずりいな、それ」

龍田の両手に一本ずつ握られている漆黒の薙刀を見て俺は笑った。

「武器や道具ハ両手から一つづつ、合計二つまでシカ作れないのよお。
だから、今はこれで全部よ」

「ま、なんでもいいけどよ」

不意に龍田が嬉しそうに頬を綻ばせて笑い始める。

「そう! ソウ! そうなのネ、天龍ちゃん! 私を殺しニ来たのネ
! そう! それハとつても素敵よ、天龍ちゃん!」

「ああ、そうだ」

不思議とその言葉をはつきりと口にできた。

「お前を斬りに来たぜ」

昂ぶる龍田の様子とは対照的に、俺はだんだんと心が冷たく、静か
になっっていくのを感じた。

さつきまでの震えは既がない。肩に入っていた余計な力も抜けた。俺は、とてもいい具合に、仕上がりがつつあった。

「さあ、殺し合いマしよう、斬り刻ミ合いましよウ！ どちらが強い
か、いよいよ決着ヲつけましよう！」

「お前、よく喋るな」

「ん——ん!?」

俺の右足の始動に龍田は完全に反応が遅れた。間合いを一步詰められた龍田は慌てて両腕の薙刀で薙ぎ払おうとするがもう遅い、刀で悠々と対処できる。既にここは俺の陣地になった。

龍田は戦いを前に口数が極端に少なくなる奴だった。

集中力が増し、耳と口が会話の機能を停止する。体中が戦闘用に切り替わるのだ。

そうなった龍田はもう一筋縄ではいかない。間合いの外とて油断していれば一瞬で間合いの内に飲み込まれ、瞬く間に首を獲られる。こと戦いというものに真に真剣だったのが、龍田という少女だった。

「どうした？ 獲物が二本もあるんだ、戦術の幅は単純に二倍だろう？」

「何故!? どうして、ここまで、攻メあぐネる!?!」

龍田の戦い方は、理性の極地だった。

全ての攻撃に意味があり、伏線があり、読みがある。野生のまま本能に従った攻撃ではない。知恵長ける者の戦術。

なればこそ、彼女は先の先を打つ。俺は、一步進むためにさらにその先を打たねばならなかった。

俺には一手の間違いも許されず、保留の代償は永遠と続く理詰め
の猛攻。

あいつの持つ薙刀が一本だけで良かったと、心底安堵したものだ。
もし、龍田が薙刀を二本、扱いこなす力量を身に着けていたらと考
えると、今でも背筋が寒くなる。

「さあ、ここまで近づいたぜ。わかるよな、後、一步だ」

「馬鹿な、バカナ、馬鹿な、バカナ、馬鹿な、バカナッ！」

ああ、ここからだ。龍田が本当に怖いのはこの最後の一步の所まで来てからなんだ。

ここからたった一步踏み込むために何か月掛けたか。

この薙刀と刀の間合いの境界線。ここはまるで刃の嵐だ。

嵐とはすなわち、前後上下左右の区別なく人々を襲うもの。

この距離の薙刀もそれに同じ。前後上下左右の区別なく、その刃が襲い掛かる。それまでの間合いでも、前、上下、左右の斬撃の自在は当然あった。

しかし、この位置に限り、さらに背後からの斬撃が加わる。

先んじて突き出された一の刃を辛うじて避ける。刃は己の後方へと飛び、一時安堵に胸を撫でおろすだろう。そこに、引き戻しよる二の刃が虚を突き、肩口を切り裂くのだ。

遠い間合いではこうはならない。刃が敵の背後まで飛ぶ近距離故に生まれる斬撃型。

近い故にさらに増す斬撃の自在度。それが龍田の技量によって振るわれればそれは文字通りの嵐だ。

「——だから、お前は違うんだ」

「私ハ強イ！ 私ノ方ガ強イ！ ソウデナクテハナラナイ！ ソウナラナケレバ意味ガナイツ！」

油断と驕りにまみれた脆い集中力。

浅慮で力任せな手数だけの攻撃。

そして、その薙刀の使い方をまるで理解していない稚拙な技量。

「私ハ！ 『力の渴望』、ソレダケニ没頭シテ！ 専心シテ！ 信仰シタ！ ナレバコソ、私ハ誰ヨリモ強ク、モット強クナツテイル筈！ ソレガ、何デ、コンナ、カンタンニ……！」

龍田の内にある最も強い概念、『力への渴望』に殉じたと言うなら、それに関しては、お前はまさしく龍田だろう。本物以上と言つてもいい。龍田よりも本物だろうさ。

だが、お前は多くを切り捨てすぎた。

捨てちゃいけないものまで捨ててしまった。

「全テヲ圧倒スル次元ノ違ウ『力』！ 少ナクトモ才前如キに劣ルモノ

デハナカツタ筈ダツタッ！」

——ああ、お前の力自体は凄かったよ。しっかりといなさなきや刀ごと俺の身体は肉塊になってただろうさ。

「私ハ！ 停滞モシナイ！ 研鑽ノ必要モナイ！ 理想ヲ具現シタ存在ニナツタ筈ナノニツ！」

——だが、『停滞』と『研鑽』を切り捨てたのは間違いだったな。

停滞は龍田を苦しめた元凶だ。だが、同時にそれが彼女をより高みへと誘う一因にもなった。

研鑽は彼女の『無才』を『秀才』にまで押し上げた強さの根源だった。

そんなものまで捨て去ったお前が、もう龍田の筈がない。

「いいのかよ、そこは、俺の間合いだぜ」

「……………」

龍田だったものは最早抵抗する様子はなかった。両手の薙刀を霧散させ、逃げるでもなく、襲い掛かるでもなく、鞘から刀が抜き放たれるその時を待つかのように、ただそこに立っていた。

だが、もうその真意すらどうでもいい。

終わらせよう、この悪夢を。

俺も夢から覚めた。今、やっと気が付けたんだ。

「龍田は、死んだんだ」

視界が歪む。いつの間にか涙が出ていたようだった。それでも目の前の龍田だったものを斬るのはあまりにも容易い。

そう、これは夢なのだ。ならばいつそ目を閉じて終わらそう。

次に目をあけた時には、この長い悪夢から覚めている筈だから。

「——本当に、強くなったわねえ」

死んだはずの彼女の声が聞こえた。

しかし、既に刀は滑り出した後。さらにはその居合、皮肉にもこれまでの中でも最も冴え渡る一刀で、俺が目を開けるよりも早く、刀は銀閃を描き、振り切られていた。

「——え？」

目を開いたら、夢が終わっていた。

振りぬいた刃に肉の感触はなかった。それでも、自分の刃が龍田の首を通り抜けたのを確信した。

柔らかで、気の抜けた感じ、しかしどこことなく読めない、そんな龍田らしい笑顔が、一番に目に入った。

最初に首から上が、次いで残った身体が、虚しく水音を立てて海底に沈んでいった。

「あ、ああー！ あああああッ！」

目を開いたら、夢が終わっていた。

そして、俺が殺したものが、龍田であった現実には直面した。

まだ、生きていたのだ。まだ、あの内に龍田は確かに残されていたのだ。それなのに、俺は、龍田は死んだと断じた。

そして、龍田を斬ったのだ。彼女を救えるかもしれない、可能性を殺したのだ。

「うわああああああああああッ！」

気づかなかったから仕方ない。

そうだろうか。俺はきつと気が付いていた。

何故、最後、彼女が何の抵抗もなく俺の刀が抜かれるのを待っていたのか。それは、あれが龍田だったからじゃないのか。

それに気づかず、愚かにも俺は目を閉じた。気付きから逃げたのだ。

気付けば殺せなくなるから。

きつとわざとだ。無意識に俺は選択していたに違いない。

——俺は、救う気などなかった。最初から龍田を諦めていたのだ。

『誓う！ 俺は、何があっても龍田の味方だ！ 俺はあいつを絶対に諦めない！』

「何が誓うだッ！ 何が龍田の味方だッ！ 何が絶対に諦めないだッ！ 俺は、俺は何一つもッ！」

不意に、背中を焼けるような高熱と吹き飛ばされそうになるほどの爆風が叩きつける。

残った深海棲艦達からの砲撃だった。

龍田という指揮官を失い、先刻までの統制の取れた進軍は崩れ去

り、それぞれが好き勝手に散開し始めている。

俺は刀を抜き、砲撃の砲口を見やる。

目に入ったのは軽巡ツ級。

海面を蹴り、数秒足らずで真正面まで間合いを詰めると、反撃の隙も与えず、一刀のもと両断する。

「四十八隻目」

俺は『龍田』を加えた撃破数を小さく呟くと、次の獲物を探し、その全てに愚直に突撃を繰り返す。

視界に入った全てに飛び掛かり、全てを斬り殺す。

「四十九、五十、五十一、五十二——」

無機質に斬った敵の数だけを唱える。

そこには最早、敵への戦意も敵意も殺意もない。それは所謂、八つ当たりだった。

☆

「——天龍ッ！」

全身に無数の火傷、擦り傷、切り傷を受けながら、五十隻を討ち果たした後、暁が見たのは、深海棲艦の骸、骸、骸。

そして、その中心に立ち、夜空を見上げる天龍の姿だった。

最初こそ、その健在に安堵の息を洩らした暁であったが、すぐに天龍の様子がどこかおかしいことを察知し、険しい顔付きで彼女の元へ走った。

「天龍！」

「……暁か」

「大丈夫、なの？ 見た所大きな怪我はしてないみたいだけれど」

薬の副作用が出たのかとも思ったが、どうにもなっている様子はなく、再び暁は安堵の息を洩らす。

しかし、彼女の傷があまりにも少なすぎる所に一周回って不気味ささえ感じた。

暁自身、五十隻との戦闘では薬の作用をもってしても大破まで追い込まれた。

天龍はその倍の深海棲艦、さらにはあの龍田とも戦っていると言う

のに、余りにも無傷が過ぎる。

背中が砲撃の余波を受けたのか服が焼け焦げ、素肌が露出していたが、それくらいのもだった。

「……まあ、とにかくお互い無事で本当に良かったわ！」

「はは、無事、ね。まあ、そうだな」

「天龍？」

天龍の頬に涙が伝ったのが見えた。

「百隻、斬ったんだ……ああ、実際はもうちょいいいたかな。百から先は数えてねえから、わかんねえんだけど、はは」

「……………」

「百隻斬ったよ、龍田も斬ったよ。ああ、斬ったんだ、俺が」

天龍の声が少しずつ震えていくのが暁にもわかった。

「龍田だったんだ……！ 誓ったのに……！ 俺は、あいつを、諦めたッ！ 俺が、殺したんだ！」

「天龍！」

錯乱しながら泣きくずれる天龍を暁は強く抱き締めた。

「やめなさい、こんな時まで、自分を責めなくていいの！ 天龍は正しいことをやったのよ！ 舞鶴の多くの人の命を救った！」

「俺はっ！ 顔も知らねえ数億人より、龍田たった一人を、救いたかったんだ……ッ！」

「……………っ！ 天龍、ごめんねッ！ ごめんねッ！ 全部、私のせい！ 命令した私が悪いのッ！」

暁は悔いた。

見誤っていたのだ。天龍の龍田への想いの強さを。その大きさを。

天龍にとつて龍田を斬るということが、彼女の心をも殺してしまいかねないことだと気が付けなかった自分が腹立たしくて仕方なかった。

（それなのに、私はなんてことを命令してしまったのよ……こんなの、レディじゃないわ……っ！）

唇から血が出るほどに噛み締めてもまだ足りない。

気づけば暁の目からも涙が流れていた。

「うわ、ああ、ああああああつ！」

「うぐ、ひぐつ……ごめんなさい、ごめんなさい、天龍！」

そうして二人で夜明けまで泣いていれば、きつと心の傷も幾分か癒えた。

二人でいれば、きつとまた立ち上がった。

それなのに、地獄は残酷にも、まだ終わってはくれなかった。

『――！』

「この咆哮、深海棲艦……!?!」

「嘘……」

目の前から、深海棲艦の一艦隊がこちらに向かって進撃してくるのが見えた。

戦艦ル級と夕級、重巡り級、軽巡夕級、駆逐イ級、そして、先頭にいるのは、姫級の深海棲艦、戦艦棲姫。

暁は先刻倒した装甲空母鬼の断末魔を思い出した。あれが、あの艦隊をここに呼んだのかもしれない。

「まだ、残つてやがった――か!?!」

殺意をほとばしらせ刀を抜こうとする天龍の視界が不意に捻じれ、歪み、立っていらなくなる。

おかしい。急に吐き気がする。全身の血が沸騰しているのかと錯覚するほど熱い。体の内側からハンマーで殴られているかのような鈍痛が全身に響く。

呼吸ができない、入ってくる空気はまるで肺を焼け爛らせているように、うでまともに酸素を取り込めない。

「あ、が……ッ!?!」

「……多分薬の副作用よ。私も数十分前にそんな感じで倒れて、動けなくなった。十分くらいしたら良くなるわ」

海面に右手を突き、左手で胸元を掴み脂汗を流す天龍にそう説明しながら背中をさする。

しかし、それすらも激痛に変わっているらしいことを天龍の反応から察するとすぐに手を離した。

「相当、無茶な動きをしたのね。薬でズルをしたその埋め合わせが一

気に来てるんでしょようね。大丈夫よ、天龍、そこで休んでなさい。すぐに終わるから」

朦朧とする意識の中、天龍が見た暁の笑顔は、どこか龍田を彷彿とさせた。

☆

「暁……？」

朦朧とする意識の中、岩融を持って立ち上がる暁は自分の何倍も満身創痍だった。

そんなことにすら今気づくとは本当に俺はどうしようもない奴だと思った。

「天龍、旗艦命令よ」

俺に背中を向け、ボロボロの身体でそれでも岩融を構える暁。

そして、その言葉の先を聞きたくなくて、俺は返事をしなかった。

だが、それでも構わず、暁は言葉の先を続けた。

「最後の命令。絶対遵守かつ、期間は死ぬまでよ。心して聞きなさい」

「断……る」

「天龍、生きること諦めないで。力の限り、生き続けなさい」

「やめろ……」

いつも小さかった暁の背中がとても大きく見える。

「この命令は私の半身。あなたが遵守する限り、私はいつだってあなたと共にいる」

「頼む、行かないで……くれっ！」

「そして、もう半身は少し遠い所で、龍田と一緒にあなたを待っているわ、気長にお喋りでもしながら、ね」

岩融の安全装置が解除される。

しかし、この大重量の薙刀を暁の腕で正確に投げられるとは思えない。

なればこそ、彼女が数分もしない内に辿る未来が見えて、俺は自分の身体の痛みも忘れ、暁を止めようと這いずって手を伸ばす。

「やめ……ろ、それだけは、駄目だ……お前まで……お前まで、俺を、置いていくなッ！」

「……っ！」

暁の肩が僅かに震えた。

彼女の顔がこちらに向けられる。その顔は、既に涙でぐしやぐしやで。

驚く間もなく、暁が俺の頭を胸に抱いた。

「私だって！ 私だって嫌よ！ 天龍ともっと一緒にいたいっ！ やりたことだって、やり残したことだってたくさんあるもんっ！ なんで……なんでこんなに意地悪されるのかなって、神様を殺してやりたくらい……っ」

やがて、ゆっくりと俺の頭から暁の手が、身体が再び離れていく。彼女の手は、とても冷たくて、震えていた。

「でも、わかってる。きつとこれは私がやらなくちゃならないこと。だって——」

涙を拭い、笑顔を浮かべて暁は言った。

「私、レディなもの」

「暁……！」

「それに、置いていかないわ。言ったでしょ、命令を守っている限り、私はいつもあなたと共にいる」

暁が向ける笑顔が、あまりに眩しくて、余りに遠くて。

「何があろうと絶対に離れない、そう誓ったからね」

「暁ッ！」

岩融を手に、雄叫びをあげて深海棲艦に突撃していく暁。

当然無数の砲火が既に大破している彼女を襲う。

しかし、当たらない。砲弾が避けていくようだった。これが神の加護だと言うのならば、神様は随分な皮肉屋でくそつたれな性格をしていると言わざるを得ない。

「安全装置解除、標的確認、方位角決定——」

——ねえ、天龍。あなたは心を痛めてしばらく立ち上がれないかもしれない
しれない

「——全速突撃、刺突、決行——」

——でも、きつといつか、私や龍田みたいに、あなたに手を差し伸

べてくれる仲間ができる。だからね

「――爆ぜ穿て、『岩融』ッ！」

――その時まで、どうか諦めず、生き続けて

「――あ、最後にもう一度だけ、天龍にレディって呼んでもらえばよかったなあ」

最後に見えた光景は、深海棲艦と暁を包み込む巨大な閃光。

俺の人生史上最悪最悪の夜は、こうして朝日を迎えたのだった。

第九十三話 「天龍、死ぬつもりじゃないですよね？」

「——もしもし？ ええ、私よ、叢雲。任務完了の報告を」

朝日が水平線から上ってくるのを気だるげに見つめながら、舞鶴から遠く離れた海域で彼女はヘッドホン型の通信機を装着し、マイクに話しかける。

「取り敢えず、結果として龍田の実験は失敗。深海化の末、招来の権能を発現したけど暴走。大量の深海棲艦を舞鶴鎮守府近海に呼び込み、大規模戦闘になったわ。舞鶴の艦娘の9割が轟沈したわ」

『残り1割は？』

「ん？ ああ、暁と天龍を除いては私が沈めておいたわ」

『その2隻が生き残りというわけか』

通信機越しに帰ってくる声に対し、叢雲は楽しそうに笑みを浮かべた。

「いいえ。暁は最後の最後に深海棲艦との戦いの末自爆。おかげで深海棲艦の片づけの手間が省けたし、良い余興になったわ」

『……………』

「何？ 天龍も沈めておけば良かった？」

『いや、深海棲艦の大群と相討ちで綺麗に全滅、というよりは1隻でも艦娘に生き残りが居た方がまだ自然と言える。問題ない、後はこちらで処理しよう』

「あつそ。……とところでこれ、回収したのはいいけれど本当に大丈夫なわけ？」

叢雲は輸送用のドラム缶に入ったそれを覗き込み、訝し気な表情を浮かべる。

そこに入っていたのは四肢が折りたたまれた龍田の体と天龍に斬り落とされた首。

「苦労してサルベージしたのはいいけれど、これ完全に死んでるわよ？ 首と胴がお別れしてるし」

『構わない。パーツさえ揃っているならどんな状態でもやりようはあ

る。ああ、できるなら体は海水に浸すか沈めるかしておいてくれ」

「はいはい、分かったわよ。それじゃ、今から帰投するわ」

『ご苦労だった』

そこで一方的に通信が切られ、叢雲は通信機を頭から取り外し、舞鶴鎮守府の方角を見る。

「天龍。もう、何もかも手遅れよ。あなたはあまりにも遅すぎた。遅すぎたから、龍田も暁も、全てを失うのよ」

☆

「——大本営から勲章が届いているぞ、あと、O・C・E・A・Nランキングの昇格通知書もだ。ランキング9位、晴れてグランドランカーだ。おめでとう、天龍」

「……………」

「二つ名は暴れ天龍、百隻斬り、色々案が拳がっているが、お前は何かいい？ 俺としてはやっぱり百隻斬り——」

「いいよ、おっさん。そんな無理して明るくしてくれなくてもよ。見てるこつちがキツくなる」

我ながら本当に酷いことを言ったと思う。だが、言わずにはいられなかった。提督の目元には深いクマが刻まれ、見るからにやつれている。

あの地獄から数日、舞鶴鎮守府に所属している艦娘があの一晩で俺1人を残し、全員沈んだ。その凄惨過ぎる現実、ただでさえ彼の心に大きな傷を残している。

そんな状態で鎮守府立て直しの指揮を執るため提督は日夜働きづめだ。更に、今回の被害状況について、大本営からは相当厳しく詰問されているらしい。

明るくふるまえという方が無理な話だ。

「そう、か。そんなに顔に出ていたか、はは、すまん……」

「別に謝るようなことじゃねえだろ、当然だ」

「毎日な、夢に見るんだ。あいつらが、海の底から、助けてって俺を呼んでいる」

「おっさん……」

声色は悲壮に包まれていた。しかし、それでも提督は氣丈に笑って見せた。

「……天龍、話そうと思っていたことがあるんだ。龍田の件と鏑木美鈴のことだ」

「何!? それは——」

「——失礼いたします! 舞鶴鎮守府提督殿は在室でしょうか!」

タイミング悪く、提督の話を遮るように3度のノックと元気のよい声が室内に響き渡った。

話を中断し、提督は一度咳払いをしてからドアの向こうに声をかけた。

「ああ、入ってくれ」

「失礼します! 修復工事の進捗の報告に参りました! お時間よろしいでしょうか!」

「……そうか、わかった」

入ってきたのがつしりとした体つきをした憲兵だった。その手には分厚い書類の束が抱えられている。

「天龍、すまないが席を外してもらえるか? 丁度良いから外へ散歩にでも出るといい」

「ん、そうだな。俺がいても邪魔だろうしな。そうさせてもらうぜ」

「天龍」

「ん、なんだよ——わぷ?!」

提督に声をかけられ、彼の方に振り向いた瞬間、俺の体が強く抱きしめられた。

突然のことに頭が真っ白になる。

顔に血が上っている俺の耳元で、提督は小さく呟いた。

「天龍、お前を、そしてお前達を、俺は心から愛している」

「は、はあ!? おっさん、ちよ、そろそろ離してくれよ! 流石に恥ずかしいっての!」

提督の抱擁から解放されても依然、動悸も顔の火照りも治まるとは思えなかった。

「はっはっは、すまないな。ほら、もう行っていいぞ」

「つたく、調子狂うぜ！　ま、また後でな！」

「……ああ」

赤くなつた顔を隠すように俺は背を向け、足早に部屋を出て行った。

☆

「お邪魔をしてしまったようで大変失礼致しました！」

「もういい」

「はっ、それでは僭越ながら自分から報告を——」

「もう、その演技はいい、とそう言っている」

「……気付いていたのか」

その言葉で静まり返る執務室。同時にそれまでは人懐っこい笑みを浮かべていた憲兵の顔から表情というものが消えた。

憲兵は頬をつまんで引つ張る。皮膚であつた部分が破け、下から浅黒い肌が新たに現れた。

「変装、か。用意周到なことだな」

「見ての通り、印象に残りやすい肌色をしているのでね」

憲兵は顔の部分だけ変装を解くと、懐から道化師の仮面を取り出し、それを装着しながら続けた。

「残念だが助けは来ない。そういう準備を済ませてきている」

「来ると思っていた。鏑木美鈴の裏の顔を知れば、必ず」

「ほう、どこまで知つたと言うのだ？」

「残念ながら俺はあまり優秀な方でなくてな。お前たちが何やら艦娘を使って何かしているということしかわからなかつたよ。龍田の件を聞いて、初めは深海化の研究かと思つたが、おそらくは違うな。いや、違うというよりも、さらにその先か——」

「安心するといい。十分、殺すに足る到達度と言える」

仮面の男は腰からナイフを引き抜き、その切っ先を提督へ向ける。「何か言い残すことはあるか？　あつたとしてもそれが私以外に届くことはないが」

「何も無い。俺にできることは全てやった。残すものも、残るものも何もない」

逃れられぬ死を目の前にしながら提督は満足げに、勝ち誇ったかのように笑った。

「お前が舞鶴の生き残りである俺と天龍を殺しに来るのはわかっていた。だから、ここ数日で準備を済ませた」

「無駄だ、どう足掻こうと今日、舞鶴は一度消える」

「だが、天龍だけは殺させない。もう一度言う、そういう準備を済ませた」

「……艦娘1人守って満足か？」

「提督の仕事は艦娘を守ることだ。最後によやくそれらしい仕事ができるまで満足だよ」

提督が満面の笑みを浮かべた直後、ナイフが彼の胸に深々と突き刺さった。

☆

「おい、どういうことだよ!? なんなんだよお前は!?!」

「我々はあなたの提督の遺志を継ぐ者。彼の願いに従い、あなたを保護しに参りました」

「どうか、このまま我々と同行願います」

「もう、鎮守府に戻ることは叶いません」

外へ出た瞬間、フードを目深に被った3人組に取り囲まれた。

状況を理解できず、俺は混乱を隠せない。

「どういう意味だ、保護って! 提督は!?!」

「彼は、おそらくはもう……」

「あなたを守るためにあの人は全てを賭したのです」

「時間はありません。彼の死を無駄にしたくないのなら我々と共に来てください」

「死って……わかんねえよ、なんで、急に、そんな……!?!」

「……彼から、何かを受け取ってはいませんか？」

「は? そんなもんあるわけ——」

不意に、先刻の提督からの抱擁を思い出した。上着のポケットに手を入れると、無機質な感触が伝わる。

ポケットの中には、見覚えのないUSBが入っていた。

「これは……」

「やはり、彼はあなたに全てを託したのですね」

「これは我々が責任をもってお預かりします」

「あ、おい、待て！」

「安心なさい。来るべき時がくれば御返しします。これから行く所では私物の持ち込みは許されない故、一時預かるだけです」

そう言つて、USBは彼らに半ば強引に取り上げられた。

訳が分からない。本当に提督が死んでしまったのか、今すぐに走つて鎮守府に戻つて確かめたい。

だが、それは許されないことは、それに意味がないことは、心の奥底で理解していた。

——天龍、お前を、そしてお前達を、俺は心から愛している

「あんたも、俺を置いていくのか……」

「さあ、本当に時間がない。行きましょう」

「御理解なさい。既にあなたの命はあなただけのものではないのです」

——天龍、生きることが諦めないで。力の限り、生き続けなさい

心が軋む。

わかっている。大丈夫だ。俺は、まだ生きられる。

死ねない理由があるから。

「これから、どこに行くんだ？」

「楠木美鈴の手の届かぬ場所。軍の力も及ばぬこの世の煉獄、『網走監獄』」

「我々はそこで刑務官をしております」

「あなたには罪人として入獄して頂くことになります。決して幸福とは言えぬ辛苦の日々が始まるでしょう。だが、代わりにあなたの生存は保障される。来たるべき時まで息を殺し、待つのです」

心が軋む。

全てを失い、冷たい孤独に苛まれながら、それでも俺はまだ死ねない。生きることが諦めるわけにはいかない。

俺は、約束に生かされている。

☆

「——天龍は、龍田を諦めてないんですね」

深夜。天龍の話聞き終えた後、それぞれ一旦休息をとることに決まった。

詳しい話し合いは明日の朝に行うことにした方が良いと結論が出たのだ。

一旦は自室に戻った天龍だったが、寝付けず薄暗い食堂に帰って水を飲んでいた。

そこに、声をかけてきたのは大和だった。

「なんだ、お前も寝られねえのか？」

「はい、天龍の過去を想像すると、色々考えてしまつて」

「はっはっは！ 別にお前が気に病むようなことじゃねえだろ！ そんな感情移入しなくなつていいんだぜ？ 俺には龍田を諦められねえ理由がある、そして鑄木美鈴に借りがある、それだけわかつてもらえりゃいい」

「そんな簡単に割り切れる話でもないでしょう……」

うつむく大和に、天龍は優しい笑みを浮かべ、その頭をわしゃわしゃとかき回す。

「ちよ、何するんですか!？」

「本当にお前は良いやつだな。お前だけじゃねえ、七丈島鎮守府の奴らはどいつもこいつもお人好しが過ぎて、心配になるぜ」

「天龍も人のことは言えないですけどね」

互いに小さく笑い合う。そうしていると今の状況も幾分か和らいで見える気がした。

龍田は依然行方不明、蜻蛉隊とは一触即発状態。現状は決して芳しくない。

それでも、自分が独りではないというだけでこんなにも楽になるのだと、天龍は改めて龍田の言葉の意味を噛み締めた。

「独りで戦っても仕方ないもんな」

「ん？」

「なんでもねえよ。さて、そろそろ部屋戻るか。寝付けねえにしても

少しは睡眠とらねえと持たねえからな」

「天龍」

「なんだ？」

椅子から立ち上がる天龍を引き留めるように大和が声をかけた。

「あなたは、本当に暁さんとの『約束』がなければ生きられないんですか？」

「……ああ、そうだよ。俺はあいつの命令が、約束があるから、今も諦めず生き続けられている」

「お話を聞いているだけでも天龍の中で暁さんがどれだけ大きい存在なのかは伝わってきました。でも、それでも私は、それが正しいとは思えません」

天龍のコップを握る力が強まった。

それまで穏やかだった表情も険しく変わった。

「どういう意味だ？」

「暁さんとの約束によって生かされている今の天龍が、本当に暁さんの望んだものなんですか？」

「……………」

「少なくとも、私は、天龍に自分の意志で生きて欲しい。死ねないからではなく、生きたいから生きて欲しい」

「やめろよ、もうお前と喧嘩はしたくねえ」

天龍の言葉に怒気がこもり始める。

それでも、大和の言葉は止まることはなかった。

「天龍、死ぬつもりじゃないですよね？」

「なっ……………」

大和の言葉に天龍は一步後ずさる。じつとりと嫌な汗が流れていた。

「何言ってるんだ！ そんな訳ねえだろうが！」

「す、すみません。それならいいんですが……………」

「…………悪い、大声出しちまった。お互いになんやかんや疲れてんだろ。もう眠ろうぜ？」

「はい、そうですね」

思わず声を荒げてしまい、後味の悪い空気のまま大和と天龍は自室に戻った。

しかし、天龍は部屋に戻った後も大和の言葉が頭の中に響いていた。

「死ぬつもりはねえ、けど。死んでも良いって思ってるのは、本当かもな……」

☆

明朝。研究所の直上に一機のヘリコプターが到達した。

「用意はいいか、愚息よ。これより研究所に乗り込むぞ。1時間以内に制圧する。良いな？」

「ええ」

パラシュート降下の準備を済ませ、元帥と提督は弾丸やナイフの準備をしながら制圧作戦の確認をしていた。

何せたった2人だけの作戦だ。段取りの確認を怠ればそれがそのまま命取りになる。

「拳銃2丁とナイフ2本、予備のカートリッジが8つ。それで足りるのか？」

「皆殺しにするわけではないんですから、これでいいんですよ」

「ふん、精々儂の足手まといにはならんことじやな。万が一にも助けてはやらんぞ」

「そちらこそ、年甲斐もなく暴れまわらないよう自制してくださいね」
「ククク、言うようになったではないか」

提督のセリフにさも楽し気に笑う元帥。そこら辺の士官ならばこれだけの暴言を元帥にぶつけるなど精神が参ってしまうだろう。

「さて、降下するぞ」

「ええ、さっさと終わらせましょう。そして一刻も早く七丈島に戻ります」

☆

ほぼ同時刻。七丈島。

「ごめんね、天龍ちゃん。もう少し時間を稼げると思ったのだけれどね」

朝日が昇り始める水平線を見つめながら龍田は憂い気に呟いた。「でも、天龍ちゃんも悪いのよ？ あなたが、早く私を殺してくれないから……」

やがて水平線に黒い線が見え始めた。

それは徐々に太くなり、こちらへ向かって近づいている。

深海棲艦の大群、であった。

「時間切れよ」

龍田は消え入りそうな声でそう呟くと、その足を海面につけた。

第九十四話 「大規模作戦」 『七丈島迎撃・七丈小島突入 二面作戦』、開始!」

その日は私、矢矧が七丈島に来てから最も慌ただしく、鬼気迫る朝だった。

「——矢矧! 偵察機戻ったわよ! 深海棲艦、数およそ100! 全方位から向かってくる! 直近で距離30 km! 船速はおよそ20ノットを維持し、足並みを揃えてきてる!」

瑞鳳の悲鳴にも似た報告を聞き、私は唇を噛んだ。

深海棲艦の大群に気が付いたのはおよそ20分程前。七丈島鎮守府のレーダーシステムが警報を鳴らしたのだ。初めてのことで対応がもたつき、依然対応に追われている状態。

情けない。自分のふがいなさを叱責した。

報告の通りならば敵は1時間を待たずこの七丈島にたどり着いてしまう。拙い。もたもたしている暇はない。最低でも島から半径10 km圏内で迎撃しなければ島にまで被害が及ぶ危険性が高い。つまるところ実質あと30分も猶予はない。

「どうするの、矢矧!」

まずは七丈島艦隊に艦装装備命令を出し、作戦確認。

戦力差があまりに歴然すぎる上に包囲されている以上、作戦は全方位への遊撃を繰り返し、応援を待つしかない。いや、問題は応援を待つまでの時間をどう持ちこたえるかだ。

私たち6隻では四方八方すらまかなえない。それに、提督がいない現状を考えれば誰も全体の指揮をとれるものがない。そんな状態ではまともに作戦も機能しないのではないか。

ああ、そうだ。応援をどこに頼めばいいのだ。近隣の鎮守府の情報と連絡網の書類は執務室だ。早く取りにいかなければ。

いや、そもそも艦種もばらばらであるからして、配置を間違えればものの数分で押し切られる。

何よりもそのせいで誰かが沈むことになれば。私は——

「矢矧！ 艦装の用意はできたんですけれど！ もう装着した方がいいですかね!？」

しまった。そもそも大和は戦えない。実質戦力は5隻だ。

何をやっているのだ。とんだ計算違いだ。早く情報を修正し、作戦を練り直さなければ、いやそんな余裕が残されているのか。

「矢矧、急げ！ もう時間の猶予がない!？」

「矢矧！ まずいよお!？」

わかっている。私が。今は私が、提督なのだから。

私になんとかしなければ。

何をやっている。かつて軍神とも呼ばれた私が何というザマだ。こんな窮地など容易く乗り越えなければならぬではないか。

早く、作戦を、早く、早く、早く――

「……………ッ!？」

「矢矧……………おい、お前、顔真つ青じゃねえか?？」

早く、早く、早く。自分だけじゃない。艦隊の皆だけでもない。この島の命全てを背負っているのだ。

いや、ならば島民の避難勧告を先にするべきか。だが、これ以上の人員は。七丈島警察と提携して。いや、まずは作戦の練り直しが先だろう。

わかっているのに、それなのに、思考がどんどん真つ白になって――

「矢矧さん、しっかりなさい」

「ぐッ!？」

不意に背後から金づちで殴られたかのような衝撃が響き、私の頭がテーブルに叩きつけられた。

いつの間にか背後に神通が立って、にっこりとほほ笑んでいた。

「非常事態でテンパっちゃうのはわかりますが。普段通りでいいんですよ? どうせどんな時だって人は普段以上の能力は出せないんですから」

「あ……………」

神通の言葉と同時に、私の脳裏に数週間前、七丈島を発つ前にか

られた提督の言葉が思い浮かんだ。

『矢矧、それではしばらくの間、留守を任せます。提督代理としてしっかり頼みますね』

『……はい、必ず、全うしてみせます』

この時、正直、私は不安で仕方がなかった。秘書艦の仕事は結局の所、提督のサポートだ。そして、サポートとは責任を負わないという立ち位置だ。

あくまで最終的な責任は全て提督が負う。その意味があまりに私には重くて、私は暗い顔を見せてしまった。

すると、提督は笑って私の頭に手刀を落としたのだ。

提督は軽くやったつもりだったのかもしれないが、今神通に食らった拳骨と同じくらい痛かった。

『固い！ 固いですよ、矢矧！ 大丈夫です、私にだってできるような仕事ですから、そんなに気負う必要ないんですって！』

『提督は、十分に、凄い人で、尊敬できる方よ……そんなあなたみたいにできる自信なんて、私にはないわ……』

『おお、矢矧にそんなに高評価を受けていたとは、普段怒られてばかりなので大変耳心地が良いですねえ』

『もう、ふざけないで！ 私我真剣なのよ!?!』

半ば八つ当たりのように感情をぶつける私に、それでも提督は優しく笑って今度は頭に手を置いてくれた。

『では、先輩としてアドバイスを。矢矧、私のようにする必要なんてないんです。矢矧ができることをやればいいんですよ』

『私ができることを?』

『方が一、どうすればいいかわからなくなったら。まず、何でもいいからできることをやりなさい。私達は自分にできることしかできないのだから』

その時は意味がよくわからなかった。

『まあ、もしもの時は私が必ず助けますから、絶対に諦めないように！』

正直、矢矧にそんな心配はしてないですけどね!』

しかし、何故か、提督の言葉を聞いていると不安が和らいでいくよ

うな気がした。私は、顔をあげ、提督の目を見据え、頷いた。

『わかりました。私なりに、やってみます！ 提督、どうかお気をつけて！』

『はい、良い顔つきになりましたね、矢矧提督！ では、行ってきます！』

提督は敬礼し、笑ってそう言った。

そうだった、私は私ができることしかできない。

私は私のやり方しかできない。ならば、時間に急かされて多くのことを同時に処理するというのは、全くもって間違いだ。

私のやり方は、いつだって1つの問題を1つずつ確実に処理していくのだ。そして、それが一番早い。

「……大和、七丈島警察署に連絡して緊急防御壁を作動するよう伝えて」

「は、はい、了解です！」

今からでは島への流れ弾の可能性は否定できない。ならば、まずは島の防御を固める。

「瑞鳳、もう一度偵察機を飛ばしておおよそでいいから敵艦種の偏り具合をマッピングして欲しいのだけれど」

「そう言うと思ってもう作っておいたわ」

「じゃあ、私の補佐に入ってもらおうわ。迎撃の配置を練ってもらおうわね」

「了解よ」

迎撃地点か、作戦の質か、私が優先すべきは作戦の質。島の防御は固めているのだから、迎撃地点をギリギリまで引き下げてでも作戦立案に時間をかけるべきだ。

「天龍、磯風、プリンツは全員の艤装の確認と弾薬、燃料の補充をして出撃準備を整えて、それから備蓄の報告をお願い」

「わかった」

「了解だよお！」

「っし、やるかあ！」

彼女達3人が七丈島のアタッカーになる。すぐにでも出撃できる

よう準備に時間をかけてもらい、その合間にできる情報を収集してもらうのが適切だ。

「そして、横須賀艦隊の皆さん。悪いけれど緊急事態なの。手伝ってもらおうわよ?」

「ええ、あなたならば喜んでこの神通、指揮下に入りましょう」

「私はなるべく敵が密集している地点の迎撃に回すといい。遠慮はするな、この武蔵、そういうのが大好きだ!」

「せいぜい頑張って使いこなしてくださいねえ。難しいとは思いますがすけれどお」

神通、武蔵、綾波がそれぞれ心強い返事をくれる。

「神通は応援要請を頼めるかしら? 私はこの近隣の鎮守府の戦力状況が全く分かっていなくて」

「ええ、わかりました。早速取り掛かりましょう」

「武蔵と綾波は天龍達同様、出撃準備をして待機していて頂戴。かなりキツイ場所を任せることになると思うけれど問題ないと判断したわ」

「素晴らしい、理想の指揮官だ」

「綾波は体はもう大丈夫?」

私が綾波にそう尋ねると、一瞬驚いたような表情を見せてからすぐに顔をしかめた。

「あなた程度に心配されるようなやわな鍛え方はしてませんので」

「すみません、矢矧さん。綾波さん、照れてるんですよ」

「照れてませんよ? まだ寝ぼけてるんですか、神通さん?」

「いえ、作戦はあなた達の万全を前提にたてるから、確認しておきたかっただけよ。問題ないならそれで結構」

私は手を一度叩き、号令をかけた。

「それでは15分後に再度この部屋に集合することとするわ! 各自行動開始ッ!」

提督。あなたが留守の間、必ず七丈島は守ってみせます。

☆

「——原田、陸軍参謀総長殿からの返答はあったでありますか?」

「ええ、その……やはり、作戦に変更は認められず、DW―1を捕縛せよ、と……」

「なんと業突く張りな。『招来』の権能のコントロールがまるで利いていない。かつてない程の深海棲艦がこの島を襲い、多くの人間が死ぬ。それを防ぐには最早DW―1を破壊するしか方法はないというのに」

あきつ丸は舌打ちをしながら目を細め、やがて大きなため息を一つ吐いた。

「原田、全隊員に伝達。これより蜻蛉隊は深海棲艦を遊撃しつつDW―1を索敵、これを撃滅するものとする、であります」

「し、しかし、隊長！ それは命令違反では……」

「関係ないであります。悪を滅し、正義を為す。これだけは曲げられない」

あきつ丸の目はまっすぐと水平線をみすえていた。

それを見て、原田もそれ以上の抗議は意味をなさぬと納得し、敬礼をして去っていきこうとする。

「いいのでありますか？ 参謀総長から私の監視を命じられているのでしよう、原田？」

「確かに、あなたの行動を監視し、場合によっては止めるよう命じられています。しかし、自分は今、閣下の部下である以前に、あなたの部下です」

「そうでありますか」

原田は再度敬礼をし、去っていった。

あきつ丸はニタリと笑い、そしてグローブをはめる。

「さて、正義の時間であります」

☆

「――準備はいい？ 作戦を説明するわ」

全員が再び集まった時、食堂のテーブルには七丈島近海の海図とその上に三色の駒が散らばって配置されていた。

「まず現状の確認から。今、深海棲艦が七丈島に向けて集まってきている。原因は恐らくは龍田の『招来』の権能とみて間違いないわ」

「……………ああ、そうだろうよ。こいつはあの時の舞鶴の状況とそっくりだ」

天龍が眉間に皺を寄せながら同意を示す。

「この七丈島鎮守府を除き、島の周辺には防御壁が作動しているわ。それでも流れ弾の盾くらいにしかならないでしょうけれど、一応、戦闘準備は整っている。問題は、私達がどう動くか」

そこまで言うと、海図の上で最も外周に七丈島を取り囲むように配置された赤い駒を指さす。

「結論から言うわよ。私達はこの大量の深海棲艦を迎撃しつつ、龍田を見つける」

「無茶言いますねえ!？」

「勿論、アテはあるわ」

「偵察機を飛ばして索敵、でしょうか?」

神通の返答に矢矧は首を振った。

「最初はそれを試したけれど、龍田らしき艦は見当たらなかった。だから、別のアプローチから索敵したわ」

そう言って、今度は矢矧は計算式がびっしりと書き詰められた紙を全員に見せた。

数式やグラフが何行にも渡って書かれているが、一番下の部分にとある座標が書かれ、強調するように二重下線が引かれていた。

『招来』の権能によって深海棲艦が呼び寄せられているのだとしたら、こいつらの向かう中心地に龍田がいるはずだと思わない?」

「だから、七丈島に集まってきてるんじゃないのか?」

「そうだと思ってた。でも、深海棲艦の航行速度と、進行方向からおおよそ深海棲艦の軍勢を収束する円として仮定し、その収束点を計算すると、何度やってもその中心は七丈島から僅かにずれる」

矢矧は手元の赤いピンを海図の七丈島から少し左に離れた地点に指さした。

「この地点には何があるかしら?」

「七丈小島かっ!」

七丈島の西に浮かぶ小島。矢矧の算出した座標はそれとぴったり

重なった。

「詳しい作戦を説明するわ。本作戦は横須賀・七丈島連合艦隊による深海棲艦の迎撃作戦と、少数精鋭による七丈小島への突入作戦、2つの作戦によって構成されるわ」

矢矧は青い駒2つをピンの側へ、他6つをそれぞれ2つずつ七丈島の北、東、南に散らした。

「迎撃部隊はペアになって深海棲艦迎撃にあたってもらうわ。北部を神通、瑞鳳。東部を武蔵、プリンツ。南部を綾波、磯風。それぞれ応援が到着するまで踏ん張って！」

「了解しました」

「ははは！ 血が沸き立つぞ！」

「別に1人で十分なんですけどね」

「頑張るよ！」

「仕方ないわね」

「力を尽くす」

それぞれの力強い返答に矢矧も頷き返す。

「そして、七丈小島突入部隊には、大和と天龍。2人をお願いするわ。

大和は盾役、天龍は攻撃役、連携を意識して一点突破を試みて――

「龍田と、決着つけて戻ってきなさい！」

「――っ！ ああッ！」

「はいッ！」

昨夜、天龍の話を聞いてから、それぞれの面々が何を思うのか。結局話し合う機会はなかった。

矢矧は、決着と言った。それは何も生き死に、勝ち負けの決着に限らない。

それは過去の清算。

これは未来へ進むために天龍が乗り越えるべき過去との決着だ。

「ただ、問題はやっぱり戦力の不足と、何よりも蜻蛉隊の動き、ね」

海図の前面に散らばっている緑色の駒を指さしながら矢矧は顔をしかめる。

現状、やはり西への迎撃部隊がないこと。これは、西の七丈小島

に集結している深海棲艦は天龍の攻撃力と大和の防御力に任せた一点突破に任せている。

これは大和と天龍の身の危険もさることながら、西の深海棲艦が万が一七丈島へさらに進行してくればそれを防ぐ手立てはない。

また、今回、情報不足により予測不能な蜻蛉隊の動きには対応できていない。作戦上、どのような支障がでるのか未知数である。

蜻蛉隊の方に関しては矢矧もどうあっても博打になると納得している。それほどにあきつ丸という艦娘はまだ底が知れない。

ただ、西の迎撃部隊についてはせめて後2隻増援がいれば対応できる。それがあまりに歯がゆい。しかし、今の戦力をこれ以上分散させることもできない。

矢矧が唇を噛んでいたその時、食堂の扉が勢いよく開いた。

「——ならば、その大規模作戦。僕達も一口噛ませてもらうていいかな?」

「あなた達は?」

軍服を着た青年と、その後ろに控える2人の艦娘。

「ボン・ジョルノ Buon giorno! イタリア海軍少将エドモンド・ロツソだ、以後お見知りおきを」

「イタリア海軍重巡洋艦艦娘Zaraよ」

「イタリア海軍重巡洋艦艦娘Polaです」

「どうだろうか? お力になれないかな?」

キザったらしくウインクなどして見せながらエドは矢矧を見る。

「……わからないわね。何故イタリア海軍の提督がこんな場所にいるのか、そして、私達に力を貸してくれるのか」

「勿論、説明はさせてもらうよ。とにかくまずは出撃した方がいいのではないかと思うのだがね?」

「……わかりました、エドモンド・ロツソ少将。ありがたく、そのお力、お借りします」

「気軽にエドでいいよ! 敬語は堅苦しくて好きじゃないんだ!」

「ザラ、ポーラの2人は七丈島西部の深海棲艦の迎撃をお願いするわ!」
「全力を尽くすわ!」

「了解でくす！」

これで、やれることは全てやった。

矢矧は作戦開始の号令をかける。

「大規模作戦『七丈島迎撃・七丈小島突入二面作戦』、開始！」

第九十五話 「雑兵があまり目立つものではありません
ん」

「さて、皆行つてしまつたね。この鎮守府は僕と君の2人きりだ」

「気持ち悪い発言はやめてもらえるかしら、エドモンド・ロツソ提督？

私はあなた達を完全に信用しているわけじゃないのよ」

「エドでいいよ。僕も矢矧と呼ばせてもらうからね」

全員が出撃してから、エドは矢矧に笑いかけるが彼女はそれを冷たくあしらひ、距離を取る。

「さて、交戦まで5分くらい時間があるわ。その間に聞かせてもらうわよ、あなた達の目的を」

「目的ね、いいだろう。僕は女性には嘘はつかない主義なんだ」

ウインクしながら矢矧の方へ歩み寄るエド。

矢矧は警戒を強めながら彼の次の言葉を待った。

「DW—1をね、どうしても手に入れたいんだ、僕達は」

「……随分と耳が早いのね」

「油断しないことだよ。日本は世界最大の艦娘技術大国。内部にスパイの1人や2人潜んでいて当然だ」

「龍田をどうするつもり？」

「安心してくれ。僕達はDW—1の技術さえ盗めればいい。酷い目にはあわせないさ。色々体は調べさせてもらうし、実験にも協力してもらうが、極めて丁重に扱うことを誓おう」

エドは人懐っこい笑みを向けてそう言った。矢矧の目から見て彼が嘘を言っているようには見えない。

だが、矢矧は首を振った。

「悪いけれど無理ね」

エドは非常に驚いた表情を見せた。

「母国の肩を持つのかい？ 日本と諸外国の技術競争なんて君はくだらないと切り捨てると思っていたのだけれど」

「ええ、くだらないわ。だからこそ、そんなくだらない理由で龍田は渡

せない」

「そうきたか」

エドは顔に手を当てて愉快そうに笑った。

「君達がD W ー1のことを本当に大切に思うのなら、彼女の亡命先として僕達を利用するのは悪くない案だと思っただけどなあ」

「そうね、確かに魅力的な提案ではあるわ。でも、必要ないわ」「どうしてだい?」

矢矧はそこで初めて誇らしげに笑った。

「あなたの力を借りなくても、私達の提督がなんとかしてくれるからよ」

「……なるほど。幸せ者だな、ここの提督は」

エドも矢矧の目を見て何かを察すると両手を上げて自嘲気味に笑う。

「ま、いいさ。全部が終わったらもう一度交渉させてもらうよ」

「諦めが悪いわね」

「母さんが言っていたんだ『女の子を振り向かせるにはアタックをやめないことだ』ってね」

その後、七丈小島の方を見てエドは言った。

「まずは彼女達の無事と勝利を願おうじゃないか」

☆

「さて、こうなるとは思っていましたが、流石に凄い量ですねえ」

「あんた、楽しそうね」

神通を見て嘆息する瑞鳳。

それも無理はなく、今、彼女達の目の前には数十の深海棲艦とそれを迎撃する黒い外套の集団、蜻蛉隊が埋め尽くしていた。

「数十分前に偵察した時より明らかに敵増えてるわね……」

「さて、どこから手をつけましょうか」

神通と瑞鳳がどう介入するか考えあぐねていると、突然高らかなで尊大な笑い声が周囲に響き渡った。

「ふはははは！ 今頃になってようやく来たか、七丈島艦隊！」

「あれは……蜻蛉隊の方でしょうか」

「原田とかいったわね」

陸軍式艤装は一度見ているが、原田のものは他のものとは明らかに重装備になっているのが見て取れた。

今までの蜻蛉隊の中での扱いから考えても彼がこの分隊の頭目なのだろう。

「ふん、たった2人か、つまらんな。おい、今すぐに逃げ帰れば見逃してやる。疾くこの場から消えるがいい」

「何あいつ、感じ悪いわね」

「相手にするだけ面倒ですよ。私達は私達の……——っ！」

瑞鳳と神通はほぼ同時にそれに気がつき、海面を蹴った。

即座に彼女達の立っていた場所が爆発と共に水柱に包まれた。

「随分なご挨拶ね」

「チッ、仕留めそこなったか」

魚雷。

おそらくは瑞鳳と神通に声をかける事前に撃っていた。大仰で挑発的な台詞はそのカモフラージュだろう。

「あきつ丸隊長からはお前達を見つけ次第沈めて構わんと命を受けている。お前達は任務の障害になるのでな」

「うわあ、じゃあマジで三つ巴の戦いつてわけ？ 想像した限りでは最悪のパターンだわ」

「いえ、むしろ分かりやすくなりました」

面倒そうに顔を歪める瑞鳳とは対照的に、神通は笑った。

そして、腰の刀に手をかけながらゆっくりと引き抜いていく。やがて、太陽の光を反射し、銀色の淡い光を放つ美しい長刀が姿を現し、その切っ先が原田に向けられた。

いや、実際には原田だけではない。

その場の『敵』に対し、神通は刀を向けたのだろう。

その証拠に、それまで混沌とした戦場は瞬間、一変し、あらゆる方向に向けられていた殺意は総じて神通一人に集合していた。

「この場の全員を倒せば良いというだけのこと」

「全く頼もしい限りだわ。援護は任せなさい」

瑞鳳は呆れてため息しか出なかった。しかし、横須賀艦隊にとってそれが決して強がりでも大げさでもないことは瑞鳳自身よくわかっていたし、事実、現状の圧倒的戦力差を目の前にしても、微塵も負ける気がしなかった。

「全員を、倒す？ 貴様如きが？ ふざけたことを……！」

神通の言葉に、青筋を浮かべ、震えているのは原田だ。

彼は黒鉄の手甲と、腰の艤装に取り付けられた砲塔を彼女に向けると、先んじて飛びかかる。

陸軍式海上戦闘用機動兵装丙型『ワダツミ』。その特性は万能性。艦種によりその役割を分ける艦娘の艤装とは真逆の構想。

このワダツミは潜水艦と空母を除いた全艦種の特性を併せ持つ。

詰まる所、この装備が与えるものは駆逐艦の機動力と戦艦の火力、その両方である。

「速いッー！」

あの重装備をして駆逐艦並の速度。しかもその軌道は決して単調ではなく、ジグザグと容易く迎撃を受けない航法をとっている。

頭に血が上ってなおも彼の戦闘経験値の高さが瑞鳳の目からも伺い知れた。

「貴様ら、艦娘が、艦娘如きが！ 英雄面をするなど、恥を知——！」

急旋回から神通の背後を取り、砲火が吹かんとする寸前、神通は既に『溜め』を作っていた。

腰の捻じり。それは即ち、刀を振る際に回転力を増すための『溜め』。それに気が付いた時には既に遅く、原田が砲の引き金を引く0.

1秒前——

神通を中心に、局所的な嵐が巻き起こった。

「が……あッ……!?!」

「ごちゃごちゃ五月蠅いですよ」

一体、神通の刀がどのような軌道を描いたのか、真上に吹き飛ばす原田のあげる血しぶきから彼が一体どれだけの数の斬撃を受けたのか、全く想像がつかない。

瑞鳳などは神通の溜めに気が付いていたからまだ良かった。

少し遠目から見ている他の蜻蛉隊の隊員達には、原田が彼女に近づいた瞬間、かまいたちにも遭ったようにしか見えなかっただろう。

「雑兵があまり目立つものではありません」

『修羅』がそう言ってニコリと笑った。

☆

「はは、あはは、くははははははッ！」

地獄の底から響いてくるような笑い声。その音源は目の前の蜻蛉隊、深海棲艦全ての攻撃を一手に引き受けながら、また、砲を撃ち返す武蔵である。

「なんだ、何故倒れない!？」

「これが『超越者』武蔵……!」

「くそ、隣の重巡洋艦には何故当たらん!？」

「まるで弾が避けていくようだぞ……!？」

一見して、武蔵の笑顔は猛々しさが相まってむしろ恐ろしい。悪魔の笑顔とはこんな感じなのだろうかとプリンツは武蔵の横で適度に砲撃を繰り返しながら思っていた。

交戦開始から早くも10分。武蔵は大体の砲撃に当たり、プリンツにはほとんどの砲撃が当たっていなかった。

奇妙なことに、武蔵の嗜虐願望とプリンツの幸運体質は相性が良かったのだ。

「ふ、この私にここまで当ててくれるとは……敵も中々やる……!」

「いや、そもそも避けてないよね? 時には当たりにいってるよね?」

「何を言っているんだ、プリンツ! 何を言っているんだ!」

「言い訳くらいしてよ」

結局、武蔵は終始何を言ってるんだ、しか連呼できなかった。上手い言い訳が思いつかなかったのだろう。もしかしたら言い訳するつもりがなかったのかもしれない。

「どうした、プリンツ? 何か機嫌が悪くないか?」

「ああ、お姉さまと離れてる時の私こんなもんだから」

「なあ、聞きたいのだが、お姉さまというのは大和のことだよな？」
「え、当然でしょ？」

「そんなゾクゾクする嘲笑をされてもな。私には大変な驚きだったのだが」

武蔵に嘲笑をこぼすプリンツに対し、武蔵も興奮に背筋を震わせていた。

「……血は、繋がっていない、よな？」

「姉妹に血の繋がりなんて大して重要じゃないよね？」

「それが全てだったと記憶しているのだが」

「関係ないよ、お姉さまはお姉さまだもん。私が認めて、お姉さまも認めている。そこにそれ以上のものが必要なのかな？　ねえ？　どうなの？　ねえねえねえ？」

「わかった、私が悪かった。好きなように罵れ、叱れ、殴ってくれてもいい」

「平手、グーパン、どっちがいい？」

「両方頼む」

「こいつら敵を目の前に何やってんの!？」

思わず蜻蛉隊の方から怒声が飛んだ。

「くっそ！　あんな変態共が何で倒せない！」

「誰が変態だって!？」

「何であんな嬉しそうに!？」

「誰が変態だ!？」

「お前は自覚ないのかよ!？」

「ああああ！　疲れる！　これ戦闘以上に疲れるものがあるわ!？」

「せめて深海棲艦の方が片付けば火力を集中してこんな減らず口を叩かせないのに!？」

「何?？」

その言葉が合図だった。

それまで半ば浮き砲台を演じていた武蔵が、動いた。

動き、砲を撃つ。ただそれだけなのだが、それをやるのが武蔵ならば、大和型ならば話は別。

数多の轟音、水柱が1分程度続き、その間は蜻蛉隊もプリンツも、誰も動くことはできなかった。

「……凄い」

プリンツはその武蔵の姿を見て思わずそう呟いていた。

歴史をたどれば、絶対的な力と平伏はイコールなどだとわかる。あまりに強大すぎる力というのは、反撃すら許さないのだ。

そこに立つのは、力をふるう一人のみであり、その他全ては平伏を絶対とさせられる。

武蔵の今の姿とは、まさにそれだった。

その1分間、文字通り彼女以外の誰もが反撃の余裕は愚か、逃げることもすらできない。ただ、その力の行使が終わるまで姿勢を低くして祈ることしかできないのだ。

「ふう、あらかた片付いたな」

辺りを見回しつつ武蔵は呟く。

彼女が動く前と後で変化したのはただ一つ。蜻蛉隊、七丈島艦隊両方に襲い掛かっていた深海棲艦が一隻残らず消えているという点だ。

しかし、最も驚くべきはあの混沌とした戦場の中、蜻蛉隊の隊員は一人も傷つけぬまま、深海棲艦のみを沈める荒いように見えてその実、繊細な技術。

「まさか、全部武蔵一人で沈めたの……？」

「いや、私は7割程度だ」

武蔵は、彼女自身の砲撃によってあがった飛沫によって一時的な霧が出ている正面を細目で見据えながらそう答えた。

「3割はあいつに持っていていかれた。大した兵士だ」

「あいつ……？」

馬鹿な、とプリンツは武蔵の言葉を疑った。

あの純粋な暴力の嵐の中を動くだけでも難しいと言うのに、深海棲艦を狩っていたと言う。

「絶対的な力をふるう暴王は歴史の中で何度もできました。しかし、その都度その力を諫める者が現れるのもまた必定。その一つが、^{アサシン}暗殺者の存在」

「ほう、人は見かけによらない……いや、その見かけもまた真の実力をくらます良き隠れ蓑という訳か」

晴れゆく霧の向こうから声が返ってくる。か細い、少女の声。

霧の向こうに見えるその人影はプリンツよりも遙かに小さい。

「無暗に力を使用する暴王の目も届かぬ闇の中に私達は潜み、その愚行を諫める。暴王にとっての天敵とは私達なのでしよう」

「あなたは……」

霧が晴れ、少女の姿がプリンツの目にも映った。

「武蔵さん、力持つあなたは果たして暴王でしょうか？」

「まるゆ、お前がこの分隊の頭か？」

「まるゆ……」

憂い気な表情を武蔵に向けるまるゆを見て、プリンツは驚きを隠せない。

昨日、鎮守府で出会った彼女は戦いを好まない、ただの少女といった印象で、蜻蛉隊の空気とはまるで真逆の雰囲気をもっていた。

それが今は、冷たい殺意を確かに放っているのだ。

「武蔵さん、あなたが力の使い方を弁える賢王ならば、その矛を収めてそのまま鎮守府に帰ってくださいませんか？」

「まるゆ分隊長!? 何を言っているのです!? あきつ丸隊長からは七

丈島艦隊も排除目標と命じられたではありませんか!？」

「戦う気はないと?」

「はい、戦いなど無意味で無益な行為です。話し合いで解決できるのなら、私は喜んでそちらを選びます」

「ははは、では今お前が沈めた深海棲艦達も対話を試みてから沈めていたというわけだ。なんとという早業だ、まるで見えなかったぞ」

武蔵の皮肉がかった言葉にまるゆはますます憂いの表情を濃くした。

「深海棲艦に対話という能力があれば、そうしていました」

「……ふむ、それで、お前の提案を呑めないと言ったらどうするのだ?」

「あなたが死ぬというだけです」

まるゆはまるで当たり前のようにそう答えた。
それに対し、武蔵は高らかな笑い声をあげる。

「くははははは！ 私を殺すと言ったか!? 素晴らしいな！ ゾクゾクするぞ、まるゆ！ 遠慮はいらん、是非やってみてくれ！」

「とても、残念です……」

互いに睨み合いが始まると共に場の緊張感が増す。

「ねえ、2人で盛り上がってるところ悪いんだけど、私どうすればいいかな？」

「ふむ、ではプリンツは他の隊員の方を頼む。本当は蜻蛉隊の火力集中を受け止めたかったが……まるゆに集中することにしよう」

「ええ……結構人数多いんだけどお」

「頑張ってくれたら、お前の活躍とご褒美を大和に口添えしておこう」

「その約束、守ってもらおうッ！ 絶対にだッ！」

「いや、お前はわかりやすい変態で助かる」

「あなたには変態って言われたくないよ、変態！」

背中を合わせ、武蔵とプリンツはそれぞれの敵と向かい合った。

「ふ、では、変態コンビ結成だな！ 行くぞ、プリンツッ！」

「その名前やめてくれる!?!」

☆

一方、七丈島南方海域。

「……………」

「……………」

一言の会話もないまま、磯風と綾波は深海棲艦、そして襲い来る深海棲艦と蜻蛉隊を着実に退けていた。

（気まずいなあ……味方でいてくれるのは有難いのだが……）

磯風が1人の深海棲艦を倒す間に綾波は3隻を、蜻蛉隊の隊員1人倒す間に2人を倒してしまう。

戦力としてはこれ以上ないのだが、もう少し連携を取ってくれてもいいのではないかと磯風は綾波に目配せを繰り返していた。

しかし――

（あ、また無視された）

目は合う。だが、綾波はそれを見て嫌そうな顔を見せ、視線を逸らすのだ。

そんなことがもう3回も繰り返されている。流石の磯風も我慢の限界とばかりに口を開いた。

「おい、綾波！ 頼むから作戦中くらいは協力してくれないか!？」

「お断りします、別段私は困ってないので」

「くっそ、頑固者め！」

取り付く島もないとはまさにこのことだ。

綾波は終始ソロプレーに徹するつもりだ。磯風も彼女の頑なな態度に腹を立て、声をかけるのも億劫になってきていた。

2人の雰囲気はまさに最悪。それでもどちらも倒れていないのは双方の実力がそれだけ高いことを証明していた。

「遅い、ね」

「——ツ——」

不意に、綾波に対し、1つの影が飛び込んできた。

即座に回避行動をとった綾波の足元に銀色の三節棍らしきものが勢いよく叩きつけられた。

「……蜻蛉隊にいた仮面の隊員か」

「この海域の蜻蛉隊分隊長ロスヴァイセ、と名乗ることにしていた。でもまあ、もういいか」

ロスヴァイセと名乗る彼女はそう言ってフードを外し、仮面に手をかけた。

「頃合いだし、もう正体明かしてもいいでしょう。あー、結構話し方変えるのって疲れるわ」

フードからライトブルーの髪が流れ出る。

口調も中性的なものから女性的なものに変わった。

そして、仮面の下から見えたその顔を見て、磯風は息をのんだ。

「改めて自己紹介しましょうか？ 私は叢雲。今は訳あって蜻蛉隊の助っ人をしているわ」

「お前、まさか、天龍と龍田を……陥れた……」

磯風の言葉に叢雲は不思議そうな表情を見せる。

「あら、天龍から聞いたのかしら？ ええ、その通り。じゃあ、知っているのでしょうね、私が鏑木提督の陣営であるということも」

「お前が……！」

「一応忠告しますが、怒りに任せて突っ込むのはやめてくださいね。あなたじや瞬殺されますよ」

頭に血が上りつつある磯風を横から綾波が制止した。

「だったら、手を貸してくれ！ こいつは、なんとしても倒さなくちゃならない！」

「お断りします。こいつを倒すのは同じですが、仲良しごっこをする気はありません。私一人で倒します」

「なんでそんなに強情なんだ！」

「ふふ、仲が悪いのね。出会ったばかりの天龍と龍田を思い出すわ」

楽し気に笑いながら、三節棍から素早く槍の形態に変化させ、切っ先を向ける。

「どちらからでもいいわよ？ 好きにかかっていらつしやいな」

「むかつかますね。なんで上から目線なのでしょうか」

先に動いたのは綾波。

勢いよく海面を蹴り、叢雲との距離を一瞬で詰めると、その顔面に砲口を向け、容赦なく引き金を引いた。

爆発音と共に叢雲が煙に包まれ、のけぞるが、すぐに無傷の彼女の顔が煙を切って現れ、綾波の懐に潜り込みつつ、再び槍を三節棍形態にして、彼女の腕に巻き付け自由を奪う。

「何で上から目線かって？ 簡単なことよ。私の方が格上だから、よ！」

叢雲が腕を振り下ろすと、綾波は海面に叩きつけられた。

「綾波ー！」

「さて、次は——つ！」

綾波の腕に巻き付けた槍。それがびくとも動かない。

先刻までの綾波の腕力ではこれはないことだった。

「もう、攻撃は終わりですか、自称格上さん？」

「あら、怖い怖い」

綾波の腕に巻き付けた槍を解き、再び通常の槍として構えなおす。叢雲の表情には依然、笑顔が残るが、先刻よりもかすかに固くなっているようにも思えた。

『ソロモン』起動。さあ、格の違いを教えてくださいあげますよ」
綾波の目が、赤く光った。

☆

「おや、私がアタリだったようでもありますなあ」

大和、天龍、ザラ、ポーラは、今七丈小島を目の前にして、足を止めていた。

「おいおい、しよっぱなからラスボス戦じゃねえのか、これ？」

「避けては通れそうにありませんねえ」

「え、ちよ、何あの滅茶苦茶怖い艦娘！ すっごい強そうじゃないの！」

「うわー、あれはお酒でも飲まなきゃやってられないわあ」

目の前に立ちふさがる蜻蛉隊。そして、その先頭で爛々と好戦的な目を輝かせる隊長、あきつ丸。

彼女達の威圧感にすっかり大和達は気圧されつつあった。

「他の海域でも既に交戦開始の報告を受けているであります。我々も始めましょうか」

「おい、大和！ あと、イタリア組も！ 構えろ！ マジで死ぬぞ！」

「ぐう……！！」

「ひえええ！」

「帰りた〜い！」

「ここは私が受け持つ。全員、深海棲艦の殲滅と七丈小島への上陸に全力を尽くすであります。D W ー 1 は目の前、絶対に逃がすな」

あきつ丸の言葉が終わると同時に蜻蛉隊の他の面々は七丈小島へ向けて走っていく。

時間的な猶予も残されていないらしいことにますます追い詰められていく。

「時間がねえ。さっさとぶっ倒させてもらおうぜ」

「不可能でありますな。私の正義はあなた程度の存在で揺らぐもので

「は到底ないであります」

「援護します」

「わ、私も！」

「微力ながら頑張ります」

腰を落とし、縦拳を構えるあきつ丸と、刀を抜き、上段に構える天龍。

両者が同時に海面を蹴り、戦いは始まった。

こうして七丈島の周囲は、余すことなく戦火に包まれた。

第九十六話 「勝てるからであります」

七丈島での戦闘開始から1時間程前。無線機を片手に恰幅の良い老齡の男が呆れ果てた声をあげていた。

「それで、あきつ丸はそのまま作戦を開始したと？」

『はい、自分ではどうしようもなく……』

「それを止めるのが君の仕事でしょう、原田君？ まあ、いい。なるべく時間を稼ぎなさい、こちらの用事が済んだら増援を送ります」

『はっ、閣下』

そこで通信は切れた。

男は大きいため息を漏らしながら無線機を置くと、前方でディスプレイに向かって終始キーボードを打ち続けている白衣の研究員達の一人に声をかけた。

「どうだね、進捗は」

「はっ！ 後1、2 時間もすれば新しい『籠』が完成します！」

「ほっほっほ、それは重畳。では、後は要のDW-1のみですか」

研究員からの報告を聞くと、それまで眉間に寄せられていた深い皺が幾分か和らぐ。

しかし、それもつかの間。唐突に起きた爆発音に再び彼の皺が深くなった。

「何事です!?!」

「わ、わかりません！ 第2ブロックで突如大規模の爆発が発生！」

「警備室、応答ありません！」

「いつの間にか監視カメラにハッキングの痕跡!? 30分前から監視カメラの映像記録が改竄されています！」

途端に露見し始めるいくつもの問題。建物の最深部であるこの部屋にまでまだ異変は及んではないが、それは明らか敵勢力からの攻撃に他ならなかった。

男は声を大にして混乱した部屋中を一喝する。

「うるたえるでないッ！ すぐに第3ブロック以降の隔壁を作動！」

外部の警備会社に応援を要請！ 残った者は監視カメラの復帰！
そして、全職員に武装許可を出しなさい！」

「り、了解しました！」

男の声で混乱状態にあった現場が統制を取り戻した。男は軽い息切れを起こしながらも取りあえずは椅子につき安堵の息を洩らす。

いまだ、何が起こっているのかわからない。敵は、人数は、武装は、目的は、何一つ判明しているものはない。

だが、この第七陸軍研究所は他の研究所以上に堅牢な構造を誇っている。

なればこそ、男もこの研究所を『計画』に使用すると決めたのだ。

「ほっほ、何者かは知らぬが、返り討ちにしてくれましょう。この要塞、容易く落とされはしな——」

椅子に深く腰掛けながら笑みを浮かべようとしたその直後、背後の扉が爆発した。

「——ほっ!?!」

固まって動けない男の前に、硝煙の中から二人の男が現れた。

一人は眼鏡をかけた中肉中背の無害そうな青年。

そして、もう一人は男もよく知っている人物だった。

「か、海軍元帥……!」

「ほう、こんなところにおったか。探したぞ、狸。いや、参謀総長殿？」

凶悪な笑みを浮かべた己が天敵。それが重火器をひっさげ、そこに立っていた。

☆

七丈島、その西に浮かぶ七丈小島。それを目の前に、激しい戦いは繰り広げられていた。

「ふん、どうした！ その程度でありますか!?!」

「くそが！」

絶えず刀を打ち込み続ける天龍。その猛攻を、あきつ丸は笑顔でいなし続けていた。

あきつ丸の装着するグローブが防刃とはいえ、それでも鉄の塊を何度も受けて手首がいかれないのは、彼女の受けの技量が天龍の攻めの

技量を上回っている証明に他ならない。

「ほら、急がねば私の部下がD W―1を捕縛してしまうでありますよ？」

「はっ！ そんな心配はしてねえよ！ 龍田がお前ら程度にやられるわけねえ！」

「まあ、それならそれで」

「ぐう!？」

あきつ丸の手の甲が振り下ろされた刀の側面を弾き、天龍は前のめにバランスを崩す。

すかさずそこに、あきつ丸の鉄拳が目にもとまらぬ速さで次々と叩き込まれた。

肺から空気が押し出されたのか、か細い嗚咽と共に、天龍は海面に倒れる。

「私が直々に仕留めるだけであります」

「天龍！」

「おつと」

起き上がれない天龍にトドメをさそうと拳を構えるあきつ丸。そこにすかさず大和が間に入る。

大和の大ぶりのパンチは空を切ったが、それでもあきつ丸と天龍の距離を離し、かつ回復の時間を稼げたのは大きかった。

「悪い、大和」

「いえ、なんとか踏ん張りましょう！」

互いに励ましあう大和と天龍を見て、あきつ丸は言い表せない不快感を覚えていた。

実力差は十二分に示した。それが理解できないほど愚かしくもないはず。それなのに何故まだ戦おうと思うのか。何故、まだ、自分たちはD W―1を助けられると思っているのか。

あきつ丸にはそれが理解できなかった。

「諦めたら如何でありますか？ このまま続けても無用な怪我をするだけでありますよ？」

「諦めねえよ。この程度で諦めるわけにはいかねえ」

「それに、私達は諦めろと言われて諦めるほど利口じゃありませんね」

「なるほど」

納得したような声をあげるあきつ丸。しかし、その返答を聞いた瞬間から、その目に宿るのは敵意から殺意に変わった。

「ならばその覚悟、試して差し上げましょう」

あきつ丸が大きく腰を落としたと同時に、彼女を中心として周囲の海面が凹んだ。

「——ッ！ 離れろ！」

「え、でも、今の時点でもそれなりに遠い——」

あきつ丸が右足を動かしたのと天龍の声が響くのが同時だった。

「馬鹿！ ここのじゃ、まだ足りねえッ！」

大和がその脅威をようやく認識した時、既にあきつ丸はそこにいた。

大和の脇下に潜り込む位置の間合い。それはあきつ丸の次の攻撃を、決して回避することはできない事実を物語っている。

「烈風拳ッ！」

大和の鳩尾にあきつ丸の縦拳が突き刺さった。

「——ッは……ッ!?!」

大和は目を大きく見開き、激痛に呼吸すらままならないように見える。

やがて、あきつ丸の拳が体から離れると、支えを失ったように大和は海面に両手をついた。

「大和っ！」

「……うッ!?!——う、おえええええッ！」

天龍が大和に駆け寄ろうとした瞬間、彼女は口から嗚咽と共に大量の血を吐き出す。

それは明らかに尋常ではなく、天龍と大和に死を予感させるには十分だった。

「がっ、げほ、げほっ！」

「胃でも破裂したでありますか？ いや、胃だけではないな。もつと

広範囲に手ごたえがあった。まあ、とにもかくにも、早急に治療せねば死ぬでありますな」

「あきつ丸ッ！」

激昂した天龍が振り下ろした刀をあきつ丸は容易く片手で受け止める。

感情のまま、理合もなく力任せに振っただけの刀などあきつ丸には紙切れ程の脅威すらない。

刀は天龍がいくら力を入れても微動だに動かない。あきつ丸は、天龍を蔑視し、言った。

「さあ、選べ。大和かD W—1か。助けることができるとすれば、どちらか一方のみでありましょう」

「う……」

「夢から覚めたか？ 現実は見えたか？ さあ、もう一度言ってみるであります。この程度では諦めない、と」

「俺は……俺は……！」

動揺が刀の震えとなつて、それを握りこむあきつ丸にも伝わっていた。

あきつ丸はそれに嘆息する。

「お前のような奴を口先だけというのだ」

「なんだとっ！」

「私ならば、敵が親を人質に取ろうと、迷わず引き金を引ける」

「な……」

「私は、悪を滅ぼすためならば、親をも殺す」

冷ややかで鋭利な、しかし嘘のない真つすぐなその言葉に天龍は言葉を失った。

「諦めろ。お前には覚悟が足りない。それでは大義を為すことはできないであります」

「好き勝手言っつてんじゃねえ……！」

「蜻蛉隊にはそれがある。そして、その覚悟に見合った力も。我々が何故、わざわざお前達と正面から戦っているのか、わかるでありますか？」

あきつ丸は、確信のこもった声で淡々と続けた。

「勝てるからであります」

☆

「分隊長の彼を差し引いて蜻蛉隊は残り10人。5人は深海棲艦を排除し、陣地を形成、維持。残り5人はその陣地内から私へ攻撃。徹底した陣地防衛戦術ですか、良い布陣です」

前方から放たれる戦艦級の砲撃を次々と避けながら神通は、蜻蛉隊の戦い方を評価し、満足げに頷いていた。

「のんびりしてないで、さっさとケリつけてこっち手伝ってもらえる!？」

「瑞鳳さん空母なんですし、艦載機で蹴散らせばいいじゃないですか」
「その艦載機のほとんどをあなたの護衛につけてるからさっつきから私
ががら空きなのよ!」

見境なく次々と襲い掛かってくる深海棲艦の猛攻を神通が受けていないのは、彼女の周りを瑞鳳の艦載機が護衛し、近づいてくる深海棲艦を迎撃しているからであった。

しかし、その分、自分の護衛に回す艦載機が不足し、彼女は己の足で深海棲艦から逃げ回っている現状であった。

「私の護衛部隊から少し削ってくれていいんですよ?」

「私、自分の仕事は完璧にこなしたいタイプなの! 援護するって言ったからにはあなたの周囲の深海棲艦は完璧に排除するから!」

事実、神通はほとんど周囲の深海棲艦に気兼ねなく蜻蛉隊の動向を探っていた。それはまさに瑞鳳の援護が完璧であるために他ならない。

「面倒くさい人ですねえ、じゃ、もう少し頑張ってください」

「本当にもう少しよ!?! そろそろ一発くらい貫いそうなもの!」

やけくそ気味の返答と悲鳴を聞き流しつつ、神通は再び頭を目の前の蜻蛉隊の攻略一点に切り替える。

正直、蜻蛉隊の陣地防衛を基本とした戦い方に手をこまねいている。陸軍であれば海上の戦いは不慣れと踏んで侮っていたが、中々どうしてこの混戦の中を上手く立ち回っている。それこそ、高練度の艦

隊の動きに酷似している。

何より、分隊長を早々に失っているにも関わらず、彼らからは一切戦意の低下や混乱が見られないことに驚いていた。集団で動く以上、その統率役となる頭の存在は、少なからず影響を与えるものであり、それを失ったとなれば大きな隙ができるもの。それを克服するには並大抵でない訓練と経験を重ねなければならぬ。

神通の中で、蜻蛉隊という敵の評価が大きく変わっていた。

「これを一人で攻め崩すというのは楽ではありませんね」

陣地防衛に徹してくる相手には包囲殲滅をもって削り殺す。矢矧とて同じ答えだろう。しかし、攻撃役が神通一人では包囲にならない。

いや、決して瑞鳳が加わったとしても包囲は不可能である。

それに加え、相手は戦艦級の長射程と高火力、そして人数を利用した時間差砲撃によって絶え間なく攻撃を行う。

そこには近接戦に持ち込む隙など欠片もない。

「しかし、妙ですね。確かに私も近づけません、この距離では私を仕留められないことは向こうも気付いているはず。長期戦に持ち込む気ですかね？ それならばやがて弾薬が尽きる向こうが劣勢なはず。はて、何が狙いでしょうか……」

顎に手を触れ、思考を巡らせていた最中、唐突にそれまで統率の取れた動きで神通を護衛していた艦載機が軌道を変え、彼女の真後ろへ飛んで行った。

その方向では先刻まで瑞鳳が深海棲艦から逃げ回っていた筈。

そして、いつの間にか後方からさんざん聞こえていた瑞鳳の悲鳴が聞こえなくなっていることに気づき、神通は後ろを振り向く。

「厄介な空母は片づけた。さて、さつきはよくもやってくれたものだな、神通」

「あなたは……」

そこにはぐったりした瑞鳳の体を無造作に海面に捨てる原田の姿があった。

「まさか、まだ立てるとは」

「いや、立てなかった。だから、仲間時間に時間を稼ぎ、回復させてもらった」

見れば、原田の体に刻まれた無数の刀傷のほとんどがきれいになくなっていた。

「お前達艦娘は高速修復剤と呼んでいるのだったか？ それを装備に仕込んである。緊急時に一度だけ、再び立ち上がることができる仕組みだ」

「……そういえば4位の方の専用装備が似たような奴でしたかね」

「さあ、残るはお前1人。どうする？」

予期せぬ敵の復活によって、挟撃状態に追い込まれた神通。しかし、その顔からはまだ笑みは消えていない。

「では、再度あなたを倒してからゆっくり陣地侵略にあたらせてもらいましょう！」

刀を抜き、一直線に原田に向かう神通。

それに対し、原田は苛立たし気に鼻をならした。

「……まさか、刀を掴まれるとは」

神通の刀は容易く原田の手に捕まり、その動きを止められていた。

「舐めるなよ、艦娘如きが俺に勝てると思うな」

「如き、とは言ってくれますねえ。今この国を守っているのはその艦娘如きでしょう」

刀をねじるように回転させ、拘束を逃れると、すかさず袈裟斬りに踏み込む。

あまりに流麗かつ神速。並の深海棲艦は愚か姫級ですら回避不能であろう一撃。

しかし、原田は神通の斬撃を左の手甲で受けつつ、右ストレートのカウンターを返す。

寸前の所で、後退し躲したが、ここで神通の懸念が確信に変わった。「今の反応速度、身体操作……随分と体を弄ってらっしゃるようですね」

「でなければ、俺の『ワダツミ』の負荷には耐えられん」

確かに、あれだけの重量をもって快速を得んとすれば、鍛え抜かれ

た程度の肉体では耐えきれない。

しかも原田の場合は他のワダツミと比べ、さらに装備が重く、しかも出力が高い。最早、人間に扱えるのか怪しいスペックであった。

「この海に、お前達艦娘はもう必要ない」

「随分と、艦娘がお嫌いなようで」

「ああ、心底嫌いだとも」

原田は軍帽を目深に被りなおし、神通を憎悪に満ちた濁った目で睨みつける。

神通は、再度蜻蛉隊の評価を改めた。

これは、敗北の可能性を考慮すべき強敵である、と。

「平伏せ、艦娘。これは天意である」

「……………ふう」

神通の表情から、笑顔が消えた。

☆

「武蔵！ ちょっと、聞こえてる!? 武蔵ってば!」

「ぐ、ふ……………! ああ、一瞬飛んでいたよ、どうしたプリンツ?」

「どうしたじゃねえ! めっちゃピンチなんだってば!」

「随分余裕がなさそうだな」

「武蔵も中々に酷いけどね!」

プリンツの悲鳴を聞き、武蔵は真っ赤に染まった視界を右腕で拭いて払う。

頭部からの出血が原因だ。

既に、武蔵の体中は傷だらけで、彼女の足元の海面が赤みがるほどに出血していた。

また、プリンツも武蔵ほどではないが数カ所切り傷から鮮血が流れている部位があった。

「血が、止まらないんだけどお!!」

「出血毒か……………私も流石に毒をもらいすぎたな、さつきから血が止まらなくなってきたよ」

周囲をゆつくりと見渡すと、いつの間にか周囲を蜻蛉隊に囲まれてしまっていた。

そして、目の前には無表情でこちらを見つめて海面に立つまるゆの姿が見えた。

「降伏を呼びかけます、いかがでしょうか。どうか、諦めていただけませんか？ 血清もお渡しますよ？」

まるゆは武蔵の血で染まったコンバットナイフを拭いながら呼びかける。

しかし、それに対し、二人は首を縦に振ることはなかった。

「はっはっは、まるゆ。私がこの程度で満足していると思っっているのか？」

「Nein^嫌だよ！ 圧倒的Nein！ ここで諦めたらお姉さまに顔向けできないからね！」

「命が惜しくはないのですか？ 私は、こんなに……いえ、これ以上の問答は無駄ですね」

まるゆは信じられないという表情で武蔵とプリンツを見つめる。しかし、すぐに憂い気な表情に戻ると、落下するように海中へ消えた。

「来るぞ、プリンツ。無音の強襲だ」
サイレント・アサルト

「本当に何も聞こえないの!? その零式水中聴音機は飾りなの!？」

「無音だ。完全にお手上げだな」

聴音機のヘッドセットを片耳に当て、首を振る武蔵。

二人は、この理不尽極まりない海中からの奇襲に追い詰められつつあった。

海中に潜れば視認での索敵は不可能。ならばと武蔵が水中聴音機を使うが、これもまるゆの所在を掴むには至らなかった。

当然だった。まるゆにとって敵は海中の索敵が可能であることが前提。海中で音を出すようでは技術とは言えない。

そして、何よりも、この間にも包囲状態の二人には蜻蛉隊の容赦のない砲撃が降り注ぐのだ。

「あー、当たるっ！ さしもの幸運艦の私もこれは当たっちゃうってえええっ！」

「いや、流石は暗殺者を名乗るだけある。見事な隠形術だ」

「なんでこんな最中に余裕ぶってるの!？ でも正直、この技術私も欲

しい。ストーキングの幅が広がるよね！」

「お前も実は結構余裕か？」

その最中、砲撃がぴたりと止む。

瞬間、プリンツと武蔵は最大限の警戒を周囲に張る。蜻蛉隊の砲撃が止んだということは、まるゆの攻撃が始まるという合図なのだ。

不意に、プリンツの左で水音が鳴った。

「そこか！」

「待て！ 焦るな、フェイクだ！」

水音の方へ体を向けた瞬間、彼女の背後から、音もなく、まるゆが浮上した。

「くそっ！」

「きやつ!？」

武蔵がプリンツを突き飛ばし、まるゆの振り下ろしたナイフの先端は武蔵の左肩の傷に深く突き刺さった。

「ぐぬうううう！」

「ああ、鉄のような肉体で大変でしたが、やっぱり傷口を攻めていけばいずれ深く入るんですね。ようやくあなたに失血死以外の選択肢を開拓できそうです、今更ではありませんけど」

「武蔵！ 私を庇って!？」

ナイフを抜きながら、まるゆは作業的に距離を取り、包囲の外に逃れる。

「ふ、案ずるなプリンツ。私の性癖はよく知っているだろう。望んでやったのだ」

「もうそういうの関係ないレベルだよ！ いくらなんでも血を流しすぎだよ！ 死んじゃうよ！」

「皆さん、当てずとも良いので絶え間なく撃ち続けてください。なるべく走り回らせて、出血を促しましょう」

追い詰められ、反撃の余裕すらない二人にまるゆからさらに追撃の命令が下る。

砲撃の雨の中、あから様に動きが鈍る武蔵を引っ張りつつ、包囲の中を走り回るしか選択肢はなかった。

「やばい、やばいって！ お姉さまあああああ！」

「敵の力をみくびった、私の慢心か……！」

武蔵が苦し気に呟いた自責の言葉も、数多の砲撃音にかき消された。

☆

「さて、そろそろ選ばねば、大和すら救えないでありますよ」

「……………ッ！」

天龍はあきつ丸の言葉に歯ぎしりをする。

大和を助けるならすぐにも降参し、彼女を連れて、鎮守府に逃げればいい。

しかし、それは実質的に龍田を諦めることに等しい。

大和を鎮守府まで運んでから追っても、おそらく間に合わない。このあきつ丸の強さは異常だ。龍田を信じていないわけではないが、他の隊員と連携されれば勝ち目は薄いだろう。

天龍はかつての龍田と同じくらい高く、厚い壁をあきつ丸にも感じていた。

「俺は……」

大和を連れて帰るしかない。目の前の仲間の命を見捨てられるはずがない。それが覚悟だと言うのなら、そんな覚悟はいらない。

天龍が刀から手を放そうとしたその時だった。

「覚悟が……足りて、ない、ですか……げほっ！ 言ってくれますねえ」

「大和!？」

「まさか、立ち上がれるとは……大したものであります」

文字通り血反吐を吐きながらも、大和がゆっくりと立ち上がる。

そして、天龍とあきつ丸の間に入ると無理に笑顔を作って見せた。

「全くもって、その通りですよ……！ 何やってんですか、天龍！」

「な、お前……」

不意に、大和が作ったのは握りこぶし。そしてそれは、あきつ丸でも天龍でもなく、まっすぐ海面に向かっていった。

「根性みせなさい、天龍ッ！」

「な!?!」

「ぐう……!?!」

海面が弾け、局所的に発生した小規模の波にあきつ丸は抗いきれず、後退させられる。

大和と、彼女に腕を掴まれていた天龍はその場にとどまった。

「あなたの龍田に懸ける覚悟はその程度ではないでしょう」

「大和……」

「そう簡単に諦めてもらっちゃこつちが、げほ、困るんですけど」

「まだ戦うつもりでありますか? そんな状態で?」

あきつ丸の声を無視し、大和は、両手で天龍を抱えるようにホールドする。

「天龍、台風の日、覚えてますか?」

「おい、お前、まさか……」

「これが、私の覚悟ですッ!」

これから何が起こるのか、予期した天龍は顔を青ざめさせ、あきつ丸は想像もつかず止めることができない。

そして、大和の全身全霊の力で、天龍は七丈小島の方へと遠投された。

「な……!?!」

己のはるか後方へと飛んでいく天龍に、あきつ丸は驚愕の表情のまま、見送るしかできなかった。

一方で、大和は、海面に倒れこみ、血反吐を吐く。

口の中は鉄と胃酸の味しかせず、一呼吸ごとに激痛が襲う。

重傷の体で無茶をした代償であった。

それでも大和はまだ立ち上がり、あきつ丸と対峙する。

まだ、倒れるわけにはいかない。まだ、自分にやれることが残っている。

「武蔵といい、あなたといい。大和型というのは揃いもそろって常軌を逸しているでありますな」

「ごんなの敵に聞くのもなんですから……私、あと、どれくらい戦えると思います?」

息も絶え絶えの大和からの問いに再び虚を突かれた表情になるあきつ丸。

しかし、少し考えて口を開いた。

「命が惜しいのならば5分が引き際であります。命を捨てるならば、10分はいけるではありませんよう」

それはあきつ丸の嘘偽りのない回答だった。

それを聞いて大和は笑った。

そんな彼女を見て、あきつ丸もまた笑った。

「じゃあ、死に体の悪あがきに付き合ってもらいましょうか」

「良い、覚悟であります」

「私は、七丈島艦隊は、そう簡単に負けてあげないですよ……!」

この戦いに勝利はない。
いかなる過程を辿ろうと、待っているのは大和の敗北という終着のみ。

しかし、その敗北に一握の価値を作るために、彼女は、海面を蹴った。

第九十七話 「では、私の正体をお教えしましょうか」

右のこめかみを掠めた砲弾に、磯風は冷や汗を流しながら慌ててグザグに後退した。

狙撃手は見えている。

磯風を包囲しようとして動き回るこの隊のさらに奥。護衛を一人付けて、さつきから好き勝手に撃ちまくってきているのはあの紙煙草をふかしている老兵だと、磯風自身もよくわかっている。

「おー、良く避ける。海での動きが俺らとまるで違う。こいつは仕留めるのに時間かかるぜえ」

「地道に行きましよう、鶴屋さん。まだまだチャンスはあります」

狙撃手とその護衛は戦場の真ただ中とは思えぬ冷静さで言葉を交わしていた。

「しかし、うちの分隊長には参ったね。マジで俺たちに命令もなんも出さずに一人で楽しんでしゃってるんだからよ」

「どこの所属とも知れぬ余所者ですから、隊の動かし方なぞ知らんのでしょうよ」

「ま、滅茶苦茶な命令されるよかマジか」

蜻蛉隊が装備している陸軍式艤装「ワダツミ」それは必ずしも全員全く同じという訳ではなく、隊員によっては自分の役割や得手不得手に応じ、改造が許可されていた。

狙撃手である鶴屋の場合は、主砲にロングバレルとスコープが特徴的な狙撃砲、所謂スナイパーキャノンと呼ばれる装備を採用している。

（あの狙撃手が厄介だな……！　しかし、こうもウジャウジャとたかられては私のレンジまで接近もできない……せめて、もう一人助力が得られれば！）

そう横目で一瞬だけ、斜め後方を見る。

しかし、数百メートル離れた場所で深海棲艦を巻き込みながら叢雲と激しい接近戦をする綾波に助力を得られるような気配はない。

(う、拙い。かなり疲労が溜まってきた……足が重い)

磯風の弱点はその体力である。

機動力に関しては一流の域にある磯風ではあるが、それは同時に大幅に体力を削っていく。

今の機動力を維持できるのは後数分程度。

「この人数差で包囲できんとは、なんて動きだ、あの駆逐艦！」

「陸で俺達がここまで手こずらされたことは一度もない。流石、海的女神と呼ばれるだけはある」

「それでも、我々の勝利に変わりはないがな！」

(ぐ、相手も手練れ、あと少し動けなくなったら一瞬で包囲されるな) 少しずつ、じわじわと追い詰められていく感覚。

それが焦燥を呼び、そして焦りは呼吸を乱し、余計な力を使わせる。

「ぐっ……くそっ！ くそッ！」

「あー、やだねえ。いい大人が6人がかりで小さい娘追い掛け回して。おじさん見てらんねえよ」

「鶴屋さん、敵を見かけで判断するのは……」

「俺さあ、あの子と同じくらい孫がいんのよ、それがもううんざりするほど可愛くってな？ もうしんどいわあ、おじさん撃つのやめちやおっかな」

「少し真面目にやって——」

「お、隙発見」

護衛の兵士が呆れかけていた瞬間、砲音が鼓膜を震わせた。

その砲撃は一瞬、集中を欠いた磯風に真正面からクリーンヒットする。

無論、艦装保護膜がある以上、まだ死んではないが、明らかに速度が落ちたのが見て取れた。

「まあ、でも、撃つしかねえよなあ。そういう命令だからよ」

「ぐ、ああ……！」

「お嬢ちゃん、頼むから早いとこギブアップしてくれよ？ またぬるい動き見つけちゃったら、引き金引いちゃうからよ」

「う、ぐ、くそおー！」

ほんの少しだった。

ほんの少し、疲れに負けて足を緩めただけなのだ。

それなのに、一瞬で見抜かれ、撃ち抜かれた。

(ありえない、あんな狙撃手の攻撃を掻い潜りながら、目の前の蜻蛉隊を倒すなんて、とても、無理だ)

磯風が肉体的にも精神的にも限界になりつつあった、その時。

彼女の耳にその声は響いた。

『――矢矧よ。おまたせ、状況把握完了したわ。指示を出すわよ』

☆

七丈島鎮守府の作戦会議室。

そこで四方にたてかけたホワイトボードをグルグルと見回しながら無線に話しかけているのは他ならぬ矢矧であった。

「悪いわね、流石に偵察機の映像から4エリアの戦況をまとめるのは骨が折れてね」

『あら、矢矧さんですか?』

神通から声が返ってくる。問題なく北部チームの無線チャンネルに繋がったことを確認すると、矢矧は北部の海域の戦況をまとめたホワイトボードを見ながら口を開く。

「神通は現在も挟撃状態ね?」

『そうですねえ、瑞鳳さんからの援護も途絶えてしまいましたし、厳しい戦況です。特にあの陣地防衛を彷彿とさせる亜種輪形陣が厄介ですわね』

「そう、でも大丈夫よ。3分間、全力で敵を引き付けておいて」

『え、それだけですか? その後は?』

「3分後に話すわ。まあ、その時には言わずともわかっているでしょうけれど」

神通の質問を遮って一旦無線を切ると、矢矧が早に東部のプリントと武蔵の無線チャンネルに合わせ、声をかける。

『うえええん、矢矧く! もう、本当に! 本っ当に限界だよお!』

『この武蔵がここまで追い込まれるとはな……!』

声をかけた瞬間にプリントの情けない声と武蔵の苦し気な声が聞

こえてくる。

それに対し、矢矧はわざとかと思うくらい大きなため息をついた。

「あんた達に言うことは一つだけよ、ええ」

『……え、なんか怒ってない？』

「真面目にやんなさいよッ！」

『私はいつだって真面目だぞッ！』

「私は全力を尽くさない奴が大嫌いなものよ！」

『全力だよお！』

悲鳴をあげるプリンツに矢矧は青筋を浮かばせて怒鳴り声をあげる。

「潜水艦？ 無音無貌の敵？ プリンツ、そんなのあんたの『ストーキング』能力、相性抜群でしょうが！ 今活かさなくてどうするのよ!？」

『ええ……だってえ、まるゆは、お姉さまじゃないし……』

『その問題なのか？ できないわけじゃないのか？ 凄いな』

「甘えてんじゃないわよ！ とにかく、まるゆはあんたが追いなさい、できるわね!？」

『お姉さま以外をストーキングなんて……私の、美学、が……!』

「……わかったわ、上手くできたら、一日だけ大和の部屋の鍵を貸してあげる」

『やる、任せて』

即答であった。

「次に武蔵」

『あ、ああ、なんだろうか』

若干、うろたえたような声が返ってくる。

しかし、そんなことを気にしている暇などないとそのまま矢矧は言葉が続ける。

「あなたね、バレてるわよ」

『な、なんのことだろうか……?』

「その敵を舐め腐った艦装改造。私、とつても腹立たしいわ」

『う、ぐ』

「後、なんか包囲されてるけど、あなた主砲一発で包囲崩せるわよね？」

「なんでやらないわけ？」

『……ああ、それは気付か——』

「気付かなかったとか言わないわよね？」

『申し訳ない……』

武蔵の沈んだ声が返ってくる。打たれ強い、というか打たれたがりの彼女にしてはこの殊勝な態度はいささか意外ではあったが、かといって怒り口調を緩めるほど矢矧も優しくはなかった。

「あなたの性癖にプリンツを巻き込まないでもらえる？」

『あ、ああ、そうだな、身勝手が過ぎた』

「じゃあ、さつきと逆転してきなさい！ 元々そんなに手こずる相手じゃないでしょうー！」

『はは、いや、いつもの事の筈なのに、お前に叱られると何故か実に新鮮な気分だ！ ふふ、くは、くははははは——』

そのまま何も言わず無線を切ると、今度は南部の戦況を描いたホワイトボードに向き直り、無線のチャンネルを切り替えると、矢矧は打って変わって優しい口調で声をかけた。

「磯風、よく耐えたわね」

『ああ、だが、もう長くは持ちそうにない……せめて、綾波と協力できれば……』

「ええ、大丈夫よ。この状況を覆すとおきの方法があるわ。あ、綾波も聞いている？」

『いや、その、綾波は……途中で無線を外してしまつてな』

「ああ、そんなことだろうと思つたわ。ええ、問題ないわ。むしろ好都合よ」

作戦内容を伝えると、磯風は少し狼狽しているようであったが、手段を選ぶ余裕もなく、素直に動き始めたようだった。

「さあ、逆転するわよー！」

☆

「3分、ですか。まあ、それくらいは訳ないですけど。別段、引き付けなくとも彼らは私を沈めるのに夢中ですし」

前方の原田、後方の蜻蛉隊。一発でもまともに食らえば勝負が決し

かねない高火力の暴風雨。そんな中に曝された状況でなおも神通は落ち着いていた。

むしろ、普段以上に研ぎ澄まされていた。

一撃でも食らえば死ぬ。勝率は一桁のパーセンテージ。

その程度の理不尽と無謀は、あの元帥に一通り経験させられている。今更、敗北の可能性が出てきた程度で動揺や焦燥が生まれる方がおかしい。

「しかし、3分後に何が起こると言うのでしょうか。援軍の大艦隊が到着してくれたくらいでないその後ろの包囲殲滅はできませんしねえ」
後ろの亜種輪形陣の攻略だけなら消耗戦に持ち込み、敵の攻撃が鈍った時に突撃すれば時間はかかるが確実に勝てると踏んでいた。

しかし、今はそれをすれば原田に問答無用で背中を撃たれてしまうだろう。

練度で負けているとは思えないが、彼の人間離れた力と、それを増幅させる重装備、何より狂気にも似た殺気は警戒に値する。

背中を向けるのは避けておきたい相手だ。

「ん……っ!？」

「掠った！ よし、いいぞ！ 徐々に捉えられてきているぞ！ 勝てる！ 我々の勝利は目前だ！」

原田の咆哮にも似た鼓舞に、ますます弾幕が激しくなる。

決して油断していたわけではないが、流石に相手もプロ。行動パターンを読んで、考えて撃ってくる。

そろそろ一発程度当たってもおかしくないと思い始めたその時、3分が経過した。

同時にイヤホン型の無線機から矢矧の声が聞こえる。

『ちやんと、敵は引き付けているわね?』

「ええ、仰せの通りに。一体何が起こるんですか?」

『あら、聞こえない? この音が』

「音?」

辺りは砲弾の雨が降り注ぎ、とても音の分別がつく状況ではなかったが、耳を澄ました神通にも確かに、僅かではあるが、その音は届い

た。

「これは……」

『陣地防衛戦術に対して包囲殲滅。確かにこれも正解。でもまだ解はある』

雲海の上、それまで着々と準備を整えてきたそれらが一斉に雲海に飛び込み、急降下を始めた。

『陣地防衛戦術っていうのは、守りに長けるけど、足が遅い。細やかな陣形維持を求められる戦術だから、移動に向かないのよ。まあ、基本、籠城戦とかの戦法なんだから移動の必要はないのだけど』

矢矧が語る間にもそれらは一直線に蜻蛉隊の真上に突撃していた。

『そして、上からの攻撃には滅法弱い』

「——ッ！ 敵機直上、急降下ッ!? 散開だ、散開せよッ！」

『もう遅い』

密集した蜻蛉隊の直上。

そこに迫った彼らの脅威に彼ら自身が気付くときには、既に、攻撃は終了していた。

「さあ、攻撃隊、戦果をあげてらっしゃい！」

神通の耳に聞き覚えのある声が聞こえたと同時に、数多の爆撃が蜻蛉隊を包み込んだ。

その攻撃隊の数は尋常ではなく、それから30秒間、爆撃は止まることはなかった。

その間、広がる爆炎から脱出してきたものは1人もおらず、神通も原田でさえも、その圧倒的な攻撃を見ていることしかできなかった。

『私の解は、航空爆撃による包囲殲滅。動かない艦なんて、艦載機の良的だわ』

「はっ、どうよ、この火力！ 一網打尽にしてやったわ！」

「馬鹿な……貴様は、確実に仕留めたはず……！」

顔を真っ赤にして歯ぎしりする原田に、瑞鳳は挑発的に答えた。

「やられたふりしてやってたのよ！ 艦娘がああ程度でやられるか！

「こちとら艦装保護膜っていうプロテクターがあるのよ！」

「ぐ……！」

「どうよ、死んだふりして不意打ち決めたあんたへのこの意趣返し！
ねえ、悔しい？ 悔しいわよねえ？」

「ぐ、ぐ、ぐううううおおおおおッ！」

「瑞鳳さん、楽しそうですねえ」

『ストレスがたまってたのね。深海棲艦を警戒しつつ、敵の目も盗んで艦載機を大量発艦、その全機を操り、爆撃。並の集中力ではないわ』
悪役のように笑いこけていた瑞鳳が、そこでふと力尽きたかのよう
に海面に手を突き崩れ落ちた。

同時に大量の艦載機も弓矢に変わり、彼女の矢筒へ戻っていく。

『それに、艦装保護膜で気絶は免れただけで、ダメージは負ってる。本当は立っているのも厳しいレベルでね』

「私のために頑張ってくれたんですね、瑞鳳さん」

「はっ……勘違いすんじゃないわよ！ ちよつと、横須賀に、私達の真
の実力って奴を見せつけたただけなんだから」

「ええ、素晴らしい仕事でした」

「……ちっ！ 普通に褒めんじやないわよ、面白くない……！」

「では、後は私の仕事ですね」

神通は後方を確認する。

蜻蛉隊の隊員は全員死んではいないものの、海面に浮かび、気絶し
ている。装備も破壊しつくされ、戦闘不能といった様子である。

あれだけの爆撃を行って死者がいないのも、瑞鳳の繊細な爆撃操作
があつてこそだろう。

そこまで確認したところで、神通は再度、原田に向き直る。

『さて、詰みよ。そうよね？』

「ええ、その通りです」

その返答に満足したのか、無線通信はそこで切れた。

「一騎討ち、望むところだ」

しかして、原田には臆した様子は欠片もなかった。

刀を抜く神通を前に、むしろ殺意をよりいっそうほとばしらせる。

「やはり油断なりませんね。負けませんけど」

「言っている、艦娘。お前達の時代は終わる、否、俺が終わらせるッ！

これは、天意であるッ！」

両者が同時に海面を蹴り、直後激しい衝突音を響かせた。

☆

「——かつはあ！ はあ！ はあ！ う、ぐ、ゲホッ、ゲホッ！」

「大丈夫ですか、まるゆ分隊長！」

プリンツと武蔵の包囲陣の外、浮上したまるゆは激しくせき込み、嗚咽を洩らす。

その様子に隊員の1人が声をかけるが、心配無用と手で制した。

「大丈夫、夫です。後、少しなんですから、頑張れます……」

まるゆの攻撃法は彼女に想定以上の消耗を強いていた。

海中に潜り姿を消しても音は聞こえる。水を掻く音を消し、海中生物や海底に体を接触させず、ついには呼吸音まで排除する。それでいて対象の死角へ素早く回り込み、また音もなく浮上する。

海中において彼女の肉体にかかる負担は想像を絶するものだった。

「呼吸音まで消したのは、久々ですよ……」

全ての原因は武蔵からのプレッシャー。

僅かな呼吸音からさえも、彼女は自分を捕まえる。そのレベルのプレッシャーを海中から彼女は感じた。だから負担が大きくとも、確実性を取った。

結果として、まるゆの全身全霊の強襲は武蔵、プリンツを圧倒している。

「後、少し、後数回の、サイレント・アサルト無音の強襲である武蔵を、屠れる……！」

ナイフを握りしめ、再度まるゆは潜航を始めた。

「プリンツ、お前のその能力を活かすにはどうすればいい？」

「取りあえず、この包囲を抜けようよ！ できるんでしょ!? てかやれよッ！」

「くっ、止むをえんか……ッ！」

同時に海中にいるまるゆまで聞こえる巨大な砲撃音と共に、海上の様子が一変した。

(拙い、包囲が破られたんですか……!?)

突然のことに、止めていた呼吸を洩らしそうになりまるゆは口を塞

そうであった。

(あ……動けない……今、一步でも動いたら、間違いなく見つかる) 海中の中、まるゆは一步たりとも武蔵達に近づけなかった。

このままでは呼吸がもたない。息が漏れれば、それで見つかる。最早どうしようもなく、まるゆは詰んでいた。

(なんなんですか!?! 聞いてない、こんなの聞いてない。武蔵以外に、こんな化物がいるなんて……聞いてません……ッ! 隊長お……!) 涙が出そうになる。しかし、それすらプリンツのセンサーに引っ掛かりそうで、泣くことすらできない。

絶望的な状況に、彼女の心が軋み始めたその時だった。

「まるゆ分隊長を援護しろ!」

「あの金髪女を狙え!」

「怯むな! 撃ち続けろ!」

蜻蛉隊の隊員達の猛攻が始まった。

「おわ! 武蔵! 守って! 私が無防備すぎてやばい!」

「任せろッ! これは私の仕事だ! 誰にも譲らんッ!」

(——ッ! プレッシャーが、消えた! 今なら!)

蜻蛉隊の追撃によるプリンツの動揺。それにより、センサーは完全に消えた。

それはきつと数秒にも満たないだろう。だが、いや、だからこそ呼吸も航行音も気にする必要はない、今こそ、全速力でかけるべきである、そうまるゆは瞬時に選択した。

「ぐう! まずっ! まるゆを探さないと!」

まるゆの瞬間的な選択と、プリンツのかかり過ぎた復帰時間。

その2つが逆転を許した。

プリンツが再び海面に耳を当てる瞬間、彼女達の死角にまるゆは無音で浮上していた。

「想定よりも遥かに大きな隙でしたね」

「あ——」

「私の勝ちです」

プリンツに振り下ろされたナイフ。

目前まで迫った死をプリンツの目から覆い隠したのは、他ならぬ武蔵の肉体であった。

「武蔵！」

（関係ない、傷口に向けて抉り込むツー！）

先刻、傷口の上からならば武蔵の肉体を貫けることは確認した。

ならば、これまでの攻撃で全身に少しづつ付けてきた彼女の傷を狙うまで。そう、瞬時に狙いを切り替えたまるゆ。

その選択はその時点では最適解であったし、ナイフは正確に彼女の急所部位の傷を抉らんと突き刺さった。

突き刺さるはずだった。

「——え？」

「は？」

「くっ、無念……っ！」

まるゆとプリンツの口から思わず声が出た。

ガキン、というまるで鉄にでも突き刺したのではないかと思う音を立てて、まるゆのナイフは砕けてしまったのだから。

「なあ……!?!」

「……艦装保護膜だ」

「は？」

訳が分からないという顔で武蔵を見つめるプリンツに、武蔵はまるで悪事を白状する子供のように目を逸らし、ぼそぼそと説明を始めた。

「その、だから、私の艦装は、艦装保護膜のオンオフが、できるように、なってるな？」

「……………」

「まあ、あの、だから、今、艦装保護膜をオンに、したのだ」

艦装保護膜は艦娘が艦装を装備した際に自動的に皮膚表面に張られる透明な薄膜である。

敵の攻撃から艦娘の体を守る重要な役目を担っており、そのため、艦娘が甚大な被害を受けても服が破れる、擦り傷、火傷程度で済むようになっている。

ただ、艦装の損傷により、徐々に効果が弱まっていくため、大破進撃などをすれば砲弾一発で肉塊になる可能性もある。

艦装保護膜の強度は最低値は決まっているが、基本、その艦娘の練度次第で強度を増すとされている。

ましてや、武蔵ほどの艦娘の艦装保護膜となればもはや航空爆撃、戦艦砲撃、魚雷以外ではダメージを与えることすら難しい。

「や」

「やっ？」

「最初つからやれやあああああッ！」

プリンツの怒号は七丈島東部に高らかに響き渡った。

☆

七丈島鎮守府、作戦会議室。矢矧は神通の勝利を確信し無線を切ったすぐ後に、大和と天龍のチャンネルに合わせ、無線機を耳に当てた。その表情は厳しい。

「大和、聞こえているかしら？」

『……………はい、聞こえて、ます』

大和の声は今にでも倒れてしまいそうなほど消耗しているのだから、矢矧の顔はますます悲壮に険しくなる。

「天龍の方は駄目そうね。多分、七丈小島に集まっている深海棲艦の瘴気のせいでしょう。だから、大和にだけ指示をだすわ」

『はい、何でも言うてください。この状況、逆転できるならなんでも——』

「無理よ。すぐに鎮守府に戻ってきて」

息絶え絶えながら、闘志と覚悟に溢れた大和の言葉を矢矧は一刀両断した。

無線の向こうから、大和の息をのむ声が聞こえた。

「一刻も早く治療しないといくらあなたでも命を落とすわ。あきつ丸も鎮守府に逃げる者を追う程余裕はないはずよ。もう十分に役割は果たしてくれたわ、だから、早く戻ってきなさい」

『……………嫌です』

「大和」

『お願いします、あと、後10分だけやらせてください!』

「大和! いい加減にして!」

矢矧の悲痛な怒声に大和も黙り込んでしまう。

「あなたを犠牲にして作戦が成功したって、何も意味がないの。それを教えてくれたのは他でもないあなたでしょう、大和」

『……………』

矢矧はかつて、一度大和に殴られた時のことを思い出していた。

彼女は言った、矢矧が私達を守りたいと思うように、私達も矢矧を守りたいのだと、仲間が傷ついているのに最善なんて言えるわけがないと。

だから、私は誓ったのだ。

「効率なんて関係ない。誰かを犠牲にする作戦なんて死んでもやらな
いわ」

『……………そんなこと言われたら、もうどうしようもないじゃないですか』

「大和、わかってくれたのね」

『でも、ごめんなさい』

「大和っ!」

『大丈夫、私は、死にませんから!』

その言葉を最後に、強引に大和の無線が切られた。

おそらくはイヤホン型無線機を潰したのだろう。

矢矧は、拳を振り上げ、感情の昂りを会議室の机に叩きつける。

「怖いなー、矢矧ちゃん。美人が台無しだよ?」

「うるさいわね! 今はそれどころじゃないのよ!」

エドの軽口について八つ当たりをしてしまう。矢矧は親指の爪を噛みながら必死に策を練る。

一番は自分が大和を連れ戻しに行くことだが、エドを信頼できない上、鎮守府に何か連絡が来た時に対応できる者がいなくなる。

矢矧は今、七丈島鎮守府の提督代理だ。この鎮守府を空にはできない。
い。

「あー、もう! 大和! あなた、なんて馬鹿なの……………!」

「……………何だったら、ザラとポーラに僕が命令しようか?」

「——っ！」

頭を抱え、机に突っ伏しそうになる矢矧の頭を、そのエドの一言が持ち上げた。

「どうやら、まだ僕達は信用されていないみたいだからね。点数稼ぎに労力は惜しまないさ」

「……わかった、お願いしても、良いかしら」

少し、訝し気に、申し訳なさそうに、頭を下げる矢矧に、待っていたとばかりにエドはキザったらしく右腕を回し、仰々しく頭を下げた。

「Volentieri, Signorina (ボランティアエリ、シニョリーナ)」

☆

「お話は終わったでありますか？」

「ええ、待っててくれたんですか？ 優しいですね」

無線を潰した私を見て、あきつ丸は笑った。

「ええ、あなたにはこれの件について聞いておきたかったのであります」

あきつ丸は懐からDW-1探索用に使っていた探知機を取り出し、範囲を最小にしてスイツチを入れる。

今、この場にはあきつ丸と私以外には誰もいない。

深海棲艦でさえ、今はザラとポーラが迎撃しているため、ここまでは侵攻してきていない。

それなのに、探知機は鳴り響き、近くに深海棲艦が存在することを告げていた。

「さて、これはどういうことですか、大和？」

「………知ってどうするんですか？」

「悪であれば滅する、それだけであります」

それを聞き、私は思わず笑ってしまった。

笑うと体の内側をつんざくような痛みが走る。笑うというだけでも全身を使っているんだと、こういう時に気が付く。

私は、私の正体をあきつ丸が知ってなんて答えるのか気になった。

「あきつ丸、あなたにとって深海棲艦とは悪ですか？」

「そうであります」

「では艦娘は？」

「善、でありましような。だからこそ、私はあなた方が蜻蛉隊の邪魔になる悪とならない限り手は出さない。この場合、あなたが鎮守府に逃げ帰るならば、追わないでありますよ」

まごうことのない本心だ。

なんて一直線な人なのだろうと、私は心底羨ましく思った。

己のものさしを持って、世界を見るということ。それはどつちつかずの私には難しいから。

「では、私の正体をお教えしましょうか」

痛みで声を出すのも辛い筈なのに、何故か今だけは唇が滑らかに動き、生体のはつきりと言葉を声にしてくれていた。

それだけ私はあきつ丸の答えを聞きたいのだろう。

だから、私もそれに抵抗することなく、あっさり七丈島艦隊の誰も知らない、私と提督だけの秘密を暴露した。

「半艦娘、半深海棲艦。『半人半深』、それが、私です」

さあ、答えてください、あきつ丸。

私は、艦娘^善なのか、深海棲艦^悪なのか。

第九十八話 「私は、七丈島が大切なだけ」

「さて、参謀総長、お話を聞かせていただけませんか？」

参謀総長の後頭部に銃口を突き付ける提督は冷淡な声で命令する。

普段、彼の艦娘には絶対に聞かせないような声。それは彼が七丈島艦隊の艦娘達に知られたくない裏側である。

「ほっほ、いや、父親が化物なら、子もまた同じですか……」

一分足らずで制圧された研究者達を横目で見ながら参謀総長はまるまると膨れた腹をさすりつつ溜息をついて笑う。

しかし、彼に後ろで銃を突きつける提督への恐怖は一切ない。単純に彼と提督の踏んできた場数の違いが、生きてきた年数の違いが現れていた。

いかに鋭い殺意を向けられようと参謀総長は理解している。提督がまだ自分を殺せないという事実を。

「龍田は……DW-1は、鏑木提督の産物に間違いありませんね？
あなたは鏑木美鈴と裏で接触をしていたんですよね？」

「はて、どうでしたかな」

参謀総長のとぼけた返答に提督の表情が強張る。

「鏑木美鈴はどこですか？ まだ生きているのですか？」

「ほっほっほ、申し訳ない。ここまで年を取ると記憶もおぼつかないものでしてね。昨日の夕餉すら思い出せない始末でして——」

「舐めないでください。殺せずとも、痛みつけるくらいのごとはできるんですよ……」

提督がしびれを切らし、その銃口を参謀総長の太腿に向けようと下げた。

その所作に、元帥は舌打ちし、参謀総長はニヤリとほくそ笑んだ。

「——ツむん！」

「——っ!？」

参謀総長が行ったことは非常に単純。

少し、よろめいた。

提督の持っていた銃が下がったタイミングに合わせて、わずかに重

心を後ろに揺らし、彼にもたれかかるように体を密着させたのみ。

傍から見ればそれは銃口が後頭部から離れたことによる安堵で力が抜けたようにも見え、提督自身もそれをまさか『攻撃』だとは思ってしなかつた。

不意に提督を襲ったのは車にでも轢かれたような強い衝撃。

この場で元帥のみが、参謀総長の『勁力』の起こりを察知していた。それは元帥自身が、参謀総長の『経歴』を事前に知っていたからである。

「ほっほっほ、その若さで素晴らしい戦闘力ですな。しかし、いささか狡猾さが足りない」

「頭に血を昇らせ、反撃を許すなどまるで三流。なつとらん」

体が動かない。提督は自分の負ったダメージの正体に未だ気付いていなかった。

「発勁、じゃ。今、お前は146 kgの肉の塊をぶつけられたのだ。しばらくは動けまい、寝ていろ」

「失敬な、今は143 kgですぞ」

「やかましいぞ、筋肉だるまが」

そう元帥と軽口を叩きあいながら、腰をどっぴりと落とし、縦拳を構える参謀総長の姿を見てようやく、提督は理解した。

中国拳法、その内でも近距離戦闘における突出した破壊力を旨とする流派。

『八方の極遠にまで達する威力で敵の門を打ち開く拳』としてその名を『八極拳』。

「悠長にお喋りをできるような相手ではないのだ。お前が銃口を突き付けた相手は、素手でナイフより速く人間を殺せる妖怪じゃ」

「過分なぞ」紹介有難う元帥殿。しかし、まだ仕事が山ほど残ってしましてな、そろそろ通らせてはいただけませんか？」

「案ずるな、死体に仕事をしろと言う奴はおらん」

重火器を向け、凶悪な笑みを浮かべる元帥に、参謀総長は苦笑で返した。

「全く、この後久々に娘に会いに行けるといいうのに、野暮ですなあ」

「娘？ 娘がいたのか、貴様？」

「ええ、無論血の繋がった娘ですよ。」

とりとめのない会話を交わしながらも両者の間合いは徐々に詰まっっていく。否、詰められている。

元帥が引き金を引かないのは、まだ避けられるという確信があるからだった。

必殺の間合いの探り合いが静かに行われているのだ。

「昔は素直で良い子だったのですが、陸軍に入ってから遅れて反抗期が来てしまってますね。仕事というのもこれから娘の命令無視を諫めに行くのですよ」

「ククク、流石の参謀総長も娘には形無しか」

「ええ、八極拳を修めたと思えば私の制止も聞かず、太極拳やら三合拳やら、はたまたボクシングやらと邪道に次々と手を出して、才覚に恵まれた子を持つというのは喜ばしいが、困ったものです」

「子煩悩なことじゃな」

嘲笑する元帥に参謀総長は同じく嘲笑し、言った。

「ほっほっほ、あなた程ではありません。あなたもその彼同様、鏑木美鈴——ご自分の娘の影を追ってこんな場所まで出向いてきたのでしよう、鏑木元帥殿？」

元帥の顔が強張り、提督は顔を俯けた。

瞬間、参謀総長の身体が躍動し、数多の銃声が室内に反響した。

☆

「ふうん、天下の横須賀艦隊、流石に手強いわねえ！」

「……………」

赤く染まった綾波の瞳を見つめながら、叢雲は愉快気に笑う。

底知れぬ彼女の戦闘力に、叢雲は今心底心を躍らせていた。

それはかつて暴れ天龍を初めて見た時と同じ感覚。

「さあ、もつと見せてちょうだい、あなたの底の、底の、底まで！」

「うるさい」

綾波のギアが、さらに一段階あがる。

それまで槍でいなしてきた綾波の正拳が、その拳が握る連装砲ごと

反応の遅れた叢雲の腹部に突き刺さる。

「がふっ……！」

「くたばってください」

綾波が砲口を叢雲の腹部に突き刺したまま引き金を引こうとするのを察知し、嗚咽をこらえながら叢雲の掌底が砲を弾く。

砲弾は間一髪彼女の真横を抜けた。

「さっきから、なんなのかしら、その出鱈目な身体能力は？ その赤い目と何か関係あるのかしら？」

「さあ、どうでしょうね」

第6位専用装備『ソロモン』。その正体は、彼女の体内を移動する超高性能ナノマシン。

これらは綾波のコントロール下であり、その肉体を自由自在に操る。

強引な身体駆動のため電気信号を中継、脳内麻薬の分泌、反応速度強化など、諸々の肉体改造を可能とする。

彼女の赤い目は、ナノマシンによる改造の副作用のようなものである。

「こんな駆動、こんな力、こんな反応、あなたには似つかわしくない。一体どんな反則をしているのかしら？」

よく見ている。そう綾波は叢雲への警戒度を一層強める。

綾波自身のスペックをまるで見透かしているかのような物言い。確かに、通常状態の綾波の身体能力でここまでの力は引き出せない。

ソロモンによる改造あってこそその力。それはまさに叢雲の言う通り反則であり、また、反則にはペナルティがあるのが必然である。

「……ッ！ そろそろ、あなたと遊ぶのも飽きましたね、くたばってもらえませんか？」

「そう言わないでよ、もつと楽しませてあげるから！」

綾波の速度上昇に対応するように叢雲も戦い方を変えた。

それまでは真正面からの打ち合いを誘うように間合いを潰していたが、今度は槍のリーチを活かし、間合いを取る。

明らかに長期戦の構え。綾波は身体を襲い始める鈍い痛みを表情

に出さないよう舌打ちをする。

「さあ、もつとあなたを見せてちょうだいな。その反則が使えなくなった後のあなたにも興味があるの」

「性格歪んでるって言われませんか？」

「性格が歪んでいることが必ずしも悪いことではないと私は思うのよ」

叢雲は気付いている。綾波の驚異的な身体能力があまり長続きはしないことを。

綾波は数秒逡巡する。

昨日、天龍と龍田との戦闘で数秒だけ解放したソロモンの奥の手。それを使えばもしかしたら勝負を決められるかもしれない。

しかし、依然実力の底を見定められない相手に対してイチかバチかをするのは避けたい。叢雲の自分を試すような態度に苛ついているのは確かだが、そこまで綾波の頭に血は昇っていなかった。

「はあ、面倒くさい敵ですね、最後には倒される運命の中ボスの癖に」

悪態をつきながら、作戦を立て直そうと決めた綾波に、直後、磯風と蜻蛉隊の集団が突っ込んできた。

想定外の乱入者に、この時ばかりは叢雲と綾波双方の目が釘付けになった。

「なっ、あなた、なんで……!?!」

「すまないが、巻き込ませてもらうー!」

磯風は、説明を求める綾波にドヤ顔でそう言った。

数分前。

『いい、磯風？ 正直、その人数と狙撃手をあなた一人で片づけるような策はない!』

『はつきり言うなあ』

『という訳で、綾波に手を貸してもらいなさい』

『いや、その綾波が単独行動で敵の分隊長とやりあってな……それに、あいつは頼んでも応じてくれないさそうというか……』

『別に了承なんて取る必要はないのよ。普通に巻き込みなさい。磯風

が綾波の方に逃げていけば自然と乱戦になるでしょう』

といった矢矧の指示の元、磯風は綾波と叢雲の戦う暴風域に逃げ込んできたのだった。

「足引つ張らないでもらえますか？」

「ぐう……！ あ、綾波だつて好き勝手やっているんだから私もそうさせてもらっているだけだぞ！」

「……………ちっ、面倒な」

あからさまに怪訝な顔で磯風を睨む綾波。しかし、直後の悲鳴と同時にその表情は驚愕へと変わった。

「が……………あ……………？」

「ぎ、貴様！ 何を……………!?!」

「私事前に言ったわよね？ 私の戦闘の邪魔をしないでつて。なんでそんな簡単な命令も守れないのかしら？」

叢雲が掲げる槍の先で、蜻蛉隊の隊員の一人が、針のような槍先に貫かれ、苦しそうなうめき声をあげながら宙に浮いていた。

「なんだ、あれは……………？」

「仲間割れ、ですかね？」

そう言っている間に、他の隊員達が叢雲を取り囲み、その砲口を彼女へと向ける。

「何の真似かしら？ 上官に砲を向けるなんて」

「黙れッ！ もう我慢ならん、あきつ丸隊長の命令だから我々は今まで貴様に従ってやっていた！ だが、仲間に手をかけた以上、もう容赦はしない！ 貴様はここで殺す！」

「あら、いいの？ そう来られると、こつちもそういう対応をせざるを得ないのだけれど？」

血走った目の隊員に嘲笑を浮かべると、叢雲は目にもとまらぬ速さで槍を振る。

槍に貫かれていた隊員の身体が砲弾のように隊員の一人に飛んでいき、衝突した。

その混乱の刹那、叢雲は砲撃と槍の刺突により、まず前方の二人の隊員を強襲。続けざまに槍で貫いた方を引き寄せ、その体を盾にしつ

つ、瞬く間に包囲していた隊員達を蹂躪していった。

十秒も経たないうちに、倒れた彼らの血で周囲の海面が真っ赤に染め上げられていた。

「ぐ……ぐそ……」

「あら、まだ息があるの？ 頑丈ね」

笑いながら槍を振り上げ、トドメをさきさんとその穂先を脳天に向け、勢いよく突き立てる。

しかし、その先端は、連装砲の重厚な鋼版に遮られた。

「叢雲！ お前、自分の仲間は何をやってるんだッ！」

「あら、敵を庇うの？」

突然の介入者に僅かな驚愕を見せ、磯風の顔を覗き込む叢雲。

磯風はこの瞬間、彼女のターゲットが瀕死の蜻蛉隊から自分に切り替わったことを察知し、反射的に距離を取ろうと試みる。

しかし、叢雲の手が磯風の胸倉を掴み、それを許さなかった。

「そういえば、あなた以前は犬見提督の鎮守府にいたんですってね」

「犬見を、知っているのか……!?!」

「元秘書艦だったのよ、ずっと昔の話だけれど。でもおかしな子。あなたからは犬見提督のニオイがしない」

叢雲にとんでもない力で引つ張られ、磯風は離脱するどころかろくに身動きがとれない。

「彼は敵を助けるなんて教育をする聖人じゃなかった筈だけれど。一体何があなたの今の行動を、形成したのかしら？ 凄く興味深いわ」

「私が、私が助けたいと思ったから、助けた！ 何よりな、気に入らないんだよ！ 平然と仲間の手をかけるような奴がッ！」

浜風、谷風、浦風のことを思い出していた。

叢雲が仲間である筈の蜻蛉隊を蹂躪する様は、過去の磯風自身を彷彿とさせ、頭を煮えたぎらせていた。

しかし、叢雲の方はその返答に対し、どこか不満げな表情で冷淡に言葉を返した。

「そう、それは美しい精神ね。でも、それで自分が死んだら意味がないとは思わなかったの？」

質問と同時に槍の切っ先が磯風の眼前に飛んでくる。

それを妨げたのは、叢雲の側面から繰り出された鳩尾を挟む右フック。目を赤く光らせた綾波による攻撃だった。

これには叢雲も耐えられなかったのか、苦悶の表情で体をくの字に曲げ、磯風の胸倉を掴んでいた手を離した。

「くたばれ」

横須賀第一艦隊所属駆逐艦たる彼女の攻撃はここでは終わらず、拳と共にめり込ませた連装砲から、続けて三発、火が噴いた。

零距离の砲撃を食らい、叢雲の身体が数メートル吹き飛ぶ。

「私を相手に余所見なんて、随分と舐められたものですね」

「……ふふ、そう、焦らずとも、ちゃんと相手してあげるっていうのに」
海面からゆっくりと起き上がってくる叢雲に大きなダメージを与えた手ごたえはない。

隣で砲を構えつつ、綾波はここぞとばかりに磯風に悪態を浴びせる。

「全く、考えなしに飛び出さないでもらえますか？ 尻ぬぐいするのはこっちなんですから」

「す、すまない」

「しかも、さつきまで戦ってた敵をなんて、甘ちゃんにも程がありませんかね」

「……………すまない」

「でも、あいつが気に入らないというのは心から同意します」

「え？」

「もう次は助けてあげられるかわかりませんか？ 気合い入れてついてきてくださいよ」

「図らずも状況は僅かに好転していた。敵は減り、そして、磯風と綾波は共闘関係を結ぶに至った。

しかし、依然敵の力は測りきれず、優勢と決めつけるのは楽観が過ぎる。

むしろ、磯風にはここからが本番とも思えた。

「さあ、ここからが正念場だ……！」

☆

『いいかい？ あんたの存在は非常に危ういバランスの中に成立している。だから、決して艦装を使って生物を撃つてはいけないよ？ ここにはどんなに僅かでも必ず生命への殺意や敵意、害意があるからだ。それはあんたを深海側へと崩落させる因子となる。だから、決して砲撃をしてはいけない、明石さんとの約束だ、いいね？』

私は海面に数十回目になる倒伏を重ねながら、脳裏にここに来る以前、『明石』から言われた台詞を思い出していた。

そして、目の前には、倒れる私を見下ろすあきつ丸の姿がある。

「まだ意識があるでありますか」

「私は……悪ですか……？」

「その通りであります」

あきつ丸は当然のように肯定した。

「善とは、真っ白なシャツであります。そして、悪とは汚れたシャツ。あなたは半人半深の自分が善か悪かと問いましたが、半分も汚れにまみれたシャツが善な訳ないではありませんよう」

「なるほど、僅かでも深海棲艦であるならば、私は悪というわけですか。厳しいですね」

「勘違いしているようですが、善悪は対極する概念でこそあれ、等価ではないのでありますよ？ いくら善行を積もうが何か一つでも罪を犯せばそれは悪人。悪人であることより善人であることがよほど難しいのですよ、故に善人は尊いのであります」

新品のシャツに汚れをつけるのは簡単でも、綺麗な状態を維持し続けるのは至難。

つまるところ、私は半分も深海棲艦が混じっている時点であきつ丸の判断基準からして悪以外の何者でもなかったわけだ。

血の味のする唾液を飲み込みながら、私は再び立ち上がり、あきつ丸の腕を掴む。

戦うためにはない。もとより戦う力もないのだ。

より長く、天龍のために一秒でも時間を稼ぐ。ただそれだけのために、まだ行かせるものかと私は彼女の腕を精一杯掴むのだ。

「よく立ち上がったであります」

容赦なく、あきつ丸の鉄拳が再び私の体中を撻る。

腕を前に、身をかがめ、防御姿勢を取りながら、それにできる限り耐えることしかできない。

こうして、既に障害にもなれない私をあきつ丸が振り切ろうとしなのは一重に彼女の信念が、私を捨て置きたくないからに他ならない。

私が彼女にとっての悪である以上、彼女は私の息の根を止めるべく拳を振るうのだ。

「さて、既に7分が経過した頃。そろそろ限界でありましょう?」
「……………」

再び海面に倒れる私にあきつ丸が吐き捨てるように言った。

「時間稼ぎ、のつもりでありましょうが、そこにどれだけの意味があるのでありますか? どうせ、この後D W—1は死ぬ。そして天龍も、他の仲間達も全て死ぬ。あなたが命を賭けて数分の時を稼いだ所で、結末は変わらないでありますよ」

「今……なんて、言いましたか……?」

私は息絶え絶えにあきつ丸に問い返す。

聞き逃せない、言葉が聞こえたから。

「悪でないなら、手を出さないって……」

「D W—1を庇い建てたあなた方が何故悪でないと思うのでありますか? しかも、こんなに表立って反抗に乗り出して。これは国家反逆罪に問われても文句は言えないでありますよ?」

「でも……私には逃げれば見逃すって言ったじゃないですか……!」

「都合よく解釈しないで欲しいでありますなあ。D W—1を処理した後に殺すという意味でありますよ。私の中ではあなた達の処分は既に決定事項であります」

私は、あきつ丸の足を掴む。

それだけは駄目だ。

七丈島艦隊の皆が死ぬなどと聞いて、黙って倒れていられない。

同時に、この言葉のおかげで、私の中で『覚悟』が決まった。

「粘るでありますな。しかし、そろそろ沈んでもらうでありますか」

「そうは、いきません……」

私は渾身の力を込めてあきつ丸の両腕を掴み、動きを止める。腕の血管が破れ、ところどころで内出血を頻発し、鈍痛が響くが、最早知ったことではない。

「がっ……まだ、こんな力を……!?!」

突然の私の反撃に驚いたのか、彼女の表情が焦燥に歪むのが見て取れる。

（こいつ、何かやる……! 鈍い殺気が伝わってくる! これは、恐らく追い詰められた末の捨て身の反撃……ッ! 拙い、拘束が振りほどけない!）

「が、はあッ! ぜえ……ぜえ……」

「離せ……ッ!」

あきつ丸の中段蹴りが腹部に深く突き刺さる。

血を吐き出しながらも、私は手を緩めない。この最後の一撃だけは、外せない。

「さあ……受けてもらいましょうか……大和型の誇る46cm三連装砲一斉射ッ!」

「まさか……零距离砲撃ッ!」

私の脇下から延びる二門の46cm三連装砲の砲口があきつ丸の真正面に向いた所で、彼女の顔が驚愕に包まれ、同時に青ざめていく。「いや、使える筈がないッ! 使えるのならば、この瞬間まで撃たなかった理由がないであります!」

「ええ、さつきまで使えませんでした。でも、たった今使えるようになったんです」

あきつ丸が、七丈島艦隊をも殺すと言い切ったから。

ここには神通、綾波、何よりも武蔵がいるから。犬見艦隊との戦いの時とは違う。後の事は安心して任せられる。

だから、時間稼ぎに留まる訳にはいかなかった。

「弾薬も積んであります。まあ、元々は重量を重くして壁役としての能力を底上げするためでしたが」

「ぐっ、クソ! 離せ! 何故でありますか!?! とつくに限界の筈!

苦しい筈!? 死にたくない筈!? 一体何が、あなたをそこまでさせるのでありますか!?!」

何度も何度も私の拘束が緩むことを期待してか腹部に蹴りをいれるあきつ丸。

しかし、私の腕の力は緩まない。

痛みで緩むような覚悟では、やってない。

「私は、七丈島が大切なだけ」

私に居場所をくれたこの場所が、この島にいる誰もが、自分の存在よりも遥かに重いものだから、それは私にとって存在を賭ける理由になってしまうのだ。

「第一、第二主砲——斉射……始めッ!」

第九十九話「君の使い方を一番知っているのは君自身ではなく、この僕だ」

「素晴らしい技の冴えでありますな、まるゆ。ナイフの扱いは勿論でありますが、何よりもその無音潜航は目を見張るものがある」

「は、はい！　ありがとうございます！」

私の部隊を訪ねてきたあきつ丸と呼ばれた黒い軍服と対照的な真っ白な肌をした少女はそう言って、笑いかけてくれた。

私は人から褒められることが少なかつたので、その称賛が素直に嬉しかった。

「しかし——」

「ひっ……」

あきつ丸は、冷たい表情になると、私の首筋に手を添えた。

瞬間、私は悟った。今、まさに、己の生殺与奪を彼女に握られたことに。彼女の気分一つで、私の首など小枝のごとくへし折られるという事実に。

それだけの殺気を、唐突にぶつけられたのだ。

脂汗が滲み、体の震えが止まらなくなる私を見て、殺気を解いて不満げにあきつ丸は言った。

「しかし、あまりに心が弱い。その気性は優しいや穏やかというよりも、臆病でありますな」

「わ、私は、争うことも、殺すことも……嫌い、なので」

「では何故陸軍に？　何より、何故無音潜航とナイフを覚えた？」

「争うことも、殺すことも嫌いです……でも、傷つけられたり、殺されたりするのは、もっと嫌なんです」

実のところ、私はどこまでも自己中心的な人間だった。

私が争いを好まないのは善性からではなく、争いによって自分が傷つくことを恐れていることだ。だから、陸軍に入った。

海軍とは違って前線とは程遠く、かつ殺されない技術を学べる。

殺されたくないから、傷つきたくないから、殺し、傷つける術を身

に着けた。

自分から決して殺意は向けない、しかし、殺意を向けられたならば殺意を返す。

保身的かつ受動的な殺意こそが私の本質である。

「それに、奇襲に、敵の強さは関係ないので……」

奇襲、暗殺に敵の戦闘力は関係ない。

戦闘力とは文字通り、戦闘でしか機能しないものだから。即ち、私のサイレントアサルトは、強者弱者の区別なく、平等に死を与えることができる。

それは、殺されないまま殺すことができる私の理想形。

「あはは！　ようやく、お前の芯が見えたであります！」

その言葉を聞いて、あきつ丸は心底嬉しそうな声をあげた。

「決めた。まるゆ、私と共に来るであります。お前の力が必要であります」

☆

「うあ、ああ、あああああ！」

目の前の武蔵という名前の怪物から、私は一目散に逃げた。

気配を消すのではなく、彼女から少しでも距離を取るべく逃げたのだ。

「ああ、艦装保護膜を発動してしまった。これ一度オンにすると艦装を外すまで消えないのだが……」

「うん、艦装保護膜オフにできる時点でいかれてるからね？」

「そういうお前は、まるゆの……ストーキングとやらはいけそうなのか？」

「うん、大丈夫！　五感が満足に使えれば半径100メートル範囲でサーチできるよ！」

「お前も大概おかしいぞ」

「だってまるゆはお姉さまだから」

「その呪文はまだ必要なのか」

一瞬、虚ろな目になるプリンツに苦笑する武蔵。
もうすっかり余裕を取り戻したように見える。

それはそうだろう。

最早、私達の攻撃は武蔵の装甲を貫けず、そして、私のサイレントアサルトもプリンツによって封じられた。

詰み、なのだ。

私の退路を確保しようと他の隊員達が砲火をあげるが、それも今や牽制の意味すらなさない。

「まるゆ分隊長！ 我々が時間を稼ぐので、その間にあの化物を！」
無理だ。できるわけがない。

私は首を横に振り、懇願の瞳で隊員を見つめた。
もう無理だ、限界だ、許してくれと。

「まるゆ分隊長！ しっかりしてください！ あなたがそんなことでどうするのです！」

私を激励しようとしているならそれは無駄な行為だ。
今まで私の情けない姿を見てきてもういい加減気付いているだろう。

私は、本来戦いだとか、ましてや殺しなどには一番向いていない脆弱な心の持ち主なのだ。

「——ふむ、終わりか？ ならばこちらから行こう。プリンツ、良く頑張った。後は私に任せて退がっている。でないと、私に砲撃が集中しないのでな」

「最後の一言がなければ本当にかっこよかったんだけれどね」

武蔵が、主砲を構え、こちらに一歩前進してくる。

圧倒的な力の塊が、暴力の城塞が、迫ってくる。

あれは殺せない。あれには何も通じない。あれと戦ってはいけない。

「う、おおお！ 主砲、一斉射！ 撃てエ！ 撃ちまくれ！」

雄々しい怒号と同時に、数多の砲撃音が海域に絶え間なく鳴り響く。

しかし、武蔵はその全てを、まるで意にも介さず、その足は止まることはない。

「砲だけでは駄目だ！ 魚雷だ！ 魚雷も撃ち込めえ！」

「いいぞ、当ててこい！ 私はここだ！」

武蔵は避けることはない。むしろ嬉々としてそれらの攻撃力を迎え入れる。

そして、耳をつんぎく爆発音と水飛沫の後、私達はようやく気付く。この世には、戦ってはいけない存在というものがいるという事実

に。
「ぐ、お、おお！ おお！ おおおおおおお！」

「主砲、一斉射だ。薙ぎ払えッ！」

それが武蔵から隊員達に向けた死刑宣告であり、そこからは一方的な蹂躪が始まった。

一つ、主砲が吠えれば、二人が吹き飛ぶ。

十発にも満たない砲撃により、残されたのは私一人だけになった。

「ひっ、ひっ……ひぐっ！」

「さて、後はお前一人のみ。どうする？」

恐怖で視界が歪む中、私を見つめる武蔵の視線だけは鮮明に見えていた。

「分、隊……長……海の中に……逃げ……」

「我々が……時間、を……稼……」

弱弱しい声でも私を逃がそうと自らの負傷も厭わず立ち上がろうとする隊員達を見て目を覆いたくなくなった。

思考が痺れ、脳が現実を拒絶しかけている。

「さあ、どうする！ どうするんだ、まるゆ!？」

周りを見る。私のために立ち上がるうと苦痛にもがく仲間達が見える。

目の前を見る。私を見つめる武蔵が見える。

ゆっくりと、目を閉じる。私に手を差し伸べたあきつ丸の姿が見えた。

「——無暗に力を行使する暴王の目も届かぬ闇の中に私達は潜み、その愚行を諫める……！」

「……ほう」

「暴王にとっての——力にとっての天敵とは、私……！」

先刻、折れたナイフは捨てた。スピアは残り二本。

私はそれを両手に構え、恐怖を必死に押し殺しながら切っ先を武蔵に向ける。

今までは、殺意を向けられたから殺意で返す。受動的な殺意が私だった。

☆ 今、私は、私の意志で、敵に殺意を向けた。

まるゆの目が変わった。恐怖で塗りつぶされた色から、恐怖を押しつぶした色に。

嫌な予感がすると顔を曇らせるプリンツとは対照的に、武蔵はそれに対して優しい笑みを浮かべた。

「武蔵——」

プリンツが声をかけようとした所で、まるゆの姿が消えた。

否、海中に潜航したのだ。

あまりに無音かつ無初動。まるで、自由落下していくかのような潜航はあたかもその場からまるゆが消えたかのように錯覚させた。

慌てて、プリンツは耳を海中に沈ませる。自分のサーチなしに、武蔵はまるゆの居場所が掴めない。今の武蔵にまるゆの攻撃が通用するかは怪しいが、それを考慮しても助力が必要だと直感的にプリンツは判断した。

「ぬおっ！」

しかし、遅かった。いや、速すぎた。

プリンツのサーチが完了する前に、まるゆのナイフが武蔵の真下から彼女の足を突き刺す。

艦装保護膜で守られた武蔵には傷一つつかないが、構わずまるゆは再度潜航する。

「うわ、まずい！ 私のストーキングお構いなしにスピード勝負に出てる！」

如何にプリンツが正確に海中のまるゆを見つけられても、それを武蔵に伝達するために数秒を要する。

ならば、その数秒の間隙のうちに攻撃を済ませれば良い。

まるゆは気配を消すことなく、気付かれてでも、最速最短で攻撃を繰り返す戦法に割り切ったのだ。

「プリンツ、構わない。ここからは私一人でやる」

武蔵は一言そう言つて腰を低く屈めた。

まるゆの攻撃を武蔵が予測することはできない。

しかし、その表情に一切の動揺も焦燥も見えなかった。

そして、まるゆの一方的な攻撃が何百と繰り返されたその時、戦況は動いた。

「来た……！」

ナイフの先端が、ついに武蔵の艦装保護膜を突き破り、足部艦装に届く。同時に、まるゆから思わず声が漏れた。

僅かな攻撃力でも、同じ個所に何百と攻撃を重ねれば、やがて、綻ぶ。まして、蜻蛉隊の艦装『ワダツミ』の攻撃力は戦艦に匹敵する。その一斉攻撃を受け切つて無傷の筈はない。

思いのほか、武蔵の艦装はまるゆの想定の遙か早期に悲鳴をあげたのだ。

まるゆが戦況を支配したかに見えたこの瞬間、武蔵も動いた。

「むんー！」

「えっ……!?!」

左足部に突き立てられたナイフ。それを武蔵は自ら足を振り上げ、押し込んだ。

艦装の破壊音と共に深々と突き刺さるナイフ。その意図にまるゆが気付くのは数秒の後であり、あまりに遅すぎた。

「ナイフが、抜けない……!?!」

「足一本はくれてやるッー！」

まるゆがナイフを手放すより早く、武蔵が足を真上に振り上げる。ナイフを握っているまるゆは一本釣りの要領で宙に打ち上げられた。

宙に飛ばされてはもう、何もできない。そのまま落下してくるまるゆを下から武蔵の拳が撃ち抜いた。

「あ………うっー！」

「ここまでだ」

飛び出るかと思うぐらい、大きく目を見開き、衝撃に悶えたまるゆは、ぐったりと武蔵の腕の中に沈んだ。

——そう、見えた。

「まだ、です……!」

「何!」

既にまるゆの腕からそれは投げられていた。

手榴弾。

海戦向きではない、陸軍の武器。

しかし、互いの身体に手が届くほどの近距離ならば、使いようはあった。

手榴弾は、狙い通り、武蔵の右足の艤装にぶつかり、その周囲を爆発の中に包み込んだ。

「武蔵!」

「——心配するな、プリンツ。私は武蔵だぞ?」

プリンツの悲鳴があがるが、彼女の不安を裏切って、即座に武蔵の声が返ってきた。

今度こそ力尽きたまるゆを両腕で抱えた武蔵は、どこか神妙な顔つきをしていた。

「……ふう、やっと終わったあ! もう、本当にしんどかったよお」

「ああ、全くだな」

「……ん? なんか悔しそう?」

「ああ、してやられたよ」

武蔵はそう言つて、駆け寄ってきたプリンツに自分の足元を見るよう視線で促す。

そこには、完全に壊された足部艤装が見える。

足部の艤装は舵と推進器だ。

それを壊されたということは、武蔵の足を切り落としたことと同義なのだ。

全体としてのダメージは少破程度でも、被害はその実あまりにも甚大。

武蔵のこれ以上の継戦は望めなかった。

「私の足を奪うつもりなのは見抜いていた。ならばと、片足を囮にし、裏をかいたつもりだった。しかし、私は見抜けていなかったのだ。この気弱な少女の奥底に隠された、執念を」

「……………」

「わかるか、プリンツ？ この少女は、成長したのだ。それも戦いの中でな。こういう相手が一番怖いのだ」

「そっか、自分の弱さを乗り越えたんだねえ」

プリンツはそう言うと、まるゆの顔を見て笑った。

「——凄いなあ」

その羨望と諦念の入り混じったプリンツの小さな呟きを、武蔵はあえて聞かなかったふりをした。

☆

「いいわ、最高よ、二人とも！」

「調子に——」

「——乗るなッ！」

左右から挟み撃ちにする形で砲撃する綾波と磯風の砲口を槍の両端で跳ね上げ、射線を逸らす叢雲。

磯風と綾波二人がかりですらまだ彼女を押し切れないでいた。

「さて、そろそろかしらね？」

叢雲のその言葉の数秒後だった。

今まで、綾波と同等かそれ以上の機動力で叢雲に食い下がっていた磯風の足が、止まった。

限界だった。既に、蜻蛉隊との戦闘でほとんど体力は使い果たしていたのだ。

怒りに任せて力を振り絞ったが、それも逆に無駄な体力の消費を招いた。

「あ…………」

（ふうん、あの機動力を発揮できる艦装センスは凄いけれど、やっぱり予想通り、体力不足が致命的ね。これでこの子の底は見えたかしら）

「磯風…………!? 全く、何、やってんですか〜」

(後は、綾波ね。まだ、何か奥の手を隠してる感じがするのよねえ、もう少し追い詰めないと見せてくれないのかしら？ それとも――)

綾波の攻撃を回避するや否や、叢雲は一直線に、足の止まった磯風に向かっていく。

(仲間を助けるためなら、出し惜しみはしないかしらね？)

「ぐ、う……い！」

綾波は思考する。

今、ここで磯風を助けるためには奥の手を使うしかない。

しかし、それを使うということは、勝負を決めるということだ。奥の手を発動させれば一分ももたない。

全く疲弊も隙を見せない叢雲に対して今、それを使って勝負を決められるのか。

答えは否だ。

(ここで私がやるべきは、今磯風を狙って背中を見せた叢雲の隙を突いて突破口を見つけること。悪いけれど、助けませんよ)

「ああ、それで正解だ」

叢雲の槍が突き出された瞬間、磯風の身体が動いた。

槍に対して半身になって外側に避け、そのまま槍を掴んで引つ張り、自らの身体を前方に押し出す。槍を突き出す力を利用され、叢雲の身体も容易く引つ張られ、その背中を磯風の眼前に晒した。

「ここで二発砲撃。一発目は退路を塞ぎ、二発目で当てる」

すぐさま砲撃を察知し、左に避けようとした叢雲の退路を見事に塞ぎ、急停止した所に砲弾が命中する。

綾波すら目を見張るほどに綺麗な有効打だった。

「な、なんなのよ……急いど!？」

狼狽し、叫ぶ叢雲の声は磯風には届いていない。

彼女には、それ以上に耳障りな声が今も聞こえているから。

『そろそろ理解しただろうか?』

「黙れ」

『君の使い方一番知っているのは君自身ではなく、この僕だ』

「うるさい、黙れ。お前は指示だけ下せばいいんだ。幻覚が余計な口を叩くな」

『ますますもって反抗的になったものだ。だが、それすら僕は使いこなして見せよう』

脳内に、しばらく聞かなかった宿敵の音が響いた。

矢矧の指揮を叩き込まれてからは聞こえなくなった筈の声。

二度と聞きたくない声。

しかし、ある意味では矢矧以上に、磯風がその指揮能力を認めている男の声。

『こちらの駒は君と横須賀の綾波。敵は駆逐艦叢雲一人。苦戦する理由がわからないな』

「黙って、指示を出せ」

『いいだろう。君が再び僕の道具になるというのなら、この犬見誠一郎が勝利を約束しよう』

犬見誠一郎。

磯風の心の奥深くまでに根付いた闇を、彼女自身が呼び起こした。全ては勝利のために。

「はは、あははは！ いいわ！ いいわよ、磯風！ あなたの全てを出し切りなさい、底の、底の、底までね！」

第百話「そういうものだ、生きることより大切なことを見つけた人間は」

『そもそも、前から質問したかったんだ。僕の艦隊戦術が君に合っていないと断じた軍神様にね』

私の脳内で耳障りな声はかくも語る。

『軍神様は君の艦装センスに夢中になってるのか、君に指導した全ての戦術がそれ前提で組み込まれていた。でも、それは君の体力が尽きたら一つも使えないじゃないか。体力不足という大きな欠陥が見えていないのかと問いただしたかったね』

矢矧は言った。犬見が叩き込んだ模範戦術は合っていないと。

しかし、犬見は返す。磯風の機動力を活かした戦術は結局、体力勝負。ただでさえ、体力面に不安がある磯風にそんな戦術を使わせてどうするのかと。

『短期決戦で如何なる勝負も決められるとでも思ったのか？ それとも、軍神様自身がフォロースするつもりだったのかな？ 今はいいようだが』

「少し黙ってられないのか？」

『真に必須なのは機動力を最大限活かした戦術ではなく、体力が尽きた時の立ち回り方だ。最低限の体力での効率的な艦装運用こそが肝要。そこを理解していないとは軍神矢矧にはがっかりさ』

「あのな、そういうのは私の脳内じゃなく、本人に言ってもらえないか？」

『残念ながらこの私は犬見誠一郎本人ではなく君の中のトラウマが具現化した幻覚だからね、無理だ。君の口から彼女に伝えておいてくれ』

「嫌に決まってるだろう！」

思わず大声で拒否する。

自分の声に驚いて、ハッと我に戻る。

綾波が何か残念なものを見るような目を向けていた。

「急に独り言とか怖いんでやめてもらえますか〜?」

「違うんだよ!」

「随分余裕そうねえ。その余裕、奪ってみたくなくなっちゃうわ」

綾波に弁解の言をまくしたて、視線を外したのを見計らって叢雲は再度槍を向ける。

その瞬間、頭の向きはそのままに、右腕が上がり、その手に持った連装砲が叢雲に向けて火を噴いた。

犬見の指示だった。

「なっ!?!」

『少し隙を見せたら真つすぐに突っ込んでくるとは、意外と単純だな』
『お前のところにいた艦娘らしいぞ。覚えていないのか?』

『さつきも言ったが僕は犬見誠一郎本人ではないからね。次、左旋回しつつ三発適当に牽制』

犬見の指示に従い、砲弾を三発撃つ。

どれも叢雲には掠りもしなかったが、おかげで注意を引き付け、かつ行動範囲を絞れた。これにより、攻撃手^{綾波}が敵に切迫する隙が生まれ
た。

「良い援護射撃ですよ〜」

「綾波!?!」

再び肉弾戦を始める綾波と叢雲。しかし、牽制射撃に足止めを食らったおかげで綾波が先制し、そのまま叢雲は綾波の猛攻を捌くのは愚か、凌ぐので精一杯で、守備一辺倒になってしまう。

おおよそ、流れはこちらに向いてきている。後、一押しだ。

「なるほどね! ガス欠でアタッカーとしての役割を果たせないと判断し、サポートに切り替えたってわけね! 面白いじゃない!」

しかし、防戦一方にも関わらず、依然叢雲の声はとても楽しそうに聞こえた。

『強いな、あの叢雲。異常に強い』

「そうだよ、だから二人がかりでも手こずっているんだ」

『それでも詰み筋は既に見えているのだけれどね』

「本当か!?!」

犬見の心強い言葉に思わず声が上ずる。しかし、反面、犬見は少しの間押し黙ると、何かを諭すような口調で語り掛けた。

『磯風、それはお前にも見えているはずだ』

何を言い出すのだ。犬見に見えているものが私に見えているはずがない。

『何度も言わせるな。僕は犬見誠一郎本人ではなく、お前が作り上げたお前の一部だ。すなわち、僕にわかることはお前にもわかる』

「……………」

『僕は君の本能が犬見誠一郎という形をもって現れたもの。気付け、磯風。既に勝利に必要な情報は揃っているんだ。ここで僕に教えられて理解するようでは駄目だ』

突然の犬見の非協力的な態度に私は大いに困惑した。

いつまでもここで綾波と叢雲の戦闘を眺めていればいいわけではない。まだ、あと一押し勝負を決めるには足りていないのだ。

そして、その一押しを凶れるのは私だけだ。

だからこそ、犬見の指示が欲しかった。それなのに、ここまで来て彼は一変して自分で考えろと投げだしてしまう。

私の困惑は至極まっとうなものだろう。

『自ら思考し、自ら答えを出してみせろ。艦娘が道具ではないと言うのなら』

「……………」

犬見の言葉に私は再度落ち着きを取り戻す。

その通りだ。思考を捨て、言われたまま動くのが嫌だったから私は犬見を否定したのだ。ならば、私は答えを待つのではなく、答えを出さなければならぬ。

犬見は言った。既に情報は出揃っていると。

私にも、勝利への道筋は見えていると。

「……………」

私がそう呟いたのと同時に叢雲の槍が大きく薙ぎ払われ、綾波の猛攻が止められ、再び戦況は元に戻った。

「駄目ねえ、綾波！ 出し惜しみしたまま勝てるほど甘くはないわよ、

「私は！」

「くそが、うざいですね〜」

決めきれなかったことに余程腹が立っているのか、顔は笑っているが言葉と目が笑っていない綾波に向かい、私は精一杯の大声で叫ぶ。

「私が隙を作る！ 合図したら仕留めてくれ！」

「うるさいです。そんな大声出さなくても聞こえてますし、言われなくても隙が出来たら決めますし〜」

「あはは、そんな簡単に隙を見せてあげるわけないでしょ？」

唐突に槍の穂先が私に向かって伸びてくる。

間一髪、横に飛んで躲すが、既に叢雲の身体は私を仕留めるため肉薄していた。

「ほらほら、逃げないと一瞬で死んじゃうわよ！」

「ぐつ、くそー！」

「綾波も背後から撃つならいつでもどうぞ！ その時は磯風に当たるかもしれないけれど！」

しつかり、背後の綾波の警戒も解いていないことをアピールしつつ、その攻撃は徐々に猛威を増していく。

ただでさえ、体力は底をつきかけている。何度も吐き気に襲われながら必死で私は距離をとるべく逃げ回るが、叢雲はその意図を察してか私に執拗に接近する。

「さあ、何か策があったんでしよう!? この状況で出せるものなら出してみなさい！」

「ああ、見せてやる！」

叢雲が私を警戒し、接近してくるのは想定内だ。

私は距離を取らせまいと真つすぐに飛び込んでくる叢雲に向け、魚雷を発射した。

「この距離で、六本の魚雷を避けられるか？」

「なるほど、ね」

魚雷が爆発し、叢雲のいた場所を水柱が包み込む。

「今だ、綾波！ 叢雲の背後を取れ！」

「——あはは、それは無理な注文よ。まだ隙なんてできてないもの」

「がつ……」

私の背後から声が出て、続けざまに胸に鋭い痛みが走る。

叢雲の槍の切っ先が、私の身体を貫いていた。

「魚雷の水しぶきと爆音が仇になったわね。そのせいで、私が魚雷を避けて背後に回ったことに気付かなかった」

「な、どうやって……」

「棒高跳びの要領で魚雷に槍を突き立てて、あなたの背後までジャンプしたのよ。まあ、無傷とはいかなかったけれど」

さもなんでもないことのように語るが、出鱈目だ。

魚雷のそんな避け方聞いたこともないし、できる気もしない。化物か、この叢雲は。

「さて、これで後は綾波一人——あら？」

水しぶきで覆われた前方の視界が晴れるや否や、叢雲は異変に気が付く。

先程まで自分の背後、すなわち、今見つめている方向にいた筈の綾波が今は見えない。

私は、自分の作戦がすっかり綾波に伝わっていたことと、詰み筋が完成したことに、安堵の息を血と共に吐いた。

「確かに隙は作ったぞ、綾波……！」

「上出来です……！」

「馬鹿な、いつの間に後ろに?!」

魚雷を放った瞬間、既に、綾波は叢雲が私の背後にジャンプしようとしていることに気が付き、動いたのだ。

私の指示通り、叢雲の背後を取った。

「ソロモン、中枢接続。『潜在解放』」

（今までにない圧!? 拙い！ 来る！ 綾波の『奥の手』が！）

叢雲は回避は間に合わない判断。迎撃しようと槍を引き抜こうとするが、それもできない。

私とその槍を抑えているから。

「くたばれッ……！」

綾波の目がこれまでにないほど赤く輝き、直後、空気を震わせる振

動と台風の如き風圧と共に、拳が叢雲のこめかみを撃ち抜いた。

☆

人の身体は脳がリミッターをかけており、普段は60%程度の能力しか発揮できないという。これを顕著に示す言葉が「火事場の馬鹿力」である。

普段、制限されていた力が、生命の危機などに瀕した際に脳のリミッターが外れ、発揮できるようになるのだ。

O.C.E.A.Nランキング第6位専用装備『ソロモン』はこのリミッターを任意的に解除することが可能である。これこそ奥の手、『潜在解放』と呼ばれる機能である。

「——っ」

綾波の目から血の涙が溢れて流れ出る。

それだけでは留まらず、彼女の身体のうちこちでは血管が破裂し、筋繊維がちぎれ、骨が軋み、殴った右の拳の指はその数本が折れていた。

『潜在解放』のフィードバックである。

何故、脳がリミッターをかけているのか。身体がその全力に耐えきれないためである。

故に、いざという時にしか発揮できないようにされているのだ。

今の綾波の『潜在解放』持続時間は最長15秒程度。

その後、綾波は戦闘不能になり、しばらく動けなくなる。まさに、最後の勝負に踏み切ったのだ。

勝てる、と確信したのだ。それなのに——

「ぐ、おお……！ おおおおおお！」

「まだ、倒れない!?!」

確かに綾波の拳は叢雲の側頭部を撃ち抜いた。普通の人間ならば首が千切れるほどの威力。しかし、相手は底が見えない化物、叢雲。人体急所の一つであるこめかみに凄まじい攻撃を受けて尚も意識を寸前で保っていた。

頭から流血しながら、叢雲は槍を手放し、初めて砲を綾波に向ける。綾波は動けない。回避より、自分の攻撃が届くより早く、叢雲の砲

が自分を仕留めることがわかったからだった。

1. 4秒、どうシミュレートしても間に合わないと気づいてしまったからだった。

(後、一歩……届かない……っ！)

「惜しかったわね……！」

満足げな笑みを浮かべる叢雲と、顔を歪ませる綾波。

これで終わりだと、双方が確信する中、磯風は叫んだ。

「止まるな、綾波！ まだ終わってないぞ！」

その直後だった。

「——ありがとよ、嬢ちゃん達。これで仲間の仇が討てる」

「距離924 m、風速2 m、北東の風。ボデイショット、エイム」

そう呟いたのは磯風達の遙か遠方から狙撃砲の引き金に指をかけた蜻蛉隊唯一の狙撃手、鶴屋とその隣で双眼鏡を覗く観測手だった。

仲間を惨殺され、既にその目標は七丈島艦隊から叢雲に変わった。

そして、先刻の磯風の大声。

『私が隙を作る！ 合図したら仕留めてくれ！』

叢雲に倒された隊員の持っていた通信機を介しこの声が聞こえたという事実、それはこの言葉が自分達にも向けられていることを意味する。それに、鶴屋達は気が付いた。

そして、約束の時が来た。

「——ファイア」

瞬間、叢雲の腹部に砲撃が着弾した。しかし、まだ叢雲は倒れない。

既に満身創痍ではあるが、後一押し、まだ足りない。

「ああ……!?! まだよ……まだあ……ッ！」

「いいえ、今度こそ終わらせませ……！」

「——っ！ 綾波いいいいッ！」

2秒、突然の砲撃に混乱し、ひるんだ叢雲。

しかし、綾波からすれば、勝利には十分すぎる時間だった。

「これで、詰みだ！」

『見事だ』

綾波の左拳が、今度は叢雲の腹部を抉り、数十メートル先の海面ま

で吹き飛ばした。

☆

「が、は……………！ ぜえ……………ぜえ……………」

「綾波！ 大丈夫か！」

「は……………？ 大丈夫なわけ、ない、でしょう……………見て、わからないんですか……………？」

今度こそ、叢雲が起き上がってこないことを確認し、力尽きた綾波は海面に伏しながら尚も悪態をついた。

その様子を見て、取りあえずは大丈夫そうだと判断し、叢雲の飛んで行った方向に視線をやる。

今、この場で叢雲の最も近くについて、かろうじて戦えるのは私だ。ならば、最後に果たすべき役目がある。先刻引き抜いた叢雲の槍を置いて、私は言った。

「叢雲の生死を確認してくる」

『生きていたらどうするんだ？』

「……………拘束する」

犬見の笑い声が脳内で響いた。大方、殺さない私を甘いと笑っているのだ。

想定通りの反応だ。私は何も言い返すことはしない。どうせこの後、嫌味を言われることも想定内のことだ。

しかし、返ってきた犬見の言葉は想定外のものだった。

『お前らしい答えだ。ならそうすればいい』

「どういう風の吹き回しだ？」

『別に、僕の道具でないなら僕の関知するところではないからね。それだけさ』

思いのほか殊勝な態度の犬見に私は困惑して言葉が出ない。

そんな私の心を見透かすように犬見は噛み殺すような笑いを洩らすと、再度口を開いた。

『さて、もう僕は必要ないだろう？ そろそろ消えることにするよ』

「……………ああ」

『もう、二度と呼び出してくれるなよ？』

その言葉を最後に、私の心から犬見が霧散してなくなったのがわかった。

再び、私の奥底に還ったのか、それとも――

「いや、今は、叢雲のことが優先か」

答えを出すのが怖くて、私は現実には逃げた。

綾波に吹き飛ばされ、水柱が上がったあたりで叢雲は見つかった。呼吸はある。気絶しているようで起き上がってくる気配はない。

「取りあえず艦装を外し、拘束させてもらおう」

艦装を外せば艦娘は皆カナツチなので海上では何もできない。

私が叢雲に手を伸ばしたその時、叢雲の真下から海面に近づいてくる黒い影が見えた。

「深海棲艦!」

慌てて後退した次の瞬間、浮かび上がってきたそれは全長10 mはある巨大な駆逐イ級だった。

「なんだ、こいつ!」

驚く私に、畳みかけるように、巨大な駆逐イ級はよもや気絶した叢雲を巨大な口の中に飲み込んでしまった。

「食われたあああああ!」

最早頭の追いつかない私に目もくれず、巨大イ級は再び海中に潜航し、沈んでいった。

「な、なんだ……一体、何が起きたんだ……?」

☆

七丈島を取り囲むように迫る深海棲艦。その包囲の外側で、巨大な駆逐イ級が浮かび上がる。

巨大な口が開くと、そこから気だるげな表情の叢雲が出てきた。

「助けてくれと頼んだ覚えはないわ……」

『アラ、命ノ恩人ニソノ物言イハナイインジンヤナイカシラ?』

怒気のこもった言葉を吐く叢雲に巨大な駆逐イ級はまるで人間のようには言葉を話した。

『全ク、油断シテイタトハ言エ、タカガ艦娘ニ敗北スルナンテ……失望シタワ』

「あ、そう。でも、残念ながらあなたに失望されて困ることがないのよ」

『……御遊ビハココマデニシテ頂戴。役目ヲ果タシナサイ』

「はいはい、わかったわよ。D W ー1を回収してくればいいんでしよう?。」

『ワルキューレニ敗北ハ許サレナイ。心シテカカリナサイ』

面倒そうに叢雲が了解すると、イ級は口を閉じ、再び海中に潜っていった。

「ワルキューレ、ねえ」

叢雲は不敵な笑みを浮かべると七丈小島へ向かってゆっくり歩いて行った。

☆

七丈島北部海域。

「そろそろ、倒れてくれませんか?」

「断る……」

「もう勝敗は決しているじゃありませんか」

「なら俺を殺して止めるんだな」

原田は、額の血を拭い、好戦的な笑みを浮かべる。

その姿に神通は呆れてため息を吐いた。

既に原田と神通の一騎打ちが始まってから三十分程度が経過した。

その間、原田には神通から数百に及ぶの斬撃が刻まれ、神通には原田の攻撃は未だ一撃も当たってはいなかった。

当然の帰結と言える。原田と神通では戦闘経験値が天と地ほども違う。

多少装備が勝っていたところでその差は埋められない。

「お前はまだ俺から一撃も攻撃を受けていないことで安心していうだが、気をつけろ。俺の一撃はお前の攻撃数百にも勝る。一発当たれば終わりがねんぞ」

「当たりませんから、心配ご無用ですよ」

そうして、また一発原田の砲撃が神通の真横を抜け、原田の身体にまた一つ刀傷が増えた。

「……何故、そこまでして戦うのです？ 何があなたをそこまでさせるのですか？」

勝てないと、原田自身も理解しているはずだった。それだけの實力差を体に刻み込んだ。

それでも原田はなおも折れずに立ち上がり、向かってくる。何が彼を動かしているのか、神通は不気味に思った。

「俺は、艦娘が憎い……」

「そうですか」

原田は艦娘が嫌いだと言った。

何があつたのかは知らないが、その憎しみが原動力というのならこの諦めの悪さにも納得がいかないわけではない。

いつだって、憎しみや怒りは体を動かす原動力になる。それは艦娘も同じだ。

憎しみだけで戦う艦娘を神通は何人も見てきた。

「艦娘を終わらせる……これは、天意だ……ッ！」

「可哀そうな人ですね」

憎しみに捕らわれた者は総じて悲しい目をしている。

そして、その誰もが早々に死んでいった。

故に、神通は可哀そうだと、そう言った。

「きつと長生きできないんでしょね、あなたも」

「ああ、そうだとも」

原田は、誇らしげに微笑んだ。

「そういうものだ、生きることより大切なことを見つけた人間は」

第一百一話「ああ、不毛です」

好きな女がいた。

「私はね、艦娘になる。世界を守るの」

彼女はそう誇らしげに笑った。

その姿が眩しくて、そんな彼女の側にいたくて、自然と口が動いた。

「だったら、俺は提督になる。提督になって、君と戦う」

一瞬、彼女は驚いた表情を見せてから、心底嬉しそうに笑った。

俺は、海軍士官学校に入った。

勉強もしたし、体も鍛えた。

提督になれることを報告しに一年ぶりに出会った彼女は、別人のように遅くなった俺を見て、爆笑していた。

「本当に提督になってくれるのね」

「当然だ」

「うん、待つてるわ。ずっと待つてる」

提督になったら、必ず迎えに行く。そう約束し、俺はただがむしやらに海軍士官学校での生活を過ごした。

無論、楽ではなかった。厳しい試験を乗り越えた先にいるのは、同様にその試験を乗り越えた猛者達。いくら努力しても主席は愚か上位30名でさえ遙か彼方だった。

それでも進級条件を満たし、やっと実務実習にまでたどり着いた。

これで可以上の評価を得られれば晴れて提督になれる。

俺の実習先は天の導きか、彼女のいる鎮守府だった。

「よく来てくれた。君の事は『神通』からよく聞いているよ」

初老の提督は俺を歓迎しながらそう言った。

この鎮守府では神通というのが彼女の名前らしい。

実習中には自分に自分が未熟かを再三にまで思い知らされた。今まで寝る間も惜しんで学んできたことは提督にとっては基礎でしかない。

何度も失敗し、提督から厳しい言葉を受けたことも一度や二度では

なかった。

「頑張ってるわね」

「いや、全然駄目だ」

「そんなことないわ。提督、いつもあなたのこと褒めているもの。勤勉で飲み込みも早いし、何より絶対に折れない根性があるって」

「根性か、はは。まあ、それだけが取り柄で生きてきたからな」

いくら辛くとも、苦しくとも、俺には彼女がいつも心の中にいた。彼女のためならば、どんなことだってできる気がした。

その根性だけでここまでやってきたのだ。

「どうして、あなたはそこまで頑張れるの?」

愚問だった。

だが、彼女もわかってて聞いているのだろう。

分からないのではなく、はつきりと言葉にして欲しくて聞いているのだ。

だから俺は、迷いなく答えた。

「君の、一番近くにいたいからだ」

俺の瞳と彼女の瞳がぶつかる。

彼女は頬を赤らめ、幸せそうに笑った。

「きつとこれは天意ね」

「天意?」

「天の意志とか、物事の自然な道理とか、広義には運命なんて意味もあるわね」

彼女は俺の肩に頭を乗せながら続けた。

「きつと、私とあなたが結ばれるのは、天意なのね」

「天意か、良い言葉だな」

天の意志で決まっているというのなら、それは何より心強い。

その日から、俺は一層に奮起した。

それでも、やはり失敗は絶えなかったが、これまで以上に速く、確実に成長していることが実感できた。

そして、最終日。

「私と、艦娘全員の評価を統合した結果、評価は『優』だ。よく頑張っ

たな」

「ありがとうございますッ！ 大変お世話になりましたッ！」

「卒業したら、私の元に来なさい。提督ではなく、私のサポートからにはなるが、ゆくゆくはこの鎮守府を任せたい」

思いもよらぬ申し出に心の臓が震えた。

「自分なんかでいいのですか……!?!」

「むしろ君以上の適任が思い浮かばなくてね。それに、君としてもその方がいいんじゃないか？」

ちらりと斜め後ろに立つ神通に視線をやって提督はニヤリと笑った。

どこまでもお見通しというわけだ。

俺は、二つ返事で申し出を受け、天にも昇るような気持ちで学園へと帰還した。

「そうか、これが、天意か……!?!」

何もかもが上手くいっていた。

今までの努力全てが報われたような気持ちだった。

これ以後は卒業まで時間が過ぎるのを待つのみとなった。

その筈だった。

「——鎮守府が……敵の攻撃を……?」

卒業まで残り3カ月を切った時期だった。

彼女のいる鎮守府が大打撃を受けたと手紙が来た。

俺はすぐに身支度を整え、鎮守府へと向かった。

その先には、地獄が待っていた。

「——申し訳ありません。よく、聞き取れず、もう一度……」

半壊した鎮守府の執務室で、提督は苦い顔で口を開いた。

「神通が、轟沈した」

目の前が真っ白になった。言葉の意味が理解できず、頭の中で提督の言葉が文字となって浮かんでいる状態だった。

落ち着け、神通とは艦娘としての名前に過ぎない。コードネームのようなものだ。轟沈した神通が、彼女だとは限らない。

「本当に、申し訳ない……!?!」

やめてくれ。何故、床に頭など付けているのだ。

それではまるで、まるで彼女が死んでしまったようじゃないか。

「——やめろ！ お前、提督に何をやっているんだ！」

「その手を放せ！ 誰か！ 誰か、来てくれ！」

「……え？」

気が付けば、俺の身体を羽交い絞めする憲兵の姿が見えた。

俺の左腕は提督の胸倉を掴み、その体を宙高く持ち上げていた。彼の顔には幾度か殴られた跡が見え、血まみれだった。

俺の右腕を見ると、その拳にべつとりと血がこびりついていた。

「——退学処分だ。今日中に荷物をまとめなさい」

一週間後。事の次第は全て学園に報告され、俺は卒業を目前に学園を去ることになった。

提督は最後まで俺のことを庇い、処分を取り下げよう嘆願を繰り返してくれていたらしい。

しかし、俺はどちらにせよ学園を去るつもりだった。

彼女がいない鎮守府で提督になることに価値など感じられなかったのだから。

「なんだ、なんなんだ、これは……！」

俺の他に誰もいない電車の中、自然と震えた声が出た。

「こんなものが、こんな結末が、天意だと、言うのか……!？」

断じて、否。

彼女が何をした。彼女は、あんな志半ばで死ぬような人間じゃなかった。

こんなものは、天意ではない。

ならば、天の意志はどこにある。天は、俺に何をさせようとしている。

そうして、長いこと考えた末、ようやく俺は一つの答えに辿り着いた。

「艦娘を、終わらせる」

気付かなかった。当たり前だと刷り込まれていた。生まれた時から当たり前存在していたものだから、それに疑問を抱けなかった。

艦娘というシステムそのものが諸悪であることに気付けなかった。こんなことは間違っている。何故、男がのうのうと鎮守府や陸地で安全な生活している一方で女が戦場で戦わなければならぬ。

女は、『生産者』だ。次代の子を残す役割を担う個体だ。それを死地に向かわせるなど狂っているにも程がある。

「そうだ。これこそが、天意だ」

艦娘を終わらせる。

提督では駄目だ。そもそも海軍では駄目だ。

このシステムを変えるためには別のアプローチが必要だ。

故郷に帰ってから考えあぐねていた俺の元に、一人の男性が訪ねてきた。

まるまると太った巨大な狸を思わせる風貌で、陸軍の軍服を着ていた。

「ほっほ。いや、提督を殴りつけたという果敢な若者がここにいると聞きましたね」

鎮守府で俺を取り押さえた憲兵から情報を得たらしい。

「よろしければ私の元に来ませんか？ あなたも今の海軍に疑問を抱く一人なのでは？」

「俺は、艦娘が憎い」

「ほう」

「艦娘というシステムそのものが心底憎い」

「私なら力になれます」

「システムを覆す手が俺には思い浮かばない」

「私が提供しましょう。一つ、面白い研究があります。その被検体におなりなさい」

「俺は、あなたが天意を為すために必要だと今、確信した」

「ようこそ、陸軍へ。歓迎しますよ、原田君」

こうして、俺は参謀総長の口利きで陸軍に入った。

陸軍式海上戦闘用機動兵装丙型『ワダツミ』の第一被検体となるためだ。

提督では駄目だ、上層部に取り入っても無駄だ。

ならば、俺が、艦娘を凌駕した新たなシステムそのものになる。
俺が艦娘を終わらせるのだ。

もう、二度と、彼女のような悲劇を生まないよう、俺が、この世界
を変えるのだ。

☆

「負けられないッ！ 負けられんのだあ！」

馬鹿な、ありえない。

神通は目の前の原田を見て驚愕と困惑を隠しきれなかった。

明らかにもう立つことすら苦しいはずだ。

血も流しすぎている。意識も朦朧としているだろう。

それなのに、何故、ここに来て、動きがさらに鋭くなるのか。

「……ッ！」

信じられない気迫だった。

思わず、こちらが飲み込まれてしまうほどの狂気に近い気迫。

「それでも、気合で実力差が埋まるほど現実には甘くないですよッ！」

原田の砲撃を避け、再度刀を振りかぶる。

その動きを予期していたのか、足元の海面に黒い影が見えた。

魚雷の影だ。

「っ！」

急停止から右に急旋回し、海面を蹴る。魚雷を回避した先には、原
田がいつの間にか回り込み、拳を振り上げていた。

相手が左右どちらへ回避するか、二択の賭けに出て、運よくそれが
当たったのだと神通は考えた。

だが、違う。原田は神通の右手に持つ刀を見て、重心の偏りを読ん
だ。右旋回の方を選びやすいと確信し、回り込んだのだ。

「甘いッ！」

右手の刀で原田の腕を弾く。しかし、魚雷の緊急回避による体勢の
崩れは直せなくなった。

「あああああッ！」

「しまった、突っ込んで……!?!」

刀で腕を弾かれた所で少しも怯むことなく、身体全体でタツクルを

食らわせる。

姿勢を立て直せていない神通には回避は愚か防御すらできず、攻撃をまともに受けて数メートル後方に吹っ飛ばされた。

その威力は凄まじく、神通の内臓にまでダメージをもたらし、数年ぶりに彼女を吐血させるに至った。

「はあ……はあ……やっつと、一撃、入れたぞ……ッ！」

「ようやく、理解しましたよ」

朦朧とする意識の中、膝をつく神通を見て満足げに笑みを浮かべた原田。

それを見て、ゆっくり立ち上がると神通は口元の血を親指で拭う。

「侮っていたわけではありません。殺さぬよう加減していたのは私の流儀の話ですから。しかし、あなたは、今の私では、どうやら殺さないうよう勝つには難しい」

「ああ、その通りだ、神通！」

「申し訳ありません。私の未熟故、あなたには、殺す気がかからなければならぬ」

「気にすることはないぞ、本気で来い！ それを打倒してこそ、天意は果たされる……ッ！」

神通はゆっくりと刀を両手で持ち、構える。

「この刀は私の専用装備、銘を私の名と同じ『神通』と名付けています」

「ああ、特別な刀なのだろうな。随分と俺の手甲とも打ち合った筈だが刃こぼれ一つ見えん」

「頑丈なんですよ、すごく。なんでかわかりますか？」

神通の右足が動く。

原田自身、油断していた訳ではない。

だが、気付けば数メートルあった距離は一瞬にして埋まり、既に神通の必殺の間合いの中に原田はいた。

「何!？」

「ふッ！」

海が割れた。

神通の上段からの一振り。それだけで、海に亀裂ができたのだ。

原田が今の斬撃を回避できたのは偶然だった。

あまりの驚愕と、疲弊、ダメージ。それが原田の身体をふらつかせ、後退させた。

「この刀は私の16番目の専用武器^{神通}。それまでのものは全て、使い潰してしまいました。不思議とそうなってしまうんです、私が全力で武器をふるうと」

（距離を、取らなければッ！）

あれをまともに食らえば終わりだと、原田は直感した。

全力で神通の間合いから外れようと全力でエンジンを回す。

しかし、どこにどのようにくら逃げて、神通との距離はまるで塞がらない。如何なる動きにも即座に対応し、ぴったりと張り付いてくる。

人間のレベルを遥かに超越した足運びだった。

まるで、原田と神通が見えない糸で繋がっているかのように、両者の距離は少しも開かないのだ。

「この刀は結構気に入ってたんですが、あなたに使い潰すなら、それも良いと思えます」

「おおおっ！」

再び、神通の刀が彼女の頭上に掲げられる。

それに対し、原田は逃げることを止め、逆に潰すまで。

間合いが開かないのなら、逆に潰すまで。

しかし、その動きすら神通は対応する。

いくら追えども、間合いが縮まらない。

それはまるで逃げ水を彷彿とさせる。

「さようなら。どうか、生き残れますように」

神通の、全力の一撃が、原田に真つすぐ振り下ろされた。

辛うじて、原田が腕を十字に交差させ、全力で防御を固めた次の瞬間、彼をこれまでに体験したことのない衝撃が襲った。

痛みを感じる余裕すらなく、視界は失せ、どちらが上でどちらが下かすら判別がつかない。

（これが、刀で斬りつけられた感触なものか。地雷を踏み抜いたと言

われた方が納得がいく)

「——よく、生き残りましたね。素晴らしい生命力です」

神通の称賛の言葉に、原田は重い瞼をゆっくり持ち上げた。

そして、立ち上がろうと右腕を動かそうとして、その感覚が一切ないことに気が付き、全てを悟った顔で小さく息を吐いた。

「腕を……失くしたか……」

「ええ、ですが、そのおかげであなたは生き延びた」

神通の手で既に腕の止血は済んでいる。それでも、いつ失血死してもおかしくない程に重症なことは変わらない。

「私の勝ちです」

「いや、まだだ……」

「もう、やめてください。死にますよ」

「死んだっていいのだ……俺はな……」

「どうして、あなたはそこまで頑張れるんですか……」

原田の目が虚ろになっていく。ここまでだ。もう心でどうにかなる境界線を越え、意識を保てなくなっただろう。

目を閉じる瞬間、神通の顔を見つめながら、原田は最後にもう一度口を開いた。

☆

「どうして、あなたはそこまで頑張れるんですか……」

『どうして、あなたはそこまで頑張れるの?』

朦朧とした意識の中で、目の前で俺を見下ろす神通と、『彼女』が重なった。

ああ、あの時と同じ質問だ。

だが、同じ答えじゃない。

艦娘というシステムを否定したいだとか、生産者である女が戦場に立つのはおかしいとか、そういう論理立てた口上は結局、表向きに用意した建前だ。

もっと、単純な話なんだ。

ただ、俺は俺の目の前で女が死んで欲しくないだけなんだ。俺の無力で、死んでほしくない人が死ぬのが嫌なだけなんだ。

俺は――

「もう……女艦娘に死なれるのは、御免だ……」

だから――まだ、頑張らなくては――なら、な――い。

☆

原田の意識が完全に消沈したことを確認した。

私の右手には折れた刀が握られている。

最後の一撃で、原田の両腕を吹き飛ばしたと同時に、力尽きたかのように折れたのだ。

私は、残った部分を鞘に納めると空を見上げて恨みがましく息を吐いた。

「ああ、不毛です」

最後の原田の言葉とその目を思い出す。

憎悪に染まった目ではなかった。

悲壮と、後悔に覆われた瞳だった。

そこには私に対する敵意ではなく、憂いがあった。慮っていたのだ、心配していたのだ。

彼は、ただの優しい青年に過ぎなかった。

「あなたみたいな人を傷つけるために、私は強くなったんじゃないのに」

悲しげに、苦しげに、誰にも聞こえないよう小さな声で、神通は弱音を吐いた。

☆

北部、東部、南部。それぞれの海域での戦闘が終了した。

それぞれが互いに大きな打撃を受け、誰一人として無傷とはいかなかった。

しかし、いずれも制したのは、七丈島・横須賀連合艦隊であった。

残りは、大和と天龍のいる西部海域のみ。

それぞれがそう意識を向けた瞬間、それはやってきた。

東部海域。

「――これ、は……ッ！」

「む、武蔵?! ちょっと、これ何?! 寒気がヤバいんだけど!」

南部海域。

「なんだ……？　急に突き刺すような、寒気が……」

北部海域。

「これは……大和さん……！」

気が付いたのは、武蔵と神通の二人のみ。

正確には二人は知っていた、その背中を巨大で鋭利な氷柱に貫かれたような、気配。

そして、西部海域には、今、まさに大和を救出しにいったザラとポーラが辿り着こうとしていた。

「え、何よ、今の!?　なんか凄い砲撃音がしたと思ったら立て続けにこの寒気！　怖いんだけど!」

「ザ、ザラ姉さま。ちよつと行くのやめましょ？　これはマジでやばそうだってえ」

本能が危険だと警鐘を鳴らしている。

ポーラはその警告にのっとり撤退を進言した。しかし、そこまで理解しているうえで、それでもザラは首を横に振った。

「駄目よ、今この場所でさえこの重圧感。その中心へ向かうのは命を捨てるような行為かもしれない。でも、その中心近くに大和がいる。凄く危険な状態ってことよ」

「でも、私たちの今回の任務には……」

「そうね、関係ないわね。でも、他ならぬエドの頼みだもの、聞いてあげたくなるじゃない?」

「……もう、見栄張ってえ」

それ以上、ポーラから反論の言葉はなかった。

ザラの足が恐怖に震えているのが見えた。それでも気丈に笑ってみせる彼女を見た。

それでも、大和の救援に行きたいと言うのだ。

生半可な覚悟ではないし、少なくとも、逃げると言う選択肢よりは格好良いとポーラは感じた。

「うゝ、本当の本当にどうなっても知りませんからねえ……?」

「ぎ、ギリギリまでは頑張りましょう！　基本、命を大事に！」

「決まらないなく、まあ、ザラ姉さまらしいけど」

恐怖を押し殺して進む二人。

先刻、大和達と別れた場所に辿り着く。

ザラとポーラの目には、そこに見覚えのある一人の影を認めた。ぼうっと、何をするでもなく、海上に棒立ちして、空を見上げている。

「あ、あれ大和じゃない!? 無事よね!? 大和ー!」

「……………んん? 何か、雰囲気、違う、よう、な?」

何事もなく、大和を発見できた喜びと安堵に手を振って彼女に呼びかけるザラ。

その横で、まじまじと少し離れた場所に位置する大和らしき艦娘を見るポーラは首をひねる。

見えているのは大和の後ろ姿。そこには大和型の特徴的な艦装が確かに見て取れるし、茶色がかかった黒髪のパニーテールも間違いなく大和のものだ。

しかし、ポーラは疑問に思う。

ずっと感じていた冷たい重圧感は今もって消えてはおらず、むしろ、より濃密に感じ取れるまでになっている。

すなわち、その重圧感の発生源に自分達は近づいているはず。

しかし、見える範囲には大和以外の影は見当たらない。

では、依然この重圧を放つ、『何』かは一体どこにいたのだろうか。

「――」

その時、再三のザラの呼び声に気が付いたのか、大和の首がこちらにゆつくりと回り始めた。

しかし、顔がこちらを向く寸前にその姿は突然、霧散してなくなる。

「え!?!」

「ん!?!」

――艦娘…………『私達』の海を侵略する愚か者達…………そう、やっぱり、そうなんですな

音、として聞こえる声ではなかった。

まるで、テレパシーか何かで脳内に直接響いているような声。

しかし、その声の主が今ザラとポーラの背後に瞬間移動したことは彼女達自身、はつきり理解していた。

もはや重圧などという言葉ですら表せない殺意と力の冷たい奔流。それが、背後で流れているように感じたから。

「あ、ああ、ああああ……」

「……………」

言葉が出ない。何を喋ろうとしても口から洩れるのは情けない悲鳴だけ。

体の震えが止まらない。足が震えすぎて立っているだけでやつとだった。

——ねえ、艦娘。教えてくださいませんか？ 今は『いつ』で、ここは『どこ』なんでしよう？

脳内に響く声色も、口調も、確かに大和の声と類似しているように思えた。

しかし、そこに内在するものはまるで違う。

大和の言葉は常に相手を慮る優しさに包まれていた。まるで心地よい陽だまりを思わせる温かな声。

それ故、少し話しただけでも彼女が信頼に値する良い人なのだ、ザラとポーラは警戒を解いた。

だが、この声は違う。

まるで真逆だ。その声は、言葉は、相手を凍てつかせて動けなくし、生命の熱を奪う永久凍土を思わせる冷たい声

——答えてくれないんですね、困りました。では、すぐそこに見える島の方々に聞いてみましょうか

その言葉に、思わずザラとポーラは振り向き、目の前の『何か』に砲口を突き付けた。

反射的なものだった。

彼女達が恐怖を打ち破り動けた理由はただ一つ、その島にエドがいるからというその一点。

それでも撃つには至らなかった。

震えて引き金を引こうにも指がかからず、また、撃つてしまえば最

後、明確な死がやってくるのが明白であるためであった。

ザラとポーラの視界に入った大和は普段の彼女とはさして見た目は変わっているように見えなかった。

あるいは内面の変化が大きすぎる故、外見の些細な変化を認識できなかったのかもしれない。

強いて、気付いたことをあげるとするならば、彼女の目の色が、元の茶色から神々しいほどの黄金色に変化していたこと。

一瞬、ザラ達は後光すら感じるその瞳に心を奪われかけた。

一方で、ザラとポーラに突き付けられた連装砲をゆつくりと見つめる大和は、彼女達に何故か笑いかけた。

——頑張りましたね

その一言に思わず涙が出そうになるのをザラとポーラは必死でこらえていた。

今の大和には、自分達は砲を目の前に突き付けてさえ、敵として認識されていない、その情けなさに、そしてそれを受け入れざるをえない彼我の戦力差のあまりの大きさに。

そして、圧倒的すぎる相手からの称賛の言葉に感動して。

——でも、いけませんよ。こんな危ないものを向けては

優しく、二人の連装砲に触れただけのようにはしか見えなかった。

しかし、大和の触れた場所から連装砲は急激に黒く染まり始め、やがて、黒く染まった部分から自然に崩れ落ち、数秒のうちに全て風化してしまった。

「うう、ううう！ うあああああ！」

虚しい抵抗。いや、抵抗にすらならなかった。

目の前の圧倒的な理不尽に、既に言葉は出ない。既にザラ達の生存は大和の手の平の上。

やがて、恐怖で脳が痺れてきたように感じ、目の前の世界が揺らぎ始めたその時だった。

——ああ、忌々しい。よもや、私を押し留めようとするのですね

唐突に大和の声に怒気が籠もり、同時に、凍てつくような重圧感が小さくなっていくのを感じた。

——ああ、口惜しい。でも、全ては時間の問題。ならば、私は待ちましよう。猶予を食い潰すその時まで……

その言葉を最後に周りを支配していた重圧は消失した。

同時に大和の瞳の色が元の茶色に戻ったかと思うと、ゆっくりと目が閉じ、そのまま糸の切れた人形のように崩れ落ちる。

「わ、わっ!?!」

「ふぎゅ!?!」

前のめりに倒れた大和を丁度目の前にいたザラとポーラが受け止める形になった。

依然、状況が掴めないまま、唾然として顔を見合わせる二人。

不意に、ザラの目から涙が溢れ始めた。

それにつられ、ポーラの目からも滝のような涙が流れ始める。

「もう、わけわかんない！ なんなのよお！ うわああああ！」

「うえええええ！ 怖かったあくー！」

目の前にあつた脅威が完全になくなったことで緊張の糸が切れ、ザラとポーラは肩を抱き寄せ合って泣いた。

第二百二話 「でも、いい夢見れたでしょう?」

気が付いたら、いつの間にか私は椅子に座っていた。さつきまで装着していた筈の艤装はどこにもなく、足元には蒼い海面。

海に不自然に浮いた椅子に私は腰かけている。

「こんにちは」

状況を理解できない私に聞こえた声。それは目の前からだった。思わず顔をあげると目の前には私そっくりの少女が私同様椅子に座って微笑みかけているのだった。

まるで鏡写しのように思われたが、向かい合う彼女は右目が眼帯で覆われており、そこが自分達を区別できるそれらしい唯一の箇所だった。

こんな状況にあつて、にこやかに笑いかける彼女の雰囲気は不思議と私を落ち着かせた。

「えと、あの、初めまして……?」

恐る恐る返答する私に目の前の彼女は笑い声を洩らした。

「ふふ、いえ、すみません。以前お話した時も全く同じ言葉を仰つていたなと思ひ出してしまつて」

「え、以前もお会いしてましたっけ!? そうなんですか!? す、すみません、大変な失礼を……!」

「いえいえ、そういうものなんです。ここでの記憶は実に揮発しやすい。大抵は全て忘れてしまうか、断片的にしか残らないのです」

夢、のようなものなのだろうか。

彼女の言葉を何度も反芻するものの、結局のところ私が今どういう状況なのか理解するには至らない。

「お名前を聞かせていただけますか?」

彼女は私にそう尋ねた。

以前も出会っているなら知っているとと思うのだが。そう思ったものの、口に出すのは失礼な気がして、素直に私は答える。

「私は、大和といます」

「そうなんですか。私は『大和』といます」

彼女は、『大和』と名乗った。

姿だけでなく名前まで同じらしい。

「あなたも艦娘なんですか？」

「おや、あなたは艦娘なんですか？」

私の質問に対して『大和』は更に質問を重ねた。

当然だろうと言い返そうとして、今の私には艤装がないことに気が付いた。

ああ、それは一目で艦娘とわかる筈もない。

「そうです、私は艦娘です」

「そう、それなら良かったです」

何が良かったのだろう。

「あの、ここはどこなんでしょうか」

「それは実に説明しにくいですねえ。とりあえずはあなたの心の中という表現が適切かもしれませぬ」

「心の、中？」

「ああ、でも所謂『あの世』というのもすなわちこのことですね」

私の心の中とあの世がイコールでは繋がらないと思うのだが。

「いえいえ、死後の世界も人の心の中も、根源は同じ。全ては一つに繋がりに、集合するのです」

「はあ……？」

何を言っているのかさっぱり理解できない。

とりあえず、ここがあの世であるとすれば、もしかして私は死んでしまったのだろうか。

そんな恐ろしい発想に行きついた所で、『大和』は首を振った。

「いいえ、辛うじてあなたという存在はまだ保たれていますよ、ご心配なく」

「あ、そうなんですか」

「でも、非常に危ないところでした。前回みたいに、外的なダメージで瀕死になることで緩む程度ならば私が表層に出ていくだけでも助けて

あげられるんですが、今回は内的な変質でバランスが崩壊しかけてしまいましたから」

言っていることが相変わらずよくわからない。ただ、要は私が砲撃をしたことについて彼女が言及しているであろうことは理解できた。

「駄目じゃないですか、砲撃したらあなたは消えてしまうんですよ?」
「でも、撃つしかなかったんです……」

「あなたが消えるだけならまだいい。でも、それだけじゃ済まないんですよ?」

そう、砲撃は半人半深の私を深海棲艦に染め上げるトリガー。

その後、私はきつと多くの命を奪うかもしれない。

でも、あの場には武蔵がいた。神通や綾波もいた。

私が深海棲艦になっても殺してくれるだけの保険はあった。それなら十分にやる価値はあると思ったし、今もその選択を後悔するつもりはない。

それを話すと、『大和』はとても悲しい表情をした。

「あなたはもう少し自分というものを大切にすべきです」

「……すみません」

「それに、武蔵、神通、綾波三人だけではとても止められませんよ」

「え?」

聞き間違いかと思った。

しかし、『大和』の厳しい表情に、聞き返すまでもなく、聞き間違いでないことは明白であった。

「というか、止める術など今の世界にあるのでしょうか」

「そ、そんな馬鹿な」

「だからこそ、私は強く忠告します。あなたは、もう少し自分というものを大切にすべきです」

同じ言葉を二度言われた。しかし、二度目は重く、私にのしかかる言葉だった。

「次はないですよ? 私も今回バランスを立て直すために随分と力を使ってしまった。次砲撃をすれば、もうあなたを助けてあげられませんし、きつと世界も助からない」

「わ、わかりました……」

『大和』の言葉に何度も頷く私に、一変して彼女は優しく笑いかけた。

「でも、命を賭してでも仲間を助けたい、あなたにそういった心が芽生えたことを私はとても嬉しく思いますよ、大和」

「あの、あなたは一体——」

そこまで言いかけた所で、私の身体が段々と透けていることに気が付いた。

「透けてる!?! なんか透けてるんですけど!?!」

「ここまでですかね」

慌てる私とは対照的に、落ち着いた声で『大和』は言った。

「さようなら、大和。機会があれば、またお話ししましょう」

☆

「いやはや、敵いませんなあ、寄る年波というものには」

縛り上げられ、吊るされた参謀総長を見ながら提督は目を細めた。

元帥と参謀総長の一騎打ちは一瞬にして決着がついた。

元帥は重火器の乱射。しかし、参謀総長はその射線を読み切り、その全てを避けて接近した。提督の目にも、その先に、元帥の勝機はないように映った。

しかし、彼は目の前に迫った参謀総長に凶悪な笑みを浮かべ、あろうことか手に持っていた機関銃を手放していた。

実際、それは正解だった。既に間合いは殺されている。ならば、あのレベルの戦闘ならば機関銃よりも拳の方が早い。

明らかに状況の変化に対応した動きとは思えない即決。つまりところ、元帥は初めからこうするつもりだったのだろう。

超接近戦に誘導するため、あえて、重火器を見せつけ、乱射した。そして、初めからそうするつもりだった元帥と、その動きに虚を突かれ、一瞬動きの遅れた参謀総長。

その拳骨を先制したのは元帥であり、すなわちそれは勝負の終わりだった。

「クッククク、やはり最後に信じられるのは己の肉体のみよ」

老齢に至ってなおも木の幹の如く逞しく太い二の腕を見せつけ、元帥は満足げに笑った。

「さて、語ってもらおうか。お前達、陸軍は一体何がしたかった？」

「D W—1、あれは陸軍復権のための茶番劇の舞台装置です」

諦めたのか、参謀総長は早々に口を割った。

「殊勝なことだ。老いて牙も落ちたか」

「ほっほっほ、まあ、どの道ここまで攻め落とされれば遅かれ早かれ判明すること。隠し立てすることに意味を感じなかったまです」

「ふん」

その後、参謀総長は全てを語った。

D W—1の持つ招来の権能。それを機械装置で制御し、深海棲艦の奇襲を誘発。それを陸軍が食い止めるというマツチポンプの図式を作り、深海棲艦との戦争により薄れつつある陸軍の必要性、その復権を目論んでいたという。

「なんという、くだらぬ浅知恵よ……！」

元帥の額に青筋が浮かび上がる。

しかし、それに少しも威圧される様子なく、参謀総長は答えた。

「そうでしょう、我ながら心底くだらない計画。しかし、今の陸軍を守るためには、必要なことでした」

「守るべき国民を危険に晒して権威を守る。そんなことは権威ある者の所業ではない。腐ったか、陸軍ツ！」

「どうとでも罵るが良い。それでも今陸軍を海軍に取り込まれる訳にはいかないのです。軍は陸と海、二本柱だからこそ崩れない。どちらかがどちらかに取り込まれては必ず崩壊する！ あなたは目の前のことしか見えていない！ 『この戦争が終わった後』、必ず陸軍は必要となる……！」

参謀総長と元帥のにらみ合いはどちらが譲ることもなかった。

しかし、提督が静かに口を挟んだことで、その視線はそちらに向く。

「D W—1、彼女はどちらなんですか」

「どちらというっ？」

「彼女に会って、少しですが話しました。あれは深海棲艦なのです

か、それとも艦娘なのですか」

「深海棲艦ですよ、当然」

参謀総長はそう断言した。

「あれは敵です。なればこそ、捕縛するか破壊するかしなければならぬ。そのための蜻蛉隊です」

「彼女からは私達への敵意は感じられませんでしたが」

「ほっほ、あんな化物に演技をする知性があったとは驚きですな。まあ、いずれにせよ敵意の有無など関係ない。深海棲艦はそこに留まるだけで瘴気で人を侵す。一隻だけならば影響が出るのは幾分先であろうが、放置することはできないでしょう」

参謀総長が嘲笑混じりに言葉を終えるのと同時に、提督の右腕がその首に伸びた。

「敵だから、化物だから、何をしても良いわけじゃない」

「ぐ……おお……!?!」

片手で参謀総長の首を鷲掴みにする提督。その表情には怒りも悲しみもなく、ただ、無表情だけが張り付いていた。

参謀総長の顔からみるみるうちに血の気が失せていくのが見取れた。

「何故あなたの都合で彼女達が苦しまなければならない？ 何故癒えかけた傷を抉るのですか？」

「よせ、死ぬぞ」

元帥が提督の腕を掴む。

はっと我に返ったような表情で、手を離すと、提督は再び口を開いた。

「鏑木美鈴について話してください」

「……DW-1が送られてきたのは数年前。見返りとして金、食料、医薬品、それと試薬と機器類を要求してきました」

「成程、陸軍を隠れ蓑に使うとは灯台下暗し。上手い手を考えたものだ」

「鏑木美鈴を実際に見たのですか？」

「いいえ、彼女とはいつも通信機越し、しかもボイスチェンジャー付き

の会話しかしておりませんでしたから、姿を見たわけではありませ
ん」

「……偽物の可能性もあると?」

しかし、提督のその言葉に参謀総長は首を振った。

「そうは思いませんでしたよ。彼女は『ワルキューレ計画』の全貌を把
握していましたので」

「なんだと?」

ワルキューレ計画。その単語に元帥の顔が露骨にひきつっていく。

それは提督も同様だった。

「完全凍結されたあの研究の全貌を知るのは鏑木美鈴と限られた研究
者達のみ。調べると、全員死亡確認済みの旨が記述されておりまし
たが、鏑木美鈴の死体だけは本人特定まではできていませんでした」

「つまり、あの死体は替え玉だと?」

「少なくとも私はそう思っています」

参謀総長は熱のこもった声で続ける。

「あれは、まだ生きています。そして、既に動き出して——」

言葉を遮るように室内に音が響き渡った。

提督はその音を良く知っている。

それは銃声。それもサイレンサーでエコー音を抑えたもの。

参謀総長の表情が固まったかと思うと、そのこめかみからドロリと
血が流れだし、力尽きたように頭が垂れ下がった。

「何者だッ!」

元帥が銃声の主へ怒声を飛ばす。

薄暗い室内の隅の闇から浮かび上がるように現れたのは陸軍の軍
服に身を包む仮面の男。仮面と服の隙間からは褐色の肌が見えてお
り、服の上からも鍛え上げられた肉体が見て取れる。

その右手にはサイレンサーの取り付けられた黒い拳銃があった。

「……………」

仮面の男は何も言わない。

臨戦態勢を取り、今にも飛び掛からんと元帥と提督が重心を前傾さ
せたと同時に、男が左手で機械のディスプレイを素早く操作した。

同時に、爆発音と大きな振動がその場の全員を襲い、動きを止めた。「まさか、自爆シークエンスか……!? 参謀総長め、秘密主義にも程があるぞ!」

「ぐ……仮面の男は……!?!」

突然の振動によるめき、視界が地面に下がった。

慌てて仮面の男が立っていた場所に目を戻すも、既にそこには誰の姿もない。

「あの男は一体……」

「愚か者ツ! まずは一刻も早く脱出するぞツ!」

☆

「よお、龍田」

七丈小島。その堤防で、天龍は海を憂い気に見つめる龍田を見つけた。

笑顔を向け、言葉をかける天龍に対し、龍田の表情は暗く、返答もない。

「さ、帰ろうぜ。皆お前を待ってる」

「無理よ」

天龍の差し出した手を、龍田が取ることはなく、その視線も尚も彼女の方を向くことはなかった。

それは、明確な拒絶の意志に他ならない。

「龍田」

「龍田じゃないわ」

初めて龍田は天龍に顔を向けた。その声には、行き場のない感情が溜まり、濁りきっていた。

「私は、深海棲艦。龍田じゃない」

「ツ!?!」

突然だった。

龍田が、一直線に天龍に近づきつつ、その右手に薙刀を出現させ、切りかかってきた。

真上から振り下ろされた薙刀を刀で受け止める天龍。

龍田の口角が徐々に吊り上がっていく。

「そう、私は深海棲艦DW-1！ あの舞鶴の夜、あなたと戦い、あなたに斬られた深海棲艦よ！ お久しぶり、天龍ちゃん！ ようやく、二人きりになれたわねえ！ 待ち遠しかったわ！」

「お、前……！」

「ごめんねえ？ 今まで騙してて。悪気があったわけじゃないのよ？ ただ私にも準備が必要だったから、龍田のフリをしてた方が都合が良かったのよ」

突然、饒舌に回りだす龍田の舌に、数秒前の彼女の面影はなく、その敵意と嘲笑に包まれた笑みは間違いない、あの夜、舞鶴を地獄に陥れた深海棲艦に他ならなかった。

「でも、いい夢見れたでしょう？」

「——ッ！」

龍田から放たれたその一言に、天龍の眉が動く。

「どうだったあ？ 死んだ筈の龍田と会えて心底嬉しかったかしら？ そうよねえ、こんな状況で、こんな場所までやってきて、まだ私に帰ろうなんて言ってくれるんだもの。よっぽど大切に想ってくれていたのよねえ？」

「やめろ……」

「鎮守府がたくさんの深海棲艦に囲まれて、襲われて。まあ、蜻蛉隊や横須賀とか不純物は多いけれども、なんだかあの舞鶴の夜を思い出すわねえ、天龍ちゃん？」

「それ以上は、やめてくれ……」

「ねえ、今回は何人死ぬのかしら、天龍ちゃん？」

その一言が最後だった。

龍田の薙刀の刃に、切れ目が浮かぶ。それに沿って、光の線が走ったかと思うと、刃は綺麗に切断された。

さらに、光の線は薙刀だけに留まらず、その後大きく歪曲して龍田の右肩から左足にかけてを斜めに走り抜け、そこから鮮血が吹き出した。

「ぐう……」

苦悶と驚愕の入り混じった表情で龍田が真後ろに飛び、間合いを取

る。

傷は浅いが、この瞬間、龍田が今まで得ていたアドバンテージが失われたことを悟る。

突然の龍田からの攻撃、それに対する混乱、躊躇。しかし、今、天龍からそれは消え失せた。

「もういい、それ以上喋るな」

「あ、は、あははは、そう、本気になったのね、天龍ちゃん！」

ゆつくりと振り切った刀を鞘に戻す天龍。

その目にはもう迷いはなく、目の前の敵を斬る、それだけに没頭していた。

龍田はそれに対し、嬉しそうに笑うばかりだった。

「さあ、あの夜の続きをしましょう！ どちらかが死に果てるまで、踊り狂いましょう！」

瞬間、龍田の薙刀に黒い霧が凝集し、その刃の大きさをさつきまでの数倍にまで大きくする。

「まず、決戦場としてここは不適合ねえ」

龍田が天龍のいる場所に向けて薙刀を横に薙ぐ。

「っー！」

その威力は見た目から類推される質量にふさわしく、おおきく地面を抉り、天龍の身体を海へと弾き飛ばした。

同時に、龍田も海面へと足をつけ、海上で再び彼女達は向かい合う形になった。

「私達の戦いは、海でこそ決着しなければならぬわ。そうでしょう？」

「……ああ、そうだな。矢矧には決着をつけてこいって言われたんだった」

天龍は、呟く。

「龍田、お前を連れて帰ってこい、とは命令されてねえ。だから、お前がそうするんなら、もう助けられねえ。いいんだな？」

「ええ、勿論よ！ そのために、ずっと待って、待って、待ち焦がれていたんだもの！」

終始無表情に徹する天龍の表情はどこか悲し気にも見えた。

「ああ、この感情は何なのかしら」

龍田の両手に黒い霧が凝集する。

巨大化した薙刀は元のサイズに戻り、代わりに左手にもう一本、同じ薙刀が握られていた。

薙刀二刀流。龍田のその立ち姿はまさに舞鶴の夜を想起させるに十分だった。

「今度こそ、舞鶴のようにはならねえ。俺は、誰も死なせねえ」

天龍の刀を握る手に力が籠もった。

第百三話 「いい夢、見させてもらったぜ」

「ザラ！ ポーラ！ 無事だったか！ 通信が繋がらなくなったから心配したぞー！」

「に、任務は……やり遂げたわよ」

「うええええ、怖かったあ〜！ ていうかお酒のみたああああい！」

七丈島鎮守府のドックになだれ込むように返ってきたザラとポーラ。その彼女達に抱えられた大和を見て矢矧が声をあげた。

「大和！ 大丈夫?! 気絶しているの?! 外傷は!?!」

声には隠しきれない焦燥が表れているながら、大和の傷を診察するその手際は極めて熟達されていた。

「傷は……あれ、思ったより……」

無傷とまではいかないが、あきつ丸の攻撃を散々受けていた割には軽症で済んでいた。

むしろ、傷の箇所によっては、治りかけているような部位まで見える。

「どういう、こと?」

「何はともあれ、まずは入渠させてあげるべきじゃないかな?」

「え、ええ、そうね。ザラ、ポーラ。悪いけれどももう少し手伝って」

「ええ、あんな怖い思いしてまで連れて帰ったんだもの……死なれる訳にはいかないわ」

「ついでに私達も休みたいんですけど? エド?」

「はっはっは」

返答はない。しかし、エドの笑顔は有無を言わせない威圧感を放っていた。

『DW-1の捕獲、まだだろ?』、と顔に書いてあるのがザラとポーラには見える。

「ですよ〜」

「じゃあ、大和入渠させたら戻ってくるわね」

「ごめんな? ザラ、ポーラ。全部終わったら僕がいくらでも奢ってあげるからもう少し頑張ってくれ」

そして、10分後。

戻ってきた彼女達を爽やかな笑顔で出迎えると、エドは口を開く。

「さて、矢矧」

相変わらず表情は飄々として笑みを崩さないが、今までのようなおどけた雰囲気は消えた。

「ザラとポーラにはこれから七丈小島に行ってもらおうと思っているんだが、どうする?」

「ちよつと待つて! できれば他の海域で戦っていた仲間も救助して欲しいの! 特に綾波と磯風の所が酷いわ。このままじゃ深海棲艦のいい獲物になってしまう」

「うーん、美少女からの頼みだ。聞いてあげたいのはやまやまだが、何かメリットはあるのかな?」

「え?」

突き放したような態度のエドに矢矧は困惑を隠せない。

「大和の救出は君たちに貸しを作っておきたかったから受けた。でも、この頼みには僕ら側に旨味がない。僕達にも目的がある。それを後回しにするだけの何かを君は提示できるのかな?」

「そ、それは」

「うんうん、困るよね。でも大丈夫。君は一言、こう言えばいい。『全部終わったら、龍田を僕達に引き渡す』つてね」

それは少し前にエドから提案されたことだった。

「勿論、さつき話した通り、VIP待遇でもてなすことを約束しよう。基本D W—1には僕達に全面協力してもらおうことにはなるが、極めて安全に人道的に、尊重して扱おうと誓う」

「……………っ!」

好条件と思われた。

今、イタリア軍の協力が必要で、しかも、その協力条件は決してデメリットにはなりえない。それでも矢矧が領かないのは、仲間の行く末を自分だけの意志で決定することに抵抗があることと、エドモンド・ロツソという目の前の男が信用に足る確証が得られないことが理由だ。

「うーん、まだ領いてくれないのか。大和を助けてポイント稼いだつもりだったけれど僕の信用ないなあ。なんでだろう?」

「そういうところよ、エド」

「そういうところなんだよねえ、エド」

矢矧が唇をかみしめる姿を見て首をかしげるエドにザラとポーラが突っ込みを入れた。

「なんでポイント稼ぎとか言っちゃうのよ」

「女性に嘘はつけない性格なんだ」

「はい、ダウトおく、ダウトでくす」

「嘘じゃないよ!」

「ポーラ、知ってますよ? エドって、今まで付き合った女の子全員に『君しかいない』って言ってるよね?」

「その時は本気でそう思ってたんだよ!」

「え!? 何それ私言われてないんだけれど!」

イタリア組がやいのやいのと騒いでいる間にも矢矧だけは難しい顔で打開策を探していた。

イタリアの助力を得ずに他の海域の救援に行く方法。

疲弊しているがまだ戦える神通かプリンツに頼むことが次善の手のように思われる。

しかし、神通やプリンツ達も瑞鳳と武蔵、更には戦闘不能になった蜻蛉隊の救助に追われている。すぐに向かうことはできないだろう。

(私は、ここの提督代理。鎮守府を離れることは許されない。でも、同時に艦娘でもある。現状、私ならば救助に動ける。鎮守府を捨てれば)

鎮守府を、イタリア軍を前に空にする行為。それは鎮守府を預かる者として禁忌に当たる行為だ。

提督からの信頼か、仲間か。矢矧は選ばなければならない。

「……わかったわ」

「おお、僕の提案を受け入れてくれるのかな?」

「いいえ」

「え!」

そう言うと、矢矧は深く、頭を下げた。

「まだ、エドモンド提督の提案に頷くことはできません。龍田本人の意思を尊重したいから。でも、きつと龍田を説得するので、どうか今は力を貸してください」

「あ、あのねえ！ それじゃ交渉にならないじゃあないか!？」

矢矧の言葉は滅茶苦茶だった。

要は、返せる保障はないが無担保で金を貸してくれと言っているよ
うなものだ。

そこには矢矧らしい理路整然とした言葉はなかった。

「それは我がままだよ。しっかりと選ばないと」

「以前の私ならば、きつと仕方ないとどちらかを諦めていたでしょう。でも、私はもう何かのために何かを犠牲にしたりしない。そうすべきだと言ってくれた仲間がいるから」

エドは想定していなかった答えに上手く言葉が出てこない。ザラとポーラの二人も絶句している。

それでも無言で頭を下げ続ける矢矧に、徐々に三人の表情が心苦しさを帯びていく。

「エド、なんか私申し訳なくなってきたわ」

「あーあ、エドが意地悪言うから」

「やめてくれ！ 僕だつてきつきから胸が痛いんだぞ！」

「お願いします、どうか！ 力を貸してくれると言ってもらえるまで頭をあげる気はないわー！」

「それ一種の脅迫だからね!? ダメなものはダメだよ、こつちもボランティアじゃないんだからさあ」

エドとしても、ここで情に流されて安請け合いするわけにはいかなかった。

何せ、その背中に背負っているものは一つや二つの命では済まない。
い。

「国家そのものに匹敵するのだから。」

「膠着状態になりかけたその時、声が聞こえた。」

「——頭をあげなさい、矢矧。もう、その必要はありません」

「――あ」

その懐かしい声に、矢矧は、思わず頭を持ち上げてしまった。軍服に身を包み、若干疲弊した笑みを浮かべる眼鏡の青年の姿がそこにあった。

「よくここまで持ちこたえてくれました、流石は、矢矧です」
「てい、と、く」

張りつめていた緊張が一機に解けた。

一瞬、涙が出そうになり、矢矧は頬を自分で叩く。

そして、敬礼を言った。

「おかえりなさい、提督！」

「ただいま、矢矧」

提督も敬礼を返す。そして、その状態のまま言葉を続ける。

「現時刻をもって、あなたの提督代理の任を解きます。そして、早速ですが命令です。仲間の救助へ向かってもらえますか」

「はい！」

「……ザラ、ポーラ。D W ー 1 の元へ出撃。任務を果たしてくれ」

「え、エド、大丈夫？」

提督の矢矧への命令が終わり、視線がエドの方へ向く。

エドは視線を逸らさなのまま、ザラとポーラに出撃命令を下した。

ザラが不安げにエドを見つめるが、彼は笑顔で言った。

「大丈夫。男同士腹を割って話せばわかりあえるさ、多分ね」

「まずは話を聞かせていただきましょうか。あなた方は何者ですか？」

「どういう経緯でこの鎮守府にいるのですか？」

「あれ、なんか怒ってないかい、君？」

「あと、どうして矢矧があなたに頭を下げていたのでしょうか？」

提督は終始笑顔のまま話をしている。

だが、何故かエドは得も知れぬ重圧が増していくのをひしひしと感じるのだった。

「は、ははは。まあ、とりあえず話し合おうじゃないか……」

冷や汗を流しながら、エドは引きつった笑顔を浮かべるのだった。

☆

七丈小島近海。

「強いじゃねえか……舞鶴の時とは大違いだぜ」

「ええ、成長したのよお。あなたのアドバースを受けてね」

過去、天龍の前に敗れ去った原因は龍田の持っていたものを不純物と断じて捨てたことであつた。

『強さへの執着』だけ残した彼女はそれ故に敗れたのだつた。

「私はね、あの夜、舞鶴であなたに負けた深海棲艦。龍田から生まれ
た、彼女の『力の渴望』——その化身にして化物」

深海棲艦は思い出していた。自分の致命的な思い違い。

「私はね、あなたに首を落とされ、沈んでいく中、理解したの。全てを
捨てるべきではなかつたつて」

力の渴望。それこそは龍田の執念、本質、あるいは起源。

故に、深海棲艦はそれ以外を不純物と切り捨てた。

そうして存在の純度を限界まで高めた。

そうすることが、正しいことであると信じていた。

しかし、それは生まれて数時間足らずで粉々に砕かれた。故に、深
海棲艦は海の底で消えゆく意識の中考察した。

別に次がある確証などなく、己という存在は限りなく終わりに向
かつて近づいていることも理解はしていた。それでも、この敗北から
何かを得ようと足掻かずにはいられなかつた。

死の際でなお、より強くなるための思考と試行を止めずにはいられ
ない。それこそが、『力の渴望』に他ならないのだから。

そして、深海棲艦は辿り着いた。

自分は捨てすぎたのだと。不純物と断じたあれらの全てを捨てる
べきではなかつたのだと。

「だから、龍田から捨てたものを、また取り戻した」

そして、今ができた。

DW-1が、片方の薙刀を突き出す。

「それが、この差よ」

体中に数多の斬り傷を作りながら、薙刀の切っ先を突き付けられる
天龍の目は、未だ傷一つない彼女の姿を映していた。

「当然よね。私は強くなった。その一方で、あなたは左目を失いブラ
ンクもできてしまったんだもの」

DW—1が強くなった一方で、天龍は弱くなっていた。
必然として、力量差は圧倒的だった。

元々、深海棲艦の基本的な能力値は艦娘のそれを上回る。それに加
えて技まで上回られれば太刀打ちできるはずがなかった。

「さあ、どうするの、天龍ちゃん？」

「どうするって、お前を斬るんだよ」

「できないわよお」

「今はな」

天龍はそう言って、もう一度腰の刀に手をかける。

「そうだなあ、後、5分くらいか」

「なあに？ 勝算でもあるのかしら？」

「ああ、後5分も打ち合えば、なんとかかなりそうなんだ。だからよ、龍
田」

天龍は好戦的な笑みを浮かべた。

その笑みに、一瞬、DW—1の背筋寒くなる。

「5分で俺を殺せなきゃ、お前が死ぬぜ？」

「へえ、面白いこと言ってくれるじゃない」

先に海面を蹴ったのはDW—1の方だった。

二本の薙刀が天龍の首に向けて薙ぎ払われる。

「ほら、ほら、ほらあー」

「っ……っ！」

薙刀が二本に増えたということは、それを使いこなすことができる
ということは、すなわち攻撃の密度が二倍になるということ。

そこには微塵も反撃に転ずる隙はない。つまり、この猛攻は耐える
しかない。

一本の薙刀の切っ先が天龍の首筋を掠り、更に一本がわき腹を引つ
搔く。

二本の薙刀を一本の長刀で捌き切ることは不可能であり、天龍は辛
うじて致命傷を避けるので精一杯であった。

「ぐ、おおー！ おおおおおー！」

刺突を避け、横薙ぎを刀で受ける。

最早、痛みは感じない。意識も朦朧としてきた。

それでも、天龍の目は、一瞬たりとも目の前の敵から離れることはなかった。

「しぶとい……！」

「……………」

不意に、天龍の動きが止まった。

血を流しすぎたのか、それまでの必死な表情もどこか穏やかに変わり、その目は虚空を見つめている。

だらりと下がった両腕に最早力は籠もっていない。辛うじて刀を握っている状態に見える。

間に合わなかったのだと、D W—1は笑みを浮かべた。そして、その首を狙い、薙刀を振り下ろした。

「間に合った、ぜ」

「——ツ?!」

振り下ろした薙刀が半身で回避され鷹と思うと、次の瞬間、神速の剣閃が龍田を襲った。

「が、ああ!?!」

右足から左肩にかけて走る痛烈な痛み顔に顔を歪ませながら、左手の薙刀を払い、天龍を強引に後退させる。彼女は抜身の刀を流れるように鞘に戻し、居合の構えをとった。

「残念だが、俺の勝ち、だ」

「居合……天龍ちゃんの新必殺技ねえ、満身創痕とはいえ流石の私もその間に飛び込んでいく勇氣はないわあ」

一撃もなかったとはいえ、既に天龍は満身創痕。あと一押しでもすれば倒れ落ちる枯れ木同然。

故に、D W—1は薙刀を銚のように構えなおし、さらに、砲口を余さず天龍に向けた。

「だから、間合いの外側か——」

「ふっ！」

一閃。

何も認識できなかった。いつ天龍が間合いを詰めていたのか、いつ天龍が刀を抜いていたのか、いつ自分の身体を刀が通り過ぎて行ったのか。

「なっ!?!」

「まだ、浅かったか……!?!」

DW-1の身体が両断されていなかったのは一重に彼女の身体が深海棲艦上位個体の身体であったためだった。

それは天龍の想定以上の硬度を誇り、完璧に決まった居合斬りすら致命傷には至らせなかった。

「ぐ、これは——」

「じゃあ、もう一太刀ツ！」

再び、同じ感覚を味わう。

まるで時間が飛ばされたような感覚。気が付けば、離れた場所にはたはずの天龍は目の前にいて、気付けばまた斬りつけられている。

強固な深海棲艦の鎧がなければ、とつくに勝負はついている。

「なんだって!?!」

大ぶりの薙刀は当てることを目的としているのではなく、天龍を後退させることを目的とした一手。

想定通り、天龍は一度後退して追撃を諦めたが、依然緊張は解けない。

（おかしい。少しだって油断していたつもりはないわあ。なのに——）

「ふうっ」

「一体、何が起きているのかしらあ?」

「さあ、なんだと思う?」

また来る。直感が、深海棲艦としての本能が、正体不明の攻撃の再来を告げていた。

しかし、未知には対処ができない。

来るとわかっている正体不明に対しては、予防ができない。

（対処できそうにないならば、カウンターはうまくないわあ。天龍

ちやんの動き出しと同時に間合いの外に逃げつつ様子見――)

「――すう」

(いや、違う。ここは――)

天龍が動いたのはその瞬間だった。

しかし、今度は見える。

動き出しから、はつきりと見て取れる。余りにも無防備な突進。

「え?」

「――や、べ」

当然のように、突き出された薙刀に対して、天龍は真正面から刀身で受けるしかなかった。

そして、そのまま後方に吹き飛ばされた。今までの天龍の快進撃からは程遠い、あまりに未熟すぎるあり得ぬ失態。

その姿を見て、D W ― 1 は一瞬放心しかけるも、その直後、未知であった天龍の技の正体を掴む。

「成程、そういう技ね」

「ミスつちまつたなあ」

「私の初動を潰す技。『起こり』を穿つ技。後の先、一つの到達点」
動き始め。そこには意識の死角が生まれる。

天龍は、その天眼により相手の初動を見抜き、そこに合わせて攻撃を仕掛けた。

故に、D W ― 1 はことごとく天龍の攻撃の初動を掴むことはできず、防御すらままならない先制攻撃を受けた。

そして、今さつきは偶然、思考を転換したことで初動の位置がコンマ数秒ずれた。それ故に、見当違いな無防備な突撃に見えた。

「元々、相手の動きを見尽くして辛うじて形になる技だ。お前だからこそ、土壇場で完成した」

「ああ、そういうこと。昨日から一緒に行動して、戦って。全てがこの技の布石になっていたのね」

「昨日からじゃねえよ。俺とお前が出会ったあの時からだ」

D W ― 1 は大きな溜息をついた。

この技を防ぐ手立てはない。先刻は天龍の攻撃タイミングと初動

転換が偶然重なったことで起こったもの。

あれを意図的にはできない。

故に、溜息しかでてこなかった。

天眼はたった今、D W—1の全てを見切った。数年もの時間をかけて。

これより先は如何なる攻撃も、行動も、初動を潰され、封殺される。これを回避する方法はない。強いて言えば、止まらず攻撃を続けること。しかし、それももう遅い。

一度でも止まってしまった以上、もう次はない。

次に動いた時が、終わりの時に違いなかった。

「ねえ、天龍ちゃん。騙したこと、怒っているかしら？」

「ああ、躊躇なくお前を殺せる程度にはな」

「ふふ、良かった……さて、決着をつけましょうか」

「ああ」

しばらく、静寂が流れた。

やがて、一分程が経過した頃、D W—1が両手の薙刀を振り上げようと力を籠める。

それはおそらくは天龍に向けて真っすぐに、最速で振り下ろされたに違いない。

しかし、その両手が上がる前に天龍の剣閃がその両手首を斬り落としました。

そして、そのまま刀は日輪を背に受けるように、振り上げられる。

「いい夢、見させてもらったぜ」

D W—1は振り上げられた刀を避ける素振りも見せず、最期の時まで天龍の姿を見つめていた。

そして、刀が振り下ろされる瞬間、小さく微笑んだ。

「ええ、私もよ」

第四百四話 「本当に、強くなつたわねえ」

私の過ちの話をしよう。

事の始まりは私自身の覚醒だった。

一体いかなる手段で私が再び目覚めたのかは定かではなく、興味もさしてない。

とにかく、天龍に首を斬り落とされた舞鶴の夜から止まっていた私の時間は突如として再び動き出した。

しかし、ここで問題が起こった。

私は、眠りに着く直前、海底に沈みながら龍田の記憶、研鑽、停滞、感情、それらをできうる限りかき集めた。

しかし、捨てたものを再びかき集めるなんて無茶を死に際にやったせいか、目覚めた私の記憶は混濁の中にあった。

あろうことか、私は、自分を龍田だと誤認していたのだ。

私は陸軍の研究所を破壊しつつして、海に出た。

冷静に考えればあれは深海棲艦特有の殺人衝動、破壊衝動だった。

七丈島にいつの間にか辿り着いたのも偶然ではないのだろう。もしかしたら無意識に天龍の気配を追って辿り着いたのかもしれない。

しかし、私はそれらの事項を見て見ぬふりをした。

自分は『龍田』で、『艦娘』なのだから、そんなことができるはずはないと思いを停止させたのだ。

『——これはこれは、まさかそちらから網にかかりに来るとは僥倖でありますな、DW—1』

蜻蛉隊の襲来がきっかけだった。

彼らのDW—1への敵意が、更には綾波との死闘が、深海棲艦としての私を呼び起こした。

そして、私は全てを思い出し、全てを理解した。

しばらくは考えがまとまらなかった。

一晩考えつくして、ようやく答えが出せた。

私は、深海棲艦DW—1に戻り、天龍と殺し合うことに決めたのだ。

☆

天龍の刀が私の身体を袈裟斬りにした。

まだ意識はあるが、あと一刺しもすれば私の核ともいべき部分は破壊される。今、私の死はほぼ必定のものとなった。

緩やかに私という意識は消滅し、海に還るだろう。

瞼を落とす時だ。そう青空を見上げながらも虚ろな目を閉じようとしたその時だった。

「――あら、壊しちゃったの？ それ」

その痛に障る声を、私は知っている。

「叢……雲……ッ!？」

彼女の姿を見て天龍の表情に驚愕が加わるのがわかった。気付いたのだろうか、この叢雲は、あの叢雲なのだと。

「はあい、天龍、お久しぶり。龍田も、ね」

そう言つて海面に伏している私に手を振る彼女に敵意の籠った視線を返した。

「あら、何その目、怖いわねえ。折角あなたに代わって私が種明かしをしに来てあげたのに」

どういう意味だ。私の背筋を悪寒が走る。

嫌な予感がしたのだ。

やめろ、と視線を投げかけるも叢雲は楽しそうに首を振った。

「あなたの都合なんてどうでもいいのよ。だって苦労して研究所から助けてあげたのにこれで終わりなんて勿体ないじゃない」

私は言葉に詰まる。

この叢雲が、私を研究所から逃がした張本人だと。何故、一体何のために。

次々と湧き出る疑問に脳裏が支配されてった。

「それは勿論、我らが司令官、鏑木美鈴の指示よ」

「鏑木、美鈴……!」

「当時はあなたを療養かつ秘匿するだけの施設とお金がなかったから仕方なく陸軍に貸していたんだけど、もうその必要もなくなったか

らね。でもあいっら返せって言っても絶対引き渡さないでしょう？
だから、秘密裏に奪い返す手筈だったのよ」

その言い方だと、実際計画通りにはいかなかったという意味だろうか。

そこで言葉を一度切った叢雲は突然、口元を手で押さえる。

その隙間から噛み殺した笑いが漏れ出て聞こえてくる。

「でも、ほら、あなた面白い勘違いをしてくれていたじゃない？ 自分を、龍田だと思い込むなんて、ねえ？」

「……………っ！」

「だからね、ちよつと面白そうだなと思って。気絶させてから七丈島の近海に置いてきたのよ」

「全部、てめえが仕組んだことだったのか……………」

「ええ、案の定、この子は天龍と再会し、まるで龍田本人のように振る舞っていた。いやあ、蜻蛉隊に潜入して七丈島に来た時は笑い声を抑えるのが大変だったわよ。仮面を付けていて助かったわ」

どす黒い感情が体の底から湧き上がってくる。

「いい加、減、に……………しやがれッ！」

天龍が激昂し、叢雲に対して刀を振る。

彼女の後退と共に、力尽きたのか天龍は海面に膝をつき、荒い呼吸を繰り返している。

「あはは、天龍。あまり動かない方がいいわよ？ そんなに頑張っていると死んじゃうわ」

「ぐ、ふ」

私との戦闘でのダメージは決して少なくはない。今の天龍は辛うじて叢雲を睨みつけるので精一杯のようだった。

「ねえ、龍田。あなたを見ていて私凄く心が躍ったわ。自分が艦娘だと思いつ込んでいた深海棲艦。その認識が正された時、あなたは一体どんな結末を描くのか。楽しみで仕方がなかった」

叢雲が私を見て笑う。

「でも、まさかこんな結末を選ぶとはねえ」

この女、どこまで気付いている。

そうだ、私は考えた。私という生命はどう振る舞うべきなのかを。深海棲艦と自覚しながらそれでも龍田を演じるのか、深海棲艦としての自らを受け入れ敵対するのか。

私は深海棲艦として敵対を選んだ。そこまでは見透かされていい。「深海棲艦としての自分を受け入れたのに、奥底では龍田を捨てきれなかった」

「——っ！」

「どういう意味だ……？」

やめろ。

「わからないかしら？ 結局、これは深海棲艦に戻れなかったのよ。いくら龍田の外装を貼り付けようが、その核は変わらない。あなたが龍田の贋物である事実は変わらないのにな」

やめて。

しかし、最早叢雲の口を塞ぐには遅すぎた。

「あなたは天龍を殺すことを願ったんじゃない。深海棲艦として天龍に殺されることを選んだのよねえ」

そして、一番知られたくない事実を、彼女は惜しげもなく吐き出した。

「……………」

絶句する天龍の表情は見えていられない。

それを見てまた愉快そうな笑みを浮かべると、叢雲は槍を必要以上にちらつかせながら呟いた。

「ねえ、龍田。今天龍を殺すって言ったらどうする？」

☆

私は間違えたのだ。

私は、一晩考えた。

深海棲艦としての自分と、龍田として振る舞っていた自分。どちらが本物なのか。

頭ではわかっている。

私は深海棲艦なのだ。頭の奥底でガンガンと叩きつけてくる際限なき憎悪と殺戮衝動が何よりもそれを顕著に表している。

だが、そこまで理解してなお、何故私はそれを理性で押さえつけようとしているのか。

何故、深海棲艦の本能を拒絶しているのか。

そう、私の過ちは龍田になろうとしたこと。

龍田の残滓を、取り込み過ぎてしまったことだ。

そのせいで、こんなにも苦しい。

そのせいで、こんな答えに満足してしまった。

——私は、深海棲艦として天龍と戦い、そして殺される

天龍が私を殺せばその武勲はきつと七丈島鎮守府を守ってくれる。蜻蛉隊も引き上げるしなくなる。

また、彼女達の日常が戻ってくる。

ああ、私はどうしようもなく壊れてしまっている。

私には眩しすぎてかえって居心地の悪かったあの日々を、私の手で守ることができる。そんなことが、私には何よりも大切に誇らしく思えてしまっているのだから。

『ああ、この感情は何なのかしら』

これは、きつと深海棲艦にはない感情だ。

きつと不要なものだ。

この感情の名前は——

☆

「ぐ、う、あああああッ！」

私は薙刀に全重心をかけ、叢雲を押しつぶさんと力を籠め、叢雲に叩きつける。

完全な不意打ちのはずだった。予想外の反撃のはずだった。

「あはは、なんて底深く愚かなのかしら」

三連突。

私の身体に三つ穴が空いた。

一切見えなかったが、おそらくはどれも叢雲の槍によるものだった。

おかしい、私は最速をもって叢雲の命を脅かしていた筈だった。

それが、何故、掠りもせずあろうことか反撃まで許しているのか。

「私の眼の前では時すら止まる」

叢雲が両膝をつく私に勝ち誇った笑みと共にそう言った。

「天龍の持つ天眼。それに匹敵する目を、私も持っている。そうねえ、神眼とでも名付けましょうか」

「神の目とは、また大げさ、ね……」

「如何なる速度の攻撃も、私には総じて止まって見える。そして、止まった時間の中で動けるだけの神速を、私だけが持っている」

叢雲が海面を蹴ると同時に私は彼女の姿が消えたものと錯覚した。

次の瞬間、叢雲は私の懐に飛び込み、槍を突き立てたのだ。

私の猛攻すら止まって見えるほどの動体視力。そして、その艦娘離れした機動力。

神眼と神速。二つが合わされば、彼女は止まった時の中で動いているも同然というわけだ。

そこには速度も、不意打ちも関係ない。

「ああ、残念。底が知れたわね、龍田。所詮は『ワルキューレ』になり損なった失敗作」

私の眼前で、叢雲が笑って槍を構える。

叢雲は、全てを台無しにするつもりなのだ。

私のたった一つの想いも、容赦なく踏みにじって、強制的に私を終わらせに来たのだ。

しかし、抗う術はない。どう足掻いても目の前の槍を私は避けることができない。

やめてくれ、私はおそらく、生まれて初めて神というものに懇願した。

こんな終わり方は認められない。

誰でもいい。頼むから、この状況を、なんとか引つ繰り返せる誰か。私を、助けて——」

『——ヲヲ……その慟哭、確かに聞き届けた……』

「っ……！ この気配は!?!」

初めに、周囲を不自然な霧が包み込んだ。

同時にその気配を知覚できたのは私と叢雲だけのようだった。姿が見えずともその気配の強大さが嫌でも私達の身体を硬直させ、警戒レベルを最大まで引き上げる。

来る。そう思った時、それは霧の中から私達の目の前に姿を現した。

「こ、いつ、は……！」

禍々しい大口が特徴的な異形を帽子のように頭に寄せ、黒いマントを羽織る青白い肌とアイズブルーの瞳を持つ少女のような姿をしたそれを、その場の誰もが知っている。

空母ヲ級。艦娘ならば一度は交戦したことがあるであろう敵正規空母だ。

「聞いてない……聞いていないわよッ！　こんなの！」

叢雲の狼狽も相まって私は疑問を浮かべる。

空母ヲ級。flagshipでも改でもましてや新型艦載機搭載型でもない。普通の空母ヲ級。

おおよそ、雑魚敵、精々中ボス程度に収まるような深海棲艦の筈。とても私と叢雲が感じた強大な気配を発するような個体ではないはずだった。

このヲ級は、何かが違う。

「ヲヲ、どうやら間に合わなかった。ほんの一瞬だけ確かに感じた『姫』の気配。また消え失せてしまった」

「……………ッ！」

「だが、こちらはまだ間に合いそうだ」

瞬間、叢雲が吹き飛ばされ、霧の中に消えた。

それが、ヲ級の手に握られていた黒い杖に仕込まれていた刀身による斬撃だったことに気付くのに、私は数瞬の時間を要した。

「ヲヲ……」

ヲ級も叢雲が飛んで行った方にゆっくりと足を動かし、同様に霧の中に消える。

数秒して、再び私の目の前に数多の切り傷を負った叢雲が吹き飛ばされてきた。

「くそ！ この霧さえなければ！」

そうか、この濃霧ではヲ級の攻撃が見えないのだ。

見えないものは避けられない。

私が手も足も出なかった相手をいとも容易く蹂躪するヲ級に背筋が寒くなる。

「ヲヲ……」

「忌々しい……撤退するしかないみたいね」

一瞬、私の方を見て悔しそうに舌打ちをすると、叢雲は海面を蹴り、霧の中に姿を消した。

すると、すぐに霧が消え、目の前にヲ級が立っていた。

「すまない同胞よ。あれは随分と逃げ足が早い。討ち取り損ねた」

「……あなたは、何？」

「私は、『姫』の侍従。それ以外に存在価値ヲ見出せないもの」

どこか自虐的な語りに私は困惑しながらも、とにかく叢雲という脅威が去ったことに一先ず胸をなでおろした。

「深、海棲艦……」

天龍が、必死に戦闘態勢を整えようと歯を食いしばっているのが見えた。

それを見て空母ヲ級は首を振った。

「やめてヲけ、艦娘。私は他の同胞とは違う。ヲ前達の殺戮ヲ目的とはしていない」

そう言いながら、ヲ級は仕込み刀を杖に収める。

「同胞よ。理解しているだろうが、ヲ前に残された時間は短い」

「ええ、わかっているわあ」

既に叢雲の攻撃によって私の中の『核』は壊された。

私の意識は少しずつ崩壊を始めている。

「では、これからどうする？」

「為すべきことを為すわ」

「……よろしい。私の助力は必要ないようだ」

ヲ級は何かを察したように薄く微笑む。

同時に、再び霧がヲ級を包み込むように現れた。

「ヲヲ、姫よ……御身は何処にあらんや——」

その哀愁の入り混じった声を最後に、ヲ級は霧と共に跡形もなく消え去った。

「お待たせ、天龍ちゃん。さあ、仕切り直しといきましょうか」

私は、ゆつくりと薙刀を構え、そう天龍に微笑んだ。

崩壊が始まっている。もう薙刀を二本振れる余力は残されていない。

だから構えるのは薙刀一本だけだ。

「悪いけれど、もう時間がないの……早く、刀を構えなさい」

「……………」

ああ、あなたのその表情が見たくなかったから。

私は、深海棲艦であることを受け入れたのに。

「早く、く」

「嫌、だ……」

天龍は首を振り構えない。震えているようにも見えた。

見ているだけで、私も辛くなった。

でも、それでもこのままでは駄目だから、私はあえてあなたに厳し

い言葉をかけるべきなのだろう。

「そんな甘えは許さない……刀を構えなさい、天龍……ッ！」

「——ッ！」

「全部、あなたの——あなた達のせいよ」

恨み言のように、私の口から言葉が漏れ出る。

「あなた達のせいで、私は深海棲艦私じゃいられなくなったのよ。あなたのせいで、私はこんな結末を選んだの。その責任を取りなさい……ッ！」

「龍、田……」

それほどに、七丈島で龍田として過ごした時間は温かすぎて。氷よりも冷たい世界で生きる深海棲艦には耐えきれなかったのだ。

だから、本来選ぶはずのない自殺という結末を選んでしまったのだ。

「私ね、どうあれこの七丈島で殺される運命だったと思うのよ」

それに結局、全ては仕組まれたことだった。
ならば、きつと私がどういう道を選んでも生存という道は最初から
なかった。

私が目覚めたあの時から、私の死は決定していたのだ。

「どうせ殺されるなら……私は、天龍ちゃんがいいわ」

「——っ」

あきつ丸でも、イタリア軍でも、ましてや叢雲なんてまっぴら御免
だ。

どうせ殺されるなら、私は殺される相手は選びたいと思ったのだ。
殺されてもいいと、そう思える誰かが、幸運なことに私にはいたの
だ。

「さあ、構えて」

天龍が、ゆつくりと刀を両手で持ちあげる。私に切っ先を向ける。

剣先は震え、今にも崩れ落ちそうなくらい弱弱しい。

でも、それで十分だった。

「ええ、それでいいのよ」

私は、倒れるように前に進む。

そして、天龍の構えた切っ先に自ら身体を預けた。

天龍からして、何かを貫いた感触はほとんどなかっただろう。

私の腹部を刀が貫いた瞬間、私の視界が徐々に真っ白に染まってい
く。

いよいよ、終わりの刻限がやってきたのだ。

「天龍ちゃん——」

私はゆつくりと彼女の頬に右手を添えた。

彼女の熱が、指先を伝わってくる。それが、とても心地よく感じる。

そして私は、彼女にゆつくりと最期の言葉を贈った。

「本当に、強くなったわねえ」

あなたは誰にだって負けない。

あなたは何にも押しつぶされない。

それだけの強さを持っている。

だから、強く生きなさい。

そんな激励を込めた、『龍田』の言葉での締めくくりをこそ、私は選んだ。

「龍、田——」

——ああ、最後まで、私をそう呼んでくれるのね。

私は何もかもを間違えた。

しかして、私は満足だった。

☆

龍田は最期に嬉しそうに微笑んだかと思うと、ゆっくりと目を閉じる。同時に俺の頬に添えられていた手がだらりと垂れ下がり、彼女は動かなくなった。

刀をゆっくりと引き抜くと、彼女の身体を抱きしめる。

温もりは、もう感じなかった。

その後、七丈小島まで戻った俺は、その堤防に彼女の亡骸を横たえ、隣に座った。

「……………」

俺は、一体どんな顔をしているのだろう。

俺が殺した彼女は、龍田ではない。

龍田本人は、舞鶴でとつくの昔に死んでいるのだ。これはそれを真似た化物にすぎない。

だから、こんな感情を抱く俺はきつと間違っているのだ。

「——全て、終わってしまったのでありますな」

後ろを振り向く。

そこには黒い外套と軍服を真っ赤な鮮血で汚すあきつ丸の姿があった。

驚きはなかった。

むしろ、俺はその到着を心のどこかで待っていたのだ。

「よお、お互い満身創痍って感じだな」

「ええ、それに、深海棲艦もうようよしているでありますからなあ……今襲われればひとたまりもないでありますよなあ」

「で、そんな死地に何しに来たんだよ。もう、全部終わっちゃったぜ」
その言葉にあきつ丸は乾いた笑い声を返した。

「私は、いつだって悪を打倒するため放浪しているであります。それ以外に生き方を知らない故」

自嘲気味にそう呟きながら、あきつ丸は続けて言った。

「D W ー 1 を渡すであります。その亡骸、我々が正義のために使い潰して差し上げよう」

「は、断るに決まってるだろうが」

俺の即答に、あきつ丸は心底嬉しそうに笑った。

「私が打倒すべき悪となってくれるのでありますね」

「お前とは、絶対に戦うことになる確信があつたぜ」

刀を構える。

あきつ丸も、ゆっくりと縦拳を突き出す。

「これが、きつと最後の戦いだ」

龍田の亡骸を背後に、俺はあきつ丸に向けて刀を振った。

第百五話 「短い間だったが、楽しかったぜ」

正義とは何か。

生きていれば誰もが一度は考えるテーマだ。

人を助けること。

秩序を守ること。

人間の生まれ持った善性そのもの。

今まで様々な意見を聞いた。

しかし、そのどれもが私を満足させるに足る回答ではなかった。

私は、ほとんどの人間が正義だと感じられることに正義を感じることはできなかった。

そもそも正義とは変化するものだ。現在悪と言われている事象が過去、正義と評されていた時代がある。逆もまた然り。

なればこそ、私が正義を知覚できるのはただ一つ。数多の変化を繰り返してきた正義の中で、唯一、人類史始まって以来一度たりとも変化することのなかった絶対不変の正義事象。

悪の打倒、である。

ほら、日曜日の朝にやっている戦隊ものだってそうだろう。

あれは、自らの善性をもって正義を示すのではなく、悪の掃討をもって正義を謳っている。

人を助けることが正義とは思わない。誰かを救うことは誰かを救わないことだから。

秩序を守ることが正義とは思わない。その秩序が正しいという根拠が欠けているから。

人間の生まれ持った善性が正義とは思わない。そもそも人間に生まれ持った善性など存在しないから。

故に、私はこの正義を選んだ。

悪を滅ぼすことによる実質的な善性の繁栄。それをもって正義を語ることにした。

だから、私には悪が必要だ。

私が正義をなすためには、打倒すべき悪が必要なのだ。

☆

「――目覚めましたか？ 大和」

「……………提督」

入渠の浴槽に着衣状態で入れられていたらしい私はゆっくりと体を持ち上げる。

既に体に痛みはなく、目立った傷も見当たらない。

しかし、私と提督双方の表情に笑顔はない。

私の顔は暗く、恐怖に怯え、一方で提督の表情は今まで見たことないくらい冷たく厳しかった。

「撃ちましたね？」

「……………はい」

重苦しく私は返答する。

「次に約束を破れば、あなたを殺す」

「……………すみませんでした」

「殺させないでください。お願いですから」

殺す、と言われたことよりも、殺させないでくれと嘆願された時の方が心に重くのしかかる感じがして、胸が痛んだ。

「――はい、とりあえず今はここまでです。切り替えてください、状況を説明します」

「は、はいー」

「現在、七丈島周囲で戦闘を行っていた艦娘、蜻蛉隊はほとんど回収できました。しかし、依然、深海棲艦に囲まれている状況は変わりません。こちらはほとんど全員が負傷と疲労を抱え、資源と資材も枯渇している。気の抜けない局面です」

どうやら状況はまるで好転してないらしい。

私はずつと気にかかっていた質問を提督に投げかける。

「天龍は、戻りましたか？」

「……………いえ、天龍と、あきつ丸両名がまだ見つかっていません」

「――ッ！ 私が出ます！ 彼女達が撤退するための壁役くらいはできるはずです」

「駄目です。認められません」

「な、何ですか!？」

「今のあなたが正常かどうか判断できないからです。そんなあなたを深海棲艦が最も密集するあの領域に送るわけにはいかない」

「……………」

「ごらえてください。今は神通と武蔵が防衛に出てくれていますし、あともう少しすれば援軍もかけつけてくれます。天龍もあきつ丸も弱い艦娘じゃない。きつと生き残れるはずですよ」

提督の視線を受けて、私を出さないという判断が絶対のものだと悟った。

「私は……また、何もできないんですね……」

横須賀との演習の時も、犬見艦隊との戦いでもそうだった。

どんなに工夫を凝らしても結局私は戦力になれない。

私はいつだって重要な局面で役立たずなのだ。

「そう思っているのはあなただけです。矢矧の時も、磯風の時も、そして今回も、あなたは十分すぎる活躍をしてくれています」

「でも……」

「それに、何もできないというのならそれは私の方です」

そのセリフを言われると、私は黙るしかなかった。

「取りあえずは救護班に回ってください。矢矧達やエドモンド・ロツソ提督も頑張ってくれていますが人手は全く足りていません」
「わかりました!」

今の私では海に出ても迷惑をかけるだけなのだ。

ならば、今の私にできることを探す努力をすべきなのだ。

私は急いで入渠室から飛び出した。

☆

それはおおよそ、戦いと呼べるものではなかった。

剣と拳。

双方の武器はあまりにも傷つき、脆く、通常時の動きから見てもあまりにも脆弱な攻撃が互いに精一杯だった。

しかし、その脆弱な攻撃でも通用してしまう程度には体力も枯渇している。

その戦いは既に技量を競い合うものではない。
互いの技量を十全に発揮し、競うにはあまりにコンディションは最悪だ。

故に、これは力比べではなく、精神力の比武。
心比べとでも評するに相当するものだった。

「はあっ、はあ……ッ！」

「ぐ、ああ……あああ！」

獣のような音しか口から出ない。

刀と拳が打ち合う度に衝撃が双方を襲い、意識が持つてかれそうになる。

どちらが先に倒れるか。

どちらが最後まで立っていられるか。

まだ、戦いは終わらない。

「正義を……」

私は声に出す。

「正義を……！」

自身に言い聞かせるように。

「正義をッ！」

自身を鼓舞するように。

そうして打ち出された拳は天龍の刀と火花を散らす。

天龍が苦し気な表情でのけぞる。

私も弾かれた衝撃で一瞬意識が飛ぶ。しかし、すぐに舌を噛み、痛みで無理やり意識を引き戻す。

まだ倒れる訳にはいかない。

勝つまでは、正義を為すまでは、私は絶対に倒れる訳にはいかないのだ。

「が、ああッ！」

天龍も負けじと咆哮をあげる。

その姿に私は敵意など放り捨てて素直に感動する。

まだ倒れない。

まだ諦めない。

互いにきつとわかっている。
互角ではない。

私の方が僅かに有利だ。
互いに残存する体力は僅か。ならば、これは心の勝負。ならば、私の方が有利だ。

私の執念の方が、絶対に勝る。

「あああああッ！」

再び、衝突する。互いに弾かれ合う。

もう何度繰り返し返した。

そろそろ倒れる。

私に正義を完遂させろ。

一体、お前に何があるというのだ。いや、違う。お前にはありすぎる。お前には、譲れないものが余りに多すぎる。

故に、執念が浅い。分散するんだ。心の芯ともいうべきものが多すぎて、かえって不安定だ。

私は違う。私は、一つだけだ。

「正義……だけだッ！」

だから譲れ。

お前にはまだ芯にできるものが残っているだろう。

だが、私にはもうない。

だから譲れ。

「がああああー！」

また衝突する。

まだ天龍は倒れない。ならば私も倒れる筈がない。

何故。そんな疑問が浮かんだ。

どうしてまだ競り合える。

もう十分戦っただろう。ここで負けてもお前を責める者は誰もいない。

きつと七丈島の仲間達は今までと変わらず絆を繋ぐ。

失うものなどないのだ。

その深海棲艦の亡骸一つ失うことに一体どれほどの喪失がある

のだ。

それは龍田じゃない。龍田を模した深海棲艦に過ぎない。

それを諦めたところで、龍田を諦めたことにはならないはずだ。

「ふう、ふうっ！」

まだ、倒れない。

わからない。どうして倒れないのかがわからない。どうしてまだ勝てないのかがわからない。

少し強い風が吹けばそのまま倒れてしまうような。そんなボロボロの身体で。

失うことが許されたその恵まれた精神で。

「……なんだ、その目は」

何故、そんな目ができる。

何故、強さを感じさせる。

何故、まだ倒れない。

違う。こんなのは認めない。私が勝つ。勝たなければならない。

正義を為す。それ以外の全てを削ぎ落してきた。

正しく生きよ、参謀総長の——父の、たった一つの教えだけに全てを捧げた。

仲間も、友も、絆も、全てを手に入れ、何一つ捨てきれなかったよ
うな奴に負けてたまるか。

「私が……正義だッ！」

初めてだった。

私の渾身の拳は天龍のガードを突き破り、その体に突き刺さった。
渾身とは言っても、威力はそこらへんのチンピラの方がまだ強いと
いう、笑えるほどノロマで、握りの甘い一撃。
だが、勝負を決めるには確実な一撃だった。

なのに——

「な……ぜ……！」

「そ、れで……終わりかよ……？」

まだ、天龍は立っていた。

おかしい。そんな筈はない。

「じゃあ、今度はこっちの番だ」

拙い。腕が上がらない。

最早、今の身体にはただ殴りつけることすら重労働だ。渾身を持って放った一撃は命中こそすれ、それで終わりだ。

そこからすぐには動かせない。

私は、迎え撃つことも、ガードすることも、回避することもできない。

そうか、天龍はこれを狙っていたのだ。

私の、渾身の一撃。

それを甘んじて受けることで、それを決死の覚悟で耐えきること、視線を潜り抜け勝機を手にした。

「今度こそ……！」

天龍の刀がゆつくりと持ち上がる。

動け、足。

あと数センチ右に動くだけでいい。

限界を超えている故に、あまりに緩やかな攻撃。その長い時間はかえって私に敗北を、死を、十全に悟らせてしまう。

「今度こそ……俺は……龍田を諦めねえッ！」

ああ、そうか。

私の敗因は盲目。

相手の覚悟を見誤ったこと。

この剣士は、私と同等の覚悟を持ちながら、それでも尚私を侮らなかつた。

私は、自分のことばかりで、それがまるで見えていなかった。

天龍の目は刀を振り下ろすその瞬間まで私を必死に見つめている。

ああ、良い目だ。勝利者の眼だ。

最期に見るものとしては、存外悪くはない。

☆

「え、マジですか？」

「本当に困ったわよ」

大和の困惑した表情に、矢矧も溜息をついてお手上げと言わんばか

りに手をあげる。

「つい一時間くらい前のことよ。正直、応急手当しただけでまるでダメージは回復していない。なのに、この私の隙を突いて逃亡とは。全く大したものだわ」

至って冷静にそう呟く瑞鳳に大和は悲鳴のような声をあげる。

「ど、どこに逃げるっていうんですか!? まだ周囲は深海棲艦がうじゃうじゃしてるんでしよう!」

「ああ、だから逃げたんじやないんだろう」

磯風も消毒液を抱えながら呆れた笑みを浮かべている。

「でも、気持ちはわかるなあ。私だって、天龍が心配でたまらないもん」

「だからこそ、腹が立つのよ」

プリンツの言葉に矢矧が苛立たし気に返す。

「まるで、我慢している私達が馬鹿みたいじゃないの!」

そう言って、矢矧が見つめる先には、不自然に空いている二つの救護ベッドがあった。

☆

「な……」

「……………」

天龍の刀が振り下ろされることはなかった。

それを妨げるように、二つの影が私と天龍の間に現れたからだ。

「まるゆ……原田……何故、お前達が……」

「隊長、間に合って良かった……」

「わ、私達が……守ります!」

できるはずがない。

二人とも武装をしていないうえに、そもそも既に満身創痍だ。ここまで来るので既に限界に達してしまっている。

原田に至っては至る所に巻かれた包帯から血が滲みだし、特に喪失した両腕の断面部からは血が滴っている。危険な状態だ。

それでも彼らは、私を背に隠し、まるで勝ち誇るかの如く天龍に吠えて見せるのだ。

「どうした？ 斬りたいなら斬れ。わが身をもって隊長の盾となる。弱弱い貴様如きの斬撃では俺の命一つ奪うのが関の山だろうよ」

「わ、私だって……ッ！」

何をしている。

盾となるだと。馬鹿か。誰がそんな命令をした。

「何を……している……！ 戻れ……死にたいのでありますか……ッ!?」

二人は首を振る。

「隊長を守れずして、何が蜻蛉隊隊員かッ！ これは、天意なればッ！」

「私達を必要だと言ってくれたあなたが、私達には必要だから……！」
やめろ。その刀を振り下ろすな。

それは関係ないのだ。

私の正義とは、この戦いとは一切の関係を持たない。不純物だ。

だから、私から奪うな。

だから、その切っ先は私だけに向けろ。

「………はは、なんだよ。その目」

ふと、天龍が私を見て笑った。

「ああ、ずりいなあ」

ゆっくりと、刀が下がったかと思うと、それは天龍の手から離れる。

そして、それを追いかけるように、彼女の全身が背中から地面に叩きつけられた。

「そんなの、勝てるわけ……ねえ、じゃねえ、か——」

そうして、天龍はゆっくりと目を閉じた。

「……お、終わったのか？」

「ふ、ふええ」

原田とまるゆは緊張の糸が切れたのか。思わずへたれこむ。

戦いは終わった。

勝敗は決した。

私は、まるゆと原田に言った。

「勝負は決した。さっさと引き上げるでありますよ」

「……奴の後ろに見えるDW―1はどうしますか？」

「……捨て置き。私達にはもう使い道のないものがあります」
私にあれを手に入れる資格はない。

私は敗北したのだから。

「動かないでもらえるかしら？」

「弾薬とか節約したいので、お願いします」

ふと、背後から声が聞こえる。

振り向けば、イタリア軍の艦娘が私達に砲を向けていた。

成程、漁夫の利という奴だ。

「DW―1の死体を回収しに来たのでありますか？」

「そう命令を受けてきたわ」

「……そうでありますか」

ならば、大人しくはしてられない。

あれは天龍が勝ち得たものだ。

ならば、天龍の手に渡らなければ、正しくない。

「ああ、違う違う。もう事情が変わったのよ」

殺気を放つ私に、彼女たちは焦って手を振る。

「死体じゃ意味ないのよねえ。生きたDW―1を捕縛するのが目的
だったわけで……」

「というわけで、私達はそこの天龍を回収しに来たってわけえ」

「……なら好きにします」

「ああ、あなた達も捕まえてこいって矢矧から追加指令受けてるから。

逃げちやだめよ？」

私は手を上にあげた

それが、敗北者にはふさわしい所作だと思ったのだ。

「ええ、好きにするでありますよ。降参であります」

私は敗北した。

しかして、正義は為された。

悪の打倒、それだけが絶対正義と思っていた。

だが、もう一つあったのだ。絶対不変の正義。

正義は勝つ。あるいは、勝った方が正義。

故に、私は負けたが、確かに正義はなされたのだ。そこで倒れる隻眼の剣士の勝利によって。

☆

気付いたら、俺は椅子に腰かけていた。

その椅子は不思議なことに海面の上に不自然に浮かび、固定されている。

「あら、目が覚めたのね」

真正面からの声に顔をあげ、俺はここがどういう場所なのか理解した。

思わず笑いがこみあげてしまう。

「よお、久しぶりだな、暁」

「ええ、久しぶりね、天龍」

正面に座る暁はどこか大人びた笑みを俺に向けた。

「なんだよ、これもしかしてお迎えってやつか？」

「それを決めるのはあなた次第よ。あなたはどうしたい？」

暁は俺に問う。

成程、本当に俺は生死の狭間というやつにいるらしい。

生きること死ぬことも、今の俺にはあり得るといわけだ。

正直、暁とこうして再会できたのは嬉しいし、このままいつまでだつて話をしたいという願望がある。

だが、俺には、聞こえている。

「悪い、まだそっちには行けねえ」

「それは、私の『命令』があるから？」

少し心配そうな表情をする暁に俺は笑って首を振った。

違うよ、暁。お前の命令のおかげで今まで生きることが諦めなくて済んでいたのは確かだ。でも、もう、違うんだ。

——龍！ 天龍ツ！

「できたんだ、もう少し一緒に居てえって思える仲間が」

「そう、そうなのね」

「悪いな」

一瞬、暁は寂し気な表情を見せたが、すぐに安心したような優しい

笑みを俺に向けた。

その笑みに、僅かに俺の視界が歪む

「もう、私の命令は必要ないみたいね」

「長いこと心配かけたな。返すぜ、お前の半身」

「うん、もう私も思い残すことはないわ」

その言葉と同時に暁の身体が青白く光り始める。

別れの時が来たのだろうか。

「そういや、龍田は来てくれなかったのかよ」

「ええ、どうせこつちには来ないだろうからって」

「薄情な奴だなあ、おい」

「それに言いたいことは、全部あの子が言ってくれたからって」

「……そっか」

あの子、とはDW-1と呼ばれた深海棲艦のことを言っているのだろう。

「じゃあね、天龍。次に会った時はあんたのお婆ちゃん姿を見れることを期待するわ」

「へっ！ 相変わらず口の減らねえちんちくりんだぜ」

「ちんちくりん言うな！」

「……じゃあな、暁。今までありがとうな」

「ええ、精々長生きしなさい。私も龍田も、ずっと待つてるから」

その言葉を最後に、暁の姿は青白い光の粒子となって消えた。

俺もゆっくりと椅子から立ち上がる。

さつきから聞こえるのだ。

耳障りな俺を呼ぶ声が。

——天龍！ 目を覚ましてください！ 天龍ッ！

「つたく、ダチとの再会くらいゆっくりさせてくれねえのかよ！」

☆

「——っ！」

「天龍！ 皆、天龍が！ 天龍が目を覚ましました！」

「本当に!? 天龍意識ははつきりしている!? 私達がわかる!？」

「だから言ったでしょ? どうせ大丈夫だって」

「何度か心停止してたけどな」

「天龍うろうう！」

目を覚まして早々、五人の少女が横たわる俺の身体に群がってくる。

一人一人の顔を見て、つい笑いがこみあげてしまう。

ああ、また戻ってこれたんだな。

この日常に。

☆

「はっはっは！ この海老名ちゃん提督とその愉快で無敵な機動艦隊にかかれば千や二千の深海棲艦なぞなんのその！ 見たか大将パワーツー！」

「提督、飲み過ぎですよ」

「固いこと言うなよー、お艦ー」

海老名が日本酒を一升瓶ごと煽りながら、陽気に叫び散らす。

あの後、ようやく佐世保艦隊を中心とした援軍が到着し、七丈島に集まっていた深海棲艦は一隻残らず駆逐されつくしたらしい。

その後、蜻蛉隊の面々は治療と捕縛を兼ねて横須賀艦隊が護送していった。全員、これといった抵抗もなかったらしい。

おそらくはあきつ丸が事前に言い含めていたのだろう。

そして、現在、夜までかけて一通り負傷者の治療、や被害状況の確認などを終え、七丈島鎮守府で祝勝会を兼ねた宴会が始まっていた。

とは言っても人数が人数であるために食堂には入りきららず、外でのバーベキューとなったのだが。

これはこれでいつもと趣向が違って楽しい。

「天龍、ここにいたんですね！」

「何一人でたそがれてんのよ」

「今夜は晴れていて月も星も良く見えるな」

「天龍うろうう！ 飲んでるうろうう!？」

大和、瑞鳳、磯風、プリンツが俺に声をかけた。

その手には酒が握られており、プリンツは既に酩酊状態であることが伺えた。

「あら、もう皆揃ってたのね」

「お、矢矧。どうだった？」

「なるべく短時間で終わらせる条件で許可してくれたわ。こっそり行きましようか」

「私達が案内するわ」

「そうでえすよお、ポーラ達がいないと場所わかあんなあいでしょうしい」

矢矧とポーラ、ザラも揃い、時間も頃合いだ。

俺は矢矧に小さくうなずくと、宴会から全員でこっそり抜け出す。そして、ドックで艀装を装着すると七丈小島へと走った。

「——ここよ。掘り返して確かめてくれてもいいけれど……」

「いや、その必要はねえ。信用してるからよ。ありがとうな」

「えへへ、どういたしましてえ」

掘り返された跡が夜でもはっきりわかった。

ここに、D W—1の死体が埋められているのだろう。

彼女を公式に埋葬することはできない。

だから、ザラとポーラが秘密裏に墓を作ってくれていたらしい。

「まあ、あきつ丸から提案されたことなただけだね」

「そうか、あいつにもいつか礼を言わなくちやならねえな」

墓の前に全員が並び立つ。

矢矧が事前に買ってきてくれていた供花を一人ずつ墓の前に備える。

「敬礼ッ！」

矢矧の号令と同時に全員が墓の前で敬礼をする。

「吊砲！・全艦、控え！・筒！」

連装砲を胸の位置に捧げる。

「砲撃用意！」

左前方に砲口を向ける。

「撃てッ！」

空砲音が七丈小島を包み込む。

「撃てッ！」

二発。全九艦による弔砲斉射が終わり、辺りが静寂に包まれる。滞りなく、葬儀は終了した。

「――行きましよう、天龍」

「ああ」

皆が海面に足を着けていく中、俺だけは、どうしても墓の前を離れきれずにいた。

それを見かねたのか、大和が俺の肩を優しく叩く。

ようやく、張り付いていた足が動くようになった。

「短い間だったが、楽しかったぜ」

俺は、別れの言葉を言って彼女の墓に背を向けた。

視界に、俺を待つ皆の姿が映る。

俺は、仲間の元へと少し急ぎ足で戻っていく。

空を見上げれば、満天の星空と満月が幻想的に輝いていた。

ふと、眼帯を取り、目を見開く。

光を失った左目の闇の中に、一瞬夜空の光が映り込んだ気がした。

日常編4

第一百六話 「そうだよ、明石だ。久しぶりだね」

「それでは、行ってきます」

「……行って、きます」

天龍と龍田を巡る七丈島での騒乱から早一週間。

私と提督は仲間たちに港で一時の別れの挨拶をつけていた。

普段通りの様子の提督とは対照的に、私の声や表情には不安が漏れている。

「大和……やっぱり傷は深かったのね……」

「あ、あはは。いやいや、ただの検査ですから大丈夫ですって」

「ま、七丈島の外出るの久々なんだし、いつそ楽しんできなさいな」

「おう、土産よろしくー」

「こっちは心配するな。なんとか上手くやるさ」

「ええ、よろしくお願いします。でも、やっぱり不安になりますね」

矢矧の申し訳なさそうな声、瑞鳳、天龍、磯風の能天気ではあるが心強い返答に複雑な感情をさせながら私は顔を俯けて溜息をついた。

「うえええええええ！ お姉さまあああああ！ わだじをおいでがないでくださいいいいいい！」

「……………」

私の不安の元凶が、みつともなくむせび泣きながら足を掴んで離さないのだ。

「こら、プリンツ！ いい加減離れろ！ いつまでたつても提督と大和が出発できないだろうが！」

「いやだあああああ！ 私もいぐううううう！」

「わがままいってんじやねえよ！」

「ほら、帰るわよ！」

「やだあああああああ！ ぜっだいに！ やだあああああああ！」

まあ、こうなることは提督から検査の打診を受けた時に既に察して

いた。

察していたからといって対策を練っていたわけではないのだが。

「プリンツ、ほんの3日間ですから、ね?」

「3日間ですよ!?! 72時間ですよ!?! 4320分ですよ!?! 259

200秒ですよ!?!」

「無駄に計算が早い」

「少しは大和離れしとけ、お前は」

「ほら、こんなことしている間にもう10秒は経過したわよ。あと

たった259190秒じゃないの」

「長いよおおおおお!」

「おい、火に油注いでんじゃねえ!」

私の足にプリンツの指がより強く食い込む。

正直、痛い。

「提督、プリンツも一緒についているのはやっぱり駄目なんですかね

……」

「無理ですねえ。何かしらやむを得ない理由がないと……」

「これはやむをえないと言えばやむをえないのでは?」

「私情まるだしなんだよなあ」

「……お姉さま、じゃあ、私の出す条件を承諾してくれたら、お姉さま

達の帰りを大人しく七丈島で待つことを約束します」

プリンツが上目遣いかつ、目に涙をためながらそう嘆願する。

この目と所作には弱いのだ。

私は頷かざるをえなかった。仕方ない。多少の条件ならば首を横

には振るまい。

「盗聴器絆を、後3つだけつけさせてください……!」

『盗聴器』って書いて『絆』って読ませるのやめろや」

「後ってなんですか!?! まさかもう付けてあるんですか!?!」

「……8つだけですよ?」

「嘘でしょ!?!」

「たった……8つだけ、だと……!?!」

「自重したのね、偉いわ」

「いや偉くはないでしょう!? 矢矧からその言葉が出るのは私凄くショックなんですけど!」

唯一の常識人枠の中の良識が麻痺しているのが発覚した以上、私はもう気が気ではない。

「大和、後3つだけと言ってますし……」

「提督まで!」

「大和、お前、そういうところだぜ?」

「大人になろう、大和」

「なんで私が狭量みたいな感じになってんですか!? 私間違つてないっ!」

しかし、盗聴器を受け取る以外に出港の目途が立つ方法も私には浮かばなかった。

納得はしていない。決して受け入れたわけではないが、私はプリンツから盗聴器を三つ手渡されることになったのだった。

(というか手渡されたらそれはもう盗聴とは言えないのでは……?)

「捨てたりしたらすぐにわかりますからね!」

「はいはい、わかりましたっば」

「慣れたものだな、流石大和だ」

「正面向かって盗聴宣言されて少しも動じてないもんな。肝が座ってる」

「諦めですよ。諦めは全てを解決します」

「悲しいほど含蓄を感じる言葉だ」

こうして私と提督は七丈島を発った。

そして向かうは、横須賀、そこにある日本最大の軍事開発機関。

その名は、大工廠。

☆

大工廠。

各鎮守府に併設されている通常の工廠の統括機関にして、現在の日本艦娘関連軍事開発の最前線である。

その役割は大きく二つ。

一つは各工廠への技術者派遣、装備の開発改修許可の通達など、工

廠運営の統帥管理としての役割。

そしてもう一つは、深海棲艦の研究、新装備開発、実験など、最先端の技術力を結集させた研究開発としての役割である。

O・C・E・A・Nランキング10位以上に許可される専用装備の開発もこの大工廠が行っている。

日本が艦娘技術大国として世界トップを独走している現状、すなわち大工廠とは世界最先端の軍事兵器が日々開発される人類の希望そのものと言える。

そんな場所に私と提督が来ることを許されたのは理由がある。

『この先は大工廠研究開発区画です。火薬類、金属類の持ち込みは認められません』

「……ああ、盗聴器ですか」

機械音声から注意を受けた理由が一瞬思い当たらなかったが、プリンツに仕掛けられた盗聴器だと思いついた。

『計23箇所金属反応を感知しました』

「聞いていた数より遥かに多いッ！」

機械音声に指摘されるままに体中に仕掛けられていたプリンツの盗聴器を排除し、ようやく私は施設の中に入ることができた。

「……はあ、ここも久しぶりですね。できれば二度と——」

「——二度と戻ってきたくはなかっただろうにね」

「っ！」

声の聞こえた方に視線を向ける。

瞬間、顔面に拳が飛んできた。当然、回避などできるはずもない。

「ぐはっ!？」

「おや、ハグするつもりが勢いあまってグーパンになってしまったよ」
ねつとりと、かつずつしりとした重みをもって絡みつくような声。

視線の先に、私を見下ろす白衣の少女がいた。

桃色の髪と、何よりも特徴的な虚のような仄暗い眼とその目元に刻まれた深いクマは忘れようがない。

「いきなり何するんですか、明石さん!？」

「そうだよ、明石だ。久しぶりだね」

私が彼女の名を呼びながら立ち上がって、理不尽な仕打ちに異議を申し立てると、明石はかえって嬉しそうにへらへらして私の肩を叩いた。

「しかし、いや本当に久しぶりだ。久しぶり過ぎて何年ぶりかも忘れてしまったよ。というか今日は一体何年の何月何日なんだい？　ここにいと時間の感覚というものがまるでなくなってしまうってね。まあ、とにかく死んでいないようで何よりだ、大和」

「私の話聞いてくれますかね!？」

私への殴打への謝罪もないまま、工作艦明石は不気味な笑みを浮かべた。

「ああ、さっきのグーパンはお仕置きだよ。私との約束を破った、ね？」

「あ……」

「撃ったんだってね。あれだけ釘をさしたのに。全部君の提督から聞いているよ。で、何か弁明はあるかい？」

「申し訳ありませんでしたッ！」

「うん、美しい土下座だ」

私の精一杯の謝罪の姿勢を見て満足げに頷く明石。

すると、私を放つてそそくさと前へ歩き始める。

「ん？　何してるの？　早くおいでよ、とりあえず検査。その後は検査、そして最後に検査だ。問題がなければ適当に帰ってもらう。問題があったら………まあ、それはその時でいいか」

「問題があったら何が起こるんですか!？」

絶妙な間が私の不安を掻き立てる。

しかし、明石からの返答はないまま、私の検査は始まった。

研究所の内部を数時間歩きまわされ、よくわからない機器のある部屋でよくわからない数値を取られ、よくわからないまま検査はあっさり終了したのであった。

そして、数分後、提督と合流した私は検査結果の束を抱えた明石から結果を聞かされる手筈となった。

「——うん、不自然なくらい異常なしだ」

「よかったあ」

「そうですか、安心しました」

私と提督は同時に安堵の息を洩らす。

しかし、明石は厳しい視線を私達に注ぐ。

「だからって今回のおいたが許されるわけじゃない。二度とやらないでよね。でないと君の艦装に爆弾取り付けることになつちやうよ？

それは嫌でしょ？」

「は、はい。肝に銘じます」

「提督も。しつかり見ておいてくださいよ。何のための提督ですか？

自分がどれだけ危険なものを管理しているのか理解が足りてないんじゃないですか？ これからはもう少し死にも狂いでやった方がいいですよ」

「……はい、申し訳ありませんでした」

普段から矢矧に叱られ慣れている提督にも明石の容赦のない説教はかなり堪えたらしく、目を閉じて下げた頭をあげることはなかった。

その様子を見ると、溜息をついて明石が書類の束を机に置いて、手を一度叩く。

「はい、これでお説教は終わり。それじゃあ、何事もなく検査は終わったわけだし明日の船の時間まで暇だね？ よければ研究所の観光ツアーでもしようか？ この明石さん自らが一般ピーポーには見せない所まで連れて行ってあげよう。何、大丈夫、ここのボスは私だ。すなわちこの大工廠では私がルールであり、私のすることに異を唱えられる奴はいない。でも、もしそんな度胸のある輩がいたらご褒美に徹夜で実験データ集めをさせてあげたいと思っている」

始まった。

相変わらずのマシンガントークだ。

思ったことがそのまま口から漏れ出ているようだ。そもそも息継ぎはどうしているのだろうか。

明石は機嫌が良かったり、テンションが上がるとこうなる。

「さて、それじゃあ早速一番近場の区画から――」

その時、明石の首から下げられている携帯が鳴る。話を中断されて忌々し気に携帯を乱暴につかみ取ると、受話器に話しかける。

「何？ 今私忙しいうえにこれから更に忙しくなる予定なんだけれど？ 実験結果なら私のパソコン宛にメールして」

『いえ、所長。その、お客様なのですが……』

「客？ 誰？ ああ、いや、わかった。今の君の口調から察したよ。あの子だね、オーケー会おうじゃないか、いつも通り私の部屋に案内しておいて」

『はい、了解しました』

そう言っつて携帯を切ると、明石は立ち上がって言った。

「ごめんね、お客さんが来たみたいだから見学ツアーは後回しね。提督さんは一旦個室の方戻ってもらえる？」

「わかりました」

「じゃあ、私も——」

「大和はついてきて」

明石の一言で、私は彼女と一緒に何故か彼女の客人へ会いに行くことになった。

全く真意が読めない。

初めて出会った時から何を考えているのかわかりにくい人ではあったが。

そもそも彼女を訪ねてきた客人とは誰なのだろうか。大工廠所長である明石が部屋に通す程の相手なのだから相当の大物なのではないだろうか。

ならば、ますますもって私が同行する理由がわからない。

「……ふむ。考えている。思考しているね、大和？」

不意に、前を歩く明石から声がかかった。

「え、あ、はい。すみません」

「いや、謝ることじゃない。むしろ好ましい変化だ。以前ここに来た君ときたらまるで植物のようだったからね。ただ生きているだけ、というのはいいことを言うのだと私は得心したものだ。あ

あ、かといって植物がただ生きているだけだなんて言いたいわけじゃないよ。あれだって立派な目的をもって力の限り生きているんだ。むしろサボテンとか食虫植物とか見ると環境に応じた進化のあまりの柔軟さに生きることへの執念すら私は感じているよ。おや、話が脱線したね？ 脱線ついでに報告しておくよ、もう私の部屋の前についてしまった。楽しいお喋りタイムはここでおしまいだ」

「あ、はい」

まるで呼吸の隙間がなかったように思えたのだがいつ息継ぎしていたのだろうか。

「ちよつと待ってね、今カードキー探してるから。ここの施設の扉は大抵ロックがかかっているんだ。なのに、全部カードキー一つで開いてしまうんだ。これってなんかおかしいと思わない？ つまるところ、このカードキーが誰かに盗まれた時点でこの施設に鍵なんてものはないも同然ということになってしまう。一応、職員の階級によって開く扉は限られてくる仕組みだけれど私のカードキーなんてもうマジでマスターキーだよ。怖いよねえ、私艦娘ではあるけれど別に戦闘ができるわけでもないし、軍隊格闘術？ CQC？ とかいうのも全然からつきしだから正直ちよつと鍛えた患者に襲われたらひとたまりもないと思うんだよねえ。この通り睡眠もろくに取れず、食生活も乱れまくっているから健康度から判断した人体的強度はそれはもうワーストに近い立ち位置にあると思うわけだよ。一応私が作った警備ロボがそこら中を巡回してくれているけれど万全ってわけではないしさあ、それにね——」

「そろそろ扉開けてもらえませんかね?！」

この人、放っておいたらいつまでも喋り続けていそうだな。

私の声に多少驚いたように目を丸くすると、またすぐに怪しげな笑みを浮かべつつ白衣の胸ポケットからカードキーを取り出すと、扉の横にあるカードリーダーにスライドする。

ピーという電子音と共に、それまで赤いランプが点滅していたドアノブ上のランプが緑色に切り替わる。

「では、散らかっているけれどどうぞ」

「失礼します……」

恐る恐る中に足を踏み入れる。

散らかっていると明石は言ったが、部屋自体は綺麗に整頓され、部屋の隅の観葉植物やコーヒーメーカーから漂う良い香りにむしろリラックスしてしまうほどに居心地のよさそうな雰囲気であった。

「……ああ、そうだ。昨日清掃職員が凄い頑張って片づけてくれたんだったよ。ごめんね、散らかってなくて」

「いや、綺麗な分には全然いいじゃないですか」

「ああ、いつそ今から散らかそうか。私もそっちの方が落ち着くところあるんだよね」

「職員さんの努力をふみにじらないであげてくださいよー！」

「——あれ、その声は」

ふと、来客用のソファから声があがる。

視線をやると、そこには見知った人物がこちらを見つめていた。

「あれ、夕張さん！」

「お、お久しぶりです、大和さん！」

「あれ、二人とも知り合いだったの？　なんだつまらない。折角人見知りの夕張が緊張してしどろもどろになるのを期待して連れてきたのに」

そんな理由で。

「ああ、でも勘違いしないですよ？　これは私が夕張の人見知りが少しでも改善したらいいなと思つてのことであつて決して面白がったり楽しんだりしてるわけじゃないんだ」

「その信憑性の欠片もない言い訳、意味ありますか？」

「まあ、いいや。大和も座りなよ。夕張の用事なんてどうせしようもないことだから聞かれたつて問題ないさ」

夕張に対する軽視が半端ではなかった。

「相変わらずですね、師匠……」

「はっはっは、お前ももう私と知り合つて長いのだからそろそろこの程度の軽口にいちいち心を痛めてるようじゃいけない」

「むぐぐ」

「それにき、しようもないのは事実でしょう？」

私を隣に座らせながら夕張の目の前のソファに腰かける明石は急に眼光鋭く夕張を突き刺す。

「お前がこういう私が大好きな高級和菓子を持ってくる時は大抵しようもない用事さ。あからさまに私が不快になるようなね。そうだろう？ どうなんだい？」

「う……」

机に乗せられた漆塗りの和菓子箱を指でこつこつと叩きながら問い詰める明石はさながら悪いことをした娘を問い詰める母親のようにも見える。

その指摘に夕張は顔を逸らし、冷や汗を流し始める。

わかりやすい人である。

「で、要件はなんだい？」

「も、申し訳ありません師匠ッ！」

最後の明石の満面の笑みがトドメだった。

夕張がソファから飛び上がって土下座の姿勢を取ると、背中に隠すように置いていた竹刀袋のように見えるそれを差し出した。

私の土下座よりも遥かにキレがある。相当やり込んでいると見えた。

「こちらなのですが……！」

結び紐を解くと、そこには折れた日本刀が一振り、丁寧に包み込まれていた。

それを目にした明石の目がすうと細くなるのが見えた。

「これは、神通だね」

「はい……」

「神通？ 神通さんですか？」

「そう、この刀はあいつのために私がこしらえてやった専用装備『神通』さ」

状況が分かっている私に笑顔で解説してくれるものの、その眼は笑っていない。

「なんで折れてるの？ これ、理論上はマンモスに踏まれても曲がら

ないような逸品なんだけれども」

「わ、わかりません……!」

「で、これを直せ、と?」

「できれば、より強度の高いものを打ち直していただければと……っ!」

「ああ、なるほど、リメイクね。私の作品の出来が不満だからやり直せクソババアってわけね」

「いや、そこまでは言っただけな——」

「うるさい。なあるほどよくわかった。全部伝わったよ、顔をあげなさい夕張。ああ、姿勢はそのままがいい。顔だけあげて」

「はい……!」

明石はにつこりと笑うと、和菓子箱を開ける。

そこには職人の粋を集めて作り上げられた美しい宝石のような和菓子の数々が所せましと詰め込まれていた。

一体いくら位するのだろうかと思わず浅ましい考えがよぎる。

しかし、そんな和菓子箱をあるうことか明石は持ち上げて逆さまにする。

当然中身の和菓子は次々とテーブルに落ちて潰れてしまう。

そして、箱の中身が空になったのを確認すると彼女は今度は携帯でどこかへ連絡する。

「……あ、もしもし私だけけれど。今ね、和菓子箱の空があるんだ。結構大きめの。ちよつとそれにさ、パイナップルあるだけ詰めてもらいたいのよ? ん? あはは、君面白いこと言うね、あんな大きな果物が和菓子箱に詰まるはずないでしょ? 違う、松ぼつくりのことでもない。言わなくちゃわからないかなあ、『マークII手榴弾』のことに決まってるでしょう?」

「師匠っ! どうかご勘弁をッ!」

「箱が開くと同時にね、そう、爆発するようにセットして欲しいのよ。いや、ちよつとぶつ殺したい奴がいてね、うん」

「申し訳ありません! どうか抑えて! どうか!」

「うわあ」

圧倒的な殺意しか感じなかった。

☆

「大体、壊した当の本人はどこいったのさ?」

明石の尋問は続く。

夕張は依然土下座の姿勢の状態を維持したままである。

「その、今日はどうしても外せない用事があつて。代わりに行って来てくれと脅——頼まれて……」

(脅されてって言いかけましたね、今)

「ふうん、じゃあまた出直してきてよ。今度は筋を通して本人が来るように言い含めてね」

「一週間後にまた大きな出撃があります。一刻も早く修理が必要なんです—」

「大丈夫、大丈夫。あの子強いし別にそんな刀なくなつたつて死なないよ」

「あの人それがないと、普段の倍以上の装備壊して帰ってくるんですよッ! 修理する方の身体が持ちません!」

実に切実な叫びであつた。

しかし、明石は冷ややかな目で夕張を見つめる。

「そんなことは知つたことじゃないね」

「師匠っ!」

「その呼び方はやめなさい。私は今はお前の師匠ではないよ」
「っ!」

夕張が、酷く動揺したような表情を見せた。

その様子を見て、思わず私の口が開いていた。

「あの、私からもお願いできませんか、明石さん?」

「大和さん……!」

「へえ、大和からそう言われるとは意外だなあ」

物珍しそうな目で私を見たかと思うと、一瞬、明石の口角が吊り上がった。

「うん、いいよ。そこまで頼み込まれたら仕方ない。特別に作り直してあげよう」

「本当ですか!？」

「ああ、ちよつと待っていないさいな。手伝いが必要だからね、何人かに声をかけてくる」

「あ、ありがとうございます!」

明石が部屋を出ていく間際、夕張に告げた。

「ああ、くれぐれもその折れた刀はなくさないようにね。それがないと新しい刀を作るのに数か月はかかるからね」

「は、はい!」

「良かったですね、夕張さん!」

「ええ、大和さんもありがとうございます!」

明石が出て行った後、夕張は何度も私の方に頭を下げる。

数分して落ち着いた所で、私は気になっていたことを彼女に質問した。

「あの、明石さんとはどういう関係なんですか?」

「え!? あ、ああ、その……私、以前はこの職員だったんです。明石さんの助手として雇われていて。まあ、その傍ら色々と技術を仕込まれていくうちに師弟関係みたいになって」

「なるほど。それで、今はそうじゃないってというのは……」

それを訪ねると、夕張は力のない笑顔を作って答えた。

「あ、あはは。お恥ずかしい話ですが、私、クビにされちゃったんですよ。他ならぬ師——明石さんに」

「……すみません」

「いえいえ、仕方のないことなんです。ここは日本の軍事技術の最先端ですから、当然それらを扱う技術者も一流であることが求められます。私じゃ力不足だったというだけです。むしろ有難いくらいです。おかげで横須賀艦隊にコネで入れましたし」

全然なんてことのないように振る舞う夕張だったが、その所作の節々には明らかに無理をしているような様子が見て取れた。

夕張自身もそれに気づいているのか、ふと、作り笑いをやめると小声で呟いた。

「まあ、正直、ショックではありませんでしたけれどね」

「夕張さん——」

その時、室内の電気が消え、続けざまに非常灯に切り替わった。何が起こったのか把握する前に、部屋の内線がけたましく鳴り響く。

私がおそるおそる受話器を取ると、そこから明石の声が聞こえてきた。

『やられたよ！ 大工廠の警備システムがハッキングされた！』

「ええ!？」

『たまにあるんだ。何せここにある情報は国家機密に等しいからね。色んな国のスパイが中に入り込もうと躍起になっている。その中で痺れを切らした輩がごくまれにこんな騒ぎを起こすのさ』

「ま、拙いじゃないですか!」

『ああ、非常に拙い。入口のゲートは今のところ開いていないが、警備システムの管理システムがやられたせいで一つ問題が起きています』

明石は申し訳なさそうに続けた。

『この建物内に私が作った警備ロボが徘徊しているんだけどね。そいつが暴走して見境なく攻撃を仕掛けてくるようになってるみたいなんだよね』

「何それ怖っ!」

『正直、そこにいるのは非常に危険だ。警備ロボに見つかったら逃げ場がない。だから、私のいる第1実験区画まで避難してきてほしい』
「私、この施設内ちんぷんかんぷんなんですけど!？」

防犯のためというのものもあるのか、大工廠内は入り組んだ迷路のようになっている。非常に現在位置や各施設の場所などがわかりにくい。

下手をすれば遭難して行方不明になれるのではないかとさえ思う。

『ああ、それについては大丈夫だよ。夕張が覚えているはずだからね。それじゃ、こつちも復旧作業で忙しくなるから、頑張ってくれたまえ。あ、警備ロボに出会ったら逃げることをお勧めするよ、陸の上ならその辺の艦娘より強いからね。具体的には1500 Akashi程度が強さだ』

「そんなオリジナル単位で説明されてもさっぱりなんですけれど!？」

『ちなみに私は―273 Akashi程度だ』

「あなたただけ弱いんですか!？」

『ああ、後、あの警備ロボには奥の手として――』

そこで一方的に通信は切られた。

「重要そうなところで!」

「ど、どうしたんですか?」

「ああ、それが……」

今の明石との会話から得られた情報をかいつまんで説明するとみるみるうちに夕張の顔が青ざめていくのがわかった。

「ど、どうしましょう」

「行くしかないですね……」

こうして、突然、危険地帯に放り出された私達は己が運命を呪いながら恐る恐る明石の部屋を出て第一実験区画を目指すのであった。

☆

一方、大和が大工廠に到着した頃合い、七丈島でも非常事態が発生していた。

「ぐおお! 落ち着けプリンツう!」

「あああああ! ダメえええええ! それだけは駄目えええええツ!」

白目をむいて狂乱するプリンツを天龍がなんとか羽交い絞めにして抑えていた。

「やめて! 大工廠の警備システムで金属探知をされたら盗聴器でお姉さまと繋がっている私の精神が燃え尽きちゃう!」

苦しみ、悶えるプリンツに瑞鳳は涙ぐんで叫ぶ。

「お願い、死なないでプリンツ! あんたが今ここで倒れたら、大和や提督との約束はどうなっちゃうの? 盗聴器はまだ残ってる。ここを耐えれば、大和に会えるんだから!」

その時、それまで発狂しかけていたプリンツが、一変して大人しくなり、力なくその場に崩れ落ちた。

「切れた……私の中で何か切れた……決定的な、何か」

その時、その場の全員が悟った。

最後の盗聴器^紳が、今、失われたのだと。
次回、『プリンツ死す』。デュエルスタンバイ！

第一百七話「でも、それは許されないのよ……横須賀の艦娘には！」

「おい、夕張」

「師匠」

遠い昔の記憶。私が、横須賀艦隊にくる以前の記憶だ。

「まだ頼まれた実験データ、提出してないんだって？ Aチームから苦情が来てたよ？」

「ああ、今の研究が一区切りしたらやります」

「おいおい、君個人の研究で彼らの足を止めてやるなよ」

「大体、なんで私があの人達の使い走りさせられなきゃならないのかがわかりません。あの程度のデータ自分達で取ればいいじゃないですか。私だって自分の研究があるんです」

私はふてくされるようにしてそう返した。

実際、その通りだと思っていた。研究開発の技術も、知識も、情熱も、何一つとして私は彼らに負けているつもりはなかったし、あらゆる事が彼ら以上にできると確信していた。

なのに彼らのようなキャリアだけある無能に、私はまだ年季が浅いからと雑用のようなデータ集めを押し付けられて自分の研究の足がその度に止まる現状に不満しかなかった。

年功序列というシステムはこの大工廠に不要なシステムだと私は常々思っていた。

しかし、師匠は首を振った。

「違うよ。あのデータはお前の腕を信頼しているから任せただ。実験条件が少し特殊で技術がいるんだよ。普通なら数人がかりでやるべきだが、そこまで人員を割く余裕もないから、彼らはお前の腕を頼ったんだ」

「どう言葉を繕ったところで結局面倒なことを私に押しつけているだけでしょう？ 私は見習いではなくプロの技術者としてここにいます。プライドがあります。自分の研究が第一です」

「違う、研究開発っていうのはそんな独りよがりでやるものじゃあないんだ。お前は腕は私が見惚れるほどに一流だけれど、心はまるで素人さ。なっちゃんいない」

「……なんと言おうと考えを改める気はありません。尊敬する師匠のお言葉だとしてもです」

「うん、知ってる。お前は自尊心が強いからね。意志の強さって意味でそれは美徳だが、今回の場合、それは邪魔でしかない。そこでね、私は師匠として考えた。お前の更生プログラムってやつをね」

師匠はそう言つて、悪辣な笑みを浮かべた。

それに背筋が寒くなるような恐怖を覚えながらも、私は強がってみせる。

「い、一体何ですか？ そんなことをしたって意味ないと思いますけれどね！ それをしている間にいくつ新兵器の実験ができるか――」

「夕張、故障した機械を直す時、一番確実な方法っていうのは何だと思う？」

「は？ えーと……一旦、解体、ですか？」

私のしどろもどろな答えに、師匠は両手をサムズアップして私に向けた。

どうやら正解ということらしい。

「その通り、いふなればさ、一度ぶっ壊して作り直すっていうのが確実なわけなんだよ。わかってくれるよね？ そこでだ。君を、鎮守府に配属することにした」

「はっ」

「しかも、喜べ。場所は日本最強の鎮守府と名高い横須賀鎮守府だ、やったね！ 栄転だぞ？ しかも大工廠からも近い！ 明日にでも配属可能ってわけだ！」

頭が真っ白になる思いだった。

一瞬、私の頭はフリーズして、少しして師匠の言葉を一言一言かみ砕き、やはりそれが現実であることを認識し、改めて私に突き付けられた圧倒的な危機を認識したのだった。

「ちよ、ちよちよちよ、ちよつと待ってくださいよオー!? 鎮守府配属!? 私が!? いやいやいや、無理無理無理! 戦うのとか私無理ですから、本当に!」

なんのために艦娘になりながら必死に勉強して、研究開発コースへ移転したと思っっているのだ。私は、あんな化物と撃ち合うのは御免だし、兵器製作と新しいアイデアを試すことが何よりも大好きなのだ。それを今更諦められるわけがない。

「大丈夫、大丈夫! 君は主に工廠配属。技術者として横須賀に入るわけなんだから。いや、あの悪魔の化身みたいなおじいちゃんからドスのきいた声で腕のいいメカニックを一人寄越せつて脅されてさあ! か弱い私としては泣く泣く従うしかないわけよー」

嘘だ。

この人は元帥とはいえそんな脅しに屈するような常識人じゃない。「それにお前ほど我が強い奴ならおじいちゃんもきつと喜ぶと思うしー? 行ってきなさいな。ああ、これもう決まってることだから。逆らったら、あれだよ? 国家反逆罪のなやつになつちやうかもよ?」

「……………き、期間は?」

どうやら逃れられそうもなかった。一体、どれだけの時間、その拷問に耐え抜けばいいのか。私はすぎるような気持ちで師匠に質問する。

彼女は聖母のような柔らかな笑みを浮かべて言った。

「私が呼び戻すまで」

「不確定ですか!? ワンチャン終身雇用ですか!?」

「あ、横須賀いる間は師弟関係も解消だから、そこんところよろしく」

「ちよ、ええ!? 師匠オとおおお!」

こうして、私の地獄が始まったのだった。

☆

「……………あ、大和さん、次の角右です」

「はい、こつちですわね!」

それにしても、と。

私は前を歩く艦娘を、戦艦大和の背中を見つめる。

正直、私としては彼女と行動を共にしている今の状況は非常に気ま
ずい。

以前、彼女に出会ったのはだいぶ前のことだ。神通さんと一緒に大
和の経過観察と、その場の思い付きで矢矧さんを引き抜こうとしたあ
の数日以来。

あの時の私は彼女に対して少なからず敵意をもっていた。それを
彼女に直接伝えてはいないし、悟られていることもないのだろうが、
やはり私の中では内心、もやもやせざるをえない。

その敵意は、今なお消えてはいないのだから。

「大丈夫ですか、夕張さん？ 私の背中から離れすぎないでください
ね！」

だと言うのに、そんなことも露とも知らず、こうして友好的に接し
てくれているうえに、私を気遣って前を歩いてくれている。そんな彼
女に、私としては一層の気まずさを感じざるを得なかった。

「あの、大和さん——」

私がそう言葉を紡ぎかけたその時、大和の鋭い声が通路に響き渡つ
た。

「夕張さん、伏せて！」

「っ!？」

直後、反射的に屈んだ私の頭上で機械の駆動音と共に激しい衝撃音
が鳴り響く。

恐る恐る顔をあげると、大和と金属製の寸胴ボディにキャタピラと
パワーアームを搭載したいわゆる『ロボット』が取っ組み合いをして
いた。

「あ——」

その姿を、知っている。

私はそのロボットの名前を、叫んだ。

『アカシロボ Mk. VI』だああああああ——」

「何ですか、その開発者まるわかりの安直なネーミング!？」

明石ロボ。大工廠内の警備を行う完全自立AI搭載の万能ロボで

ある。

「ぐ、おお、こんな見るからにギャグマンガに出てきそうな寸胴ロボの癖に……っ、強い……!」

「嘘!? 大和型が押し負けるなんて……まさか、Mk. VII!? 既に完成していたなんて……!」

「それっぽいこと言ってないで手を貸してもらえませんかね!」

あまり長く持ちそうにないと、大和が苦し気な声をあげている。

当然、このまま大和に任せるつもりなど毛頭ない。ここは、私の見せ場だろう。

「ええ、もちろんです。あと5秒、そのまま抑えておいてください。それで済みます」

そう言い終えると同時に、私は身を屈めて取っ組み合いを続ける大和と明石ロボの横をすり抜けるようにしてロボットの背後に回る。

私は知っている。

アカシロボの基本構造と基礎設計。そして、ナンバリングが変わろうと、その基本構造はそうそう変えられるものではないという技術的な理を。

「その回路を乱すッ!」

上着やスカートの裏、靴下——恥ずかしいが下着にまで暗器のごとく仕込んである工具の数々を瞬時に取り出し、金属板の隙間に差し穿つ。

私は速やかに作業を開始し、そして終える。

「解体、完了……ッ!」

不意に赤く光っていたアカシロボのアイライトが消灯し、力を失ったようにそのパワーアームはだらりと床に垂れ下がる。

「もう大丈夫です。回路を切断して機能停止させましたから」
「……………」

久々の高速解体だったが、腕は鈍っていないようだ。ほっと安堵の息を吐く私に、大和が口を開けたまま私の方を見ている。

「す、すごいです! 今、一瞬でしたよね!? 残像しか見えなかったんですけれど、ドライバーとかレンチとかが、しゅばばって!」

「え、い、いやあ……それほどでも……」

「夕張さんがいてくれて本当に良かったです！」

「うっ」

胸につんざくような痛みが走る。

やめてくれ。そんな信頼しきつた目で私を見ないで欲しい。

私が心のうちであなたに対してどんな想いを抱いていると思っ
ているのか。

「……少し休憩しましょうか」

きらきらと輝く視線を向ける彼女から目を逸らして、私はそう提案
した。

通路上で、私達は座り込んでおのおの足を休める。

しかし、私の方はそれと同時に進行でやるべきことがある。

「何をしているんですか？」

「ん、改造です。せっかくだしい素材が手に入ったので。このアカシロ
ボを改造して私達の戦力の足しにしようかなと」

「ああ、なるほど！ 流石夕張さん！ 頼りにさせてもらいます！」

「ああ、うん……任せてくださいよ……あはは……」

やりづらい。

まるでわからなくなってくる。彼女と話せば話すほど。

本当に、あの日、あんなことをした張本人と同一人物なのだろうか。

ああ、わからない。どうしてこう、人間というものは電子回路のよ
うに、あるいはプログラミング言語のように、理路整然とできないの
か。

悪人ならば、悪人らしくしてくれないと、調子が狂う。

端的に言って、私は困ってしまう。

「あのー、夕張さん」

「なんですか、もー！ 人が考え事してる時にいー」

「あ、すみません……黙っているとなんだか気まずくて……お話で
もしたくないなって。いや、すみません、黙りますね」

「……いえ、こちらこそ急に怒鳴ってすみません。そうですね、何かお
話でもしましょうか」

ぐだぐだと一人で考え続けたところで答えなどでない。

ここは適当な世間話で頭を空っぽにした方がいいだろう。

私は作業の手は止めないまま、萎縮している大和に提案を了承する旨を伝えた。

途端に、しゅんとしていた彼女の表情は一転して笑顔に戻る。

表情の忙しい子だな、と思った。

「じゃあ、横須賀艦隊のお話聞かせてもらってもいいですか？」

「地獄ですよ」

「即答!？」

「ええ、私配属されてから今日まで平均して三日に一度は死んでしま
うって確信する時ありますもん」

「さ、流石、横須賀艦隊はそこまで激戦区の海域に」

「ちなみに私は工廠でも仕事してるので出撃は他の方と比べて少なめ
ですし、実力も大したことはないので基本遠征組です」

「ブラック鎮守府というレベルではないのでは!？」

「だから地獄ですよ」

「そうでしたね!」

「まあ、そこまでヒイヒイ言ってたのは私だけでしたけれど」

思えばよく今日まで生き残れたものだ。

配属当時のことが懐かしい。

☆

横須賀艦隊、配属初日。

「お前が、明石の推薦してきた夕張か」

「は、はい」

初対面の元帥は死ぬほど怖かった。

それでも、まだ命知らずな自尊心を捨てられていなかった私は、な
るべく声を震わせないようにして言った。

「わ、私は技術者としてこの鎮守府に来ました! だから、その!
私に艦娘としての戦力的な働きを求められても、こ、困ります!」

「……ほう。艦娘として戦いの場には出られない、そう言うのじゃな
?」

「ひゃい」

思わず舌を嚙むほどの威圧感であった。

「ククク、我が強いと聞いてはいたが、まあ、上出来じゃな。良いだろう、お前が艦隊戦において戦力にならんという現状はよく理解した」
「そ、それじゃあー！」

「うむ、儂が戦力になる程度まで鍛え上げてやろう」

「ん!? んん!?」

「おい、神通」

「はい、提督」

「お前が世話をしてやれ。そうじゃな、まずは基礎体力からか」

「了解しました。よろしくお願いしますね、夕張さん」

「んんんッ!?!」

マジで何を言っているのかさっぱり理解できないまま私は神通さんに連れていかれ、挨拶を終えたのだった。

その後は、何度死ぬかと思ったかわからないほど壮絶なトレーニングの連続だった。

「も、もう……限界……本当に、無理……」

「あらあら、まあ今日は初日ですし、ここまですかね。それじゃあ、夕食にしましょうか!」

「う……気持ち悪い……」

「しっかりと食べて英気を養いましょう!」

貼り付けた笑顔で、しかしその行動は鬼そのものに近い神通という艦娘。

彼女との基礎訓練という名の拷問が始まり一週間が経つ頃には、私は限界を迎えていた。

「もう、無理!・ 本当に無理です! ていっかなんで!? 私メカニックですよ!?! この一週間、ずううつと艤装つけて海で走り回るだけ!

撃ちまくるだけ!」

「あらあら、どうどう」

どうどうじゃない。

「いまだ工廠の場所知らないし! 私の大本命!」

「それは自分で調べて行けばいいじゃないですか」

「そんな時間も、体力も、気力も、根こそぎ持ってかれましたよ！ あなたに！」

「初日はヒステリック起こす気力も残っていなかったのに、とつても体力付きましたね！」

「おかげさまで！ ついでに随分と強くなっちゃいましたよ！ 敵艦一隻だけなら瞬殺できるくらいには！」

「その程度だとウチでは遠征部隊でも厳しいのでそこはこれからももつと精進しましょうね」

「しない！ 必要ない！」

「……」まで怒鳴り声をあげるのも大変久々のことであった。

「私は、工廠で兵器開発と艦装整備をするために来たの！ プロとしての仕事をしにきたの！ 新兵訓練を受けに来たんじゃない！」

「あはは、それはすみません。でも、ここではそれは通用しないんですよ」

神通は表情も口調も変えないままに続けて言った。

「できることだけやればいいは、許されない。当然できることはやり、提督がやれと仰ったのなら、それも成し遂げる。それこそが、ここでのプロの仕事、というものです。残念ですが、あなたの仕事はここまでは三流ですらない」

「な、なんですって……！ ぐ、う、もう！ やってられるかあああああ！ あ！」

「あ、夕張さん!?!」

私は逃げた。もう付き合ってもらえない。私は工廠へ行き、本来の仕事をやらせてもらう。そんな決意を固めて鎮守府内を歩き回っていた最中、不意に私の腕が捕まれた。

「おや、そんなに必死に走ってどこへ行くんだ？」

「む、武蔵さん!?!」

「……ふむ、何か思い悩んでいるのなら、話を聞こうか」

そのまま、促されるまま、私は全てを吐露していた。

一通り、私の話を聞くと、彼女は薄く笑みを浮かべ、私の腕を握つ

て立ち上がる。

「ついでに」

強引に引つ張られ、連れてこられたのは薄暗い物置。

その壁の間にのぞき穴になりそうな隙間が空いているのが見えた。

「息を潜めて、決して気取られるなよ？ 覗いてみる」

「……………ッ！」

見えたのは、執務室だった。

当然、中には提督がいる。全身の毛が逆立ち、悪寒が全身を支配した。

「見えるか？ 中に神通がいるだろう」

武蔵が小声で私に説明すると、確かに中では提督と神通が何やら話をしているようだった。

「あいつはお前の訓練の後、秘書艦の仕事もしている。勿論、その中で出撃もこなしている、なにせ第一艦隊旗艦だからな。作戦海域への出撃こそあいつの本業というわけだ」

「……………化物ですか、あの人の体力は」

私は訓練だけでへとへとだというのに、その合間に彼女は秘書艦の仕事も、そして本来の艦娘としての出撃任務もこなしているという。

「その他にも、秘書艦の仕事に関連して作戦の伝達や指示、お前以外の新人の手ほどきにも付き合っている。何故か、わかるか？」

「……………」

「お前の言う、プロの仕事を適用するならば、あいつの仕事は出撃だけでいい。秘書艦も、お前への訓練も、やる必要はないはずだな？」

「そうですよ……………なんで——」

「それが、ここでのプロの仕事だからだ」

神通と同じ言葉を武蔵も言った。

「何、能力を活かす、という点ではお前とそう考え方は変わらない。ただ、意識の違いだけだ。自分にできることを期待通りにこなす、そんなことは横須賀では当然のこと。自分に求められるあらゆる期待に応えてこそ、プロの仕事、というわけだ」

「求められる、あらゆる期待に……………」

「そうだ、『頼まれる』『任される』『命令される』ということは、できると期待されているということだ。その期待に応えられてこそ、横須賀の艦娘だ」

「横須賀の、艦娘……」

「神通を初めとして、ここの艦娘は皆そうだ。期待に応える覚悟を持って。だから、私達は強い。そして、お前にもそうやって欲しいと思っっている」

「私には……」

自信がない、と言いかけた私の肩を武蔵が優しく叩いた。

「何、安心しろ。ああ見えて提督も、神通も、無理なことはやらせない。無茶ぶりに感じているかもしれないだろうが、お前になら、必ずできると信じているからこそ、ああ言っただ。お前に自信がなくとも、既に周りはお前を認めている」

「ほ、本当に……?」

「そうだとも。何より、あの神通の訓練を一週間受け続けられるという根性が既に貴重だ。工廠だけに籠もらせておくには勿体ない」

武蔵からの激励。そして、ここで誰もが当然のようにできることが私一人できていないという事実。

それが私を踏みとどませた。

私は、人並み程度には負けず嫌いだし、プライドだつてあるのだ。もう三流だなんて呼ばせない。私は、横須賀の艦娘として、プロになつてみせる。技術も、心も。

☆

「——ふう、完成、と」

「おお、それが改造したアカシロボですか!」

「ええ、私達を守るようプログラミングしなおしたわ。これで百人力よ」

「ピ、ピピピ——アカシロボ、起動。オハヨウゴザイマス、マスター、お姉さま」

「今私に向かってお姉さまって言いませんでしたか!？」

「え? ああ、あなたのことなんて呼ばせようか決まらなかったから、

「適当なのチョイスしたんですけれど、嫌でした？」

「嫌じゃないですけど、特定の個人が連想されちゃうんですよ……！」
そう言つて、大和は目をつぶつて耳を塞いでいる。

とはいえ、今からもう一度解体してプログラミングしなおすのは手間だし、そこまで悠長にもしてられない。

我慢してもらうほかないだろう。

「才姉サマ、才姉サマ」

「やめて！ 私をお姉さまって呼ばないでくださいあい！」

何故か改造明石ロボの大和への距離が近いように感じる。

彼女の警護レベルを高めに設定したからだろうか。

「まあ、些細な問題だろう。」

「さあ、行きましよう、大和さん。ししよ——明石さんのところまであと少しです」

「は、はい」

そして、大工廠を歩き回ること数十分。

「お、見えた。この通路の先に見えるのが第1実験区画の扉——」
違和感があった。

ここままであまりにもすんなりと来れてしまったこと。

暴走した警備ロボとは結局一体しか遭遇しなかった。他の数十体は一体どこにいたのか。偶然出会わなかっただけというのが、あまりにも都合の良い解釈だと、私は気付かなければならなかったのに。

「夕張さんー」

先に気付いた大和が叫んだ。

その直後、私の目の前に、衝撃音と共に、赤いアイライトを光らせた警備ロボが降ってきていた。

見れば、通路の上の通気口。

そこから次々と警備ロボが下りてきている。あつという間に第1実験区画への扉は警備ロボに埋め尽くされた。

それどころか背後にも警備ロボの集団が押し寄せ、通路の真ん中で挟み撃ちにされている状態になっていた。

「この量はまずい！ 改造アカシロボ！ 後ろから来る警備ロボを足

止めして!」

「了解、オ姉サマノタメニ」

「プリンツロボ!」

「プリンツロボってなんですか!?!」

大和に変な呼称を着けられてしまったが、それはそれとして、ゴールを目の前にしてこの警備ロボの軍団。

全部解体するにもこの数ではそんな隙もなさそうである。

「夕張さん、ここは私が道を切り開きます」

「大和さん!?!」

そう言うと、大和は警備ロボの一体に突進したかと思うと、それを両手でつかみ腰のあたりから持ち上げた。

そして、それをそのまま、警備ロボの大群に向かって、投げた。

「なんて、馬鹿力! やっぱり大和型は化物ですね……」

武蔵も同じようなことができるだろうなと思わず想像してしまう。

そして、警備ロボを投げ飛ばしたことによって僅かにできた隙間を指さして大和は叫ぶ。

「今です! 行ってください!」

「わ、わかりました!」

密集していたことが災いし、投げられた警備ロボのアームにからめとられ、警備ロボはいまだ混乱の渦中にある。今なら集団を抜けて、その先の扉に届く。

扉の開閉装置まであと数センチのところ、そこで、事態が一変した。
「なっ!」

背後から一瞬引つ張られた感覚。反射的に振り向けば、ロボットのアームの先がジェット噴射で飛んできて私の背負っていた『神通』の破片の入った竹刀袋を掴んでいた。

「ろ、ロケットパンチ!?!」

「アカシロボの奥の手……忘れていた!」

竹刀袋が強烈な力で引つ張られる。

その力に肩紐の方が耐えきれず、ぷつんと私と竹刀袋をつなげていた紐は作用を失い、私の身体からみるみるうちに離れていく。

「ッ！」

竹刀袋を追えば、私は警備ロボの集団に突っ込んでいかなければならない。

十中八九捕まることだろう。

しかし、ここで竹刀袋を捨てれば、無事、第一実験区画へとたどり着けるはずだ。

私の目的はまず第一実験区画に辿り着くこと。

元々は『神通』の修理のために来たわけだが、むしろそのせいでこんなトラブルに巻き込まれている。

ここで、大和達の頑張りを無にしてまであの竹刀袋の中身を取り戻す義理もメリツトもない。

「でも、それは許されないのよ……横須賀の艦娘には！」

竹刀袋を掴む。同時に腰のベルトに仕込んであるドライバーを構え、アームに突き刺す。

「返してもらおうわよー！」

アームの駆動部位を破壊し、竹刀袋を握る指を開かせる。

しかし、その時点で私は警備ロボの目の前。

すかさず、私の身体を捕まえようと無数のアームが私に迫る。

「ぐ、くそー！」

万事休す。

そう思った瞬間だった。

「——はい、そこまで」

一瞬で、目の前にいた警備ロボの全てが機能を停止した。

高速解体。一瞬で、複数の機械相手にこの早業。

そんな神業ができるのは一人しかいない。

「夕張、よく頑張ったね」

「し、師匠ッ！」

安堵から思わず禁止された呼び方をしてしまい、慌てて口を塞ぐ。

しかし、師匠からそれを咎める言葉はなかった。

「はい、ドツキリ大成功」

「はっ？」

「え？」

「オ姉サマ、オ姉サマ」

間抜けなファンファーレの音が鳴り響くと同時に、師匠の目の前の床からドツキリ大成功と書かれた看板が生えてきた。

相変わらず無意味な改造を施す人である。

「いやあ、そういうわけだね。これ実はドツキリなんだよ。本当に大工廠がハツキング受けると思う？ 無理無理、私が直接プロテクトかけてるんだよ？ 世界中の技術者が10年休みなく頑張ったって到底入れやしないね。全部自作自演さ。まあ、警備ロボは本当に暴走させておいたけれどね。いや、だから夕張が警備ロボの目の前に突っ込んでいった時は焦ったよ。管理室からの操作じや間に合わないから思わず私が解体しちゃったじゃないか。いやあ、これ組みなおすの結構大変なだけけれどね。まあ、でも丁度追加したいアタッチメントあったからついでにその試運転でもすればいいか、まあ取りあえずこれにて一件落着いてわけだよ。二人とも、ごめんね」

最後にてへぺろ、と言いながらニタつと爬虫類じみた笑みを浮かべた師匠は非常に不気味であった。

「な、なんでこんなことを？」

「ん？ ああ、それはね。ちよつと経過観察だよ。弟子の成長具合をね」

「……私のですか？」

「そう、でも、良かった安心したよ。竹刀袋を奪われて、自分の安全を優先するようならまだ不合格にするつもりだったが、ちゃんと取り返してくれたね。任されたことに責任を持っている証拠だ。お前は心までプロに成長したんだとよくわかったよ」

「師匠……」

「もう十分だろう？ 大工廠に戻ってくるといい。大変だったろうが、よく頑張ったね。師匠として鼻が高いよ」

その言葉に、一瞬涙が出そうになった。

しかし、それをなんとかこらえて、私は頭を下げる。

「ありがとうございます。でも、私はまだまだ未熟な所だらけです。」

もう少し、横須賀にいさせてください」

「……そうかい」

「私、まだ『横須賀の艦娘』になれてませんから」

「そう、まあ、たまには顔見せにおいで」

とくに私の言葉に異を発するでもなく、師匠は軽く頭を二、三度叩いて大和の方を見る。

「大和も、巻き込んで悪かったね」

「いえいえ、気にしないでください。結構楽しかったので！」

図太い人だ。私もあれくらい肝が据わっていれば良いのだが、こればかりは経験の差というのもあるのだろう。

何はともあれ、私は彼女に謝らなければならない。

「大和さん、すみませんでした」

「え、何がですか!?!」

「……実は、私、あなたのこと嫌いでした」

「よりにもよって大団円のこのタイミングでそれ言います!?!」

「あんなことをするような人はきつと最低な人間なんだって思ってたから」

「——っ! は、はい………そうですよね、恨まれて、憎まれて当然ですよね。すみません、そんなことにも気づかず図々しかったですね……」

「でも、今日、あなたと一緒に話して、戦って、考えが変わりました。私は、あなたのこと、好きになれそうです。だから、これから仲良くしてくれると、その、嬉しいです」

「うん、それがいいよ。ぜひそうしておくれ。夕張、友達少ないから」「し、師匠! 余計なこととは言わないでください!」

「……ありがとうございます。それだけで、凄く、救われた気持ちです」

大和は、本当に嬉しそうに、そう言って、深く私に頭を下げるのだった。

☆

翌日。

「それでは、お世話になりました、明石さん」

「ああ、こちらこそ。もう来ないことを祈っているよ」

七丈島提督と大和は港まで見送ってくれた師匠に頭を下げた。

「オ姉サマ、オ姉サマ」

「プリンツロボ！」

「プリンツ？」

「あ、改造アカシロボ。まさかついてきたの!？」

「やっぱりこのロボ何かおかしいな。後で解体して調べるか、あるいは――」

「……大和さん、持って帰ります？　なんか懐いてますし」

「い、いやあ、それを島に持ち帰ると面倒なことになりそうなので」

「そうですか」

「オ姉サマ」

「やめて、そんな憐憫の籠った眼差しで見つめないでください！」

籠もっているのだろうか、私にはさっぱりわからないが。

「まあ、それでは。大和さん、提督さん、お二人ともお元気で」

「ええ、夕張さんも元帥によろしく伝えてください」

「夕張さん、また！」

そうして、船に乗り込む彼女達を見送る私の頬はわずかに緩んできた。

「ああ、そうだ、ほら。夕張、これ持って帰りなさい。新しい神通」

「もう出来上がったんですか!？」

「まあね、私は明石さんだからね。もつと敬意の眼差しと喝采を送るがいいよ」

「流石師匠！　日本一！」

「はっはっは、舐めてるのかな？　宇宙一だろうが」

珍しいダウンナーな師匠の笑い声がしばらく港に響き渡るのだった。

第一百八話 「僕はね、尽くされる男よりも、尽くす男になりたいのさ」

昔からママは僕に色々なことを教えてくれた。

僕の心にはママの教えが今でも生きています。

人生で必要なことの大半を、学校ではなく、ママから教わったんだ。

「ママは僕によく言ったものさ『女に尽くされるよりも、女に尽くせる男になりなさい』ってね」

「お前、そろそろイタリア帰れよ」

「そうだそうだ！」

僕、エドモンド・ロツツ（偽名）は、D W ー 1 の一件が収束した後も七丈島に居座っていた。もう一カ月くらいになる。

確かに天龍とプリンツの不満はごもつともだろう。

「はっはっは、悪いが僕達にも事情があつて手ぶらでイタリアには帰れないものでね。しばらく世話になるよ。あ、提督には了承してもらっているよ？」

「マジかよ」

「ふぎけるなー！ いいから出てけー！」

「プリンツ、わがまま言っちゃだめですよ」

「だつてお姉さま！ この鎮守府に男が居座るんですよ!? 危険ですよ！」

「男性なら提督がいるじゃないですか」

「あれはなんていうか別じゃないですかあー！」

必死に大和に抗議するプリンツを見て、僕は溜息をつく。

邪険にされていることを悲しく思つて出たものではない。

彼女のあまりの可憐さに、思わず溜息をもらしてしまったのだ。

「ほら！ 見て、あの舐めまわすような視線！ 絶対お姉さまを見て

変なこと考えてますよー！」

「おい、ブーメラン刺さってんぞ」

「私はいいんだよ！ ね、お姉さま!?!」

「できればやめてくださいよ」

「ははは、いや、すまない。でも勘違いしないで欲しい。僕は決していかがわしい妄想なんてしていないし、何より僕が見ていたのは、大和ではなく君だよ、プリンツ」

「死ねえ！」

「ごふっ！」

プリンツの鋭いレバーブローが直撃する。

しかし、なんだ、彼女とのスキンシップと思えば、中々悪くない。

「ああ……癒されるね……」

「さては武蔵と同じ部類の変態だな、テメー」

「やっぱりお姉さまのためにもこんな変態を鎮守府に置いたら駄目だあー！」

「お前が言うな」

「まあまあ、一応提督も了承しているみたいですし、エドモンド提督が良いなら、今はいいんじゃないですかね？」

「な、ななな何言ってるんですか、お姉さまあ!?!」

「———そうだぞ、それに悪いことばかりじゃないだろう」

会話の途中で、食堂の厨房の方からエプロン姿の磯風が姿を現す。

ここに多くの言葉は無粋だ。端的に言おう。

最高にキュートだ。いつかこんな娘にパパと呼ばれた日には僕の人生に思い残すことはないだろう。

故に僕は叫ばずにはいられない。否、叫ばなければならない。

「非デイ・常モールト! 非デイ・常モールト良いぞッ！」

「うるせえッ！」

「はっはっは、そんなに楽しみにしてもらえると、この磯風、胸が熱くなる思いだ」

私の情熱の発露にも笑顔で答えてくれる磯風の無垢さたるや脱帽せざるをえまい。

「いや、本当に助かるわあ、エドモンド提督みたいな素敵の人が来てくれたおかげでこれからは磯風料理を試食する必要もなくなるんだから。ほんと感謝しかない」

「お礼を言いたいののはごっつちさ。女の子の手料理。しかも磯風みたいな美少女のものならいくらだって試食するとも」

「ロリコンだあ……犯罪者予備軍だあ……」

「お前は既に犯罪者の領域だけどな？」

厨房から少し遅れて出てきたのは瑞鳳だ。

この月に一度行っている磯風料理特訓における今月のコーチ役らしい。

外見だけなら磯風と同じくらいに見えるが、その精神は誰よりも大
人びており、どことない色気すら感じる。

魔性の女というのはイタリアにも少なからず存在したし、何度かお
相手してもらったこともあるが、彼女はそれ以上に危険な感じがす
る。そう、彼女なしでは生きられないほどに骨抜きに魅惑される、そ
んな危ない女の気配だ。

「だがッ！ それがいいッ！」

「さつきからなんなんだ、お前!？」

「やっぱり危険だよ」

「そうかもな」

拙い、あふれ出る情熱に天龍とプリンツの僕への心証が急降下中
だ。

「瑞鳳、今日の磯風料理はなんですか？」

「炒飯よ。見た目は」

「不穏すぎる二言目やめろ」

そんな会話をされながら僕の目の前に磯風から皿が置かれる。

そこには、黄金色の米粒と、細切れの長ネギとチャーシューが織り
交ぜられた炒飯が確かにあった。

ラー油の香りが僕の鼻腔を刺激し、食欲を刺激する。

「いいじゃない、食べるのエドモンド提督だし」

「すまない、瑞鳳。一つお願いがあるんだ」

僕は今から厚かましいお願いをする。

それはあるいは抜け駆けにも等しい行為。一部の人間にとってこ
れを僕だけが享受するという事実も背信にも等しいのかもしれない。

だが、僕はお願いせざるをえない。日本に来たからには、瑞鳳に会えたからには、絶対やつてもらおうって決めていたんだ。

「アレを、言ってみてくれないかな？」

「へえ、なになに言ってる欲しいんだあ？ 私に？」

焦らすような視線と言葉に僕の中の何かが目覚めようとしている。

「言ってくれ！ 言ってください！」

「仕方ないわねえ、特別よ？」

そう言うと、スプーンで炒飯を一口分ほど掬いあげ、僕の眼前に持ってくる。

その表情は、既に魔性の女のそれに変わっていた。

「ねえ、エドモンド提督。私、磯風と炒飯作っただけけど……たべりゆ？」

「デイ・モールトたべりゆうううううううッ！」

うるつかせた目、上目遣い、甘ったるい声、小首を傾げる仕草。

全てがあざとい！ 故に、たまらない！

瑞鳳の『たべりゆ？』の破壊力の程は遠くイタリアの地でも聞き及んではいたが、まさかこれほどとは。

なるほど、あざと可愛いは伊達じゃないということか。

「——ッ！」

一口食べただけで、全身を表現しがたい劇的な感覚が襲った。

それは燃えるように熱く。

また、凍えるように寒い。

何が起こったのかわからないまま、僕は椅子から崩れ落ちる。

「今回もダメだったわね。知ってたけど」

「何故だあ……」

「エドモンド・ロツソ、良い奴だったよ。南無」

「やった！ やったぞ！」

「天龍、洒落になりませんから。プリンツも汚いから椅子の上に立たないでください」

薄れゆく意識の中、5人の美少女が僕を覗き込んでいる。

こんな死に方も悪くはないが、まだ、終われない。

まだ、炒飯が残っている。

炒飯、磯風の作った炒飯。すなわち、女の子の手料理。

「——この、エドモンド・ロツソは……！ 女性の手料理は決して残さない……！ これまでも、そして、これからもッ！」

雄たけびと共に、僕は立ち上がり、スプーンで炒飯を全て口の中に掻き込む。

体中が悲鳴を上げている。生命のアラートをけたましく鳴らしている。

しかし、構うものか。

僕には、命よりも重いと定めた流儀がある。

そして、最後の一粒までを飲み込んだと同時に、僕は意識を失った。

☆

「馬鹿なんですか？ エドモンド・ロツソ提督」

目覚めた医務室で矢矧が心底呆れた表情で僕を見つめる。

凜としたその美しい顔立ちがいかにも度し難いといわんばかりに歪み、軽蔑的な視線が僕を射貫く。

そんなに見つめられると、僕はもうどうにかなってしまいそうだ。

「別に天龍達の悪ふざけに付き合ってくれなくてもいいですから。せめて大人しくしていてくれませんか？ 余計な仕事を増やされると困るんです」

淡々と、僕を叱りつける矢矧には流石の僕としても茶々をいれるわけにはいかなかった。

「いや、すまない。世話になってる身で迷惑をかけてしまったらしい。もう随分と良くなったし行くよ」

そうおどけて笑って見せながら立ち上がろうとすると、立ち眩みが生じてバランスを崩す。それをすかさず矢矧が支えてくれた。

「急に立ち上がらないでください。あなたは自分がどれだけ無謀なことをしたのかわかってるの？ 磯風の料理を一皿平らげるなんて……大和型でもないのに」

磯風の料理を食べることに大和型の耐久力が求められていることに疑問しかないが、彼女の表情をこれ以上曇らせないためにも今は何

も言うまい。

「とりあえずはしばらく安静にしていなさい。いいですね？」

なんと献身的な。態度に多少棘こそあるものの、それも全てこちらを慮つてのこと。天龍と似た気質ではあるが、あれとはまた違う。

そう、彼女は生真面目に、全力で、真つすぐ相手と接しようとしている。その真摯な姿勢に心を打たれる。

日本の委員長系の破壊力の程は遠くイタリアの地でも聞き及んではいたが、まさかこれほどとは。

なるほど、清楚系黒髪ポニテは伊達じゃないということか。是非、眼鏡とかかけて欲しいね。

「でも、そんな堅物なところを崩してみたいのが、男心さ」

「はっ」

体を支えてもらっているということは、至近距離にあるということ。

イタリア男ならだれしもが弁えている。

落とせる、間合いだ。

そして、イタリア男にとつて、美女を口説くのは最早礼節。ここでやらないや男じゃない。例え、心に決めた女性がいるとしてもだ。

彼女の頬に手を当て、軽く僕の方に顔を向かせる。決して力はいれない、しかし、抵抗の間も与えぬ程度にはスピーディかつスムーズに。

「矢矧、気をつけなくちゃ。こういうことをされると、君にその気はなかつたって男はその気になつちゃうんだか——らあああああああ!？」

セリフが途中から激痛による絶叫に変わる。

僕が矢矧の頬に添えた手を、いつの間にか背後に回っていた七丈島提督がひねりあげていた。

やめて、痛い、本当に折れる。

「油断も隙もありませんね」

「ぎ、君……いつから……!？」

「最初からですけど」

「嘘だろ!?! 全然気が付かなかつたぞ影うつすいな、君!?!」

「注意力が散漫ですね。軍人とは思えません」

「ぎゃあああああ、デイ・モールト痛あああいつ!?」

明らかにひねりあげる力が強くなった。

「提督、流石にそれ以上は……」

「矢矧も矢矧です。もう少し男性との距離感を考えてください……心配になります」

「え——は、はい」

「ぬおおおお!? 何だい、そのしおらしい表情!? くっそ、その顔にさせるのは僕のはず——痛つたい、手があああああ!?」

「反省してください。エドモンド提督」

眼鏡の奥から覗かせる彼の怒りの丈は計り知れなかった。

この時、僕は二度と彼を軽んじるまいと誓ったのだった。

「関節の限界というものを身をもって思い知らされたな」

とりあえず医務室から逃げてきたはいいが、さてこれからどうしようか。

まずは食堂に戻って無事を伝えようか。

まあ、プリンツには嫌そうな顔をされそうだが。

「まあ、余所者がすぐには受け入れてもらえらるとは考えていないさ」

全く気にしてない、と言えば嘘になるが、だからと言って落ち込んでいても何も解決しない。

何、イタリアに帰る目途なんてまるでたっていないんだ。時間をかけて受け入れてもらえばいい。

心を切り替えて食堂の扉を開けようとした時、中から声が聞こえてきた。

☆

「あれ!? あれ!? ない! ないない!? なんでえ!」

「き、急にどうしたんですかプリンツ!」

慌ただしいその声は間違いなくプリンツのものだ。

「お姉さま、ない……ないんですう! ロザリオが!」

「ロザリオ? いつも首からかけている?」

「チェーンが、いつの間にか切れていて……」

「どうやら、落とし物らしい。」

なるほど、ロザリオか。首から下げていたらしいが、服の内側に隠していたのだろうか。

気が付かなかつたな。

「いつからなくなってたかわかるか？」

「昨日の夜まではあったはずだけれど……」

「今日の午前中は鎮守府いたっけ？」

「いや、私の料理のために買い出しをしてくれていたんだっただけ……」

「うん、商店街の方歩き回ってた……多分、その時かも」

プリンツの声は沈んでいる。

商店街というのは僕も何度か足を運んだが、人通りが多く、物を落とせばそう簡単には見つからないかもしれない。

それでなくとも鎮守府から商店街までの間もそれなりの距離はある。道路沿いの草むらに落としした可能性もある。

なににせよ、搜索範囲は広大だ。

「ど、どうしよう……」

扉の隙間から垣間見たプリンツは今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「とりあえず鎮守府の中から探してみましよう、提督と矢矧にも手伝ってもらえるよう話してみます」

「私は艦載機飛ばしてみるわ」

「俺も商店街のおっちゃんに話聞いてみるぜ」

「店長と美海にも話をしてみる」

「うう、皆あ、ありがとう……」

いい娘達だ。

プリンツのために誰もが協力を即答した。

「エドモンド提督にも手伝ってもらえるか。人手は多い方がいいだろう」

「そ、それは駄目！」

プリンツの制止の声が響く。

「……その、あの人には、酷いことたくさん言っちゃったし、そんな立場で頼み事なんて……」

「いや、あれならお願いって上目遣いして頼めば一発よ」

その通りだ。いつそ命令してくれた方がいい。

「それに、あのロザリオには……この皆以外、あまり、触って欲しくない」

切実な声だった。

きつと、大切なものなのだ。

大切な者達以外に触れてほしくないと思う程度には、掛け替えのないものなのだろう。

僕は、その一言を聞いてそつと食堂から立ち去る。

僕は、今なんの話も聞かなかった。それでいい。

「あ、エドだあ。ほら、いっぱい日本酒買ってきたよお、みてみて」
「ただいま、エド！ 遅くなってごめんなさいね、商店街が楽しくてつい。すぐにザラ特製パスタ作るわね！」

「いや、すまない。お昼はもう食べてしまったんだ。磯風の手料理を
ごちそうになってね」

「な、なんですって……!?!」

鎮守府の入り口付近で、大量の買い物袋を提げたザラとポーラと出くわす。

「すまないが、ちよつと出かけてくるよ。夜には戻る。ザラのパスタは帰ってから夕食に食べたいな」

「ほ、ほんと!? わかったわ、ザラに任せて！」

「ん？ なになにおでかけ？」

「まあね、ちよつと散歩さ。商店街までね」

☆

その夜。

「うめえ！ なんだこのトマトパスタ！ 今まで食べたことねえ！」

「うちは基本和食に偏るからイタリアンは新鮮でいいわよね、新鮮で」

「むう、これは新たな師匠になつてもらおう」

「うえへへ、ザラ姉さまのパスタは日本酒にもよく合う〜」

「ふふ、グラッツェ！ まだまだあるからたくさん食べてね！」

「本当に美味しいですね！ ね、プリンツ！」

「はい、お姉さま！」

交流もかねてザラの作ったトマトパスタに舌鼓を打つ一同。

結果として、皆で色々な所を探し回ったが、結局ロザリオは見つからなかった。しかし、空気を重くするばかりなので誰もが消沈した様子は見せない。

一見してプリンツも楽しそうだが、大和からはどこことなく意気消沈している彼女の内心が伝わってくる。

「……大丈夫、きっと明日には見つかります」

「ありがとうございます、お姉さま。その言葉だけで、私とっても心強いです」

そう笑顔を浮かべるプリンツに笑顔を返しながら、結局力になれていない自分を大和はどうしても責めずにはいられない。

そんな時、食堂の扉が勢いよく開いた。

「ただいま、皆！ いやあ、遅くなって大変申し訳ない！」

「あー！ エド！ 遅いじゃないの！ どこまで散歩してたのよ！」

「いやあ、この島は美女が多い。商店街でことごとく美しい女性を見つけてしまったね。一通り全員に声をかけていたらいつの間にかこんな時間になってしまったよ、はっはっは！」

「この浮気者」

「ん？ 石鹸の香り。あとなんで服着替えてるの？」

「ふつ、少し汗をかいたのと、衣服が乱れてしまっただけ」

「不潔ッ！」

「ぶ!？」

ザラの鉄拳がエドの顔面にめりこんだ。

「か、顔だけはやめてくれ……イタリアーの伊達男が台無しに……」

「なんでそう、気が多いのかしら。あなたって人は」

「イタリア男にとって、美女を見かけたら口説くのはマナーなのさ」

「私、あなたみたいな人、嫌い」

「ぐっはあああああああッ!？」

「エドおおおおお！」

プリンツの心からの軽蔑の視線に、エドモンドは絶叫と共に食堂の床に倒れた。

☆

「ふう、美味しかった！　ね、お姉さま！」

「ええ、そうですね」

厨房にて、二人で食器を片付けながらプリンツと大和は料理の感想を言い合う。

しかし、両者ともにどこか心ここにあらずと言った様子で、会話も途切れがちだった。

「あの、お姉さま。ロザリオのことは、そんなに気にしなくてもいいんですからね？」

「いいえ、絶対に見つけます」

「……いつかは、手放さなくちゃとは思ってましたから、いつまでもロザリオに依存したままじゃいけないって。だから、いい機会だったのかもしれない。これも、主の思し召しなのですよ、きつと！」

「でも……」

「——あー、すまない、取込み中だったかな？」

「うわあ!?!　エドモンド提督!?!」

唐突に声をかけられ、思わず大和達は悲鳴をあげてしまう。

その反応に、申し訳なきように会釈して、エドモンドは言葉を続ける。

「申し訳ない。実は自室の鍵をどこかに紛失してしまつてね。もしかしたら食堂にあるかもしれないと思つてきたんだが……」

「鍵ですか？　すみません、見ていませんねえ」

「そうかあ、まあ、他にも心当たりがあるからそつちに行つてみるよ」

「はい、後で掃除がてらもう一度食堂を確認しておきますね」

「本当かい？　申し訳ない、このお礼はきつとさせてもらうよ。差し当たつていつ頃が空いているかな？　二人で食事でも——」

「お姉さまに近づくな」

「嬉しいな、嫉妬してくれているのかい？」

「ふふ、そう見える?」

「見えないな! よし、退散だな!」

大和に詰め寄るエドモンドの前に立ち、笑顔で包丁をゆらめかせるプリンツの迫力たるや、流石の彼も全速力で逃げるしかなかったようだ。

「がるるる」

「まあまあ、落ち着いて、プリンツ。エドモンド提督はあんな感じの人じゃないですか。挨拶みたいなものなんですよ、きつと」

「いや、あれは隙あらば食ってしまう野獣の眼光をしてみましたよ! お姉さまの貞操は私が守る! とうか私が貰い受ける!」

「あげません」

「ぶう」

「私、食堂の方掃除してきますね。厨房の片づけをお願いします」

エドモンド提督の自室の鍵のこともあるし、普段より念入りに掃除しよう。

大和がそうして食堂の掃除を初めて数分が経った頃。

「ん?」

食堂の角。観葉植物のおいてある鉢の付近に何か光るものを見つけた。

おそるおそる近づいてみれば、それはまさしく銀製のロザリオ。

プリンツが落としたそれに他ならなかった。

「プリンツ! プリンツ!」

「なんですかあ、お姉さま?」

「ありました! ロザリオ! こんなところに!」

「え、ええ!! 本当ですか!? うわ、本当だ! わああああ!」

食堂から濡れたままの手でプリンツが全速力で駆けてくる。

そして、ロザリオを力強く抱きしめた。

「良かったあ、本当に良かったよお……」

「ええ、本当に」

「流石、お姉さまです……! 私、きつとお姉さまが見つけてくださると信じていましたあ!」

「……はい」

泣いて喜ぶプリンツを他所に、大和はどこか素直に現状を受け止め切れていない様子だった。

そして、プリンツを撫でて落ち着けてやると食堂の掃除を終わらし、早足で食堂から出ていく。

☆

「——鍵は見つかりましたか、エドモンド提督？」

「ん？ やあ、大和。ああ、鍵は上着のポケットに入っていたよ！ 気付かず洗濯機にいられてしまつて、さつき気付いて回収した所さ」

そう言つて鍵を見せるエドモンドに大和は頭をさげた。

「ありがとうございます。プリンツのロザリオを見つけてくれて」

「……ロザリオ？ なんのことだい？ 僕はお祈りとかはサボつてしまふ不信心ものでね、ほら、お祈りつて目を閉じるだろ？ あの間に美女が通りがかったら見逃すじゃないか。あ、それはそれとしてシスターさんは好きだから教会にはよく通つてたよ」

そうおどけて見せるが、大和は下げた頭をあげようとしなない。

それにエドモンドは参つてしまった。

「お願いだから、顔をあげてくれないかな。本当に何のことかわからないし、何より女性に頭を下げさせる趣味はないんだ。顔が見えないからね」

そう言われて頭をあげた大和は優しく微笑んでいた。

「随分と長いお散歩でしたね」

「いや、可愛い子だらけだったからね」

「あのロザリオ、食堂に落ちていたのに土で少し汚れてましたよ？」

「なんだつて？ いや、そんなはずはない。汚れはしっかりと洗い落としましたはず——」

反射的な反論。誘導されたと気付居た時にはあまりに遅い。

それだけ、入念に、外で拾ったものと気が付かれないように、洗つた。何より女性の持ち物を汚れたままにしておくなんてできないエドモンドの性格が、その大和の言葉を受け入れられなかったのだ。それがブラフだとわかつていたとしても。

「すみません、嘘です。はい、仰る通りとても綺麗でした。一日鉢植えの裏で放置されていたとは思えないほど」

「……確かに、埃一つ被ってないのは不自然だったかな」

置く場所はもう少し考慮しておくべきだったかもしれないとエドモンドは自身の浅慮を後悔した。

「直には触っていない。手袋越しに触れただけだから許してくれ」

「聞いていたんですね、食堂での話。すみません、気を遣わせてしまつて」

「僕が勝手にやったことだ、気にする必要はないさ」

「……プリンツにも伝えておきますね」

「それは駄目だ」

即答だった。

その反応に、大和は困惑を示す。

「少なくとも、このことを知れば、プリンツのあなたへの態度も多少は柔らかくなると思いますよ?」

「僕はね、尽くされる男よりも、尽くす男になりたいのさ」

エドモンドの声は今までになく真剣そのものだった。

「ロザリオを探したのは僕がやりたかったからやっただけだ。見返りを求めてやったんじゃない。だから、彼女に知らせる必要なんてない」

「でも——」

「それに、あのロザリオはそんなことのために利用していい程軽くはないはずだ」

その言葉には大和も反論しなかった。

「何、プリンツにはまた違うアプローチを試みるまでさ。それに、君が知ってくれているというだけで僕の身勝手なお節介はもう十分すぎるほど報われている。これ以上を求めるのは、罰があたるよ」

「わかりました。そこまで言うのなら、このことは私の胸にしまっておきます」

「光荣だ、女性の胸の内に刻まれることほど男冥利に尽きるものはないからね」

☆ エドモンドはこれ以上なく誇らしげに笑った。

「美味しいですね、このパスタ」

「ええ、本当に。提督はこういう味付け好きなんですか？」

「そうですね、結構好きかもしれません」

「……覚えておきます」

「はあ、そうですねか……？」

仕事が一と段落着いたので、矢矧と提督は執務室で遅めの夕食をとる。

要望を聞きつけてザラが茹でたてのパスタを持ってきてくれたのだ。

「それにしても、エドモンド提督達を受け入れるなんて思いませんでした」

「まあ、悪い人達ではなさそうでしたから」

「適当すぎませんか？」

「こんな美味しいパスタを作れる人が悪人なわけないでしょう！」

「いつか騙されるわよ」

呆れた様子の矢矧に、提督は続けた。

「でも、実際悪い人じゃなかったでしょう？ エドモンド提督」

「まあ、そうですね。あんなに泥まみれになって、どこまで探しに行つてたんでしょうか」

「調子に乗って山で迷子になったとか言い訳してましたから、方々手を尽くしてくれたんでしょう」

空になった皿を重ねながら提督は安心したように溜息を吐いた。

「彼ならば、安心です」

「提督、いい顔でシメようとしているところ悪いですけれど」

提督の眼前に山の如く連なる書類が置かれる。

現在、日にちが変わるまで既に3時間を切っている。

「ロザリオ捜しで中断していた分、仕事の進捗がすこぶる悪いです」

「……徹夜ですかね」

「徹夜ですね」

「はあああああ」

二人は揃って大きなため息をつき、再び書類仕事に戻る。

こうして今日も一日つつがなく、七丈島の日常は終わりを告げるのであった。

第百九話 「そうだ、私も艦娘になる！」

「おや、天龍じゃないですか。何やってるんです？」

港の倉庫街に入っていく天龍を見かけた大和はふと声をかける。

天龍もこちらに気が付き陽気に手を振り返す。

近づく、天龍は何やら手に袋を抱えている。

「よお、大和！ 奇遇だな、港で会うとは。お前こそ何やってんだよ」

「ビッグスプーンでお昼いただいでたんです」

「おいおい外食かよ、珍しいな」

「ええ、今日の昼食当番がサボってしまったので」

「はっはっは、そいつは災難だったな！」

「あなたの話ですからね？」

まったく自覚がないらしい天龍に大和の目が笑っていない微笑みが炸裂する。

「あれ、俺だったっけ？」

「お前ですよ」

「口悪いな、おい」

「怒ってるので」

「すまんて」

ただならぬ剣幕にとりあえず天龍は頭を下げた。

「罰として磯風ラザニアの刑です」

「死刑宣告やめろや」

「天龍がいないせいで『じゃあ、私が』って磯風がエプロン取り出した時の私達の絶望感がわかります？」

「マジですまねえ」

「磯風ラザニアと磯風プリンの刑です」

「首吊りの後に電気椅子みたいな死体蹴りはやめろオ！」

大和の目は、実に据わっていた。

天龍を土下座に至らせる程度には据わっていた。

そして、大和の溜飲も下がりつつあった昼下がり。

「で、話を戻しましょうか」

「これ以上の罰は勘弁してつかあさい！」

「そっちじゃないです。天龍どっかいこうとしてたんでしよう？」

「ああ、その話か」

天龍は袋を開けて中のものを取り出して大和にしたり顔で見せつけた。

それは、キャットフードであった。

「野良猫共に差し入れしに行つてやるのさ」

「ああ、天龍猫に懐かれてましたもんね」

「今は特にある一匹によく懐かれててな。こうやって近くに来るだけで——お、噂をすれば」

天龍の視線の先を見ると、倉庫の屋根を器用に下りてくる一匹の黒猫の姿があつた。

ふてぶてしい顔に少し丸い身体に野良猫らしいけば立った体毛。

確かこのあたりのボス猫的なやつだったか。いつも一匹でいるのが放つておけないのか幾度となく矢矧からアプローチを仕掛けるも全て玉砕しているという難敵である。

生真面目な矢矧には懐かず、適当な天龍に懐くあたりなんだか猫らしい。

「ブサ可愛いって感じの黒猫じゃあないですか」

「だろ？ 俺も気に入つててき、名前つけてんだよ」

「へえ、なんていうんですか？」

「やまと」

「宅急便か」

安直かつ、自分と名前がかぶっていること、二重で天龍のネーミングセンスが許せない大和であった。

「ほら、やまとの大好物のキャットフード持ってきたぜー、いつもの魚より旨いぜ」

「ビャアアアアア」

「鳴き声が汚い！」

「やまとの声は汚くなんかねえ！」

「ちよっ、ていうか名前変えてくださいよ！ 私の好物がキャットフードみたいな噂になったらどうするんですか！」

「もうなってるよ」

「何やってんだ」

大和の両腕が天龍の胸倉に伸びた。

「落ち着け落ち着け、はっはっは」

「何笑ってんですか!？」

「お前、あれだぞ？ 噂になるって時点でお前もお前だからな？」

「黙れ、小僧ッ！」

「せめて小娘にしてくれ」

事態の深刻さに天龍の胸倉に伸びていた手を今度は自分の頭に伸ばす大和。

天龍は少し申し訳なさそうにその肩を叩く。

「いや、その、まあ、俺も軽率だった」

「私、この島の人達にキャットフードだって食べるって思われてるんですね……大食いキャラは仕方ないとしても、もう少し皆信用してくれているかと思ってたのに」

「いや、そこは全然信じてくれなかったから、俺が一生懸命説得して信じ込ませたんだよ」

「絶対磯風フルコース食わせてやる、覚悟しろ」

「即死コンボやめろお！」

今再び、天龍の土下座が繰り出された。

「というか、本当にやまとって名前なんですか？ さつきから全然反応しませんよ」

「そりゃ、お前、遠慮してんだよ。同じ名前のお前がいるから」

「慎み深っ！ 猫なのに！」

「お前、やまと舐めてんじやねえぞ。賢いんだぜ、やまとは」

「なんか馬鹿にされてる感じがします」

「お前のことじゃねえよ！ ややこしいな！」

「天龍が名付けたんでしょうが！」

ひとしきり怒鳴り合ってお互い息があがる。

「名前変えませんか？」

「だってよ、どうする、やまと？」

「……………」

黒猫は横たわって体を伸ばしている。天龍の呼びかけに対する反応らしきものはない。

「あれ、名前呼ぶと反応してくれるんだけどな」

「慎重深いから私がいる前では鳴かないって話では？」

「バツカ、お前、そんな冗談に決まってんだろ、バツカ」

「あんまり私を舐めない方がいい」

「はっはっは、締まる、締まる」

笑顔で天龍の胸倉を掴んで持ち上げる大和に、天龍は笑顔を繕いながらも必死で腕を叩いて降参の意を示し続けた。

「やまとく、おい、やまとく」

「……………」

「これは、あれだな。名前を認識してないってやつか」

「本当に懐かれているのかという根本から怪しくなってきましたね」

「……飯」

「ビヤア〜」

即座に起き上がって天龍の足元にのそのそと歩み寄ってくる。

「こいつ……………」

「とりあえずキャットフードあげたらどうです？」

「くそお」

買ってしまったキャットフードを無駄にするわけにはいかないの
で複雑そうな表情で天龍はキャットフードを与えた。

結局、野良猫なんてそんなものである、と大和は思った。

「そんなに好きならもうお前の名前は『飯』だ、この野郎！」

「ビヤア〜」

「返事してんじゃねえ！ お前にはプライドってやつがねえのか！」

「猫にマジギレしないでください」

飼い主気分で接していたが、結局猫の中では給仕係的な存在にしか
留められていなかったことが割とショックだったらしい天龍は悔し

気である。

一方で腹を満たしたらしい黒猫は欠伸などしてまた寝そべっている。

「くう、誰がお前をそこまで丸くしてやったと思ってやがる！ 豚みてえにぶくぶく太りやがって！ あれだ！ お前の名前なんざ豚飯だ！」

「飯より少しグレードアップしてませんか？」

「ビヤア〜」

「てめえ、さつき食ったろうが！ 食い意地張ってんじやねえ、大和か！」

「え、なんですって？」

「ぬぐおとおおお、悪かった！ 悪かったって！」

胸倉を掴まれ宙に浮かされるのは本日三度目である。

「——落ち着きましたか？」

「ああ、悪い、取り乱したぜ」

「結構な時間を無駄に過ごした気がします」

「今回、猫見てるだけだもんな。ここまで動きのない回も珍しいぜ」

「回とか言わない。それに大丈夫ですよ、今回は後半がありますから」

「お前も後半とか言ってるんじやねえよ！」

黒猫は依然、大和と天龍の目の前でねそべっている。

たまに寝返りを打ちつつ、こちらをチラ見したり、何も無い所を凝視したりしている。

一体何を考えているのか到底理解することは叶わない。

そもそもさつきから野良猫にあるまじき無警戒さである。

「まあ、あれだな。こういう無駄な時間過ごしてられるってのは、平和な証拠だな！」

「良い感じにシメましたね」

「取りあえず、こいつの名前は『豚飯』決定だ、この野郎」

「ビヤア〜」

「……つくそ！ 可愛いな、くそ！」

「あはは」

このあと、数時間猫と戯れつつ、天龍と大和はとりとめのない話で盛り上がるのであった。

☆

「磯風ちゃん、ありがとね。折角の休日なのに私につき合わせちゃって」

「問題ない、私達は毎日が夏休みだ」

鎮守府の食堂に座っているのは美海と磯風。

そして、もう一人――

「まあ、たまにはこういう休日の過ごし方も悪くはないでち」
佐世保鎮守府の伊58が二人の対面に座っている。

三人の片耳には共通して、真珠のイヤリングが見えていた。

「ゴージャちゃんもありがとう！」

「お、お礼とか別にいいでちから」

顔を真っ赤にしてそっぽを向く伊58を見て美海と磯風は顔を見合わせて笑った。

「で、今日は相談があるということだが」

「うん」

「なんでちか？」

少しうつむきがちに、しかし覚悟を決めたのか磯風と伊58の正面に座る美海は二人の顔を見つめ、口を開いた。

「私、自分の将来が不安で」

「早いな」

「あまりに早すぎる悩みでちな」

小学生にして将来への不安を抱える少女、美海。

もうすぐ13歳である。

「そう急ぐことはないんだぞ、美海はまだまだ子供なんだから」

「子供にはまだ早いでち」

「私子供じゃないもん！」

あからさまに不機嫌に頬をふくらませながら、美海は事の顛末を語り始める。

きっかけは、発端は、父親であるところのカレー専門店ビッグス

プーンの店長と彼女の会話だ。

『美海、そういえばあなた将来の夢とかあるの?』

「え、うーん……なんだろう? やっぱりこのお店を継ぐこととか?」

『なんでそう考えたの?』

「え、いや、なんとなくなあ? 私このお店のお仕事慣れてるし、お

父さんとずっと一緒にいられるし! お父さんだってその方が寂し

くなくていいでしょ?」

美海としては、それは思いつきにしてはかなり上出来に思えたらしい。

また、いつも自分の味方をしてくれる優しい父親が、父親のことを思っただけで将来を応援してくれないはずがない。例えそうでなくても、頭ごなしに否定されることだけはない。

そう踏んでいたのだ。しかし、現実は違った。

『それは、本当にあなたがやりたいことなの?』

「え?」

『美海。このお店だけが世界じゃないのよ? 私だってよく本島の方に出かけてるでしょ? 何も、この島に縛られる必要なんてないのよ』

「え、なんで、そんなこと言うの? 私、お父さんのために——」

『まあ、今すぐ決める必要なんてないし、もう少しよく考えてみてもいいんじゃないかしら?』

父親からのその言葉に、訳も分からず考え込みながらふらふらと歩き続け、いつの間にか、七丈島鎮守府へ辿り着いていたと言う。

「で、もうなんかわかんなくなっちゃった」

「それで、私達に相談か」

「美海らしい生真面目さでちな」

美海は小さく頷く。

「で、私将来何になりたいのかな!」

「うん、私達に聞かれてもな」

「中々にパニックってるでちな」

そういうわけで、美海の将来の話をする事になった。

「そもそも自分が何をやりたいかなんて、簡単に決められるものじゃないでちよ」

「店長の言うように別に今決めることないんじゃないか？」

「でも、磯風ちゃんとゴーヤちゃん私は私と同じくらいの年にはもう艦娘になるって決めてたんだよね？」

「私や磯風はそれ以外道がなかったただけでち」

「そうだな、選択の余地もなかったから、悩むこともなかった」

「そこまで言っつて、自分達がいかに進路相談に不資格か、磯風と伊58は実感したのだった。

将来への悩みは同じく将来への不安を抱いた経験のある者にしかわからない。

それがなかった彼女達には、美海にどうしてやればいいのか見当もつかないのである。

「まあ、とりあえず想像しやすい近い将来から考えてみよう」

「中学進学はするでちか？」

「するよ!?! まだ義務教育だよ!?!」

「ああ、そうだった」

「そういうのもあったでちね。学校って行ったことなかったから失念してたでち」

「二人の過去の闇が思った以上に深い!」

磯風も伊58もよく考えたら学歴はない。

磯風は孤児院で最低限の学だけを積み、伊58は鎮守府内で年長者から教わる形で必要な知識を得た。

一般人の美海とはあまりにかけ離れた人生である。

「じゃあ、分岐点の一つ目は高校進学だな」

「高校は、まあ、行きたいなって思うけど」

「どこの高校でちか? この島にはないでちよね?」

「あ」

「すると、本島の方に行く必要があるな」

「やっぱりやめる」

「なぜ!?!」

急に首を横に振る美海。

「だって、二人に会えなくなるのは……」

「全く、美海は寂しがり屋さんだなあ」

「でちなあ」

「そうだ、私も艦娘になる！」

「ぶふおっ!？」

「でちっ!？」

唐突な爆弾発言に、磯風と伊58が同時に噴出した。

「な、なんで、そうなったんでち？」

「私、磯風ちゃんや、ゴーヤちゃんと一緒にいたいから」

「……………」

「決めた！ わかったよ、私のやりたいこと！ 私、艦娘になる！ それで、磯風ちゃんやゴーヤちゃんと一緒に戦う！ それが私のやりたいこと！」

磯風と伊58は顔を見合わせる。

まずは、伊58の方から美海に語り掛けた。

「やめたほうがいいでちな」

「なんで!？」

「ぶっちやけブラックでちよ」

「ぶらっく?.. 黒?..」

言葉の意味を図りかねて単語を反芻しながら首をかしげる美海に慌てて伊58は追加で説明を加える。

「めっちやしんどいってことでち」

「私、普段からお店の手伝いとかしてるし、その中で学校の勉強もしてるけど耐えられるよ?」

「はっ！ 甘い甘い、そんな程度、私の仕事に比べればまるで苦勞にも入らないでち」

「なんでそんなに得意げなんだ」

「私の一日の仕事を教えてやるでち」

そう言つて、大きく深呼吸をすると。

「オリヨクル、オリヨクル、オリヨクル、オリヨクル、遠征、オリヨク

ル、遠征、オリヨクル、オリヨクル、オリヨクル、オリヨクル、遠征、演習、オリヨクル、オリヨクル、演習、遠征、オリヨクル、オリヨクル、演習、オリヨクル、オリヨクル、オリヨクル、演習——」

「やめろオ！ それ以上は精神が壊れるぞおっ！」

「ひええ」

「24時間働けますか!!? イエス、海老名ちゃんの言う通り！」

「帰ってこい、ゴーヤ!!?」

「ひええええ」

伊58の目は私達を映してはいなかった、はるか遠くの地獄にトリップしていたのだ。

あと数秒、磯風の顔面グーパンが遅ければ、きっと伊58は助からなかったに違いない。

「——まあ、というのは半分冗談でちけど」

「半分しか冗談じゃないのか……」

「ゴーヤちゃん、かわいそう」

「それでも割と前の鎮守府よりかは快適でち！ 割と高頻度で休日くれるし！」

「まるで普段からお休みがないみたいな言い方、ひええ」

「あ、美海、そうなんだぞ。私達艦娘には基本休日というものが存在しない」

国を、世界を守るために戦う艦娘に決まった休日など存在はしない。

戦いに休息はあっても、休暇はない。

「福利厚生という面でいえば結構酷いでちよ？ いくら艦娘が普通の人間より頑丈だからって酷使しすぎなところが否めない気がするでち」

「でも、ここはほとんど休日だよね？」

「ああ、七丈島鎮守府だけは特別だ。毎日がホリデイだ」

「私、艦娘になったらここに入隊する！」

「あー、残念ながらそれはできないんだ」

「どうして!?!」

「ここに着任するには条件があつてな。美海ではその条件を絶対に達成できない」

ここには、監察艦の矢矧を除き、罪艦しかない。

罪深い咎人、そのほんの一部だけがここに來ることを許される。

美海は罪など犯さないのだから、ここに來ることなどありえない。

そういう意味で、磯風は絶対という単語を使った。

「で、でも、それでも私、頑張るよ！　どんなに大変でも、磯風ちゃんやゴーヤちゃんと一緒にいられるなら、いくらだって頑張れるもん！」

今度は、磯風の番だ。そう言いたげに伊58は目配せをした。

それに無言で答え、磯風は美海に向き直って言う。

「そういうことなら、私も艦娘になるのには、賛成できない」

「なんで!？」

「危険極まりないからだ」

「そ、そんなのわかつてるよ！」

「いや、まるでわかつてないよ。でなければ、私やゴーヤと一緒にいたいから艦娘になるだなんて矛盾した結論に辿り着くはずがない」

「矛盾って……二人と同じ艦娘になれば、ずっと三人で一緒にいられるじゃない！」

言葉の意味を理解していない美海に、磯風は心から安堵した。美海のような子供に、戦場の過酷さが理解できてしまうような国は終わっている。

だからこそ、美海の頓珍漢な発言は、磯風達をいくらか救っていた。自分達は、大切なものは失っていないのだということを自覚する。

同時に、だからこそ美海にその残酷さを突き付けることが大変躊躇われた。

「艦娘なんてのは、この七丈島鎮守府が異常なだけで、誰もが明日の命だつてわからないんだ。艦娘は戦うのが使命だ。命の駆け引きをしているのに、ずっと一緒にいられるなんて保障はないんだよ」

「で、でも！　きつと私達三人なら助け合つて——」

「かつて、私には三人の親友がいた。美海やゴーヤと同じくらい大切

な親友が。私も艦娘になったばかりの時は美海と同じことを思っていた。きつと四人なら、助け合って生き抜いていけるって。だが、今生きているのは、私一人だけだ」

「——っ！」

美海の様子が露骨にこわばる。

磯風は決して表情を変えない。悲壮の色を浮かべることもなく、淡々と語る。谷風、浜風、浦風との日々を思い出しながら。

ただ、その親友三人共を、全員自分が手にかけて殺したことまでは言わなかった。

「私達と同じになったからって、私達が一緒にいられるわけじゃない。だから、美海の理論は矛盾してるよ」

「うう……」

「まあ、でも、こうして自分の将来について色々悩めるっていうのは結構幸せなことぢよ、美海」

「そうかなあ」

「ああ、着実に平和に近づいているんだという実感が得られる」

「……ごめんね。磯風ちゃんやゴーヤちゃんばかり辛い思いをして、私ばかりが得してる」

美海は心根があまりに優しく、そして賢い子だ。

平和というのが、艦娘の戦いと犠牲の果てに得られているものであることを、そして、それを享受するのが艦娘ではなく、戦いとは無縁の一般人ばかりである不合理を理解している。

それに、罪悪感を抱かずにはいられない。

しかし、そんな美海を見て、磯風も伊58も嬉しそうに笑うのだ。「美海みたいな子が平和に生きている。それだけで私達は報われているでち」

「それに、勘違いするな。私達は決して平和の犠牲になっているんじゃない。私達が、平和を作っているんだ。私達のために、私達の意思でな」

「二人とも……」

「負い目なんて感じる必要はない。恩義を感じてくれているのなら、

それは平和を生きる姿で返してくれ」

「うん、決めたよ」

美海は立ち上がり、磯風と伊58を見つめて言った。

その顔に、さっきまで刻まれていた眉間の皺はもうない。

「私、提督になる！」

「ぶふおっ!?!」

「でちっ!?!」

「私、やっぱり二人と一緒にいたいし、何より、二人みたいになりたい！ 私も、平和を作りたい！」

「う、うーん……私の期待していた展開とは少し違うんだが……」

「まあ、提督なら、艦娘程危険ではないでち、か？」

美海のやる気に圧倒され、とても反論できそうな雰囲気ではなかった。

「今まで、きつとこれからも、私は二人にたくさん守られて生きていくんだろうけど、私が提督になったら、今度は私が二人を守るから！」

「美海……」

「やばい、泣きそうでち」

「そうと決まれば、勉強だね！ 提督になるのって凄い頭良くないとダメなんでしょ？ 頑張らないと！」

「ウチの提督を見てるとそうでもない気もするがな」

「私も同意見でち。美海なら絶対なれると思うでち」

「うん、頑張るよ！」

かくして、美海の小さな悩みを通し、三人の絆はますます深まつていくのであった。

そして、そんな食堂で賑わう三人を、扉の隙間から伺う影があった。

「……………ああ、尊い」

「何やってんの、エドおっ?」

「これ事案って奴よね、エドっ?」

第一百十話 「横須賀鎮守府、戦艦武蔵、馳せ参じた！」

私は戦艦になりたい。

「あーあ、やっぱ早まったなー」

なんで私は勢いで駆逐艦の艦娘になってしまったんだろう。

そりゃ駆逐艦は戦艦みたいな身体能力基準や空母みたいな知能指数基準がないから、いわゆる、なろうと思えば誰でも最短でなれる艦娘だ。

当時の私とはいえば、身体も、頭もまだまだ子供すぎてとても戦艦や空母の適性はなかった。

だから、こうして駆逐艦を選んだわけだが。

「あの時諦めず、あと数年頑張つてれば、きっと私も戦艦になれてたかもしれないのに……はあ」

戦艦になれば良かった。

艦隊戦の花形、皆から頼りにされ、華々しく活躍する戦艦達を遠目に見て、私は自分がいかに愚かなことをしてしまったのかと後悔したものだ。

駆逐艦は火力もないし、装甲も脆い。だから基本、他の艦をサポートしたり、護衛したり、そんな裏方仕事ばかりが中心だ。

それでも戦場に出られる者はまだ幸せだ。大抵の駆逐艦は遠征に駆り出され、資源、資材の補給にばかり振り回されることになる。

つまりは、駆逐艦なんて貧乏くじだ。まあ、今更こんなことをぼやいた所で、一度艦娘になってしまえば、もう艦種変更なんてできない。身体がその艤装に適応して作り替わってしまい、他の艦の艤装が適合できなくなるためだと言う。

ごくまれに、改装を経て艦種が変わる者もいるらしいが、今まで駆逐艦が戦艦になった話は聞かないし、私にはおそらくそんなチャンスはない。

「あーあ、戦艦になりたいなあ」

そう、例えばこの雑誌の一面を飾る日本最強の艦娘、横須賀の武蔵さんみたいな、そんな戦艦に私は憧れている。恋焦がれていると言っ

てもいい。

もしも私が戦艦になっていたら、いつか武蔵さんとも肩を並べて戦うこともあったかも。それを想像するだけで、私の胸は高鳴る。

「ちよつと、清霜！ 何そこでサボってんの!? そろそろ横須賀さんから応援の艦娘さんが到着する頃だから、近海までお出迎え行ってきたさい！」

「……はぁーい」

雑誌の武蔵さんを見つめながら至福の妄想に浸っていた最中、堤防に座る私の後方から怒鳴り声が響く。

新人だからって、駆逐艦だからっていいようにこき使ってくれるものだ。

しかし、先輩に対して口答えする度胸もないので私は大人しく腰を上げることにする。

全く、駆逐艦なんて最悪だ。

「——あーあ、しつんどい、しつんどい、しつんどいなーつと」

そんな後ろ向きな歌を口ずさみながら、軽快に私の艤装は波を切つて前へ進む。

駆逐艦で得したなと思うことがあるとすればこれだ。

やはり機動力という点で駆逐艦は良い。

「……そろそろ見えてもおおかしくな——何あれ」

数百メートル程前方で何か巨大な魚のようなものが海面を跳ね上がりながらこちらへ進んでくる。

イルカかシャチだろうか。

そんなものはこの近海では見たことないが。

一応念のため持ってきた連装砲を握り、私は船速を落としながらそれに近づき、そして、啞然とした。

「ぶ、ぶはぁー！ ぐ、ふはぁー！ ぐぶぶ、ぶはぁー！」

「……なにこれ」

それはイルカでもシャチでもなく、人だった。

もつと言えば、艦娘だった。

しかし、その体は何故か簀巻きにされた拳句、顔には分厚い鉄製の

面が付けられている。

その艦娘はまさに溺れようとしているところを体を捻じって反発しているのである。

さながらピチピチと跳ねる小魚のごとく。

(神様、どうかこれが応援の艦娘じゃありませんように)

「む、君は……！ やあ、私は応援に来た横須賀のものだが！」

(こいつだったあー！ くっそマジか、なんだこいつ、え、マジか!?)
鉄仮面はピチピチと海面を跳ねながら私の引きつった表情も構わず色々喋り始めた。

何か色々すごいな、この人。

「いや、遅くなって済まない！ 横須賀からここまで普通に向かうのもなんだから遠泳で行ってみようと思つて少し遅くなつてしまった」
(いや、それ遠泳の装備じゃないよ？ 東京湾に沈められる用の装備だよ？ ていうか艦娘は泳げないんだから遠泳つてまず無理じゃないの、何でこの人できてるの?)

「普通に遠泳するのもなんだからと思つて身体を縛つて簀巻きにして顔に重しをつけてみたんだが、いや、これが効く！」

(嬉しそうだなあ、なんで?)

嬉々として語る横須賀の艦娘を前に既に愛想笑いなどできないくらいドン引きしている私はそれでも一応、声をかける。

「……応援に来てくださりありがとうございます。私は駆逐艦清霜です。あなたをお出迎えて鎮守府まで連れてくるよう言われています。とりあえずその、普通の格好に戻つてくれませんか？」

「ふ、気遣いはありがたいが、大丈夫だ問題ない」

「いや、さつきからあなたが海面跳ねまわるから水飛沫凄いだよっ！」

全身もれなくびつちやびちやじゃないか、この野郎。

「おっと、失礼した。では——ふんっ！」

雄々しい声と同時に簀巻きと内側の荒縄の拘束がちぎれ、五体満足の状態となった彼女は海面に立つ。

思いのほか大きなその体は立ち上がるとただならぬ威圧感を与え

る。

「あの、なんでそんな恰好をしていたんですか？」

「趣味だ」

「趣味」

何を言っているのだろうこの人は。

「とにかく自らを痛めつけることを生きがいに行っている」

「頭ヤバいですね」

「君のそのハッキリ言う性格、とても好ましいぞ！」

「体調が悪くなつたので帰っていいですか？　もしくは帰ってくれませんか？」

「はっはっはっはっは！」

「何笑つてんだこの人」

「お前といると楽しいな！」

「私はそうでもないです」

どうしよう、ヤバい人に気に入られてしまった。

ところで。褐色の肌、開放的な衣服に挑発的なさらし。

この人、どこかで覚えがあるような。

「改めて自己紹介しよう」

鉄仮面を外し、露わになるその顔に、私はすっかり固まった。

「横須賀鎮守府、戦艦武蔵、馳せ参じた！」

百年の恋も冷めると言うが、私の憧れはその瞬間に跡形もなく碎け散るのだった。

☆

「へえ、あれが横須賀の武蔵さんかあ！　すごい！」

「清霜ちゃん、あんな大物をお迎えに行けたなんていいな——！」

「え、ああ、うん。そうだね」

「なんでそんなに目が死んでるの、清霜ちゃん!？」

鎮守府に入っていく武蔵を見ながら同僚の駆逐艦達がキャーキャー騒いでいるのを私だけが無表情で見つめていた。

嘘だ、まさか、人違い——否、艦違いとかじゃないの。

あの日本最強で、カリスマで、憧れで、皆のヒーローな武蔵さんが。

「あんな度し難い変態だったなんて……」

「清霜ちゃんがついに崩れ落ちた!」

「救護室——!」

「大丈夫、大丈夫だから……ちよつと頭痛が痛いだけだから……」

「頭いい清霜ちゃんが凄い頭悪い言葉を!? これは重症だよ!」

わらわらと集まってくる駆逐艦達が私を抱え上げて運ぼうとしてくる。

やめて、そつとしておいて。

「——清霜——! 清霜はいるか——! はっはっは——!」

そつとしておけて言ってるんだろうが。

「わー、武蔵さんだ!」

「ファンです、握手してください!」

「ありがとう! さあ、私の指を握りつぶすつもりで来ると良い!」

「わー、私も! 私も握手したい!」

「はっはっは、まとめてかかってこい! ほら、清霜も来い!」

「やかましいわツ!」

ストレスマックスな私の怒号で駆逐艦達は武蔵の背中に隠れる。

武蔵だけは私を見てニコニコしている。気持ち悪い。

「……で、私探してたんじやないんですか?」

「清霜、これから時間はあるか?」

「すみません、ちよつと腹痛の予定があるので」

「そうか! 実はな——」

「お構いなしなの? 私に拒否権はないの?」

「滞在中、私の世話係を君にしてもらいたいと言ったら提督も快諾してくれてな、一つよろしく頼む!」

「何やってくれてんだ!?!」

どこまで私に追い打ちをかけるつもりだ、神様。

「というわけで鎮守府を案内してくれ、何、君に負担はかけないぞ、私が運ぶからな! 上腕二頭筋に効く、お姫様抱っこでな!」

「やつめっろっ!」

「清霜ちゃん!」

「武蔵さんにお姫様抱っこしてもらって羨ましい！」

「拉致されようとしてるんだけどツ!？」

しかし呑気な駆逐艦同僚達は私と武蔵を手を振って見送るばかりだった。

「はっはっは、軽い軽い! もう100 kgは重くなつてこい、清霜!」

「無茶言うな!」

☆

それからはもう、なんていうか、最悪だった。

「さあ、清霜!一緒に飯にしよう! 食堂に案内してくれ!」

「私以外を当たつてもらえます?」

「私は君がいいんだ。清霜は、私とじゃ、嫌か?」

「はい、嫌です」

「だから君に決めたツ!」

「嫌がらせか!」

またある時は。

「清霜、世話になつている札にこの武蔵に背中を流させてくれ」

「いいです! いいですから! 他の艦娘の目もあるんですから!」

「何、私はそんなの気にはしない、羞恥プレイは興奮する」

「私が気にするんだよツ! プレイとか言うな!」

「はっはっは、それじゃあさっさと服をぬいで浴場へ行くぞ!」

「ちよ!? 服は自分で脱げるから! 触んな!」

「こら、暴れるな! パンツが脱がせにくいだろうが!」

「余計なお世話だよツ!」

「ぐっ、鳩尾とは、わかつているじゃないか、清霜お!」

「笑顔、怖っ!？」

またまたある時は。

「ちよ、なんで私の部屋にいるんですか、武蔵さん! 自分の部屋戻つてくださいよ!？」

「わー、武蔵さんだー!」

「えー、ど、どうしよう、もつといいパジャマにしてくれば良かったあ」

「武蔵さん、いつも応援してます！ この寝間着にサインください！」
「皆歓迎ムードやめて！」

「はっはっは、気にするな、清霜。私は床で寝る」
「自分の部屋で寝ろッ！」

「ならば力づくで寝かせてみる！ さあ、こい！ お前の二段ベッド
上段から繰り出すドロップキックを私に食らわせてみる！ 受けて
立っ！」

「それが狙いか！」

そんなことが続き。

「もう、限界……！」

3日目にして私はもう限界であった。

「清霜ちゃん、やつれてるね」

「なんであんなに付きまとってくるんだあ、もう……」

「えー、私は羨ましいけど」

「あんたもやってみればわかるよ、あの人は私達が憧れているような
人じゃないの！」

「——ほうほう」

突然真後ろから聞こえた武蔵の声にその場の全員が凍り付く。

「む、武蔵さん」

「清霜、陰口は許さん。必ず私に直接言え！」

「え、そこなの!？」

それだけ言うと武蔵さんは微笑む。

「そうか、では、清霜の枕の下にあったこの雑誌は——」

「な、な、なななななな」

武蔵さんが手に持っていたもの。それは、私の枕の下に隠していた
武蔵さんの特集が組まれた古雑誌。

「な、なんで」

「うむ、一晩床を貸してもらった札に部屋の掃除でもさせてもらおう
と思っつてな。その時見つけた！ ふ、嬉しくなっつて——」

「——えせ」

「む?」

「返せ！ この変態！」

「ぐはあ！」

私は武蔵さんに思い切りタツクルして雑誌をひったくり、懐に隠すように抱え込む。

信じられない。人のプライベートにずかずかと入り込んで。

よりにもよって、今、一番見られたくないものを。

「ふざけんな！ 死ね！ 本っ当に大っ嫌い！」

「清霜！」

制止の声も聞かず、私は駆けだした。もう、この場に留まり続けるのが我慢できなかったのだ。

☆

「う、えぐ、うろう……」

鎮守府の倉庫の隅。人通りのないその空間で、私は一人泣いていた。

今までのこと全てに対して、やっと一人になれたおかげで感情があふれ出したのだ。

あんな武蔵さんは見たくなかった。

私が憧れた彼女は凛々しくて、格好良くて、強い人。断じてあんな変態じゃない。

ずっと、憧れていたのに。

あんなの、まるで、私が馬鹿みたいだ。

押しつぶすように抱きかかえていたために、ふと見れば私の宝物だった古雑誌はぐちゃぐちゃになっていた。

それでなくとも幾度となくページをめくってボロボロだったのに。

いや、でも、いい機会なのかもしれない。

もう、こんな雑誌はいららないのだから。

「——清霜、いるか」

ふと、倉庫から武蔵さんの声が聞こえた。

私は涙をぬぐって泣いていたのがばれないよう繕うと、倉庫の出入り口に立つ武蔵さんに向かい、歩いていく。

「よくここがわかりましたね」

「君の友達が教えてくれた」

「……それで、何の用ですか」

「済まなかった。私も少し浮かれている、軽率な行動をした。この通りだ」

頭を下げる武蔵さんに私はそれでも冷ややかな視線を向け続ける。

今更謝られたところで、もう何もかも遅いのだ。

「やめてください。もう、終わったことですから」

「……………」

「どうして、そんな風になっちゃったんですか」

頭を下げ続ける武蔵さんに、周囲に誰もいないという状況も相まって自然と言葉が零れ始めた。

「そうですね、懂れてたんです！ 私は！ あなたに！ でも、気持ち

悪いドMの変態なあなたにじゃない！ 昔の、強くて、かつこいいあ

なたに懂れたんです！なのに、全部ぶち壊しにしてくれて、なんで、

そんなあなたになっちゃったんですか……」

「……言葉を返すようだが、私は、今も昔も変わっているつもりはない」

「変わりましたよ！ あの時のあなたは——」

そこまで言って、私はその続きの言葉がエゴでしかないことに気が付き、口をつぐんだ。

それに、こんなことを持ち出しても仕方のないことだ。

昔のことをいくら持ち出したところで、今は決して変わらないのだから。

「もう、いいです。すみませんけれど、世話係は他の人にやってもらうよう私から提督に言っておきます。では」

それだけ言って、私は依然頭を下げ続ける彼女の横を抜けて走り去った。

今度こそ、武蔵さんが後を追いかけてくることはなかった。

それにどこか一抹の寂しさを感じる私が嫌だった。

☆

鎮守府に戻って遠征の準備をしなければならない。

そう思った矢先に私に声をかけてきたのは第一艦隊の面々だった。その穏やかではない顔つきから、単なる世間話目的でないのは明らかだった。

「ねえ、清霜。あんた、何か勘違いをしているんじゃないの？」

「勘違い？ なんのことです？」

「武蔵さんとお前の間には実力と功績に裏付けられた途方もない身分の差がある、ということだ」

「……それが、何か？」

「武蔵さんに対するあなたへの態度が目に見える、という話です」

ああ、いつかは来ると思っていたがよもやこのタイミングで来るのか。
最悪だ。

なんてったって私も今むしゃくしゃしているのだ。

こうもわかりやすく火種を放り込まれたら、嫌でも着火してしまう。

「先輩方、つまりなんなんですか。私、明日の作戦まで暇な先輩方と違って遠征任務で忙しいので時間に余裕がないんです。要点をまとめて出直してきてください」

「そういう所がおかしいんじゃないのって話よ！ あんた、何様のつもり!? 遠征要員位しかできない役立たずの駆逐艦の癖にそんな口叩ける権利があるとでも思ってるの!? 身の程を弁えなさいよ！」

「ちよ、そ、それはいくらなんでも言い過ぎでは——」

「人が、好きで駆逐艦やっているとでも……!」

その瞬間、私は拳を固めて無我夢中で飛びかかっていた。

しかし、その拳が届く前に、後ろから褐色肌の腕が伸びてきて私の腕と体を抑えた。

「よせ」

「っ！ はなせ！」

「む、武蔵さん……これは」

私は武蔵さんの姿を見てもまるで冷静になれず、必死に暴れもがくのだがまるでびくともしない。

一方で先輩達は怯えにも似た恐縮ぶりで、見ているこつちが情けなくなる程だった。

そんな彼女達を見て武蔵さんは言った。

「この鎮守府では、海域攻略隊は遠征隊より優遇される規律があるのかな？」

「い、いえ、それはその」

「……そういった取り決めはありませんが、命がけで戦い国を守っている私達と、危険の少ない資源集めを行う彼女の間には差が生まれるのは事実ですし、そういった敬意は払って欲しいと思います」

「ふむ、確かに。君達が戦っているという事実が、人々が安心して暮らす今日を作っているのは事実だ。だが、その君達が戦えるのは遠征隊が身を粉にして資源と資材を集めてきてくれるからだ。違うかな？」

「それは……はい、その通りだと思います」

武蔵さんの声は優しく宥めるかのような口調だった。

そのせいも、先輩方も先刻の恐縮した様子から幾分か冷静さを取り戻して話をできている感じがする。

「遠征隊よりも海域攻略隊の方が危険は大きいし、それに見合った成果も大きい。だから、世間も遠征隊のような裏方には目もくれない。しかし、君達は知っているはずだ。海域攻略は海域攻略隊、遠征隊、鎮守府全員の力を合わせ成し遂げられているのだと」

「……」

「ならば、君達が誰より遠征隊の苦労を労ってやらねばならない。そこに身分違いなどあるはずがない」

「はい、すみません、ついカツとなって……」

「それを言う相手は私ではないだろう？」

「……ごめんなさい、清霜。言い過ぎたわ」

「……いえ」

ぶっきらぼうに答える私に心なしか武蔵さんの視線が刺さる。

「それはそれとして、清霜。仲間の手を挙げるとは何事だ」

「……っ！ だ、だって」

「お前のその手は仲間を守るためのものだろう。お前はこんなことを

するために艦娘になったのか？ 違はずだ」

一転して厳しい口調の武蔵さんに、私は理不尽さを感じてしまつて、それが途方もなく悲しくなつてしまつて。

感情とは難しい。

理性では絶対駄目だとわかつていても、止められない。

そして、取り返しのつかない失敗をする。

「なんのために艦娘になったかなんてわかんないよ」

「何？」

「私は、あなたみたい艦娘になりたかつた！ でも、結果は駆逐艦で、何もできなくて、あまりにも思つていたものよりも遠すぎて……もう嫌なの、こんなの」

「清霜……」

「私だつて、駆逐艦なんかじゃなかつたら、戦艦だつたら……役立たずなんて言わせなかつた！」

私の悲痛な叫びが廊下を埋め尽くし、その後には静寂が訪れる。

しばらくして、口を開いたのは武蔵さんだつた。

「明日の作戦、清霜、お前も来い。提督には私から話を通しておこう」
「え？」

「そうすればわかる。戦艦だつたら何か変わるなんていうのは都合の良い現実逃避でしかないという事実がな」

「……何それ、喧嘩売つてるの？」

武蔵さんは私を見て挑発的に笑つた。

「そうだ、明日の作戦で敵を一隻でも沈められたなら、戦艦への艦装変更について大工廠に相談してみよう。明石なら、なんとかできるかもしれない」

「本当に!？」

「ああ、だが、戦場に立つ勇氣がお前にあるかな？」

「上等だよ」

こうして、私は、突然明日の海域攻略作戦の艦隊に組み込まれる手筈となつた。

それに、絶好のチャンスだ。

これをものにして、絶対に私は戦艦になるんだ。

第百十一話 「私は、戦艦になりたい！」

あの日、私は夢を見た。

「怪我はないか、少女よ」

炎に包まれた街の中で、私はその背中を見た。

後ろからではその横顔しか伺えなかったが、その口元は確かに笑っていた。

「安心しろ。もう、大丈夫だ」

その背中に。

静かな、しかし力強い声に。

一歩も退かず、目の前に黒い塊のように群がる化物とたった一人で対峙するその姿に。

あの日、私は武蔵という夢を見たのだ。

☆

「通常、一艦隊は艦娘6名。これは艦隊として統制が取れ、かつ最大戦果が期待できる構成とされている」

武蔵さんは説明を続ける

「だが今回は例外的に清霜を加え、7名での作戦となる。私達は作戦の成功を第一に行動する以上、お前をカバーしきれぬ保障はない」

「はい、理解してます。早く行きましょう」

「そうか、わかっているならいいんだが」

「さあ、出撃だ」

武蔵さん達が艀装を装備し、抜錨する。

私も緊張気味に、少し遅れてドックの中から外へと飛び出す。

「全員来ているわね!? これより南方海域攻略作戦を開始！ 目標は敵中枢艦隊の撃破！ 今度こそ、やってやるわよ！」

雄々しい発破に他の艦娘もそれぞれ声をあげて答える

「敵艦影発見！ 2時の方向、数は6！ 重巡、軽巡、駆逐艦の水雷戦隊！」

「単縦陣を成し、突撃！ 空母はアウトレンジから航空爆撃！ 先制攻撃で混乱した敵艦隊を一気に沈めるわよ！」

ものの数秒でめまぐるしく艦隊の動きが変わり。艦列が組み代わり、綺麗に一直線に並ぶと同時に爆撃機が発艦する。

状況に追いつけない私は最後尾で艦隊に置いてかれないようついていくのが精一杯だった。

「清霜、大丈夫か？」

「ご心配なく、万全です！」

強がりを言った。

「ふ、ならば良い」

「爆撃成功！ 駆逐艦4隻の轟沈を確認、重巡は被害軽微、軽巡2隻はいずれも被害甚大！ 撤退行動を取ろうとしています！」

「逃すな！」

「ここからは戦艦の仕事だな」

直後、鼓膜を割らんばかりの轟音が響く。艦砲射撃の音だ。駆逐艦の連装砲とは大違いだ。

逃げられないと悟ったのか、眼前に迫る背中を向けていた敵艦隊も翻ってこちらに砲口を向ける。

「チャンスだ！」

一隻でも沈めれば、私は戦艦になれる。今までの全てをやり直せる。

私は嬉々として連装砲を構える。

直後、私の数メートル横を敵の砲弾が掠めていった。

敵重巡と目が合った。

「ひっ」

駆逐艦と重巡洋艦では射程が違う。

ここはダメだ、もっと下がらないと。

「あ、あれ、でもこれじゃ私も届かない——」

その時、他の艦の砲撃が直撃し、敵重巡は力尽きて海面に倒れる。軽巡2隻もいつのまにか海上から姿を消していた。

「全敵艦撃滅確認！ 次行くわよー」

周囲を索敵し、手早くまた指揮をとる旗艦に皆迅速に続く。

私はといえば、先の戦闘での動悸がまだおさまっていなかった。

(くそ、次こそは！)

今回は初めての戦闘だった。まだ勘が掴めていないだけ。

「敵艦隊確認、11時の方角！」

(もう!? もう少し休憩を——)

「輪形陣で敵艦隊に突入！」

こんなことが数回繰り返された結果。

ついに私は駆逐艦の一隻だって沈めるどころか、砲撃すらできずにここまで来てしまった。

「清霜、大丈夫か？」

「だ、大丈夫、です……! ご心配、なく……っ！」

最早強がりをする余裕もない。

汗は滝のように流れ続けて止まらない。息がいつまでたっても整わない。

他の誰も私ほど疲弊している艦娘はいない。

「少し休む。この先は敵中枢艦隊だ。今までの敵よりさらに手強い。さつきまでのように逃げているだけでは危ないぞ」

「そ、そんなの、仕方ないじゃないですか! 私は空母や戦艦みたいに、射程も長くないし、装甲も薄いし」

彼女達は安全なアウトレンジからしかも分厚い装甲をもって撃てるのだから駆逐艦の私のように逃げ回る必要もない。

私だって戦艦なら今頃何隻も敵を沈められていたはずだ。

「それは、関係ないな」

「え?」

「よく見てみる、お前の仲間達を。私達は常にお前の先にいる」

「それは、どういう……?」

理由を尋ねる前に、武蔵さんは旗艦の方へ行ってしまった。

一人取り残された私は、首をひねるばかりだった。

「さあ、いよいよこの先に敵中枢艦隊がいるわ。作戦通り単縦陣を組み、空母は制空権優勢を目指して、弾着観測ができれば随分勝算が違おう。戦艦は敵旗艦に火力を集中させて、随伴艦が庇ってこようが押し切るわよ! 武蔵さん、あなたが火力の要です、よろしくお願いしま

す！」

「ああ、任せておけ。期待以上の働きを約束しよう」

「さあ、勝ちに行くわよ！ 艦隊、出撃！」

全員が雄叫びと共に進み始める。

私もそれに一步か二歩分遅れて続く。

それは、まもなく聞こえてきた。

『オオオオオ、オオオオオオオオオオ』

「姫級を確認！ 敵中枢艦隊から航空機多数発艦！ 迎撃します！」

「こつちの索敵に即気付いた、相変わらず反則級の性能ね、姫級は……！」

「おい、何をぼさつとしている、清霜」

「え？」

「備えろ、爆撃が来るぞ」

何を急に。確かにこちらの索敵行動は敵に察知されたかのようにあるが私達の方も航空機を出したじゃないか。

「甘いな、考えが。言っただけだ、今までの敵より手強いと。今までのようにはいかない。私も空母のことはまだまだ勉強不足だが、あの艦戦の数では負けはしないだろうが防ぎきれない」

「すみません！ 敵機が数機抜けました！」

「全艦、対空砲火——いや、回避運動ッ！」

黒い鉄の塊が、私達の頭上に飛んできた。

そして、それらは火薬の詰まった爆弾を、私達に向けて投下してきた。

「ぬわああああ！」

「あっはっはっはっは！ どうした清霜、みつともない声をあげて！」

「うるさい！ 必死なんですよ！ てか、さつきからことごとく狙ったかのように爆弾直撃してる奴に言われたくない！」

爆弾が雨のように降り注ぐ中、私は走り回り悲鳴を上げて逃げ回る。

しかし、武蔵は落ちてくる爆弾のことごとくを体で受け止めている。

「違うぞ、清霜！ 狙ったかのようにじゃない！ 狙ってるんだよ！」
「なお悪いわ！」

「元氣じゃないか！ その調子だ！ ほら、前方に見えたぞ、私達の敵が！」

「——っ！」

前方に見える黒と白で彩られた人型を模した化物。他の深海棲艦とは極めて異質な、不気味な美しさすら感じさせる個体。

初めて見る。深海棲艦最上位艦種『姫級』。

いや、あんな大物はいい。私は随伴艦の駆逐艦を狙うんだ。

「うわー！」

即座に私は移動する。その数秒後にはさつきまでいた場所は砲撃の嵐に包まれた。

ダメだ、もつと距離を——

『さつきまでのように逃げているだけでは危ないぞ』

逃げているだけじゃ。

確かに、その通りだ。私はここでまだ一度だって戦っていないのだ。

私はここに、何をしに来たんだろう。

私は、どうしたいんだろう。

なんで、ここに来たんだろう。

「私は……そう、私は、私にだってできるって——」
前方を見た。

視界の中心にはまるで戦艦や空母の攻撃にもともしない姫級の姿が見える。

ふと、そいつのどこか憂いを帯びた暗いまなざしが、私を見つめた。

「清霜ッ！」

武蔵さんの叫び声が聞こえた瞬間、私の目の前を光が包み込んだ。

☆

艦娘になったばかりは、まだ私は今ほど腐ってはいなかった。

戦艦になりたいという希望は通らなかったが、駆逐艦でも頑張ればきつと戦艦並の活躍だってできる。

武蔵さんと肩を並べられるような艦娘になれるって、そう思ってた。

だから、たくさん頑張ったんだ。

遠征だって、文句ひとつ言わなかった。

ある日、攻略部隊に初めて編成された。嬉しかった。

夢に一步近づいた実感があつた。

しかし、当日待っていたのは、駆逐艦と戦艦の圧倒的な差。

私が大破を重ね、一方で戦艦達が悠々とMVPをかつさらっていく

その姿に、私は膝を折つたのだ。

「それでも、私は——」

あの日、武蔵さんに夢を見た。

その夢に焦がれた時間を、否定したくない。

今まで頑張ってきたことを全部間違いだなんて思いたくない。

私が、間違いになんてしない。

☆

「う、ん……?」

「ふ、危ないところだった」

回避できないと思わず目を瞑った。

しかし、いつまでも衝撃がやつてこないことを不思議に思い、ゆっくり目を開けると私の目の前にはいつか見たあの背中があつた。

「武蔵さん、私は……」

「あと少しで私から外れる所だったじゃないかッ！」

「はあ、本当にあなたは」

「怪我はないか、少女よ」

「幻聴かと思った。武蔵さんの表情は横顔しか伺えないが、その口元

は確かに笑っていた。

変わっていない、あの時から。この人は何も、変わっていないかつた

んだ。

「いつから、気付いてたんですか」

「最初からだ。立派になりすぎていて一瞬わからなかったがな」

「嘘ばっかりですね。私は立派なんかじゃなかった」

「嘘ばっかりですね。私は立派なんかじゃなかった」

「そうか」

「でも、見ていてください。今から立派になります」

私はスクリーンを全開で回転させる。

「前に出ますッ！」

ようやく、武蔵さんの言葉の意味がわかった。

私の目の前には戦っている他の仲間達が見えている。それはつまり、全員が私より敵に切迫しているのだ。

私よりも射程があるのに。それでも確実に命中させるために、仕留めるためには、自身の射程ギリギリでは戦わない。

例えば、駆逐艦の魚雷の餌食になるとしても、覚悟を決めて撃沈できるように距離を詰める。攻略が全てである彼女達は、安全には戦わない。

「なら、私は、さらに前へ！」

機動力の高い私は砲撃や爆撃をすり抜けてあつという間に一隻の駆逐艦を目指し、距離を縮める。

当然向こうも気付いて迎撃してくる。

「まだ、足りない……ここからじゃ、まだ当たらない」

私は強くない。上手くない。

でも、もっと近づければ、嫌でも当てられる。

当てれば、私だって倒せる。

舐めるな、今までどれだけ海に出てきたと思ってる。どれだけ、武蔵さんの背中を追って、海を駆けたと思っている。

「ぐ、あッ！」

一発、砲撃を真正面から食らう。

まあ、これだけ近づけばそろそろ当たり始めるとは思っていた。

でも、それはこちらも同じこと。

必殺の間合いなら、より覚悟が決まっている方が勝つ。

私が、絶対に勝つ。

「私だって、やればできるんだあ——ッ！」

何発も連装砲を撃ちまくる。

最早人一人分もない近距離で、それでも何発かは外してしまうが、

ほぼ全ての砲弾が駆逐イ級に命中し、ついにその禍々しい身体を海底に沈ませた。

「やったー！」

しかし、喜ぶのも束の間、不意に真横で巨大な爆発が起こる。私の体は容易く吹き飛ばされ、艦装は大破していた。

姫級の砲撃。完全に気を抜いていた。

「よくやった、清霜。十分だ」

「いえ、まだまだ、です」

意識が薄れる中、目の前には武蔵さんが立っていた。

無防備にも敵に背を向け、私を見つめる彼女の笑顔が、最後の光景だった。

「安心しろ。お前は、もう大丈夫だ」

☆

「結局あれだけやって戦果は駆逐艦1隻、しかも私は大破」

翌日。入渠室で目覚めた私はすぐに執務室へ行き、作戦は怎么样了のか尋ねた。

結果は快勝も快勝。

姫級も武蔵の攻撃が始まった途端に防戦一方。結局、数発の砲撃を一方的に食らい、沈んだという。

無事作戦を終えた艦隊は気絶した私を武蔵さんが背負う形で鎮守府に帰港したというわけである。

ちなみに艦隊の中では私が最も戦果が少なく、かつ被害が甚大だった。

それでも、提督は。

『また機会があったら攻略部隊に入ってもらおう。訓練に励め』

と、声をかけてくれた。

攻略部隊の先輩とも互いの謝罪をもって関係を修復し、今度一緒に食事に行くことになった。

あの作戦から、いや、武蔵さんが来たあの日から、停滞していた私の時間は動き出したのだ。

そして、私は今ドックにいる。

提督からあの人はきつとここにいと聞いたからだ。

「武蔵さん、何黙って行こうとしているんですか」

「私の任務はこれで終了したからな」

「打ち上げくらい参加していけばいいじゃないですか？」

「私はドMだからな。褒められたり持てはやされたり、そういうのは苦手なんだ」

そして、思い出したかのように付け足した。

「ああ、約束通り明石には話してみるからな」

それに私は首を振った。

「いや、もういいんです。それは」

「……そうか」

「私は戦艦になる必要はないってわかりましたから」

「そうか、それならば良かったよ」

「駆逐艦のまま、戦艦《武蔵》を目指してもいいですか？」

私の憧れた戦艦は、艦種の問題ではなかった。

私の憧れた戦艦はつまりは心だった。

前に進み、皆の先を行く、その武蔵のあり方に私は憧れた。

だから、私は――

「私は、戦艦になりたい！」

宝物に、古い雑誌がある、

私の枕の下に大事に保管されている。

誰も頼んでいないのに、いつの間にか勝手にサインまでされている

それは、私が戦艦を追いかけることを間違っていないと認められた証だ。

第一百十二話「網走番外監獄へようこそおいでくださいました」

「それでは、またしばし留守をお願いします」

「えー！　またですか!?　私が着任してからまだ一か月も経ってませんのに！　これで二回目じゃないですかっ！」

提督の言葉に悲鳴のような声で抗議するのはこのできたばかりの七丈島鎮守府に着任したての給糧艦伊良湖だった。

彼女の不満は至極真つ当なものである。

これで、彼女を残して鎮守府から離れるのは三度目なのだ。

「ごめんなさいね、伊良湖。多分、これが終わったら落ち着くと思うから」

「もお……いいです！　そうやってないがしろにされている内に、私、良い殿方に貰われてしまうんですからね！」

「ええ、それは困りますねえ」

「ええ、本当に困るわ、伊良湖」

「もう！　提督さんも矢矧さんも本気にしておりませんね!?　本当に貰われてしまうのですからねっ！　その時はお暇をいただくのですからねっ!?!」

笑いあう私と提督に対し、頬をふくらませ、両手をふりあげてます
まず抗議の声を上げる伊良湖。

彼女のこの冗談のような台詞が、帰ってきた時に真実になっている
ことを、まだ私達は知らない。

☆

「一度目は、舞鶴鎮守府へ行きました」

「結局ほとんど手がかりはありませんでしたね。まあ、仕方ないことです、舞鶴の深海棲艦大型侵攻。その被害は甚大なんて言葉じゃ言い表せない。敵はなんとか全滅させたけれど、結果舞鶴鎮守府も提督含め艦娘一隻を残して全滅。その唯一の生き残りも神隠しにでもあつ

たかのように行方不明。今の舞鶴にあの時の名残はもうなかった」
「新任の提督が非協力的なことも災いしました。でも、確かに一隻だけ、生き残った艦娘がいたことは確かなんです。その艦娘がどこに消えたのか……」

舞鶴の大型侵攻。

そこで唯一生き残った艦娘。私と提督はその艦娘を探して舞鶴鎮守府へ行った。

しかし、件の艦娘は当時の提督の謎の死と同時に姿を消しており、その足跡は完璧に消されている。

上はこれにさしたる重大性を感じなかったのか、ろくに調査もされないまま捜査は打ち切り。その艦娘は舞鶴の惨状に気が狂い、提督を殺害した後、自身も後を追って自殺し、今は海の底だろうという憶測が結論としてまかり通ってしまっている。

「二度目は舞鶴の提督について調べ上げるために大本営に行ったり、警察へ行ったり、憲兵隊を訪ねたりと奔走しましたね」

「かなりダメ元でしたが、それでも、手がかりは見つけました。提督の執念の賜物ですね」

「矢矧が私に最後まで付き合ってくれていなかったら、今もまだここに辿り着けてはいませんでしたよ」

「私はあなたの艦娘なのだから、当然でしょう」

艦娘がダメなら、殺害された提督はどうだろうと方向転換した。

膨大な情報から、舞鶴鎮守府前任の提督が殺害された日の周辺の行動を徹底的に調べ尽くしたのだ。

気の遠くなる作業だったが、殺害七日前の外線記録を辿り、ついに見つけ出した。

消失した艦娘の手がかり。

その可能性。

「まあ、大変な作業だったことは間違いないけれど、根気強ささえあれば誰でも見つけられる程度には隠蔽工作がなされていなかったのも幸いでしたね。まさか外線記録にそのまま残っているなんて思いませんでした」

「そこまでする時間がなかったか、あるいは意図的に辿り着けるようにしていたのかもしれませんが」

「あるいは——」

矢矧が言葉を重ねた。

「誰が辿り着こうが関係なかったのでしょうか。何せ、この場所は絶対中立領域です。政府であろうと軍であろうと交渉はできても、強制的な干渉はできません」

「そうですね、ええ、きっとそうなのでしよう」

三度目。

私達は、見つけ出したその目的地にやってきた。

北の大地、北海道。

一度入れば出ること叶わずの絶対原則を掲げる異界とまで呼ばれる大監獄。

その名を、網走番外監獄。

「一度ここに入られてしまえば、捕まえるのも始末するのも至難の業でしょうから」

「でも、下手をしたら一生をここで終えることになるんですよ？」

「そこまでしなくちゃいけない事情があったのかもしれませんが」

何はともあれ、きつとここにいるはずだ。

私達が探し求める艦娘。

七丈島艦隊の新しいメンバー。

——舞鶴百隻斬りの天龍。

☆

「——お待ちしております。少将様」

監獄を取り囲むにはあまりに大仰な巨大かつ果ての見えぬ岩壁は内部からの逃走を防ぐもの、というよりは外部への情報の漏出を遮断するためのものに思える。

あるいは境界線か。

この壁を越えた向こう側は、最早別の世界。

その内外を繋ぐ唯一の出入り口である監獄門。

その門が地を震わせながら開くと同時に見えたのは、黄色の羽織に

白の着物、黒い袴とブーツという和洋折衷の大正モダンな装いの少女。

彼女は門が開き終わると同時に、そう挨拶し、私達に深く頭を下げた。

「網走番外監獄へようこそおいでくださいました」

「……着物の、女の子？」

「私、三等刑務艦の旗風と申します」

刑務艦。その言葉の響きにはあまりに似合わない風貌をした旗風と名乗る少女は顔をあげてニコリと微笑み、私達の返答を待っている。

「あ、その、はい、本日はよろしくお願いします」

「よ、よろしくお願いします」

あたふたと落ち着かない様子で頭を下げ返す提督の隣で私も同じように深々と頭を下げた。

「御二方ともそんなに緊張なさらず。この旗風、本当に歓迎しているのです。ここに外から人が来られるのは大変久方ぶりでございますので、はい！」

「そ、それはどうも……？」

「さあ、お早く門の内側へ。警備の問題上2分までしか開くことができないのでございます」

「は、はい！」

速足で私達が門の内側へ入ると同時に門が再び閉じ始める。

そして、私達はついに網走監獄へ足を踏み入れたのだ。

「あ、ご理解されているとは思いますが」

旗風が思い出したかのように口を開く。

「こちらに立ち入られた時点より、外の世界のルールというものは適応されませんので、あしからず」

「えっ！」

「いえいえ、別にそこまで物騒なものではありませんとも。ただ、こちらにはこちらのルールがあり、それが何より優先されるということをご了承くださいまし」

温和な笑みを浮かべる旗風に私は固い表情で頷き返した。

☆

「それにしても、刑務官が艦娘だなんて驚いたわ」

「艦娘とは名ばかりですがね。もう長らく砲を携えたことはございません」

「収監されている囚人の中には艦娘も少なからずはいますからね。艦娘でなければもしもの時に抑えがきかないのでしょうか」

「ええ、まあそういう理由もございます。ですが、一番はやはり寿命ですかね。艦娘となった時点から成長が止まるとさえ言われる程度に老化が緩やかになりますので、長くこちらの刑務官を務めあげられるという点が適しているのでございます」

「この網走監獄へ投獄される囚人に共通すること。」

それは、無期懲役。終身刑を言い渡された罪人であるということ。

ゆえに、ここへ入獄した囚人は二度と外へ出ることはない。

同じく、その刑務官も囚人の終身まで付き合える寿命が必要というわけである。

「この刑務官になりたいと言われる方は中々おりませんので、万年人手不足です」

「それは、大変ご苦勞なされていることでしょう」

「いえいえ、旗風はこの仕事に誇りを感じておりますので、苦と思つたことは一度もございません！」

明るく答える旗風からは一切の嘘を感じない。

本当に、心から自分の仕事が好きなのだろう。

「それでは、まずはお二人を所長室へご案内いたしますね」

門の内側は、広い平野になっていた。

少し先に大きな武家屋敷のような建物が見える。あれが、監獄なのだろうか。

しかし、建物に近づいたところで、私たちの目の前に驚くべき光景が見える。

「あの、あれは……?」

「畑ですね! あそこで作物を作っております。他にも田園や牧場が

あつたり、温室であらゆる果物、野菜を栽培してたりします」

「誰が？」

「囚人さん達ですけれど」

「……え？」

「なんなら、畑の向こうには村がありますよ、囚人さんの」

「ええ!？」

「この網走監獄のルールは、自給自足です。衣食住は全て自分で用意してもらっております。この建物も大変苦労しました」

「これも作つたんですか!？」

立派な武家屋敷はとても素人が作れるものには見えないが。

「網走監獄では囚人は自由です。あらゆる意味で。別に牢屋に閉じ込めたりなどいたしません。代わりにお世話もしません。病気だとか、怪我だとか、例外はいくつかありますけれどね!」

「ほ、本当に世界が違う……」

「どうせここにに入った以上、二度と外へ出ることは叶いません。罰は与えられております。ならば、この中では自由であるべきというのが監獄の方針なのです」

一生、外の世界を見ることはなく、この壁の内側に隔絶された囚人達。しかし、世界から隔絶されるというこの上ない罰を与えられた先には自由が待っているというわけだ。

やっていることはまるで開拓民である。

早速、自身の常識が崩壊する音が私の中で響き渡っている。

「では、そろそろ所長室へ向かいましょうか!」

☆

「——どうも、所長の神風です」

「……あなたが、こここの所長なのですか?」

「半年程前に前任の所長が100歳を超える大往生の末ご臨終なされましたね。遺言で私がこの椅子を継いだんですよ」

また随分と目の死んだ少女が所長室の椅子に座っていた。

旗風の服装同様、彼女は少し褪せた緋色の振袖に桜色の袴を合わせている。その襟元を正しながら薄く微笑んで、神風は私達の後ろに立

つ旗風に視線を向ける。

「ありがとう、旗風。もう下がっていいわよ」

「はい、神姉さん！ 旗風、失礼致します！ 後で外のお話聞かせてくださいね！」

満面の笑みで私達にそう言っつて背を向ける彼女には申し訳ないが、流石にそんな時間が取れるとは思えないし、長居するつもりもない。旗風が扉を開けて出て行ったことを確認すると、神風は椅子から立ち上がる。

「何かお飲みになります？ 緑茶、番茶、煎茶、ほうじ茶、抹茶、紅茶……まあ、お茶なら大抵のものは揃えていますけれど。茶葉も栽培していますからね」

「いえ、お構いなく。早速本題に移らせてください」

「そうですか。では、そう致しましょうか」

手に取った茶葉入れを棚に戻し、再び椅子に腰掛けなおした神風は改めて提督と私を見つめて言った。

「ご用件は、天龍、でしたね」

「はい」

「……こちらとしても、彼女は特例というか、一応舞鶴鎮守府前任の提督殺害ということで収監されていますが、それもこれも殺害された彼自身の仕組んだこと。茶番であることは知っています」

「やっぱり、天龍を守るために……」

「では、天龍を出獄させることは可能なのですか？」

提督がまくしたてるように尋ねる。神風はその問いに少し首を傾けて笑顔で答えた。

「彼女の囚人登録を取り消すことは勿論可能ですよ、特例中の特例ではあります」

「では、天龍を艦娘として私の指揮下に置くことも——」

「どうぞ、ご自由に」

良かった。私は安堵に胸をなでおろす。

この監獄の名前を見た瞬間から、ここでも一悶着あるに違いないと身構えていたが、意外にも話はトントン拍子に進んでいった。

「では、天龍を呼んできましようか」

神風は執務机の上の黒電話を手に取り、慣れた手つきでダイヤルを回す。

「——春風？ ええ、予定通り天龍を執務室まで連れてきてもらえる？」

そう短く二、三言話すと受話器を置く。

「今部下が連れてきますので、しばしお待ちを。お茶、やはりお飲みになりませんか？」

「……一度断っておきながら厚かましいことこの上ないのですが、是非いただきます」

「あ、私が淹れます！」

「いえいえ、お客様は座っていてくださいな。緑茶でよろしいですか？ 今年は皆さんの頑張りのおかげで特に良い葉が取れたのですよ」
急須に茶葉を入れる神風は嬉しそうにそう言う。

執務室の隅の方に設置されている簡易的な台所でやかんに水を入れ、ガスコンロに火を付ける。

「自給自足などとは謳ってはおりますが、電気と水は一応設備を作ったものの供給が安定せず、ガスや通信に至ってはまるで駄目ですね。結局、ライフラインは外に頼っているのですよ」

「十分すぎるでしょう。流星にそこまで自給自足できたら驚きますよ」

「ただ、食糧に関してはこの数十年で安定してきました、もう外からの補給は止めているんです。今は衣服についても羊や麻や蚕を使って作ろうと試行錯誤しています。染物の技術も未完成ですので、まだ先の話にはなりそうですがね」

「凄いですね……」

「元帥閣下からもお褒めの言葉をいただきました」

「元帥もここに!？」

予想だにせぬビッグネームが聞こえ、提督の眼鏡がずりおちる。

「ええ、もう十年以上前のことです」

「一体、何をしに来たんですか、あの人は」

「その頃は前所長もご健在でしたので、一介の刑務艦だった私には来訪の理由までは」

そんな話をしているとやかんから沸騰したことをしらせる笛のよ
うな音が鳴る。

火を止めて、急須に湯を注いでいる最中、執務室の扉が三度ノック
され、鈴の音のような声が聞こえてきた。

「一等刑務艦春風。囚人天龍を連れて参りましてございます」

「入って頂戴」

「失礼致します」

入ってきたのはやはり例によって、桜色の着物と緋色の袴のおつと
りとした少女。そしてその後ろには、眼帯をした、少し土で汚れた質
素な麻の着物に身を包んだショートカットの少女。

天龍であった。

「やっと、会えましたね、天龍」

「……誰だ、あんた？」

「こら、いけませんよ、天龍さん。お客人にそんな乱暴な言葉遣い」

「あー、はいはい、すみませんでした、春風一等刑務艦殿」

「もう、本当にわかっておられるのかしら」

「それよか、俺自分の田んぼほっぽり出してきてるんだよ。手短に頼
むぜ」

「あ、だからそんなに土汚れが付いているのですね。後でしっかり湯
浴みして汚れは洗い落としておくのですよ？」

「……面倒くせえ」

「女子たるもの身は清らかに保つよう心がけねばなりませんよ」

「春風一等刑務艦殿は逆になんで畑仕事の後なのにあんま土汚れがつ
いてねえんだ？」

「私程になれば無用の汚れを付けることなく畑仕事ができるのでござ
います、天龍さんも精進なさいね？」

「ばねえなおい」

なんだか、予想よりもフランクな様子
の天龍に私も提督も顔を見合
わせて拍子抜けしてしまった。

「取りあえず、皆さんお座りなさいな。丁度お茶を入れました」
「お、気が利くじゃねえか、所長！ ありがたくいただくぜ！」

「神風お姉様、お気遣い痛み入ります」

私達が座るソファの正面に座る春風と天龍、そこに盆に人数分の湯飲みを乗せた神風がやってきた。

「粗茶ですが」

「あ、いただきます」

「いい香り……」

湯飲みから鼻孔をくすぐる緑茶の香りに思わず酔いしれてしまう。

成程、神風が勧めるだけはあるということだろう。

「で、話つてのはなんなんだよ、所長」

湯飲みを手に取りながら天龍から口を開く。

神風は自分の湯飲みを持って、また執務机の椅子にもたれながらその問いに答えた。

「ええ、天龍。ようやく、あなたを迎えに来てくれる方が現れたのよ。おめでとう」

「……ああ？」

「あら、本当なのですか、それは、本当におめでとうございます、天龍。今日はお赤飯にでもしましょうか」

「ええ、そうね。とてもめでたいものね」

神風と春風はそう言つて互いに笑いあう。

対照的に天龍はどこか苦虫を噛み潰したような表情で私達を見つめる。

「馬鹿野郎が……なんで来た」

「あなたが必要なんです、天龍。力を貸してください」

「違う、そういうことじゃねえ！」

天龍が空になった湯飲みを置き、怒鳴り声をあげて立ち上がる。

「なんで、ここに入ってきたッ！」

「……………え？」

天龍の声は震え、その表情は強張っていた。

そして、そんな天龍の横で、絶えず笑顔を浮かべている神風と春風。

なんだ、なんなんだ、この対照的な絵は。

あまりにも異様だ。

あまりにも不気味だ。

背筋が寒くなる。

「さて、二人分の食事が増えるわけだけれど、食糧の備蓄は問題ないかね?」

「ええ、問題ございません」

「……いえ、その、お気遣いはありがたいのですが、天龍の引き渡しが終わったなら私達はもうお暇させていただこうかと」

「あら、何を言っているのですか、少将様」

異様な空気を察し、提督が話を切り上げようと立ち上がるのを制するように神風が口を開く。

「もう、出られませんよ? そういうルールですから」

「……え?」

空気が凍った。

鈴を転がすような笑い声が聞こえる。

春風の笑い声だった。

「網走番外監獄は一度入れば、出ること叶わず。それは囚人も、客人も変わりません」

「なんですって……!?!」

「天龍の囚人登録は抹消しましょう、少将様の指揮下に加えていただくのも一向に構いません。しかし、ここから出られるかは別のお話」

「ようこそ、御二方。私達はあなた方を心より歓迎するわ」

眩暈がした。

一瞬にして状況が変わる。怪しいと感じるべきだったのだ。ここまで都合よく話が進むということ自体に、私は不自然さを感じなければならなかった。

同時に、提督が行動を起こした。おそらくは私と天龍を連れて逃走を図ろうとしたのかもしれない。

かもしれない、というのは、実際、提督がそれを為そうする前にその動きは制止されてしまったからである。

突如、四方八方から襲いかかる『鎖』に提督が縛り上げられたこと
によって。

「ぐ……っ!?!」

「あらあら、邪な考えはおよしくださいね」

「あなた、私達から逃げられるとでも思ってるの!?! 馬鹿じゃないの
!?!」

「ふ、いけない子だね」

まるで、突然そこに現れたかのように、いつの間にか部屋の隅に彼
女達はいた。

一人は金髪と大きな青いリボンが特徴の気の強そうな薄青の着物
と青色の袴の少女、もう一人は小さなシルクハットを頭に乘せたボー
イツシユな白の着物と緑の袴の少女。

彼女達も刑務艦であることは疑いようもなかった。

そして、春風とその二人の少女の着物の裾から伸びる鎖が、提督の
身体を縛り、動きを止めていたのだった。

「二等刑務艦、朝風よ！ 今日からよろしくね、新入りさん？」

「二等刑務艦、松風だ。まあ、諦めて仲良くやろうじゃないか。何、こ
この暮らしもいいもんだよ？」

しばらく、提督は抵抗しようとしていたようだが、やがてどうしよ
うもできないと諦めたのか、戦意を消失したのを表明するように脱力
した。

同時に、提督の体に絡みついていた鎖はまるで生き物のようにならね
り、春風達の着物の内へと戻っていく。

天龍はその様子を見て、言わんこつちやないと顔に手を当て、首を
振っている。

「さて、状況は呑み込めたかしら？」

「成程、まんまと嵌められたというわけですか」

「一度入ったなら、出ること叶わず。そのルールは外にも伝えてあつ
たと思うけれど？」

「詭弁よ！ 監獄と謳う以上そんなもの囚人に対するルールと思うに
決まっているわ！」

「世の中、自分が思っていることと実際の事実は案外一致しない。良い教訓になったわね」

「こんな拉致まがいのことをして、ただで済むとでも……!？」

私の怒りの籠った反論に、神風は暗い瞳を向けて笑うばかりだった。

「ここでは外のルールは通用しない」

「皆さんはこれより私達の預かりとなるのでございます。新しい刑務官として」

「私達が刑務官……!？」

「ちよつとは考えなさいな。囚人じゃないんだから刑務官として働いてもらうしかないじゃない」

「ふ、旗風も後輩が増えて喜ぶだろう。勿論、僕らだって嬉しいとも」
打開策はないのか。

この危機的な状況を打開する策は。

「——とまあ、ここまで言ったところで、納得いかないでしょう?」

「え?」

「だから、チャンスをおあげるわ、感謝しなさい!」

「チャンス?」

「ええ、今から日没まで、監獄門を開けて差し上げます。私達の追跡を逃れ、見事門の外に逃げおおせたならば、皆様は自由でございます」
「ただし、門が閉まったならゲームオーバー、諦めて刑務官になってもらうよ」

「どうかしら? この提案、受ける?」

神風はそう言つて笑った。

私達を試しているのか、その考えの底はわからないが、確かにこれはチャンスだった。

「さて、それじゃ始めましょうか。私達は今から十分間はこの部屋で待機しているわ。それまではお好きにどうぞ、はい、スタート」

軽い口調で告げられたスタートという言葉に一瞬反応できなかった私だったが、提督は違った。

立ち上がり、私と天龍の手を引っ張ると、急いで部屋を出る。

「行きますよ！　一秒でも時間が惜しい！」

「は、はい！」

「くそつ、くそつ！　なんだってこんなことになってやがる！　訳わかんねえぞおい！」

天龍も混乱しているのか、頭を掻き毟っていたが、やがて手を止め、私達を見据えた。

「おい、あんたら」

「なんですか？」

「信用していいんだな？」

その問いに、一瞬言葉に詰まる。しかし、提督は天龍の目を見て即答した。

「それはあなたが決めることです。ただ、少なくとも私はあなたを信用しています」

「私達、ですよ、提督」

「……いいね、オーケーだ。ただ信用しろって言う奴よりかは信用できる」

提督の返答が気に入ったらしく、天龍は初めて私達に笑みを見せた。

「お前達みたいな奴が来るのを待ち焦がれていた。このチャンス、絶対に逃さねえ……！」

その目に、闘志が宿るのを確かに私達は見た。

これは天龍の物語。

彼女の再出奔の物語。

第一百十三話 「はっ、二度と御免だぜ！」

所長室を出た私達は出口へと走る。

幸い、ここから出口までの道順はそれほどまで複雑ではないので容易く建物を出ることは可能だろう。

しかし、私は前を走る二人。

すなわち、提督と天龍に声をかけた。

その足を止めるよう、言葉を発した。

「なっ！ お前、状況わかってんのか!? 10分後にはあいつらが追ってくるんだろが！ なら、今は少しでもあの門に近づかなくちやならねえって時——」

空気が震えるほどの天龍の怒声に気圧される私を庇うように隣の提督が彼女を手で制してくれる。

「矢矧、重要なことでなんですね？」

提督の目はまっすぐ私を見つめる。

思わずその眼鏡の奥の瞳に吸い込まれそうになるのを抑えながら、私は大きく頷いた。

「まずは落ち着いて状況を整理すべきです」

「そんなことをこの死ぬほど貴重な時間を割いてまでやる気か!？」

「この死ぬ程貴重な10分で勝利の道筋を作るために！ それが今、必要不可欠よ！」

「——っ!？」

今度は天龍が私に気圧される番だった。

「わかりました、矢矧。では、急いで作戦会議を始めましょう」

「お、お前ら、正気かよ……!？」

「天龍、あなたも私達を信用すると言い切ったなら、覚悟を決めるべきよ」

数瞬の睨み合いの末、天龍の方が折れた。

「……確かに、ただ門まで走るだけなんて考えなしで、あいつら出し抜けるなんざ俺も思っちゃいねえよ！」

「ありがとう。じゃあ、早速、天龍、ここの刑務官は全部で何人いるのかしら？」

「網走監獄内にいるのは朝風、春風、松風、旗風の四人の刑務艦だけだ。一応所長の神風も元刑務艦だが」

「たったそれだけなの？」

「ああ、他の刑務官は新たな囚人の入獄手続き、情報収集、物資の補給だとか諸々の雑務で門の外に出払ってるらしい。それに、たった四人でも十分過ぎることはもうわかったんじゃないかねえか、特に提督さんはよお？」

「ええ、まあ」

天龍に話を振られ、提督は苦笑いを浮かべる。

まだ、出会って三カ月も経たないが、提督の底の知れない実力の片鱗は何度か見えてきている。

彼が何者なのか、そんなこと私にはわからないが、只者ではないことだけは確信がある。

そんな彼が、先刻、春風、朝風、松風の三人がかりとはいえ、容易く鎖で拘束された挙句、まるで抵抗できずに無力化されてしまった。

あの光景は、私に刑務艦の脅威を植え付けるには十分だった。

「正直、勝つどころか撒ける気すらしません。私では見つかつてしまえば一分程度で制圧されるでしょう」

「逆に言えば一分は持つ、ということですね？」

「……そうですね。先ほどのように三人がかりで来ようとも、今度は一分持たせて見せましょう」

心強い。何より信頼できる言葉だ。

「わかりました。次に天龍、この建物以外に隠れられそうな場所、あるいは障害物が多いような場所はある？」

「いいや、基本、ここら辺は所々木が生えてる以外はだだっ広い平地だ。一応、囚人村まで行けば小屋はあるが、門とは逆側だし、そこまでたどり着く前に多分追いつかれる」

なら、身を潜めながらゴールを目指すのは無理か。

よし、私達の状況がわかってきた。

現状、刑務艦に見つかれば逃げ切ることはほぼ不可能なうえに一分程度で全滅する可能性が高く、かつ身を隠せるような場所はない。成程、これではいくら門が開いていようが逃げ切れる目はない。うん、勝てる。」

「天龍、確認したいことがあるのだけれど——」

☆

「さて、彼らは一体どうやって私達の手を逃れようとするのかしら」
所長室の椅子に深く腰掛け、神風は刑務艦三名の方を見やる。

「はてさて……今回は姉姉さんもないことですし私達だけでは出し抜かれてしまう可能性もあるかもしれませんね」

と、春風。

「はあ？ 別に余裕でしょ。むしろ私一人でもいいくらいよ」
と、朝風。

「姉貴——いや、朝風一等刑務艦の肩を持つわけじゃないけれど、僕も大方同じ意見かな。取るに足らない、それだけだよ」

と、松風。

「……そういえば旗風に知らせるのを忘れていたわね」

三人の意見を聞いて旗風にこの『ゲーム』のことを伝え忘れたと気づき、面倒そうに頬杖をつく神風。

それに対し、即座に春風が着物の裾を片手で抑えながらゆつくりと手を挙げた。

「では、私から伝えておきますね。五分もあれば私達と合流できるはずかと」

「ん、任せた」

手をひらひらさせながら春風の提案に了承の意を送る。

その目線は手元の懐中時計に向いていた。

「……時間よ。刑務艦一同、速やかに対象の捕縛に移りなさい」

次の瞬間、まるで局所的に嵐が吹き荒れたかのような風圧が室内を襲う。

乱暴に扉がひとりでに開け放たれたかと思えば、嵐は止み、室内からは朝風の姿が消えうせていた。

「……どうにも乱暴ね」

「まったくもって、優美さの欠片もないよね」

「松風さん、フォローに回ってもらえる?」

「うん、了解したよ」

春風の言葉に頷くと同時に、松風の姿も一瞬にして消え失せた。

「春風。わかっているとは思うけれど、これは『ゲーム』。でも、やるからにはしっかりね」

「承知致しました、所長」

春風はソファから立ち上がって丁寧に腰を折る。そして、まるで散歩でもするかのような緩やかな歩みで、彼女は所長室を出ていくのだった。

☆

「ふん、三人まとめて私がひっ捕らえてやるわ!」

屋敷内の柱に鎖を巻きつけ、体を手繰り寄せる。

鎖を外して、次の柱に鎖を巻きつけ、再び体を手繰り寄せる。

なんのことはない、ただのワイヤーアクション。

しかし、それもここまで高速に行えば飛行しているようにしか見えない。

網走監獄刑務艦は全員がこの鎖を用いた特殊な体術を習得している。

その名も『網走鎖縛流捕手術』。かつてその流派の達人が鎖で大地を縛り、地震すら収めてみせたという神話じみた伝説の残る捕縛術である。

今朝風が行っているのはその基礎機動術であった。

この屋敷を含めこの網走監獄内にはこうした鎖を巻きつけるための支柱がおおよそ万遍なく存在している。

この屋敷の木柱、外には不規則に生えている樹木、囚人村の小屋だって支柱になる。

この監獄内で最も移動速度の速い生物はこの鎖術を使いこなす刑務艦なのである。

「こんなのは茶番! この監獄内で私達から逃げることなんてできや

しないのよ！」

この先の通路は真っ直ぐ行くか、左に曲がるか。

朝風の脳内に屋敷内の構造が明瞭に浮かび上がる。

「当然、真っ直ぐね。出口に近いものねえ！」

束の間に訪れるであろう勝利の余韻に既に入り浸る朝風。

その目端が、左側の通路の僅かな影の揺らめきを捉えた瞬間、その顔から笑みは消え、その背筋は凍りついた。

「——今よ」

「あ、網走鎖縛流——」

「おせえッ！」

黒点が朝風の眼前に迫る。

それが木刀の先端だと理解したのは、攻撃を受けた直後であった。

「っらああッ！」

天龍の咆哮と同時に額に木刀の突きを受けた朝風は頭から壁に叩きつけられる。そのあまりの威力に木製の壁は朝風の身体を受け止めきれず、巨大な破碎音と共に大穴を開く。

木刀を肩に乗せて一息つく天龍の横に、したり顔で微笑む矢矧の姿もあった。

「まさかここまで予想通りとはね」

「俺はお前以上にびっくりしてるぜ、おい」

壁の向こう側まで吹き飛ばされたであろう朝風が起き上がってくる気配はない。

そもそも天龍の感覚からして、あの感触で仕留められていないということは考えられなかった。

握っていたものが運動用の古びた木刀でなく、真剣だったなら、確実に命を奪っている。そう断言できるだけの致命的な一撃を見舞った。

「まあ、こうご丁寧に屋敷内の間取り図を置いているんじゃ、待ち伏せしてくれと言わんばかりじゃないの。普通に罠という線も想定してたんだけれど」

「ねえよ！ 間取り図一枚でこんなことになるなんて敵さんも思わ

ねえよ!？」

矢矧が指定したのは屋敷の間取り図一枚と、天龍に武器をもたせること。丁度その両方が建物内の倉庫で手に入った。

思いのほか時間が短縮できたので、残りの時間はたっぷり間取り図を見て、敵が辿ってくるであろうルートを絞り込み、その死角となる待ち伏せポイントの吟味に使うことができた。

「自分が狩人だと思っている獲物程狩りやすいものはないわね」

矢矧は数分前も天龍に段取りを説明する前にそう言った。

自分達はあの刑務艦から逃げるのではないと。

逃げる必要などないのだと。

戦って、全員戦闘不能にしてから、悠々と門を出れば良いと。

「さて、一人は仕留めたわね。次のポイント行くわよ」

「おう！」

幸先の良いスタートに思わず言葉尻が浮き上がる。

その浮足だった心の隙を射抜くかのように、それは現れた。

「——まったく、信じられないな。一応、追ってきて正解だったということかな」

「なっ、鎖!?! いつの間に……!?!」

天龍本人すらも気付かぬ間に、その手首を鎖が絡め取っていた。

その鎖の先にまたいつの間にか立っていたのは松風である。

「姉貴の鎖術は力強くて豪快だけれど、喧しくて敵わない。僕の鎖は寝息より静かに、しかし蛇より素早く敵を絡め取る」

まるで蜘蛛が巣に掛かった獲物を繭に閉じ込めるように、あつという間に全身に鎖が巻きつき、為すすべなく天龍は宙吊りにされてしま

う。

「網走鎖縛流、繭吊——」

「ぐ、うおお!?!」

「さあ、矢矧さんだったかな? 悪いけれどチェックメイトだよ」

「……はあ、参ったわね」

矢矧が首を振って嘆息し、両手を挙げる。

「ここまでやり易い敵は久々よ」

「え——しまった、もう一人は——っ!？」

自分の身に何が起きたのか。松風がそれに気づくことはなかった。ただ不意に頭部を貫くような衝撃が走り、目の前の世界が歪曲し、廻り、やがて深い闇に染まっていった。

彼女は何が起こったかもわからぬまま、倒れる。しかし、その体は提督の腕の中に優しく抱きかかえられていた。

「二の矢、三の矢と策を練りこむのが馬鹿らしくなってくるわね」

「良いことじゃないですか」

「私は想定以上に事が上手く運ぶことにかえって不安を覚えるタイプなんです」

「面倒くさい性格をしていますねえ」

「は、はは……すげえ、なんだこいつら」

松風の鎖から解放され、天龍からはもう驚きの声すらでなかった。

「これなら本当に最後の一人も倒して——」

「いえ、流石にそこまで甘くないようです。空気が変わりました。こちらの動きがバレたようですね」

「ああもう、やつとそれらしくなってきたじゃない。よし、じゃあ奇襲作戦終了!。ここからは本当に追いかけてこよ、走るわよ!。天龍!。」

「はあ!? いやいや今いい感じじゃねえか!? お前も言ったように全員ブツ倒して悠々と門まで歩いていきやいいじゃねえか!」

「駄目よ。この朝風と松風はあくまでも私達の奇襲に対して無警戒だったからこそここまであっさり倒せたの。正面からぶつかってたらとつくにゲームオーバーよ。というか全員倒すとか現実的じゃないわ、二人倒しただけでもかなり上出来よ」

「あ、あんな啖呵切っておいて……」

矢矧は平然と天龍の提案に首を振る。

提督も同じ意見のようであった。

「それに、あの春風さんは別格です。とても警戒されている状態で戦っていい相手ではないかと思えます」

「ったく、余裕なのか、ギリギリなのかまるでわかんねえな!」

「戦いつてそういうものでしょ？ ほらわかったらダツシュ！ 三十六計逃げるにしかず！」

「それらしいこと言ってんじやねえぞ！」

矢矧が天龍の背中を押しながら走り始める。

それに合わせ、提督も走りだし、天龍も足を動かす他にはなかった。

☆

「矢矧！ 天龍！ もっと早く走って！」

「ぬあああああッ！ 今、俺の耳元を鎖が掠めていったあああああー！」

「あららあ、お待ちになったださいなあ」

背後は振り向けない。振り向いた瞬間に心が折れる確信がある。

今、背後に迫る春風の殺気が針のように刺さりながらも、天龍達は門の手前300メートル程の所を駆け抜けていた。

「ぬおおおお、今度は一瞬足に鎖が当たったああああ！ 超怖えええええッ！」

「うっさい！ 黙って走りなさい！ ぜえ……はあ……」

「おまつ、こんな所ではてんじやねえぞ!!」

「肉体労働は……私の領分じやな、い……」

「ここ一番で頼りねえなあ、糞が！」

ここでペースが落ちるのはまずい。

天龍は矢矧を背負おうと腰をかがめる。

しかし、その前に同じことを考えていたらしい提督が矢矧を抱きかえ、速度を落とさぬまま器用に背中に乗せてみせる。

なんだか嬉しそうに笑いかける提督と目が合い、天龍は即座に視線を前方に戻す。

「ニヤニヤしてんじやねえぞ、この非常時に！」

「やっぱりあなたは思った通りの人でした、天龍」

「どういう意味だよ」

「やっぱりあなたは『暴れ天龍』なんかじゃない。あなたは助かるべきだ！」

「……うるせえ！ 俺が一番そう思ってるよ！」

「あはは！ それは頼もしい限りです！」

「つたく、能気な野郎だ！」

絶えず伸びてくる鎖の追撃を器用に躲し続け、この小丘を登りきればようやく門の出口が目と鼻の先に見えてくる。

いよいよここまでくると本当に逃げ切れるという希望が湧いてくる。

誰もがそう思っていただろう。

丘を登り切った先で、門の目の前に立つ最後の刑務艦、旗風の姿を見つめるまでは。

「こ、ここはお通しできません！ 刑務艦の誇りにかけて！」

「流石旗風さん、完璧な位置取りです」

「ここまで来て……ッ！」

「前門の虎、後門の狼というやつですか」

「ぶっちゃけ後ろは狼どころか龍に匹敵する感じがするけどなあ」

自分でも驚く程に、この絶望的な状況を前に天龍の心境は穏やかで、軽口を叩く余裕すらあった。

「ここまで、か」

その時、天龍の右頬に弱い衝撃が走る。

見れば、いつの間にか提督の背から降りていた矢矧の拳によるものだった。

「諦めることに、慣れるなッ！」

「——っ！」

「足を止めるな、肩の力を抜くな、真っ直ぐ前だけを見なさいッ！ でなきや、あんたは始まらないっ！」

矢矧の怒号が天龍の身体をのけぞらせるのではないかというほどの衝撃を与え、すぐに止まりかけた足が回転を始める。

天龍自身も理由はわからないが、折れかけた心が、今再び立ち上がり、逆境に立ち向かう覚悟を決めたのである。

「あら、まだ諦めませんか。ええ、よろしいですとも、挟み撃ちに致しましょう」

背後からの殺気がより強くなる。

天龍の額に脂汗が滲むが、隣を走る提督と矢矧はまるで意に介して
いない。

「提督、分かっていますよね？」

「ええ、二言はありませんとも。任せてください」

「それでこそ私達の提督です。じゃあ、行きますよ！」

何の話か天龍には分からないが、矢矧と提督の間では既に段取りが
付いているようであった。

途端に、矢矧と提督の速度が上がり、二人が天龍の前を走る形にな
る。

まるで天龍の盾となるかのようにさえ見えた。

「天龍！ ただ門の外へ向かって走り抜けなさい！ それ以外は何も
考えなくていい！」

「私達が道を開きますッ！」

「な、お前ら、まさかッ!？」

「後門は龍に違いないけれども、前門は果たして虎かしら？ 私には
猫くらいにしか見えないわねッ！」

「え、全然足を緩めない……？ え、まさか私に突進して？ ええええ
えええ!？」

提督と矢矧の意図を察した旗風が思わぬ状況にパニックになる。

旗風としては自分がゴールである門の目の前に陣取っていた以上、
相手は諦めて降参すると踏んでいたのだから当然と言えば当然では
あるが、この想定外の事態へのメンタルの弱さと未熟さは天龍一人を
通り抜けさせるには十分過ぎる隙となった。

「旗風さん！ 落ち着いて！」

「——っ！ は、はい！ 網走鎖縛流、土竜縛り！」

旗風の緊張に震えた声と同時に彼女の足元の地面から鎖の束が這
い出て襲い掛かってくる。

それを提督と矢矧が真正面から受け止め、そのまま体重を乗せて旗
風を押し倒さんと突進する。

二人の猪突猛進の勢いが凄まじかったのか、あるいはその覇気に気
圧され鎖術の方が鈍ったか、旗風の繰り出した鎖は提督と矢矧を絡め

取ったものの、その突撃を阻むことまではできなかった。

「ひ、ひえええええええ！ お助けえ！」

二人が鎖の束と共に覆いかぶさり、旗風の動きを止める。

「まだです、逃がしはしません！ 網走鎖縛流、縛弾！」

鎖が束ねられた球体が春風の手から放たれる。

それは門の外へ手を伸ばす天龍の背中の中の少し手前で大きく膨らみ、次の瞬間、爆発のようにその球体は無数の鎖をその周囲に無差別に飛ばしながら拡散した。

本来は集団捕縛用の鎖術ではあるが、天龍との距離、鎖の拡散速度と捕縛範囲の広さから最適な鎖術を使った。ギリギリ脱獄には一歩半間に合わなかったはず。

息を切らしながら春風は土埃の舞い上がった門周辺を見つめ、そう結論付ける。

「——な、なんという……」

土煙が晴れて最初に見えたのは、無数の鎖に雁字搦めにされ、もはや人型の鎖と成り果てた提督の姿。

次に、おそらくは提督に押し出されたことで間に合ったのだろう、門の外に尻餅をついてこちらを唾然と見つめる天龍の姿。

そして、全てを察し、勝ち誇った顔で旗風の上から体をどかす矢矧。

「まさか、あの状況で尚も天龍さんを庇えるなんて……」

「1分は私一人で対処できると言いましたから。まあ、かなりギリギリでしたが」

春風の脱力と共に地面に落ちていく鎖を払いのけながら提督はズレた眼鏡を直しつつ、薄く笑うのであった。

☆

「——さて、天龍には逃げられたけれど、お二人は捕まった、と」

「申し訳ありません、神姉さま。全ては私の失態です」

「そんな！ 全てこの旗風の不甲斐なさが原因です！」

「いや、それを言ったら私なんでもっとダメでしょうが……」

「はは、自分の情けなさに涙がでそうだよ」

再び所長室に連行され、結果を聞く神風は特に驚くでもなく静かに

春風達の謝罪に耳を傾けていたが、全員が自分こそ悪いと主張するの
で最後には耐え切れず吹き出してしまった。

「各々課題が見えたようで大変結構。今日という失敗を胸に刻むこと
で、あなた達刑務艦のますますの練度向上に期待するわ、以上！」

「はいー！」

神風はそうまとめて刑務艦達を下がらせると、何も言わず座ったま
まの提督達を興味深そうに見つめる。

「さて、今後の話をしようか、少将殿、矢矧殿」

「あの、私はいいいので矢矧は帰していただくことはできませんか？」

「提督……！」

「はは、それはダメですよ、少将殿」

矢矧が抗議する前に神風が提督の申し出を却下した。

「じゃ、お二人は今日からうちの刑務官ということで働いていただき
ます」

「……………」

「あはは、そう怖い顔しないでください。あなた達には、監獄外での情
報収集任務を命じます。期間は無期限です」

「は？」

「え？」

神風の言葉に二人そろって素っ頓狂な声があがった。

「あれ、天龍から聞きませんでした？　うちの刑務官は監獄外で任務
に就いているのも多いんですよ」

「え、あの、じゃあ、もしかして七丈島に帰れたり……」

「しちゃいます」

「情報収集任務っていうのももしかしてわざわざここに来なくても」

「定期的にレポートを郵送してくればおっけーですよ」

「よ、よかったあああああ！」

「もうダメかと思ったあああああ！」

提督と矢矧、今日一番の脱力ぶりを見せる。

「本当に何も考えてらっしやらなかったんですか？　じゃあどうする

つもりだったんです?」

「まあ、なんとか脱獄するしかないかな、と」

「あははは! いい度胸ね! ますます気に入ったわ!」

提督の傍若無人な発言に神風はかえって気分を良くしたようであった。

「まあ、正直人手は足りてますしね。ただのゲームですよ、ゲーム。ついでに刑務官になってもらうことでコネクションを形成させてもらってるだけです」

「スリリングすぎるゲームでしたね」

「ええ、多少は危機的じゃないと、本性が出てきませんから。天龍を任せられる人間かどうか見極められないじゃないですか」

「私達が信用できるか試すテストというわけですか」

神風は怪しく笑った。

「お二人が良い人なのは十分に理解しました。終始天龍を見捨てず、三人で逃げようとしてましたし、何より気絶させた刑務艦を人質に使わなかった。悪人には程遠いですね」

「ご理解いただけは何よりです」

「悪人だったら心置きなくこの監獄に一生幽閉しておくんですけれどもねえ。残念です」

安堵に綻んでいた提督と矢矧の口角がその一言でひきつる。

「何はともあれ、あなた方になら任せられるわ。天龍をどうかよろしくお願いします」

神風はそう言って、深く頭を垂れた。

そこには本当に心から天龍のこれからの幸福を願う慈愛の心があった。

それに対し、提督達も同様に深く頭を下げる。

「謹んでお引き受け致します」

☆

「ああ、これ天龍の日本刀です。手入れはしてあるので、持ってってください」

「丁寧にありがとうございます」

「それと、これも」

神風は日本刀を渡すのと同時に、周囲にはれないように提督の手にUSBを握りこませる。

「天龍をここで保護するよう要請した提督様からの預かりものです。中身は見ていませんが、何かお役に立つかと」

「……ありがとうございます」

耳元で囁かれたUSBメモリの説明に提督も小声で礼を返す。

「では、門もこれ以上開いていただけませんので。また機会があればお立ち寄りください、いつでも歓迎しますよ」

「二度と御免です」

「二度と御免だわ」

「あはは、これは残念」

提督と矢矧が門をくぐる。既に一足先に門の外で待っていた天龍は門が閉まり始めると神風に一度頭を下げた。

「世話になった!」

「また立ち止まりたくなったらいらっしやい」

「はっ、二度と御免だぜ!」

天龍の言葉に、満面の笑みを返す神風。

そのまま、門は重厚な音を立てて完全に閉じられ、開くことはなかった。

「行きましようか、天龍」

「帰るわよ、私達の鎮守府へ」

「おう、よろしく頼むぜ! 俺の再出発、あんたらに預けた!」

これが、長らく立ち止まっていた天龍が再び歩き始めるまでの物語。

諦めることに慣れた剣士が、諦めることをやめるに至った物語。

彼女の運命との決着までには、ここからいましばらくの時を要するのであった。

第百十四話 「どんな理由があれ、女を待たせる男は最低だ」

「やあ、プリンツ、今日もいい天気だね。そういえば、商店街の喫茶店知ってるかな？ 新作のパフェを今出してるらしいんだけど、良ければ一緒に——」

「失せろ」

「……………はい」

こんにちは、廊下の壁からこつそりと二人のやり取りを観察しています、大和です。

最近、プリンツのエドモンド・ロツソ提督のアプローチへの塩対応が不憫でならない今日この頃です。

それはそれとして、今日も七丈島は平和です。

「よし、今日は66文字もったぞ！ 昨日は61文字だったから5文字の大躍進だ！」

それは躍進ではなく誤差です。

エド提督のあのメンタルの強さは一体どこから来るのでしょうか。彼がこの七丈島に居候を始めてから早数か月。

週に3、4回のペースで彼はプリンツをデートに誘いに現れるのですが、その度にこつぴどくあしらわれています。

最初の方は面白がって見ていた瑞鳳も二週間前に「きついわあ」と言って以降姿を見せなくなりました。

「プリンツも最初は無視だったけれど、最近では『死ね』と言葉を返してくれるようになってついに今日は『失せろ』だ！ 2文字から3文字！ 大躍進だ！」

だからそれは誤差です。

あの前向きさに思わず涙が出そうになります。

瑞鳳もそんな感じでみていられなくなったのでしよう。ただ、酷いのはプリンツです。

確かにエド提督のあのアプローチ地獄にはうんざりするものがあ

るのは否定できかねますが、それでももう少し言葉を交わしてあげても良いと思うのです。

「それは無理だよ、お姉さま」

「気配もなく私の背後に立ちつつ当然のように私の思考を読むのはやめてもらえませんか？」

「でも、お姉さまももう慣れちゃいましたよね？」

「はい、残念なことに」

「じゃあ問題ないじゃないですか！」

「これを問題ないと片づけることに問題があるんですよ！」

私だけは常識を手放してはいけない。

そう強く思う今日この頃なのです。

「ふ、大丈夫さ、大和。僕のことなら心配はいらない。へこたれてはいないからね！」

「あなたまで気配なく私に接近するのはやめてもらえませんか!？」

「というか、まさか二人とも私がいることには気づいていたのでしゅうか。」

「当然だよ、私がお姉さまの位置を見失うなんて電波の届かない所にいる時くらいしかないんだから」

「GPSか何かですか」

「僕だって流石に近くにいる人間の気配くらいはわかるさ。提督だからね」

「提督って何者なんですか」

それはそれとして見られているとわかっていながらあんな大胆なアプローチを仕掛けるとはエド提督も肝が据わっているものです。

「イタリア男は公衆の面前だろうがプロポーズをやめない！むしろ見られていた方が興奮——勇気が湧いてくるんだ！」

「今興奮って言いかけましたよね？」

「この、変態ッ！」

「その通りなんですけれどプリンツにだけはその単語を使う資格はないです」

「——お、大和ここにいたか！」

私達がそんな談笑をしている中、天龍がやってきて私に声をかけてきました。

「客が来てるんだが。ちよつと食堂来れるか？」

「お客さん？ どなたですか？」

「俺とお前は以前会ったことあるぜ」

そんなもつたいぶつた天龍の台詞に首を傾げつつ、私は食堂へと急ぐことにしたのでした。

☆

「ご無沙汰しています！ 天龍さん、大和さん！」

「あ、あなたは」

「二原荘の時は大変お世話になりました！」

「バイト勇者さんじゃないですか！」

久々の登場過ぎて誰だ、となつている方も多いと存じますが、彼については詳しくは七十一話から七十四話をご参照ください。

簡単に説明するのなら、彼はこの七丈島のありとあらゆるバイトをこなすスーパー高校生です。

高校生というからには高校に通う生徒の筈なのですが、学校にはちやんと行っているのでしょうか。謎です。

「それで、どうしたんですか、一体」

「ちよつと、皆さんに相談がありました……」

「相談？」

「こういう相談をする相手っていうのが全然周りにいなくて、なんとなくか、こんな下らない話を艦娘さんに持ちかけて申し訳ない限りなんすけど」

バイト勇者さんはそう言つて、大変言い難そうにもぞもぞと口を動かしました。

「恋愛相談、させていただけじゃないでしょうか……！」

「な、なんですって!？」

恋愛相談。

それは、恋する男女が想い人以外の人間に自らの恋模様をあげつづるげに打ち明け、今後の展望などについて模索する行為のことです。

つまりは、バイト勇者さんには想いを寄せる異性がいるということ。

成程、眩しい。これが青春という奴ですか。

私がどこかに置き忘れてしまったものですか。

いいなあ。

「ま、それはそれとして」

「誰なんだよ、そのお相手は？」

私と天龍は喰い気味にテーブル向かいのバイト勇者さんに顔を近づけます。

彼の方は、思いのほか私達が食いついてきたことに困惑を見せつつも、恥ずかしがりながらその名前を口にしてくれました。

「いろは、です。二原荘の、若女将やってる」

「……ああ、あの子ですか！」

二原荘の若女将をしている女子高校生、いろはさんに関しては、詳しくは七十二話から七十四話をご参照ください。

「ふ、二原荘の若女将のことなら僕も良く知るところさ。彼女は確かにこの島の中でも五本の指に入るレベルの美少女と言えるだろうね。

バイト勇者君、中々いい趣味と言わせてもらおう！」

「急に出てこないでもらえます、怖いな!？」

突然後ろから謎のキメポーズと共に現れたエド提督に私は思わず罵声を浴びせてしまいました。

まあ、後悔はありませんし、むしろ言い足りないくらいではあるのですが。

「しかし、そうですねえ。お話は理解できたんですけれど」

「俺達じゃなあ、ちよい力不足だよなあ」

私と天龍は顔を見合わせて唸ります。どちらもはつきり言って恋愛沙汰とは無縁の位置にあるものですから、正直ここまで興味本位で話を進めてしまいました。具体的な相談に対して的確な回答を持ち合わせてはいないのです。

こういう話は百戦錬磨の瑞鳳か、もしくは絶賛恋する乙女な矢矧がいてくれた方が盛り上がるのです。

「ふ、そう不安げな顔をしなくてもいい、大和！ 何故なら、ここに一人、恋愛の達人がいるのだからね！」

「……………」

「ちよ、なんでもすます不安げな顔をするのかな!? このエドモンド・ロツソは色恋沙汰に関してはおちよつとしたものなんだよ、君い!？」

「いや、でも…………ええ」

「ええ、じゃない! これでも老若男女問わずあらゆる恋愛相談を持ちかけられ解決してきた身さ! 是非僕に任せてくれたまえよ!

それにバイト勇者君とは喫茶店のバイト仲間、力になってやりたいんだよ、個人的にも!」

「え、そうなんですか!? エド提督喫茶店でバイトしてたんですか!？」

「このエドモンド・ロツソ。ただで居候させてもらおうだなんて思っちゃいない。経済的な負担くらい軽くしなければと考えている。ザラとポーラも確か伊良湖さんの所で働かせてもらっている筈さ」

唐突に何か立派なことを言い始めたが、とにかく彼はこの話に首を突っ込む気まんまんらしい。

仕方なく、彼も椅子に座ってもらうことにした。

「それで、何が聞きたいんだい?」

「は、はい。その、女々しいとは自分でも思うんですが…………」

「はい」

「自分、いろはにどう思われているんでしょうか!？」

「え、そりゃ————」

「天龍!」

私は慌てて天龍の口を塞ぎました。

そう、私達は知っていますのです。以前、二原荘の女将、すなわちいろはさんの祖母から、いろはさんがバイト勇者さんを憎からず思っているらしい事実を。

きつと天龍はそれを言おうとしたに違いありません。

しかし、それはどうなのでしょうか。

ここで、いろはさんもあなたのごが好きだから安心して告白するといいですよと伝えてしまったとして、それはなんだか違う気がする

のです。

天龍も私の意思をなんとなく理解したのか、小さく頷き、それ以上は何も言いませんでした。

「ふむ、いろはちゃんとはよく話すのかい？　もう何回かデートには行ったのかな？」

「その、今はもう二原荘のバイトはしていないので、学校で偶に話すくらいです。デートとかは、特には……」

「ううん？　じゃあ、二人でどんなことを話しているんだい？」

「別に大したことじゃないですよ。昨日はバイト先でこんなことがあったとか、宿題が大変だったとか」

「うん、話にならないな！　脈なしだ！」

「やつぱり……」

「ちよつと!？」

思わずエド提督の胸ぐらを掴んで引き寄せ、思い切り落ち込んでいるバイト勇者さんには聞こえないように耳打ちします。

「何言ってくれてるんですか！　これで彼の恋が終わっちゃったらどう責任取るつもりですか!？」

「おいおい、僕は客観的に見て事実を語っているだけだぜ？　正直二人の関係は友達止まりが良いところだと思うがね。異性として意識してもらうには距離が遠すぎる」

「いや、それは、そうかもしれないですけど……」

「なあ、バイト勇者。二原荘に居た時はどうだったんだよ？　結構打ち解けてたように見えてたけどよ」

ここで天龍が良いパスを出してくれました。
バイト勇者さんも少し、青ざめた顔に生氣を取り戻したように見えます。

「確かに、二原荘でバイトしてた時はだいぶ距離が縮まった気がします。凄く楽しかったなあ」

「おお、お前がそう思ってるなら、もしかしたら向こうもそう思ってるんじゃないかねえの？」

「そ、そうすかねえ。でも、向こうは単に仕事仲間としてっただけかも

しれないし……」

いいぞ、天龍。私は内心ガッツポーズをしていました。

上手く彼をポジティブな方向に誘導してくれている。

ここで彼の恋の炎をかき消すわけにはいかないのです。

「その時はあくまで一緒に仕事をした仲間として見てただけだろう。距離が近くなるのも当然と言えば当然だ。他意はないと考えた方がいい」

「ちよつとー」

再び、彼の胸ぐらを掴みました。

「なんで邪魔するんですか!？」

「そんなつもりはない。でも、事実は事実として伝えてやらないともしも勘違いだった時が悲しいじゃないか。しっかりした確信が得られるまで僕は無責任に背中を押すことはしない」

「この……!ー」

「それともあるのかい？ 君にはいろはちゃんがバイト勇者君に気があるって確証が」

思わず言葉に詰まりました。

エド提督に打ち明けてしまえばもしかしたら協力してくれるのかもしれない。しかし、さつきからこの敵対的な態度。

彼の女好きな性格はザラやポーラからもよく聞いています。イタリアでもしよつちゆう女の子の追いかけてまわっていたとか。

もしかしたら、彼もいろはちゃんを狙っているのでは。

だから今バイト勇者さんに恋を諦めさせるような発言ばかりするのではないでしようか。

そう疑念が湧いた以上、私の口はそれ以上動くことはありませんでした。

「何も言うことがないのなら、話に戻ろうか」

「……はい」

その後も、エド提督の執拗な嫌がらせは続きました。

「そういえば、何度かノート見せてもらってます！ バイトで大変だろうからって」

「単純に世話焼きなんだろう。旅館で働いている身だからね、人一倍気遣いができてもしゃない」

「確かに彼女、学級委員長もしてますからね……責任感からの行動化もしれないっすねえ」

ああいえば。

「以前お弁当作ってもらったことがあるんすよ！ 毎日コンビニ弁当とかで栄養偏るからって！」

「旅館の新作メニューの試食を兼ねていたんじゃないか？ 感想を求められなかったかい？」

「た、確かに……結構詳しく感想聞かれました」
ことういう。

「よく話している時にずっと目が合っちゃったりするんすけど！」

「女性は男性に比べて異性と目を合わせることに抵抗がないんだ。体格的に男性に劣る女性は相手の挙動をよく観察しようとする本能が働くらしい」

「別に特別なことじゃないんすね……勉強になります」

当然私達もフォローしようとしたが、うんざりするほどに叩きのめされた。

「やっぱ脈なしなんすかねえ……」

「そ、そんなことは」

「そうだが、諦めるにはまだ早いだろ！」

「いえ、もう時間もないんすよ。俺、近々故郷に帰る予定で」

「え……!?!」

「七丈島を離れるってことか!?!」

「故郷はどちらなんですか……?」

「……ドイツつす。実は、父親がドイツ人なんす、俺。だから今度そっちに戻ることに」

「ドイツ……」

「じゃあ、当分こっちに戻ってくることはできねえ、のか……?」

バイト勇者さんは黙って頷くだけでした。

「来週、七丈祭りがあるじゃないすか。その時に想いを伝えようって

思ってたんす」

七丈祭り。毎年この時期に島で行われるお祭りです。

かなり大規模で島全体で行われます。

去年は最後に確か花火も打ちあがったりしていました。

確かに、告白には絶好のシチュエーションでしょう。

「今更付き合うにはあまりにも遅すぎる。だから、いなくなる前に、せめて想いだけは伝えようかと思ってました」

「っ、伝えましょうよ!」

「でも、俺だけの一方的な想いなら、伝えられても迷惑なだけなのか
なって……思っちゃったんすよね……はは、なんだろ、俺、滅茶苦茶
ダサいっすね」

「う、ぐ……」

もう、打ち明けるしかない。

正直、このタイミングで話すのも気まずい感じがするけれど、それでも、彼の恋心を消してしまうよりはずっといい。

私が口を開きかけたその時でした。

エド提督がバイト勇者さんに笑って言いました。

「バイト勇者君、いや、バイトと呼ばせてもらうか。全く、なんという
か君は、情けない奴だな」

「な、あなた、誰のせいだ!」

「てめえ、この野郎!」

私と天龍に掴みかかられた彼はそれでもバイト勇者さんから目を
そらすことなく続けました。

「君は待っているだけだろう、背中を押してもらおうのを! 女々しい
奴め! 答えなんてとっくに出ているのに! なあ、バイト! お前
の心はとっくに決まっているのに、なんだって行動しない!? 僕には
そこが理解できないぜ!」

「エドさん……」

「僕は散々、君の言うことを否定してきてやった、完膚なきまでに、徹
底的にだ! でも、君はそれでもと、負けじとこんなことがあっただ
とか、彼女とこんなことをしたとか、諦めずに噛みついてきたじや

ないか！　なあ、なんでだ!?　なんで、脈なしって言われて、それでも言い返したんだ!?」

「それは……」

エド提督の言葉には熱がありました。

心から、バイト勇者さんに言葉をぶつけているのです。

私と天龍はいつの間にか掴みかかった手を放していました。

「いいか！　そんなのは決まってる！　脈なしだろうがなんだろうが、彼女のことが好きだからだ！　諦めないで既に心に決めているからだ！」

「そ、そうっすよ、そんなことは最初からわかってます！　でも——」

「だったら、さっさと想いを伝えろ！　告白しろ！　男にそれ以外の選択肢なんてない！」

言い切った。清々しいほどまでに。

だが、彼はそれを体現している。何度でもプリンツへ想いを伝え続ける一所懸命な姿を目の当たりにしているからこそ、私にはその言葉が彼の生き様そのもののようにも思え、心に響かずにはいられなかったのです。

私達はいつの間にかバイト勇者さん同様、固唾をのんで彼の次の言葉を待つばかりでした。

「故郷に帰るのがなんだ、迷惑がなんだ。そんな些事は想いを伝えない理由にはならない！」

「そう、なんすかねえ……」

「君は本当に女々しい奴だな！　だが、そんな君の背中を押す言葉を贈ってやろう！　僕の母さんの言葉だ、噛みしめろ！」

バイト勇者さんの胸ぐらを引き寄せ、テーブルの上に片足を乗せ、エド提督は言いました。

「どんな理由があれ、女を待たせる男は最低だ」

「——！」

「来週の祭りだとか言わず、今すぐ行ってこい！」

「はい……はいっ、エドさん！」

弾かれたように、バイト勇者さんは食堂を飛び出していきました。その表情は、覚悟を決めた男らしい顔つきをしていました。

そして、彼を見送るエド提督も、薄らと爽やかな笑みを浮かべているのでした。

「全く世話が焼けるよ」

「エド提督……」

「大丈夫、成功するよ。それだけは保障する。まあ、君達もそれは分かっているみたいだけれどね?」

「やっぱバレてたか」

「でも、エド提督はどこで二人が両思いだつて知ったんです?」

エド提督はキザな笑みを浮かべて言いました。

「言つただろう、僕は数多くの恋愛相談を解決してきた身なのさ。この七丈島でも例外なくね」

☆

数日前。

「ほう、恋愛相談か。しかし、君ほどの娘なら男なんてよりどりみどりだと思っけれどね」

「はは、そうだといいんですけれどね」

「それで、いろはちゃん。君の想い人つていうのは?」

「……バイト勇者君、です」

以外にも知っている名前が出てきた。最近始めた喫茶店のバイト仲間だ。

誰にでも分け隔てなく陽気に接してくれて、僕自身も店の仕事を覚えるまで彼には良くしてもらった。

恩義には報いなきや、イタリア男がすたる。

「私、今度の七丈祭りで彼に告白しようと思つてて……でも、もしダメだったらつて思うと、怖くて」

「それはそうさ。想いを伝えるってことは勇気が必要なことだ、怖いのは当然だ。そんな君に、僕の母さんの言葉を贈ろう」

「エドさんのお母さんの言葉?」

「男は為せ、女は待て、だ」

「待つ、ですか」

彼女の表情に不安の色が強まった。

「告白するのと同じくらい、待つのも勇気が必要だ。それでも君がバイト勇者君を信じるのなら、彼が決意するのを待ってあげてはくれないだろうか」

「……それで、大丈夫だと思いますか？」

「ふ、意外と上手くいくんだな、これが。まあ、見ていなよ」

別に彼女の告白を止める理由なんて実はない。

きつと彼女が見初めた男だ。男だつてきつとそれに応えるだろう。

だが、僕の中ではそれはなんとというか、カッコ悪い。

こういうのは、やっぱり男が勇気を出さないとな。

まあ、これは僕のエゴだ。

だが僕の流儀を優先するからには、この二人には必ず幸せになつてもらう。

☆

「——まあ、そんなこんなで僕は全てを知っていたわけだ」

「あの二人、上手くいきますかね」

「バイト勇者の奴、完全に勢いでいっちゃったぜ……一応様子見に行くか？」

二人のその後について案ずる私達を注意するように、エド提督は唇に人差し指を付ける。

「おいおい、他人の恋路にそれ以上の詮索は野暮だよ」

この日、七丈島に新たな恋が実ったことを私達は後々に知るのであった。

プリンツ・オイゲン編

第百十五話「みんな、今までありがとう。大好きだよ！」

「やっと……会えましたね」

燃え盛る海の上で私とその少女だけが立っていた。

私の身体は既に裂傷やら打撲傷やらでボロボロで、服には血が滲んでいる。対照的に目の前の少女の身体には傷一つない。

ゾツとするほど美しい、死人の如き白い肌。

その肌同様、白く透き通った銀髪が少女の首の動きに合わせて流れる。そして、彼女の真つ赤な目が私の姿を確かに捉えた。

「……………」

少女は何も言わないし、動かない。

私を視界に収めてもまるで石ころでも見るかのように反応が薄い。

私のよく知る彼女は、今は私のことを認識できていないらしい。

それでも私は彼女に語りかける。そのために、私はここにいるのだから。

「さあ、もう帰りましょう？ 皆心配してますから、ね？」

少女は私の声に反応しない。

ただ、少女の背後で目にもとまらぬ速度で動くものがあつた。

それはまるで蛇のように宙をうねりながら一瞬で私の目の前まで伸びてくる。

それは、灰色の触手だつた。生物のようであり、所々鉱石のようでもあるその触手の先端部には巨大な黒い岩でできたサメを思わせる怪物の頭がついており、その口が私の頭を包み込むように大きく開かれていた。

「——大和っ！ 逃げて！」

背後から聞き覚えのある声がある。

しかし、目の前に開かれた鋭利な牙と腐臭が蔓延する巨大な口から逃げるにはあまりにも判断が遅く、どうあがこうとその捕食から逃げ

られないことは明白だった。

いやに時間がゆつくりと流れているように感じる。

口が私の頭を砕かんと閉じられていく、死がゆつくりと迫ってくる中、私は何もできない。

できることと言えば、一つ。

「プリンツ——」

少女の名前を、掠れた声で呼ぶことだけだった。

☆

およそ10日と18時間前、七丈島。

「おい、大和！ あつちに焼きそばの屋台あるぜ！」

「行きましょう！」

「私もお供します、お姉さま！」

「あんた達、まだ食べるわけ……？」

「天龍、大和、プリンツも、あんまり勝手に動かない！ この人混みの中じゃはぐれるかもしれないわ！」

「楽しいね！ 磯風ちゃん！」

「そうだな、美海！」

今日は七丈祭り。年に一度の大きな祭りであり、今日ばかりは島中が飲めや歌えやのどんちゃん騒ぎで埋め尽くされている。

そんな空気に七丈島鎮守府の面々もすっかり当てられ祭りを満喫しているのだった。

「それにしても、こんな時に店長はいないなんて残念だ」

「うん、どうしても本島に行かなくちゃならない用事があるんだって」「私も店長の新作カレーが味わえると期待していたんですけどねえ」

「まったく、娘の誕生日だったのによ！ 美海はもつと怒っていいんだぜ？」

今日はお祭りでもあるが、美海の13歳の誕生日でもある。

まるで我が事のように怒る天龍に美海は笑って首を振った。

「ううん、お父さん、うんざりするほど謝ってくれたし、本島に行く前にお祝いしてもらったからいいの！ それに、お父さんは決して私

をないがしろにしてるんじゃないって私が一番わかってるから！」

「いい子ですね……」

「店長は幸せ者ね」

「今日は店長の分まで俺らが一緒だからな！ 日付が変わるまでは寝かせねえから覚悟しとけ！」

「なんてこと言うの、教育に悪い！」

「えへへ、皆ありがとう！」

満面の笑みを見せる美海に全員が癒される。

磯風が率先して手を引つ張つて二人で林檎飴を買いに行くのを見届け、大和達は身を寄せ合い、小声で話し始める。

「皆さん、そろそろですよ、わかってますよね？」

「おうよ、ばつちりだぜ」

「さつき提督から準備できたって連絡があつたわ」

「さて、二人が戻ってきたら作戦開始ね！」

四人が領き合い、少しして林檎飴を手にして磯風と美海が帰ってくる。

大和と磯風の間でアイコンタクトがあり、それが作戦開始の合図となった。

「そういえば、この後は花火があるらしいですよ！」

「え、そうなの!？」

美海が驚いて食いついてくる。それはそうだ。例年、七丈祭りでは火はあげていない。

だが、今年は特別なのだ。

「じゃあ、皆で花火見やすいとこ移動しよーぜ！」

「だったらやつぱりうちの鎮守府が一番じゃないの?」

「確かに海にも近いし、私達以外誰もいないし、まさに特等席ね」

「よし、じゃあ鎮守府に戻るか。美海もそれでいいか?」

「うん！」

若干、演技臭いところがあつたが、なんとか美海には気づかれていないようだ。大和達は内心安堵の息を吐く。

そして、鎮守府に戻るため、今来た道に戻ろうと大和が轉身したそ

の時、真正面に人がおり、思い切り衝突してしまふ。

この人混みで急に方向転換しようものならこうなるのは必然だったと自分の短慮を反省しながら大和は尻餅をついてしまった女性に手を差し伸べ声をかけた。

「す、すみません！ 大丈夫でしょうか!?!」

「アーハハ！ いや、大丈夫大丈夫！ ごめんなさいね……う、立ち眩みが……」

「本当に大丈夫ですか!?!」

一度立ち上がるも再度尻餅をついた女性は大和の手を取つてふらつきながら起き上がり、笑つて両手を目の前で振る。

島では見かけたことがない。というか、そもそも日本人ではなかった。

真つ白な髪と肌が特徴的な線の細い身体をした彼女の瞳は美しい碧眼で、鼻も高い。外国人であることは一目瞭然であった。

「いやあ、悪いね、助かったよ」

「いえいえ、あの、失礼ですが海外の方ですか?」

「ええ、ちよつと旅行でね！ 好きなんですよ、日本!」

女性は流暢な日本語で陽気にそう返す。

今の時代、海を超えるということは深海棲艦が出没する以上そう簡単なことではない。

深海棲艦の支配から取り戻した海域はあまりに僅かで、その僅かな海域すら万が一を考慮して護衛の艦娘をつけなければ航海できないし、航空機の飛行はそもそも許可されていない。

それ故に、その旅費も馬鹿にならない額になつてくる。とてもじゃないが、一般庶民に手の届く値段ではない。

彼女が日本へやつてくることができたということは、かなりの富裕層に違いない。

「いやー、ここはいい島ですね！ 気温も丁度よくて、住んでいる人たちはすごく活気づいていて、優しいし!」

「気に入っていただけで嬉しいです!」

「うん、すつごく気に入った! いつかはこういうところでのんびり暮

らしたいなあ」

七丈島のことを褒められるとなんだか自分を褒められたような気分になり、大和は頭を掻いて照れくささを誤魔化すように笑った。

しかし、いつの間にか他の面々に置いて行かれていることに気が付き、急いで後を追うべく大和は慌てて話を切り上げる。

「あ、す、すみません！ 私もう行かないと！」

「ああ、ごめんね、引き止めちゃって！」

「いえいえ、とんでもないです！ お姉さんもお祭りたくさん楽しんでください！」

「アーハハ！ うん、そうするよ、ありがと！ それじゃ、またね」

観光客の女性と手を振りあって別れ、先行する皆に追いつくべく走る大和。

ふと、彼女の最後の言葉が引つ掛かった。

「ん？ またねって……まあ、いいか！」

後ろを振り向いても、既に人混みの中に消えて、女性の姿は見当たらなかった。

☆

「さて、そろそろ花火があがる時間だぜ！」

「楽しみ！ ね、磯風ちゃん！」

「ああ、そうだな！」

「何か適当に冷たい飲み物でも持つてくるわ。大和、手伝って」

「はい！」

「俺コーラな！」

「私はトロピカルジュースでいいわよ」

「私はお姉さまの飲みさしならなんでもいいです」

「皆オレンジジュースでいいわね？」

鎮守府の堤防近くに椅子とテーブルを持ってきて特等席を作った。ここなら一番良く花火を見ることができると、瑞鳳が計算した位置取りである。

花火があがるまで後僅かの所で矢矧と私は席を立ち、手はず通り食堂へ向かう。

「花火なんて久しぶりに見るよ！」

「美海、あの七丈小島から打ちあがるらしいぞ」

「ここからなら七丈島のどこよりも綺麗に見えるはずよ。私の完璧な計算に間違いはないわー！」

「うお、なんか俺緊張してきたぜ」

「私もなんかテンションあがってきた！」

そして、笛のような音と共に花火が打ちあがり、その夜空に色とりどりの花を咲かせた。

しかし、それらはやがて一つの形を成していく。

美海はそれに気づくと、思わず両手を口に当てた。

「え、嘘……」

夜空には、花火で『オメデトウ ミウ！』という文字が描かれていた。

驚きの余り声も出ない美海の背後から、歌声が聞こえてきた。

大和と矢矧の声だった。

「ハッピーバースデー、トゥーユー」

「ハッピーバースデー、トゥーユー」

そして、大和と矢矧が持ってきた13本の蠟燭の灯った誕生日ケーキを囲み、最後には七丈島艦隊全員の声が重なる。

「ハッピーバースデー、ディア、美海ー……ハッピーバースデートゥーユーっ！」

全員で高らかに歌い上げた時には、美海の目は潤んで今にも決壊しそうになっていた。

「嘘、皆……信じられない……」

「美海、13歳の誕生日、おめでとう！」

「おめでとう！」

「おめでとうございます！」

「また一步大人に近づいたわね！」

「めでたいぜええええええ！」

「ひゃっはー、おめでとお！」

声高に一人一人が美海に声をかける。

もうそれ以上の我慢もできず、美海は泣き出してしまおう。

同時に、花火が夜空に乱れ咲いた。

「う、うええ、みんなあ、みんなあ……」

「おいおい、主役がそんなんじや、この蠟燭は誰が吹き消すんだ？」

「おら、頑張れ美海！」

「やだ、なんかこつちまで泣けてくるわ」

「わかります」

「うん……うん……！」

涙でぐしゃぐしゃになった顔の美海が思い切り蠟燭を見事に吹き消して見せた瞬間、今日一番の大きな花火が上がり、再び歓声があがった。

「みんなあ、ありがとお……大好きい！」

「私もだ、美海！」

「私もです！」

「良かった、良かったわ……」

「おい、矢矧まで泣き出したぞ!？」

「ひゃっはー! ぱーりいないとだあああああ!」

「プリンツもなんかテンションおかしいんだけど!？」

その後は休む間もなく放たれる花火を見て、食堂に戻り、屋台であれだけ食べ歩いたにも関わらず大和が腕によりをかけた料理とジュースとお菓子とケーキで大騒ぎした。

しかし、流石に疲れたのだろう。日付が変わる前に美海は机に突っ伏して眠りこけてしまった。

それを天龍が背負って部屋に連れて行くのを見届け、大和達も後片付けを始める。

「——ただいま戻りました。おや、丁度終わった所でしたか」

「あ、提督、お帰りなさい! 今日には本当にありがとうございます、無理を言ってしまったて」

「いえいえ、島の方々も喜んでましたよ。花火なんて久しぶりだって」

今回、美海の誕生日サプライズをするにあたり、ケーキや料理は大和が、企画と尺玉に関しては瑞鳳と妖精さん達が、花火の打ち上げに

関しては提督が役場で交渉していた。

予算や事故の面でそれなりに苦労したようだったが、花火自体は原材料さえ工面してくれればこちらで妖精さんがノーコストで作り上げてくれるし、花火による事故のリスクマネジメントは瑞鳳の企画書に完備されていたし、何より提督は職業柄か島の重鎮には意外と顔が利く。

苦労はあっても失敗に終わることはなかっただろう。

「おや、天龍はどこに？」

「美海ちゃんを寝かせに行ってます」

「なるほど、そうでしたか」

「提督、ここは私達で片づけておきますからもう休んでは？ だいぶ

付き合わされたのでしよう？」

「はは、分かりますか……」

七丈祭りの打ち上げでは相当飲まされたらしく、平静を装っている提督の身体は絶えず左右に揺れていた。

島の役場の方々は例外なくうわばみなのである。

「では、お言葉に甘えてお先に失礼します」

「後でお水持つていきますね」

「ありがとうございます、助かります」

若干ふらつきながら、提督はそう言って食堂から立ち去っていた。

「それにしても美海が喜んでくれて良かった」

「ええ、本当に。また来年もやりましょう！」

「いいわね、今度は何をしようかしら。腕が鳴るわ」

「また提督には頑張ってもらわないといけないわね」

皆で今日のサプライズ成功の余韻に浸りながら後片付けをしていたその時、磯風と瑞鳳の手がまず止まり、次にプリンツと矢矧の表情が固まった。

「……こんな日に、空き巣か？」

「穏やかじゃないわね」

「ええ、本当に」

「え、なんですか?」

一人、状況に追いつけない大和にプリンツが小声で耳打ちする。

「多分、侵入者です。数は把握できないですけどかなり多いです」

「え、ええええ!?!」

普段の七丈島鎮守府ではそのような荒事は一切ない。

というかそもそも七丈島自体にそういった事件がない。

鍵をかけずに扉を開けっ放しにしている問題ないくらいである。

大和の脳裏には以前、あきつ丸率いる蜻蛉隊の襲撃の時のことが思い返された。

「ど、どうしましょう」

「迎え撃つしかないわね。瑞鳳、艦載機はどう?」

「今妖精さん達にメールしたから十分くらいで届くはず」

「よし、プリンツ、電気を消して。大和は食堂からフライパンとか武器や防具になりそうなものを片っ端から持ってきて」

「て、提督と天龍はどうしましょう」

天龍は美海を部屋に送り届けている最中だし、提督は酒でふらふらだ。

しかし、大和の懸念を矢矧は薄く笑いながら首を振る。

「むしろあの二人なら心配ないわ。美海に天龍がついてくれて本当に良かった。提督は絶対に大丈夫よ」

「そうです、よね」

「今は自分達の心配をしましょう、迎撃準備よ!」

☆

時は遡り数時間前。

人気がない街灯の少ない路地で男女が抱き合っていた。

「バイト君」

「いろは……ごめん」

「いいんだよ、帰ることは前々から聞いてたし、でも、きつと帰ってくるよね?」

「もちろんっす。俺はきつといつか君を迎えに——」

見つめ合うバイト勇者といろは。

その会話を遮るように着信音が鳴り響いた。

「俺のつす、ごめん……」

「ううん、全然いいよ、出て」

「……いや、大丈夫つす」

スマートフォン画面を一瞬見ると、着信を切り、バイト勇者はもう一度力強くいろはを抱きしめる。

「ごめん、もう行かないといけなくなったつす」

「もう?」

「予定より早く迎えが来ちやつたみたいつすね」

「……バイト君、これ、受け取ってもらえる?」

いろはは手提げ鞆から白玉のついたストラップを取り出し、手渡す。玉は揺れる度に美しい鈴の音を響かせる。

「二原山神社の鈴守り。ドイツまで無事に帰れますように、そして、もう一度ここに帰ってこられますように」

「いろは……ありがとう! いつも身に着けておくつす」

そう言つてバイト勇者はズボンのベルト穴に鈴守りを結びつける。

「じゃあ、また」

「うん、またね」

バイト勇者はいろはに背を向けて走り去る。

彼が見えなくなり、やがてその足音すら聞こえなくなった所で、いろはが一人すすり泣く声だけが響いていた。

☆

七丈島鎮守府、食堂扉前。

既に消灯された廊下に、闇に溶け込むよう真っ黒な装備に身を包む三名の人間がいた。

いずれもその手には機関銃が握られており、一見してそれは兵士のような出で立ちであった。

三名はハンドサインで意思疎通を図ると、食堂の扉を勢いよく開け、突入する。

「——やあ!」

最初に中に入った一人目の真横から大和がフライパンをフルスイ

ングし、奇襲を仕掛ける。

見事にフライパンが兵士の顔面にめり込み、大和の怪力によってそれは意識をかき消すには十分なダメージを与えることに成功し、あえなく床に倒れた。

残る二人が慌てて銃を大和に向けようとした瞬間、不意に全ての電気が点灯し、闇に慣れていた視界が眩い光に眩む。

「今だ!」

「はっ!」

その隙を突き、背後からプリンツと磯風がガスコンロと伸ばし棒を頭に叩きつけ、気絶させた。

「ふう、どうにか上手くいったわね。艦載機の到着を待つまでもなかったわ」

「まだ油断できない。気配は三人だけじゃなかった。後、四人いる」

「——おい! お前ら無事か!」

「——みなさん、無事ですか!」

食堂に、両肩に兵士を二人背負って駆け込んできた天龍と提督を見て、今しがた警戒を解かないよう注意喚起した磯風は思わず吹き出してしまった。

「とりあえず、全員縛り上げましょうか」

「そうだな」

「誰なんでしょうこの人達」

「残念ながら空き巣じゃなさそうね」

「……………なんか、嫌な感じがするね」

兵士の顔を見ても見覚えはない。理由がわからないのが不気味だ。一人くらい気絶させずに拘束できればそれを聞くこともできたのだが、そこまでの余裕はなかったのだから仕方がない。

大和達が不安に包まれる中、再び磯風が食堂の入り口の方を振り向く。

「また、誰か入ってきたぞ」

「便利ですね、磯風レーダー」

「でも今度は全然気配を隠そうともしねえ。こいつらじゃねえのか

？」

「皆さん、油断しないで。それぞれ物陰に隠れてください」

全員テーブルを盾にしたり、厨房へ隠れたりと移動し終え、臨戦態勢が整った瞬間、食堂の扉が三回ノックされた。

当然返事はしない。

すると、ドアノブが回転し、扉が開く。

食堂に入ってきたのは大和の知る顔だった。

「え、さっきのお姉さん……？」

「アーハハ！ また会ったね、偶然！」

「なんだ、大和、知り合いか？」

「いえ、さっきお祭りで知り合った方なんですけれど……」

「う、嘘……嘘だ……」

「プリンツ？」

状況が読めない中、プリンツだけが目を見開き、その女性を見据え、後ずさりしている。よく見れば、僅かに手が震えているように見える。

そんなプリンツの方を見ると、女性は一瞬目を見開いて、次の瞬間、満面の笑みを浮かべた。

「アーハハ！ 見違えた、すっかり立派になったね、『ゲルダ』！」

「ゲルダ？」

「……まさか、艦娘になる前の名前かしら？」

「昔の知り合いつてことか……？」

当然、艦娘も元は人。艦娘になる前の人としての名前がある。

磯風のように艦娘になるまで名前を与えられなかった者や、記憶喪失で思い出せない大和のような者もいるが、基本、艦娘はその二つの名前を持って生きているのだ。

そして、プリンツの真名を知っているということは少なからず彼女と深い関わりのある人物には違いないのである。

「プリンツ、誰なんだよ、そいつ」

「アルマ姉様……」

「アルマ、姉様？」

「嬉しいな、ゲルダ。まだ私のことを姉様と呼んでくれるんだね」

「あの、少しよろしいですか?」

提督が物陰から出てきてアルマと呼ばれた女性の前に立つ。

彼女は穏やかな笑みのまま、目線を提督に移した。

「ええ、なんででしょう」

「困ります。ここは一般人立ち入り禁止です。プリンツのお身内と愚考致しますが、一体どちら様で、どのようなご用件で来訪なされたのかまずは聞かせてください」

「……ああ、そうだね。ここではプリンツ・オイゲンだったね。ごめんね、姉さん少しはしゃいでしまって、つい」

アルマはプリンツに謝罪するようにそう語りかけると、再び提督に向き直ると、懐から名刺を取り出し、それを両手で差し出しながら営業スマイルを浮かべ続ける。

「お初ト初ラにイにお目ゲにかンかりアますレ。私ス、『Traシgenッnalピesン Shグippカingニ Coバmニpany』兵器運送部部長を務めております、アルマ・トラージェンアレスと申します。以後お見知りおきを」

「え、は、はあ……」

名刺を受取り混乱気味の提督にアルマはまくしたてるように続ける。

「かねてより、私の義妹であるゲルダ——失礼、プリンツ・オイゲンがお世話になっております。本来であればもっと早くにご挨拶に伺うべき所ではございますが、生憎と機会に恵まれず、遅れたご挨拶となってしまうこと心よりお詫び申し上げます。お詫びと言ってはなんですが、我が社の商品をお買い上げいただく際には可能な限り勉強させていただきます所存ですので何卒今後ともよろしくお願い致します。あ、ポストに当社のカタログなど勝手ながら投函させていただきますましたので、注文の際には後ほどお電話かメールにてご連絡ください。そうですね、私のおすすめは——」

「ちよ、ちよつと! ちよつと一旦待つてください!」

「はい、なんででしょうか!」

「終わりの見えぬ営業トークに慌てて提督が止めに入る。

一方で、大和達は目の前のこのアルマという女性が果たして敵なのか味方なのか、依然判別がつかないこの状況に不安を募らせていた。しかし、このプリンツの怯えた反応を見る限り、およそ友好的な存在と考えるべきではないだろう。

互いにそのようにアイコンタクトを交わすと、ゆっくりとプリンツを囲んで守るように位置取りを変えた。

「今日は、一体、どのような要件でいらっしやったか聞いてもよろしいですか？」

「アーハハ、そうでした！ 私どうにも営業にばかり口が待ってしまって、肝心要を忘れていました。申し訳ありません」

「……………」

「単刀直入に申しますと、今日はプリンツ・オイゲンを引き取りに参りました」

その言葉を聞いた瞬間、提督が三步後ろに下がり、プリンツの盾になるように立つ。

大和達も、プリンツの包围を更に固める。

「まあ、そう警戒なさらず。勿論タダでは言いません。そちらの言い値で買い取らせていただくのは如何でしょう？」

「馬鹿なことを言わないでください。お金の問題ではないんです」

「…………ああ、戦力のことですか！ ご安心ください、当社は艦娘の斡旋も行っておりますので、プリンツ・オイゲンの抜けた穴を埋めるだけの艦娘をこちらで無償補填させていただきます」

「そういう問題でもありません。如何なる条件を提示されようとお渡しできないと言っているんです」

「提督……………」

怒声混じりの提督の言葉にアルマは腕を組んで逡巡した後、大きく溜息をつく。

「そうですか、できればビジネスの範囲で平和的に解決したかったのですが」

「トラーゲンアレス社、ドイツの大手海運会社でしたね。それにプリ

ンツの身内でもあると仰った。ならば全て知っているということでしょう。であれば絶対に渡せません」

提督のその言葉を聞いた瞬間、今まで浮かべていた営業スマイルが嘘のように掻き消え、能面のような無表情が現れる。

あまりの急変に、提督だけでなく、傍から見ているだけの大和達でさえ背筋が凍った。

「へえ、その口ぶり、提督もご存じということですか。もしかして、そちらの艦娘達もですか？」

「いいえ、私だけです」

「ああ、それは良かった！　口封じはあなただけで十分というわけですー！」

「おい、ウチの提督に何する気だ」

「お話を戻しましょうか。プリンツ・オイゲンをどうかお引き渡しください。これが最後のお願いです。ここで承諾いただけなければ、こちらとしても少々アプローチを変えねばなりません」

「テメエ、無視すんな！」

天龍の言葉を一切無視し、アルマは提督の返答を待つ。

「それは、脅しですか？」

「いいえ、脅しはこれからです」

次の瞬間、近くで爆発音が鳴り響き、建物が揺れた。

「一体何事だよ!？」

「爆撃を受けてる……!？」

「既にこの鎮守府は当社の私兵社員で包囲致しました。これ以上、要求を拒否し続けるのであれば、この鎮守府に空爆を仕掛けます。今は脅迫の段階ですので無人区域を狙いましたが、本番ではここを更地にします」

その言葉に全員が戦慄した。

自分達が空襲を受けるのはまだいい。だが、今この鎮守府には美海がいる。

彼女を危険に曝すわけにはいかない。

提督の表情に明らかかな焦りが浮かび、それにアルマが勝利を確信し

た笑みを浮かべた瞬間、食堂になだれ込むように何者かが飛び込んできた。

「アルマさん！」

「え、バイト勇者君……!?!」

「おや、よくここがわかったね」

「話が違うつす……手荒な真似はしないって約束だった筈つす」

「私はそうしたくはなかったんだけどね、提督が頑固なものだからねえ」

唾然とする大和達に気付いたアルマは悪戯っぽい笑みを浮かべると、バイト勇者の横に並び立ち、彼の肩に手を回す。

「この子はウチの私兵社員の一人です。プリンツ・オイゲンの監視役として七丈島に潜入してもらってましたんですよ。ねえ？」

「……………つ」

バイト勇者は大和達と視線を合わせないように目を伏せ、唇を噛んでいる。

「ていうか、バイト勇者って何？ ああ、そうか！ 聞き間違えられたんだね！ 『ベイト・ユースー』が空耳でバイト勇者になったのか！ ありえなさすぎて面白い！」

一人で大爆笑を始めるアルマ。

しかし、誰もかれもがこの状況についていけず、パニックになっていた。

アルマが数十秒笑い転げた後、再び彼女は提督の方に視線を向けて問いかける。

「さあ、決心はつきましたか？」

状況が切迫してきた。天龍が小声で瑞鳳に話しかける

（おい、瑞鳳！ お前の艦載機ってまだなのかよ!?! それさえ来てくれりゃ打開策になるんじゃないか?）

（……来ないのよ）

（はあ!? なんでだよ!）

（決まってるわ。撃ち落とされたのよ。多分、向こうにも艦娘がいる）
状況の打開を求めた先に待っていたのは更なる絶望的な推察。

「ああ、ついでに言わせてもらおうと、私を人質にするのは諦めた方がいいですよ。無策で敵陣に乗り込んでくるわけないじゃないですか。出てきていいよ、涼月」

「はい、アルマさん」

「更に新手の艦娘かよ……!」

食堂の扉からアルマ同様、白い髪をした儂げな雰囲気少女が入ってくる。

既に艤装を付けており、戦闘態勢に入っている。

「この子が私を護衛し、安全に逃がしてくれるから、空襲が始まっても私は大丈夫。あ、ベイトのことは完全に予想外だし自分でなんとかしてね」

「え」

「構いません、アルマさん。お二人とも涼月が守ります」

(……おい、磯風。あいつの気配はわかってたか?)

(残念だが、今の今まで全く気付かなかった)

磯風にすら気配を感知させない実力の持ち主。

明らかに格が違う。

全員でかかっても装備も不十分な状態では勝機は薄いだらう。

「さあ、それじゃ。待っても色好い返事はいただけないみたいだし、やっつけてしまいますかね」

「ま、待ってください!」

「だめ、もう遅い」

アルマがポケットからトランシーバーを取り出したその時、食堂に声が響き渡った。

「待って、アルマ姉様!」

「プリンツ!」

「何?」

「行きます。戻りますから、私。だから、ここの皆には手を出さないで」

「……………そう! 良かった! うん、私も本当はこんなことしたくなくてね。ゲルダがそう言ってくれるなら本当に助かるよ」

プリンツは顔を伏せたまま、大和達から離れ、アルマの元に歩いていく。

「お、おい、待てよ！」

「プリンツ、考え直せ！」

「くそ……何よ、なんなのよこの胸糞悪い展開」

「くっ……！」

「プリンツ！」

「天龍、磯風、瑞鳳、矢矧、お姉さま——いや、大和。ごめん、私、さよならだ」

胸が締め付けられ思いだった。

プリンツからお姉さまではなく、大和と呼ばれる。それが何を意味するのか。

それを考えただけで、血が沸騰しそうなくらい熱くなり、眩暈がする。

大和は思わず両手で顔を覆ってしまう。

「……………」

「提督、ありがとう。こんな私を最後まで守ってくれて。こんな私をあなたの艦娘にしてくれて」

「プリンツ、私は……」

「みんな、今までありがとう。大好きだよ！」

プリンツの苦しそうな笑顔がかえって大和達の心を折った。

もう誰も彼女を止める声をあげることができず、ただその行く末を見守るだけであった。

「うん、いいお別れだ。姉さん涙が出そうだよ」

「どの口が……！」

殺気立った天龍の前に立ちふさがるかのように涼月が動く。

目が血走って怒りに震える天龍だったが、それでも無策で攻撃をしかけるようなことはしなかった。

「それじゃあ、もう日付も変わりそうだしお暇しようかな。ああ、そこに縛り上げている私兵の処分はお任せします。所詮二束三文で雇った傭兵崩れですのぞ」

「……………本当にすみません」

悠々とプリンツを連れて去っていくアルマ達。

最後に出て行ったベイトが悲痛な声でそう呟いたのが鈴の音と共に聞こえた。

それから、どれだけの時間が経ったのか。

誰も立ち尽くしたまま動けなかった。

やがて、食堂の振り子時計が12時の鐘を打った音が鳴り響くと、パンと乾いた音が響く。

見れば、矢矧が大きく手を叩いた音だった。

「……………今は、私達にできることはなにもない。とりあえず休みましよう」

「今からでも取り返しに！」

「馬鹿、まだ包囲解かれてなかったらどうすんのよ。美海を危険に曝す気？」

「でも、でもよおー！」

「今は美海の安全が第一よ。プリンツだってそう考えたからこそああいう行動を取ったの。それを私達が台無しにしちゃいけない」

瑞鳳のその台詞で、磯風、天龍、矢矧は食堂を出て行った。

「大和」

「はい……………」

「提督も、こういう時はあんたが一番しつかりしなきゃでしょ」
「すみません、情けない姿を見せてしまいました」

「……………仕方ないわ」

そうして、全員が自分の部屋に戻り、眠りに落ちた。

目が覚めたら、全部ただの悪い夢で終わることを願いながら。

第一百十六話「待っててください……すぐに迎えに行きます！」

TASC（トラージェンアレス・シッピング・カンパニー）による七丈島襲撃事件から数日前。

横須賀鎮守府。

第一作戦会議室。通称『虎の間』。

「皆、よくぞ集まった」

薄暗い室内、元帥は円卓に座る四人とそれぞれの後ろに控える補佐艦にそう言った。

「……いえ」

「いえ、閣下からの緊急のお呼び出しとあらば馳せ参じぬ理由がありません」と提督は仰っています」

そう短く返答した漆黒の鬼を模した鉄仮面を装着した男性は、ブイン基地の白鯨大将。

その背後から彼の言葉を再度伝え直すのは補佐艦の吹雪である。

「はっはっは、気にすることはないぞ、元帥。私は基本やることなくて暇だからな！」

「提督、閣下に対しそのような態度はいささかフランク過ぎるか」と

「そうです！ ちょっとだけいけませんよ！」

豪快な笑い声をあげる黒髪の凛々しい女性と、それを嗜めるアツシユブロンドと銀髪の少女達。

呉鎮守府の亀有大将と補佐艦の香取、鹿島である。

「手短に済ませろジジイ。その根暗やゴリラ女と違って俺は暇じゃねえんでな」

「すみませんっ！ ウチのデブがほんつとにすみません！」

軍服がはちきれそうな程大柄で恰幅の良い、熊のような男性。

舞鶴鎮守府の姥鮫大将である。

後ろで何度も頭を下げているのは補佐艦の山城である。

「相変わらず胸焼けしそうな濃いメンツだぜー、海老名ちゃんもう帰りたくなってきたわ！ 帰っていいかな？」

「駄目です」

そして、へらへらと笑いながら軽口を叩いている女性は、佐世保鎮守府の海老名大将、その軽口を笑顔で叩き斬るのは補佐艦の鳳翔である。

「うむ、では早速本題に入る。緊急で四大将である諸君に集まってもらったということは、それだけの案件が舞い込んできたわけじゃ——神通」

「はい」

元帥に呼ばれ、部屋の隅の闇から浮き上がるように音もなく現れた神通は、円卓に内蔵されたディスプレイを起動させる。

すぐに大将達の目の前の液晶画面に緊急案件の概要が映し出された。

瞬間、室内の空気が一気に張りつめる。

「……………成程」

「これはこれは、中々に大変な事態だな」

「こりゃ、俺ら集めるだけの緊急案件だわ、確かに」

「はあ!? え、ちよ、これマジ!? はあ!？」

最も取り乱したのは海老名であった。

「嘘でしょ!? あのドイツが壊滅の危機って!? ええ!？」

液晶画面に映し出されたファイルの見出しには、『ドイツ壊滅阻止を目的とする遠征艦隊の緊急編成』と書かれていた。

「いささか信じられぬが、事実じゃ。つい昨日、国家機密回線にて救援を乞う旨の連絡があった。余程状況が切迫していると見える」

「あの艦娘大国のドイツがそうそう壊滅させられるかねえ……畏じゃねえの?」

姥鮫提督は眉をひそめながらその太い腕で窮屈そうに肩肘を付いて言った。

「一応、衛星画像で状況を確認したが、どうやら事実のようじゃ」

「深海棲艦はどんな大群で押し寄せているのだ? 数千か? あるい

は数万か？」

今度は亀有大将からの質問に元帥は一度間をあけると、重々しく口を開いた。

「一隻じゃ」

「は？」

「なんだと？」

「む……」

「ええええ!!? そりやないでしょ!? あの鉄血大国がたった一隻の深海棲艦に何がどうなつて滅ぼされかけてるわけ!!?」

ドイツ。日本、アメリカ、イギリスと並ぶ艦娘大国にして、現在世界一の軍事国家である。

艦娘技術の着手については日本に遅れをとったものの、艦娘の能力を最大限発揮させる優れたドクトリンや艦娘関連技術の開発と改良により、今や日本と同等の深海棲艦制圧力を誇る大国となった。

現在衰退気味のイギリスや、依然発展途上のイタリアを鑑みれば、今の欧州はドイツによって深海棲艦の侵略から守られていると言っても過言ではない。

そんな国がたった一隻の深海棲艦によって壊滅の危機に瀕していると言うのだから面食らうのも仕方がない。

「ドイツはその深海棲艦を『魔女』^{H E X}と呼称しておったわ」

「魔女……」

「そこで、我々に魔女狩りを手伝えと？」

「そういうことじゃな」

「で、実際どうすんだよ、遠征艦隊つてのにはどれくらい出すつもりなんだ？」

姥鮫大将の疑問に答えるかのごとく画面が切り替わる。

「六隻、プラスでさらに二隻ほどかの」

「はあ!?! おいおい、そりやあんまりだろ。近場の海に遊びに行くんじゃねえんだぜ?」

「最低でも十二隻の連合艦隊が四つは欲しいところだ」

「……………」

「うーん？ 何か理由がおありなんですかあ？」

元帥は頷くと、声のトーンを若干低くしながら言った。

「この件、裏で鎬木美鈴が動いている可能性がある」

「鎬木、美鈴……」

「あ？ 誰だそりゃ」

「国家反逆罪を犯した大罪人だよ、一応大将なんだから知っておきなよそれくらいさー」

「うるせえ牛」

「どういう意味だコラあ!？」

「とにかく、この『魔女』が、ワルキューレ計画の完成品ではないかと僕は睨んでおる」

ワルキューレ計画。軍の上層部の一部の人間のみがその詳細を知るところを許されている現在は完全凍結された機密計画。

四大将は内容を知ることのできる一部に含まれている。

「第三世代艦娘『ワルキューレ』か……『魔女』とやらがそれだど？」
「僕は、たった一隻でドイツを陥落させうるだけの個体を深海棲艦に知らぬ」

「そんなヤバイ奴ならますます六隻だけとかマズイと海老名ちゃんは思うわけなんですけれど」

「……逆だ」

「ん？」

「それだけの強大な相手だとすれば、逆にドイツに大艦隊を送り込む方がリスクだということか」

ドイツまでの道のりは過酷だ。

大艦隊で動くとなれば、それだけの食糧、水やら弾薬、燃料やら大荷物になっていく。

大荷物の長旅は疲弊をもたらす。

いざドイツに到着し、『魔女』と戦うとして、長旅の後、土地勘も働かぬ地の大艦隊は果たして万全と言える状態なのか。

そして、単騎でドイツを攻め落としかねない程の怪物に対して、万全でない大艦隊を当てることは許されるのか。

答えは否である。

返り討ちにされ、優秀な艦娘が多大に犠牲になれば、国の深海棲艦に対する防御力の低下に直結する。

「お前達にははつきり言っておこう。最悪の場合、ドイツは見捨てる」「そんなのって!」

「魔女ってやつがドイツを単騎で滅ぼせるなら、こっちも本気で潰さなきゃならねえ。そうするためには、こっちのホームグラウンドで叩くのが一番だろうが。わざわざドイツくんだけ行行って戦うメリツトがねえって話だ」

「向かわせる六隻はドイツへの義理立てか?」

元帥は首を振る。

「それもあるが、少し違う。主には魔女とやらの情報収集が目的じゃ」「ドイツが滅ぼされたら次は俺らかもしれないねえもんな? せいぜいドイツ様の犠牲を無駄にしねえようってわけだ」

「……理には適っている」

「でも冷たいよ……海老名ちゃんはこういうの好きじゃないな」

「なんと言われようが、儂は日本の海軍元帥。ドイツよりも、この国の方が惜しい」

そこで一同は沈黙する。

それから数十秒の後、海老名が口を開いた。

「……それで、六隻の編成はどうやって決めるんです?」

「儂の横須賀から二隻出そう。残り四隻はおぬしらの艦隊から一隻ずつ寄せせ」

「少数精鋭の混成艦隊か。小回りと艦隊の機動力を重視し、情報収集能力と生存確率をなるべく上げると同時に、万が一全滅しても被害は少なくて済むってわけだ」

「いちいち説明してくれなくても結構だよ、イラつくなあ」

「……選択基準は、死亡しても戦力が大きく削がれない程度に優秀な人材、か」

「死んでもいい優秀な者とは、矛盾したような選定基準だな」

「……各々抜擢する艦が決まった者から言え」

また、沈黙が流れた。

そう容易く決められるようなことではない。選出にそもそも心理的な抵抗もある。

しかし、そういった残酷な決断は、この地位まで上り詰めたこの場の面々は悲しいほどに慣れ過ぎていた。

加えて、こういった場合の決断の速度がそのまま艦隊の生死に直結するということを身を持って知っていた。

故に、沈黙はまたも数秒で終わった。

「おし、山城。お前行ってこい」

「はあ!? 私ですか!? 私死んでもいいって思われてたんですか!? ああ不幸ー!」

「まあ、お前確かに運悪いけど、悪運は強えからなんとかかなんだろ」「もうちよつとマシなフォローしなさいよ!」

最初に声を挙げたのは姥鮫提督。

舞鶴からは山城が選抜された。

「……吹雪、頼む」

「私、司令官からそんな風に思われてたんですね! 悲しいなあ!」

「いや、そうではなくてだな……その……」

「ふふ、冗談です。私はどんな怪物からもちやんと生きて帰ってこれるって信じてくれてるんですよね? ご期待に応えますよ」

「……なら、いい」

ブイン基地からは吹雪が選抜。

「ふむ、そうだな。ウチからは阿武隈を出してみるか」

「大丈夫でしょうか……」

「なんなら私でも……」

「いや、そろそろあいつも修羅場の一つは潜ってもいい頃合いだ。何、心配はいらない。阿武隈は強い子だ」

呉鎮守府からは阿武隈が選抜。

「……くそが」

「提督、お悩みなのですか?」

「……いや、本当はさ。死んでもいい優秀な艦娘って言われた瞬間に

もう答え出た」

「提督……」

「本つ当に、自分が嫌になるわ、マジで。勝手に頭の中で損得勘定始まつちやあってさ、感情なんかどっつかいっちゃって、機械みたいに作戦内容と艦娘の能力値照らし合わせて最適解を最短で出そうとするんだよね」

「それでいいんですよ。だから私達は今日まで生き残ってこれたんです」

「……ごめん、ウチからは『この子』を出すよ」

こうして、横須賀から二隻、各大将から一隻ずつ艦娘が選出され、ここに遠征艦隊が結成された。

☆

プリンツがTASCのアルマ・トラージェンアレスと名乗る白人女性に連れ去られてから一夜が明けた。

七丈島鎮守府の食堂には目の下にクマを作った面々が無言で座っていた。

「皆、酷い顔ですよ」

「お前が言うな」

「大和が一番酷い顔してるぞ」

「ごめん、一日考えたんだけど……何もいい案出てこなかったわ。軍神が聞いて呆れるわ」

「仕方ないわ。一応あの後艦載機飛ばしてみたけど、見失った。追いかけてようにも手詰まりよ」

黙っていても気分がますます沈むばかりだと口を開いても、結局絶望的な現実を突きつけられただけであった。

再び、食堂内を沈黙が包み込んだところで食堂の扉が開き、提督が入ってきた。

彼もまた眼鏡の下に深いクマを隠している。

「……すみません、突然なのですがこれから神通さんがこちらに来るらしいです」

「神通？ 横須賀の？」

「ええ、昨夜のことを報告しようと連絡したのですが、何か話があるよ
うで」

「何かしら?」

「この状況の打開策だといいが」

「……待つしかないわね、そう信じて」

神通の来訪。

それを遅めの朝食をとりながら待つこと一時間。

来客を告げるインターホンが鳴り、提督と矢矧が出ていき、少しし
て神通を伴ってまた食堂に帰ってきた。

「お久しぶりです」

「おう、話ってなんなんだ?」

「プリンツさんの誘拐と関係のある話かと思えます」

「今は少しでも情報が欲しいわ。さっさと話して」

「その前に、もう一度確認させてください。昨夜の襲撃者はTASC
のアルマ・トラージェンアレスで間違いないんですね?」

寝不足も相まって、冗長な再確認に半ば苛立ちながら頷く七丈島鎮
守府の面々を見て、神通は頷くと、一緒に持ってきた鞆から資料の束
を取り出し、テーブル上に広げた。

「実は、現在ドイツは『魔女』^{HEx}と呼ばれる一隻の深海棲艦らしき敵に
よって壊滅の危機に瀕しています」

「はあ!?!」

「それは、本当なんですか……?」

突然の衝撃事実に驚愕の声が重なり、食堂内に反響した。

「ドイツ軍から日本に公式に救援要請がありました。ですが、流石は
ドイツ軍。やることなすこと徹底的と言いますか、抜け目が無いと言
いますか……」

「あ? 話が見えてこねえぞ、どういふことなんだよ!」

天龍の罵声を両手で制し、静かに神通は続けた。

「慌てずに、順序立ててお話ししましょう。まずドイツという国の話か
ら。ドイツは今や世界一の軍事国家です。最大の特徴としては深海
棲艦との戦争に一般企業の参入が許されていることでしょう」

「一般企業？」

「つまりは、企業が艦娘を雇い、深海棲艦を討伐することを許しているのです。あるいは、企業で開発した兵装を直接売り込むこともあります。中には軍とパートナーシップ契約を結んでいる企業もあります」
「なにそれ……」

深海棲艦と戦うのは艦娘である。

もっと大きく言えば、海軍である。

海軍のみが艦娘を配備し、運用する権限を持つ。それが日本におけるルールだ。

艦娘関連の技術も一般企業ではなく、軍直轄の工場からのみ生み出される。

その常識から、日本とドイツは違っているのである。

「中でもTASCは、戦前はドイツの中小海運会社でしたが、開戦以来、特に軍事方面に注力し、海軍とのパートナーシップ契約を最も早く締結した今や国内有数の大企業です。事業内容は兵器の運送、卸売、それと傭兵派遣を主としているようです」

「そんな大企業がなんでプリントを？」

「ドイツが『魔女』により壊滅の危機に曝され、軍がとった対策は世界最強と称される我が日本海軍への救援要請が一つ」

「一つ？」

「一の矢に慢心せず、二の矢を用意していたということですよ」

「その二の矢が、TASCだと？」

顎に手を当てて矢矧が神通にそう尋ねると、神通は相変わらず張り付いたような笑みを浮かべながら拍手を送った。

「流石矢矧さん、お話が早い」

「どういうことだよ」

「ドイツ海軍は国内の企業にも『魔女』に対する打開策を求めているんですよ。そこで手を挙げたのがTASCです」

「TASCには『魔女』をどうにかする策が何かあるということか」

「そして、それにプリントが関わっている、そういうことね？」

「はい、提督さんから事の次第を聞いて、私はそう考えています」

「確かに、プリンツを誘拐しに来たタイミング的に辻褄は合うけれど……」

「ところで神通は何故そんなに向こうの事情に詳しいんだ？」

「ああ、軍部にスパイを潜り込ませているんですよ。これくらいはこの国もやっていることでしょうが」

「なんだかブラックな世界の一面を覗いた気がするぞ……」

プリンツが、ドイツを単騎で壊滅に追い込む化物を打倒する鍵になっっている可能性。

その事実にも誰もが困惑に包まれる中、提督だけが一人眼鏡の奥の瞳に確信の色を覗かせていた。

そして、それを見逃す神通でもなかった。

「電話でお話を伺った時感じましたが、提督さんはもしかして何かご存じなのでは？」

「……………」

「提督？ そうなのですか？」

「確かに昨日もなんか知ってるようなこと言ってたよなあ？」

「隠し事してたのね」

「提督、どうなんだ？」

「……提督、プリンツと今回の件について知っていることがあるのならどうか教えてください」

艦娘達に迫られ、提督も観念したように溜息を吐き、諸手を挙げた。

「わかりました。こんな状況になってしまいましたし、隠しておく方が良くないでしょうし、知っていることは全てお話します。ただ、その前にまずは神通さんのお話の方から終わらせましょう」

「お気遣いありがとうございます。では、ここまでお話したところでようやく本題に移ります。皆さん、プリンツさんを奪還する気は当然ありますよね？」

「当たり前だ！」

神通の質問に天龍が大声をあげた。

それに対し、満足げに頷き、神通はさらに続ける。

「TASCの輸送船は光学迷彩が搭載されているらしく、今から追跡

するのは不可能でしょう。しかし、最終目的地は容易く推測できますよね？」

『魔女』の打開策のためにプリンツを攫ったのなら、あとは戻るだけ。つまりは、ドイツに……!」

「そして、私達は現在、ドイツ軍からの救援に応え、遠征艦隊を編成中です。そこにあと二隻分、枠が残っています。いかがですか？ 参加する気はありませんか？」

プリンツを攫ったTASCの行先はドイツ。

そして、丁度ドイツへ向かう遠征艦隊の枠が二隻空いているという。

プリンツ奪還には絶好の機会であり、これを逃す手はないだろう。

ここに来て初めて七丈島艦隊の面々に笑顔が戻った。

「おお、いける！ いけるぞ！」

「ようやく希望が見えてきましたね！」

「それで、誰が行くんだ？」

「枠は二つ、か」

「選ばなくちゃならないわね」

そこで一度静寂が七丈島艦隊を包んだ。

誰もが自分がと名乗り出たい。しかし、そんな我儘を通していい状況でもないこともわかっている。

それ故に、誰もが口火を切れずにいた。

そんな彼女達を見て、神通が手を挙げた。

「こちらとしては矢矧さんと天龍さんを希望します」

「……っ！」

「理由を聞いていいかしら？」

「単純に戦力的な理由です。軍神と元O.C.E.A.Nランキング9位の戦力は貴重ですので」

神通の意見は驚くほどシンプルな正論に違いなく、天龍も矢矧も反論はしなかった。

磯風や瑞鳳もそれに納得するように小さく頷いている。

しかし、ただ一人、大和だけが異を唱えるように手を挙げた。

「どうしました、大和さん？」

「あの……私に行かせてもらえませんか？」

「なんですって？」

瑞鳳が声をあげ、他の面々も大和を驚愕混じりに見つめている。

神通は溜息をついて頭を掻いていた。

「大和さん。ご自分がどういう状態なのかは理解していますよね？」

「はい、確かに私は砲撃ができません」

「ドイツでは激しい戦いが予想されます。厳しいことを言わせてもらいますが、大和さんにできることはないかと思えます。お気持ちはわかりますが、本当にプリンツさんを助けたいと思うのなら、より適任の方に譲るべきではないですか？」

レバーブローを食らったかのような衝撃を覚える程に厳しい言葉が大和に降り注いだ。

それでも、顔をひきつらせながらも、大和は引かなかった。

「私は撃てません！ でも、戦えない訳じゃないです！ どうか、私に行かせてもらえませんか!？」

「……大和さん、あのですね——」

「いいんじゃないか？」

「いいんじゃないかしら」

若干苛立ち交じりに反論しようとした神通の言葉を切ったのは天龍と矢矧の声だった。

二人とも笑って大和の方を見つめている。

「そうだな、確かに、お姉さまとしてお前が迎えに行っていくのが筋だ」

「私達の誰よりもスタミナあるからドイツまでの長旅での疲弊も少ないだろうし、案外一番戦力になるのは大和かもしれないわね」

「……撃てないのに本当に行くんですか？ 私、これでもあなたのためを思って忠告しているんですよ？」

「撃てはしませんが、私は戦えます！」

大和のその気迫に多少たじろいだ様子の神通は数秒逡巡し、一際大きなため息をついた。

「わかりました。そこまで言うのなら、天龍さんか矢矧さんのどちらかと入れ替わりで——」

「待った、大和が行くなら私も出るわ」

「瑞鳳!？」

「ああ、もう、次から次へと」

今度は瑞鳳が手をあげた。

神通は最早やってられないといった感じに片手で頭を押さええている。

「何よ神通、空母は何隻いたっていいでしょ？」

「まあ、それはそうですが、なんで突然……」

「大和のフォローと戦闘、同時に並行処理できるのは索敵、攻撃が広範囲な空母が適任でしょう?」

大和のフォローに回れば、その艦娘は常時大和につきつきりになり、行動が制限される。しかし、空母ならば艦載機を使って遠隔からフォローができる。

瑞鳳の意見に対し、神通は自分の希望した矢矧と天龍が両方入らない点について不満があるような様子ではあったが、ついに反論はせず同意を示した。

「確かに、大和さんが入るということならば天龍さんや矢矧さんよりも瑞鳳さんが適任かもしれませんね……わかりました、それで結構です」

「なあ、別にいいんだが、なんで私が駄目なのかだけ聞いていいか?」
「磯風はそもそもスタミナ不足でドイツまでの長旅に耐えられそうにないもの」

「むう……この課題は早急に克服せねばな」

こうして話はまとまった。

ドイツ遠征艦隊には大和と瑞鳳の二隻が七丈島から参加することが決定した。

目的はただ一つ。TASCからのプリンツの奪還。

「三日後の早朝6:00に佐世保港から出港予定です。準備を整え、遅れることのないよう願います」

最後にそれだけ言い残し、神通は颯爽と帰って行った。

「海老名ちゃん提督のところか、俺らも見送り行くぜ」

「あまり時間はないからすぐに準備に取り掛かりましょう」

「私も二人のためにお弁当を作ろう」

「あ、気持ちだけで十分です」

「よし、くよくよするのはもうおしまい！ ビシバシ動くわよ！」

「皆さん、特に大和と瑞鳳。今回はこれまで以上に厳しい戦いになる

かもしれません。気を引き締めてかかりましょう！」

全員で円陣を組み、手を合わせる。

必ずプリントを連れて帰る。

そして、皆で過ごす七丈島での日常を取り戻す。

全員がその想いに統一されていた。

「待っててください……すぐに迎えに行きます！」

大和の瞳は、これまでになく燃えていた。

第百十七話 「弱すぎるッ！」

「ゲルダ〜——あ、今はプリンツか。どう？ 私の用意したV I P 船室は？」

「……うん、快適です、アルマ姉さま。常に怖い見張り役の人がいる以外は」

船室の扉を蹴り開けながら入ってきたアルマは両手にバニラアイスの乗ったグラスを持ってプリンツの目の前に歩み寄る。

プリンツはそんなアルマの背中越しに視線を動かし、銃を持って入口付近に立つ見張り役のバイト勇者改め、バイト・ユースーサーを見やりながら答えた。

バイトの方は、それに対し、目を逸らして俯くことで答えた。

「アーハハ！ それは本当にごめん！ でもプリンツは大事な大事な私の可愛い商品妹だからね、何かあったらすぐに駆けつけられるようにしたいんだよねー。それに——」

アルマの目がゆっくりと細められる。

「——いつ心変わりして脱走されちゃうかもわからないしね？」

「……しませんよ、そんなこと。艀装も七丈島に置いてきたし、海の上じゃどうしようもないもん」

数秒、無言の時間が流れる。

その間、まるで獲物を品定めするかのようにな表情でプリンツを凝視していたアルマは一転して再びおちやらけた笑顔に戻る。

「ま、そうだよねー！ さ、それよか姉さんと一緒にアイス食べよ！ さつきキッチンからくすねてきたんだー！」

「はい、ありがとうございます、アルマ姉さま」

アルマの差し出したアイスを両手で受け取りながらプリンツも笑顔を返した。

「ん〜！ 美味しい！ 頭痛い！ アイスクリーム頭痛すごっ！」

「あはは、そんなに急いで食べるからですよ」

隣で感情豊かにアイスを食べるアルマに苦笑しながら改めてプリンツは思う。

この人は苦手だ、と。

単純そうに見えてその実、心の奥底で何を考えているかまるでわからない。

優しくしてくれるのに、明るく話しかけてくれるのに、彼女と一緒にいると悪寒がする。

「アルマ姉さま、質問してもいいですか？」

「んー、何ー？」

「何で今更私を連れ戻しに来たんですか？」

「そりゃ、プリンツが必要になったからに決まってるでしょ。その質問、意味ある？」

若干怪訝な表情を見せるアルマに更にプリンツは質問を重ねた。

「何で必要になったんですか？」

「いやー、今我らが母国が滅びかけててねえ」

「……え？」

「いや、事実なんだわ、これがさー！　ほんと笑えないよねえ、しつかりしろよ海軍って感じ」

まるで他人事のように軽い口調で話すアルマに一瞬、プリンツには彼女の言葉が呑み込めなかった。

「つまり、プリンツはドイツを救う希望なんだよ！　ほら、もつと喜んでくれていいんだよ？　よっ、我らが最後の希望、プリンツ・オイゲン！」

「な、何を言ってるんですか！　いくらなんでも私一人にドイツを助けるなんてことできないに決まってるじゃないですか！」

「いやいや、それがそうでもないんだよ。何せ今ドイツを崩壊させんとしている敵はたった一隻だけなんだからね」

「たった一隻……？」

「そう、『魔女』って呼ばれているその敵一隻を倒すだけでドイツは守られる。そしてプリンツは英雄になれる！　ついでに私の会社もますます軍に優位に立って商売できる！　ほら、めっちゃお得じゃない

？　Win—Winじゃない？」

「……………」

「あれ、お気に召さなかつた？　じゃあこれ聞いたら少しはやる気だしてくれるかな？」

アルマは体を寄せてプリンツの耳元に口を近づける。

「今、ドイツを襲っている『魔女』の正体は——」

その言葉を聞き、プリンツの顔が真っ青に青ざめ、その手から食べかけのアイスクリームが残ったグラスが床に滑り落ちていった。

ガラスの碎ける音が室内に鳴り響くがそんなことは意にも介さず、アルマは蛇のように放心状態のプリンツの身体に腕を絡ませて抱き寄せる。

「ゲルダ、これは私達がやらなくちゃいけないことだと思わない？」

「そんな……嘘……」

プリンツの手は衣服の下に隠した胸元のロザリオを強く握りしめていた。

☆

神通が七丈島鎮守府に来てから三日後。

七丈島艦隊と提督は佐世保港へ来ていた。

「先輩！　先輩じゃないですか！　お元気でしたか、先輩！　さあ、いつものように再会のハグを、さあ！」

「海老名、私がるまるであなたと毎回ハグを交わしているかのような言い方はやめてください、ぶっ飛ばしますよ」

「先輩がいつになく暴力的だ！　だが、それもいい！」

「海老名大将、お話を進めてもよろしいですか？」

笑顔で、かつ敬語ではあるが、明らかに怒気の籠ったそれは海老名と提督の会話を中断させ、背筋を伸ばさせるには十分な効果を発揮した。

「お、おほん！　あー、先輩、そして七丈島艦隊の皆もお元気そうでなにより！　ようこそ佐世保鎮守府へ、私達は君達の来航を心より歓迎するよ！」

「遠征艦隊の準備はどうなっていますか？」

「既に皆集まっています。正直言ってあの艦隊マジぱねえ。単騎でもヤバイ奴らが六隻も集まるんだからこれすなわちマジヤバイ」

「全然詳細が伝わってきませんね」

「ふわっとしてるな」

「ヤバいことだけは伝わったけどね」

テンパリ気味の海老名にその後も『ヤバい』が六割を占める説明を聞きながらドックに連れられていく面々。

途中、見知った顔が目の中の扉から出てくるのが見えた。

それに磯風が思わず声をあげる。

「ゴーヤ！ 久しぶりだな！」

「おお、磯風じゃないでちか！ とうか七丈島艦隊全員お揃いでどうしたでち？」

磯風の声に反応し駆け寄ってくる伊58。その両手には重そうなドラム缶が抱えられている。

彼女の逞しい成長に喜びと一抹の不安を感じつつ、とりあえず一同は再会を喜び合った。

「あー、ゴーヤには話してなかったねえ、オリヨクル行ってたし。今日の遠征艦隊に七丈島艦隊からも二隻参加するんよ」

「え、誰が行くんでちか!？」

「私と瑞鳳です」

「……必ず生きて帰ってくるでちよ。ドイツはきつとオリヨクルの数は倍は過酷でち」

「はい、勿論必ず帰ってきます!」

「滅びかけてるドイツが数倍換算で済むとはオリヨクルもかなりの過酷さのようだな」

「俺はでち公の方も心配になつてきたぜ」

「ゴーヤこそ死ぬんじゃないわよ!」

何故か互いに励まし合いながら伊58と別れ、やがて一同はドックに辿り着いた。

「さ、中入っちゃって! もう出港時刻まで猶予ないからね、顔合わせくらい済ませとかないと!」

促されるまま中に入った七丈島艦隊は、そこに佇む艦娘達と正面から相對することとなった。

「——ほう、お前らが俺の艦隊に参加する最後の二隻か」

ドスの利いた声と同時に大和の目の前に眼帯の艦娘が目の前まで迫ってきた。

少し小柄なのか、大和と大分身身長差があるせいで彼女が見上げる形ではあるが、その鋭い眼光は大和に体躯の小ささを感じさせないプレッシャーを与えた。

「俺の名は木曾、横須賀鎮守府第一艦隊所属だ。この遠征艦隊の旗艦を預かる、よろしくな」

「七丈島鎮守府の大和です、よろしくお願いします……!」

手を差し伸べられ、自己紹介をしながら大和も手を伸ばす。

しかし、握手をした瞬間、大和の視界は左に大きく回転し、骨身が軋むような衝撃が全身を走ったかと思えば、視界にはドツクの天井しか映っていないかった。

「お前が瑞鳳だな?」

「え? え? そうだけどって——ぎゃあああああ!」

間髪入れず瑞鳳の元に歩み寄り今度は強引に瑞鳳の手を掴んで同じように投げ飛ばして見せた。

瑞鳳は空中で数回転してドツクの硬い床に叩きつけられていた。

「てめえ! いきなり何しやが——」

「弱すぎるッ!」

天龍の怒声をかき消すような大音声がドツク全体を包み込んだ。

仰向け状態の大和を除く全員があまりの大声に耳を塞いだ。

「ここまで、お前以外の六人全員に同じことをやったが、ここまで綺麗にはつ倒されたのはお前らだけだ」

「う……」

「さっさと起きろ、愚図!」

「おい、さつきからいい加減にしろテメエ、何様のつもりだ!」

木曾が無理やり大和を起こそうとするのを見かねて、天龍が掴みかかろうと駆け寄る。

しかし、次の瞬間、天龍の視界から一瞬で木曾の姿が消えたかと思うと、天龍の顎の真下にサーベルが突きつけられていた。

「いつ抜いたんだよ……」

「騒ぐなよ、天龍。俺の艦隊の話だ。部外者はすつこんでろ」

そう言つて、サーベルを離し、腰の鞆に納めると木曾はよろよろと立ち上がる大和の方に向き直つた。

「ダメだ。お前、このまま七丈島帰れ」

「……………っ！」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ！ か弱いレディをいきなり投げ飛ばして帰れとか失礼にも程があるでしょ、あんた！」

「ああ？ ああ、瑞鳳お前は別にいいよ。俺は大和にだけ帰れと言つている」

「な、なんでよ!? 私大和以上に回された気がするけど!」

「……………お前、理由本当に聞きたいのか？ バレてねえとでも思つてんのか？」

「……………」

瑞鳳の沈黙に対し、機嫌悪そうに舌打ちをすると、木曾は再び大和に視線を戻した。

「ドイツには遊びに行くんじゃねえんだ。お荷物は御免だ、迷惑なんだよ」

「……………嫌です」

「ちやんと言わなくちゃわからねえか？ 俺の艦隊に新兵に毛が生えた程度の雑魚はいらねえつて言つてんだよ」

厳しい言葉が大和の胸を貫く。

それでも大和は木曾の目を真正面から見つめ返して言つた。

「お願いします、連れて行つてください！」

「駄目だ！」

「……………まあまあまあまああ！」

平行線の怒鳴り合いが大和と木曾の間で続こうとしたその時、割つて入ってきたのは橙色の髪をした少女であつた。

同じく遠征艦隊に参加する艦娘と見て間違いないだろう。

「木曾さん、そうあんまり怒鳴るのも良くないですよ！ 私の耳もさつきからキーンとして痛いです！」

「あん？ 阿武隈、お前、もしかして俺に命令してるのか？」

「違いまひゆー！ ごめんなさい！」

木曾に一睨みされた瞬間、目にもとまらぬ速さで土下座を繰り出す阿武隈。

助け舟かと思われたその余りにも迅速な沈没は周囲を落胆させる前に呆然とさせた。

しかし、それが呼び水ともなったのか、艦娘達数人の足音がドツクの奥から近づいてきた。

「まあ、その大和を連れていくかどうかは置いて、木曾さんの無駄な大声は確かに迷惑極まりないですね、出港前に既に不幸。え、なにこれ幸先悪いとかいうレベルじゃないでしょこれ……！」

「山城か」

爪を噛みながら卑屈に顔を歪ませるのは舞鶴鎮守府の山城。

「——諦めるんですか？」

「うわ!？」

いつの間にか背後に立ち、話しかけてきた少女に大和は驚いて飛び上がってしまう。

「ふふ、失礼しました。ブイン基地より参りました、吹雪です。どうぞよろしくお願いします」

「よ、よろしくお願いします」

「何か成し遂げたいことがあるのなら、絶対に諦めちゃダメですよ。諦めず進み続けさえすれば、必ず辿り着くことはできるんですから」

「は、はい！」

大和の返事に吹雪はにっこりと笑って答えた。

「木曾さん、ここは横須賀じゃないんですから、もう少し抑えられませんか？ 佐世保出禁になっちゃいますよ？」

「お前までこいつの味方すんのか、大鳳？」

「横須賀鎮守府第一艦隊所属の大鳳です。いきなりウチの木曾がご迷惑をおかけしてます」

「おい！ 大鳳！ 何勝手に頭下げてんだ、てめえ！」

慣れた様子で大和達にペコペコと頭を下げる大鳳。

明らかに風向きが変わってきていた。

そして、最後に、また見知った顔が大和達の前に現れた。

「私は、大和は戦力になると思うけどね!」

「川内……! 佐世保からはお前が出るのか!」

「おつひさ、磯風! 皆も! そうだよ、この夜戦マスターこと川内がドイツを救いにいっちゃうのよ!」

陽気にポーズを決めながら川内は木曾と大和の間に割って入り、立ちふさがった。

「……で、大和が戦力になるという根拠は?」

「木曾さんは犬見元提督のところにいた伊勢つて艦娘知ってる?」

「ああ? 確か何度か演習の相手してやったことあるな。まあ、チキンではあったがそこそこって感じの奴だったか」

「あれ、一騎討ちで倒してるよ、大和」

「……こいつが? 本当に?」

「え、と……はい、多分」

「多分だあ?」

「な、なんだったら鳳翔さんも確認してるよ!? 聞いてみる!」

顎に手を当てて数秒思考を巡らしていた様子の木曾ではあったが、溜息をついて頷いた。

「オーケー、鳳翔までそう言うんならそうなんだろうよ」

「あと少し前に陸軍の反乱あったじゃん」

「蜻蛉隊の事件か」

「あれの隊長のあきつ丸に致命傷与えたの大和なんだよね?」

「え、それはその……はい、一応」

「……………ふうん」

木曾の大和を見る目にほんの僅かではあるが興味が宿るのを川内は見逃さなかった。

「そりや木曾さんに比べたら全然だけどき! 連れて行ってみる価値はあると思うんだよねえ、ただでさえ人手少ないんだしき!」

「……………」

「それに、旅は多い方が楽しいし、頼もしいじゃん?」

「お前なあ……」

「お願いします！ 実力不足は重々承知です！ それでも、ドイツにどうしても行かなくちゃいけないんです！」

「何故そこまでしてドイツに行きたい？」

木曾が大和に尋ねる。

大和はその目を真っ直ぐに見つめ返して答えた。

「仲間を、^妹迎えに行かなくちゃならないんです……！」

「私情か」

「私情です！」

数秒の睨み合いが続いた。

川内が援護しようとして口を開きかけた瞬間、再びドックが大音声で溢れかえった。

ただし、今度は怒鳴り声ではなく、笑い声で。

「オーケーオーケー、正直お前が雑魚だという評価は変わっちゃいないが、真っ直ぐな奴は嫌いじゃない。その馬鹿正直に免じてやる、俺の艦隊によろこそ、大和」

「あ、ありがとうございます！」

「さすが木曾さん！ 話がわかるう！」

「結局お荷物は増えるってわけね、不幸だわ」

「諦めないで良かったですね」

「あ、あれ？ え？ なんか、いつの間に色々解決しちゃった感じですかあ？」

「阿武隈さん、まだ土下座続けてらっしゃったんですね……」

他の遠征艦隊の面々が大和の周りに駆け寄り、拍手をしたり握手をしていたり、悪態をついていたりしている。

その様子を遠巻きにして、七丈島艦隊の面々も安堵の溜息を洩らす。

「ひやひやしたぜ……」

「川内がいてくれて良かった」

「これで、無事二人を送り出せそうね」

そして改めて準備を整え、遠征艦隊七隻がドックに並んだ。

「行くぞ、野郎ども！ 準備はいいか!？」

「は、はい！ 阿武隈大丈夫です！」

「私野郎じゃないんだけれど……不幸だわ」

「吹雪、いつでも行けます」

「ドイツの夜戦、楽しみ〜！」

「大鳳、万事問題なく」

「瑞鳳、いつでもオーケーよ！」

「大和、出撃準備完了です！」

「——遠征艦隊、出撃する！ 抜錨！」

木曾の声と同時に遠征艦隊はドイツへ向けて、海へと駆け出して行った。

彼女達が水平線の彼方に消えるまで七丈島鎮守府と佐世保鎮守府の面々は敬礼で見送った。

「そういうえば、イタリア軍の方々は結局見つかりませんでしたか？」

「ええ、ドイツのこともありますし、イタリアに帰ったのかもしれない」

「……心配だな」

「あんな奴らでも同じ釜の飯食った仲間だしな」

「きつと大丈夫ですよ。エド提督は決して弱い人ではありませんから」

「はっ、提督の太鼓判付きなら間違いねえな！」

☆

船室のドアを誰かが開ける。

またアルマかとプリンツは緊張気味にドアの方を見たが、彼女ならばついさっきのようにドアを蹴り開けてくるだろうから彼女ではないと推理を展開する。

程なくして、扉から室内に入ってきたのは三人の兵士だった。

全員目深に帽子を被っているが、ベイトと服装や装備が一緒なのでこの船の兵士であることに間違いはないだろう。

（ん、あれ？ そういえばベイト君はどうしたんだろ？ 交代なのかな？）

兵士達は無言のまま静かに扉を閉め、施錠すると、プリンツに歩み寄り片膝をついた。

そして、そのまま真ん中の一番大柄な兵士がプリンツの手を取る。

「え、え!?! な、何これ、なんなの!?!」

「はっはっは! ちよつと気合入れて変装しすぎたかな? わからな
いかい?」

「その声……!」

プリンツにはよく聞き覚えのある声だった。

毎日のように愛の言葉を囁き続けてきた諦めの悪いストーカーの
声とそっくりなのだ。

「な、なんで、ここに……!」

「なんで僕がここににいるのかって? 君がここににいるからさ!」

兵士達が兵帽を取る。

両隣の二人はそこに長い髪の毛を隠していたらしい。栗色と銀色
のウェーブがまぶしい。

そして、真ん中の男は、キザつたらしく胸に片手を当て、ウイंक
しながら言った。

「待たせたね、プリンツ。貴女のエドモンド・ロツソです」

「ザラよ!」

「ポーラでくす」

プリンツの眼前に、してやったりというドヤ顔を浮かべ、イタリ
ア軍の三人が並んでいた。

第一百十八話「はい、すみません！ 私が弱味憎です！」

「どういうことだ、きつきの。ああん？」

「いえ、その、はい、大変申し訳なく……」

大和達遠征艦隊は当初の予定通り佐世保港から出発し、現在香港の地へと立っていた。

一同が陸に上がって一息ついた矢先、ずっと黙り込んでいた木曾が突然、怒声をあげながら大和を睨みつけてきたのであった。

しかしながら、大和を含め、他の者達もこの木曾の怒りの原因に心当たりがあるために何も言わない。

気まずそうな顔やら、苦笑やら、溜息やらで各々茶を濁すばかりであつた。

「俺が言いたいことはわかってるよなあ？ 自覚あるよなあ？ 戦艦大和？」

「ええ、その、はい、勿論です、木曾さん……」

「香港向かう途中で遭遇した深海棲艦、駆逐五隻に軽巡一隻の哨戒艦隊。ちよつと鍛えりや駆逐艦だけでも十分に突破可能な雑魚だ」

「はい……」

「ましてやこつちには空母に戦艦までいる。敵の射程外から殲滅可能だよなあ？」

「はい……」

大人と子供を思わせる身長差のある大和と木曾が並び立ち、小さい木曾が大きな大和に頭を下げさせている構図はなんとも珍妙に見える。

「まず大鳳と瑞鳳が四隻仕留めた。次に山城が一隻。じゃあラストはお前が仕留められた筈だよなあ？」

「はい……」

「じゃあなんで撃たねえんだよ！」

「すみません……」

「阿武隈が辛うじて先制雷撃で仕留めたから良かったが」

「あれ、木曾さん、今若干私のことデイスりました？ あれ!？」

「下手したら向こうから反撃を受けてたかもしれないねえ。お前の怠慢が仲間を危険に曝すってのがわかんねえのか？ ああ!？」

「ちよ、ちよつと待つて！ 大和にはちよつと事情があるのよ!？」

「事情だあ?」

一方的に怒鳴られ続ける大和を見かねて瑞鳳が二人の間に割って入った。

「大和は——」

「待て、テメーのことはテメーの口から話すのが筋だろうが、大和」

「はい……すみません、実は、私は……砲を撃つことができないんです」

「……は?」

木曾だけではなく、他の山城、阿武隈、吹雪、川内、大鳳からも驚愕の声 leaked。

不意に、木曾が大和の真正面まで跳躍し、その拳は大和の顔面に向けて振り抜かんと握り固められていた。

「——っ!」

「木曾さん、それはダメです」

殴られる、そう思い大和は目を瞑ったものの。結局顔面に拳が飛んでくる気配はやってこない。

恐る恐る細目を開くと、そこには木曾を羽交い絞めする大鳳の姿が見えた。

「テメー! 大鳳! 離せ、コラ!」

「だーめですって! ちよ、ほら、暴れないでって——いたあつ!」

「あ、あの、私」

「なんで言わなかったつ!」

「ひっ!」

一際大きな怒声が周囲に響き渡る。

港周辺を歩く人々が何の騒ぎかと集まってくるのも無視して、木曾は大和だけを睨んでいる。

「言うタイミングはいくらでもあったはずだ！ 何でそんな大事なことを言わなかった!?!」

「その、皆さんを落胆させてしまうのが、申し訳なくて……」

「落胆なら初対面の時に十二分にしてるわ、ボケが！ いいか!? 糞雑魚とはいえ大和型の火力があるのとないのじゃ戦力計算だとか作戦にそこそこ差がでてくんだよ！ 下手すりゃ勝てると思いついで突っ込んだ結果、テメーのおかげで全滅するまであるじゃねえか!」

「はい、仰る通りです……」

「瑞鳳、テメーも知ってて黙ってたな?」

「……何か問題があれば私がサポートしようと考えてたのよ、ごめんなさい。一言相談すべきだったわ」

「テメーら……人をおちよくするのも大概にしとけよ?」

木曾の声は怒りの余り震えていた。

それに対し、大和も瑞鳳も何も言わない。黙って俯くばかりだった。

「木曾さん、もうそれくらいにしましょう。人目があります」

「……………チツ！ おい、弱味憎お!」

「え、あの、私ですか?」

「テメエ以外に誰かいんのか? 言ってみろ、ゴラア!」

「はい、すみません！ 私が弱味憎です!」

「いいか、テメーは弱い。一人じゃなんもできねえんだろうが。申し訳ないだとかいっぱしに変な気遣ってんじゃねえ！ 逆に迷惑だ!」

弱味憎は弱味憎らしくしてろ!」

「……………はい、すみません」

「おし、じゃあ行くぞ。無駄に時間を食った」

その言葉を最後に、木曾は周囲を取り囲む人ばかりを一睨みで散開させると先へ歩いていく。

それに他の面々もついていき、最後に大和と瑞鳳が若干沈んだ表情のまま後を追った。

「で、木曾さん。これからどこ行くのさ?」

「昔馴染みの知り合いを尋ねてドイツまでの陸路を確保する」

「木曾さんにはそんなお知り合いがいらっしゃるんですね」

「まあ、昔色々な。安心しろ、俺が全部話をつけてくる。大鳳と山城は俺と一緒に、残りは待機だ。飯でも食ってろ、ほれ」

そう言っつて木曾は懐から革の中着袋を取り出し、阿武隈に放り投げる。

「うえ!? 結構重い!」

「それなりのモン食えるだけの額は入ってるが、無駄遣いすんなよ?」

「よっしゃー! 木曾さん太っ腹!」

「吹雪、通信機持つてるな? 終わったらこつちから連絡するから電源入れとけ。なんかあつたらすぐに連絡しろ、いいな?」

「了解しました」

「おし、じゃあここで一旦解散だ。大鳳、山城、ついてこい」

「はい」

「ええ、私もご飯行きたいんですけどお……不幸だわあ」

そう言っつて、木曾達は別の方向へ歩いていき、人混みの中に消えていった。

そこで緊張感から解き放たれ、大和は大きく息を吐いた。

しかし、依然としてその表情は暗い。瑞鳳はその横顔を見て何か話しかけねばと話題を探した。

「……あー、軽いわね、なんだか!」

「え?」

「ほら、手! スタンリング一時的に外してもらったでしょ? まあ、

正直そんなに重さは感じてなかったけれど、なくなったらなくなつたで違和感あるわね!」

「あはは、確かにそうですね」

久々に何も付いていない右手首を見て笑う大和の表情はやはりどこかどんよりと暗かった。

そこに、川内と吹雪も歩み寄ってきた。

「もー、大和いつまで暗い顔してんの! ほら、切り替えよ!」

「う、うん! 気にしなくても大丈夫だよ! 私だつて大して戦力になつてるわけじゃないし! あれ、自分で言つててなんか悲しくなつ

てきた」

「失敗は誰にでもあるものです。重要なのはその失敗から学ぶことですよ」

「お二人とも、ありがとうございます」

「さーて、折角香港来たんだし、ぱーっと豪遊しよ！ お金はたんまりあるしね！」

「あー！ 私が預かった財布！ かーえーしーてーくーだーさーいーっ！」

川内が悪戯つぽく笑いながら阿武隈から巾着袋をひったくって走り出す。

それを慌てて追う阿武隈、吹雪、瑞鳳。

少し遅れた大和と他の四人との距離が僅かに開く。

その瞬間だった。

「うわ?!」

突然大和は路地から伸びてきた手に引っ張り込まれた。

四人に助けを求める暇もなく、その背中は人混みに覆われ、見えなくなった。

☆

「私は正直反対なんですけど」

「大和か？」

「いやだって撃てないって、もうそれ岩礁とかと変わらないですよね？」

山城が不満げに木曾に抗議の声をあげる。

「何でまだ連れてくんです？ 港で置いてけば良かったんじゃないですか？ これ以上ついていってもあの子が不幸になるだけですよ。ついでに私達も巻き添え食って」

「俺は大和を連れていくと一度決めた。ここで放り投げるのは筋が通らねえ」

「あの子、このままドイツ連れて行ったら死にますよ」

「それはねえよ、俺は強いからな。任務を遂行し、かつ全員生きて帰す。俺ならそれができる」

「自信過剰なんですね、私と正反対で羨ましいです」
険悪になつていくムードに困り顔で大鳳が言葉を挟む。

「まあまあ、山城さん。木曾さんにも考えがあるみたいですから。ここは旗艦の顔を立ててあげてください」

「……まあ、木曾さんが責任持つなら私も何も言いませんけれど。私はアテにしないでくださいね。木曾さんと違ってそこまで強くないし、なにより不幸なので!」

「わかったわかった、ほら、目的地についたぜ。ここからは気引き締めろよ。何せ、マフィアの本拠地なんだから」

目の前の天まで届くのではないかと思われる高さのビルディングを見上げながら、木曾はニヤリと笑ってそう言った。

対照的に、反抗的だった山城の表情が一気に青ざめる。

「え、マフィア!? 香港マフィア!? なんでそんなところ行くの!? 昔の知り合いってそんなヤバイ奴らなわけ!」

「まあ、昔はそもそもマフィアじゃなかったんだが、今はこの幹部やつてるらしい」

「なんでそんな超危険なところに私連れてくんですか!」

「お前、姥鮫提督のところだろ? あの中じゃ一番こういうところに場馴れしてそうだからな」

「その評価のされ方は不幸!」

「まあまあ、そう仰らず。ここまで来てしまったんですし、お互い腹を括りましょう」

山城の抗議の声を聞き流しながら、木曾達はビルの中へと入っていくのであった。

☆

私は何故ドイツに行きたいのだろうか。

プリンツを助けに行きたい。その気持ちは本当だ。

しかし、それは果たして皆に迷惑をかけてまで、危険に曝してまで通しいていい我儘だったのだろうか。

出港前に覚悟はしていた筈なのに、再びそんな憂鬱が私を襲っていた。

木曾の言葉だけではない。他の面々の私を見る気まずそうな表情を見て余計にそんな後悔がぶり返していた。

そんな考え事をしているから、一足先に駆けていく川内達に遅れた。

そして、狭い路地裏から私の眼前に四本の細い腕が伸びてあつという間に私の身体を引っ張り込んだのであった。

「む、むぐー!?!」

すぐに口に布を挟まれて手足は縄か何かで拘束されている。かなり熟達した手際だ。

訳も分からずもぐもぐと呻くことしかできない私の目の前にそのならず者が姿を現した。

「へっへっへ! 観光客ゲット!」

「やったね、お姉ちゃん!」

驚くべきことに賊の正体は少女であった。しかもどうやら姉妹らしい。

妹の方は磯風や美海と同じくらい、姉の方は成人前くらいだろうか。

二人とも英語で話しているので辛うじて私にも言葉は聞き取れた。

「やい、お前観光客だろ! 金を出せ!」

「むぐー!」

金はないと返そうとしたのだが、布が邪魔で言葉が出ない。それに気付いたららしい姉妹が困ったように顔を見合わせた。

「どうしよう、お姉ちゃん。これじゃ何言ってるかわかんないよ!」

「でも大声だされても困るしな!。参った、師匠にこういう場合の対処法も教えてもらえば良かった!」

「あ、じゃあ筆談にしようよ!」

「手の縄解いたら暴れられちゃうだろ!」

「うーん!」

「しようがない! 家まで持って帰ろう!」

「まずい。持って帰られようとしている。」

初めて来た香港でどこぞと知れない場所に連れて行かれては下手

したら一文無しで迷子である。

「もごー！ もごー！」

「こら、暴れんな！ 抱えにくいだろうが！」

「この人重いねー、お姉ちゃん」

「むごおおおお！」

「ぬお！ 暴れんかって、このー！」

乙女の心をいたく傷つけられながら、私には対処する術もなくゆつくりと路地裏のさらなる闇へと引っぱり込まれていつてしまうのであった。

☆

「よお、久しぶりじゃねえか。ええと、今は木曾って呼べばいいか？

変わりねえようで何よりだよ」

「おう、お前は随分変わったな。偉そうに葉巻吸いながらソファにふんぞり返りやがって。骨と皮だけのガリガリ野郎が随分とまるまる肥えたじゃねえか、一瞬わかんなかったぜ」

「はっはっは！ 出世したんだよ、出世！ もうスラムの端っこでしかた煙草吸いながらしかた玩具売るのは飽きた」

ビルの上層階。

広々としたスイートルームを思わせるオフィスの一室で、葉巻の煙をくゆらせながらニヒルに笑う恰幅の良い男性は、向かいのソファを葉巻で差して木曾達に座るよう促す。

それに対し、木曾も真ん中にどっしりと腰掛け、他二人もその両端に続いて腰を下ろした。

「なんか飲むか？ ウイスキー、スコッチ、ワイン、シャンパン、ウオツカ、日本酒までなんでも置いてあるぜ。酒、嫌いじゃなかったよな？」

「酒は好きだ。だが、仕事の時は飲まねえって決めてる。こいつらも

だ」

「え」

山城が小さく抗議の声をあげるものの、木曾の横睨みで一瞬にして黙らされた。

男はつまらないとでもいいいたげに首を振ると、上げかけた腰を下ろ

し、まだ吸いかけの葉巻を灰皿に押し付けた。

「で、十数年ぶりに急に押しかけてきやがって何の用だ？」

「陸路を用意して欲しい。八人分だ」

「どこまで？」

「ここからドイツまで。ハンブルクまで行けりや大分助かる」

「大陸鉄道か。まあ、他ならぬお前の頼みだしなあ、融通できんことはない」

男はそこまで言って新しい葉巻を取り出すとシガーカッターでその先端を切り落とす。

「で、いくら出せる？」

「今回俺の財布は日本海軍持ちでね。希望に見合った額は出せると思うぜ」

「へえ！ 軍のワンちゃんは金持ちだねえ！」

ぐもった声で嘲笑する男に思わず山城の顔が怪訝に歪む。

「いつまでに用意できる？」

「まあ、早けりや明日か、明後日には確実にってところか」

「オーケーだ。小切手に希望の額を書いとけ。また明日来る」

「おいおい、待て待て待て、話を急ぐな、まだ終わっちゃいねえだろうが」

早々に話を切り上げ立ち上がる木曾を制止する男。

男は葉巻に火を付けて深く吸い込み。紫煙を吐き出して再度席につくよう手で示した。

気怠そうに仕方なくもう一度ソファに座る木曾に満足げに男は頷いた。

「まだなんかあんのか？ 俺は腹減ってんだよ」

「飯くらい奢ってやるよ。三ツ星の中華料理店でいいか？」

「三ツ星……！」

山城が思わず目を輝かせるのを肘で小突きながら木曾は手を前に出して首を振った。

「結構だ。マフィアと必要以上に仲良くしてもらくなことがねえ」

「マフィアとしてじゃねえよ。俺個人として、旧友のお前とその仲間

をもてなしてやろうってだけさ」

「そんな深い仲でもねえだろ。昔からお前が武器、情報、足を用意して、俺が必要な時にそれを買う、それだけだろ」

「冷たいねえ。それがこれからお前らのために大陸鉄道の切符用意してやる俺への態度かよ？」

うんざりした様子で木曾が溜息を吐いた。

「何をご所望だ。はつきり言え」

「金は勿論もらう。ただ、加えて一日、お前らが俺の苦労を労わって欲しいわけだよ、誠意ってやつさ」

男の表情が下卑た笑みを呈する。

その視線が木曾達の胸や太腿に容赦なく向けられている。

流石にここまで微笑を保っていた大鳳も嫌悪感を露わにした。

「香港なら俺ら以上の女なんていくらでもいるだろ」

「もう飽きたんだ。偶には違う刺激が欲しいんだよ」

「悪いが俺らは娼婦じゃなくて艦娘だ。他を当たれ」

「じゃあ、この話はなしだ」

「はあ？」

「まあ、安心しろよ。そもそもお前は女として見ちやいねえ」

「……殺すか」

「落ち着いて木曾さん、落ち着いて」

腰の軍刀を抜きかけた木曾を大鳳が止める。

「その女は、顔立ちは悪くねえが、胸がなあ」

「撃ち殺していいですか？」

「落ち着け大鳳、落ち着け」

今にもボウガンに手を伸ばしかねない大鳳を木曾が止める。

「やっぱお前だな。顔もいいし、胸も尻も俺好みだ」

「うえ……不幸……」

容赦なくいやらしい視線を向けられ、山城はあまりの嫌悪感にえつきそうになるのを口元に手をさて必死にこらえていた。

「別に悪いようにはしないぜ？ タダで最高級のもん食わせてやるし、酒もいくらでも飲めばいい。ホテルもスイートルームだ。ただ

し、俺も一緒の部屋だがな」

「最後で全部台無しなんですけど！ 嫌！ 死んでも嫌！」

「気性もいいねえ。従順な奴よりそっちの方が仕込み甲斐がある」

「嫌ああああああ！」

山城の悲鳴に木曾も手で顔を覆った。

「おい、テメエ、流石にいい加減にしねえと——」

「——失礼します！」

木曾の言葉を遮るように黒服の男が慌ただしく部屋へ飛び込んできた。

突然の乱入者に、男は般若の表情で罵声を飛ばした。

「大事な商談中だって言っただろうが！ 殺されてえのか！」

「す、すみません、非常事態で……」

「なんだ？ 何があった？」

黒服に何事か耳打ちされると、男も片手で顔を覆ってその後木曾の方を見た。

「おい、お前、切符は八人分って言ったよな？ ってことはここにいる以外にも仲間連れてきてるんだよな？」

「ああ、そうだ」

「大和つてのはお前の仲間の一人か？」

「ああ？」

木曾がその名前を聞いて固まる。

「そいつが俺の部下殴り倒してくれたらしい。今こっち向かってるってよ」

「何やってんだあいつ!?!」

☆

遡ること一時間程前。

「はあ、やっとなついたあ！」

「重かったあ」

「むー！ー！ むー！ー！」

絶賛拉致されている私、大和は見知らぬ地で一人はぐれてしまっている。

この姉妹達にかつがれ、半ば引きずられながら十分程裏路地を行き、少し開けた場所に出たかと思うと、まるでゴミのように捨て置かれたのであった。

「師匠――！ 帰りました――！」

「師匠――！ お姉ちゃんとかモ捕まえてきた――！」

見れば、今にも崩れそうなボロボロのトタン小屋があり、姉妹はそこに走っていくのであった。

「――そんなことするためにお前達に捕手術を教授したのではないのであります」

姉妹とは違う、おそらくは彼女達が師匠と呼ぶ何者かの声が聞こえてきた。

気のせいだろうか、聞き覚えのある声の気がした。

「全く、とにかく早々にその人を離してあげなさい――！」

トタン小屋から出てきた師匠と目が合った。

お互いに、表情が固まった。

「む、ッ……!?!」

「……こんな所で会うとは、縁とはわからないものでありますな」

今まで英語で喋っていた口調が日本語に変わる。

そして、その人物はおもむろに私に近づくと、まるで魔法のようにその手刀で手足の縄と口布を切って私の身体を解放する。

私はその瞬間、素早く、距離を取る。

「なんで、あなたがここにいますか？」

「なんで？ こつちが聞きたいでありますな。貴様こそ何故こんな場所にいる？」

「あきつ丸、さん……！」

そこに立っていたのは、蜻蛉隊隊長、あきつ丸に間違いなかった。

第一百十九話 「ご心配をおかけしました、大和、ただいま原隊に復帰しました！」

あきつ丸。

陸軍特殊小隊『蜻蛉隊』を纏めていた隊長。艦娘であり、その実力は私を含め、七丈島艦隊なら誰もが身に染みてよくわかっている。化け物だ。

今でもよくこんなのを相手にして生きているのが不思議に思う。

「あきつ丸さん、軍刑務所に収容されているはずでは……」

「ああ、色々あつて脱獄してきましたであります」

「脱獄!?!」

「大和、貴様こそ、何故香港にいるのでありますか?」

「……色々ありまして、ドイツに行く道中なんです」

「ほう、ドイツ……成程」

目を細めて納得したようにあきつ丸は頷いた。

何を考えているかわからない。どこまで知っているのかわからない。相変わらず底の見えない不気味な人だ。

縄から解放されてひとまず自由になった筈の私の身体は緊張で固まっていた。

「師匠の知り合いー?」

横からさつき私を拉致した妹の方が話しかけてきた。

私のことを上目遣いで覗き込むようにしてじつと見ている。

こうして改めて見ると、この子の外見が随分と貧相なことに気が付いた。服は黄ばんでいるし、髪も何日も洗っていないようにボサボサで傷んでいる。

申し訳ないが体臭もそれなりに臭う。

さつき金を出せなどと言っていたから貧民街の子供なのだろう。

「あの、あきつ丸さん、この子たちは?」

「私に聞かれても困るでありますな。ここに来た時、少し助けてやつ

たら勝手に懐いてついてきただけでおおよそ無関係の他人でありま
す」

「その割には随分熱心に捕手術など教えていたようで」

あの手際は不意を突かれたとはいえプロ顔負けだったように思う。
相当みっちり仕込んだと見える。

「ふ」

「何笑ってんですか」

あきつ丸は特に悪びれる素振りもなく誇らしげな笑みを浮かべて
いた。

「あの、さつきはごめんなさい」

姉の方が私に申し訳なさそうに頭を下げる。

なんだかこちらの方が申し訳なくって私は首と両手をぶんぶん左
右に振る。

「いえいえ、全然いいんですよ！ 気にしてないです！」

「大和さんいい人ー！」

妹の方が人懐っこく私の腰辺りに抱き着いてくる。その無邪気な
姿に思わず頬が緩んだ。

ここに来てからは初めて笑ったかもしれない。色々と思いつむこ
とが多かったから。

「それで？ まさか貴様一人で来たわけでもなし。他の仲間はどうし
たでありますか？」

「あ……」

そうだ。すっかり失念していた。

私は、今、香港で迷子なのだ。

「この子達に拉致されたのが原因で迷子でありますか。こちらが悪い
とはいえ情けない話でありますな」

「うぐ……」

「しかし、悪いのはこちら。お前達、大和が仲間の所に戻るよう協力
してやるであります」

「了解です、師匠！」

「はい、師匠！」

姉妹は二人そろって敬礼して見せる。

「敬礼まで仕込んだんですか？」

「いや、これは、つい、熱が入って……」

あきつ丸が目を逸らしてもごもごと何か呟いている。

なんだか、この数分で彼女のイメージが変わった。もっと怖くて、冷たくて、腹の内の読めない人だと思っていたのだが。

思わず笑いがこぼれた。

「あきつ丸さんは、結構面白い人なんですね」

「……貴様は変な奴でありますな」

「変な奴!？」

「少し前に殺されかけた相手に、そこまで無防備になれるものか。普通、もっと警戒して、言葉を交わすことすら躊躇うものであります」
確かに、そうかもしれないが。

天龍から話を聞いていたからかもしれない。

彼女のために、原田とまるゆが自分の身体もいとわず庇いに入ったことを。

そんな二人をあきつ丸もまた庇おうとしていたことを。

「話してみないと分からないことも多いですから」

何故か、頭で考えるよりも早く言葉が滑り出ていた。

「私は、相手を否定する努力より相手を理解する努力がしたい」

不思議な感じだ。まるで私が私じゃないみたいだ。不思議な力に操られていたかのように、まるで一瞬だけ誰かが乗り移ったかのように、気が付けば口が動いていた。

「やはり変な奴であります。さっさと仲間の元へ戻れ。こういう時のための軍事回線は打ち合わせてあるのでありませう? 電話ボックスまで案内してもらうがいい」

「あ、えーと、その実は私今無一文——」

「口止め料であります」

「ぐえ」

私が言い終わる前に1ドルコインが顔面めがけて投げつけられた。避けることあたわず、私は額に直撃したコインを握ってポケットに

しまいこむ。

あきつ丸が楽しげにこちらを見つめているのが若干腹立たしいが、お金を施してもらっている立場故、何も言わなかった。

「私と出会ったことはくれぐれも内密に」

「……安い口止め料ですね、でもありがたく貰っておきます」

「よし、じゃあ行こう！」

「いっ……」

姉妹に手を引っ張られ、再び狭い路地へ走り出した最中、私を先導して路地に曲がろうとした姉妹の身体が弾き飛ばされ、尻餅をつく。

同時に路地からこちらに入ってきた大柄な男の身体が彼女達を跳ね飛ばしたのだった。

「つてーな。おい、糞ガキ。どこ行くつもりだ？」

「あ……」

男は黒いジャケットに赤いシャツを着て髪をオールバックにした明らかにならず者の風体をしていた。

男を見た姉妹の顔が一瞬で青ざめ、体が震えているのがわかった。

「よお、糞ガキ。金は集まったかよ？」

「そ、それは……」

「言ったよなあ？ 今日までにお前らの親が俺らに借りた金、利子つけて返してもらうって」

「え、期限まではまだ一週間あるはずじゃ……」

「はあ？ 俺が今日つつつてんだから今日なんだよ！ 口答えしてん

じゃねーぞ！ そもそもがそのザマで一週間時間があつたところで返せるような額じゃねえだろうが！」

「ひっ」

男に怒鳴られ、姉妹はすっかり怯えて縮こまってしまっている。

黙ってはいられなかった。

「ちよ、ちよつと、やめてください！」

「あ？ 邪魔すんじゃないよ。俺はな、正当な権利を主張してんのよ。金を貸したんだから返してもらうっていう正当な権利をよー。何か文句あんのか？」

「それは……」

「違う！ お前らがお父さんを騙して滅茶苦茶な利子でお金を貸したから……！ そのせいで借金が膨れあがって……！」

「お父さんも、お母さんも、その借金のためにたくさん働いて、死んじやった……」

姉妹の声は涙声になっていた。

男を睨みつける目は真っ赤になっていた。

そんな姉妹をゴミでも見るような目つきで見下しながら男は笑って言った。

「はあ？ 俺は騙してなんかいない、お前らの親のおつむが緩かっただけだろうが！ 大体よー、あいつら自分が死んだ後はお前らに借金が行くことになるって部分は確実に分かかってて契約したんだぜ？

恨むなら俺じゃなく親の方じゃねーのか？ 家まで差押えられて、今こんなところでコソ泥してんのは全部お前らの親が原因だろうが！」

「違う、お父さんとお母さんは……！」

「もうやめてください……こんな子供に、こんな状態で借金が返せるはずないじゃないですか！」

「……まあ、そいつはわかっているよ。だから俺は今日来たんだ」

そう言つて、男は姉の方を腕を捻り上げて無理やり立ち上がらせる。

「まあ、こんな小汚いガキでも需要はあるもんだ。両親の借金はお前の身体で稼いで支払ってもらおう」

「え……」

「まあ、死ぬまでこき使つてやるよ。数年すれば妹の方も使う。二人で必死にやればなんとかなるんじゃないやねえか？ その頃には二人揃つて廃人かもしれねえけどなあ！」

「や、やだ……嫌だ！ 助けて！ 誰か！」

「お姉ちゃん！」

自分のこの後の運命を察し、暴れまわる姉。しかし、痩せ細った体ではろくに抵抗もできず男に容易く抑え込まれてしまう。

「暴れんじやねえよ。大丈夫だつて、そう簡単には死なせねえからよ」

「嫌だ！ 嫌だあ！」

「お姉ちゃん！ お姉ちゃん！」

「その手を離してください！」

姉を連れて行くこうと踵を返す男の腕を握る。

男の殺気だった顔が私の方に振り向いた。

「ぶつ殺されてえのか？」

「これは、不当です……！ その子を持って行かせるわけにはいきません」

「なんだ？ 警察にでも駆け込むか？ 裁判でも起こすか？ やつてみるよこつちには契約書の写しもある。そもそも俺達相手にしてこの国の警察だとか司法だとかがまともに動くと思うなよ？」

「ぐ……」

「上等だよ。お前、殺すわ。もう謝つても遅い」

男は私の腕を振り払うと、素早く懐に手を入れ、そこから黒い鉄の塊を私に向けて突きつけた。

拳銃。その銃口が、私の額に押し付けられていた。

「俺達が正義だ！ 正義に楯突く奴はもれなく地獄送りなんだよ！」

「あ、あなた達が、正義な訳がない！ そんなことは、絶対に認めません！」

「お前に認めてもらう必要なんざねえんだわ、死ね」

せめて、この姉妹が逃げる隙を作る。

銃弾は避けきれないだろうが、なんとか致命傷だけは避けつつ、そのまま男にタックルを噛ましてやるつもりだった。私は艦娘なのだから、体は頑丈にできている。なんとかなるはずだ。

しかし、男が引き金に指をかけ、私が重心を僅かに沈めた次の瞬間、私の真横を突風が吹き抜けた。

「——烈風拳」

「な……!?!」

それが男の断末魔になった。

男は拳銃の引き金を引き終える前に一瞬で懐に潜り込んだあきつ丸に拳を腹部に叩きこまれ、くの字に体を曲げて路地の壁に叩きつけ

られた。

当然、生身の人間が彼女の鉄拳を食らって無事で済むはずもなく、男は白目を剥いて地面に倒れ、起き上がることはなかった。

「あ、あきつ丸さん……」

「私を前に正義を語るとは、この男も貴様もいい度胸でありますな」

その猟奇的な笑みは、間違いなく私と天龍を二体一の状況でその拳だけで瀕死に追いやってみせた化け物の笑顔であった。

「大和、貴様は正義などではない。自惚れるなであります」

「で、でも！ あのままじゃあの子達が連れて行かれそうでしたし！

何より、あんなの横暴すぎます！」

「それで？ その後は？」

あきつ丸の冷たい視線が私を射抜く。

「そうやって中途半端に助けようとして、お前はその子を守り切れるのでありますか？」

「それは……」

「こいつはこの辺りを仕切るマフィアの手の者。マフィアを相手取って勝算があると？」

「……………」

「確かに貴様の言うことは正しい。この男は横暴で、悪であります。だが、正しいだけでは正義たり得ない」

あきつ丸は淡々と語って聞かせる。

先ほどの男のように怒鳴るわけでもないのに、恐ろしくてたまらない。

「お前は正しいが、その正しさを貫けるだけの力がない。だから正義にはなれない。だというのに、正しさだけは主張したがる。正義にはなれないが、悪者ではないと言い訳をするためだ。卑怯でありますな、大和」

プリンツのことを言われている気がした。

あの時、アルマ・トラージェンアレスに連れて行かれた彼女に私は手を差し伸べることでできなかった。

否、私は何もしなかったのだ。

だから、やり直したくて、この遠征に参加しようとした。

あの時、何もしなかった自分を否定したくて、上書きしたくて。

私は、自分の身可愛さにプリンツを助けようとしているのだ。もつともらしい理由を作って周りの厚意を利用して、迷惑をかけてまで。

それはまさしく、卑怯だ。

木曾の言う通り、私は弱味憎なのだ。

「だから、私が貴様を鍛えてやるであります」

「え?」

次の瞬間、大きく息を吸い込んだあきつ丸は、耳鳴りがするほどの大音声で叫んだ。

「私の名は大和ツ! 貴様らマフィアの横暴に腹を据えかね、制裁を

下す! 覚悟するがいいッ!」

「え、ええええええええええ!!」

とんでもない爆弾発言をかまされた。

「ふう」

「ふう、じゃない!」

「近くにこの男の仲間がいることには気づいていたであります。これですつがなく貴様が下手人と報告されるであります」

「なんてことを!?!」

「覚悟を決めるであります。あの子達を救える正義の味方ヒーローになりたいなら、マフィアの二つや二つ相手にできずいかんとする」

「スパルタが過ぎる!」

「厳しくいかねばいつまでも弱いままでありますからな」

「急には強くなれませんよ!」

「弱いなら弱いなりにやりかたはあるであります。今の私が良い手本であります」

「は?」

「貴様一人では無理なら、周りを巻き込んでしまえ。否応なく、無理やり、貴様の正義に付き合わせるであります」

「そ、そんな身勝手な」

おののく私にあきつ丸は私を見下すように顎を上になり、笑った。

「ふん、迷惑を気遣える立場じゃないでありますしやう？　大和、弱い貴様が正義を為さんとするなら、それこそ形振り構うことは許されないのであります。ひたすらに、がむしゃらにやれば良い」

『いいか、テメーは弱い。一人じゃなんもできねえんだろうが。申し訳ないだとかいっぱしに変な気遣ってんじやねえ！　逆に迷惑だ！』

弱味噌は弱味噌らしくしてろ！』

脳裏に、木曾の言葉が反響した。

（木曾さん、もしかしてこういう意味で……なわけないか）

「安心するであります、少なくとも、貴様は今私を巻き込むことには成功している」

「どっちが巻き込まれたかわかりませんけれどね……」

「いや、貴様の行動が、私に手を貸させたのであります。さあ、行くでありますよー！」

「ああ、もう！　こうなればやるだけやってやりますよー！」

もうやってしまったことは取り返しがつかない。

どちらにせよ、あそこでこの子達を見捨てる選択はあり得なかった。

あそこで見捨てるようなら、私が今ここにいる意味がない。

そうだ、私は、今度こそ――

「大和さん……」

「ごめんなさい、私達のせいで……」

「いいえ、違います。私がやろうと決めたんです」

ようやく、はつきりした。

私は、プリンツの正義の味方になる。

そのために、ドイツを指すんだ。

「こんな所で、足踏みしていられません……！」

☆

『――あ、木曾さんですか!?　阿武隈ですう！　実は、その、美味しそうなお店は見つけたんですけれど！　その、あの、いつの間にか大和さんが……いなくなっていた、というか、はぐれたと言いますか……ごめんなさあーいつ！』

「……ああ、大丈夫だ。既に居場所はわかつてる」

『え!? なんて!? でも良かったあ!』

「いや、最悪だ」

『なんで!』

「お前らも取りあえずこつち来い。場所は——」

木曾は困惑を隠しきれない阿武隈に手短にここの住所を伝え、一方的に無線機を切った。

目の前には青筋を浮かべて神経質に机を指で叩き続ける男の姿があった。

「よお、木曾。お仲間との連絡は取れたか?」

「おう、どうやら大和とははぐれて今一緒にはいねえとよ」

「そうかあ、じゃあ沈めるのはそいつだけで済みそうだなあ」

今にも爆発するのを必死で抑え込みながら男は血走った眼で木曾を睨みつける。

木曾はそれに対し、飄々とした態度で肘をついて目を瞑る。

「おい、わかっただらうなあ? 大和とかいう奴がやったのは紛れもなく宣戦布告だ。こつちもタダでは引き下がれねえ、面子つてもんがあるからなあ」

「……………」

「ちよ、ちよつと、どうするのよ、木曾さん! 大和のせいで何もかも台無しじゃない! ああもう、不幸オブ不幸!」

「まあまあ、山城さん。もう焦ったってどうしようもないですし」

「で、でも、これもう大和助からないんじゃないの!? どうやって無理でしょ! あのデブ怒り狂ってるわよ!? 血上りすぎてゆでこみみたいになってるわよ!」

「山城さん、聞こえますから」

さつきから山城にガンガン肩を揺さぶられ、眉を潜める木曾とそれをなだめる大鳳。

しかし、一向に山城の不安は増していくばかりのようであった。

「いや、確かに大和いらんとは思ってたわよ! でも何も死んで欲しいとまでは思っていないじゃない! こんなの目覚め悪いじゃない

の！ ああ、不幸！」

「まあ、でも、実際問題どうしますか？ 一応、『準備』はできてますけれど……」

「……なるようになるだろ。今は大人しくしてろ」

大鳳と山城に、木曾はそう言っただけで、再び目を閉じた。

「……はい、木曾さんがそう言うなら」

「私のせいじゃない！ 私の不幸のせいじゃないわよ!？」

その時だった。

不意に室内の扉が開いた。

真っ先に反応したのはゆでだこのように顔を真っ赤にした恰幅の良い幹部の男だった。

「おい！ 今は誰も入れるなっっていったらだろうが！」

「悪いわね、執務中に」

「ぼ、ボス!? こ、これは……大変、し、失礼しました!」

現れたのはチャイナドレスの蠱惑的な美女。

しかし、その姿を見た幹部の男は、さっきまで真っ赤になっていた顔を一瞬で青ざめさせ、床に膝をつけて頭を下げていた。

「ぼ、ボス？ ボスってというのは、まさか……」

「ええ、どうやらとんでもない大物が出てきたみたいですね」

「……………」

チャイナドレスの女は木曾達を一瞥すると、跪く幹部の男に視線を戻して笑った。

「そう畏まることはないわ。気にしないで頂戴。私が無理を言っ通してもらったのよ、ごめんなさいね」

「い、いえ、とんでもございません……その、本日はどういったご用向きで……?」

「決まってるでしょう、私に喧嘩を売ってきた奇特な輩がいるって聞いて飛んできたのよ」

「既にご存じでしたか……」

「今はどういう状況？」

「はい、賊はこちらに向かってきています。お任せください、生きてい

ることから逃げ出したくなるような地獄の苦しみを与えてから生き
たまま輪切りにして魚の餌にしてやります」

「うわあ、えぐ！」

「山城さん、今はお静かに！」

「処理は任せるわ。私はその様子を見物させてもらおうから」

「よお、親玉さんよ」

唐突に、木曾の声が室内に響いた。

首が外れるのではないかというくらい勢いで幹部の男が木曾を
睨みつけ、大鳳も動揺の余り固まっている。

そして、ゆっくりとボスの視線が木曾の方へと注がれた。

「私のことかしら？ ワンちゃん」

「おたく、表では世界有数の貿易会社だってなあ」

「ええ、良く知ってるわね」

「なんでもフェアな取引ってやつをモットーにしている信頼性が高い
とか」

「ええ、私のポリシーなのよ」

「素晴らしいぜ。そこで提案なんだが、大和と話をしてみてくれねえ
か？」

「大和？ ああ、賊のことかしら？」

ボスは確認を取るように幹部の男を見る。

幹部の男は小さく数回頷いて見せた。

「今回、うちの仲間があんたに迷惑をかけたことについては俺からも
謝る。だけれど、あいつは特に考えなしで人に喧嘩売れる奴じゃ
ねえ。何か理由があるはずなんだ」

「私に楯突く気概はないと？」

「あいつは弱味憎だからな」

「弱味憎……ふふつ、そうなの」

「だから、処分の前に少しでもあいつの話聞いてやってくれ」

しばらく、沈黙が流れた。

息も詰まる重苦しい空気の中、ボスと木曾は互いを探るように見つ
め合っている。

やがて、ボスの方が小さく溜息をついた。

「いいわ。そこまで言うなら話をきいてあげる」

「ぼ、ボス、それはいけません!」

慌てて幹部の男が制止する。

しかし、ボスはそれに薄く笑って返す。

「いいのよ、確かに理由は気になるしね」

「いえ、そんなことは我々で聞き出します! 賊をボスの前に立たせるわけには——」

「私が良いと言っている」

ボスの声が一段低くなった。

同時に空気がさらに重くなるのを木曾達も感じた。

「は、仰せのままに……」

「さて、じゃあ、その大和ちゃんとやらが来るまで待ちましょうか」

ボスはそう言つて、木曾の真正面のソファに深く腰をかけた。

ますます縮こまる山城と大鳳とは対照的に、木曾は不敵な笑みを浮かべていた。

(よし、乗ってきた。さあ、これでできることはやった。これでダメなら、その時はその時だ)

☆

それから、十分程して、扉が三度ノックされた後、黒スーツにサングラスをかけた女が入ってきた。

その後ろから、続いて見えたのはボロボロになった大和であった。

「失礼します。賊を捕まえてきました」

「馬鹿野郎! ボスの前だぞ! 跪けッ!」

幹部の男の怒号に、慌てて黒スーツは膝をつく。

「し、失礼いたしました」

「いやいいのよ。よく連れてきてくれた。ご苦労様」

「はっ」

「それで、あなたが大和ちゃんね」

「……はい」

大和は真つ直ぐにボスの目を見つめて頷いた。

「別にあなたがこれからどんな可哀そうな目に遭おうが興味はないんだけれど、私に喧嘩をふっかけた理由だけ聞いておこうと思ってるよ。連れてきてもらったのよ」

「大和」

「木曾さん……」

木曾は大和に声をかける。その隻眼は大和の奥底を見透かすように透き通った目をしていた。

「これは弱味噲なりに考えた結果か」

「はい、そうです！」

「そうか」

それだけ言って、木曾はソファに深く倒れ込み、それ以上は何も言わなくなった。

「さて、じゃあお話ししてもらおうかしら。なんでマフィアに喧嘩売るなんて自殺紛いなことをしたのか」

「あなたの部下が、子供を攫おうとしていたからです」

「子供を？」

「はい、膨大な借金があったそうです。そのせいでその姉妹は両親を亡くし、家を追い出され、今は浮浪児として生活しています」

「ふうん、でも、借金は自業自得ではないかしら？ その姉妹は可哀そうだけれど、返せないならこつちで仕事を斡旋して稼いでもらうしかないわ」

ボスの反論に大和は首を振った。

「その借金には法外な利子がついていたそうです。しかもそれを悟られないよう細工をし、騙して膨大な借金を背負わせたんです、あなた達が！ 私はそれが許せない！ だから、ここに来ました！」

「……それは、フェアじゃないわね」

ボスの表情から笑みが消えた。

「でも、証拠はあるの？ その子供の嘘だという可能性は？」

「子供を連れて行くこうとしていた男は契約書の写しがあると言ってきました。それを見れば、はつきりするのでは？」

一瞬、幹部の身体が大きく揺れた。その後、ガクガクと小刻みに揺

れ始めたかと思うと、慌てて立ち上がる。

「ぼ、ボス！ その契約書の写し、俺がすぐに探して参ります！」

「ええ、すぐに探してきて頂戴。ただし、探すのはお前じゃない。私の秘書に探させる」

「ぼ、ボス……!?!」

冷や汗がだらだらと流れ落ち、高そうなジャケットはびしょ濡れになっている。

そんな幹部の男にボスは虫けらを見るような無感情な視線をぶつけた。

「何か、思い当たる節があるようね。お前も知っているはず、私のポリシーはフェア。それに従わないということはこの私に楯突くということと同じこと」

「ボス、決して！ 誓って、俺はボスに楯突いたりしておりません！」

「それはすぐにわかることだ」

幹部はその頭を床に擦り付け、ボスに懇願する。

しかし、そんな彼に彼女の視線が向けられることはもうなかった。

「よし、獲った！」

小さく木曾が歓喜の声を上げた。

それを皮切りに大鳳と山城の身体から緊張が抜け、ソファから滑り落ちていく。

「てめえ、の、せいだ……!?!」

「え?」

ゆらゆらと、ゾンビのように立ち上がりながら、幹部がふらつきつつ血走った眼を大和に向ける。

次の瞬間、その袖口からナイフが飛び出し、幹部はその切っ先を大和に向けながら突進してくる。

「なっ!?!」

木曾達もすっかり気を抜いていた直後のできごとで、制止できない。

唯一止められそうな幹部と大和の間に立っているボスは興味なさげにあっさり幹部に道を開けた。

ナイフの切っ先が大和の胸元に迫ろうとしたその時、黒い影が大和の横から飛び出す。

それは、大和を連れてきた黒スーツの女である。

「―――揃いも揃って油断しすぎであります」

「ぼえぶっ!?!」

「……この恥さらしが」

サングラスの女の縦拳が幹部の腹部に深々と突き刺さる。余りある脂肪を考慮しても確実に内臓に達しているであろうその拳が引き抜かれた瞬間、幹部は血を吐き出しながら真後ろに倒れていく。

それを見て、ボスは幹部を蔑むように罵り、一方で大和は安堵の息をついた。

「すみません、あきつ丸さん。助かりました」

「これもまた、弱いゆえに周囲を巻き込む力でありますな。まあ、取りあえずは及第点と言っていい結果でありましょう」

サングラスを外したあきつ丸はそう言ってニヤリと笑った。

「木曾さんッ！ ご無事ですか!?!」

「うわー、マフィアの本部初めて入ったー！ すっごい豪華！」

「どうやら色々、終わってしまった後みたいですね」

「大和！ 無事!?! もう、勝手にいなくならないでよ、心配するでしょうがっ！」

全ての決着がついた瞬間、扉を蹴り破る勢いで阿武隈、川内、吹雪、瑞鳳がなだれ込んできた。

その姿は数時間ぶりなのになんだかとても懐かしく思えて、大和は満面の笑みで四人を迎えた。

「ご心配をおかけしました、大和、ただいま原隊に復帰しました！」